
ルートモストマック

うさブルー

HinaProject Inc.

注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

ルートモストマック

【Nコード】

N2677CN

【作者名】

うさブルー

【あらすじ】

【あらすじ】

『どんな願いも、無条件で一つだけ叶います』
十五歳の誕生日、夢でそんなことを言われた。
そんな都市伝説から始まる、心温まるモノローグストーリーです。
泣いたり、笑ったり、悩んだり、怒ったり、たまに真剣になつたりとつても多感。

そんな思春期の女の子たちが、『願い』の謎に迫りつつ成長していきます。

ゆっくりと経過する温かい時間を、あなたにも感じてもらえたら
ら。

見守りたくなる不安定さを、あなたは「愛する」ことができま
すか？

許されない気持ちを、あなたは「好き」になれますか？

【future】 夢と希望と、祈りと願い。(前書き)

【まえがき】

ある夜、ふと思いついた話です。
そこまで長くならない予定です。

全然興味なんてなかったのに、気付いたら二人の恋を応援している自分がある……。

そんな百合っぽい話を目指しました。

各話、登場人物ごとに分けておりますが、実は『読みたい人だけを読む』というの也有可能なように作文しております。時期は飛んでしまいかもしれませんが、焦点を変えてストーリーを見たいという方はぜひ、試してみてください。

後述しますが、『』で囲われたタイトルを持つ話はサブエピソードになっております。なので、読まなくてもストーリーを進められるように、作文しております。読んでいただくと、その後のストーリーや、組まれたトリックに気づきやすいかと思われますので、時間があれば是非読んでみてください。百合度が高いのも特徴です。

本編前のプロローグになります。
うわめんどくさいと思った方は、第三章から読んでいただくと超面白いです。

本作品は、より多くの皆様に読んでいただけるよう、大賞タグが貼られています。

【future】 夢と希望と、祈りと願い。

もしも。

もしも、一つだけ『願い』が叶うなら。

どんな『願い』も一つだけ叶うと言つのなら。

あなたは何を願うだろう。

僕は何を願うだろう。

そんな、簡単な質問。

空を飛びたい。

でも、着地に失敗したら死んでしまう。

賢くなりたい。

でも、何を基準にして賢いと定義しているのだろうか。

強くなりたい。

でも、怪物みたいな外見になったら嫌だな。

格好良くなりたい。

でも、誰かしらは非難する。

お金持ちになりたい。

でも、お金が無限にあつたらお金の価値が無くなってしまふ。

王様になりたい。

でも、皆をまとめるリーダーシップは僕にはない。

魔法が使いたい。

でも、そんな力が使えたって便利なことだけじゃない。

人の心を読みたい。

でも、知らなくても良いことだつてたくさんある。

未来を予知したい。

でも、未来を予知する未来を見てもしょうがない。

後悔したくない。

でも、振り返つて悔いて反省しなければ納得できない。

過去をやり直したい。

でも、後悔するのがとても怖い。

死にたくない。

でも、誰かが死ぬのも見たくない。

何回でも『願い』を叶えられるようにしたい。

でも、今悩んでいるのは一つしか叶えられないからじゃない。

進むべき道を照らしたい。

でも、辿り着いたその場所は本当に望んだ場所なのだろうか。

何を願うか決めたい。
でも、それだけは叶わない。

『願い』が叶うと言うのに、僕は否定的なことしか考えられない。
もしかして、すでに満たされているということ？
いや、何を叶えようか悩む時点で満足はしていないのだろう。

悩まない心が欲しい。

悩まないとしたら、僕は何を叶えてしまうのか。
嫌な人を殺してしまうだろうか。

好きな人と結婚してしまうだろうか。

もしかしたら、他の人の願いを叶えてあげてしまうだろうか。

どれもこれも、何か満たしているようで何か満たされていない。

誰にも迷惑をかけない『願い』を僕は望むけれど、果たしてそんな『願い』があるだろうか。

空を飛ぶにしても「航空法」が、お金を持つにしても「税金」が、
死人を蘇らせるのにも「人権」が、邪魔というか当然のように関わりを持つてくる。

ああ。

死ぬにしてもだ。

僕には、僕のために泣いてくれる人がいるのだ。
ならいっそ。

僕に関する記憶をみんなから全消去しようか。

……笑えない。

『願い』が一つ叶えられるというのに、自分自身の存在の抹消を願うなんて。

僕の迷いは、叶えてしまった後に生じるはずの後悔から来ている。後悔しない心を願わないのは、後悔したいから。

後悔しなければ、進んできた道が正しかったかどうかわからないと思うから。

でも、後悔はしたくない。

そんなジレンマが僕を底無し of 苦悩の沼へ引きずり込む。

少なくとも、『願い』を叶えなければいけないという決まりはないのだ。

ならば、叶えなくてもいいのではないか。

僕自身、それを もつたいたい などと思うことはない。

けれど、叶えられるのなら、叶えなければ、叶えられない人への冒険になるとも思うのだ。

言うなれば、自分で自分の進む道に霧をかけているようなもの、なのかもしれない。

でも。

きつと。

その道を進んだ先にはまた、同じ『願い』がある気がする。

ああ。

僕は何を叶えるべきだろう。

そんな、難しい問題。

どうしてこんなにも悩まなければならぬのだらう。

一つの『願い』が叶うだけなのに。

一つの『願い』が叶うのに。

ああ。

僕は何を叶えるべきだらう。

【future】 夢と希望と、祈りと願い。(後書き)

【あとがき】

「なんでも一つ願いが叶います」

そう言われたらどうしますか？

どう感じますか？

どう答えますか？

私は「詐欺かなー？」と疑いますね。

次回から本編に入りますよ！

あ。これは詐欺じゃないです。

僕という名の、発着点。(前書き)

【まえがき】

結構ありきたりな話を、ひたすら哲学して展延させようかと思いません。

それと男尊女卑の払拭がテーマですかね。ですから、読者対象は男性ですかね。でも、読んでほしいのは女性かもしれせん。

気付いたら二年もたっておりました。

今と昔では大分書き方も変わってました。

今章、「ちよつと拙いな……」と思ったら、二章(ちよつと面白い)か三章(割と面白い)に飛んでみてください。本に起こすことを想定して作っているので、キャラ紹介などは毎回やっています。ご安心を。

by 未来から来たうさブルー！

では本編が始まりますです、どうぞ。

僕という名の、発着点。

昨日が何の日か。

それは記憶に新しいほんの昨日のこと。

寝起きの重い瞼でも、意識すれば、容易に答えは浮かんでくる。

それは嬉しいことのはずだけれど、夏休みの終わりを知覚する
とで、少しだけ霞んでしまっている。

「んん……」

大きく背伸びをして、気分の転換をする。これは起床の自己暗示
の意味も兼ねている。

重たい瞼を擦って無理矢理に開くと、夏の陽ざしを浴びながら風
に靡くカーテンが殺風景な部屋で主張しているのがわかって、少し
落ち着かない。

半袖の口から大胆に飛び出た二の腕の裏が、真っ白で柔らかい絹
シャツに撫でられて心地良い。自重に感応するベッドの至妙な沈み
加減が、幼気いたいけな睡魔ととりとめもない億劫さを助長している。

しかし、スパートをかける太陽の光熱は凄まじく、否応に覚醒を
強制される。目が覚めるにつれ感じる僅かな湿り気が、快適さの中
で奇を銜う。

「ううん……」

不穩の出所を模索するとすぐ、自分の鎖骨あたりから吹き出た悪
い汗らしいことが判明する。

「変な夢、見ちゃったなあ……」

『変な夢』を振り返れば、確かにそれは悪夢に分類された。だか

ら、昨日の喜びが霞んだのだろう。

嘆いていても仕方ないので、朝の支度を始めよう。

「よしっ」

頬を両側から強く挟んで、そうカツを入れてみる。

僕はそれほど朝が苦手ではないので、布団を出るまでに時間はそうかからない。

「今日から学校だ。起きないと」

昨日に終わりを迎えた僕たち中学生の夏休みは、惜しんでも延長されたりしない。

延長希望の署名活動を行えば良い所まで行くかもしれないけれど、隣国で戦争すら行われているこのご時世では、そんな悠長な議題は即刻論外になってしまふ可能性も否めなかった。

夏休みの延長談義など立会するはずもなく、今日も昨日までと同じ、当然の様ないつも通りの朝だった。

「僕も昨日で十五歳かあ……」

部屋の鏡に自分の制服姿を映して、独り言つ。

昨日母にもらった藍色のカーディガンが、寒色の制服の胸元から澄ます。三年を経て着古された制服の合間に映えるその新しさは、対称的でとても趣深かった。

だがしかし、

「熱いな……」

夏にカーディガンはさすがにキツかった。時期尚早にも程がある。いや、逆に遅いのかもしれない。

物を貰うのは嬉しいことだけれど、やはり即効性と汎用性は熟考する必要があるのではないだろうか。

晩夏とは言っても、日中の気温は冬のそれとは比較にならないのだ。

「なぜにカーディガン……」

すっかり者の母のことだから、大方、在庫処分の安売りで買ったのだろう。貰った衣服がこれの他にもたくさんあったし。

「まあ、いいけど……」

安らぎと喜びを身に着けながら、代わりに僕はカーディガンを脱いだ。

窓から吹き込む温風は、奥行きが無いとても乾いた暑さ。しかし、制服の内側はじつとりと粘り気のある熱。

まるで、悪いもので満たされているよう。

雨降る熱帯夜だった昨日を思わせる、心地の悪い湿っばさに、身震いする。

「もう、夏も終わりか……」

そう実感するのは、苦しくない。

夏の終わりにはいつも、“しあわせ”があるから。

昨日のプレゼントでいっぱいになった物置を一瞥して、僕は今、部屋を後にする。

最近、国の中心部では木造住宅が流行っているらしい。

夏涼しく冬暖かいという木造の利点は、年間の寒暖差が激しいこの国で、効果を発揮できるようだった。ちなみに一昔前は、風雨に對してとても強い、石造りが流行っていた。

うちはそんな流行廃りを相手にするようなミーハーな家系ではないけれど、もともと木造だったため、最近も流行を先取りした気分になる。それは、家中どこにいても香る、マイナスイオン満載な木の香による落ち着きでもって感じる。

でも、木造にあるのは利点ばかりではない。

「はああ……」

一階へ続く階段の前で、深いため息をつく。

自分の部屋が二階にある以上、階段を使わなければ絶対に下には

降りれない。

そんな道理に非を言うつもりは毛頭ない。言う必要があるとすれば、自分自身の弱い心だろうか。

「ぐっ……。もう、無理……」

二の舞を踏まぬよう手摺にギュッと掴まって、震える脚で必死に地を捉えながら、階段を一段一段、ゆつくりと降りてゆく。

膝が震えるのを抑えるべく力むと、手と額に汗が滲む。拭おうにも、体を支えるのに腕一本では心もとなくて、手が離せない。

先週のトラウマ事件が悔やまれる。

木造の欠点、“滑りやすさ”のために階段から転倒した、あのだうしようもない事件が。

「はあはあ」

冷静を保つために深呼吸を試みるも、上手くいかない。

噴き出す汗は自然、頬を伝って顎のラインを経由し、末端までを滑らかに下っていく。

夏終わりの生暖かい風が、汗の辿ったラインを追って順番に冷やしていく。

その温度差に一層の恐怖を覚えていると、追い風に乗ってやってきた良く響く声が、階段の吹き抜けに軽く木霊する。

「またビビってるの、ルー」

「ひゃえ！」

背後かつ上から突然話しかけられて、思わず変な声が出てしまう。反射でしゃがみこんだせいで、膝を強く打つ。

「痛た……。お、脅かさないでよ」

手摺に縋るよう凭れながら、僕は怯えたような弱々しい声で、妹の名前を呼ぶ。

リズ……」

「ほんと怖がりだよな」

「ひ、否定はしないけど……」

「ちょ、あれ？ え？」

半笑で会話していたリズの表情が、瞬間的に“驚愕”、そして“焦燥”へと変遷していく。

僕は階段をびくびくしながら降りていただけで、そんな目を見開かれるようなことをした覚えはないはずなのだけれど。

一体どうしたのだろう。

もしかして、呼び方に問題があったのだろうか。

「リ、リズ、どうしたの？」

「うう、うそうそ！ ごめんごめん！ そんな、な、泣かないですよ」

「え？」

「ごめんってばー！」

「な、泣いてなんか……って」

「冗談だとわかりつつ、とりあえず目を擦ってみれば、

あ、あれ……？」

そこには確かに、塩辛くて温い透明な液体があった。

溢れるというほどではなくとも、拭わず放っておけば頬を伝っていく量だ。欠伸して自然に湧出してくる生理現象のレベルを遥かに超えている。

『泣いた』と言うのに、十分すぎている。

涙で瞳の表面が潤んで、目に映っていた制服姿の妹は、歪んで像を結ぶことになる。

突如として歪曲された世界と、自分が涙を浮かべているということに、僕は驚いて、

「うえ！？」

「あははは！ 気付いてなかったの？ あーはっははっ！」
結局、笑われてしまうのだった。

でも、どうして涙が溢れてくるのだろう。

高い所が怖くて、遂には泣いてしまうような年齢では無いと思うのだけれど。

僕は、恐怖以外に何となく感じている“違和感”が腑に落ちなくて、理由を一番知っていきそうな自分自信の中を、全力で模索してみる。

なんだろう……。悲しい？ 嬉しい？

真逆の性質を持つ感情が複雑に絡み、乱れ混じって、手がかりの欠片も掴めそうになかった。

わかったのは、汗と違って、涙がとても温かいものであるということくらい。

「はははっ！ そんなに高い所怖かった？ ルーの教室って三階じゃなかったっけ？」

リズは、階段の一番上から、少し笑い気味に言葉を投げかけてくる。

立場を顧みて、駁することを試みるけれど、不器用さのせいで少し言い訳くさくなってしまふ。

「高い所、というよりは階段が怖い、の、かも……」

「そうなの？」

「多分ね」

「ふーん……」

「うん……」

「へー」

「……………」
「……………」

淡白なやり取りが続くと、リズはキョロキョロと挙動不審になる。そして、静寂が訪れる前に、リズの方が口を開いた。

「まあいつか」

その言葉で、続いていた重たい空気が一気に軽くなる。

辛気臭い涙の後処理には、とてもぴったりなセリフだと思った。

「とりあえず、ごめんね」

「あ、うん。いいよ」

二人で頷いて、和解する。

「というか、対立していたのか？ と疑問に思っるのは言うまでもない。」

「ただ、そんなことよりも僕は、和解というか和平というか平等というか……。」

「とにかく、妹が自分より上の段にいる今の状況が好ましくなかった。」

「あ、あの。言にくいこと、言ってもいいかな……？」

「なになにー？」

「いつまでも瞳を湿っぽくしておくのは恥かしいので、ぐじぐじ袖で擦っておく。」

「眦の湿潤を拭くと、彼女の本質が絶世の乙女、容姿端麗、見目麗しいという形で、これでもかというほど伝わってくる。」

「大きな瞳を構成する澄んだ緑は、『世界に存在する“可憐”の黄金比がここにある』。そんな謳い文句でさえも、ちゃちなものに感じられてしまう。」

「今、一つだけ残念なことを挙げるとするならば、自由を制限している衣服でまず間違いはない。」

「アイデンティティの消失とまでは言わないが、せつかくのファッションセンスが潰されていると言っても過言ではないからだ。」

「そ、その……」

絶世の乙女ことリズは二歳違いの妹で、僕と同じ学校に通う一年生。

運動、勉強、音楽、その他何をやっても完璧。母譲りの美貌と世話焼きで心配性な性格も助けて、その人気はクラス、学年、学校を飛び出して、町規模の話になる。

ただ、欠点があった。

「パ、パンツ……。見えてる……」

ガードが弱かった。

「う、嘘……」

「本当だよ……」

僕は目を逸らしつつ、そう告げる。

ガードが弱いと言うと、安っぽい人間という印象を受けてしまうから、正しい表現とは言えない。でも、思い切って『ずばら』というと、今度は言葉が悪いような気がしてくる。

言い得て妙な表現を考えていると、ポンポンと小気味の良い言い訳が聞こえてくる。

「でもでもっ。見たのルーだし、パンツくらい別にいいよっ。減

っ

「減るもんじゃないは禁止」

テンポよく飛び出す言葉を遮って、僕は浅く釘を差す。

「ええー。いいじゃーん」

その軽やかさが、そこはかたなく心配なのである。

注意勧告する僕も僕で、『僕だから許せる』という特別視が気になって、スパルタになりきれなかったりする。軽んじているなど自覚はある。

頑張つて捻出した説教は、とても恥ずかしいものだった。

「もっと気を付けなきゃダメだよ。リ、リズは、か……いんだから

……」

ここは家だし、見たのが僕だからいいのかもしれないけれど、学校でいつ同じ状況が起きるかわからないのだ。

男子たちから『そういう目』で見られていないか、とか特に。あの学校、階段多いし。

ただ、それは公に呈する大義名分で、本当の理由は別にある気がする。

そして、それは僕の中にある感情^{もの}、だったりするかもしれない。それが分かっているからこそ、僕は音吐朗々と声を張り上げることができないのだ。

「ん？ 今なんて言ったのー？」

くぐもった部分が気になったのか、今度はきちんとスカートの動向を心配しながら、とてとてと同じ段まで来て、訝られた。

耳打ち気味に近づけられた顔に、僕はどうしようもなく困惑して、思わず手をばたばたさせる。

その行為が何を意味するのか知りながらも、最善策を講じるといふ処理が、万有引力の効力に追いつかない。

そして、また。以前と同じ。

トラウマになったシーンが完全再現されるのであった。

「わっ！？」

二人、同時に泡を食う。

僕は転倒に。リズは僕の転倒に。

僕は涙目になりながらも着地だけは確実に成功させようと身を翻す。運動部にでも所属していれば、培われていたであろう反射神経で受け身をとれそうなものだけど、生憎、僕は帰宅部だった。眼を瞑ってしまったせいで空間認知が滞る。

とりあえず足は下で、頭は上に。それだけ留意しながら、ただただどこかを回り続けた。

「痛っ！」

僕の叫びとほぼ同時くらいに、床が物凄い音を鳴らした。木という材質のおかげか、音の割に痛みはなかった。

轟音と痛みで、僕は反射的に目を開けた。

目を開けると一瞬、現在地がわからなくなったけれど、一階廊下奥の洗面所から出てきた母を見て思い出すことができた。ああ、ちやんと家だ、と。

母は笑っていたけれど。

トラウマになった一回目が無ければ、もう少しマシな痛みだったのかもしれないけれど、それは後の祭りである。

「だ、大丈夫？」

流石に心配になったのか、リズが駆け寄ってくる。

床に転がる僕からすれば、リズはまた、無防備である。ああ、今日は、何度見ても飽きない安定の……ではなくて。

「う、うん。すごい音したけど、そんなに痛みはなかったよ」

自分の腰の辺りを摩りながら、リズの不安を解こうと努める。実際、腰回りにも痛みはなかった。

平気平気と無事の意を重ねたけれど、リズは心配の表情をやめてはくれない。

「本当に？」

心配してくれるのはとても嬉しいけれど、自分の貞操の心配も忘れて欲しくはない。

「うん大丈夫。そ、そんなことより朝ごはん食べよう」

「我慢してない？」

話を逸らそうと努めるけれど、やはりすぐには話題を変えてくれない。

どうやら軽い打撲ぐらいで残る傷はなさそうだ。これで怪我でもしていようものならリズは責任感に追われて、ずっと看病してくれただろう。

リズは誰に対しても、優しさの限りを尽くす。それはリズの良い所の一つであるのだけれど、僕はそれが何より怖かった。

「大丈夫?」「大丈夫だよ」と言うやり取りを、再三して、ようやく目に見える心配の色は消えた。

「じゃ、ご飯食べよつか!」

「う、うん」

「もっと気を付けなきゃダメだよ?」

ほんの数シーンほど前の僕のセリフをなぞって、得意げなウインクを披露する。

リズは自分の感情をコントロールするのがとても上手だから、嘘も上手い。もちろんリズは悪い嘘をついたりしないけれど、心配を隠すために笑顔を作ったりはする。

僕は鈍感だから、リズ以外の人では、感情の縷々など一切合切わからない。

けれど、長い間一緒にいるから、心配を悟られないように作るリズの笑顔が、いつもと違うことぐらいはわかる。

だからこそ、僕はその心配が怖い。

「うん」

心配だけではなくて、『僕の好きなリズ』の笑顔まで誰かに盗られてしまいそうで。

「母さん。コーヒーを一杯、お願いできるかな」

日光が直線のように降り注ぐ窓際の特等席で、父が本を片手に言う。同じテーブルなのに、なぜだろうか、格差がある気がする。

「あらあなた。今日は雑誌の編集の方とお話があるんじゃないか」

？ そんなに落ち着いて大丈夫なの？」

今度は、カウンター越しの台所から、落ち着いた大人の雰囲気
が漂う美声が聞こえてくる。忙しなく動いているので、声の主の全体
像はなかなか拝めない。

対照的に落ち着いた態度の父が、またなにやら口ずさむ。

「大丈夫だよ。文学のコラムについてのインタビューだからそこ
まで時間はかからないだろうし、今日はそれしか仕事が入っていない
からね」

「あーそうなの」

「あ。目玉焼きはー」

「はい。わかってますって」

僕たちと違って、父のトーストにはいつも二つの目玉焼きが乗っ
ている。それで、リズが小さい頃にずるいと駄々をこねたこ
ともあった。

でも結局、僕たちのトーストには黄色い目玉が一つ、爛々とする
ばかりである。

母も父も強情横柄な人間では決してないので、僕たちはその家族
内格差を『二人の愛の形』の代償であると解釈することで納得した。
ちなみに、その愛には半熟というオプションもついているが、そっ
ちの方は本を読んでのんびりしている間に無意味になってしまっ
ていた。

「ふう……。やっぱり母さんのコーヒーは美味しいよ。どこのお店
に行っても、こんなに美味しいコーヒーは出てこないだよ」

父はテーブルに並べられたブラックを飲みつつ、そんなことを呟
く。

僕はブラックが飲めないからミルクと割るけれど、それでも香り
というのだろうか、そういうものが他と明らかに違うのはわか
る。だから、毎日聞く父のそのセリフがお世辞でないことぐらいは
理解に易い。

けれど、

「ごつも毎日言われるとねえ……」

母の言う通りであった。

コーヒーのソムリエでもなければ、コーヒーの生みの親でもない、ただの文学者である父がコーヒーについてとやかく言っても、説得力に欠けていた。それも回数で、一回当たりの効力も着実に落ちていく気がする。コーヒーの本でも出せばいいのに。

「コーヒーについてまとめた本でも出せばいいんだが。それは眠れない日々が続きそうだな……、ははは！」
なるほど。

評価をするために飲んだコーヒーの含有カフェインで寝不足になってしまふというのと、本をまとめる大変な作業に眠れなくなってしまうというのが、かかっているのか。

ユニークだと思うけれど、声にして笑うほどではない。わざとらしく笑ってみせるあたり、それは本人も自覚しているよう。

つまり、洒落の結果は。

……沈黙。

「うふふふつ。愉快ねえ」

母は何の躊躇もなく沈黙を破り、空気の流れを良い方へ変えた。

絶妙な空気感を保ち、家族間の正しい距離感を把握する天才、という存在が母であった。

文学者という難しい人間を包み込む器量の広さと、代々受け継いできたコーヒー園を一人ですべて切り盛りする行動力は尊敬に値する。

リズムも僕も、母に似たとよく言われるけれど、どうやらその恩恵のほとんどはリズムに与えられてしまったようだった。

「えー。全然面白くないよー。あはははっ！」

「笑っているじゃないか！」

天真爛漫、明朗快活。

それは、豪快なトーストの食べ方、日常生活に見る所作、淀みの無く輝く大きな瞳から、もれなく知ることが出来た。

母は朝食を作り終えたようで、調理中邪魔にならないよう後ろに束ねていた髪を、解く。窓際を歩いて、僕たちが座っている四人掛けのテーブルの一席に腰を下ろす。

窓から差し込む日の光を浴びてキラキラと主張する直毛についた弱いカールが、僕には存在しない何かを思わせる。

一言で表現するならばつと、『美人』が適格だろう。

「どうしたのルー。お母さんのことそんなに見つめて」

「ううん。なんでもないよ」

「ふーん。そう」

他愛のない会話をしていると、テーブルの向かい側から母が忠告してくる。

「あら？ あなたたちは急いだ方がいいんじゃない？ 今日夏休み明けよ？」

美人もとい母の言葉の意味を理解すると、俄然、焦りを感じ始める。

「「始業式！」」

僕とリズは顔を見合わせて、トーストを齧るスピードを上げる。

そして、父と母の笑い声をバックグラウンドに、僕は機械的に咀嚼と嚥下を繰り返した。

リズと目が合った……！

そんな抱いてはいけない気持ちを殺して。

自分が一番、自分のことを知っているはずなのに、何も変えられ

やしない。この思いや、想いが、本物なはずはないのだと、そう胸に刻んで。何重にも何重にも痕を付けて、穴が開くほどに。

「どしたの、ルー？」

「ほっぺにジャムが付いてるよ」

「どこー？ とってー」

「う、うん……」

だからきつと、この顔の火照りも、日差しのせいだ。

僕という名の、発着点。(後書き)

【あとがき】

二年後にあとがきを書いてます。

これぞまさにあとがきですね。

いやはや、幼稚というか。

やっぱり、成長するのは登場人物だけではありませんね。

それを如実に感じて、作者としてはしみじみです。

「ここから始まったからこそ、今がある……」

みたいな気障なセリフを言うつもりはないですが、文面にはすでに書いてしまったことになりませぬ。気障ですみません。

でも、やはりどこか、子を見守る親のような気持にはなりますね。

うんうん。趣き深い。

そんな感じで、皆さまも私のことを優しく見守ってくれると嬉しく思います。万歳です。

ということ、どんどん続いていきますのでお楽しみに。

by 未来のうさブルー！。

大人と子供、近くて遠い。(前書き)

【まえがき】

題名「ルートモストマック」の由来が分かったら、「とんちまん」
或いは「とんちうーまん」の称号をあげましょう。

なんだか卑猥な響きですね。

鼻血が出てきました。

では本編です。

大人と子供、近くて遠い。

一日の中で一番楽しい時間はいつ？ と聞かれれば、まず『登校』を挙げるだろう。

質問の内容的にも、時間を遡るより進めていく方が早いから、自然的に順番の早い『登校』が思い浮かぶからだ。解答を遅疑するほど深入りする質問ではないという理由もまた一つ。

当然、答えには納得のいく理由があるわけだけれど、社会的にも道徳的にも生物的にもイレギュラーな説明をするわけにもいかないのです、それは心の中だけに留めておきたい。

「ねえルー？ 今日には部活、ある？」
隣を歩く女の子が首を傾げれば、自然、僕の顔は覗き込まれる形となる。

心に留めておきたい感情が、さっそく溢れ出しそうになるのを必死で堰き止めながら、僕は答える。

「な、ないけど。どうしたの？」
逸らした目線の先にあった、青々とした木々の梢が揺れていて、余計に焦る。

でも、その根元にある用水路を滔々と流れる水を見て、少しだけ涼むことができた。

何とかリズの方に向き直って、話を聞こうと務める。

「良かった！ 今日、放課後にお買い物に行かない？」

「買い物？ またどうして？」

過去を顧みても、放課後、母のおつかい以外の目的でショッピングをした覚えはなかった。

初めてということになるから、その所以も初めてということにな

る。

最近の初めて、と言えば。

「あ、あのさ？ 私、部活が忙しくて昨日の誕生日のお祝いしてあげられなかったでしょ？」

我が家は無宗教だけど いや、だからなのか、誕生日にかなりの思い入れがあった。

一年に一回、つまり家族合わせて四回訪れることになるのだけど、そのたびに軽いパーティークラスの盛り上がりを見せていた。

参加人数は十人を超えたことはないが、プレゼントの量だけは確実に十人以上確保されている。洋服なら衣装ケース一つ分くらい、本なら棚が一つ埋まるくらいと、とにかくボリュームだった。僕は遠慮しつつも、両手を上げて喜ぶのだった。

「だから、その罪滅ぼしって感じかなあ……」

例外はあるけれど、貰えるプレゼントには規則性を見出すことができた。

文学者である父は本、母は体を気遣った内容の物、そして妹リズは手料理だった。

リズの料理の味は可もなく不可もない『美味』。

世間で、その味は普通というのかもしれないけれど、キッチンをごちゃごちゃにしながら必死で料理を作る姿を見て、「あんまり上手にできなかつたけど……」などと上目遣いで前置きされれば、当然ながらそれは『美味』になるのである。まあ所謂、お世辞である。「昨日は謝っただけだったし、それじゃおかしいかなって」

「お、おかしくはないと思うよ」

僕はリズの作ってくれる料理が好きだった。いや、それが料理に限ったことではないという自覚もあった。

言ってしまうえば、それは両親のプレゼントよりも嬉しかった。

それが今年、人生初の『無し』だった。

でも、大会があったのだから、仕方ないと割り切るしかない。仕方ない。

仕方、ない……。

「それに全然怒ってないから、謝らないで……」

仕方ないとは理解できても、一年で最高の楽しみが無いという初めての喪失感に対応しきれないのが実際に、僕は昨日、布団の中で泣いて……は、いない。

さすがにそれは恥ずかしすぎるので、虚偽であると弁明しておくけれど、機嫌が悪かったことは認めざるを得ない。

鋭いリズがすぐにそのことに気付いて、また心配してくれた、というわけだ。今回の場合、リズでなくてもわかったかもしれないけど。

「だって、すごく楽しみにしてたでしょ？」

「うっ」

適応力の低い僕は急なジレンマに抗えず、口ごもってしまう。口ごもると言うのはとどのつまり肯定の意味合いを醸す。

……ならいつか。

リズに詰られるのも、また一興なのかもしれない。

いや、それはさすがに変だろうか。

「ほら、やっぱリー！」

二の句が継げない僕を指差して、なんだか楽しそうだ。

僕も思わず笑ってしまうほどに。

「うふふ……。知ってるんだよー、毎年すごく楽しみにしてることルー、お母さんとお父さんのプレゼントの時よりも、私の料理食べてる時のが元気だから、お母さんたちすごく悔しそうにしてたんだよー？」

「っ、筒抜けだったの……」

ふふん、と鼻を鳴らして得意な表情をするリズ。

柔らかかそうな頬が口角につられて動く。

つつきたい、いや、触れてみたい衝動に駆られて右手が伸びる。

止まれ と指示を出しても、指先は暴れる馬の様に言うことを聞いてくれない。

そんな駄馬を制したのは、穏やかで優しい声と視線だった。

「でもありがとね。楽しみにしてくれて」

純粹なその言葉に、自分の中の不純が浄化されていくように感じた。

周囲を見渡せば制服姿の人が目立つ。危うく公衆の面前で触れ合うところだった。

家族と言うことは周知の事実であっても、公然の場での接触は感心されないはずだ。いや、公然でなくてもだけ。

「それでなんだけど……」

「あ、うん……」

心を押し殺すのに必死で、話をするまで意識が回らなくない。

話の主導権はリズに握られてしまう。

リズは最初の話題を再確認するように重ねて問う。

「どうか……？ 今日の放課後、一緒にショッピングモール……」

ショッピングモールとは、所謂大きなお店である。

放課後におつかいに行くことはたまにあるけれど、それは所謂小さなお店。大きなお店は小さい方と違って、カフェや飲食店が付設されているのだ。

大きな方に行こうと言うのはつまり、そのカフェや飲食店で食事を取ろうという意味にもとれる。

「ご飯を作って待っていてくれる両親のことを考えると、自然と口が動いた。

「母さんたちには言ったの？」

「ん？ 言ってないよ？ どうして？」

「どうして……。だって」

「あー、もしかして一緒にご飯食べに行っちゃおうとか思った？」

図星である。

目に見えて、確実に一歩、身を引く。

舗装されていない自然道の傍、雨水に流れを生む目的で掘られた溝に、足をとられて躓く。疾うに梅雨は明けていたので、慌てて手をついた先は固い土だった。

「どうおあー！」

出過ぎた真似をした反動がやってきた。

僕は起き上がりながら、ズボンの砂を払いつつ、心配に及ばないということ伝えた。

「ごめんごめん。そんなに反応するとは思わなくて……」

「ううん。大丈夫だから、続けて」

若干、眉が下がっているのが気になったけれど、リズは本題に入ってくれた。

「本当は一緒にプレゼント選ぶうと思ってたんだけど、ルーがご飯食べたいなら私はご飯でもいいよ。それに、今日はお母さん忙しくて夕飯作れないらしいしね」

「あ、そうなんだ」

「そうだよー。シスコンなルーのためだもん。それくらいは、ね？」

「リ、リズッ！」

「あははっ！ ごめんごめん」

こつこつ小悪魔的などころもリズのチャームポイントである。

怒ることができないから、治らない。治らないから、繰り返す。

繰り返すから、心配。

リズの魅力は、そんな負のスパイラルのリスクすら軽く凌駕してしまうのだ。

「別に『遠い方』でもいいんだよー。この前部活の友達と行ったパスタのお店が美味しかったってだけで、変な意味はないからねっ」

確かに、夕飯が遅れるのなら、夕飯を作り始める前に帰宅することが出来るから、モールで食事をとっても問題はない。『遠い方』でも余裕をもって帰宅できるだろう。

「う、うーん……」

リズの言う『遠い方』というのは、大きいお店からさらに歩いたところにある、さらに大きなお店のことである。

この国には二つしかショッピングモールが無いから、ショッピングモールを呼ぶときは大概、『遠い方』という修飾語を片方に補って簡単に区別することができる。

この区別の仕方は国民の誰もが使うけれど、ではなぜ『遠い方』ばかりを呼称して言うのか。

その理由は立地意外に、思春期特有のものがあつた。

「さ、さすがにそれは良くないんじゃないかな……」

「そ、そうかな。私、妹だし別に関係ないと思うけど」
いや、妹だからまずかつた。

言ったことがないから確かなことは言えないけれど、『遠い方』にはホテル街というアダルティなスポットがあつて、カップルが一夜を共にする決め手によく使われるらしい。

『遠い方』という呼び名も、男子生徒たちの「彼女とのデートかどっちに行くんだ?」「遠い方だ」という会話の中の隠語から誕生したという説まである。

それはあくまで噂なのだが、判断材料としては十分に力を発揮する。良くない風評の立っている場所には行きたくないのは当たり前なのだ。

だが、今回の場合は善悪よりも、道徳とか倫理とか、そういう個人の心理に基づいた判断が必要だと思つたのだ。

「リ、リズはどっちに行きたいの?」

「わ、私じゃなくてルーが決めて。せつかくの誕生日なんだしさ」
決断を委ねられてしまった。

なんだろうとか、非常に悩んでしまつた。

「ううーん……」

この国では、国王の意向により近親婚が認可されている。それは習わずとも自ずとわかるこの国の常識である。

でも、だからと言って近親婚を選択した者たちへの風当たりは優しくはならないのは世の常で、特に身内からのバッシングが激しいと、ニュースや噂で耳にしたことがある。

そんな逆風の中でも、互いの愛を繋ぎ続けられる人だけが、近親婚の道を行くことができるのだろう。

「……………」

いきなり結婚の話を持ってきたのは、色香のする『遠い方』の話が出て連想されたからであって、僕がどう思っているかとかは全くの無関係だ。

僕の望みは、妹からのプレゼントを貰うことであって、妹とそういう関係になることではないのだから。『遠い方』か、『近い方』か、今はただそれだけ。

「どっちだろ……………」

「どっちがいいかなあ……………」

気持ち上目で顔を覗き込んでくる妹の目には、僕の下心が丸見えになっているかもしれない。

けどそれは、全力で否定しなければならないことだ。だって、僕には

「じゃ、じゃあ……………近い方で」

そんな資格なんて、ありはしないのだから。

徒歩およそ十分。

学校が近づくにつれ、周囲に行く制服姿の割合が増加してくる。

すると、顔の広さ以前に、見た目、成績、エトセトラ……と、有名人であるリズは、声をかけられる頻度が上がっていく。

その中には当然男子生徒もいるから、僕は警戒をしなくてはいけない。

律儀に挨拶を返すリズを注意するわけにもいかないのだから。

僕のために笑ってほしいから、今は笑わないでいて欲しい

僕の気持ちを変えることでしか解決できないジレンマが、再び僕を悩ませる。

さらに徒歩五分で、学校へ到着する。

約二十分の登校道は一日で一番短くて、一番濃い……気がする。

まあ、それはいいとして。

学校の校門はシックなレンガ造りで、校舎は高級感のある白壁で統一されている。まさに『学校』と言う佇まいのここは、義務教育の三ステップ目【中級学校】にあたる。

僕の暮らすこの国には義務教育というシステムがあって、一ステップ目【幼稚園】に五歳から二年の間所属して道徳と常識を教わり、それから二ステップ目【初級学校】で六年間、三ステップ目のここで三年間勉学に励まなければいけないのだ。さらに、進学の道を選択すれば【上級学校】に三年間、そして学者の道を歩む者は【学術学校】に所属することができるようになっていく。

戦争に無縁であるとは言いきれないけれど、この国は比較的平和な方だと思う。そのおかげもあって、医学や天文学の研究にも力を入れることができているのだろう。

ただ、戦争地域ではないから楽な人生かと言えばそうでもなく、平和だからこそその辛さもある。

毎日、生きるのに精いっぱい暮らしを強要されている人たかを悪く言うつもりはないのだけれど、彼ら彼女らの「勉強したい!」という言葉を耳にする度に、僕は複雑な気持ちになってしまふこと

が多々あるのだ。

ミドルのレベルでは、将来の貢献度というか有望性というか、そういうものの差は顕著ではないという話を先生からよくされる。

でも、それに続く文句「だからこそ中学の内に勉強して良いアカデミーに入るのだ」は耳に胼胝ができるほど聞いている気がする。多分それだけ大切なことなのだろう。

人生の分岐点で迷わないように今から努力するということをお願いのだろうけど、ああも頭ごなしに言われると素直に受け止められないのが条理でもある。

そして、聞かなければいけない人ほど話を聞いていないのも条理かもしれない。かもしれない。

「ルー？ 大丈夫？ 話聞いてた？」

既に上履きに履き替えたリズが、一段高いところから尋ねてくる。僕もすぐに靴を履き替えて、

「ごめん。聞いてなかった」

あちこちで鳴る、靴が下駄箱に飛び込む喧噪を言い訳に、素直に申告する。

「まったくもう。いいい？」

いつもの待ち合わせ場所 中庭で待っていてくれ、という言葉伝だったのだけれど、肝心の理由を聞き逃してしまった。

リズの背景にいた男子生徒がリズを見ているのが視界に入ったせいだった。

人生の岐路に立たされている自覚なんか全然なくて、僕は妹のことばかり考えている。

いや。

自分のことばかり考えている、が正しいかもしれない。

今、本当に必要な自覚がない。

あるのは困惑や迷走に溺れた、僕の我儘な『願い』だけで。

大人と子供、近くて遠い。(後書き)

【あとがき】

何だか専門用語のような単語が続出していましたね。申し訳ありません。

質問していただければすべてお答えしたいと思っています。感想欄かツイッターの方にお問い合わせします。

え？ タイトルの意味ですか？

いやいや、それはまだ教えませんよ。

るーともすとまっく……。

ルートも、スト、マック

ああ、マック食べたい。

僕の親友、アメとムチ。(前書き)

【まえがき】

27年の大幅改稿のことを「革命」と書いて、レボリユーションと読みたいです。

革命のおかげで相当読みやすくなりましたが、「話がぶちぶち切れてしまう感」がある気がします。一冊の本にする場合なら、一章単位で区切れれば良いのですが、携帯でご覧になっている皆様のことを考えると、この形が最適なのではないでしょうか。

書いている自分の環境も大切ですが、読んでくださる皆様の環境もそれ以上に大切なのです。

……と、いい話をしたところで本編です。

僕の親友、アメとムチ。

妹と校舎が離れていることだけがこの三年間の悔いである

そう言ったら何かおかしいだろうか。

きつとその答えは、論じるに値しないと思う。そのおかげで逆に僕は、もやもやすることが少なく済んでいるのかもしれない。

そう。

今、論ずべきは、三階まで続く螺旋階段の長さ以外にない。

心内討論して出した事案が『目を瞑って上る』という事で、話は振り出しの『妹リズ』へと舞い戻ることになる。

かけつけて応援してくれないかなあ……

僕は、膝から踵にかけて脚をがくつかせながら、そんなしょうもないことを妄想するのであった。

「ああ、足が……」

上る時の恐怖は下る時の恐怖の半分くらいだったので、それほど手摺に縋りつかなくて済むけれど、階段にいると自覚してしまうと正直なところ、こちらにも目を瞑りたくなる。

夏休みが明けて体が焦げている人は昔からよく見かけるけれど、階段恐怖症になってくる人はなかなか見ない。というか、生来見たことがない。

日焼けした4〜5人の同級生に追い越され、漸く三階の三年教室に到達する。

到着時刻的には余裕があったはずだけれど、教室からは騒がしい

くらいに賑やかな話し声が漏れ出ている。

早い登校は褒めてあげたいけれど、受験生なのにそんなに浮かれていて大丈夫なのだろうかと不安が募る。

とは言っても、僕もそのうちの一人なのだけど。

春先に多数決で決めたスローガン『隠し事のないオープンなクラス』に恥じない、空きっぱなしのドアを潜る。

教室の後ろの掲示板に掲げられた、豪快な黒太字のスローガンの次に、それなりに仲の良いクラスメイト達が視界に飛び込んできた。

「おはよう!」「おはよっす」「おう。久しぶりだなー」

「うん。おはよう。久しぶり」

クラスメイトからの手厚い歓迎を軽く受け流して、僕は足早に自分の席を目指す。

窓際の席。綺麗なブロンドの子の一つ前。

そこが僕の席だ。

「おはようアリス」

振り向くと、ふわりと揺れる鮮やかなリボンと太陽の様なブロンドの相乗効果で、まるで絵本の世界から飛び出してきたかのような印象を受ける。大人びたクールな雰囲気醸し出している炯眼とのギャップで、目が合った者すべてを虜にしてしまいそう。

風貌も仕草も女性的なイメージが目立つけれど、実は運動部でエースとしても活躍していたりもする万能人間なのだ。ここまで来ると、もはや勉強はおまけになるかもしれない。

そんな完璧超人の友達アリスは、サイドヘアーを右手で払って開口一番、毒を吐く。

「あら、意外と遅かったわね。もしかして、階段恐怖症になって階段が怖くて登れなかったのかしら」

「え」

確かに、夏休み中、一度アリスと遊んだけれど、僕のトラウマ事

故はそれよりも後だ。

それに階段から滑り落ちたなんて恥ずかしい話、他人にするはずもない。仮にも、受験生なわけだし。現場を目撃したりズも、秘密にしてくれるって言うていたし……。

「ど、どこでそんな情報を……」

「あら、凶星だったの？」

ハメラれた。

こんな朝早くから嘲笑される気分はと言えば、あまり良くはなかった。

それにアリスの嘲笑は、小悪魔リズのそれとは違って、可愛げの無い策士の不敵な笑みと言う感じ。

策士、という称号はあまりにもアリスに当てはまり過ぎている気がする。ただ、アリスはとても愛くるしい顔立ちをしているから可愛げのないという前置は、あまり正しくない。

どちらにしたって怒られるから言わないけど。

「ふふふっ……。顔に書いてあるからまさかとは思ったけどね」

「ま、またですか……」

情報の出所は、聞いても『顔に書いてある』と濁されてしまって、いつも判然としない。何となく、知らない方が得策な気はする。

とりあえず一つ言えるのは、アリスの情報網はすごいということだけ。

ちなみに、鏡で自分の顔を見ても何も書かれてはいなかった。

…当たり前か。

たじろいでいると、アリスは「まあいいわ」と心機一転、話題を変えた。

「昨日が何の日か、もちろん知ってるわよね」

「え、うーん……ううん？」

とんと見当がつかなくて、僕は首を傾げる。傾げるほど、真剣に考える。

わからない、と言ったらアリスは絶対に怒ってしまうだろう。そ

れはアリスの一番嫌いな答えだから。

「冗談であつても、アリスは怒ると結構怖いので、納得してくれそうな答えを模索する。」

でも、なかなか見つからない。

変な間ができないように、僕は唸って間を埋める。

「うーん……」

額に滲むこの汗は、晩夏でラストスパートをかける太陽の努力のせいか、それとも

「はあ……。まったく、あんたってホントに鈍感よね」

「ご、ごめん」

僕の謝罪に呆れたのか、アリスは深いため息をつく。朝からこの扱いをされると、正直かなり泣きそうになる。

アリスは「……。まったく、もう」と毒づきながら、机の横に掛けていた鞆から何かを取り出した。そして「はい、コレ」と、何やら小包を手渡してきた。

「え？ え、え？？」

「まったく鈍いわね。昨日はあなたの誕生日でしょ？ 一日遅れたけど……。あ、あたしからよ。そんなに良い物じゃないけど。……。てか、いつもあげてるじゃない」

「ご、ごめんなさい」

処理が追いつかなくて、とりあえずの謝罪をしてしまった。今するべきは……。感謝、だっただろうか。

手渡された小包を受け取っていなかったら、アリスがフラれたみたいなの構図になっていたかもしれない。

僕は言下に「ありがとうアリス」と訂正して、アリスの優しさを実感する。

アメとムチの使い方が至妙である、というこれまた至妙な表現が見つかって、決して口にははいけない。また泣かない程度にムチを振るわれてしまうだろうから。

「どういたしまして。誕生日おめでと……。とりあえず、ね」

甘美な飴は、例年通り素敵な味がした。

昼休み。

『自分の進路は自分で決めるんだ』

「はあ……」

アカデミーの受験が控えている三年生だけあって、前年前年と比較にならないほど先生方もヒートアップしている。

ついさっきの授業で語られた熱を帯びた言葉が、頭の中でぐるぐる回り続けているせいで頭の中が熱い。

他のことを考えると、その熱と許容量超過で、すぐにごちゃごちゃになってしまう。

今は簡単な問題を出されても、この乱雑な自動攪拌のせいで間違えてしまうだろう。

『他人と相談することは悪いことじゃない』

無論、言いたいことはわかる。

二年生まで琴線はおろかフレームにさえ触れなかったその熱弁が、夏休み明けのこの時期になってフレームくらいにはヒットするようになってきたのだ。

そして、今の時期でフレームヒットはまずいだろうと、心のどこかには焦りも生まれてきている。きちんと面の真ん中にヒットして、それで初めて自分が置かれた受験生という状況を、真摯に受け止め

られるはずだと思う。ヒートアップしなくてはいけないのは先生方ではなく、当事者である僕たちなのだ。

でも、だからと言って「よし！これから必死で勉強に励もう！」だなんて、これ一つも思えはしない。

人間そんな簡単に変われはしない。

「はあ……」

丁度四度目の溜息を、部活の顧問の呼び出しから戻ってきたアリスに聞かれてしまう。

「そんな暗い顔していると、オムレツが泣くわよ」

アリスは自分の席に着きながら、僕のお弁当を指差す。

弁当箱を見れば、ケチャップで描かれたオムレツの笑顔が輝いていた。

口にあたるラインがオムレツの直径を軽く超えているせいで、口の裂けたお化けに見えなくもない。だから、ただの笑顔というよりは不敵な笑みが正しいだろうか。

「僕、そんなに暗い顔してた？」

オムレツの笑みを食べ崩す前に、一つアリスへと問う。

アリスの返答より早く、憂鬱がやってきた。

『人に決めてもらった人生は後悔も何もできないぞ』

そんなことを急に言われても、『納得』が『向上心』に変わるのには、また違うベクトルの力が必要になる。

社会的に自分のこと アイデンティティの様なものだろうか？

それを知るには、自分以外の人を通す以外に方法がないのだから、人に決定権を委ねることだって、あつて然るべきなのだ。自分の顔は自分では見ることができないという比喻をすればわかりやすいと思う。……あ、鏡は無しで。

だから、進むべき道を見誤らないよう、婉曲的に道を示してもらうことだって、間違いではない気がする。だからこそ今頑張る、と。

それが分かっても、自分の人生を左右するアカデミーにおいては一人で答えを出さなければいけないのだろうか。

アリスの応えは、僕の求める答えを上手く避けていった。

「いつもと同じ、暗くも明るくもない普通の顔ね」

「じゃ、じゃあオムレツは泣かないじゃないか」

アカデミーに行くことだけが人生じゃない。だからこそ、今頑張るのだ。

それは矛盾しているようではない。

「いい？ 人間の顔は、ここだけじゃないのよ」

アリスは僕の顔を少々乱暴に小突いて、少し得意げに、それでいて僕を宥めるように目を細めるのだった。

アカデミーがすべてのゴールであるはずはない。アカデミーに通うためだけに僕たちは生まれてきたわけではないのだ。

通過点という表現がしっくりくる。

通過点の先にある未来には必ず到達点というものがあって、僕たちはそこを目指しているのだと思う。到達点、それは所謂将来の夢と言っちゃつ。

到達点だけが光っていると自然、アカデミーという存在が、通らなくてもいいような中途半端な休憩所に見えて仕方ないのだ。決して無駄な休息でないとわかっていても、他の選択肢の方が明らかに有用に目に映る。

到達点すら見えていない僕にとって、進路の選択というのは、真つ暗闇の平原にたった一人で立たされるのと相違なかった。

「はあ……」

「コラ。人が昼食を始めようって時に、溜息なんかつくんじゃないの」

「じゅめん……」

僕は椅子を後ろ向きにして、いつもアリスの机でアリスと一緒に食べていた。

夏休みという長いブランクがあっても、自然とこのスタイルにな

ったのだから、よほど習慣づいているのだろう。

でも、そういう習慣の延長に、僕たちの道は存在しない。

「アリスは進学するんでしょ？」

「ええ、そうよ。あんたも頭良いんだからそうでしょ」

分岐を超えて、僕たちは灯りを求め、新しさを手に入れなければならない。今まで続いてきた習慣を壊し、日常的な事柄もすべて変えていかなければならないのだ。それが道を進んでいくと言うこと。道を振り返れば、そこは真つ暗闇でしかないのだから。

「でも、アリスは国外かもしれないでしょ？」

「ええ、まあね。あまり気のりはしないけれど。できることなら、

あんたと同……って何言わせるのよ！」

頭を引つ叩かれて、謝ったのはなぜか僕だった。

僕の頭の上を回る星が、何かを照らしてくれるだろうか。

少なくとも、進むべき道を照らすことはないだろうけど。

「……はあ」

進路を顧みて、再び長い溜息。

この国にあるアカデミーは一つ。

学術都市の看板を掲げる割に、この国には教育機関が不足気味だった。国外のアカデミーとの交流が深いおかげでアクセスもしやすいため、あながち間違っているのではないのかもしれないけれど。

でも、おかげさまで、選択肢が狭まらない。それが良いか悪いかは、今、判然としない。

国外には名門と呼ばれるアカデミーがいくつかあるのだが、学費が国立の数倍するため、庶民には高嶺の花となる。もちろん学費だけでなく、高い学習能力も要求される。

アリスはそのどちらも満たした超優秀な生徒なのだ。

「なんだ。あんた、進路で悩んでたのね。それは平和でいいわね」
イメージ通りの質素な弁当を上品に頬張りながら、アリスは僕の心を見透かしてぼやく。

その勘の鋭さに怯えて、返答の語気は多少荒くなる。

「全然平和じゃないよ。だって、どうすればいいのかわからないんだよ。 巨大な迷路に放り出された気分だよ」

そんなことを愚痴つても、状況は変わらない。

それに、同じ状況の人が何人いるか考えると、今まで何も考えていなかった愚鈍な自分が、死ぬほど嫌になる。

だから溜息が出る。

行き場を失った不安、心配、期待 そんな感情の断片が、口から洩れたものが溜息だと、つくづく思う。

「でも、それは自分で決められるからこそその悩みでしょ？ いいじゃない、決められるんだから」

「アリス？」

含みのある言い方だったので尋ねようと思ったけれど、炯々たる鋭い眼光に射られたのと、自分の問題だけで精いっぱいなのに、わざわざ問題を増やそうという趣は好ましくないと思った。思い止まったことで、頭の中に不穏なものが渦巻き、滞納し始めた。

僕の脳がパンクする前に、アリスが話題を変えてくれた。

「そういえばあんたも十五歳になったのよね。ちよっと残念だわ」「どうして？」

「年上だと何かと気分がいいのよ」

言いながら毛先で遊ぶさまは、年齢に拘らず崇高に映る。

「アリスって年下が好みだったりする？」

「うーん……年下ってよりは、小さい子が……って、あんたまたっ！」

アリスはカーリング部に所属しているので、一応は運動部と言うことになる。けれど、体型はどちらかと言えば華奢な部類に入る。

華奢なのに、華奢を欲すると言う理由には少しばかり興味がある。少しだけ目に色を出してみれば、アリスは遊んでいた髪を手で払って「誤解されないように言っておくけど」と前提してものぐさだ。「小さいって言うのは、体がって意味じゃなくて、心がってことよ。別にロリコンとかじゃないわよ！」

「臆病とかってこと？」

なるほど。それなら納得だ。

アリスは、体は華奢でも心はとても大きいと思う。それは、優しさから容易に感じ取ることができた。

臆病な人が好みとなると、精神的に守ってあげたい……ということになるのだろうか。

なんとなくわかる気がする。

「ああもう！　せつかくオブラートに包んでるんだから、話を具体的にしないでくれるかしら！」

クールさはどこへやら、頬を赤らめて、珍しい反応をする。

話のジャンルとしては“恋バナ”となるのだろうか。アリスはどうもそういう話は苦手らしい。

アリスの苦手な話題にしてしまった反省と謝罪の念を込めて、今度は僕が話題を変えてみた。

「アリスの誕生日って春だったよね」

「そうよ。春休みが明ける少し前の日ね」

自分で話題を変えておいて勝手なのだけれど、どうして誕生日の話題に戻ってしまったのだろうか。

確かに、切歯扼腕に値する事実ではあった。でも、覆水盆に返らずという言葉もある。

「ア、アリスやっぱりこの話題は」

「そうよねえ。黙っていた方がいいわよね。『妹の手料理が食べられなくて泣いていた』なんて話。三年にもなつて恥ずかしいものね」

「アリス……！　それ以上は……、お願い……」

一人だったはずなのにどうして知っているの！？　とか　もしかして盗聴器でも仕掛けられてる！？　とか、色々逡巡したけれど、行きつく先は策士アリスの笑みと矜持だった。

「アリス情報網をなめないことね」

機密機関の存在を提唱したい、夏の終わりの昼下がりに。

食べられたオムレツは暗くも明るくもない、普通の顔になってい

た。

放課後。

遅くなることだけはわかっているのに、いつも待ち合せに使っている場所　中庭で妹を待っていた。

ちらほら見かける帰宅部の影に、逸る気持ちが募ってしまい

「貧乏揺すりしないっ」

僕の座っているベンチの肘掛けに腰かけたアリスに怒られてしまう。

そんな警告に母性を感じるのは僕だけだろうか。

「本物のお金持ちが言つと謎の説得力があるよね」

「それは褒めているのかしら？」

アリスはきつと僕で遊ぶのが好きなのだろう。

それでもなければ、友達の妹という縁遠い人物と一緒に待ったりはしてくれないと思う。

「うん。褒めてるよ。いつもありがとう、アリス」

「なっ!?!　なによっ、突然!　ち、調子狂うわね!」

僕もアリスで遊ぶのが好きだった。

つんけんしているというか、少しひねくれているところのあるア

リスは、率直な感想に対して過剰な反応を示す。

僕は、たまに見せてくれるその反応が結構好きだった。

「あ。そうだ」

中庭にある窓と校門はほとんど一直線上にある。なので、放課後にこのベンチに座っていれば、帰宅部の人数を大体を把握することができる。

しかし、今日はいくつかの部活が休みらしいので、その数の正確性を保証できるとは言えないだろう。

「アリス、部活は？」

僕で遊ぶためにここにいるなんて冗談はさておいて、バリバリ運動部のアリスがこんなところで油を売っていてはいけない気がしてきた。それに、ただの帰宅部と話していたとなると、僕の立場も危ない。

「部活？」

当然なことだけれど、アリスにはファンが多い。

可憐さで人気を得ているリズとは違うジャンルで、異性だけでなく同性のハートも奪っている。

だけど、アリス自身は無自覚でらしく、以前は「奪ってなんかないわ。勝手に差し出してくるのよ」などと宣っていた。

「ないわよ。リズから聞いてなかったの？」

「あ。そう言えば……」

アリスとリズは同じ部活だった。

リズが休みなら、アリスも休みで当たり前である。

「もしかして喧嘩でもしたのかしら？ プレゼントが貰えなくて号泣した拳句、人のせいにして逆上なんて、大人げないにもほどがあるわよ」

「ぎゃ、逆上はしてないよ！」

「ふふふっ。泣きはしたのね」

またやってしまった。

とうのアリスは得意顔である。

隠せそうもない気がするけれど、弁明しないわけにもいかない。

とりあえず事実の否定だけはしておこうかと意気込んだところで、アリスに割って入られてしまう。

「わかってるわよ。誰にも言わないわ」

何が、どこから、どう、わかっているのか気にならないと言ったら嘘になる。仮に、すべてがアリスに筒抜けで、情報が公開されようものなら僕は社会的に死んでしまう。

だけど、アリスなら信じられる気がした。

だから、あまり心配はしなかったりする。

「ありが」

「その代わりに、あたしも連れて行きなさいよ」

「えへ？」

疑問の「え？」の形をした口から、勢いをなくした力のない空気だけが通り過ぎる。

プライバシーの心配に重きを置いていたために、意表を突かれてしまった。

アリスの言い分は理解できたけれど、まだ感情の処理が済んでいない。そんな頭に、追撃がくる。

「だ、だからっ。あたしも、食事に連れて行きなさいって言ってるのよっ」

「い、いいけど。いいんだけど……、ど、どうして？」

完全に二人しか知らない事実を知っていたことに対する疑念と、同行を申し出るといふ訝しさから出た、「どうして？」だった。

「だけど、

「い、いいから連れて行きなさいよっ。お代はちゃんと払うから。

それと、あなたに拒否権はないはずよ！」

と、言うことらしい。

僕の疑心暗鬼は、勢いという名の波ちからに流されて、跡形もなく消えた。

僕の親友、アメとムチ。(後書き)

【あとがき】

新キャラ「アリス」が登場しました。

真面目でクール、それでいて人間味のある優しさも兼ね備えた完璧超人です。完璧ゆえに、周囲の人間の期待に応えようと努力する姿がとても輝いて見えます。

男子よりも女子に人気が出そうな性格でもありませんね。

これから部活でも活躍する予定なので、お楽しみに。

今回は「アリスも連れてお食事会」でしょうか。

邂逅と継続、その境界。（前書き）

【まえがき】

ちよつとだけ百合っぽくなります。

これからもつと百合百合させていくつもりですので、好きな方は
お楽しみに。

では本編をどうぞ。

邂逅と継続、その境界。

「まったく……」

「まあまあアリス、そんなに怒らな」

「わあ！ アリス先輩、私のために待つてくださったんですかあ！
？ というか、一緒にお食事してくれるんですかあ！？」

「成り行きよ成り行き」とアリスは気怠げに返す。

さっきまでの脅迫じみた嘆願はどこへ行ってしまったのか。後輩の前では格好の良い顔をしたという意識の表れだろうか。

それにしたって、妹の豹変ぶりは何度見ても慣れるものではない。
「成り行きでも嬉しいですよ！ 先輩と一緒にご飯なんて！」

リズはアリス先輩の右腕に張り付いて離れない。中庭に訪れて以来、この様子である。

アリスの方は、ベタベタされるのが嫌いなのかあまり良い気はしないらしく、こちらに目配せしてくる。「よけて」と言いたいのだろう。

「ちょ、ちょっとリズ。今日は」

「大丈夫、大丈夫。ルーの誕生日でしょ、忘れるわけないよ！
ですよね、アリス先輩！」

助け舟を出したつもりが、見事に沈められた。

それに、なんだか僕の扱いがぞんざいになっている気がする。

「はいはい。わかったから、ちょっと離れなさいよ。歩きにくいわ
「わかりましたーっ！」

リズは歩きににくい程度に離れたつもりなのだろうけど、腕は組んだままであった。調子がいいな。

「はあ……。まあいいわ。とりあえず、出発しましょ」

「そうですね！」

主役のはずの僕が出る幕が無いことは一先ずおいておくとして。

「『近い方』でいいんだよね？」

自分で決めたことだけれど、何か心に引っかかっているものがあるって、聞かずにはいられなかった。聞いて解決するのはわからないけれど、このまま何もしないでいたらいけない気がしたのだ。

「そうだけれど、ルーが行きたいなら別に、『遠い方』でも……」
「変態ね」

「いや、そういう意味じゃなかったんだけど……」

どちらかを選べば、もう片方には一生行くことができない。訪れるだけならいつでも何度でも可能だけれど、『今この時』に行けるのはどちらかなのである。

ただご飯を食べるだけだから、どちらにしても結果はそんなに変わらないのだ。美味しいかどうかの話ではなく、『遠い方で食べた』のか、『近い方で食べた』のかという話で。

そのはずなのに、何を迷う必要があるのだろう。自分の決断を変えてまで、僕は一体何をしようと悩んでいるのだろう。

「ルー？」

（じゃ、じゃあ……僕は『遠い方』に行きたい、かな？）

「どうしたのよ」

（アリスも来てくれるなら、大丈夫だよね）

「僕は……」

（アリス……。リス……。嘘、でしょ……？）

「ど、どうしたの？」

（リス……）

「あなた……」

(好き)

頭を左右に大振りすると、視界が高速で流れ、少しクラッと来る。「よし！」

蹠跟めきが夏終わりの暑さからきた病的なものではないと確信し、カツを入れる目的で小気味よく発言する。

それが逆に憂慮を呼んでしまう。

「いや、全然『よし！』じゃないよ。本当に大丈夫？ まだちょっと熱いから、熱中症かもしれないね。引き返して保健室に」

「ううん！ 本当に大丈夫だから！ さあ行こうか」
「どっちによ」

歩き出した僕の進行を妨げるように放たれたアリスの言葉が、背中深く突き刺さった。

でも、答えは決まっているから。

「決まっているじゃないか」

僕の体を案じて不安そうにするリズムと、感情を読み取られないようにポーカークフェイスを作るアリス。

二人の顔を一瞥して、一度空気を吸って。

僕はもう一度、選択する。

「近い方へ」

行き先を告げた後、僕は二三何かを補足した記憶があるけれど、あまり重要な情報ではなかったのか、はっきりとした内容までは思い出せなかった。

たった一度の決断で、ここまで意志が、意識が揺らぐことはそう
ない。しかも論題は、たかが夕食の場所決めである。

けれど、確かにあの時、僕は迷った。迷ったし、悩んだ。

妹のリズには「慎重すぎる」とよく言われる。

確かにそうなのかもしれない。

でも、それは『後悔するのが怖い』からであって『選択すること
が怖い』わけではないのだ。

結局は僕自身が、すべてを決定しなければいけないということは、
身をもつて知っているのだから。

痛いほどに。痛くて死ぬほどに。死んで消えてしまうほどに。消
えてなかったことにしてしまうほどに。

「リズのイカ墨ペンネグラタン美味しそうね」

「アリ つと！ ここは学校じゃないから……、食べますか、先
輩！」

「じゃあ一口だけもらうわ」

「はい！ 先輩、あーん……」

「あー……、つて!!」

アリスは、「こらっ」と近所の子供たちを注意するように軽やかに諭す。

こんなにも平和な風景を望めるのは、僕がこっちに来ることを選
択したからなのかもしれない。いや、『遠い方』でもそんなには変
わらないだろうけど、『今見ているこの風景』は『遠い方』では見
ることができないのだ。

代わりに『遠い方で見れたはずの風景』を見ることができていた
のだろうから、何とも無駄な話ではあるが。“かけがえのない”と
いう表現は、その当事者でなければ無意味だったりするものなのだ。

「美味しいわね」

「美味しいですよね！」

「……………」

せっかくリズと隣同士で座っているのに、僕だけ取り残されてい

るみたいで、少し寂しい。

加えて思うのは、僕の時と随分扱いが違うなあ、ということ。

「ん？ 大丈夫、ルー？ さっきから放心状態だけど。まさか熱中症の後遺症が……」

「本当は『遠い方』にしたかったとかじゃないでしょうね」

リズの気遣いの隙間から、アリスの毒が入り込んでくる。

おぼろげな意識で服毒する。

「いや、大丈夫。そんなことはないよ」

目の前にあるナポリタンは僕が頼んだものだけけど、フォークがソースに埋もれている以外は、運ばれてきた時となんら変わりなかった。

放心状態とは、自分で自分が放心していることに気付かないものなのだろうか。

僕と同じものを頼んでいたアリスの皿を見ると、相当な時間の経過を感じられた。ほとんど食べ終わっている人もいるし。

「アリス……」

「な、なにかな」

リズの皿に盛られた、残り僅かのイカ墨ペンネグラタンは、洋食屋の雰囲気合ったライトの淡い暖色光を浴びて黒々と艶めいている。そして、それはリズの口回りにも同じことが言える。

何でもこなせる妹の欠点を挙げるならば、それは『著しく香る生活感』であった。長い付き合いであるから、もはやそれさえもチャームポイントに感じるが、アリスは別だろう。

「ただね……」

妹の品のなさがこれ以上他人に露呈しないように、僕は紙ナプキンで妹の口回りを拭いてあげる。最初は恥ずかしがっていたものの、観念したのか途中からは静かになる。

もし拭かなければリズの悪い噂が広まって、ますます僕の近くに

さすがに思い止まる。

思い止まった慣性で、黙思に勢いがついて放言してしまう。

「もし『遠い方』に行っていたら、この楽しい時間がなかったんだって思うとさ……」

二人ともキョトンとしている。

せつかくの喜悦の合間に、現実味の無いとても『現実的』な話題を出したのだから、当然かもしれない。

悪気がなかったせいか、訪れた沈黙にはさしたる罪の意識を感じることはなかった。

このまま黙っているのもいいし、二人のどちらかが話題を変えてくれてもよかったのだ。僕自身が決断をするために、僕の心を二人に知ってもらう必要はないのだから。

「そ、そうだ！ 先輩は将来の夢とかってありますか？」

沈黙を破ったのはリスだった。気を遣ってくれたのだろうか。

でもまた、一人取り残された感じである。

「夢？ 魔法使いになって空を飛びたいとか、そういう『願い』みたいなことでもいいのかしら？」

「そうですね……そういうのもいいですよ！ でも空を飛びたいなんて、先輩って意外とメルヘンなんですネ！」

自分で叶えていかなければいけない将来の夢が、叶ったらいいなあという『願い』に。

どうしてそう換言されたのか、僕は少しだけ気になった。

「それは例えばの話よ。あたしはもっと現実的よ。そう、例えば

急にアリスと目が合って、僕は瞬きが止まらなくなる。

どちらかといえば現実味のある『夢』という単語が、一切現実性を帯びていない『願い』という単語に上書きされたことも相俟って、僕は確かな焦燥を感じていた。

それは、僕にとっては痛言だったから。

時間を巻き戻せたら、とかかしら？」

このシヨップینگモールに辿り着いた時には、すでに日は半分ほど暮れていた。夏の終わりだから、自然、気温は下がる。拘らず、額に汗が滲む。

いくらか我慢できる涙とは違って、汗は隠蔽が難しい。悲しいことや嬉しいことは隠せても、高揚や焦りは隠せない。

人間は、そういう風にできている。

「そそ、それで？　じ、時間を戻して、アリスは一体何をするつもりなの？」

外気温にそぐわないペースで溢れる汗を、制服の裾で拭いながら、聞いてしまう。

焦ると饒舌になるのが、僕の癖だった。だから、総じて嘘が下手であるという事実も、自覚している。

自覚しているからこそその、行為だった。

「そうね。とりあえず、色々やってみたいわね。『願い』を叶えられる直前まで戻れば、何度でもやり直せるでしょうしね」

明言された『色々』という表現があまりにも壮大で、返す言葉が浮かばない。

強調された部分を脳内でリピートすれば、そこには確かに『闇』があつて、同じ質問を繰り返して深く介入することもできなかった。

それは僕の場合の話で、リズは違かったけれど。

「それ、いいですね！　毎日毎日、快樂に溺れる生活を送っていても、リセットしちゃうえば全然問題ないですもんね！　あ、先輩が快樂を求める時は私のこと、好きに使っていいですからね！　添い寝したり、お手伝いしたり、縛ったり、挿　」

「そうね。快樂も悪くはないと思うわ。でも、もっと使い時があると思うのよ」

左斜め上を見て、「そう、例えば……」と淀みのない口調で、アリスが言葉を続ける。

一層の緊張を感じた脳が指令を送ったせいで、心臓が胸を突き破るのではないかというくらいに拍動する。緊張の種類が変わったおかげで、不自然な汗は引いた。

アリスの例え話は、どこかで聞いたことがあるというよりは、「確実にどこかであって、いつ自分に起こるかわからない」というような神妙で不気味な恐ろしさを覚えるのだ。

今度は、恐怖に戦いて、嫌な汗が滲んできそうだ。

「家族とか大切な人が事故に遭ってしまった時、とかかしらね」

「確かに、それは辛いですね……」

事後のことを詳しく語ることはしなかったけれど、想像することは容易だった。

死んでしまえば、生き返ることはない。だからそれは叶わない『夢』だ。だからそれは叶えたい『願い』になるわけで。

でも、アリスの言った方法【リセット】ではなく【蘇生】であったとしても、アリスの望みは達成されると思う。

だったら。

だとすれば、なぜ？

「どうして、生き返らせるっていう『願い』にしないの？」

疑心をそのまま口に出してみる。

アリスは確かに【リセット】すると言った。また例え話の話なのかもしれないけれど、というか多分そうなのだろうけれど、僕はその微妙なニュアンスの違いが腑に落ちなかったのだ。

ただ、ここでもし仮に、卒倒するくらいの驚愕の答えがアリスの口から飛び出しても、きつと僕には対処のしようがない。後の祭りであった。

でも

「さあ。どうしてかしらね」

でも、アリスの答えは不敵な微笑みで。

僕の投げかけた疑問は、そのまま僕の元に返ってきた。

「ふふっ！ 先輩もわからないんですね！」

「ええ。わからないわね」

「ア、アリスにもわからないことがあるんだね……」

でも、どうしてだろう。

どうして、生き返らせるっていう『願い』にしないの？

どうして自分の言葉が、こんなにも深く冷たく、僕の心に突き刺さるのだろう。

邂逅と継続、その境界。（後書き）

【あとがき】

今回はリズの本性が明らかになりましたね。

登場人物の内情が知れてくるにつれ、作者の本質も明らかになっていくと思います。

悪しからず。

満たせない、必要十分条件。(前書き)

【まえがき】

早くも五話ですね。

もともとは五話までで一話でしたが、改稿 革命により五話分に伸びました。話の内容自体はほとんど変化しておりませんが、一話分が短くなり読みやすくなりました。私も書きやすくなりました。以前は、約二万文字(原稿用紙五十枚)ほどの話を五つほど繋げて話を作っておりましたが、今は一万文字以下になり、とても余裕ができました。

小説を書いていると、「作文や感想文の宿題」がかなり楽に思えます。

では、本編です。

満たせない、必要十分条件。

リズは、居間にやってくるなり、ソファで寛いでいた僕に告げる。

「ルー、お風呂あいたよー」

「うん」

髪の毛はまだ十分に乾ききっておらず、さらにはパジャマのボタンも掛け違えている。

なんだか、とてもだらしが無い

「も、もつとちゃんと髪の毛拭かないと風邪ひくよ。あと、またパジャマのボタン掛け違えてるよ」

「いいのいいのー。どうせもう寝るんだから」

というのは、残念ながら建前で、僕は完全に自分の妹に見惚れていた。

いまだ水分を含んだ髪の毛が、いつもの快活さの代わりに大人っぽさを醸して、ドキドキする。ボタンを掛け違えるというあどけなさと対照的に、パジャマの肩口から覗く雪のように白い肌が、これでもかというほど女性らしさを明々白白と知らしめている。

僕はその両方に見入って いや、魅入ってしまったのだった。

価値云々の話ではないけれど、もし、この光景に価値を付加するのなら、『家族である僕でさえ魅入る価値がある』という伝わりやすい気がする。

「何してるの？」

「本、読むでる」

「ふーん……。勉強熱心だねっ。隣、座ってもいい？」

「う、うん。いいよ」

ソファの隣に座ってくる無防備な妹に、僕の鼓動はこれでもかというほどに高鳴る。

リズが、ぽすつとソファに腰を下ろすと、振動と共に『女の子の匂い』が伝播してくる。すぐに抜けていった振動と違って、匂いの方は僕の嗅覚を捉えて逃さない。

嗅覚情報はすぐに脳に伝わって、その刺激がまた、逆上せそうになるくらい、僕を高揚させた。

「ルー？ お風呂入らないの？」

「入る、入るよ……。入るけど……」

催促するのだけれど、それが逆に遅延効果をもたらしているということを、リズは知る由もない。

「まさか、一緒に入りたいとかー？」

「やややややややや、そそそそそそそそ、それはないから大丈夫だよ！」

「あははは！ ホントわかりやすいね、ルーは」

熱いお湯に浸かったわけでもなければ、サウナに長時間籠ったわけでもないのに、鉄っぽい芳香に加えて鼻腔の奥が熱くなるのを感じた。

「でも、ルーのそういうところ、私、好きだよ」

「おおおお、お風呂行ってくる！！」

崩落しそうになる理性を保とうと、僕はそそくさとその場を離れて風呂場へと向かった。

この暑さでお湯が沸き立つとか、そして鼻血で湯船が紅に染まるとか、色々な思考を巡らせていると、目が回ってしまいそう。

風呂場の前の洗面所の鏡には、真っ赤になった自分が映った。

事実の許容に恥じて下を向くと、真っ白な洗面所にポタリと一滴ひとしずく

「あ、鼻血……」

きつとこういうのが、分かりやすいといわれる所以なのだろう。

固定式の安いベッドだから、布団を取り外して洗ったりはできないけれど、今日の昼間の日差しのおかげで干したようにふかふかだった。

そんな自然ランドリーサイクルに一躍買った幅広の窓も、夜はさすがに閉める。窓と一緒にカーテンも閉める。開けっ放しはさすがに恥ずかしいし、何より冷えるから。

のそりと布団に潜ってから、秋に備えて母が準備してくれた薄めの毛布に包まる。

今は寒くも熱くもなくちょうどいい温度だけれど、寝ている間に熱くなる気がする。リズだったら、確実に毛布を蹴り飛ばしてしまうだろう。

「はあ……」

リズ……

以前は同室で生活していたということを思い出して、無性に寂しくなる。それもそのはず、この僕の部屋には以前、二人の人がいたのだ。

特に理由はなくとも遅くまで会話したり、またある時はトランプをやったりもしていた。

楽しかったし嬉しかったし、なにより、一人じゃないと自覚すること、安心できた。

一人になるということが、どれだけ寂しく、どれだけ心細いことなのか。それは、こうした過ごしやすい夜の空気と体温でもって犇ひし

と再認識することになる。

僕は……

隣の部屋で眠る一人の少女のことをイメージしてみる。
自分自身の気持ちだが、本物かどうか確かめたいから。
そして僕の問いに答えて欲しいから。

僕はリズのことを好き

僕のこの気持ちは、他でもないこの僕が本物であると証明できる。

リズは僕のこと、どう思ってる？

それが僕の問い。そして……、

嫌いじゃない

それが僕のイメージの中でのリズが出した、率直な答えだった。
結局は、僕の期待の最低ラインを暗喩しているだけの、下らない
妄想に変わりはない。

でも、リズのことを思うだけで僕は、僕自身の気持ちを確かめる
ことができていたのだ。

少し我儘だけど愛らしいその仕草、素直で明朗快活な言葉、未熟
だけど頼もしいその純真　純心。

リズのすべてで、僕は僕自身を確かめていた。

しかし、最近は違った。

だから、自分のこの気持ちが本物かどうかさえも、見失いかけて
いた。

『でも、ルーのそういうところ、私、好きだよ』

ほんの部分を褒めただけの言葉だし、文頭に『家族として』という前提はついているだろう。

僕はその言葉で、見失いかけていた自分の気持ちを再認識することができた。

一つ、思うことがある。

本物の気持ちを感じているあなたは本物なの？

もしも、その僕が『偽物』だったら？

僕は否定するけれど、本物と証明する術すべがない。僕がいくら自分を本物だと熱弁したところで、周囲が認めてくれなければ『偽物』に成り下がることになるのだ。

そればかりは自分自身の知覚で決定できるものではない。

だからこそ、僕はリスをイメージする。

でも、その答えは変わらない。

ということは、答えはそこには無いのだ。いくら鈍感な僕でも、流石に気付く。

では、答えはどこにあるのか。

アリスの情報網に頼れば、もしかしたら何かわかるかもしれない。でも、もっと確かなものを僕は知っていた。

それは今、『本物』か『偽物』かを問われている、自分自身意外に無かった。

正しい道を歩いていることを知っているのは、他ならぬ自分。『本物』だろうと『偽物』だろうと、歩いている道は、同じなのだら。

堂々巡り……ではない。

僕自身が、無限に続く円道ループを歩こうと願わない限り、確実に到達ゴ点は存在していなければいけない、という真理に基づいているのだ。

から。

「きつと、これでいいんだよね……」
答えはすぐに返ってきた。

あなたが良いと思えるのなら
僕が良いと思えるかどうか？

『遠い方』で死んでしまった二十二人たちと、私とアリスの二人。どちらに生きていて欲しいか。……どちらに死んで欲しいか死んで欲しいなんて思っただけ。

でも、二人に生きて欲しいと願えば、結局は同じことなのだ。表があるなら裏があつて当然なのだ。ならば裏返しになっている物を裏返しにしても、本質的には同じことになる。裏表のある事実というのはそういうものだ。だから、最初から「死んで欲しい方」を選んでも同じことなのかもしれない。

つまり、僕は大勢の人の死を願った、というわけか。
そして、その選択が良かったと思えるか、と。

「わからない……。わからないよ……。誰か……。助けて……」
余計な情報の少ない闇の中、脳は逡巡のためのみに稼働していると言つても過言ではない。

考えることを止めたら、すぐにでも深い眠りに落ちることができそうだが。
でも、それだとリズのことまで忘れてしまうようで、僕にはできなかつた。

「リズ……」
僕はもはや、リズに対するこの気持ちだけでこの世界に存在している。

正体も分からない　きつと不安定で、きつと儂くて、きつと脆

い。

このとてつもなく大きな気持ちだけで。

x x x

「んん……！」

眠気覚ましのルーティンで、一つ背伸びをする。

窓を閉めたせいで、カーテンは靡かない。代わりに、隙間から部屋へと差し込む暖かい光が、静かに僕の部屋を照らしていた。

「……………」

昨日考えていたことが都合よく頭から抜けているということとはやはりなくて、僕の一抔の期待も、月とともにどこかへ消えてしまうのだった。

けれど、僕の一日はこれから続いていく。

だから。

せめて。

「今日も楽しい一日になりますように！」

カーテンを勢いよく開いて、大きく深呼吸する。

そして、窓から降り注ぐ日光の暖かさを直接体全身で浴びて、感じたことのない夏の終わりを 今日を感じるのだ。

秋用の制服姿を鏡に映して、朝の慌ただしさに焦って、登校道の高揚と緊張を愛して。

クラスメイトとの諧謔を楽しんで、昼休みに友達と相好を崩して一人で家に帰って責務を済ませて、家族団欒を心から悦んで。

今日の始まりと同じ明日を願って。

新しい道を探す苦痛に耐えながら、僕はいつも通りを装って進むべき道を 求める答えを俟まつ。

「これからも毎日楽しいと、いいなあ……」

そうだね。でも……

その返答はあまりにも早く。

一度目ならね

満たせない、必要十分条件。(後書き)

【あとがき】

ここで一部は終了となります。

主人公についての謎を増やすのはあまり得意ではありませんでしたが、少し挑戦してみました。

二部から少しづつわかかっていくと思います。

次回からは二部をお楽しみください。

短くなる、と最初に明言したのですが、どうやら長くなりそうです。

結局、詐欺になりました。ごめんなさい。

僕とらじまの、終着点。(前書き)

【まえがき】

もう少しだけ、ルート編が続きます。

本編です、とじごと。

僕という名の、終着点。

僕は昨日で十五歳になった。

それはごくごく自然な時間の流れだけれど、平々凡々で順風満帆な日常生活を送れない人たちもいるのだから、この時間感覚の余裕は幸せを意味している。夏休み明けの初日と言うこともあって、頭が鈍っているだけかもしれないけれど。

ただ、何をもって満たされていると定義するかは人それぞれだから、哲学者でもない僕が口を出すのは器に合っていないというものだろう。

リビングに差し込む温かで平穏な日光にも、特別の感情を抱くことはない。

「おはようお母さん」

「あら、おはよう。リズは？」

「多分、まだ寝てるんじゃないかな」

僕には、当然のように両親がいる。加えて、大事な妹もいる。それを一括りにして、家族と呼ぶのである。そこに犬や猫などのペットを数える人もいるだろう。

大事なものは数や質ではなく、その存在だ。

存在しない人は不幸なのか、と聞かれたら僕は「わからない」と答えるしかない。けれど、いなくても幸せな人もいる、ということを知っている。

じゃあ『本当の家族ではない』という条件を付けたらどうだろうか

ふと湧いた邪な思考回路に、内心驚く。

けれど、向かいの椅子に座る父が読んでいた本のタイトル【Ma y b e a F a m i l y】を見ると、回路の発生源が確認できたようで少しホッとした。

「今日の朝ごはんは……って、母さん。目玉焼きは二つにしてって」

「わかってますよ」

父はいつも、朝食のおまけに本を読むのではなく、読書の片手間に朝食を食べている。それなのに難癖をつけるというのはどうも図々しい気がするのだが、それに対して母が怒りを表したのを見たことはない。母の返答に付加された屈託のない笑顔を見るに、我慢しているということもなさそうだった。

僕も席に着いてから、朝の雑談という意味合いで気軽に尋ねてみる。

「ねえお母さん。なんでお父さんだけ二つなの？」

「そ、それは……」

一瞬、卵を割る母の手が止まる。同時にコーヒーを飲んでいた父の動きも止まったから、時が止まったようにも感じられた。

どうやら聞いてはいけない何かがあるようだった。

果たしてそれは、大人限定の事実なのか二人だけの約束事なのか。どちらにせよ、今、知ることは出来ないだろう。

沈黙が、つらい……！

深く介入してまで知りたい情報ではないことに気付いて、空気を悪くしてしまったことを少し後悔する。

止まっていた時は、母によって動き出す。

「秘密よ、ヒ・ミ・シ」

このところ三十路がどうこう言っていたはずの母は、唇を人差し指で塞いで見せた。

どのくらいの年齢の人まで、その動作を不自然なく使えるのか僕は全く知らないけれど、母はまだまだ余裕だと思った。

コーヒーと補色の関係にあるくらい白い肌は、家の中だけでなく街中でも良く映える。一緒に買い物に行くと、視線を集めているのがよくわかる。

コーヒー園を一人で切り盛りしている身上、コーヒーの成分が肌に良い効果をもたらしているのかもしれない。

「ヒ、ヒミツ？」

「そうよ。ヒミツよ」

母は再び、唇に人差し指をあてて軽くウインクして見せた。

母は結構……いや、かなりの楽道家で、自分が注目を浴びているということにあまり頓着していないようだった。

その人目をあまり気にしていない性格は、妹のリズに遺伝したように、彼女もまた頻繁に傍若無人の素振りをしていた。

「あら、リズ。おはよう」

「うん、おはよー。うん、おはよー……」

寝ぼけたまま顔を洗ったのか、前髪が少し濡れている。寝癖もまだほとんど直ってないし、何より眠そうだった。挨拶を二度するあたり、母とのやりとりも反射でやっているのかもしれない。この通りである。

こんなあられもない姿を誰かにに見られたら、と思うと僕は気が気ではない。

もう一度言おう。

僕は気が気ではない。残念ながらリズではなく。

リズは半寝のまま、僕の隣の席に座った。ふわりと漂ってきた芳香に、僕は意識してしまわないよう、必死でコーヒーの芳香で上書きしようと試みた。

「あ。ルー、おはよー」

「う、うん。おはよう」

緊張のせいで乾きそうな口の中を潤そうとコーヒーを啜るけど、

今度はその熱さが頭を混乱させそうだった。

自分から話をする事もできず、それでいて目も合わせられずたじろいで、意気地の無い人みたいになってしまふ。まあ実際、意気地なしと言われることはあった。

でも、相手が妹だと意気地云々と話は変わる。

「そおだ……ルー、昨日は」

「き、昨日は部活の大会お疲れさまっ。昨日のパーティー、楽しめなくて残念だったねっ。プレゼントのことは気にしてないから、うん、大丈夫だよっ。だから謝らないで！」

伝えたいことをすべて伝えなければと焦るあまり、僕はそう口走っていた。

言い放った後、脳で一つ一つ処理が行われると、恥を晒していたことがわかってくる。

「え、ああ……、ん？」

妹がどんな表情をしているか想像するのも怖くて、間を稼ぐのにとりあえず両親の表情を拝む。

自分の置かれた状況が、自然と理解できてしまう顔をしていた。すると、感じていた羞恥心が倍に膨れ上がって、一気に心を満たして、死にたくなってきた。

「ちち、違っんだよ！別にプレゼントが欲しいわけじゃなかったんだよ！僕は本当にリズに無理をしてほしくなくて……って、お母さん笑ってないで、信じて！」

言い訳も虚しく、誤解されてしまった。

……誤解なのか？

「わかったよ、ルー」

母も父も僕も、リズを見る。

注目を一手に集めて、リズは自信ありげに目を見開く。少し遅めの起床になるのだろうか。

その一声、その動作で、僕にとる嫌な空間は、リズ色に支配される。

僕はリズに導かれるように、「何が？」と尋ねた。

「プレゼントを欲しいということが」

「全然わかってないよ!？」

子供と大人、遠くて近い。

いつもは並列して歩いていたらけれど、朝から色々と敗北感を味わったおかげで、今日の登校道はリズが先導する形となっていた。

学校が近づくと、制服姿の人が目立ってくる。

リズと僕が家族であることは周知の事実なので、超がつくほどモテる妹と歩いていても咎められることは、多くはない……多くはないけど、あることにはあった。

だけど僕は、それをリズのせいにすることはなかった。

そんな凶々しさで足元の安定感が消失するのを、このところは俯くことで解消していた。

「ねえ、ルー」

「え！？ な、何かな！？」

顔を上げると意外に距離が近くて、焦る。

リズは学校でもどこでも、家にいるプライベートな時と同様「ルー」というあだ名で僕のことを呼ぶ。

それが嬉しくもあり、怖くもある。

「今日って部活ないよね？」

夏休み明けの本日より、ひと月ほど前の記憶を漁る。

……………。

結局、探り当てられたのは『勉強しろ』と口ぐちに言う先生方の熱心な姿だけだった。

「ごめん。わからない。後で顧問の先生に聞いてみるよ。でも、どうして？」

「私、今日部活休みだから、ルーも休みだったら、一緒に……買い物にでも行こうかなって」

いつの間にか、リズは僕の隣を歩いていた。

僕が速く歩いたのか、リズが歩く速さを緩めたのか、どちらにせよ僕たちはまた並んで話をしている。

「もしかして、リズは昨日のことを気にしてるの？ それだったら

—

昨日も謝ってくれたし、リズは大会だったのだから仕方のないことだと思った。リズだって、家族の誕生会に参加できなかったのは悲しいだろうに。

その旨を伝えようとするも、少しばかり強引にセリフを奪われてしまう。

「でも、一番気にしてるのはルーだと思うの。だから」

確かに、味わっていた悲しみを数値化すれば僕もリズといい勝負をしていたと思う。

毎年、僕の誕生日に作ってくれる不器用なリズの手料理が、僕はなにより好きだった。

それが無いというショックと、リズがテーブルにいない喪失感、加えてリズ自身が感じているであろう責任を考えると、涙を堪えずにはいられなかったのだ。

自分の涙の理由を思い起こすと、少しだけ強くなれた気がした。

「その気持ちだけで嬉しいよ、リズ」

こんな恥ずかしいセリフを吐くのはいつぶりだろう。いや、もしかしたら、初めてかもしれない。

——『感謝』。

それは、簡単そうに見えて難しい、でも、とても大切な言葉だと思う。

家族という括り以前に、僕たちは一人の人間の集合なのだ。感謝

するということとは、繋がりを保つ上で、おそらく一番重要なことだ
と思う。

それが恥ずかしくなってしまうのはどうしてなのだろうと、勝手に
疑問に思う。

そんな疑問はちっぽけだと言わんばかりに、リズがぐいぐいと攻
めてくる。

「でも、それだと私の気持ちが収まらないの。悪いことしちゃった
なあって、ずっと思ってたなきゃいけないの」

リズは言下に首を左右に振って、「でも、それは私の我儘」とい
う自己否定を前提する。

「私が嫌な気持ちでいたくないから、ルーとのいざこざを解消した
い、ということじゃないの。私はホントに、ルーにおめでとうを言
いたい。でも、それは周りから見れば、勝手なお願いを押し付け
ているようにしか見えないと思うんだ」

「リズ……」

記憶を遡れば、リズがエレメンタリーにいたという事実はかなり
早い段階で見つかった。掘り起こしたというよりは、少し低い場所
にあるのを見つけただけかもしれない。

そんな浅くて近い所にいたはずのリズが、僕より先の未来 遠
い方に行ってしまう気がして、立ち止まっている自分に腹が立つ。

対応力 一人で解決する力、自立力の身に着いていない子供の
僕は、居ても立っても居られなくて手を伸ばす。

きっとリズは、相手が誰であつても伸ばした手を払うことはない
だろう。でも、それはリズの不安定な部分なのだ。不安定の対処の
仕方が『助長』しかないから、結果がマイナスであつてもすべて抱
え込むことになる。

僕はリズのマイナスになるつもりはなかった。むしろ、不安要素
をすべて取り除いてあげられるくらいの存在になれば、とも思っ
ていた。

それは、差し伸べられた彼女の手を握ることじゃなく、彼女が伸

ばした手を握ることだ。

難しいのなら、それを自然にやってのけるリズの真似でも良い。
だから僕は、リズの願いに呼応するように密かに思う。

僕がいつか、彼女の手を握りたい

リズが振り返って、両の手の平を擦り合わせて言う。願わくは、
その手を握って囁けるよう。

「だからこれは私の我儘なの。それじゃ……だめ？」

「え、ううん……」

自分の誕生日のプレゼントとして他人の望みを叶えるというのは、
どうにも自虐的な気もしたが、それで相手が喜んでくれるなら、と
思う自分もいた。

相手が好きな人や、意中の人なら尚のこと「悪くない」と思える
だろう。

「だ、だめ……かなあ？」

さすがのリズもここまで来ると意固地になる。

思えば、リズは僕のためにやってくれているのだ。断る理由など
どこにも見当たらないではないか。手を握るのは意味が違っけれ
ど、これはこれで良い……気がする。

「うん。いいよ」

心配そうな表情で僕の答えを待っていたリズから、一気に緊張が
解けていくのが分かる。

ぴょん、と一度ジャンプしてからガッツポーズ。さらに、顔は太
陽のように眩い笑顔。

『あざとい』という雑な一言で片づけてもいいのだけれど、僕は
その後に一言『ほどに可愛い』と言い添えたい気分だった。

「じゃあ、場所決めなくちゃだね！……って言っても、この国で
お買い物と言えば二か所しかないんだよね」

さっそく段取りを始めたしっかり者の妹に、今度は進んで主導権

を引き渡す。

「そういえば、今日は仕事が忙しくてご飯が遅れるってお母さん言
つてたから、ご飯食べに行くのもアリかな」

今朝、家を出る前に母に告げられたのを思い出して、頷く。

「そ、そういえば、美味しいパスタの店があるんだけど……。……
……。なんだよね」

リズの声は綺麗で澄んでいるので良く通る。聞き取れないのは、
意図してポリウムを下げられたかららしい。

美味しいパスタというのが気になったので、確認してみる。

「パスタ？」

「いや、その……。前に部活の子と行ったんだけど、そのパスタの
店、『遠い方』にあるんだよね……。…」

「へ、へえ。そうなんだ……。…」

国内に二つあるシヨッピングのうち、学校から近い方を『近い方』
、遠い方を『遠い方』と呼んでいた。

『遠い方』はカップルの聖地として有名なので、特に印象深い。

聖地と言われる所以は、『遠い方』を少し進んだところにある『
いかがわしい宿泊施設』の密集地帯にあった。この国のそういう施
設はそこにしかないから、若いアベックの行きつく先はそこになっ
てしまうのだ。さらに言えば、『遠い方』にある飲食店でご飯を食
べてから……。』という流れが王道中の王道らしい。

「いや、『遠い方』の話題を出したのには深いイミはないからね！
ただ、美味しいパスタがあるっただけだからっ」

取り乱すリズという珍しい光景を目の当たりにすると、僕は一瞬
だけ冷静になった。

「うん。わかってるよ。でも、リズは僕の妹なんだし、そんなに気
にすることでもないんじゃないかな。勿論、他意はないよ」

家族という周知の事実を利用して、『遠い方』に行くのも悪くな
いと思った。

僕はそういうのとは無縁なので、無論、そこへは行ったことがな

かった。なので、冒険心が優勢に働いてしまうのも無理はない。

「私はルーの誕生日を祝うのが目的だから、どこに行くかはルーが決めていいからね！」

決定権を委ねられてしまうと、悩むのと同時にプレッシャーも感じる。

そして、違和感も。

ん？ 違和感？

「ううん……」

これは、どっちに行つて何をしたいと言う迷いとは質を異にする感情だ。感情という定義をしていいかもかなり怪しい。

そもそも違和感というには、感じている心の容積のようなものが大きすぎるし、後悔を恐れる不安や心配が、その周囲を圧倒的な厚みでカバーしていた。

でもそれは、『少しい期待が含まれていてもいいのではないか』と異議を申し立てたくなるほどしつかりとした、深いマイナスイメージに染まった冷たい違和感だった。

そんな曖昧模糊としたイメージは、僕の言葉をも曇らせてしまう。「どうしようかな……。『近い方』にも美味しいお店はあるし……。でも『遠い方』にも行ってみたいし……」

せつかくリズが提案してくれたのだから、『遠い方』に行ってみたい気もした。

確かに家族関係にある二人がそういう雰囲気のある場所に行つても問題はないけれど、それは周りの人から見たとすると訳が違う。

もし、運悪く同じ学校の人に見つかつて噂を流されたら、僕もリズも普通の学校生活を送れなくなつてしまう。制服を着て行くことになるだろうから、なおさらだ。

でも、リズは妹だよ？

魔が差したのか、僕はそんなことを考えていた。
好き嫌い云々の前にただの妹だぞ、と。

でも、それは裏を返せば『妹だから構わない』という自己暗示にもなり得た。

だけど、そんな葛藤すら、違和感の前では小さく見える。

「ま、まあゆつくり考えればいいよ。それにまだ部活が休みかもわからないしね」

そう諭されて、自分がどれだけ冷静さを欠いていたか初めて理解する。対照的にリスは自若とした態度だった。

ただご飯を食べに行く場所を決めるだけなのに、僕は腰を据えて話すことができない。

それほどに、妹のことを愛してしまっているのか、それとも『違和感』の仕業なのか。

どちらにしても、今日は授業に集中できなそうだった。

子供と大人、遠くて近い。(後書き)

【あとがき】

好きな人が学校にいと、毎日学校へ行くのが楽しくなりますよね。

一つ気になるのですが、それって大人でも適應されるのでしょうか？

「職場」を代入しても……それは違うか。

今回はクールなあの子が登場ですよ。

僕の友達、飴と鞭。

昼休みになつてすぐに職員室へと向かったので、教室に戻つてくると、緊張の抜けきつた感じがよくわかった。

部活動の有無を確かめるべく厳格たる場所へ出向いていた僕は、時期と言ひ笑い声のポリュームと言ひ、その温度差に思わず笑つてしまひそうになる。

「あら。なんだか楽しそうね」

「おわあ！ アリス、驚かさないでよ！」

教室の入り口で微笑していた僕の背後にいたのは、親友のアリスだった。いた、というよりかは出現した感じだったので、だいぶん臆に悪かった。

仰々しく腕を組んで目を細めるあたり、通行の邪魔になつていかもしれない。そう推測した僕は「ご、ごめん」と早々謝罪をして、窓際にある自分の席まで急いだ。

「それで？ なんであんなにニヤニヤしていたのよ。あたしにもらつたキーホルダーがそんなに嬉しかったのかしら？」

そう言えばアリスは僕の後ろの席だった。夏休みという長いブラックのおかげで、他人の席はさすがに曖昧になつていた。

数秒前に謝罪していたという関係上、アリスの問いに対する答えが著しく端的になつてしまふ。

「違ふよ」

「即答なのね」

アリスが「はあ……」と溜息をついて首を垂れると、さらさらのブロードヘアが不意に耳の後ろから降りてきて、ふわふわりと宙を舞う。太陽の光を受けて輝きながら踊る毛先と、その憂いを帯

びた表情の対称性がとても魅力的に見えて、目が離せなくなる。

「な、なによっ」

「プレゼント、すごく嬉しかったよ」

先刻の誤解を解くために放った言葉が、アリスの顔から憂いを奪っていく。対称性が消滅していくのと同時に、顔が赤らんできて今度は相称性に富む。

「こらっ。は、恥ずかしいからやめないさいよっ」

アリスは僕の頬を結構強く抓って、「それで」と話題を戻す。痛みのおかげで、僕の目にハートが宿ることはなかった。

「どうして嬉しそうだったのかしら。もしかして、部活が休みだったから、とかかしら？」

「ど、どうしてそれを……」

どうして、部活が休みだと僕の愉悦に繋がる、という今日限定の思考回路を把握しているかが聞きたかった。

けれど、質問に関してアリスはいつも同じ返答をするのだった。

「アリス情報網を舐めないことね」

そのブロンドには、勝ち誇った表情が一番よく似合っていた。

放課後になると、担当の場所の清掃をしてから部活動、というスケジュールがこの学校では自然、というか普通だった。

部活動に所属することが半分強制なので、学校の思い通りに動いているみたいで癪だ。別にこの学校が嫌いじゃなく、言われたことを言われた通りにこなすと言う行為なら、からくり人形でもできるからだ。

「ねえ。リスはまだなのかしら」

「うん。日直の仕事だけだから、もう少しだと思っよ」

紆余曲折あつて、アリスも僕の誕生会（仮）に来てくれることになった。そのために、待ち合わせ場所となっている中庭のベンチで一緒に待つことになった。

リズと二人で『遠い方』に行くことにわずかばかりの後ろめたさを感じていた僕にとつて、この展開は嬉しい限りだ。

ただ、それよりも今は、アリスという人気者と二人で中庭にいることにハラハラ、ドキドキしていた。

アリスは所謂『完璧超人』というやつで、学校ではかなりの人気があるのだ。アリスの前の席の僕は、しょっちゅう「また告られたわ」とか「好きですとか言われたわ」とかそういう愚痴の様なものを聞かされているので、モテ具合の証人としての能力は申し分ないと思う。

中庭というオープンなフィールドにいと、東西南北すべての校舎から見られることになる。それは“見つけやすい”という理由で探す側にとつては好都合だけど、待つ側にとつてみれば、“観察される昆虫の気持ち痛いほどわかる”、自然相対的な不都合があった。

「アリス姫が中庭で日向ぼっこしてるぞ！」「本当だ！ 姫様だ！」

「いつ見ても可愛いよなー、姫はー」

「あ、アリス様がいるわ！」「今日も凜としていてカッコいいわね！」「素敵！ でも、隣にいるのは誰かしら？」

校舎のあちこちから聞こえて、音を拾うのに耳が忙しい。中庭と
いう箱の様な空間だと、音の反響が際立って、処理にも疲れる。

わかるのは、アリスの人气が性別不問であることぐらいか。やっぱり、アリスはすごい。

「アリスってさ」

「結構、迷惑してるのよ」

「え？」

褒めようとした僕の言葉を遮って、アリスがさらりと断言する。周囲に聞こえないようにとトーンの低くなった声に、僕は一種の恐怖を覚える。高所から下を見下ろした時の、足が竦む感じと似ている。

アリスは時いてしまった恐怖の種を拾っていくよう、追って言い添えた。

「好きです」って言われるのは、別にいいのよ。好きでいてくれるのはとても嬉しいの。だけど、将来何人も人と付き合うわけにはいかないじゃない？」

この国では重婚と同性婚が認められていない。優秀な家柄を継続する狙いなのか、近親婚は認められているけれど、当のアリスには兄弟がいない。

当然、一人の人を愛さなくてはいけないのだから、アリスの言うことには大いに理解がある。

納得の意を、首を縦に振って示すと、優しく柔らかな微笑みをくれた。

「最後には一人の人を選ばなくちゃいけないのよ。それで選ばれなかった人の気持ちを無下にするのはよくないでしょ？」

家柄の良いアリスは、お金目当てで求婚されることがよくあると、言う話を以前に聞いた。

それが何を意味するのか、僕にはまったくわからなかったけど、アリスの真剣さは痛いほど伝わってきた。

「だからあたしは、あたしに告白してくる人たちに言いたいなのよ」
短い言葉なのか、長い言葉なのか。平和なのか、それとも残酷なのか。そんなことがどうでもよくなるくらい、アリスの目には力があつた。

僕は息を飲んで、ただただ聞くだけだ。しみじみと感想を言うつもりもなかった。

「あなたのことを好きな人もいるのよ？　ってね」

その言葉はアリスにしか言えない、とても贅沢な言葉なのかもしれない。

けれど、そのレベルを僕たちのような平民に落とすとしてもきつと、同じく成り立つと思う。

自分の中を検索して見つかった『好き』という気持ちを、もう一度見つめ直したい。

僕の好きな人……。僕を好きな人……

何かを好きになる気持ちは確かに自由なのかもしれない。

でもそれが、俗に言う『恋愛』として成り立つためには、ある程度の正しさが必要になる。

正しさは、相手から一方的に浴びせられる理不尽でもなければ、自ら発する合理性の無い身勝手でもない。

何人も人がいる中で一人を選択する、ということはそれ以外を捨てることに等しいのだから。

進まなかった道は、二度と進めない。それが摂理。だから、その気持ちには、絶対の価値が生まれる。

だからこそ、その告白の価値をもう一度考え直してほしい、という事なのではないだろうか。

「まあ冗談だけど」

「アリス！」

ジョークにしては、暗い表情だなあと、僕は思った。

僕の友達、飴と鞭。(後書き)

【あとがき】

人気者の友達を持つと辛い、とよく耳にしますが、本当でしょうか。

その人気の度合いにもよりますが、おこぼれくらいはいただける気がします。

再会と断続、その境界。（前書き）

【まえがき】

今回は、章の構成上、いつもより少し長い話になってしまいました。
た。

よろしければ最後までお付き合いください。

では本編です。

再会と断続、その境界。

アリスを見つけてからというものの、妹の様子がおかしかった。

具体的にどうおかしいのかというと、猫が学校に行ったらライオンになって帰ってきたようにおかしかった。

僕は比喩が下手だった。

なので記憶を辿ってみる。

『ええええええええ！！ アリス先輩も来てくれるんですかあ！？』

開口一番、通る声でシャウトされたのは、確かそれだった。その時は、東西南北の校舎に木霊していた。

そういうベクトルの反応をするだろうとは予測していたけれど、程度の話にすると、僕としてもそれは意外な反応だった。

僕はアリスとエレメンタリーのころからよく遊んでいたから、同じ家に住んでいるリズも自然、アリスとの付き合いは長くなる。

長い付き合いでわかっているのは、リズがアリスのことを熱烈に気に入っているということ。

学校では親しみやすい後輩という顔で他人行儀に『アリス先輩』と呼ぶけれど、学校を出ればそれはすぐに、小さい頃から親しみ遊んできた友人の顔になって『先輩』と呼ぶようになる。どうして元の『アリスお姉ちゃん』ではないのか尋ねると、アリスに嫌がられたという経緯があったようだった。

それでも、『先輩』や『アリス先輩』と呼ぶことで他人と自分を区別している感は十分あった。

ただ、そんなことよりも、放課後からついさっきまで続いていた

腕組みに、僕は果てしなく呆然としていた。
いくらなんでも大胆過ぎる。
そして

滅茶苦茶羨ましい！

と思ってもいた。

気になって仕方なかった腕組みも、パスタのお店に到着すれば解消されたので、落ち着いて食事することができる。

二人で食べる、という特別感に浸りたい気持ちは確かにあったけれど、学校生活において負うリスクの大きさを顧みるに、今のこの状況はとてもしっかり来た。

「それにしても、このお店の名前【パスタのお店】って言うのね。そのまんまじゃない。でも、まあ、名の通りパスタが美味しければ問題ないわね」

「あはは……。確かにそうだよな」
リッチなアリスが言うと、強い圧迫感があった。

しかし、アリスのオーダーしたものは、確か『店長特製ドリア』というこの店の最安値を誇る商品だったから、色々と矛盾している気もする。

「今日は私が奢るんだから、もっと頼んでも良かったのに……」
「いや、それはさすがに悪いよ」

気持ちは嬉しいけれど、年上としての面目というものもある。

一緒に食べられるだけで　　っと……。
何だかアリスにツッコまれそうなので、このセリフは胸に留めておく……。つもりが、

「そうよ。どうせだから『君と一緒に食べられるだけでボクは幸せだよ』みたいなこと、言っときなさいよ」

結局、言われてしまう。

「先輩……！ 私は先輩と一緒に食事できて嬉しいです！」

「あんだじやないわよっ」

自然と笑顔になれる空気が出来上がる。

周りの客の迷惑にならない程度に、でも限りなく気を遣わずに、笑う。

ここに来てよかった……

そう思う。

そう思うけれど。

本当に？

また、『違和感』が心に表れ始める。徐々に膨張して、心を覆い尽くそうとする。

そうはさせまいと、僕も全力で抵抗する。

抵抗する……。

抵抗する……。

抵抗の仕方が分からない。

逆ベクトルのことを考えて打ち消そうにも、違和感自体の性質が判然とせず難しい。

しどろもどろに渦巻き絡まった感情が、僕という器に重く押し掛かってくる。まるで、こうなって当然だから仕方ないのだというような、どうしようもない諦念に駆られる。

「突然だけど、こんな噂を知っているかしら？」

リスとじゃれていたアリスが急に、不自然な話題と視線を僕に提供してくる。

もしかしたら、苦い感情が思い切り顔に出ていたのかもしれないけれど、今は大いに話に乗りたかった。

「それってどういう噂なの、アリス？」

藁にも縋る思いで、アリスの話題に食いついた。

狙い通りの僕の反応に安堵の色を浮かべたアリスの瞳と、アイコンタクトが成立する。

「え、えーと、そうね……」

ようやく眉を開いて話ができるかと思えば、まさか、策士ともあるうものが無策だったのだろうか。

店内からは食器と食器が擦れる音、キッチンの方からは滔々と流れる水の音。

「なんですか、なんですか？ もったいぶらずに教えてくださいよ」

心臓に悪い沈黙は偶然にも解消されるが、アリスが対策を講じない限り、何も問題は解決しない。僕自身も急いで対策を練っているけど、どうにも『作り話』は苦手だ。

少し静かな状態が続いて、再度、沈黙になろうとしていた時だった。

アリスの顔つきが策士に変わる。

「ふう……。仕方ないわね」

そう前ふりして話し始めた『作り話』は、異様に現実的で、作ったものではなく天然の。本当に身近に起こった事実のように、僕の心を揺さぶり始める。

「『願いの夢』という話を知っているかしら？」

リスは首を横に振る。そして、餌を目前に焦らされる犬の様に目を爛々と輝かせて、続きを待っている。

アリスは少し口角を上げつつ、自前の餌を投じていく。

「この国ではね。昔から、十五歳になると不思議な夢を見る、と言われているのよ」

「へえー！ へえー！」

夢物語の様な話に過剰な反応を示しているが、おそらく傍聴理由の半分以上は『話し手がアリスだから』という項目で占められてい

るに違いない。

僕はといえば、誰とも目を合わせられなくて、テーブルに備え付けてあったナイフとフォークを見ていた。反射して映った歪んだ自分の顔を見て、憂鬱になる。リズに与えられた餌を横取りしようにも、アリスの含みのある笑みが怖くて、踏み切れない。バツの悪い空気を一身に感じて、ただただその声に耳を傾ける。

「それでね。その夢の中では、どこからともなく声がするのよ。そうね……確か、一度も聞いたことがない声が頭の中に響く感じらしいわ」

「それで、なんて言われるんですか？」

『願い』を一つ叶えてくれないか？

その願いというのは、君の『願い』を叶えると言つものだ。

「へ、へえー……。確かに、変な夢ですね」

明らかに回りくどい方法が、乙女の夢を破壊してしまったのか、話を聞くリズの意欲は『話し手がアリスだから』以外になくなつてしまふそうさ。

「そう。変な夢よ」

アリスに変な夢と称されるのは、『願い』が叶うからというよりも、その回りくどさにある気がする。

結果として一つの『願い』を叶えるのなら、初めから「あなたの願いを叶えましょう」と言えば良い所なのだ。

にもかかわらず、「あなたの『願い』を叶えると言つのが、私の願いです」と婉曲的に言うのには、何か理由でもあるのだろうか。まあ、都市伝説だから面白さに期待はしないけれど。

「でも先輩、どうしたんですか急にそんな話を」

話の発端を辿ったのか、リズが不自然さに気付いてしまった。こうなると、対処はすべてアリス任せになつてしまふ。

どうしてその話題を持ち出したのか、僕には知る由もないのだから。

「そうね。最近、十五歳になった人が近くにいたからかしら？」

「ルーのことですね！ さすがアリス先輩！ オチをつけるのも上手いです！」

策士アリスが感情的な理由だけでそんな話をするとは思えなかったけれど、場の空気は結構落ち着いてきたので、一先ずは胸を撫で下ろせる。

一呼吸置けと言わんばかりのタイミングで、僕たちのオーダーしていたものが運ばれてくる。

店内を明るく照らすシーリングライトとスタンドライトの組み合わせは、ノートに映ってしまう自分の影を打ち消してくれるので勉強が捗りそうだけど、今日照らしているものはしっかり黒いままだった。

「イカ墨」

『パスタのお店のイカ墨パスタ』がテーブルの上で黒く銜っているのを見て、妹の表情は段違いに明るくなる。リズは結構、食べるのが好きだった。

続いてアリスの目の前に配膳された『店長特製ドリア』は、これでもかというほどの湯気を立てていて、その熱さが非情であることを物語っている。しかし、熱で蕩けたチーズのアトランダムなうねりを見ると、他人の物であるにもかかわらず食欲が掻き立てられてしまう。

ただ、いくら夏の終わりとはいえ、寒くなったわけではない。

「あ、温かそうね」

アリスは暖かいものが好きなのかもしれない。

「『蕎麦風パスタとパスタ風蕎麦の境界』になります」

「あ、はい」

読み上げられた商品名を考察すると、パスタでも蕎麦でもない麵類という分類になる。

僕がオーダーしたかった料理は、所謂『和食』と言うやつだったのだけれど、洋食店に『和』を求めてもいい答えは返ってこない。

そう諦めかけていた僕の視界に飛び込んできたのが、これ『蕎麦風パスタとパスタ風蕎麦の境界』だった。

ただでさえ謎のジャンルである和食を好き好んで食べる者は、この国では好事家と呼ばれることになる。ある哲学者が『和食』のことを『平行世界の遺物』とまで言っていたことは、和食を好む好事家たちの間では、あまりに有名で共感に値する噂である。

その理論に共感を示せる人間を好事家と言わず何と言えようか。それは表現的な意味で。

よくされる「何が謎なのだ？」という愚問には、「すべてが」という一言で返すに尽きる。

「境界って言うてたけど、それ、和食なのかしら？」

アリスはスプーンを手に取りながら、物好きの感性を疑う。

僕は自信を持って、その疑念を払いたい。

「蕎麦は和食！」

もつと具体的に言えば、僕が和食と思う物は『和食』だ。

箸という食事道具を探したけれどなくて、その代わりに、我慢の限界を超えてイカ墨パスタを食べ始めているリズを見つける。

一口、また一口と頬張るごとに、口の周りがイカ墨で染まってゆく。その黒に比例して拭いてあげたくなってくる。しかし、『遠い方』に來ていることを思い出して、手が出せなくなる。

「あむ……。お、美味しいわ、あつ、熱くて」

こちらでも、すでに食べ始まっていた。

いただきます、とか言わないのが流行っているのか。

仕方ないので、僕もフォークを使って食べ始めることにする。

「ご飯を食べれば大抵の不満は忘れてしまう、というような話をよく聞けけれど、本当にそうだと思うた。」

喉越しで感じる特殊過ぎる芳香が、クセになる。これは確か……
『seuyu』という名前のソースの匂いだっただ。

そのソースは流動性に優れているために、嚼るだけで麺と麺の間に良く絡むので、風化して味が落ちることがない。パスタは時間が経つと乾燥して味が落ちるから、すぐ食べなければならぬが、蕎麦の場合はその心配はなかった。

それどころか、時間が経つと麺が『seuyu』を吸って柔らかくなるので、塩梅の整った味そのままに、また違った食感を楽しむことができるのだ。

そんな洗練された料理『和食』は、蕎麦だけの話ではない。
そもそも『和』というのは……

「ちよつとルー。洋食店なんだから、あんまり嚼って食べちゃだめなんだよー」

感慨に浸っていると、口の周りを黒くした年下の女の子に注意されてしまった。

反駁の余地があり過ぎて、逆に畏なのではないかと、疑いたくなる。

だから、あえて「ごめん」と謝ってみれば、立場が逆転している事に気が付く。

実は畏など最初からなくて、空いている深い穴に自ら入ってしまったパターンだった。

僕は、自業自得の落とし穴から抜け出すべく、足掻いてみる。

「食べるの早いね、リス」

「え。そ、そうかな？ はっ！」

リズは隣に座っている人物を一瞥して、何かに気付いたようで、突然行儀よくなる。

そして、テーブルに備え付けられた紙ナプキンで仰々しく口を拭くと、微笑みを一つ作って、話を逸らそうと努めた。

「さ、さっきの話の続きなんですけど、先輩は将来の夢とかあるんですか？」

せつかく収束した危惧の念が、再度形を帯びてくる。

でもそれは、受験という人生の岐路に立たされた僕たち三年生に對して、一年生であるリズが疑問で然るべきことなのかもしれない。

「それは叶えたい『願い』とか、そういう話……ではないわよね」

質問の意図を理解したのか、アリスはリズと視線を合わせないようにして、何か考え始めた。

すぐに答えが出せないのは、リズの納得を得られそうな解答が浮かばないからか、具体的な将来像がないからだろう。

流れるに、僕も言わなければいけないだろうから、他人事ではなかった。

『どこのアカデミーを受験しますか？』という具体的な質問ですら消去法で答えを出している僕が、『将来の夢は何ですか？』のような抽象的な問いに、誰かを納得させるような答えを出せるはずがないのだ。

「あたしの将来の夢……。そうね、多分、医師とか弁護士とかになると思うわ」

「へえー！ お医者さんですか！ やっぱアリス先輩はすごいですね！」

アリスの言った『多分』や『なると思う』という曖昧な表現には、アリスらしからぬ覇気の無さが、確かに見て取れた。

「そんな素晴らしくないわ。あたしはただ、言われたことを言われた通りにやるだけよ。そんなものより、リズのご両親の仕事の方がよほど生産的で素晴らしいと思うわ」

コーヒー園経営者と文学者を持ち上げて、医者と弁護士を謙って

言う。話しているアリスの表情は、戒律正しい仕事とは質を異にするものを、どこか羨望しているようにも見える。

アリスの本当の夢は医師や弁護士じゃない？

だとしたら、どうしてそんなことを言ったのだろうか。

問いを投げかける前に、僕へとパスが回ってくる。

「そ、そうだわ。あなたはどうなのよ。三年生なんだから、将来の夢くらいはあるでしょ？」

「ぼ、僕は……」

いまだ正体の掴めない違和感と、アリスの表情と言葉、それから腑に落ちない不安要素の対処に手一杯で、自分のことを考えるのが蔑ろになっていた。

適当な解答をすればアリスにツッコまれるだろうし、妹の面前なのでカッコつけていたいという気持ちもある。それに、沈黙を作るのも怖い。

穴の空くほど瞳を凝らして僕を見つめている二人から、さりげなく視線を逸らして、薄らと店内を見渡してみる。

店員が慌ただしく蠢く統率の取れたキッチンルーム、値段以上に多種多様なセルフバイキング、自身の緑を強く主張する観葉植物。

これほど周囲を見渡している人は、十数人いる客の中でも僕くらいだ。

もし今、何か一つでも合点がいく答えを見つけることができれば、その不条理さや理不尽性を無視して、僕はそれを自分の答えとしてしまふのだろう。

でも、順序としては間違っていないのかもしれない。

どれだけ平仄が合わない決断であったとしても、それは自分がした決断に変わりはなく、後になって考えてみて悔いが残るのなら、またやり直そうと努力すればいいのだ。もし、成功したのなら、その時は両手を上げて喜べばいい。

「　っ!？」

ふと視界に飛び込んできた狂気に、僕は息をのむ。

同時に、感じていた違和感が、仄かな恐怖へと形を変え始めている事に気付く。

「アリス。リズ。今すぐここを出よう」

期待していた答えと違ったようで二人ともとても不満そうだったけれど、結局、納得の解答が浮かばなかったのだから、仕方がなかった。

しかし、今は浮かんでいたとしても同じ答えを返しただろう。

「えー……。どうしたの急にー。まあ家でも聞けるからいいかー」

「もつと焦った方がいいと思うのだけど」

「気付いてたの!？」

アリスは首を横に振って「今気づいたのよ」と言った。
いつも通りの冷静で鋭い声色なはずなのに、僕の心は不安なままだ。

「え？　なにになに？　どゆこと？」

周囲をキョロキョロと見回して首を傾げ、イマイチ状況が掴めていない様子だ。

ならば、掴めていないままの方が善策だろう。

まだまだ子供のリズに、現状を伝えて混乱させる方が悪い結果になる気がする。

「なんでもないわ。これからショッピングする予定を立てていたのを思い出しただけよ」

これから、というと確実に夕食に間に合わなくなる気がするけれど、アリスの言うことならリズは都合よく解釈してくれる。

そこに引け目を感じている暇はなかった。

「と、とにかく!　ここを出よう!」

今なら、会計を済ませて、安全に脱出することができる。

下手に刺激するより穏便に事を構えた方が、僕たちとしても冷静にいられるはずだ。

脱いでいた制服を着て、会計の伝票を持って、忘れ物がないか確かめて、二人の手を引くようにして、出口付近にある会計場所に急ぐ。

この際、二人の手を引くだけでもよかった。

「かかかか、会計、お願いします！」

「そんなに緊張しなくても……、っていうかここは私が奢るんだからね！」

割り込んでくるリズに、少しばかり苛立ちを覚えるけれど、ここは従った方が早く済みそうなので黙って奢られることにする。「会計は全員分まとめてお願いします！」と元気に発音する姿を見るに、まだ気づいていないらしかった。

「か、かしこまりました」

一方、店員の方は視線の先だけあってさすがに気付いて、萎縮している。

そして、背後を取られる形となった僕は、手の震えが収まらず足も落ち着いて地面を捉えてくれない。生きた空もない思いをしているのは、僕の左腕に必死にしがみついているアリスも同じだっただろう。

会計を終えたリズが「どうしたの？」と訝し気に尋ねてくると、圧倒的な温度差を感じた。

しかし。

「あ……」

そこにあつた温度差が急激に縮まって、一気にゼロになる。いや、マイナスかもしれない。

リズは恐怖を体現化したような表情のまま、一步、また一步と後ずさる。リズが離れていかないよう、僕もリズを追うように二歩前

進する。自然、アリスもついてくる。

会計場所の長机に凭れかかるように、僕たち三人は身も心も縮こめて戦々恐々する。

恐怖を目の当たりにしているからか、リズの顔からは徐々に色が抜けていつている。このままでは死人のように白くなってしまふ。

そして、一瞬、リズの体がビクツと反応する。

何に反応したのか、推測は必要なかった。

「ひっ！！」

僕の目の前で、同じ圧力を感じていた店員が、声を上げてその心情を露わにした。そして、逃げるという行為によって、自分の『願い』を叶えようとする。

すっかり密着しているおかげで、二人の心臓の音が聞こえてくる。それは僕と同じく「助けて」と音を上げ、弱く、そして早く拍動していた。

「金を出せっ！！」

学校の先生が熱弁する時なんかよりも明らかに野太くてどすの利いた声。透明感が無く焼け枯れているせいで耳障りなのが、逆に頭に残って気持ちが悪い。

客の中には悲鳴を上げる者もいたが、数秒後には沈黙の空間の一部となつて、ただただ恐れ戦いているだけだった。そこに生まれた一体感は、何よりも頼りがいかなかった。

その一体感に飲み込まれるように不動沈黙でいた僕は、眼を瞑つてただただしがみついてくるアリスの期待に応えようと、策を練るのに必死だった。

でも。

極度の緊張と、これ以上ないくらいの後悔が、僕の思考回路をシ

ヤットダウンしてしまう。その度に僕はゼロから考え直すけれど、
打開できるような策など一つとしてありはしなかった。

どうしよう！

どうもできない。

奇跡でも起こらない限り……、僕たちはもう……

奇跡を祈っていた矢先、僕にかかっていた重さが、まるまる一つ
取られる。否、盗られる。

「きゃ！！ いやっ、やめてー！！」

重さの正体は、妹のリズだった。

僕は、思わず振り返った。恐怖を超える『何か』を感じたせいだ。
僕のそばにあるはずだったリズは、どうしてか見知らぬ男の腕の
中にある。

強引に首元に添えられたナイフが、ちらちらとこちらを挑発する
ように反射光を浴びせてくる。あと一センチでも動いたら、雪のよ
うな白さに不純で穢れた赤が表れてしまうだろう。

『何か』を感じていた僕は、考えるより先に言葉を放っていた。

「やめろ！！」

やめろ！ 妹に触れるな！

そう思った。

僕は、他でもない憤りを 『憤怒』を感じていたのだ。それが
恐怖に打ち勝った。

普段、大きな声を使うことがないので、自分で自分の声に驚く。
でも、一度閾値を超えれば、次の行動までは時間がかからなかつ
た。

「離せ！！」

文になっていない言葉。ただの命令文句。

こんなにも強い言葉の籠ったセリフを、こんなにも弱い僕が言えるとは思っていなかった。

でも、言えた。

これはリスのためだから。

そう思うと、勇気が湧いてくる。

もしかしたら、返り討ちにできるかもしれない！

「それはだめよ!!」

アリスの悲痛な叫びが耳に入ったかと思えば、刹那、僕の視界はやけにローアングルになっていた。アイレベルを上げようと試みるも、下腹部に強烈な痛みが走って起き上がれ……ない？ どうして？ 地面に寝そべっている場合じゃない……のだけれど、頭も打っているようで視界が不均一に歪む。

「大人を舐めるなよ!？」

気味の悪い声が耳に入ると、防衛反応で視界の歪曲が一気に調整される。そして僕は、理解する。

どうやら僕は、僕が思うより先に、行動に移してしまったようだ。「くっ……。うっ……」

どれほどの力を下腹部に受けたのか。

それは、自分が店の外まで飛ばされていることを考えれば、痛いほどわかった。こうして、確かに痛いし。

でも、そんな痛みは耐えなければならなかった。耐えて、二人を救わなければなかった。

アリスというもう一人の人質を手に入れたその男は、店内に向かって再度「金を出せ!!」と凄む。そして今度は「さもないと、こいつらの命は無い!!」と条件を足した。

困る。やめる。ふざけるな。絶対に許さない。

思いがいくら募ろうとも、それらが腹部の激痛を癒してはくれない。

尚も、動けない。

痛点を大雑把に押さえて、涙が溢れてしまわぬよう奥歯を食いしばる。それしかできない。

「くそっ……！ う……ぐっ……」

形は違えど、これは人生の岐路なのではないだろうか。

叶えられない『願い』がいくらあっても、現実、叶えるべく努力するための願いを決めることは難しい。

今助かるという奇跡を願うのは簡単だけど、現実、僕が立ち上がって二人を救うのは難しい。

勝手な変換をした自分の思考回路に腹が立つ。それでいて道理に外れないその理論に、また、腹が立つ。今、立ち上がれない自分に、一番、腹が立つ。

例え無駄でも、例え無意味でも、例え無価値でも。

今自分が立たされている運命に抗えないことに、狂おしいほどの『憤怒』を覚える。目の前に目的が 光が見えているのに掴めないもどかしさに、僕はこれ以上ない怒りを感じてしまう。

「おい！！ 誰も持ってないってことはないだろう？ ええ？」

頑として沈黙を貫く店内の反応の無さに痺れを切らした男は、「それならこうするだけだぞ？」と脅迫し、同時にナイフの刃でアリスの首を軽く撫でた。

「っ」

アリスはいつものプライドに満ちた明るい微笑と正極にある険しい表情を見せる。

「お？ この女、無反応かよ。我慢しなくてもいいんだぞ、俺は若い女の喚く声がたまらなく好きなんだ！ ほら、ほら！！」

一つ、また一つと赤い雫が重力の働くままに首を伝って、制服の

襟で堰き止められる。雫が通過した後には赤黒いラインが浮かんで、痛々しさを周囲に知らしめる。

「い、痛っ！ や、やめなさい、よー！」

「ア、アリスお姉ちゃん！ お願いやめてー！」
くそ。

僕が助けないと。僕が助けないと。

……だめだ。

「お腹が……、くっ……」

叫んで助けを呼べば或いは。
でも。

さっきの様に声を張ろうにも、痛みのせいで腹部に力が入らない。ならば、だれかの近くまで行けば、この異常事態に気付いてくれるかもしれない。

洋食店の前は大きな廊下になっていて、向かい側にはこじやれたインテリアシヨップが設置されていた。人も何人が確認できる。

この際、一般人でも構わなかったけれど、その中に一人。

「……お姉ちゃん、大丈夫！？ しっかりして！」

「へ、……気よ」

かろうじて店内の音が聞こえる。男はまだ僕に気付いていないらしい。

これなら。

「へえ。似てない姉妹だな。髪色も違うし、どっちかと言えばさっきの」

男の話し声が止んだ代わりに、足音が近づいてくる。

もう、気付かれてしまったか。

でも。

「き、君！ 大丈夫かい！？」

「は、はい。何とか」

慣れない地を這つての移動に酸素を使ったせいで、脳にまで十分な量の酸素が届いていないらしく、正常な意識を保つことができない。

い。どことなく視界も白んできた。

朦朧とする意識の中、僕は伝えなくてはいけないことを伝える。

「妹が……妹と友達が、大変なんです!!」

「大変!? 大変ってどういうことだい? もう少し詳しく教えてくれ!」

防衛用の装備を整えた警備員と話していれば、ナイフを持っていたあの男もそう簡単に手は出せないだろう。

僕を追って来たとしても、警備員に返り討ちにされるのがオチだ。

「妹を、アリ……ス、を……。二人を……」

「ちよ、ちよつと! 大丈夫かい!」

よかった。

これで二人とも助かる。

「助けて、くだ……」

苦痛を堪えて立ち向かうとか、潔く諦めるとか、そういう正攻な選択ではなく、命題の揚げ足を取るような、頓智を利かせたような、そんな途轍もなく脇道にそれた選択肢だと、僕は思う。

でも、それで誰かが笑ってくれるなら。

僕の好きな人が笑顔でいてくれるのなら。

僕はその選択を、後悔しない。

現実でも夢でもない、『願い』。

「う、嘘……でしょ……？」

誰かに責任を課そうとか、自分に責任があるとか、そういう感情にはなれなかった。

だって、誰が悪いのか、明白だったから。

本当に明白だったの？

確かに明白だった。

「ごめんね……。止められなかったよ……。謝ったって許してもらえないよね……。一生かけて償うよ……。本当にごめんね……」
そう。

警備員の人は悪くない。

だって

二人を救えなかったんだよ？

それは僕も同じだから。

悪いのは二人を僕から奪った、あの男。

国の公安部の人たちが担架で運んでいるのは、さっきまでとは打って変わって静かになって、眠るあの男。公安に射殺された、あの男。もう二度と起きることなどない、あの男。

二人を傷つけた人間がいなくなつて、ひどく安心した。

けれど、せめて。

せめて……。

自分が殺したかった？

そんなことあるはずない、と言ったら嘘になる。けど、

「いいんですよ。警備員さんは悪くありません」

そう答えるしかなかった。

でも、僕はアリスのように嘘が上手くないから、それは隠しても
すぐに見抜かれてしまう。

怒り、嘆き、悲しみ、寒さ。

寒い、寒い、寒い。

果て、震えたこの声のせいで。

「本当に、ごめんね……。悔しいよね……。なんて言っているのか
わからないんだ……。ごめんね……」

僕から復讐の機会を奪った警備員の人は、それから何度も「ごめんね」と言っ
て、泣き崩れてしまった。そして、それからは謝罪の言葉以外を発しなくなっ
てしまった。

罪悪感などなかった。

これから二人の死を背負っていくことは、僕も変わりなかったか
ら。

事件の概要は、起きてすぐ自発的に飲み込めた。

目の前で、二人、見知った顔が横たわっていたから。

最初は寝ているのだと錯覚したけれど、同じ色の物を見たくなくな
るほど真っ赤に染まった店内の床を見て、そうではないと理解で
きた。

信じたくない事実だったのにも拘らず、否が応でも知らされたせ
いで、僕は逆に冷静になった。

だから、事件のあとのことは鮮明に記憶に刻まれていた。ただ、

二人が死ぬという僕にとつての事件が始まってから終わる直前までの記憶は、その部分だけ夢幻ゆめまぼろしのように存在しなかったけれど。すぐ思い出そうとしたことは覚えている。

だって、それが夢なら、続いている今も夢かもしれないから。

アリスが死んだ。

リズが死んだ。

そんなことは覚めれば嘘になる夢であつて欲しかった。夢であれば、また「冗談だよ」と言つて互いに顔を綻ばせ合うことだつてできるのだ。そういう温かい現実が、夢の先には待っているのだ。

ーでも、違つた。

当たり前のように、冷たかつた。

あまりに冷たくて、僕は泣いた。

事件の収束と同時に振り始めた冷雨が、僕の体を冷やしていく。怒りを抑えていられるのは、この雨のおかげかもしれない。

でも今は、抑えるほどの怒りすら感じていなくて。

僕の気持ちを形容したように降る雨は、一滴一滴が生きているかのように肌に纏わりついてくる。でも、それが生きているはずはなくて、ただただ『縋りたい』という自分自身の意識が作り出した幻影にすぎないのだ。

「もう待てませんよ」

冷たすぎる現実を諦めたくない一心で、僕は公安に頼んで遺体の搬送を遅らせていた。

それも、もう、終わり。

僕は温かい。体温があるから。

僕は動いている。意識があるから。

僕は生きている。生きているから。

二人から僕と同じ要素が、一つ一つ消えていくのが分かった時、僕はどうしようもなく虚けた。

だから、同じ冷たいを雨を浴びているというだけで、僕は少し報われた気がしていたのだ。

「わかり、ました……。でも、最後に、一分だけ、時間をください」
二人に同じものを求めるにしても、冷たい雨は可哀想だと思った。
だから最後に いや、最期に僕の持っているものを分けてあげようと思った。

いい顔はしていなかったけれど、公安の人も「一分なら」と認めてくれた。

使えるだけの時間を使おう。

僕の思い。

「ごめんね、アリス」
伝われ。

「今までありがとう」
強く、強く抱きしめた、その冷たい体に。

僕の温度。

「………………。リス……………」
伝われ。

「大好きだよ」
僕の方から求めた、その冷たい唇に。

あれから、まだ一時間も経っていない。
公安の人に家まで送ってもらった僕は、一人で自分の部屋にいる。
一階では公安の人と両親が話をしている。

下から母の慟哭が聞こえるたびに、僕は枕で頭を覆って聴覚情報を遮断した。それでも、父の激怒する声は聞こえてきて、結局は心が痛んだ。

感情を爆発させたところで、報復にすべてを注いだところで、どうにもならないことを知っていた。それは両親も同じだろうか。
「泣いたって、怒ったって……」

リズは帰ってこない？

ふと生まれた疑問に、僕はさらに疑問を重ねる。

自分の中の疑問を疑問に思うというのは、意味不明な『違和感』がある。

前提した通り、その『違和感』を解消したところで二人は戻らない。
い。

けど、

「何もしないよりは、何かした方が……」
絶対に良いとも思った。

僕は、これからずっと、二人の死を背負って生きていかなければならないのだ。もともと、リズのように明るい性格ではない僕が、そんな大きな負を背負えば、確実に人生のそのすべてが暗い道に落ちる。

確かに、歩き慣れてはいるけれど、やはり僕も明るい道を歩きたいのだ。

気の持ちようで、僕自身の道を明るく照らすことは出来るかもしれない。
なら。

「二人がまた笑ってくれるなら……」

何をしてもいい？

よくはない。

二人に笑顔が戻ったとして、仮に僕がいなくなってしまうえば、元も子もないのだから。

でも、二人に笑顔が戻るならと、極論そう思わなくもない。

贅沢な『願い』だよな

当然だった。

蘇生を願っているのだから。

ものを願うということには、必ず代償が付き纏うものだ。蘇生の代償は、単純に考えれば同じ数以上の命と言うことになる。

でもそれは、『人の命を奪う代わりに二人を救う』のであって、『二人が救われる代わりに人が死ぬ』のではないのだ。

でも、もしそうなら。その贅沢が許されるのなら。

二人以外の死には目を瞑る？

首を縦に振ることは簡単ではない。

ただ、命の重さというのは確実に存在するのだ。

同じ犬なら優秀な犬が、犬と人間なら人間が、同じ人間なら遺伝子の強い方の命が、確実にその重量を増す。

でも、優秀な飼い犬と優秀な野良犬なら？ 大好きなアイドルみたいな赤の他人と、愛しても愛しても足りないくらい大好きな恋人なら？

結局はすべて、その『思い』に左右されてしまうのだ。

だから哲学者たちは研究するのかもしれない。

どちらを救うべきかの方程式を見つければ、悩む必要なんてどこにもないから。

「知らない人間と、大切な二人……」

天秤にかけて、重いのはどっち？

答えは簡単だった。

けれど、替わりに犠牲になる人たちに目を瞑るのも、良心が痛む。それが贅沢だとわかっていても、片方を諦めることなんてできない。

命の重さは、僕一人で決定できるものではない。

でも、もし、二人がまた

また笑顔で、話をしてくれるなら。

僕は、犠牲に目を瞑ってしまうに違いなかった。

けれど、これは『二人が生き返ることなどない』という大前提のもとに成り立っている。だから、ここまで残酷になれる。

すべては空想だ。

夢だ。

「いや、叶いもしない『願い』だ。

」うわああああああ！！」

それを認識した途端、僕の心は音を立てて泣き始めた。

枕越しなのに、一階に聞こえるのではないかというくらい、僕は嗚咽して泣いた。

滔々と溢れ壊れそうになる瞳よりも、喘ぎ喚いて潰れそうになる

喉よりも、自分の声で破れそうになる耳よりも、何よりも 心が痛い。

今まで溜め込んでいたものがすべて、涙となって僕から出て行っている感じだった。

このまま二人のことも水に流して、忘れ

ルート、あなたはそれで幸せなの？

それは、僕の名前。アリスがたまにする呼び方だ。思い止まった僕には、考える時間が生まれた。

僕は本当にそれで幸せなのだろうか。

アリスとリズ。今もそうだけど、きつとこれから歩んでいく人生でも、最も大切な人になることだろう。

そんな大切な二人と作ってきた思い出を、すべて忘れていいのだろうか。

リズと喧嘩をしたことがある。それで一週間口を利かなかったことだって何度もあった。

それは忘れていい思い出？

そんなはずはなかった。

僕とリズは喧嘩するたびに仲直りをして、それでずっと幸せだった。心の底から明るくなつて、笑いあえる日々を送れた。

忘れていい思い出なんて、一つとしてないのだ。

でも、だからこそ、僕は二人の死を乗り越えなければならぬ。周囲の人間を自分の闇に巻き込んでしまわぬように、平静を装って生活していかなければならなくなるかもしれない。

それは、二人が生き返っても同じこと

そうだ。二人の死が無かったことになっても、僕は覚えていなければならぬ。

二人が生きている現実を見るということは、二人が死んでいた夢を見ていなければいけないということだから。

でも、それが夢なら 夢と分かっているのなら。

「僕一人でも……」

生きていける。

僕だけが二人と違う夢を見ていても、冷たくても幸せな現実がそこにあれば。

僕は生きていける。

だから、僕の『願い』は……

そう。

これは大事な人を失って病んでしまった僕の空想で、途中で諦めればまたどん底に落ちてしまう、そんな気休めにしかならない。

でも、何もせずに、ただ、二人の死を受容することなんか、到底できなくて。

人は、人生の岐路に立たされた時、迷い、苦しみ、悩み、悶える。変えられない失敗という結末に、後悔をしたくないから。

自分の歩く道を決めるのは、簡単なことではない。

過去を振り返ることはできても、未来を見通すことなんて、絶対にできないから。

だけど、進んでしまった逸れた道なら、まだやり直せるかもしれない。

寄り道は、ボーっと立ち尽くして待つことでも、ただ先生の指示に従うことでも、この世の不条理に抗うことでもない。

小高い丘に登って、少しだけ未来を見渡してみることなのだから。僕が知らずに進んでいた、あの脇道の先には未来がよく見える丘

があった。

後悔したくないという臆病な感情を拭いきれなかった僕は、失敗しないよう必死に未来を探した。高く高く、できるだけ遠くを見ようと、僕は躍起になった。

そして、落ちた。

落ちた衝撃で、とても大切なものを失った。

結局、後悔した。

後悔しまいと意気込んで上った丘で、僕は後悔したのだ。

急に答えを要求されたわけではない。

それは人生も、その一部である受験も全く同じで、躊躇していた時間分は、確実に猶予として与えられているのだから、反駁の余地など存在しなくて当然なのだ。

だから、言い訳を述べることは無駄なのだ。

必要なのは『反省して』、『改善して』、『一度目より良い結果を得ること』。

これは僕にとって最後のチャンスだから。

「やり直したい……」

すべてが始まる

「あの時を」

昨日のことを思い返すと、心の壁を内側からバリバリと破られるようなショックと、大切なものをたくさん失ったような激しい喪失感で涙が溢れ出しそうだった。

僕はそれを堪えるために目を開くのを躊躇うけれど、太陽の強い

覚醒効果を遮断するには、薄い瞼は頼りなすぎるようだ。

「んん……」

ルーティンワークをこなせば、目も覚めて、昨日の悲劇にも目を瞑れるかと思っただけれど、部屋のクローゼットからはみ出している誕生日プレゼントの一部分を見ると、そうでもなかった。

「まあ、大会だったんだから仕方ないよね……」

割り切ろうにも、心の表面で渦巻くごちゃごちゃの感情が邪魔してくる。マイナス、プラス、その中間、イーティーシー。本当に様々な感情が渦巻いている。感情と定義していいか微妙だけれど、『違和感』という表現がしっくりくる。

僕が何かを感覚する部分に、その『違和感』がべったりと接着されてしまっているので、暫くは忘れられそうもない。

「アリスにいじられそうだなあ……」

けれど、そんなことで学校を休んでしまえば、さらにいじられることになるだろう。

それに、妹が心配するだろうし。アリスもか。

「さて」

就寝の時間はここまでという意味を込めて、そう合図する。

寝相が悪い方ではないので、ずれたシーツのしわをぴしりと正せば、ほとんど完璧なベッドメイキングが完成する。

そのおかげで、着替えや学校の準備などの身支度に時間を割くことができる。ただ、宿題含め学校に関する用意は前日の内に済ませてしまうことが習慣になっているので、その時間も短縮される。

朝の時間の使い方には、少しばかり自信があった。

けれど、その余裕も今日までのようだった。

「か、階段……」

数日前にこの階段から転落してからというもの、下る際の進捗にかなりの悪影響が出ていた。

一段降りる度に何分もかかってしまえば、せっかく作った時間の余裕も自然となくなり、早起きを苦手とする妹との間にあったアドバンテージもすぐに埋まってしまっ

「あ、ルー、おはよう」

「お、おはよう、リズ」

下の段で対応することで、自然とアングルが下がる。

家族である僕の数にも、その姿はやはり『あられもない姿』に映る。

「そんなに階段が怖いのか？」

「う、うん。ま、まあね」

包み隠さず言つと、リズはすぐに同じ段まで来て肩を貸してくれた。

そこまで身長差が無いおかげでお互いの足が浮いたりはないけれど、妹という自分より弱い存在に依存している現状に背筋が冷たくなってくる。

到底頼もしいとは言えない女の子らしすぎる肩ではあるし、何より、僕自身が特別な感情を抱いているせいで、意識せずにはいられない。

「あ、あり、ありがとう」

「いいよ。……………え？ ちょっと」

ただでさえ処理力の低い僕だから、違和感とか憧憬とか郷愁とか、そういうわけのわからない心情がキャパシティを越えてしまったのかもかもしれない。

それは、壊れたということなのか。

「……………どうして泣いてるの？」

表情を見られないように、俯き気味に首を振る。

カッコつけていたいといことではなくて、リズを直視してしまえば、また涙が溢れてくる気がしたから。

「うう……。僕にもわからないんだよ……」

「そ、そんなに階段怖かったの？」

確かに階段を降りると言う行為にはフラッシュバックするほどのトラウマを感じていたけれど、それは泣くほどのものではなかった。それに、感情の性質というか、温度のようなものトラウマとは真逆だった。

「嬉しいんだ、と、思う……」

「嬉しい？　もしかして私が肩を貸したから、感動して……ってこと？」

「そ、そうかも」

本当はもつと大きな何か。

けれど、それを口に出して　言葉にして表現するには、人生経験がまだまだ足りない。少なくとも、失敗を恐れてわき道に逸れてしまうような子供の僕では。

それは『愛』とか『恋』とか、簡単な言葉じゃ到底表しきれないことが分かっているから。

だから、言い得て妙な表現を経験するまでは、『違和感』として扱うしかないのだ。

「ふふっ……」

「こ、今度は笑って……、どうしたのルー？」

これから歩いていく道を照らす力もないほど不安定で弱い僕でも、一つだけわかることがあった。

それは、学校で教えられることもなくて、人生経験の中で学ぶものでもない。

自然的に習得するものだから、動物と同じ『条件反射』などと敬遠されることもあるだろう。

でも、確かに、それは人間にしかできないこと。

「嬉しいときは、笑っていたいから」

「あははは！　なんだ、そういうことね！　もう、脅かさないですよ。そこには何の迷いもない。躊躇もない。後悔することも厭わず、僕たちはそれをやってのける。」

例え、その先に見える景色が黒くて寒い、荒んだものであったとしても。例え、身震いするほどの暗澹たる闇に染められた絶望の過去を見せられたとしても。

笑顔でいられる今だけを感じて。

「リズ、いてくれてありがとう」

「ふふふっ！　いいよ。どういたしまして！」

そして、僕たちは階段を下る。

現実でも夢でもない、『願い』。(後書き)

【あとがき】

これでルート編の第一部が終わったことになりますね。改稿前はリス編(秋)、アリス編(冬)という形で書いておりましたが、今回はどうすべきか……。

ルート編は、何となく『長い序章』のような感じがします。もしかしたら、ルートモストマックと言う物語は、まだ始まっていないのかもしれない。だとしたら、次はちゃんと始められるような話でいきたいですね。

少し考えてから投稿していきましょう。

【therefore】期待と不安と、迷いと痛み。（前書き）

【まえがき】

この【 】で囲まれたサブタイトルの話は、本編と直接の関係を持たない（読まなくても問題は無い）代わりに、話の核心部分に迫るような内容にしています。

記念すべき第一章ですが、何だか退屈そうだなと感じた方は、第三章からお読みになっていただくと超面白いです。

嘘です。是非とも第一章から読んでくださいませ。

とじぞ。

【therefore】期待と不安と、迷いと痛み。

「音も、光も、ここにいるという感覚さえも、全部微睡みの中に消えて、自分が自分であるという認識さえも薄れていく。でも、時間が経てば、また生まれる。」

それは、今日の続きという明日を知覚するために必要なことだから。

今日の日がどれだけ苦しくて目を瞑りたくなるようなものであっても、体一杯で感じる幸せに溺れ沈んでゆくようなものであっても、明日はまた新しくやってくる。

今日の続きは、今日とは違う明日を連れて帰ってくるのだ。

今日の自分のままでは、明日に適応することができないから、一度すべてを新しく作り直さなければならぬ。

そのために、人は眠るのかもしれない」

だとすれば、僕は今日と明日の狭間に取り残された人間？

妹から誕生日プレゼントを貰えなかったことで感じていた悲しみも、ベッドに潜ってしばらくすれば、強制的にリセットされた。

眠っている間、人は自意識が乖離しないよう努める。

知覚できる範囲を超えた自分の精神の世界のようところで、自

分を自分として見ている僕が、僕から離れてどこかへ行ってしまうように、無意識に監視するのだ。

それはとても難しく、労力のかかることだから、監視するうえで余計な感情を差し挟むことができない。

でも、例外があるとしたら。

例えば、そう。

禁忌とされている感情や、異常と判断される可能性のある思考、溢れんばかりの大きな野望。

普通、そういうものには不安や戸惑いがあつて、心の中で、選択が一進一退を繰り返していることがとても多い。

どうして不安なのかとか、諦める理由が分からないとか、ちゃんとした形を持たない疑問ばかりが募るうちに、それは大きくなって黒い『違和感』めいたものに感じられてくる。

正体がわからない。怖い。

そう思うとまた不安になって、感情の肥大化を助けてしまう。

自分の心から湧きだした苦悩なのだから、当然、自分という存在に疑問を持つことだって必ず出てくる。『生まれなければ良かった』というほど悲観的になる人もいるかもしれない。

そうして自意識の認識がおざなりになって、今日と明日の狭間を漂うことになるのだ。

x x x

「あ、あれ？」

目の前に広がるのは、白。

白の空間というには広すぎるし、白の世界というにもまた、何か足りないものが多すぎる気がする。

全てが均一の白に塗りつぶされていて距離感が掴めないはずなのに、僕はどうしてか、僕がどのくらいの高度緯度経度にいるのか手に取るように分かった。

天地開闢の時を見たわけではないけれど、どうやらこの白は僕の感性が作ったようだった。

僕、という存在を色に例えるなら、この色が一番しっくりくる気がするからだ。

それにしても、僕はどうして、こつこつ冷静でいられるのだろう。

「よ、こつ……」

自分の意思で体軀を動かすことができるらしい。考えることもできるし、言葉も話すことができるから言語野も機能している。

記憶野はどうだろう。

「うーん……。さっきまで布団で寝ていたような……」

記憶野も問題ないようだ。

でも、だとすれば、問題なのは“ここ”ということになる。

こんな白い場所に行ったことはないし、教科書でも見たことが無い。

でも。

「どこかで見たことあるような……」

僕の心の中では、過ぎ去った思い出を懐かしむ郷愁と、飽きるほどに繰り返される日常に呆然とする気持ちがちやごちやにミックスされて渦巻いている。これはデジャヴとは似て非なる感情だと思う。

何だろう。

いつも身に着けていた洋服が、ある日突然人間になってしまったような感じ？

そついえば、僕は比喻表現が苦手だった。

「でも、どうしてこんなところにいるんだろう……」

知らない場所に来てホームシックをこじらせたというには時間的に無理があるけれど、単純に『帰りたい』と思うだけなら十分に自然だろう。

そして次に、

「リズ……」

と、妹のことを思うのも自然なことだ。

『願いを叶えてはくれませんか？』

どこからともなく声が聞こえる。

僕は思わず振り返るけれど、そこにはさっきまでと同じ白しかない。

続いて上を見上げる。

あるのは、白、それだけ。

聞こえたのは上からだったけれど、下から出た音が反射して耳に入ったのかもしれない。

今度は下を試してみる。

また、白。

「え？ あれ？」

声の持ち主を知ろうと周りを見渡すと、急に、距離感が掴めなくなる。自分がどこにいるかわからなくなる。

理由は全く分からないけれど、何故か恐怖や焦燥を感じないということもまた、僕の空間認知を弄んでいる。

さっきまで立っていたあの場所が天井に　いや、空になっている。僕が振り返る前に向いていた方向は今、右側にある。

「ど、どうなって……る」

『願いを叶えてはくれませんか？』

身構えていたおかげで、声の出所はわかった。

出所が分かると、自然と応対の方法もわかってくる。
何を期待することもなく、僕はただ、その存在に縋った。

ここはどこ？

白一色の中、ただでさえリソースの無いものを吸い取るように、
不定の情報を貪る。

僕の頭の中にいる相手が分かって僕に分からない情報など、無い
気もするが。

『願いを叶えてはくれませんか？』

事務的というには少し感情が入りすぎているその調べに、一種の
同情を覚えてしまう。

質問を無視してでも伝えなければいけないことなのだろうか、
気になっても来てしまうのではないか。それに、先に無視したのは僕
のほうだ。

どんな願い？

『それは……』と話し始めた今回は、先ほどよりも幾分か明るい口
調だった。

『あなたの「願い」を一つだけ叶える、という願い』

「へ？」

じゃなくて、へ？。

『あなたが願えば、どんな「願い」であっても必ず一つ叶う』

それはつまり、お金持ちになりたいとか人気者になりたいとか、

そういうこと？

『そうです』

間髪入れずに断言される。

そこまで自信を持って言われると、信じたくなくなってくる。

だけど、ある日突然リスのような人気者になれるとか、一瞬でアリスのようなお金持ちになれるという理不尽性を除いて、この話は成立しない。

そう。

この話は不合理で不道理で、理不尽極まりないのだ。

でも、宝くじに当選する可能性だってある。

そうすれば『僕がお金持ちになるという未来予知』を除外すれば、不合理さは否定されて話の筋は通ることになる。

いや、除外自体無理か。

また道理にそぐわないことを責めるところに帰結するわけだけけれど、ああも断言できるのには何かしらの理由があって自然だと思う。

どんな『願い』も叶うんだよね？

『そうです』

それって、空を飛びたいとか、魔法を使いたいとかでもいいの？

『はい。叶います』

また断言だった。

さつきと同じ反応を示すと言うことは、僕の『願い』の大きさ自体に価値は無いのかもしれない。

それは、つまり……。

「ただ単に願いを叶えたいってだけ？」

コミュニケーションの手段にも慣れた僕は、伝わらないように声を発していた。心に留めていたら考えてしまいそうだったから。

「でも、ありえない」

魔法が使えるなど、ありえない。空が飛べるなど、ありえない。

そんなことを可能にできるのは、今ある『不可能』を作った張本人　神様くらいのもだろう。

神様は人間に乗り越えられる試練しか与えない代わりに、可能性を与えたのではなかったのか。『不可能』にトライする人間たちに見出される可能性は、人々の心に『希望』を生み出すから。

なのに。

「叶う？」

「いったいどうやって？」

自問自答の復唱の末、辿り着いたのは不合理性だった。

幾らかの間があったと思う。

『証拠が見たいという「願い」でも構いません。今すぐに証拠を見せます』

「どうやって？」

『その方法を知りたいという「願い」でも構いません。今すぐに教えます』

堂々巡りで無駄な労力を使うのは気が引けたので、質問攻めは切り上げることにする。

声に質問をすることはもしかしたら、意味がないのかもしれない。それは糠に釘という意味ではなくて、先刻よりはぐらかされてきた質問の答えは自分ならわかる気がするということだ。

魔法や神様の存在と同じ矛盾性を抱えたこの議題を、百歩譲って認めるとして。

微かに残っている子供心の赴くままに、すべてを都合よく鵜呑みにして信じるとして。

自分が純粹に何を願うのか、僕は知りたくなつたのかもしれない。

本当に『願い』は叶うんだよね？

『はい。そうです』

変わらない自信に満ちた即答に、僕はどこか安堵の念のようなものを感じていた。

どうすれば叶う？

『強く願えば叶います』

安心感の割にアバウトだった。

逆を言えば、アバウトな割には安心できていたということになる。

どんな『願い』でも叶うんだよね？

僕は重ねて聞くけれど、答えはやはり、

『はい。そうです』

という強い自信を含んだ断言だった。

不安や心配を払拭するために再確認したつもりだったけれど、強い肯定の意志というものは必然的に一つの疑問を生んでしまうものでもあった。それは何かしら否定する意図を含む。

代償は？

魔法が使えるようになるために命を要求されれば元も子もないし、空を飛ぶのに足を失ってしまえば皆と同じ楽しみを感じることも出来なくなってしまうのだ。

でも、それは当然のこととて、この世界では力のあるものが全てを把握、所有できることにはなり得ないのだ。

幸せの形は一つではないのだから。

『代償ですか？ ありません』

そんなことすら軽く凌駕してきた。

僕は少し憤りを覚えた。

何の見返りもなく欲しいものを手に入れられる不条理に、腹が立っただ。

精いっぱい勉強した人が幸せを掴むのと、何の努力もせず不自由もなく育って幸せを掴むのでは、やはり意味が異なるのだ。

あとで罰が下るとか言うなら話は別だけれど、今回はそういう話ではないらしい。

甘んじて受け入れるわけではない。

ただ、心のどこかで、僕は期待してしまっている。もしかしたら僕の『願い』も叶うのではないかと。

そのことに無性に腹が立つのだ。

本当に、代償は……無いの

限りなく継るように、自分に言い聞かせた声に呼応して心の声も震える。でも、そこには一抹の期待を含む。

『代償はありません』

ピキキツと音を立てて亀裂が入る僕の心。

崩壊してしまった白ならば、二度と崩壊することなどない。

もしこのまま壊れてしまえたなら、見渡す限りのこの色と同じ、

何にも属さない自由を手に入れることが出来ただろうか。

「ただ、その幅が拡大していくのを防ぐように、タイミングよく声が聞こえてくる。」

「ただ」

それは待っていたと言わんばかりの獅子吼だった。

さっきまでの自信がすべてそこに繋がった気がした。

「いくつかの条件はあります」

【第一項】その『願い』は一つであるとする。

つまり、「と」の命を救いたい」という複数をまとめたものは無効になってしまうということだろうか。やり直しが利かないという意味合いもあるかもしれない。

【第二項】その『願い』の範囲は1つ或いはすべてとする。

これは【第一項】にも被ってくるだろうか。要は、「と」という部分指定は不可能であるという意味が妥当な気がする。

「と」を生き返らせたい」という願いならば、片方を諦めて「を生き返らせたい」と願うか、大事件を覚悟で「今死んでしまった人を生き返らせたい」と願うか、二通りあるわけだ。

僕がそういう状況に置かれたら、どうするだろうか……？

【第三項】願いを決定する『願い』は無効になりカウントされない。何を叶えるか迷った時に、「自分が今、何を願えば幸せになれるか知りたい」と願えばすべきことが見えてくるのかもしれないが、それを禁止する意味はなんだろうか？

でも、その答えがわかるのはやはり、神様しかいないのではないだろうか。

「何度でも『願い』を叶えたい」と願った上でそれをすれば、もしかすれば神に成り代わることもできるのではないだろうか？

もしかして、他人の願いを決定することもできなくなるということだろうか？

【第四項】願いが無効にする『願い』は無効になりカウントされない。

もう『願い』を叶える必要がなくなった時に、「自分の『願い』が叶えられないようにしたい」と願えば、普通の生活に戻れるのかもしれない。

それを防ぐ必要性は、僕には皆目見当もつかない。

それとも、僕意外の『願い』を叶えようとしている者たちの邪魔をしないようにという意図が組まれているのだろうか。

【第五項】願いが叶えられる状態を周囲の人間に知られてはいけない。

例えば、「 を消してしまいたい」ということを願った時に、それが当人の知るところとなれば、不倶戴天の仲になってしまっても仕方がないし、「 と結婚したい」ということを願った時に、当人に知られてしまえば『愛は偽物だったのか』と狂瀾怒濤の憤激をぶつけられても致し方ない。

この【第五項】は論を俟たずに理解し納得できる、そういう不確定要素を含んだ感覚的なものなのだと思う。

ここでタブーとする理由が謎である、たとえば一切の否定はできない。

一から四までのように憶測を必要としないあたり、何かありそうな気がする。

例えば、ペナルティのようなものを課されてしまつとか、だろうか。

ただ、現時点で何かを明言するのは難しそうだ。

『以上の五項になります』

け、結構たくさんあるね

付け焼刃の言い訳と揶揄するには、用意周到が過ぎた。

しかし、頭の中に直接語り掛けられているせいか、一度ですべて飲み込めたし、考察をすることもできていた。だから、冷静でいられた。

しばらく“声”と対話することで、分かってきたことがある。

「まず、ここは現実世界じゃない」

何者かもわからない相手　もしかすれば、僕をここに連れてきた張本人かもしれない相手に、気取られるのは危険なので、深謀遠慮になる前に声に出して整理しようと試みる。

声の質は今まで聞いたことが無いような不可思議な響きで、中性的。声色は常時落ちて着いていて、決して取り乱したりなどしない。そして、僕の頭の中に直接情報を送り込んでくる。

何故か僕だけがここにおいて、僕は聞こえてくる“声”とだけ交流を持てる。それ以外には白という色しかなくて、情報源は“声”に絞られてしまう。

白という色をとっても、透過しても何も無いから漠然とそう見えているだけなのかもしれない。

「何もないここで、僕は何をしているんだ？」

ここへ来てしたこと、それは一つしかない。

それではまるで、僕がここへ来た理由が、

「“声”と話すため……？」

と、でも言っているようなものではないか。

僕の『願い』を叶えるという願いを叶えるという意味不明な内容を聴くために、僕はここににいるのか？

だとすれば、これは僕のために用意されたものである気がしてならない。

一体誰が？ 僕が

なんのために？ 『願い』を叶えたくて

思い切り首を横に振って、追走してくる自答を否定する。おまけに口も「違う！」と訴えて助長している。

でも、逡巡するほどに 僕が『願い』を叶えたかった という気持ちは膨らんでいく。

「でも、それは叶うわけがないんだ！」
そう。

ここは、もし叶うのならば？ と、そう思う心が生み出した幻想の世界だ。

間違いない。

『気付きましたか。でも、もう時間もあまり残されていません。手短かに説明します』

そしてこれは幻聴だ。

普通なら聞こえないはずの音を、僕は聴いているのだ。

『あなたの推測通り、ここはあなたの夢の中ですよ』
言い得て妙な表現だ。

それは自分の望む光景を手に入れたくて、都合よく解釈しているだけなのかもしれない。

だけど、その中だけでも幸せになれるのなら良い、とも思う。

夢の中でなら、僕は 僕の『願い』は叶ってもいいのかもしれないな……

『これから、あなたは目を覚まします』

確かに、夢は覚めてしまうものだ。一体今まで何度、覚めなければいい と思ったかわからない。

どれだけ巨万の富を得ようと、意中の人との間に子供を授かろうと、それが夢なら覚めてしまうのだ。魔法とか飛行体験とか、現実でできないことも夢の中ならできる。でも、それらも同じ。

でも、夢の中では幸せでいられることに変わりはないのだ。

『もし夢の中の魔法で「現実を変えたい」と願うことができたなら？』
夢の中の声は、自信をも含んだ強い語勢でもって、そう豪語する。そんなことが出来るのだろうか。

確かに、論理的な矛盾はないけれど、現実問題としてそれは有り得ない話だ。仮にそれができたとして、現実世界で「突然 が生き返った」とか「 がある日突然お金持ちになった」とか、そういう噂を聞いたことは……あれ？

でも、待てよ。

夢の中に、現実のルールが適用されることの方が、ありえないことなのではないか？

『わかってもらえましたか？』

僕は自然と頷いていた。

また、あの安心を感じていたのだと思う。

頷いて視線が上下すると、視界に白が無かった。代わりにあったのは黒だった。

目を瞑っているわけでもないのに、そうしているように暗い。光が無いというのはまたちよつと異なっていて、何だろう、光が反射して仄かに明らむ黒？ のような感じだろうか。

『……あの空間……保つ……できな……り……た』

頭の中に響いていた声も次第にノイズが増えてきて、聞こえにく

い。
聞こえていない覚悟で、僕も最後に一つだけ確認する。

これは現実……だよな？

答えはすぐにはなく、聞こえ始めた小鳥の囀りと、風に揺らされてバサバサと鳴るカーテンの音が僕を強制的に現実へと引き戻そうとする。

これほどまでに、今日の訪れを憎んだことはないだろう。

微かに聞こえた最後の言葉は、あまりに荒唐無稽だったからか、それとも朝の喧噪のせいで情報が歪んでしまったせいかわからな
いけれど、僕を悩ませた。

『夢の…………続き………』

僕は一体どこにいるのだろう。

どこまでも続くその色は、あの時の白や黒とは確かに違っているけれど、その間には差はないのかもしれない。

僕が失明してしまえば、ここだって夢の世界の風景と何ら変わりがなくなってしまうのだから。

あの時間こえた“声”だって、僕が頭の中で一人二役を演じれば、再現することは不可能ではないはずだ。

“声”の言っていた『夢の続き』という言葉の真意は、こういうことなのかもしれない。

現実もまた夢と同じなのだよ、と。

夢と同じで『願い』は叶えられるのだよ、と。

ただ、現実が一つだけ夢の世界に勝る部分がある。それは叶えられる『願い』が本物になるところだ。

「を手に入れたい」と願っても、夢ならば消滅してしまう。けれど現実なら、すべての物質が物理法則に則っているために不規則に消滅することなどできないのだ。が心とか感情という不定形なら話は別だけれど。

夢の世界ほどの自由はないにしても、現実世界における『願い』は広い範囲を誇っているのだ。

僕は一つ考えた。

もしかしたら、考えてはいけないことだったかもしれない。

もし、夢が覚めなかったら？

もし、現実から戻れなくなったら？

代償は無いと言っていた。

でも、代償と言うのは自分で作ってしまうものである気がするのだ。

依存すれば中毒になるように、僕たち人間は一定の自由があると、自らを自らの毒で侵し始める。毒された者の行きつく先は必然的な破滅で、それは十分代償になり得るのだ。

そうなるのが嫌だから、解毒を試みる。でも、自分が作り出した毒だから完全に抜き切ること出来ず、また繰り返す。そうしているうちに、毒に慣れてしまう。

毒に侵されているという現状に満足して、それ以上も以下も望まない。毒はそういう中途半端な病変に形を変えていく。

染まりきることも、完全に潔白になることもできず、狭間を彷徨うしかなくなるのである。

それは夢の世界も現実の世界も同じ。

毒は自分が作るものだから。

僕の毒はまだ弱い。でも着実に毒素を溜め込み始めてはいる。迷いや不安というエッセンスが、絶妙に毒性を強化して、僕自身を蝕んでいるのだ。

今日と違う明日が来ることを恐れて、道を逸れて狭間から明日を覗く。

それが中毒になれば、僕は狭間に取り残されて身動きが取れなくなってしまうだろう。

でも、それは普通のことです、どうしようもないことなのだ。人間は楽を求める生き物だから。

だけど、僕には密かな『願い』があった。

それを叶えるために邁進すれば、何か変わるかもしれない。

そんな期待を込めて。

僕は『願い』という特效薬を、ゆっくりと毒と馴染ませてゆく。

【therefore】期待と不安と、迷いと痛み。（後書き）

【あとがき】

何だか変な五か条が登場してしまいました。

これは大事なことだったりそうでなかったりするかもしれないので、覚えたい人は覚えて、そうでない人は見直してみたりしてください。

今回は時系列通りに「無関係なリス編（秋）」を挟むか、それとも時間を少し進めて「ストーリーパート担当のリス編（冬）」を入れてみるか。

ちょっと迷ってきます。

Arrival and Departure (前書き)

【まえがき】

と、言うわけでアリス編にしました。

時期的には、夏休み明けから急に飛びまして、受験シーズンの冬です。

以前のアリス編では、すでにネタバレをしている状態だったので、それを訂正するのが大変でした。

“ 人生の始まりも終わりも、すべて自分にある ”

そんな感じのサブタイトルです。

ではとりあえず、本編です。

Arrival and Departure

朝、あたしの目を覚ますのは、母でも父でもない。うちに住み込みで働いているメイドさんたちの一人でもない。

あたしの目覚まし役は、あたしが早起きするようになった十五の誕生日から、必要とされなくなった。

元々、早起きは得意ではない方だった。だからメイドさんたちにそんな役回りが誕生してしまうわけなんだけど。

小さい頃からメイドさんが起こしてくれていたかと言つと、そういうわけじゃなくて、昔は母親が起こしてくれていた。そうね。

語弊のないように予め注釈を入れておくと、メイドと言つのはやはり、あのお金持ちの家に常駐する白と黒のアレだ。

今、あたしの家はそれなりに裕福なのだ。いや、普通に裕福だ。小さい頃はメイドがいなかったということからもわかると思うけど、昔はそこまで裕福ではなかった。

貧困の淵を泳いでいた時代から今に至るプロセスとか経緯を省いてしまつと、共働きの努力でここまで上り詰めた、という短文ができる。

現在も共働きは続いていて、二人して仲良く、国の平和を守る公安で働いている。

メイドの話と紐付けるなら、家事をする時間すらも仕事に奪われてしまったことを言うべきだろうか。

母が家事をする時間がなくなったのは、あたしが丁度……そう、エレメンタリーの四年生くらいの話だった。そのあたりから、メイドの数が時間とともに増え始めた。逆に、両親が昇進するたび両親

が家にいる時間は減った。

私の目を覚ます人が見知らぬ人になるということは、すぐに慣れるものではないと思っていたけれどそうでもなく。

あたしのコミュニケーション能力が役に立ったのか役に立たなかったのか、三日くらいすると、寝坊もできた。

そんなメイドの具体的な数を述べると言われると、相当難しい。全貌を把握できないほどいるという意味で。

全員が全員住み込んではいないけれど、少なくともあたしの部屋の四つ隣まではメイドさんが寝ていることだけは確かだった。それ以外にも、日雇いのメイドが来たりするから、正確な人数まではわからなくなる。

メイドの話は、もう、いいかしら。

わっ！ もう朝だ。もう少し寝ていたいな……。でも、学校だから仕方ないか

そうね。学校だから仕方ないわ。目を覚ましましょう。

最近、あたしは家で一番起床が早かった。

季節の移り変わりは早いもので、ついこの間まで夏休みだったはずが、今ではもう、辺り一面銀世界である。三月強みつきの時間が経っているのだから、自然なことではあるのだけれど、初雪の時期というのはやはり、移ろいゆく時の流れが空しくなるものだ。

小高い丘に建っているあたしの家の窓からは、近くの公園から学校まで国の半分ほどを見渡すことが出来る。あたしの部屋を出てすぐの窓からは、二階という高さも相俟って、尚のこと。

冷えた結露をなぞって、小さな窓の形を描いてみる。窓枠の上側から大きな雫が垂れてきて、原形がなくなる。

呆れてため息が出てしまうほど見ているというのに、あたしはま

た雪を見ようとしている。

歪で小さい窓から見えた景色を見ているだけで、こちらまで寒くなって、身震いしてしまう。このまま体温が下がって雪と同じくらいに冷たくなれば、あたしはその分だけ冷静でいられるだろうか。暑いほどに温められたこの家で、あたしだけが雪のように解けていく。そんなイメージしか浮かばない。

結局、昔のまま自然であり続ける銀世界と、富と栄光に溺れる家の中との温度差を強く感じたただだった。

「はあ……。暑すぎるのよ、この家は」

あたしの息はこれっぽっちも白くならなかった。

あたしの家のダイニングは、広い。ただ、『無駄に』という言葉を前置しなければ、その表現は正解とは言えない。

その解説には、たまにしか帰ってこない両親の名前とか、部屋のサイズに見合うよう特注したテーブルの面積とか、来きもしない客人のために用意された五つの椅子という語を使う以外にない。

「アリスお嬢様。お食事の準備ができました。様々なものを作りましたので、好きなものをお食べください」

「ありがと。でも、そんなに作らなくていいのよ？ あたしは出されたものを食べるだけだから」

謙って柔軟に対応しているつもりなのに、メイドたちは「ははあ！」と女王様の御錠に跪く兵隊みたいだ。

女の子なら一度はそういうものに憧れるというけれど、あたしは上下関係というのが大嫌いだから、それと似たような今の状況にも良い気はしなかった。

すぐに頭を上げさせて、宥めた。多分それも、『上様のありがとうお言葉』みたいになっちゃってるんだらうけど。

「アリスお嬢様。今日は、旦那様方がお帰りになるので、お早目に帰宅願います」

メイド長っぽい風格のある女性メイドが、きつい口調で言ってくる。肅然として瞳を閉じているのは、威厳を保つためか。時折、ゴシック長の派手な眼帯を着けているのも見る。確かに見分けやすいが、趣味が悪い。

長年見てきてわかったけれど、メイドの中にも一応の上下関係があるようだった。

他のメイドたちはあたしの食事を机に配膳しているのに、メイド長はそれだけ言ってどこかへ消えた。

新人や日雇いのメイドは、住み込みやベテランのメイドに比べて、メイド長の当たりがきつかったりするらしい。

お願いだから仲良くしなさいよと、あたしは常日頃思っているけれど、それを言葉にして伝えようものなら、いびりやいじめでも起きてしまうかもしれない。

「へえ、パパが帰ってくるなんてねえ……」

「アリスお嬢様。旦那様には『お父様』と呼ばせるようにと言いつけられておりますので……」

「はいはい。お父様ね、お父様」

どういうわけか、あたしの父は自分のことを「お父様」と呼ばせたいらしいが、非常に気に食わない。

父親は貧しい家系だったらしいから、そう呼ばせるのが小さい頃からの憧れだったのかもしれない。それでも呼び方を指定されると何となく嫌だ。

呼び方以前に、相手の行動に制限を設けるやり方自体、あたしは嫌いなんだけど。

例えば、『メイドとは絶対に食事を共にしない』とか。

「今日は部活の大事な練習試合があるの。だから少し遅れるかもしれないわ。伝えておいてもいいけれど、必ずあたしの名前を使いなさい。いいわね？」

「ですが……」

それは、両親が好き勝手やっていることに対する、雀の涙ほどの

反抗だった。

Arrival and Departure (後書き)

【あとがき】

お金持ちは誰もが憧れるものではありませんが、もともとそうでない人間が富を得るとギャップに苦しむと言います。

稼いでいる大人たちにとってみれば裕福になって、幸せなのかもしれないませんが、自我の形成が完全でない 思春期只中にある中学生にとれば、世界ががらりと変えられてしまうことにもなります。

そうした中で苦しむ一人の少女、アリスを取り巻く環境を、ルートがどう変えていけるのか。はたまた、変えられないのか。また『願い』の力を借りるのか、リズの愛が救うのか。

……………。

というところで次回もお楽しみに！

Adults approach Children (前書)
き)

【まえがき】

“子供と大人の境目は存在しない”
基準があればどちらサイドの人も楽だと思っんです。

身支度を済ませて、学校へ足を運ぶ。

普通に徒歩で行けているのは、あたしが徒歩を望んで最後まで折れなかったからだろう。

折れていたら、今頃は馬通学だったかもしれない。恥ずかしいったらありやしない。

急がないと遅れる！ もう少し早く起きてくれないと流石に困るよ

キャミソールの上に薄い肌着、冬服ブレザーの下に厚いセーター、保温効果が計算された特注のロングコート、極地仕様を思わせるムートンブーツ、マフラーに手袋など……。

メイドたちに強引に重ね着させられたおかげで、あたしは今、全くと言っていいほど寒くない。

パフォーマンスを重要視しているあたしからすれば軽装が良かったんだけど、今日はパ……お、お父様が帰ってくる手前、メイドたちが怒号されるよりはマシかと思って、おとなしく従うことにした。湿り気のある白雪が降る中、わざとらしいほどに厚い いや、熱いブーツで薄らと積もった雪を蹴散らし、擦るように進んでいく。「きゃ！ アリス様よ！ 朝から御目にかかれるなんて！」「雪を蹴ってるわよ」「あのクールさとのギャップが良いのよね」「いつ見ても可愛いよなあ」「あのあどけなさがいいよな」「ウブな感じとかな」

学校が近づくと、生徒たちの視線が刺さって痛い。誰とも目が合

われないようにするのが、とても疲れる。視線を逸らすのに奮闘して、額に汗が滲む。

雪が降っている中で汗をかいている人は、あたし以外にいないんじゃないだろうか。

彼女ら、彼らの熱を集めたら、5センチほど積もった雪がすべて解けてしまう気がした。

対するあたしは、解けた水を再び凍らせるくらいには冷めていて欲しかったけれど、やはり慣れはしない。そこまで図々しくなれない。

教室に着くまで視線を浴びることになる。

クラスだと、長い間一緒にいてあたしへの関心が冷めたおかげなのか、視線は感じない。

それはあたしにとつて、とても心地のいい空間になる。

出来るだけ視線のない所の方が、気が楽だった。

教室に心地よさを感じる要因は、もう一つあった。

「おはようアリス。今日も早いね。リズが寝坊したせいで、僕まで少し遅れちゃったよ。まったくもう……」

「満更でもなさそうに見えるんだけど」

遅刻ギリギリ教室にやってきて、あたしの席の後ろに座る一人のクラスメイト。

それがルート。あたしの友達だ。

いや、ルートはあたしにとつて、友達以上に大切な存在だ。

別に変な意味はない。

「そ、そうかな」

「ええ。顔にそう書いてあるわ」

「ま、またアリス情報網なの？」

「そうよ」

あたしがどんな発言をしようと構わず、ルートは絶妙な間と柔らかな態度でもって接してくれる。敬意と畏れを含んだ様付けとか、一定の距離感を保とうという意図を感じてしまうさん付けとかじゃな

くて、親しみを込めて『アリス』と呼んでくれる数少ない人物の一人でもある。

そのおかげであたしは、一日中メイドに監視されている家とは違う、解放感のある心地の良い安堵を感じることができた。

「ね、ねえ。アリス情報網の出所って」

その答えはルートだけには話せない。

軽く睨みつけたら、口を開いたまま萎縮して固まってしまった。悪気がなかっただけに良心が痛む。

ルートの思考は手に取るように分かるのに、こういう状況に陥った時の対処方法が全く分からない。

もしかなくてもあたしは、空気が読めなかった。

「よし。皆いるよな。授業を始めるぞ」

タイミングよく教室には行ってきた先生に感謝したい。

「ほら。授業が始まるわよ」

あたしは鞆から教科書を取り出して、教壇の方へ向き直った。

あ……

授業が開始されても尚、ガサゴソと鞆を漁るクラスメイトが目の前にいる。

大方、昨日に妹と勉強していて教科書が妹の物と入れ替わっていたとか、そういうオチかしらね。

教室という広い空間に対してストーブ一台。

当然の冷え込みも、あたしにとっては心地が良かった。それに、家の熱気で火照っていた体が十分に冷めて、冷静さも取り戻せたと思っ。

前の席の人の肩を叩く。

「ちょっと。忘れたなら忘れたっていいなさいよ」

「ごめんアリス。ありがとう」

先生に背中を向けて、というのはさすがに失礼なので、ルートはあたしの方に半身を寄せて授業を受けると言うスタイルを取った。

何のことはない、忘れ癖のある連中がよくやっているスタイルだ。当事者になるのは初めてだった。

しかし、こんなに胸がときめくものだったとはね。

Adults approach Children(後書)
き)

【あとがき】

背徳感ほど人間を愉しませるものはないと、よく耳にします。

このどエスめ。

次回、熱い愛で雪をも解かす！ あの子がアリス編にも登場です。

Cold and Hot (前書き)

【まえがき】

“ 曲学阿世は弱者である ”

夏に長袖を着て、冬に半袖を着る それが常識だとしたら、誰
もがそうするのでしょうか？
いいえ。

きつとまた誰かが反対して、世俗に抗うのでしょうか。
それがパラダイムシフト。

「最近寒いけど、外での部活は大丈夫なの？」

放課後になって掃除も終わり、部活へ向かう時間となっていた。

外では雪がチラついていて、その影を見るだけでも二の腕の裏から全身へと悪寒が走っていく。

活動を始めてから体が温まるまでが辛いこの時期、運動部としては正念場だった。一応は部活のエースだから休むわけにもいかないし。

「大会が近いから、休むことは出来ないわ」

ただ、あたしはそんなことよりも、今日帰ってくるらしい父親に会うのが嫌だった。

時々刻々と迫る自然の流れを呪いながら、鮮やかに対応する。

あたしは結構、感情に融通が利いた。

「バトン部は、どこでもできるからいいわよね」

「まあね。でも、活動自体がそこまで盛んじゃないから、休みの時間も多いよ。多分今日も、寒いから練習休みだし」

ルートが所属するバトン部（ほぼ帰宅部）は確か、体育館横の大倉庫で練習していた。

あそこは日照時間がほぼゼロだから、確かに寒い。

そうは言っても、あたしたちカーリング部だって半分外のようなものだ。

アイスリンクという名称で呼んではいるけれど、可動式の天井が凍結のために故障して二日に一度くらいしか動かせないの、開きっぱなしになっているのだから。

さらに、雪が降り積もるとストーンの滑りが悪くなるので、リン

クの上から水をかけて、また平らに削らなければならない。削っている間にも雪は積もるし、ユニフォームは薄いしで、結構な苦行になる。

リンクを整備する係りの人がいるかと言うと、そこまでの予算は出せないらしかった。

部員総出で氷を削っている光景を見て、さらに自分もその一人だと、家からメイドさんを派遣したい気分にもなる。

それに比べたら、体育館の倉庫はマシに感じるけど。

「アリスは本当にすごいよねえ」

「すごくなかないわよ。言われたことをやっているだけだからそう。」

『こんな寒い中部活なんて嫌。早く家に帰って遊びたい』、というのがあたしの本音だった。

あたしのいう『言われたことだけやっている……』というのは、『言われた通りにしているから何でもできる』のではなくて、『言われたことしかできない』ように父から色々なことを制限されているからだ。

期待に応えようと努力をするのはあたし自身の意志であったとしても、あたしが今まで習得してきた『特技』の中には、やりたくないものだってかなりあった。

だから、成し遂げた結果以外を見てくれない父は、あたしにとって嫌悪の対象だった。

「でも、結果として出来ちゃうんだからやっぱりすごいんだよ。アリスは」

ルートは首を横に振ってそう言うのだった。

でも、その様子に父の幻影を見ることなどない。

「たくさん頑張ってるんだよね」

「……………」

ルートはあたしのことをちゃんと見てくれているから。

だから、あたしもルートのことをちゃんと見てあげよう。

最近になって、よくそう思う。

「それじゃ、行くわね。また明日」

「うん。頑張つて。また明日」

ルートと別れて、アイスリンクへ向かう。

道中、また視線を浴びる。放課後は部活へ急いでいるふりができるので、そうする。

カーリング部は女子と男子が別の場所で練習することになってるので、部活もそれなりには落ち着ける場所となっている。

作戦を伝える、アドバイスをする、といった事務的な内容ではないことを話せる相手だっている。

少し熱血なのがネツクの可愛らしい少女だ。

「先輩！ こんにちは！」

「あら리즈。今日は遅いのね」

ルートの妹にあたるはずなのだが、性格がまるで似ていない。

石橋を叩いて渡るような心配性な性格をしているルートとは反対に、妹の리즈は、今にも落ちそうな吊り橋を積極的に渡るような、そんなアグレッシブな性格をしているのだ。

女々しいルートをさらに女の子っぽくした風貌なんだけど、なんだろう、あざといといふかなんというか、仕草や言動すべてに『キョート』な成分が含まれている？ そういう感じだろうか。

「今日は日直でした。遅れてすいません！」

「いいのよ」

積極的に話しかけてくれるのは嬉しいけれど、熱いものが苦手なあたしにとってみれば、少し気が重い。

리즈がルートの妹であるという事実から、あたしとの関係性は容易に想像できるはずだけれど、それをあまり言つと리즈が可哀想になつてくる。

なので、あたしはこの子のことを気に入っている、と言っておく

ことにする。

「先輩！ 今日も一緒に帰りませんか？」

この子は昔から何を考えているのか掴めなかった。根底にあるものはいつも同じような気がするんだけど、毎回違う顔で接触してくるせいなのか、この子自身に何か迷いがあるのか、兎にも角にも難しい子だった。

一つ確かなのは、あたしのことを好いていることくらいか。

まあ、付き合いも長いし、好きでいてくれることは嬉しい。

「別にいいわよ」

「ありがとうございます！ じゃあ、今日も校門で待ってますね！」
女子カーリング部の部室にはあたしたち以外にも何名か部員がいて、教室の半分くらいの広さだから当然、互いが互いの視界に入ってしまう。

だから、誰かが誰かとくっつけば、それだけ部室内の空気から浮いてしまうことになる。

密着することのできる微妙な空間がまた、それをやんわりと醸しているようだった。

やっぱり、熱すぎるのも問題かもしれない。

大会用のユニフォームから制服に着替えて部室を出る。

鍵を閉める係になっているので、部室をでるのは常に最後だ。

約束通り、校門で待つリズの元へ向かう。

最近はずと一緒に帰っているのだが、大丈夫なのだろうか。少なくとも部活では非難の的になっているのを、あたしは知っているのだ。

あたしのせいではない……いや、あるんだろうけれど、「私がか

わいすぎるばかりに！」みたいなナルシズムはあたしには無いから、そこは常に否定したい。

「待たせたわね」

「待ってないですよ！ 行きましょう！」

いや、部員の数名が話し込んでいたせいで長引いたのだから、待っていたに違いはないのだけど。

どうしてすぐにばれてしまうような嘘をつくのか、あたしはそんなことよりも白雪に凍える彼女を心配していた。

「ひゃあ！ せせ先輩、大丈夫ですって！ 自分でひやりましたからあ……」

突然マフラーを首に巻いたせいで畏縮してしまったのか、いつも饒舌のリズが一転、黙る。

「いいから。頭の雪くらい払わせなさいよ。それとこれも……、ほら……。呂律が回らなくなるほど寒かったのなら、あたしなんか待たずに帰ってもよかったのに」

顔が真っ赤になっているが、この寒さのせいだろうか。マフラーに顔を埋めるあたり、本当に寒かったとわかる。最近手袋じゃ足りない。

本当に謝りたくなってくる。

「……………」

罪滅ぼしになるのか、あたしにリズの心はわからないけれど、あたしの心は『やれ』と訴えている。

「ちよつと、こつち向いてくれるかしら？」

「な、なんでしゅか？」

あたしは手袋を外して、温まった手でリズのほっぺを両側から挟んだ。ひんやりを通り越して、ツンと冷たい。

「どつ、かしら？」

「あたたたたたたたかいです！ ありがとうございますがとつじやいましゅ、アリしゅ先輩！ 今日顔を洗いましえん！」

「それはちよつとやり過ぎよ」

今日のご飯はイカ墨シチューだ……。リズ早く帰ってこないかなあ……

ふふふっ

「先輩、どうしたんでしゅか？」

ほっぺを挟まれているせいで、パ行の破裂音が掠れる。

あたしはそれで少し笑って、「思い出し笑いよ」と御託を並べておいた。

フィックだったかフリーエだったか、そんな名前の物理法則に則って、あたしの手の平の温度とリズのほっぺの温度が次第に近くなってくる。

急に離すのもあれかと思って「大丈夫？」と訊いて、頭が縦に触れたのを確認してから、リズの頬から手を離れた。

手がまるで家に帰るみたいに手袋に潜っていった。

「先輩、ありがとうございます。いつも優しいですけど、今日はいつもより優しいですね。何かいいことでもあったんですか？」

「いえ、むしろその逆くらいね。そんなことより、この道までよね？」

いつの間にか別れるところまで到達していた。

リズは二度三度周囲を見渡してから、肩を落とした。

「先輩、このマフラー……」

「いいわよ。あげるわ」

この寒い中待っていてくれたのだ。お礼にもならないかもしれないけれど、首元くらいは温めてあげたかった。

「でも……」と遠慮するのを押し切って、あげた。凄く嬉しそうだった。マフラーをもらってそんなに喜ぶかってくらい喜んでいた。

「今日の夕飯、イカ墨シチューだってルートが言っていた気がするわ。寒いから、早く帰って温まりなさいよ？」

言った直後、リズは猛ダッシュで家への道を駆けていった。

一気に距離が離れてゆく必然に、心が空しく泣いた。

二人でいる時なら、寒いと言う理由づけもできるし、くつついてくるのも許容できるのに、リズはそうしない。

その理由の詳細は知る由もないけれど、なんとなくわかる概要もある。

あたしのこの感情はきつと、リズの持っているそれとは、質を異にする。

離れていく距離を感じて悲しく思うこの心は、自分の方ばかりを向いていたから。

「マフラーなんかじゃ、足りないわよね……」

あの子の純粹な想いに応えるためには、あたしもあの子の方を向かなければならない。ぶつかってくるあの子を受け止めなければならぬ。

あたしに、そんなことができるのだろうか。

進むべき道すら見いだせない、大事な人を救う方法もわからない、ぶつかるのが怖い、そんなあたしに。

愛の意味もまだ分からないあたしに。

Cold and Hot (後書き)

【あとがき】

マフラーっていいですよね。

長いやつを二人で巻くのもいいですし、普通のもあったかくていいです。

マフラーを貰うのって、嬉しいですよね。

私は、それが手作りの新品であるよりも、使い古されている方が、何となくあったかい気分になります。好きな相手なら尚更ですよね。ビンテージギターとかほら、そんな感じですよね。

男性の方は、後ろ側に先っぽを二つ垂らせば『忍者』っぽく出来ますね。

あれも、また風情です。

マフラー……。

Heaven or Paradise (前書き)

【まえがき】

“天国は世界である”

幸せを感じている今が存在しているここにしか、楽園はないのです。

Heaven or Paradise

さて。

あたしは、このまま家に帰るわけではない。途中、長めの寄り道をして帰るのだ。

存分に時間を費やすつもりだ。あの金の亡者とは、できるだけ話をしたくないから。

寄る場所のあてはあった。あてというか、日課というニュアンスが正しい気がする。妥協で訪れているのではないあたりが、まさにそれっぽかった。

リズが走っていた道とは逆の道　つまり、自分の家に向かう方の道を途中で右折すると、あたしの安住の地は見えてくる。

木造、石造、土造……と、沢山の白壁マンションが立ち並ぶ団地の一番奥。他のマンションと比べて一回りも二回りも小さいサイズの黒くてぼろい建物。その一室。そして、その四畳半。

そこがあたしの楽園だった。

楽園の入り口についているチャイムを押すと、掠れた呼び出し音が外まで聞こえてくる。

インターホンとかがないから、直で名乗らなくてはならなかった。「こんばんはー。アリスです」

団地外れの静寂を、あたしの声の響きが破壊していくようで気分が良くない。その大音声は草臥れた公園の築山に反響して、調べがガラリと変わる。もう少し雪が積もっていたら、極地で叫んでいるみたいでちょっとは幻想的に聞こえたかもしれないのに。

公園の中央にある時計が午後六時を示しているのを見つける。

もうこんな時間かと独り言ちていると、扉から何やら聞こえてくる。

「待ってて……。今開けるから……」

楽園側から聞こえてくるのは、この静けさにすっかり同化した弱々しい声。弱いなりに存在感のあるルートよりも、明らかに儂くつか細い、今にも成仏してしまいそうな声。

だけど、まだ成仏してもらおうわけにはいかない。

ガチャリという解錠音の後、ゆっくりと開き始めたドアの間から、フットインザドアと言わんばかりに体をねじ込んで、楽園内に侵入する。

一番初めに視界に入ってくるのは、楽園の住人。

「お母様は今日もいらっしやらないのかしら？」

「うん……。だから……」

頷くと、ぼさぼさの黒髪と一緒に揺れる。この国では珍しい黒髪も、ここまで手入れされないと輝きを失ってしまうのだと、少し悔しい。あとで髪を梳かしてあげよう。

あどけなさの残る声色に見合った小動物のような華奢な体つき。

そのまま明るい性格なら国のアイドルにでもなれるかもだけど、度の強い眼鏡が意味する暗い性格が確実にその秀囲気を邪魔している。眼鏡で、根暗で、黒髪で。

楽園なのに死神みたいだ。

玄関で立ち話もなんだと、あたしは家の中を我が物顔でずかずかと進んで行く。

自分の家とは比べ物にならないほど、早く目的地に着く。自分の家だと、目的地が遠いと結構かかる。けれど、ここなら一瞬なのだ。それが、とても懐かしくて好きだった。

そして、楽園の住人より先に楽園に辿り着く。

布団を一枚敷いたら、もう部屋はいっぱいだ。それなのに布団は

敷いたままで、今まで一度たりとも収納されたところを見たことがない。部屋よりも大きいんじゃないかってくらいの窓から差し込む光で、毎日自然天日干しされているらしく、ダイヴ一番はいつも太陽の匂いがする。

この万年床が、あたしの楽園だ。

「ちよつと、ノア？ 早くしなさいな。今日は何して遊ぶのよ」

「むう……ちよつと待ってよ……。ここは、ノアの部屋なんだから……」

死神ことノアは、のそのそと部屋に入ってくる。そして、あたしの隣、布団の上に座る。

この布団はクッション兼、部屋の大部分兼、ノアの寝床だ。

けれど、あたしが居すぎたせいで、ノア曰く「布団からアリスの匂いがする……」らしい。

あたし自身がそれを認識できないレベルに、あたしはここに入り浸っている。頻度で言えば、ほぼ毎日。

ここで何をするのか。それは来る前からは予測できない。

ただノアと話をすることだけでも楽しいけれど、たまにやるゲームがあたしのお気に入りだ。

ノアにとつては普通のことなのかもしれないけれど、ゲームとは一切無縁の生活を送ってきたあたしにとれば、それは特別なことだった。

たまに外れのゲームもあるけど、それはそれで当たりを引き立てるから好きだった。

というか、あたしはこの空間が好き過ぎた。

この空間にはあたしとノアの二人以外は入れない、と強い確信を伴って思う。

物理的には絶対的に不可能だし、何となくだけどそれ以外でも無理な気がした。この楽園にノア以外が存在しているところが全く想像できない。

「今日は人生ゲームを作ってみたよ」

鼻高々に手作りの装置を見せびらかしてくる。

その装置はところどころ木だったり紙だったりで、マスと思しき部分にはびっしりと文字が書かれている。

今日は、というところが引っかかるけど、

「賽の目に操られた人生を呪うゲームね！ 受けて立つわ、その勝負」

笑っていたから、あたしは安心した。

苦笑いだっただけれど、作り笑いじゃない気がした。苦笑でも笑っていることに変わりはない。

笑うことすらできなかったこの子が、今、あたしの目の前で笑ってくれている。

それが、何より嬉しくて、心地が良かった。

ノアとの出会いはルートよりも早くて、ちょうどエレメンタリーの一年生の時だった。

その頃、「黴菌ごっこ」という遊びが流行っていた。

それぞれが黴菌を所有して、それを擦り付け合って遊ぶらしかったが、遊びと言うにはルールなんか皆無で、的になった人を苛めるというだけなのが実態だった。

その的になっていたのがノアだった。

金銭面に難があって、一週間の内に同じ服を何度も着ていた彼女は、「黴菌」を所有するには適役だったらしい。

ありもしない「黴菌」の存在に彼女は悩み、来る日も来る日も泣いていた。

初め、あたしに彼女を救うという目的はなく、女子を苛めている男子が許せないだけで行動を起こしていた。

「やめた方がいいよ」より強く、「やめろ」よりは弱い。そのくらの強制力であたしは男子たちに働きかけた。その力が、その時のあたしの気分を比喻していると言っても過言ではなかったと思う。けれど、涙目で「ありがとう」と訴えてくる彼女を見ていて、あたしは不憫でならなかった。

だから、友人関係になった。

同情で友達になって、そのうちに普通の友達に、今じゃ親友を通り越して、あたしの楽園の主だ。

彼女はあたしやルートとは違う中学に通っているのだが、そういつた過去があるせいで心配でならなかった。

でも、あたしが相談に乗ろうと話を切り出しても、すぐに話題を変えられてしまって、本題にありつけない。あたしくらいには話してくれてもいいんじゃないかとは思うけど、むやみな詮索で傷つけたくないというのも本音だった。

あたし以外に彼女と話をしてくれそうな人物はと言えば、彼女が寝ている間にしか家に帰っていないかったりする。まあ、ご飯が食べられなくなっても困るから、母親が忙しくなるのは仕方ないのだけど、彼女の心身があたしは心配なのだ。

エレメンタリーの時散々彼女を苦しめた、「金銭面」を担うはずの人物は、彼女の家にはいなかった。いや、いなくなった。

その理由を聞くことは無力なあたしには到底できないけれど、彼女の方から打ち明けてきた時は受け入れようと思っている。

ということ、あたしは彼女を守ろうとしているのだ。もちろん、あたしのできる範囲で。

そこに特別な感情はないけれど、思うところはあった。

でも、以前感じていた同情とは確実に違う、もっと温かくて大切な感情。

あたしはそれを「保護欲」と呼んでいる。

秘密の抜け道とか裏ルートとか、人生のすべてを知り尽くした彼女に勝てるはずもなく、人生ゲームは惨敗に終わった。創造主に勝てるわけがなかったのだ。

負けても勝つてもこの場所は、あたしの楽園に変わりはない。

だから全力でゲームできる。

だから好き。

「ねえアリス知ってる？」

「何かしら」

敗北を喫してゲームが終了すると、今度はガールズトークに移行していた。

「寝てる時、夢を見るでしょ？ ここじゃない国にはね、現実世界から意識だけを切り離して、その夢の世界に飛んだっていう人がいるらしいよ。その夢の世界では、望むものが手に入るらしいんだけど、色々制約も」

「ねえ」

「……え。な、なに、かな……」

あたしはノアの言葉を遮った。

あたしの方が意見力は強いから、口を挟めば自然、ノアは黙ってしまう。

話題を変えたりするには都合がいいけれど、きっぱり中止されてしまうとそれは確かな罪悪感になる。

でも、彼女を守るためなら仕方ないとも思う。

この家には暖房がない。あつたとしても、燃料を安定して購入できるほど余裕はない。

それくらいはわかるほどに、あたしは長い間この子という。

だから、あたしが何かをしてあげられるかも、なんとなくだけでもわかった。

「寒いでしょ。布団に入りなさいよ。あなたの部屋でああなたの布団なんだから、あたしだけ布団に入っているのも変でしょ？」

誠に図々しいことを承知で掛布団の片側を開け、手招きする。

両手を左右に振られて拒まれてしまったので、手を伸ばして追撃を試みた。

「ただ、大丈夫！　ここはノアの家だから！　アリスはお客さんだから！」

全く。こいつは子供か。

あたしは振り払われた手でまた追いかけて、手を握って、引つ張って、体温三十六度五分によってすっかり温まった布団に引きずり込む。

あたしは親鳥か……。

「ひゃっ。冷た」

「ごうごう、ごめん……！」

というか、温まったところに入ったのに、なんでさっきより震えているのよ。

親鳥よろしく羽毛があれば、心行くまで温めてあげられるけれど、それは無理で。抱きついてあたしの恒温を伝えるくらいならできるかもだけど、それも流石に無理で。

でも、このぐらいの距離感が、あたしとノアにとってちょうどいいのかもしれないなと、そうも思えてくる。

「ち、近くない？」

「そうかしら？　別にいいじゃない。あたしは女なんだし、何をするわけでもないんだから」

互いに相好を崩して布団を揺らすたび、布団の隙間から空気が抜けてちよつと寒い。

もつとくつついて隙間を埋めればそれは解消されそうだけど、あたしとノアの香りが程よく混じった隙間風が何だか心地良くて、ず

つとこのままでもいいかなと　このままここで眠ってしまいた
いなど、そう思えた。

ノアがあたしの楽園であるように、あたしはノアの楽園になりた
かったのだろうか。

「それでね？ ルートがまたおかしいのよ」

「ふうん……そうなんだ……」

「どうしたのよ」

居間の時計が午後の七時を指しているのを確認してから、かれこ
れ二十分はたつただろうか。ノアの家に来てからで言えば、軽く一
時間強はお邪魔していることになる。

もしかしたら迷惑、だなんてことは長い付き合いからは想像がつ
きにいくい。

今もこうやって髪を梳かしてあげているし、おさがりだけどたま
に服もあげている。

じゃあどうして、そんなに楽しくなそうな表情なの？

あれ？

あたし、今、すごく勝手？

「や、何でもない……」

言いながら俯くのはどうして。

隠せもしないのに隠そうとするのは昔からだけど、こんな表情は
初めてだ。

あたしはこの子のことなら誰よりも知っている自信がある。だか
ら、分からないのは悔しい。

「何でもなくない顔してるわよ？　言いなさいよ。言って楽になり
なさい」

「大したことじゃないから、脅迫しないで……」
もしかして、家族のことだろうか。

それならば、あたしが介入するのは迷惑至極なお節介かもしれない。けれど、家族に問題が生じるという事態は、ノアにとっては大きな事件になるのは確かだ。

あたしが介入してこの家庭が壊れても、あたしは少なくともノアだけは守ろうと思う。

そういう心意気でいるあたしは、少し強く言えた。

「いいから言いなさいよ」

幼い頃、あたしはノアに同情して友達になった。そして今、あたしは親友以上くらいの立ち位置からノアに同情している。

これ以上の同情はするまいと思っても、あたしとノアの違いが違過ぎて、家柄という制限が大人しくしていてくれないのだ。
『これ以上自分を貶めるな』と。

脅迫にならないように、あたしはノアの自発的な解答を促す。髪を梳かす手も、自然と優しくなる。

「本当に大したことじゃないよ……。………にとってはね………」

「ん？ 聞こえないわよ」

小さな部屋で隣り合って話しているが、蚊の鳴くような声ではやはり聞こえない。

髪を梳く手の通りがよくなってくる。

撫でると、今度はちゃんと聞こえるように言ってくる。

「もう少して二月でしょ？ 特別な日があるから、ちよつと………」

「二月？ 結構先な気もするけど………。特別な日って何かしら……、デートでもするの？ もしかして好きな子でもできた？」

冗談で言ってみる。

陽気に、滑稽に。ちよつと口調も考えた。

「ノ、ノアはね………アリスが、好き………」

「あはは。嬉しいわ。ありがと」

冗談で返ってくる。恥ずかしいなら言わなければいいのに………枕

に顔を突っ伏してしまった。

でも、バレンタインで悩んでいるわけではないようだ。
他に何かイベントがあっただろうか？

そうだよ。もう少しで卒業なんだよ。僕は一体どうすればいいんだ……

ああそうか。卒業式が再来月に控えていたのだった。
ということはつまり、悩みは勉強か。

「ねえノア。卒業したら進学するんでしょ？」
さりげなく話題を変える。変えた話題が核心を突き過ぎているかもしれない。

「うん、するつもりだけど……。国の学校じゃないと学費が払えな
いから……。でも、ノアはそんなに頭良くないし……」

「勉強なら手伝うわよ。どうせこの辺で国立って言ったたら一つしかないから、あたしと同じでしょ？ 過去問とかも貸すから、一緒に勉強しましょ」

便宜上嘘をついてしまったけれど、あたしはそれが本当であって欲しいと思っていた。

この子を一人にさせたくないから。

ノアは、壁のシミあたりを一瞥してから、

「うん。ありがとう、アリス。ノア、頑張る」

と、三回頷いた。

あたしが来た時よりは幾分かサラサラになった黒髪が同じく三度、月光に銜ってふわりと揺れた。

父に決められた制限を破ってまでノアに合わせようとしたはずだったが、その表情にはイマイチ手応えを感じない。

あたしが息を吹きかければ、すぐに泣いてしまいそうな儂さを含

んだ、その嬉々とした笑顔の中には、確かな悲壮が潜めいていた。

あたしの憶測、外れたかしら。

【あとがき】

気の置けない親友が、そのまま恋人になってしまうというパターン。

現実において、ありそうでなかなかないシチュエーションですね。

相手のことを深く知っていくうちに、良い所だけでなく悪い所まで見えてきてしまうのは、仕方のないことだと思えます。

それでも、たまに見せる良い所を好きになってしまっただけ、そうなると思える所も好きになれて……、みたいなことがあるらしいんですよ、それが。

恋愛に発展することはなくとも、アリスとノアの関係性はそういうカップルに似ていると思うのです。

Corruption or Wealth (前書き)

【まえがき】

“財産が増えるほどに、心の豊かさは減る”

サブタイトルは本当は“Corruption or Wealth are same?” 汚職(崩落)と富み(裕福)は同じなのか?、みたいな感じでしたが、長いので切りました。

「ただいま」

「お帰りなさいませ。アリスお嬢様。旦那様がお待ちです」
つい五分前までは天国。今は、その逆。

あたしは、学校のカバンをメイドに預けたりせず、自分の部屋まで運ぶ。

「お嬢様！ 私たちにお任せください！」

「いいのよ。あなたたちも疲れているでしょう？ あたしには気を遣わなくていいわ」

いつから建前になってしまったのだろう。

あたしが自分の荷物を自分で運ぶ意味は、できるだけ両親を避けるため、になってしまっていた。

部屋に荷物一式を置いて、居間に向かう。ノアの家なら目的地まで一瞬なのに、この家だとやたら長い。足取りが重いせいも、確かにある。

居間の扉を開けると、開口一番。

「遅いぞアリス。もう八時になる」

「それは、ごめんなさい」

何人用だよ、と言うくらい広いテーブルに、わずか二人が座っていた。あたしが混ざっても、あと五人くらいは食事の席に参加可能だろう。

喧嘩しているわけじゃないけど、多分その席には誰も座らない気がする。何とかは犬も食わないとは言うけれど、もしかしたら犬ですら座るのを拒みそうだ。

そんな席に、あたしは砂を噛むような思いを抱きながら、座る。

「今日も部活か？ 大会はどうだ、勝てそうか？ 最近学校はどうだ？ 勉強の調子はどうだ？」

「あなた、そんなにいっぺんに質問しちゃだめよ」

「そうだな」

どの質問が来ても、「うん。大丈夫」で返すつもりだった。

けれど、どういうわけか父親が選択した質問は、それで答えられないものだった。

あの小汚い団地にはもう行ってないだろうな？」

思い出したように言って、苦い顔をする。

あたしは心底ムカついて、目角を立てた。けれど、父親のその表情に冷めてしまう。

ああ。ノアに対する気持ちにここまでの差があるんだな。

そう思って、沸点みたいなものを超える前に、怒りが鎮まってしまう。良かったのやら悪かったのやら。

「行ってません。行かない約束だから」

あたしがまだ無邪気だったころ、あたしは両親を楽園に招きいれようとしたことがあった。あたしにとってあそこが楽園になったころだから最近かもしれない。

幸せの共有を、あたしはしたかったただけだったのだ。

結局、団地の奥に差し掛かったあたりで、両親は「不衛生すぎる」と毒を吐いて帰ってしまったのだが。

それ以来、あたしは楽園の出入りを禁止されていた。

そしてそれ以来、あたしは親が嫌いになった。様付けの呼び方も、言霊に皮肉を乗せるようになった。

「そうか。ならよかった。今日は部活で大変だっただろう。それじゃあ食べようか」

「そうですね」

夕食は大抵、家族が全員揃ってから食べる。

普通なら望ましい家族の形なんだろうけど、あたしからすれば、『家族』と言う要素が少なくなり始めたから補うためにやっているように感じられた。

テーブルには、そのサイズに見合った、つまり家族に見合った量の食事が並べられていた。

「いただきます」

あたしは、メイドさんたちになるだけ迷惑をかけないように、手を付ける皿は少なく済ませます。

けれど、母親も父親も、食べたいものを食べて食べたくないものを残し、豪遊の限りを尽くしているように見える。

そういうのやめたら？　と言ったら、努力の報いだと言いつ返されそうだから、言ったことはない。

「そうだアリス。もう少して卒業だろう？　進学先は国外の名門アカデミーにするということと担任の先生に伝えておいたから、しっかり勉強しておきなさい。でも先生は、アリスの成績なら余裕だと仰っていたから安心するといい」

「え？」

「そうよアリス。そこに入れば何にだってなれるわ。医者にも、社長にも、もちろん公安にもね」

「ちよつと待って……。あたしは国立に……」

両親の意識が高いせいで、あたしは昔から国立を決めていた。けれど、そこには資金面を考えてと言う理由もあった。

その心配がなくなると同時に、両親の目標はまた変わったのであった。

でも、直接先生に話を持ち掛けると言う話は初耳だ。

急過ぎやしないだろうか……あたしの安寧の、崩壊。

「国立に行くにはもつたいなすぎる」「もっと上を目指せるわ」

「はい……。わかりました……」

家が裕福になるにつれ、あたしは確実に何か失っている。

息の詰まる食事の席を早食いで早々に切り上げて、あたしは部屋にいた。

壁掛け時計は午後九時を指している。時間が経つのが遅い。

両親のスタイルはあたしがどう頑張っても変えられない。そんなことを考えて挙措を失って手足を放り投げ、ベッドに転がっていた。「なーにが『はい……』。わかりました……』よ！ 全然わかるわけないわよ！ あたしは国立に行くんだから！」

枕に顔を突っ伏して、冬を感じて、冷静になって、何があたしをここまでさせるのか少し考えてみる。

今まで親に従ってきて、確かにあたしの人生は上手くいっていたのだ。

言われたことを成功に導くだけで、様々な人があたしを見てくれる、認めてくれる。だからあたしは、嫌なことでも我慢してやってきた。

そう。我慢して。

あたしが、嫌なことを嫌と認識して、それを我慢するようになったのは、最近のことだった。

それはもしかしなくても、自分のやりたいことが 進みたい道が、見えてきたからなのではないだろうか。

国立という道を、もう一度見てみる。

その進学が元々の目標であったとは言ったが、それがここまでのモチベーション維持に繋がっているかと言ったら、それは違った。じゃあなんだ……ノアか？

確かにあの子はあたしの親友、いや多分それ以上だけど、あの子のために同じ学校を目指していると言っには少し厳しい気がする。

それは、言うまでもなくノアがあたしについてくるから。

じゃああれか。反抗心みたいなものか？

親と同じことはしたくない。思春期にはよくあることだけれど、

あたしは両親への尊敬を忘れたことはない。

ノアの様な状況から努力して栄光を掴んだ。その歴史は尊敬に値する。

けれど、少し勝手が過ぎる。

この間なんか、どこぞの豪族のご子息を連れてきて許婚協定まで結ぶ始末だ。レイルとか言ったっけ、あの男。

確か、あの男が通っていたアカデミーが、父親がさっき言っていた国外の名門校だったか。

多分、そこには何か繋がりがある。

また我慢すれば、成功するだろうか。明るい未来が訪れるだろうか。

でも結局、あたしは、言いなりになるのが嫌で

ふう……眠いな、もう寝よう

……

はあ……。今日も、うまくやれてたかな……。明日も、上手くやれるかなあ……

でも、そんなこと考えても仕方がないよね……

そうね。考えても仕方がないんだわ。明日は明日の風が吹くって言うし。

ああでも、おかげで分かった気がするわ。

あたしはもっとあなたのことが知りたい。だから、同じ学校に行きたい。

結局、それだけのことなのよね。

だからあたしは頑張れるのよ。

あたしが頑張るのは、他の誰でもない、あたし自身のためなんだから。

【あとがき】

親の期待に応えようとするのは、子供の本能のようなものらしいです。

どれだけ親が憎くても、最後は孝行してしまったりするのです。それで「自分のためだから」なんて、100%ツンデレじゃないですか。

そうしますと、世の中には結構ツンデレさんがたくさんいますね。いえ。

みんなツンデレなのかもしれませんね。

人類オールツンデレ。

ツンデレ好きは歓喜ですね。

B e f o r e a n d A f t e r (前書き)

【まえがき】

“ 前も後も変わらない。変わるのは眼^{まなこ}”
話の都合上、今回はとても短いお話になりました。
込み入った内容になっているので、ぜひ読んでみてください。

本編をどうぞ。

Before and After

二月初旬。

「それでね。ルートってば」

「はあ……」

あたしの話を遮ってまで、ノアが溜息をするのは珍しい。

どれくらい珍しいかの言い得て妙な表現はなかなか見つからないけれど、多分、雷にあたるより珍しいと思う。

だって、そんなこと今までなかったから。雷と同じで。

「どうしたのよ」

「どうもしてない……。ただ……」

「ただ？」

あたしが首を傾げると、ノアがあたしから離れて少し壁の方へ寄る。

昨日に倣って一緒に布団で寝転んでいたから、そこまで距離は取れない。

それはあたしも同じく。

「だって……。だってここはノアの部屋で、ノアと話してるのに、アリスはいつもいつも……ばっかりで……」

意図して音量をマイナスされたら自然、これだけ近くても聞こえない。

今まで散々お世話してきたのに何その態度……とは流石に思わない。

けれど、一人の親友　少なくとも友達以上くらいには思われて

いるはずの人から頼られていないと、自分に自信がなくなる。

あたしはどこに矛先が向いているかわからない一抹の憤りから、また、ずいとノアに寄った。

これで後ろめたければあたしが悪くて、ノアが萎んだらノアが悪い。

あたしたちの関係なら、密着しようが何しようが、多少は大丈夫だという確証があった。

「あなた最近、すぐくつまらなそうよ。何かあったなら言いなさいよ」

「な

ノアとの距離はゼロ。ノアの顔との距離はおよそ7センチ。

これが男女だったら、もしかしたら何か感じるのかもしれないが、ノアが相手だと別段何も感じない。

ただ、「黒髪が綺麗ね」とか、「円らかな瞳が可愛らしいわ」とか、「きめ細かい白肌が羨ましいなあ」とか、往々にして言われる有象無象で無粋な感想は、あたしも申し訳程度には持っていた。

でも、特別言葉にして伝えようとは思わなかった。

何にもないから!!! ……何もないの!!! もういい、帰って!」

怒鳴られてしまった。

そして、人生初の追い出しを喰らった。

背中を押されて、入り口まで持ってこられた。

歩行を強要できるほど強い力はそのにはなかったけど、歩いてあげないと何だか可哀想な気がして歩いてしまった。

「ノア、一体どうしたのかしら……」

静かに閉められた楽園の扉を眺めて、独り言ちる。
同情という言葉が自分の中に残っていることが、とてつもなく気色悪い。

現在進行形で降り積もる白雪に頭を突っ込んで、凍るほどキンキンに冷やして反省したくなる。

思いついた戯言を口にしていたら、何か変わっただろうか。

「はあ……」

きつと何も変わらない。

今まで、そんなことを言ったことはなかったから。

「帰ろうかしら……」

わざとらしく踵を返して、改めて帰り道の暗い闇を食む^は。例によつて、あたしの足取りは重い。

けれど、あたしの足はどうしてもそこに向かう。まるで、牢獄から長い鎖で繋がれて生きているみたいだ。今は、楽園から発せられた退園命令の圧力も一つの要因か。

でも、思えばそうなのかもしれない。

子供が生まれてから暫く経って自由が利くようになると、親は、子供がどこかへ行ってしまわないように制限を付ける。門限とか一家言とか、形は色々ある。

子供たちは制限という代償を支払って、親に保護してもらおうようになっていくわけだ。

しかし、子供が成長するにつれて、保護の必要も薄れてくる。それが自立することなのだろうけど、中間にいるあたしたちにとってみれば、それはとても邪魔に思える。

中途な位置である十五歳という経年からすれば、制限というのはただの「枷」でしかなくなる。それも、特別重い「枷」。

保護の必要はどうしたってあるから、その「枷」には、さらに大人の重圧という錘が上に乗っかることになるのだ。

少なくともあと五年はこうしていなければならぬ。

身体的には大人でも、精神的社会的にはまだ子供らしいから。

でも、大人の気持ちも子供気もちも、両方ともわかるからこそ出来ることだつてある気がする。

それを見つけることが、大人になるということだとも思つてしまふ。今のあたしが知らないことを、大人と呼ばれる者たちはきつと知っているから。

だからこそ今、あたしたちは迷い悩むのだ。

捨てたいほどに辛かった過去も、俯きたくなる苦しい未来も、眼を塞ぎたくなる厳しい現実も、すべて背負わなければいけないのが大人だから。

だから、あたしたちは葛藤し戸惑うのだ。

かけがえのない愛おしい過去も、希望の光に辿り着く未来も、愛情や友情で満たされた現実も、すべて味わうことが出来るのが大人だから。

あたしは今、一体何が出来るのだろうか。

Before and After (後書き)

【あとがき】

きつと仲直りできる。

私には、そう思って別れた友人がいました。

ですが、もう、あの子に会うことは二度とできません……。

名前も思い出せないのですから。

ただの薄情でした。

【まえがき】

“あなたの心に触れたい”
そうすれば自分の心も知ってもらえるから。

今回は、前回の話が短くなってしまった分、少し長めになりました。
悪しからず。

それでは本編です。

「なんだ。今日は早いな」

「部活が早く終わったから」

玄関の巨大な時計の短針が午後の六時の手前にある。お前こそ早
いじゃないか、とかは言えない。

父親との会話はそれだけにして、あたしは部屋に向かった。

背中に突き刺さる視線が、気持ち悪かった。

家の中央を貫く長い廊下を行くと、海鮮系のいい匂いがしてくる。

この時間帯だと、まだご飯は……いや、出来ているわね。

だいぶ以前の話だけど、母親が料理を作っていた頃はほぼ定時で
午後の六時半がディナータイムだった。

たまに早く帰ると、その頃の癖で厨房を覗いてしまうことがある。

「今日のご飯は何？」と言うと、「ハラスよ」と返ってきて、ぴよ
んと跳ねて喜んで。その日学校であつた下らないことを、下らなく
ないように話して。

今となつては郷愁の中にしかないそんな素朴なやり取りが、あた
しは好きだった。

鞆を部屋に置く前に、キッチンを覗いてみる。習慣を思い出した
だけの話で、何も期待などはしていない。

白黒フリルのメイド服を着た四人のメイドが、右に左に忙しなく
夕食の準備をしている。ものすごいスピードで料理が出来上がって
いく様は、雪が積もると少し似ていた。

あの量の食事があたしの家族三人分のためだけに作られていると
考えると、ゾツとする。世界には食べ物にありつけない人も大勢い
るのに、あたしはこんなところで一体何をしているの？ と疑問に

なる。

「お帰りなさいませ、アリスお嬢様。盛り付け中ですのでお待ちください」

あたしが覗いていることに気付いたメイドの一人が、作業の手を止めて頭を下げる。続いて、他の三人も作業の手を止めてお辞儀した。

あたしはどうしていいかわからなくて、「頑張つて」とだけ伝えて、逃げるようにその場を後にした。

別に、家に家族以外の人間が存在していることには抵抗はない。メイドさんたちは皆、仕事抜きでもいい人だつてわかるし、あたし自身ノアの家に半居候状態だから抵抗を抱いては行動と矛盾してしまう。

でも、何か違う気がする。この家庭の形には違和感がある。

なら、違和感は違和感のままでもいい。

正体がわかってしまったら、何か良くないことが起きる気がするから。

このテーブルの大きさを踏まえて家族の人数を考えると、あたしの家族は巨人族でなければおかしいことになる。

いや、そんなわけはなくて。あたしたちは当然、ただの人間で。

ただただ裕福であることを周囲に知らしめるような、そんな顕示欲すら感じるこのテーブルは、あたしにとってはとても居心地の悪い場所だった。

「ああそうだアリス。この間、コーヒー園のあの子……ええと……」
紙エプロンを装着しながら、父親が何やら聞いてくる。

あたしは、目を細めないよう努めながら、いつものトーンで返す。

「ルート？」

「そうだそうだ！ その子の家にお邪魔したらしいじゃないか。ちゃんとしたお礼がまだだったから、明日それを渡しておいてくれ」

人差し指で合図してメイドの一人を呼んで、両手に収まらないほど大きな箱をあたしの元に持ってこさせた。

これを学校まで持つていくのは正直マヌケだ、とか言ったら、散々怒鳴られた拳句、果てには馬を手配されそうだ。

「夏休みに宿泊をさせてもらったお礼も兼ねてある。中身はそんなにいいものじゃないが、一応コーヒー園だからお菓子を選んだ。確か、『マカロン』とかいう奴だ」

「あなた。それだと、流行に乗り遅れないように必死なのが滲み出てる感じがするわよ」

「お、そうか？ では別の」

「これでいい。ルート、甘いもの好きだし。妹も、多分喜ぶ」

両親は暫くの間、思案顔でいた。

そして、「そうか。ならそうするといい」と許諾の意を示した。

いや、許諾と言つ言葉がここで出ること自体おかしいんだけど、どうして悩む必要があったのだろう。

もしかして捨てる気だった？

過去にもそんなことがあったのを思い出してしまって、邪推せざるを得ない。

軽蔑が表情に出ないよう、ポーカーフェイスで咀嚼、嚥下を続ける。

「アリス。進学の方はどうなっている？ 試験は確か二週間後だろう？」

父親は昔から間が悪かった。

あたしが何かしようとするかと介入してきて、あたしの行為は未然に終わる。

結果として、いい方向へ向かっていたから尚更あたしはそれが嫌だった。

今通っている学校も、実は父親が決めていたりする。

そのおかげでルートやリス、部活仲間に出会えた。でも、ノアとは離れてしまった。

.....
あたしが従順だっただけかもしれない。

「一応は、国外で考えてる……」
そう。

あたしの今の望みは、ルートやノアと同じ学校に行くこと。

でも、望みに反することを確定的にするのは怖くて、「一応」なんて言葉を付けてしまう。

「一応？ 他に何かあるのか？」

「アリス？ 国立はダメよ？ あなたはもっと上を目指せるんだから」

母親は昔から強情だった。

常日頃振り回されていたわけではないけど、父親と同調した時の強制力には、一度も逆らえなかったためがない。

ここで引き下がったら、あたしの望みなんて軽く潰されてしまいうさだ。

風邪がどう吹きまわしたかは、あたしには少し計算が難しい。

「でも、友達がみんな国立に行くの……。それに国立だって、立派な仕事に就ける可能性は十分あるわ」

「！？」 「！！」

それからは怒号だった。完全に耳を塞ぐことはできないけれど、何を言っているかわからないくらいにはカバーできた。

どうせ、国外に導く言葉しか吐けないのだ。あたしにとって、そんな言葉は無価値だ。

昔、あたしが従順だったのは多分、『願い』がなかったから。望みとも言うのかな。

けれど、今は違う。

あの時ルートに救われて、あたしは願った。いや、願い続けている。

多分、だから叶った。

『あたしだけの王子様のこと、すべてが知りたい。好きなもの、嫌いなもの、住んでる場所、何でもいい。あたしはそれを知って、王子様にお礼がしたい！』

まだ幼い頃に、あたしは公園で遊んでいた男の子のサッカーボールをなくしてしまつて苛められそうになつた。そんなあたしを救つたのはルートだつた。

その時はわけがわからなくて逃げ出してしまった上に、後で邂逅した時、ルート自身も覚えていないようだつたから、暫くお礼が言えない状況だつたわけだ。

だから、そんなことを『願い』に、あたしは生き続けた。

叶つてしまえばそこで終了する願い事だと思つていたら全然違くて、あたしはもっと知りたくなつた。醜い人間の底無しの欲望と言われたつて良かった。

それくらい面白いんだ。あたしの王子様は。

ここで簡単にやめられるわけがない。少しばかり中毒性が強すぎる。

それでいいのよ。

「友達つて、まさかあの　　か？」

でも、その言葉だけは聞き捨てならなかつた。

耳を塞いでいるはずなのに、その名前だけは透過してきてしつかり音声情報として脳に取り込まれた。

耳栓　手を耳から外して、

「あんな小汚いところ、二度と行くなと言つていただろう？　お前

は明日から外出禁止だ！」

脱力して、両の手がプランとなる。視線も次第に下がって、テール下の暗がりで見界がいつぱいになる。

あたしの大事なものが取り上げられた虚無感にとらわれて、さらに怒りと悲しみを足して二で割ったような感情が頭の中をぐるぐるして吐き気がする。

処理しきれなくなったあたしは、フォークなんて放り投げて、部屋に走った。

視界が水分を多分に含んでいるせいで部屋までの道のりが歪んで、いつもと違う風景に見えて不安になった。

決して嗚咽して泣くほどではなかった。

けれどそれは、現在の感情に怒りという成分が含まれているからだった。暫くして両親の言い分を理解してしまえばそれはなくなって、悲しみだけが残ってしまう。そうなれば、あたしはもう、ノアに頼ってもらえるような強い女ではなくなってしまふ。

そうなる前に、何かプラスの成分を探さなくてはならないのだが、あたしはその成分のありかを知っていた。

いつでも、どこでも、何をしても、あたしはそれを手に入れることができる。

そういう能力だと豪語してもいい。

それを使うのに、特別の配慮はいらない。代償も何も無しに、使いたいと思ったとき、使える。

けれど、今日は自分と言う存在が抱く余計な感情が邪魔だ。

少し自分の意識から離れなければいけないだろう。

卵が先か鶏が先かと言う話があるけれど、あたしの場合、自意識のコントロール技術と特殊能力が同時だった。

そういうわけで、あたしは目を閉じて、少し精神を落ち着ける。

当然、悲しみは消えたりしないけれど、悲しみを感じている自分と、

自分という存在を知覚している自意識の乖離を試みることはできる。説明が難しいのは、感覚質というものが他人に伝播しない性質を持つことから証明できる……って、わけがわからないわね。

とにかく、あたしは心の安寧を求めて、自分の意識に旅を強要する。

出航したあたしの意識は、目的地「王子様」まで障害なく突き進む。

ヨーンロー。

「あ。もう七時か……。寒すぎて部活が無いせいで、最近勉強ばかりしてる気がするな」

「私も。アイスリンクに雪が積もり過ぎると、雪かきでほとんど部活が終わっちゃうよ」

居間の机で、妹のリズと学校の宿題をやっていると、時間が過ぎるのは結構早い。

食事休憩を挟んではいるが、勉強を始めてから約三時間経つ。

リズのノートを覗いてみると、数式よりも落書きの方が多い。リズはとても移り気が激しかった。その割に飲み込みが速いから、見かけ上は『遊んでばかりいる割に勉強ができる天才少女』の様に映らなくもない。

対する僕のノートは、宿題の範囲を遥かに超えてしまっている。暇だと、結構こういうことをやってしまう。

僕は中三だから、一応はミドルの学習範囲を全て終えたことになっている。だから、まだ中二のリズに勉強を教えることができるわけだが、どうも話を逸らされて時間を稼がれてしまう。

リズはとても頭がいいから勉強の必要がないのかもしれないけれ

ど、宿題は義務だからそういうわけにもいかないだろう。

「ほらリス。あと四問だよ」

「ううううう……」

テーブルの向かい側に座るリスは、開いたノートに顔を埋めて唸っている。

部屋が散らかっていたり、宿題が大嫌いだったり。完璧なリスに時たま見つかる欠陥も、僕にとってはチャームポイントに思える。

だから正せない、と。

「お風呂に入ってからにしたら？ 眠気がさめるよ」

「うむう……。そうするー」

眠そうに口を動かしたのち、のそりと立ち上がってバスルームへ向かっていった。

確かに、入浴は目が冴えるけれど、しばらくすると体温が下がって眠くなってしまふ。僕はそれを知りながら提案した。

すべては妹の寝顔を見るため……！
なんて。

「あらルート。まだ起きてたの？」

いまだ眠らずに蛍雪の功を積む僕の所へ、母がやってきた。ちなみにリスは宿題を終わらせて（八割方僕がやった）、すぐに部屋に戻って寝た。

「最近眠れなくて……」

「あら？ 乙女チックな悩みね」

母は冗談交じりに、自分の唇を指でなぞった。

右手に持つコーヒーカップに変な薬でも入っているような気がして、なんだか艶めかしい魔女の様な 魔性というのだろうか？

そんな雰囲気を感じる。

「お母さんは大丈夫なの？ もう夜なのに、コーヒーなんか飲んで」

「あら？ 知らないの？ 適量のコーヒーを毎日飲むとね、それが」

習慣になってよく眠れるのよ。どう、やってみる？」

僕はカフェインという不眠成分に非常に弱いので、首を横に振った。

母は飲み干されて空になったコーヒーカップを流しに片付けて、僕の向かいの席に座った。

「悩み、当ててあげようか恋でしょ？」

「早いよっ。考える時間が少なすぎるよ！　というか、まだ何も言っていない」

間髪入れずに答えられて、シンキングタイムがコンマ単位だった。適当にも程がある。

母は、はははと無邪気に笑ったかと思うと、今度は真剣な面持ちになった。どうやら大人のアドバイスをくれるようだ。

母の澆刺とした性格のせいで、あまり期待はできないのだけれど。「きっとルートの抱えてる悩みって、とても難しいことでしょ？」

ならいいのよ、恋で。今、抱えている一番の悩みを恋にしちゃいなさい。恋ならいくらしても減るもんじゃないし、いい経験にもなるしで一石二鳥よ」

「どういうこと？」

子供っぽい大人なアドバイスを母はくれる。でも、子供の方が的を射ていたりする。

興味が湧いたので、ペンを置いて少し色気を出してみる。

「簡単な話よ。例えば、幽霊になっちゃって悩んでいたとするでしょ？　それを、幽霊になってもまだ好きな人がいて悩んでいます、にするとどう？」

「うーん……。明るくなった？」

幽霊か……。僕も、世界をやり直している意味では似ているかもしれない。一度目と同じように生きられないところが特に。

それでもいいのだろうか？

「そうよ。恋って言葉が入るだけで、話は一気に明るくなるの。ライバルとかもいるかもしれないから一概には言えないんだけどね。」

でも、好きでいることは自由なわけだから、仕方のないことではあるのよ？」

「そういう時はどうすればいいの？」

「一番は、その思いを寄せられている子に決めてもらうのがいいけど……。だから、最悪譲ることも覚えなきゃだめよ？」

でも、それは同じ土俵にいたことが大前提だ。

仮に、片方が幽霊でもう片方が人間なら、好意を持たれた方は自分と同じ種族である人間の方を選ぶに決まっている。

母は、唐突に首を横に振った。

「違うわ。幽霊でも、好きになつてくれる子は必ずいるの。どれだけ、学校で人気が無くても、一度死んでいても、好きになる時は好きになるものなのよ」

心を読まれた。

平静を装おうと作り笑いとすると、表情筋がづらい。

引き攣る表情筋を我慢して、必死に脳内の引き出しを漁る。リスの部屋のようにてんでんばらばらではないので、言葉は割とすぐに見つかった。

「それって運命みたいな？」

どれだけ恵まれない環境にあつても結ばれる人もいる。

そういうものを説明づけるには『運命』という言葉以外では難しい。逆に、『運命』とはそういうものなのかもしれない、とも言い換えられる。

ルールという最大最強の障壁があるこの国では、僕の置かれた状況は恵まれているとは言えない。

そういう意味では信じたい。『運命』を。

「運命か……。そうね、運命みたいなものかもね。意外と乙女なのねルート」

「意外とって何……。よ」

乙女と言う単語に肖って申し訳程度に語尾を変えてみたが、違和感が凄まじい。

笑うことないのに、母も笑っている。別に可笑しいことはしていないのだが、僕自身がこの違和感をおかしく思っているのだから、然もありません。

「ふふふつ。いいのよ何だつて。『運命』ってのは、意外ともう始まっていたりする。そういうものなの。もしかしたら、昔助けてあげた子が……なんてことはよくあつたりするわ」

暗くなるまで外で遊んでいた頃のことを思い出して、複雑な感情になる。複雑の中には、微かな恋情もあると思う。

それはきつと、昔、公園で虐められている女の子を助けたことがあつたからだろう。

確かに、恋や愛などといった緻密で繊細な感情を感情として判別できるほど大人ではなかった。

それに、虐めていた人たちがいつも遊んでいたメンバー（友達と言えるのか怪しい）だったのだから、その勇気を買われて『少しくらいモテてもいいだろう』という期待が多く含まれているが。

今は違うけれど、僕は昔、サッカーをやっていて、かなり良い所まで行った……のだと思う。だから公園でサッカーをしていた子達に歓迎されたわけだ。

サッカー技術の方はといえば、遊びの延長として勧めてくれた両親を喜ばせたいと言う、偽善にも似た自己満足を維持し続けているうちに、僕は周囲からも認められるようになっていたほどだった。

それは後になって間違いだつたと気付かされるのだけだ。

結局、一人の女の子を救つたせいで、僕はいつものメンバーからは外されることになってしまった。

今思えば、『正しかったのだろうか』と後悔の念に悩まされることはほぼない。けれど、その時は悔しくて仕方がなかったのだと思う。当然のように見返りも欲していただろう。

だけど、それが好意だつたのかという記憶は流石に掘り起こす気にはなれない。

口にしようものなら鞭を振るわれそうだし、そうでなくともキツ

イお仕置きを課されそうだから。

だから、少し『運命』の人が違う人だったらなあ、と誤ってしま
うこともある。できれば、そう、もつと僕が……。

「あら？ 腑に落ちないみたいね。それなら、もつとわかりやすく、
リズでもいいのよ」

今まさに『運命』の人にならないだろうかと考えていた人物の名
前が聞こえて、驚く。

「い、妹なんですけど……？」

多分、恥ずかしい内心を隠しきれなくて、目が見開かれている事
だろう。

「だからこそよ。二人とも生みの親が同じなんて、これ以上の『運
命』はないでしょう？ リズと喧嘩することはあったって、本当に
嫌いになることはないでしょう？」

黙って頷くけれど、躊躇いはあった。

だって、僕がリズを嫌いにならないのは、『もう好きだから』な
のだと、そう思ってしまったから。

「う、うん。そうだね……」

僕が口ごもったことで話は途切れてしまう。絶妙な空気を保つの
が上手である母は、何故か、今ばかりは静かに僕の顔を見つめて微
笑んでいるだけだった。

うっ。バレル……！

情動をカモフラージュすべく、僕はまたペンを手に取る。

「うふふっ。勉強もいいけど、あんまり無理はしないのよ？」

その言葉を最後に、母は居間を去った。「答えは与えたぞ？」的
な表情をしていたから、これ以上は何も言ってこないだろう。

自己解決を催促されたことによる焦燥感のせいで、ノートを走る
ペン先がぶれる。内容も全く頭に入っていない。

僕の抱えた「世界」の問題に対して、母からもらった答えは「恋」

だった。

多分、母に答えを求めれば、すべて恋という言葉で返ってくる。それは母が適当であるからというより、母が恋は万能なものであることを知っているからな気がする。

本能に支配された動物では多分、恋とか愛とか足して恋愛とか、そういった感情はまず芽生えないのだと思う。そういったものはすべて、十分条件としてリビドーにカテゴライズされてしまうのだ。動物にとって、愛と生殖は切っても切り離せないのだから。

人間もそれらと同じ動物だから、根底には子孫繁栄というのがあるかもしれない。

でも、人間はそうでなくても恋愛をすることができる。食べ物が好きになるとは別の、失いたくないとか一緒にいたいとか、そういう精緻なステートを含んだ「好き」が人間にはあるのだ。

僕が恋と呼んでいるものは、本当は恋ではないのかもしれないが、それでも普通の恋愛と質を異にしていらないように感じる。誰かを好きになる感情に、僕は闇を感じないから。

けれど、「恋か……それはいい！」とすぐに切り替えられないのも、恋愛と生殖を結びつけない人間の性だ。

母が提示した解決法通り、僕はこの世界で　この国で「恋」を目的に生きられるのだろうか？

でも、そうでなくても、僕は生きていたい。リズやアリスと、いつまでも楽しく笑いあって毎日を過ごしたい。

僕はノートを閉じて、窓のそばに立ってみた。いつも変わらずそこにある外の景色を、夜の深い黒を、目に焼き付けたくなったから。一度目がダメだったから、と言う理由では僕は済まさない。

一度目でも二度目でも何回目でも、僕は同じことを願っているのだから、やり直されたこの世界は夢であり、現実である一度目の世界の続きなのだ。

いや、逆かもしれない。

それだけでなく、僕は何かを変えたくてここに存在しているのだ。

それだけは揺らぐことのない事実として、僕の心の中にある。それだけでも、僕の心は一度目とは 現実とは、明らかに違っている。そう思うと、必要なものが手に入る気がするのだ。

まだ一度目の世界は終わってない。しかし、まだ「恋」に到達していない。

僕が二度目の世界を認識する時、いや、二度目の世界が僕を認識する時

おそらく僕は「恋」を通り過ぎる。

郷愁を感じる漆黒の画面が、一瞬で、退屈な天井の白に切り替わる。時計を見れば、すっかり眠るのに適した時間になってしまっている。

あたしが意識を離れている間の体感時間は、あたしと全く異なるでも、あたしの意識が全くないかと言ったらそれもなくて、あたしの意識はあたしの意識として時間感覚を所有し続ける。

「意識の往復の機序はどうなっているんだ？」と言われると答えることはできない。時間感覚のずれとか、空間認識のずれとか、そういうものを言葉で説明するのはとても難しい。

多分、相対性理論とかが絡んでくると思う。あたしはそれを知らないし、知っている人自体もそうはいないだろう。

郷愁を感じていたというのは、正しくはあたしの感覚ではない。実は、時間感覚だけでなく、他の全てを、あたしは知覚認識することができるとができる。

全て、というのはつまり……………全てだ。

知る方法は簡単で、少し集中して相手のことを知りたいと考えると、無意識的に意識の中に相手の意識が生まれてくるのだ。

先ほどのように、自意識の乖離に集中すれば相手の感覚全てを覚することも可能だ。タイミングも任意で変更できるので、喜びや快感を感じている時だけ同調して、不満や苦痛を感じている時は同調を解除するということも当然可能だ。

感覚の積み重ねと言っても過言ではない記憶も、相手が思い出すとしなくとも感じ取ることができる。

ちなみに、意識を同調させている相手からは、あたしが同調しているとはわからない。相手の感じたことに対して、あたしがいくら感想を詳述しようと、相手には一文字たりとも届かない。

飽くまで、あたしの方からのみ相手を知ることができる能力なのだ。

不可逆的にしか発動しないことを始め、この能力には制限がいくつがある。まあ、その制限を作ったのはあたし自身なただけだ。

制限というより、道理と言った方が表現としては正しいかもしれない。

一つは、この能力は一生消えないこと。

何でも、叶えてしまったものを取り消すことは出来ないらしい。

例えば時間を巻き戻しても、その時間遡行を自意識で知覚できなければ、全くの無意味だと言うのだ。

仮に、あたしが同調している相手が時間遡行しても、それは自意識ではないから、さっき言った相対性理論がどうにかなくて、結局のところ未来を変えるのは無理らしい。それ以外にも、知覚情報の齟齬が生じるらしいけれど、詳しくは知らない。

さらにもう一つは、相手が感じていないことを知ることは出来ないこと。

相手のことを知る能力だから、自然、相手の知らないものを知覚することは不可能だ。ど忘れした記憶は、その瞬間だけ知ることが

できなくなる。それ以外にも、記憶から完全に消去されたものは、シヨック療法的な何かで思い出されなければ知覚不可能だ。

最後に、この能力の対象となる人物が限られているということ。それも一人。

空想世界の住人とかじゃなくて同じ世界に住んでいて、ファンタジーみたいな特別な存在でもないごくありふれた人。

世界で特別じゃなくても、あたしの中では確かに特別、確かに運命。

その人は、あたしを救った王子様。でも同じクラス、とか言うと親近感が湧きすぎてギャップに酔うかもしれない。

あたしはルートのすべてを知ってる。

何が好きかとか何が嫌いとか、そんな単純なこともちろん、何がどれくらい好きかとか何がどれくらい嫌いとか、その大きさも正確無比に知っている。

ルートが今聞いている音、見ている景色、全部。あたしはそれらすべてをリアルタイムで、ルートが感じているのと全く同じように感じる事ができる。あたしとの感じ方の違いを感じられるから、その感覚がルートのものだと知覚できるのだ。

いつからそうなってしまったのか、それはあたしの十五歳の誕生日、四月の九日まで話を遡ることになる。

To prince's heart . . . (後書き)

【あとがき】

色々なことが起きた第七話でしたね。

一つ一つ整理して、次回をお楽しみに。

次回はアリスの誕生日について、ですかね。

【Chance】Prince at Princess（前書き）

【まえがき】

“王子様はお姫様の元へ”

atには色々な意味があります。

沢山の解釈を考えていただけると嬉しいです。

『サブタイトルはこれで三つ目ですね。

前言しました通り、スキップしていただいても問題なく読み進めることができますよ。

あまり長くないお話なので、読んでいただけると嬉しいです。

【Chance】Prince at Princess

「あ」

ワンバウンド、ツーバウンド、スリーバウンド。

あたしの蹴ったボールは小気味よくバウンドして、坂を転がって、引つ張られるように公園横の小川に豪快にダイヴした。

白黒幾何学模様のそれは、強い勢力に乗せられて、どんぶらこどんぶらこ、流されてゆく。

あのスピードでは、おばあさんはおるか運動神経の良い男性でも、拾うのは困難だと思う。

あたしは、蹴ってストレス解消した爽快半分、ボールを追って走って行った男の子たちへの懸念半分、それぞれ抱きながら立ち尽くしていた。

五分経って男の子たちが戻ってくると、そのうちの片方はもう片方に染められた。

「おい！」

「な、なにかしらっ」

三人の男の子を従えるリーダーの様な男の子が接近してきて、ブランコのところにいたあたしに凄んでくる。

「お前が蹴ったボール、流されてっただけけど！ お前、弁償しろよ！」

「ふ、ふんっ。知らないわよそんなこと。あたしは、転がってきたボールを蹴っただけだもの。その後はどうなるかなんて、予想もできないわ！ あたしのところにボールを転がしたのがいけないんだと思うわ！」

「な、なんだと!? 自分でやっておいて、人のせいにするのか! それは最低なことだつて学校の先生に習わなかったのかよ! この、バカ女!」

リーダー各含め、包囲網を張る男子たちは見るからにあたしよりも体が大きい。

見覚えもない顔ぶれだし、上の学年の人だろうか。

さっきまでサッカーをしていたからか、ノアを虐めていた陰湿な同級生連中よりも、かなり暴力的に感じる。

『汚れた力には絶対に屈するな。澄み切った意志で抗うのだ』

父の教えが自動的に思い起こされて、意気込むあたしを活性化させている。

はずだけれど。

あたしがボールを蹴る行為に爽快感を求めた理由が、その大半を妨げているようだ。

結局、別の意味であたしは奮い立つ。

「バカとはなによ! バカつて言う人の方がバカなのよ! この、どアホ!」

そつだそつだ。

バカと言う人の方がバカなのだ。

……………

…………… パパのどアホ。

「バカもアホも変わんねえだろ! クソ、ムカつくな! 弁償しろつつってんだろ! これ以上抵抗するなら公安呼ぶぞ!」

社会的すぎる第三者の名前が登場して、連れの三人にも動揺が表れる。さすがにまずいぞ、みたいなの。

だけど、あたしにその脅しは効かない。

なぜなら、あたしのパパとママは……………、つてまたか。

「思い出させるんじゃないわよ! まったく、もう!」

そうだ。

丁度蹴るモノが欲しかったのだ。

蹴ってやるうか。

「ダメだこいつ。痛い目を見なきゃわかんないみたいだわ」

あたしの思考が周囲に伝播したわけではない。

そう言えば、この男子たちも、蹴る代わりのモノが欲しかったのだった。

リーダーが目配せすると、他三人は頷いた。

「わっ、ちよつと！」

あたしの背後を取っていた二人の男子が、あたしの腕を片方ずつロックして自由を奪う。

「ははは！ 無駄無駄。見たところ一年か二年だろ？ そんなんじや絶対抜けらんねえって！」

「は、離しなさいよ！」

「くくくつ。何をしてやるうかな」

「なっ、やめなさいよ！ やめないと、パ

公安だから、あたしを助けてくれる？

親だから、あたしを助けてくれる？

そんなことは、今はどっちでもいい。

あたしはそのどちらにも必要としないのだから。

パンチするわよ！」

「おうおう。やってみるよ！」

腕をロックする力が一段と強くなって痛くて、あたしはパンチどころか泣き出さないよう抵抗するので精いっぱいだった。

このまま泣いてしまったら確実にバカにされて終わりだ。

我儘なバカ娘で、終わりだ。

それだけは嫌だから。

嫌、だから。

だから。

でも……。

「痛っ！」

「どうしたどうした？ パンチするんじゃないのだったのか？」

「そそそ、そうよっ！」

無力であることに、あたしは心底腹が立つ。

その怒りは絵本の世界みたいに、あたしの力に……なるはずもなかった。

力んで、でも空振りで、その勢いが自分に跳ね返ってくる。

あたしの声は咽ぶように震えていた。

「全然出来てねえじゃん！ もしかして殴り方知らねえの？ お手本見せてやるうか？」

「ふ、ふんっ

嫌だ。

これ以上痛いのはやめて。

やれるものならやってみなさいよ。

澄み切った意志つてなによ。

そんなものを掲げて、あたしの欲しい物が 待ち焦がれる物が
手に入るといふの？

あんたにできるならね！」

力に抵抗する意志つてなによ。

ただ痛いだけじゃない。

「ぶざけたこと言いやがって！ 本気でぶん殴ってやる！ おい、ちゃんと押さえてるよ！」

「う、つく……」

自由を制限する力は、一段と強くなって、制限の範疇を超える。

腕が関節の働かない方へ扱かれるのにつられて、体が反ってしま

う。

背骨が折れるのではないかというくらいに、頭頂部から後ろに向かう強い力を感じる。

『誕生日？ ケーキ、が食べたい、かな……』
痛い。

泣きたくない。

「あたしの誕生日の次の日はママの誕生日」

『チヨコのが良かったー！』
嫌だ。
殴らないでよ。

「あたしの家はそんなに裕福じゃないから、あたしの誕生日を祝うと、ママの誕生日を祝えないの」

『あたし、白のは要らない！ もう、ママにあげるから！』
許して。
もう嘘なんてつかないから。

「だから、一日早いけど、あたしの誕生日ケーキをママにあげようと思ったの。ママ、こごでもしないと、きつと食べてくれないから……」

『パパのバカ！ もう知らない！』
立ち向かったけど。
あたしの意志は澄んでなんかいなかった。

「生き残るための処世術を知ると、人は汚れてしまうのかもしれない

ない」

『ごめんなさい……。パパ……。』
探そう。

汚れてしまった意志の中から。

こんなにも黒いあたしさえも救ってくれる、真っ白な王子様を。
待っているばかりでは黒が濃くなってしまつから、あたしも純粋
に叫ぼう。

あたしの中に残る、澄み切った一つの白を。

「誰か、助けて!!」

「やめろ!!」

「え？」

あたしの目の前にいるリーダー格の男の子のせいで、声の主の姿
が一切見えない。

声の主が敵なのか、味方なのか。

今はそれだけが気がかりである。

「あん？」

リーダーが振り返ると自然、塞がれていた視界が広がる。

あたしは、その姿を見て、仰天する。ある意味では“呆然”だっ
たかもしれない。

「なんだ、お前か。どうしたんだ、やめろなんて。お前が殴りたか
つたのか？」

「ち、違うよ! い、いじめるのは、良くないって……。良くない
って言ってるんだよ!」

「はあ？」

脅迫と疑問を足して強引に二で割ったような問いに、その人は深呼吸を一つする。

「いじめはいけないうって言ってるんだよ!!」

その糾弾は、今までで一番、この公園を震撼させた。

どこからそんな声が出るのだろうかと疑問に思えるほどに小さい

あたしと同じか、あるいは少し小さいくらいの身の丈。この男子四人組の友達と言うには、少しばかりアクが弱い気がする。顔立ちはとても整っていて、必要なものはあつて不要なものは無い感じ。声質は中性的で、どちらかと言えば弱々しく、頼りがいが無い。

目立つ特徴とえば、右と左で色が異なる瞳。

それは稀有な存在であることを示すと同時に、外界から力を加えられれば忽ち廃れてしまいそうな儂げな雰囲気醸す。

でも、檄を飛ばすその姿は、惚れ惚れするほどに輝いて、カッコ良くて……、何だろう……。

王子様……っぼい？

「ちつ。なんだよ。サッカー上手いから、俺たちの仲間に入れてやってたのによっ！」

興が醒めたのか、リーダーは「別のこととして遊ぶぞ!」と、あたしの包囲網を解体して、公園を去って行った。

かけられていた大きな力が急激になくなった慣性力で、あたしは脱力してしまう。

腰が抜けた、と言うのかも知れない。

けれど、それは安心からくるものなのであった。

安心の反対は『不安』。

それを感じていたからこそ、今の安心がある。

でも、『不安』を感じていたからこそ、今の痛みがある。

そして、その『不安』は、自分のせいで感じてしまったのだ。あ

たしの慢心がパパとママを傷つけてしまったから、その罰に『不安』と痛みが下されたのだ。

今、あたしが感じている安堵は、暴力が未然に終わったために生じた感情だ。

あたしには、もう一つ、感じなければいけない安堵がある。

あたしが家を飛び出した理由が、きつとそれだ。

ならば、することは決まっている。

「謝らなきゃっ」

一段落すると、あたしの感情を堰き止めていたものが緩やかに流され始めた。

「う、うう……」

もう、我慢する必要もない。

今、あたしのことを見ている人はきつと、あたしをバカにするよ
うな人じゃない。

ダムが壊れてしまう前に、溜まったものを流してしまおう。

「うわ

「うわああああああああん！！」

あ、あれえ………？」

開けたと思つた栓が、隣にいた王子様もどきの嗚咽によって、また閉じられてしまう。

さすがにその動向が気になって、あたしは立ち上がり、王子様もどきに近づいてみる。

そうすると、今度は、王子様の方が地べたに座りこんでしまうのだった。

それも、泣き喚きながら。

「ど、どうしたのよ？」

あたしの声が届かないくらいに、王子様もどきの喚声は、自身を防音の殻に閉じ込めてしまっている。

もう、わけがわからない。

友人に避けられることを覚悟した上で、あたしを助けたのではないのだろうか。

もし、そのことを悔いて泣いているのなら、あたしは感謝などしない。むしろ、軽蔑する。

でも。

「うわあああああああ！！」

瞳の色は手で覆われてしまっただけで見ることは出来ないけれど、逆に零れ落ちる涙の色は鮮明に見える。

あたしはその色に見覚えがあった。

あたしも、同じ色を持っているけれど、王子様のそれはあたしのと比べ物にならないくらい澄んでいて、見惚^{みほ}れてしまうほどに綺麗だった。

眺めるだけで、何もできはしなかったのだが。

だからあたしは、「早くお家に帰りなさいね」と言葉を添えて、その場を後にするしかない。

薄情なことをしているとは思う。

けれど。

このまま一緒に、ここにいてはいけないのだ。

何故か？　なんて質問をする人は、それこそバカだ。

それを口に出してしまうから　周囲に知らしめようとするから、この世界からは争い事がなくならないのだから。

あたしは今日、それを経験して知った。

感謝とお礼はまた今度にして、今はここを離れよう。

『運命』とか『巡り合い』とか、そういう言葉で飾ることが出来る存在　あたしの王子様なのだから、きつと、また、あたしの前に

現れるはず。

そう信じて。

もし仮に、現れなかったとしたら、感謝を伝えるために　そし
てあなたを知るために、あたしの方から会いに行こう。

そう謳って。

今は、あなたの心から距離を取って、パパとママの心へ近づこう。

「またね。あたしの王子様…」

「このままここにいたらきつと、あたしはこの人のことが“好き”
になってしまっ」

【Chance】Prince at Princess（後書）
き）

【あとがき】

“親の心、子知らず。子の心、親知らず”

なんて言葉がありますが、普通に考えて、“自分の心、自分以外
知らず”ですよ。

今回は本編に戻ります。

忘れてしまった人はバックスペースで一つ戻りましょう。

最後の一文だけ見れば、関連記憶想起効果で大体思い出せます。

Y o u a n d “ Y o u ” (前書き)

【まえがき】

“あなたとわたし”

わたしのあなたはあなた。

あなたのあなたはわたし。

裕福になってから、あたしは自分の誕生日が嫌いになった。

服はクローゼットに余るほどあったのに、誕生日には決まって服だったから。実状、クローゼットの服のほとんどは去年の誕生日の時のものだ。

必要もない召し物をもらって、感謝を要求される。そんなものは、誕生日とは言わない。

だから、十五の誕生日の時、あたしはそれを伝えた。

そうしたら父に、

『服でもアクセサリーでもお金でも土地でもない。アリスの欲しいものは一体何なんだ？』

と怪訝な顔をされた。

性別が違うからわからないのかもしれないが、お金の力で何でも解決しようとしている父に、あたしは無性に腹が立ったのだ。わがままだつてわかっていたけれど、一言物申したかった。

『自分で考えてみたら？ あたしこそ、パ……お父様が何考えてるか知りたい！』

結果は芳しくなかったけれど。

あの時は少し怒りの方が強かったから、確か、泣いてはいなかった。

寝れば気が紛れると思って、あたしは早めに布団に入った。

そしてその夜、あたしは夢を見たのだ。

夢の中で『願いを叶えます』と言われた。『全知全能にだってなれる』らしかった。

あたしはそんなものに魅力を感じなかった。第一ただの夢だろう、

と呆れかえつてもいた。

けれどその夢はやけに鮮明で、目を瞑ってもその先にまた同じ夢があつて、どうやら自力では覚めないようだった。

だからあたしは仕方なく、

『パパが何を考えているのか知りたい』

と、そこにいる誰かに提案してみた。すると、願いを強く念じれば叶うという説明が返ってきた。

言われた通り、あたしは父親のことを思い浮かべてみた。

胸糞が悪かった。

暮らしが豊かになつてからの悪い記憶ばかりが思い起こされて、とてもじゃないが、その人のことを知りたいなんて思えなかった。

知ってどうするんだ。何か変えられるのか？

そう自問すると、すぐにノーと言う否定的な答えが返ってきた。でも、その空間にいと、記憶が異様にクリアに浮かんできて、忘れようとしてもなかなか上手いかなかった。だから、別の記憶で上書きしようと思った。

その時、一番最近の出来事がクラス替えでルートと同じクラスになれたことだった。席も隣だった。別段、意識することはなかったが、ルートは曲がりなりにもあたしの王子様だった。忘れてしまうくらいに、ルートはルートだった。

そうだ。

「やっぱり、ルートのことを知りたいわ」

そこからはとてもスムーズだった。

あたしの頭の中は、驚くほどすぐに、ルートのことですべていっばいになつて埋め尽くされた。知りたいと思うのに、自問自答の余地すらなかった。

『わかりました。とてもいい「願い」ですね』

確か、そんな感じの音声情報が脳に響いて、夢は覚めた。

けれどその朝は、あたしの上に誰か乗っているんじゃないかって
くらいの体の異様な重さに、メイドの力なしで起床できなかった。
メイドに囲まれながら朝ごはんを食べている時だった。

遅刻する！ もう、早く起きてよりズ！

ルートの声だった。

ただし、いつも聞いている声とは少し違っていた。なんだろう、
自分の声を自分で聞くのと人が聞くのでは聞こえ方が違うというの
と似ているか？

気になって、その声に意識を集中すると体の自由が利かなくなっ
て、あたしはそのまま床に倒れた。メイドの話も耳に入らないくら
い、あたしの意識は混濁していた。

自分の意識ではないものが、自分の意識に無理矢理入り込んでく
る。入ってきた意識と自分の意識と一緒に知覚しなければいけない
せいで、自分の意識の知覚が疎かになる。

その絶妙なバランスが保てなかった。

五感すべて、第六感みたいなのも全部、それから記憶とか感情と
か全部が、とにかくあたしの中に入ってきて、感覚を感覚として処
理できないのだ。

あたしはその日、人生で初めて学校をさぼった。

皆勤賞を逃した代わりに、ルートという存在に対して不可逆的に
皆勤賞が確定したというわけだ。

あたしはルートのすべてを知ってる。

だからもちろん、この世界がルートの手によってやり直されたこ
とを知っているし、一度目の世界であたしとリズが死んでしまった

ことも知っている。無論、それでルートが悩んでいることも知っていた。

あたしは王子様にお礼がたくくて『願い』を叶えた。だから、やり直されたこの世界で、細やかな感謝を込めて、あたしはルートの手助けをしようと思った。

ルートが思い出せない『違和感』の正体を知っていたあたしは、どうすれば生きられるかを知っていた。

けれど、この世界の選択はルートに委ねた。

もしかしたら、あたしとリズの代わりに、誰かが犠牲になってしまつと推測できた。そんなことになってしまえば、ルートは自分を責めるだろうということも、無論推測できた。

でも、それは正しいことだとわかっていたから。

だって、それを乗り越えなければ、あたしたちは絶対に笑って生きていけないのだから。

結果として、あたしとリズは死なずに済んだ。

だというのに、ルートは現在進行形で苦悩している。

何のために時間を巻き戻したんだ！ と活を入れてやりたいけれど、不当にプライベートを覗いていることを知られるわけにはいかない。それとなく伝えようにも、あの鈍感さでは困難を極める。

今日も普通にできたかな……。変じゃなかったかな……

ルートは少し優しすぎるのだ。

それは、超能力まがいあたしの力を使わずとも、分かっていたこと。

そこまで清濁を併せて呑むようだ、あたしが介入することが不純に思えてしまう。何か助けようにも蛇足になってしまう。

でも、あたしはルートのことに関して、億劫がったりはしない。

少なくとも王子様で、そうでなくても命の恩人なんだから。

You and “You” (後書き)

【あとがき】

アリスが使っている『王子様』という表現は、あの白馬に乗って度々登場するアレではなくて、どちらかというと“幼い頃に助けてくれた運命の人”という意味合いでの表現が近いです。

女子校などではよく耳にしますね。あんな感じじゃなくて、吊り橋効果的なあれです。

最近はまだあまり聞きませんが。

き) **V i s i b l e b e c o m e I n v i s i b l e (前書**

【まえがき】

“可視か不可視かという議論は無意味である”

見えているのが正解なのか、見えないのが正解なのか。

事象の正当性を証明するのに、不要な感情を所有する人間では役不足なのです。

翌日。教室。

「今日は卒業式の予行演習お疲れ様でした。体育館、体育館倉庫、アイスリンクを使用する部活は、今日は卒業式の準備のため全面休止だそうです。では、さようなら」

担任の先生の声は、教頭に呼名の繰り返しを強要されたために掠れている。一度で成功させればいいのに、口ごたえするからだ。

担任が教室を後にすると、クラスメイトたちも続いて帰路に着く。最近あたしたち三年生は、受験生であることを理由に放課後の掃除を免除されている。代わりに、下級生たちが三年生の教室を掃除することになってるので、教室がゴミだらけになることはない。

「アリスちゃん、バイバイ!」「じゃあねーアリスさん」

「さ、さようならっ」

横に座っている人とその友達らしき人が、そう挨拶して去っていく。いつも部活で忙しくて放課後にクラスに残らないせいで、放課の挨拶は何だか新鮮だ。

今日は部活が無いので、勉強をするド真面目以外は家に帰って遊ぶのが世の常と言うものだった。あたしに挨拶をしたあの二人も、受験を控えてピリピリしている風では無かった。

あたしの場合にはノアの……。今日はやめておこうかな……。

リズは……。二年だから掃除か。今日は、アリスと帰りたいな

というわけで、あたしはルートと帰ることにしよう。

机の横にかけてある鞆を手に取って、極地と場所を間違えたと錯覚するほど温かそうな上着を着て、着て、また着て、そして席を立つ。手に持って帰るのも馬鹿らしいから、着るしかないのだ。

後ろを振り返って、新鮮味の全くない、そいつの様子を拝めば：

…。

「か、帰る？」

ん？ アリス、なんか怒ってる？

「別に怒ってないわ。ただ、既視感に立ち眩んだだけよ」

目を丸くしてしまうのは自然なこと。思考を完全に読まれると言うのは、形容しがたい不安な感覚になるのだ。あたしはその不安も感じられる。

テスト対策のために重くなった鞆を肩にかけなおして、出発を促す。

部活はないけれど勉強があるせいで、廊下に行く足取りはそれなりになる。勉強自体は憎悪するほど嫌いではないけれど、それは一人の時限定の話だ。あたしには有名な家庭教師がつけられていて、そいつが厳しいと言ったらない。

思わずため息が出てしまいそうなあたしとは裏腹に、ルートはあたしを遊びに誘うか否かでそわそわしている。

「ねえ」

あたしの方から遊びに誘ってあげようと立ち止まったはいいけれど、何だか見惚れてしまう。多分表現が変だけれど、言うなれば「実物はやっぱり違う」感じ？

こうして見ると、鞆を持って歩くルートを実際に見るのは久しぶりかもしれない。

「な、何かな」

輪郭と目元がリズムと似ていて、二人の間にある血の繋がりを強く

感じる。両親からそれぞれ受け継いだ綺麗な青と緑の目色を見てみると、何となくだけど左右の距離感が掴めなくて、吸い込まれそうになる。

今も短すぎるとは思わないけれど、もう少しだけ髪の毛に余裕があれば弄って遊べるのに、ルートはそうしようとはしない。伸ばせと言っても、あたしの求める長さのちょうど手前くらいで切ってしまうのだ。

持っているポテンシャルを隠蔽して、やりたいことがあっても他人優先。消したい過去の記憶と、消えなくなるような現況。

あたしはそんなルートの実情を知って、許せないでいる。

「今日は暇かしら？　　というか暇よね。ええ、暇だわ」

「ちよつとアリス。そんな勝手に」

幸せになる能力も資格も持っているのに、幸せになる選択をしない。能ある鷹が爪を隠すのとは異なる、諦観のような心情から。

人間は何かしら隠しているのだから、別に隠すことが悪いわけじゃない。諦めることで道が開けることもあるから、諦めることも悪くない。というか、ルートは悪くない。

「いいじゃない。久しぶりに遊びましょう？」

あたしが何するでもないけれど、隠蔽なんて能は鷹には必要ないと思うから。

x x x

外に出ると、真冬の乾いた冷気が肌を差すように刺激してきて少し痛い。両手で口を覆って吐息で温めようと試みるが、効果はほんの一瞬のもので、その後はただ指の間に湿り気が残るだけだった。

リスにマフラーをあげたせいで、最近のあたしの首回りは少しだけ寂しい。

あげたのが間違이었다んじゃなくて、金の力に縋るみたいなのが癪で虚勢を張って、家にあるマフラーに手を出さないことが確実に間違이었다。

手袋では足りないということを実感する。いつも待たせてごめんなさい、リス。

アリスが寒そうだ……。どうしよう……

「そんなに心配しなくても、あたしなら大丈夫よ。さ、行きましょ。また虚勢を張ってしまった。これに一体何の意味があるのだ。いや、意味はあった。

強がることで、あたしはあたしでいられるのだ。でも多分、そのあたしはあたしとは違うあたしだ。みんなのアリスであって、あたし個人としてのアリスではない。

まあ、そんなことはどうでもよくて、頭に雪が積もる前にあたしは歩き出す。あたしの読心術まがいの能力に目を丸くしていたルートも、おずおずと後をついてくる。

「ねえアリス。今日は僕の家に来るの？」

「ええ、そうよ」

ルートの推測に思うところがあって、振り返らずに答えるしかなかった。歩みを同調させられたらとうとう逃げ場を失ってしまう、と少し歩くスピードも上がる。

ずっとアリスの家で遊んでないなあ……。もしかしたら、家で何かあったのかな……。それとも嫌われてしまったのだろうか……

あたしとルートの記憶を辿ってみると、あたしの家でルートと遊んだのは、どうやら五年前が最後みたいだ。ルートの家とあたしの家で交互に遊んでいたという、さらに過去のイメージも遂次浮かんでくる。

こんなに早く家に帰っても両親はいないだろうけど、メイドがいる。お金持ちのシンボルであるメイドが、家には隠せないほどいる。そして、ルートはそれを知らない。それだけじゃなくて、あたしが裕福であることすらやんわりとしか知らない。

学校であたしの噂が色々たつていているけれど、ルートとリスだけは昔のあたしの印象が強くて、あまり噂をあてにしていなかったのだろう。

現在に至る経緯を考察すると、自然、身の置き所に困る。

あたしは「そういえば」と、分かりやすい話題を提示する。まさに逃げの一手。

「この前のバトン部の試合、あたしも見に行ったんだけど気付いた？」

「え、本当？」

精神的距離を正確に把握できるあたしは、逃げる時に失敗することとは無い。

人は逃げる時は普通、距離を置く。それは物理的にもそうだけど、やはり一番は精神的な間が必要になる。

物理的になら両眼で見ればほぼ正確な距離感を掴めるけど、精神的な距離は目に見えないので感じ取るしかない。でもそれは、幽霊とかと同じで認識の不可に個人差がある。

他人が考えていることは、他人には絶対に分からない。仮にわかったと思っても、それは推測の押し付け、エゴでしかない。つまり、人は誰しも『精神的盲目』だ。

盲目の人に非がないのと同じように、精神的盲目も咎めることはできない。だからこそ、人は他人の気持ちを考えて行動し、助け合うことを覚えたのだとあたしは思う。

でも、あたしは違った。

は、恥ずかしい……。試合には勝てたけれど、少し失敗してしまっただけだからなあ……。見られてないかなあ……。

「盛大に失敗してたわね」

あたしは精神的にも晴眼だった。振り返ったから、物理的にも見えるようになった。

見える相手は一人に限定されているけれど、絶対に仲違いをしない距離感を保つことができるのだ。目が見えていれば、人とぶつかることはないことと同じだ。

「やっぱり見られてた……」

ルートは両手で顔を覆ってしまった。他でもない、『羞恥』から。あたしは、あたし自身が選択したことを後悔するつもりはないけれど、どうしても考えてしまうことがある。

物理的に盲目でなければ、対象との距離を詰めて親しくなることができる。近いからこそそのリスクもあるけれど、近ければ静かな心の叫びを聞き取って助けてあげることまでできる。そうしているうちに、距離はゼロになって、それこそ「恋愛」に発展するかもしれない。

精神的に晴眼なら、自分と相手の心の距離を知ることができる。だから当然、ぶつかることは無い。もちろん、近づいて距離をゼロにすることもできる。

でも、それってどうなの？

普通見えるはずのないものを見て、利用する。それって至極傲慢なことじゃないだろうか。あたしは、全く他人のことを ルートのことを考えていないじゃないか。

「で、でも！　すごく綺麗だったわ！　可愛らしいと思ったわよ！」

ああ、ほら。信憑性が皆無だ。

「あ、ありがとうアリス」

アリスは優しいなあ……

ルートは今、あたしのことを信じた。それはあたしが距離を調節

しているために、ルートはあたしとの距離感に悩む必要がないからだ。

本当は知ってはいけない事実を、あたしは知っている。

他人のことを慮る能が人間には不可欠だから、神様は人間を精神的に盲目にしたんだと思う。

あたしにその能力が全くないわけではないわけではないけれど、もしかしたらルートに対しては皆無かもしれない。ただ確実に言えるのは、ルートの心を読む能力はこれ以降絶対に向上しない、ということ。

「ほら、さっさと行くわよ。このままじゃ凍え死ぬわ」
それでもよかった。

王子様が盲目なら、あたしは目の代わりになって、肩だつて貸そう。それは、見えるから助けてあげるといふ以前の問題だと思っから。

そんな慈悲深い意志とは裏腹に、行先はルートの家だった。

き) Visible become Invisible (後書)

【あとがき】

見えない恐怖よりも、見える恐怖の方が強大であるという話があります。

見えなければ、恐怖はすべて自分の想像に委託されることになります。その代わりに、精神を落ち着かせれば怖いものなどなくなってしまう。

見えるならば、しっかりと考えて憶測して、等身大の恐怖を感じるようになります。なくなることはありません。最小値を比べただけ、というお話になります。

もう少し考えてみてください。

見える恐怖を感じることが出来ない人は、見えない恐怖しか語れない。

結局は、恐怖も人それぞれです。

W i n g o f K n o w i n g (前書き)

【まえがき】

“何かを知りたければ、行動せよ”

また、行動することは何かを知ること、でもあります。

「あんたの家、学校から遠すぎるわよね」

「そういうアリスの家も、同じくらい遠いと思うけど」

いつもの別れ道だけど、今日は曲がる方向も気分もいつもとは異なる。

この道をルートと通った過去を掘り返してみると、無駄に大きい新品の制服の袖に腕を通してぎこちなく歩く自分とルートの姿があった。リズはまだエレメンタリーか。

とは言っても、あたしたちもまだ小学生気分が抜け切れていなかったから、同じようなものだけど。

よちよち歩きするあどけない二人の影は、深々と降る雪の光に照らされ、像を結ぶ。イメージが想定外の鮮明さだったせいで、ノスタルジアに陥る。

「ん？ アリス大丈夫？ 目が潤んでるよ？」

「き、気のせいよつ。というか、普通は気付いても言わないものよ」
毎日新しいことに挑戦して色々なことを知って、笑って、泣いて
回顧すると無性に今が哀しくて、変えられない悲劇に為す術もなくて。でも、楽しかった思い出は確かに心にあつて。

この道をルートと通ることで、空想の世界で過去と現在を行き来できる。それだけで、懐古の情に駆られて泣きそうになる。

これから遊びに赴くと言うのに泣いてはいられないし、涙の引き金の緩さがルートに露呈したら、恥ずかしくていられない。多分ルートも恥ずかしいだろうから、おまけにその恥ずかしさもあたしに伝播してしまって、逃げ道がなくなってしまうに違いない。

降雪の残業に勤しむ曇天を仰いで瞳の水分を飛ばそうとすると、

大気との接触面積が増加した首元が一気に冷え込む。同時に、顔面全域に氷点下の白綿が被さって思わず、「にゃっ!」と変なことを叫んでしまう。

でも、泣いているところを見られるくらいなら……と、それくらいは我慢できた。

「ふう……。暫くは止みそうにないわね、雪」

「そうだね……」

少しコントラストはあっても、どこまでもモノトーンである気さえしてくる。少なくとも、今、この国の空はそうだと思う。空の色を心情に例えるなら、多分『憂い』。

「アリス……。泣いてるの……?」

「え……。? ノ、ノア!？」

パレットに空の色を借りて、隅から隅まで心を染め上げてしまったみたいな表情をしている。

部屋に飾ってあるだけだと思っていた白い制服は、どうやらちゃんと機能していたようだ。雪の郷愁色と制服の色が被っているせいで、すれ違う距離になるまで気がつかなかった。

すべてを打ち消すように映える、寝癖のついた黒髪の実在感はずまじかった。

黒髪だ……。いいなあ……

場を和ますようなルートの思いも、あたし以外に伝わることなどありはしない。

「ねえ……。アリス、どうして泣いてるの?」

物理的距離そのままに、虫の鳴くような小さな声でまた訴えてくる。ルートはあたしよりも距離があるので聞こえていないようだ。

「泣いてないわ。それより、学校はどうしたの?」

「っ！」

ノアの気持ちを汲んで聞いてはみたけれど、露骨に塩っぱい顔をされた。

いつもの愛らしさの欠片もない苦い表情。その表情は何？ あたしが泣いていたせい？ それとも学校をさぼったことを指摘されたから？ どちらにせよ心証を害してしまったことに違いはないか。

ルートの家で遊ぶのを早めに切り上げて、その帰りにノアの家に寄って慰めてあげよう。

ノアの望む方法で。

「ノア。あたし今日はこの人と遊ぶから」

「もう……………嫌い！ アリスなんて大嫌い！ ノアのこと全然考えてない！ 明後日だって……………なのに。……………もう知らない！！！」

こんなに大きい声出せたんだとか、あたし嫌われたの？ とか、優先度の低そうな事例ばかりが浮上している間に、ノアは走り去ってしまった。これは確実に距離を置かれたのではないか？

あたしの運動神経とノアの運動神経を考えると、走れば追いつくということとは明白だけど、タイミングを考えよう。

とりあえず後で謝ろうとは思うけど、今日ノアの家を訪れて、入り口を開けてもらえるかどうか不安だ。でも、行かなければならぬのは確かだろう。

ああもどかしい。どうすればいいのだろう。

ああ、そうか。

これが、適度な距離感がわからない、というやつか。

「な、なんかごめん……………」

「なんであなたが謝るのよ」

ルートが た、確かに と思うと同時に、表情も相応のものになる。

一定の距離感を保てることに安堵を覚える自分に嫌気がさす。
「でも、追わなくていいの？ 怒ってたよ、ええと……ノアさん？」
今距離を詰めたら衝突してしまう、気がする。そして一層距離を置かれてしまう、気がする。楽園までの道が決壊してしまう、気がする。

どれもこれも、空気を読んだ憶測でしかない。当然だ。
人間が読めるのはせいぜい空気くらいの話で、他人の思考が読めるなんて、天と地がひっくり返ってもあり得ない。

でも、だからこそ、人は考える。だったわね。

今、雪が降っていれば頭を冷やせただろうけど、視界に白い粒は無かった。

「今はあなたの家にお邪魔するわ。その後、話をしに行くから安心して」

「うん。わかった」

停止していた足の回転を再開して、目的地へと進む。何度も訪れているから、足の運びに迷いはない。

止んでしまった雪とは違って、ノアへの心配は止まずに降り積もるけれど、雪ほどの白さはそこにはない気がした。

「明後日って……十六日？ 十六日ってあの子の誕生日よね。……」

まさか。……いや、ないわね流石に」

「何か言った？」

いつの間にか並行して歩いていたルートが、怪訝そうに顔を覗き込んでくる。

「言っていない」と答えても、「言った」と答えても、ルートとの距離は大きくは変わらないと思う。変わってもすぐに一定値に戻る、いや、戻せるだろうし。

だから、少し考えてみた。

「一緒にあの子の誕生日プレゼントを考えましょう、って話よ」
綻んだ顔を見ると、一定が崩れそうで少し震えた。

【あとがき】

解決に向かっていているのか、それとも迷宮入りしようとしているのか。

その狭間を彷徨っているのは、ルートだけではないのです。

アリスの『ルート全知能力』について少し補足です。

五感、第六感、思考、その他、カバー範囲はすべてです。例外として「ルートの背後」や「ルートの体の状態」などを知ることが出来ません。後者は感覚から推測することは可能。

アリスの任意で知りたいことを知ることが出来る。逆に、記憶操作や知覚操作などのそれ以外のことはできない。あくまでも『知るため』の能力です。

本文に書いていること以外にも、アリスは事細かに聞いております。真面目な話をしている時にわずかなりとも『和食』のことを考えていたりもしますが、さすがにそれを出すわけにもいかないのです、本文の様に整頓させていただいております。

その他、お気づきの点がございましたらメッセージください。

次回はルートの家ですかね。

Lead also Reached (前書き)

【まえがき】

“導かれて、そして届いて”

何をすればいいか、わからなくても。

高校生になってから、小学生の頃の友達の家に行くと不思議な感じがします。

毎日のように遊んでいて、それが普通だったはずなのに、今は、とても変な感じがしてしまうんです。その友達に彼女や彼氏ができていれば、尚更です。

郷愁を強く感じてしまえば、もしかしたら破局を願ってしまうかもしれませんね。

女の子の友達に彼女ができていたら、私は応援しますね。

その中で唯一変わらない存在は親などでしょうかね。
いい意味で変わりませんよね、彼らは。

今回は少し長めです。

では、ノスタルジックに浸れる本編をどうぞ。

「プレゼント……ですか？」

「そうよ」

ルートの家に着いてから、父から頼まれたものを手土産としてご両親に挨拶して、とりあえずはルートの部屋に腰を落ち着けた。

直前に予定を組んでいたプレゼントの話を開いたところまでは良かったが、それから、一言で言うなら「論外」だった。

ルートに何を尋ねても、「わからない」「うーん、どうだろ」を繰り返すだけで、一向に話は進まなかったのだ。普段の生活ぶりだけじゃなく、あたしの能力を通しても知っていたつもりだったけれど、ここまでとは。

「ルートは著しい乙女力の欠如が見られるわ。だからリズ、あなたに手伝って欲しいのよ」

「べ、別に、そんなもの必要ないじゃない……か」

暖簾を押すようなやり取りをし続けていると、ルートの妹リズが帰宅したのだった。

あたしが持つてきたマカロンを居間で発見したらしく、リズはそれをここ ルートの部屋まで持つてきて、「お菓子持つてきたよー」と体が良かった。

期待をちらつかせておいて言うのもなんだが、『乙女力』について考えてみると、この子も期待できそうになかった。

ライムグリーン色のそれを一つ頬張りながら、リズは楽しそうである。

「ふふふ……。なるほどなるほど。それでルーに代わって、私が選ばれたわけですね？ いいですよー！ 他でもないアリスお姉ちゃ

んの頼みだもん、断る理由はないよー！」

敬語が抜けて次第に言葉が砕けてくるが、エレメンタリー時代はそうしていたからか、あたしとしてもあまり気にはならない。

もしかしたら、あたし自身もしっくり来ているのかもしれない。

久方ぶりの呼称に懐かしさを覚える暇もなく、若干『乙女力』が欠如したりズが問う。

「それで、プレゼントは誰に渡すの？」

「友達

意外とすぐに出たその答えが、何となく腑に落ちなくて、セリフの歯切れが悪くなる。

引っかかっているのは、数十分前のアレのせいでもまず間違いはないだろう。

傷つけてしまった自覚はそこはかとなく存在しているし、謝りたいとも思っているのも事実だ。

だけど、そんなことを考えていては、誕生日プレゼントにまで罪悪感の影響が出そうだとも思うのだ。誕生日ケーキに『ごめんなさい』なんて言葉が添えられていたら、素直に喜べないに決まっている。

だから、今、少しでも報いようというのもあった。

例え目につかないところであっても、巡り巡って伝わればいいな、と思う……的な？

友達以上……恋人未満？　みたいな感じかしら？」

「お姉ちゃん。それ、女？」

年下、後輩、とは言っても、急激にトーンを落とされると、一定の恐怖を感じる。

自分で自分を誤解しているのだと言い聞かせて、あたしは目の前で悍ましい眼力を発揮する女の子を宥める。

「女だけど、違うわよ。そういうのじゃないから」

「なら良かったあ！」

『そういうのじゃないから』。そう言い切ってしまった瞬間、あたしは間違ったことをしているような感覚にとらわれた。まるで、好きな子を前にして強がって「嫌いだ」と言ってしまったみたいなの、そんな後悔にも似ている感覚。準備していた言葉じゃないにしろ、悪いことしたなあと思いはした。

でも、それが後悔と質を異にしているというのは、自分が一番知っているものだったりする。

「ねえねえ。それってもしかして、誕生日プレゼントだったりするの？」

「え、ええそうよ。言っていなかったわね、そう言えば。二月十六日だから、明後日なのよ」

「なんだー。誕生日プレゼントなら、そりゃあげるよね。ホントに良かったあ……」

え……。もしかして、僕の扱いもそんな……

話に混ざれずにいるルートの顔が次第に青くなる。

あたしはリスへの意見を、ルートを慰めるのに使っても良かった。「そんなことはないと思うわよ。誕生日なんて一年に一度しかないのだから、結構特別なものじゃない？ あなたも誕生日の時、いつもとテンションが違っていたりしないかしら」

「それもそうだけど……。やっぱり、好きだったりする人とそうじゃない人じゃ、違う気もする……。かも。アリスお姉ちゃんとかルークくらい好きな人と、それこそ、めんどくさくてあんまり好きじゃないクラスメイトとは意味が違うと思うの」

動揺で右に左に忙しなかったルートの目が、一先ず落ち着いて正面を捉えてくれる。

床のテーブルの足元に並べられたクッションに座っているルートからだ、真正面のあたしは自然と視界に入る。別段意識する必要

もないので、メンタルに難のあるルートも、さしたる気兼ねをせず
に済む。

足をバタバタさせながらルートのベッドに寝転がるあの妹が視界
に入っていたならばまた、別の意味で動揺を隠せなかっただろうけ
ど。

「ありがとリス。でも、嫌いだからってぞんざいに扱ってはダメよ。
そういうのは適当にあしらうくらいに……じゃなくて、プレゼント
の話よ」

思い出して、半ば強制的に話題を戻す。

話題の収束に納得したのか、リスはすぐに順応して話を掘り下げ
ていく。

「その子の好きな物、じゃダメなのかなあ？」

確かに、それなら、喜んで欲しいという自分の気持ちを強く伝え
ることが出来るし、相手の気持ちを深く知る必要はない。

ルートなら和食、リスならイカ墨、という感じだろうか。食べ物
でなければ、ルートは確か登山と天体観測で、リスは温泉だったか
しら。

では、ノアは？

ああ。そつだ。

あたしはあの子の好きな物が分からない。

ルートやリスよりも長い付き合いがあつて、ほとんど毎日顔を合
わせてもいて、つまらないあたしの愚痴をいつも聞いてくれて、あ
たしのことを喜ばせようとしてくれて、親しみを込めて『アリス』
と呼んでくれる数少ない人間の一人で、『冗談でも『アリスが好き』
なんて言ってくれて、あたしもあの子のことは好きで、すべてから
守ろうと決めていて。

それなのに、あたしはあの子の好みすらわからない。

どれだけ勝手なのだ。

『ノアのことなら誰よりも知っている』だなんてことをぬかしておいて、好きな物一つわからないなんて、勝手に勝ち越して詐欺師だ。比較するつもりはないけれど、あの子の母親なら知っているのかもしれないという事実には、あたしは心底腹が立つ。そしてまた、ズルい自分が嫌になってくる。

どうしてもっとあの子のことを見ていてあげられなかったのか、と。

それすらも完全に見下ろした言い口であるということは自覚している。

でも、もし、あたし以外にあの子を見てくれる人がいなかったら。そう思うと、あたしはどうしても自責して考えを改めることが出来ない。

あたしがルートのことを知ろうとしたように、その時あたしが感じていたのと同じように、ノアのことを思ってくれる人がいないなんてことになれば、あたしは気が動転しておかしくなってしまうだろう。

酷い目にあつた上に、誰の気にも留めてもらえないなんて、悲しすぎる、可哀想すぎる。それではまるで、永遠に続く冬の中に一人、薄着で震えているようなものではないか。

至極傲慢な同情と揶揄されようと、あたしは一向に構わないとさえも思える。あの子が受けた迫害に比べれば、そんなものは一ミリの価値すらもない塵みたいなものだ。

そう。

だから、あたしはあの子にならでできる限りのことをしてあげたいし、行きつく先は守ってあげたい。

けれど、なんだ。

なんなんだ、あたしは。

アリスが熟考に入った……。もしかして、わからないのかな…

…

そうよ。わからないのよ。

勝手に家に上がり込んで、保護者面して、守るなんて体の良い表看板を掲げて、友達になつた時だってほとんどあたしの圧力だったし、あげている服だって本当に捨てる直前のものだし、勝手に『あたしの楽園』にまでしている。

結局、あたしの方が面倒を見てもらっていた。

とんだ愚か者だ。

あたしが見ていたのはノアではなくて『楽園』。

何一つ相手のことなんか見えてなかった。

それなのに、学校生活を楽しくするために友達を作るよう勧めたり、図画工作という特技を褒めてあげたり……そうだ、ルートの話をしたりもした。

だから、さっきのすれ違いも生まれてしまったのだ。

こんな自分勝手にぞんざいな人間からプレゼントを貰っても、嬉しいはずなんてない。もはや、あげる資格などないのかもしれない。そうになると、考え無しに相談を持ち掛けてしまった二人にも謝罪をしなくてはならない。

ノアには贖罪をしなければならぬ。

「あの……、悪いだけ」

「ああー！！」

これ以上事が大きくならないように、自己満足の謝罪をしようとするが、リズムの激しい閃きに遮られてしまう。

絶叫の後、ベッドから急に立ち上がったかと思えば、「そうだとさうだー」と眩きながら部屋を出て行ってしまった。

「……………」

「……………」

取り残されてしまったあたしとルートの視線が自然とぶつかって

しまう。けれど、ルートがすぐに逸らそうとしたせいで、流れるにあたしも逸らさざるを得なくなる。

逸らした先にあった時計の針は、本来なら部活中である時刻を示しており、いつもとは違う特別な時間であることを改めて実感する。同時に、どれだけ長い時間悩んでいたのかという溜息と、こうしている今もノアが泣いているかもしれないという懺悔が、じわりじわり確実に身に染みてきて、また少し胸がズキリと痛んだ。

目、逸らしちゃったよ！ どうしよう！ アリスも目を逸らしたせいで、初々しいカップルみたいになってる！

「ふふふっ。何よそれ」

「うえ！？ 僕なんか言ってた！？」

ええ。心の中で言っていたわよ。

少なくとも、あたしの良くない逡巡が一時停止するくらいのこと
は。

しかし、場違いな天然が生んだその白い光でさえ、あたしの胸の痛みを鎮めることは出来なかった。

そしてまた、あたしは黒くて暗い、闇のような深い思考の沼に溺れていく。光の届かない、底無しの沼に。

ずぶずぶと沈み始めた、その時だった。

「アリスお姉ちゃん！ これあげる！」

勢いよく開かれたドアが壁にぶつかって止まる時に発生した、爆発的な音量が耳を劈く。擬音にするならきつと、爆弾のそれと同じ。破竹の勢いそのままに、意気揚々としたメッセージが叫ばれている。澄んでいてよく通る声質も助けて、最初から最後まで、しっかりと逃すことなく耳に入って、頭に刻まれていく。「びっくりした……」と仰天している人以外には。

豪快に舞い戻ったリズの言葉によれば、どうやらあたしに何かをくれるよう。

「な、なにかしら？」

「これです！ どうぞ！」

そんな笑顔で手渡されたら、それがいくら粗悪な品であっても受け取ってしまっただろう。

そう思えるほどのオーラのようなものを、リズは持っている。

「マフラーね」

白、灰、黒、というモノトーンの合間で度々主張するパステルの水色がアクセントになっていて、作者のオリジナリティが感じられる。施されているガーター編みは、お店で売られているものと遜色なく、まるでプロの仕事と言わんばかりの丁寧さ。フリンジを三つ編みするように編んでみたり、端の方にあたしの名前を入れてみたりと、プロでは出せない『気持ち』的な面も持ち合わせている。そう。

言うなればそれは『大切な人にあげるべき一品』。

そのくらいのクオリティはあると思う。

「これ、本当に貰っていいのかしら」

あたしなんかにはもつたいない、と思う。

それは、父親からマフラーを貰った時に抱いた感情とは、きっと百八十度違った。いや、五百四十度かもしれない。

「いいのいいの！ というか貰ってくれないと困る。泣いちゃうかも」

それもそうか。

貰う資格云々以前に、与える方の気持ちも考えなければいけないのか。

「でも、どうして突然？ あたしの誕生日は春よ？」

「この間、これ このマフラー貰ったから、お返し！」

リズの右手には、あたしがあげたあのマフラーがあった。

そんな高い物じゃないのに、かえって悪いことをしたかしら。

「あの時は学校帰りで言えなかったから、今言うね！ マフラーありがとね、アリスお姉ちゃん！ だから、これはそのお返しだよ！」
思い違いだったようだ。

あたしはあの時、リズに寒い思いをして欲しくない一心でマフラーを与えた。別に何の見返りも求めてはいなかった。

リズが鋭い子だからという補正は幾らかあるかもしれないけど、でもそれはちゃんと伝わっていたのだ。

昔のことを思い出した。

思いは伝わる。

あたしは元来、マイナス思考を基盤にして思考するタイプではなかったはずだ。

もしかしたらルートの思考の全てを把握するうちに、伝染してしまったのかもしれない。

そうだ。

あたしは、ルートじゃなくて、あたしだ。

「とても嬉しいわ」

プレゼントを貰えれば嬉しい。大事な人の気持ちが込められたものなら、何を貰ったって嬉しいのだ。

それはあげる人の気持ちだが、ちゃんと伝わるものであるから。

途中で途切れたりせず真っ直ぐに、相手のことを思っていれば必ずその思いは届く。『喜んでほしい』という気持ちが届けば、『喜んで』くれるのだ。

ならあたしは、『ノアはあたしのことを必要としているだろうか？』ではなく、『あたしがノアを必要としている』と強く想いたい。そして、伝えたい。

気付かせてくれたリズに、感謝よ届け。

「ありがとね、リズ」

「えへへっ、どういたしましてー！ ……………あ、そうそう。実は

もう一つ理由があるの」

何となく蛇足な気がするけれど、それを知っているのか知らないのか、「二人は知らないと思うけど……」と話は続く。

「どこかの国では今日の日をバレンタインって言っらしいの。それでその日、好きな人にものをあげると永遠の恋が成就するらしいの！ お墓まで同じになるって話なの！ すごくロマンチックだよね！」

「リズ……」 「あんなねえ……」

始まりは異音同義。

「「愛が重い……」」

締めは異口同音だった。

気持ちの整理が一段落つく頃には、時間はもう夕食時になっていた。

リズは夕食の手伝いに駆り出されて、部屋にはあたしとルートの二人だけとなっていた。

盛り上げ役がいなくなってしまうたせいで、また降り出した雪が強風に流されて窓を叩く、空しく不穏な自然音だけが部屋に響いていた。

プレゼントは自分の気持ちの籠ったものを一人で考えるとして、さすがに夕食では邪魔になるだろうし、ノアの家にも寄るとなると遅くなってしまつから、そろそろお暇しようとしていたところだったのに。

今日は楽しかった。けれど、本当は遊んでいる場合じゃないんだよな。もう少しで受験になるんだから、勉強以前に進路を決めなくちゃいけないんだよ

小さく溜息を一つ。

その溜息はあたしでなくともわかるだろう。

僕のしたいことをすればいいと言われた。アリスが進学を考えているアカデミーに行くのもいいし、もちろん国内のアカデミーに通うのもいいと言われた。将来の夢なんて大層なものは僕にはないから、流れで国内に進学するのも悪くはない

以前、天文学を勉強してみたいと言っていたのを、あたしは覚えている。

天文学レベルになると学者になる道以外には考えられないから、当然のことながら、進学先のレベルはプロフェッショナルに行けるくらいは必要になる。

そうすると前者、あたしと同じアカデミーへの進学が妥当に感じる。

これはあたしの推測ではなくて、ルートの潜在意識に近いかもしれない。

やり直しなんてできない、一度きりの人生なんだ……

誰もが納得する理論だと思ったけれど、恐ろしく説得力に欠けるとも思った。

ルートは『何も始まっていないあの時に戻して』と願って、その通りの時間 『願い』を叶えられるようになる直前まで人生を遡行した。

つまり、『願い』はまだ叶っていない状態だ。

ルートは再びあの夢を見てその事実を知っている。だから、「やり直しなんてできない」は嘘なのだ。

リセットできるならどちらの道も進んで試してみても、後から取捨選択することも可能なのだ。

でも、あたしはそれを良しとはしない。それはルートと同じ。

世間では『世渡り上手』と言うところを『狡猾』と言い換えてしまっから。

まだ世の厳しさを知らないからなのかもしれない。でも、あたしもルートも間違ったことは言っていないと確言することだってできると思うのだ。

純粹だった子供が闇を知って、手に入れるのは『世渡り上手』になるための処世術だったりする。大人はそれだけを見て物事や利益を評価するけれど、あたしたち子供には手に入れた代わりに失ったものも見る事が出来るのだ。

社会的には無駄で終わってしまうところを、あたしたちは何度も何度も掘り返し、心に反芻して、気の済むまで吟味する。大人たちが悩む必要のない、『新しさ』とか『これから』について、あたしたちは答えを出さなければいけないから。

ルートの苦悩が続いているのは、その吟味の時間が延長されているからだと思う。

社会にとってみればきつと、「あたしとリズが死んだ」という事実は無駄になってしまっ。悲しいけれど、確かにあたしもリズも生きていくから、ルートが話を捏造しているだけと言いつ聞かされれば、それも全うなことで否定などできはしない。もし、あたしのようにルートのことを知ることができれば、話は別かもしれないけれど、そういう少数派はすぐに多数派に飲み込まれて消えてしまっだろう。

鈍感なルートであっても、そのことは知っている。

だけど、無駄とわかっていても、ルートは考えることをやめない。いや、ルートにとっては無駄ではないのか。

だとするならば、その苦悩を晴らすにはどうすればいいのだろうか。

あたしとリズの命、罪の無い二十二人の命、そのどちらかを選ばなくてはいけない時、もしくはどちらかを選んできた時、どうすればいいのか。命題を課された本人は、一体どういう心持ちで生きればいいのか、もしくは生きていてはいけないのか。

どちらにせよ、自分の進路で手一杯のルートが抱えるには大きすぎるのだ。

「ちょっと、もう。帰ろうって時に溜息なんてつかないでくれるかしら」

「う、ごめん」

病気なら薬を与えればいいし、欲しいものがあるのならお金を貯めて買えばいいのだけれど、明確な対処法が分からない問題を抱えてしまっているのだから、溜息をつきたくなるのも理解できた。

でも、あたしはあたしらしくあるために、毒を吐くようにルートを賣めてやる。

いつもあるものが無いと、違和感を感じてしまうだろうだから。

「なに。また進路？」

「ま、まあ、ね……」

ものぐさに尋ねるけど、あたしも本心では悩んでいるのだ。

勝手に進学先を決められて、友達まで制限されて、最近では許婚とか意味不明なものまで出てくる始末。勝手に段取りを済ませてくれるのは嬉しいけれど、あたしに選択の余地などない。

確かにそれは、迷う必要が無いと言う意味で言えば、未来を見据えていて素晴らしいことなのかもしれない。

でも、本当の意味で、あたしはあたしにはなれない気がするのだ。

自分のやりたいことを 叶えたい願いを叶えるために、今、何

が必要なのか。ただの定期テストとは質を異にする、これから決めるといふ大切なことだから、迷ってしまうのだ。

大切な問題の答えと言うのは、複雑に入り組んでいて何度も振り出しに戻されてしまう危険さえ含んだ超難度の人生ゲームみたいにクリアして正解を出すことが難しい。

だからこそ、正解した時の喜びが大きくなるのだ。

では、進むルートを決められている場合はどうだろうか。

『そっちに進めば大金が必ず手に入る』とか『ここで結婚しておけば後半戦で役に立つ』とか、一度クリアしてしまった人間の攻略法を、同じように適用させて進む人生ゲームは、本当に楽しいだろうか。

迷いの果てに自分でルートを選択して進もうとするルートやノアの姿を見て、その隣で指示通り悠々自適に流れていくあたしは一体何を思うのだろうか。

「あなたなら賢いんだから、外のアカデミーにも行けるでしょう？」

「でも学費が高いんだよ。お母さんたちに迷惑をかけたくないし……」

あたしの立場からでは、そこに関して何を言っても説得力を持たせることはできない。

けれど、何となく、あの両親ならルートの言うことを真つ向から拒否したりはしないと思う。自分たちが苦しくなったとしても、ルートとリズには幸せになってほしいと願っていると思うのだ。

「ご両親は好きにしろって言うていたんでしょ？　なら、好きにしないさいよ……とか言うから迷うのよね……」

「うめん……」

「いや、別にあなたは何も悪くないのよ」
そう。

ルート、あなたは悪くない。いや、もう誰も悪くなんてない。

誰かに責任を転嫁する必要など全くない。もし必要になったのなら、悪いのは『決められないでいる優柔不断な自分の心』とでもしておけば良い所。

それだけはわかってほしくて助言しているつもりが、「でも……」と打ち消される。

「アリスの家はすごくお金持ちだから、素直に羨ましいと思う。だけど、その代わりに門限とか家のルールとか、何か制限みたいなものがあると思うんだ。アリスは顔に出さないし、家のこともあまり口にしない。何となくだけど、それが逆に引つかかって……」

ルートが悩んでいることにあたしという無駄なものが含まれているのかと思うと、こちらでも少し悩ましい。

仮にも王子様なのだから、しがらみなどなく軽い心でいて欲しい。「もしかしたら何か、嫌なことが、あったり、するんじゃないかな、って……。そしたら、僕の悩んでいることみたいなの、どうでもいいことは、アリスを……。その……。傷つけているんじゃないかって……」

知っているわよ。そのくらい。

あたしはあなたの全てを知っているのだから。

だからお願い。

お願いだから。

自分を責めないで。

「そうね。あたしの家はエレメンタリーの頃よりずっと裕福になったし、友達になっていいかどうかでも許可が必要になったし、進学先も最善を選択させられたし、最近では許婚なんかも登場してるわ」

何もしていないでいるあたしの生き方なんか、褒められたものじゃない。

「でも、しょうがないのよ。それがあたしの人生にとって一番なんだから。一度正解を見つけた先輩　親が言うのだから、それは不正解じゃないのよ」

だから正解。
それが……、

「それは違うよー!」

「え?」

それが、正解でないのなら何が正解だと言うの?

人生ゲームをクリアするためには攻略法が必要なのだ。創造主になどなれはしないあたしは、一度クリアした人にそれを聞くしかないのだ。

でも、それも違うと言うのか。

「アリスは本当にそれが正解だと思っているの?」

「ええ」と事務的に頷くと、「本当に?」と聞いてくる。「本当よ」と、また頷く時、ルートと目を合わせられなかった。「本当に本当?」と問いを重ねるルートに、あたしは何も答えることが出来なくなる。

「結婚相手が好きじゃない人でもいいの? 大好きな親友と一生会えなくなってもいいの? 全てを失っても、いいの……?」

いつもどこか暗くて冷たい雰囲気醸しているルートの声が、今日はなぜか、鈍い反射光を放つ槍のように激しく熱く、あたしの心を貫いていく。もしくは、母の指が髪を梳いていくように優しく琴線を鳴らし、呂律りよりつを合わせていくようだ。

女々しくてか弱い震え声も、接近すれば一定の切迫感があった。妙な説得力の訳は、この距離のせいかもしれない。ルートの心の中が冷たいからか。或いは、お互いに一度目の世界を知っているせいだ。

衝突を恐れるあたしが、厭わずにルートの心が接近することを許してしまったから、だろうか。だろうか。

「ねえアリス」

「な、なによ……っていうか、近いわよっ」

目に見える距離はそこまで変わっていない。

でも、盲目の代償は確かにここにある。

今回は、疲弊のせいであたしの目も曇っている。
ぶつかるのが怖い。

「その人のこと、本当に……す、好きなの？」

「は？」

いきなり話題を『恋愛』的なものに変えられて戸惑う。

そして、この心の距離に目が眩む。

一定が壊れた反動でできた亀裂が、あたしの心の端から端まで、どこまでもどこまでも進んでいく。亀裂が一周すれば真ん中から両断されてしまいかもしれない。

なんとか繋ぎとめようと焦って、冷静な判断が出来なくなってくる。ルートもまた然り。

でも、ルートの目は真っ直ぐにあたしを捉えていた。

「その許婚の人、本当に好き？」

そうか。

これはルートの母親の言っていた、話に恋を取り入れると明るくなる、というやつね。

子供っぽくて正直ダサイと思っていただけけど、ここまで効果があるとは……。でも、無理くり明るくしなくてもいい気はする。

お互いにそういう話が苦手な場合は、オススメできないと注釈を入れておくべきだったわね、ルートのお母様。

「本当に……あ、あああ、愛、してる……の？」

「わからないわ」

それは、まだ幼いから理解できないと言う意味ではなくて、相手のことをよく知らないから。

顔を見たぐらいで話も全然していないのだから、好きかどうかの判断はできない。

外見だけでも、と言う話なら「普通」と答えるだろう。

「わからない人と結婚するの？ 普通は、何が好きなのかとか何を

されるのが好きなのかとか、お互いのことを何でも知っているようなものなんじゃないの？ それこそお互いに、す……好きじゃないという意味ないと思うし」

何でも知っているというのは、あたしとルートくらいの関係のこととは言わないのだろう。ただでさえ一方的な認知だし、それにお互いに好きではない。それはあたしが、能力でもって示そう。

では、何も知らない許婚はどうなのだ。

家のために好きじゃない人と結婚したって、嬉しいはずなんかない！

「わかってるわよ、そのくらい……。でもね、パパもママもそれで成功してきたの！」

あたしはその断片しか知らないけれど、昔聞いた話によれば公園の雑草を食べていたこともあつたらしかった。

そんな生活から、常にメイドが世話をしてくれるような生活に。

これを成功と言わずになんと言えるだろうか。

「だから！」

正解なの？

浮かんできた自問は、あたしの否定の自答を待っている。

「だから」

微笑んでいるルートを見て、あたしの勢いはさらに逶減していく。だけど、このまま止まるわけにもいかないのだ。

ここで止まってしまおうのなら、今までのあたしがすべて否定されてしまうことになるのだから。

「だから……」

ルートは包み込むような温かい笑顔であたしを見ているだけなのに。

それなのに、何を言い訳しようとしていたのかも忘れてしまう。
言葉にしなくても、あたしの思いが伝わる。

特殊能力や高等な読心技術が無くても、心と心でぶつかれば伝わる。

憎しみ合ってぶつかれば、その憎悪の念が通じるように、相手のためを思っ**て**ぶつかれば、その思いはきっと相手の心に届いてくれる。

「いいんだよ、間違っても。正解を決めるのはお母さんでもお父さんでもないんだ」

衝突することは間違いじゃない。

だから、怖がらなくてもいい。

その真っ直ぐな言葉に 常温より熱くて、熱よりは冷めている微妙なその温度に、あたしの中の冷たくて硬い氷の部分が、解かされていく。

そして残るのは、本当の気持ちと、塩辛い湿気だけ。

そうなんだよ。進んできた道が正しかったかどうか判断するのは自分なんだ。道を進む前は、それがどれだけ理想に近づけているか気にしてしまうから、その一步を踏み出すのが難しいんだ

あたしは、あたしの今の理想は。

王子様の心を、明るく照らしたい。

その冷めた胸に飛び込んで、温めてあげられたらと思う。

「あなたと……ノアと一緒に……、同じ学校に行きたい……！ あたしはあたしの好きな人と居たい……！」

あたしの中で温められた感情が、勝手に言葉になって飛び出していた。

王子様の心に一番近い所で発したそれは、真実の咽びとなって確

かに届いてくれた。

「アリス……」

まだまだ小さいけれど温かく優しい手が、肩に触れる。

感じきれず溢れ出してしまうほどのこの温もりを、今度はあの子に分けてあげよう。

「あたしは、ノアと友達でいたい……！」

温もりに紛れて、あたしの願いも溢れてしまった。

でも、ルートは微笑んで頷いてくれる。

言葉にしなくても、思想しごうにしなくても、伝わることだってある。その温度で、思い出す。

そうね。

将来を見据えるというのは、今ある現実にもがくことと真逆にあることかもしれない。

そう考えると、現実^{じゆんじつ}に苦痛を感じて悩むことの正しさが証明されていく気がする。

大切だから辛いのだ、と。辛いから大切なのだ、と。

目を逸らしていて気が付かないだけで、そのために必要な条件も、実現するのに十分な条件も、常にそこに存在しているのだ。

だからあたしは、あたしたちは理想に向かって邁進していきける。

今の理想はきつと、達成されたと思う。

だから次は、本当の理想に、あたしの願いにありつけるよう、

「ぐすつ」といったん鼻をすすって、あたしはまた、あたしになる。

「い、いつまで抱き付いているつもりよ」

「え！？ 今、絶対アリスの方から抱き付いてきたよね！？」

Lead also Reached (後書き)

【あとがき】

いつも悩んだりしない人が悩んでいた話でしたね。

今回のように、悩みというのは突然解決したりするものなんです

(話の中ではしてませんが)。

なので、諦めずに粘ることも大切ですよ。

死ぬまであきらめなかったあなたは、『ヤンデレ』の素質……と
いうかヤンデレですね、もうすでに。

私はヤンデレ好きですから、恋に悩んでいる方は歓迎です。

もっと悩ませちゃいますから。

次回、アリス編一幕最終回かもしれません。

Scourge or Penalty? (前書き)

【まえがき】

“ 刑罰は天罰よりも重い ”

人間という僻した者が創ったルールは、時に弱者を破滅に追い込む。

アリス編の第一幕はこれにて終了となります。

まだ続きますが、ここまで読んでくださった皆様ありがとうございます。います、と言いたい気分なので言っておきます。

「ここまで読んでくださった皆様ありがとうございます」

はい、コピペでした。

では、波乱と高揚のアリス編最終話、どうぞ。

Scourge or Penalty?

「ありがとうアリス、相談に乗ってくれて」

「お互いさまよ」

話が収束する頃には、結構な時間になっていて、迷惑ではないかと焦りを感じ始める。

何度も時計を確認する素振りを見せはするのだけれど、やはり鈍感な鈍感で伝わらず、刻まれる時間を数十秒単位で把握できたただけだった。

拭うほどの涙は流していないと思っていたけれど、ルートの制服を少し湿らせてしまったようで、胸部がわずかに黒っぽくなっている。

どうせすぐに乾いてくれるだろうし、気付かない方がなにかと楽だと思っていた、のだが。

「もしかして、アリス泣いてた？」
など。

「ちょっと濡れてるから」
など。

意外と女の子っぽいなあ。いいなあ、可愛くて……
など。

気に障ることを次々とぬかし始めたのだ。

考えてやっているのなら、手の内を知ることが出来るこちらに利

があるけれど、ルートの場合、ほとんど無意識で思ったことを口にしてしまっている。

思考が読めても、対策を練る時間がないのだ。

ならば、こちらでも何か困るようなことを仕掛けてやろうと、帰宅際に置き土産として何かしてやろうと、そう思った次第だ。

なぜならあたしは、ルートの苦手なものだって知っているのだから。

ノアには悪いけれど、少し待っていてもらおう。

「ちよつとあなた、乙女心つてもものが分からないのかしら？」

「え……？ あ……ご、ごめん！ もしかして僕、なんか悪いこと言ってた！？」

一睨み利かせて、高飛車にものを言えばこの通り。

さっきまでの頼もしさはどこへやら、今日の前にいるのは、か弱くて女々しいただの仲の良いクラスメイトだ。

さて、何をしようか。

話は散々したから、何か悪戯をして攻めようか。否、責めようか。

「女の子に泣いてるかどうかなんて、普通は確認しないものよ」

「そ、それを僕に言われても……って、ちよつと、何、する……、やめ……」

撥るのは効かないんだったわね。つまらないわね。

それじゃ、髪の毛で遊んで……、って遊ぶ余裕もないわね。

あ、そうだ。

「乙女心を知りたいとは思わない？」

これは少し意地が悪すぎる。

小さな子供に難しい数学の問題を解かせるようなものだろう。

あたしにもその問題はわからないから、解答を乞われても教えることはできない。

でも、何となく、今試せば他の問題が解けるようになる気がする。

本当にするつもりはなくても、現場を見られたら何をされるか知れたことではない。そう、多分、ただ事では済まされない、そういう恐ろしいことが起きると思う。

「大丈夫よ。別に何か大変なことが起きるわけでもないんだし」

そ、そうだけど！ と、見開かれた目でー付け加えるように心で、強く訴えてくる。

でも、あたしだって引き下がる気はない。それに、本当に接触させるつもりはないのだから。

あたしはルートのが好きだけど、それは友人としての話であつて、恋人とかそういう話ではないのだ。

もし仮に、あたしが許婚のことを心から愛せなかったとして、あたしはどういう心持ちでいればいいのか、絶対に戸惑うことになる。夫婦と言つ關係になることを望むほど愛することはできなくとも、表面上の付き合い　つまり友人のような關係を保つことは出来ると思う。

でも、相手は本気かもしれないのだ。

そうなれば、こういう状況だつてあり得てくる。

あたしはその時、きつと冷静でいられないだろう。

心の距離を把握できない者同士で、近づくと言つことは衝突の危険性を高めること。けれど、ぶつかつてもまた近づきたくなるような關係を見つけることもできる。どちらにしろ、一度は近づかなければならないのだ。

これはその免疫をつけるためのワクチンみたいなものなのだ。

実際に触れ合わなくとも、その直前までいけば何かしら関連した情緒は湧くと思う。それに、ルートが相手なら、観測できる感情も二通りある。

それらを凝縮していけば、恋愛抗体の足しくらいにはなるはずだ。「軽くよ。一度だけだから」

回数指定すると、急激に現実味が増幅する。それに乗じて、あたしにも奇妙な羞恥心が芽生え始める。

「ただ、本番はきつと、もっと、こう……、アレなのだと思うから。」

「んー！ むぐーっ！」

「あら、ごめんなさい」

空気の通り道が滞ってしまったので、読心して大声をあげようとは思っていないことを確認してから手を退けた。

あたしが馬乗り気味になっているせいで、ルートが影ってやけに小さく見える。

「はあ、はあ……。ど、どうしたの急に……」

この行為の大義を知られるわけにもいかないのです、とりあえず「乙女心」についての旨を重ねて伝えておく。

「僕ってそんなに鈍感かな……」

「ええ。かなり」

「それが迷惑になる時って、ある？」

「ええ。たまに」

「き、キ……。ス……。したら、治る、と思っ？」

「さあ。どうかしら」

これ以上泳がせると、心を弄んでいるようで、罪悪感を感じてしまふ。

あたしはとっておきの切り札を切って、とどめを刺す。

「間違っても、いいんでしょう？」

「っっ」

「言い返せない……！」

「乙女、心……」

そうぼやいたルートはあたしから目を逸らす。

すかさずルートの視覚を感じてみる。整理整頓のなされた殺風景な部屋を縦横無尽に駆け、最後はカレンダーに落ち着いた。……と思えば今度は時計の長針に。

でも、視界の隅には常に、あたしのぼやけた輪郭がくつついていた。それだけ近い位置にいるし、どうやら、目を離せないほどに動揺してもいるようだった。

友達に急にキスを要求されたら、当たり前か。

「……ふふふっ」

ほらね。

異常だとか、やり直しているから偽物だとか、自分を貶めるようなことを色々と言っているけれど、あなたって結構普通なのよ。

アリスのことは嫌いじゃないし、むしろ好きなくらいだけど、さすがに突然キスなんてできない……。いや、でも、アリスは僕のためを思って言うてくれたのかもしれないよね。ノアさんを待たせているって言うのに……。その気持ちを無視したら、僕はノアさんにも謝らなくちゃいけないのかな……

「そうよ。乙女心を知るためよ。特別な感情は必要ないわ。それに、何事も経験っていうじゃない？」

「それは、そう、だけど……」

ただの羞恥心がルートの決断に待ったをにかけている。

それが分かったのなら、することは一つ。

「王子様、あたしからしましょうか？」

「んふえ！？ ややや、大丈夫です！ 遠慮します！」

「じゃあ、あなたからしてくれるのね」

話を強制的に進めてしまえばいい。

ややこしい躊躇だけが展開を妨げているのなら、それを取り払ってしまっても、残るのは疚しさの無い純粋な気持ちだけなのだから。もしこれがダメなら、期待薄だけれど、色気で誘惑するのもありだと思う。

「僕、 “ はじめて ” 、なんだけど……」

「あら、奇遇ね。あたしもよ」

初めては出来ればリズムとがいいのよね。
そんなことはわかってるわ。

あたしだって、初めては飛び切り好きな人とするのがいいもの。
それこそ、ぽつと出の許婚なんかじゃなくて、気心知れた人とする
とても心温まるようなのを。

ルートがダメという意味ではなくてね。

「ね、ねえアリス。本気なの……？」

逸らされていた目が向き直ったことで急に合って、あたしは内心
では臆してしまう。観念しなくてはいけないのは、あたしも同じな
のか。

馬乗り状態である今、自分の立ち位置を考えてみれば、その距離
は異常なほどに近かった。

衝突するならもう、していてもおかしくはない。

でも、していない。

そして今、心にあるのは、衝突を危惧する不安や恐怖ではなくて、
これから起ころうとしている物理的接触に対する高揚と、一抹の羞
恥だけだった。

「け、結構本気よ」

瞳だけでなく顔も向き直って、一段と距離が縮まる。

あたしは話を持ち掛けた割には、ルートの本気度に気を吞まれて
しまって、少しだけ態度が小さくなってしまふ。おかげで、「結構」
なんていらぬ修飾をしたりしてしまふ。

そんな臆病者に比べて、ルートの方は落ち着きを取り戻し始めて
いる。

決めるところで決めてくれる、それがルートなのかもしれない。

「そ、そうなんだ」

うつわぁー……。本当に本気みたいだ……。僕、本当にキスす
るの……？ しかもアリスと？ 明日からどんな顔をして学校に行
けば……

学校、と言う単語が不要な憂慮を導いてしまう。

それは、あたしにも非があったと思う。

言われた通りのことだけをやってきた報いというのは、こういう大切な時に枷となるのだ。

でも、卒業したらアリスとは違う学校になるんだよね……。二度と会えないわけじゃないけれど、やっぱり寂しいよね。アリスは、どう思っているのだろう。でも、少なくとも、喜んではないよね。だから、思い出にキスを……。みたいなことなのかもしれないな

そこまで深読みされると、悪戯半分でいる手前、罪悪感が膨らんでしまう。

何事もなく笑って終わるつもりが、相応の修羅場を迎えてしまっそうだ。

だけど、結論を急ぐにも、その一歩が踏み出せない。

たじろいでいると、ルートが何やら託つ。

「アリス、一つだけ、お願いしていいかな……」

「なによ」

進路がどうか、思い出がどうか、記憶がどうか、そういう大層なお願いでないということは、事前にルートの思考を感じ取って知っていた。

けれど、あたしにとってみれば、かなり負担の増えること相違なかった。

「その……。ア、アリスの方から……。し、してほしい……。なんて……。い、いやいや、別にして欲しいわけじゃないよ！ただ、自分からって……。すごく……。なんか……。こっ、ねえ？」

「わかったわ」

本当にするわけではないから、速くなる鼓動にも限界点はある。さっきからずっと限界点を常にキープしているから、総じて見れ

ば本番のシミュレーションとしては高すぎるくらいの演習水準だろう。もはや本番のドキドキを超えているかもしれない。

「じゃ、じゃあ目、閉じてる、から。そ、その……………どうぞ」

特別な存在が目の前に現れるわけではない。あたしが興味本位で知ろうと思った、あの時の王子様がそこにいるわけでもない。

ただ瞳を閉じている友達が、そこにいるだけ。その柔らかさも温かさも、何もかもを知っている一人の人間がそこにいるだけ。

あたしはその友達の唇を、自分の唇で奪うだけで良い。いや、実際には奪わないけど。

ただそれだけなのに、こんなに体が熱くなるのはどうして。

とどとどどうしよう！ 本当にキスするんだ！ やばい！ しかもアリスと！ どんな感じなんだろう！ 柔らかいのかな……………気持ちいいのかな……………。あああああ！ 心臓が壊れちゃいそうだよ！

さして差異ないことを、あたしも思っていたところだった。

違いと言えば、少し前に考えていた学校での付き合い方を、あたしはまた深慮していたことくらいだろうか。

高熱を出したときみたいに体が言うことを利いてくれない。耳が特に熱を帯びていて、地続きの顔にもその熱が伝播し次第に火照ってくる。

冷静さを装おうと努めるあたしの自意識とは裏腹に、無意識で勝手に感情のキャパシティを全部使って、相手の ルートのことを考えようとする。

それ以外のことを考える余地が残されていなくて、強制的に頭の中が一色で染め上げられていく感覚を覚える。

それが不安でもあり恥ずかしくもある。また好奇心なんかも見て取れた。

高鳴る鼓動が更なる焦燥を率いてそれらと無理矢理に混ざり合う。でも、轟く感情が纏れたり拗れたりすることはなく、適当な塩梅で

渾然と調和を保っているために、他では感じ得ない感情になる。ポ
ーダレスでいつしよくたの感情であつても、不思議なことに、不
快であるとか苦痛であるとか、そういうことはなかった。むしろ、
すべてが前向きになる感じ。

この感情がクセになる人もいるかもしれない。
染まっていない部分が徐々に減っていくと、比例して鼓動が速く
なってくる。とめどなく流れる血が、さらにその速度を増して、血
管との摩擦で血液の沸点に達してしまうようだ。
きつと、それはルートも同じ

は、早くー！ 恥ずかしいよー！

じゃない？

あたしの頬を伝っていく大粒の汗は、焦燥という精神的なものが
もたらした物理的なもの……のはず。

なら、それはルートにも出ているところなのに。
どうしたのだろう。

一人で舞い上がってしまったのだろうか。
だとしたら、恥ずかしいのはあたしの方だ。

「えっ？ ア、アリス……？」

たかが寸止めなのよ？
相手はルートなのよ？
なのに、どうして。

「ちょ、ちょっと！ 大丈夫！？ アリス！ アリスッ！！」

体が動かないの？ 声も出せないの？

いえ、違うわ。

これは、意識のコントロールができていないようね。

金縛りの状態に近いかしら。

「ルーどうしたのー……って、アリスお姉ちゃん！？ なに、どうしたの！？」

「わからない。少し前から変だったから、もしかして熱があったのかも……。と、とにかくお母さん呼んできて！」

さっきの熱は、もしかして恋情からくるものじゃないということかしら？

だったら、この作戦は失敗だったのかしら、ね……。

「うわっ！ すごい熱！ アリス、しっかりして！ 今、何とかするから！」

さっきまでの奇行は病気のせいである、なんて結果に終わるのは、何とも形容しがたいショックだわ。

でも、病気なんて患ってはいないはずなのだけれど。現に今、体が熱いだけでどこも痛くないし、むしろ心地……良い？

額に触れる手の平と、あたしの肩を優しく包む細身の腕が、わからない。

ルートに実体がないわけではない。ということは、あたしの感覚が無くなった？

そんなのは、ルートの意識を辿れば……って、あら？ 意識が飛ばせない？

「あらまあ！ 大変だわ！ リズはぬるま湯とタオル、ルートはア

リスちゃんの家連絡しておいて！」

他人のベッドってこんなに居心地が良かったのかしら。

あれ？ でも、この感触……。

どこかで同じようなベッドに寝たのかしら？

それに、この匂い……。

懐かしくて、落ち着く。

「アリスお姉ちゃん、大丈夫！？ 今、お母さんが薬持ってくるから、もう少しだけ頑張つて！ 私の手、握つてていいよ！ タオル以外で何か欲しいものある？ 何でも言つて！」

しっかりと天日干しされているからだろうか、肌を撫でていくタオルの感触が絶妙に気持ちいい。

でも、この感覚は気持ちいいとか心地いいとか、そんなやんわりとした表現を使つてでは、少々物足りない。もはやタオルで触られている感覚ではない。

擦りたいと痛いのもちょうど中間くらい。何か、体の疲れが抜けるツボのようなものを、遂次、緩急をつけて刺激していくようだ。

一言で『快樂』という表現を使うのが妙にしくりくる。

急に艶めかしくなった気がするけれど、快樂と共に感じる劣等感のおかげで、大き口的を外してしまうようなこともなくなる。

「……………しい」

「アリスお姉ちゃん……………、何……………言……………！？」
どうしたのかしら。

熱つて、こんな風に聴覚が鈍るものだったかしら。

代わりに『快樂』が鮮烈に感じられて、その詳細な性質が分かつてくる。

波があつて、劣等と比例していて、誰かを想っている。

アリスが大変だ！

期待、羨望、好奇心。

そう。

あたしがルートを想っている時の感情と少し似ているかもしれない。

熱が……。アリス……。！！

おかしいわね。

熱つて、こんな風に知覚が鈍るものだったかしら。

「アリス……」

次第に大きく波立っていく『快樂』に溺れて為す術もないあたしは、ただただ劣等感の海へと沈んでゆく。

いつものように、決まりきった目的地へと向かう船に搭乗する余裕はなさそうだ。

このまま沈んでゆくのもいいけれど、どうやら海流はあたしを温かい方へと導いてくれるようだった。

そう。まるで、あたしのことを必要としてくれていて、あたしを求めてくれていて、そうして名前を呼んでくれていてみたいに。

ならば、その流れに乗ろう。

いや、「乗ってあげよう」が、やけにしつくりくる。

向かう先は沖なのか陸なのかもわからない。もしかしたら無人島かもしれないし、樂園かもしれない。

けれど、前向きになれる今なら、どこへでも行ける気がした。
忘れていたことを思い出せたおかげで、あたしはまた、“あたし
”に戻れたから。

『快樂』の波に乗って、流れていこう。
あたしを必要としてくれる、あなたのもとへ。

Scourge or Penalty? (後書き)

【あとがき】

湿っぽい人には、アンニュイな雰囲気強調されて、女性らしく見えたりする効果があると思います。

それとはまた別ですけど、雨の日って晴れてるいつもと違っていて、またいいですよ。ちょっと鬱っぽい表情になるのもキーポイントだったりしますね。

男子は汗臭いので論外ですね。

次回からは、どうしましょう。

とじあえず。

お楽しみに。

僕が知った気持ち、等身大。

アリスが倒れてからすぐに、僕はアリスの家に連絡を入れた。アリスの両親にはエレメンタリーの時に会ってそれっきりだったので、どういふ声質であるか記憶が薄かった。

だから、電話口から聞こえてきた馴染みのない仰々しさにも、さしたる疑問を感じることもなかった。

電話での『数分で参ります』という文言通り、十分としない内にアリスの身柄を引き取りに、うちに来訪者があった。

僕の家もアリスの家も学校からは遠いけれど、お互いにはそれほど遠くはなかった。

でも、アリスが熱に倒れてから勢いを増したこの吹雪の中では、晴れている時のように順風満帆に事が運べないというのが道理だと思っただ。積雪に足を取られるだろうし、ホワイトアウト同然の密度にも、行く手を阻まれてしまっただろうから。

受話器の声は女性だったから、尚のこと心配だ。

でも、結果的に、架電から数分で来訪者があったのだ。

だからと言って、心配が安堵に変遷していったかと言えばそれは違くて、どちらかと言えば、そう、もつと心配になったのである。

それは多分、僕だけの話ではなかった。

引き取られていくアリスを見て、僕の隣で眉を曇らせるリスが印象的で、忘れることができないのだ。

そして、自分の家へと帰還しているにもかかわらず、一切の言葉を発しないアリスもまた、強く印象に残っている。

熱病に理性を侵されているから、言葉が出ないのか。それとも…

…。

でも、言葉を失ったのは僕も同じだった。

こんばんは。お嬢様を引き取りに来ました。ナイプス家の者です。

玄関を開ければ、白と黒を基調としたフリル付きの洋服を身に纏った礼儀正しい女性が、頭の上に積もった雪を払いながら、開口一番にアリスの姓を名乗る。

本でしか見たことが無かったけれど、メイドは実在するのだな
が、僕が抱いた率直な印象。

熱を出してしまったと、ルート様からお聞きしたのですが、
その後の容体は。

救命士のライセンスを持っているらしかったので、実際に見ても
らうことにした。

簡単な診察によれば、気疲れからくる知恵熱のようなものとのこ
とで、一先ず、アリスの体については安心できた。
けど。

これから、アリス様を自宅までお連れします。

救命士の資格を持っているのだから、優先度くらいは把握してい
て欲しかった。それも、何があっても人命優先、という揺らぐこと
のない意志をもって。

ご迷惑をおかけしました。では。

迷惑などとは思っていない。むしろ、今引き取られる方が迷惑だ
と言っても過言ではないくらいの話。

だけど、アリスのことだから、「心配いらないわ」なんて強がり
を言ってくれるに違いない。

それならば仕方のないことだけれど、アリスの口は否定も肯定も、

もはや何も主張することはない。
そう。

僕はこのタイミングで、このメイドに対する初見の感情を思い出したのだ。

あなたは誰？、と。

翌日。

二月十五日。

僕の後ろの席は、三年間で初めて空席となった。昨日のことを思い返せば、それは当然なのだと納得できた。

しかし、後ろ髪を引く……ではないけれど、いつもあるそういう力が 圧迫感めいたものかもしれない。そういう雰囲気がなく なると、生活のリズムどころか、感性まで狂いそうになる。

卒業式の予行演習は引き続いて行われたが、僕たちのクラスの担任が張り切ったおかげで予定より早く終了したため、今日の部活動は短縮で止まることになり、休みにならなかった。

顧問の先生がやる気のない人で、無断で部活をサボタージュしても咎められることの無いバトン部にはあまり関係の無い話だったけれど。

今日はお見舞いに行こう

そう考えていた僕にとって、ミドル一年生の時にした部活動選択は正しかったと思える。

例え、進んできた道が逃避行の連続で駆け込んだ暗く狭い道であっても、こうして明るく照らすことだってできるのだ。逃亡の日々を輝かしい栄光の日々と言い換えるのではなく、確かに暗いその道を自分が照らすのだ。

重要なのは、どの道が正しいかではなくて、どう照らすのが正しいか、なのである。

でも、あくまでこれは、僕が勝手に心に決めた一言。

他人に適用できるかと言ったら、それは色々と間違っている気がするのだが。

「一年のリズです！ ルーがお世話になってます！ お邪魔します！」

昼休み、一人寂しく食事をしていると、昨日のことについての詳細を聞いたかったようで、リズの方から僕に出向いてきてくれた。

堂々とアリスの席に着いたりするあたりがまた不安の種になるけれど、昼ご飯を一人で食べることにならなくて良かったと安心もできた。クラスの男子達も「リズちゃんならいい」「様になってるな」など、気分を害している様子はなかった。けれど。

「え！？ お見舞いに行く！？ わ、私も行く！」
すぐに不安要素がぶり返してくる。

帰宅部同然のバトン部と違って、全国大会制覇を綽然と視野に入れるカーリング部は無断欠席が許されることはないし、人の家に行くだけという不当な理由で欠席が認められるはずもない。

結局ついてくることになるのだけれど、どういつ手段を使ったかは不明である。

放課後。

リズが公的に部活動休止の機会を手に入れたために、いつもの待ち合わせ場所を使うことなく、アリスの家に向かうことが出来た。

家の所在は昔と変わっていないとアリスが言っていたので、記憶の通りに行けば迷うことはないだろう。

方向音痴と言われたことはないけれど、昨日のことを思い返すと自然、自信がなくなつて足取りが重くなつてくる。

「ねえねえ」

部活をサボっているために感じる背徳のせいだろうか、その声にはどこか、結果を憎む後悔のような苦みがある。

並んで歩いていたから、別段、声の大きさに気を遣うことはない。

僕は「ん？」と軽やかに訝った。返ってきた応えは軽やかではなかった。

「アリス先輩つて、すごいお金持ちなんだね……。私……」

リズの中でのアリスはきつと、裕福だけど庶民的で素朴な存在だったのだと思う。

本当に裕福であるというのは、その素朴さに見え隠れする高貴な仕草から汲み取れた。居丈高に豪遊を驕ることもないし、むしろ謙遜が過ぎるくらいだった。

そのバランスがリズの中での、そして僕の中での、アリスという存在だった。

リズの応えの重量に引かれて、必死で保っていたその均衡が、バラバラと崩れていく。そして、リズの中でもまた、僕の沈黙が生んだ重力が平行の崩壊に努めているところだろう。

だから付き合い方を変える？

それだけは有り得なかった。

今まで僕たちが描いてきたアリス像は、本当の、等身大のアリスではなかった。こうであつたらいいな、という理想が少なからず像を築く道具として用いられていたに違いないのだ。

アリス自身が知られたくなくて巧妙に隠していたのだろうから、隠されたその部分は僕たちが想像で補うしかなかった。

でも、今度は違う。

僕は昨日、本当のアリス、等身大のアリスを見ることができた。

僕が見たものが全てではないけれど、あの涙は確実に彼女の願いを映していた。

だから、僕は崩れた均衡をもとに戻す術すべを知っている。

それは、要らない部分を削り彫っていくのではない今までとは違う全く新しい形。

等身大のアリスに足りない部分を僕が補って、一見不要に見える部分にリズが彫鏤を施して魅力に変える。

二人で手に負えないところはきつと、あの人が何とかしてくれる。アリスと二人で手を取って、アリスを『もっとアリスらしいアリス』に近づけてくれるに違いない。

僕も、見失っていた本当の僕を見つけることが出来た。それは、アリスが等身大の僕を見て、足りないものを教えてくれたおかげ

…。アリスに近づいて、アリスの涙を見て、アリスの願いを知って…。それが本当のアリスを知ること。

昨日、取り乱してしまつてできなかったことを、これからしよう。

アリスの願いは、従うだけの現状維持でも、流されるだけのストーリーでも、徒いたすらに熱いたすらい悪戯いたすらなキスでもない。

「行こう、リス」

「う、うん……」

これは僕が選択した、道。

アリスにもらった覚悟と勇気の大きさを確かめるように、僕はリズを撫でる。

「大丈夫。アリスはいつもアリスなんだから」

「うん！」

道が暗かったら照らせばいい。

無尽蔵に湧いてくるそれは、形も大きさもわからないほどに明るく心に衝つて、僕の中にあつた一抹の不安と、しょうもない違和感を一蹴していく。

待っていて、アリス

やり直した僕だからこそできることがあると思う。

二人のために失った二十二人を背負っている僕だからこそできることがあるのだと思う。

今できること アリスの手を取ること。

そのために僕は、解けて固まった圧雪を蹴り壊してでも、この道を進むしかない。

僕が君の願いを叶えるよ

理想だけを形にする『願い』じゃない。

叶えられる願いが、そこにあるのだから。

僕が知った気持ち、等身大。（後書き）

【あとがき】

再びルート編が始まってしまいました。

アリスとの交流で少しだけ前向きになれたルートの遠謀深慮は吉と出るか凶と出るか。

次回へ続きます。

拒否権はない、ただの我儘。

友人の家を訪れて門前払いを喰らうことが、こんなにも空しく悲しいものだとは。

もしかしたら、昔からずっと同じく接してくれていたアリスと同様、アリスの家も変わらずにそこにあつてくれるかもしれないなどという一抹の期待は、見上げんばかりに聳える巨大な門と、それを管理統括するメイド数人の存在によって、僕たち同様、軽く払われてしまった。

アリスの体調はもう大丈夫だということ、僕たちを拒否する理由が一人になりたいからだということ、それだけが僕たちのメンタルの崩壊を防いでくれたのだった。

『一人になりたい』

つい昨日、アリスの気持ちを知った僕は、何となくその意味を理解することが出来た。

迷いや悩みの中には、思い抱いていることが無駄なものも多い。

それを整理するために、一人の時間が必要になるのだ。

僕は、その一人の時間が長すぎたのかも知れない。

必要か不必要かという選定ばかりに時間を割いて、本当に必要なものを選択することができていなかった。それは、部屋を片付ける時に要るか要らないかを決めるのと少し似ているかもしれない。

僕の場合、整理整頓の時間をとり過ぎていた、というわけだ。

だから昨日、アリスの協力を得て、すぐに一つの答えを掴むことができたのだろう。

片付いている状態ならば、 unnecessaryなものを見つけることもたやすいから。

でも、そうでない人もいる。

『アリスお姉ちゃんに何かしてあげたい！』

整理整頓をしないタイプのリズは、いつでも直球だ。

それは悪いことではないけれど、今、落花狼藉に抵抗のない者が何かを助長しても、部屋は散らかるばかりだ。

ただ、その言い分には一理ある。

友人が悩んでいるのを知りながら何もしないでいるというのは、もどかしくてならない。

直接的ではないにせよ、何かしら相手の助けになることを早く悩みが解決されるように策を講じることを、僕もまた望んでいるのだ。

僕一人でできることをやってみたい、という思いも強くある。

でもそれだと、価値観の押し付けにしかならない。

だから。

そうだな。

これは、キスをしようとした罰にしよう。

そして、僕の心の蟠りを解消してくれたお礼にしよう。

『そういえば、友達がこの道を行った団地のあたりに住んでる、ってアリス先輩が言ってたんだ』

アリスの家から帰る途中、リズがそんなことを言っていた。

いつも通る分岐路周辺だったのと、昨日すれ違った黒髪の子がこちらの方へ走り去っていったのを思い出して、僕は居ても立ってもいられなかった。

家に帰って夕食を食べてすぐ、学校に忘れ物をしたことにして僕は家を出た。

雪が降っていないことが幸いしたのか、すぐに戻る旨を伝えると両親も外出を認めてくれた。

「この道、初めてだな……」

学校へ向かうでも、アリスの家へ向かうでも、来た道を引き返すのではない、明かりの無い暗い道を進んで行く。

手がかりは、ノアという名前の黒髪の少女と、団地に住んでいることだけ。

見つからなければ無駄で終わってしまうこの行為でさえも、何もできずに呆然としている自分を想像すれば、苦痛ではなかった。

しばらく直進すると、明かりが見えてきた。

外から見上げただけでも軽く五十世帯は暮らせるほどの建物が、道に沿ってずらりと並んでいる。すべてが同じタイプの建物というわけではないらしく、奥に行くほどに建物は小さくなっている。

石造、木造、……と並んでいれば、そのサイズが遠近感の問題ではないことはすぐにわかった。

まるで、ヒエラルキーが可視化されてしまっているようだ。

「この団地のどこかにノアさんがいる……」

両親にすぐ戻ると言ってしまった手前、そんなことに一喜一憂している暇はない。

でも、手がかりの少なさ故に、どこから手を付けていいか見当もつかない。

とりあえず周囲を見渡してみる。

目の前に見えるのは、おそらくこの団地で最も高級な部類に入る木造の建物。その影から覗く建物は、おそらくその次に高級なのだろう。その影、その影、と繰り返していくと、僕の家と変わらない

くらいの小さい建物が見えてくる。一番小さい代わりとでも言うように、道路を挟んだ向かい側の土地には公園がある。

「アリスの友達なら、自然に考えてここだよね」

高級感のある木造の建物を見上げる。

ほとんどの部屋に明かりが灯っていて、その中の温かい団欒の風景がイメージできる。

黒髪はこの国ではとても珍しく、有名人の家系であることが多いのだ。

それならここに住んでいてもおかしくはないし、何よりあのアリスの友達なのだ。

「あ……」

一瞬、酷いことを考えてしまったと悔いた。

けれど、それが本当のアリスなのだ。

僕はそれを知った上で、アリスと友達でいたい。

一人、首を横に振って、そう改めた。

「ただのお金持ちじゃない。アリスはアリスなんだ」

偏見を捨ててもう一度考えてみよう。

今、僕にできることはそれくらいしかないのだから。

明日はノアさんの誕生日なんだよね。仲直りできないままじゃ絶対にダメだ！

僕が会って何をできるかなんて限られている。

もしかしたら、また門前払いを喰らうかもしれない。

だって、これがお節介であるということくらい、自覚しているから。

でも。

僕が何もしないままいた結果、アリスとノアさんが疎遠になってしまったら アリスが、ノアさんが大切な親友を失ってしまっ

たら、きつと……

僕はまた、世界をやり直してしまっただろう。

それすら覚悟したうえで、僕は一番奥の小さな建物へ向かって歩き出していた。

その一歩目はとても重かった。積もっていた雪のせいもあると思う。

けれど、一度歩きだせば、アリスにもらった勇気が道を照らしてくれた。僕の中に確かに存在する大切な感情が、太陽の様に雪を溶かしてくれている感じもした。

その感情はきつと、僕が変わらないかぎり、何度繰り返してもなくならないのだと思う。

目的地の前に着いた時だった。

急激に肩に重力が働いたのかと思った。

「どうして……。どうして、そこまでできるのよ……」

「え？ アリス？」

アリスが僕の肩を掴んでいた。

その力は『これ以上は進ませない』みたいな迫真的な何かを、間違ひなく含んでいた。

でも、ここまで来て引き下がるわけにもいかなかった。

願わくは、アリスの静止を振り切るか、アリスの手を取るか。

「明日、誕生日って言ってたよね。このままじゃダメだよ、絶対。もちろん、わかってるよね。余計なお世話を働いてる自覚がある確信犯だつて」

アリス情報網なら知っているはずだ。

今だつてきつと、情報網を頼りにして僕の前に現れたのだから。

「え、ええ、もちろんよ……。そして、『間違つてもいいんでしょ？』と言おうとしていることもわかって、いるわ……」

僕の心を読んで優位に立とうするアリスだったけれど、肩で息をしている様子がとても弱々しく、脆く見えた。

病み上がりだというのに、走ってここまで来たと言っただろうか。「どうして、そこまで……あたしのためなんかそこまで、できるのよ。軽蔑したでしょ、あたしが、あなたたちを、追い払ったこと……。それでいいのよ、別に……。あたしは……周りの期待に流されるだけのダメな、人間なのよ……。もう、昔みたいには……戻れないのよ！」

息を切らしているせいで、凄む姿に迫力が無くなる。

答えを要求するというあたりがまた、いつものアリスたり得なくて、僕ははつきりとした同情を抱く。

きっと、アリスが今のアリスになっただけからずっと、自分の気持ちを押し殺しているんだ

「どうして、よ……」

相当疲れたのか、アリスは僕の方へ倒れ込むように体重をかけてきた。

情報網は滞ってしまったようだ。

なら、もう『思う』必要なんでない。

僕は、その重みをすべて受け止めるよう努めた。

アリスにかかっている重さを、少しでも負担出来ていたらいいなと、伝わるよう。

五分後。

アリスがかなり消耗している様子だったので、向かいの公園で少し休むことにした。

それは、僕自身の頭を冷やすと言つ意味合いも強くあつた。

「ねえ、アリス」

「……………」

公園のベンチの雪を払つて、二人で座つた。

雪が降らないにしても、風除けのないこのベンチでは肌寒いを通り越して身震いするほど寒くなるはずだ。

はずだったけれど、ならなかった。

「ノアさんのところ、行かなくていいの？」

「……………」

アリスはベンチに座るなり横になつて、僕の大腿部を枕にしながら沈黙を貫いていたからだ。

まだ少し熱があるせいで、市販の安価な防寒具よりかは幾分か温かく感じる。

さらに、気恥ずかしさからくる顔面の火照りも助けて、真冬の防寒は完全であつた。

「アリス、寒くない？」

「……………」

いつ頃に家を出たのかは知らないけれど、距離的に考えて、最低でも十分は外にいることになるだろう。

首に巻かれたリス特製のマフラー以外に防寒対策がなされていないため、少し心配になる。仮にも病み上がりだし。

とは言つても、貸せるほどの装備を持っていないので、気にしてあげることしかできないのだが。

「もう少しで七時半か……………」

公園の中央から生えた柱に取り付けられた時計は、年季が入っているせいで正しい時間を指示してくれているかどうか怪しい。

感覚的に、家を出てからあまり時間は経っていない気もするが、戻するのに必要な時間を考えると、すでに手遅れな気もする。

だからと言つて、この温かみのある重さを、極寒の闇の中へ放り出すわけにもいかない。

時計柱の直下にある公衆電話の明かりがあるから、闇と言つには少しばかり明るすぎる気もするけれど、投射された柱の影が細く鋭くこちらに向かつてくるようで真つ暗闇と競つても劣らないくらいの恐怖がある。

余計にアリスを手放したくなくなる。

「きつと怒つてないよ」

これはアリスの決めることだから、僕は気休めを言うくらいのことしかできない。

でも、それで気が紛れるのなら、枕になることで心が安らぐのなら、ここにしようと思える。

そうでなくても、僕はアリスの願いを叶えようと決めたのだ。

それが罰と謝礼になるのだから。

「ねえ、アリス」

あまり真剣さが伝わらないように、でも適当にあしらうことはなく、改めて尋ねてみる。

「本当に勝手にごめん。でも、僕はこのままじゃ、イヤだよ。……」

アリスは？」

沈黙。

空しい沈黙を破つたのは、アリスではなかった。おまけに僕でもなかった。

一段と強く吹いた風に乗せられてやってきた白が、あたりを染めていく。染まり積もっていく音が、無音に近い公園では嫌と言うほど耳に入ってきた。

『早く帰って温まりたい』と、そんな弱音が心の奥底から聞こえてくるようだった。

それとほぼ同時に、僕の鼻頭に一つの冷却があった。

『早く帰れ』と、そう言われているような気さえしてくる。

僕は まだ帰るわけにはいかない と、覚悟を決めて、この冷え込みを弱かった自分の罰とした。

『どうして……。 どうしてあなたが、謝るのよ』

アリスの声が振動して太ももを伝う。

僕もまた、同じ性質で返す。

「だって、僕がここに来ようと思わなければ、アリスがぶり返すことはなかったでしょ？」

それは結果論であるとわかっている。

分かっているても、後悔はしてしまう。 選択が間違っていたと、自責の念に駆られる。

だから選ぶことは怖い。

選択しなかった道は引き返せない。 進まなかった道をいくら願っても、それは未来永劫『願い』のままなのだから。

でも、僕は知っている。

前に進む意志があれば、道は必ずそこへ向かってくれるのだと。

だからアリスは、『間違ってもいい』と言ってくれたのだ。

それは決して『やり直せばいい』という意味ではない。

後悔して、今進んでいる道が間違いだと気付いたとしても、それでも、一心不乱に前へ進もうと努力すれば、目指すものに近づいていくことが出来るという意味なのだ。

僕たち受験生にとって、選択すべき道。

それはやはり進学なのだろう。

迷い苦しみ嘆き悶えるほど、選択肢は広くはない。 けれど、そのうちの一つくらいには必ず引っかかってしまう。

不安とか、焦燥とか、そういう感情が邪魔して、進むべき道に霧をかけてしまうからだ。

『他人と相談するのも悪くない』

先生はそう言っていた。

アリスと一緒に悩んで苦しんで、遂には答えにありついた今なら、胸を張って賛同できる。

進む道を決めるのも、照らすのも、自分だ。

だけど、かかった霧や靄を払ってくれるのは、友達や家族に他ならない。

「きつとノアさんはわかってくれるよ。だから、行こうよ」

それは僕にとるアリス、リズ、父や母なのだ。それはアリスにとるノアさんなのだ。

今、苦しいのはきつと、どうすべきかわからないからだと思う。

「行って……、行ってどうするのよ」

数日前までの僕、あるいはリセットする前の僕を見ているようだった。

僕は僕だから、そんな僕だったらどうして欲しかったのか、自然とわかった。

「行かないのなら、アリスはどうするの？」

アリスが僕に手を差し伸べてくれたように、今度は僕がアリスに手を差し伸べる。

そこに特別の感情などは必要なくて。

欲しいのは……そう。

言っなれば

「わかったわ……。一緒に行きましょう」

拒否権など生じない、ただの我儘な願い。

拒否権はない、ただの我儘。(後書き)

【あとがき】

友達と喧嘩をした時の雰囲気って、特殊な趣がありますよね。

家族なら上下関係がしっかりしているので、どちらかが引けば事が済みますが、友達同士ですと、そももいきません。

時間が解決してくれる兄弟姉妹と違って、解決方法は「ごめんなさい！」と謝るか「はっ。別に怒ってないし？」と開き直るか、しかない気がします。

現代日本において、前者を選択するのは少し怖いです。だからと言って後者を選択して踏ん返り返るのもアレです。

そこで一つ提案なんですけど………あ、あれ？

おかしいですね、忘れてしまいました。

すいません。

きつとアリスとノアがその答えを覚えてくれると思うのですが…

…。(あからさまな告知)

次回はノア宅で会いましょう。的な。

導け届け、この思い。(前書き)

【まえがき】
本編です。

導け届け、この思い。

「ノアに何の用……」

初めて会ったわけではないから、正確な第一印象は『少し暗い性格の子』ではなくて『黒髪で華奢な可愛い子』ということになる。アリスが家を探ねると、何も言わずに居間へと通してくれた。拒否されて外での待機を余儀なくされることも覚悟していたけれど、親しくない間柄である僕も招き入れてくれて安心する。

あまり歓迎されている様子はなかったが。

「……………」
「……………」

居間に辿り着くなり二人とも黙り込んでしまう。

もしかしたら、僕というイレギュラーな存在がいることで、二人のいつもの関係に綻びが生じてしまったのかもしれない。

急激に増大し始める罪悪感を誤魔化すために、僕は口を開いた。

「あ、あの……。ノアさ」

つもりだったのだが、

「帰って……………」

拒否されてしまった。

まだ腰を下ろしてから一分と経っていない。

僕が口を開かなければあるいは、もう少しはもったかもしれないけれど、それでは意味がない。そして、現在おかれているこの状況もまた、意味がなかった。

頼みの綱アリスを一瞥するも、すくつと立ち上がるところだった。このままでは終われない。終わるわけにはいかない。もう二度とやり直したくない。やり直して見える代償の大きさを、僕は見たくない。何か……。何かしなければ。

時計は八時に迫っていることを示している。公園の時計もあながち誤報はしていないようだ。

壁掛けのカレンダーは二月のページが開かれている。改めて冬を自覚する。

明日、十六日には赤い文字で『ノア 十五歳』と書かれている。この子は年下か……。頷ける。

て。
全然ダメだ。

「何してるのよ。帰る、こほこほっ！ か、帰るわよ……」
居間の中心で立ち尽くしていると、早速、玄関で靴を履き替えて待っているアリスに催促されてしまう。

早く。
早く何かしないと。

「あ。ちょっと待って」

僕はテーブルの上に無造作に転がっていたペンの一つを手にとって、「借りてもいい？」と尋ねる。

「……いい、けど」
了承を得たので、次のステップ。

今度はおもむろに振り返って、壁に掛けてあったカレンダーを指差して、「少し書いてもいい？」と尋ねる。

「……別に、いい」

「ありがとう」

僕がここへ来たと言う証を、今日、十五日の欄に刻む。

ここまですれば、きっと無意味ではなかったと思える。

僕はペンをテーブルに置いて、アリスの元へ急いだ。

「……………」 「邪魔しました」

「……………」

僕の挨拶だけが空しく玄関に響いて、その入り口は閉じた。

なぜだろうか、僕はすぐに歩き出すことが出来なくて、暫くの間、閉まったドアを見つめていた。

後悔……、は無いはずだ。

僕は、今の僕にできることをやったと思う。最後の機転なんかは自分でも褒めたいくらいだ。

それに、僕は思うのだ。

ノアは誰かに助けを求めている。

そうでなければ、このドアを開けて、しかも、僕という部外者を家に入れてくれるはずなどないのだから。

助けを求められているのは僕ではないのかもしれない。

だけど、助けを求める声が聞こえて無視することが、僕にはどうしても正しいと思えないのだ。せめて何か、遠回しにでも、手を差し伸べる事が出来ればと、そう思うのだ。

あのメッセージには、そういう意味があった。

でもやっぱり、これで完璧とは言えない。

色々なところに不安は残っているし、結局はアリスの願いへの意志の強さで決まると思うのだ。

だからきつと、僕が歩き出せないのには、他の理由がある。

それに、どうしてアリスは何も言わないのだろうか。

「って、アリス!? 大丈夫!? 体がすごく熱い!! 大丈夫……じゃない!？」

隣を見ればそこにアリスの影は無かった。

当然だ。

アリスは僕に救いを求めるように必死に手を伸ばして、倒れていったのだから。

x x x

僕が家に帰ると、すぐ、家族が総出で出迎えてくれた。

浴びたのは歓迎の言葉ではなかったけれど、二言目には気遣ってくれた。

僕がアリスを背負って家まで行った時も、アリスに浴びせられた一言目は往々にして厳しい叱責の言葉であった。

僕はその後を知らないけれど、アリスの二回目が僕と同じ類のものであることを切に願う。

僕は、長時間の外出で冷え切っていた体を、湯船に浸かるといって『和』の技を使うことで、芯から温まることができた。いつものシヤワーだと、体表から蒸発していく水に奪われる熱があるせいでしょうか。温まることが出来るのだが、やはり『和』テイストは違った。それはもう、鼻血が出るほどだった。

「涼しい……」

僕はお湯の温度以外から齎された熱で沸騰寸前だった頭を冷やす

ために、廊下の電話の前の壁を背凭れに涼んでいた。

きつと、これも『和』である。

そして、ここでよく冷えたミルクを飲んだりすれば、もつと『和』なのである。

「あ、いたいた。いやー、さっきはごめんね。はいこれ、冷たいよ」
リズが持ってきたコップに入っていたのは、なんと、ミルクだった。

これ以上ないくらいのベストなタイミングに、何か仕組みられているのではと少し怖くなってくる。

誰が仕組むのか。

それはきつと、世界の均衡を保っている神様、みたいな存在だろうな。

「あ、ありがとう」

それはきつと、どこにでも潜んでいるのだ。

「でもさー。さすがに妹の裸で鼻血出すのはどうかと思うよ」

「ブファッ!?!」

やはり身近に居た。

それは僕の隣に腰かけているリズの、そのまた隣に、一緒に腰かけていたりするのもかもしれない。

でも、あまり口に含まなくてよかった。思い切りよく飲んでいたら、今頃廊下は白濁液の大惨事になっていただろう。

風呂場から雑巾タオルを持ってきて、床に打ちつけられて独特の形に滴下した白い飛沫を、一滴残らず吸い取っていく。

「もー。汚いよー」

それは自分でも思うけれど、少し理不尽性がある気もする。

『しゅ、しゅめ』

そう言おうとして、ふと思っ。

以前の自分ならそう言っていた気がする。というか、確実に言っ

ていただろう。

確かに、僕は以前の僕とは変わった。

けれど、以前の僕が上書きによって消えてなくなってしまったか
といえ、それも違うのだ。

言い得て妙な表現が見つからないけれど、『成長』という表現な
ら端的でそこまでかけ離れてもいない気がする。

成長して、その言葉は徐々に形を変えていく。

「リ、リズのせいだよ……」

その言葉が余程想定外だったのか、リズは数秒の間、目を白黒さ
せていた。

そして、平静を取り戻した後、今まで見たことのない表情でぼそ
りと呟いた。

「だ、だって……シャワーの音しなかったんだもん。誰もいないと
思ってたんだもん……」

僕から目を逸らしてしまったけれど、その顔は確かに赤らんでい
た。

それもそうか。

僕が見ているのだから自然、リズは見られているのだ。

一緒に入っていた幼少時代とは違う、成長した自分を見られるの
は恥ずかしいものだ。

それは家族だけが感じる特有の感情のようで、少なからず僕も、
親やリズに裸を見られることにはあまりいい気はしない。

いや、僕の場合は別か。

「ごめんね。僕が悪かったね。次からは気を付けるよ」

「え。次もあるの？」

少なくとも、『次』はこの世界で。

湯冷めしてしまう前に布団へ入るのが、我が家に存在する数少ない掟の一つだ。

リズムもその掟に従って、先ほど就寝したようだった。

掟、というには強制力が弱いけれど、心意気的な意味かと甘く見ていると『もしもの時の五か条』や『家族の在り方三項』なんかで躓くことになるだろうと、忠告しておきたい。

言い出しておいてさっそく抵触しそうなのであるが、今回はかりは目を瞑って欲しい。

そうだな。

逆に、『友達との付き合い方四戒』を適用しようか。

「もしもし」

『あ、あの……』

「ノアさん？」

『そ、そう。ノア』

繋がった。

電話の相手にこの喜びは伝わらない。

溢れそうなのこの喜悦はガッツポーズとなって、余すところなく表現される。

実は、僕がカレンダーに施したのは「来ました」というメッセージではなく、電話番号だったのだ。

全く話したことがなかったし、ただでさえ険悪なムードになっているところへズカズカと飛び込んだわけだから、期待薄ではあったけれど、僕はやらずにはいられなかった。

電話番号を書けば、それは同時に、架けてもいいという容認の意志も伝わることになる。

容認の意志さえ伝われば、それは電話だけでなく存在も許容していることにも繋がるだろうと思ったのだ。

今の二人に必要なのは、二人で歩いていく道にかかっている霧を払うことだ。

「電話してくれてありがとう」

「……べ、別に」

受話器から聞こえる声には、先刻ほどの圧力は感じられない。幾らかは落ち着いて話をしてくれるようだ。

「でも、どうして電話してくれたの？」

当の僕が落ち着いていられないなら、それは意味がないのだけど。架電してくれたことが嬉しくて、嬉しすぎて、どうも逸る気持ちを抑えられない。

僕が望んだ選択で、話がアリスの願いに近づいたのだと思うと、やはり嬉しいのだ。

いきなりの核心をついた質問にも、狼狽えることなく回答してくれた。

「アリスのこと、知ってそう、だったから……」

そうだ。

僕はアリスのことを知っている。

そう自負できるくらいには、僕はアリスと親しくなれたと、通じることができたと思う。

「ノアさんは、アリスのこと、どう思ってるの？」

今は喧嘩しているから正しいことは言えないかもしれない。

でも、例え「嫌いです」ときっぱり言ったとしてもきつと、本当は僕と同じかそれ以上にアリスのことを思っているに違いない。だって、そうでなければおかしいのだ。

「ノアは……」

あの家は、アリスの匂いで充満していたのだから。

いや、アリスの匂いがあの部屋の匂いになったのかもしれない。少なくともアリスの匂いは昔から変わっていない。

変わったのはアリスの家の匂いだけなのかもしれない。

高台のお城で艶やかに咲き誇る高貴な薔薇の香りではなく、たとえ現実が苦しくても未来を信じて世界に銜う、教会の花壇で上を向く向日葵の香り。

それがアリスだ。

「アリスが好き……」

あまりに真つ直ぐ過ぎて、一瞬、その意味を理解できなかった。

だけど、心に反芻することで、僕の中にある感情と照らし合わせることで、その意図を解くことが可能になった。

「どれくらい？」

「アリスのためなら何でもする……くらい」

それはきつと、信頼と言う形でアリスを助けてくれるだろう。

でも、それは未来の話。

今は、その未来のために、今の話をしなければならぬ。

「ノアさんは、まだアリスのこと怒ってる？」

そして、あの時のすれ違いを悔いてくれているだろうか。

誤った道を進んでしまったことに気付いてくれているだろうか。

「ノア、怒ってないよ」

「良かった。じゃあ」

受話器から聞こえた『でも』という否定的な単語の後に続いた文
言は、あまりに現実味がなくて合理性も皆無で、いわば掟じみたものを思わせた。

「ノアが友達だと、アリスの迷惑になる……」の

願いの霧の正体が掴めた気がした。

そう。

つまりは、それを解消すればいいのだ。

「大丈夫だよ、ノアさん。僕に任せて」

何の根拠もないけれど、僕ならできる気がする。

この際、世界をやり直しているから、という根拠を並べてもいい。
でもきつとそれは、それ以前に、僕が『恋』や『愛』を知らない
から、なのだと思う。

「ノアさんの願いは、僕が叶えてみせるから」

導け届け、この思い。(後書き)

【あとがき】

今回はただのサービス回だと侮るなかれ、ルートの成長が見られる涙ぐましい回でもあるのです。

人はなかなか変われないと昔からよく言いますが、本当にそうでしょうか。

私は違う気がします。

つい数秒前までは牛丼が食べたかったのに、今、ラーメンのことを考えながらマックで弁当を食べている……みたいなことありませんか？

はい。ごめんなさい。

ないですね。

次回はどうなってしまうのか。

【between】Always stay First（前書き）

【まえがき】

“ 日常はいつも始まりにある”
のっけから非日常というのは、有り得ないのですね。
なぜならば、非日常を観測するためには、ある程度の恒常性を持った日常が必要になるからです。
今回は文字数は少ないですが、スクロールは長くなります。

【between】Always stay First

二月十五日。

鳴りやまぬ怒号に嫌気がさしたあたしは、例の如く自室に閉じ籠って外界からの情報を完全に断ち切ろうと試みた。

メイドの何名かが、暫くの間部屋の前で屯していたようだけれど、数分もすればそれは片付いていく。

仮にも病人だと言うのに、この扱いである。両親からしてみれば、病気でないという診断がなされれば、いくら顔色が悪くとも健常であることになってしまふのだろう。

時間を置いて訪れた静寂に、あたしの心境は去就に迷っているようだった。

今までも、きっとこれからも、両親があたしの部屋のドアをノックすることはないのであるだろう。

それが嬉しくもあり、悲しくも……あるのだろうか。

あたしは、本当にそれを悲しいなどと思っているのだろうか。

アリス……。熱、大丈夫だったかな……

例えルートやノアに『可哀想』と思われていたとしても、あたし自身がそれを認めずに、無下に拒否をしてみれば、どうなってしまうのだろうか。

そうすれば、もしかして、両親はあたしのことなんて忘れてくれて、あたしの将来を思って国外と言う進路を提案したりすることも

なくなるのではないだろうか。そして、不衛生だからと言う理由であたしを保護することをやめてくれれば、ノアとも離れずに済むのではないだろうか。

それは、本当に悲しいのだろうか。

先の暗い道なのだろうか。

「わから、ない……、わね」

今は少しの熱と気怠さのせいで、問題の正当性を問うのに相応しい理性と言うには事足りていない。

判然としない意識の中、あたしは自室の天井を目に映す。

ずっと変わらない景色がそこにある。

そう。

昔と何も変わってはいない。

あたしが寝起きで目を開ければ、そこにはあたしを雨や霰から保護するための天井があった。

それは家を引越す前も同じ。

ノアのような貧相だったあたしの家にも、確かに天井は存在していたのだ。

雨や風を凌ぐために設けられたそれに、あたしは別段意識せずに、長い間、身を委ねてきたのだ。

それはきつと、両親も同じなのだ。

あたしが生まれて、あたしの自我が芽生えて、そうしてようやく記憶が貯蓄されるようになって、泣いて笑って思い出を作って。

そんな長い間、あたしは無意識に身を委ね続けていたのだ。

天井と同じで、特別、感謝はしない。

それは、あるべくしてそこにあるのだから。

でも今、あたしは空を見上げたい。日の光を浴びて、自分の進むべき道を照らしたい。

両親が買ってくれた照明じゃなく、付設されている窓からの光じゃなく、あたし自身が欲して手に入れた光で照らしたいのだ。

国外、許婚、そんな決められた光では、自分で決めた道は照らせ

ない。

でも、あたしには屋根を打ち破るだけの力はない。

だから、認めてもらわなければならない。

「もう一度、初めからやり直しましょう……。お父様じゃなくて、パパと呼ばれたあの頃から」

あたしは今、部屋に閉じ籠っているが外にいる。

だから、両親がそのドアをノックすることなど有り得はしない。外に出るためにノックする人なんていないのだから。

幸いなことに、あたしは追い出されたのではなく、自分で家を出た。

だったらまだ、あたしは家に入ることが出来る。

そちらから出てこないのなら、あたしの方からノックしよう。

それを、今まで恐れていた。

でも、きつとこれからは、違う。

アリス、頑張つて……！

ドアなんて、あたしが絶対に壊してやる。

「無駄……。だったかしら」

それは即時に否定出来た……。けれど、実際に話が進んでいないと、実感が伴わないのも確か。

結局、あたしの三連続の提案『ノアとは友達でいる』、『国内に行きたい』、『許婚は断る』は、父の「認めない」の一言で一蹴されてしまったのだった。

その様子を見ていた母は、終始、沈黙で頷いていただけだった。

あたしはと言えば、アウェイな空気を感じたので、また外へと出た。否、部屋に籠っていた。

『そうは問屋が卸さない。だから、ゆっくり攻略していこう』、そんなことを考えながら。

何気なく見たカレンダーを見て、あたしは重要なことを思い出す。

「あした、ノアの誕生日ね。何をあげればいいかしら」

ルートと同じキーホルダーでは、物足りない気がする。十二月のリズの誕生日にあげたアングレットでは、汎用性が乏しい。

あたしはノアから様々な恩恵を受けている。

その恩恵をプレゼント一つで返すことなど、到底不可能だ。

例えば長い時間をかけて、少しずつ返していくような、少なくともそういう根気の要る何かが必要だと思う。

つまり、今日考えても、明日渡せるわけではない。

そうか。

ドアも、少しずつ壊せばいいのか。

一気に壊す必要は

？
確か明日ってノアさんの誕生日……。アリス、大丈夫かな……

「うふふつ。あなたって本当に世話好きよね」

分かっているわよ。

明日、『ノアが欲しい物』を調べて、後日それをあげることにするわ。

ふう。ミルク美味しいな……。電話……。まだ、かな……

「ふふふつ。あなたたちは一体何をするつもりなのかしら？」

これほどまでに面白いことはない。

最近は何倍楽しい。

だから、あたしはもっと長い時間一緒にいて、もっと知りたいのだ。

もしかして、もう寝ちゃったかな……

「ノアはそんな子じゃないわ
知っている。」

それは情報網を必要としない、情報網が蛇足になるくらいに既知である。

揶揄されることのない強大で絶対たる力ではなく、誰からも卑下され疎まれ嫌悪されるような愛おしい意志の力で。

×××

「でも、どうやって？」

だ、大丈夫。僕に任せて！

「な、なんか、不安……」

僕だって、アリスのことは好きだよ

「え」

ち、違うよ！　そう意味じゃないから、大丈夫！

「よかった……」

エレメンタリーの頃から、ずっと助けられてきたからね。そのお礼だっと思っていたんだ

「アリスと、同じエレメンタリー？　じゃ、じゃあ、ノアとも、同じだよ」

え。ご、ごめん！

「いいよ。ノアは、影、薄いし……」

本当にごめん……

「謝らなくて、いい……よ。だから、方法を教えて……」

まだ不完全だから、少し待つて欲しいんだ

「……………」

明日には……ノアさんの誕生日には絶対に答えを出すよ！

「……うん、わかった」

それでなんだけど。明日は早めに家に帰ったりできる？

「うん、できる。ノア、帰宅部だから」

あはは、僕もだよ

「……………笑うところ？」

「ははは……。と、とにかく、明日は家にいて欲しいんだ。アリスのことだから、色々と策を講じてくるに違いない。そのことを考えると、時間には余裕を持っておきたいんだ」

「そういつ、ことなら。……うん、わかった」

ありがとうノアさん

「……ど、どういたしまして？」

ところで、今は十時くらいだけど、ノアさんの家には今誰がいるの？

「い、いない……。よ。けど、入れ違った、かも」
入れ違った？

「うん。今、ノアは、公園からかけてるの」

え？ 公園？

「そ、そう。公園」

もしかして、寒かったりする？

「平気……。ノアは、冬生まれ、だから……」

ああああ！ 本当にごめん！ 今度、何かお詫びをするよ！
絶対！

「あははは」

ノ、ノアさん？

「謝って……謝って、ばっかりだね。あ、あの、その……」

僕の話はルート、でいいよ。そういえば自己紹介もしてなかったね

「そうだね。ノアは、ノアだよ。よ、よろしく……。ルー……ト」

ああいいいいよ！ 寒いから早く家に帰ろう！ 風邪ひいたりしたら大変だよ！

「ん……。わかった」

今度、うちに遊びに来て！ コーヒー園をやっているところなんだけど。ホットココアをごちそうするよ！

「いいの？ ノア、迷惑にならない？」

そんなはずないよノアさん。歓迎するよ！ 妹もいるから、アリスも呼んで四人で一緒に遊ぼうよ！

「うん……！」

じゃあ、これからよろしくね、ノアさん！

「ごちそう……。ルート……」

×××

二月十六日。

あたしは学校へ向かう。

今日もまた、いつも通りが始まる。

いつもと違うことを挙げるとするのならば、それはあたしの首回り。

この暖かさは、家の強制力ではないこと。

「ありがとう、リズ……」

そして、もう一つ。

今日のこの日は、一年に一度巡ってくる、大切な日。

「ノア……」

あたしは学校へ向かう。

今日もまた、いつも通りが始まる。

【between】Always stay First（後書き）

【あとがき】

今回は結構ログの数が多かったです。

私としては初の試みなのですが、書いている最中は結構不安でした。

こんなに改行しているの？ って感じで。

最近の小説では、携帯などの描写の時に使われることが多いようですが、私は少し苦手みたいです。とても背德的。

ライトノベルなんかは地の文でも改行を多くすることが多いみたいです。レイアウト重視ということなのでしょうが。

最近活字離れが蔓延っていますので、それを防ぐ目的で、読みやすさを追求しているのかもしれませんがね。

いや、でも、まあ、アレですね。

私、小説とか読んだことないんですね。
はは。

通るべき、二人の脇道。(前書き)

【まえがき】

サブタイトルの意味は、何となくニュアンスで伝わっていると思います。

少しハートフルな雰囲気を目指しました。

通るべき、二人の脇道。

二月十六日。

「いい、アリス！今日はノアさんのところに行くよ！」

「はあ……。もう、わかったわよ……」

そこまで言うなら仕方がない、と言いたげで、なお気怠げ。

今朝登校してから、今 放課後に至るまで、言っているのに、この様子である。

でも、とりあえずは了承の意を示してもらえたので一安心できる。

「部室に顔を出してから行くから、少し教室で待っててもらえるかしら」

荷物を肩に担ぐなりそう述べられると、少し心配になる。

「逃げないでよ！」

「逃げないわよ」

「絶対だからね！」

「はいはい」

鋭く釘を刺すけれど、アリスは柔軟に対応してくる。それはさながら糠のよう。

抜けきらない心配をよそに、アリスはさっさと教室を出て行ってしまった。

今更追う気にはならない。

ここから先は僕ではなく、アリスとノアの二人の独壇場なのだから。

だから僕は、手を拱いて見ているしかできない。

でもきつと、それでいい。

アリスなら、ノアなら、遂行できる気がするから。

僕が昨晚、寝る間も惜しんで考えた対抗策を。

「ふふふ。あなたって時々、小学生みたいよね」

十分後戻ってきたアリスに、ダメ出しを喰らってしまっけれど。

きつとそれは、また別のこと……のはずだ。

「僕、何も言ってないよ!？」

間近に控えた受験のために、僕たち三年生の清掃と部活の責務は免除されることになっている。おかげで、放課後という長い時間を有意義に使うことが出来るわけだ。

早く帰って勉強をすることが必ずしも有意義とされるわけではないけれど、生まれた自由時間を遊びに使うことが、その反対の無意義にあたることは論を俟たないのだと思う。

そうになると、今回、勉強をすることもなく、または遊ぶでもなく、他人の家にお邪魔すると言うのは、どちらにあたるのだろうか。

結論から述べると言うのであれば、『その判断を下すのは行ってみなければわからない』という判然としない解答をさせてもらうことになる。

なぜならそれは

「ねえ。ちよつと」

僕より少し先を歩いていったアリスが、振り返る。

午後よりチラついていた雪が、学校を出るあたりで弱まったので、澄んで乾いた空気が一層強調される。その白の中で、アリスの髪がアクセントとして働いている。

ばさりと触れた毛先が直滑降する白雪を薙ぐ。

「どっしたの?」

「あなたは、ノアの家に来てどうするつもりよ」

「挨拶したら頃合いを見て帰るよ。その後はノアさんが何とかする
って」

「そんなこと言ってなかったわよ」

「え」

確かに、そんなことは言っていなかったけれど……。もしかして、アリスは昨日、ノアと連絡を取っていたのだろうか。何でもするって言っていたし、もしかしたら作戦のことも言ってしまうかもしれない。

秘密にしていた方がサプライズ感の演出がしやすいと思っていたのだけれど、聞かれてしまったのなら仕方がない。

「嘘よ。ノアが何かしてくれるのね？ 期待しているわ」

「え？」

いつも周辺状況を完全に網羅して、そこからくる余裕を高飛車な雰囲気でもって示しているアリスが……。いつになく素直だ。

これは、想定外の反応である。

やはり、逃げるための策……。だろうか。

「逃げないわよ。本当に期待しているわ」

進行方向に向き直って言うので、表情が見えない。

元々、人の気持ちを汲み取ったりすることが得意でないから、それはあまり関係ないことかもしれないけれど。

でも、『黒』かった友人が、突然『白』くなれば、それは非日常的に感じられる。

非日常には、不安を覚えるものだ。

「はあ……。なによ、もう。逃げないって言うてるでしょ？ 今日
はあの子の誕生日であって、あたしの誕生日じゃないのよ。気持ち
は嬉しいけど、あたしのことばかり気にかけるのは、あまり感心し
ないわね」

「そうだね。ごめん」

「謝るんじゃないくて、そこはもう少し怒りなさいよ」

「じ、ごめん」

「はあ……。まあ、いいわ」

アリスは一度言ったことを、決して曲げたりはしないのだ。それは頑固とも言っけけれど、僕は進んでこう呼ぶよう推す。

『強くて綺麗な、澄み切った意志』

夏の太陽の光も、冬の白銀の光も。

アリスのブロンドはすべての光を受けて、キラキラと輝く。僕には無い色で。

×××

「……い、いらっしやい、ませ」

叫ぶレベルの音量で名乗ると、すぐにドアが開いた。

現れたのは、今までに二回見かけて、一回電話をしたことのある人物。

一度目に見かけた時より黒髪の艶が落ちていることと、制服ではなく私服であるということが重なったせいで、一瞬、そのギャップに怯んでしまった。

でも、その声は電話で聞いたのと同じ……ではなく、心なしかキーンが高い。

「アリス連れてきちゃったんだけど……」

「何よ、その『何も考えていませんでした』的な口ぶりは」

昨日の電話で言わなかったと思ったので、一応、一言だけ添えておく。

「……だいじょうぶ、だよ。……中、あんまり外と変わらないけど、

入って……、どうぞ」

「ありがとうございます。それじゃあ、お邪魔します。ほら、アリスも早く」

「わかったから、引っ張るのやめなさい」

ノアさんが扉を施錠するのを確認してから、制服の裾を離してあげた。

アリスを制圧出来た気がして、何となく気分が良かったのに、もつたいない。

「とりあえず……そっちの部屋で、座って待ってて。今、何か作るから……」

ノアは、風呂場らしき扉と物置らしき扉の狭間を走る廊下の奥以前、通された居間を指差して呟いた。

「あ、いいよいよ。気、遣わなくて」

「で、でも……。作らないと、何もないから……。何も……」

「だ、大丈夫だよ！ あ、もし作るなら、僕も手伝うから！」

「ダ、ダメだよ。まだ、荷物も、持ったままだし……。そっちで待ってていい、のに……」

「い、いいんだよ。僕、料理好きだから、任せて！」

「ルート、お客さんなのに……」

罪悪感に苛まれたのが、ノアは俯いてしまう。

収拾のつかない遠慮合戦を尻目に、アリスは言われた通りトコトコと居間へ向かって行ってしまった。

いや、もしかしたら、アリスは空気を読んでくれたのかもしれない。

おかげで、渡しやすくなった。

「じゃ、じゃあさ。これ……じゃ、ダメかな？」

今日一日、僕のカバンの中で大人しく錘の役割を担っていたそれを取り出して、台所で御開帳する。

「チョコ……ケーキ？」

「ごめん。これ、コーヒーなんだ。あ、もしかしてコーヒーは……」

「うっん。ノア、コーヒーは好き」

「よかった！ 小さいけど二つあるから、後でアリスと食べてね」

「ルート、のは？」

何となく、言うべきことはわかる。

「僕のは、家にあるから大丈夫だよ」

けれど、それは売り物だから、きちんと勘定しなくては食べられない。ノアに渡したこのケーキだって、端材や余剰分ではなかった。僕はアリスのように、特別ノアを知っているわけではないから、共通の価値を持つお金を使うことしかできなかったのだ。

「これは、僕からの誕生日プレゼントということで、受け取って…
…もらえないかな」

ノアの好みの食べ物も、趣味嗜好も、これから知っていければいいなとは思っけど、それは今の僕にはわからない。

だから僕は、この『コーヒーケーキ』しかあげないし、あげられない。後から現れた僕が、二人の間に割って入るのは傲慢が過ぎるだろうから。

だけど、アリスなら、ノアの欲しがっている何かをあげることができると思うのだ。長い時間をかけて作り上げた何かを。

きつと、それを伝える時間くらいは、このケーキが作ってくれると思った。

「あ、ありがとう……！ ノ、ノア……！ やや、やばい、かも…
…っ」

「ど、どうしたの！？」

「な、泣いちゃいそう……だ、よう……」

「ま、待った待った！ まだ主役が！」

ノアが泣き止むまでの不自然な間、それからケーキをもつて一堂に会して今の調和がもたらされるまでの間　それはアリスにとつて一体どんな時間となったのだろうか。

これは推測でもなんでもない、ただの僕の主観論に過ぎないけれど、少なくとも『え？　嘘？　本当なのかしら？』くらいの驚きを感想として述べて欲しかった。

でも、まあ、後の祭り……なのかもしれない。

予兆に浸る暇もない！

そう音を上げていたのは、どうやら僕だけのよう。

「え？　それだけ？」

本当はアリスが、もしくは、無意識でやってしまっていたとかでノア自身が、この筆舌に尽くし難い絶妙な心の声を振動に変えて、これまた言い得て妙な言葉で周囲に知らしめるべきなのだ。

でも今、多分、僕がこの場で一番驚いている。

そして、その声の主も、多分、僕。

「何がっかりしてるのよ。前から言っていたじゃない。ノアなら心配いらないうって」

「え、ええええ……。だ、だって、あんなに……」

「ノ、ノアはただ……」

僕が思っていたほど二人の間に確執は生じていなくて、想定していた溝の深さは見当違いを通り越して、妄想の域に突入しそうであった。

ここまで読み違えると、冷え込み対策のガウンを着ながら宵っ張りで策を練っていた努力が、無駄になってしまったような気もしてくる。

ただ、それは良い無駄だけ。

……。
なんだ、良い無駄って。

「いいのよノア。ルートは思い込みの激しい人なの」

「それは、さすがに傷つくよ……」

「……だ、大丈夫だよ。ルートは……い、いい人だよ」

「あ、ありがとう、ノアさん……」

『自分の誕生日を忘れられていると勘違いしていたから、少し機嫌が悪かった』などという、出来過ぎた如何にもな理由を聞かされれば、誰だって、張り詰めていた神経が柔らかくなる。とりあえず平穩無事に終わって良かったなあ、と余韻にも浸る。それはもう、浸かり過ぎて体が柔らかくなったり、逆上せたりするどころの話ではない。

人生とか、進路とか、希望とか、そういうことを真面目に哲学していた手前、肩透かしが重大故に繋がったような感覚さえ覚える。

でも、また、結果は無事なのである。

それはきつと、僕を取り巻く環境が、クッションとして働いてくれたおかげなのだと思う。

アリスの体調は回復したし、ノアさんとも上手くやれそう。そもそも、失敗なんてしてなかったようだしね。さて……

僕は時計を確認して、三人でしていた話の収束を試みた。

「それじゃ、僕はそろそろ帰るね。妹もそろそろ帰ってくるころだし」

「え……、帰っちゃうの……?」

「そうよ。この人はね、妹のことが大好きだから、早く会いたくてしょうがないのよ」

「ちよつと、アリス！」

「そう、なんだ……」

「信じちゃうの!?!」

「……ち、違うよっ」

「まったく、鈍感はこれだから……」

毒づいて、アリスはノアの方を見るようアイサインをくれる。

そこにあっただのは、捨てられた子猫のように純粋な表情だった。

「大丈夫。また今度、一緒に遊ぼう」

カレンダーの方を一瞥して、また、ノアの方を見据えた。

その目配せの意味を理解してくれたのか、ノアは「わかった……」

と悲しそうに、でも、密かに『次』を期待したように、首を縦に振った。

畳んでおいた制服をまた着直して、外の寒さへ対抗できるよう、熱を装備していく。

そして最後に、鞆を背負って、嬉しい軽さを感じて、僕は歩き出すのだ。

「あ、あの……。ケーキ、ありがとう……」

「うん。どういたしまして」

背中にぶつかった声に振り返って、応える。

ノアは、もう一言、何か言いたげでいる。

「ノアさん？」

「あ、あのあの……」

モジモジとたじろぐノアの奥、座っているアリスが視線を散らしているのが見える。

それはアリスなりの気遣い、なのだろうか。

「なんでも言ってみて」

もし、心の声が聞こえたら、それをすべて受け止める。

それはきつと誰にでもできること。

でも、今、ここで、それができるのは、この世界のどこを探しても、僕しかいない。

言葉の綾だと揶揄されてもいい。

誰かが僕に声をかけたのなら、僕が誰かの声を聴いたのなら、僕は立ち止まって、その声を聴く。

例え伝わってきたことが『願い』で、僕に叶える力が無くて、ただ頷くことしかできないのだとしても、

聴く

聴くことは、今、僕にしかできないのだから。

「……さっき、ルートと話して、とっても……とっても楽しかった。でも、ルートは、違うかもしれない……」
うつん。

僕も楽しかったよ。

「ケーキ、貰って、とっても嬉しかった……。でも、ノアは、ありがとうとか、ごめんと言うの、苦手なの……」

大丈夫。

ちゃんと伝わっているよ。

「あ、遊びに来てって、初めて言われて、ノア……泣きそうだった。でも……絶対に迷惑になる……」

そんなことあるわけない。

こんなにも純粋な人を、迷惑だなんて思わない。思えない。

「ノアは、自分のこと、ノアなんて呼んで、子供だし……。アリスと違う学校で頭悪いし……。体洗えない時もある、汚い、の……。だから、ルートは、優しいから、我慢……してくれてる、のかもしれない……」

我慢なんてしていない。

目に見えるものなんてすべて変えてしまえるのだから、そんなに自分を貶めるのはやめて。

発言の度に後退するノアを追うように、一歩、そしてまた一歩と、僕はノアに近づいていく。

「だ、だけどっ」

その進行を止めるように、ノアが叫んだ。

発言者はその一言だけで、息が上がってしまったている。

勇気を振り絞る行為には、強い力が必要なのだ。

そして、その力はおそらく手に入りにくい。僕やアリスがそれを求めて迷い、戸惑い、寒空の下で震えるしかなかったように。

でもきつと、ノアにはもうその力があるのだと思う。

アリスと長い時間を共に過ごしてきた中で、自分の意志を伝えるために必要な力を見つけていたのだろう。

コントロールの利がなかったその力の使い方が、今きつとわかったのだ。

だから、僕がこれ以上、歩みを進める必要はない。

近づきすぎて、アリスとノアの距離感を崩してはいけないから。

「ノアは……、ノアは………」

大丈夫。

聞いているよ。

僕は、頷くだけでいい。

「ノアね！」

君の心の声を今、僕は聴いている。

それが例え叶えられない『願い』だとしても。

「ノア、ルートのこと……友達だと、思ってる、から！」
叶えられる願いだとしても。

「うん。僕もだよ！」

通るべき、二人の脇道。(後書き)

【あとがき】

喧嘩というのは、かなり激しく見えて、第三者が認識にしているよりも大したことなかったりします。当人たちが遊ぶ感覚で論争している、なんて時もあります。

私も友人と会話する時は大概、論争が起きます。

「人間は死んだらどうなる?」「世界の端はどうなっている?」「正しさと正当性の違いは?」「みたいな哲学形而上学的なことを、ファミレスで音吐朗々。

そういった問題には、明確な答えと言うものが、おそらく「人の数だけ」あります。いくら友人だからと言って、一も違わぬ思想を持っているわけではないので、論争が起きてしまっわけです。

でも、私は心の底から楽しんでます。

何となく次回は話に展開がありそうな気がします。

『tomorrow』繋結アバンチュール（前書き）

【まえがき】

ノア編にしてみました。

ノアは中二病という設定なので、サブタイトルはちょっとそれ風にしてみました。響き（けいけつあばんちゅーる）と見た目（繋ぐ+結う）を組み合わせた造語、趣深いですね。

ちなみに、アバンチュールはフランス語です。

『』サブタイトルなので、読まなくても話は繋がります。

ただ、今回はサブエピソードが長くなってしまったので二つに分けました。と、いうことは、こちらを読んだ場合は次のサブエピソードも読まなくてははいけません。

結構長い（1万文字程度）ので、「うわぁ眠い……」と言う人は、思い切って飛ばしてください。

今回は百合成分かなり多めです。

ではどござー。

【tomorrow】繫結アバンチュール

「……生まれて初めて、人に必要とされた」
それも、大好きな人に。

「……とても嬉しい」
この気持ちを言葉にするのには、ちょっと学が足りない。

「大好き……」
言葉にならなかった感情は、全部まとめて涙になった。

二月十七日。

今日は休日。

いつもなら、アリスが喜んでくれそうなゲームを創作したり、アリスのことを思い浮かべながらアリスの絵を描いてみたり、アリスの夢を見られるよう願って仮眠をとっているところ。

ゲーム、絵、勉強、運動、人間関係、お母さん……。頭の中の引き出しはよく整理されている方だと思う。

でも、どこを開けようと必ずアリスもついてきてしまう。
目的のものからそれだけを取り外して引き出しに戻せば事が済む

のに、できない。

そして多分、「もったいない……」とか「せっかくだから……」みたいなおまけ的感情のせいではなかった。そう。

言うなれば、それを引き出してしまった瞬間に、目的だったものが“おまけ”になってしまふ。

差出、収納を反復しているうちに、部屋は散らかってしまつて、もう、設置した布団が片付けられずに万年床と化している。その代わりに、引き出しの中身は整頓されたけど。

同じもので埋め尽くされた、引き出し。

ちよつと不便だけど、自分の気持ちはとても見つけやすい。

「アリス……」

その気持ちは中^{ちゆうぶ}でも大^{だい}でもなく、そして、きっと小^{せう}でもない。引き出しを引いてはその中に手を伸ばす。

「好き」

あと少し。

あと少し引き出しが大きかったら、大きな気持ちもとっておけるのに。いつでも取り出して伝えることが出来るのに。

その人との間にある、現実と言う名の隔絶が、部屋を萎縮させてしまふ。

「手を繋ぎたい……。ギュってしたい……。触れ合いたい……」

引き出しに入りきらない大きすぎる気持ち^{きもち}が、どんどん零れていく。

いつしか川の様になって流れ、どこかへ溜まって、それは違和感

の海になる。

部屋に充滿した狂恋の液体に窒息するのも、全然嫌じゃない。でも、それだと、大好きな人が部屋に入れなくなってしまう。だから、封を解いて、違和感の海へと合流させるしかない。

「キスしてみたい……」

創作したゲームと一緒に遊んだり、遅くなるまでお話ししたり、布団で温まったりして、海の温度が上がると、雲が出来て、また、振り出しの雨が降り出す。

そして、流す。

昔からずっと　好きになってからずっと、それを繰り返してきた。

だから、雪崩れていく時、どれだけ部屋が乾いてしまうのか、合流した後、どれだけ劣等感に襲われるのか、よく知っている。

「もっと……」

『痛いほど苦い』と言う単純な言葉では、到底表しきれないような、そんな二度と味わいたくない苦汁を、何度も舐めるようなものだった。

それでも、今までずっと諦めなかった。

いつの日か、この下らない『願い』が叶うよう、どうしようもない祈りが伝わるよう、素っ頓狂で馬鹿な想いが届くよう、信じて。

「もっと、先まで……」

「も、もう！　わかったわよ！　そ、そんな恥ずかしいことばかり思い浮かべないでくれるかしらっ。あたしだって……なぜか、こう、恥ずかしいじゃない！」

「…………ごめんなさい。だって、本当…………、なの…………」

「これから入浴だっていうのに…………全くもう。へ、変に意識しちゃうじゃない…………」

「でもノア、お風呂、入らないでいいって」

私服の胸元を軽く抓んで、羞恥心を露わにしてみる。

直接的なその意志表示だって、今のアリスにとればきつと『回りくどい』ように感じる、のだと思う。

「ダ・メ・よつ。もう少ししたらパ…………お父様が帰ってくるんだから。不衛生だなんて、もう絶対に言わせないんだから！」

「…………で、でも」

「…………さすがに、裸は、まだ…………恥ずかしい！」

「裸なんて、そんなの気にしないのっ。あたしなんて、毎日メイドに見られまくってるのよ！」

アリスは、「ほらほら！」と荒い手つきで衣服を脱がそうとしてくる。

中学生にもなつて、着替えを手伝ってもらうのには、多分、好きな人の前で裸になる以上の恥ずかしさがあった。

「じ、自分で、やる…………から」

「ふっふっふ。いいのよ、それで」

アリスがなんだか、いけない人みたいだ。

「何か考えたかしら？」

「な、なにもっ」

すぐに「好き」を降らせて、どうでもいい感情を流してしまおう。

「…………あ、あたしもすぐ行くから、先に行つてて」

「うん、わかった」

催促されて、浴場へと通じるガラスの扉を引く。

シャワーしか浴びたことのない者にとって溜まったお湯は、何だかとても不安だった。

もう少し狭くても良かった、なんてことを言ったらきつと、アリスに変態と罵られてしまう。

「あなた、本当にあたしのが好きなのね」

「ブフっ!? ブブク、ブク……」

大人でも詰めれば十人は入れるほどの湯船に、今は、二人だけである。

タオルを湯船に浸けてはいけないせいで、今、平常心を保ってられるのはお湯が呈する白濁だけ。

「隠さなくてもいいじゃない。どうせもう、全部知ってるんだから」

「……………ぶく」

そう。

沈黙には意味がない。口籠るのにも意味がない。隠し事にも意味がない。

でも。だったら。

言葉にしてもいい。

「ノア、後悔は、してないよ……………」

自分の決意が二人だけの浴場に木霊して、少し恥ずかしかった。

木霊の応えは、微笑みだった。

「ええ。知ってるわよ」

微笑みのアリスは、そう断言して距離を縮めてくる。

中央にいたから後退する余地は十分にあった……………けど結局、端まで詰められてしまう。

「……………」

「あなたが何も言わなくても、あたしはあなたが言いたいことがわかる。今は……………、『キスしたい』って考えているわね」

もう一度。

沈黙には意味がない。

ただ、即座に回答しないことで、この距離を心に反芻する時間を

作ることができる。

「……………」

「あなたの「好き」は友達としてじゃなく、恋人としての「好き」……なのよね？」

ゆっくりと、でも確かに、頷く。

頭が傾くと、湯船の白濁の中で、アリスの抜群なプロポーションのシルエットが主張していた。

「……………」

「また、色々考えてるわね……。ふふっ、あなたも面白いわ」

複雑に入り乱れつつもすべて同じ方向へ行ってしまう、そんな感情を見抜かれる。

それに呼応し熱くなる感覚も、知られてしまう。

「……………」

「でもね」

吐き捨てるよう言って、アリスは隣へ移動する。

少し離れてしまったと残念がれば、すぐに、左腕に柔らかい感触がやってくる。

頭が沸騰しそうになるのは、お湯のせいだと思いたい。

「ノア」

端的で冷めたその口跡は、沸点を急に上げていく。

一人で舞い上がるのは、自分の悪い癖かもしれない。妄想癖があるとも言つのかも。

でも、少し冷静になった頭でなら、この沈黙も理性でもって断ち切れる。

「……………な、なに？」

「あたしも……あたしのことも、知ってほしいわ」

「っ！」

「あなたは『あたしに自分のことを知ってほしい』って『願い』を叶えたのよね」

「……………」

「もちろん信じるわよ。現に、あなたのことは、全部、何一つ逃さず伝わってくるもの」

「……………」

「でも、そんな一方的な関係は…………、あなたとは嫌だわ」

「……………」

「だから、あなたにも、あたしのことを…………」

「……………ぶ、ぶくっ」

そう。

この沈黙には…………、意味があった。

「ちよつとノア！？ 逆上せそうなら言いなさいよ！」

『アリスに自分のことを知ってほしい』

それが夢に託した『願い』だった。

アリスとすれ違ったあの日、家に帰って、対処しきれない不安と悲しみを背負いながら、声を上げて泣いた。隣人に注意されるまで、ずっと。

それからの行動はあまり記憶にないけれど、夢を見たのだから多分、寝てしまったのだと思う。

そう。夢を見た。

それも、この国の夢見る女の子なら誰もが知っている、あの都市

伝説の夢を。

普通の人ならきつと信じなかったと思う。だけど、幼い頃からその伝説を疑ったことのなかった自分にとって、『願い』という単語は『願い』が叶うという言葉は、狂うほど嬉しかった。

ようやく、幸せになれる。

今まで、ずっと、信じていてよかった。

初め思い描いていた『願い』は、『何度でも叶えられるようにしたい』だった。そうすれば何を間違えても、何かが欲しくても、すべて望みどおりになるから。

『アリスと仲直りしたい』と願えば、すぐに仲直りすることだって可能だ。重ねて、『お母さんが楽になれるだけのお金が欲しい』と願うことだってできる。取り返しのつかないことになってしまったら『世界をやり直したい』、誰かが死んでしまったら『蘇らせたい』、学校へ行くのが嫌なら『勉強をしなくてもいいくらい賢くなりた』い』、寒くて外に出たくない時は『今日を休日にして欲しい』、夕食を作るのが億劫なら『豪華な夕食が食べたい』と願えば、すべては叶う。

少し思考を巡らせた。

叶わない『願い』を叶えられるのに、叶えられる願いすらも、その力に依存してしまっている気がする。でも、きつと、その概念すらも変えてしまえる。

おかしいと思った。

望まない現実を変えるのに、どうしてか、 unnecessary理由を探していたから。そうして見つけた壮大な理由と紐付けて、盛大な『願い』を率いていたに過ぎないから。

必要な過程全てを省略して、結果だけを手に入れるなんて、虫が

良すぎるのにもほどがある。

ずっと与えられてきた苦痛を対価に支払って、『何度でも叶えられるようにしたい』という『願い』を叶えることは、釣り合っているのか。

有り得なかった。

誰一人の命も救えやしない、ましてや誰かの役に立つ能など持たない自分にはきつと、小動物一匹分の価値すらもありはしないのだから。

そういう結論が、出てしまった。

だから、自分に支払うことのできる範囲内で、『願い』を叶えることにしたのだった。

『アリスに自分のことを知ってほしい』

そう願った理由は二つある。

一つは、今述べた通り、自分で支払うことが出来ると思ったから。『願い』のルールに則れば、『願い』の範囲は一つかすべて。

全てを選択すれば、自分のプライバシーを売ることになるから、少しくらいは等価に近づけると思った。

そしてもう一つは、怒りの感情から。

誕生日が忘れられているという事実が原因となった、今までになくはつきりとした感情だった。本当は違ったけど。

それら二つを兼ね備えていてかつ、都市伝説の夢を信じてきた自分を裏切らない『願い』がそれだったのだ。

「ノア、この服は、ちょっと……着れない、かも」

アリスの部屋のベッドで逆上せた頭を冷やした後、バスタオル一枚だったことに気付いて、着替えを要求した。

そうしてメイドの人が持ってきた召し物は、入浴前まで着ていたお気に入りの長袖Ｔシャツ&ジャージ長ズボンではなく、いわば、豪華絢爛そのものだった。

多分、アリスが言っただけで聞かせたのだ。

「何よ。いいじゃない。よく似合ってるわよ」

ほとんど純白に近い仄かな水色のワンピースの上に、高級感のある装飾が施された温かみのある薄い桃色のボレロを着せられる。ワンピースにもボレロにも皺一つなく、プリーツが入っているところはきつちりと折り目がつけられている。ワンピースに柄はないけれど、ところどころに小さなリボンが付いているし、裾にはフリルがあつて、とても可愛らしい。

衣服の良質さに加えて、アリスに高級石鹸で洗われたこともあつて、肌触りは何も着ていないかのように快適だった。着てるけど。

「腕が、出ちゃってる……けど」

「そういう服よ。あたしが小学生の時の服なんだけど、なんだかびつたりみたいね。最近キツくなってきたからあげるわ」

「え」

「この服で、小学生？ む、胸元が……少しだけ、緩い……です……」

「わ、悪いよ……。ノアなんかには、勿体ないもん……」

「いいのよ。着れない服を持っていてもしょうがないでしょ。誰かがノアが着てくれた方があたしも嬉しいし、作った人も、服も、きつと喜んでくれるわ。まだまだ沢山あるから、あとで選定しましよ？」

今着ているこの服でさえも、自分が持っている私服と比べたら、

比べること自体愚かな気がしてくるほど高級な、一流ブランドの物だ。

クローゼットの中にはきつと、貧しさとは無縁な高尚で格別の、同じような衣服がたくさんあると思う。

もしかしたらこの服は、その中でも末端的存在なのかもしれないけれど、その服を着た自分を見て思う。

「『服を着ている』じゃなくて、『服に着られてる』……」

でも。

それでも、アリスが似合うと言ってくれるなら、着たい。

それに、匂いが……好き。

「……うん。ありが……とう……」

「よしよし。それでいいのよ」

そう口ずさんで、優しく髪を梳くように頭を撫でてくれる。

アリスは、貧民からすれば高級服に相違ない私服に身を包んでいて、何となく社交的で大人っぽい趣がある。その雰囲気纏っているせいで、こちらは保護される子供の気分になってしまう。

ならばこのまま眼を閉じて、さらさらと髪がほどける心地の良い感触と温度だけを、心に反芻したい。

ずっと、ずっと……。

「ずっと、して……」

「うふふつ。ノア、犬みたいね。でも、もう少しでお父様が帰ってくるから、また後で。我慢できるかしら？」

「……大丈夫」

離れていく温もりを心で追う。

実感は出来ないけれど、アリスはきつと、追っていることに気付いて振り向いてくれる。

「ノア。一つだけ約束して」
「ん……」

振り向いてもらえるよう追いかけて、撫でてもらえるよう媚びて
そう。アリスの犬になってもいい。

アリスの心の癒しになれるなら、何だってする。

「あの人に何を言われても、絶対に泣いちゃだめよ。きつとあの人は、嫌な言葉をかけてくると思う。でも、絶対泣いちゃだめよ」

言われ慣れているから大丈夫、という形の無い自信を掲げて、黙
って頷くバカな自分がいる。

だからもう一度。

アリスのためなら、何だってできる。

「心配しないで。あたしがついてるわ。……今度こそ、絶対に認め
させてやるんだから！ 今度こそ天井を」

「あ、あのっ」

「ご主人様の意気込みを割いてでも、忘れずにしなければならぬ
ことがある。

それはきつと、どんな駄犬でも知っていること。

「ノア、頑張るから……」

「「ご褒美、ください……」」

「ふふふっ、もちろんよ。あたしのできることなら、何でもしてあ
げるわ」

また撫でられて、わんわん泣なきたい気分になった。

【tomorrow】繫結アバンチュール（後書き）

【あとがき】

犬系彼女と猫系彼女どちらが好きか（もしくは彼氏ですね）……、最近よくその質問を耳にしますが、極論を言うと、「彼女（彼氏）にしてみたら 系だった！」という方が正しい気もします。

これ以上は、鶏が先か卵が先か、言葉が先か意味が先か、みたいな話になりそうなので、終わります。

次回は今回の続きです。

あ。

当たり前か。

【never die】愛想アヴェクトワ（前書き）

【まえがき】

安堵と解決のノア編後半です。
アヴェクトワ。

【never die】愛想アヴェクトワ

時間があつたので、メイドに混ぜて料理を作ろうと思った。すると、アリスと一緒に作りたいと申し出てきた。

さすがにアリスに作らせるわけにもいかないと思ったので一度は断った。四名のメイドたちも、「お嬢様、恐れ多いです！」と口を揃えて婉曲的に遠慮していた。

しかし、折れなかった。

アリス参戦後二十分で、メイドたちの遠慮の意味が分かった。

「う、うるさいわね。別にいいじゃない！」

「うん。いいよ。ノアが……作って、あげる……」

「それは……そうね。ありがと、ノア」

アリスの前では“含み”も含みとして伝わらない。だからと言って素直に披瀝できるほど、自分の心は丈夫ではなかった。

露呈する羞恥心を必死に誤魔化そうと、配膳された夕食に視線を飛ばした。

大きなテーブルに並んだ料理の内、四分の一はアリスの料理、また四分の一は自分の料理だった。半分はメイドということになる。

メイドたちは調理師の免許を持っているらしく、片付けや盛り付けに至るまで抜かりない手際の良さだった。配膳された食事の配置も、色使いと取りやすさに十分の配慮がなされている。

比べて、自分で作った料理には圧倒的に色味が少なかった。

牛肉とジャガイモの煮物の色、椎茸だけ乗った茶碗蒸しの色、生姜とソースで炒めた豚肉の色……。

出汁とか素材の味に気を配り過ぎて、見た目がとても地味になってしまったようだ。

「そんなことないと思うわよ。食べれば誰だってわかるわ。ノアが、どれだけ心を込めて作ったのか」

「……そ、そうかな」

アリスが作ったのは本日の主食、オムライス。

上に被せる卵焼きが、チキンライスほど上手くいかなくて少し不格好になっているけれど、アリスの一生懸命さと気持ちはたくさん伝わってきた。

アリスの両親のものには『アホ!』と書いてある。

アリス自身のものには別段何も書いていない。

そして。

ハートマークが一つ。

これは、そういう気持ちと受け取っても良いのだろうか。

「うふふっ。そんなことより、あなたって料理が上手いのね」

「あ、ううん。いつも作ってるから、作り方知ってるだけ……」

お世辞とわかっていても、褒められるととても嬉しい。

帰りの遅い母のために、毎日料理を作っていた甲斐があったと思える。

「さつきね、味見してたメイド長がべた褒めしてたわよ。『この味、一体どうやって……?』とか」

母は書き置きでしかお礼の言葉をくれない。会えば多分、何かしらの言葉はかけてくれるだろうけど、会えないのでは意味がない。

でも、きつとその言葉は、自分の娘に対して投げかける、とても敷居の低いものなのだと思う。

例えば、母以外の他人に褒められたことは、無かった。

称賛の声を貰って、どうリアクションすればいいか、全くわからない。

でもアリスは、ただただ微笑んで、雪みたいに白い柔らかい手で頬を撫で、褒めてくれる。

「お、お世辞だよー……」

喜んでいいのか、悦んでいいのか、歡んでいいのか、慶んでいいのか、わからない。

けれど、嬉しかった。

それは多分、称賛も何も関係ない。

触れてくれた、ただそれだけのことに、心が躍る。

全てを知る目の前の人は、理路整然と言葉を紡ぐ。

それがまた、日常を作る。

「ふふっ！　どうかしらね。あのメイド長が他人をほめるこ

「ただいま帰った」「今、帰りました」

っと、帰ってきたわね。あとは臨機応変に頼むわよ、ノア」

午後八時を回った今、普通の家の、ごくごく自然な流れなのか。

それすらも判然としない自分が、他人の家の普通の流れを壊しても良いのだろうか。日常は自分だけのものではなく、人それぞれに存在しているのもなのだ。そこに勝手に干渉して、非日常を演出しても、良いのだろうか。

いや、良いはずはない。

でも、今白旗を振ることは、信じてくれたアリスを裏切ることになる。

そんなこと、絶対にできない。

「アリスは帰っているのか？」

「はい。お嬢様はお帰りになられています」

廊下に響く足音が近づいてくることに、鼓動が速くなる。

手の震えを抑えようとアリスの服の裾を握りしめるけど、感じる悪寒には力及ばず対処できない。

だから、ただただ俯いて、アリスのことを思い浮かべることに努めたい。

「ただいま帰った」

「あら、お帰りなさい、パパ」

「アリス。パパではなくお父様と……」
見られている気がする。

尋常じゃないほどの威圧感が、頭頂に突き刺さる。

今顔を上げれば、圧倒されて逃げ出してしまいかもしれない。

「アリス。どういふことが説明しろ」

きつと、次の一言ですべてが決まる。

その瞬間、これからの自分の配偶が決まる。

「説明、ね……」

ルートが丸一日かけて考えてくれた作戦を、今ここで。

それは稚拙極まりない作戦だと言われるかもしれない。

でも、万全を期して、本来の目的から大きく逸れてしまふよりは、
断然マシ。

「友達じゃなければいいのよね」

安全策を安全策を……と繰り返すうちに目的が霞んで、いつのま
にか進むことが目的になってしまう。

成功を掴んだアリスの両親がそうであるように、それはきつと悪
いことではない。

けれど、進むのはアリス。

「ああそうだ。だから、さっさと家に

「恋人よ」

はあ……。お前は何を言っているんだ……？ 意味の分から
ない冗談はやめろ」

思わず脱力したような気の抜けた口調で、脅される。

アリスは一度「ふっ」と鼻で笑って、言い返す。

「冗談？ 冗談なんかじゃないわ」

両親がしようとしているのは、アリスの進み方を指定するものではないと思う。

道を照らそうと手を尽くしているのでもない。

「いい加減にしるアリス！！ 認めないと前も言ったはずだ！！」
通う学校も、付き合う人も、着る服も、行動も、気持ちも、何もかも決められて、アリスはそれを達成するだけで、成功が保証される。

それは目的^{ゴール}地を決めてしまっていること、なのだと思う。

ゴールは確実にあるのに、別のマスをゴールにしてしまっているのだ。場合によっては、出た賽の目の先をゴールにすることもあるかもしれない。

でも、アリスはもつと先に進みたいと言っていた。

自分は、それを応援したいと思った。好きな人が叶えたい願いを、一緒になって叶えたいと思った。

ただ、それだけだった。

でもそれは、下を向いてはできないこと。

「いい加減にするのはパパの方よ！ あたしの欲しい物一つわからないなんて、そんなのパパ失格よ！ あたしの欲しい物は縁談じゃない！ 高い洋服じゃない！こんなに大きなテーブルじゃない！ 無駄になるほど大量の食物じゃない！ 最初から明るい道じゃない！！」

顔を上げよう。

どれだけ厳しくて、苦しい現実がそこにあつたとしても。目も耳も心もすべて塞ぎたくなるような、残酷な光景が目の前に広がっていようと。

隣で声を大にして自分を叫ぶ好きな人がいれば、どんな恐怖^{トラウマ}にだつて立ち向かえる気がするから。

自分は、アリスを応援したい。

今までずっと、応援されてきたから。それで、好きになつてしまつたから。

これはきつと、自分に課せられた責務だ。
いや、そうでなくてもこの気持ち、臆病な自分を突き動かして
くれる。

「あたしの欲しい物は

立ち上がったアリスがこちらを一瞥して、深呼吸を一つする。
アリスは頷いて、また、話を進める。

あたしの欲しいものはあたしが決めるわ！ いい！？ よく
みてなさいよ！！」

「ちょ、ちよつと、アリ んムツ!!??」

擡げた顔に、アリスの顔が飛び込んでくる。

胸のときめきが体を駆け巡るより速く、そのお返しをこちらから
求めるのよりも早い。

額でもない、頬でもない、もつともつと敏感なところ。訪れた柔
らかさと心地よさを、共有できる場所。

「ああ……」

それ以上を望むには、経験と時間が不足していた。

けれど、それ以上でも以下でもない目の前の現実を、今、狂うほ
どに愛おしい柔らかさと、懐かしくて大好きな匂いだけで、感じて
いた。

すぐ離れたくなくて、ずっとこのままでいたくて そんな思想
いを、開放された心に反芻する。

それに呼応して体が熱くなっていく。それに反応して体の自由が
利かなくなっていく。

とても心地が良くて、今まで感じてきた劣等が、報われる気もし
た。

一つ一つ、現状を顧みしてみる。

もう、すごかった。

語彙能力も不足していた。

「……………」
二人、愛を感じる中、場違いの初々しさが周囲に呈されていく。でも、それは、誰が見ても一律、絶対に、確実に、百パーセント。

『キス』だった。

妄想の中でだけ相手をしてくれるはずの人が今、現実で、してくれている。

こういう時は多分、目を閉じるのが正解だろうけど、できそうにない。

初めて視界に入ったアリスのお父さんも、どうやら開いた口が塞がらないみたいだ。アリスのお母さんも同じに見える。

「アリス……。泣きそう……」

今、泣いてしまったらアリスとの約束を破ることになってしまう。どれだけ惜しくても、それは自分が許せない。

だから、「もう、大丈夫だよ」と思った。

「ふあ……。……………ア、アリ、ス」
息継ぎ目的で離れた自分の口から、かろうじて呼名が聞こえてくる。

心の声が漏れ出るとは、きつとこのことなのだと思った。

「あ、あたしは今、この子が欲しいわ！ 認めないと言うなら、縁

「談なんて金輪際受けないわ！」

それはきつと、一人の少女が犬を拾ってきて、親に許可を貰うのとそこまで違いはない。

犬はただ、聴いている事しかできない。

ただ、大好きなご主人ヒトの愛を信じて。

沈黙。

アリスは一步も引く気はない様子。両親もまた、呆然と立ち尽くしているだけで、一進一退はない。

テーブルに並べられた手つかずの料理は、どこか空しさを漂わせ、場の空気を常に窮屈へと収斂させる。その中で、動揺を隠そうと必死のメイドたちは、両親バーサス子供という試合のレフェリーを務めるよう、部屋の四隅を固めていた。

テーブルの中央で高貴を演出する蝋燭の火が、プレッシャーを受けてゆらゆら揺れる。

「もういいわ。これ以上待っても仕方なさそうね」

味方であるはずなのに感じていた圧迫感は、その言葉を境に消滅する。

緊張していた空気が、一気に緩んでいく。堰き止められていた呼吸の波が再開されて、突然、肩が楽になる。

でも、またアリスが口を開けば、場の空気は力のかかった弦の様にピンと張ってゆく。空気も重く、息もし辛い。

「あたしの気持ちは絶対に、決して、断じて、変わらないから……、明日にしましょうか。ほらノア、パジャマに着替えてもう寝ましょ」

場の空気同様、アリスにされるがままであった。
手をぎゅっと握られて、強引に連れられて、居間を後にする。
去り際、アリスのお父さんの顔を見たけれど、明日が不安になる
だけだと思って、すぐ目を逸らした。

x x x

初めて手を引かれて歩く。心が温かい。
前を歩くその人に、母の影を見る。ドキドキする。
自分の布団と同じ、大好きな匂いがする。胸がきゅんてなる。
繋いだ手に汗が滲む。……恥ずかしい？

「あれ……？　もしかして、アリスも緊張してた？」

「流石にするわよ」

アリスの声は少しだけ震えていた。誰もいない静かな廊下だから
よくわかる。

両親の圧力に耐えて、自分の意見を述べることに。それがどれだけ
すごいことなのかはわからない。

けれど、キスされて恍惚に浸りながら半分気を失っていた人間と
違う、ということとはわかる。

きっと、アリスは戦っていたのだ。

そんな、愚^{じぶん}か者のために。

「違うわ。あたし自身のためよ」

「……本当？」

気を遣ってくれているのではないだろうか。

「ああもう、面倒ね。あたしの考えてることも伝えられれば便利な
のに」

それはノアもお願いしたいくらいだけど、「でもそうするとプライバシーが……」と言下に否定されると、複雑な気持ちになる。

確かに、プライバシーはアリスによって侵されている。

でもそれは、自分で臨んだ『願い』なのだから、後悔はない。むしろ『自分のことをアリスに知ってもらおう』ことができて嬉しい限り。

「あら？　あたしはあなたのことなら前から何でも知っていたわよね？」

「……そ、そうかも」

手作りのゲームと一緒に遊んだり、衣服を譲ってもらったり、髪の毛を梳かしてもらったり、頭を撫でてもらったり、同じ布団で寝てみたり、すべてを共有したり……。

過去にしてきた会話が、痴話言に思えてきて恥ずかしくなり、顔を手で覆いたくなる。

「もらって、ばっかり？」

「そんなこと、全然気にしなくていいのよ」

「で、でも……」

考えても見れば、『自分のことをアリスに知ってもらいたい』という『願い』も、アリスからもたらされるものである。

普通、人から何かを貰ったら、お返しをするものだ。

自分がアリスに何かをあげたことはあつただろうか。

必死で自分の記憶を検索するけれど、望んだそれは見つかるはずもなく、ただ、我儘な自分に対する嫌悪と、存在ごと負担してくれているアリスへの罪悪感に苛まれるだけだった。

「はあ……」

そんな罪悪感は、アリスの溜息によって、一刀両断された。

手を繋いで先導してくれていたアリスが不意に立ち止まり、振り返った。

そして、握る手を片手から両手に増やして、さらに距離を縮めてくる。

「ノア。あたしはあなたに色々貰ってるわ。それも、一生かからな
いと返せないくらいのものをね」

「……ノアが？」

これほどまでに、アリスの心を知りたいと思ったことはない。

それを知ることが出来れば、同じことをして、一生をかけて、返せるから。

「それって、なに……？」

「うふふつ、あなたにしかできないことよ。それは簡単に見えて難しい、でも、とても大切なこと……だと思つたよ……って、何恥ずかしいこと言ってるのあたし」

簡単そうに見えて難しい。

でも、とても大切。

そして、恥ずかしい？

……。

何をすればいいか、わかった。

「よ、よしっ」

ここからは他のことを考えて、カモフラージュしよう。

そうでもしないと、恥ずかしくて、今度こそ腰を抜かして倒れてしまつかもしれない。

「……ね、ねえアリス」

「何かしら……ん？　そういうばあなたシジミが好きだったわね。

明日はシジミ料理を作りましょうか」

好きな食べ物に隠して。

「目……。目を……」

「目？　ええそうよ。確か、オッドアイって言うのよね。ルートはコンプレックスだと言っていたけれど、全然綺麗だし、本当に羨ま

しいくらいよね」

青と緑。あの人の瞳の色に隠して。

「目、目を閉じてっ」

「え？ ええ……？ な、なによ。何する気よ」

「……お、お返し。誕生日の……」

「まだ何もあげてない気がするけど……、まあいいわ。……はい、閉じたわよ」

もう、限界。

「ええいままよっ」

当初の狙いとは三十度ほど逸れて、頬の一番柔らかいポイントへ。ついさっきアリスがしてくれたものと比べると、二段ほど格が低い。でも、その等級によって幾分か羞恥も相応のものになる。

案外弱かった達成感のおかげで、次への意気込みが生まれてくる。そして、一生を賭ければきっと返済できるだろうと、感じたその温かさにほんの少しだけ溜飲が下がる。

「……もう、いいよ」

目を閉じて、静止したままだったアリスに一言添える。

「あ、あれ？」

「ア、アリス？」

添えられた言葉に気付かないのか、アリスは目を閉じたまま口を開こうともしない。

もしかして、してはいけないことをしてしまったのだろうか。

そして、嫌われてしまったのだろうか。失敗して、しまったのだろうか。

「あら？ もしかして、これで終わりなのかしら？」

「……お、怒ってる、よね……」

「ええ。もちろんよ」

楽園から一転して地獄へと叩き落されるような絶望を味わう。恥ずかしくて熱くなっていた体も一気に冷めて、銀世界の吹雪中で凍えているような感覚になる。

「ごめ」

「もっと、してくれないのかしら？」

その言葉に救われて　掬われて、また、温かい家ほこに連れてこられる。

「浮かれたり、滅入ってみたり。心が不安定ね」

「ア、アリスのせい……だもん」

アリスの匙加減で、すべてが決められる。

そのことに、これ以上ないくらいの愉悦を感じる。

「マゾヒストなのね、ノアって」

アリスが微笑みを浮かべながら、右の頬を指で小突いてくる。

笑ってくれて嬉しい。

触れてくれて嬉しい。

「な、なんでもいい、もん……！」

アリスさえ傍にいてくれれば。

言わずとも伝わる、この気持ち。

「でもあたし、女なんだけど」

「ア、アリスは……アリスだよ」

今も昔も変わらない。

そしてきつと、これからも変わらない。

「あたしはあたし、か……」

アリスは、窓に近づいて、真っ黒な闇の帳をバツクにしてガラスへと自分の姿を投影していく。

一面の銀世界が、アリスの髪を輝かす役を申し出るのなら、心を明るく照らす役には是が非でも立候補したい。

自分の黒では、黒すぎる夜の闇に飲み込まれてしまう。

飲み込まれて、息が出来なくて、寒くて、どうしようもなくなつて、立ち止まるしかなくなる。

けれど、アリスの影でなら　アリスの隣でなら、自分が持っている黒でも、息ができる。

窓に自分の姿を映して、光の横に並ぶ。

弱すぎるほどに淡い自分の色に、少しばかり自信を失う。

でもきつと、それがアリスを一段と引き立たせる。そして、そこに映っている自分は、それを望んでいる。

だから今度は、自分からアリスの手を握った。

「アリスは、アリスだよ」

その影に、自分がいる。

影は、どこまでもついていく。

「そうよね。ありがとう、ノア。その言葉、救われる感じがするわ」

「うん。アリスも、あり……がとう」

とりとめのないやり取りが、尊い。

それは、今までずっと感じてきたことと同じだった。

「でも、あたし恋愛とかしたことないんだけど。どうすればいいかとか、わからないわよ。しかも女同士なんて、尚更よ」

「それは、ノアもあんまり、わかんない……」

それはこれから知っていければいいと思う。

それまでは誰よりも傍にいて、お互いがお互いのことを想っていればいいと思う。

そんな日常を、これからも続けていければいいと思う。

「そうね。その辺のことはルートの妹が詳しくそうね」

「そ、それもいいけど……。……二人で、見つけたい、かも」

「ふふっ、そうね。じゃあ、寝ながら考えましょうか。あたしたちのこれからのことを」

「うん！」

体が冷えてきたことが伝播したのか、ちょうどいいタイミングで

アリスが手を引いてくれる。

でも、心の中にある一抹の蟠りが、窓枠の自分をそこに留めさせた。

「……ねえ、アリス。ノア、約束、ちゃんと守ったよ」

いつまでも、思想おもう。それは、不確定要素。

ずっと、思想おもう。それも、不確定要素。

大好きなアリスあなたのことを。これは変わらない、確定要素。

「あら、欲張りね。でも……いいわ、ご褒美をあげる。あなたの誕生日プレゼントも兼ねて、あなたの願いを何でも聞くわ」

そこで撫でてしまったら、当初のおねだりの意味がなくなってしまう。

でも、気持ち良いからいいかも……、なんて気にもなる。

「せっかくなんだから、もっと欲を出していいのよ」

願いが叶う。アリスが叶えてくれる。

それは、叶わない『願い』が叶うよりも、遥かに嬉しいこと。

「そ、それじゃあ……」

空を飛びたい？

アリスのところへ行くことにしか使わないなんて、恥ずかしい…

…かも。

賢くなりたい？

アリスと同じ学校へ行った後はきつと、もう、不要だ。

お金持ちになりたい？

けれど、今、自分の心は、幸せで満たされている。

未来を予知したい？

見えるのはきつと笑顔だけだと、今は信じられる。

過去をやり直したい？

でも、多分、同じ道を辿って、今に戻る。

進むべき道を決めたい？

それはもう、見つけている。

「何かしら？」

それは簡単そうに見えて、難しい。

「こ、これからも……ずっと……」

でも、大切。

「ずっと……ノアと、一緒に……」

そして、少し恥ずかしい。

「一緒に、居て欲しい……」

「ふふふっ。意外と欲張りなのね。もちろん……いいわよ」
心を読まれた。

でも……、それでも構わない。

「それじゃ、とりあえず」

名前を呼んでくれたから。

必要としてくれたから。

「誕生日おめでと、ノア」

いつまでもどこまでも、ついていく。

いつまでもどこまでも、すぎ。

「……生まれて初めて、人に必要とされた」
愛で満たされることで、それを実感する。

「……嬉しい」

言葉にしなくても、伝えることが出来る複雑な感情。

「大好き……」

言葉にならなかった感情は、全部まとめて微笑みになった。

【never die】愛想アヴェクトワ（後書き）

【あとがき】

ノアと言う子は、一人称がノアなのでそのまま書くと諄いです。なので文章化には少し工夫して『自分』という表現を使ってみました。

意外としつくりきますね。

百合百合した雰囲気、感じていただけましたでしょうか。

次は本編に戻ります。

多分、次で最後です。

やり直し、僕は辿り着く。(前書き)

【まえがき】

小さな括りではルート編、大きな括りでは中学生編が、これにて閉幕です。

ここまで読んでくださった方、感謝感激雨霰にございます。まとめの話ですので、また改稿するやもしれません。

思い出しましたら、ぜひまた覗きにいらしてください。

皆さんの心の中に、温かいものと百合力的な何かがあっさりと香っていれば、冥利に尽きます。

では、本編です。

やり直し、僕は辿り着く。

「……受験が控えているので、遊びは自重するように。それでは皆さん、気をつけて。さようなら」

受験が近づいてきて、部活だけではなく午後授業も大方削られる。

間近だ間近だと、くどくどしく言い訳していたクラスメイトの目の色も、その大部分が必死の赤に変わっていたのは、とても印象深い。

僕はと言えば、だいぶ前から勉強をしていたせいで、緩急を感じるほどアクセルをかけることが出来なかった。受験という人生の転機への特別な思い入れの有無で言えば、苦悩していた数週間前の方が先生方の評価は良さそうだ。

それでも、周囲の熱気に充てられてか、幾分か焦燥は感じていた。

特筆すべき熱気は、後ろの席の友人からのものだろうか。

「アリス。今日もノアさんのところ行くの？」

「今日も部活無しだし、無論よ」

アリスはそういう部活の無い日、国立アカデミー進学を決意したノアに勉強を教えているようだった。

ちなみに、アリスが苦手な科目を教える時は、僕も駆り出されることもある。

「あの子、意外と飲み込みが速いのよ」

「なんか嬉しそうだね、アリス」

「そ、そうかしら？」

僕がノアの家から帰った翌日、アリスはノアを家に招いたらしい。その後二人の間に何があったのか、その詳細は知る由もないけれど、事態は良い方向へ向かってくれたと、感想を述べることは出来る。

「まあ、でも、そうね。最近は、楽しいから」

「うん。それなら良かったよ」

アリスの話によれば、メイドとして雇用する形ではあるが、父親にノアを認めてもらえたらしかった。おまけに国立アカデミーへの進学も、縁談話を継続させることを約束に、了承してもらえたと言っていた。

こんなにも嬉々とした、喜色満面のポーカーフェイスは、今まで見たことがなくて、なんだかとても新鮮だった。

ただ、最後の最後の会話が、「本当にいいんだな?」「いいわよ」という軽佻な二つ返事だったらしいことに、少し不安は残るけど。

「アカデミー、三人で行けるといいね」

「そうね」

とにもかくにも、進むべき道はしつかりと見えてきた。

いや、道は初めから見えていたのかもしれない。

葛藤が足に絡みつくように蔓延っていて、期待にも似た不安が霧となつて視界を遮っていて、僕は僕たちは、進む道を選択することが怖くなる。

隣の道にはなんの柵も無く、明るく見えて、そちらへ進みたいくなる。逃げたくもなる。高みへ上つて、不安要素を無くしたくなる。そうしている間に、本当に進みたい道を見失うことだってある。それが迷いとか戸惑いとか違和感という形で、心の中を埋め尽くそうとしてしまう。

霧や霧を生んでいるのが誰であるか、重い足枷をはめてしまうのが誰であるか、蹠踉めいてしまいそうになる蔓の種を植えるのが誰であるか、今の僕ならわかる。

それは他でもない、自分なのだ。

友人や家族は、そのことに気付かせてくれる存在なのだと思う。
僕にとってのアリス、アリスにとってのノアが、そうであったように。

『間違ってもいい』

アリスはそう言った。そして、僕もまた、同じことを言っていた。
その時の気分に左右されて出た勢いのある言葉であったと、今は思う。

だけど、それは顰に倣ったような軽薄な言葉ではなく、自分で思
って自分で放った、とても重みのある言葉なのだ。

だから、とても意味があった。

間違っていることに気付けないのは、自分で選択していないから。
間違ってもいいから、自分の『願い』に続く道の方を向いてみよう。
そこにはきつと願いがあつて、弱くても必ず、光を放っているはずだ。

僕は世界をやり直している。

でもそれは、道を引き返したのではなく、高台へ続く脇道から
先へと、ちゃんと進んでいったのだ。

見失った光を再び求めることで、僕はそのことに気付けた。

これから僕は『二十二』の死を背負って生きなければならぬ
のだろう。

だけど、僕はもう、何もせずに立ち尽くしていた、光を見失つて
いた、あの時の僕じゃない。

僕は今を生きている。これから生きていく。僕にできることを
精いっぱいやって、少しでも明るく、今よりもっと輝けるように
力の限りを尽くす。

でも、もしかしたら、責任を問われることだつてあるかもしれな
い。それだつて、他人からすれば、当然の願いなのだから。

「返して」と言われても、僕にはできない。「戻して」と言われ

ても、僕にはできない。

だけど、その『願こゑい』は、確かに聞こえてくる。

僕はその時、その人たちにとる、光になっていているのだと思う。今はまだ、誰かの道を照らせるほど明るくはない。

けれど、いつかは、その声を聴いて、確かに輝けるよう。

僕は言う。

「僕があなたの願いを叶えるよ」

x x x

アカデミーの合格発表日。

僕たちは笑って、そして、泣いた。

笑顔の輝きが涙で乱反射して、僕たちの進む道が明るく照らされる。

やり直し、僕は辿り着く。(後書き)

【あとがき】

中学生編、これにて閉幕です。

初めは原稿用紙二十枚程度の短い話を想定していましたが、まさかこれほど長く(文字数換算で原稿用紙四百枚ほど)になるとは……。書き始め当初、「あれ? これってW X O S Sとかまどギと似てる……?」と戸惑っていた自分が懐かしいです。その点は、色恋沙汰で結構解消できたと思います。

中学生編中学生編と言っているあたり、想像はつくと思いますが、あります。

そうですアカデミー編です。

やりますアカデミー編。

急な話が多かった中学生編だったので、アカデミー編ではもう少しライトノベル的なイベントも増やしていこうと思います。新キャラも出したいところ。

女の子同士の恋愛のほとんどは、長い年月と葛藤を経て煮詰まって、やっと成就するものである(と勝手に思っている)ので、アカデミー編ではそういったところも表現していきたいですね。

触れられなかったリス編、ノアの事情、ルートの秘密、『願い』の夢、アリスのこれからなどなど、色々な問題が山積み。

でも、まあ、はい、アレです。

そう言う感じで、やっていきましょう。

それでは今章最後に、重ねて御礼申し上げます。

「ありがとうございます!」です。

今回は、次章『アカデミー編』突入。

『ready』明くる日も明くる日も、春。(前書き)

【まえがき】

第二章『アカデミー一年生編』が始まりました。多分、色々なイベントがあるので『アカデミー一年生編 その二』とかあり得そうです。

プロットを練りに練っており、まだ本編を書いていないのですが、「早く載せたい!」と思い、とりあえずさわりとして『サブエピソード』挟みました。

『ready』明くる日も明くる日も、春。

「じゃ、またの」

彼女はそう言うと、すぐに校舎の方へ向き直った。

生温かい中に冬の厳しさを残したような乾いた春風に、茶けたシヨートヘアが靡く。同じ風に乗せられて舞い散る花びらの鮮やかさが、威風堂々と向けられた背中の方へ奥行きを感じさせる。その色を映して銜う、彼女の髪には、また別の、一種の郷愁のようなものを感じる。

僕は、そんな光景を前に、どこか心の中で、もしかして、失望されたのだろうか？ と、疑心に駆られる。

それを表に出すまいとした結果が、淡泊な別れだった。

でも、その背中　物悲しいような、何かを求めるような、そんな背中を見ても、何かを悔いるような気持ちは芽生えなかった。

それが、さらに僕の焦燥に拍車をかけていた。

一体どうすれば……

雲をつかむような無価値な逡巡に、始まりの春は答えをくれた。

何もかも始まったばかりなのだ。彼女との付き合い方も、これから決めていけばいい。今日の勝敗が全てを決めるわけではない。

温い風が優しく頬を撫でるように、ゆっくりと吹き抜けてゆく。それからワントempo遅れてやってきた新緑の芳香に、思わず目を瞑る。

僕にも、彼女にも、等しく風が吹いている。

平穩に、確かに、現実に。

だから、僕は彼女の表情を見ることができなかったのかもしい。
い。

違いを見つけるのが怖いから。人と違うことは怖いから。
でも、それはきつと、彼女も同じだと思つ。

なら、僕は手を差し伸べる。

求められた『また』に、僕もまた、『また』で応えよう。

「また明日

僕が見た彼女の表情は、舞い散る花と同じ。

とても綺麗だけど、しかし儚くて、多分に寂しさを含む。

これからの新しい自分を素直に歓迎できずに、美しかった過去に
打ちひしがれる。でも、少なくとも未来への希望を抱いてもいる。
変わることが怖いけど、今のままいることも怖い。

矛盾する感情を一緒に持っている、不安。

僕が苦悩してきた違和感のように、答えは存在せず、正しさもな
い。

でも、彼女は僕とは違つた。

きつと、彼女は迷つてなどいないのだと思つ。

だから、こんなにも美しい。魅力的に感じる。見ていたいと思え
る。

周囲に感銘を与える艶めく花の色も、それを陰から見守り飾る葉
の色も。すべての色には必ず意味がある。

彼女は、微笑む。

その青緑は真ひすみつ直ぐに、カラフルに彩られた未来を捉えて。

「サクラ」

それが、その花の名。

『ready』明くる日も明くる日も、春。(後書き)

【あとがき】

一人書いたら次、また一人書いたら次、というふうに書いているので、おそらく、アップする時は、いっぺんに五話くらいになると思います。

今回は本編に入っていきます。

新しい環境になるので、作者の方も心機一転して書いていきたいと意気込んでおります。

変化を許容して、春。(前書き)

【まえがき】

新章『アカデミー編』が始まりました。

前章でできなかった色々なことに手を出していきたいですね。

本編をどうぞ。

変化を許容して、春。

身を置くための日常の一部が変わると、それにつられて他の部分も変わる気がする。

きつと、それにつられてまた、別の何かが変わって、つられてまた別の何かかと、連鎖が起きたりもすると思う。

新聞や情報誌の『新生活』のコラムにそういう話題が載っているのを見ると、口の軽い文学者である父が「コラムは半分遊びだ」と言っていた手前、新しい環境に託けて話題に挙げただけの文言な気がしてならない。

では、実際のところはどうか。

その事実を知るために、他人に意見を求める必要はなかった。

「ネクタイ、難しいな……」

数週間前まで存在しなかった難しさが、首周りと指先の神経を中心に、日常の確かな変化を感じさせていた。

ただ、アカデミーの登校時間はミドルの時ほど早くはないし、遅刻に対してもかなり寛容なので、別段焦りを感じることはなかった。それがまた、今までの日常との変化を連れていたけれど。

「よし、できた！……のだろうか？」

形は記憶にあるものと同じだったけれど、大きさが大分違う気がした。

今から母に聞きに行こうにも、すでにコーヒー園に行ってしまったので、あまり良い結果は見込めない。多分、見つけれなくて遅刻してしまうだろう。

父はネクタイを締めたことが無いタイプの人間だし、頼みの綱である妹のリズはすでに学校へ行ってしまった。

つまり。

「万策尽きた……」

頭をカクリと落として、ぼやく。
でも、それ一つでこれからが決まってしまおうようなことは、決してない。

そう樂觀視できるのは、ごくごく自然なことだと思う。

悩んで悩んで苦しんで、その果てに出た決断が求められる時があるならば、その逆に、悩まずに出した直観的な回答を求められることもあるのだ。

今が、まさに後者。

「アリスなら、知ってるかな……」

博識で常識人の友人に期待して、僕は制服のベストを着る。

いまだ抜け切らない新品特有の繊維の匂いが、クローゼットに吊るされたミドルの残滓とのコントラストを演出する。三年間という長い時間を見据えて長くした袖が、いつぞやの入学式と似た初々しさを醸している。

そんな姿を小さな鏡に映して、一回り成長した自分を反省する。

それは同時に、不慣れな日常への期待と不安もしみじみと感じさせた。それが何だか新鮮で、とても心地がいい。良い緊張感とはきつと、このことを言うのだと思う。

さて、この感覚は、一体あと何日続いてくれるのか。

最近の僕は、そんな平穏で平凡な愚問に小胸を躍らせながら、部屋を後にしていた。

今日は例外的に遅起きになってしまったため、ダイニングには人の影が無かった。

一人で朝食をとるのは嫌なので、いつも通り早く起きたかたところだけれど、昨晚遅くまで妹の宿題を手伝った（ほとんど僕がやった）おかげで、寝坊してしまったのだった。

テーブルに昨日の残滓を感じながら、その上に乗った自分の筆箱を回収する。

「いただきます」という孤独の嘆きを聞いて、僕はトーストを齧る。空しさを紛らわすために、隣の椅子に置いておいた学校用の小型リュックサックにも、筆箱を食べさせてやる。

当然、返事はない。

リュックは喋らない、と言う必然に僕はひどく安堵して、溜息をつく。

高天井の大きな天窓から差し込む温かい光が、ダイニングの観葉植物の緑をより一層生き生きと輝かせる。春の涼しく乾いた風が光と同じところを通り抜けて、葉を揺らす。光沢がぼやぼやと移ろいで、光の粒がたくさんあるようにも見える。

その花弁から香る仄かな白が、トーストに塗りたくったチョコレートクリームトクリームの黒を邪魔する。

僕は漆黒のコーヒーを飲んで上塗りして、再び、普通の孤独を知覚した。

「……………」
また早起きしようと思った。

「ちょっとあなた。二分、遅刻よ」

「ご、ごめん」

「大丈夫……。ノアは、怒ってないよ……」

「う、うん」

三人の待ち合わせの場所は、ノア宅前の公園中央にある時計柱と言うことになっていた。

国立アカデミーは、この団地をずっと進んでいった先　街の外

れにあるので、待ち合わせるのにとても都合が良い場所ということになる。三人全員が知っている場所ということもあつた。

僕の家からは徒歩十分と言つたところだろうか。

待ち合わせに遅れるようなことは滅多にないとは思つけど、そんな油断をしていると、今日のように、友人から容赦ないムチ攻撃を喰らうことになる。

「二分でできることがこの世にどれだけ存在すると思つているのかしらっ？」

「た、たくさんあるね……。なんかアリス、キャラ変わつてない……？」

振るうムチの威力が、ミドルの時の比ではない気がするのだが。

さばさばと冷酷に振るわれるそれを、僕は全力で躲そうと試みる。すべて躲しきることができれば、景品としてアメが与えられるのが常だ。

「別に？ 変わつてないわよ」

「そ、そうかな……。えええ……？」

頭を傾げるようにして放たれた冷気が、春の陽気に逆らうように、僕の瞳を凍らせてゆく。凍り付いて動かなくなつた視線の先には、頬にかかった髪を左手で払う高尚な仕草があつた。否が応でも入ってくる視覚情報を、冷えて静かになつた頭でもつて処理していく。

ミドルの時よりも幾分か大人らしくなつた制服に合わせてか、どこなく髪を束ねるリボンの色も大人しい寒色寄りになっているようだ。でも、逆にそれが太陽の様な髪色フロントの艶を引き立たせている。

春というよりか夏っぽい雰囲気があるから、憂い色のリボンが一層儂げに映る。

「言い訳は、歩きながら聞いてあげるわ」

ミドルの時は劇毒だつたセリフが、猛毒になつている。

成績トップクラス、部活のエースを張る運動万能ぶり、程よく引き締まつた抜群のプロポーションで容姿端麗と非の打ちどころのない完璧超人に、僕みたいに変哲の無い凡人は返す言葉が無い。許さ

れるのは、せいぜい頷いて謝ることぐらいか。

「……お、怒らないで、アリス」

「ごめんごめんと頭を上下させていると、ノアが音量控えめに宥めた。」

アリスの影に隠れているせいで、せつかくの綺麗な黒髪ショートが褪せてしまっている。華奢な体つきに見合ったその声は洗練された鈴の音の様に澄んでいて、聴いてもいない歌声を妄想して陶醉してしまいそうになる。

出会った時していた眼鏡は、今はしていない。暗い印象を与えるからと、アリスに注意喚起でもされたのだろう。

「わ、わかったわよ」

「ご、ごめ……ん、ルート。今日の朝、アリスの　むう!?!」

「そそそ、それは今言わなくていいわっ」

ノアは今、アリスの家で住み込みメイドとして働いている。

家にいる時間が無くなってしまうようにするためということも、待ち合わせ場所を選んだ理由にもなっていた。

どうやら給料も貰えるようで、ノアの母もいくらか楽に過ごせるようになったら良かった。

「ごめん、なさい……」

「いいのよ、わかれば」

アリスが頭を撫でると、ノアの俯いた顔が次第に上がってくる。

ブロンドの女の子が黒い犬を可愛がっているように見えなくもない。そうなると、僕は部外者になるのだろうか。

「そろそろ歩き出した方がいいんじゃないかな」

三人で登校したいって言ったのはアリスじゃないか！　などと心の中でだけ上気しつつも、上辺は部外者らしく横槍を入れてみる。羨ましさを感じていないと言ったら、それは確かな嘘になった。

アリスは、僕を思い出して深くため息をついた。

「全く……。どの口が言うのよ」

「どうやら、アメはすべてノアにあげてしまったようだ。」

僕は仕方なく、塩辛い^{なみだあめ}涙雨を飲むことにした。

振り返った先も、春。(前書き)

【まえがき】

今回は少し長めかもしれませんが。
眠い方は明日読みましょう。

振り返った先も、春。

いつもと違う顔ぶれで、いつもと違う道を通って、いつもと違うところへ行く。

ありふれた日常が、新しさという非日常に塗り替えられてゆく。そして、その非日常が繰り返されてまた、それがありふれた日常になる。

痛みを伴うことが普通だとするならば、今の僕は普通ではないということになるのだろうか。

赤茶色のレンガでもって作られた校門を潜ると、僕はいつも振り返る。

自然、校門の両サイドを固める二人に視線が吸い込まれる。個々の美しさは華奢にあるのに、二人揃うと大胆で優雅になってしまう謎めいた不思議すら持ち合わせている。仰げば、手を繋ぐように伸びた髪が交わり解けて、風が吹くたびに息の合ったしなやかさを見せる。その背中だけを見て、僕は尊敬の念に似た畏怖の感情を抱く。堂々たるその息吹には、何物にも代えられない懐かしさ。目を瞑っても、決して突然いなくなったりはしないような、確かな存在感。その足元で眠りたいとさえ思える。そこでさらに、息吹を感じられたら言うことなしだろう。

時間が許す限り見ていたい、そう思える先輩が二人もいた。

「ああ、和だ……」

さらさらと爽やかに梢を揺らす先輩を拝んで、今日も僕は独り言ちる。

「この心地よさがきつと、新しい日常になる。」

「あ。予鈴」

感慨に浸る僕に、命令調子の猛りが水を差す。

周囲を見渡すと、すっかり人の影が無い。どうやらアリスとノアも、すでに教室へと行ってしまったらしい。無念にもクラスが別になってしまったのだから仕方ないことなのだけけれど。

少しばかり惜しいけれども、入学早々にして『遅刻するほど木が好き』なんてレッテルを張られてもらっては、後々になってアリスに笑われてしまつて惨めに違いない。

僕は踵を返して、自分の教室へと向かう。

ミドル一年生の時は一階、二年生の時は二階、三年生の時は三階。そして、アカデミー一年生の今は、一階。

なんだか来年の教室の位置がわかつてしまうような気がして、目的地まで廊下を行く足取りに、砂を噛むような味気の無さが混じる。でも、新しい環境が生むぎこちなさが、それを十分にカバーしてくれている。

教室から聞こえるがやに、ドアが開きつぱなしだったミドル時代ちやうど前を思いながら、新鮮な『閉まったドア』を開く。

遅刻気味だったせいもあってか、視線が一箇所に集まるのを感じる。

その一箇所とは、僕のこと。

おそらく、強い意志などのない反射的なものなのだろうけど、人数が人数なだけにかんりのプレッシャーを感じる。目立つことが苦手なおかげで、そんな無意識の重みですら勝手に小さくなってしまふ。

突っ立っていると余計目立つと思ったので、萎縮したまま身を屈めるようにして、こそこそと自分の席に向かうことにする。

烏合の衆の一部に溶け込むと、ドアの音によって静寂に支配された空気も同時に解けて、元の賑やかさに戻る。僕に集まった視線も散っていった、壁に押し付けられるような圧力も消えた。

出席番号が名前の五十音順なので、ミドルの入学時とほとんど変わらない窓際の席だった。今は、顔と名前の一致が済んでいない入学直後の時期なので、席替えもまだしていない。喧噪の中、一人静かに着席して思う。

どうしてそんなにすぐ会話ができるのか……

学術都市を掲げるこの国は、聞こえが栄華な割にとても平和で緑も豊かだ。大型店舗が二つ、広大な居住区、自然の綺麗な公園の数々……。田舎と言ってしまえばそうだけど、必要なものは全部揃っているのだ。

そんな環境の中にあるアカデミーで、かつ学費が安いともなれば、人気が出るのは当然なことである。今年の競争率は確か五、六倍ほどだったか。

しかし、記憶が正しければ、僕やアリスが通っていたミドルの受験生の数では五、六倍にはならない。ということは、他校からいや、もしかすれば国外の学校から受験している人もいるかもしれない。

それは、初対面ということに相違ないのではないだろうか。

「なあお前、何部に入る？　ちなみに俺はテニス部かな」「お前、さっき元サッカー部って言わなかったっけ？」「はは、どうせ女子目当てだろー！」「

「ねえねえ、学校どこだったのー？」「ワタシは隣の隣の国から来たんだー」「おお！　ってことは、今は一人暮らし！？」「ウソ、マジすげえ！」「

右も左もわからない。いや、多分これは、右にも左にもついていない感じが。

相手のことをよく知ろうという意志があちこちで放たれて、飛んで、跳ねて。教室を舞う大量の情報が視覚から、聴覚から、遂次脳へとダイレクトに応酬する。

要するに今、この教室は、とても混沌としている。
でも、さしたる焦りは感じない。
僕にも一つだけわかることがあったから。

「あ、あの……さ」

ぶつきら棒を演出しながらも、僕は左右を諦めてきつちりと前を向く。

しかし、その放言は教室に飛び交う雑言の一つとして処理されてしまったようだ。

僕は、その人の名前を呼ぶ間柄にはまだ早いと踏んで、肩を軽くつつくことにした……の、だが。

「はむうおん!?!」

つつこうと構えていた人差し指に、柔らかさと生温かさと、それから湿潤が訪れる。勢いが良かったせいで、第一関節は確実にその湿り気にやられることになる。

これまでの学校生活を振り返っても、今ほど、教室の混沌たる喧々譁々に感謝したいと思つたことはなかった。まだ数日しか経っていないけれど、きつとこの先もないと思つた。

何が起るかわからないカオスの中に、『木好き』のさらに上に行く『変態』というレットルの存在を危惧して、僕はすぐさま指を引つ込め謝罪する。

「じじじ、ごめん!! ほほ、本当にごめんなさい!!」

誤って 謝つてばかりの日常に、安心する自分がいる。

片目を開けて見てみれば、先ほどまで僕の指が挿しこまれていたところが、まだポカンと開いたままになっている。その影響はそこだけではなく、驚愕の表情をぴったり固定するまでに及んでいた。

教室で、しかもこんな朝早くから変なことをさせてしまったのだから当然か。二人きりで、夜ならいいとか言う意味ではなく。

入学式の後に教室で行われた、自己紹介を兼ねたレクリエーション

ンで一度話したただけの関係の分際で、一体何をしでかしているのだ、僕は。

「うわぁ……！ 朝起きるところからやり直したいよ！ という憂慮を顔に出してしまわないよう、また俯いていると、前方から何やら聞こえてきた。」

「むふふ……」

それは不敵な笑みの効果音か。

「むふふふ……」

はたまた、愉悦を露呈する羅列か。

「むふふふふふ……」

わからない。

でも、『俯いていたらわからない。知りたければ面おもてを上げる』という明るい意味に受け取っても、あながち間違いではない気がした。『むふふ』という字面には、そういう力があった。単純に『顔を上げて』と解釈できたら、また一つ明るくなれるだろうか。

僕は引き続き、俯き気味の片目で機嫌を見る。

「ぬはは！ そんなに固くなるでない。そんなことでわしは怒らんから、安心せんか！」

その人は、そう言って僕の肩口にポンポンと、軽く二回叩いてきた。

大袈裟に、でも、嫌みな仰々しさは感じられない。こんなにも無邪気に笑う人は、生まれて初めて見たと思えてしまう。

こちらまでつられて笑ってしまいそうになる失礼を堪えて、僕は安堵の声を口にする。

「よ、よかった……」

「よいぞよいぞ。わしの方こそ、急に振り向いたりして悪かったのう」

右手で自分の髪を撫でながら笑う。終始気取ることはない。

その一挙手一投足が生む『愛くるしさ』が、緻密に計算されたように心を掴んで逃避を許さない。均整の取れた健康的な面持ちと、

少しくセのある鼻にかかった声質が普遍のあどけなさを感じさせる。言うなれば『熟練の子供らしさ』だろうか。

撫でられるのに従って暴れる薄紅を広げたような紅茶色の毛先のいじらしさと、左右でサイドの髪の高さが違うというシンメトリーゆえの不安定さに、また幼さを感じる。ただ、それでいて制服をしつかりと着こなしているというギャップに、得も言われぬ敗北感を味わうことになるのは言を俟たない。子供が好きな人なら、この子を理想形とするかもしれない。

子供と違う要素を一つ挙げるとするのなら、訛った口調が生む『精神年齢』に限る。

「うっん。僕は大丈夫だよ。それより、く、口の中とか怪我しなかった……かな？」

試しに子供をあやすよう言ってみるけれど、違和感が激しい。

でも、誰のためにもならないその試みすらも包み込むように、言葉を返してくれる。その受け答えはまるで、経験を語る先輩や一日の長で弁を振るうお姉さんのよう。

「うむ、大丈夫じゃ。お主も、わしの中ナカは温かかったかのう……？」

「ま、まあ……うん、温かかった……かな」

「んはは！　そうかそうかー！」

心の中で　やっぱりノリの軽いおばさんかも　と訂正して、僕は制服の裾で指の先を拭いた。

クラスに馴染むのが若干困難に感じられるのは、どうも僕だけの話ではないようだ。

僕とアリスとノアの三人は友人関係の好よで、慣れるまでの昼休みは、ここ　開放屋上庭園に集合して昼食をとることに決めていた。

「それで？ あなたはどんなのかしら？」

三階建ての頂上というそれなりの高さでもたらず展望を楽しむ暇もなく、回答を請われる。

この場合、納得のいく答えというのは、おそらく世界のどこを探しても見つからないだろうと思われる。そういう不利な問いには、被害を最小限に抑える答えを返すのが無難だ。

「僕も、二人と大体同じ」

「まあ、分かってたわ」

やれやれと大袈裟に両手を広げるアリスの隣で、ノアが発言する。視界の奥に、歓談しながら昼食をとる男女各二名を捉える。学校生活を楽しんでいるように見えるか見えないかで言えばおそらく劣ってしまうであろうノアも、アリスの影で真価を発揮する黒の存在感でアイデンティティを確立させているように見える。

クラスで馴染めないと言うのはつまり、そういうアイデンティティを入手するという意味にもとれる。ノアは特に、アリスにくっついていて大人しいキャラとして定着しそうだ。

何にもなれない僕は少し焦りながらも羨んで、耳を貸すのだった。

「ルートは、部活……やるの？」

「部活か……」

タイムリーな話題が、胸に深く突き刺さって痛い。

実は、『部活動ガイド』と銘打たれた部活紹介が、三時限目と四時限目の二時間を使って行われていたのだ。

人気のある部活は新入部員の獲得が安定しているからまだしも、そうではない部活の紹介たるや、もう必死そのものだったということがとても印象に残っている。良い結果を収めた部活には高い部費を支給するというシステムは、どうやらミドルの時とそこまで差異は無いらしい。

「どうしようかな……」

僕が胸を痛めてまで悩んでいる理由は、とても簡単。

「残念ながら、バトン部は無かったわね」

購買部で一番売れているらしい『塩パン』なるものを頬張りながら、アリスは片手間に僕の傷口へ塩を塗りつける。屋上に渦巻く春の荒風がまた、ヒリヒリと沁みる。

国技であるカーリングの部活動が無いわけもなく、アリスは引き続きカーリング部に入部するようだった。それ以外の部活からの勧誘もあつたらしいし。何より、迷う必要が無いのが大変羨ましい。

でも、僕自身部活に対して、迷いや葛藤があるかと言ったら、それも何か違う気がした。

確実にあるのは、一種の“引け目”だろうか。

ミドル時代にバトン部に所属していたのも、部活動への所属が強制されていたため仕方なく、だったのだ。それは、やりたいことが無かったというよりは、やりたくなかったというニュアンスが近いかもしれない。

どちらにしても、僕は逃避するために選んでいたのだ。帰宅部同然の部活、バトン部を。

『部活動所属』という名目は同じでも、アリスと僕とは意味が全く違った。

僕が足早に家に帰って無下に時間を削いでいる間も、アリスは目標達成に向けて辛い練習に汗を流しているのだから。部活で手に入られる何かを、僕は確実に持っていないのだから。

そして、汗の片鱗すらも感じさせない余裕を見せられて、僕はいつも引け目を感じてしまうのだ。

「この学校は強制じゃないわけだし、普通に帰宅部でもいいと思うのだけど」

気を遣ってくれたのか、アリスは僕と目を合わせずに話していて障りが無い。

「そっだよね……」

確かに、この学校には部活動への所属が自由なために、帰宅部の存在が認可されている。だから、僕には迷いが無いのだと思う。

引け目という柵だって、勝ち負けを気にするような性格ではない

僕にとってみれば、それはただ引け目としてそこにあるだけなの
では、一体何に悩んでいるのか。

僕はその答えを、ミドル時代に同じ部活動に所属して……いや、
所属していなかった仲間に尋ねるべく、アリスの影を見る。

「ノアさんは帰宅部？」

「んとね……、ノアはカーリング部……だよ」

予想だにしない回答に目が開いて、僕の表情は「えっ」で固定さ
れる。平然と食事を続ける様子からして、アリスはノアからすでに
聞いていたのだろうか。

処理を急いでいると、言い放った下から「でもでもっ」と訂正が
入った。

「マネージャー……だよ」

「そ、そっか。すごいね、ノアさん……」

そんなことはないと言葉尻に付け足していたら、自分に自信を持
つてくれていただろうか。

やりたいことを見つけて、やりたいことをやれるだけやるという
ことが、どれだけ素晴らしいことなのか、僕にはわからない。一度
は理解したはずだったのに、今は、忘れてしまって、失ってしまっ
てわからない。

……だけ……。

僕はノアにも引け目を感じてしまうのだろうか……

確かに怖かった。

少なくとも僕の近くを歩いていた人が、急に遠くへ行ってしまっ
ような気がして。

追いかけても追いかけても僕は周回遅れだから意味がないけれど、
隣を歩くことはできるのに。それすらも叶わなくなってしまうよう
で。

でも、きつとそれは、僕が一位になっても最下位になっても同じことなのかもしれない。

辿り着くための資格が無かったら、何も始まりはしないのだから。
「ルート」

食べ終わった塩パンの袋を畳みながら、アリスが僕の名を呼ぶ。
尚も、視線は合わせずに。

視界の奥で弁当を食べるノアの視線も、展望に赴いている。

何となく向かい合うのが億劫に感じられて、僕もアリスに耳を向けて、目は逸らすことにする。強いられることはなくとも、呼名に返事した。

「昔、サッカーやってたわよね、確か」
目を逸らしてよかったと思った。

表情から何かを読まれることも、こちらが読んでしまうこともない。僕は何も答えずに、ただ黙るだけでいい。

「サッカー、やってみたらどうかしら」
「……………」

「前にリズから聞いたんだけど、あなた全国大会で」

「ごめん。今日は、ちよつと気分が悪いから、先に教室に戻るね」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよっ」「ルート、行っちゃおうの………？」
アリス情報網に何が引つかかっているのか、それを僕が見れば部活に関連する引け目云々の悩みが晴れるかもしれないと、そう思った。

第三者の話を聞くということも、時には重要なことだと思うから。
ただ、それを知るということは、やり直そうとも変えられないだろうしようもない現実を、再び身に刻むということにもなる。それまで望んでいたすべてを忘れて、自分のやりたいことを失った“あの時”の気持ちを思い出してしまう。

僕は“あの時”すでに、リズから話を聞いて、現実を知っていた。
そしてその結果、僕は泣いた。

失敗してやり直し、悩み苦しみ悶えて、納得のいく結論に辿り着

いて……。様々なことを経験して、確かに僕は変わったと思う。
でも“あの時”、僕は僕になったのだ。そしてそれはきつと、何
度やり直したとしても同じ結末になるだろう。僕が僕として生きる
道を、僕は選んだのだから。

だから、僕は逃げる。

間違ってもいいと信じて、逃げるしかない。

「部活ですべてが決まるわけじゃないんだ……、これでいいんだ…
…」

春風が吹くたび傷口が沁みる、そんな空しい痛みには耐えきれず、
僕は屋上庭園のドアを閉める。

校門の先輩二人の目にはきつと、酷くだらしがなくて意気地なし
に映るだろう。反対に、僕の目にその姿を映せば、劣等感を感じて
しまつに違いない。

もう、教室の机で眠ろう

僕は、できるだけ人目につかないルートを通って、逃げるように
教室へと駆け込んだ。

忘れもしない。忘れられない。

逃げる。

それは“あの時”に覚えたことなのだから。

「来週末にはクラス対抗の球技大会も控えていますので、この後部
活を見学に行く人はあまり身を入れないように注意してくださいね。

あくまでクラス対抗ですから？」

担任の先生はベテランらしく、丁寧ながらも絶妙な口ぶりで、緊張を解くようクラスに笑いを生む様子は、手慣れたものを思わせる。

そんな先生が、僕の顔を見たら、多分悲しむだろう。

だから、先生の「さよなら」の合図が聞こえるまで僕は、机の上に敷いたカバンに突っ伏していた。

なんだか、昼休みの終わり辺りからずっと、目の前が暗い気がする。

そして、部活に入らないとこれからもずっと、目の前が暗くなる気がする。

仕方ないと思いつけるのを断ち切るように、頭に違和感を感じる。

「ちよいつ、ちよいつ」

どうやら、髪の毛で遊ばれているようだ。

擦ったくなつて、遂に顔を上げると、そこにいた少女はにっこりと柔らかく微笑んだ。

「具合悪いのかと思ったのじゃ」

「えと……、ごめん」

「何がかの？」

「心配かけちゃったなと思って」

「なんと！……優しいのう」

「そ、そんなことはないけど」

「それじゃ、優しさのお返しをしなければいかんのう」

そう言つて、少女は椅子から立ち上がると軽そうなりユックを背負い、僕に帰り支度をしよう催促した。

言葉に寓された意味を理解するよりも、荷物をまとめる方が断然速かった。

だから。

「部活、一緒に見に行くのじゃ！」

「え？」

正直、ショックを受けた。

「まだ、何も決めてないのじゃろ？」

部活ではなくて『何も』という言葉を選ばれて、さっきまで突っ伏していた理由が露呈してしまうような恥ずかしさを感じる。

でも、確かに僕は、その言葉の通りだった。

何もかもが初めてのこの環境に戸惑って、自分の在り方すらわからなくなつて。

僕はこの新しさの中で、何を日常にすればいいのか、どんな日常がこれから輝かせるのか、見失ってしまったのだ。

人生の岐路に立たされたわけでもなければ、世界をやり直すような大事変に遭遇したわけでもない。

それなのに、僕は今、迷っている。

それなのに、僕は今、楽しくない。

「え、ええと……」

「なんじゃ？ だめなのかのう？」

鮮やかな花を思わせる彼女の手に引かれていけば、いつかは、花の園のような楽しいところに辿りつける気もしてくる。

でも、自分で選択していなければ、進んでいる道の正しさすらもわからないのだ。いくら楽しくても、いつかは偽物だと気付いてしまつたろう。それは、アリスと一緒に悩んで考えて、気付けた。

「ダメ、ではないけど僕、部活には……」

辿り着いた先に何があるか知っている道 既に通って知っている道が、僕にはあつた。

そして僕は、そこにはなるべく近づきたくはなかった。

間違っていると、確かに経験して、知っているから。

僕は自然と俯いて、彼女の威勢を少しだけ拒んでいた。

でも、彼女は僕の手をとって歩き出し、

「んんー！ いいのじゃいいのじゃ！ 今はわしが見に行きたいだけなのじゃー！」

振り返り、

「いや、お主にはこう言わんとダメか」

視線を交えて、

「わしは、ルートと見に行きたいぞ」
僕に願う。

その言葉で、見失った日常の明るさが見つかったわけではない。ただ、それを見つける方法が　光を遮る煤を払う方法が、分かった気がする。

大きく頷きながら、僕は歩みを少し速めて、彼女の隣に並ぶ。

「わかった。見に行くよ」

何かを求められることが、こんなにも嬉しい。感謝されるべきなのに、感謝したくなってしまふ。優しさのお返しをしたくなってしまふ。そうして次々に連鎖すれば、世界はきつと優しさで満たされる。

そんな簡単なことを、今までずっと忘れていた。忘れてしまふほどに深く、淡い記憶だった。

それは、幼い頃に誰かと誓った、世界が明るくなる方法。

『世界が優しさで溢れますように！』

温かく包み込むように懐かしい、優しさの始まり　彼女の表情が、そんな記憶を掘り起こしていた。

振り返った先も、春。(後書き)

【あとがき】

春って、なんだか不思議な季節ですよ。

何もかもが初めてになる『始まりの季節』なのに、どうしてか懐かしい。新しい何かが始動する『芽吹き季節』なのに、どうしてか空しい、寂しい。

心が聞き耳を立てて、風の音を聴いてしまう感じ、しませんか？

新キャラは、そんなワビサビを形にしたような、儂いけれど深い人生を見ているような、そんな女の子にしていきたいです。

失った過去の日は、春。

メジャーなスポーツは野球部、陸上部、テニス部、バレー部、バスケット部、水泳部（休部中）に至るまで、すべてを見学し終えた。

ほとんどの部活は見ているだけではなく体験入部であったため、大分疲労が溜まった。困憊した体には、マイナースポーツのゆつくりとした動作も応えた。

アリスとノアが所属する予定のカーリング部を始め、爽やか系スポーツのラクロス部、自称スポーツのクイズ研究部、和テイストな謎スポーツの居合道部、エトセトラ。マイナースポーツも、メジャーに負けず劣らず、本格的な活動をしていた。

無論、見学は運動部に留まることはない。

ただ文化部の場合、見学や体験入部というよりは邪魔しにいっただけのような気もした。

静寂の中、落ち着いて本を読んでいた先輩方が露骨にしていた苦い顔はとても印象に残っている。音楽部も似たようなもので。

結局所属できる部活は原則一つまでとされていることを、ついさつき彼女の口から聴いて肩を落とすのは言うまでもない。早く言うて欲しかった。

「はあ、はあ……。やっと終わった……。疲れた……。」

「どうしたのじゃ？ サッカー部の見学がまだじゃぞ？」

つま先がグラウンドの反対を捉えて利かなかったので、そのまま校舎の方へと帰ろうとした時だった。

制服の裾を抓まれたので、振り返って言い訳をする。

「い、いいんだよ。サッカー部には入らないから」

背景のグラウンドにピントが合わないように、目の前の少女へと

視線を集中させる。

すると、僕の逃げの一言を追いかけるように詰められた瞳が煌々と、視界を独占している事に気付く。

こんなにも近くににいるのに、彼女の真っ直ぐな瞳は僕よりもずっと奥の方を捉えている気がする。不安とか違和感とは違う、もっと確かな『孤独』が、そこにはある気がした。

僕の距離感の怠惰など知る由もなく、彼女は瞳だけでなく体も、じりじりと寄せてくる。

「でも、さつきからおぬしは、そっちの方ばかり見ておったぞ」「そ、そんなことは……」

一步、また一步と歩み寄られて、彼女との適正な距離感をいまだ把握していない僕は、一挙に大股で後退するしかない。

そして、離れすぎてしまったことに気付く頃にはもう、彼女が近づいていて。

「何でもよい。ホレ、いくぞ」「ちよ、ちよっと」

されるがまま、僕は彼女に導かれてグラウンドへと足を向かわせる。

彼女というベクトルが無ければ、僕は多分、そこへ一生涯近づくことはなかったと思う。

「見学したいのじゃー!」

なぜだろう。快活に叫ぶ彼女の横顔は、笑っているようにも泣いているようにも見えた。

徐々に上がっていくスピードでランダムに跳ねる髪の毛は、夕暮れに焼かれて映える影と光のコントラストのせいで古めかしく感じる。年季という差異が、地の色を自然と思ひ起こさせて、それが彼女の魅力だったと気付く。

「走るのじゃ!」

鼓舞するような一喝で、僕の中の郷愁は振り払われる。

そしてそれは、確かな記憶へと変遷していく。

すごく、綺麗だな……

超速で流れる風景に、僕は舞い香る花びらを見た気がした。

「ほい、ほい、つとな。……やっぱり教えられたようには出来ん。難しいのう」

掛け声と同時に浮沈するボールが、滑稽だった。随分と長い間、ボールは宙を舞っていた。

リフティングと呼ばれるそのテクニックは、長く続けられれば続けられるほど良い。リフティングは、細やかな爪先の使い方と、膝を始めとする体全体をクッションのように駆使する感覚的な能力を必要とする。

「ううん。初めてなのに、すごく上手だと思うよ」
初めてトライしたにも関わらず、その出来栄は、とても感心する。

世間では『素質がある』と言ったりするかもしれない。

でも、やり遂げた彼女にあまり嬉しそうな様子はなく、どちらかと言えば、結果に満足していないような、そんな感じもする。

ボールを足で踏み転がしつつ、彼女は首を傾げて、
「そうかのう？ ホレ、お前さんもやってみい」
ボールをこちらに渡してくる。

勢いの調整されたそのボールは、ちょうど僕の目の前 一番蹴りやすい位置で停止した。

でも、僕は触れずに言った。

「い、いいよ僕は……」

「ブランクなら、気にせんでもよいぞ」
「え？ どうして？」

どうして、ブランクだとわかったのだろうか？

「なんとなく……、口ぶりからじゃ。ホレホレ、早^{はや}う」
パンパン！ と二度、景気の良い拍手が鳴る。その音を集合の合図と受け取ったのか、部活動に努めていた生徒の何人かが、こちらを注目する。

期待の眼差しを向けられて、ここで断つては悪いという気持ちが生えてくる。脅迫観念と分っていても、僕には正当性を周囲へと示唆する力などなかった。

「わ、わかったよ……」

意を決した僕は、幾数年ぶりに、白と黒のそれに触る。
何故か緊張する。

ああ。それは見られているからか。

ヒット、リフト、トゥー、クロス、インサイド……。

ねえ。君は、僕に使われても幸せなの？

期待されて手に入れた“罪悪感”を盾にして、僕は意識すべてを足先に集中させ無心を装う。

「なんじゃ？ どうして入らんのだじゃ。お主、ちよー楽しそうにしておったぞ」

「だって、僕がやっても、結局意味ないし……」

漸く許された帰宅に胸を撫で下ろす暇もなく、彼女が尋ねてきた。疲れ切っていたこともあって、返答は適当に投げる。でもそれは、かなり本心に近い所から放たれていた。

「そんなことはないじゃろ。下手くそなわしがやっては無意味かも知れんが」

彼女は歩きながらピョンとジャンプしつつ、そんなことを放言する。

ボールが無いから、ただ楽しそうにスキップをしているように見えなくもない。

表情さえ明るければ。

僕がサッカー部の先輩方にした対応が、彼女の気に障ったのかもしれない。

「そんなことはないよ！　すごく上手だった！」

「じゃあ、先輩らに感心されるほど上手なお主は、もっと価値があるのではないかの？」

「……………」
フオーして和ませるつもりが、言葉の綾で巧みに返されてしまった。

二の句が告げない僕はまた、逃げの沈黙で白を切っていた。

「わーかったのじゃ。わしはこれ以上何も言わん。今日楽しかったのならそれでよし、なのじゃ！　それに、部活で全部決まるわけではない。ただ、楽しかったじゃろ？　とな」

彼女はそう言って、笑って終わることを求めた。

求められたら、答える。

「うん、楽しかったよ。……………今日はありがとう」

悲しみを知った末に、漸く知ることができたことだった。

リズのように、誰かに手を差し伸べられるようにはなりたいたいけれど、今の僕に、今以上のことは出来ない。

「そんな辛気臭い顔はやめんか。これから楽しくなるといって」

「あ、ごめん。……………これからしてもしかして、まだどこか回るの？」

もう七時くらいになるけど……」

「ああ。そういう意味ではのうてのう。来週末の球技大会じゃよー！」

彼女は僕の手を引くように、そしてどこか良い場所へ導くように、爽やかに明るく振る舞う。空を指差すその仕草がまた、その明朗さを助ける。

この輝きの助けになれる日は、来るのだろうか。

「き、球技大会？」

「そうじゃ。クラスの親交を深めるため行われる、クラス対抗男女混合サッカー大会のことじゃ！優勝すると、なんと一年間、体育館の優先使用権がクラスに与えられるのじゃ！」

「そ、そうなんだ。でも、それだとサッカー部がいるクラス有利じゃない？逆に女子は不利な気がするし」

「その点は大丈夫じゃ。サッカー部以外の得点は二倍にして、さらに女子なら三倍になるという変則ルールがあるからの」
「なるほど」

ゴール前に女子を配置して、サッカー部がその女子をアシストすれば得点は容易だろう。ただ、そんな月並みな作戦では、既に球技大会を二度経験している三年生には敵わないとも思う。

そう考えると、意外と道理の立ったルールであるようだ。

それを理解して可否でか、腕を組んで頷く彼女はとても強気で勝負だ。

「そうすると、わたしのクラスも優勝を狙うには十分なわけじゃ。

サッカー部ではないが、経験者のお主がいれば、もう得点フィーバーじゃ！無双じゃ！ファンタジスタじゃ！」

「そ、そんなの無理だよ……。僕なんて……」

「これこれ、そう言ってくれるな。少なくとも、わたしは期待してやるのじゃからな。他ならぬお前さんのう」

彼女は、『僕に』という部分を何度も付け足し、語気を強める。

それはまるで、僕が彼女にとっての『特別』であるよう。

息を飲んで、次に吐いたのは「期待か……」という複雑な溜息だった。

そんな複雑さなど知る由もない彼女は、絡みついていたら何かをいっしょくたに刈り取る。

「ぬははっ！ そう、期待じゃよ。お前さんならやれる、と信じておるのじゃ。そして、今度こそ優勝じゃ！」

「今度こそ？」

「ああ。ちよつと昔に、試合に負けてしもつての。今度こそ勝ちたいのじゃ」

「そうなんだ……」

何となく、彼女がどういう人か分かった気がする。

「そうじゃ。だから次は、きつと優勝じゃ。わしも頑張るから、おぬしも、のう？」

いつの間にか、僕らの帰り支度は済んでいて、歩きながらしていた会話も立ち話になっていた。今日の午後で暮った二人の経験が、別れることの悲しさと空しさを僕に覚えさせた。

「う、うん……」

「よおし！ 優勝じゃ優勝！」

容姿風貌はとても可憐。独特な色遣いの中には、一見不必要に感じられるものもある。しかし、それもまた愛らしさを一層引き立てている幹みきであるということに気が付けば、捨てられないチャームポイントへと変貌する。

丸くて大きな瞳は、花びら。輝きを受けて光る派手さを、散りゆく最期に寓される儚さが、絶妙な加減でもって抑えられて均衡を保つ。そのバランスがやけに心地よくて、ずっと感じていたいと思ってしまう。

「ん？ どうしたんじゃ？ なんかついとつたか？」

「ううん。ただ……」

鈴の音のように澄んでいながらも、底の無い沼に沈んでいくような深みのある落ち着いた声は、梢から洩れる日。対称に、忙しい所

作から見ることでできる成熟したあどけなさは、風に揺られ生きる
枝葉。

今、僕が感じているこの香りは、彼女のものか。

それとも、僕たちを優しく見守る二人の先輩のものか。

はたまた、同じ香りなのか。

「ただ、どうしたんじゃ？」

ただ、この懐かしさは、確かに彼女のものだ。

「サクラって、この桜はなみたいだな……って」

失った過去の日は、春。（後書き）

【あとがき】

色々な部活がある中で、一つだけ選ぶ。

それは、人生のミニチュアver.のようなものではないでしょうか。

それまで磨いてきた技術を磨いたり、新しいことを見つけたり…。

とても貴重な体験をできます。

そう考えると、無限の選択肢があるともいえる『帰宅部』って、意外と羨ましい部活だったりします。

もう僕には無い、春。

「あ、ルー。おかえり。遅かったね」

「うん。ちよっと、部活の見学をしてたんだ」

見学と言いつつ、実際は練習メニューの一部を体験する、いわば体験入部のようなものだった。久しぶりの運動で節々が音を上げている。

居合道部という謎の部活を体験してからというもの、あまりの臀部の痛さで椅子に深く腰掛けられないでいる。ご飯が非常に食べにくい。

一足先に風呂に入ってきたらしいリスが、タオルで濡れた髪を拭きながら、僕の隣の席に着く。

「ふ、ふう……。疲れたなあ……。！」

「んー？」

弱い石鹸の香りと、何か女の子めいた良い匂いが同時に鼻に訪れて、僕を誘惑する。誘われるまま、本能のままに芳香を辿ると、パジャマから覗く白肌がそこにあつて、僕は羞恥心から目を逸らそうとして、振る舞いが不自然になる。食事の喉の通りもあまり良くはない。

なみなみ注いであつたコップの水を一気に飲み干して頭を冷やすも、

「ふっふっふ……。大人な私を見て興奮しちゃったんだねー？ わかるよー」

冷却、追いつかず。

リスは僕の喉の通りなど知る由もなく、「ルーは結構ムツツリなんだよねー」など続けて冗句を告げる。でも、その表情はどこか、

悲し気に見えた。

「前はお風呂毎日一緒に入ったのにさあ」

「前って……、それ、相当昔の話じゃ……」

「夜とか、怖くてトイレ行けなかったのにさあ」

「それは関係ないと思うけど……というか、それは僕じゃなくてもリスじゃ……」

「前は毎朝一緒に学校行ってたのにさあ」

「それは、僕だって進学したんだし……」

スープを口に運ぶのを邪魔するように、リズの口から次々と不平が飛んでくる。

同じ高さでキープするのが辛いことに気付いて、スープをスプーンもろとも皿に戻す。

離れていった温かさが、恋しい。

「うふふ。やっぱりルートは鈍いのね」

思いもよらぬ方向から刺々しいセリフが飛んでくる。その鋭さは正反対の、角が取れて丸みを帯びたような声にショッキングなギョップを感じる。

「リズ、夕飯を食べないで待ってたのよ。あなたが帰ってくるまでずっとね」

台所から来た声の主が、テーブルに料理を運びつつ言う。

そして、僕の隣の席の前に、僕と同じ配置で料理が並ぶと、妹は慌てふためいて、

「ま、待ってませんしい！」

と、強がりと言う。

それが強がりであると、僕も気付けるようになった。

そこに自尊心の様な強い知覚は存在しないけれど、それに気付いて初めて思うことのできる『ごめんね』が、僕の中には確かにあった。

アカデミーに入学して少し大人になったから、妹や年下という関係性を強く意識してしまっている副作用なのかもしれないけど。

だからこそ、僕は慎重に言葉を選ぶ。そして、行きつく結果は同じになる。

「ごめんね、リズ」

「ふ、ふんっ？ い、いんだよ、別に。待ってないし」

「じゃあ、食べようか。僕もう、少しだけ食べちゃったけど……」
いじけるリズに対して、語気に注意を払って優しく撫でるように言った。

すると、せつかく滑らかなになりそうだった毛並みを逆撫でするがごとく、台所から母の言葉が飛んでくる。

「うふふふ。リズが何だか子供みたいね」

「こ、子供だもんっ！」

「あらあら？ 大人な私、じゃなかったのかい？」

「うっ……。も、もう！ いただきます！」

リズがこんなにも子供に見える。ほんの数週間前まで同じステージにいたはずなのに、今は一段下に見えてしまう。

言葉を選ぶ余裕すら、僕にはある。分岐点に立たされて迷っていた少し前の自分が、まるで自分とは違う人間に思えてくる。でも、どうしてだろう。

この胸の痞えは、この心の蟠りは、この違和感は、まるで、あの時と同じ感覚がそのままここにあり続けているようだ。

「それで？ ルーは何部に入るの？」

「え？ ううん……と」

リズの質問には答えたい。けれど、本当のことを答えてしまえばきつと、彼女の笑顔は無駄になってしまうし、僕のお尻の痛みもただの痛覚に成り下がるだろう。

仮に、この痛みに従って嘘をつくとする。

それで誰かが幸せになるだろうか。リズは「居合道部に入るんだ」という虚偽を聞いて嬉しいだろうか。

その答えは簡単だ。

「あ……、ごちそうさま。僕、お風呂入ってくるね。体冷えない内

に布団に入らないとダメだよリス」

逃げることは、いい。

傷つくのは、自分一人だけでいいから。

「……ルー？」

これは仕方がないことなのだ。

逃げる以外に方法がないのなら、逃げるしかないのだから。

僕、また逃げてる……

そう思って改めようとも、無駄になることだって、この世界にはあるのだ。

脱衣所の鏡に映った情けない自分の姿を見て、僕は深い溜息をついた。

「部活か……」

端的に言えば、『やる』か『やらない』か。話はそれだけ。

そして、僕の心の中で、答えはほとんど出きっている。その答えを基盤にして、否定肯定の逡巡審議が執り行われているのだ。

「運動部かあ……」

野球部を初めとする運動部には、ミドルの時と違ってマイナースポーツがとてもなく、どちらかと言えばメジャーなスポーツが多かった。居合道部はマイナーな部類に入る。

野球、サッカー、バスケット続いて、テニスやフットサルなど、国内外から集まってくる生徒たちのニーズに合わせて、その種類数はかなり豊富に設定されていた。もっとも、バトン部は無かったけれど。……ああ、バトン部は帰宅部のことだったか。

ガイダンスで、『初心者歓迎！』という表看板を掲げてはいたけれど、アリスの話によれば、実情は経験者を優遇するということになっっているらしい。

迷惑になるのも嫌だし、選択の余地はないと思おうか。

「でも、文化部はなあ……」

体を動かして汗を流すイメージの運動部と相對する文化部は、どうやらあまり盛んではないようで、本を読んで記事を作ったりする文芸部と合唱や楽器の演奏などをする音楽部の二つの部活に限られていた。

前者ならまだしも、僕は楽器をやったことがないし、歌声にも自信が無い。でも、人を楽しませるような面白い記事を書けるかと言ったら、それも難しい気がする。

「……………」
ここまででは、いわゆる『やる』方針。

では、僕の本心である『やらない』方針ならどんな批判が飛び交うのか。

「やっぱり帰宅部……になるのか」
帰宅部というのは、厳密に言えば『部活動無所属』ということになる。

皆が挙って部活動に励む理由は種々様々だろう。ただ単に楽しいから、将来の夢を叶えるため、親の意向だから、成績のためなんて人もいるかもしれない。

でも、それが何であろうとも、そこには必ず、目的というものが存在しているのだ。

帰宅部を選択すること自体は悪いことではないし、何より学校が認可しているのだから否定はできない。

問題は、目的の有無にある。

現帰宅部の中には、部活では目的地向到達するのに遠回りになってしまうからと、わざわざ帰宅部を選択する者だっているのだ。そういう人は目的意識があるから、僕の言う『道』のようなものを踏み外すこともないだろう。

では、僕はどうかだろう。馬鹿の一つ覚えの様に、逃亡を繰り返している、情けない僕は。

僕には明確な目的がない。

『世界を優しさで溢れさせたい』などという抽象的すぎるあやふ

やな目的の地へと進むために、僕は今、何かをしているのだろうか。できているのだろうか。

周囲の人間が部活動に打ち込んで進んでいく中で、僕は現状維持という名の後退をして、身勝手に利己的な憂慮に浸っているだけなのではないか。逃亡するとはそう言うことなのではないか。

でも、だけど と、僕は何故か、いつもそこで自己否定をする。その理由は、多分、自分が一番知っているのだ。ただ、それを認めたくないだけで。

“あの時”からずっと続いてきた試合に、遂に負けてしまうように。

「どうしよう……」

難しい。とても難しい。

頭から被るシャワーのお湯が、冷たく感じられる。それでも、閉じた瞳だけは常に熱くて、開けることができない。水勢を言い訳に、僕は目を閉じたまま無言になる。そうすると、この世界に自分しかないような孤独感に陥って、瞼が震えた。

首筋を伝う水を追いかけるように撫で、胸の中心まで来て止めた。自らの心臓の拍動を左手に受け、無性に安堵する。止まった左手で水が堰き止められて自然、重くなっていく。でも、また水は流れていくのだ。追いかけれられない疎外感に、僕は孤独を一層噛みしめることになる。

「……ん？」

孤独、沈黙を破るように、脱衣所の方からノック音が聞こえる。シャワーの勢いを弱めて、僕は“二人”を心に反芻する。

「リズ？ どうしたの？」

「う、うん。あのさ……、…………て……」

僕は、弱められた語気を呪わず、とめどなく流れている騒音の方に嫌悪感を抱く。

シャワーの栓を閉めて、再び。

「どうしたの？」

「や、やっぱり何でもないっ。……けど、何でもなくもない、かも」
「気になるけど、言いづらいことなら無理しなくてもいいよ」

「んー、まーいっか。やっぱり言うっ」

「そ、そう。じゃあ聞くよ」

耳を傾けても、すぐに言葉は無かった。そのせいで、シャワーから放水の残滓がぼたぼたと滴って鳴る都度、沈黙が破られる形となった。その不安定なリズムが何だか気持ち悪くて、僕は耳を塞ぎたくなった。

沈黙と不協和の中にある期待を見つけて耳を塞がず頑張っている
と、漸く綺麗な音色が聞こえてくる。

でもやっぱり言いにくいことなのか、曇る言葉は「あの、さ……」
から始まる。

「部活のことなんだけど……。もしかしたら、私のせいで迷わせちゃってるのかな……って」

「……………」

「ミドルの時は無かったから仕方ないけどさ、ルーの学校にはあるんだよね？」

「……………」

「またやってよって言うのじゃないの。昔、やってた頃のルー、本当に楽しそうだったから……………」

「……………」

「……………ごめん。絶対私のせいだもんねっ。それなのに、その私
が、またやれなんて、おかしいよねっ。おこがましいよねっ」

違う。リズは悪くないんだ。悪いのは……

「本当に、ごめん……なさい」

浮かんでくるのはせいぜい「君は悪くない」とか「心配しないで」

とかの話で、僕が「僕」としてリズムにかけてあげられる言葉なんて一つたりともありはしなかった。当然だった。

この際、そんな無価値な言葉でも良かったかもしれない。でも、できなかった。

「でも私、ルーのこと、応援してるから……。本当にごめんなさい……」

それからまた、気に入らないリズムが刻まれるだけだった。いやに静かで、いやに寒かった。

だから僕は、またシャワーの栓を緩めてお湯を出して、温まろうと試みた。

襲ってくる喧噪と熱に憔悴して、僕は自然と自分の心音を求める。流れゆく普遍を堰いて感じる安堵によって、心は一層寒く、“二人”は一人になった。

「僕が、悪いんだ……」

リズムに求められているのに、僕は何もできない。

僕だって、諦めたくはない。でも、諦めるしかない。

割り切れない感情は、「諦めきれない」という語彙によって、悪寒に象られる。それでも割り切ることができないのは、意味の無い自信のせい。楽しかったという、鮮明な記憶と確かな感覚のせい。逆に考えることもある。

やりたいことをやればいい。

誰よりも速く走って、誰よりも長くキープして、誰よりも巧みにトラップして、誰よりも多くゴールを決めて。

それでも、勝利を認められることがないという背理に、僕は途方もない無力感を覚えてしまう。それまでの努力が泡沫に消えた喪失感にとらわれて、きつと、また泣き出してしまう。

だからこそ、僕は“あの時”に『僕は泣かない』と決めたのだ。

僕が“あの時”泣いてしまったのは、他の誰でもない。

僕のせいなのだから。

もう僕には無い、春。(後書き)

【あとがき】

そろそろルートの過去が気になってくるころだと思います。

世界をやり直して、変わることができたルート……。

しかしそれは、アリスという友人の存在が大きかったからこそ一緒に岐路に立たされたからこそ、“二人”の変化だったのです。

でも今回は、アリスは居ません。

また、一人になってしまいました。

果たしてルートは、新しい春を迎えることができるのでしょうか……。

きつとずつと同じ、春（前書き）

【まえがき】

第二章での目的は『ルートの自立』というとても大きなものがあるだけあります。

思春期という難しい心理状態にある高校生は、『進路』と『自立』で苦悩することになります。その中でさらに、『恋愛』とか『出会い』といった人間関係も混ざってきて、とても忙しいです。そういう心理の変化を、自分の経験を交えながら表現していけたらと思います。

では、本編です。

きつとずっと同じ、春。

「それじゃあね」

にこやかな笑顔で手を振るサクラの瞳を通して、一週間前の懐古的な情景を見る。それは、しみじみと眺めていた二人の先輩　桜の木の子に近いものを、その潤んだ瞳に感じてしまったから。わずかばかりの物悲しさは、”回顧”という漠然としない感情の一面を捉えただけに過ぎない。そしてきつと、彼女の脳裏に想起されているのは、これからのアカデミー生活の充実を期待する白さではなく、ほんのワンシーン前に飲み込んだ敗北の苦渋の黒さに相違ない。僕の口調は、そんな彼女の心の内を知ってか知らずか、とても朗々と場違いな彩りを放ってしまっていた。

「またのう」

彼女は、鮮やかな僕の言葉に対して、とても淡い白で、きつちりと返答した。続けて、余計な色がこぼれてしまわぬようにと、校舎の方に向き直ってしまった。

目が合わせられない状況を噛みしめると、罪悪感に駆られた。余計なものが何一つ無いこの景色が、異様に怖かった。

また、何か失敗してしまっただろうか？

そんなことを考えていると、僕の口は勝手に彼女を呼び止めようとしていた。

さよならの黒を、先に塗っていたのは僕だったはずなのに。

「サクラ！」

「なんじゃ」と振り返った時には、すでにいつも通りの明るい表情に戻っている。

ほんの一瞬の落差が生んだ衝撃に、僕はそこはかとなく戸惑う。でも、僕の心の中心は潰れずに原形をとどめていてくれた。

「もしも、さ」

「もしも？」

彼女は軽く首を傾げ、僕の言葉の続きを待っている。

その瞳は、希望一色で染められて煌々と輝き、円い。円い世界を纏うよう、円い。

周囲を染め上げる灯火きんの色に焼かれぬように、僕はただ、”今の僕”が使える絵の具で背景を塗る。

彼女は、校舎のクリーム色を下地に、ただただ明るく微笑んでいる。

「世界をやり直せたら、何がしたい？」

僕が塗りつぶした背景に、風に舞う花びらが足され、奥行きが出る。それによって、僕とサクラの間にある距離を感じ、僕は少し暗くなる。ただ、鮮やかな花色のアクセントは、蛇足と見做すにはとても惜しい。

距離感とか空間の使い方が美を極める上でのポイントだと、ミドル時代の美術教科の先生が言っていたことを思い出す。

僕は、一概にそうは言えないのだと心の中で反論を述べながらも、素直な気持ちを勇んで訴えていた。

美しい。

本当に、その一言に尽きると思った。
でも。

「……」

サクラは能面のような不気味な笑みを作ったまま、何も言わなかった。

僕の色が気に食わなかったのだろうか。それとも、塗る場所を間違えてしまったのだろうか。感性は人それぞれだということも、確か言われていた。もしかすれば、僕の『美しい』は、サクラにとつての『醜い』なのかもしれないのだ。

……サクラ？

ただ、その表情は、僕が塗りあげた背景の色と、その上を舞う花びらの色に、ぴったりとはまっている気がした。

一枚の絵画が出来上がってしまいそんな眼前の時間経過を、彼女は笑顔でもって破りさる。

「ぬははは！ お主は面白いことを言うのう！」

空中で止まっていたように見えた花びらも、その破顔一笑によって、再び踊りだす。

絵画の中の空間が流れ出したようで、僕は気づかれぬよう焦った。

「お、面白かった？」

彼女は、うんうん頷きながら質問に答える。

「そうじゃな。わしは、もう一度、お主と遊びたいかのう」

「ど、どうして僕なの……？」

「お主のことが、特別気に入っておるからじゃ」

特別。

ただ気に入ったのではなく、特別だ。

もしかしたら好きになつてしまつとか、これは愛の告白であるとか、色々と妄想は広がっていくけれど、僕はその事実にも、そこまで驚きはしなかった。

なぜなら僕もまた、彼女のことを特別視していたから。

「あ、ありがとう」

屈託のない光で、僕を導いてくれる彼女なら　彼女のためなら、自分の『願い』を消化してしまうのも悪くはないと思つた。

『願いの夢』を見る前ではなく、一週間ほど前に時間を巻き戻せば、『願い』の力を消滅させることができるはずなのだ。

もう一度僕と遊ぶという、彼女の純真無垢を叶えるのなら、代償もそこまで重くはないと思える。

少なくとも、アリスとリズの時のように、二十二人もの人間の命を天秤にかけなければいけないような事態にはならないと思うのだ。「いきなりどうしたというんじゃない？　もしかして、部活に入らなかったことを後悔しておるのか？」

「い、いや、違うけど。ただ……」

「ただ、なんじゃ？」

ただ。

ただ僕は。

彼女と僕との間にある距離が、ずっと変わらない自然が、絵として成立してしまう空間の在り方が、異様に怖かつた。

会つて間もない彼女に対して、離れたくないとまでは言わない。

けれど僕は、彼女にもっと近づきたいのだ　もっと仲良くなりたいのだ。”友達”になりたいのだ。

それが、今までできなかつた、自分から手を差し伸べるといふことなのだと思つから。

だから、この恐怖を乗り越えることはきつと、その第一歩を踏み出すために必要なこと。

サクラのために世界をやり直そう

僕は首を軽く横に振って、怪訝な表情で答えを待つ彼女の期待を煽る。

「うっん。なんでもないよ」

「なんじゃ。気になるのじゃー」

「全然、大したことじゃないよ……」

「そうなのかのう」

「そうだよ」

会った時と比べれば、物理的な距離は確実に縮まったと思う。でも、精神的な距離は違った。

遠くも近くもない、この絶妙な距離感が、サクラと僕の関係を比喻しているようだ。

だからこそ、この美しさを目の当たりにできているのだと思うと、得も言われぬ憂愁を感じる。

「そうじゃ。お主、さっき『やり直せたら何をしたい』とか言っておったな？」

「い、言っただけど」

「もう一つあったのじゃー！」

「な、なになかな？」

僕と遊ぶこと。それに追加で出される『願い』は何だろうか。もしくは、願いは。

「球技大会で優勝したいのじゃー！」

「あ、なるほど……」

「今回はルートが体調不良だったからのう。今度こそは頼むのじゃー！」

もう少し近くにいたら、きつと肩をポンと叩かれていたことだろ

う。

幸いにも、サクラは未だ一枚絵の中央でモデルを務めている。

「そ、そう……。そんなに優勝したかったんだ……」

「そりゃそうじゃる！ 優勝クラスには、一年間の体育館優先使用権が与えられるのじゃからのう！」

「あはは……。でもきつと、僕が出ても、一三年生に負けちゃうよ……」

「いいや。やってみないとわからんのじゃ！ まだ、一度も試したことがないことを、決めつけてはいかんのじゃ！」

「そ、そうだね」

「そうなのじゃ！ お主がいれば、きつとイケると思うのじゃ！」
強い口振りによる肯定は、僕の過去を覗かれているようで、何となく不安になった。

でも、良かった。

バレなかった……

僕の体調不良が仮病だったことも、僕が全国大会でMVP受賞を棄権したことも、サクラが笑ってくれないのが怖いことも。

逃げきれて、心底ホツとする。

一つ腑に落ちない点を挙げるのならば、まるでその場所がすべての始まりなのだと訴えるかのように、サクラが一步も動かなかったことだろうか。でも、それがつまり、僕が見た美しい絵の力ラクリなのかもしれない。

だとすれば、僕が背景を染め上げたのは間違いだった。でも、やり直せば、その過ちも正せる。

それはきつと、迂回であって逃亡じゃないはずだ。

「そんなことよりさ」

やり直した先の世界で、きつとまた、僕は彼女と会おうだろう。

そして、きつとその時に感じるのは、初々しさではないはずだ。
でも、大丈夫。

新しさに付随して生まれる、必要な不安や不可欠な期待がなくて
も、僕は知っているから。

彼女のことを。

何よりも、懐かしさを。

これからもよろしくね、サクラ」

僕の言葉に、彼女は何も言わず、いつも通りの朗らかな笑顔で、
頷いた。

春風に踊る腕うでが、宙を舞う髪はなが、密かに廻る奥行きが、何もかも
すべてが。

目の前でまた。

生きた絵のように、美しかった。

きつとずっと同じ、春。(後書き)

【あとがき】

サクラというキャラを書くにあたっては「地に足がつかない」ということに、特に注意しました。あまりにふわふわしすぎると、思考が読めず、どこかへ行ってしまふぶっ飛んだキャラになってしまうので……。

芯のあるふわふわ感と、漂うミステリアスを表現できていればいいなど、思いますね。

ルートとリズの言う“あの時”については、今しばらく明かさなideおこうかと思えますので、色々と思考を巡らせていただけると幸いです。

今回は、ルート編からちょっと離れて、ノア編かアリス編あたりにいってみたいと思います。

【Exile】建前の春、僕と桜は。（前書き）

【まえがき】

最近、音楽制作の方に力を入れていて、作文の方がお座なりになっていました。

なんていうんでしょうね、改めて自分の文章を読み返してみても、「うわあ、この人中々良い文書くなあ」ってなるのです。

これって、だんだん衰えてるってことなんじゃないかな？

毎回なるので、見るたびにあほになっているということなのでしようか。

文才の血が流れているはずなのに、残念ながらクォーターのハーフでは薄すぎたようです。

本編でございませう。

【Exile】建前の春、僕と桜は。

体育館。

真剣が空を切る冷たい音を聞きながら、休憩気分で床に腰を下ろしている、さつきまで先輩の指導を受けて燥いでいた彼女が、意味を同じく僕の隣に座った。

「ふう……」

彼女の吐いた溜息は、いまだ部活動にいそしむ先輩方の身振り素振りに切り裂かれて、響かなかった。

かろうじて僕の耳には届いていたけれど。

「お疲れさま」

「うむ。……なんだかお前さんはあんまり疲れとらん様子じゃのう」
「そんなことないよ。結構休み休みやってたから、疲れてないだけだと思っよ」

「そうかのう」

少し訝しげに首を傾げる彼女の息は、落ち着いていて深い。ついさつきまで刀を振り回していたとは、到底思えない。

彼女の運動神経について称賛しようかと意気込んでいた僕の脳内は、その彼女の称賛によって打ち消されてしまう。

「さつきから思っておったんじゃが、やっぱりお前さんは運動神経がいいのう」

『さつき』とは、野球のことだろうか。それとも、テニスだろうか。もしかすれば、バスケかもしれない。でも、どれも今日が初体験だった。

それに、その感想は、僕にも述べる権利があった。

「そ、そんなことないよ。サ、サクラさんの方が慣れるの早いし、全然上手だと思う」

「ん。サクラ、でよいぞ」

即座に訂正される。

僕の称賛のその後を知るには、彼女の呼び名を改めるしかないと思っただ。

「じゃ、じゃあ……。サ、サクラ……。の方が、絶対上手だと思うよ」

少し仰々しくなる。

アリスやリズの時は、呼び名よりも先に関係性が構築されていたので、特別の情緒は感じなかった。けれど、サクラの場合は、順序が違った。

なんだろう。恥ずかしいというか、不安というか、とても背中がむず痒い。

「むふふっ。そんなに緊張せんでもよいのじゃ。わしは、呼び方一つで他人を決めたりせんから」

「う、うん。わ、わかった」

どうやら僕の称賛は、緊張と呼ばれた感情の起伏によって流されてしまったようだ。

一憂していると、突如として、先輩たちがフォーメーションを変え始めた。コミカルで奇妙な動きと、厳格な趣のある黒い袴とのギャップが面白く見えて、少し笑えた。

それでも床は冷たいままで、温まるまではもう少し時間がかかりそうだった。

「そうじゃそうじゃ。そう言えば、自己紹介、授業で少ししただけじゃったのう。休憩がてらに、好きな食べ物話でもせぬか？」

温める時間をもらえるようで、安心する。

僕は、せっかくの会話のチャンスを逃してたまるかと、心の中で意気込みつつ言う。

「僕の好きな食べ物、『和』の物かな。蕎麦とか、seuyuとか、そういう……って、あれ？ サクラ、僕の話聞いてる？」

もしかしたら、あまりに数奇すぎる好みに呆れ返ってしまったのだろうか。『和』を好むという好事家は、そういう宿命にあるから仕方ないのかもしれないが。

静止したサクラの目の前で「おい」と、小刻みに手を振る。

「はっ！」

どこへ意識を飛ばしていたのやら。でも、ちゃんと帰ってきた。

目に生気が戻ったサクラは、何事も無かったように話を続けるのだった。

「そうかそうか！ お主も『和』な食べ物が好きなのか！ 嬉しくて、ついつい安心してしまったのじゃ！」

「あ、じゃあサクラも？」

「そうなのじゃそうなのじゃ！ わしも、和食好きじゃぞ！」

なるほど、突然の活動停止の理由はそれか。納得である。

僕は、当然の納得だけではなく、そこはかたないシンパシーも感じていた。そのおかげで、少しだけ、ほんの少しだけテンションが上がったと思う。

「本当っ！？ 『和食』自体、知ってる人がいなくて……、ましてやそれを好きな人なんて、なかなかいないんだよ。うわあ、まさかこんなところで会えるなんて……！」

思わず、唾を飛ばす勢いで熱弁してしまう。

それを迷惑そうにすることもなく、サクラは落ち着いた大人な調子で答えた。

「それはよかったのう」

「あ、ごめん……。急に燥いだりして……」

「良いのじゃ。自分と好きなのが同じ者を見つけたら、わしだってワクワクするからの」

うんうん頷きながら理解を示すサクラの横顔に、少しだけ取扱注意の不安を感じる。

僕は、ワクワクついでに会話の延長を試みる。

「他に好きな物とかある？ 別に食べ物以外でもいいよ」

「そうじゃのう……。山登りとか、結構好きじゃぞ」

「ほ、本当！？ 実は、僕もなんだ！」

自分でも高揚しているのがわかるほどに、テンションが上がってきた。

迫真過ぎて、逆に、話を合わせようと必死になっているように見えなくもないのが、なんとも惜しい。

僕の自信の無さを気にも留めず、サクラははきはきと合いの手をくれる。

「そうなのかの？ なんだか、わしらは気が合う気がするのう」

「もしかして、星を見たりするのも好き？」

自信の無さを誤魔化そうと、勢いに任せて聞いてみる。
なんだろう。

『好き』と答えてくれる確信があった気もした。

「星、かの……？」

「うん、星。さすがにそれは違ったかな」

サクラは首を横に振りつつ言う。

「それはもしかして、星と括るよりは『世界』とかそういう種類の話じゃないかえ？」

「そ、そうそうー！！ まさか、サクラも……！？」

「好きじゃよー。世界はどうやってできたんじやるとか、世界はどこへ向かっているんじやるとか、そういうのー」

「すごいね！ こんなに好みが合う人、初めてだよ！ まるで

『運命』。

リスや母なら、間違いなく迷いなく、その言葉を選んで言い放っていただろう。

確かに僕も、同じ言葉が一番に浮かんだ。

けれど、すぐに口に出すことはできなかった。

僕にとる『運命』というものは、すべての策を講じた果てにあって、引き返すこともそれ以上進むこともできない、言わば『終焉』のようなものかもしれないから。

僕とサクラの“未来”を変えるこれからのことを考えると、そういった不安要素には敏感にならざるを得ない。

だとすれば僕は一体、どんな言葉を選択すればいいのだろうか。言いて妙な表現はなんだろうか。

『巡り合い』だと、別段言い添える必要も無くなってしまふ気がする。『宿命』、『天命』にすると今度は、雰囲気太重すぎる。『邂逅』では、以前に一度会っていないければいけない。『再会』も同じ。出会うべくして出会ったような、偶然が重なりすぎて必然になったような、そんな現実を受け止めて、僕は何と言葉を紡げばよいのだろうか。

これほどまでに、『運命』という言葉の汎用性の高さを憎んだこととはない。

精一杯に場を濁す言葉を探して、口をパクパクさせていると、サクラはふと僕の顔を指さした。

「運命、じゃの」

「あ、うん。え？」

『ズバリ正解じゃろ？』というしたり顔に困惑して、僕は思わず首を傾げてしまう。

心を読まれたのではなく、言葉の繋がりから推測されたということ。サクラ情報網が素晴らしいスペックなのではなく、その単語の汎用性が高すぎるということ。

僕はそれに対する反駁を目でもって訴えながら、彼女の言葉の続きを待った。

「はえ？ 運命、と言いたかったんじゃない？ 違つたのかの？」

「う、うん。まあ、そうだよ」

得てして反論する言葉を持っていなかった僕は、ただ頷くことしかできない。

なんとなく、サクラに脅迫されているような気分になる。

それはなんとというか、まさに、『運命』づけられた敗北のようだった。

「そいじゃ、次の部活見学に行こうかの」

少し薄暗くなった外を一瞥して、サクラが立ち上がる。

そんな暗澹たる外気を映したような無表情でいる僕は、座ったままだ。

「ま、まだ回るの……？」

「当たり前じゃ！」と腕をバタバタ、ぴよんぴよんと二度ジャンプ。まだまだ元気な様子。まるで子供だと言ったら、どんな顔をするだろうか。気になりはするけれど、彼女が小柄な体格をしているのが災いして、なんだか子守をしている気分になる。

でも、僕がそう大人ぶる度に、彼女の口癖が確かな違和感を生むのだった。

とても若い老人？ とても老けた子供？

もう少しのを射た表現はないだろうか。

「ほれほれ、早うせんか」

そう言っただけで彼女は僕の手をぐいぐいと引っ張る。僕はそれに対抗することもせず、ただただ、その引力の働くままにいる。

「ちょ、ちよつと待って！ まだ道着着たままだから！」

「脱がすの手伝うのじゃ」

「け、結構ですっ」

愛くるしい強引さでも言うべきだろうか、その無邪気な我儘に嫌悪感を抱くことはない。それは幼い子供のあどけない手つきでも

あり、臍長けたる老婆の熟練された温かい手つきでもある、そんな気がした。

今のこの関係や状況に慣れてしまったら、僕みたいな小心者もしかすれば、いいように扱き使われてしまつかもしれない。

「遠慮はいらんぞー」

白くて細い彼女の腕が、袴の投げにするりと飛び込んでくる。

遠慮をしていないのは彼女の方だった。

「い、いや、大丈夫……って、ちよつと！　　それ、道着じゃ

ないとこ掴んでるよつ。あはつ、あははは！　やめてやめてつ、くすぐつたいつて！」

「むふふつ。ほれほれー」

なんとなくわかつた気がする。

考えなしに任せてしまうのは怖いけれど、何かを期待して何となく頼つてしまう。そして、もし失敗してしまつても、愛嬌として許容してしまう。

それは、まさに“妹”のそれと同じではないだろうか。

「や、ちよつ！？　　誰かつ、助けてえ……」

「変な声を出すでない。こつちまで……変な気分になるじやる。むふふふ……」

リズム一人でも結構いっばいっばいなのに、こんな妹が増えたら大変だろうな。

そんなことを考えながら、僕は拒否の意を示しつつも、されるがままにいる。

汗で湿つた花の香に、僕は内心ドキドキする。生活感にシンパシィを感じる。

手の届かないところにあると思つていた存在が、少しだけ近くに見えた気がした。

そして多分、僕は満足しているのだ。

「ね、ねえサクラ……」

「なんじゃ？」

身体を弄っている彼女と、弄られている僕との距離はほぼゼロ。互いに抵抗も無い。それなのに、どうしてか隔たりを感じる。

瞳に熱や力が無く、笑顔に真意を感じられない。どこか事務的で上辺だけの愛想笑いを浮かべている、そんな感じがしてしまう。

会って間もないから確かなことは言えないし、今のこの密着度がサクラにとつての適度な距離感だとも思う。けれど、サクラという女の子を一日見ていたらきつと、この凄まじい落差ギャップに、誰もが違和感を抱くのではないだろうか。

そんな身勝手な不安を払拭しようと、僕はその表情の鱗片に触れてみる。

「どうして、こんなことするの……？」　それも僕なんかには……」
申し訳程度にオブラートに包んで聞いてみたが、そのオブラートが綻んでいたことは、言ってから気付いた。

サクラは手の動きを止めて、真っ直ぐな瞳に僕の姿を映す。さっきまでの、疲れを感じさせない一挙手一投足が無くなり、辺りは刀剣くが空を切る滋味豊かな渋い音に埋もれてしまった。

焦りから零れてしまった僕の疑心暗鬼を際立たせるように、サクラは乾いた言葉で淡々と会話を繋いでいく。

「別によいじゃろ」

「……いいの、かな」

「いいのじゃ」

「僕でいいの？」

「お主がいいのじゃ」

「どうして？」

「んー？」

「……」

「そうじゃのう。強いて言うなら……」

「うん」

「特に……」

「特に？」

「理由はないのじゃー!!」

「ちよつ!?!」

荒唐無稽にも再開された手の動きは、初めよりも一段と荒々しくなっていた。

でも、まあ、少し強烈な妹だと思えば、この戯れも可愛いく見えるのかもしれない。何より、サクラという存在に対しての今のこの気持ちがあれば、別段困ることなどない気もする。

昔のリズミたいだな。友達に、なりたいな

「ま、ままま、待って待って! あっ……やめっ……」

もう少し仲良くなったら、注意したり叱ったり、もしかすればあの偽りの表情の理由も聞くことができるだろうか。偽らなくても、笑えるようにしてあげられるだろうか。もっと、楽しそうな瞳でこちらをみてくれるだろうか。『運命』ではなく、『必然』だと語り合えるだろうか。

そうしたらきっと、友達になれるだろう。

ただ、そんなつつけんどんで水臭い話はおいておいて。

「ぬはははは! くすぐったいかー!」

とりあえず、今は。

楽しんでくれれば、それでいいな。

そう思った。

『Exile』建前の春、僕と桜は。（後書き）

【あとがき】

サブエピソードは意外と書くの楽しいです。物語とそこまで関係のない話を書けるので、自分のやりたいことを表現できる場所ですからね。まあ、小説家になろう自体そういう場所なんですけどね。

ルート編はここまでにして、次回は初の『ノア編』行きたいです。ルートはこの後どうなるのか、少しばかり想像してお待ちください。

顧独モンスーリール（前書き）

【まえがき】

始まりました。ノア編です。

ノア編はサブエピソードとしてだけ取り扱おうと思っていたのですが、結構キャラが立っていたので、メインとしても立ち回ることができると思いました。

タイトルには、中二病っぽい単語を鏤めていこうかなと。

それでは、本編をどうぞ。

顧独モンスーリール

今までずっと一人だった。

それは、朝も昼も夜も一様に。

日の光で目を覚ませば、否が応でも孤独を知覚することになる。

そして、学校へ行くまで一人。クラスメイトに話しかける勇気がなければ、部活に入らなければ、また一人になった。

そして夜は、眠ってしまっただけ。

夕方に訪れる大好きな人がいなければ、自分は 自分という存在は、床に臥せてずっと眠っているのと何ら変わりはない。

だから、今までずっと、「自分には生きていく意味がない」と思っていた。孤独を噛み締めて眠っているだけの存在に、価値なんてないことは明白なのだから。

「ずっと眠っているのなら、死んでいるのと同じこと」

そんな思想に至る因果を辿ってみると、妥当性の甚だしさに笑えなし、泣けました。

だって、そんなことを考えていても、太陽は力づくでも絶対に、目を覚まさせたから。自棄になっただけ辛くも、なっただけ辛くも。あの光は平等に降り注いだから。

それが自分にとって、どれだけ辛いことだったのか。無尽蔵の無力感を感じさせていたのか。

それは、そんなありふれた日常が壊れて初めてわかる、“しあわせ”が教えてくれた。

「お、おはよ。アリス」

「いまだ夜船に揺られるその人の、白い肌に触れようとして、やめた。」

「この場所に住み込みで働いているとはいえ、間借りしていることには変わりはない。ご主人様と敬称されるであろう人の睡眠を妨げる資格などあるはずもないのだ。」

「けれど、このまま何もせずに起床してしまえば、それはつまり、ただのメイドに成り下がるわけだ。少なくとも自分は、他のメイドとは違う。ご主人様と同じ部屋にいるということだけではない。」

「アリスのためだけに、働いている　　生きている」

「そんな動機を掲げてメイドになったということ。」

「ただそれだけの違いで生じた特権を、自分は今日も瞳に焼き付ける。他のものが見えなくなってもきつと、後悔しない。」

「アリス……。好き……」

「どうせ心の内を知られてしまうなら、口にしてしまおう。そうした方が恥ずかしくないよ、最近気づいた。一人ではなく二人でいるという非現実には、少しの不安すら覚えていない証拠だった。」

「その代わりに、『ぎゅってしたい』『ぎゅってされたい』と高揚する胸中を抑えることの方が、不安だった。」

「衝動が閾値を超える前に、着替えてしまおう。」

「起こしてしまわぬよう、布団を出る時は気を付けた。二重になっているカーテンの内、片方だけを開けた。そして、クローゼットからアリスの着替えを取り出して、ベッド横の机に置いた。」

「これも業務の内だった。」

「自分としては「業務じゃなくてもやりたい」くらいの気持ちでいたから、仕事だと言われたときは少しだけ悔しかった。」

「さて。」

おさがりのパジャマも脱いで、着替えも済ませた。
朝の支度をしなくてはならない。

時計の針が午前五時を指す直前くらい。

自分は、アリスの家　　ナイス家の厨房にいた。

自分の家のキッチンと比べること自体、失礼にあたりそうなくらい大きいキッチンには、メイドが四人いた。そこに自分も数えるなら五人か。

「みなさん、机の上からレシピを三枚ずつ取って行ってください。
これが今週の献立です」

メイド長と思しき人物が、金切り声のごとき高い声で、ほかのメイドに呼びかける。指揮をとっているのもそうだけど、一人だけ眼帯のようなものをしているから、格が違うのだとすぐわかる。していない時もあるけど、それでも目を閉じている気迫で他との違いを感じた。

バックで口を開けている巨大オープンにメイド長の声が反響して、心地の悪い音が生まれる。

近くにいたメイドから順々に、ご主人様方の好みの味付けやら配膳位置についても事細かに書かれた献立の紙をとっていく。一番遠くにいた自分は、流れに従って最後に控えた。

順番が回ってきた時だった。

「ノア様は、昼食の分と休日分の、とらなくていいですからね」

「……ふえ？」

いつもの金切り声とは質を異にする優しい声に虚を突かれて、「え？」の形をしていた口からだだ空気が漏れてしまう。言葉の意味を理解しきるころには、息も吐ききって、確りと不安と疑問の表情

を浮かべていたのだと思う。

戸惑っている自分に追い打ちをかけるよう、メイド長がまた、柔らかな言葉をかけてくる。

「ああ！ 違いますよ。決してあなたを仲間外れにするというわけではありませんよ。ただ、ノア様は昼は学校で不在ですし、育ち盛りなので休日はしっかりと休んでいただきたいのです」

「……………うん？」

「大丈夫ですよ。ご主人様には いえ、私どものご主人様には、ちゃんと許可をいただいておりますので」

イマイチ状況がつかめない。

けれど、一つ確認しておかなければならないことがある。

「ノ、ノアは、ここに、居てもいいの……………？」

「……………」

自分の中にある最大限の原動力を勇氣に代えても、声は震えた。

『ダメだ』と言われたら、その時は仕方がないことだと諦めて出て行こう。そしてまた、あの楽園で、ご主人様を待ち続けよう。

愛という原動力は、これからもずっと、自分を動かし続けてくれるだろうから。

「ノア様！」

「は、はいいい！」

突然、名前を叫ばれて体がびっくりする。手は冷たくなってきたし、足は震えが収まらない。

でも、その叫び声はまだ、優しかった。

「そんな悲しいことを言わないでくださいませ……………」

メイド長に限らず、他のメイドたちも、とても暗い表情を浮かべていた。

心の奥底から『悪いことをしてしまった』と、悔いた。

「うう、ごめんなさい……！」

「いいのです……。これからは、ここを自分の居場所だと思っ
てくださればそれで……。もう、謝らないでくださいませ……。私
たちは家族のようなものなのですから」

「ご、ごめんなさ……。あ……」

温かく歓迎されることに慣れていない自分は、どうしていいかわ
からなかった。

自分の何を買われたかは全く分からないけれど、どうにかその歡
迎に報いようと必死に思考を巡らすと、目が回って、動悸もしてき
た。どうしようもなくなつて視界を閉ざすと、塩しほっぱい水流にこじ
開けられた。

次の瞬間、その水流は、メイド長の白黒メイド服に吸い込まれて
いった。

「ああ、ごめんね……。好きだけ、泣いていいのよ……」

「う、うう……」

本当に認められたのだと勝手に思って、メイド長の胸で少しだけ
泣いた。

我慢して、後になって心が咽いでしまえば、アリスに知られてま
た余計な心配をかけてしまう。

そういつ合理的な言い訳は、朝食を作り終えてから気が付いた。

メイド研修は、こうして幕を閉じた。

自分は今日から、ナイブス家の者だ。

願独モンスーリール（後書き）

【あとがき】

ここで、少しだけアリスの『ノア知覚能力』について、補足です。正しくは、ノアの『アリス限定自己伝播能力』ですね。

基本的な性質は、ルート知覚能力と近い。把握できる限界等。例外として、激痛や失神など、突発的なものは伝えられない（感情を挟む余裕が無いため）。

伝播能力なので、アリスの意志に関係なく伝わる。アリスもノアもコントロールは不能。ノアが『伝えたい』と思ったり、『アリスが……』とか『アリスと……』とか思ったりするだけで、伝わる。伝播したかどうかは、アリスにしかわからない。

こんな感じになります。
でも、まあ。

ノアの頭の中は、同居どうこう言う前よりアリスのことです。いだったので、考えていることや感じていることはほぼ筒抜け状態です。本人は、それでも幸せそうです。

サクラみたいたい場面を動かすキャラがないので、あまり動きはありませんが、百合度は高めを意識しております。もう、イチヤイチャしまくりで行きたいですね。

牛歩の次回も、お楽しみに！

早朝マレーズ（前書き）

【まえがき】

こつこつ文学的なことにも、少しだけ手を出してみようかなと思
いながら、今作は書かせていただいております。

少しだけ、アンテナの感度を高く、先入観は捨て去って、読んで
みてください。

「あれ？もしかして？」と感じたあなたは、きっと、I Q 14
0です（適当

本編です。

早朝マレーズ

部屋に戻ってメイド服を脱ぎ始めるあたりで、アリスが目覚ました。

「んん……」

「あ。アリス、おはよ」

まだ瞼が重そうだったけれど、無理に起こそうとはしない。

仮に、急いでいるのならば、『急いでほしい』と伝わるし、そうでなければ『ゆっくりして』と伝わるから。どんな思いでもってそう伝えたいのかを確実に反映して、伝わるのだから。

今朝はそのどちらでもなかった。

「ノア……。早いね……」

「ん……。ノア、今日から、アリスのメイドになったよ」

白黒服を脱ぎ終わったあたりで、脱がなければ様になったと気付く。

でも、また着直すのも気が引ける。アリスに着てみてと言われでもしないかぎりは。

「ふふっ！ 知ってるわ。よかったわね」

アリスは小さく笑いながらベッドから起きた。そして、さつき自分が用意した着替えに袖を通す。

朝食時だけ着る服らしいけれど、自分の貧しい感性からすれば、それは一国のお姫様が着るような華やかなドレスに思えた。深紅のリボンが、空を映したような水色の布地によく映えた。

よく手入れされた黄金の髪は、その装いに負けずとも劣らない主張をしていた。そのくらいの気品が、オーラのようなものがある人でなければ、そのドレスを着ることなどできないのだろう。自分の

ような平民以下の超級貧民は、呆けて手を打ち鳴らす以外にできることなどない。

普通の貧民と違つとすれば、お姫様のことを心から愛していることぐらい。

しかし、

「窮屈だわ」

お姫様の口からは不満がこぼれていた。分を弁えたうえで、口を出してみる。

「すぐく、奇麗、だと思つ……」

「あら、ありがと」

嬉々とした表情の裏に何か含まれている気がしたけれど、今回はかりは壁掛け時計の指し示す時間に免じて気に留めないでおこう。

「朝ごはん、だよ」

「そうね。行きましょう」

アリスは、だらしなくぶら下がっていた自分の手を取ると、矢継ぎ早に部屋を出た。そして、長い廊下を歩いて、自分の家よりも大きな居間へと向かった。

道中耳にしてしまったアリスの不安を感じ取るには、手を繋いでいるという実感を忘れるしかなかった。

「お父様、最近また豪遊しだしたわね。一体何を考えているのかしら」

その豪華なドレスは、最近導入されたものらしかった。そして、朝食の席にドレスコードを設けるといふことも。

何を考えているのか全く分からないけれど、因果に思い当たる節はある。

ここ最近のイレギュラー、それは。

自分。

メイドとしてこの家に住まわせてもらい、さらには学校にまで行かせてもらっている。それだけでも十分すぎるのに、メイドとして働いた分の給料までもらっているのだ。アリスとも同じ部屋だし。

虫が良すぎやしないだろうか。

「そうなのよね。少し気がかりだわ」

「ノア、追い出されちゃうのかな……」

一番可能性があると思った。

最近変わったことと言えば、自分がこの家に住みだしたことぐらいのものだ。それに乗じて、ルールを改変したというのならば、合点がいく。合点がいくが、納得はできない。

「あたしの脅しが効いたということは、あなたを追い出すようなこととはしないわよ。何の得にもならないから。……得？　もしかして

……」

「アリス……？」

アリスは「なるほどね」とか「厄介ね」とか、一人で頷いて相槌して、自己解決してしまったようだ。何がなるほどなんだろう。何が厄介なんだろう。

不安になつて少し歩くスピードを落とすと、アリスはそのことに気づいて振り向いた。

一瞬宙を舞った髪の毛が落ち着くころには、アリスの優しい表情が視界いっぱい広がっていた。心の底から安堵する。

それに拍車をかけるよう、甘い匂いのする言葉も聞こえてきた。

「あなたは何も心配しなくていいわ」

けれど、心配は消えなかった。

声色も、表情も、言葉選びも、いつものアリスだった。

ただ一つ、

「あれ？　アリス、手が冷たい……」

いつもの温度が消失していることに気付いてしまったから。
「大丈夫、なの、かな……？」

朝食を食べ終えたので厨房に行った。

食器洗いを申し出るつもりで出向いたのに、「学校の支度がある
でしょう？」と諭されて、仕事を一つ免除されてしまった。

少し悔しかつたけれど、無理を言っても悪いと思った。

部屋に戻ると、先ほどもであれほどの輝きを放っていたドレスが、
まるでただの布きれのように力なく、地面に横たわっていた。裏返
しになっているからとかではなく、多分、着る人の問題なのかもし
れない。

窮屈から解放されたお姫様は、勉強机の棚から数冊の教科書をと
って鞆に入れていた。自分と同じ教科書を持っているところを見ると、
と、なんとなく庶民派な雰囲気は漂ってくる。

「さて。そろそろ行くこうかしら」

「そう、だね」

二人だけの時間と空間を、無下にしてしまうのは惜しかったが、
遅刻して退学処分でも喰らってしまったら、家から追い出されても
何も言い返せない。

速やかに部屋を出よう。

と、その前に。

「アリス」

「何かしら」

「はい」

「あら？」

「お弁当。今日から、ノアが、作るね」

「そうなの。ありがと。すごく、嬉しいわ。お礼に、今度何か作ってあげるわね」

「や……そんな、いいよ……」

「遠慮なんていらないわよ」

「じゃ、じゃあ！ い、一緒に、作ろう……？」

「ノアがそれでいいのなら、いいけど。あんまり意味がないような気がするんだけど」

独特の風味と外形上を有しているからと言って、別に、アリスの作る料理が食べたくないわけじゃない。自分の作る料理に、誰かの下を喰らせるほどの自信を持っているわけでもない。

自分にとって重要な意味は、そこではなかった。

「でも、まあ」と言い初めたアリスの視線は、自分の視線を避けるように横へと逸らされていた。おまけに顔を少し下目に傾けられて、その表情の縷々を汲み取るのはかなり困難だった。

そして、紡がれた言葉もまた、

「そういうこと、よね」

理解困難だった。

でも、きつと、そういうことなのだろう。

説明するのが面倒だから、人は“愛”という言葉を考え出したのかもしれない。相手の気持ちなんてわからなくとも、それは感じることができる。仮に、相手から発せられなくとも、感じることできる。

そういう矛盾を山ほど孕んだモノ。

それがきつと、“愛”なんだと思う。

「ふふつ。面白いこと考えるのね」

「お、面白かった……？」

「ええ。面白いわ。とても」

「そ、そかな……」

料理。

愛。

面白い。

そういうこと。

もう、なんでもよかった。

こうして二人でいられる喜びに、今までさんざん叩かれてポロポロだった自分の心は、昇天して機能しなくなってしまったのかもしれない。

けれど、そんなことも、もう、どうでもよかった。

目まぐるしく回っていくこの世界の中で、この部屋だけは止まっていた欲しかった。厄介な時間の流れも、惜しまれる空間の在り方も、何もかもすべて止まっていればよかった。

でも、もう『願い』は叶っていた。

だから。

だから、今日は。いや、ここ数日は。

「さ。少し早いけど、待ち合わせ場所に行きましょう。」

あまり、学校へ行きたくはなかった。

「ん……」

二人分の重さを持った足は、踏み出すのに少しばかりの力が要った。

「これでよし、と」

「あなたも健気よね。娘が家を出たというのに、少しも顔を見せな

い母親も母親だけだ」

それは、自分のことを詰っているのではなく、当たり前前の疑問を投げかけてきたただけだ。

なら、知っていることはすべて話そう。知っていることしか話せないけれど。

「いいの……。お母さん、お仕事忙しいって、ずっと言ってたもん……。ノアには、夜ご飯作る、くらいしか、できない……。から」

「ずっとって、いつからよ」

「お父さん、いなくなっすぐ、くらい……。から、かな……。？」

「あ。ごめ」

「ん。いい、よ……」

父親に関する記憶がほとんどないおかげで、そこを責められても痛くも痒くもないのだ。

何をしていた人なのか、いつ母と結婚したのか、今何歳なのか、名前は何というのか、自分について何を知っているのか……。存在しているのか、それすら判然としない。

いや、居はしたのだろうけれど、自分との接点という漠然とした証拠のようなものを微塵も感じなかった。

だから、そのことに関して、特別悲しいとかは思ったことはないのだ。

「そう。なら、安心したわ。でも、ごめんなさいね」

アリスは柔らかい表情でそう言うと、頭を撫でてくれた。

自然、目が閉じる。

「……………」

このまま目を開けていたら、あの部屋に吸い込まれてしまいそうだったから。二人だけの時間、二人だけの空間に閉じこもって、鍵をしてしまいそうだったから。それだけの価値が、アリスにはあったから。

「ふふふっ」

アリスの小さな笑い声が、草臥れた一部屋に木霊する。

髪を梳く温度に埋もれていた自分にとって、それは驚天動地の出来事だった。

すぐさま目を開けると、視線に引力が働いた。

「……？」

アリスの微笑みを直視することはできず、背景の薄汚れた黄土色が、いやに目に焼き付いた。

「……………」

やっぱり、好きだった。

少しだけでも、その表情を見たくて、今度は逆側のカレンダーに視線を飛ばした。右から左へと瞳を動かせば、その途中で拝むことができる。

「……………」

一瞬、視界に入ったのは、鎖骨辺りだった。

すごく、奇麗だった。

「ふふっ。あなた最近、明るいわよね。すごく嬉しいわ」

「そ、そかな……？」

「ええ。そうよ」

すべて見抜かれている、伝わっている 繋がっているという強固で確かな解釈が、自分の心の平穩を保っている。いや、自分を取り巻く世界を作っている。ずっとできなかったことが、できるような気がしてくる。

例えばそれは、誰かのために遊びを考えてみたりということだったり。例えばそれは、誰かのために外に布団を干してみたりということだったり。

最近、こうして自宅へ来る度に、新しい一歩を踏み出したという紛れもない事実が、強く想起されるのだ。前はそんなこと、なかったのに。

「変わったのよ、あなた」

「変わった……………」

意味などさして考えもせず、アリスの言葉を追いかける。

それは愛ゆえに。

「そうよ。あなたは、ずっと一人なんかじゃなかったの。誰かに支えられてるって、助けられてるって、やっと気づいた。それだけのことよ。あたしは、出会ったあの時からずっと、あなたを一人にした覚えはないわ」

「ア、アリスう……………」

「ふふつ。性格、明るくなったのに、今度は泣き虫になるのかしら」
「な、泣いて……………ないから！」

そう。泣いてなんかかない。

もう、泣いたりなんかしない。

でももし、自分の涙が止められないようなことがあるのならば、その時はきつと、皆が笑っている時。誰もが幸せで、優しい気持ちになって、笑顔でいる時。

とても簡単そうに見えて、難しい。

独りじゃない。

そう、思った時。

変わるのなら、そんな月並みな答えが許される笑顔が欲しくなる。

「アリス……………大好き！」

でもそれは、要らなくもある。

早朝マレーズ（後書き）

【あとがき】

少しこれ『***』が多かったですね。

場面を展覧しようとしたのですが、やはり、この二人は二人にしておくのは危険ですね。

書いていて思うのは、「この二人ならこうするだろう」「じゃなく、

「おお！？ あのノアがそんな大胆なことを！？」なのです。

これは、由々しき事態ですね。

もっと二人きりにしなくてはいけません。

ノア編は百合メインになりそうです。

次回をお楽しみに。

「謎エッセイ」(前書き)

【まえがき】

「謎エッセイ」は、学校です。

本編へつづいて。

一謎エトランジュ

アリスと違うクラスだ。

今度は、そんな重たい気分ですを引きずりながら、自分の教室へ向かっていた。

背景を染めるアイボリー、走ると滑って危ない廊下、エトセトラ……。配色や規模などの外形としては、小さい頃から持っていたイメージと、ほとんど相違なかった。

けれど、

「昨日さー、彼氏がさー……」 「ええー。マジ？」 「ホントなのー？」

「よー、お前ら今日暇？」 「すげえ暇。どっか遊び行く？」 「『遠い方』でも行くか」 「お前女いねえだろ」

廊下の両サイド、階段の踊り場といったところでたまって話している男女を見かける。

どうやら、中身はイメージ通りとはいかなかったようで。

いや、イメージ的には外れてはいないのかもしれない。ただ、幼いころから想像していた、たくさんの友達に混ざって楽しくお喋りすることや恋バナに花を咲かせて今をトキメいてしまうようなこととは、かなりかけ離れてしまっている感じがする。どっちも、一人ではできないことだ（二人でも無理か）。

ミドル時代がミドル時代だけに、^{アカデミー}ここの空気は得意とは言えない。というか、初めてに等しい。

気分は、異邦人なのだ。

「そー言えば知ってる？ ああ噂」「なに？」「ああー、もしかして【一不思議】のこと？」

「それがさ、最近さ、変な夢を見るんだよね」「急にどうした。メルヘンか」「それ、俺もだわ！」

教室の扉を開けると、男女の話声が混ざった中性的な音の量だけが、耳を劈くようだった。比較的静かそうなクラスメイトの合間を縫って、廊下側一番後ろの自分の席へ。

到着したら、鞆を下して椅子に座る。そうしたら、手の届く位置に置いた鞆から、今日使う教科書を授業の順番通りになるよう机の中に収納していく。

そして、準備は終わる。

「……………」

そう。

言わば自分は『周囲に着いていけない状態』に陥っている。

このところ流行っているらしい【一不思議】についての二三を聞き流して、ただただ座っている今日この頃。流行りの噂も、毎日くらい聞こえてくるから、その全容というか内容は、あらかた知っしまっている。

知っているが、しかし。

それを話題にして、誰かと話をしようなどとは到底思えない。アリスにだって、まだ自分から話題を振ったことがないというのに、そんな赤の他人相手に口を利こうなんて高尚な話は、自分には十数年ほど早いのだ。

でも、だからと言って、『教科書の準備終わったね』とか『一時限目の準備お疲れ様』みたいなことを言われても困る気がしないでもない。

「……………」

類は友を呼ぶ、という言葉がある。その通りだと思う。その逆も

また然り、という自分の言葉もある。本当にその通りだと思う。

走ることが好きな人の周りには、自然と走ることが好きな人が集まるし、年がら年中遊んでいる人の周りには、同じく遊び人が集まってくる。『類は友を呼ぶ』は結果論であり、『呼ばなくても集まった友は類』が因果論である。

そんな思想を抱いて早七年強。

これまで続けてきた孤独を断ち切る力もなく、自分はまた、教室で一人だった。つまり、似た者が集まったところで、それはただの『一人の塊』なのである。

自分の中にあるはずの勇氣はどうやら、アリス限定らしかった。

話すこともすることもないせいで、クラスメイトの顔も名前も誕生日もあらかた覚えてしまった。

そのクラスメイトのことを、アリスと同じくらい好きになれば、自分から話しかけたりできるだろうか。

無理な気がする。

好きになるのも、話すのも。両方とも。

そんな半夢物語ゆめうつつは、左隣の席に座る少女サクラによって、壊されることになる。

「のう、のあよ」

「どど、どうしたの……」

少し明るめのブラウン、長くもなく短くもないセミショート、滞りなく舞い踊り香る甘い匂い。サクラの髪の毛は、誰もがそんな第一印象を抱くに違いないと断言できるほどに、いつも通り奇麗きれいだった。

春にしては涼しすぎる制服、その合間から主張してくる妖艶な鎖骨の影が、健康的で少し羨ましい。豊満とは言えずとも確実に自分よりは魅力的で、さらにその明るい笑顔が魅力を増させる。自分には無いものを、サクラはたくさん持っている。おまけに良い匂い……って、そんなことはどうでもよくて。

首をぶんぶん横に振って、再度サクラの方に向き直る。

「最近流行っておる噂、知っておるか？」

「うん。知ってる」

「どんな噂なのじゃ？」

「え？」

入学式翌日あたりからこれだけ騒がれていけば、別棟とかに隔離でもされてなかったら嫌でも耳に入ってくると思うのだけど。授業中だって、隣の教室から聞こえる程だから。

あ。

もしかして、自分が聞き耳を立てすぎなだけか。

いや、でも、昼休み毎時間どこかへ遊びに行っているサクラほどの行動力をもつてすれば、この煩わしい噂話を聞くこともないのかもしれない。

噂は煩わしいというほど悪い内容のものではないけれど、皆が皆口々に異なることを発信すれば、それはまとまりがなくて喧しくなる。でも、喧しいというほど五月蠅くないので、煩わしい、なのだ。「どんな噂か……。説明、しづらひ……。」「ほう。感情的な話かのか？」

確かに、『気になる！』とか『知りたい！』とか、そういう好奇心めいた感情が無ければ、噂話はまず発生しない。噂というものは、人間の感情抜きには語れないのだ。

だけど、なんだか腑に落ちない。合点がいかない。

「んー……。ちよつと違う、かも？」

「表現的な、抽象的な話かのか？」

表現、抽象。それだけ不確定で、広い範疇を持つ言葉なら、まあとりあえずという形で首を縦に振れる。

けれど、的を射ているかと言えば、掠めた程度な感じでそれも違う。

明白な好奇心を含むサクラの問いに対して、自分の方は少し言葉が曇ってしまう。謎は謎のままに伝えればいいのだから、曇っても仕方ないのかもしれないけど。

「表現か……。んー……。そう、そんな気がする。みんな、噂のこと、アカデミーの【一不思議】って呼んでるのに、不思議はね、一つじゃないの。一つ一つがふわふわしてて、そういうのが、たくさんあるの」

「ほお。なるほどのう。どんなのがあるんじゃ？」

「んとね。放課後、階段を下つてたら、いつの間にか、朝になってたとか。体育の授業で、転んで怪我した人は、保健室が消えたってあと、みんなで、コスプレで登校する夢を見たとか。球技大会で優勝、って人もいるみたい。球技大会、まだなのに、変だよな」

「そうかそうか。なるほどのう。どれも面白そうじゃのう」

「そ、そだね……」

時間逆行、空間喪失、コスプレ、未来体験、エトセトラ……。

面白そう。

確かにそうかもしれない。

そう思うから、噂は広まるのだろう。

でも、少なくとも自分は、そうは思わない方の人間だと思う。そう。

噂の渦中にいる張本人、いわば『被害者』の人たちと同じ意見。

面白半分、或いは面白そうというだけで【一不思議】を噂として発信するだけの者達は、もしかしたら気付いていないのかもしれない。でも、そっちの方が幸せなのかもしれない。だって、『面白そう！』という好奇心を持てるわけだから。

自分のように『何だろう？』という疑問を持つことも、噂の渦中にいる当人たちのように『どうしよう』と思悩むこともないわけだから。

でも、自分は気付いてしまった。

この噂話は、ただの噂話とはわけが違つと。面白半分で聞き流せるような生易しいジョークではないのだと。

「のう、のあよ」

「な、なに……かな」

「のあは、何かないのかの」

「なにか？」

「【一不思議】じゃよ、【一不思議】」

あるとすれば、それは【一不思議】という存在そのものだ。

幽霊の正体見たり枯れ尾花という言葉があるけど、【一不思議】の場合は、“枯れ尾花の正体見たり枯れ尾花”だということ。つまり、ここで大切なことは【一不思議】という噂話の中身ではなく、外枠の形。

ここ一週間で分かったことをまとめて、尾花を垂らしたのは誰なのか、推理してみよう。

左斜め上、黒板の上の時計を一瞥した勢いに任せて、首を傾げる。一時限目まで、時間はまだ少しある。

「うーん……。【一不思議】、かあ……………」

【一不思議】は普通の噂話とは質を異にし、目を追うことにその範囲を広めていくわけではなかった。

その実情は、一部の人間が話す噂の数が増えるというもの。要は、噂の範囲はそのままに話の中身だけがエスカレートしていくということ。

確かに、同じ人がそう何度も大言するとなると、法螺を吹いているようにも見えてくる。オオカミ少年はそうして信頼を失っていたのだ。

だから、周囲の人間は面白半分にはあるいは、オモシ口話にか、感じ得ないわけだ。

時間遡行、保健室消失……。そんな面白い冗談は、校内くらいでしか流行らないだろう。

自分も初めは 初めの三日間はそう思っていた。けれど、違った。

「あ、あんまり、知らない……………かな……………」

「そうかそうか。なら、他の奴に聞いてみるとするかのう。すまんかったの、急に变なことに聞いて」

「ん。いいよ……」

軽く微笑みを向けてから、サクラは席を立ち上がって辺りを見回した。そして、ちょうどよさそうな人を見つけたのか、視線の先、黒板の方に向かって小走りした。

「無駄、だと思っ……けど」

浮かれているともとれるサクラの軽率を、自分は哀れみをもって悲嘆した。

それは、独言と散ったけれど。

無駄。

それは、意地悪で教えてくれないからではない。聞いて問題解決ができるはずもない、ということでもない。

もし、自分に、会って間もない人と話せるだけのコミュニケーション能力と、知ってしまった世界の秘密を話せるだけの勇氣があるのならば、サクラが歩き出す前に伝えてあげたかった。

「のー。おぬしらは、どんな【不思議】を知っておるのじゃ？」

「【不思議】？ 何それ？」

「うーん……。知ってる？」

「私も知らない。ごめんね、サクラさん」

このクラスの生徒だけ【不思議】を知らない、と。

昨今から続いていた不可思議な時間が過ぎ、訪れた一時の安息を満喫しようと、アリスとルートに挟まれるように屋上の特等席のベンチに腰掛けながら、手作りの弁当を食べていた。

危険防止のための鉄柵の間から覗く遠い空の青と、自分で作った弁当のおかずの彩を見比べてため息をつく。そしてまた空を仰いで、その大きさに委縮する。

遠く高いあの青の上からなら、こんな違和感など塵にも満たぬ些事なことに決まっている。それでも、人は　　自分は悩むし悶える。そんな弱さが、一人だと合点がいった。

また一人になりたいのかと言われたら、それは両手を大きく横に振って、力の限りに拒否したい。けれど、今は、この不愉快な不可思議を断ち切りたくて、三人でいることが不安だった。

「へえ。あんたの担任、熱血なの。今時珍しいわね」

「そうなんだよ。少し熱すぎるくらいで」

「ちよつと、ノア。どうしたのよ、顔色が良くないわよ」

雑談の合間を縫って、右隣に座る恋人が声をかけてくれる。その言葉は、自分の身を案じていた。左隣に座るただ一人の友達は、自分の背中を優しくさすってくれていた。

このままの状態で放課後になってくれれば、それはもう、安堵の限りかもしれない。

心配には及ばないと返答しようと思ったけれど、本当に気分が悪くてそうもいかない。

「ん……。ちよつと、寒い、かも……」

「ええ！？　ちよつと、早く言いなさいな！　ほら、ルート、どいたどいた」

「は、はいいいっ！」

どうしてだろう。

今までずっと、一人だったのに。

味方なんか一人も居なくて、周りは敵だらけ。不思議に支配され

た今と、何も変わらないというのに。慣れているはずなのに。

「『ふつう』じゃないみたい……。」

「ルート、ちょっとノアの弁当しまつてくれるかしら」

「わかった」

「悪いわね。さ、ノア、あなたは横になりなさい」

「えっ？ あっ……。」

アリスの少々強引な力に引かれて、ハタとそこへ倒れこむ。体の重心を、その柔らかさを信じて預けて、羞恥心に転ぶ。熱く赤らむ顔の温度以外は少なくとも知られたくない。

「にゃ！」

「変な声出さないの。びっくりするじゃない」

「き、急に触る、から……。」

耳に掛かっている髪の毛を梳かれて、どうやら羞恥の色も周知になっちゃったようだ。

「耳、真っ赤だよ！ 熱が」

「あなたはちよつと、静かにしてなさい」

「ご、ごめんなさい」

でも、それは自分自身のせいだから。

「ごめんね、ルート……。ノアのせいで……。」

「い、いいのいいの！ 気にしないで！」

自分がアリスに膝枕をしてもらったおかげで、ルートは立ち食い状態になってしまった。そのはずなのに、なんだか嬉しそうに見える。

もしかして、そういう人？

「違うわよ。ルートは、人の役に立てることが嬉しいのよ」

「そう、なんだ……。」

「な、なに。何の話してるの」

「なんでもないわ。あなたが良い人だって話よ。顎で使って悪かつ

たわね、謝るわ」

「うづん。いいよ全然」

その他愛のない会話は、自分にとる『他愛のない』ではないけれど、アリスの体を通して少しづつ自分に結びついていく感じがする。いつの日か、この会合が『他愛のない』不変の日常へと変わっていけばいいな。

そう。他愛のない『ふつう』に。

そんなことを期待して、今はアリスの太ももに身を委ねることにする。

自然、「すう」と、生きていることを確かめるように、ゆっくり息を吸う。寒いくらいの薫風に冬を感じて、すぐに目を閉じる。傍にある光に縋って、暗闇に意識を落としていく。知覚できる感覚の何もかもがいつもより鋭敏になる。高揚した意識で触れる膝枕は、この世のものとは思えない心地がした。

ヒリヒリと肌を刺激する冷たい風さえなければ、昇天していたかもしれない。

今日ほど、そよ風を憎んだことはないと思う。

「そういえば。あなたは知ってるかしら」

「何を？」

「噂よ」

「噂？」

「学校の至る所で聞くじゃない。【一不思議】」

「【一不思議】？」

「あんだ、知らないの？ こんだけ噂になってるのに」

「ご、ごめん。どんな噂なの？」

「変な夢を見たりするのよ。幻覚を見たりとかね」

「夢……。でも、突然どうしたの？」

「いいえ、なんでもないわ。ちよつと気になっただけよ」

また目を開けて、大きな深呼吸を、溜息をつきたくなった。

比べるものが無くなった遠い青に、身も心も、もろとも飲み込ま

れそうになる。何らかを防いでいる鈍色の鉄柵との距離感を掴めなくて、意識が微睡み沈んでいく。それでも、アリスの膝が受け止めてくれるのだという絶対的不变の意識が、何もかもをリセットしているようだった。そうすると、今まで避けてきた違和感が浮き彫りになって、自分の『他愛のない』ものが凸凹と歪に象られていく。

アリスの家に住むようになったこと、ルートが友達でいてくれること、二人と同じ学校へ進学できたこと、春なのにとっても寒いということ。

ゼロに戻った自分に、何ができるだろうか。

「ね、ねえ、アリス」

「ん？ 何かしら？」

傍にいる温かさと髪を梳く包容に依存しながら、自分は安定を保つ。そういう狡さも、少しは知っている。自分を守るために知ってしまった、良くないことだということも。

ただ、そう高飛車にでも乗っていないと、見えない距離感に回路がショートして、脳が麻痺してしまいそうだった。ただでさえ、顔が灼ける様に熱い。

熱を外界に放出するよう、勢いに任せて言い放つ。

「アリス、【一不思議】知ってるの？」

「え、ええ。知ってるわよ」

「ノアに教えて」

「な、何かしら」

知られたくないことなら仕方がないと思う。でも、今は自分が知りたかったのだ。

アリスと顔を合わせていたらきつと、炯眼に射られて引き下がってしまっただろうけど、今、自分の目の前にある光景は、遠くて寂しい不思議だけで。自分の弱さも何もかも、すべてゼロに近い塵のようなものだと、そう自覚させるような、違和感を象った謎だけで。

「アリス、【一不思議】に巻き込まれてる、よね……」

「「え？」」

二人の息がぴったり合う。

なんだか悔しいけれど、今は、自分の方がアリスと同調していると自負できる。

「アリス、お願い。ノアに、教えて？」

「ア、アリス……。本当なの……？」

「……………」

これはどちらの沈黙だろう。

わからない。わからないけれど、ものすごく不安になる。

膝から引き剥がされてしまう悪いイメージが思い浮かんで、焦りに拍車をかけた。

出た言葉は、

「う、ごめんなさい

『捨てないで』という意味を帯びた、心からの謝罪と、

ノア、アリスのこと、何にも知らないから……。ノアのこと
は、全部、伝わってるのに……………」

『願い』に依存した、申し訳程度の言い訳だった。

「伝わってる？ どういうこと？」

「あつ。なんでもない！ なんでもない、から……………」

「……………」

戦ぐ春風が、悪寒を連れながら二の腕の裏を掠めていく。遠くに
あった空は、もうすでに頭上近くまで伸びてきていて、さっきまで
見ていた空しい青は、もうそこにはなかった。代わりにそこにあっ
たのは、見慣れた白。

天気が悪くなってきた。

少し首を傾けて空を仰げば、空しい青と太陽色の細やかなる攻防

が、今まさに行われている最中だった。青はそのまま空しいままで、代わりに太陽は無表情でいた。こびりつくように鬩ぐ青も、今の太陽の無機質さには空ろうしかない。
どうやら、空色は劣勢のようだった。

「ど、どごしよじ……」

今、何をすればいいか、全くわからない。

謝罪を重ねて、下手に出ればいいのかもわからない。でもきつと、そんなことをしても、沈黙を長引かせるだけ。常に下手にいるから、無意味だし。

それなら、急に閃いて、この場から走り去るのがいいだろうか。そんなことをすれば、自分は変な人だと思われてしまう。でもきつと、もう変だから、もっと変な人になる。

ここは意表をついて、太陽の懐に飛び込んでみようか。太ももと太ももの間に顔をうずめて、柔和な新世界を冒険してみようか。それなら、場が和むし、幸せだしで一石二鳥ではないか。

いや。
それこそ真正の変態だ。アリスの両親に現行犯で逮捕されてしまうに違いない。

だったらこのまま沈黙を続けて……、というのは本末転倒相違ない。

「……………」

もしかしたらこの沈黙は、自分が作り出した沈黙なのかもしれない。

これだけの邪な心情を挿し込んでも、アリスは眉一つ動かしてはくれない。

それはつまり、【一不思議】という概念を知らないクラスに所属

しながらも【不思議】を知っている、イレギュラーな存在である自分に気付いたアリスが選択した、一つの行動なのかもしれないのだから。

でも、騒動の中心が自分でないことぐらい、自分にはわかる。そして、自分がそうでないと決定づけた自らの記憶も、アリスは知覚しているはずだということも。

だとすれば、どうということなのか。

「アリス……」

ゼロがイチに変わっても尚残っていた、深い凹凸について、自分は幼さを盾に言及しようとしていた。

それを罰するかのように、事務的なまでに乾いたチャイムが響いて、沈黙を破り去って空しい空へ消えていった。

「これって、放送だね」

「そう、みたいね」

『本日、入部届の提出最終日となっております。週末には球技大会も控えているので、本日中に決めるよう努めてください。では、入部届の提出場所を部活ごとに発表していくので、メモを取ってください。まずは』

「どうするのよ。メモなんて持ってないわよ」

「じゃ、じゃあ僕が教室に戻って、メモしておくよ！あとで、見せ」

「ノア、紙とペン、持ってる」

沈黙が解消された偶然に肖あやかって、体を起こす。体調不良も、良い匂いを嗅いで気分が良かったおかげで、わりと回復していた。

九十度傾いていた世界が元に戻ると、鉄柵の隙間から校庭で遊ぶ幾数名の生徒たちの姿が見えて、少しだけ安心する。

『サッカー部は、校庭東側のサッカー部部室。体育館隣の部室棟の三階にあるが、わからない人は職員室の』

「え、と……。校庭東の……」

手のひら大の小さな紙に、メモを取っていく。この紙の裏には、ナイブス家の昼食事情が書かれている。ご両親もとい、ご主人様の好みを把握しておきたくて貰っていたものだ。

ペンは、物忘れしないようにと、小さい頃からの癖で持ち歩いていた。

放送の内容から、必要そうな部分だけを抜き出して、書き写していく。

わりと、字を書くことには自信があった。けれど。

「ああっ！」

びっくりして、文字が化ける。

そんな些事を咎めるつもりはないけれど、声の主の方を見ている。手でわざとらしく口元を隠して、憔悴した表情で、何か言っている。

「僕、先生に呼ばれてたんだった！先に帰るね！今日も、一緒に帰れたら、帰ろうね！そ、それじゃっ」

そうして、あっという間にルートは走り去ってしまった。

そして、二人だけになった屋上に、扉が閉まる音が響いた。その音は、校内放送の渋い男声を打ち消してしまうほどに愁いを帯びた、無機質無感情であった。

ルートの後を追うように、予鈴が鳴った。

現放送は、五時限目の後に持ち越しという形で打ち切りになった。「さて」

少し開いてしまっていた距離を埋めるよう、アリスが詰めてくる。でも、さすがにいきなりは怖くて、ベンチの端まで逃げる。行き場を失って、アリスの方を横目で見る。

「ア、アリス……？」

「ふふふっ」

アリスはにんまり微笑んで、嬉しそう。

口角が細かく動いて、表情の豊かさが　コントロール力が垣間見える。

なんだか落ち着かなくなつて俯くと、もう一度「ふふふっ」と笑つたアリスの吐息が耳に掛かつてくすぐつたい。そして、心臓が勝手に鼓動を速める。

「にゃふ……」

きつと、もう一度息吹を吹きかけられれば、また腰を抜かしてしまふ。

「でも、それでもいいな。授業、出れないけど……」

そんな腑抜けに現を抜かしていると、気付けの言霊がやってくる。

「後で、色々、教えるわ」

アリスは、そんな冷たい印象を残して、屋上を去っていった。

横風になびく太陽色は、確りと自己主張をしながら、遠くに見える空しい青を引き立たせてもいた。アリスの髪を梳くように透過した風からは、甘い良い匂いがした。物理的にだけじゃなく、精神をも包み込むような、柔らかい風だったと思う。

でも。

でも、とても寒かった。

「アリス……？」

二時間を残したこの後の授業に、集中できる気がしない。

「謎エトランジュ」(後書き)

【あとがき】

ノアは何かと鎖骨を気にしておりますが、別に鎖骨フェティシズムなわけではございません。

少し暗い性格の人を想像してみてください。

視線は、ちょっとだけ下だと思っております。その副作用が、鎖骨であります。

ちなみに、ノアは『髪フェチ』です。

いや、『髪の毛フェチ』が正しいかもしれません。

そういう設定も、ぼちぼち立てていきたいですね。

次回をお楽しみに。

解帰ポヌール・ア・ヴ(前書き)

【まえがき】

今回は少しだけ長くなります。

百合百合し始めの二人を、どうぞよろしく。

解帰ボヌール・ア・ウ

前日前々日と、連日カーリング部にお邪魔していたから、一部の部員の顔合わせは今日が初めてではない。別に何かを期待して欲しくて、そんなことを抜かしているわけではない。

ミドル時代から活躍していたアリスの名は、アカデミーのカーリング部にも轟いていたようで、入学式から三日後という不安定な時期にも関わらず、アリスは先輩らに拉致されていた。

放課後、一緒に歩いていいたから、そのついでということで連れていかれたけれど、まさか、自分が部活などというコミュニティに属することになるとは思いもしない。

二言目には『アリスのため』が飛び出す自分の口も、先輩方や顧問の先生の熱弁を浴びると、さすがに動かなかった。

そうして、半強制的に入部させられたわけだ。

名実のあるアリスは言うまでもないけれど、自分のような未経験かつセンスの欠片もない人間は、部員として歓迎されるはずもない。おまけに、カーリング部は人気があつて、競争率も激しかったから、さらに存在意義が希薄になる。

仮に「辞める」と言われていけば、その時にきつと、辞めていただろう。やりたいかやりたくないかで言われたら、もちろん後者なのだから。

早く帰って、食事の支度をしていた方が世のためアリスのためになると、そう思っていたのだ。

口に出さないだけで、『アリスのため』と思っではいるのだ。

それが伝わったのかどうかは知らないけれど、アリスは一体何を考えて、自分をカーリング部に留めるのだろうか。

まあ、でも。

『ノアさんは、運動神経悪そうだから、やめといた方が良いと思うよ？』

『アリス様だって、練習に集中したいだろうし。ましてや、未経験者なんてねえ……』

『アリス様の足手まといにならない自信があるのなら、話は別だ』
『ど』

アリスが、自分を留めてくれないければ、自分がこうして『マネージャー』という役職をもらうこともなかったのだ。誰かのためにアリスのために何かする、できる、そういう役割を、ここでもらうということはできなかったはず。

『いいのよ。ノアは、あたしが好きだから』

その『が』は、どういう意味なの？

そんな醜く愛くるしい疑問は、氷上を颯爽と滑るアリスを目で追うことで、忘れることができそうだった。

体育館と校庭、それからプールに部室棟。それらがすべて隣接する位置。つまり、円形の中心部にある巨大な建物の中に、カーリング部の部室と、活動場所であるアイスリンクは存在した。

体育館よりも高い天井に加えて、校舎の廊下よりも長い通路。建物の中心に向かって勾配があるので、建物に入ると自然、アイスリンクが目に入るようになってい。そのアイスリンクは、整備の仕方によってはアイスホッケーやフィギュアスケートのリンクになったりもする。手を伸ばしても届きそうにない高い天井は、開閉式になっていて、実施競技に応じて開け閉めが可能なようだった。

建物そのものの大きさはじめ、搭載設備の規模やクオリティも、国内最大らしかった。半年に一度の全国大会の会場であったり、世

界大会の会場になったこともあったりしたようで、学校に敷設される建造物としては珍しい、観客席を有していた。ただ、何もかも差し置いて際立つのは、肌を貫くような圧倒的な寒さ。

中央に構えるリンクを囲むようにして並んだ観客席の一番前で、自分は一人の少女の一挙手一投足と一際目立つ綺麗な白肌を、まじまじと目で追っていた。

うまくストーンを配置できた時に小さくガッツポーズをしたり、顧問の先生に褒められて目を輝かせてみたり、先輩に敬語を使っていたり、エトセトラ……。

普段見ない一面を見ることで、ここ最近の心の蟠りと、見ているだけで寒くなるような選手たちの風体も、一瞬だけ忘れることができる。

忘れることのできなかつた寒さに身悶えながら、自分は顧問の先生の隣に座って、マネージメント業務についての話を聞き流していた。

「だいたいそんな感じになるわね。わかった？ ……って、ノアさん？」

「……は、はい！ わかり、ましたっ」

「はい。よろしいです」

気が散っていたのではなく、単に言葉選びに時間がかかってしまった。

敬語も人付き合いも慣れていないのに、突然コミュニケーションを始めるから、こういうことになるのだ。

でもそれは、自分のエゴでしかなく、世界は平等に 平らにしようとする選択を迫ってくる。それに応えられるか、応えられないか。それによって、自分自身を取り巻く環境は大きく変わってくる。

今は、ちゃんと応えられていたから、先生が言葉つながらをくれた。

「でも、ノアさん、ありがとうね」

「ふえ？」

これは、どう平らにすればいいのだろう。

ここは視線をアリスに飛ばして逃げて、先生に任せよう。

「このカーリング部にマネージャーができるって、初めてなの」

「……そ、なの？」

はっとして、周囲を見渡す。

そこには、先生の文言の説得力をこれでもかと削ぐ、広大な観覧席があった。きつめの勾配が圧迫感を醸して、少し息苦しかった。

「ははは……。そうよ。こんなに良い設備があるのに、部員数はいつも十人くらい……。部員たちは不真面目だし、いつ潰れてもおかしくない……。だから、ありがとう、ということよ」

今度はリンクの方に視線を向ける。

ちゃんと練習しているようだし、サボっているような人は見受けられない。強いて言うなら、私利のためにここにいる自分が、一番不真面目だ。

こんなに寒いのに、アリスの額には汗が滲んでいる。他の部員たちも、みんな肩で息をしている。

「真面目そうに見えるでしょう？ でもね、それって、私が監視しているからなの。今日は初ミーティングだから来れたけど、私、仕事が忙しくてなかなかここに来れないのよ」

「そ、そう……なの？」

「うふふふつ。そうなのよ。おかしいでしょ、顧問なのに来れないって。ちよつと、教頭先生に目を付けられちゃってね……つと、この話は無しね」

突然、そんな大人の世界の黒さを見せつけられても、どうしていいかわからない。

でも、世界は平等なのだとよくわかる。

若々しいと言うのも気が引けるほどのあどけなさや童顔。とても愛くるしい眼差しと、先生とは思えないほど頼りない柔らかさすぎる雰囲気。でも、その中で見え隠れする、厳かな『先生』の風体が、好印象のギャップになっている。『昔はモテた』みたいな話をする先生はよく見るけれど、この先生がそれを言っても、きつと誰も信

しない。

「この先生、可愛いから絶対モテるだろうなあ……」

「ん？ どうしたの？ 私の顔に何かついてる？」

まじまじと眺めてしまっていたことを反省して、首を横に振る。

そうすると、先生は微笑みを返してくれる。『素敵』の一言ではもったいないくらいの、『可愛い』という言葉では形容しがたいほどの、そんな笑顔だった。

「だから、ね？ ありがとうね、ノアさん。あなたがいてくれれば、アリスさんもいてくれるでしょ？ もちろん、その逆もねっ」

「……………」

「あれ？ 違った？」

「……………そう、だと思う……………。アリスは、どう思ってるか、知らないけど……………」

「やっぱりそうだよね！ よかった！」

多少食い気味で、明朗な合いの手を入れてくる。断言したつもりはないのだけど。

「なんだか調子が狂う。」

いつの間にか傾いていた首を元に戻すと、先生が謝ってきた。

「いやー、ごめんね、急にこんなこと言ったりして。入部初日なのに、こんがらがるよね」

矢継ぎ早に出来事が進捗して終わっていく。対処の仕方がわからなくて、どうしようもなくイベントだけが消化されていく。

「追いつこうにも、進み方がわからない。」

「あ……………」とか「う……………」とか、口をパクパクしながら逡巡していると、先生の方から近づいてきてくれる。

「私、気付いたかもしれないんだけど、言ってもいい？」

イエスカノーか。それだけの質問なら、理解が追いつく。

要は、聞きたいか聞きたくないか。そういうこと。

ここで聞きたくないと思つてしまえば、きつと、会話はそれで途切れてしまう。

別に、この先生に特別の思い入れがあるわけでもないし、むしろ早く終わらせてアリスとお喋りをしたいと思つていた。でも、それだと、今までと何ら変わらない。

それでは、ここ最近の感じの悪い謎に押しつぶされてしまう。

そこまで頭が回って初めて、自分は首を縦に振れた。

先生は「じゃあ、言っちゃおうよ」と、勿体ぶる。

そのセリフを勿体ぶっていると感じるということは、自分がただ『聞きたかった』のだということ。そんな恥ずかしい意地に、気付いてしまった。先生もたぶん、気付いている。自分は、『本当は聞きたい』のだと。

結局、俯いたまま先生の言葉を待つしかない。

「好きなんでしょう？ アリスさんのこと」

「え……？」

思わず顔を上げ、先生の方を見る。冗談なのかどうか、知ろつと

した。
コミュニケーション不足の自分には、目の前の先生の顔は、さっきまでと同じ『笑顔』に見える。少し視点を遠巻きにすれば、さっきよりも若く、もう、普通の学生となら変わらない、まさに青春している表情だった。

あたふたと泳ぐ目を落ち着かせようと、急いでアリスを探す。一点を見つめれば、何とか冷静になれると思つた。

なれなかった。

たつた今、その人が話題に持ち上がっていることに、気付く。

またも、「え……」「あう……」と言葉を失ってしまう。

先生は、唐突に立ち上がって、対応に追われる自分を弄ぶ。髪の毛

毛がくしゃくしゃになるくらい強引に、頭を撫でられる。そこに悪意などは感じない。痛くはないし、むしろ、強く手を繋いでいるかのような安心感さえある。

自分はもしかしたら、頭を撫でられると思考停止してしまう体質なのかもしれない。

全く体が動かない。恥ずかしいのに俯けないから、目を閉じるしかない。

「うふふっ！　かわいいっ。ノアさん、もっと自分に自信もっていいと思うわよ！　すごくかわいいんだから」

「……………」

「みんな、あなたのことを悪く言うかもしれない。でも、それは羨ましいからなのよ。何か言われたら、逆に喜ぶくらいじゃなくちゃ！」

髪を撫でるといふよりは、頭部を抱擁するという感じ。

アリスとは違った趣がある。

あ。

「アリスの方が、良いからねっ」

「その気持ち、絶対忘れちゃだめよ？　願いは、いつか必ずかなうんだから」

「？」

「まあ、ノアさんなら心配ないか！　とにかく、辞めないでねってこと！」

なるほど、勧誘に結び付けてくるとは。

でもそれは、ここに居てもいいということでもある。

「ありがと……………」
「ありがとうございます。せ、先生も頑張っ……………」
「うん。頑張るね。それじゃ、またねノアさん」

頷くと、先生はアイスリンクの方に向き直って声を張った。

「休憩ー！」

急に声色が『コーチ』に変わって、少し戸惑う。

全く何なのだと、愚痴りたい。どうしてこうも、優しくするのだと。不満を述べたい。

ここ最近おかしいのだ。

眼鏡をはずしたら世界が変わるとはよく言っけれど、ここまでは思いもしない。

先生の号令を聞いて駆け付けたアリスに、タオルを手渡して、世間話といこう。

願わくは、この凍ってしまうような違和感おかしな寒さを忘れられるよう。

「ルートはね。昔、有名なサッカー選手だったのよ」

アリスは、虚空を見つめながらそう呟いて、会話の口火を切った。視線が散ってしまうのは疲れているからなのだと自分に言い聞かせて、すっかり整ったアリスの呼吸音を感じる。そういう自分の最初の返しはというと、例によって「え？」だった。

アリスは、同じ語調で続けた。

「エレメンタリーくらいの話よ。ルートは、サッカーの世界大会に出場したのよ。もちろん、ジュニアの部だけ」

「す、すごいね。ルートって」

アリスは首を横に振る。

尚も、視線は氷の上で。

「それで終わりじゃないわよ。ルートは、MVPもとってるのよ。」

大会で最も活躍した選手に与えられる最高の賞、MVPを「

「……………」

「MVPになると、サッカーの超名門校に推薦で入れる上に、寮費とか活動費が全額免除になる権利が与えられるのよ。学費は、別みただけだ」

「ふ、ふーん……………」

なんとなく、アリスの言いたいことがわかった。世間話は、オチに気付いては面白みに欠ける。

「ま、まあ、そういうことよ」

「うん。そういうことなの」

同調して頷く。アリスが当たっているとさえ、それは確実に当たっているのだ。

だから、テストの時、アリスが羨ましくなる。

それは、いいとして。

そういうこと、とはどういうことか。

「ね、ねえ、アリス……………。そういうことって、どういう……………こと？」

解答だけでは理解まで及ばないので、解説が欲しい。

アリスの言霊とルートの所作から推察した自分の解答と、合っているかどうかの確認も兼ねて。

「ルートに直接聞いて……………って言いたいところだけど、絶対はぐらかされるし、詮索自体良いことではないから、仕方がないわよね。

それに、あなたのことをすべて知っているなんてズルいものね」

ぶんぶんと首を縦に振る。

それはまるで、ご主人様に尻尾を振る飼い犬のよう。

「そうね。まず、あなたが気になっていることに、答えるわ」

アリスは、タダでは餌をくれない。

少しもどかしいけれど、自分という存在と付き合ってくれているという実感が湧く至福の瞬間でもある。

潤んでしまう羨望の眼差しを、理性でもって隠して、議論を進めよう。

「一番は、どうしてルート……サッカーやってないのかなっていきなり確信をつきすぎているかもしれない。」

それをルートが言わないということには確実に理由があるし、その理由もきつと、もの凄く込み入った深いところにあると思う。自分みたいに関わりたての人間が、知っていいことではないに決まっている。

アリスの言う通り、時間をかけて本人から直接聞くのが一番良いに決まっている。

アリスはそれをわかった上で、教えてくれるのだろうか。

「そうね。私情に口を挟むのは、本当に良くないことだと思うわ。プライベートを勝手に覗くようなものだもの。それに、あのルートがひた隠しにしているのだから、尚更深入りしないといけない」

「それでも、聞きたいのか、ってこと……？」

勝手に、試されているのだと思った。

ルートのことをどこまで信用しているのか、を。

アリスに限って、そんなことはしないとすら思うけれど、それ以外考えられなかった。

無言のアリスの瞳は、真っ直ぐにこちらを捉えている。

「し、知りたい」

言ってしまった。

「知りたいよ」

言った。

「知りたい……」

言えた。

初めてできた友達は、自分を無条件で受け入れてくれた。もしかしたら、本当は嫌なのかもしれないけれど、とても優しくしてくれた。アリスとの関係を応援してくれた。「朝、一緒に学校へ行こう」と誘ってくれた。

だから、知ろうと思った。友達でいてくれるお礼じゃないけれど、それに近いものだと思う。

そうか。初めての友達だから、なんて言っているのかわからないのか。

アリスへの“愛”とは違うから、“友情”みたいなものだろうか。とにかく、「友達が困っていたら、助けてあげたい」と思った。

「ふふっ。あなたも大概、お節介やきよね」

「そう、かも……」

自然、俯くけれど、いつもあるはずの心地よさはない。

ああ、そうか。今は部活中だった。

あの変わった先生なら許容してくれそうだけど、他の部員は特に、アリスと同じミドル出身の部員からは強く非難糾弾を浴びることになるだろう。

仕方なく自分で自分の髪を撫でて、アリスの言葉を待つことにする。

「……それじゃ、どこから話しましょうか」

今日の帰宅道は、とても静かだった。

学校の校門を抜けて、家まではほぼ真っ直ぐだ。だから、一人でも道に迷うことはない。でも、目的地までの距離が明確である真っ直ぐだからこそ、その道のりは長く険しく見える。

その長い廊下のような道路を、二人で、とぼとぼと歩いていた。

時間は、午後七時過ぎ。初日からかなりハードな練習をしたので、遅くなってしまった。自然、周囲に人影はない。

加えて真っ暗だったけど、それは隣を歩く人のおかげでいくらかましになった。相変わらぬ寒さも、手を繋いでいるおかげで温かったけれど、ちよつと温度不足感は否めない。

会話でもしていれば、もう少し温かったのかもしれない。

「……………」

この沈黙は、間違いなく自分が作り出している。
でも、これでいいのだ。

「ルートは、そのMVPをね。棄権したのよ」

「え？ なんで？ どうして？ 本当？」

「…………… 本当、よ」

別に、「手を繋いで緊張しているのだ」と、適当な理由付けをしてもいい。

むしろ、そっちの方が和やかなムードが漂ってきそつだ。

せつかくの二人きり、「アリス……………。お話ししたい……………」とは思いうけれど、「でも……………」とすぐ心籠こもってしまう。そして、思っても口には出さない。

だから、沈黙になる。

「それ以来、ルートは逃げ続けてるのよ」

「だから、昼休み、どこか行っちゃったんだ……………。でも、なんで……………」

「それは……………」

アリスは親友の傷口を抉り、その傷口に塗る塩を、さらに自分に渡したのだ。自分とは言えば、ルートのことばかり考えていて、そ

んな当然の仕組みに気が付かなかった。自分がそうしると命令したようなものなのに。

でも、アリスはそれすらも知っていた。

だからアリスは言い終えて、『謝らなくていいから』と、『謝ったら、今日は一緒に寝ないわ』と、そう言ったのだ。

そんなことに、今更気付いて、後悔する。どれだけ自分が考えなしの馬鹿だったのか、痛いほど思い知る。この気持ちを、このまま抱えておけるほど、自分の心は丈夫じゃない。

けれど、唯一の救いである謝罪は、封じられてしまっている。

ただ、謝って済む問題なのかと言ったら、それも違う。

何よりも、自分はルートのことを知りたいと思って、知ったのだ。そして、自分の記憶の一つとして吸収したのだ。吸収したのならば、それを糧として行動を起こさなければならぬ。

『それは、あたしにもわからないわ』

『そう、なんだ……』

『ルートのこと、見損なっただかしら？』

『そそ、そんなことない！ ルート、ノアの友達だし、良い人だし……』

『そうね。良い人よね……』

『だから、きつと、だいじょうぶ……』

『そうね。大丈夫よね。見守ってあげましょ』

そうか。

謝らないでって言うのは、自分の過ちを認めて『逃げないで』ということなのか。逃げることは否定しない。ただ、自分の弱さや個性を認めて、それを受け入れるということ。そうして初めて、人は逃げることができる。立ち向かうこともできる。

なんて下らない自己解決も、すべてアリスに伝わっていると思うと、時々恥ずかしくなる。それに付随して生まれる、『下らないな

んて言わないで』という妄想の中だけの恋心セリフも、自分の羞恥心の種になる。

「……………」
「……………」
暗闇の中、どうして自分が　自分たちが手を繋いでいるのか、考える。

漆黒の帳に二人の隙間を埋められて、光を見失ったとしても、こうしていけば絶対に逸はくれることはない。春に見合わない寒さの中を歩いて、一人という冷却に凍え死ぬこともない。繋いだ後悔に溺れていつても、好きという気持ちはまだ、繋ぐ意味を思い出させてくれるから。

そう思って、自分は、今こうして、アリスと手を繋いでいるのだ。それはつまり、アリスも手を繋いでいるということ。

その相手が誰なのか、知覚できるのは、他の誰でもない自分。そして、アリス。

『ふふっ。そうね。じゃあ、部員もはけたし、そろそろ帰りましょ
うか』

『ね……………。アリス……………』

『何かしら？』

『……………。手、繋いで、帰ろ……………』

視線を落として、小さな自分の手を見る。

同じくらい小さな手が、繋がれている。体が熱くなる。

よくよく考えれば、自分はものすごいことを提案していたのだ。アリスとしては、単なる『手を繋ぐ行為』に過ぎないのかもしれないが、自分にとっては別だ。

何だろっ。愛を深め合う……………って、うわあ。

「……………」

でも、それでいい気がする。

ルートは、妹が好きだと言っていた。アリス談だけど。

「だったら、手を繋げばいい。そうすれば、きつとわかるのだ。」「逃げるということ。」「それが何を意味するのか。」「立ち向かうということ。」「それが何を意味するのか。」

人に言えた義理ではないけれど、「でも、妹はさすがにまずいかな……」、なんて思ったりはするけれど。

『ノア』

『なに?』

『謝らなくていいから』

『え?』

『謝ったら、今日は一緒にお風呂も入らないし、一緒に寝ないわよ』

『ど、どして……!』

『どうしてもよ。謝らなければいいだけよ。そうすれば、いつも通り一緒に眠るわ』

『わ、わかった……』

自分の中にある『アリス限定の勇氣』みたいなものでもいい。

何か一つでも、自分自身のために立ち向かえるのなら、それを尊べば答えは見えてくるはずなのだ。

もしかしたら、ルートの大切なものは、まだサッカーなのかもしれない。だとすれば、縛りをかけている過去の鎖を断ち切ってまた始めればいいのだから、それはとても幸運だ。そうでなくなったら、結果はきつと良いものに変えられる。

自分のように、何も取り柄が無いわけでない。勉強も運動もできるし、とても温和な人格。前後ろのシルエットも完璧だ。女々しいと言っても、それは愛らしい顔立ちをしているともとれる。欠点なんて見当たらぬ。

だったら、きつと、こんなところで満足している自分なんかよりも、もつと高いところへ行けるに違いない。いや、深いところかな。立ち向かう力が、ルートの中には、絶対にあるのだ。そう確信できる。

だから自分は、それを、友達として見守ろうと、そう強く思った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………痛い、わよ」

アリスの言葉とともに、沈黙は破られることとなる。知らぬ間に、アリスの指と自分の指を絡めて強く握っていたことに気付いて、少し自慢げになる。

誰もが知っている痛みという確かな情動が、自分たちを一つにしてくれる必然。もう、この闇の中には、二人^{ふたり}だけ。

【一不思議】も、後悔も、何もかも、光の深淵に溶けて消え去っていく。

痛みだっそう。いつかは微睡んで消えていく。

きつと、残るのは、この手の温度と、気持ちだけ。

解帰ボヌール・ア・ウ（後書き）

【あとがき】

この二人は、放っておくと勝手にイチャイチャし始めるので、作者としては大助かりです。

シチュエーションを妄想するのは、作る側としては楽しいのですが、そこにどうやって持っていくかというのと、それをどう表現するかが大変なところですよ。

ノアとアリスの場合、シチュエーションもクソもないですね。どこでだって、いいんです。

イケナイ場所でイケナイことを始める日も、そう遠くはない気がします。

アリス側はどう思っているのか。

それは、なんとなくお分かりかと思われませんが、次章で詳しく書いていこうと思います。

このジャンルでは最も重要なポイントである「恋愛への発展」を、この二人はさらりと飛ばしてしまっているのです、ノアアリでは「事後の心理」に重きを置こうかと逃げの手法をとるわけですね。

今回は「ノア編最終回」です。

お楽しみに！

不変マイヨ・ド・バン（前書き）

【まえがき】

さて。

ノア編のネタバレ最終回になります。

ノア編は、書いていてすごく面白かったです。読心能力を持つているアリスだと、心理描写が多めになるので、情景中心のノア編はとても新鮮でした。

今回は、そんな情景描写を利用したいやらしい効果を組み込んでみたので、ネタバレのその時まで、考えてみてくださいください。

本編です。

不変マイヨ・ド・パン

不可思議、流転する謎、螺旋する迷宮、エトセトラ……。

そんな非日常の中で、早朝聞こえてくる囁きだけ、変わらなかつた日常だった。

でも、違和感の発端から一週間弱の時を経ると、非日常が非日常でなくなっていく感じも、なんとなくだけどわかった。そうすると逆に、小鳥たち演ずる目覚まし係の存在の方が、どことなく不自然な気もしてくるのだ。数日前まで寝心地のよかったこのベッドも、蒸れやすくて前言撤回したくなる気もする。

不思議に包まれた生活を送って、自分の感性がおかしくなっているのではないだろうか。

今日は、それを確かめたくて、ご主人様の起床を待っていた。従士業務は、急ぎ終わらせた。

自分の眠っていた場所の窪みに正座して、寝顔をまじまじと見つけていた。

なんとなく、同じタイミングで呼吸を試してみたりもした。

「……………すう」

「……………すう」

アリスの寝相はとても良く、適度なタイミングで寝返りを打つ以外は、微動だにしない。だから、自分に接触してきてしまうようなそんな期待通りのハプニングは起こり得ないのだ。寝相が良いというのも清廉な感じで好きなのところだけど、ちよつと残念ではある。

それでも、相も変わらず、その人は自分の隣で寝ているのだ。

これほどまでの非日常など、往々にして存在しない。

「アリス……、寝てると、ノアより、子供みたい……………」

「可愛い……」

少しだけ、少しだけと、理性が殺されて、マシユマロみたいに柔らかかそうな頬に指が伸びていく。こんなことをしたところで、結局、罪悪感が残るだけなのだとはわかっていて。わかってはいたけれど、自制は効かなかった。

頬で済んでいるのだからまだマシな方だと、勝手に自己満足をしている自分も、心の中には確かに潜んでいる。無様である。

「わあ。柔らかか……」

自分の想像していた“最高”を遥かに超えていく手触りだということが、実感をもってわかる。そして、昨日の冷血な人格を忘れさせるかのように「あったか……」かった。

思えば、今まで、自ら直接肌に触れたことはなかった。嬉しい不可抗力のおかげで、唇に振れたことはあったかもしれないが。

すでに一線を越えている気がするけれど、改めて肌に触れてみて思うこともあった。

「毎朝、こんなことやってるなあ……」

きつと、愛が尽きるまで飽きは来ないのだろうけど、毎日やっている学習能力不足を自覚してしまいそうになる。実際そうだけだったら今日は別のことを、明日はまた別のことを……なんてことをやっていたら、そのうち行くところまで行ってしまっくに違いな。それも、朝っぱらから。

すごい。イケナイコトだけ。

それはすごい。でも、イケナイコト。

「なに、してるのよ……」

「わっ。ごめ、ごめんなさい！」

不意をつかれて驚いて、一気にベッドから飛び退く。

飛び立つ前に、自分の手がアリスの二の腕をさすっているところをちらっと見てしまった。

恥ずかしさに、思わず顔を両手で覆う。

アリスの声だけ聞こえる。

「ただだけびつくりしてるのよ……。別に、怒ったりしないんだから、そんなにびくびくしなくてもいいじゃない。あと、すぐに謝るのも、ダメよ」

「う、ん……」

「あら？ 今日、メイド服着たままなのね」

手を除けて、自分の身なりを確認してみる。

アリスの言う通り、自分はまだ白と黒の規律を身に纏っていた。

これでは、アリスの目を覚ましたことが“仕事”の一環みたいではないか。

“恋人の戯れ”であって欲しかった自分にとって、今、この制服は邪魔だった。

「い、今着替える！」

「い、いいわよ！ そのままで！」

アリスが飛び起きて、「待った！」と手を伸ばす。

腰の蝶結びを解き始める直前で、手が止まる。

「アリス……？」

「い、いや、その、ね。あなたがその服着てるの、新鮮だったのよし、新鮮？」

それは、早朝の市場に陳列されている魚介類の、あのピチピチ感とかプリプリ感のことか。

自分の体を触ってみる。首、肩、バスト、ウエスト、ヒップ……ぷ。

がっかりするようなシルエツトが象られていくだけだった。

「その新鮮じゃないわよ。あと、プロポーシヨンは関係ないわ」

「じゃ、じゃあ、なに……？」

熱が引いて青ざめていそうな自分の顔を想像しながら、アリスの言葉を待つ。

アリスの視線は定まらず、そわそわと落ち着かない様子だ。

そんな反応をされると、こちらまでそわそわしてくる。もしかしたら言いにくいことなのかもしれない……それって追放勧告なのかもしれない……と、不安にもなってくる。

「ああもう！　そういうことじゃないわよっ。ただ　」

セリフを中断すると、アリスは視線を逸らして「ふんっ」と勢いよく鼻息を吹いた。

「や、やっぱりなんでもないわ」

凄んでいた勢力も鼻息とともに散って、残った焦燥だけがまた目に見えた。

でも、なんだろう。追放勧告でないとするのならば、アリスが今、自分に言わない理由は。

まさか。

まさかだけど。

「に、似合ってた……？」

ベッドの方に近づいて、アリスの顔を覗き込んでみる。

そこにあっただのは、真っ赤な……って、「わっ」。

「なんでもないから、もういいからっ。は、早く脱ぎなさいな！」

「自分でやるよう……！」

恥ずかしさから拒否するつもりが、内心では何かを期待して完全に拒むことはできなかった。おかげで、脱がされる羽目になった。

でも、文句は言わない。

ただ、好きな人に（無理やり）衣服を脱がされる気分というのは、あまりに新鮮で気色の良いものではなかった。けれど、いい経験になったと思う。アリスも楽しそうだったし。

きつとアリスもこんな新鮮さを自分に感じたのだろうと、勝手に解釈するのが一番幸せな気がする。

「な、なんだか、人の服を脱がすのって……。気持ちいい……。わね」
アリスの解釈は、いざ知らず。
でもよかった。

自分の感性はいつも通り変だった。

「ねえ、ノア」

「ん、なに？」

同じ形の制服を着て、同じ色の鞆をもって。鞆の中には、全く同じ教科書とノートが入っている。これほどまでにシンクロしているのに、隣を歩くアリスとの間に隔絶を感じる。

それは、日直で不在のルートのせいではなく、きつと、ここ最近の寒さのせい。

「四月って、こんなに寒かったかしら」

「ううん」

首を横に振る。舞った髪の毛が目に入って痛い。

そうだ。もう一つ、違和感があった。

眼鏡をかけていないことだ。

なら、眼鏡をかけてみよう。

「あら？ 急にどうしたのよ。眼鏡なんかかけて。でも、久しぶりに見ると、良いわね、眼鏡も」

「よく、見える……」

鏡面を通して像を結ぶのは、非日常に埋もれている自分たちの姿。今までの習慣が崩れて、新たな習慣が生まれた光景。言わば、『慣れ』。

以前の『慣れ』をフィルターに世界を透視すれば、今、どれだけの不信任に苛まれて生きているのか、怖いほどわかった。

そして、この程度の危機感では足りないことも。

「アリス……。やっぱり、『一不思議』に取り込まれて……」

「そうね。そうかも、しれないわ」

伝播した自分の心情を読み解いたようで、アリスは真剣な顔つきになる。

「あなた、ルートのこと、疑っているのね」

「……………うん」

疑っていると言っても、何か悪事の犯人を捜査しているわけではない。だから、もし仮に、犯人というものがルートだとしたら、自分の気が済むまで話をしようと思う。

皆を不安にさせたということ、どうして【一不思議】を引き起こしたのかということ、どうすればこの騒動は収束するのかということ。その他いろいろ。

そんな話ができるのは、『一不思議』の外側にいる自分と、ルートだけなのだから。

「なにか、あたしにできることはあるかしら」

「……………」

ルートと旧知の仲のアリスなら、できることはたくさんあるだろう。けれど、今、アリスは蚊帳の内側にいる。非日常に取り込まれてしまっている。

この不思議を不思議と思える自分の心の縷々を、すべてくまなく知っているアリスなら、外側に引きずり出すこともできると思う。

ただ、それはアリスには相当な負担なはず。異世界に連れていくよ
うなものなのだから。

だとすれば、願うことは一つ。

「あなた、一人で大丈夫」

「ア、アリス……」

「……………」

この素晴らしい非日常じふじふが終わっても、自分と一緒にいて欲しい。
再び流れ始めるであろういつも通りの日常の中でも、自分と繋がっ
ていて欲しい。

「わかったわ……………」

アリスは、少し赤面しながら、自分の手に指を絡めてきた。

願わくは、この手が離れぬよう。

「じゃ、じゃあ……………。学校、行く……………」

「そう、ね……………」

昇降口に行くまでの十五分、当たり前前の視線に安心した。

さて。

教室がそこまで離れているわけでもないけれど、この迷宮のよう
な空間を一人で出歩くのは少々危険な気がする。そうすると、自然
な時間経過で言えば、ルートに会えるのは昼休みになる。

アリスが教室に迎えに来てくれる昼休みまで、自分は飲み込まれ
ずに入れるのか少し不安だ。

その不安を殺そうと、アリスのぬくもりを追いかけるよう、自分
で自分の手を握っていた。その光景は傍から見れば、まるで教室の
一席で神に祈りを捧げているかのよう。

祈って自意識を保てるのなら、今は神でもなんでも信じていよう

と思う。

目を閉じて、教室の話声に聞き耳を立てる。

聞こえてくるのは、いつも通りの【一不思議】。一部の人間だけが知覚できる、世界から隔絶された謎。

今日は、『同じ日を繰り返し返している』という声が多い。

ルートにそんなことを引き起こす能力があるとは思えないけれど、事実、このクラス以外で【一不思議】を知らないのは、ルートだけだと思う。他の学年の生徒の情報は知らないけれど、何となく、【一不思議】は一年生限定な気がする。だってほら。一、不思議だし。適当である。

ただ、部活選択というイベントが、ルートにとる『違和感』であることに違いはない。

もしそうだとしても、一体どうやって、ルートは【一不思議】を引き起こしたのかが、謎になる。

悪く言うつもりはないけれど、ルートだって初対面の人間と軽々しくコミュニケーションをとったりはできないはずだ。自分に接触をとってきたのだって、仲介にアリスがいたからだ。

仲介人がいたとして、一年生全体を巻き込むほどの事件【一不思議】を、起こす必要はない気がするのだ。部活決定を阻止したいのなら、それこそ生徒会にでも乗り込んで抗議しなければ、論題の帰結へは近づけない。

ルートはこのクラスの生徒ではないから、『何故か知らない』とか『【一不思議】について無知』とか、そういうことはあってはならないはずなのだ。このクラスにいない限り、知らないことが、所謂『ふつうでない』ということなのだから。

つまり、行きつく答えは

「ルートが、【一不思議】の中心……」

若しくは、『自分が無意識のうちに引き起こしてしまった』

る』か。

後者だとすれば何か。

無意識化で働く、“チカラ”のようなもの。周囲へと無故意に伝播し、自分をイレギュラーたるものへと位置付けていく不定のエネルギーギー。

あ。

ああ。そうだ。

『願い』の力、なんてどうだろうか。

自分の身に起こった大きな異変と言えば、『願い』を除いては語れない。

ある日突然、『願いを叶えるという願いを叶える』という夢を見る。これだけで言えば、そこまで条件は難しくないのではないだろうか。

この都市伝説のもとになった昔話は、この国に生まれ育った者なら誰だって知っているはずなのだから。

だとすれば、【不思議】を引き起こすことだって簡単なはずだ。簡単なはずだと思う。

簡単な、はずなのだ……。

「……………むう」

この煮え切らない気持ちを説明するのに、特別な配慮は要らない。こんなに非現実的な、非日常的な『ふつう』は、日常的『ふつう』からしてあり得ない。

だから、教室に充満する種々様々な笑い声も、【不思議】という種から咲いた噂話による非日常なのだ。こうして目を瞑って祈っている間にも、非日常の日常は動いているのだ。

非日常に飲み込まれてしまわぬよう、早く答えを出さなくてはいけない。“気付いている”ということを出言できる答えを。

それはつまり、真犯人を見つけ出すということなのだけだ。

「どうしよう……。ルートの教室、どこだっけ……………」

一人で出歩くことが危険だと思っていたけれど、教室で待機するのときほど変わらない気がする。それなら、耳を塞ぎながら廊下を漂っていた方が安全な気もする。

そうだ。

その方法を使って、この煩わしさから解放された人間を、一人知っている。

彼女も一緒に連れて行ったら、もしかしたら心強いかもしれない。ゆっくりと目を開けて、固く結んでいた手も解く。視界には、いつもと変わらない孤独の世界が広がる。温もりは、確りと脳裏に刻んだ。これならきつと、大丈夫だ。

一度、深呼吸をしておこう。

「……っ、すう……。はぁ……………」

ね、念のためもう一度。

「すう……………」

「祈祷はもう終わったのかの？」

「すう！？ はぁ！ げほっ、げほっ……………！」

唐突に、非日常が訪れたせいで呼吸の仕方が飛ぶ。そして、噎せる。

「おお！？ 深呼吸じゃ、深呼吸……………」

自分の隣の席に座る非日常代表のサクラが、背中をさすってくれる。

さすって治るのかは知らないけれど、自分と似た境遇の人間とコンタクトをとれている結果には、大変満足だ。このまま、一緒にここを抜け出す手筈を整えたい。

「けほっ、けほっ」

「それ、ゆっくりじゃ、ゆっくり」

まずは、自分の乱れた呼吸を整えるのが先か。

サクラに言われる通り、「すう……、はあ……」と二度三度深呼吸をすると、それなりに落ち着いた。

「あ、ありがと……」

「よいのじゃー」

さあ、本題に入ろう。

本題に入りたい。

本題に……。

「も、もうだいじょぶ、だよ……?」

「むふふう！ よいのじゃー」

ぞぞぞつと、悪寒が背筋を伝って爪先まで、再三走り抜ける。そのうちの一回は、腰回りから太ももにかけて大胆に撫でているサクラの手のひらに、見事に堰き止められる。そうして腰回りに残った寒気を攪拌するかのように、また、サクラの指の腹が太ももの内側の方へと這っていくのだ。

もはや、介抱レベルを超え始めた。

「や、やめて……よ」

「よいじゃろよいじゃろー。せつかく、こんなにふにふにですべすべなのじゃ。触らぬのは損じゃ。ああ、柔やわいのう」

背後に立たれているから、その表情を見ることはできないけれど、きつと相当楽しそうにしているに違いない。それと同じく、自分の表情も見ることとはできないけれど、きつと、相当嫌らしい顔をしているに違いない。

ものすごく、恥ずかしい。

アリスなら話は別だけど……。

「んー……。も、もう、いいよ……」

「何!? 足りんじゃないと!? 仕方のない奴じゃのう！ ぬはっ！
「言つて、ない……」

きっぱり言えばよかったのかもしれないけど、それで機嫌を損ねてしまったら怖い。でも今、こうやって二人で戯れていれば、『ふつうでない』日常に飲み込まれる心配はないはず。

だったら今は、大人しく体を預けてもいいのかもしれない。

「ほれほれー。ここかー、ここが良いのかー」

「にゃんっ!?!?」

いや、良くはない。

これ以上は、ちよっと道徳的に危ないかもしれない……、じゃなく。いや、それもだけど。

今は、ルートのところへ、同行をお願いしなければならない。

さっきから絶えず大腿部の辺りを流離っていたサクラの右手を、はしつと捕まえてみる。自分では、かなりの決断だったと思う。

「痛っ」

「う、ごめんなさい!」

素早い動きを捉えるのに、少しばかり力みすぎてしまった。

痛くするつもりはなかったのに、なんだか少し罪悪感を抱いてしまっ。まっ。

「……む? そんなに嫌じゃったか?」

「ち、違っのっ。本当に、ごめん、なさい……」

「いや、いいのじゃ。わしが、おさわりしとったからじゃもんな。

悪かったのう。今度は、もっと気持ちよ」

「ち、違っの!」

「うおう。なんじゃ?」

いきなり大声を出したせいで、息が上がる。息が上がるほどに大きな声だったわけではない。羞恥心を処理するのに脳が弱音を吐いている。ただ、それだけのことで。

だから、次の言葉は、蚊の鳴く如く小さく。

「……に、来て……か?」

「ん?」

背後から、サクラの顔が近づいてきたのがわかる。

きつと、自分の頭の横に今、サクラの耳があるのだろう。

「一緒……来て……」

「着て?」

サクラは、首を傾げつつ、自分の椅子の隣で中腰になる。

今日初めて、サクラの顔を見た。思ったよりも嫌らしくない、優しい顔つきをしていた。

その和やかな微笑みに導かれるように、自分の中の思いは形になった。

「一緒に、来て、くれません……かつ！」

「んー？ もう授業始ま……はっ。なるほど、わかったのじゃ。トイレか、体育用具室じゃな？」

「違う、けど……。いい。とりあえず、一緒に、行きたいの……」

おかげで、変な所に連れていかれそうだけれど、いざとなったらアリスを呼ぼう。きっと、それは【不思議】と関係のない危なさだから。

でもとりあえず、サクラは同行してくれるようだ。

「じゃ、行く……」

「お？ 連れて行ってくれるののう？」

生まれて初めて、授業をサボった。生まれて初めて、他人の手を引いて歩けた。

でも、誰もいない廊下はすごく寒かった。

「どこへ、向かっるとるんじゃ？ トイレはあっちじゃぞ？」

「トイレじゃ、ない……よ」

教室を抜け出してすぐに、授業開始の予鈴が鳴った。予鈴が鳴り終わるころには、廊下を出歩いている生徒は、自分とサクラの二人だけになる。

「むむ？ そうか、保健室か。お主もなかなか、良い場所を知ってるのう。むふふ……」

そうだ。もし先生に止められたら、保健室にでも隠れよう。確かに、サクラが喜びそうなシチュエーションではあるけれど、致し方ない。

三階にあるルートの教室までは、まだ少しかかる。

「のあよ、一つ聞いてもよいか？」

「……うん。いいよ」

後ろから問われて、改めて気付く。

自分は今、サクラと手を繋いでいるのだ、と。

「手、震えとるぞ」

「……うん。知ってる」

なんだけ、アリスに申し訳ない気持ちになるけれど、今すぐ離してしまうのは怖い。離れた瞬間、世界すべてが敵になって、自分に襲い掛かってくるような、そんな気がして。

だから、もう少しだけこうしていたい。

自分の身勝手を、サクラが許してくれるのなら。

「怖いのかの？」

「ち、ちよつとだけ……」

本当は、目を瞑って、おかしな世界の変な流れに身を投じてしまいたいくらい。

溺れ沈んでゆくことが、きっと楽なのだと思うから。

「大丈夫じゃよ。痛いのは最初だけじゃ。それに、わしがついておるのじゃからな」

「あ、ありが、と……サクラ……」

頼もしさに応えられるように、自分はサクラの手を握る力を少しだけ強めた。

少し急ぐ。

この後、授業中の教室に乗り込むという、とんでも行動を起こさなければいけないのだから。

「のうのあよ」

「どうしたの……？」

「そんなに怖いのかの？ まあ、最初は仕方ないとは思うがの。わしに任せておけば、全部大丈夫じゃから、本当に安心してよいぞ」

「う、うん。でも、そんなに、怖いとかは、ないよ……？」

そう。

自分でも意外なほど、緊張はしていなかった。それ自体が非日常という不安要素ではあるけれど、同時に、自分たり得ない蛮行を取り締まる都合のいい心理状態でもあった。

つまりこの手の震えは、

「寒いのかの？」

「……うん。少し」

確かに、ここ最近気温が落ち込んでいるという話を、先輩のメイドたちからよく聞く。だから、意外と温かい仕事着を着ている間は、至福なのだとも言っていた気がする。

この制服のように、薄くて肌に張り付くような素材だと、外気温の影響というのはかなり大きなものとなる。

ただ、幼少期からずっと暖房の無いところで育った自分にとってみれば、我慢できないレベルでもない。

「……けど、全然、平気だから。だいじょぶ、だよ」

「一旦教室に戻れば、わしの服、貸せるんじゃないが……」

「制服の上から、着るの？ 変だよ……」

「変かろう？ 普通の気がするんじゃないが」

今、サクラの『ふつう』って何だろう？

そんな疑問を考える暇があったら、体を動かして温まった方が早そう。昔は、冬が来るとよく体を擦っていた記憶がある。

さすがに、学校で乾布摩擦の真似事をするのも気が引ける。おじいちゃんみたいだし。

まあ、三階に向かうこの階段のとてつもない長さを利用することにしよう。それなら教室に戻らなくて済むし、服を着ることもない。ゴールへ向かうこともできて、一石三鳥だ。

「服は、いい……」

「そうかのう……。普通に服を着れば早いのにのう」

「普通に……？」

再び表れたサクラの『ふつつ』は、何となく自分の中にある『ふつつ』とは逸れている気がした。

どうということだろう。

もしかして、サクラも……。

階段の踊り場らしき広がりです足を止めて、振り返ってみる。

「ん？ どうしたんじゃ？」

「ど、どうもしてない！」

最近見飽きる程に見ているサクラの姿を目に映して、自分と比べ
てみる。

紅^{あか}みがかつた明るい茶髪が、さらりさらり、サクラの動作に合わせ
て右往左往している。その忙しさを、自然とあどけなさに変換さ
せてしまうような愛くるしい童顔は、一度見たらきつと忘れられな
い。碧緑の瞳も、羨ましいくらいに澄んでいて宝石のように奇麗。

「んー？ ここかの？ ここで始めるのなの？」

何を始めるのかは知らないけれど、とりあえず「始めないほうが
いい」ような気がする。

疲れたという言い訳をして、もう少しだけ、サクラを観察してみ
よう。

視線を下へ下と持っていく。

自分との差異にがっかりしそうな部位は飛ばすとして、その下も
非の打ちどころはなかった。ふわふわした性格からして、鍛えてい
るといっわけじゃなさそうだけれど、なぜか括れて引き締まってい
る。痩せ過ぎかと言うとそうでもなく、「触ったらきつと柔らかい
」と思えるほどには、グラマラス。

感想を述べるなら「全体的にバランスが良くて、とても健康そう」
だろう。

その均衡を崩すことなく、すらりとした手足が肩と腰から伸びて
いて、それはまさに美しい樹木の一枝のようだった。柔軟で丈夫そ
うという意味を兼ねて。

自分がサクラと対抗できるのは、なんとなく肌の白さぐらいのも

のだと思う。

「お主、見つめ合うのが好きな質タチかの？ やっぱり最初は、そこからなのかの？」

「見つめ合うのは、好き、かも……」

ふと、アリスのことを思い出す。

そう言えば、自分の左手は学校に来るまでアリスの手に繋がれていた。今は、サクラが握っているけれど。

そう考えると、今現在自分が置かれた立ち位置というものが、急にあやふやになってくる。サクラの背後に傾かぶいている階段が、恐ろしく長く見える。

自信が無くなりそうだったので、振り返るのはよそう。

「なんじゃ。もっと見てもよいのじゃぞー。まあ、場所替えには賛成じゃが。さすがに階段では、落ち着いてできん」

「……………」

立ち止まって、目的地を見据えてみる。

後ろ髪を引くように、サクラが声をかけてくる。

「なんじゃなんじゃ、そんな辛気臭い顔してー。お主、結構良い体つきしてるんじやから、自信もって良いと思うぞー。欲を言えば、もう少しふつくらしてもいいかもしれんのう。……あとは、やってー」

「ね、サクラ……」

もう一度振り返るのは怖くて、できなかつた。

「どうしたんじや？」

「ノアの、制服って、変……？」

「なんじゃ急に。全然変じゃないのじゃ。わしだって、教師だって、クラスのものどもだって、みんな同じやつを着てるではないか。……

…ああ、もしかして、柄がらが」

「ほんとう……？ ノアだけ、変に見えてたり、しない……？」

「むう……。それは、わしはおめしのあではないからの。なんともいえん。

お主の目に、お主自信はどういう風に映っておるのじや？」

「制服、だと思っ……」

「わしも、同じに見えるぞ」

これは、もう、最後のチャンスだ。

ここまで階段を昇れば、何となくわかる。目的地に、辿り着けるかどうか。

今振り返って、目の前に映し出された『ふつつ』を知覚することで、自分がどこにいるのか飲み込めるのだと、そう確信できる。

だから、最後。

「ね、サクラ……」

「なんじゃ？」

「もう一回……。み、見ても……いい……?」

「うむ。よいのじゃ。ポーズは要らんかの？」

「うん。いい……」

「もう、脱いでた方がよいかのう？」

「ううん。いい……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

二人の沈黙が交わるその瞬間、自分は意を決して振り返る。

『ふつつ』でないものに溢れた今の世界に、『ふつつ』の安心は求めない。

だから、願うのは『アリスと一緒にいてくれる毎日』や『友達として接してくれる人がいる日常』、『日々を楽しくしてくれる隣人の笑顔』みたいな、少しおかしな安心。もしかしたら、これから『隣人と愛を深め合う展開』なんてこともあるかもしれない。

とてもおかし。

とても『ふつつ』とは言えない。

言えないけれど、それが『ふつつ』。

「残念じゃったの。脱ぐなと言われたから、脱いどらんぞ」

「ん……全然。着たままでいい……」

「そうじゃの。脱がす方が、興奮するのは、道理じゃからの」

「そういじゃなくてっ。サクラの、すごく、似合ってる……」

「そうかの？ それは嬉しいのう！」

相当自分に自信があるか、はたまた天然か。そんな常套句など、即座に吹き飛ばしてしまいそうなコーディネート。サクラの場合、自信も天然もどちらもあり得そうだけど。

肌の色には特に際立つ黒を基調にした、黒い蝶のような上下ではつちり決めている。そのバランスを提言するかのように、スタイルもまた均整がとれているのであった。胸元には、灰色の水玉模様が入った大きなリボンが付いている。行動的なサクラの動作すべてに合わせて羽ばたくその黒リボンが、また、一際目を引いた。腰回りの小さなリボン二つは、蝶の番^{つがい}みたいで、とても幼くて可愛らしい。それはもう、それとないズルさを感じてしまうくらい。

「……うん。可愛い……」

なんにせよ、とても魅力的だった。

目だけでなく心すら奪っていきそうな括れが、視線を誘引する空間を生みさえしなければ。その隙間から、今一番見たくなかった背景が見えさえしなければ。

「あのも、似合っておるぞ！ 胸元のひらひらしたやつとか、すごくいいのじゃ！ 舐め回したいくらいじゃ！」

「ありがと……。でも、舐めるのは、ダメ……」

「比喻じゃよ比喻。そんなぐらいかわいらしいということじゃ

そうか。

もしかしたら、学校自体が【不思議】に覆われているのかもされないのか。学年とか、クラスとか、そんなやわな括りじゃなくてもはやこの建造物全体にまで及んでいるのかもしれない。そして、その中心にルートがいる、と。

その中で唯一、『おかしい』を『おかしい』と感じることができ
る人物が、他でもない自分であると、そう考えた。もしくは、サク
ラもまた、それに近い存在であると考えた。

そんな思想を掲げでもしなければ、授業中である今、階段の踊り
場で互いのフアッションセンスについて語っているはずもない。そ
れも、これほどまでに『ふつう』に。

そこまでは『ふつう』に『おかしい』でよかった。

だから今、わかってしまった。

かわいらしいということじゃ。お主の水着せいふくはのう。ぬははっ
「

「ありがと……。大人みたいで、綺麗だと思う。サクラの水着も…
…」

きつと、サクラの言う『はじまり』みたいなものは、サクラが始
めようと思えば、いつだって始められるのだと思う。それこそ、自
分が許しさえすれば、今すぐにだって。

でも、それと違って、自分の中にある『ふつう』の『おかしさ』
は、もう始まらない。そして多分、終わりもしない。だって、この
日常ふじつの中にある非日常おかしさが、これ一つも見つけられないのだから。

そんな『おかしさ』は、もうすでに『はじまり』を迎えてしまっ
ているのだから。

だから。

「ね、サクラ………」

「なんじゃ?」

だからきつと

「こじって何階?」

「まだ二階のはずじゃよ?」

この階段はとてつもなく低く、恐ろしいほど長いのだろう。
それはまさに、【昇っても昇っても昇れない】ほどに長い、普通^{おかし}
な階段で。

もう少し昇れば、そこは今朝だろうか。

不変マイヨ・ド・パン（後書き）

【あとがき】

さあ。

と、言うわけで。ノア編に仕込まれていたトリックは、『ノアも一不思議に巻き込まれている』でした。【一不思議】の内容は『全員水着が制服』です。

よく見ると、Noah - 1から「服を着る」という表現が省かれていたのがわかります。逆に「服を着ていない」という表現が多くあったのもわかると思います。

【一不思議】は、学校で流行る話題そのものをモチーフにしています。例えば、「芸人Aが面白い」とか「BさんとCさんが付き合ってる」とか、そういう一過性のものです。

ノアのような立ち位置に意外にたくさん情報を知れたりするということにも、留意して書いてみました。昼休み外でサッカーをしたりしている人は知らなかったりとかですね。

――何が普通か？

みたいな、大きな哲学的テーマは、小説一つ一つとしてではなく、私の生き方自体に深く介入しているので、常に忘れないようにしています。

私の話を読む際、哲学の知識があると、また面白いかもしれません。

そういう人にだけ引かかるトリックも入っているので、学があるからと言って、読み解けるとは限らないのが深いところです。

今回はサブエピソードを挟んでアリス編に行こうかと。

【notice】お母さんへ

お母さんへ

こんにちは。
あ。この手紙を読んでもる時は、きつと夜だから、「こんばんは」かな。

気を取り直して……。

お元気ですか？ ノアのお弁当だけじゃなくて、ちゃんとご飯も食べてますか？ しつかり眠れてますか？

質問ばかりしてごめんなさい！

でも、心配なの……。

もちろん、お仕事忙しいのは、ずっと昔から知ってる。

だから、お母さんがお休みの時でいいんだ。

たまにでいいから、一緒にどこかに行こうね！

そうだ！

ノアね。なんと、アリスの家でメイドをすることになったんだよ！

ノアもお仕事だよ！

毎日すごく大変だけど、みんな優しくしてくれるの！ だから、

全然大丈夫！

それにね。毎日、アリスの部屋でお泊りできるの！ お風呂も一

緒に入ってるの！

アリスって、すごくいい匂いなんだよ！ 寝顔もすごくかわいい

し！ 寝てる時、髪の毛が少しチクチクするけどねっ。アリス、髪長いから。

そうそう、それでね！ アリスって、寝てる時、すごく抱きついてくるんだよ！

アリスは覚えてないっていうんだけど、ノアは全然眠れないから、覚えてるんだよ。すっごく、柔らかいの！

あ！ ずっと眠れないわけじゃなくて、いつの間にか寝ちゃうの！ だから、ちゃんと眠れてるからね！

アリスって、いつもクールなんだけど、本当はもっと……なんだ。もっと、温かい？ もっと、優しい？

と、とにかくね！ アリスって、すごく素敵なんだ！

……

書こうかどうか少し迷ったけど、お母さんだから、やっぱり書くね。

ノアね。

アリスのことが、好きなの。

それでこの前、好きって言っちゃったの。

でも、それで良かったと思うんだ。だって、好きなんだもん。ずっと、好きだったんだもん。

結婚は無理でも、一緒にいたいって思えるの。結ばれなくたって、繋がっていられるならって、そう思うの。

今度、おうちに連れてくるね。

お母さん、多分、反対するだろうけど、ノア、諦めないと思う。

そのくらい好きだし、ノアだって十五歳だし、大人だもん。

うん。諦めないもん。

だからね。これは、秘密なんだからっ。

あとね。

ノア、友達ができたんだ！

ルートっていうんだけど、すごく優しいんだ。

ちょっと変わってて、それがまた面白いの。でも、すごく頭良いし、運動もできちゃうんだよ！

アリスもそうだけど、ノアの周りって、すごい人ばかり……。

二人とは、クラス別々になっちゃったんだけど、また、友達ができそうなんだ！

サクラっていう、すごく可愛い子！ おばあちゃんみたいなしやべり方なんだよ！ また変だよ！ でも、すごく面白いんだよ！

ふう……。

ノアも、みんなみたいに頑張らないと、だね。

そろそろ学校へ行かなくちゃ！

それじゃ。また、手紙書くね。

お弁当、食べてくれて嬉しいです。体に気を付けてください。今度一緒に、どこか行きたいです。何か食べたい物あれば、言ってね。

最後、かなり詰め込んだね。

でも、これでもまだ伝えきれないくらいなんだ。

だから、お母さんとお話したいな……なんて。

忙しくなくなったらでいいんだ。

お母さんのこと、ずっと待ってるから。

それじゃ、体に気を付けてね。

ノアも、気を付けるね。

ノアより

ありがとう。
大好きです。

Magic the Gathering(前書き)

【まえがき】

また始めましたアリス編！

今編は、前アリス編と比べると、少しだけ内容が軽くなります。薄っぺらくなるという意味ではなく、シリアス度的なものが少なめになるという意味です。

その点で言えば、かなり読みやすいものに仕上がるかと存じます。

設定もぶっ飛んでいく予定なので、心しておいてください。

本編です。

朝、目を覚ますと、一人の少女がこちらを見ていた。

とてもよく知った顔だったので、寝ているふりをして様子を見ることにした。

どうやら、あたしのことが好きみたいだった。

わかりきっていたことだけれど、こうして近くで目の当たりにすると、不思議と心がもやもやする。

好きでいてくれることは、とても嬉しい。嬉しいけど、相手にも覚悟が必要なのだと、あたしは言う。相手に相応の覚悟があった。

あたしはどうしたらいいかわからない。

あたしは生来、結構な自己中なのだ。

でも、嬉しいのはわかる。

ただ、どうして嬉しいのか、わからない。

何か物を貰ったわけではない。あたしの身边整理をしてくれるのは、メイドも同じ。作ってくれるご飯の味は、メイドのそれを軽く凌駕するけれど。

ああ、そうか。嬉しいのは、弁当を作ってくれるからなのかもしれない。

「子供みたいで可愛いなあ……」

「触ってみたいなあ……って、ダメダメ！ そんなことしたら、嫌われちゃうー！」

その子は、口心くちんに、あたしへの好意を漏らす。別に触るくらい気にしないのに、律儀に我慢している。そんなちっぽけな理性を、あ

たしに嫌われたくない意気込みで覆って、精一杯カモフラージュしている。

好きな物には触りたくなるのが、道理なのだろうか。

あたしの好きな物、好きなモノ……。

温かいもの。

確かに、触りたくなる。

「ちょ、ちょっとだけなら……！」

でも、あたしがそれに触れる時、「好き」だと思っ気持ちは、減する。触ってわかるのは「温かいこと」だと知っているから。それでも触れなくなるのは、「温かいこと」を期待するから。

けれど、あたしは大して温かくはない。むしろ、冷たいくらい。

だったら、あなたは一体、何を期待してあたしに触れるの？

急に聞いてみたくなる。

これは、そう。あれだ。

新たな“チカラ”への好奇心？ 的なあれだ。

「わっ！」

重い瞳を開けば、その子が飛び退いてベッドから落下する光景が飛び込んでくる。そこまで驚く必要はないだろうに。

念のため、その子から伝わってきた、あたし自信の映像を確かめる。

ちゃんとあたしだ。魔法生物モンスターじゃなく。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない」

「う、ごめんなさい！」

まあ、寝ていた人間が急に起きたりしたら、びっくりするのも当

然なのか。

悪いのはあたしの方だ。

「謝らなくていいわよ。ノアの怖がりや、今に始まったことじゃないでしょう?」

「複雑……」

「ごめんなさいの一つも言えないあたしは、いつも他の方法を模索する。くそみたいなプライドを捨て去れば、事は済むというのに。」

これは、あたしの治せない癖なのだ。

『ごめんって言っても誰も嬉しくない』なんて、身勝手な持論でも展開するとして、あたしはすぐ、ノアのフォローに回った。

「あら? あなた、今日はメイド服着たままなのね。いつもは制服着てるのに」

「そ、そうなの! ノア、今日から、アリスのメイドに、なったんだよ……」

ただ事が済むよりも、誰かが幸せになって終わる方が良いに決まっている。

あたしに募る罪悪感も、そのうち忘却の彼方に消えてくれると思うし。

そんなことよりも、覚えていたいたことがたくさんあるのだから。

「ちよつと、回ってみてくれるかしら?」

「わかった! ……はい!」

言われた通りに、くるりと一回転。

不器用という言葉がしっくりこないほどあどけない動作に、メイドのフリルが可憐を演出する。黒い髪の毛が、少し遅れて回っている。よく手入れされた黒髪は、窓から差し込む日光を受けて白く光る。

おまけに、ミニスカートの隙間から白い花柄が見えた。私のお下がり黒タイトのワンピースだった。

「あなた、メイド服似合うわね。……っというか、あなたって、何を着せても似合うわよね。コスプレみたいなのも、全然アリだった

し。……ああ、黒髪ってなかなかズルいわね」

「そ、そのの……かな……？」

「そうよ。それ以前に、あなたってすごく……か、可愛い感じなのよっ？ 雰囲気ってというか、空気が何となくね、小さい動物みたいだわ」

「動物……。複雑……」

そうして見せる複雑という表情を、あたしは記憶に刻む。そうすることで、ちっぽけな罪悪感など、一瞬で消えてしまうのだ。

けれど最近、それだけじゃない気もしていた。

そんなとってつけたような動機じゃなく、もつと確固たる理由に導かれて、あたしはノアこの子を見ているような。

それがわかれば、この子の抱く気持ちに、少しは応えられるのだと思う。

「ノア」

「なに？」

「あたしのこと、好き……なのよね？」

「え？ あ………うん……。好き……」

全くわからない。

どうして、俯くのが。俯くときに、恥ずかしくなるのが。恥ずかしいけど、それでも絶対に変わらない想いがあることが。それをもってしても、顔が熱くなることは止められないことが。

あたしだって、ノアのこと好きだ。

ノアと長い時間を共にしたあたしは、ノアに対する一つの思いとしてのその言葉に気付くことができた。自信をもって好きだと言える。それは、相手が女の子だからとかは関係なく、特別な好意であると、自負できる。

それなのに、わからない。

「どんな風に？」

意地悪で狡猾なあたしは、ノアの「好き」を利用して、答えを探そうとする。

「ただ、

「ん……。わかんない……」

ノアに伝えられないことは、あたしにも伝わらない。いくら、伝えたいと願っても、梓の無い想いは伝えることができないのだ。ノアのもつ不可解な想いは、適当な外形を持たせることもできないから厄介だ。

何か似ていると言えば、あれと似ている。

ルートがリズを想う、あの気持ちと。

「でも……。アリスのこと、好きなの……。大、好き……」

「あたしも、あなたのこと、好きよ」

ルートにわかってあたしにわからないはずがない。少なくともルートに、乙女心で負けるつもりはない。

……乙女心、関係ないかしら。

立ち話もなんなので、あたしはノアを自分の横に座らせた。ベツドの上に、メイド服姿の可憐な少女がいると、特殊な趣がある。色香というかなんというか、ね。傍から見たら、危ないことをしているように見えなくもない気がする。

まあ、それはいいとして。

「ね、ノア？」

「なに……？」

「あたしにしてほしいことはあるかしら？　せつかくメイドに就任したのだから、なんでも一つだけしてあげるわ。欲しいものでもいいわよ」

「えっ？　いいの……？」

ノアの瞳が、急に爛々と輝きます。もともと大きな瞳がさらに強調されて、若干のあざとさがあたしの視界で奇を銜う。

その輝きに応えるよう、あたしは「もちろんよ」と肯定の意を示す。

「この子の持っている不可解をとくためには、この子の情報が必要。」「じゃ、じゃあ……。え、と……。うーん……。どしよ……」

「答えは早い方が嬉しいけど、別に急いではないわ。だから、すぐに答えを出さなくてもいいわよ。その代わり、ちゃんと欲しいもの、考えるのよ」

「わ、わかった……」

あたしの言った通り、ノアは考え始めたようだ。言ったことはきちんと最後まで遂行するのがノアだから、今ここで決まらなくても心配はいらない。

逆に、その方がたくさん情報を得られる。

そんな狡賢さ、本当は許されない。

けれど、あたしに素直さを求めたところで、期待外れの空回りを煽るだけだ。それを自覚しているからこそ、あたしは悪知恵を働かせることができる。

だからあたしは、ノアを部屋に招き入れたのだ。その時、ノアの望んでいたものが、『あたしという空間』だったから。

さすがに対価とは言わないけれど、とても近いものだと思う。

さあ。考えてみせて。

あたしは、絶対にあなたの傍から消えたりしないから。いつかあなだが、あたしを必要としなくなるその日まで。ずっと、一緒にいるから。

「んー……」

煮詰まりそうだったので、予定通り無期限の猶予を設けることにした。

着替えて朝食を食べよう。食事をすれば、不安や心配は大概忘れてしまうと、誰かが言っていたし。

「焦らなくていいわ。決まったら、言っただいね」

「わかった……」

あたしはベッドから降りて、ノアが準備してくれた、食事の席用のドレスに一旦着替える。

最近、食事の席にドレスコードを設けていて、そこはかたなく煩わしい。

何が狙いかは何となくわかるけど、色々と露骨に変化をもたらす過ぎだ。何か一言くらいあってもいいのではないか。

ノアが家に来てからすぐ、というタイミングにも問題がある。忌み嫌われていたノアにとれば、これが『排除運動の一環』と捉えられてもおかしくはないのだ。

本当やめなさいよ。心配かけるの。

無論、あたしにも、ね。

「一体、何を考えてるのかしら。お父様は」

何を考えているかわからない相手は、好きになれない。

そんな偏見を引つ提げていたら、あたしの恋愛対象は、すべてを知ることができるルートただ一人に絞られてしまう。

ノアの中にある、その想いの在り処は知ることができる。形や大きさも、だいたいわかる。でも、色と感触がわからない。

だから、その心に触れた時に、どうしていいかわからなくなる。知らぬ間に壊してしまわないか、怖くなる。

それでもノアは、あたしの心に触れようとする。それはきつと、

「好き」だから。あたしも、ノアの心に触れたい。それは、「好き」だから？

答えられない気持ちを受け取るのが、怖い。今まで受けてきた告白を、どうやって断っていたかわからなくなる。

相手の気持ち^{ノア}を考える程に、あたし自身が苦しくなった。好きじゃないはずはないと、自問して身悶える。恋煩いとはこのことだ。

一つ深く息を吐いて、心機一転しよう。

「さ。行きましょ」

ノアの想うあたしの匂いと、あたしの想うノア匂いで充滿したこの部屋に長居していたら、脳がパンクしてしまいそうになった。

「うん」

長い廊下は、とても静かで、不穏な逡巡を加速させる。これほど、ノアの手が心強かったことはない。

あたしは、憎たらしくも長い道を小走りで駆ける。

正体不明の不安で冷たくなっていく手を、ノアの魔法で温めてもらいながら。

高貴な様相と、偉そうな態度。所謂『お金持ち』しか、言わないような言い回し。それらが生む、固すぎる息苦しい空気。

ノアだけじゃなく、あたしも感じている。

「いただきます」

「「いただきます」」

父親の号令を口火に、あたしと母が続く。

相も変わらぬ大きな机には、家族三人以外は座っていない。そのせいでできた大きな隙間は、家族間の距離感を揶揄するよう、大きな口を開けて笑っているようだ。

これだけの量を作るなら、メイドたちと一緒に食べたっていいのではないだろうか。別に、罰が当たるわけでもあるまいし。

ノア含めメイドたちは、一足先に食べてしまっているのだけれど。もちろん、父の指示通り。

「アリス。明後日の休日は開けておくように」

「わかったわ」

心地の悪い沈黙を破ったかと思えば、父の言葉は場を和ませるものではなかった。そして、対応するあたしの語調も、大分、黒く整っていた。

母は、にこやかに微笑みながら、高級そうなスープを一口一口、口に運んでいた。

一体、何が。

何が楽しいの？

疑心で浮かんだ仏頂面を、諦観の無表情で覆っていると、父がま

た楽しくない。

「その日、お前の婚約者がくるんだ。礼儀作法に気を付けるんだぞ」
「ええ。わかったわ」

このところ、父によるあたしの婚活は、油を差したブリキのように活発だった。おそらく、食事の席のドレスコードはその一環だ。

礼儀作法の先生を雇ってみたり、舞踊の稽古に力を入れてみたり。やること成すこと結婚に結びついていて、ものすごく嫌だ。

弊害には目を瞑れだのなんだのと父が言っていたけれど、そんなことをしたら、あたしの目には何も映らなくなるに違いない。

その時は、ルートの目を借りてあたし自身を見てみよう。
きつとそいつは、あたしじゃない。

「アリス……。本当にわかつちやっただのかなあ……」

メイド隊の一番端で、誰かが俯くのが見える。

『そんな結婚なんてする気はない』というあたしの気持ちは、ノアに伝えたはずだ。即興とは言え、ファーストキスマで添えたんだから、覚えてくれていると嬉しいのだけれど。

その様子だと、忘れてはいないようだけど、反応を鑑みるに心配でならない。婚約者とやらが来た暁には、ノアは一体どうなっしまうのだろうか、と。

だから今は、『来んな！』と強く思う。

「レイル君とは前に一度会っていたよな？」

「ええ」

そう言えばレイルという名前だったか、あの男。

「どつだ？」

「どつって……」

率直に感想を述べるのなら、『顔が良くなかったら殺されている。あと、あの悪知恵も無いとまずい』だろうか。

初見は夏休み、金持ち主催の金持ちの間の抜けたパーティーの時

だったのだが、二人きりで話した時とそうでない時のギャップがひどかった。外面と本音の差異は、違和感なんて表現では物足りない。「別人」、が言い得て妙か。

「大丈夫？ 疲れてない？ 中で休もうか？」 「俺の部屋なら、静かだよ」なんて、そんな歯の浮くような甘いセリフを、何気もなく堂々と使えるのは、そいつくらいの話だ。顔が良いだけに、女子は観面にやられてしまうだろう。

あたしがそいつの甘い誘いに乗らなかった理由は……よくわからない。

よくわからないけれど、気に入らなかった。

なんとなく、その理由を逆さまにすれば、ノアの気持ちについてわかると思うのだけれど、そもいかなのが世の常というやつで。だから、逆に「気に食わない」を極めてみようと思わなくもない。気に召さなかったことに悪気がないのも、今のノアに同情心が無いのと、似たようなものだろう。

けれど、そんなことを口にするわけにはいかない。

あたしには「気に食わない存在」でも、両親にしてみれば「家系を強くしてくれる逸材」なのだから。

ここは、気を削がぬよう努めよう。最大限の対抗と、ノアへの気遣いは忘れず。

「かつこよかった、と思うわ」

「そうかそうか。お前もそう思うか。よかったぞ」

「レイル君かつこいいわよねえ。うふふふふ」

食事に集中していた母も、話に食いついてくる。あたしの反応が好印象過ぎただろうか。もっと「気持ち悪くはない」とか控えめに言っておけばよかったか。センスを疑われそうだけど。

まあ、言い放ってしまったものは仕方がない。

縮こまっているノアには、あとで適当に弁明するとして、今は、このくだらない茶番劇を終焉に導こう。

とは言っても、早食いをかますだけの話なのだけれど。

「お。アリス、今日は威勢がいいな。関心だが、張り切り過ぎは禁物だぞ」

父に無意味な目配せをしてから、スピードを上げて、あたしは五分で完食した。

これから部屋に戻って、制服に着替えなければならないのが、非常に億劫で不本意だ。気付けの意味合いの強い正装が嫌いなのもそうだけど、言いなりになっているこの現状が、心底気に食わない。言葉が悪いけど、端的に「ムカつく」。

「ごちそうさま」

「ああ。学校に遅れるなよ」

「気を付けて行ってらっしゃい」

つい最近あんな事件があったのに、両親とも事前事後の態度が同じなことが、さらに気に食わない。

あたしがノアにキスをしたこと、まさか忘れたわけじゃないわよね？ あの瞬間、あたしとノアの関係は、父の禁止する『友達』を超越したことで、覚えているわよね？

最近、少し不安になる。

両親からの無言の重圧と水面下での支配、ノアがあたしに抱く気持ちの正体。

数力月前に死ぬか生きるかの選択を迫られていたあたしにとって、この悩みは少しばかり、小さすぎると思った。

でも、もっと真剣に考えよう。

それがきつと、あたしの心の支えでいてくれるノアへの感謝になるから。

あたしは、偉そうにノアを指名して、部屋への同行を命令した。

そして、部屋で、また、キスをした。

撫でて欲しい？ いつもしてるじゃない。いくらでもしてあげるわ。

手を繋ぐ？ いいわよ。減るもんじゃないし。

一緒の布団で寝たい？ もちろんよ。二人の方が温かいもの。

ハグしたい？ 全然いいわよ。あたし、結構好きなのよ。くつつくの。

触れたい？ いいわよ。……も、もつと別のところに？ ……い、

いいわよ。ハグするのとそんなに変わらないでしょっ。

キス……したい？ そ、そうね。時と場所さえ都合に合えば、いい……わよ？ 前にあたしからしたの、すごく変な感じだったわよね。でも、悪くはなかった、と思うわ。

え？ もつと？ それって……。

ああ、そうなのか。

そのあたりから、あたしはノアの求めるものが掴めないのか。だから、答えることもできない、と。

ルートに恋心を語っていた、以前の自分が、無知な恥ずかしい存在に思えてくる。

でも。だったら。

どうやったら理解^{わか}るのよ。

本当に困る。

考えても解決できない論理、特效薬の存在しないもの、努力の方向がつかめないこと、善と悪の狭間にある身勝手な葛藤、魔法で解けない問題……。

——相手は女の子で、自分もそう。

その気持ちを心の中に留めておくのなら、制限は及ばない。だけ

ど、一度外に漏らしてしまえば、それは国の規制の対象になる。

だけど、そんなことは無論知っている。それを覚悟の上での、気持ちなのだ。

だから尚更、悩む。

一思いに無理だと言つてあげられれば良かったけれど、あたし自信、あの子^{ノア}のことを『好き』なのだ。一生一緒にいたいとだつて、思っているのだから。

じゃあ、いいじゃないか。

いいのかしら？

良くない。

あの子の中にある『好き』は、あたしの中にあるそれとは違う気がする。あたしが思う、『我が子に捧げる愛情』や『わがままだけど、結局嫌いになれない妹への想い』みたいなものは、何となく違う気がしてならない。

いや、絶対そうだ。

そうでなければ、キスなんてしないし、強請つてもこないはずだ。せいぜい、一緒にいて欲しいと思うくらい。ルートじゃあるまいし、家族にキスしたいなんて思ったりはしないはず。

でも、した。

それも、あたしから。

あたしはただ、ノアに喜んでほしくて、それに答えたかっただけなのだけれど。「してほしい……」と、日夜伝わってくるから仕方なく。

……………なんだろう。

本当に、仕方なくなのか。

回数を重ねるたびに、そうではなくなっていだろうか。

つまり、あたしも『してほしい』と思つていたり。

いや、ないわね。

ないない。

ないのかしら……？

もう、考えるの、やめにしましょう。

なんなのかしらね。本当に。

モヤモヤ全部焼き払えたらどれほど楽かしらね。

でも、残念ながら、あたしの使える炎では、せいぜい生身の人間を焼き焦がすくらいしかできない。ノアならわからないけれどね。

まあ、嘆いても仕方ないのは確かか。

「さ。学校、行きましょ」

「そうだね」「うん。行く」

ノアの家の前で、三人で待ち合わせをして、学校へ向かう日常。多分その中に答えはないけれど、きつとそれがあれば、不安に押しつぶされることはないと思う。ルートの能力的な意味でもね。

だから、三人でいられるこの瞬間だけは、他のことなんて全部忘れて、ただ楽しかった頃の思い出に浸ろう。ルートやノアとの、いい思い出だけを掘り起こして、それを心に反芻して。ルートが作ってくれた当たり前の今を、心の底から知覚しよう。

陽気で朗らかな春らしい天気が、追憶の妨げになっっていて気がかりだ。

今日ばかりは、少しだけ曇っけていてもよかったかもしれない。

M a g i c t h e G a t h e r i n g (後書き)

【あとがき】

違和感はあるけども、その正体が何なのか、まだわからない状態だと思っています。

ノア編では、最後まで引っ張った正体解明ですが、今回はどの辺で明らかになるのでしょうか。

お楽しみに！

次回は学校に行こうかと。

L o v e s l i k e B e r r y s (前書き)

【まえがき】

今回は少し長めになってしまいましたが、セリフ多めで、雰囲気もぶっ飛んでいるが故、読みやすいと思います。

ずっと読んでいただいています皆様。

これは、ちゃんとルーモスです。

安心してください。

では本編をどうぞ。

L o v e s l i k e B e r r y s

「行くよ！ 【フレイム】！」

その詠唱かけこえとともに、体の前に突き出された両の掌から火の玉が飛び出す。火の玉は、体育館の端に設置された練習用の案山子へと高速で直行し、ぶつかって爆発、それから赤々とした火炎を上げながらパチパチと音を立てて燃えた。

「ルート、上手……」

「いや、全然。ノアさんに比べたら、まだまだだよ」

今日の一時限目『物理魔法』は、体育館で他クラスとの合同授業だった。

おかげで、また三人でいられる。一人にしておくのが心配なノアの監督もできる。

ただ、四〜五十人以上の生徒が同じところで一斉に魔力を扱うと、空間の魔成分濃度が上がり過ぎて酔いそうになる。水蒸気で飽和した部屋に閉じ込められたような、あの息苦しい感覚と似ているか。

計三クラスを監督する先生らは、授業開始時に一つ指示を出したきり、漫談をしている。抗議したら、「それに耐えるのも授業の一環だ」とかなんとか抜かしそうだ。

溜息をついていると、隣で何やら話し声がする。

「ノアさんノアさん。僕、ノアさんの、また見たいな」

「え……。んー……」

「こらルート。ノアを困らせるんじゃないの」

ルートの頭を小突いて、叱る。

あたしは保護者か。

「う、ごめん」

「い、いいよ。別に……。見せる……」

「ちょ、ちよっと。あなたも無理しないの」

「ん。だいじよぶ」

ノアは引き攣った笑みでそう言い切ると、のそのそと詠唱台に登った。あまり『だいじよぶ』ではなさうだ。

ノアが、自分の魔法を披露するのを億劫がっているのは、目立ってしまっからだった。

今現在、先生らから出されている指示は、火の玉をターゲットに飛ばす初級魔法【フレイム】の乱打練習のだが、ノアの場合火の玉ではなく火の嵐になってしまう。

『初級中の初級であるが故、最上級中の最上級にもなりうる魔法』などというわけのわからない標語まで存在するほど、奥の深い魔法【フレイム】。ノアは、その火炎系の魔法にだけ抜きん出た才能を持っているのだ。

理由はわからないが、魔法はその人の想いの因果を反映するものらしいので、余程誰かを『温めたい』とでも思っているのだろうとされている。それは、あたしを、ということなのかなんなのか、知らないけれど、とにかくにも、ノアの【フレイム】はとてつもなかった。

「じゃあ、やるね……」

ノアの掲げた両手は、若干震えていて、まだ少しだけ躊躇いが見える。嫌ならやらなければいいのに。

期待に応えたいというのわかるけれど、あまり無理はしてほしくない。でも、これでノアという人物像が良いものになん変わってくればと、期待も持てる。

ノアの実力というのは、それほどのものなのだ。

だったら、見守ってもいいだろう、と。

そう高を括るのは、一時の後悔となり得るので。

ノアの詠唱が終わるまでの間に、あたしはルートに守護魔法を頼んでおいた。火事になったら面倒だ。

「フ、フフ、【フレイム】！」

その刹那、ノアの制服の長襟が威勢よくたなびく。

周囲にある空気を燃料にして、燃焼速度は一気に加速していく。小さな火の玉ができる時の機序と全く同じだが、規模が恐ろしく大きい。室内の温度上昇に反比例して、酸素濃度は徐々に落ちていく。このタイミングで、大半の生徒は異変に気付いて、「なんだテロか!？」と慌てだした。

そんな必然を知る由もなく、室温は急上昇を続ける。相乗的に空間の気圧を大きく上げ、風を生み出していく。今度は、最初の吸引とは逆、放出で。無論、その風には、ノアの幼気いたいけな想いのこもった六千度の熱気が添えられている。

そろそろ暑い。いや、熱い。

体育館のサイドにあるバスケのゴールが溶けていくのが見えて、さすがに焦る。

「ル、ルート！」

「わ、わかった……！ 【プロテクション】！」

ルートが広げた両手を突き出すと、炎を押しつけて体育館を包むように、薄い膜のような半球空間が広がってゆく。押しやられた炎は、防火仕様の体育館壁に押さえつけられて、勢いを弱める。もともと、燃えるものの無かった炎だったおかげで、勢力は意外に早く沈降した。

大きな力が二つ拮抗したおかげで、体育館は魔成分が飽和して、余計に空気がまずい。

「大丈夫か!？ お前たち、怪我はないか!？」 「今の、誰がやっただんだ!？」

のんびり談話していた先生方も、悠長にしていられない。

「なんだ今の!」「マジやばくなかったか?」「一気に魔成分が濃く……死ぬ……」

「これ、本当に【プロテクション】なの？」「すごい、キレイ……」
「なんか、温かいね」

勝手に九死にされていた生徒たちも、また勝手に一生を得ている。
「ふう……。良かった……」

詠唱を終了したルートは額の汗を拭って、一呼吸する。これだけの強大な力を行使して、汗の一つで済むのだから、恐ろしい。

そう。ルートもまた、守護魔法の才に恵まれているのだ。妹のリーズはじめ、いろんなものを『守りたい』と思っっているせいだろう。

ルートとノアは、その能力の高さから『ファイブウィザード』の一人として選ばれもしている。確か、ファイブのうち二人は三年で、残り三人は全員一年生らしい。

そんなダサい通り名が存在する通り、二人の才能は周知のことなので、先生たちの犯人捜しは早々に終わりそうだ。まあ、二人の性格からして、先生もあまり怒れはしないのだけど。

「ノ、ノアさんごめん！ 無茶言ったりして……」

「ううん……。大丈夫……。ノアも、コントロール、全然できなくて……」

「でも、本当にすごいよね。ノアさんの、火」

「あ、ありがとう……」

この空気感である。呆れてしまう。先生も然り。

慌てふためいていた生徒たちを落ち着かせてしまうほどのほのぼの空間を展開するのは、二人の特殊能力のようなものだ。

「はあ……。あんたらって、ホント……」

そんな二人の前では、あたしの最高適性の超絶地味能力【経緯度

把握^{ピンク}】など、霞んで無くなってしまってもおかしくはない。いや、

むしろ無くなってくれた方が良い。危うく、進路先を地理院にされそうになったことがあったのだ。

ただ、利便性の面で言えば、なかなか便利ではあった。

あたしの特殊能力『ルート全知能力』と『ノア半知能力』を組み合わせれば、ルートとノアの正確な現在地を知ることができるのだ。

.....。

……なにそれ、使えないわね。

まあ、自称保護者は溜息をつくしかないのだろう。

「ルート。あなた、錬成できたわよね？」

「うん。少しだけなら」

「先生たち、バスケのゴール直してるみたいだから、手伝いましょう」

「わかった。行こう」

「ノアは、ここで待ってなさいね」

あたしが言いつけると、ノアは頷いて、体育館の端の方で体育座りした。

あいにく、ノアには【フレイム】以外の適性が、ほぼ無かった。それでも、有り余るくらいの火炎だとは思いつけれど、本人はとても気にしていた。

だから、最近では、やたらと手を繋ぎたがっていた。『温度のコントロールができれば、氷だって作れる』と意気込んで……炎で氷って、どうやってたらできるのかしら。

どうやって、あの温度じゃあ、あの優しさじゃ、氷や凍結なんて使えないと思うのだけれど。

それに、魔法が意志を形にするのなら、ノアはきっと、冷たい現実を突き付けても凍結魔法を使えるようにはならない気がする。

「手伝うわよ、先生」「僕も、手伝います」

「おお。助かる！」「ありがとう！」

溶けてしまった鉄を、原子レベルでバラして、組み立て直すという作業を要求された。難しいように見えて、仕組みを理解してしまえば簡単な作業だ。高度な処理能力を要するとは言うものの、四則演算ができれば無問題だったりする。

あたしは、今日初めて手を掲げて、錬成魔法【レドックス】を行

使用する。

その矢先、ルートの無責任を言い放つ。

「それにしても、アリスってすごいよね」

「なによそれ、皮肉？」

「ち、違うよ。アリスって、すべての魔法に適性があるじゃないか。それに、テストだっていつも一位だし……」

「そんなの、才能じゃないわよ」

「それでも、すごいよ。やっぱりアリスは」

「褒めても、何も出ないわよっ」

何食わぬ顔で、そういう歯の浮いたセリフを言うのはやめて欲しい。こちらばかりが恥ずかしくなるではないか。

座標にしてエックスゼロコンマ幾つで歯が浮いているのが、あたしにはわかった。

……いや。だから、どうしたという話だけど。

呆れ半ばながら、詠唱を続けていると、背後から何者かが抱きついてくる。

「わしも手伝うのじゃー」

甘ったるい匂いを漂わせている少女が、首を突っ込んでくる。春になると香る花、夏になると薫る花、秋になると馨る花、冬になるとかおる花、それらをごちゃ混ぜにしたような芳香を漂わせながら、少女は今日も明るい笑顔である。

少女が楽しそうにバスケのゴールを修理　否、創作していく様子を見て、あたしは悟る。

「ああ。それなら、ここはサクラさんに任せましょう。サクラさん、錬成魔法なら、トップクラスよね？」

「うえー。一緒にやるうなのじゃー」

片手で魔法を唱えながら、体はこちらに向けてくる。どれだけ魔力制御ができれば、そんな芸当ができるのだ。詠唱中、しゃべるのでも精一杯なのに、片手でしかも小躍りまでしている。おまけに、詠唱中なのは最難関と言われる核融合系魔法【アトミズム】である。

あたしもルートも使えないことはないけれど、できて鉄製品の修理ぐらいだ。それを、サクラという少女は、空气中に存在する様々な原子を組み込み、核改変を誘引し、バスケのゴールの形から性質まで新たに創作している。

才能云々のレベルではないと思う。『よく研究機関に捕まらないな』と、そう思えるレベル。なんとかファイブなんてきつと、足元にも及ばないだろう。

それは、彼女の得意とする転移系魔法【テレポーテーション】の正確無比な精度を見れば、自ずと理解できた。

「あ。ほら、あなた先生に呼ばれてるわよ」

「本当だ。反対側のゴールを修理するのかな。じゃ、僕、あっち行ってくるね。ごめんアリス」

「いいわよ。こっちは、こっちでやっておくわ」

ルートは軽く手を振って、向かい側のゴールへと駆けていった。さてとりかかりますか、といたいところではあるけれど。

「ボディタッチはやめなさい」

「よいじゃろー。最近、痩せたのばかり触っておった気がするのう」

「あたしは、太ってるとでも言いたいのかしら？」

「丁度いい、と言いたいのじゃ」

「そんなのどうでもいいから、直す方に集中しなさいよ」

とは言うけれど、実際、あたしの二の腕を揉みながら詠唱しているサクラの方が、修正スピードは段違いに上だった。

もしかしたら、修正についてどうでもいいと思っっているのはあなたの方なのかもしれない。サクラの言う二の腕の『丁度良さ』が気になって仕方がない。

「胸は揉んでも」

「ダメよ。ダメに決まってるでしょ」

「いいじゃろー。減るもんじゃ」

「凍らせるわよ」

まあ、どうせ当たりはしないのだからうけれど。

「わかったのじゃー……。髪の毛で我慢するのじゃー。すうはーすうはー……。ああ、ええ匂いじゃのう……。」

「つつたく……。いいから早く直し」

「もう、直つとるぞー」

掲げた両手の隙間から、ゴールドリングを見れば、確かに。

もはや人知を超えている、おぞましいスピードだ。先生が三人集まっても、数十分かかるというのに。

これで、接触癖（女子限定）と老人めいた口癖さえなければ、少しは親しみやすいのに。変な赤みがかかった茶髪も、綺麗な茶髪に矯正して、適当にハーフアップとかにすれば、かなり好感が持てる気がする。

いや……。

それ、一体誰よ。

「他のところがまだかかりそうね。手伝いに行きましょうか」

「胸」

「凍らすわよ」

「わ、わかったのじゃ。これ以上は、お主のオトコに怒られるやもしれん。行くわい」

遠目でもわかるほどに仏頂面をしている彼女ノアのために、ここはいつもより一層冷たく振舞おう。これ以上あの子を不機嫌にさせてしまったら、今度は学校全体が焼け野原になってしまいそうだ。

だからなのか、ただ単に触られるのが嫌なのか、両方なのか。あたしはサクラに初めて触られたときに『許婚』について言及したのだった。

都合の良い時だけ使うのもどうかと思うけれど、あたしの中で『許婚』というのはそういうものだった。

ノアの方が断然、大切だ。

これって、好きってことなのかしら。

まあ、それはおいておいて。

「手伝いに来たわよ」

「ありがと、アリス。助かるよ」

「あたしより、こいつを……………って……………」

「アリス？」

自分の周囲を見渡すと、小賢しさは見当たらなかった。花の香りとともに、どこかへ消えてしまったようだ。さっきまで二の腕を鷲掴みにしていたくせに、こういう時に離れるのは割と淡泊よね。

頼もしいと思って連れてきた分、逃げられた空しさは、割増だった。

決して二の腕を掴まれるのが好きなのではないのだと、そう心に決めてゴールの修理に取り掛かるう。力不足なりとも、精一杯に。

「なんでもないわ。さ、続きをやりましょ」

「うん」

あたしはまた、両の手を上げて念じる。

崩れてしまった鉄の構成を、再び、リングの形へと戻してゆく。ルートがゴールの縁を構成する原子を、あたしはそれに付随する部位の原子を、担当した。先生と、有志の生徒ら数名が、それをサポートするスタイルだ。

「サ、……………サクラ……………。どうして……………？」

ノアの気持ちに触れて詠唱が乱れる。その心情の裏側には、大きな不安と闇があつて、冷氣さえ感じた。

サクラほどの魔力があるわけでもないのに、あたしは体育館ステージ側の端っこを脇見する。当然、そこにはノアがいる。体育座りをして、ぼーっと虚空を見つめている。

少し、様子がおかしい。

ノアなら俯いていそうなところなのに。

「ア、アリス……………っ。さすがに、きついよ……………」

ルートの声で我に返ると、ゴールの形はぐにやりと^{ひっぱ}拉げ、元より

も酷く変形していた。構造をばらしていただけに、損傷どころでは済まなくなってしまうている。

「あ。ごめんなさい」

「僕はいいけど……これ……」

リングの下に垂れ下がっている網紐は替えられるとして、リング本体が大変なことになっている。まるでキャラメルのように溶けて網紐に絡まって、体育館の床まで垂下してきている。なんだかオブジエみたいで趣き深い……なんて言ったら許してもらえないかしら。横目で先生の方を見れば、目は白黒、開いた口は塞がらない様子だった。

「教頭に怒られる教頭に怒られる教頭に怒られる教頭に……」

居残り決定かしら。

いや。一つ方法がある。ただ、確実に代償を要求される。その内容も、何となく予測できる。

あたし自信は代償なんて別にどうでもいいけれど、きっとノアはそれを嫌がると思う。

でも、居残りしないためにはそれしかない。

「誰か、あたしと替わってくれないかしら。助っ人を呼んでくるわ」
号令をかけてみればすぐ、後ろで見ていた女生徒が名乗りを上げた。あたしはその子に自分の魔力を少しだけ【魔力供与^{バッシング}】して、その場を後にした。

授業中だから、体育館の外には出て行っていないと思うけれど、目に見える範囲にあの独特な茶髪は見当たらない。生徒のほとんどが壁際に捌けているおかげで、探しやすいにも関わらずだ。じっとしているはずもないから、余計、体育館にいない感じがする。

ならば、残る魔力を全部使って追跡してみるのもありかもしれない。賭けにはなるけれど、勝率はそこまで低くない気がする。

あたしの得意な魔法【グラスピング】は本来、自分の位置を把握するための能力。しかし、行使する魔力を大きくすれば、自分の体の一部がどこにあるのかも把握することができる。

そう。例えば、髪の毛とか。

体育館の中心で、あたしは瞳を閉じて両手を前に掲げ、念じる。すると、意識が乖離して、校内を高速で移動し始める。

昇降口、廊下、階段、教室、職員室、部室、体育館、プール……。渡り歩く道中であたしの髪の毛があれば、その場所の情報がピンポイントで脳裏に刻まれていく。

大雑把に校内を六周ほど巡ってみれば、三十八本も見つかる。

校内に落ちている自分の髪の毛の本数を数えてレポートを付ける人なんて聞いたことが無いから、多いのか少ないのか統計的に判断することはできない。できないけれど、何だか生々しい。ここへきて一週間くらいしか経っていないという事実も相俟ってか、気分はあまりよくない。

……あれかしら。サイドヘアを手で払う時に抜けるのかしら。

そんなことはどうでもよくて。

あたしが今探すべきなのは、『移動している髪の毛』だ。

髪の毛から足が生えて校内を駆け回っているわけではなく、あたしの髪の毛を所有する何かが移動している（かもしれない）という事実を利用するのだ。

入学初日から身体接触を強要してきたサクラなら、髪の毛の一本や二本、付着していてもおかしくはない。ついさっきも匂いを嗅いでいたし。

さあ。もう一度探そう。今度は体育館の周辺から。

体育館舞台袖、階段を上ってギャラリ、窓から飛び出してプールサイド、念のため女子更衣室、鉄柵を乗り越えて体育館の屋根まで、高みから校庭を見下ろして、隣の南校舎へジャンプ、その場でぐるりと一回転して、見つけた。

南校舎の屋上の経緯度に、動く髪の毛があった。

そこは、いつもルートとノアと昼食をとっているベンチがある場所でもある。そう思えば望み薄だけれど、動いている髪の毛はそこにしかない。

もし仮にそこにいたとして、一体全体そんなところで何をしているのやら。

でも、とりあえず行ってみるしかない。

修繕に取り掛かっている人たちが頑張っているのを一瞥して、あたしは体育館出入り口へと走る。広い体育館が嫌いになりそうだ。

「アリス、どこ行くの？」

「ノ、ノア……」

袖口を撮まれて、立ち止まらざるを得ない。振り切ることもできない。

適当な言い訳を考える。

「お花を摘みに、よ……」

「じゃ、ノアも行く」

「二人きりだあ……」と意気込んでいるだけで、どうやら勘繰っているわけではないらしい。

純粹なだけに、断りにくい。そして生理現象なだけに、「あ、やっぱり」と訂正もしにくい。

……。

『サクラを探しに行く』と本当のことをありのままに伝えたら、ノアは一体どんな反応をするだろうか。

『どうしてサクラなの？』と言い迫られるだろうか？ 『授業をサボってまで？』と呆れられるだろうか？ 『ノアじゃダメなの？』と嫌われるだろうか？ あたしはそうしてまで、居残りを回避したいのか。

「ノア、あのね」

「アリス……。さっきの女の子、知り合いなの？」
痛いところをつかれる。

こういう時、ノアは意外と鋭いのよね。

「さ、さっきの子？ ああ、サクラのことね。サクラは、ただのク

ラスメイトよ。すぐ触ろうとしてくるのよ。あまり気にしないで」「それなら……うん、わかった」

「それで、今、サクラを探してるんだけど、見てないかしら？」

そして、今からその子に体を捧げに行くのだとは口が裂けても言えない。

脇や背中に嫌な汗をかきそうになるのを、残った魔力で精一杯【フロスト】する。後半授業まで魔力が持ちそうにない。今日は部活も休むしかないようね。

「んー……。わかんない……。けど、多分見てない……」

「そう。それなら仕方ないわよね」

ふう、と一息吐くと、ノアがぼそぼそと何か呟く。

「アリス……、使える……」

「ん？ 何よ」

「アリス、【意思疎通^{テレパス}】使える、と思うの……」

「あ」

完全に忘れていた。

全魔法における初期中の初期。危険性は低く成功率は高いという扱いややすさと、精神集中のノウハウを体感できる魔法として確立しているということから、エレメンタリー一年生基礎とされている魔法【テレパス】。

あたしは、魔法とは別に『知覚能力』があるから、ずっと使っていなかった。

そうよ。

こんな便利な魔法があるじゃない。

「助かったわ、ノア。ありがと」

「ノア、何もしてないよ？」

「いいのよ。あなたは何もしなくても、居てくれるだけで嬉しいわ」「ほんと？」

「ええ、本当よ」

「アリス大好き！ もうノア、死んでもいい！」

「し、死ぬのはよしなさいな……！」

「わかった。ノア、死なない」

「あなたが言うのと、本当に死ななそうよね」

「アリスが、必要としてくれる限り、ノア、死なないもん！ 絶対！」

「うふふつ。本当かしら？」

……つて、この子の頭を撫でている場合ではなかった。いくら落ち着くからと言って、いくら喜んでくれるからって、悠長にしている暇はない。

ゴールの方を一瞥すれば、もう限界が近そうだ。リングが、もう液化化し始めている。

「ノア。ちよつと、手伝ってくれないかしら？」

「いいよ。何、すればいいの？」

「手を、繋ぎましょう」

「え？ 手？」

「そ、そうよ。魔力を分けて欲しいだけよ」

「うん……。いいよ……。ノアの、全部持って行って……」

そう言うのと、ノアは両手をこちらに差し出してくる。

小さくて頼りない、でも少しも穢れてなどいない無垢で綺麗な手だった。この弱弱しい手から、あの魔法のような料理ができるのだと思うと、不思議でならない。

あたしは、その白い手に、自分の手を……。

「アリス？」

「あ、ああ……。ごめんなさい。今、繋ぐわ……」

……何かしら、この感じは。

手繋ぎなんて、今まで何度だつてしてきたじゃない。学校へ行く

ときだつてたまにするし、布団の中でだつて何回もしてる。それなのに、どうして。

どうして、こんなに緊張するのよ。

「アリス……。もしかして、嫌？」

「い、いえ。嫌なはずないじゃない。……さ、早く終わらせましょ！」

さつき女生徒と手を繋いだ時は何ともなかった。

それなのに、なんでよ。

心臓の鼓動を鎮静すると汗を抑えるために行使する魔力と、ノアから供給される魔力が拮抗するなんて。

「アリス、汗すごい……。本当にだいじょうぶ？」

「え、ええ！ 大丈夫よ！ 心配しないで！」

思わず声が裏返る。これでは、完全に大丈夫ではないのが伝わってしまう。

ああ。わけがわからない。

ノアと手を繋ぐことが、こんなに恥ずかしいことだなんて。

今までは、求められたことに答えているに過ぎなかったのだ。ノアから伝播してくる、細やかな欲求を満たすことが、ノアに『願い』の力を使わせてしまったあたしの、当然の務めなのだと思っていた。だから、手を繋ぐのだった、ハグをするのだった、キスをするのだった。さしたる情動など、想起はしなかった。そうすることが、当たり前前の仕事や業務みたいなものだ、あたし自信が勝手に解釈していたから。

それが今はどうだ。あたしの心に住んでいる、“ノア”という存在の束縛を解いた今は。

今度は、あたしがノアに束縛されているではないか。それも、あたし自信が『縛ってください』と言っているような構図で。

ああそうか。

だから、あたしはこの子の『好き』がわからないのか。

受動的にノアに支配されているあたしでは、ノアの想う愛など理解できるはずもない。押し付けられ、押し付け合うものである愛は、きつと、対等な立場でなければ知覚することができないのだ。

だったら、どうすれば、あたしは自由になれるのか。

あたしは、その答えをすでに知っている。

あたしが倒れたあの時、ルートが教えてくれたから。

「【テレパス】！」

あたしは片手を上げて、南校舎の屋上辺りに、一方通行の念波を発信する。

もう片方の手は、ノアの手に繋がれていた。優しく、強く。それに応えるよう、あたしは握る力を強めて。でも、痛くならないように。そうすると自然、繋ぐ手の形は決まってくるもので。

それはノアも理解わかっているようで、あたしがノアの指の間に、指を絡めようとするとすぐ、通り道を作って導いてくれるのだ。

そうして繋がれた手には、優しさが含まれることとなる。それも、誰にも引き剥がすことなどできない強さを秘めながら。

こうしている間はいつも、ノアはあたしのことを「好き」だと思いってくれる。

ああ。わからない。

でも、理解わかる方法は、知っている。

どうして、できない。

この後、【テレポーターション】して登場するサクラは、あたしのことを触ろうともしなかった。

L o v e s l i k e B e r r y s (後書き)

【あとがき】

冒頭から結構ぶつとんでいましたね。異能モノということでの話の構成自体は練りやすかったです。

ただ、異能の表現をどうしようかというところは本当に悩みました。もう、異能はこりこりですね(あと三話続くのですが)。

さて。

今回は、アリスがノアに抱く気持ちに迫っています。

滅茶苦茶に悩んでおりましたね。乙女ですね。

悩むというのは、思春期特有の物なので大事にしてくださいと、いまだに思春期のこない作者は咳いてみるわけであります。

次回は、授業も終わりました、短めに息抜きでもしよつかと。

Masterd of Duelling(前書き)

【まえがき】

春って、温かくて桜が咲いてるくらいで何もないので、書くのは苦手です。

私自身はどうなのかと言いますと、今年(2016年)から花粉症になった気がするので、『好きだった』ということになるでしょうか。

ルーマスの登場人物では一応、“リズ”が花粉症設定です。
花粉症好きの人はどうぞ、お楽しみに！

本編です！

「あれ？ 今日にはノアさん来ないの？」

「あの子は確か、日直だったわ」

その旨が逐次、あたしへと伝わってきている。この“確か”は、不確定を伝えるものではなく、確実を断定するものだ。

ノアがいない空間は、あたしが埋める。

改めて感じる近さに、ルートは身悶えていた。

無論、内心で。

「き、今日は天気がいいね！」

「そうね」

言われてみれば確かに。

午前授業の時に魔力を使い果たしたせいで、体に力が入らない。

答えが淡泊なのはそのせいにして、あたしは黙々と昼食を食べる。

複数名の男子生徒の叫び声が入ったので、視線を右の方にする。

屋上庭園を謳っている割には、植わっている樹木の数は片手に収まる。サイズもそこまでではなく、うちにある観葉植物パキラを一回り大きくした感じ。ただ、よく手入れされているからか、それとも春の陽気のせいか、とても青々として新鮮。まるで、植えられたばかりのようだった。

一本木の青さの隙間から奥を覗けば、どうやら校庭でサッカーをしているらしかった。

あ。そこは、サイドバックに……って、ああ……ほら

隣で弁当を頬張る親友は、放心しているようだ。部活決定の時からかなり悩んでいたようだったけれど、後悔でもしているのだろうか。

まあ、その答えはいつも通り、顔に書いてあるのだけれど。

うわぁ……。また、点入ったよ……。もっと、ちゃんとチーム分けすればいいのに……

なんてわかりやすい感情なのだろう。

小さい頃に、ものすごくサッカーが好きで、良い所までいって、でも辞めて。結局、こうして試合を見て感動する。でも、口では拒否する。

ルートって、本当に面白い。

「あなたも混ざって来れば？」

「ん？ え？ 混ざる？」

校庭の方を指差して、あたしももう一度そちらを見る。ルートの目を見るのは、脅迫しているみたいで気が引ける。

男子生徒たちの小さな影が数体、うようよ蠢いている。遠巻きに視点を変えれば、手前に茂った新緑の上で踊る蟻のように見えなくもない。気持ち悪いので、緑だけを見たい。

ルートは、尚も蟻を見ていたけれど。

「混ざるって、え……？ あのカップルに？」

「カップル？」

目を凝らせば、新緑の奥の蟻……のさらに奥のベンチに、男子生徒と女子生徒が二人で座っているのが見える。全く、現実逃避も良い所だ。二人も、ルートも。

……けど、あんなのよく見つけたわね。

「んなわけないでしょう」

まあ、あたしの追従が不可避であることぐらい、ルートも知っているように。

ルートは、少し間を空けて、もごもごと口を開く。

「僕が混ぜつても何にもならないよ……?」

「そうね」

そのセリフよりも、会話の途切れ目を縫った春風の方が気色悪くて、あたしは物悲しい表情の親友に毒を吐けなかった。

やっとの思いで作った即興毒は、少しばかり薬味が強かったと思う。

「でも、あなたは楽しいかもね」

「それは……ない、と思う……」

ルートはノアと違って、すぐに俯くことはない。

逃げるための現実を知らなければいけないから……らしいけど、そんなものは要約すれば『鈍感だから、現実に直面するまでわからない』ではないだろうか。

全く、可笑し過ぎてならない。

「ふふっ。あなた、リスにも同じこと言われたでしょ?」

「どうして、知ってるの?」

「顔に書いてあるわよ」

「……………」

そんな、表情を誤魔化そうとしなくても。

不安の上から無を被せてカモフラージュしようとしているようだったけれど、全然塗り切れていない。

これがかくれんぼなら、あたしに敗北する理由はない。

「ねえ。部活、本当に入らなくてよかったのかしら?」

「どうして?」

それはこちらのセリフだ、と言いたい。

少なくとも、ルートの目が真剣に憤慨の意を示してなければ、あたしは放言していたに違いない。

「ど、どうしてもよ」

ルートは、大きな憂慮の塊のようなものを溜息一つとともに吐き出して、また、弁当を頼張るのを再開する。

今度は、食事のついでという形で、会話をする気らしい。

「リスがね、昨日僕に言ったんだ。『サッカーをしていたころの僕は、すごく楽しそうだった』って」

「……………」

勿論、そんなことは知っている。

だからなのか、でもなのか、あたしは散布できるような丁度いい毒を持っていなかった。

「それってさ。僕がやっているところを見るのが楽しいってこと、なのかな？」

「……………」

「楽しんでくれるなら、僕だって喜んでやるよ。だけど、僕に待っているのは行き止まりじゃないか。リスだって、きっと知ってる」

「……………さいよ」

「つまりさ。僕が行き止まるところを、また見たいってことなのか？　だってそうだよ？　そんなの、意味無いよ」

「……………やめなさいよ」

そうだ。早く弁当を食べるべきだ。

ルートに口に運ばれる弁当の量は減るばかり。逆に、呪言が飛び出ているけど。

「だってリス、“あの時”泣いてたんだよ？　僕、リスが泣いているところなんて、もう見たくないなあ……………」

「やめなさいって！」

きっと、間にノアがいれば、場を和ませてくれていただろう。この際、サクラでもいい。

とにかく、今、あたしは逃げ道が欲しかった。

「ごめんねアリス。僕、もう、行くよ……………」

「そ、そう……………」

そうしてルートは立ち上がり、屋上庭園の木々の間をくぐって、出て行った。一人になった屋上に響いたドアの音が、あたしの逃げ場を奪うように鳴った。

一人になるということがどういうことなのか、あたしはルートを通して知っている。けれど、どうしても引き止められなかった。後悔に埋もれて今にも泣きそうなたしが、泣いてしまえば『いつものあたし』ではなくなってしまうから。

こんなに悲しいのはどうして。自業自得の罰は空しさだけで十分なのに。

「ごめんなさい……。あたしが、悪かったわ……」

この声が、ルートの心に届くまで、あと何年かかるのだろう。きっと、あたしがノアに支えられている間は、届くはずもない。

そんなことは、知っていた。

「ノア……。今、どこにいるのよ……」

午前の授業が、比較的消耗の少ない教科だったことが幸いして、ほんの少しだけ魔力がある。【グラスピング】一回分くらいが妥当か。ちなみに、寝てはいない。

一人でご飯を食べるのは、あまり気分がよくない。それはノアも同じはず。

あたしは、昼食に蓋をして、立ち上がる。

できるだけ人目につかない木陰がある。屋上の出入り口が影になっただけ、尚且つ鉄柵からも遠く、校庭から見られることもない場所だ。

そこならいいか。

とりあえず昼食の箱をベンチに置いて、そこまで歩く。

近づけば近づくほど、その木は大きく見える。隣に並ぶ頃には、あたしの身長など軽く超えていて。葉の色も、遠目で見た緑とは比べ物にならないほど、鮮やかだった。見れば、幹も結構しっかりしている。

そうね。これぐらい太ければ、登っても　　って!?

「サクラ!?!」

「なんじゃ。見つかつてしもうたか」

青々とした葉の陰から、ひよっこりと紅色が顔を出す。木全体を支える太い幹から出ているうち、一番太い枝を占拠して横になっていたようだ。色々な意味で場違いだ。

まず第一に、「こんなところで何をしていたのよ」と、目的を尋ねる必要がある。距離的に盗み聞きはされていないだろうけれど、寝る場所なら別にもあるはず。サクラが好きそうな保健室とか、サクラが好きそうな体育館用具室とか、いくらでも。

「ここ、落ち着いていいんじゃないよー」

「寝返りも打てなそうだけど」

「それはそうじゃが、ほれ。枝が三本あるじゃろ？」

サクラが背中の方を指差すので、少しだけ登ってみてみる。

なるほど確かに。三本の枝が自然的に編まれて、人が一人はまりそうな窪みができている。

「そこに挟まっとれば落ちたりせんし、快適なんじゃ」

「快適って……。虫とかいそうじゃない……」

緑色の葉に囲まれていることに気付いて、あたしは早々に木から降りる。

青臭いところには、決まって這う虫がいる。お約束と言えばお約束だ。

その昔、あたしにもやんちゃな頃があって、何を思ったのか木に登ったりもした。木の上で寝たいという動機だった気もする。……ああ、そうだ。ハンモックに憧れていたのだ。ハンモックなどなかったから、木の上で寝てみたいと、そう思ったわけだ。

結果は、お約束と言えばお約束。

毛虫数匹が……いや、やめよう。考えただけでも背筋のあたりが寒くなる。

「お主は、虫が苦手なのかの？」

「毛虫とか何かの幼虫とか、這うやつはダメね。でも、それ以外なら……って、そうじゃないわよ。あなた、いつからそこにいたのよ」

「いつ？ んー……。休みになつてすぐくらいからかの。わしの席、お主の斜め前じゃから、出て行つたの見たじやる？」

「ええ、見たわ。じゃあ、あなた、昼休みになるまでどこいたのよ」

「あ？ ああ。そうきたかの」

「当たり前でしょ」

サクラが教室を出るところはあたしがこの目で、確かに見た。急に立ち上がったかと思えば、迷いなく教室の出入り口へ。前のドアから出て、どこかへ行っていた。同伴者はなかった。

サクラという存在の持つ強烈な個性のおかげで、呼び起こす記憶がすべて鮮明だ。

そう。サクラが教室を出たのは、昼休みの開始時ではなくて、二時限目と三時限目の間にある中休みの開始時だった。三時限目と四時限目は、見事にサボっていた。

だとすれば、二時間強もの長い間、どこで何をしていたのか気になる。ずっとその窪みに挟まっていたというわけでもないだろう。

「そうじゃのー。特に何かしていた、というわけでもないのう。校内探索したり、保健室で寝てみたり、空飛んでみたり……そんなところかの」

「自由ね……。つていうか、授業出なさいよ」

「授業はつままないんじゃー」

「いや、そうだけど……。あなたそれでテストに受かるの？ この学校、成績不良者にペナルティがあるのよ」

色々と緩い、というのがこの学校の第一印象だけど、国立ということだけあって、学業成績に関してはそれなりに厳しかった。

なんでも、部活の先輩の話によれば、大量の宿題が課されるとか。

「カンニングでもすればよからう」

「平気ですごいこと言うわね。でも、それは無理よ」

「なんでじゃ？」

「テストの日、何人かの先生が学校全体に結界を張るのよ。魔法を封じる結界をね」

この学校では、サクラみたいな人間がいることを見越して、そういう対応をとることになっていた。結界魔法が得意な先生が交替で結界魔法【インターセプト】を行使するのだ。

「結界か……。でも、それも魔法を封じる魔法なんじゃろ？」

「ええ。そうよ……。って、まさかあなた……！」

「まさかもなにも、それしかなかるう？」

「本気で一日中【魔法反射^{リフレクト}】してるつもり？ そんなの、いくらあなたの魔力が強いからって、不可能よ。あたしだって、もって一分よ。先生も、五分が限界って言っていたわ」

すべての魔法を反射する魔法【リフレクト】は、機序こそ簡単だが、行使するための魔力は時間の二乗で爆発的に膨れ上がっていく。だから学校で教わるのは、せいぜい【フレイム】を跳ね返せる程度の一瞬のもので、あたしのように一分間続けてみたりする人間は、相当力に自信があるか、余程の反射好きくらいの話だ。

それを半日間自分の周りに張り続ける、などという夢物語はつまるところ、余程のアホにしか語ることはできないというわけで。

アホの顔を見るに、ポカンとしていて、いかにもだった。そして、紡がれたセリフは、

「【リフレクト】？ そんな回りくどいことはせんぞ。わしは、【インターセプト】を【インターセプト】するんじゃ！」
もっと、いかにもだった。

「はあ……」

あたしは、少なくとも今日は毒を吐けない気がして、溜息とともに体内にため込んでいた毒も吐き切った。

温かすぎる春の光から逃げるように、こつして木陰に身を隠す。日差しを浴びる勇気が無くて、あのままベンチにいるのが苦しくなつたからだ。

だけど、サクラのように、理由が無くて木陰に腰を落ち着ける

者もいる。……ああ。居心地がいいとか言っていたわね。

理由は違えど、集う場所が重なる。逃げた先にいた者が、自分と同じく、何かから逃げた存在ではないことだ。ただ、たまたまノアを探すことで気を紛らわせようとしていたあたしと、ただ昼寝がしたくてそこにいたサクラが、それを証明している。

もし、現実から逃亡することが夢に近づくことだと言っているのなら、ルートがしていることは本当は正しいことなのかもしれない。

夢から逃亡しているということは、一番現実に近いところにいるということなんだから。

「そんなことより、お前さんこそ、こんなところで何をしておるんじゃない？ まさか、一人で」

「違うわ。ちよつと、友達を　いえ、恋人を探しているのよ」

「ほお。恋人とな」

興味を持ったのか、サクラは枝の隙間から軽やかに飛び降りて、あたしの顔を覗き込むように訝る。

香水でもつけているのではないかというくらい強い芳香が、跳躍の反動で漂い、鼻を衝く。

別に臭いというわけではないけれど、あたしはこの甘い匂いが苦手だ。

この香りを嗅ぐと、なんとなく切なくなってくる。形容しがたい懐かしさを感じるとも言えるか。母親に抱きしめられる場面を想起させるような恥ずかしさ、と言えば伝わらないだろうか。……伝わらないか。

とにもかくにも、あたしはこの子に近寄られることが、あまり好ましくなかった。変な奴だけど良い奴であるだけに、拒否しにくい。「どんなやつじゃ？　かつこいいのか？　どこまでいったんじゃ？

Aか？　Cか？」

「全然かつこよくないわよ。Aって……それ死語じゃないのかしら？　というか、あなたは知らなくてもいいことよっ」

「でも、どうせ呼ぶんじゃない？ 面白そうなやつだったら【コンフ告白心理】するぞー」

「あ、あなたって、本当に自由よねっ！」

「それで楽しければ万々歳じゃ」

「……ったく」

そんな持論を持つていれば、気軽に授業を抜け出す心理にも納得できる。先生のつまらない話を聞いているより、夢見心地で春風に肌を撫でられている方がいいという理屈も、筋が通っている。褒められたことではないけれど。

サクラの喜悦に繋がるのなら、あたしが何を拒もうと通されてしまうのも、悔しいけれど納得だ。

それなら、あたしにだって考えがある。

サクラのことだから、きつとノアを見つけたら即刻告白を強要するに違いない。ノアに何を告白させるかは二の次にしても、あたしを困らせたりすることは、どうやら好きなようだから。

だったら、あたしはその【コンフーション】を【リフレクト】してやろう。

ただでさえ謎の多いサクラという少女に、何を告白させるか悩むところではある。どこに住んでいるとか、何が好きなのかとか、自己紹介の授業で聞き流してしまった無難すぎる情報だっていい。今はとても興味がある。もしそれが彼女の逆鱗に触れてしまったのなら、さっきの彼女のセリフをなぞって駁はくしてやろう。

「それ、早う呼ばんか。どうやるんだか知らんが」

「はあ……。わかったわよ……」

あたしの口から出た返事は、とても億劫そうで響かない。

サクラのプレッシャーで重くなる腕を肩の位置まで上げて、「【グラスピング】……」と溜息を吐く。毒の含まれていない、濃密で澄んだ苦勞ためいきを。

「ふう……。やっと日直の仕事終わった……。大変だった……」

ほとんど常時伝わってきているノアの感覚に、自分の感覚を絡ませていく。

はじめの頃、ノアの感覚を知覚することはかなりの負担だったけれど、今は全くそんなことはない。自分の隣でノアが眠っているという想像の感覚と、ノアとの現実での間隔を思い出せば、楽になった。ルートの心理を知覚している経験もあったから、自分の感覚をノアのそれに重ねることも、難しくはなかった。

なかなかいい表現が見つからないけれど、ノアの感覚がパスタなら、あたしはさしずめミートソース、という感じが。

どう？ 絡まりやすそうでしょうか？

「誰も手伝ってくれないよう……。もしかして、嫌われてるのかな……。いや、絶対嫌われてるよね……。性格暗いもんね……」

そろそろパスタが乾燥してしまいそうだ。今思い出したけど、ベロンチに置きっぱなしのあたしの昼食も湿気ってしまいそうだ。

早い所ノアを呼んで、さっさと事を済ませてしまおう。策は万全なのだから。

「あ。もうこんな時間だ。アリス、もう帰っちゃったかな……」

そうよ。もっとあたしの意志に近づいて。

強引な裏技ではあるけれど、これなら特定の人とピンポイントで念話できそうだ。

「でも、屋上寒そうだなあ……。さすがに水着せいふくじゃなあ……。服着たら変だよな」

必然的に日陰になる校内は、日照時間も短いおかげで、若干外よりも寒い。対照に、屋上は日除けも少ないし、高度がある。風が涼しくはあっても、寒いまではいかない。制服でも全然事足り……ん？ 水着？^{せいふく}

刹那、教室中を埋め尽くすカラフルなビキニ姿の女子生徒たちのビジョンが、紫電の如く脳裏をよぎる。一瞬、視界をジャックされたのかと思った。

目を擦ってみれば、期待で大きな瞳を輝かせるサクラがいた。

「どうしたんじゃ？」

「い、いえ。何でもないわよ」

「そうか。魔力が足りなくなっただんなら、助けるぞ」

「大丈夫よ。【テレパス】くらいなら二、三回は許容範囲だわ」

「遠慮なんかせんでよいぞ」

「あなたは遠慮しなさい」

胸に伸びてくる卑しい手を払って、頭をポンとはたく。サクラは憎たらしく赤い舌を見せて、それとなくはにかんでくる。

将来、謙虚さと度胸を交換できる魔法でも研究しようかなと最近つくづく思う。

そんな浅はかな思考が、あたしにまた、毒を作らせてくれる。要は、いつも通り元気になれたということ。魔力なんか供給されなくても、人間は楽しくやっていけるのだということ。

だとすればどうして、【魔法】なんて力がこの世に誕生したのかということ。

浅瀬を彷徨っていたあたし^{わたし}の意思は、何か一つの不思議^{ふしぎ}に引きずられるように、深みへと沈んでいった。

Master of Dueling (後書き)

【あとがき】

部活というものはどうして、ああなんでしょうか。

やってる時はきついのに、いざ辞めると日常に張り合いが無くなるという不思議。後輩に口出ししたくなるという謎。プライベートでやってみると超絶楽しいという罠。

ああ怖い。

今回は『アリスがあんなことやこんなこと……!』のはず。
お楽しみに。

Y o u g i v e O w n (前書き)

【まえがき】

さて。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、実は、A r r y s
- 3 のタイトルは、T C G のパロディになっております。
響き重視なので、特にやりたかったとかではないのですが、タイ
トルの意味的にはかなりしっくり来ています。

本編です。

「まず、そうじゃな。お主の好きな食べ物は何んじゃ」
 「うっ、くっ……！ そんなこと、どうだって

話を逸らそうと試みるも、口が言うことを聞いてくれない。口が
 というよりは、口を動かすための筋肉がか。いや、もっと言えば、
 口を動かすための筋肉に指示を出している脳、かしら。

『言いたくない』という感情からくる抵抗の指示だけが運動神経に
 伝わらないようにと、何者かに回路をコントロールされているかの
 ようだ。

どうやら、許諾と肯定の回路に結び付けられているようで、口が
 勝手に告白してしまう。

ハ、ハラスよ……。わ、悪いかしら!？」

「むふふ……。いや全然。わしも好きじゃよ、ハラス」

得意満面のサクラは、腕組みしながらあたしの周囲を右往左往し、
 体の爪先から頭頂部までしっかりと、舐める様に見つめてくる。

本当は「あんまり見るな」と脅してやりたいけど、木に縛り付け
 られたこの状況では説得力が皆無だ。拘束している縄を切断しよう
 にも【真空切断^{カッター}】は魔力不足だし、抜け出そうにも【瞬間移動^{テレポーション}】は、
 あたしに使えない。

だから、今あたしにできることは、せいぜいサクラを調子付かせ
 ないよう睨みを利かせるか、そのサクラの後ろで手を拱いて挙動不
 審になっているノアに—か八かの【テレパス】を試みるか、それぐ
 らいのものだ。

魔力的にもラスト【テレパス】となるから、本当に一か八かだ。文面を練る時間は、サクラがあたしにする質問を考えている時間と同じだけある。

「ね、ねえ……。ちょっと……。やめてよお……」

「なんじゃ。お主、まだおったのか」

「い、いるもん……！」

「な、なにこの人……。アリスにひどいことするなら……」

強がるノアから、あたしの意識をも焼き焦がしてしまうような熱い思いが伝わってくる。錯覚でなければ、ノアの周囲に陽炎が立って空間が歪んでいる。

そうだそうだ。燃やしてしまえ。どうせ逃亡するのだろうけど、その後の始末に追われてしまえ。

……というのは冗談だけれど。

いつ体を弄弄られてもおかしくないこの状況下である以上、あたしもノアの劫火に焼かれなないように用心しないとイケないかもしれない。その時は、【テレパス】ではなく、【プロテクション】に変更か。

臨機応変に対応するために心を落ち着けるあたしとは裏腹に、ノアの動揺は激しさを増していつている。

拍車をかけるように、サクラがあたしの耳元に顔を近づけて、妖しく囁く。

「試してやるうか？」

「何を、よ……」

甘ったるい花の香りが、諄々しく鼻を衝く。どこかで嗅いだことがあると思えば、これはさっきまでサクラが眠っていた、あの天然のベッドの匂いだ。いや、逆か。あのベッドが、サクラの匂いにな

ったのか。

上からも横からも、同じ匂いがする。まるでサクラに精神を支配されている気分になる。これが【コンフェシオン】の効力なのだろうか。

やられている側の気分を害するとは習ったけれど、なるほど気分が悪い。自分の魔力だけに尚のこと。耳元で囁かれていることに対する至妙な違和感も、この不快感の原因の一つで間違いなさそうだ。あと、サクラに自分の【魔法】を反射されたあたりも、ものすごく気分が悪い。

「悩んでおるんじゃない？」

「……………」

ふふふ、と鼻を鳴らすのが、耳の近くで聞こえる。

そのくすぐったさに気を取られそうになる暇もなく、脇腹辺りを何かが這う。左右非対称、温かくて柔らかい。それはすぐに虫ではないとわかった。

だからなのか、目角を立てて憤激することもできない。

「だから、試してやろうと言っておるのじゃ」

その行為自体が、ノアを試していることをサクラは知らない。

行き先も知れぬ彼女の手は、背中に行ったり、腰に行ったり忙しい。たまに感じる緩急が、まさしく無目的。

あたしは、そんなサクラの軽薄さを呪う。

「ふふつ。別にいいわよ。その代わり、あんまり調子に乗ったら、明日絶対凍らせるわよ？ あなたの寢床」

「そう来たか。まあ、よからう。……………それじゃ、始めるかのう」

漸く、あたしの体の周囲を渦巻いていた甘い香りが退散する。

サクラは振り返って、ノアの方をびしっと指差す。

「それ、そのの、こっちへ来るんじゃない」

「え？」「え？」

ベンチに座っていたノアとシンクロしたのがわかった。

『あたし遊び』という茶番劇の登場人物としての人選が、意外過ぎ

だからだ。

「ちよ、ちよつと。どういうつもりよ」

「どういうつもりもなにも、試すんじゃない？」

「そうよつ。あたしを試すんでしょ？ だったら、あの子は関係ないわ。巻き込まないでくれるかしら。ただでさえ人見知りなんだから」

「そんなのは知らんし、誰もお主を試すとは言つとらんぞ」

「くつ……！ あんたねえ……！」

あたしを縛り付けているのは、サクラの編み出した【バインド捕縛拘束】という拘束魔法だけど、縛り付けているモノは、ただの縄だ。でも、【バインドバインド】とは名ばかりで、本質は【サイコキネシス念動力】という物体操作の魔法のはず。

【サイコキネシスサイコキネシス】による物体の動的作用は、魔法行使者の筋力に左右される。行使者が持ち上げられない荷物は、【サイコキネシスサイコキネシス】でも持ち上げられないというわけだ。しかも、距離が離れたり、集中力が途切れたりすると、魔法の作用は低下する。

つまり、この縄は人間の力でも、解けないことはないということだ。

これ以上サクラの勝手にさせるわけにはいかない。

ラスト【テレパステレパス】も、ノアの【火の嵐火の嵐】も、保険の【プロテクションプロテクション】も、もうやめだ。どれも運が絡むのなら、結果は早い方がいい。

「ほれほれ。のあと言ったか、お主じゃ。こつちへ、早う」

サクラは手招きして、戸惑うノアをこちらへ導いている。それも心底楽しそうな顔で。

でも、もう、これまで。

「【インビンシブル身体強化】……！」

ルーティンワーク両手を構えることができない分、集中力が半減したが、わずかば

かりの残存魔力の前では、そんな問題は微々たる話。魔法の起動さえできれば、あとは流れて込める魔力の強さを決められる。

あまりに注ぎ込みすぎると、力が抜けて歩けなくなったりする。逆に注がなすぎると、今度は魔法として機能しない。その辺は、加減する。

今回は、十秒限定の怪力を求めて、限りなく限界まで注ぎ込んだ。木に縛り付けられているのを、力で解くというところでも、筋骨隆々の軍人が木もろとも破壊する下品な光景が思い浮かんで、途轍もなく嫌だ。けれど、今はそんなことに恥らっている場合でもない。

ノアに聞かれるのは一向にかまわないけれど、サクラにあたしの秘密を聞かれるというのは、どうにも危険な予感がする。

さあ。ここは絵面^{フラインド}を捨てて、木ごと壊してしまおう。

……ん？

どうして、ノアになら秘密を聞かれてもいいのかしら。確かに、ノアなら他言はしないだろうけれど、秘密を知られていることに変わりはないはずだ。

寝食を共にしているから、隠し事はあまりないけれど、きっとサクラの興味はその『あまりない』の裏側だ。『知られてもいい』ではなく、『知られたくない』からわざわざ隠している、完全なるプライバシーの塊。

それを、あたしは、ノアになら知られてもいいと……？

「なんじゃ急に。わしの【バインド】は、その程度じゃ抜けられんぞ？」

「そ、そうね。そんなこと、わかってたわつ。こ、これは布石よ」

「アリス……？」

「アリス、すごく顔色悪い……。大丈夫かな……」

この子に、あたしは、何を思うのか　何を、想うのか。

あたし自信の魔力で、それが明らかになるのなら、少しだけ聞いてみたいと思った。それはもう、あたしの細やかな秘密ひそかを知られる羞恥など、どうでもよく感じてしまうほどに。

「あたしは、大丈夫よ。あなたは、大丈夫？」

「う、うん。ノアは、だいじょぶ……」

ノアの微笑みを見ると肩から力が抜けて、緊張していた腹部の神経も休まる。おかげで、魔法で込めた筋力強化も、抜けていったけれど。

もう、魔力も尽きた。

ここからは、体の力を抜いて、ノアの問いに答えなければならぬ。

それはきつと、自問自答も同じ意味。

だから、嘘をつくことはできない。あたしがあたしでなくなってしまうから。

「さあノア。何でも聞いていいわよ」

「ア、アリス……？」

「な、何か考えがあるのかな……」

ノアの陰に見えるサクラの不敵な笑みが気になったけれど、それに対抗できる策も魔力も、今は持ち合わせていない。

ただ、あたしはそんなことよりも、あたし自信の気持ちについて試してみたいことがあった。それが策なのだと言えば、あたしらしいかもしれないわね。

だから今は、軽くふんぞり返って偽りの余裕を呈そう。

「随分と余裕そうじゃな。何か策でもあるんじゃないかと、わたしは臆しておるよ」

「そういうあなたも余裕そうね」

「まあ、余裕じゃよ。わしはそれよりも、のあが心配じゃ」

陰から抜け出てきたサクラは、あたふたと落ち着きのないノアの肩に腕を回して、押さえつける。当たり前前の流れで素肌に触れるかと思えば、そうしない。嘘をつかないサクラの口上、もしかしたら本当に心配しているのかもしれない。

逡巡の合間に、サクラはあたしの言葉を奪っていく。

「ノアは大丈夫だよ」

「本当かの？」

「本当……」

「怖くはないのかの？」

「そんなの……」

ノアが俯いたのをいいことに、サクラは肩を組んでいた腕をスライドさせて背中に寄りかかり、後ろから抱きつく形になる。

あたしのポジションが奪われるような気がして、怖い。ノアがあたしのもとを離れてどこかへ行ってしまうのではと、怖い。

そんなあたしの神経を逆撫するように、サクラは「大丈夫じゃ。わしがついておる」と優しさでノアを包んでゆく。

逆鱗に意図して触れるのなら、その覚悟を買って本当に凍らせてやろう。それはもう毛細血管から、吸う空気に至るまで。

故意か天然かなんて、ノアの反応を見て決めれば早い。

「そんなの、怖いよ……。怖いに、決まってるよ……」

「ノ、ノア？」

天然、か。

そうやって人の神経を逆撫でするのも、自由気ままに振舞うのも、あたしのノアに甘い言葉を浴びせかけるのも。全部、天然でやっているのか。

それを証明するかのように、ノアはまた、顔を上げて言葉を重ねる。

「怖いよ……。ノア、アリスに、嫌いつて言われるかもって、いつも怖い。だって、そんなの、ぜったいやだもん……。でも」「よしよし」と、サクラが頭を撫でるとノアは、親猫に縋る子猫のように、その手に吸い付いてしまう。

それは、あたしの居場所なんだ。だからお願い。恥ずかしいことだつてなんだつて、どんなことにも答えるから。

お願いだから、盗らないでよ。

何だろう。力が湧いてくる。……。いや、魔力が漲ってくる、が正しい。

厳密に言えば、正確なベクトルを持った意志の堅牢さが、どんどんと上昇している感じが。

考えるのをやめようとすればするほど抜け出せない、思考の沼という深みにはまっていく。でも、埋もれば埋もれるほどに、あたしの中にある意志の力は、増幅していく。限りはないけれど、どこかで踏みとどまらなければ、人間はおかしくなってしまうのだと、あたしの中の何かが訴えている。目の前でノアと抱き合っている少女の不思議さに、似ているか。

その不思議を思い出すと、無性に腹立たしくてならない。凍らせて、美しい氷の像にしてしまいたい。煩わしくて役に立たないものすべてを。

「最近、寒いなあ……」

ええ、寒くなってきたわね。それはもう凍えてしまうほどに。

春の到来に浮かれていた樹木も凍について、パキパキと痛々しい悲鳴を上げている。春の木々が冬に適応できるはずがないのだ。それと同じで人間も骨を軋ませる。

辺りは急激に白くなり、刃のごとく凍について、鋭く肌を刺激し

始める。

そして、世界は氷点下に――

「でもね」

それは、どんな氷もたちまち解けてしまつような温かい笑顔だつた。

誰もが見入ってしまったような輝きを持った仄かな胎動が、新春の芽吹きのように寂れた心の霜を水に変えていく。

紡がれた蕾は、隣にあつた細い新芽にすら縋っている。その姿はあまりに弱々しく、それでも勇敢に見えた。でも、あたしという氷の花から見る、朽ち果て行く未来のその先を、その新芽は見据えているようだった。

「ノアは、アリスの気持ちかわからない方が、怖い……。いつもノアに良くしてくれるの、本当は嫌々やってるんだってなったら、ノア、居場所無くなっちゃうんだ……。けど」

今にも萎れてしまいそうな微笑みで、身勝手で凍てついたあたしを温めてくれる。自分が寒くなってしまうのだと、もしかしたら枯れてしまふかもしれないのだと、知りながら。それでも、あたしの中にある花の香りを求めて。

「ありがと。もうだいじょぶ」と、蕾は縋ることをやめる。「あとには好きにするのじゃ」と退散する、その少しつまらなそうな表情には、『期待』も見えた。もしかしたら、花を咲かせようとしているのかもしれない。

あたしはどうしたらいい。自分で自分を溶かす力もなく、ただ春の到来を待つだけのあたしは。

「だけど、アリスが、アリスの口から、ノアにそう言ってくれたら、ノア、変わるから……。アリスが、ノアのこと、好きになつてく

れるように、ずっと頑張れるから……。ノアは、アリスのことが、世界の誰よりも、好きだから……」

その贅沢に縊ること、あたしという氷が、“あたし”という輪郭だけを残して解けてゆく。実体のなくなったあたしは、枷から逃れて自由になれた。

縛り付けていた縄から解放された今、あたしはどこへ枝を伸ばせばいい。

目を閉じて、もう一度自分を【探してみよう】。そうして見つけた自分の輪郭は、一体何を【探している】のか、それを知るために魔力が尽きていようと、きっとできる。そんな気がするから。

「本当だよ……」

芽を開く。そして、枝を伸ばす。

肩口に手を回せば、応えるように背中に手を回してくる。ぎこちない手つきではあったけれど、それがまた気持ちよかった。密着すると、あたしの中身の無さが露呈するようで恥ずかしかったけれど、もう、それでもよかった。

いざ懷に飛び込んで顔を埋めてみれば、少しばかり頼りがなかった。けれど、目の前を埋め尽くす温かい闇が、真っ黒なあたしを包み込んでくれるようで、安心した。ここが自分の居場所なのだ、そう思わせた。

「アリス……」

何かを聞かれれば答えてしまう今の自分なら、ノアの気持ちにどう答えるのだろうか。

【魔法】というものは果たして、あたしの意志が理解していないもの、形にできるのだろうか。

いや、【魔法】は必要ないんだったわね。

「聞いても、いい……？」

こんなに近くでノアの声を聞いたことがないからか、緊張で体が

硬く強張る。ノアが腕の痛みを我慢しているのがわかる。

それでも、今は、この子があたしから離れることはない。
いや、あたしがなのか。

もし、ノアの問いに答えられなかったとしても、それだけは言える。そしてきつと、あたしはずつと、この子を必要としていくのだらう。

「アリス、ノアのこと、好き……？」

ノアの心臓の音が、あたしの顔から足の先までを、じわりじわりと伝っていく。暫く数えていると、いつの間にか自分の鼓動と同期する。

息苦しいまでの回数は、あたしを一層小さくしていく。

あたしは顔を上げられない。

でも、あたしは答えた。

You give Own (後書き)

【あとがき】

このセクション分けはズルいと思えてしまうので、あまり多用しないのですが、いざ使ってみると、気持ちがいいですね。

ただ、条件として、予測できても楽しみであるレベルのイベントが必要です。

時間進行中毒者を笑顔にするくらい難しい気がします。

何を言っているんでしょう。

ふう。

ハラスっておいしいですね。安いし。

と、いうことで今回はアリス編最終話です。

なんかもう、ルーマス自体が終わりそうな内容になってますね。

アリス編。

終わりませんよ。

まだ。もう少し。

W i s h i s A c r o s s (前書き)

【まえがき】

アリス編ではたくさん【魔法】が登場しましたが、これはこのあともう使いませんので、覚えてしまった人、すみません。

魔法名とか考えるの好きなので、力入り過ぎちゃいました。(テヘペロと真顔で言っている)

どの魔法も、名前に由来があるので、気になったら調べてみてください。

もしかしたら、ルーモスー大テーマを解く手がかりがあるかも…
…!?

本編です。

W i s h i s A c r o s s

あたしにしては珍しく、全然眠れなかった。

寝ぼけ眼まなこで部屋を見渡せば、理由は幾つかありそうだった。

一つは、今日と明日が『太陽日』だということ。

農作物云々かんぬんの国政で一年に何度か、一日中太陽が照りつけるという日を設けることになっているのだけれど、今朝がまさしくその一日目だったのだ。今朝というのは、つまり午前0時からという意味で。

世界魔法機構の精鋭が【観測波交錯ミブリージュ】という最上級魔法を行使して、太陽を増やすらしいのだ。物体は偽物だけど光は本物という、天文好きのルートが気に入るような【魔法】だ。

そんなわけで、深夜まで寝ずに起きているあたしにとれば、昨夜の睡眠は『夜にする昼寝』のようなものであったわけだ。

昼寝に慣れていないあたしは、起きられるかどうか不安だったのだ、ずっと起きていることにしたのだが、いやはや、眠い。

すぐに上下瞼がくつきそうになるのを気合いでブロックしつつ、また部屋に視線を飛ばす。そこには、二つ目の理由がぶら下がっていた。

今日は球技大会だった。

イベント直前の夜に気持ちが高ぶって眠れない、というようなことは今までなかったけれど、初めて【魔法】を使った球技大会をするから、勝手に萎縮しているのかもしれない。

何が怖いって、あのダサイ名前の五人衆を敵に回すことがに決まっている。破天荒サクラが同じクラスで良かったと、心から安心する。

あんなじゃじゃ馬に暴れられたら、球技大会どころではなくなってしまう。クラス対抗サッカーなんて、「テレポーテーション」専売特許の彼女からすれば、溜息が出る程簡単な球技だろう。消える魔球どころか、自分ごと消えてゴールまでワープすれば一瞬で片が付くぞうだ。

いや、そんなことより。

あたしは、この子を敵に回すことの方がよっぽど怖かった。隣で安らかに寝息を立てている、あたしの不眠の一因の方が。

絶え間なく伝わってくるこの子の夢の内容が、試合中誰かに伝わってしまったかわか、心配になる。皮肉なことに、「テレパス」などという意思伝達方式がこの世界には存在しているのだ。

火災以外の【魔法】に適性を持たないこの子が、高揚とともに胸の内を周囲に発信しないともしない切れないのだ。

こんな夢が知られたら、あたしも恥ずかしくてならない。

「そういう意味じゃ、なかったんだけど」

昨日、あたしが出した答えが余程嬉しかったのだろうか。現実の寝顔にまで嬉々とした感情が表れている。その鱗片に触れようと、あたしは指を伸ばす。

温かかった。

温かいものは、あたしの好きなものだ。

好きなものには、触れなくなる。そこにあるのが、温かさだと知っているから。

ノアはとても温かい。ノアと眠る布団は温かい。ノアという部屋は温かい。ノアのいる空間は温かい。ノアと過ごす時間は温かい。

これはきつと【魔法】じゃない。

何年も前に、あたしは同じ温度を感じたことがあったから、分かった。

『家族として好きよ』

ノアの想う好きとは、また違うのかもしれないけれど、ノアが喜んでくれるのなら、答えはそれでいい。

ノアの好きを理解できるようになるころには、ノアはもうあたしを好きじゃないかもしれないけれど、あたしの気持ちは絶対に変わらない。

不自由なのだと言ってもいい。そうやって縛られていることが、あたしにとる自由なのかもしれないのだから。

だから、あたしは、この子の傍にいたい。いなければいけない。そう思うことはできた。けれど、今はそれだけだった。

あたしはそれを誤魔化すために、キスをするのかもしれない。きつと、違うのだけだ。

登校道。

「僕はアリスのクラスが優勝すると思うな」

「ノアも」

「そうかしら。経験者まがいがいるクラスの方が有利な気がするんだけど」

【魔法】の使用が許可されている以外は、普通のサッカーと同じルールなので、ルールを逆手に取った戦術が立てられる経験者がいるクラスには、ハンデが課されることになっている。

経験者というのは、『ミドル時代にサッカー部所属である』という条件のもと決められているので、ルートのような存在はいわば『ルールを守った反則』なのだ。おまけにツワモノ五人衆の一人でもある。

得点源筆頭のそいつは、あたしの隣を歩くノアのさらに隣で何やらぼやいている。

「で、でも、今回は【魔法】が使えるんだよ！ 知らない【魔法】が使われたら、いくらサッカー部でもすぐに対応できないと思うんだ」

「じゃ、ノアのは、すぐ対応されちゃうね……」

「ノ、ノアさんは例外だと思うよ……」

あの火炎に思うところがあつたのか、ルートは言下に「でもさ」と話題を変えた。

「強い魔力を持った人もいるのに、大丈夫なのかな。まさかとは思うけど、死人とか、でないよね……」

「大丈夫よ。今日の学校は【崩力減衰】サフォケーションで覆われてるから、破壊力はあらかた削られるらしいわ。昨日のルートの【フレイム】くらいなら、静電気レベルの威力に抑えられるんじゃないかしら？」

「さすがに抑えられ過ぎじゃ……」

「冗談よ。あれぐらいなら、多分、バレーのスパイクくらいにはなるんじゃないかしら？ 温度は熱湯ぐらいかしら」

あたしは、担任の先生の説明を比喻表現丸ごと受け売りで話す。

【フレイム】が熱湯スパイクなら、ノアの火の嵐はなんだろう。激熱サウナとかかしら。

できればサウナの中でサッカーはやりたくない。それは術者自身もそうだろう。つまり、使いようによっては、使えるかもしれないということだろうか。

「ねえ、アリス。今、【サフォケーション】って言ったよね？」

……ということは、直接外界に効果を発揮しない【魔法】については、半減されないということ……？

「ええそうよ。つまり、対象は物理魔法だけということ」

「あ……やっぱりそうなんだね。じゃ、じゃあ、アリスの【グラスピ

ング】みたいな精神系魔法は、半減されないってこと？」

「まあ、そういうことになるわね。でも、試合に使えるのはせいぜい【テレパス】くらいだけど。先生たちもきつと、それが狙いなんだろうし」

あまり話したことがない人が相手でも、作戦伝達という意味合いでならコンタクトもとりやすいという人も多い。それを皮切りに友達ができたりもするかもしれない。

だから、破壊行為を抑止する【サフォケーション】なのだと思っ完全禁止の【インターセプト】ではなく。そこは先生の優しさなのだろう。

ただ、半減の対象外は精神系魔法だけではないという盲点もあった。

「あなたの【プロテクション】も、半減されないわよ」

「あ。そっか。防御系魔法も半減されないのか。……ということは、強化系魔法も大丈夫だね」

ルートの記憶にあるサッカー戦術論を駆使すれば、勝てる陣形は何となくわかる。それを突破されないようにと、二重三重に策を巡らせるのにはあたしの勘が助けてくれる。

ポイントゲッターに目一杯身体強化を施して、それを援護する一騎当千スタイルが攻守バランスも良好で、尚且つクラスメイトの得意分野を生かしやすいか。

月並みが過ぎるか。いかにも教師が思いつきそうな戦術だ。

「何か良い戦術はないかしら？」

これでは、やる気のない人間にすら負けてしまっかもしれない。

そう例えば。

「うーん……。そうだなあ……」

首を傾げ真剣な表情になるそいつからは、試合というイベントに対する執着を感じられない。それでいて、あたしの問い 戦術に 関しては、思案に熱がこもっている。

短絡的な拒否反応は幼稚で、見ていてとても面白い。

周囲に迷惑をかけているから、笑っている場合ではないのだけ
ど。

だからあたしは、毒を塗りたくってやるのだ。そのためにあたし
は、心に毒をためるようになったのだ。毎晩ノアに吸い尽くされて
解毒されても、悪夢を見ればまた積もる。

それくらいが、ちょうどいい。

「楽しそうな顔するわね」

「え？ 僕？ そんなこと……」

あたしの意を汲んだのか、間に挟まれて小さくなっていったノアも
加戦し、等身大に助長する。

「作戦考えてる時、いつも楽しそうだったよ、ルート」

「いつもは考えてないけど……。そうかな……」

嬉しいのか嬉しくないのか、自分でもわかっていないようだった
けれど、表情は決して暗くなかった。ノアはそれを見てとても嬉し
そうにしていた。

「うん。そうだよ。ルート、楽しそう」

「あ、ありがとうノアさん」

あたしはそんな連鎖を垣間見て、顔が熱くなった。変な汗もかき
そうだった。だから、少しだけ腕まくりをした。ボタンも一つだけ
外した。

繋いだ手に緊張が伝わらないように、あたしは視線を遠く遠く、
空の彼方へと放り投げた。

その空から、ふわりと風が舞い降りてくる。

ノアはあたしの手を強く握り返してきた。「離れないよう」に。

ルートは歩みを止めた。止まらないよう

あたしのもとへ、一片の花びらがひらり、やってくる。ゆっくり
と、あたしの右頬へ。

あたりとくつついたそいつをはがすと、下半分が破けてしまった。
新しい匂いとは裏腹にとても萎びていて、それとなく年季を感じた。
手を離すと、そいつはまた風に乗って、空へと飛んで行った。目

で追えば、そこには巨木が二本、元気よく門前に構えていた。その二本のうち一本の花びららしかった。

「もう、散るのね」

「そうだね……」

「ノア、この木好きだから、残念……。でも、綺麗……」

「そうね。綺麗だわ」

「きつとまた見れるよ」

あたしの中にあつた“予感”は、ルートの中にあつた 確信 に埋められて、どこかへ消えた。

生まれてこの方ここでしか見たことがないこの桜という樹木を、ルートはなぜか知っている。一年に一度、春が来ると花を咲かすのだということも、散り際すらも美しいのだということも、知っている。

ただ一つの不思議を除いては。

「アリス、どうしたの……？」

あたしは【グラスピング】を使って、失った“予感”を探した。

ノアの力を勝手に借りて。

中空へと舞い消えた、あの花びらを追った。

ついに辿り着いた場所 排水路を流れながら見る学校は、とても大きかった。

屋上で満開を迎えている中くらいの木の上で、あたしの“予感”は密かに確信に変わろうとしていた。

球技大会二日目。最終日。

クラス対抗サッカー決勝戦、【昏睡^{レサージ}】を使用してきた三年生の前に、あたし含め一年生クラスは手も足も出なかった。体に力が入ら

なくて、その場に寝転がるくらいしかできなかったのだ。

目を醒ました時、目の前には地面に這いつくばって、一人息を切らしているサクラがいた。

あたしたちは、負けたのだ。

サクラは、あたしの胸で声を上げて泣いていた。

W i s h i s A c r o s s (後書き)

【あとがき】

これこのあとどうつなげるんだ？ とお思いの皆さま。
安心してください。
つながりませんよ！

と、「冗談はこれくらいで。

ルーマスの構成としては、キャラごとに視点分けがなされておりますが、ルーマスという物語の主人公はあくまでも『ルート』です。アリスやノア、リズももちろん、サクラだって大事な登場人物です。

スピノフという形式でももちろん良かったのです。ですが、ルーマスはルーマスで完結させたいのです。なので、この形式にさせていただきます。

スピノフとして百合百合したのだけを楽しみたい方、ご安心ください。

実は、『A r y y s - 1』、『N o a h - 1』などの名前を関した章は、その名前の章だけを辿ると、スピノフ的な話の流れになります。

つまり、A r y y s 編を読めば、主人公がアリスになりますし、N o a h 編を読めば、主人公はノアになります。

というわけで、キャラも大方登場しましたので、気に入ったキャラがいらっしゃれば、読み方を変えてみても面白いかもしれません。

次回は、第二章完結編です。

『certainly』と。(前書き)

【まえがき】

始まりました、リズ編です。

まだサブエピソードですが、とてもハリのある面白いキャラクターなので、ゆくゆくはメインを任せていきます。

本編です。

『certainly』ルーと。

最近、色々とおかしい気がする。
でも多分、一番おかしいのは私なんだと思う。

第一に、ルー。

小さい頃からおかしい所はたくさんあったけれど、最近またおかしい。

いつ頃からかな。誕生日のあたりからだったかな。

変に思い悩んだり、一人になりたがったり、急に泣き出したり、
e t c . . . 、色々と変になった。青春してるってことなのかな。

アカデミーに入ってから、少し落ち着いた気がするけど……あ
あ、そうだった。最近おかしいってのは、本当に最近の話なんだっ
た。

なんでも、部活を決めなくちゃいけないらしい。それも、あと三
日で。

まさか有り得ないよね？ みたいないつも通りのくんだりありき、
せつかくのチャンスだから悩んでほしいというのもありきで、私は
複雑だ。

ルーがそのどちらだったかと言えば、

「僕、お風呂入ってくるよ」

まさかまさかの後者だった。

ソファから立ち上がって浴場へ向かう顔つきは、焦りと不安でいっぱいに見えた。焦りは私のせいだけど。ああ、残りの不安も、もしかしたら私のせいかな。

……って全部わたしのせいじゃないか。
別に、いいけどね。

第二に、ルー。

またか。

うん。まただ。

ルーの抱えた悩みの種がなんなのか、私はだいたい知っている。その種を蒔いてしまったのは、他でもない私だから。あの時は小さかった……じゃなくて、“あの時”はまだ子供だったから、贖罪することもできない。今その話を持ち上げると、ルー、逃げちゃうし。さっきだってそう。

ルーは、誰も傷つけないように、自分を犠牲にする。一人で解決しようとするということは、諦めて逃げることを意味するのだと知っているはずなのに。逃げたくないと、涙を流したことだってあったのに。

私の蒔いた種に、ルーは水をやっているのかもしれない。それは私のものだから、何か大事な花を咲かすんじゃないか、なんて思っ

て。
今だってそうかもしれない。

いつもは湯船にお湯を溜めてそこに浸かるのに、今日はしんととシャワーを浴びているようだ。

悩みの種を回収しに洗面所まで来たつもりなのに、水をやってい

てはできない。水やりをしている人の目の前で、花をむしるわけに

もいかないし。

「ねえ、ルー」

風呂場のドアをノックすると、シャワーの音が止む。

「部活、入らないの……？」

すぐに返事はない。いつも通りの当たり前。

私がルーを悩ませているのに、「悩みの種はなに？」と無神経に尋ねるような真似をしているんだから。

責任感でもなんでもなく、私はルーを構う。

ルーは、私のことが好きだから。ルーをお風呂場へと追いやった、あの胸元チラ見せサービスも、それを知ったこと。からかっているわけじゃない。いや、からかっているな。

ルーの色々なことを知っているのに、種を回収するにはどうすればいいかわからないから、ああやってルーの喜びそうなことをしているだけ。なんてそれらしい言い訳ができるけど、私は特に弁明しない。

こうして毎日毎日、風呂場へと語りかけるのもそう。構っているということ。

罪悪感とは、謝罪することで解消されるわけじゃない。罪を償えばそれで終わりということでもない。そう悟ったから、私は構う。別に、好きとかそういうのじゃない。

「……………」

ルートから返事はない。感触はよくない。退散せざるを得ない。洗面所を出る間際、洗面台の鏡に映った自分を見て、ふと思う。

私が脱いで、風呂場に入ったらどうなるかな。

イマイチパツとしないルーの日常に、少しだけ肌色成分を演出できるだろうか。深紅に染まっちゃうかな。それもいいかも。

一回やってみようかな。

そう思って振り返る。ルーの驚く顔が目には浮かぶ。

そうと決まれば。どうせ繰り返すのだから体裁も無問題だ。

「あれ……？」

目先の笑顔への期待は、確かに頭に浮かんでいる。それをする利点も、その場のノリではあるけれど、理解できている。ルーの反応が楽しみだ。

でも、おかしい。

そうだった。私は最近、おかしかった。

「あははは……。恥ずかしいな……」

私の右手が、白シャツの上から三番目のボタンを掴んだまま、動いてくれない。すぐそこにある楽しみですら、右手を動かすことはできないというのか。

それほどまでに、恥ずしいのか。

「リス……？」

「わっ。びっくりした！ やめてよもう」

浴場のドアに人影が揺らめいていたから、反響の効いた声がお化けの叫び声に聞こえた。まあ、お化けの叫び声、聞いたことないけど。

驚かすつもりが、見事に驚かされてしまった。しかも無意識に。

これこそ恥ずかしいので、さっさとここから脱出しよう。

ボタンを締める動作はやけにスムーズだった。やっぱりおかしいな。

寝る前の日課になっていた牛乳を飲んで、それから自分の部屋に
来た。

宿題は出てなかったし、別段することもないので、布団に入る。
私の部屋は昼に日が差し込まないから、布団が少しひんやりしてい
た。

暖房を入れる程ではないにしろ、一人ぼっちを体現したようなこ
のひんやり感は、あまりに空しい。人恋しいとも言うかもしれない。
ルーと生活していた部屋は、今はルーが一人で使っているから、
私の部屋にはあの頃の名残のようなものは何もない。もともと父の
書斎予定地だったおかげで、古くて大きな本棚が壁に埋め込まれて
いるけど、それは古紙臭いだけで名残も何もない。

電気を消して真っ暗になると、嗅覚が鋭敏になる。

そうすると、また寂しくなった。

今度、添い寝でもしてみようかな。

どうせ、【一週間を繰り返す】だけなのだから。

第三に、ルー。

三度登場、だ。

私たちは、決められた一週間の中を生き、年を取る。そうして朽
ちていき……って何を言ってるんだらう。まあ、いいか。

ともかくにも、私たちの暮らすこの世界は、同じ一週間を永久
に繰り返している。私が生まれた時から、多分もつと前からそうだ

ったのだと思う。学校でもそう習ったし、きっとそうなのだ。

繰り返すという認識は個人固有のものであるから、一週間経つと私の周囲の人間は、その一週間のうちの出来事をすべて忘れてしまう。他の人からすれば、私も記憶喪失しているということ。

人々は、『繰り返す』ということを知識』として知っているのである。

だからこそ、人々は日常に彩を求めて、様々なアクションを起こす。

一週間世界一周旅行を決行してみたり、一週間引き籠ってみたり、一週間恋人とべったりだつたりe t c ……。

それが普通であり、楽を求める人間のありのままの姿だろうと、私は適当なことを抜かしたりもする。誰か、的を射てるよーと言ってください。核心理ついでるよーでもいいです。

まあ、それはいいとして。

最近の身の回りのおかしさに話を戻すと、ルーの話になる。

ルーは、何回繰り返されても同じことをしているように見えた。

とても不思議だ。というか、謎だ。変だ。

『繰り返す』と知っているのなら、余程のマゾヒストさんでないかぎりと同じ道を通つたりしないはずだ。同じ道を辿れば、行きつく先は必ず同じになるのだから。『繰り返す』というのは、風向きや天気もすべてなのだ。『運』という言葉が必要ないくらい正確無比なこの世界で、同じ道を通ることは、死んでいることと一緒かもしれないのだ。

そう。

子供の頃は、幾分かマシだった。アリスお姉ちゃんとか、隣のサクラちゃんとかと、毎週毎週危険なコトをして遊んでいたものだ。危ないことをしないのはいいことだけど、死ぬほど安定を望まなくても心配になる。だから構うのだけど、最近は一向に反応してくれない。私の魅力がなくなつたみたいで、なんだか悔しい。

ここはやっぱり添い寝を……って、ダメだ。やっぱり恥ずかしい

な。

布団、夜、二人、というワードは、刺激が強すぎる気がする。でも、前はそうしてたんだよね。変^{へん}なの。

でも、いつから刺激的だと感じるようになったんだろう。あの温^{あたた}かい場所が、私の中で危険な場所になったのはなんでだったろう。

やっぱりこれって、大人になったってことなのかな。

だったら、もう少し胸も大きくなって欲しいなあ。……なんちゃって。

眠いなあ……。

学校めんどくさい。ルーもアリスおねえちゃんもいないし。

サボっちゃおうかな……。

ルー
一週間の一日目。

やっぱりおかしなのは、私なのかもしれない。

とどのつまり、そういう話だったりする。

『certainly』ルール。(後書き)

【あとがき】

というわけで、リズムも巻き込まれておりました【一不思議】です。リズムは、『永遠の一週間』という王道ではありますが、誰もが記憶保持できるという突出した普遍設定があります。

ですが、【一不思議】の犯人がそろそろバレてくる頃なので、そう長くは続かないでしょう。

設定だけとって、スピンオフというのはアリですけどね。

というわけで、次回は『二章を締めくくるルート編』、いつてみたいと思います。

春、変わりゆく。(前書き)

【まえがき】

第二章ラストになります、ルート編です。

おかしな世界がたくさん出てきた今章。

どんな終わりを迎えるのか、乞うご期待！

本編です。

春、変わりゆく。

僕の「さようなら」は、一体いつ、「またね」に変わってくれるのか。それとも、待っていては変わってくれないものなのか。否が応でも訪れる絶対不変の春のように、勝手に遷移してはくれないのだろうか。

にこやかな笑顔で手を振る彼女を挟むようにして聳える、あの桜のように。互いの散りゆく花びらを見てすら物言わぬ、あの双つの桜のように。

「またのう」

左から右へと舞う小さな花びらが、時折彼女を視界から消す。その度新しい彼女を見ている気がして、取り残されるような焦りと不安を覚える。実際、帰り支度をしているのは僕だから、取り残されるのは彼女の方なはずなのだが。

手ぶらで校舎に背を向ける様は、それは一際目立っていた。

夕焼けの色と似ても似つかない薄紅色の髪の毛が、背景の校舎の壁との線引きをしているようだ。輪郭の内側には、作られた剥製のような、まるで絵画の中の決まりきった笑顔ウチウチのような、そんな写真が見て取れた。それなのに、躍動する桜の花びらが奥行きを演出していて、一枚絵として固くもなり過ぎていない。

『二度と見られないのではないか』と不安になるほど、綺麗な光景だった。

でも

何か違う。腑に落ちない。

この絵の中で、必要のないものがあつた気がしてならない。

全体の下地を支えている、校舎の白壁だろうか。いや、キャンパスが無ければ、絵は描けない。鮮やかさと彩りを添える桜だろうか。いや、自然的な要素を抜いてしまつては、とても人工的なものになつてしまう。僕とサクラ以外の人間の影も見えないという寂しさだろうか。いや、ここに下校途中の生徒が入つてしまつては、独特の悲壮感は演出できないだろう。校舎の窓から誰かが覗いているのすら好ましくない。

だつたら、僕の持つ視界という枠だろうか。それは違うと、首を横に振る。そうすると、枠組みは消えた。

なら、彼女という存在が抱える謎だろうか。それも違うと、頭を抱える。彼女が謎めているのは、彼女の存在がもたらすものではなく、僕の無知が引き起こしているのだ。

それがわかるまでは、僕は岐路に付けない。

わからないまま絵に背を向けてしまつたら、次の瞬間にはすべて消えてしまつていような、そんな結末が待っている気がするから。夕方が夜に変わる、そんな切ない当然を思うにも似た感情が、僕の中には芽生えてしまつていたから。

こうしてぼう々と眺めていると、時間が経つのが遅く感じる。絵として成り立つ夕方の時間だけ長くなつていような錯覚に陥る。

動きのある桜を頼りに、感覚の麻痺を必死で食い止めようと試みる。散りゆく花の一片一片を、目で追いかける。そのすべてが違う表情をしているという必然に気が付いて、無知な自分を呪いながら委縮する。そうすることで、僕の中で大きな存在だつた彼女が、より一層大きく見えて、少しだけ怖くなつた。けれど、目を離せなかつた。それだけの魅力が、価値があつたのだと思う。

こんなにも美しい唯一の瞬間を失いたくない、なんてことを思い始める自分もいた。

……唯まじひ一？

そうか。そうなんだ。

当たり前だけど、この瞬間は 唯一 だし、二度とはない。だからこそ美しいとも言えるし、奇跡なんて言葉を手向けて賛美したりする。

千変万化に流転する、この絵画の中の風景を、切り取ることは簡単にできる。でも、そういう心を打つような瞬間を切り取るのは、容易ではない。幾つもの偶然が重なって、それが奇跡になって初めて、唯一 になるのだ。

僕はそれを知っている。世界をやり直した僕だからこそ、言える。だからこそ僕は、「またね」を言うことができななのだ。またあってしまったら、それはもう、美しかろうが奇跡だろうが 唯一 ではなくなくなってしまふのだから。 唯一 である存在を、やり直すことで 唯一 でなくしてしまうのが怖いから。

代わりが利かないからこそ、後戻りできないからこそ、僕たちは精一杯になれる。最後を思う悲しさはあるけれど、それを乗り越える楽しさや新しい何かを見つける喜びだって、知ることができる。

僕は、そう学んだから。

だから、「またね」と言えないのだと思う。

そう考えれば、普通なのかもしれない。

サクラが口にした「また」という言葉の意味も。手を振りながら空虚に微笑む彼女の真意も。

僕にはわからない。本当に、わからない。

けれど、このまま帰ったら、いけない気がする。

何がいけないのか、どういけないのかはわからない。でも、胸騒ぎがする。僕の後ろに帰り道が無い気がして振り返れない。もしかしたら、漆黒の洞ほらが大きな口を開けているかもしれない。落っこちて、出られなくなってしまふかもしれない。

そう思うと足が震える。

「サクラ……泣いてるの……？」

これはきつと、球技大会のせいだ。

僕の手足が言うことを聞かないのも、きつとそう。準々決勝まで、帰宅部なりによく走ったと思う。こうやって帰り道の一步を踏み出せないのも、困憊した体のせいなのだ。間違いない。

第四位という中途半端な結果が、サクラの涙を呼んだのだ。『体育館優先使用権』のために優勝を狙うという発言をしていたし、余程悔しかったのだろう。無理して笑顔を作らなくてもいいのに。

泣いてしまうのなら、「また」なんて言わなくていいのに。

遠巻きに見る彼女の涙は、細く頬を伝っていた。拭われずに、ただただ流れ落ちていく様は、途轍もなく心苦しかった。微笑みがまた、苦しさに拍車をかけた。

このままこうして立ち竦んでいても、結果は同じになる。太陽は沈んで、月は昇る。キャンバスは、絵具を残して黒へと変わってゆく。それで輪郭が消えて、彼女は消える。舞い散る花びらも、ただの闇の粒になる。その中で残るのはきつと、月光すらも反射し煌めいてしまう涙に相違ない。

闇に浮かぶ微細な円弧を、僕はどう愛でればいい。その円弧が涙だとわかってしまったら、僕はどんな感想を述べればいい。そうやってしまう前の絵を知っていたら、僕はどう評価すればいい。

だんだん怖くなってくる。だんだん夜になってくる。

また、逃げたくなってくる。また。

そうだ。進むことも振り返ることも視線を逸らすこともできないのなら、目を閉じてしまえばいい。向かう術なく訪れる闇よりも、自分で故意にもたらすものの方が、幾分か安心できる。

瞳を開いたとき、そこにあるものが光であると信じて。

僕は、ゆっくりと瞳を閉じてゆく。夕焼けが月光に変わる瞬間を、自分の瞼でもって演出するように。

ついに、夕焼けが消える。つられて彼女も消える。代わりに、涙も見えない。何も見えない。

そして、また、瞳を開くのだ。

僕の 唯一 は、きつともう見えない。

「あ。ルート、来た」

「遅かったわね。三分の遅刻よ」

「はあはあ……。ご、ごめん。ネクタイの締め方わからなくて、手間取ってた」

同じ学校に通っているので、ノアの家前の公園を待ち合わせ場所にして、三人で一緒に登校することになっていた。つい先々日の入学式の放課後に決めたことだった。

遅れるわけにはいかないと急いでいたのだが、タイの締め方にあれこれこだわっていたら、時間が経過しているのに気が付かなかった。こだわりというか、締め方そのものがわからないので、ただの試行錯誤である。

アリスは「はあ」とため息をついて、僕の首元をつかんでくる。

「そして間違えているという結末ね」

「うわっ。ごめんなさいい！」

「何よ。直してあげようとしてるのに、失礼ね」

「え、本当に？ ご、ごめん。殺されるかと……」

「冗談で言ってるのなら、怒るわよ」

「うそうそっ！ 本気だよ本気……って、あれ？」

「うふふつ。冗談よ」

朝っぱらから、友人の洗礼を受ける。アリスの言葉には劇毒が健在であった。

それでも、ネクタイを直してくれるあたり、優しい。

「ありがとう、アリス。今度、締め方教えてもらってもいい？」

「妹にでも教えてもらえばいいじゃない。あの子なら余裕でしょ。」

そういう、正妻ポジション技術的なこと。良妻賢母が過ぎて、リスの夫になったやつは、きつとダメになるわね」

家事炊事を完璧にこなし、身を削るほどの気配りもやってのける。反射的に人を助けて、見返りも求めずにただ微笑むことを良しとする。大人かと言えば違くて、でもそのあどけない危うさが、保護欲を掻き立てる。

確かに、そうかもしれない。あれだけの完璧な奥さんがいたら、きつと誰だつて頼りにしてしまうだろう。それは依存というのかもしれないけれど。

僕もそんな奥さん、欲しい。

うんうん頷いて納得していると、アリスの影から小さい焦りが飛び出してくる。

「ね、アリス……。遅刻、しちゃうよ……」

そう言つてアリスの袖口を引つ張つているのは、同じ学校へ入学したノア。ミドル時代は別々の学校だったけれど、アリス伝いで知り合つて、友達になつた女の子だ。

体格は極度に華奢で、現になよなよしている僕が言うのもなんだけど、少しばかり弱々しい。猫背っぽい俯き具合で、何となく陰気な印象を受けるけれど、アカデミーに入るにあたりアリスとの同棲が始まつた最近は、そんなことはなかった。むしろポジティブで、元々の優しさも相俟つてか親しみやすいと思う。眼鏡を外したのも良い選択ではないだろうか。眼鏡も似合わないわけではないけれど、世にも珍しい黒い髪の毛と張り合えるだけの愛くるしい瞳を、歪ませておくのは勿体ない以外の何物でもない。

「そうね。歩き出しましょうか」

「うん……」

そうしてアリスの影に隠れることを好んでいるようだけれど、ノアならきつと、隣に並んでも何も問題はない。完全な黒なら、あの太陽のようなブロードの前でも、色褪せることはない。そういう意味でも、アリスとノアはお似合いなのだと思う。

「な、なに？」

唐突に、アリスが僕を睨んでくる。その眼光たるや、煌々と名探偵のそののよう。悪口を言っているような表情をしていた覚えはないのだけれど。

そのはずなのに、何か悪いことをしてしまった時のような悪い汗が、背中からにじみ出てくる。

「これで遅刻したら、三分遅刻したルートのせいね。ノア。もし遅刻したら、三分遅刻したルートのせいにするのよ。いいかしら？」

「うん。わかった……」

「わ、わからないでよー！」

「よしよし。あなたもルートの扱いを心得てきたわね。その調子よ。頭を撫でられているノアは、嬉々とした表情で、よくよく見ればつま先立ちして歩いている。というよりは、アリスの手に頭がくっついていつている感じか。歩きづらそうだ。」

さらさらと黒い髪を手で梳きながら、アリスは策士のしたり顔でこちらを見てくる。

「ちよつとアリス……。変なこと教えないでよ」

「変な事じゃないわよ。あなたがいじられるのは、今も昔も変わらないしきたりみたいなものでしょ？」

「冗談に聞こえないからやめてよ……」

「冗談じゃないもの」

「アリスー……」

そうして三人で小さく笑う。いつものくんだりだ。

この温かい笑顔にありつけるのなら、僕は何を言われようが何も

言われまいが、割とどうでもよかった。

さて。

学校まではしばらく歩く。

ミドルの時よりも幾分か遠くになった。『遠い方』のシヨッピン
グモールが、学校の近くにあるので、何だか変な感じがする。も
う遠くない という得も言われぬ感情が、新しい春を思うための他
の情動を邪魔している気もする。

ノアの家の前から十分ほど歩くと、畑や畦は見受けられなくなり、
所謂“都会”の風景になる。消えた田畑の代わりに見られるのは、
古き良き石畳の街並みだ。

学術都市というだけあって、看板には研究所やら製作所やら、工
業的なものが目立つ。文房具屋もたくさんある。ミドルの時との一
番の違いは、喫茶店があることだろうか。店に上がらずとも、アカ
デミー生活が充実しそうな気がするのは僕だけか。

そんな都会に、僕らの学校【カシミーヤ上級学校】はあった。

「そんなに挙動きようどうつてると、隣の田舎者だと思われるわよ」

背後から指摘されてはじめて、知らぬ間に先導を切っていたこと
に気付く。

振り返って反論しようと思ったら、見慣れない石畳が目いっぱい
に広がって、迷子になってしまいそうだった。

「い、いいんだよ、田舎者でも！ 田舎の方が空気も食べ物も美味
しいし、緑が綺麗だし、土地は広いし、都会に負けてないよ！」

「ルート、必死……」

都会に憧れていないのかと言われたら、返答に迷うけれど、逆に
田舎が好きなのか問われたらすぐさま「好き」と答えられる自信が
あった。

なんだろう。大地に肖って、そのお返しをするために生きている
感じがして、この辺一帯の風土はすごく気に入っている。すっかり

と足を受け止めてくれるような踏み心地の土もいい。歩き慣れない石畳をとやかく言うつもりはないが、踏み固まった土の歩きやすさは石畳のそれを軽く凌駕すると思う。

生まれも育ちも大自然だし、家がコーヒー園だから鼻屑しているのかもしれないけれど。

見慣れない土地でも一生涯懸命だった僕の鼻屑口は、見慣れないアリスの表情により、閉じられることとなる。

「大丈夫!?」「アリス!」

何かに耐えているような険しい表情をしたかと思えば、そのまま頭を抱えて地面に座り込んでしまった。

僕とノアは反射的にアリスの背中を摩っていた。

「だ、大丈夫よ。それより、あんまり背中撫でないでくれるかしら……。二人分は、生温かくて、逆に気持ち悪いわ……」

「じゃ、ノアさん」

「うん。わかった」

僕はアリスを開放する役割をノアに預けて、原因究明係を申し出る。

アリスの前方にしゃがんで、問うてみる。

「どこか痛い?」

「少し頭痛がしただけよ……」

倒れる程の頭痛だったのだから、痛くないとは言っても油断できない。もしかしたら、何らかの原因があって脳にダメージを受けているのかもしれない。

体がポカポカするとはいえ、汗が噴き出すほどの暑さではないから、おそらく熱中症ではない。見たところ腫れているようでもないし、どこかに打ったということでもなさそうだ。

「気持ち悪かったりしない?」

「大丈夫よ。頭痛がするだけ。最近、多いのよね……。ありがとア、もういいわよ」

「ん……。肩、貸す……」

ノアの力を借りて立ち上がるアリスは、いつになく弱々しく見えた。

よく見れば、よろよると足元がまだおぼつかない。

「本当に大丈夫？」

「大丈夫よ。あなた、リズに似てきたわね」

「え？」

「なんでもないわ」

どの辺がどう似てきたのかかなり気になったけれど、物凄く面倒くさそうにしていたので、留意しないことにする。それで遅刻しても困るし。

アリスは「ふう」と一息つくくと、何やら毒を吐いているようだった。

「まったく……。一体、誰のせいよ……」

紛れもなく毒づいた口調だった。にもかかわらず、誰に対しての特効薬なのか、アリスは明白にしなかった。いつもなら、必ず名前を添えるはずなのに。

やはり、おかしい。

今の発言では、僕だけではなく、ノアまでも服毒してしまうのではないだろうか。アリスはそんなことはしないはずなのだ。少なくとも、僕にじわじわ効いてきている今の毒を、ノアにまで投じる必要はないと思う。

考えあつてのことなのか、それは後で問い詰めるとして、今はフオローに回ろう。

「ノ、ノアさん。今のは、僕が言われたんだからね」

「大丈夫……。ね、アリス……？」

「わかったわよ。昼休みになったら、あたしの教室に来なさいな」

「うん……!!」

「え？ん？ どういうこと？」

どのタイミングで取り合わせたのか知らないけれど、とにかく『わかった』らしい。

とりあえず、面倒なことにはならなそうだけど、せつかくのフォーがスルーされて大変恥ずかしかった。

そうして、漸く学校へ歩き出す。

アカデミーの生徒たちが目立つようになるまで、僕の前を歩く二人は手を繋いでいた。とても危なっかしくて、見ていられない。

結ばれた場所に視線がいかないよう、必死に周囲を観察した。まだ見慣れない石造りの街並みに、小さな胸が高鳴っている。少し白っぽい壁は、自分の顔の赤さを映してしまわないか、少しだけ不安になった。

二人の肩と肩の狭い隙間から先を見れば、学校はもう見えている。一步一步歩を進めるごとに、僕の鼓動は強く、速く刻まれていくのだった。こペースだと、学校へ到着するころには心臓が破裂してしまっているかもしれない。拍動が歩くスピードを追い越してしまわないよう、深呼吸してみる。真っ直ぐな道だから、加えて目を閉じてみる。

意外と、落ち着けた。

前を歩いていたアリスが急に振り向くまでは。

「そ、そうだわっ。あ、あなたにも、感謝、してるわっ！　そ、その、つまり……あ、ありがとってことよっ！」

「え？」

「べ、別になんでもないわっ！　目瞑って歩くの危ないわよって言ったの！」

饒舌になったかと思えば、また前に向き直ってしまった。

感謝と注意を一緒にされたのだろうか。なんだかよくわからない。でも、とりあえず、怒られているということはなさそうだ。

ただ、こちらからでも一つわかることがある。

アリスの視線が右往左往に泳いでいて、定まっていないということ。ブロンドからちらりと見えている耳が、真っ赤になっていること。その赤い色が、周囲の白壁のせいで余計目立ってしまったこと。

アリスが緊張しているということ。

アリスにも、緊張することあるんだな……

単純に、関心を抱いた。

この春からアカデミーということで、色々な変化を感じているのは確かだ。ノアがアリスの家に居候を始めたことをはじめ、ネクタの締め方然り。他、色々。

その中で、“アリス”という、自分の中で確固たる存在としてあり続けた人物が、変わろうとしている。いや、変わってしまったということに、断然興味が湧く。

変わるの怖いことだとよく聞かす、僕自身もそう思っていた。けれど、アリスの様子を見ると、一概にそう言い切れるわけではならしい。ノアの眼鏡が外れたのも、とても良い変化だと思う。

こうして知覚する新しさを噛みしめて、僕は学校へと続くこの路地に行く。

満足しているような、はたまた何かが不足しているような、微妙な違和感を抱きながら。同時に、新しさの中にある変わらぬ日常のようなものを求め、心の手を伸ばして。

なんだろう。不思議だ。

まだ、始業式の日の一回しか通っていないはずなのに、もう、行き慣れているような感じがする。

なんとも恐ろしい。これが大人の余裕なのか。ネクタイは結べないのに。

そろそろ学校が近づいてきたところで、二人は繋いでいた手を離れたようだった。一息つける安堵半分、ちょっと勿体ないなという悪心半分、僕は持っていた。

そしてまた、三人並んで歩くのだった。やっと視界が開ける。

一番に目に飛び込んでくるのは、校門にどつしりと腰を落ち着ける、双子の桜だった……らよかったと、思った。

どうしてか僕の視線は、屋上へと吸い込まれた。

屋上では、『私もここにいるんだ』と知らせるように、小さな桜が花びらを散らしていた。

僕に植物の気持ちはわからないけれど、その桜はなんとなく寂しそうで、泣いているようにも見えた。双子に比べて早かった終焉は、『見て』と必死に言っているようでもある。その苦しそうな表情は、見ているのがつらかった。

僕は目を伏せて、前を向くことにした。

少し先を歩いていた二人に追いつこうと、僕は人込みの間を駆けた。

春、変わりゆく。(後書き)

【あとがき】

百合における最重要人物「傍観者」を、今回はルートにやらせてみました(なんか、常にルートな気がする)。

嫉妬するほど深入りせず、看過できるほど浅くもない。そんなところに位置取りをするという、難しいポジションです。色んな意味で、ドキドキはしてしまうのでしょうか。色んな意味で。

今回は意味深なフェードアウトを試みたので、ワクワクしていただけたかと存じます。

次回は「あのキテレツ和ロリ」が登場しますよ。
お楽しみに。

春、萌芽とらへて。(前書き)

【まえがき】

今回は少し長めです。

消毒液の匂いを嗅ぎながら読んでいただけると、想像が膨らみま
す。

では本編をどうぞ。

春、萌芽とらへて。

消毒臭いというのだろうか。特有の芳香は、どこの学校の保健室も同じだった。

普通の教室より一回り小さい部屋に、ベッドが二つ並んでいる。ベッドの下手側には診察台の役割をするらしい机と、事務処理用のデスクがあった。診察台横のガラス棚には、よくわからない薬やガーゼ、包帯などなど、手当道具一式が所狭しと置かれていた。足の踏み場はちゃんとあるけれど、足の踏み場しかない感じだ。

ベッドの一つは、今、僕たちが占拠しているから、尚更部屋は狭く感じる。

「別に、休むほどじゃないんだけど」

「でも、一応は安静にした方がいいよ。まだ、痛いんでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

今にも起き上がりそうなアリスを、何とか食い止める。お節介かもしれないけれど、後で突然倒れたりしたら、僕も本当に困る。ノアは気絶するかもしれない。

「大丈夫……？ ノア、何か、する？」

「大丈夫よ。ノアは、そうね……。なるべく無心でいてくれるかしら」

「無心……。ノア、無心、得意だよ……」

「助かるわ」

ノアはベッドの横にあった椅子に腰かけて、アリスの左手を握っていた。

あれは絶対、無心になれない気がする。

何か僕にもできることはないかと、保健室を物色してみることに

する。ベッド横の大きな窓からは、校庭がよく見える。授業開始前だから誰もおらず、とても静かだ。繁茂している雑草類の中に薬草があったりするかもしれないけれど、判別不能だ。アリスがいくら完璧超人と言えど、毒草を食べて無事でいられるはずはない。

壁掛けのカレンダーは真新しく、記入も少なかつた。どうやら明後日、脳検査が予定されているようだった。アリスが変な病気じゃないということだけを祈る。

診察台の上に、たくさんの紙が挟まった分厚いファイルがあった。中には、保健室利用状況が書かれているようだった。『サクラ 頭痛』『サクラ 頭痛』『サクラ 頭痛』以下略……。どうやら、だいたい同じ人が利用しているようで、その理由も決まって頭痛であるようだ。サボる人も、やはりいるのだろうか。最新の情報のところに『アリス 頭痛』と書いてあって、少し面白かつた。

ガラス棚の中を拝見していたら、鎮痛薬の群生を見つけたけれど、デスクにいた保健室の先生に目配せされたので、諦めることにした。ベッドのところへ戻ると、腕で顔を覆うようにして寝ていたアリスの口が動いた。

「あなた。ちよつと、落ち着いてなさい」

「え？ 僕？」

目が隠れて視線が伺えないせいで、人称がわからない。

この場合、内心暴れているであろうノアにも、それは言えるだろうし。ああも強く手を握られていたら、眠れないだろうし。

でも、まあ、違うだろうな。

「そうよ。あなたよ。あなたも、無心でいなさい」

「む、無心ね……。ノアさんは、ちゃんと無心なの？」

「違うわね。……き、きつとね」

「だよね……」

「やっぱり、ダメなの……。ノア、無心のつもり、だったのに……」

無意識状態下である睡眠時ですら、夢を見たりするおかげで、人間は無心ではなくなる。意識がなくとも、無心になることができない

いということとは、無心になるとはもはや人間には不可能なことなのだ。

もっと言えば、無心であると知覚する自分がいる時点で、それは無心ではなくなると言えるのではないだろうか。つまり、無心が無心として成り立つには、他人の心を知覚できなければならぬということにもなり得る。自分の心が無であると判断するのが他人であれば、矛盾しないのだから。

知ってか知らでか、それを要求するとは、アリスもなかなか意地悪だ。言葉の綾で遊んでいるだけなのかもしれないけれど。

少し邪推していると、急にトーンの低い声が聞こえて、内心焦る。

「ノア……」

「わう！ ご、ごめんなさい……」

「いいのよ。でも今度からは気をつけなさいね」

「な、何の話してるの……!!?」

「あなたはいいのよ気にしないで。あとノア、手、少し痛いわ」

「う、うん……。こうやって、繋いじゃ、ダメ……?」

ノアは一旦パツと手を離れたかと思えば、またすぐにアリスの手を追いかけた。そして今度は、アリスの指の間に指を絡ませる。確かに、それらしく優しく強い繋ぎ方だった。

「ええ、いいわよ。というか、もう、隣で寝てもいいわよ。そっちの方が、余計なこと考えないでよさそうだし」

「だ、大胆だね、アリス」

「何よ。冗談よ。ただ、色々と情報網が錯綜してて、物事を考えるのがものすごく億劫なのは、確かだけどね」

「冗談を言う元気は残っているようだけれど、どことなく口調に覇気がない。人の心理を取り込むような独特のプレッシャーも、いつになく弱い気がする。」

それは、そうしてベッドに横たわっているせいなのだろうか。い

つもの鋭い眼光が、腕で塞がれているからなのだろうか。

どちらにせよ、何か別の対抗策を講じなければ、アリスが アリスの情報網が破けてしまいかもしれない。

別の、別の、別の。

一つ提案してみる。

「じゃ、じゃあさ、無心は無理だからさ、他のことについて話そうよ。アリスの情報網の負担を軽くすれば、きっと頭痛も収まると思うんだ。楽しい話したら、痛いのも忘れちゃうかもだし」

ノアは一度首を傾げると、アリスの方に向き直って小さく確認した。

「アリス。いい……？」

「ええ、いいわよ」

興味が感じられない返事だと思ったけれど、口は許可しているようだったのでよかった。

それでは。全く関係ない話をしよう。

「ええと……」

「うんうん」「……」

少しばかり調子付いて起立してみれば、一席打つ余裕すらありはしなかった。流行や世間話に疎い僕には、これというネタがなかったのだった。

隗より始めよと言われてしまえば辱めを受けるだけだ。何かネタを捻り出さなければ。

「そ、そうそう！ 今年収穫したコーヒード豆、今までで一番香りが良いんだあ……！ あーははは……はあ……。ごめんなさい……」

……

空元気である。

「そ、そうなんだ……！ ノ、ノアも、飲みたいなつ。あ、甘くすれば飲めるんだよっ」

「うっ、フォ、フォローが痛いっ。いいんだ、僕が悪かったんだよ！ 無理してフォローさせてごめんノアさん！ 本当にごめんなさ

いノアさん……。僕はもうダメみたいだ……」

「そ、そんなことない！ お、面白かったよ！」

「や、やめてえ……」

「保健室ではお静かに！！」

「「う、ごめんなさい！」」

「ルート……。そんなに落ち込まないで……。気を取り直して、もう一回、しようよ」

「もう一回やるんだ……。あ、ありがとうノアさん……。じゃあ、ノアさんから、どうぞ」

保健室の先生に一喝されてしまったそばから、またお喋りを再開するのもしかたかと思うけれど、ノアが何か言いたげなおかげで、やっぱりやめようとも言いにくい。

もしかしたら、ノアはお喋りするのが好きなのかもしれない。いっつになく目が輝いている気がする。

「【不思議】って、知ってる？」

ノアは目をキラキラさせたまま僕の方を見上げて、そう尋ねてくる。アリスには聞かないあたり、アリスにはもう話したことなのだろうか。もしくは結んでいる手から情報を伝達、共有しているように見えなくもない。

『保健室のベッドで手を繋ぐ』という規律違反グレーゾーン行為が、目の前で行われていることに、僕は今更ながら気づく。……まあ、先生も何も言わなかったし、いいか。

とりあえず、ノアの瞳の煌めきに答えたい。

「【一不思議】って、学校に伝わる怪談とか、そういうこと？」

「似てるけど、ちょっと、違うの……。【一不思議】は、【一不思議】なの……」

「ごめん。知らないや」

流行りに追いつけない自分に喝を入れつつ、「アリスは知ってる？」と質問を病人に丸投げする。

「はあ」と溜息を一つしたかと思えば、重たそうな口がのっそりと動いた。

「こんだけ噂になってるのに、あなた本当に知らないの？」

「し、知らない」

「それもなかなかすごいわね」

アリスが言った下から「ねー」と、ノアが語尾をなぞる。遊ばれている感じがするのは、気のせいだろうか。

それがただの杞憂であるということは、次に口を開いたのがノアだったので、すぐにわかった。本来なら、こういう時は、アリスからの追撃が来るものだから。別に待っていたわけではない。

「【一不思議】はね、一年生の間で流行ってる、変な噂だよ。不思議な夢を見るんだ、って噂だよ。同じ日を繰り返したり、魔法を使える世界だったり、みんな水着で登校したり、階段を上ってたらいつの間にか朝になってたり、不思議な夢。一いぢって付いてるけど、たくさんあるの。おかしいよね」

「へ、へえ。そ、そうなんだ……」

話が突飛すぎてついていけない。

今話を要約すると、【一不思議】というのは夢の話盛り上げた噂話だということなのか。

処理の追いついていない頭に、また、アリスが情報をつっ込んでくる。

「とてつもなく胡散臭い話だけだね、一つだけ、現実的でおかしいところがあるのよ」

「そ、それは？」

「【一不思議】を噂する人間が、限定的だということよ。あたしが聞いた話によれば、『保健室が消失する』という噂話は、陸上部の一年生だけで伝播しているらしいわ」

「それって、部員同士で話を合わせて、皆の反応を楽しんでるってだけじゃないのかな」

「それだったら単純で良かったんだけどね」

「少しだけ解決に近づいたと思えば、また遠ざかってしまうのか。」

普通に考えれば、数名の人間が話を合わせているとしか思えない。アリスの言う通り、単純なおふざけで話は収束したはずだ。でも、それほど噂になっているのなら、何か興味を引くような信憑性が隠れている気がする。

そう。例えば。

「もしかして、特定の人だけ噂話を知らないとか……？」

「話が早いわね」「ルート、すごい！」

褒められた。なんだか、生まれて以来初めて褒められた気がする。さすがに気のせいかな。

よくわからないけれど、恥ずかしかったので、話を進める方向に仕向けることにする。

かなり大事であろう事実を、僕は告げる。

「というか、噂話、僕も知らないんだけど……」

「周囲に【一不思議】の渦の中心がないから、多分、関係ないと思うわ。ただの時代遅れね」

「それは酷すぎるよ……。アリス、何かおかしいこと起きてない？」

「あたし？ 強いて言うなら、この頭痛かしら。噂が耳に入ったあたりから、痛いよね」

「それは、確かに変だね」

脈絡のない噂に眩んで、情報網が決壊してしまったのかもしれない。人間の脳に記憶量の超過はあり得ないけれど、何となくイメージはできる。情報がたくさん入り込んできて、脳がパンクしそうになる、あの感じ。

それで熱を出す人もいるのだから、倒れそうになるほどの頭痛があってもおかしくはない。

「噂って、いつから流れてたんだろっ」

「さあ。入学式の放課後には、もう聞いていた気がするわ」

「かなり早い段階だよね、それ」

「そうね」

自然、首が傾いてきてしまう。手がかりが少なすぎて、推理しようにも、その序説すら思い浮かばない。というか、何を解いているのかも、よくわかっていない。ただ、事件が難航しているということだけはわかる。

目隠しアリスが「面倒ね」と溜息をついて諦めようとしている。

アリスがお手上げなら、僕になす術などありはしない。三人寄ればなんとやらと言うし、一人諦めたら

それをよしとせず、一人、唸っている人物がいた。

アリスの手を握りながら険しい表情になっている彼女は、アリスの恋人のノアだった。

「もしかしたら、【一不思議】の犯人、一年生、かも……」

自信なさげに、そんなことを口ずさんでいるようだった。

手を繋いでいるから、何となくアリスには意味が伝わっている気がするけれど、僕は別だ。尋ねる役割は、僕が担うことにする。

「ノアさん、それってどういうこと？」

「噂って、広まらないと、意味がないの。なのに、この噂、放課後から始まっているんだよ……。広めたいなら、もっと、目立つようにすると思う……。朝、来るとき、校門のところで、何か呼びかけたりとか……。なのに、全然なの」

噂を流すというのはつまり、その噂を聞いた人間の反応を見下ろして、愉悦を探すものだ。自分が流した噂で誰かを困らせたり、時には喜ばせたりする、というのが噂を流すという行為そのものの大義なのだと思う。

流行らせたいがために噂を流すのなら、もっと早い段階で流しておくべきなのだ。

頷いて肯定すると、自信がついたのか、今度ははきはきした口調で、論じた。ノアの閃きの表情たるや、推理小説に登場する名探偵の得意満面を彷彿とさせた。

「だから、犯人は、入学式に出て、その時間いない、一年生……！」
「そう見せかけるために、二三年生が仕組んだとか……」

それなら、二三年生の間に噂が広まっていけないことも、説明がつく。

ノアは、言われることを予測していたのか、言下に言い添えた。尚も自信ありげに。

「二年生と三年生、噂話を知らないんだよ。知ってるけど、知らないふりをしてるのじゃないの。本当に、何も知らないの。存在を認識してない、みたいなの……？　ということは、その逆……。一年生が、流した……ってこと……」

「一年生の誰が犯人なんだろう」

「ノア、そこまでは、まだ……」

「あ、そうなんだ。でも、ノアさん、すごいね！」

「考えるのは、好き……」

ノアはそう言って、アリスの方を向いてしまった。どうやら電池切れなようだ。アリスは変わらず表情を隠しているし、語勢の無さからも伺えるように、本当に元気がないようだ。

すると、ここで探偵の足役として動けるのは僕だけということになる。

今のノアの推理を元に、一年生およそ百五十人の中から、犯人を炙り出さなければならぬ。アリスのためにも。それを思うノアのためにも。もちろん、僕自身のためにも。

アリスのような観察力も無ければ、ノアのような洞察・推理力も無い僕に何ができるわけでもない。けれど、今、僕は、心底楽しかった。臥せっているアリスには不謹慎かもしれないけれど、『事件

解決に向けて何かしたい』と足が疼いてしまう。
これはきつとあれだと思う。自分の中に、今使すべき標語があったはずだ。

誰かのために、何かできる。

僕が、僕にしかできないことを。

「あ。そろそろ時間だ。アリスはまだ休んでる？」

「ええ……。そうするわ……」

授業開始前五分、アリスのこの感じだと授業は受けられなさそう
だ。

ここは、保健室の先生に任せることにして、立ち去ろう。

「また休み時間になったら看みにくるよ」

「来なくていいわよ、別に……」

「いや、来るよ！そこは来させてよ！」

「はいはい。わかったから、さっさと行きなさい……」

「良かった。元気そうで」

「……マゾヒストなのかしら」

押しの強い妹との折り合いもあるのです、きっぱり否定はできない
けれど、他人に気質を言われるとなんだか癢である。

今回は、アリスの衰弱に免じて突っ込まないでおく。

「じゃ、行くね」

そう言い残して、ベッドから離れようとした時だった。

やっぱり、アリスはアリスだった。

「逃げるのね、やっぱり……」

僕はすぐさま振り向いて、でも何も言わなかった。アリスも、目を
隠しているだけで、何も言わなかった。

聞かなかったことにして、忘れものを拾っていい。」

「それじゃ、ノアさん。行こう」

「……………」

「あれ？ ノアさん？」

「……………」

「ね、寝てる…………？」

「……………」

「寝てる!？」

「……………」

「寝てるよ!！」

「保健室ではお静かに!！」

「ごめんなさい!！」

熱^いり立った保健室の先生の激昂にびっくりして、僕はダッシュで保健室を飛び出した。

これを『逃げた』というのだろう。

それは一瞬の判断で、必ずしも最善の選択とは言えないのかもしれないけれど、間違ってもいないと思う。“生きる”という欲以外何も無い、完全なる直感だけが働いた結果が、その行動なのだから廊下をゆっくり歩いていたら、アリスに詰^なられる気がして、何度か後ろを振り返った。誰もいないのを確認するたびに、少しずつ早足になって、最後の方はほぼ走っていた。

僕は一体、何から逃げているんだろう？

西校舎の一階に僕の教室はあった。西校舎とは、体育館の隣の建物で、通称を「旧校舎」と言うらしい。掃除を徹底する校風のおかげで、古めかしさはあまり感じないけれど。

校庭とは真逆に位置するため、窓側の僕の席からは、学校の周りに張り巡らされた柵がよく見える。色々な蔦植物が柵に絡まっている。緑の壁に見えなくもない。

ミドル三年生の時が三階だったから、天地の高低差に若干の抵抗はあるけれど、地の方も悪くないと思った。

でもきつと、慣れてしまふのだろう。

僕は縮こまって教室のガヤの中を抜けて、自分の席まで急いだ。話せる人が自分の席の近くにしかないからだ。席が近いという理由で入学式の時に少し話したぐらいの分際で、おこがましい気の持ちようだけど。

「ふう」と一息ついて気持ち切り替えて、僕は前の席に座るサクラという少女の肩をつついてみる。

「あ、あれ？」

反応がない。突っ伏しているし、寝ているのかもしれない。起こしてしまうのも悪いので、自粛しよう。

と、思ったけれど、寝ているわけではないようだ。鼻を嚙っているのが聞こえる。

もしかしたら、具合が悪いのかもしれない。最近、流行っているのかな。頭痛。

僕は席を立ってサクラの席の横で中腰になった。何となく、サクラをクラスメイトから隠すように立ってから、背中を摩ってあげることにした。

肌に触れたりするわけではないから、特に緊張はしなかった。

「サ、サクラさん……だ、大丈夫？ 具合悪いの？」

「んん！」

首が激しく左右に振れ、紅茶色のセミショートヘアが一緒になっ

て舞う。行きと帰りでおでこが机にぶつかっていて痛そうだった。表情は見えなかったけれど、首の振り方然り唸り具合然り、怒っている気がする。

鼻を嚙りながら怒る。

これは知っている。家族に同じようなことをしていた人物がいた。「サクラさん、もしかして花粉症？」

この時期になると、リズの機嫌は総じて悪かった。重度の花粉症のせいで、鼻は詰まり、目は痒くなり、ひどい時は頭痛もするらしい。

それで、この時期になるとリズは、花粉に対してよく怒りを露わにしていた。「なんなのもう！」とか「もうやだ」とか、鼻声がまた可愛らし　ではなくて。

「窓、閉めた方がいいかな？」

「んん」

また、首を左右に振られる。

でも、何だろう。さっきよりも威勢がないような。

「サクラ……さん？」

「……………」

「だ、大丈夫？」

また背中を摩ろうかと手を伸ばした時だった。

「わっ」

物凄い瞬発力で、サクラが起立した。反動で椅子が後ろに跳ね飛ばされ、僕の席に勢いよくぶつかった。

甲高くて抜けの良い金属音は、これでもかと教室中に鳴り響いて、ガヤをかき消した。代わりに沈黙を持ってきたけれど。おまけに、注目も浴びる。

額から変な汗が噴き出てくる。そろそろ頭痛もしてくるかもしれない。保健室に行きたくなってきた。

でも、今振り返つたら、緊張死してしまうに決まっている。
だから、こうしてサクラを見ているしかない。

見れば見る程に、均整の取れた体つきだとわかる。出るところは出ていて、出なくていい所は出ていない。制服スカートもきちんとしたプリーツがついていて、礼儀正しさが伺える。何かスポーツをやっているのだろうか。日焼けしていないところを見るに、屋内の運動部だと考えられる。髪の毛の長さからして、ジャンプしない競技な気がする。

.....。

数秒経つただろうか。

僕から見えるサクラは、横から見えるほんの一部だけ。改めて見ても、怒っているのか、笑っているのか、陰つていてそれすらわからない。

この沈黙の中後ずされるほど、僕は強くはなかった。

だからなのかなんなのか、僕はサクラの方に一歩踏み出していた。

「ど、どうしたの？」

少しだけ首を傾けて、尋ねてみる。

僕がその表情に気付いた時には、もう、サクラの顔は僕の胸の中にあつた。

「うわああああー!!」

「え、ちよっ!?!」

お腹周りが湿っぽく、さらに熱くもなってきた。背中を締め付ける程に強く、サクラは僕のことを抱きしめていた。顔が押し付けられて、少しだけ胸が痛かった。ただ、何より沈黙が沁みだ。

何がどうなっているのか知らないけれど、求められたら答えると決めたのだ。

僕は咽び泣くサクラの背中をまた摩って、今度は頭も撫でてみる。落ち着いてくれることを願って、髪の毛を優しく梳くくらいにした。何故か懐かしい、桜の香りがした。

「よ、よしよーし……?」

「うえええ……! うっ……」

入学二日目の朝。

僕は、三年間背負っていく『女の子を泣かせる不良生徒』という汚名を心に刻んで、すでにこれからの過ごし方の設計を見直していた。贖罪で三年間の青春がすべて消えそうだった。

「あははは……。どうしたらいいんだろ、これ……」

だけど、髪を撫でる手は止めずにいた。

春、萌芽とらへて。(後書き)

【あとがき】

これは言うまでもなく、そそる系エンディングだったので、あとがきは早々に退散します。

ただ、次回は『ノア編サブエピソード』を挟む予定なので、結論だけ読みたいと言う方は、ぶっ飛ばして次の次くらいまでいっちゃってください。

『sympathy』一息クライジユ（前書き）

【まえがき】

一応、ノア編の続きとなっております。

そして、今更ながら気づいたのですが、サブエピソードは短編として読むこともできます。その話一つで成り立っているもので、前後の繋がりを無視しても、割かし成り立ってしまうようです。

エンディング。

『sympathy』一息クライジユ

階段の端の方に座って休んでいると、サクラがそわそわしだした。「の、のう。そんなに、焦らさんでくれんか……」

「じ、焦らしてないよ……」
そう。ただ休んでるだけ。

無限に続く螺旋階段を作り出した犯人からすれば、気が遠くなりそうなこの長さも、ほんの数ミリ秒程度にしか感じないのかもしれない。永遠という一瞬の隙間を埋めるために、観測するのは永遠であるように見える瞬間でも構わないのだから。

形而上学に自信はないけれど、自分の隣のスペースを右手でポンと叩いてみる。彼女との距離を推し量る手間を省くためだった。

サクラは、二回、瞬きしてから、しゃなりと隣へやってきた。子供みたくに嬉しそうな表情で、普通に可愛かった。

すたとんと腰を下ろすと、結構強引に距離を縮めてきた。ただでさえ曖昧な計算が、確実に狂う。

「やっとか!?! やっとなのかの!?!」
「た、多分違う……と、思う……」

「なんじゃまったく……ん? もう震えは止まったんじゃな」
「そうみたい」

「うむ、良かったのじゃ。信頼してもらえたようじゃな」
果たして、すぐに体を触ろうとしてくる人を信頼してよいものなのか。

答えるまで数秒の間があったけれど、自分にとれば一瞬だったのかも知れない。

「信じてたよ、最初から……」

「ほう。嬉しいぞ。じゃが、なんでじゃ？」

自分でもわからなかった。ただ、直観的に大丈夫だと思った。けど知っている。そういう曖昧な判断は、大概アリスへの想いに基づいているものだ。

「アリスなら、いいって言うかな、と思ったの……。あ。アリスっていうのは、ノアのご主人様　じゃ、じゃなくて……。そう、知り合い！　同じ学年の人なの！」

「ほう。そういう関係じゃったか」

滑落した部分だけ見事に切り抜かれてしまった。

楽しい話が好きな人は、一緒にいてすごく楽しいけれど、こういう時少し怖いものなのか。

一つ学びながら、滲んだ額の汗を密かに拭う。

「あれじゃろ？　朝、お主、手を繋いでおったじゃろ？」

「へっ!？」

反射的にそちらを向けば、無表情のサクラがいた。あまり楽しくなさそうにも見える。

あんまり好きじゃないのかな。恋バナ。

……。あ。恋バナでもないのか。女の子だし。

だから、つまらなそうなのか。だとしたら、月並みな自分の反応も、興ざめを誘っているに違いない。

「う、うん。繋いでた」

今度は、呆気にとられたのか、ひどくきよとんした表情で、

「い、潔いのう」

と、感心して笑う。

言下に、口調を変えてくる。表情は、確りと整った『興味』だった。

「ありすと言ったかの？　お主、付き合つとるのか？」

と、興味津々な様子だ。結局、どっちなんだろう。

知リたそうにしているのを見ると、逆に、あまり教えたくなくなる。無関心ならまだしも、群を抜いた奇抜さを引っ提げて校内を歩

き回るサクラに、情報を提供するのには危険すぎる気がする。

ただ、信頼はできる。約束は守ってくれる気がする。黒蝶のリボンをあしらった柔らかそうな胸部のハリに賭けてこそ、信じられるというものだ。まあ、自己主張の代償は抜かりの無い誠実であると、そう信じたいわけで。

少し牽制してみる。

「水着^{せいふく}、寒いから、手繋いでみたの」

「まあ、確かに寒いのが。艶めかしい体は拝めるのじゃが、やはり肌寒いのがネックじゃな。わしは服を着たい」

アリスとの関係性を掘り下げてきた割に、話題が逸れる。

もしかしたら、あまり興味がないのかもしれない。それなら、気兼ねせずに会話できそうだな。

「ねえ……」

「ん？ なんじゃ？」

「やつぱり、服、水着^{せいふく}の上から着るの？」

「寒い時はのう」

「そうだよな……。別にかさばるわけじゃないし、邪魔になるわけでもないもんね」

それならば、どうして着ないのだろうか。

ほんの数百グラムの重量を纏うことで、パフォーマンスが著しく変化するとも思えない。良くも悪くも。いやむしろ、こういう寒い春なんかには、プラスの面ばかりだと思う。加えて、自分のように、自分の体に自信を持ってない人からしたら、体型を隠してくれる上着は、多少変に思われても着たいものなのだ。メイド服のような作業着だって全然いい。

衣服を取りに、自分だけ家に戻るわけにはいかないのだけれど。

「なんじゃ？ お主、自分のカラダに自信がないのか？」

「や、そういうんじゃないか……くないか……」

「全く。これじゃから最近の若者は……」

「サクラも、そうじゃないの……？」

サクラは首を横に振って、にじり寄ってくる。

ポンと、太ももに手を乗せられたのに驚いて、体がビクツとなる。急に触るのはよくない。あと、緩急をつけて摩さするのもよくない。ドキドキしてしまう。

「お主は、自分のどこが嫌いなんじゃ？」

「ぜ、全部……だと、思う……」

自覚している自分という存在は、客観的に見れば『最悪』だった。真っ黒に荒んだ過去を顧みて確信した、自己嫌悪だと思う。最近ではアリスにたくさん励まされて少しはマシになってきたと思うけれど、世に言う普通の自尊心に達しているかと言われたらそれも違った。

サクラは一度軽い溜息をついてから、太ももに置いていた手を肩へと持ってきた。

「そうか。じゃったらお主は、気に入らない自分をありすとやらに押し付けるといふことじゃな？ 自分の嫌いなものを、他人に好きになってもらおうと、そういうわけじゃな？」

「え、あ……」

「お主の嫌いなお主の手と、ありすは手を繋いでいるのじゃぞ？」

お主の嫌いなお主と、ありすは一緒に歩いておるのじゃぞ？」

「で、でも……」

「それは本当に、『好き』ということなのかな？ 守ってもらえるから、子供みたいに甘えとるだけではないのかな？ どれだけダメ人間でも、親は匿かくってくれるからなの？」

一点の曇りも無いサクラの瞳がすぐ目の前にあって、そこには自分が写っている。

誰がために凄むのか知らないけれど、その瞳にだっで見ると堪えないダメ人間が写っているに違いない。アリスが見ようと、サクラが見ようと、自分が見ようと、自分は確実に劣っているのだ。だから虐げられるって事実も、瞳には写っているはず。

それは、仕方のないことなのだ。

でも、今、自分は幸せだ。

怠慢を見抜かれるまでは、ほんの一瞬だった。

「お前さんじゃないわい。ありすじゃ。ありすが気の毒じゃということじゃ」

「あ……」

サクラは肩を掴んでいた手を離して、今度は頬を撫でる。緊迫する空気も助けて、自分に考える時間を与えてくれない。

「のう。お主は、ありすが自分自身を嫌っておったらどうするのじゃ？ 励ますじゃろ？ それでも自分自身を好きにならんかったらどうするのじゃ？ 嫌じゃろ？ そんなにも自分のことが嫌いなやつと手を繋ぐのは、なんとなく気が引けるじゃろ？」

重ねられた問いをいっしょくたにして、サクラは「ん？」と首を傾げて訝ってくる。

何かを繕おうとする気持ちは、その優しい表情に洗い流されて消えた。

「この者は本当に自分を好いておるのじゃろうか？ と不安にもなる」

「……好き、だもん」

「ありすも、そうじゃったら、きっと悩んどるじゃろうな。お主が、自分を嫌いなせいで」

「ち、違うつ。ノアは……」

「なんじゃ。言うてみい」

左手で頬を優しく撫でられて、右手で髪の毛を梳かされて。自分は、そんな自分の頬も、髪の毛も、好きになることはできないのだろうか。

いや、そんなことはない。

「ノアは、何をやってもダメだし、センスも無い……。頭も良くないし、運動も全然……。だから、自分のこと、好きになれない……」

「そうかの、なら」

頬から逃げていく温かさを追いかけるように、自分の中にある精一杯の勇気を　アリス限定の勇気を振り絞って、「でも！」「、サ

クラの手に自分の手を伸ばして握る。

「でも！ ありすと繋いでる手は好き……大好き！ サクラと繋ぐ時の自分の手も、好き、だよ……？ だから、自分を嫌いなままじやダメ、かな……」

サクラはまた首を傾げる。今度は、少しだけ表情が硬くて、怖かった。

でも、勇気が勝ったんだと思う。

「今の自分のこと、好きになっちゃったらね、これ以上、アリスに好きになってもらえない気がするの。アリスに、本当の意味で『好き』って言うて欲しいのに、アリスの家族としての自分を好きになっちゃったらね？ そこで終わっちゃうの。だから、ノアは、まだ、自分のことを好きになれない……んだと思う」

「そうか……」

右手で捕まえていたサクラの左手が、また離れて、今度は二の腕の辺りをがっしり鷲掴みにされる。右手も同じように、二の腕を掴んでくる。おまけに、真下を向いたので、今、目の前には、可愛らしいサクラのつむじが二つ見えるだけになった。

「サ、サクラ……？」

「むふふふっ！」

「え？」

「よかったのじゃ。わしは心配したぞ。その程度の気持ちなのかの、と」

「ん？」

「でも、ちゃんと“好き”みたいじゃな。安心じゃわい」

急に口調がぶっきらぼうになる。下を向いていて表情が読めないせいもあって、また少し怖い。

サクラは自分の二の腕を握ったまま、言う。

「ほれ！ 立つのじゃー！」

「う、うん……」

そして立ち上がる。

随分と長い間座っていたせいか、若干立ち眩みがある。でも、サクラが腕をしっかりとつかんでくれているおかげで、安心する。

「あ、ありがとサクラ」

「うむ」

「あ。今ね、サクラに掴まれてるから、自分の腕も好き、かも……」
鼻で笑いつつ言うから、付け焼き刃感是否めないのだけれど、つまりそういうことだと思う。

それだつてちゃんと自分なのだと、そういうこと。

理由はどうあれ、アリスが好きと言ってくれた自分なのだ。思い出すたび好きになれるじゃないか。

そうか。

そう思える人を増やしていくこと。それが、友達を作るってことなのか。自分が好きになれる瞬間があれば、きっともう友達なのだ。

「ねえ、サクラ……」

「うむ」

「友達つて、思ってもいい？」

「うむ」

「良かった……！」

「うむ」

「うんうん」

「うむ」

「うん……。サ、サクラ……大丈夫？ どうかしたの……？」

「うむ」

様子がおかしい。

相変わらず顔は下を向いたままだけど、若干小刻みに震えている気がする。寒そうにも見える。

「さ、寒い……？ や、やっぱり、服着よ……！」

「うむ」

「ねえサクラ」

「うむ……」

「も、もう。貸せる服も無いから、保健室に行こ……。ベッド、温かいと思うの。寒かったら、ノアも一緒に包くまる……。あ！嫌だったらやめるから！」

「うむむ……」

「サクラ………?」

そんな具合が悪いのでは急を要する。

力に自信はないけれど、サクラが体重を寄せて来たら、その自分も好きになれる気がする。そうしたらきっと、今思うよりは、少しは力が出てくれると思う。

二の腕をロックした手は外れそうになかったので、そのまま階段を一段下に降りる。そうしてサクラのちょうど真下に位置取る。

こうすることで、その表情を覗きやすくなる。もしかしたら、泣いているかもしれないから、ちょっと急ぐ。

「うむむむ……」

「あれ……? サクラ……?」

「御免！」

「えっ?」

後ろに押されると同時に、二の腕のロックを解除される。感じるのは後方への推進力というよりも、真下への引力。一段一段数える暇もなく、世界は流れてゆく。あつという間にサクラは小さくなつて、いつの間にか消えた。それでも階段は続いていて、着地予定のはずの踊り場へは辿り着かない。

今までぐるぐる螺旋していたはずなのに、今、後進するのは直線

の気がする。そんなはずはないのに、確かにそう感じる。

三十秒も経つと、視界が紅茶色に染まりだす。夕焼けの色に似ている。似ているけれど、絶対に違う。今は、まだ朝のはず。

さっきから同じところを滑落している気がする。

何分経っただろう。ここはどこだろう。自分はどうして落ちているのだろうか。自分は落ちているのだろうか。

夕、夜、朝、昼、と何度か繰り返して、気が疲れて、世界は微睡んで、気付くと眠ってしまったのだと思う。

でも、何となく、目は覚める気がする。

しばらくしたら、眠っていたことを思い出すのだろう。

そしてきつとこう言っ。

「変な夢、見たの……」

『sympathy』一息クライジユ（後書き）

【あとがき】

書いていて気付いたのですが、やはりノアはアリスとでないといちやつきませんね。私は、キャラが勝手に動き出したものを文に起こす執筆スタイルなので、こういう結果になると、とても面白いですね。

キャラもだいぶ出てきたので、カップリングが楽しみです。

王道ノア×アリ、重い愛リス×アリ、ノア×サク、リス×ノアなんてのもありえるかもです。

私も未知数なところなので、書いていて楽しみです。

次回は、本編に戻っていききたいところです。

春、歩み止め。(前書き)

【まえがき】

お気づきかとは思いますが、タイトルがLoote4のオマージュになっております。

私は、作詞をしている分、そういうタイトルには少しだけこだわりがあります。

加えて部屋の模様替えが好きで、どんな家具も隙間にぴったり収めたいタチです。そういう状況を、私は「フィット主義」と呼んでいます。

なので、タイトルもパズルにすれば、きっとフィットするのです。

本編です。

春、歩み止め。

「はあ……。授業サボっちゃったよ……」

僕のぼやきは、学校中に鳴り響く定時のチャイムにかき消されたと思う。

愚痴が聞こえていたら、サクラは笑ってくれたのかもしれない。

「うえっ、うううっ……ひうっ」

均整の取れた可愛らしい顔が歪んでしまっている。それでも、可哀想だという確かな比率は、僕の目の前に存在していたけれど。

度々やってくる小刻みに鼻を嘔る痙攣が、いたく弱々しく見えた。

「だ、大丈夫？」

首を縦に振ってくれるはずもなく、呈する反応は悲鳴のような嗚咽そのものだった。涙があまりにポロポロと零れるので、止めることを諦めてしまっているようでもある。

少なくとも、僕の心配は今、意味をなしていない。

あの状況で手を引いて教室を飛び出したら、誤解を生むことは自明だろうと、そう責め立てられるのを覚悟して行動していた僕にとって、その反応は少しばかり呆気に取られてしまう。

実際、後がどうなるかはわからないけれど、予測するのも怖い。

こうして誰もいない屋上に連れてきてしまうあたり、また言い逃れできない状況を作り出している。「でも、保健室に友達がいて……」と言い訳するのも、かなり苦しいものがある。どうしてそんなことを知っているのだと、変に思われるに違いない。

そんな行き詰った状況を謳った溜息が、さっき漏れ出たばかりだ

った。

「ど、どうしよう」

目の前には泣きじゃくる女の子がいる。

こういう場合、介抱するのが普通なのだろうけど、状況を顧みるとなかなか手が出ない。

入学式の時に少し話したぐらいの関係であるし、こうしておかしの時間におかしな所に連れてきてしまったという不思議もある。もしも誰かに見られたら、色々と変だし、きっと大変なことになる気がする。

「うわあああんー!」

今後の生活と、目の前の悲劇を天秤にかける。天秤は、ちょうど中間で止まる。

わかった。

どちらに分銅を乗せるか、それだけ教えてもらえないだろうか。

「サ、サクラさん大丈夫？ どこか痛むの？」

反応はない。

サクラの音量に押しつぶされそうになる。身も、心も。

「き、昨日何かあったの……？」

反応はない。

変な場所に連れだしておいて、どんなことを聞いているのだ、僕は。これではまるで、サクラと親しい関係にある者みたいではないか。それは、彼氏とか兄妹とか、家族のような。

でも、もし、本当にそうなら、僕が口を挟めるような問題ではないのかもしれない。

「サクラ、さん……」

身を震わせながら、声を上げて泣く彼女を、もう一度よく見てみる。

僕とほぼ同じくらいの身長で、すつきりとした体躯。髪の毛は紅茶色で、長くもなく短くもない。青空と正反対の夕暮れ色に色づいたその色と涙との対比に、体の水分が枯れてしまうのではないかと、

少し不安にさせられる。

だから、親と喧嘩して泣いているのとは意を異にするのだと、そう思える。もっと別の、涙を止めることを諦めてしまうような笑うことができなくなるような、そんな絶望めいた何かに遭遇してしまったのではないかと。

そんなサクラに、今ここで何かしてあげられたらとは考えるけれど、立場を弁えるべきでもある。びしょびしょになったあの手の代わりに、僕が涙を拭ってあげるとか、思い付きはしても行動には移せない。泣き止むまで抱きしめてあげるなんて、できるはずもない。そんなどうしようもない僕の意気地の無さを浮き彫りにするよう、サクラの泣き声は止む。

「……う、うう……。ひつく……」

サクラは手の付け根あたりでぐりぐりと目を拭くとまた、「すすすつ」と一度鼻を吸った。

成り行きで連れだした以外に何もできなかった恥ずかしさから、僕はサクラと目を合わせる事ができない。シャツの襟元に羽ばたく蝶ネクタイに視線を逃がして、口だけを動かす。

「サクラさん、大丈夫？」

「……しいのじゃ！」

サクラは号泣から一転、声を荒げる。僕が目を逸らしたのが気に食わなかったのかもしれない。言い初めが聞き取れなかったのは、喉が潤んで声が震えてしまっていたからだけど、その言葉は乾いていたと思う。

聞き返すのは気が引けたけれど、義務だと思った。

「どうしたの……？」

僕の言葉に導かれるように、サクラは朗々と言い放つ。ここが屋上で、本当によかったと思う。

「悔しいのじゃ……！」

それは彼女特有の語尾もそうだし、入学二日目というタイミングとミスマッチなセリフもそう。もちろん、泣くほど憤慨するレベルで、何かに本気なこともである。その挙動には色々と思議があった。

これを教室やら廊下やらで曝け出されていたらと思うと、この開放的な場所に連れ出したことは正解だと思える。

それならば、どこまでも続くこの晴天に懸けて、サクラの懺悔を解き放つてしまおう。

「悔しいの？」

「悔しいのじゃ！！ もうつんざりなのじゃ！！」

彼女は両手を激しく振りながら、強く訴える。

何か繰り返された苦痛に耐えかねたらしかった。その反復の程度は、あまりに強く握られた拳の震えを見れば一目瞭然だった。

ならば、繰り返されたことは何だろう。

「誰かに何かされたの？」

「違うのじゃ！！ 悪いのは……悪いのは……」

それが誰であろうと、僕はその人間を罰しようと思った。サクラに嫌な思いをさせる前に時間を戻して、僕がそいつの非行を阻止するのだ。僕にはその力が、まだ、ある。

でも、どうやら僕は、その人を罰することはできないようだった。

「悪いのは、全部わしなのじゃ！！」

「え？」

「何回やっても無駄じゃった……。人を集めても無駄じゃった……。素質を見極めても無駄じゃった……。天候を考えても無駄じゃった……。やり方を変えても無駄じゃった……」

「サクラさん……」

彼女の言葉は、一区切り一区切り言い切ることに強く、それでいて淡く臆気になっていく。

その対比は、彼女の髪と空のそれと似ていた。今は、愁いが勝っていた。

「何をしても無駄じゃった……。こんなのは、もう、わしが運命を決定づけているとしか思えん!! ……………どうしてじゃ。どうして、うまくいかんのじゃ……!!」

怒りに震えるサクラは、泣いて震えている時よりも、ずっと弱々しく見える。僕が彼女だったらきつと、逃げ出していただろう。

でも、彼女は僕ではない。

「逃げれば……いいよ」

「なんじゃと?」

「逃げればいいんだよ。そんなに辛いことなら」

彼女のきつい視線を受けながら、僕は僕なりの言葉を捧げる。

「サクラさんが泣いちゃうような嫌な事なら、きつと、誰だって嫌だし、諦めると思うんだ。でも、それでサクラさんがサクラさんらしくなくなるってことは、絶対はないよ」

「お、お主……なぜじゃ……」

アリスが『自分らしさ』を求めて奔走したことを思い出しながら、僕は強固な意志のもと言葉を紡いでいく。その記憶の中には、アリスと一緒に目標へ向かって走っている自分もいた。

脇道に逸れていた僕も、アリスと同じ目標地点へたどり着くことができた。脇道を進んでも、ゴールに向かってさえいれば、いつか必ず辿り着くのだ。

だから、逃げることだって、僕は正しいと思う。

「もしも、サクラさんが逃げるならさ。僕も一緒に逃げるよ。それならどうかな?」

暗い道は歩き慣れている。そうして、目標へとたどり着いたことだってある。

その道でなら、僕はサクラの手を引いて歩くことができるはずだ。ここへ連れてきた時のように。世界をやり直して、こうして今があるように。

サクラは、もう一度目を擦った。それはまるで、これが現実なのか試しているようだった。

「お主は……、お主はそれで悔しくないのか……？」

純水のように透き通ったサクラの涙を目で追いながら、僕は答える。

「悔しくなんか無いよ。逃げるってことは、進んできた道を引き返すってことじゃないと思うんだ。坂の緩い脇道に逸れて行って、ちよっとだけ先を見通すことじゃないかなって、僕はそう思うんだ」

そうして小高い丘に登って、未来を観察することで、違和感に気付いたりする。でも、それに気づいてしまうことで、進むのが怖くなったりもする。脇道に逸れたことを思い出して、悔いたりもする。でも、それでも僕は、それを悪いことだとは思わない。ミドル時代の記憶を撮んでいる今、絶対の自信をもってそう断言したかった。過去に胸を張る僕に、サクラは重ねて問う。

「そんなに別の道に入っても、辿りつければよいのか？ 目標に一直線に進む者らを見て、お主は引け目を感じたりせんのか？」

「それでいいんだよ。同じところへ向かう人がいても、皆が同じルートを通るとは限らないでしょ？ 僕とサクラさんだけは、皆とちよっと違う道を通ってみるってことだよ」

「違う道、とな……？」

サクラの瞳は急激に興味を帯びる。その熱で、さっきまでの湿気はあらかた干上がってしまったようだ。

これ以上は干乾びてしまいかもしないと、僕は焦らさずに言う。

「そう。違う道。少し遠回りだけど、綺麗な景色が見えるかも」

「景色かの……？ わしは、景色より勝利が欲しいのじゃ……」

サクラは、また少し肩を落とす。

その勝利という言葉は、サクラの目指す目標地点なのだろう。だとすれば、サクラはその脇道を通っている間、勝利へと進んでいると意識すればいい。要は、進捗への想いが貪欲か消極的かの話になるわけだ。

でも、それさえ念頭に置いていけば、そのまま景色を眺めて休んでいるだけになることもないだろうと思う。サクラなら、落ち込んでもきつと、また立ち上がる。

そう思えてしまうのは、一体どうしてだろう。

「サクラさんなら、きつと大丈夫だよ。その景色の先に、あると思うよ、勝利」

「本当かのう……？」

「頼り無いと思うけど、僕も一緒だから
「おぬし……」

そう言っつて、二の句を告げることはなかった。もしかしたら、サクラは呆れてしまっているのかもしれない。表情はと言えば、無そのものという感じで、全く読めなかった。

一つ分かるのは、僕の言動がサクラをそうさせたのだと言っつことだろうか。

相当恥ずかしいことをしているというのは、自分でも痛いほどわかってる。やり直せるから体裁などどうでもいいと思っつているわけではないのだから。

けれど、なんだろう。

こっつして何かを語っつている間、自分の心はとつても満たされてる感じがしてつたのだ。そして、サクラの無表情を必死に解こつとする現在も、進行形で満たされてる。

形容しがたいこの気持ちと言葉にするのなら多分、『望んでこっつしている』とか『こっつなるよう願っつてつた』とか、だと思っつ。

そっつだ。

これは、僕にしかできないことなのだ。一度きりの人生を生きる人間には知り得ない自信を、どうしてか持ち合わせてる僕にしか次にサクラが言っつことは、見当がつつた。

「こっつしてわしにこっつまでするんじや」

工夫せずに答えるのなら、『自己満足』だ。でも、それは何か違った。僕の中で、何かが違和感を生んだ。出会ってから二日で、教室から連れ出すと言う『運命』じみた何かを、サクラという少女に感じていたからだ。僕の嫌いな『運命』という言葉が、どうにもしっくり来てしまふあたり、不思議だった。不穏な空気を漂わせるはずのその言葉を、サクラは揺るがせていた。だから、そう言った。

「『運命』みたいな感じかな……。席近いだけでも、僕はそう感じたよ」

それは右隣でも、後ろの席でもない、一つ前という『特別』だった。

彼女の涙を掬い取るという運命的な役割を任されたというだけあってか、その二文字はすぐに思い浮かんだ。こうしてここにいる事実が、もう『特別』だ。

サクラは首を傾げつつ微笑む。

「ははははっ。それは愛の告白かのう」

「少し似てるかも。でも、ちよつと違うかな」

母の教えてくれた『運命』は、もう少しだけ意味が違っていた。ただそれだけのこと。

僕は肩を震わせながらも、「それじゃあ……」と我に返る。続く言葉はあまりに辛辣で、現実的だった。

「これからどうしよう……。授業始まつてるし、水やりの人が来るから、このままここにもいれないし……」

「そうじゃのう……。保健室で寝るとかはどうじゃ？ それなら言い訳もできるぞ」

「それもそうだね。……あ、でも、友達が体調崩しちゃって、今寝てるんだった。ベッド二つあるけど、狭いからちよつと迷惑かも」

「人がいるのではダメじゃな。ナニするにも不自由じゃ。作戦会議もできん」

「作戦会議か……。そうすると、先生もいないところがいいよね」
「そうじゃの。そうしたら、どこじゃろう……。授業中に先生がおらんようなところ……」

「廊下、とか……?」

「なるほど！ それなら見つかりそうな時にも逃げやすいのじゃ！
そうと決まれば行くのじゃ！ 校内探検、二人バージョンじゃ！」
サクラは拳を天高く突き上げて、笑う。

その拳からは緊張が解けて、柔らかさも見えた。
開かれたその手が、自分の前に差し出される。

「ん？」

「早うせんか」

「う、うん。行こう！」

僕もおおずと拳を握って掲げ、歩き出す。

サクラの横を通り過ぎるあたりで、制止を食らう。

「なにやつとるんじゃ」

「え？ なにつて……」

続く言葉が思いつかずに黙っていると、サクラは少し怒って「むつ」と頬を膨らました。

「早う繋ぐのじゃ」

「えっ!? 手、繋ぐの!?!」

「な、何を言うとするんじゃ。探検と言えば、手を繋ぐのが決まりじやろ?」

「そ、そうなのかな」

エレメンタリー時代の記憶を掘り返してみる。

四年生くらいの時、地域探検なる企画をやったことがあった。下級生たちと合同で数名の班を編成し、学校周辺を探検して回るというものだったと思う。ルールとして手を繋がなければいけないということはなかったはずだが、班員が迷子になってしまわないよう、伝統としてそうしていたのを覚えている。

僕の班にはリズがいて、確かにその時は手を繋いでいた。

「ど、どうしたんじゃ、嫌かの？」

「ううん。嫌じゃないよ。ただ、それを僕たちがやるのって、少し問題じゃないかなと思って……。小さい子ならまだしも、僕たちって、一応、十五歳だし……」

それ以前に、僕がサクラと手を繋ぐ構図にも大きな問題があるけれど。

もじもじとたじろいでいると、

「わっ。ちよっ」

遊んでいた手を多少強引にサクラに掴まれる。

きゅっと、ぴったり握られて、少し汗ばむ。

「そんなのはいいんじゃっ。めんどいつ。わしが繋ぎたいから繋ぐんじゃっ。手を繋いでぶらぶらしたいんじゃ！」

「そ、そう。わかったよ」

このタイミングで水やり係の先生が登場するビジョンが見えて、僕は焦燥に駆られる。

「じゃ、じゃあ行こうか！」

「行くのじゃー！」

サクラはとても嬉しそうに歩き出す。僕もそれに合わせて歩みを進める。

なんだかとても懐かしい。初めて握ったはずのサクラの手も、初めてじゃない気がしてくる。

温かくて、湿っていて、不可思議な柔らかさ。揺れる髪の毛、大きな瞳、桜の香。それら全部、自分の思い出の中にある気がする。

気がするだけで、そんなことはないのだけど。

きつと、この新しい環境がそう錯覚させているのだろうと、僕は屋上の桜の幼木に託けて持論を展開してみるのだ。

「ところでサクラさん」

「んー？」

「サクラさんの目標って、なに？」

「目標か？ 決まっておるじゃろ」

サクラはこちらを見ずに、テンポよく喋る。同じペースで歩いているおかげで、とても聞き取りやすい。良い言葉も、もちろん悪い言葉も。

「サッカーで優勝！！じゃ」

「え……？」

遅れることもなく、先走ることもなく、ほぼ真横に並んで歩いてゆく。

このままだと、屋上の扉は通れない。

春、歩み止め。(後書き)

【あとがき】

これから色々と起きそうな感じですね。

私もわからないので、一緒に予想して楽しみましょう。

実は、の次回予告、次回を書いてから書いております。なので、全然次回予告じゃないんですね。すみません。

それでもめげずに。

今回は「アリスのサブエピソード」な気がします、と。

【Waiting】Surrender never Surrender (前書き)

【まえがき】

というわけでアリス編の続きです。

今回は最後まで一気に投稿ということで、少し遅れました。流れるように書いたので、もしかしたら一気に読まないと難しいかもしれません。行間を読めないように構成していますので。

では、ごじぞ。

【Waiting】Surrender never Surrender

「あなたって意外と泣き虫なのね」

「泣きたくなつたのじゃ」

嫌味を込めて微笑んだつもりが、その淡泊な答えに飲み込まれて、しみじみとした空間が生まれてしまった。泣き虫は泣きたい時に泣いたりしない、という皮肉で返されたのかもしれない。

そう思えば、あたしのセリフのバックには、嫌味にも勝る気遣いがあったのだと思う。今あたしの胸に顔を埋める少女にとってみれば、お節介にはならないのだろうけど。

逆にあたしからすれば、球技大会の真っ最中、しかも最終決戦という大舞台である校庭のど真ん中で、抱き合いながら泣きべそをかかれているというこの状況こそが、お節介だった。そんなに包容力のアピールをしたいわけじゃない。

「もう大丈夫でしょ。そろそろ離れなさいよ」

「ああ、急に涙が……」

「凍らすわよ」

「冗談半分のもりが、少しだけあたしの手から冷気が漏れる。同時に「冷たいのじゃ」という一言が、サクラの口から洩れる。

そう言えば、屋上で拘束された時から、あたしの凍結魔法の能力は格段に上昇したのだった。こうして無詠唱の内に発動すると、なんとなく、【魔法】が意志の力を反映しているということに納得できる。

【魔法】が意志の力を反映するということは、だ。

「あとでいくらでも抱きついていいから、とりあえず今は離れてくれるかしら。すごい見られてるから」

「見られると恥ずかしいタイプかろう？」

「見られるのは嫌だけど、今はそういうのじゃないわよ」

「汗臭かったかのう？」

「そんなことはないわよ。ただ、早くしないと、学校が大炎上するかもしれないってこと」

「大炎上……？ ああ……、恋人かの」

いくら【魔法】の破壊力が軽減されているからと言って、空間の温度が上昇するあの感じでは意味がない。この試合会場のどこかで応援している、一番熱心なあたしのファンの【フレイム】の前では心無しか、校庭の気温が高くなっていく気がする。

「そう、恋人よ。だから、さっさと離れなさいよ」

「なんじゃ。ケチじゃのう」

「別にいいわよそれで」

「……………」

「何してるのよ。早くしなさいな」

「嫌じゃ」

背中に手を回して、きつちりとロックされる。

何なんだこいつは。

「は？」

「直揉みさせてくれんと、離さんのじゃー」

「そんなこと言ってる、死人が出るわよ」

「わしが創り直してやるのじゃ」

色んな意味を含んだ決め台詞を言い放つも、サクラの不謹慎に回避される。冗談で言っていないから、非常に恐ろしかった。

原子レベルで再構築された人間はどうなってしまうのかという哲学はにおいて、あたしはこんなことをしている場合ではない。

一番のファンのもとへ、一刻も早く駆けつけなければならぬのだ。

「ここが焼け野原になるのが見たいのかしら？」

「む、むう……。確かに、それは嫌じゃ……………」

「……」

「……」

その仮定は、二人同時にだったと思う。あたしの言い訳の仮定は、サクラの代用の仮定に打ち消されてどこかへ飛んで行ってしまった。きつと、四次元空間の向こう側とかに行っただけに違いない。

あたしの視界は一瞬にしてどこかの室内に変わる。空間が歪んだり、時差を体感したりはしない。

「ここならどうじゃ？」

「あなた本当に保健室好きよね」

周囲を見渡せばギヤラリーの姿はなく、代わりに校舎の白壁が四方八方を取り囲んでいた。おまけに、泥臭さの代わりに消毒の匂いがした。さっきまでの歓声も、壁一枚を隔てたこもった音声に聞こえる。

これが【テレポーターション】らしいわね。

「どうじゃ？　ここならいいじゃろ？」

「あなたは、どれだけあたしの胸が揉みたいのよ。もっと大きい人なんていくらでもいるでしょ」

垂涎してまで、公言してまで、瞬間移動をしてまで、【魔法】を……使つてまで？

「勘じゃよ勘。絶対、柔いじゃろとな。あとは、良い反応をしそうじゃ」

「あたし恋人がいるって言わなかったっけ」

「そしたら、これは不倫じゃのう……むふふ。………そいつ！！」
そうしてあたしは押し倒された。特別、情緒も感じなかったから抵抗も何もしなかった。サクラは本気で揉みしだこうとしているのだらうけれど、それが嫌かと言ったら、そんな感じもしなかった。試合で疲れているせいかもしれない。

少し眠りたくて天井の一点を見た。

「脱がせてよいかの!？」

ああ。思い出した。

あの時の天井には、こんな嫌らしい笑顔はなかった。だけど、確かに、その天井は白かった。

紅茶色の髪の毛が視界をちらつくたびに、何となく懐疑心に駆られる。白塗りのキャンバスに、夕暮れ色の何かが飛沫しているようだった。でも本来あるべきは、破廉恥な紅茶色ではなくて、純粹で儂い漆黒のはず。

あたしの記憶の中にあつた【一不思議】は、そう……。

【魔法】だ。

ふと我に返って、長袖ジャージを脱がされていることに気付く。揉むだけなら脱がさなくてもいいのに、全く欲が強い。

あたしは、シャツの裾を撮んだサクラの手を、軽く握って止める。

これがあたしの最後の【一不思議^{まほう}】になるはずだ。

「どうしたんじゃ？ 自分で脱ぐのか？」

「いえ。そのままでもいいわ」

「ん……？」

反射されようがされまいが、これではつきりする。

この世界に発生した【一不思議】の正体が。

「【コンフェシオン】」

「むっ!？」

「三年生が優勝だったね。でも、惜しかったよね。まさかあんな戦

術を仕組んでるなんて、誰も思わないよ」

「そうね。それをあたしに言うのは、嫌がらせかしら？」

一瞬だけ頭をよぎったそのセリフが、理性の制止を振り切った口から漏れ出る。

いつものようにじわりじわりと蝕む感じの毒ではなかったせいか、ルートは目をぱちぱちとさせて「う、ごめん」と深謝する。

ルートとの隔たりを担っていたノアが、手をパタパタ振って必死だ。

「ち、違うよアリス！ ルートはただ、残念だったねって……」

「そ、そうよね。ごめんなさい……」

また、発言の意図を抱く前に、口から言葉が出ていってしまふ。言うべきか言うべきでないかの判断が、その後をついていく。

あたしは、素直に謝っていた。

顔が熱くなる。

言い放ってしまったことに責任が取れない。謝ってしまったのは仕方がないし、間違ってもいない。けれど、謝った後どうすればいいかわからない。

とりあえず、下校道の縁^{へり}に視線を逸らせば、今度は気遣いが飛んでくる。

「ア、アリス？ 大丈夫？」

肩透かしを食らったのか、ルートがそう尋ねてくる。

「大丈夫よね？ 大丈夫だね。だから大丈夫と言いましよう」と手っ取り早く処理を済ませると、その後「ええ。大丈夫よ」と言葉が続いた。自白するより先に処理を済ませられれば、少しは言い訳がしやすいのかもしれない。

「倒れて保健室に行ってたみたいだけど、本当に大丈夫だった？」

「ええ。無論よ」

本当は保健室に行ってから倒れたのだけど。それも自損で。

そんなことはありえないはずなのだけけど。

「アリス……何か隠してる……？」

「そんなことないわよ」

「え？ やっぱりまだどこか……」

「い、いえ……！ いえ、大丈夫よ！」

声が裏返ってしまったって、かえって怪しくなる。

別段、咎めるつもりはないけれど、事情が知りたくて横目で見てみる。どうやらノアは、下校道の縁を見ているようだった。

いつもなら、このまま様子を見ていただろう。

「ノア、どうかしたのかしら？」

「あつ、えつ、な、なんでもない！」

「あたしに隠し事はできないわよ。あたしも、隠し事はしないから何を聞かれても答える覚悟で、あたしはそう言う。」

もしかしたらそれは、今だけの話なのかもしれないんだけど、あたしがあたし自身に興味があることは確かだった。

「で、でも……。言って、いいの……？」

「いいわよ」

ノアは、ルートの方を一瞥してから、もう一度「いいの？」と確認してくれる。

あたしは頷いて、肯定の意を示す。

すると、ノアはおずおずと話し始めた。さっき思っていたことを、再び。

「アリス……何か、隠してる……？」

それはきつと、さっき知ってしまった事実のことだったりするのだろう。それはきつと、何かに勘付いているノアが知りたい事実だったりするのだろう。

あたしは首を横に振って答える。

「いいえ。隠してなんかないわ」

「本当？」

「本当よ。知りたいことがあるなら、答えるわ」

「う、うん。わかった……。じゃあ……」

世界を自分に同期した彼女が、どう出るか疑念は残るけれど、今あたしに選択肢はない。そしておそらく、時間も無い。

「アリス、【一不思議】知ってるよね……」

やっぱり、そう来たわね。

それは、以前にあなたが気付いた事実。あたしに疑いを持って、問いかけてきた言葉。場所も時間も違っけれど、抱く想いは同じに思える。

あたしは、はっきりと答える。今なら、【魔法】の力を借りて言うてしまえる。

「ええ。知ってるわ。そして、あたしも巻き込まれているのも、知ってる」

「やっぱり、そうだったんだ……」

「え？ ええ？ なに、何の話……？」

ルートが首を傾けて、こちらを覗き込んでくる。いつも通りの光景は、無視しよう。

「ノア。どこで気付いたのか、言えるわね」

「うん。で、でも、何となくだよ！ アリス、最近、ちょっと変だった、から……。あ！ 変なんじゃなくてねっ、なんだろ……。た、大変そう……。？ だった……。？、感じ……。？」

言い放って、俯いてしまうノアに、もう一度顔を上げてもらいたい。ノアの髪の毛についていた泥をさらりと払って、撫でるように言う。

「大丈夫よ。そんなことで怒ったりしないわ」

ノアは相変わらず、手に吸い付いてくるように懐く。

時間がない……。気がする。ノアには悪いけれど、いつも通りの光

景は今、必要ない。

あたしは「それで」と結論を急ぐ。

「どの辺が大変そうだったのかしら？」

「あ。うん、と……。たまに、頭が痛そうだった……。とこ……」

「頭痛、ね……」

「うん……。それでね。アリス、頭が痛くなったとき、変……。じゃなくって！……。そう、不思議なこと、言ってたの……」

「不思議な事？」

縁の無さそうな友人が、首を突っ込んでくる。

ノアは、そちらの方を一瞥して、「うん」と頷くと、またあたしの方に向き直って続けた。少し悔しそうな顔をする友人が新鮮だったけれど、それは不思議でもなんでもない。

「アリスね、サクラさんって人のこと、知ってたの」

「え？」

一瞬、【時間が止まった】かと思った。

そんなことはありえないはずなのに、その言葉は異様な現実味を帯びて、あたしの脳を混乱させた。それはもう、時間感覚を麻痺させるほどに。

「ちょっと待ちなさい。あなたこそ、どうしてサクラを知っているのよ」

「え？ だって、ノアは……。あれ？ なんてだろ……。？」

「アリスが、サクラと、同じ×××……？」

ノアから伝わってきた声の音像が、急激に乱れる。左右上下の情報がちや混ぜになって、それを情報として感じ取るための処理に、脳が追いついていない。処理しきれなかった分の情報は溢れ、痛みとしてあたしの意識を襲った。

そうだ。

このところの頭痛は、このノイズによるもの。あたしの持つ『知覚能力』が、『一不思議』と干渉して、エラーを起こしているのだらう。

あたしが体験するはずのないノアの体験した【一不思議】の中では、あたしにとる『ふつう』も『ふつうでない』ことになる。逆だって同じ。それでいて、あたしの『ふつう』がまだ、この世界に留まっているという矛盾を、解消することはできない。ただ。

それも、あともう少しで、第三者によって終焉を迎える、ような気がする。

「ア、アリスツ!？」

「ノア、保険の先生、呼んでくるっ!」

知らぬ間に視界は地面で覆われていて、どうしても立ち上がることはできなかった。ノアの『願い』が叶ったあの時ほどの重さはなかにせよ、いつものように立ち上がり、生活することがこれ以上ないくらいに億劫だった。

ルートとノアの声が遠のいていく。保健室に行ってしまったのだろうか。

目を閉じると、だんだん、周囲の状況が掴めなくなってくる。音も光も何もない空間に、放り出されたような感覚に陥る。

言うなれば、『願いの夢』に酷似している、ということか。

しかし、似ているだけで同じものではないとも言えた。そこだけかなりの自信がある。

違いを挙げるとするならば、第一に頭が痛い。第二に、黒い。そして、最後に。

「大丈夫か? 随分と草臥れておるようじゃが。……だが、やはりお前さんは面白い繋がりを持つてるようじゃな。どんなことを試しても、お主らは絶対に不思議に気付く。毎回毎回、ひやひやさせら

れるわい」

女性の声ができること。どこかで聞いたことのある、懐かしい声が聞いたことはないはずなのに、どうしてか思い出せる優しい声が。

声の主が誰かわからないけれど、頭を撫でられている感じがする。そういう声色なのかもしれないけれど、なにかしら、心地がいいわね。

「疲れたじゃろ。試合、頑張ってくれたからのう。わしは、今度こそ勝ちたかつたんじゃが……仕方あるまい。いくら自分に都合の良いルールで縛ったとて、抜け道はあるからのう」

何年ぶりかしら。頭を撫でられたのは。

下に見られている感があったから拒んでいたけれど、これほどまでに落ち着くものなのね。ノアが懐くのも納得だわ。

「次こそは、絶対優勝するのじゃ。わしはまだ諦めんど。それじゃ、お休みなのじゃ」

あれ？ ここ、道路の真ん中だったわよね。こんなところで眠りについたらニュースになるわ。自分の身も、両親の面目的にも、色々と危ない気がする。

まあ、でも。

このまま眠るのもいいかもしれないわね。

ここ最近、全然眠れていなかったから。単に新しい環境に気疲れしているからなのか、あの子があたしの部屋に越してきたからなのか、どちらにせよ睡眠不足気味なのよね。

まったく。キスなんて、毎晩するものじゃないわね。

あの子が落ち着くからってしているけれど、あたしは全然落ち着けないじゃない。

たまには、頭を撫でたり……って、それは何か変ね。

ああ。

眠くなってきた。

久しぶりに、良い夢が見れそうね。

起きた時、あたしはその夢の内容を覚えていないんでしょうけど。

【Waiting】Surrender never Surrender (後書き)

【あとがき】

道路のど真ん中で眠りについたところで、今回は終了です。
アリスはやはり鋭いですね。元々の洞察力と、ノア&ルート知覚能力の前にはもはや敵無しですね。

さて。

そろそろ真実が見えてきましたね。

これをどうやって解決に導くか、見ものです。

お楽しみに。

次回は本編に戻ります。

春、心覗かば。(前書き)

【まえがき】

サクラファンの皆さまにはむむむっ!?!なイベント面白押し今回は、球技大会の真っ最中でございます。

皆様自身の推理も加味しながら読んでいただくと、面白いかもしれません。

どうぞ本編です。

春、心覗かば。

暑くもなく涼しくもない。

そんな当然の空気の中に、風が運ぶ春という新鮮な香りだけが浮いていた。今まで生きてきた中で十五回しか感じたことはないはずなのに、それがいつも隣にあるように、僕の鼻は過去を懐かしむ。

そんな新しいフィールドの上で、僕自身も新しくなれたら。なんてことを、熱くもなく涼しくもない応援に包まれながら、思いつのだった。

その応援の影には、アリスとノアの姿もあった。

アリスはいつものポーカーフェイスで、ノアはその後ろに隠れて「が・ん・ば・れ」と口を動かしているように見えた。

僕は一つ愁いの息を吐いて、自分のチームメイトの方を見据えた。ディフェンスラインはかなり防御寄りで、カウンターには向いていない。少し大人しそうな女の子が二人と、何かお喋りをして笑っている男子三人が配置されている。その奥には、野球部らしく体格のいいキーパーが、屈伸前屈と準備体操をしていた。

ミッドのラインは、クラスの中でムードメーカーと呼ばれる男子二人と、同じく明るい性格でクラス盛り上げている女の子が一人、務めていた。こちらも何か話をして盛り上がっている。

全体的に明るいクラスなのだ、改めてわかる。三年生という大敵を前にして、こんな余裕を見せられると、少し不安にはなるけれど。すでに諦めているのでは？と。

そんな根拠のない自若の中で、一際目立っている少女がいた。

その少女は僕の隣で、悠々とセンター位置に仁王立ちしていた。腰に手を当てて、胸を張って、髪を靡かせて。まさに体全体で風を受けている感じだった。

でも、その表情はなぜか『確信』に満ちていた。

『それでは！ これより、球技大会第一回戦を開始します！』

生徒会放送係のアナウンスを皮切りに、会場からは涼しさが消える。歓声はアナウンスをもちき消す勢いでヒートアップして、ただの音の塊になっていく。その塊は、僕の中にあつた一抹の不安すら、吹き飛ばしてしまった。

彼女の『確信』も、吹き飛ばせばよかつたのに。

第一回戦で三年生とあつてしまふという幸運を、僕は彼女の涙に隠そうと、そう思っていた。

最低なことだとわかつてはいたけれど、それしかなかつた。

僕が今からサッカーをしても、誰も幸せになどなれない。

ただ一つ、僕が、敗北を悔やむ彼女の『願い』を叶えてあげられればそれでいい。僕が彼女に逃げ道を与えるのだ。

『体育館優先使用権を手に入れること』。それだけでいいのだから。彼女の『願い』は、たったそれだけのことなのだから。

「サクラさん」

「なんじゃ、るーとや」

「頑張ろうね」

「……………」

「サクラさん？」

「そうじゃの。頑張るのじゃ！」

会場のガヤが鎮まると、盛り上がりの合間を縫い合わせるようにホイッスルが鳴った。

少女は僕の方へとボールを転がしてくる。僕はパスを受けて、フ

イールドを見渡す。少女はすでに走り出していて、相手ゴール前のディフェンスの薄い位置へと、瞬く間に移動していた。相手の三年生のフォワードは様子を見ているだけで、僕の方へは近づいてこない。

こんな展開、死ぬほど練習した。汗と泥でベトベトになるくらい、失敗した。上手くなりたくて、一番になりたくて。喜んでほしくて、笑っていてほしくて。

だから、涙を流して 流させてしまった“あの時”、僕の試合は終わったのだと思っていた。二度とやりたくないと思っていた。

でも、笑ってくれるのかもしれない。

今だけは、そう思っていたかった。

彼女の『敗北への確信』という表情に懸けて。

そして、終わったはずの僕の試合は、また、始まる。

『し、試合終了ー!!』

「はあ……………はあ……………。か、勝った……………?」

「はあ……………。そのようじゃな……………」

驚愕の表情を浮かべている相手チームとは正反対の表情を、サクラは端的な言葉で表現していた。肩で息をしているという疲労感だけが、かろうじて周囲と馴染んでいる。

本当に彼女の望むものは優勝しかいなかった。試合中の行動スピード、行動範囲、そして終了後のつまらなそうな言動、そのす

べてがそれを物語っていた。

盛り上がり隠せないでいるクラスメイトたちは、見事にサクラをフィールドから浮かせていた。

「すげつ。俺ら勝っちゃったぜ?」「やばいな」「しかも、相手、優勝候補らしいぜ?」「あの二人がいれば優勝なんじゃね?」

「わたし、なんにもできなかったわー」「そんなことないよ。めっちゃパス出してたじゃん」「あの二人にさえボールを渡せば、ほぼ決まっちゃうからねー」

なんだか、ものすごく注目を浴びている気がする。

サクラには悪いと思いつつも目立たないように手を抜いていた手前、不本意であった。

ふと観客席の端の方へと視線をやると、アリスとノアが拍手をしていた。ノアは嬉しそうな表情でいたけれど、アリスは相変わらずだった。

この一瞬で、様々な表情を見た気がする。

その中で、自分は一体、どんな表情をしているのか。もし、鏡があったとして、僕は本当にそれを覗くことができたのか。

ほんの少しだけ、謎だった。

「なんと！優勝候補の三年生が、一年生に負けてしまうという急展開で球技大会は幕を開けることになりましたー！最後の球技大会だった三年生方は残念でしたー！……が、しかしー！何が起るかわからないのが球技大会であり、それはまた人生の一部でもある！奇跡だって何だって起こっちゃうんです、この世界ー！では、そんな運命のようなものを信じて、次の試合に行ってみましょーー！！」

小気味のいい語調でもってアナウンスされると、会場からはただの轟音ともとれる歓声が、また聞こえてくる。

さすがに疲れまでは吹き飛ばせないにしろ、相手方の三年生は笑

って試合を終えられたようだった。
三年生の後に続いて、僕たち一年生もフィールドを後にした。

教室。

「サクラさん、大丈夫？」

「んあ……ダイジョブじゃ」

試合後、教室に戻ってくるやいなや、サクラは倒れてしまったのだった。保健室へ搬送しようと思ったけれど、サクラが「行かんでいい！」と気を張るので、教室の片隅にタオルを敷いて、その上で横になることになった。

さっきの試合の活躍からか、サクラの看病係を名乗り出る者は多くいたが、というか、男女問わずほぼ全員が名乗り出たが、サクラきつての希望で、なぜか僕が膝枕をしなければいけないらしかった。

授業をサボってサクラを屋上へ連れ出した事例もあったせいかな、クラスメイト達は潔く了承したのだった。それはもう、断ってはいけない空気だった。

「床、固くないの？」

「固いのじゃ」

「保健室のベッドの方が良くないかな」

「ここで良いのじゃ」

さっきまでフル稼働していた太腿の上に、サクラが重さを預けてくる。おかげで熱が逃げず、異様に熱くなってくる。汗をかいているせいで、短パンも下着もかなり蒸れてくる。

いつものサクラの匂いに少しだけ土の匂いが混じっている。その

自然的な匂いをかき消すように、僕たちの汗の匂いが混ざり合って鼻を衝く。清々しい勝利の匂いとも言うべきか、不思議と嫌な匂いではなかった。

ただ、それは僕にとっての話。

サクラがどう思っているかはわからない。もしかしたら、我慢しているかもしれない。

だから僕は、今、ものすごく恥ずかしかった。

「サ、サクラさん。頭、すごく熱いよ。熱があるんじゃないかな」「それはお主の体温じゃ」

「うっ。それはそうかもだけど……」

どうやらサクラは、どうしても枕を変えたくないらしかった。

左、右と寝返りを何度か打って、目を瞑る。本格的に眠ってしまうようだ。

「こ、ここで寝るの!？」

「ダメか？」

「い、いや……ダメじゃない、けど……」

「けど、なんじゃ」

サクラは、また一つ寝返りを打って責めてくる。

その口調が当然のように気怠げだったことに、僕は少しだけ腹が立った。

「どうして僕なのかな、って」

勢いに任せた暴言を吐いてしまったと思った。クラス中の人間が僕たちの戯れを注視する中では、決して言うてはいけないことかもしれないなかった。

少しの会話が聞こえていた教室が、その言葉を境に、静寂という一つの塊へと姿を変えた。入学後間もないクラスにしては、団結力があり過ぎる気がした。

沈黙の中、僕は初めて気づいた。

僕も浮いてるのか、と。

何か訂正しなければ、フォーローしなければと頭を回転させるけれど、沈黙が作り出す確かな蔑視と距離感の拡大の方が、数倍速かった。

僕の頬を流れる汗は、サクラのそれとは意を異にする。

「特別だからじゃ」

汗がまた、サクラの汗と交わってしまう前に、沈黙は破られた。

僕は汗を拭いて、俯いた。

「特別……？」

「特別じゃ」

そこには、どこかで見たような横顔で、どこかで聞いたことがあるような言葉を話す、少女がいた。少女が目を開けると、瞳には僕が写っていた。瞳の中の僕の瞳にはまた、同じ少女が写っていて、夕焼けの中で涙を流していた。でも、その少女は僕の目の前にいるサクラとは何か違っていて、でも違わなくて、途轍もなく【不思議】だった。

瞳の奥の少女は、瞳から零れた真っ赤な涙を一つ拭って、僕に微笑む。

どうして。どうしてそんなにも、美しく微笑むことができるのか。涙を散らす瞬間が、こんなにも綺麗なのか。

僕は、同じ感想を、誰かに抱いていた気がする。

それはきつと、僕にとる『特別』ではないだろうか。僕が選ぶとるといふ、これ以上ない価値を持った、そして、一つしか選択できない、特別で特別で特別な、【不思議】のような無知。

そんないたって普通の無知を、僕は【不思議】であると思ったこととはなかった。知らないということが当たり前だと、僕は知ってい

だから。

でも、だからこそ、時が止まりそうになるほど美しいその花を見て、僕は感動するのだ。きつと、何度見たって同じことを思い浮かべるのだろう。

「ありがとう」

僕は崇めるようお礼を言ってから、太腿に乗っかっていたサクラの頭をゆつくりとタオルに下ろして、その場に立ち上がる。急に頭の位置が低くなり過ぎないように、タオルを何重にも重ねて畳んで高さを稼いだ。

それでも、少しばかり頼りなかったのか、サクラはすぐに半身を起こしてしまった。

「どこへ行くのじゃ」

「疲れたから、ちょっと屋上で休んでくるよ」

「わしも行くのじゃ」

依然として半身のまま、そう言う。

瞼が少し重そうで、汗も引いていない。目に見えて疲れている。

口ではついていくと豪語しているけれど、態度は「連れて行つて」と訴えてくる。

「ああ、いいよいいよ！ サクラさんは、無理しないでここで休んで。クラスのみんなもいるから、大丈夫だよ」

サクラの「行くのじゃ！」という勢いに、クラスメイト達が若干引いているのがわかる。不本意ながら『デキてる説』も浮上し始めた。

サクラの疲れもさることながら、僕は僕自身の意志で休憩に行くのだから、ここは遠慮させてもらいたい。

「僕なら大丈夫だから。心配しないで」

「……そうかの」

「うん。そうだよ」

「……………」
僕は、サクラにじっとりとした細い眼をされて、一つの儀式を思い出す。

「そうだ」と閃いて、サクラの前に小指を差し出してみる。

「約束するよ。逃げる時は一緒に、ね？」

ああ。恥ずかしい。

名前も顔もまだ半分くらいしか覚えてないクラスメイトの前で、こんなセリフを音吐朗々と読み上げることになるうとは。

顔が熱くてしょうがない。もしかしたら、真っ赤になっているかもしれない。

でも、サクラのキョトンとした表情を見ると、何となくだけども後悔の念はなくなっていく気がする。

これが、求められて手を差し伸べるといふことかもしれない。

「……………むふふっ」

サクラが微笑んだその刹那、小指に強烈な湿り気がやってきた。

「はむっ」

その湿潤は、ざらざらとした奇妙な肌触りと温かくも冷たくもない絶妙な温度でもって、僕の小指を喰らっていった。背筋がゾツとなって、思わず「んえ！？」と声にならない声が漏れる。

僕は何より、教室の空気を心配した。

焦りからくる勢いで見てしまったクラスメイト達の表情は、『呆然』、『驚愕』、実に二通りだった。でも、それは『誤解』だった。

そうして僕は漸く、突きつけられた現実を受け入れる。小指を突き付けたのは僕だったけれど。

「ちよつ。なにしてるの、サクラさんっ」

「んー」

サクラは、突きつけられた現状を吸い、口の中で舐め回している。僕が突きつけた現実、そうして湿気って行って、少しばかり強い粘性に絡めとられた。

「す、吸わないで……っ！」

もしこれが、彼女に取る約束の交わり方だったら、ということも考えはしたが、却下したかった。何か約束するたびにこんなことをしなければいけないのなら、恥ずかしくて約束なんてできたものではないだろうから。

若しくは、僕が逃げようとするのを吸って留めようとしていたり………なんてことも、有り得ないと思う。

そうだ。

こんなことになってしまったのは、きっと偶然だ。

偶然、そこにサクラの口があったから、僕の指は飲まれたのだ。

そういう運命的なものなのだ。

「……んん」

何かに満足したのか、サクラは僕の小指を舐めるのを止めた。

よくよく考えてみれば、僕は舐められることに対して、なんの対抗も否定もしなかった。つまり、どういうことだろう。

考えたくもない。

サクラは、自分の手で口の周りを拭いて、笑った。

「やっぱり、しよっぱいのじゃ………！」

何度やっても同じ。現実はしよっぱいものなのだ。

僕は「そうだね」と微笑み返した。

春、心覗かば。(後書き)

【あとがき】

だんだんと輪郭が見え始める四話目でした。

友達の指をしゃぶるといふ経験、なかなかあるものではありません。

一見するとただの変態ですが、「料理中に指を切ってしまったのでしゃぶってあげる」とすると、ちよつと物語に面白みが出ますね。いつかやってみたいです。

次回は続き。

春、自らを知る。(前書き)

【まえがき】

期待に応えるという重圧。

それを糧にできたら、プロフェッショナル。

本編です。

春、自らを知る。

「ただいまー……」

疲れ切った弱々しい声では、誰にも届かないだろうと思った。けれど、リズが階段を下りて玄関まで来てくれた。ドアの開閉音に気付いてくれたのだろうか。

「お、おかえりー」

「うん。ただいま」

対話後、三秒ほど僕の様相を確認したと思うと、リズはそそくさとダイニングの方へ早歩きで退散してしまった。

それからすぐに、ダイニングから母が出てきて、玄関までやってくる。

「おかえりなさい」

「ただいま」

「泥だらけねえ。お風呂湧いてるから、先に入っちゃいなさい」

「うん。そうするよ」

リズがそっけなかったのは、白い運動着がほとんど茶色に染まっていたからだろうか。汗臭いのもあるかも。

靴を脱いで家の上がると、母が何やらニヤニヤして嬉しそうにこちらを凝視していた。

「な、なにっ?」

「何でもないわよー? うふふふっ」

「そ、そう……」

腑に落ちなかったけれど、嬉しそうだから良しとしよう。

廊下に歩みを進めると今度は、廊下の突き当りのダイニング入口のドアの影から、リズがこちらを覗いていた。

「な、なにっ？」

「なんでもないよっ」

一体なんなのだろう、この監視されている感じは。何か、僕に関する変な噂でも流れているのだろうか。家の中限定で、というのが考えにくい。そもそも、噂は家の中に伝わりにくいものだ。

そういえば、アリスに頼まれていた噂について、何も手がかりを掴めていないな。わかっているのは【不思議】と呼ばれる、怪談話みたいなものが幾つかあることぐらい。それも、保健室が消えるとか、水着で登校とか、胡散臭い話ばかりだった。

信じるに堪えないけれど、僕自身『世界をやり直している』という不条理を抱えているから、どうにも否定できない。

もし、本当にそれらが起きているとして、一番得をする人間を探せばいいわけか。

いやでも、しかし……。水着って……。保健室って……。いくら何でもカオスが過ぎる。

一体、誰得ですか。

……っつて、ダメだ。

頭が休息を欲していて、全く働かない。考えるのは後にしよう。

物凄い見られている気がするけれど、汚れたままも嫌なので、潔く風呂に入ることにしたい。今日は湯船に浸かりたい気分だ。

洗面所の鏡に映った泥だらけの自分を見て、何となく後悔した。

でも、もう決めたから。これは、立ち向かうことじゃなく、避けることだって知ってるから。

僕は泥だらけのそれを脱いで、洗濯機の中に放り込んだ。

もう一度鏡を見るのは、怖くてできなかつた。

「脱いだよ」「脱いだわねえ」

洗面所と廊下を繋ぐドアから、二人が覗いていた。

「え！？ 着替えも見るの！？」

気が動転して、僕はツツコんでいた。頭が働かないのは恐ろしい。「見るよね」「見たい見たい」

「人の着替えシーンをそんなまじまじと見ないでよっ！？」

「見てないよ」「見てないわよー」

「いや、見てるよっ！？ もう、閉めるからねっ！」

そうして、洗面所のドアに鍵をした。鍵穴とかからも覗いてそうで未恐ろしい。

どうなっているのだこれは。一体、何の噂が流されているんだ。

なるほど確かにしようもない。もしかすれば、これがアリスの言う【一不思議】なのかもしれない。

僕は、落ちていた衣服を鍵穴に掛けて、浴室へと急いだ。

「準決勝出場おめでとーっ！」

ダイニングに入るなり、リズに叫ばれる。母も、その後ろで拍手をしていた。

イマイチ、ピンと来なかった僕は、「わ、わー」と適当に流して、食卓の自分の席に着く。僕の後を追うように、リズと母も定位置の席に着いた。初めから座っていた父は、いつも通り左手には夕刊が、右手にはコーヒークップが握られている。

普通じゃない、不思議な空間の中で、相も変らぬ父の佇まいは、頼もしかった。

ちやうど向かいに座っているので、何気もなく尋ねてみる。そう、いつものように。

「お父さん。リズとお母さんの様子が変なんだけど、何かあったの？」

「ルートが準決勝に勝ち進んだからじゃないか？」

「そうなんだ」

あまりにそっけないので、一瞬、口から出任せを言っているのかと思った。けれど、父はいつも通りらしかった。

安心する暇もなく、隣に座る非日常は僕に襲い掛かってくる。

「そうだよって、さっき言ったじゃん！」「そうよ。おめでたいことが起きたら、祝わなきゃでしょ？」

「そ、そうだけど……。急に、なんで……？」

なんで、こんなに豪華な食事が出てくるのだ。なんで、このタイミングなのだ。

もし仮に、この状況がアリスの言う【一不思議】なら、この僕の問いには誰も答えられないはずだった。

けれど、答えはきちんと返ってきた。犯人の名前とともに。

「さっきね。アリスお姉ちゃんから、『ルート、準決勝までいったわよ』って連絡があってね。何かサプライズしないと思って、思ったの！」

「アリスの仕業か……」

自然、ほくそ笑んでいる策士の姿が思い浮かぶ。

余計な気遣いをさせたくないと思って、「秘密にしておいて」とアリスに忠告したのが悪かったのだろう。

はあ、と小さく息を吐く僕に、母は無駄な気遣いを回してくれる。

「今日のパスタ、全部リズが作ったのよ」

「そうなんだ」

「そうだよ！」

ふと見てみれば、テーブルの上にはパスタが四つ並んでいて、それぞれ白黒赤緑と彩り豊かだった。

気持ちは嬉しいけれど、タイミングというものがある。

リズの方を向けられない僕は、それを母に訝ってみる。

「でも、まだ準決勝だよ……？」

「もう。そういう細かいことは気にしないの。前祝いだと思えばいいでしょ。それに、まだってことは、優勝も狙ってるのね？ 頼もしいわあ」

そう大言する母の前には、クラムチャウダー風のソースがかかったパスタがあった。淡いクリーム色は、少しばかり大人しくも、確かに周囲へと彩をプラスしていた。

「さすがルーだね！」

依然テンションの高いリズのところには、トマトソースのパスタがもうもうと湯気を上げて佇んでいた。その赤さもその湯気も、リズの存在感にはかなわない。

「そ、そんなことは……」

「ほら見て！ お父さんだって、コーヒークップを持つ手が小刻みに震えてるでしょ？ 喜んでるんだよ、きつと！」

リズの指さす方を見てみれば確かに。コーヒーの水面が波立つほど小刻みに震えている。心なしか、夕刊のページをめくるのも早い気がする。

唯一いつも通りだと思っていた存在が、非日常に飲み込まれた瞬間だった。

これでもかというほど緑に染められたオリーブオイル仕立てパスタが、段々と毒々しく見えてくるのも、おそらく気のせいではないだろう。

「ね？ 準決勝だもん。すごいよ！」

「そうよ。お母さんもすごい嬉しいわ」

そんな羨望と期待を寄せられて、「勝つつもりはなかった」と言えるはずもない。

だから僕は、苦手ながらに作った笑みを浮かべて「偶然だ」と言い張るしかない。

「またそんなこと言ってー！」「ルートは昔から謙遜するわよねえ」
家族の喜びが膨らむ度、僕の自問自答は肥大化していく。答えの

出ない不安からくる苦悶がまた、この不可思議な空間を犇ひしと感じさせた。『一体何の偶然なんだ』、『あれは本当に逃げていたのか』、『あの時』誓ったはずではないか』、と。

目の前にあった黒い出汁じゆを見てみると、自分の中にある闇まで洗練されていくようだった。その黒の中で感じることでできるわずかな金色こんじきの部分を探して、僕は箸を手に取る。

「これ、パスタじゃないよ……」

僕はそうぼやいて、眼前の暗黒を飲み込んだ。一瞬凍結した空気は、僕が蕎麦を嚼る仰々しい音によって、また流れ始める。

勢いよく嚼れば嚼るほど、その黒も絡みついてくる。それは、ただしよっぱいだけじゃない。何らかの風味も感じさせてくれる。そのバランスにこそ、面白さというものが存在している。心からそう思う。

「おいしい？」

「うん。美味しいよ」

「よかったわね。リス」

「よかったー！」

そうしてな無くなっていく彩いろどに、僕はごくごくありふれたものを感じた。

「ごちそうさま。ありがとう、リス。お母さんも」

「どういたしまして！」「お粗末様です」

その後僕は、暫くの間、ダイニングのソファに座っていた。何をすることもなく、ただただその空気を感じるために。

リスと母が食器を洗う音が聞こえた。父がコーヒーを嚼る音が聞こえた。天窓には大きな金色の満月が見えた。何の匂いもしなかった。普通だった。

“あの時”に間違っただけで味わった敗北の苦汁は、今日という日に、腐って甘くなっていた。

もしかしたら、今度は勝てるかもしれない。

そんな邪で甘ったれた考えは、もう捨てよう。
僕は逃げると思ったのだ。
アリスに電話しようと思った。

『なによ、こんな夜遅くに』
執事に取り次がれた電話から聞こえてきたのは、してやっつたりの
含み笑いではなく、夜分に電話してこられることに対する嫌悪から
くる不機嫌だった。

迷惑承知で電話したのだ、アリスだって同じはず。でなければ、
わざわざ取り替わったりしないだろう。

だとすれば、眠いだけなのかもしれない。

「それはごめん」

『まあ、いいわよ別に。息抜きにもなるし』

電話口から、ふう、と陰気な音が聞こえた。

何か、根を詰めて作業でもしていたのだろうか。

僕の憂慮を断ち切るように、『それで？』と脅される。何も悪い
ことはしていないはずなのに、悪いことをしているような気分にな
る。

そんな理不尽に対する不満を糧に、放言してやろう。

「アリス、さっき家うちに変な電話したでしょ」

『変な電話？ 何のことかしら』

「秘密にしてって、言ったじゃないか……」

『ああ。そのことね。忘れてたわ』

忘れていたような口調ではないし、もとよりアリスが約束を忘れ
てしまうような人ではない。このそっけなさは、故意だ。

それはつまり、「わざとでしょ！」と憤るに値する。

音が響きやすい廊下であることを考慮して、小声ながらに声を荒げた。若干しゃがれて、喉が痛かった。

『だったらなによ』

「何って……、そりゃさあ……」

こうまで開き直られると、どうしていいかわからなくなる。その上、アリスに不要な忠告をした自分が悪いようにも感じられる。と
いうかすでに、不要と思ってしまうている。

こうなると、心から「もういいや……」となる。

『そう？　話はそれだけ？』

「そうだよ……。突然夜遅くに電話したりしてごめん」

結局、謝ってしまう。アリスには、本当に敵わない。

潔く負けを認めて電話を切ろうとすると、アリスが繋ぎ止める。

『それはそうと、ルート』

「どうしたの？」

急にアリスが黙り込むせいで、風呂場からリズの鼻歌が聞こえてくる。電話が置いてある場所が洗面所のすぐ近くだから、当然だ。途中から聞いたから、何を歌っているのかはわからないけれど、ものすごく嬉しそうな声色だった。何か良いことがあったに違いない。

リズが嬉しいなら、僕だって嬉しい。

けれど、その良いことが、必ずしも僕にとる良いことだとは限らない。

アリスは達観したように言う。

『あなた、後悔してないわよね？』

「してないよ」

僕は、即座に答えた。

でも、「何の話だ」と返すことだってできたはず。そうすれば、

白を切ることができる。この話を終わらせることができる。それが、逃げると言う選択のはずだ。

それなのに。

『そう。それならなおさら変ね』

「そうだね……。僕、ものすごく変かもしれない」

ああ。変だ。

誰も幸せになれないのだから二度とやるものかと、“あの時”に誓ったはずなのに。ある一人の少女に導かれて、逃げるために戦った。それは、目の前に立ちはだかった大きな壁を避けて通ることだと思っただけから。そうすることで、苦しむのは自分一人で済むし、その少女の苦しみを理解してあげることだってできる気がしたから。それなのに、僕はどうして。

どうして、こんなに幸せなんだろう。

「ねえ、アリス」

『なにかしら』

「僕、どんな顔してた……？」

何時間か前まで僕は、紛れもなくあのフィールドにいた。

【一不思議】など、些事な諧謔に聞こえてしまうほど大きな、大きなグラウンドに。

『そうね……』

その瞬間、僕は、わけもわからず笑った。

「あはは……っ。そうだよ、ね……」

これは、泣いているとも言つのかもしれない。

春、自らを知る。(後書き)

【あとがき】

“あの時”についての逡巡、さらに拂って参ります。

こういう、同一作品でしか通用しない専用単語、私は好きです。

宛て字とか造語も好きですが、「その時間」とか「この場所」とかそういうニュアンス的なネーミングがいちばん好きだったりします。あのとかそのの指すものが人によって違うのが、面白いです。

あれこれそれぞれの、距離感とかも皆違いますしね。

次回はサブエピソード、かも？

『surreily』と！（前書き）

【まえがき】

リス編です。

抒情的で私は好きです。書くのも見るのも。

エンゼル。

【surreally】ルーと！

小鳥の囁りが聞こえる時、人々は大抵、自分のベッドにいる。一週間の続きだろうが、昨日の続きだろうが、そういうものだ。

夜通し天体観測をしたり、極地で生活したりすれば、それは例外に当たるけど。

そうでなければ、ほとんどの人は自分のベッドで、この清々しい朝の声を聞くことになる。

今日の私は、ほとんどじゃない方の人だった。

「……………」

「おい。起きてよー」

小鳥たちの声を邪魔しない程度の小声で、囁く。言葉の意味よりも、吐息で耳元を擦る意味合いが強い。

朝特有の小気味のいい鳥の声は、割に元気で、加減された私の声など、すぐに打ち消されてしまう。

けど、このまま無理やりに起こすのは、なんだか悔しい。小鳥に負けたみたいで。

もう少し、悪戯をして様子を見よう。

「寝相いいなあ。ルー」

私というイレギュラーを布団に抱えても、寝ながらにして柔軟に対応していた。潜り込んだら、自然と場所を空けてくれたし、その後も私が布団からはみ出ないように調整してくれた。起きてるのかと思えば、脈絡のない寝言を言い出すので、無意識らしかった。

いつも起きてる時間にはまだ早いから起きないのかな。

私の初の試みとしてはありがたいけど、なかなかどうして。

これでは、成功なのか失敗なのか、わからない。

「あ。そろそろ起きないとまずいかも」

私が思う成功のビジョンを見るには、少しばかり時間が足りない。でも、揺すって起こしたら、何の面白みも無い。抱き癖があるとかキス癖があるとか、そういう収穫があれば、今日のところは諦めてあげようとは思ったけれど、完璧な寝相で……って、私は何を期待してるんだろ。

まあ、いいや。

このままここに寝ていよう。眠いし。

大事なものは周囲からの評価じゃなくて、自分に蓄積されるモノなんだ。遅刻したって何したって、どうせみんな忘れちゃうんだし。

何より眠いし。

「おやすみー」

朝独特の小鳥たちの鳴き声を聞きながら、私はまた目を閉じた。

真っ黒になった視界には、何分後かの成功のビジョンが浮かび上がってきた。

こうして思わずニヤけてしまうのは、久しぶりの「おやすみ」を、久しぶりのこのベッドで、久しぶりにルーに言えたからだだった。

寝癖は私の方が悪い自信がある。むしろ自信しかない。

色々面白いことをしてやろうと思う。

こうして、また、私の今週は始まる。

今日の私の目覚ましは、隣で眠る人の絶叫だったりする。

「いめんってばー」

「ま、全くもう。本当にびっくりするからやめてよ」

朝食を仏頂面で食べるルーなんて久しぶりに見た。あと、運動着のルーも。

今日は本当に収穫が多い。添い寝をした甲斐があるというものだ。あれ。本来の目的、何だっけ。

「あらあら？ ルートが怒るなんて珍しいわね。なにがあったのかしら？」

お父さんの分のトーストを食卓へと運んできたお母さんが、こやかに問うてくる。何でもお見通しなその笑顔が、私の怖いものの筆頭だったりする。嘘です。ごめんなさい。

「なんでもなーい」と言う私の冷静に、「なな、なんでもないよ！」と、ルーの焦燥が被さってくる。でも、その顔には『なんでもなくない』と書いてあった。

母の表情を覗き込めば、自然、ため息が出る。

ふと目が合つて、額に汗が滲む。

「リズがなにかしたのね？ うふふふ。若いつていいわねえ……」
お母さんは微笑みながらそう言うと、髪を解きながらキツチンの方へ行ってしまった。洗い物をしながら、ニヤニヤしているに違いない。

私は、隣であたふたしているルーの脇腹を軽くつまんで、こつそり言う。

「ばれちゃったじゃんっ」

「えっ？ だ、だって、そんなの……リ、リズが悪いんだよっ」

同じく小声で口応えしてくる。

つまんだ部分を引つ張つて、私は負けない。

「ルー、ぶにぶに」

人間、これだけ年を重ねれば、柔らかくて当然なのは知っている。知っていてやっている。私だから許されることも知っている。良くないことだつて知っている。

でも、私はする。しなきゃいけない。ルーの言う“あの時”を、悲しいものにしてしまったのは、他でもない私なのだから。

「きつと運動不足だよ」

だから、私はルーの黒い部分掠めるような発言を重ねる。これで嫌われてしまったのなら、それはきつと、必然たる天罰なんだと思う。

いつそ、私は天罰を受けたい。言っておくけど、私はどエムではない。

天罰を受けて、すべてがチャラに、ゼロに　元通りになるのなら、私は甘んじて罰を受け入れようと思うのだ。

そういう考えもあってか、私はこのところ、意識的にルーの心に触れていた。それも、逆撫でするように。

それなのに。

「ちよっ、リズっ……く、くすぐりたい……よ」

どうして、そんな眼をするの。私の心を洗い流すような碧と翠の愚直で、純粹に受け止めてしまうの。そうして目を逸らして、私を引き込むの。

これじゃあ、黒に染まる私の覚悟が、無意味になっちゃっ。

けど、そういう潔白な瞳こそ、ルーのいいところだし、私が思う好きなところでもある。

じゃあ、私はどうして欲しいんだ、というのが結論だったりする。

迷いの果てに、私はルーの柔らかい贅肉から手を離す。銀色のスプーンを持って、温ぬるくなったコーンポタージュを一口啜る。唇越しに感じるスプーンは冷たくて、生暖かいルーのお腹が恋しくなる。こんなのは、コーンポタージュが温ぬるいせいだ。

ぬるま湯みたいな私の気持ちを温めるよう、ルーはいつも熱い。

「ま、まあ確かに、これじゃあね」

「うんうん」

「さすがに、お父さんみたいになるのは嫌だな」

「うんうん」

ルー、私、お母さん、とスタイル抜群家系のうちの中で言ったら、お父さんは確実にふくよかな部類になる。本ばっか読んでると、あ

あなる。

「ま、でも、そんなに食べないから大丈夫かな」

「えー。いつもみたいに、アリスお姉ちゃんにバカにされるよー」

「それはそうかもだけど……アリスだしなあ」

「なんだ、その『アリスのことなら何でも知ってるよ』的な言い返しは。ちよつと腹立つな。」

「ま、いいや。ルーって、服、割となんでも似合うからね」

「そ、そうかな？ ……あ」

一瞬、自分の衣服を確認したと思うと、言下に「ありがとう」と言い足して、わざとらしく笑顔になる。

運動着というキーワードから、色々と連想したんだ。すごい発想の転換……じゃなくて。少し詰め寄り過ぎたみたい。

二の句が継げないでいると、キッチンから戻ってきた母が、話題をリセットしてくれた。

「ルート、急がなくても大丈夫なの？」

「あー！」

お母さんの催促を皮切りに、ルーはご飯を食べるスピードが急上昇する。

お母さんはそれを見て薄く笑いながら、朝食の席に着く。

「やっぱりねえ。イベントがある時は大体待ち合わせしてるから、もしかやと思っただけど」

「時間は、あと……十分しかない！」

「でも、珍しいわね。ルートが何か忘れるなんて」

お母さんは微笑んだまま、私の方を見てくる。

「なんだよ。一週間経てば、皆だつて忘れ物するじゃないか。」

「……なんてことを目で反論していると、早々にルーが席を立った。」

「そ、それじゃ、行ってきます！」

「ルー、鞆は？」

「あ！ あはは、ありがとう……」

小走りを始めた瞬間に呼び止めたから、ブレーキの時の慣性がす

「ごかった。靴下を履いているせいもあって、良く滑った。そしてまた、「行ってきます」と、気を取り直す。

「ルー、お弁当は？」

「あ！ あはは、ありがとう……」

また、慣性がすごい。ルーは焦ると面白い。

私は決して、おちよくつているわけじゃない。お母さんだって笑っている。お父さんだって、またコーヒートの水面を揺らしている。顔を真っ赤にしたルーは「今度こそ」と、意気込む。

「それじゃ、行ってくるね」

私は、気は引けたが、それでも言わなければと思って、言う。

「ルー、寝癖」

「嘘っ。……あ、本当だ。じゃ、じゃあ、直してくるね……」

「じゃあ、私がかっこよくしてあげるー」

気付けば、私も食べ終わっていた。

ルーは割と食べるのが遅いから、追いついてしまうのも無理はない……はず。

そういうことにしておこう。

私も席を立って、遠慮するルーの背中を押して洗面所まで歩いていく。居間を後にする時、お母さんの「くすくすっ」という小さな笑い声が聞こえた。

日常の中に潜む、こういう軽微な変化を楽しんでいるんだろう。

特に、ルーに関しては、本当に楽しみにしていると思う。

何度繰り返しても同じことしかないルーを見ると、少しだけ不安になるから。もしかしたら、何かを隠しているんじゃないかなって。今までも、そういうことがなかったわけではないけれど、ルーは本当に変わらない。良い意味でも、そうでない意味でも。

だから、こつやっつて少しだけいつもと違うことがあると、私も嬉しくなる。それが本当に微々たる変化だとしても、私は嬉しい。

そして、ちよつと応援したくなってしまう。

文字通り、背中を押したくなってしまう。

「じゃ、ここに座ってー」

「う、うん……」

洗面所の鏡の前に椅子を置いて、そこへルーを座らせる。少し急いでいるのもあってか、ルーはどことなく落ち着かない様子。

私はその後ろに立って、髪の毛をいじり始める。手始めに、速乾性のトリートメントを寝癖の矯正にして、ぴっちりと整えてやる。私なりに、ちよつと変化を加えて。

「あ。もう直ったね」

「あ、本当だ……って、後ろ髪のところ変な風にしたでしょ!？
なんだか違和感がすごいんだけど!？」

「あ。気付いたー？ あはははっ」

私の欲する変化が、必ずしもルーの求めるものであるとは限らない。けど、その中に一つくらいは、共通の望みがあったっていいと私は思う。

私だって人並みには勤が働く。

だから、ルーが何を望んでいるのかわかる。ルー、わかりやすいから。

「はい、できた」

「ありがとう……って、また！ しかも、サイドテールっ」

「あははははっ！ かわいいー!」

私はルーの柔らかい髪を弄びながら、一つ思い、また悩む。そういう意味では、アリスお姉ちゃんから聞いてしまった事実を、私はまだ受け止め切れていないのかもしれない。

ルーの表情が焦燥のそれに変わっていくことに、昨日のアリスお姉ちゃんからの電話が鮮明に思い起こされていく。

「はい、なおったよ」

「こ、今度は大丈夫だよね……うん、大丈夫。普通だ」

今、目の前であたふたしているルーの口から、『ふつう』なんて言葉が聞けるとは思わなかった。ちよつかい出してよかったなど、

しみじみ思う。

でもやっぱり、鏡に映る姿がいつも通りになってしまっていて、なんだか少し悔しい。

「ありがとう　って、わっ！　ちよっ！」

私はルーの髪の毛をもしゃもじゃと、手荒く撫でまわす。さらさらなせいで、私の手の動きの軌跡通りに、髪型が変わる。今度は、前髪が揃い過ぎていて面白かった。

でも、ルーがすぐに戻してしまって、また面白くない。

「き、急にどうしたの……？」

「……………」

「リス……？」

鏡越しにじゃなくて、今度は直接私の方を覗き込んでくる。

そんな眼で見られても、何も答えられない。私だって、自分が何をしているのか理解できてないのだから。すべては気分なのだ。

だからこれもまた、気分だ。

「ねえルー」

「どうしたの？」

「部活、入らなくてよかったの？」

一瞬、目をパチリとさせたけれど、ルーはすぐにいつもの優しい面持ちになって、応えた。なんていうか。ものすごく頑なに感じた。語勢も、その表情も。

「いいんだ」

「いいの？」

「うん。後悔はしないよ。絶対」

「そうなんだ」

ルーは絶対と言った。絶対など存在しないこの世界で。

プラスもマイナスも無いということ。それが絶対。

繰り返し繰り返し繰り返し、何度も同じ物語を紡ぐこの世界で、変わらないことなど不可能なはずなのに。逆に、人は変化を求めて生きていくというのに。

私は聞いてみたくなる。

「ね、ねえ。もしかして、怒ってる？」

「ん？ 怒ってないよ。それより、ありがとうかな。寝癖直ったし」
「今までずっと、変わっているように見えていたけれど、やっぱり変わっていなかった。」

私がまだ小さい頃に、ルーを絶望に追いやって、それでルーは変わってしまったのだと思っていた。

けれど、やっぱり変わってなかった。

“あの時”のルーは、まだ生きている。

これなら、少しばかり安心して送り出せる。

「ルー、時間」

「あ。……あと、二分しかないっ！！ 走らないとっ！！」

また、アリスに怒られてしまうから。

いつも通りルーはそう言って、駆け足で洗面所を出ていった。

一人になった洗面所の鏡には、やはり、私一人だけが写っていた。ため息が出る程の存在感を漂わせて、椅子だけが私の前にあった。

私はそこに座って、自分の顔を覗き込んだ。

私の瞳の中には、補いきれない隙間が、ひっそりと存在していた。ルーのように綺麗な碧緑でないことに、改めて落胆する。

このまま鏡を見てもしょうがない。ナルシストだと思われるってしまう。

自分の身支度を適当に済ませ、椅子から立ち上がると、廊下の方から足音が聞こえた。どうやら、こちらに近づいてきているようだった。そして、急いでいるっぽかった。

見慣れた人物が登場して、少し身構えたのが恥ずかしい。

「あれ？ 遅刻しちゃうなの？」

「あ、うん……それは、大丈夫……」

一度外に出てから走って戻ってきたのか、心なしか息が切れてい

る。

「忘れ物？」

「う、うーん……、そんな感じかな……」

「手伝う？」

「ううん。大丈夫……」

ルーは二度三度深呼吸して、息を整える。

そして、物を探す素振りも見せず、私の方へ近づいてくる。

「な、なにに。どうしたの」

立ち退いたりしなかったから、距離は一瞬にして縮まる。

別段焦りはしない。思うことは、ただ一つ。ルーの身長伸びたな

あ、と。

「なんだか最近、リズが変わったなあと思って」

「え？ 何言ってるの？」

変わったのはそつちでしょ？ と首を傾げようとすると、頭を押さえつけられる。押さえつけられるというか、これは……撫でられる！？ 私がルーに！？ ……まあ、昔はそんなこともしてたっけ。

私は抵抗することなく、大人しくルーの話を聞いていた。

「何でもないんだ。ただ、ちょっとね……。久しぶりにこうしたくなっちゃったっただけだよ」

「ふうん。そう」

「あ。嫌だった？」

「嫌じゃないよ、別に。ちょっと、変な感じするけど」

懐かしいような。それでいて新しいような。特殊性癖の発見のよう。あ、一番最後のは無しで。

とにかく、不思議な感覚だった。ルーに触られている部分だけが変に生温かくて、そこだけ世界から浮いているようだった。この古された世界から抜け出せるような、不審な解放感さえあった。

あと、なんか悔しかった。

ふと横目で鏡を覗けば、無表情の私が出た。色々な感情が溢れて、

互いに打ち消しあったのかも。よくわからないけれど、多分、悪い表情ではないと思う。

鏡の奥の反転した時計を見て、考えて、私はまたルーに言う。

「ルー、時間」

「あ。あと……って、もう間に合わないや……」

「あーあ」

「まあ、仕方ないよ。でも、待ち合わせ時間早めにしたから、大丈夫だよ。アリスには叱られるけど、学校には遅れないはず」

「言い訳ってゆうんだよ、それ」

「あはは……」

「……………」

「はははは……」

「ねえ。いつまでやるの」

いい加減、私の頭も温まってくる。そう、生っぽく。でも。

「あつ。ごめん！」

こうして離れていくと、すぐに恋しくなってしまう。物足りない感じが、ホントにすごい。いつまでやったたら満たされるか、試したくなる。ルーが行ってしまうのが、心底寂しい。

素直に伝えたら、ルーはここにいてくれるだろうか。腹に潜めていたら、いつか気付いてくれるだろうか。

そんなことを願っていたら、ルーはまた、私に背を向け歩き出していた。

忘れ物はいいの？ そういうこじつけはちゃんと用意してある。だから、私は呼び止めた。

「ルー」

私の 私だけの呼び名に、“ルート”は応えてくれる。答えてくれる。

私は何を投げかけよう。

そんなのは決まっていた。とうの昔から、そう決めていた。

ルートを絶望に追いやった私にできること。

そんなのは、一つしかない。

「応援しにいくから！」

一瞬、目を白黒させていたけれど、それはすぐに靴下の慣性に流れて見えなくなった。

私が見た今週最後のルートの表情は、多分、試合中のそれとイコールで結ばれるのだと思う。

変化を求めて変化してきた私は、その価値が少しだけ羨ましかった。

でも、こうして共通の望みを持つことが、嬉しかった。

さあ。

終末 週末の始まりだ。

また、終わらない一週間が始まる。ルートのベッドの中から。

ルーはいつも、気付いたらびっくりにしてくれる。それが面白くて笑っていて気付いた。

あれ？ 私、変わってないかも？

【surreilyルーと！（後書き）】

【あとかぎ】

世界がこういつものだったら、楽しいと感じますか？
戦争は無くなると思いますか？

答えは簡単。

「今と同じになる」です。

雨、プール、海、水道、川、湖。
すべて水で、同じものです。
そういうことです。

春、終わりゆく。(前書き)

【まえがき】

球技大会もクライマックスの今話です。

近所の人を巻き込んでやるイベントってエネルギーギッシユ。

どうぞ。

春、終わりゆく。

午前中に執り行われた準決勝は、近隣の新聞社が駆けつける程の盛り上がりを見せた。記者たちとどちらが先か、休日ということもあって近隣住民たちもたくさん観覧に来ていた。

二、三年生たちが落ち着いているところを見るに、それは恒例の光景なのかもしれない。そんなことよりも、僕たち一年生が決勝へ進出するという事に、先輩方は驚いていたけれど。

フィールドに集められる視線が痛い。こうも数が多いと、応援というよりは一種のテロのようだ。どちらがどちらの応援をしているのか、まったくわからない。

相手方の三年生クラスの顔を見るのは怖いので、後ろを向いてみる。

ムードメーカーらしき三人衆は、依然変わらず楽しそうにおしゃべりをしている。ここまできると、何だか余裕があるように見える。その後ろのディフェンスラインは虚空を見つめ、完全に委縮してしまっている。さらに奥に構える野球部ゴールキーパーは、自分の頬をぱしつと叩いて、喝を入れ直しているようだ。

総じてみれば、この球技大会初戦からずっと変わらない光景だった。

そう考えると、この状況に特別の感情を抱いてしまっている僕は、クラスから浮いてしまっていると言っても過言ではないだろう。

懐かしい。

無意味な轟音ととれる歓声の中で、ボールを操りゴールへと運

ぶ。仲間と協力し合って、練習で培ったものすべてを吐き出す。
『立ち向かう』ということ。

懐かしい。

二、三年生でもないはずなのに、彼女は初戦キャプテン以上の落ち着きを見せる。決勝に進んだからこそその冷静なのか、それともそれが彼女にとる『ふつう』だからなのか。

だとすれば僕は、その『ふつう』についていくだけだ。

そうして『逃げて』、望むゴールへとたどり着こう。

僕は、彼女の顔を拝みに、少しだけ前へと歩く。

「落ち着いてるね、サクラさん」

「……………そうかの」

まるで『決勝進出は当然』と言っているかのような無表情に、僕は一瞬戦く。遠い目で勝利を睨みつけて、僕のことなど眼中にないようだった。

「サクラさん、大丈夫……………？」

「何がじゃ？」

「いや。さつきまでと少し様子が違うから……………」

遠くを見ていたサクラが、急に僕の方へ向き直る。

その視線は、ギャラリィから寄せられる数多のそれと比べても、劣らないほどに重く、冷たく、そして雑然として無だった。

「そうか。やはりばれとったか」

「サクラさん……………？」

ふっ、と憂慮の一息を吐いて、サクラは告げる。

「わしは知つとるんじゃ。決勝に進出できることは」

そう強く豪語できる自信は、サクラの中に確実にある気がした。そしてそれは、僕が感じ取れるほどに黒く輝いているのだと思う。鈍く、淡く、それでいて紅く。

彼女が俯くと、紅茶色の髪の毛だらしなく垂れていく。鉄が溶

けていくようにゆっくりと舞い落ち、それがとても不気味に思えた。サクラはすぐに顔を上げて、「そして」と続ける。億劫そうに話すサクラは、どこかで見た表情をしていた。

「この試合には絶対に勝てない、ということものう」
「え？」

ああ。そうだ。あれはいつだったろう。

これは、いつかの別れ際、彼女が見せた能面のような表情と、よく似ている。時が止まってしまいそうなくらいに、背景に溶け込んだ美しい表情。一枚の絵画として名を馳せそうな刹那の中にある、絶対的な比率が物悲しくてならない。

「そんなことないよ」

「お主だつてわかつておるじゃろ。この試合は負けなのじゃ。一度たりとも勝てないのじゃ」

僕は逃げるのを忘れて、その絵画かべに触れてみたくなる。

少しだけ、僕色に染めてみたくなる。

「そうだね。相手は三年生だし、優勝候補。勝ち目はないかもしれない」

こんな恥ずかしいセリフが、自分の口から飛び出すとは夢にも思わない。

でも、僕は言う。その理由は、知っている。

特別、だから。

「だから、言ったじゃないか。逃げようって」
「……………」

鳴りやまぬ歓声の中、彼女の呆然の表情は異様に幼く見えた。

周囲の圧力や期待に押しつぶされないよう、必死に足掻いて、ダメで。それでも足掻いて、またダメで。そんなことを繰り返して駄々をこねているだけ。

サクラの冷静は、我を通すことに慣れてしまつて作り上げられた、

偽りのものなのではないだろうか。

僕は、その表情の意味を推し量ることしかできない。けれど、そんなことはどうでもいい。

僕は、僕の　僕だけの持論を、喧噪が取り囲むフィールド上に述べ立てていく。

「僕は逃げる。けど、それでも、応援してくれる人はいるんだ」

リズがそうであったように。アリスだって、ノアだって、そう。

誰もが僕を否定しなかった。僕が僕としてした決断を、最後まで見届けてくれた。

だから僕は、その人たちの気持ちに答えなければいけない。

その強い想いを言葉に乗せる。

「僕は逃げるよ。全力で、必死で」

「るーと……」

何か言いたげにしていたサクラの言葉を待たずに、僕は続ける。

言い訳をつぶそうと思ったのだ。

「戦わなくなつて、勝てるんだ。それに、サクラさんが逃げたつて、

誰も何も言わないよ。それはサクラさんの決めたことだから。僕が、

誰にも文句なんか言わせない」

「……………」

「だから、サクラさん。逃げよう、僕と一緒に」

最後まで疑問だったけれど、わかることだつて確かにある。

僕たちが逃げて辿り着く勝利は、きつと壁を壊して手に入れたそれとは比べ物にならないほど見劣りするのだろう。けれど、それだつて、磨けば輝いてくれると思うのだ。

そして、磨いてくれるのはきつと、僕たちの思い出や仲間だつたりするのかもしれない。

だから。

「僕と一緒に、ゴールまで！」

後ろを振り返れば、ムードメーカーの三人が、決勝の空気に押しつぶされて小さくなっていたディフェンスラインの面々を元気づけ

ていた。野球部キーパーは相変わらずだけど、それでもクラスの中に“繋がり”が生まれていた。

サクラという一人の少女が勝利に向かって奔走した。クラスメイトは何も言わずに、彼女についていく。これを誰が負けと言えるのだろうか。いや、言えるはずはない。

それがきつと、サクラの手にする勝利を、これ以上ないくらいに輝かせてくれるのだから。

サクラは表情を変えずに笑う。

「ははは……まったく、何を言っておるんじゃ……。矛盾しておるではないか……」

そんなことは毛頭知っていた。

逃げることに立ち向かうことは相反しているのだから。

けれど、そうやって【同じことを繰り返す】のなら、それは立ち向かっているとは言えない。僕は駄々をこねるといふ言葉を使うけれど、本当にそういうものなのだと思う。言い方を変えれば、子供がわがままを言っているだけということ。

だから僕は優しく頷いて、諭す。

「そう、かもしれないね……」

でも、サクラは子供ではなかった。僕なんかよりも、ずっと大人なのだと思う。

今だけは、「じゃが……」という独特の老人口調が、わざとらしく感じられた。

「お主なら　　るーとなら、何か変えてくれるかもしれないな」

「サクラさん……！」

能面のような顔の中に、温かい何か芽生えた。僕の見たことのない表情は、新しいなどという古された言葉では、到底表しようがなかった。だから僕は、『春らしい』と言葉を濁すしかない。

それよりなにより、こうして頼られることが、僕はとてつもなく嬉しかったのだけれど。

『変化を求める』というセリフを心に反芻する。

そつだ。僕が変えていけばいい。クラスメイトの研磨で足りないのなら、僕が彼女の勝利を磨き上げよう。満足してもらえらるまで。そして僕が、満足のいくまで。

戦わずして勝つとはそういうこと。

時に笑つて、時に泣いて。長い長い迂回路を、共に歩いていこう。サクラとなら、きつと楽しいはずだ。

彼女は今こうして、笑っているのだから。

「サクラでよいぞ」

「えっ？ あ、うん……じゃ、じゃあサクラ」

早速、第一歩を踏み出す。

「なんじゃ」

「頑張ろうね」

「なんじゃ、それだけかろう……」

「え？」

「誓いのキスは無いのかのう……」

「き、ききききききっ！？ 別にっ、そんなっ、僕はサクラのことが好きってわけじゃ……！ あー！ 嫌いっつてことでもない……！ よっ！ た、ただ……っ！」

狼狽する僕を見て愉しむように、サクラは密かに笑つ。

大きな一歩は、少し怖い。

「冗談じゃよ。ぬははは！ お主はやっぱり変じゃのう……」

「も、もう！ る、類は友を呼ぶって言うからね……！」

「上手な返しじゃのう」

「ま、まあね……。それじゃ、無礼講ついでに、一つお願いしてもいい？」

サクラは胸をポンと叩いて、「よいぞ」と鼻高々だ。

まだ何を言うのかも言っていないのに。

「よかつた。じゃあ、試合が終わったら、屋上に来てくれないかな……？」

「ん？ んんん！？」

「べ、別に変な意味はあ……な、ないよ！」
いや。特上に変な意味なのだけれど。

【一不思議】の黒幕はサクラなのではないかという、荒唐無稽な僕の推理をばっちりとかます予定なのだから。

そう決めているも、サクラの期待する変な意味を腹の中で考えてしまふ自分が、これ以上ないくらいに恥ずかしかった。

こういう時こそ、逃げるべきなのだ。

「そ、そういうことだからっ！ 試合、頑張ろうね！」

ニヤけた顔でこちらを見ていたのが非常に気になるけれど、時間も迫っている。

僕は三、四歩下がって、試合開始に備えることにする。

ふと、ギョラリに目が行った。

遠く、遠く、遠く。

校門の双子桜の木陰に、リズと両親がいた。

準決勝の時、両親は見かけなかったけれど、今は確かにそこにいた。きつと、僕の最後の試合を見届けに来てくれたのだろう。

その想いに応えることは、多分、二度とできないのだろうけど。

でも、きつと大丈夫。僕はもう泣いたりしない。笑って、この最後の試合を終える。勝ったって、負けたって。

逃げた先に、僕は笑顔を見たい。

リズも、母も、父も。屋上で試合を見ているアリスとノアも。そして、この非日常の中心に立つサクラも。皆に笑っていて欲しい。

この一週間で何度繰り返していたって、制服が水着になってしまったって、魔法が存在したって、世界を一度やり直していたって、きつと関係ない。

【人間だけが笑える】という確かな一つの不思議を、僕はまた、呈するだけだ。

何度でも。

そして、試合開始のホイッスルが鳴る。

「や、やった……」

肩で息をしながらも、僕は強く感じていた。

春の訪れが、同時に春の終わりへの引導を渡すということ。

「やったね！……って、あれ？」

周囲を見渡せば、未だ、凜として優雅な花を咲かす双子桜がいた。彼女たちは、ひっそりと春の終わりを待っている。

「サクラ……？」

そして勝利の瞬間に、彼女はもう、どこかへと消えてしまっていた。跡形もなく、その香りだけを漂わせて。散る桜の如く。

「あれ？ サクラ……」

きよろきよろと周りを見渡す。

フィールド上では、僕以外のチームメイトが「わあ！」と声を張って喜んでいた。けれど、そこにサクラの姿はなかった。ともすれば、僕の近くに来てくれてもいいと思うのだけれど、それも的外れなようだった。

もしかしたら、試合前にした僕のお願いを早速実行に移してくれているのかもしれない。四方八方を取り囲む老若男女の人込みの中に入っていつてしまったのでは、もう探しようもない。

指定した場所へ向かおう。

表彰式のようなものもあるのだろうけど、この騒ぎなら一人ぐらい欠けていてもそうそうばれはしないだろう。

人込みを掻き分ける……というか、飛び込むというのが正しい気がする。そうして、人と人の間を潜水するように進んでいって、ようやくと会場の外側　校門前に出た。変な汗をかいた。

会場の外側は、思いの外しんとして置いてさらに、風通りがよくて涼しかった。

ひゅうと強く吹いた春風に、校門の双子桜が心地の良い自然音を奏でながら靡いた。

その不定のリズムの下に、妹たちはいた。

僕は、桜だけを見て、少しの間立ち尽くしていた。

「ルー、お疲れさま」

リズの澄んだ第一声は、そう聞こえた。

父と母は、その言葉の真意を助長するように、にこやかに微笑む。返す言葉を探していると、第二声が聞こえてくる。

「おめでとぅ。すぐく、かつこよかつた」

期待という熱が籠っていないその言葉に、僕の心は震えてしまった。

多分、僕がもう二度とサッカーをしないと決めたことに気付いているのだろう。今日、最後の試合を終えて引退して、その帰りなのだと勘付いているのだろう。

でも、リズは笑顔だった。“あの時”とは違う、僕の大好きなりズだ。

ああ。良かった。

心底、安堵した。

僕は、感想はこの一言に決めていた。

「楽しかったよ」

そして、僕にサッカーを与えてくれてありがとう。

僕は、心の中で両親とリズに言い添えて、その場を後にした。

屋上の重い扉を開けると、ひゅうと一層冷たい風が頬を撫でた。試合会場から離れるにつれ、目に見える風景は落ち着いた装いを取り戻してゆくようだ。

屋上庭園と銘打たれたこの場所にはおよそ数種類の樹木が植えられており、天空にほど近い高さで木陰を、同時に楽しむことができる稀有な設計になっている。

昼休み、例の三人でこの場所に集まっている身上、この場所は他の場所よりも幾分か落ち着く。

「学校に慣れるまで、昼休みを屋上で過ごすそう」ということを提案したのは、確か僕だった。一度も行ったことがなかったはずなのに、僕は屋上という優良な環境があることを知っていた。

その不思議も、今なら合点がいく。

僕は、屋上が素晴らしいということ、サクラの口から聞いたのだ。

僕がサクラを黒幕だと推測した理由はそれだけではない。小さなものまで提示すれば、たくさん出てくる。

でも、多分、僕がそれを断定するに至らせた理由は、もっと感覚的な何かなのだと思う。それはもしかしたら、『僕と少し似ている』みたいな、曖昧なシンパシーだったりするのかもしれない。アリスとノアがここで試合を観戦していたのも、おそらくはアリスの図らিদらう。

だからこそ、僕はこの場所を待ち合わせ場所を選んだのだ。

『優勝が一年生のクラスということになりましたが、代表者の方、

下剋上を果たしたことに對するコメントを一つ頂戴できませんでしょうかー!!!」

会場を華麗に支配するアナウンスが、静かな屋上にまで響いてくる。アナウンスの盛り上がりを追うように、会場の盛り上がりも最高潮に達しているようだ。

これはもう、音の塊と言うよりかは空気圧の流れと言った方が正しいかもしれない。

『本当にすごいな放送係』と心の中で半ば呆れ半ば褒めながら、しばかり熱を帯びた風を浴びて小さな樹林の間をくぐっていく。

約束のベンチに辿り着くと、そこには一つの影があった。

「あれ？ ノアさん、一人？」

「あ、ルート……。うん。ノア一人、だよ……」

その陰にアリスの姿はない。もちろん、サクラも。

桜の幼木をバツクにしたノアは、もじもじとした動作も相俟って一層小さく見えた。アリスがいないのもまた、ノアを弱々しく見せているに違いない。

自分だけ座っているのが気になったのか、ノアはぱつとベンチから立ち上がった。

「アリスは？」

相手がノアなら、サクラのことを尋ねるより先に、アリスについて聞く方がいいと思った。きっと、辿る意味は同じになると思う。

アリスもノアも、サクラを知っているはずだから。

「生徒会の準備室、だって……」

入学後間もない僕たち一年生には聞き慣れない単語が聞こえて、思わず「へっ？」と間の抜けるような空気が口から出ていく。

あまりの脈絡の無さに立ち尽くしていると、ノアが続けた。

「アリス、呼んでたの……」

漸く、馴染みの深い策士の名前が聞けて安心する。

「生徒会準備室に行けばいいのかな」

「うん。そう。ノアもついていく」

「他に何か言ってた？」

「ん……。なんにも……」

「そっか」

重要そうなところをなかなか言わないあたりがいかにもアリスらしくて、僕は内心嬉しかった。いつも通りのアリスなら、もう【不思議】のからくりを解き明かしていてもおかしくはないから。

僕は小さく笑って、歩き出す。

「それじゃ、行こうか」

目的地へ向かう歩みは、确实だと思う。

導かれるように、ノアも僕の後をついてくる。

何かを期待するでもなく、逆に何かに絶望するでもない。その中間地点のような半端な気持ちで、心を揺るがす不安と間違えないように、一度大きく息を吸った。

その中であつたのは、確かに新しくて懐かしい春の匂いだった。

屋上を出て、また校舎に入る。

生徒会準備室は向かい側の南校舎の三階にあるはずだ。

その記憶を頼りに、歩みを進める。

一体今まで何度、この結末に辿り着いたのだろう。

春、終わりゆく。(後書き)

【あとがき】

さて。

物語の終幕に向かって、歩き出した感がありますね。

ただ、ここまでの道のりを考えるとあっさり終わらないかもしれ
ませんね。

最後のわるあがきがあったり。

そういうものです。

次回は、どうなる……！

そして僕は、夏を詠む。(前書き)

【まえがき】

今章ラストになりました。

結構屈指の長さなので、お話をもう一度整理してから読んでみましょつ。

どしどし。

そして僕は、夏を詠む。

「失礼します」

中に誰がいるかはわかっていただけれど、とりあえずの礼儀を持ってその扉を開く。

スライド式のドアが開いていくにつれて、視界に非日常が広がっていく。

「ア、アリス……な、なにやってるの……？」

「あら、遅かったじゃない。見てわかるでしょ」

そこにいた策士は、まるで「そんなのもわからないの？」と卑下するかのようになり、僕に理解を求めた。理解はできるが、納得はいかなかった。

策士の右手には太めの手綱が握られている。その縄の先は、椅子に座らされた華奢な少女の胴回りをこれでもかと言つほどに何周も回つて、終いにはか細い腕を左右一緒に束縛していた。

誰が見ても、『監禁』か『拷問』の真つ最中である。

だから、卑下されるべきなのは僕ではなくて、策士らしからぬ強引な手段を用いているアリスなのだ。

「こんなのダメだよ！ アリス、すぐ解放して！」

そう言っている頃には、僕はもう少女の手枷を外そうとしていた。言つより先に、考えるより先に、行動してしまつた。

「あれ……。解けない……。アリス、頑丈に縛り過ぎだよ……。あの、大丈夫ですか……。って

ぐいぐいと食い込んでいた太い縄を外しながら、少女の顔を覗けば、僕は僕が冷静さを欠いていたことに気付かされることになる。

「サクラ!？」

だから、「どうして縛られているの?」とか「なんでこんなところに幽閉されているの?」とか、そういう言葉は出てこなかった。

僕は、そのサクラの表情を見て、少しだけ立ち退いた。

「なんじゃ、るーとも来たのか」

両手を封じられて、かつ椅子に縛られて足も封じられているにもかかわらず、サクラは笑っていた。まるで、この状況を楽しんでいるかのよう。

「の、呑気だね、サクラさん」

試合前もそうだったね、とは言えなかった。

あの余裕の意味と、今の余裕の意味を比べるのは少しばかり怖すぎるから。

「気長に待っておれば、解いてくれるんじゃない?」

「う、うん。多分……」

「いえ。悪いのだけれど、この縄は解かないわよ」

アリスはそう言っ、サクラに繋いだ縄をグイッと引つ張った。

特殊な結び方をしているのか、縄の締めりがきつくなって皮膚に食い込んでいった。

「たたっ……。ちと、痛い、のじゃ……。もう少し、優しくするのじゃ……」

「手加減してるわよ?」「優しくればいいんだ……」

「ちよつとアリス! やりすぎだよ! 放してあげて! ノアさんも、冷静にツッコまないで!」

アリスが鋭い目でこちらを一瞥してから、向き直って、またサクラを脅かした。

「あなた。どうしてこうなったかわかる?」

「さあ? わしはお主のことすら知らん。お主もわしのことを知ら

んじゃろ」

「嘘はいらないわ」

アリスがまた、縄をグイッと締め上げる。

キリキリという痛々しい音が、静寂の生徒会準備室に響いた。誰かにこの場を見られたら、完全に誤解を生むだろう。ああ、誤解ではないのか。

「一体何のことじゃ。わしが何かしたのかっ」

終始笑顔だったサクラの表情も、理不尽な痛みのもせいで少し曇り始める。

アリスは変わらぬ誇った表情で、さらに責める。

「【一不思議】って言葉、当然知ってるわよね」

「【一不思議】？ なんじゃそれ」

「この学校の一年生だけで流行ってる、しょうもない都市伝説のよなものよ。知らない方がおかしいくらいに流行ってるわ」

「知らんもんは知らんのじゃ。わしはよく出歩くからの」

「じゃ、これは知ってるかしら？」

アリスは縄を肩に絡ませて、自分の方へグイッと強引に引っ張った。力が絶妙にコントロールされていて、アリスの口元にちょうどサクラの耳が引き寄せられた。

外の表彰式も終わったのか、やけに部屋が静かだった。まるで、世界に存在しているのがこの部屋だけ。この部屋が世界そのものになったかのように。

静まり返った生徒会準備室に、アリスの囁く声が淡々と吸い込まれていった。

「ループする一週間。水着で登校。魔法のある世界。そして」

『インタビューは一年生代表者さんでしたー！ お疲れ様です！
それではみなさん、楽しかった球技大会も、そろそろ終わりが近づいてまいりましたー！』

唐突に聞き慣れた演説調子と組み合わせない聞き慣れない声はかなり近くから聞こえて、心臓が心臓に良くない動きをしているのがわかる。

どうにかして落ち着けようと深呼吸をしていると、ノアが閃く。

「そか……。隣、放送室……」

なるほど確かに。それなら、聞き慣れない声だと言つのも説明がつく。……と同時に、この現場がいつ発見されてもおかしくはないという説明もすっかりなされることになる。

僕は一層焦って、アリスを諭そうと努めた。

「ア、アリス……。そろそろ離してあげよう……?」

決して逃がしてあげるつもりはないけれど、この場面を誰かに見られてもしたら、停学処分は免れないだろう。ましてや、相手が生徒会の人間なら、強行権限で退学もあり得る。それに、一番この場にはいけないはずの人間、ノアもいる。

それを知ってか知らずか、どうやらアリスは従う気はないらしい。「はあ……。全く。あたしが何のためにこの子を捕まえたと思ってるのよ。大変だったのよ? 足は速いし、廊下は散らかすし……」って、そうじゃないわよつ。あなたねえー」

「わかってる」

また溜息をつきそうだったアリスを遮るように、僕は頷く。

わかっているのは、アリスに問われた内容だけではない。

僕がここに呼ばれた理由。それは、僕にしかできないことがあるからだ。アリスにはできないことだからこそ、僕がここにいるのだ。それが、保健室でアリスに頼まれた『【一不思議】の原因究明』なのだ。『何の変哲もない日常』という【一不思議】に巻き込まれている僕にしかできないこと。

だから僕は、サクラに問う。問うことができる。一步、サクラに近づいて。中腰で、視線を合わせて。サクラと歩調を合わせることを約束したことを、思い出しながら。

「サクラがこの事件を起こしているんだよね？」

それでも、サクラは端的に吐き捨てる。

「わしは何も知らん」

サクラは、面白いことなら何でも知っている。野球、バスケ、バレエ、居合道、文芸部だつてそうだった。サクラは、そのすべてを楽しんで、輝かしいばかりの笑顔をしていた。苦手なスポーツも体験したけれど、僕もそれが不思議と楽しくなって、いつの間にか声を出して笑っていた。最後に体験したサッカーの時だつて、同じだった。

球技大会の前日に泣いていたサクラはまだ、楽しいことを求めていた。

だとすれば、「何回やつても無駄だった」なんて事はある得ない。僕が変えて見せたのだから。

「楽しかったよ。僕は」

それは、僕の、すべてに対する答えだった。

これが否定されたら、僕にはもう手は残っていない。

それでも、僕は伝えたかった。アリスに、ノアに、サクラに、自分に。

三人の視線が僕に集中する。アリスは少し目を見開いて、ノアは少し俯きながら、サクラは能面のように美しい無表情で。

僕を取り巻く無秩序な沈黙は、隣の部屋で声を張る生徒会放送係の人の勢いまでも飲み込んでしまいそうだった。

サクラが口を開くのと、固まった表情が解れていくのは、ほぼ同時だったと思う。

「わしも楽しかったのじゃ」

「よかった……」

「全然よくないのじゃ。せっかく優勝できたと思えば、SMぶれい

に連れていかれたわけじゃからな！」

「違うって、さつきから言ってるのがわからないのかしら？」

「アリス……。言葉が、えず、だよ……」

少し顔を赤らめながら控えめにツッコむノアに、アリスは「違うっての！」と言い返す。アリスの動作につられて縄が引つ張られる。「痛いんじゃない……」

「あら、ごめんなさい、つい……。というのはさておいて」

さておいたアリスは、サクラの紐を少し緩めた。逃げられるレベルの締め具合ではないことに変わりはないけれど。

続けるアリスの語調は、心なしか、先ほどまでよりもテンションが低い。

「どうしてこんなことしたのよ」

「こんなことって、何のことじゃ？」

「はあ……。まだとぼけるつもり？」

「さっきの話じゃる？ わしは何も知らんと言っておるじゃる」

「いいわ。それなら、試してあげる」

アリスは、僕の隣にいたノアに近づくと、手を引いてサクラの前へと連れて行った。

されるがままに目を回すノアは、その華奢な体躯も相俟って、小さくて可愛らしい人形のようにだった。サクラの目の前に立たされて、キョロキョロと挙動不審である。

「あなた。この子、知ってるわよね？」

「知らん。のあと言ったか。さつきお主が連れてきた時に初めて見たぞ」

「それはおかしいわね」

「な、なにがじゃ？」

また締め上げられると思ったのか、サクラの声にも少し警戒が混じる。

アリスはわざとらしく笑って、責めの語調で不敵に脅す。

「ふふふっ。全く、おかしいわ。あなたは、知っていなければなら

ないのよ。この子のことを」

「どういう意味じゃ」

「ものすごく簡単なことよ。あなたの有意志無意志関係なく、この子があなたに会っているっていう、至極簡単なね」

「知らんと言っておるじゃろっ」

「だとしても、あたしがどっちを信じると思っかしら？」

言い終わったアリスは、一度「ふふんっ」と鼻を鳴らして、余裕の表情をしてみせる。

まだ何か隠していそうで、未恐ろしい。そう思わせるような黒い笑みを浮かべながら、アリスはサクラの髪の毛をくるくると指に巻いたり、結ってみたり、弄ぶように遊び始めた。

予想だにしない行為に呆気にとられたのか、サクラにあつたさっきまでの余裕は、少なからず減退したのがわかる。蹂躪というか服従というか、サクラの赤らんだ顔を見るに、どちらともいえない気もするけど、ニュアンスとしてはそのような感じだろう。

「く、口裏合わせてるだけじゃろ!？」

「残念ながら、それはないわね。あたしとは別クラスだし、休み時間忙しくて、会ってる暇もないわ」

「しし、知らんもんは知らんのじゃ……。や、やめんかつ……。くすくすったいっ」

「あら、そう。じゃ、この子にも確認してみましようか？」

アリスは淡々とした口調でそう言うと、ノエルと呼ばれた少女の方へと近づいていく。

僕の目がおかしくなければ、この世界が正しければ、その少女は紛れもなくノアのはず。ましてや、アリスが間違えるはずはないのに。

アリスは、背後からノエルの両肩に優しく触れて、「ほら」と押す。

「え、あ、うん……。サクラ、本当に覚えてないの……?」

ノエルは心底悲しそうな表情で、サクラに言い迫る。きっと、忘

れていることが本当に悲しいのだろう。

その純粋な悲しみは、本当にサクラの心に傷をつけるのだろうか。サクラはぱちりと目に力を入れ、ノエルを凝視する。

アリスのため息が聞こえるまで、十数秒ほどそうしていただろうか。

「はあ。もういいわよ。行きましょ、ノエル」

「う、うん……」

そうしてアリスは、ノエルを連れて僕の横を通り過ぎていった。

その時のアリスの表情は、次に何かが起こることを自然と推測させる、企み顔だった。

「ま、待つんじゃない！」

アリスが出口のスライドドアに手をかけるかかけないかくらいのタイミングで、サクラが叫んだ。縄で縛られているからその場から動くことはできないけれど、相当勢いよく叫んだせい、少しだけ椅子がこちらの方へずれ動いていた。

サクラは肩で息をしながら、もう一度口ずさんだ。

「待つ、のじゃ……」

僕の位置からはアリスの表情は見えないけれど、おそらくは笑っているだろう。それはもう、誇りに満ち満ちた、満面のしたり顔でサクラの自制心を弄ぶかのように、アリスの目の前のスライドドアが開く。ノエルはちらりとこちらを一瞥したけれど、アリスは聞き入っていないらしかった。

そして、そのまま生徒会準備室を出て行ってしまった。ご丁寧にドアまで閉めて。

「い、行ってしまった……！」

サクラの焦燥が、生徒会準備室に木霊する。書類の山に吸収されて、空しくも、直ちに響かなくなっただけ。

さて。

僕はサクラの方へ向き直って、改めて考える。

アリスは、僕をここへ残して立ち去った。僕を必要としてここに呼んだ。サクラに、ノアをノエルだと錯覚させて、記憶に揺さぶりをかけた。

そうか。

もしかしたらこれは、アリスの言うように簡単なことなのかもしれない。

僕は、ここにいていい？

【一不思議】の蔓延るこの学園で、おそらく唯一、『何もない日常』という【一不思議】に巻き込まれている僕だからこそ、僕はここに呼ばれたのではないだろうか。

ここにいて、【一不思議】という非日常を 『ふつうでない』ところを、観測しようと。そういうことなのではないだろうか。

ならば、僕のこととは一つ。

サクラを見ているだけ。

そうすればきっと、ボロがでる。ボロが出れば、必ず修正が入る。ループする一週間や水着で登校する光景が、夢や噂として昇華されたように。

だから僕は、楽しいことを求める人が必ず持っている、『運の尽き』という運命の間隙から、サクラを覗いてやろう。そうして見えた本当のサクラが、僕が 僕たちが今一番会いたいサクラだ。

「……………」

誰も来ないであろう部屋で、クラスメイトの女の子と二人きり。

相手はとびきり可愛らしくて、好奇心旺盛で明朗快活。彼女をどう隠そうとも、彼女の才能がそれを許してはくれないだろう。

どんな問いかけにも元気に応じてくれて、こちらまで元気になってくるようだった。その際限のない原動力は一体どこから来るのだろう、とかなり疑問だ。

落ち着きがないかと思えば、休み時間に木の上で眠っていたり。授業に出てみれば、綺麗な紙飛行機を折っていたり。音楽の授業では、鍵盤ハーモニカという名前の珍しい楽器を持ち込んでみたり。とても面白くて、一言で表せない存在だ。

「……………」

サクラがきよきよと部屋の中を見渡しているおかげで、僕と目が合うことはない。しっかりと観察している感じがする。

けれど、手持ち無沙汰ではあった。

禁止されているわけではないと、僕はサクラに一步步み寄った。

「なんじゃ。助けてくれるのか？」

「うん。でも、ごめん。もう少しだけ我慢できる？」

「焦らしか。それなら仕方あるまい」

「あはは……………」

苦笑いしたあと、僕はサクラの隣に腰かけた。椅子が無かったので、普通に床に座る。サクラが縛られている椅子は他のところから持ってきたのだろうか。

サクラは僕が隣に座る様を見届けると、また、部屋の中の観察を再開した。

「抜け出す方法でも探してるの？」

「そんなところじゃ」

「サクラ」

「なんじゃ」

「なんだか焦ってるみたいだけど、大丈夫？」

「大丈夫なはずあるか！ 手足を封じられて、誰も来るところに閉じ込められとるんじゃぞ、全く！ わしは先生に言ったりはせんが、このままここに居るのは退屈なんじゃ！」

嚴重に縛られた手足の先をバタバタしながら、威嚇する子犬のよ

うに喰る。

今手を出したら、噛みつかれそうだ。

「お、落ちていてサクラ！」

「ううー。全く解けん。適当に結びよってあの娘っ。“えすえむぶれい”の“え”の字も分つとらんない！」

「はは……」

えすえむぶれいのすべてがわかっていて、わざと乱雑に結んだ気がしてならないのは僕だけか。

そういう光景が容易にイメージできてしまうから怖い。

「ほれ、るーと！ 早う解かんか！」

「ごめん。それはできないんだ。もう少しだけ我慢して」

「もう少しして……一体いつまでじゃ！ のう、誰か来たらどうするんじゃ？ ただではすまんと思うぞ、わしは」

この状況を逆手に取った脅しをかけてくる。

でも、目は大きく見開かれていて、耳も赤い。焦りは隠せていない。

「それなら、“えすえむぶれい”をしてるって言うよ」

「なっ！？ なんじゃとっ！？ お主はやられる側じゃる！ 性格的に！ って、違う！ そんな話はしとらん！」

アリスの施した拘束が効果を發揮しているのか、必死にセルフツッコミをするサクラの息が、徐々に荒く、点々と細切れになってくる。

一人愉快にしていたサクラは、深呼吸して改めて口を開いた。

「そうか。この世界のお主は、ちよつと意地悪なんじゃな。やはり、勝利には代償がつきものなのかもしれないのう」

実際、そうかもしれない。

僕の掲げた『逃避による勝利』という理想の先にあったものは、確かな『断片的達成感』だったのだから。

その瞬間、勝ってしまったという結果だけが釈然と心に残存して、非常に胸糞が悪かった。逃げては辿り着けない結末だと知っていた

からこそ、情動だと思う。

でも同時に、クラスメイトや周囲の人間が、笑顔になっていた。それだけで、『やっていてよかった』と思えた。それは、僕が“あの時”、涙とともにフィールドに置いてきた感情だった。

最後のPKを決めた時は、本当に泣きそうだった。

だから僕は、「そうかもね」と代償を肯定した。

「サクラ。最後、泣いてたよね」

「な、泣いとらんつ。砂埃が目に入ったのじゃ！」

「はははっ。じゃ、それがサクラの代償だね」

泣いてもいいんだ。

この球技大会を通して、本当にそう思えた。

逃げたって立ち向かったって、その先にある目的地へと辿り着ければ、人は笑顔になれる。

結果論だと言われるかもしれない。それでもいいと、僕は思う。

大切な人が死んだことをやり直した『願い』を、正当化しているだけだと言われてもいい。

それでも僕は、皆が幸せな方が良い。僕を僕として見てくれる、周りの人たちが、笑ってくれているだけで。

「急に怒鳴ったり急に笑ったり、なんなんじゃ一体……。ほんに、変な世……あ」

「変、か」

それは、僕の知るサクラが決して口にしなかった言葉。そして、部屋の外で聞き耳でも立てているであろうアリスたちも、きつと耳にしたことはないはず。

『何も起こらない』はずのこの世界で、非日常を観測できるはずもない。

ただし、例外はある。

そう、真犯人だ。『ふつうでない』という事象を『ふつうでない』と認識できる人間こそ、この一連の騒動の犯人なのだ。

さあ。

現行犯のとする行動と云えば、二通りしかない。

「気付かれてしまつては仕方があるまい。優勝したのはもったいないんじやが、優勝する可能性が世界に存在することが分かつただけで十分な収穫じや」

一つは、目撃者への奇襲。所謂、口封じ。

でも、体操着は半袖半ズボンで、仕込み武器を忍ばすことができるといふほど複雑な作りをしていない。ポケットも横に二つ付いているけれど、この状況を打開できるようなアイテムを入れたりはできないサイズだと思う。

僕は身構えて、もう一通りの対処に努める。

「【解除】じやー!!」

サクラがそう叫んだ瞬間、聞いたことのない響きも一緒に聞こえた。何かの単語や言葉だと言い表すには少しばかり世俗離れた混沌とした発音だった。

けれど、縄はサクラの指示通りに、しなつと解けてしまった。

床に落ちた縄は、さっきまでの厳格堅牢な様相から打つて変わつて、だらしなくうねっていた。サクラがそれと対称的に元気になつたせいで、縄が活力を吸い上げられたように見えなくもない。

吸うものもなさそうなものから、何かを吸収できるかと言えば、そういうわけではない。ましてや、縄を解いてしまつほどの力が漲ってきたりもしない。

それはつまり、そういう力を隠し持っているということ。

僕はサクラの想う『面白い』を信じて、問うてみる。

「サクラ。今の、何……？」

「気にするでない」

よっこらせと年寄り臭く立ち上がったサクラは、アリスに遊ばれて乱れた髪の毛を元に戻すと、手首をくるくると回して、何かに備えているようだった。

「のう、るーと」

「何かな」

「もし、おぬしの考えが正しかったら、わしの手にした勝利は本物じゃろうか？」

サクラはどこか物悲しい表情でそう言った。変わらず手首の運動しているけれど、なんとなく、手持無沙汰だからしているような気もする。

心の隙間を隠すために僕から目を逸らしてまで、サクラは疑問をぶつけてきたのだ。

答える以外の選択は、できない。

「サクラがそれを勝利だと思えば、それは勝利だよ。だって、サクラは楽しかったでしょ？ 優勝できて、嬉しかったでしょ？」

サクラは素直に頷いていた。

安心して続く言葉を紡げる。

「僕も、嬉しかったよ。楽しかったよ」

「そうかの……。それはよかった、のじゃ……。じゃが……」

そう呟くと、サクラは俯いてしまった。

どんな表情をしているのか気になってくる。僕について何か考えているのか、あるいはこの世界のことについて考えているのか。表情を見れば、何かわかる気がしたからだ。

隠し武器は持っていないだろうと信じて、一步一步近づいてみる。丁度顔を覗き込める距離感になった、その瞬間だった。

「じゃが、少し気になることもあるのじゃ」

サクラの姿が一瞬にして消え、声が背後から聞こえた。そんなは

ずはないと目を擦ってみても、そこにサクラの影はない。
「この世界を疑り深く探るようにゆっくり、ゆっくりと後ろを振り返る。」

「え？」

空きっぱなしのスライドドアの敷居の上に、その姿はあった。

僕の認識できる時間の流れを超えて、一瞬でそこへ移動したのである。

物体の移動には、その重量と速度に応じたエネルギーが必要なはずだ。でも今、光や熱は感じなかった。あるべくしてそこにあるように　まるで最初からそこにいたかのように、サクラはそこに仁王立ちしていた。おかげで表情は臨めたけれど。

今の僕にとっては、瞬間移動の存在よりも、そっちの方が確実に優先的に意識された。

「どこに行くの？」

「さっきのノエルとやらのところじゃ」

「あれは、ノアさんだよ」

「やはりそうか。じゃが、さっきの物憂げな表情は確かに本物じゃった。あやつは、本当にノエルとしてわしのことを見ておった」

「それってどういうこと？」

「要は、のあが自分の潜在意識れべるから、自分自身をのえるだと確信しておる、ということじゃ」

難しいことを言っているようではあるが、整理するととても簡単な話。ニュアンスで理解できると思ったのが、サクラは補足説明しなかった。

僕は、サクラの考えと答え合わせをするために、改めて口に出す。
「それってつまり、『ノアがノアじゃない』ってこと……だよね…

…?」

「ほう！ さすがーとじゃ。そういうことじゃ。自分が考えていることは、自分以外にはわかるはずがない、ということじゃな！」

「じゃあ、さっきのノアは一体誰なんだろう」

「考え得るのは、わしが作り出した並行世界ののあじゃろうか。もしくは……」

「そういうこと、さらっと言っちゃうんだね……」

「ついさっき、目の前で瞬間移動をされたら、信じざるを得ないけれど。」

その魔法のような力の原動力 もとい、因果がどこにあるのかは、後でアリスと協力してじっくり聞き出すとして、今はサクラの動向に留意しなくてはならない。

そんなことを考えている間に、サクラは僕に手を振って何やら言っていた。

「そいじゃ。わしは、あの二人を探す。また後でな」

そうしてまた、目の前から消えようと つ！？

消え方が、さっきと明らかに違った。

さっきは、音も無く光も無く、本当に瞬くよりも速く消えていたのに、今は視界の右下へとフェードアウトしていくのがわかった。何かにぶつかった音もきつちりと聞こえた。

スピードはものすごかったけれど、瞬間的かと言われたらそれは少し違う気がする。

準備室を飛び出して、駆け足で追いかけると、そこにはサクラの上に覆いかぶさるようになっているアリスの姿があった。

アリスはそのまま首を絞めるように胸倉をつかむと、妖しく尋ねた。

「へえ。あなた、おかしいこと、するのね」

「な、なんのことじゃ」

「誤魔化さなくてもいいわよ。全部見てたから」

「扉は締まっておったんじゃ。そんなはずはあるまい……!」

アリスはぐいぐいと襟を引っ張って、サクラの感情の高ぶりを削いでいく。次第に表情も苦いものになって、見ているこっちまで苦しくなってくる。

それに耐えかねたのか、アリスの影に隠れていたノエルが、一歩前に出てきた。アリスの袖口を撮んで小声で訴えた。

「ア、アリスう……。もう、止めてよう……」

「これぐらいが丁度いいのよ。じゃないと、また逃げられるわ。確か、あなたの【テレポーション】は接触しているもの全てを移動させるのよね？」

ノエルの制止に対するアリスの答えは、あまりにも非現実的過ぎていた。けれど、アリスが口から出まかせを言っているようにも見えない。もとよりそんな性格はしていなかったはずだし、何より、アリスの憤怒の表情を久しぶりに見た気がする。もしかしたら、初めてかもしれない。

気道を狭められてか、凄まれてか、サクラは涙ぐんだ声で苦言を呈した。

「い、痛いんじゃない……」

「ア、アリス、お願い……。サクラ、悪い人じゃないの、ノア、知ってるから……」

「……………」

ノアに懇願されると、アリスは少し不満そうな顔をしてから、「……つたく」と毒を吐いてロックを解いた。憤怒のベクトルが悪い所へ昇華されなければいいのだけれど。

持ち上げられていた半身分、サクラは落下して、その衝撃で背中を打っていた。少しの間、けほけほと息苦しい咳をしてから、ふうと二度ため息をついてとりあえず落ち着いたようだった。相も変わらず、アリスはまたがったままだったけれど。

これは、“えすえむぶれい”と言い訳するにはかなり苦しい。

サクラの荒い呼吸が落ち着くのを待つように、暫くの間沈黙が続いた。

「結構痛かったのじゃ……」

「あらそう。加減はしていたのだけれど」

「お主、えすの才能があるのう」

「聞こえなかつたことにしてあげるわ」

アリスは絶対敵に回さないようにしよう。心の底から、そう思った瞬間だった。

不敵な笑みのプレッシャーに押しつぶされて もとい、腹部に乗っかられて、少し苦しそうに、サクラがまた尋ねる。

「のう、のあよ」

「な、なに？」

「やっぱり。お主はのあか」

「あ、うん。そうだよ」

ノアは忌憚なく、さらりと告白してしまった。

ノエルという呼称について、何らかの作戦だと思っていた僕は内心ひやつとした。

しかし、恐る恐るアリスの顔を覗き込んでみれば、そこにあったのは僕が危惧するような形相ではなく、いつも通りの作られた笑みだったのであった。その笑みが意味するものは、僕だって知っている。

僕は再びサクラの方へ向き直って、踏まれている友達と、それを踏んでいる友達と、それを見ている友達の、不思議な話の展開を追う。

「さつき言つてたことは、本当かの？」

「え？ ノア、なんか言つた？」

「とぼけるのはやめるのじゃ。こんがらがる」

「誰のせいでそうなってると思ってるのよ」

アリスの手が、がサクラのほっぺを両側から挟み込む。柔らかく歪んだ顔は、白さも相俟つて、どこそのパン生地みたいで、食べたらなんとなく美味しそうだった。

喋りづらそうにサクラが返す。

「しよれば、もうみちよめるわいつ」

「あら。存外早いのね。でもそれだと、色々と聞くことがあるのだけれど、いいのかしら？」

「しゅきにせえ！」

凄んでそっぽを向こうとするも、頬を抑えられて動けないようだった。加えて、話し方がおかしくなっているせいで、イマイチ迫力に欠ける。

何かに目覚めたのか、頬を撮むアリスの表情がものすごく楽しそうに見える。

「じゃあ聞くわ。あなたのその力、一体なんなのよ」

「あれは、そうじゃな……。魔法かのう……」

「魔法？ 残念ながら、この世界に魔法は存在しないのよ」

友達が友達の上に乗って、しかも非現実的が過ぎるおかしな話をしている。

今、この現場に部外者がいたらきつと、知らない世界に一人取り残されたような感覚に陥るのだろう。

「じゃて、あれは魔法以外には何とも言い表しようがないのじゃ」

「そう。まあ、いいわ。それなら、聞かせてもらえるかしら。あなたの言う魔法の原動力」

アリスの言う原動力は、魔法を使うために必要なエネルギーのことではなく、いかにして使えるようになったのかだろう。

現実思考のアリスがそれを問いただすのは甚だ不思議ではあるけれど、今はそんなことよりも、サクラという人物について知りたいもつと、何の食べ物が好きかとか、どこに住んでいるのかとか、家族はどんな人なのかとか。

だから、僕は大人しく質疑応答の順番を待つことにする。

「原動力か。それは、わしも聞こうと思っておったところじゃ」

「あら。あなたに聞くことなんてあったのね」

「お主にじゃないわい」

サクラの視線の先には、注目を浴びて委縮するノアの姿があった。

「え？ え？ ノア、なの……？」

「そうじゃ。ちょい、見つらいから、こっちへ来んか」
「う、うん……」

ノアはどこかきこちなく、サクラの方へ歩いていく。踏まれている人に呼ばれることはなかなかあることではない。きこちないのは当然だろうか。

「ありすで塞がってよく見えん。もう少し寄るのじゃ」

「あ、うん……」

「もうちょいじゃ」

「こ、こっ……？」

サクラの指示通り、徐々に距離は詰められていく。ついには、ノアがサクラの髪の毛を踏むギリギリまで、接近することになった。

そして、踏まれそうになったサクラはニヤニヤしながら一言二言添えるのであった。

「のあよ」

「な、なに？ も、もう寄れないよ」

「可愛いの履いとるのう」

「ん？ え？」

「ピンクピンクのフリフリじゃ」

「きゃっ」という純粹で素直な叫びが、僕たちの左右に伸びる静かな廊下に、ひっそりと木霊した。その音が反響して耳に返ってくる頃には、確かな羞恥がその表情に顕著に表れていた。

けれど、その当たり前の光景に、僕は驚いていた。

その瞬間、飛び退いたのはノアだけではなく、アリスもだったから。

地面に寝そべっていたサクラが、束縛から解放されてゆっくりと立ち上がる。そして、肩をくるくると回す体操をしながら、飛び退

いたアリスの方へと歩み寄っていく。

近づいてきたサクラを、鋭ききつと睨みつけるアリスの顔と耳は、今まで見たことがないくらい、赤かった。

その反応はまるで、『ノアの反応を鏡に映したかのよう』だった。

「そうかそうか。なるほどのう」

「な、なによつ。この、変態っ」

アリスは真つ赤になった部分をすっかり覆い隠すように、両側から頬を手で挟み込んでいた。その指の隙間あたりを舐めるように見つめて、サクラは嫌らしく笑う。

「わしも聞きたいのう。お主が今、飛び退いた原動力」

「そ、そんなの、あなたが急に動くからでしょっ」

「わしの上に乗っておった奴が何を言うか。わしは動いとらんはずじゃ。それに、女同士じゃぞ。なにも、驚くことなんてあるまい」

「だ、だからそれは、あなたがおかしな力を使うからで」

過去を顧みても、こんなにも流暢に言い訳を重ねるアリスは見たことがない。中身のない空虚な御託を並べて、身振り手振りまで添えている。

そんなことに呆気にと取られていると、次の展開を処理しきれない。

「じゃ、じゃさ……。ノア言うから、サクラも……。っていうのは……、だめかな……」

「ノ、ノア、あなた……！」

「だ、大丈夫。ルール違反はしてないし、サクラ、悪い人じゃないもん。それに、サクラなら何か知ってるかも……。だし……」

頭をフル回転させていると、ルールという耳慣れない単語が飛び出し、また回転が狂わされる。

手がかりの掴めない不条理なことが多すぎて、頭がこんがらがってくる。もつとゆっくり喋って欲しいけど、そもいかないうつで

「わかったわよ……。ノアが良いなら、それでいいわ」

何かに観念したのか、アリスは小さく深呼吸をして、もう一度ノアの方を見た。

ノアはアリスと目を合わせて、一度頷いた。そんな二人の間に割り込むように、サクラが横槍を入れる。

「よいのかのう。仮にお主が本当のことを喋っても、わしは本当のことを喋らないかもしれんぞ」

「大丈夫。サクラ、そんな人じゃないって、知ってるから。それに、ノア、嘘つけないって、知ってるよね……？」

「う、ぐ……」

「じゃ、言っね……」

綺麗に反論されて、サクラは二の句が継げずに焦っていた。焦っているのは、サクラだけの話ではなかった。

これほどまでに不思議な事が僕の身近で起きている、という事実を受け止めるので精一杯だった。そうして一つ一つ処理していけば、また新しい不思議が現れて、際限なく僕を悩ませるのだ。

この一週間で最大の不思議は、ノアの口から飛び出した。

「ノアの全部は、アリスに伝わってるの」

漠然とし過ぎていて、逆に理解がしやすかった。今現在、この廊下に流れる空気が、不可思議に満ちているせいなのだろうか。処理に追われていた脳の負荷も、合点がいったようで、一斉に軽くなる感じがした。

ノアは補足するように続けた。

「ちょっと前にね、ノア、夢を見たの。アリスと喧嘩した夜だよ……あ、喧嘩じゃなかったんだけどねっ」

とある単語に反応して、ノアの話は宙を舞い始める。

そう感じるのは僕だけだろうか。

今度は身振り手振りも交えながら、徐々に話の核心へと迫っていく。その表情は、明るくも暗くもなかったけれど、どこか割り切っ

たよくな、透き通った清々しさがあった。

「夢の中で言われたの。『私の願いを叶えて』って……。ノア、思ったの。これは、おとぎ話と同じだって。そして、『ノアの夢が叶うんだ』って。だから、すぐに願ったの……。ノアの誕生日、忘れて欲しくない。また、ノアの部屋に来てほしい。一緒に遊んで、ずっと傍にいて、もう離れたくない」

『アリスにノアのすべてを知って欲しい』。

「あ、ありがと……。嬉しかったわ」

離し切った後、どうしていいかわからなくなったのか、ノアは泣き出してしまった。それを慰めようと、アリスが頭を撫でてあげていた。学校という公共の場で、また、おかしな噂が流れないように努めながら、微かに。

聞いてしまった者は、この話を受けての答えを出さなければならぬ。当然、僕も。ノアの『願い』の内容を聞いて大きなため息をついてから、ずっと虚空を見つめているサクラも。

目の焦点が合うまで、十数秒あっただろうか。

「ふう……。そうか、のあはそんな『願い』を叶えたんじゃない」

「ノ、ノア、アリスのこと、好きだから……」

決して望む意味でなくとも。

そんな物言いの落ち着いた表情で、ノアはそう語った。

視線を散らすアリスの耳が、少しだけ赤らんでいるような気がした。いつの間にか暮れていた日のせいとも言え切れないと、僕は確かに思う。

涼んだ表情そのまま、ノアが続けて問う。

「サクラ。やつぱり、サクラのその力も、そうなの……？」

「そうじゃ。わしも同じ。『願いの夢』の力で手に入れたものじゃ」

淀みの無い、忌憚も無い、そんな口調で、サクラは言った。

僕は、完全に思考停止した。

決して、ノアの言葉では信じられなかったのではない。非現実を具現化したような存在であるサクラが、その言葉を口にしたからである。

僕の中にあつた、非現実 『夢』と現実との境界線が、一気に掠れて見えなくなっていくのがわかる。確実に、『夢』は夢でなくなっていく。

それに乗じて感じたのは、恐怖でも不安でもなく、果ての驚愕でもない。

無だつた。

僕は無知を装つて、必死にその無を隠そうと努めた。

「ノア、自分だけかと思つてた……。ちよつと、安心……。した、かも……。？」

「ぬはつ。そうじゃな。わしは仲間じゃったんじゃな。さつきまで踏まれておつたがのう」

「うるっさいわねっ」

「そ、それで……。サクラ、何を願つたの？」

「わしか……。わしは、そうじゃな……。『魔法が使いたい』かのう……」

「適当ね」「忘れちゃつたの？」

「わ、忘れとらんわい」

目の前に存在していた非現実が、どんどん現実へと変貌していく。それは、アリスの言葉のせいであったり、ノアの言葉のせいであったり、サクラの言葉のせいであったりする。

僕が見ていた景色は、大きくは変わらなかつたけれど、その中身は大きく変わったのだと思う。断面を見ることは人間にはできないけれど、触れていれば何となくわかる気がする。温度とか、感触とかそういう感覚的なもので。

こうして三人が話しているけれど、もしかしたら、三人は僕の知

っている三人ではないかもしれない。それが、今、唐突に、一つの解答に向かって収束させられたという事。

この世界はサクラの作り出した偽物だと言うこと。

不思議の抜けきったこの世界で、ただ一つ残ること。

サクラの望む通りに、勝利を掴んだということ。

僕は、思案の外、絶望していた。

アリスに調査を依頼されて少し思考を巡らせてから、この世界の行く末は消滅なのかもしれないと、僕は心のどこかで推測していたからだ。核心めいたものも感じていた。

それでも、僕は真実を探した。

逃げ惑い、立ち向かい、辿り着いた。

願いを求められて、それに応えて、そして満たされた。

僕は、願われれば、人も殺してしまうかもしれない。

一抹の不安は、急に開いた扉のせいで吹き飛んで行った。

それでも、心の奥底にしっかりと根付いたそれは、拭いきれなかったけれど。

「あー！！ あなたは！！ ル、ル、ル、ルーティ……？ あ、そう、ルートさんだ！！ 今球技大会のMVPのルートさんじゃないですかー！！ どこ行ってたんですか全くー！！ ……はっ！？ まさか、『名乗るほどの者じゃないぜ……』的なアレですか！？ やだ、カッコいいっ！！ どうしようワタシっ。じゃ、せっかくな

んで、ここでMVPの表彰状を渡しまっすー！！ 特別に、放送室に入れてあげますから、どうぞ入ってくださいー！！ うっはあすごい！ サイン貰っていいですか！？」

一週間後。あるいは、一週間前。

「これっ、押すでない」

「お、押してない、けど……ごめんなさいっ！」

「この人だかりじゃ、仕方ないわね。ノア、いるかしら？」

「い、いるよー……」

今日は、入学式後のクラス分けの発表日だった。

流石の人気国立校だけあって、一学年の規模でさえ凄まじい。校門前の掲示板に張り出された一枚の紙を拝もうと、何百人という学生が轟いて校門を塞いでいる。

上の学年の人たちが驚いたりしないところをみるに、毎年恒例の光景なのかもしれない。

これが毎年行われていると考えると、正直、人の波に抗うことに疑問を覚えてくる。そこまで急いでいるわけでもないのだ。

でも、何となく早く見たい。そう思う人がたくさんいると、こうなるのだろう。

掲示板のもとへたどり着く頃には、元気が無くなっていた。

「ふう……。疲れた……」

「そうね。あたしも疲れたわ。この後また催し物があると思うと、本当に憂鬱ね」

「ノア、酔ったかも……うっえ」

「ははは……。それじゃ、ささつと見て、教室に行こう」
張り紙に顔を寄せると、小さな文字がびっしりと並んで、配属ク
ラスについての詳細を示していた。

自分の名字の頭文字をあてにして、視線を流していく。

自分の名前をの所在を確認した後は、自然と、二人の名前も確認
したくなる。そういう余計なことを考える人がたくさんいると、ま
た、こうなる。

「あ。僕、ノアさんと一緒だ」

「え、ほんとっ？ ノア、アリスと同じだよ？」

「何よその芋づる式。まあ、一緒なら色々と安心ね。一人を除いて」

「ア、アリスが僕を見ているのは気のせいだよ……！！？」

「あら。気のせいじゃないわよ。別に、あなたを仲間外れにしよう
って訳じゃないわ。隣の張り紙、見てみたらどうかしら？」

「ま、まさか……！ 視線を逸らしている間に、人込みの中に消え
るつもり!？」

「ち、違うよー……。ルート、生徒会副会長に任命されてるんだよ
……」

ノアの言うことを信用して、ちらりと一瞬、そちらと思しき方へ
顔を向けて、すぐ戻る。

よくは見えなかったけれど、何やら、自分のフルネームがでかで
かと書かれているようだった。

「えっ？ あれー……。おかしいなー……」

向き直ってもまだアリスたちがいたので、今度こそ信用して拝ん
でみる。

『Loot Queueer 以上の生徒は、一学年代表として生
徒会副会長に任命する。学校長』

何らかの手違いも起きていないことを証明するかのように、校内
放送が校門前に響き渡る。「何事だ」と、周囲からガヤの賑わいが

消える。

『生徒会長兼放送部長、ルリよりご連絡いたします。次期生徒会副会長のルーティ・キュー・ヴェールさんは、大至急生徒会室まで来てください。……え？ これルーティじゃない？ ルート？ うわあ。なんかそんな気はしてた！ し、失礼いたしました、訂正します。新一年生のルートさん、生徒会室まで来てください。生徒会長ルリがお待ちしております』

放送終了の合図が空しく鳴って、また、ガヤが戻ってくる。けれど、そのガヤの内容はさっきまでの期待や不安とは違って、「お気の毒に……ルートさん」「可哀想……」というお悔やみの声だった。終始、目の前のにやけていたアリスも、お悔やみの言葉をかけてくれれば、僕は少しくらい救われたのかもしれなかったのに。

「……ですって。ふふっ。これは、傑作ね」

「が、頑張つて。ルートならできるよ、生徒会副会長……」

「ふふふ……。そうね。頑張つて。あたしたちは先に教室に行つてるわ。お先に、副会長」

きつと、この先三カ月はあのあだ名で呼ばれるのだろうと、僕は勝手に覚悟して、生徒会室へと駆ける。

人込みを掻き分けて、昇降口前までやってくる。さっきよりも人は断然少ないけれど、ミドル時代と比べれば、人口密度は大幅に増加していると思う。

履き替えた靴を下駄箱に入れようとした、その時だった。

「痛^たっ」

「あ！ じ、ごめんなさい！」

「大丈夫じゃ」

「よかった……ん？ じゃ？」

「お主、るーとか」

そこには、聞き慣れた語尾と、見慣れた紅茶色のセミショートが存在した。いつとも変わらぬ明るさで、それでいて愁いを帯びた矛盾性を含んだ不思議な面持ちで、そこにいたのだ。

僕は一瞬戸惑いながらも、しっかりと一段上がる。

「そうだよ。僕の名前はルート。初めまして」

「わしはサクラ。初めましてなのじゃ」

「サクラ、消してくれなかったんだね。ルリさんの記憶」

「そうじゃ。そっちの方が面白そうじゃと思ってるのう。にしても、いきなり呼び捨てか。嬉しいぞ」

「あ。ごめん。でも、いきなりはサクラもでしょ」

「なんじゃ？ 副会長は嫌じゃったか？」

そう言っつて、紅茶色の少女は笑う。

僕は、大きく首を横に振る。そうしてブレた景色の中に、いつの日か僕が繰り広げた逃避行が走馬灯のように流れた。瞬きをすれば、それらはすべて慌ただしく駆け回る生徒へと変貌していった。

「そんなことないよ。少し、楽しそうかもってる。僕でも何か役に立てるんじゃないかって、勝手に期待してるよ」

「お主らしいのう」

「はははっ！ ありがとう。……あ、僕、呼ばれてるから、そろそろ行かないと」

「ぬははっ！ 全く。都合がいいのう」

「お互いさま」なのだと、僕は目で言った。

自分の都合で世界を捻じ曲げて、そうして【一不思議】という快樂の中に逃げたサクラ。生徒会の副会長という立場を手に入れて、一週間後に控えた球技大会から【生徒会】という口実を得た僕。本当に似ているのだと思う。

だからこそ、こうして一度だけの世界を共に体験することができているわけだけれど。運命という言葉の意味を、少しだけ見直そうと思えたわけだけれど。

いつもと少しだけ違う空気の中で、ただ一つ変わらない桜の匂いを感じながら、僕は息を吸う。真新しさの中にある不安だけを切り取って、僕たちはそれを『非日常』だとみなす。それが新しい環境という概念を生み出す。

そう。これでいい。

サクラも同じ思いを抱いているだろうか。もし違うのなら、僕が何度でも教えよう。

始まりとは、こんなにも楽しいものなのだと。新しいとは、こんなにも美しいものなのだと。緊張とは、こんなにもおもしろいものなのだと。終わりとは、こんなにも愛おしいものなのだと。

『願いの夢』が現実のものとなって、ほんの少しだけ変わった日常を思いながら、僕は歩みを進める。前へ前へ、健やかに、にこやかに。

そして、僕は言う。

右手を振りながら。

「それじゃ、またね。サクラ」

そして僕は、夏を詠む。(後書き)

【あとがき】

ということ、今章終了となります。

新キャラ「サクラ」の登場から、レギュラーメンバー入りまでの波乱万丈な物語でした。

私はもともとパラレルワールドとかそういう話が好きだったので、ちよつと入れてみました。多分、皆好きだと思っけれど。ただ、今回は完成度重視というよりは、サクラの感情と登場という意味合いが強かったので、ストーリーは重くなり過ぎないようにしました。

さて、今回でサクラが仲間に加わり、なんだか最後にはルートに一悶着ありそうな感じでした。

吉と出るか凶と出るか。

吉を吉のまま過ごせるか、凶を吉に変えられるか。

私もわかりませんが、楽しみです。

もう少し、見守っていきたいと思います。
では次回。

【decide】僕を演じる。私が演じる。（前書き）

【まえがき】

始まりました、新章です。

今回はアカデミー生活初の「文化祭」あたりからのお話となります。
前回加わった仲間サクラを筆頭に楽しい時間が長く続きそうです。

では、冒頭部を先行公開です！

【decide】僕を演じる。私が演じる。

「ふふふっ！ かわいいね。やっぱりドレスも似合うよ」
「も、もう。やめてよ……」

白霧が立ち込める舞台の裏で、仰々しくも華やかな衣装に身を包んだ二人の少女が、他愛もない話をしていた。暗がりには映えるスパンコールが、役を待つ周囲の者の貧相な様相を際立たせているとも知らず。

それでも端役の者達は、誰一人として不満を述べようとはしなかった。やはり納得し、理解し、協力しているからなのだろう。

二人は、すぐそこに控えた出番を、二段三段と高くなっている袖で待つ。

少女のうち一人が、沈黙を埋めるように小声で言う。

「別にしてもいいよ」

ステージの状況を逐次確認していたもう一人の少女は、その言葉の意味を瞬時に理解することはできなかった。首を傾げ、訝る。

「なにを？」

端的な答えは、少女の微笑みとともに彼女の心を貫いた。

「キス」

「っ！？」

思わず声になりそうな心の声を、これでもかというブレーキを盛大にかけて喉に留める。あまりに勢いが強かったせいで、若干噎せてしまった。

劇にノイズが入ることが危惧されたが、ちょうど魔女が咳払いをするシーンだったので、事なきを得る。

事なきを得るかどうかわかるのは、これからだろうか。

「ちよ、ちよっと!?! 変な事言わないでよ……っ!?!」

「あははははっ。ごめんごめん」

「全く……」

「でも、本当にしてもいいよ。そっちの方がリアルだし?」

「こらっ!」

「ごめんごめん。……あははっ!」

そうして落着する間隙に彼女が口にした「私からしちゃうかも」という言葉は、令嬢の高笑いと観客のどよめきに埋もれて消えた。

その令嬢が役目を終えて、舞台裏に戻ってくる。

慣れない高笑いをしたせいで、喉をやられたらしかった。水を探そうと裏口から出て行ってしまった。声がしわがれていたのと、衣装を着たままだったというのも相俟って、おおよそカルト研究会の一員だった。

続けて、メイドも戻ってくる。

こちらは、普段出さない大声を出したせいで疲弊した様子だった。メイドはメイドらしく、令嬢の行き先を聞いて、舞台裏から出て行った。

その様子を見ていた二人の少女は、顔を見合わせて笑う。

「おかしいね!」

「うん。そうだね」

笑顔の理由は同じだった。

「全然演技じゃない!!」

そして二人はまた、堪えつつも笑った。ノイズにならないように声を殺すと、肩が震えた。お腹に力を入れて、互いが互いに凭れかけた。頼り頼られ、支え合うかのように。互いに足りないものを

補いあうかのように。

二人の笑顔は、太陽の如く舞台裏を明るく照らす。舞台裏が舞台裏でなくなってしまうほどに。

そんな二人に、スポットが当たる刻ときが近づいてきた。

二人が登場する時、二人は離れ離れた。それでも、物語が進むにつれて、近づいていく。そうなる結末を知っていても、知っていないくても、二人は二人を演じられるだろう。そう思わせるような演技を、彼女は　彼女らはしてきた。

不変の正しさなど知る由もない身上、彼女たちの選択は正しかったとは言えない。

それでも、二人は笑っていられた。

何かが巡って今があるという必然こそが、きっと、幸せの正体なのだから。

絶望を知ってこそ、希望はあるというもの。あるいは、涙を流したものだけが笑顔になれると言うこと。だから人は、生まれてくる時に泣く。

その後だってそう。

生まれ、育ち、泣く。それは、泣いた分だけ笑顔になれるよう。

今の二人の笑顔はきつと、過去の涙の裏返し。

「それじゃ行こう。お姫様！」

【decide】僕を演じる。私が演じる。（後書き）

【あとがき】

まだ「？」な内容でしたね。

私自身の中でも、今章は最も感情移入をした部分だと思います。百合度もかなり高めです（年齢制限も結構きわどい）。まだまだ先入観が抜け切れてない方や、偏見を捨て去れていない方は特に、すべてが覆される三章になるんだと思います。

冒頭部は本編にも深くかかわってくるので、熟考してお待ちくださいませ。

会長のいる、八月。（前書き）

【まえがき】

今章は、とある理由で一章完結になっています（最も重要なので、この章だけ読めば大きなテーマはつかめると思います）。なので、キャラ紹介だったり過去の出来事だったり、少しだけ省かれずに出てきます。ここまで通して読んでくださっている皆さんには退屈かもしれません、再確認だと思って読んでみてください。

何か発見があるかも……？

では、本編をどうぞ。

会長のいる、八月。

春と言うには暑く、夏と言うには涼しい。

入学式を終え、暫くして学校に慣れてくる頃にはそんな時期がやってくる。過ごしやすいかと言えばまたそれも違って、過ごしづらいかと言ったらまたそれも違う、本当に微妙な時期だ。

そんな微妙さを反映したかのような距離感がクラスの中に生まれる。……というのが、入学後の定番展開だと思っていた。変な先入観を持たないエレメンタリーは例外としても、実際、ミドル時代は定番展開そのものを辿っていた。

それが今回は、違ったのだ。

解放的な校風もそうだし、新しい交友関係が始まったと言うものもある。理由はたくさんあるけれど、その中で、一際大きな要因が二つあった。

その一つは、こうして教室のドアを開けることでわかる。

「お。るーとじゃ」「あ。ルートだ」「あら。遅かったわね」

ドアを開けてすぐ右手に、三人はいた。理由もなく集まっているわけではなく、そこが三人の席だから自然そうなるのだ。席替えを提案したのがサクラだったから、なんとなく仕組まれている気はするけれど。

「今度は何に呼ばれたんじゃ」

「飲み物の蓋が開かなかったんだって」

「あやつは本当に生徒会長なのか?」

半分笑いながら本気で首を傾げているどこか古風な少女はサクラ。アカデミーに入学してから会った、とても面白い人だ。本人も面白いことが好きで、僕の所属する生徒会に遊びに来てはよくハプニン

グを起こすイベントメーカーだ。

正式に部活に所属しているわけではないらしく、毎日気分部活を変えている。ユニフォームが無いために制服でプレーするようで、放課後になるといつもだいたい汚れている。

意外にも、その着こなしはしつかりとされていて。ピンと張った背筋も相俟って、礼儀正しさすら感じられる。地毛を主張する紅茶色の髪の毛さえ、黒か茶に染めてしまえば、あと足りないものは落ちて着きくらしいものだろう。

「職権乱用が過ぎるわね。今月何回目よ。最初に放送入った時は、ルートがなにしかしたかすごい楽しみだったのに」

「僕は何もしないよっ！」

「さあ、どうかしら？ 毎朝、妹に髪の毛手入れしてもらったりネクタイ締めてもらったりしているんだもの。今に何をしてくるか」

したり顔と訳知り顔を足したような顔で話すのは、親友アリスだ。エレメンタリー時代から同じ学校で、家も近いせいで付き合いは深く長い。それよりなにより、僕の妹のリズがアリスを気に入っているおかげで、家に招くことも多かった。

僕自身、アリスのことが嫌いだというわけではない。けれど、どうもアリスの持つ情報網には頭が上がらなく、どうしても上下関係を自覚してしまう。もちろん僕が下で。

まあでも、それを含めてこそアリスなのだ、ミドル時代の事件を通して気付けたから、親友と言いつけるわけ。

親友の言葉には、毒がある。よく手入れされた綺麗なブロンドヘアと絶対的に整った顔立ち、それからカーリングで鍛え上げられたボディラインも、好い加減目の毒だ。

考えてもみれば、毒は薬にもなり得る。僕は、そう考えることにしていた。

「だから何もしないってば……」

「ふふっ」

「あ。今、ノアさん笑ったよね！？ 笑われたよね、僕！？」

「だって、ルート、面白いんだもん……！」

『いじられてる』という修飾語を丁寧に省略して小さく笑うのは、ミドル時代に知り合った友達のノアだ。

アリスとは小さい頃からの仲で、猛烈な好意を抱いている。その好意は、一つのすれ違いを糧にして見事に実を結び、二人は事実上の『恋人』になった。現在は、そのアリスの家で住み込みのメイドをやっている。

授業中の挙手を躊躇したり、順番も後ろの方にいったりと、ミドル時代の影はまだ少し残っているけれど、アカデミーに入学してからの方が断然明るくなったと僕は思う。

やはり、眼鏡を外したのが大きいか。

アリスのアドバイスで眼鏡を外したらしいが、なるほど、もともと瞳が大きくてパッチリと円らであるためか、一気に印象が変わった。それに、この国ではかなり珍しい黒髪ということもあって、校内ではすでにかなり注目を集めているらしい。生徒会にも『黒髪可憐の新生』の噂が、よく舞い込んでくる。

もう少し自分を表現することに貪欲だったら、十代向け女性誌の表紙を飾っても全くおかしくはないと思う。

花に例えるなら、控えめでも芯のある紫陽花アジサイと言ったところだろうか。ノアが口を開けば、自然とそちらを見てしまう。

「ルート、やられるの、好きだよ。ふふふっ」

「や、やられるってなにをっ!？」

そう。アジサイにも毒があった。それも天然の毒だから怖い。

「そんなの、決まっているじゃない」

「うん。決まってる」

二人はアイコンタクトを取って、薄く微笑んでくる。特別、何かを言葉にするわけではないけれど、それがまた痛い。

助長か、はたまた妄想か。うずうずしていたサクラが、どうにかして話に入ろうと、ストレートに言い放つ。

「どえむじゃな。どえむ」

「ち、違っつて!」

渾身の否定をするも、三人の笑みは止まらない。結局、僕がどエムであるということでは話は落ち着き、いつも通り暗黙の了解に収束する。

最後には、意味のない僕の溜息と三人の笑顔で終わる。これが僕の日常だと言えば間違いはない。

でも、明らかに一つだけ、日常からかけ離れていることがあった。それが、僕たちが推し量るはずだった僕たちの微妙な距離を、確実に狂わせていた。

「またいじられてるよ」「でも、楽しそう」「まさか、本当にマゾなのでは!？」

「それはないない」「球技大会の時、ホントかつこよかったしー」「わたし思い切って告白したけどふられちゃったー」「当たり前でしょー!」

諧謔に浸る僕たちを見て、教室が多少ざわつく。クラスメイト達の話は、大抵、僕の関係者のことが中心にある。万能無敵少女アリス、隠れ美少女ノア、トラブルメーカーサクラ……と、メンツがメンツだけに。

その中でも最近、先月に行われた球技大会をテーマに取り上げた話が多い気がする。

何度も繰り返された、あの球技大会を。

体感してそれを知っている僕たちは、その話題を耳にするたびに、背中や額に変な汗をかくのだった。

急に黙り込んで逆には怪しまれるので、間を繋ぐ意味で会話の口火を切る。話には意味が無いといけないから、大変ホットな話題を取り入れることにした。

「ねえサクラさん」

「ん。なんじゃ」

「最近つくづく思うんだけどさ。記憶って、本当に消えてるの？ たまに、話を通じない時があるんだけど……」

「いい感じに消しておいたのじゃ」

「全く。おざなりね」

「うるさいわい。意外と面倒なんじゃぞ」

サクラは小声で毒づきながら、渋い顔をする。その表情を見るに、サクラの施術が手抜きであることは否めない。

そこを詰るように、アリスが言う。

「そんなの自業自得じゃない。球技大会で優勝したいってあなたの勝手にループとかさせるからよ」

「これっ。あまり大きな声で言うでない！ 面倒じゃろ……って、まさか……！ おまわざとかつ！」

そっぽを向いて「どうだか」と居丈高になるアリスを見て、僕は小さく笑う。こちらもいつも通りだ。

こつもいつも通りだと、現実離れた話の内容ばかりが浮いて聞こえる。

サクラという一人の少女の『願い』が引き起こした、アカデミー新入生【一不思議】の事件は記憶に新しい。

水着で登校したり、保健室が消えたり、同じ一週間を繰り返したり、魔法が使えたり、エトセトラ……。そんな不思議な現象が起きたという噂が、入学式直後に新入生の間でだけ流れたのだ。何も起きないという現象に巻き込まれた僕は、事件の黒幕がいると言うアリスの命のもと原因究明に奔走し、ついに一つの真実に辿り着いたのだ。

それが、サクラだった。

僕はノア、アリスと協力してサクラを捕らえ、動機を吐かせようとした。そうしてサクラが口にしたのは、あまりにも衝撃的で現実的なものだった。

『願いの夢』を見た。

僕が十五歳の誕生日の夜に見たあの夢を、サクラもまた見ていたのだ。どんな理不尽も非合理も、すべて叶えてしまおうあの夢を。

一不思議事件は、それだけでは終わらなかった。

暴露劇の場にいた、ノアもまた『願いの夢』を見ていたのだ。それは、『アリスに自分を知って欲しい』という『願い』を叶えているという告白とともに、サクラの洞察によって証明された。

つまり。

僕の中でだけ渦巻いていた、かつての『違和感』はもう、僕だけのものではなくなったのだ。それも僕たち四人だけの話ではないかもしれない。

【魔法】という具体的な事象が、今この世界に存在してしまっている以上、僕たち以外にも同じ夢を見ている人がいないと言いきれなくなってしまうからだ。もしかすれば、大切な人を目の前で失った一度目の僕のように『世界をやり直したい』と願った人もいるかもしれない。

面白いもの好きのサクラでさえそれを隠すのだから、世の中のたいていの人はそれを露わにしたりはしないはずだ。けれど、そういう力を持っている人が、少なからず存在する。

そう思うようになって、最近、とても不安だった。

僕はその気持ちを抑え込むために、不安要素が判明しているだけマシ。対処の余地がある と勝手に虚勢を張っていた。

「はあ……」

「うあ？ どうしたんじゃ。でっかい溜息じゃのう。もしかして、溜まっとるのか？ のう、るーと？ 溜まっとるのかのう？ わしでよければ手を貸すぞ！」

「大丈夫。ちよっと考え事してただけだから」

煮ても煎じても砕いても、全然小さくならない不安が、不意に僕

の口から漏れ出た。サクラは過剰なスキンシップも交えて冗談で応じてくれる。戯れているだけに見えるけれど、彼女は彼女なりに気を遣ってくれているのだと思う。どうしようもない僕のために。

などと、悲観的な思考を巡らせていると、僕の親友はそれをなぞるように傷を抉ってくる。

「どうしようもないあなたのために、みんな心配しているみたいよ。あたし以外」

「あはは……。ありがとうアリス」

アリスの気遣いは時々痛いけれど、それがまた嬉しくもある。

「べ、別に、礼を言われるようなことはしてないわよっ」と狼狽するアリスの右手側から、ひよっこりと勇気が顔を出す。

「ルート。何を悩んでたの……？ よ、よかつたら、ノアが……」

「ありがとうノアさん。全然大したことじゃないよ」

「そう、なの……？」

「そうだよ」

「大したことだったら校庭十周ね」

「面白そうじゃな！ わしも校庭十周したいのじゃ！」

「あんたは特別三十周でいいわよ」

「あはは……」

左に右に頭を振る。僕の視界は忙しく右往左生して、途中で諦めたようにちようど真ん中で停止する。おかげさまで、視界中央には黒板の上に提げられた丸い時計が位置していた。時計の針は、ちようど授業開始の時刻を知らせようとしていた。

「あっ。もう少しで授業始まるよ。席に着かないと」

「お。そうじゃな。言うて、わしはお主の隣じゃがな」

「あたしも、後ろだし」

「ノアはアリスの隣」

そうして、日常の一連の流れのようにチャイムが鳴って、それぞれが自分の席に着いた。

僕の席は廊下側の一番後ろから一つ前で、隣にはサクラ、後ろに

アリス、その隣にはノアが座っている。

まるで誰かが意図してそうしたかのような席順だけれど、僕は文句を言うつもりはない。

一時限目の担当教諭の授業開始の合図が入る直前のことだった。隣の席の黒幕筆頭に、「のう、るーと。それで、お主は一体何を悩んでおったんじゃない？」と尋ねられたので、こう答えた。

「返してとは言わないけれど、これはこれで大変だなんて」

そんな戯言は、クラス委員の挨拶に埋もれて消えた。

でも、僕の日常は決して奪われたのではない。
変わったのだ。

大人になるとはこういうことかもしれないなど、少しだけ難しくなった授業内容を脳に刻みながら、黄昏てみた。

思いを馳せるのは、非日常。放課後の生徒会のことだけ。

放課後。

『 以上で、放送部通信を終わります！ 続きましては、生徒会通信のお時間です！ 』

僕は今、放送器具が所狭しと並べられた窮屈な放送室に、閉じ込められている。生徒会長でもあり、放送部長でもある女生徒、ルリに。

入学式の日、ルリ会長に『副会長』に任命されたところから、僕たちの関係は始まった。と言えば聞こえはいいが、実のところ強制

以外の何物でもなかった。サクラが面白半分で、会長の球技大会の記憶を消さずに残したせいだった。

僕の日常を大きく変えたもう一つの要因が、彼女だった。正確には、彼女から発せられる環境か。

端から帰宅部を希望していた僕からすれば、正反対に位置する『生徒会』。正直、初めは面倒だと思っていた。反面、何もせずに時を過ごすことに得も言われぬ抵抗があった。

そこに舞い込んできたのが、突然の副会長任命だったわけだ。

特定の部活に入りたいわけでもない僕には、特に断る理由も無い。そんな浅い気持ちの奥底には、『これで自分も変わるかもしれない』という頑なな信念があったのだと思う。

結論から言えば、そんな信念は無かった方がよかった、なのだが。

『 以上で、生徒会通信を終わります！ 怪我に注意して部活動に励みましょー！！ もちろん、帰宅部もな！ 』

朗々とアドリブを繰り出すと、会長はいつも額の汗を拭う。そして、「ふう」と一息ついてから中継機器をストップさせる。そうして、原稿を見る必要が無くなると、屈託のない鋭い眼光が僕を照らすのだった。

「ねえ、ルートくん」

「く、君？」

「ねえ、ルートくん」

「ど、どうしたんですか？」

「ワタシ、可愛い？」

「え」

会長はわざとらしく首を傾げて、困った表情を作る。付随して垂れた薄茶の艶髪を辿れば、そこには色白な額が主張していた。地続きの肌は白くきめ細かく、鋭角のスクエア眼鏡からみる二重の瞳は均整がとれていて美しかった。和とも洋ともとれぬ中性的な雰囲気

と、一本結びでおさげという母親のような貫禄が相俟って、感想に困る。

いつもは逸らしてしまう視線も、その落ち着いた容姿のおかげかそのままでいれた。だから、美しいというよりかは可愛いという褒め言葉が相応しいのかもしれない。でも、リズのような新鮮味が無いウェットな雰囲気には、可愛いと言つ言葉も相応しくない気がする。

逡巡していると、会長は逆側に頭を傾けて、再び問う。

「ワタシ、可愛い？」

ここはいつも通り、会長の言葉を借りることにする。

「か、可愛い……と、思います」

「どの辺が？」

「え、えーと……。肌も綺麗だし、おさげもよく似合ってます」

「……………」

「か、会長？」

「さて、生徒会の仕事をやりましょうか」

会長とは　ルリとは、こういう人物だった。所謂『少し変わった人』なのだが、明朗快活な性格とずば抜けた行動力によって、とても人望は厚い。放課後の放送を欠かさず続けているということが地方紙で紹介されたりもしたらしく、相当顔も利く。

何というか、彼女のまわりには人がたくさん集まる。ハプニングに自分から突っ込んでいくサクラの、ちょうど対極にあるような感じか。

生徒会に、もっと厳格で誠実なものを思い描いていた僕は、何とも表現しがたい複雑な気持ちを抱かざるを得なかった。さらに真面目すぎる信念を抱いていたりすれば、尚のこと。

「そうですね。生徒会室に戻りましょう」

「あ。戻る前に、ちょっと待って、ルートくん」

席を立つと同時にくらしいに呼び止められて、中腰になる。

この状態をキープするのはつらかったので、とりあえず再び座る

ことにする。

「すまんね。せっかく放送室にいることだし、放送の使い方を教えるように思ってる」

「僕、放送部じゃないですよ？」

「生徒会でも放送を使うことがあるからね」

「まさか、生徒会通信ですか……！？」

「そんな露骨に嫌そうにしないでくれよー。まあ、それは大丈夫。あれはワタシにしかできないことだから」

会長はそう言って、誇らしげに胸を張った。

盛つてないのに盛られているような言葉だと、僕は思った。少なくとも、敬意は芽生えたのだけれど。

会長にしかできないことを、会長は見つけたのだ。僕も、それを期待してここにいる。

少し、安心する。

「じゃあ、練習しようか」

「はい！」

「そしたら、そうだな……。どこから教えようか……。うーん……。面倒くさっ！ もういいや！ 実践あるのみだよ！ ルートくん、今呼びたい人とかいる？」

「ええ！？ 今、ですか！？ そんな急に言われても」

「別に今じゃなくてもいいよ。明日の放課後とか、昼休みとか。あんまり面倒じゃない時間帯にしなね」

「うーん……。それじゃ……」

よくよく考えてみれば、放送というのは自分の知らない人は呼ぶことができない。不特定多数ということなら可能だけれど、それは会長の想う『面倒』に当てはまるに違いない。

そう考えると、放送で誰かを呼べるようになるということが、そのまま自分の見聞を広げていくことに繋がっているのだと言えるかもしれない。『放送でたくさんの人を呼べるようになる』というのは今後の意気込みとしては十分ではないだろうか。

「決めました」

「お。そうかそうか。じゃあ、お手本見せるから、覚えてね。簡単だから大丈夫だよ。ルートくん、頭良いもんね」

「い、いえ、そんなことは」

「謙遜するねー。ま、いいや。それじゃやるぞー！　まずは、このボタンを押しますー！」

このボタン、そのボタン、あのボタンと、三つ四つボタンの説明があつて、「大丈夫？」と確認される。ボタンには会長が押した順番通りに番号が振つてあつたので、それを辿れば別段難しいことはないようだ。

「最後に、この赤いボタンを押せば、そこから放送開始だからね」

「わかりました」

「うんうん。さすがルートくん。そうそう、さつき順番に押したボタンは、放送前のピンポンパンポーンを鳴らすやつだから、喋るなら早く喋つた方がよいよ」

「えっ、あつ、ちよつと!？」

焦燥に駆られながらも、教わつた通り赤いボタンを押して、一度深呼吸をする。常套句のようなものを聞いていないし、放送の終わり方も聞いていない。安心するというのは撤回したかった。

『生徒会より連絡です。カーリング部のノアさん……ノア・グリニツチさん。一七時になりましたら、生徒会室まで来てください。……以上です』

面白いものを見るような目で僕を見ていた会長に、身振り手振り目振り、「早く止めて！」とヘルプを求めた。会長はクスリと一笑してから、赤いボタンの隣にあつた四角いボタンを押して、再び笑つた。

「いいじゃないじゃない上出来だよー！　あとはそうだなー……、急ぎじゃないなら内容を繰り返すといいかもね！」

「あ、ありがとうございます。でも、急にはやめてくださいよ」

「あははは！ ごめんごめん！ そうやって焦ってる人って、なんか面白くてね！ くふふふっ」

「会長っ」

「あはははは！ やっぱ新人は可愛いわー！ あ、可愛いって言うのは両方の意味でね」

「両方、ですか？」

「んー、なんでもないよ。あ、そうそう。さっきワタシがしてた放送の後、ワタシのどこが可愛い？ って聞いたじゃない？ あれに對するルートくんの答え、放送で流れてるわよ」

「ん？ えっ？」

「肌も綺麗だし髪も素敵だし、もう結婚したいってやつ」

「じ、冗談ですよね……？ あ、あと、結婚したいは言ってますん！」

「冗談じゃないよ……ふふふふ……」

「か、会長……」

会長はそうやって僕から日常を奪っていく。でも、それが日常になっっていくことを、僕は拒もうとは思わない。

色々なことを経験すれば、それだけ僕は成長できる。そういう確信があったから。

「じゃ、そろそろ戻ろうか。と、言っても隣だけどね」

「そうですね」

席を立ち、機材の電源を切ってから、放送室を後にした。

放送室の隣にある生徒会室へ行く短い道のりの間、会長が話しかけてきた。

「さっき呼んだのって、あのクラスメイトの小さい子でしょ？ どうしたの？ 何か用事でもあったの？」

「と、特には無いですけど」

「もしかして、ルートくんとルートくんの友達の間で流行ってる『願いの夢都市伝説』についての話かい？」

俄然、興味を持った瞳で、会長が食いついてくる。

あまり話を大っぴらにすることは好ましくない問題なので、僕は声を小さくして頷く。自然、会長の気迫に押されたような構図になる。

「は、はい。まあ……」

今回、ノアを呼び出したのは、会長の読み通り『願いの夢』について少し聞きたいことがあったからだ。

会長が『願いの夢』について知っているのは、以前、生徒会室に遊びに来たサクラが口を滑らせてしまったからだ。それがきっかけだったか故意だったかはおいておくとしても、流行りもの好きの会長が、そんなそる話を看過するわけもなく。

ちょうどその場には、アリスとノア　要は、当事者たちが集っていたので、全員でフォローしてなんとか『都市伝説の調査をしている』ということにして話を収めることに成功した。ただ、それでも気になっているらしく、会長は度々進捗を確認してくるのだった。「それにしても、サクラちゃんの【手品】はすごいよねー！　また見たいなー！」

「ははは……」

サクラの【魔法】は【手品】だということになっている。瞬間移動も、物質生成も、念動力のような力も、無論だ。バレそうになったら、都市伝説を探っている時に偶々見つけたオーパーツの力だ、と言いつつすることに決めている。

「まあいいや。さつさと仕事しちゃおう。再来月の文化祭の準備も、早めに取り掛かりたいし。今年も忙しいぞー！」

「頑張りましょう！」

他校との合同の文化祭ということで、大規模となることが予測される文化祭。ミドルの時にも三度経験しているけれど、一〜三カ月という準備期間から察するに、桁違いになると思われる。

本腰を入れるのはこれからでも、意気込みだけはしっかり持っておきたい。

そう喝を入れようと、右手を握りしめた時だった。奥の廊下から駆けてきた人物を見て、意図せずに力が抜けてしまっていた。

「遊びに来たのじゃー!!」

紅茶色のセミロングを暴れさせながら、サクラがこちらに急接近してくる。終わった季節を思い出させるかのような、甘ったるい花の匂いを漂わせて。

「お。サクラちゃん。廊下は走っちゃだめだぞー」

「走ってしまったものは仕方ないのじゃ」

「それは、そうだな。じゃ、ワタシと遊ぶか。今日は何しようか」
サクラと会長は二三、会話を交わすと、さっさと生徒会室へ入って行ってしまった。そうして取り残されたのは、変に意気込んだ新一年生のルートという人間だった。

口から洩れた「仕事してください会長……」という呆然自失の塊は、自若として廊下に木霊した。

今日は いや、今日も。

色々と頑張れなさそうだった。

会長のいる、八月。(後書き)

【あとがき】

前章でルートたちの仲間になったサクラ。

早速トラブルを起こしそうで、書いているこっちまでドキドキします。会長という新キャラも登場して、火に油を注ぐ構図が出来上がりつつあります(笑)

今回は「アリス編」か「ノア編」あたりになります。

悩殺ジエーン（前書き）

【まえがき】

三章初のノア編になります。

情緒不安定かつ、（心の中では）ストレートなノアは、見ていて楽しいです。

その素直さがすべて表面に出たら、おそらく、アイドルグループのセンターポジションを担う、アイドル界のエースとなるでしょう。果たしてそんな日は来るのでしょうか……。

本編です。

悩殺ジエーン

青春イコール苦悩、なんて言葉をどこかで見かけた。

本当にその通りかもしれないとため息をつく自分と、青春を実感して心躍らせる自分が、自分という一つの器の中で右顧左眄混在していた。時たま前者が強くなってひどく落ち込んでみたり、時たま後者が強くなって誰もいないところでにやけてみたり。浮き沈みする感情は、コントロール下に無い気がした。

その理由は何となくわかった。

一切の真新しさが無くなった今、生まれてくるのは恒常性。所謂、マンネリ。そのマンネリの中で、感情に直結するイベントが起きると、心的な影響は甚だしい。

一つ、アリスと同じクラスになれたこと。ずるをしているような気がするけれど、とても嬉しかった。

一つ、新しい友達が増えたこと。サクラという名前の女の子。変わってるけど優しい人。もちろん嬉しい。

一つ、アリスがモテすぎることに。かなりストレスフル。

平坦とは、よく言えば平穩。逆に、平穩は悪く言えば平坦。平坦の水準が低かった自分にとって、今ある平坦は幸福の絶頂と言っても過言ではない。

アリスが、また告白されたってよ。

幸福に溺れる自分に訪れた、これ以上ない恐怖だった。そうして自分は、現実に戻されることになる。

アリスのことは、自分が一番知っていた。無論、こうなることも

多少は予想していた。

一言で表せない「可愛らしさ」と「美しさ」は、どんな人間だって魅了する。だから、アリスに告白したのが男の人だけじゃないということには、あまり驚かなかった。だって、「カッコいい」から。最近は、文化祭の話もあって、誰がアリスを射止めるか、フアンの間で抗争になっていた。

そんな光景を見て、自分にできることは、本当に、青春することくらいだった。

言葉良く言ってみただけど、空しいだけ。

アリスは自分だけのもの。

主張したいことは決まっているのに、表現の仕方がわからない。もしかしたら、環境やタイミングというのもあって、今は存在しないのかもしれない。それこそ、学生という短期間にだけ青春するという必然を見れば、合点がいつてしまう。

その通りに話が進むのならば、自分の思いは学生の間だけ限定の感情ということになってしまう。そんなことはあり得ないはずなのに、どうしようもなくなつて不安になつてくる。

どんどん悪い方に考えてしまつて、終いには「暗い」なんて言われてしまうのだろう。

変えなきゃ変わらなきゃと、髪をいつもより短くしてみたけれど、何も変わらなかった。アリスはまた、告白された。

当たり前だ。また、落ち込んだ。また、告白された。また、落ち込んだ。

幸福かと思つた自分の日常は、負の輪廻に埋もれていった。

そんな中、現れたのがサクラという女の子だった。

同じ年とは思えない言動と貫禄で、ルートやアリスが知らない事も色々知っていた。基本は面倒くさがりだけど、大人び過ぎているくらいに達観していて、困ったときは必ず助けてくれる。

『願いの夢』に関して、信じてくれるどころか当事者だった。自分一人だけが『願いの夢』を見たのかと不安だったから、余計に信頼してしまった。

今日も、二時限目終わりの休み時間に、後ろのサクラの席に凭れた。

「ん？ どうしたんじゃ、のあよ」

「アリス、また、告白されたって……」

「ほお。モテるんじやのう」

サクラは、悟られぬようアリスを一瞥して、ぬははと笑った。

「わ、笑い事じゃ、ないよう……」

「そうかの？ こんなどえす娘を好きになる神経が、わたしには理解できん」

「い、良い所も、いっぱいあるもん……！」

そう。だからこそ辛い。

人を好きになると、悪い所などどうでもよくなってくる。そもそも悪い所なんてあるのだからとさえ思う。いや、きっと存在しないのだ。美化されていると言ってもいい。

結局、自分がアリスに重ねて想い描くのは『大好きで仕方がないアリス』なのだから。

明確な答えにありつくことができずにまた項垂れると、サクラに頭を撫でられる。落ち着くのと同時に、「色んな人が撫でるけど、そんなに撫でやすい頭なのかな？」と複雑な気持ちになった。

サクラが優しく問いかけてくる。相談に乗ってくれるようだ。

「ううむ、そうじやのう。ありすは学校じゃアレじゃが、実際のところ家ではどうなんじゃ？」

「どつって……？」

「そうじやな、例えば、ご飯の食べ方が死ぬほど汚いとか、寝相が悪すぎて困るとか、そういうのはないのの？」

「な、ないよ！」

学業成績や運動能力、環境適応能力、コミュニケーション能力、

礼儀作法、細やかな気配り、エトセトラ……。化粧と衣服によっては、可愛らしくも美しくもなれる均整の取れた顔つき。いわゆる『イケメン』。物怖じしない姿勢と、【魔法】を行使できるサクラに勝るほどの策略と洞察力。

どこをとつても、アリスは本当に完璧。非の打ち所なんてない。自身に満ち溢れるサクラに「なるほど……」と、空ろ気に言わせしめるほど。

「そうしたら、手は一つしかないのう……」
「あるの……！？」

時間だけが解決できる問題かと諦めていたところだったので、受け答えが多少食い気味になる。

奇才サクラなら、何か変えてくれるに違いない。淡い夕方色の髪の毛に【魔法】を期待して、耳を傾けてみる。

「開拓するのじゃ」
「開拓……！？ 開拓って【魔法】！？ どんなことするの……！？」

「まあ、そう急くな。開拓というのは一日にしてならずじゃ」
「そうなんだ……。でも、ノア、頑張る……！」

少なくとも、第三者の手によって消滅させられるのを待つ、無為な日々を送るよりは遥かにましだ。

こうしたいという目的だけが見えている今、方法を知ることが最重要だ。

「お、お願い……。教えて……。ください……！」
撫でられるままに俯きながら、頼み込んでみる。他人に頭を掴まれること以上に、自分を遜ることはできないから。

「むふふ……。のあはありすと違ってかわいいのう。よいじゃろう。教えよう！」

「ホ、ホント……！？ ありが、とう……！」
「じゃが、あのありすを開拓するんじゃ。きつと、ものすごく大変じゃぞ？」

「大丈夫……。ノア、どれだけ辛くても、開拓する……！」

「ぬはははは！　そうかそうか！　良い意気込みじゃ！　それじゃ、さっそく方法を教えるのじゃ！　体を使って覚えた方が早い。ちょっと、場所を変え　んじゃあっ！！？？」

自分の手を引いて席を立ったサクラの脳天に、重い一撃が振り下ろされた。サクラが頭を抱えてその場にしゃがみ込むと、そこには分厚い参考書を右手に掲げたアリスの姿があった。

今朝も告白されていたということを出してしまつて、勝手にサクラの介抱に体が動いた。自然とアリスを避けてしまう。

「だ、だいじょぶ……？」

「大丈夫じゃ……。このくらいの刺激がないと張り合いがないからう。……にしても、割と本気でぶっんじゃな……。痛かつたのじや……」

「自業自得よ、まったく……。ノアに変な事吹き込まないでくれるかしら」

「へ、変な事とはなんじゃ。開拓じゃぞ開拓。のあが、お主のためにやろうと意気込んでおるのに、ほんに勝手な奴じゃ。のう？」

やれやれと呆れた表情で、同意を得ようと尋ねてくる。

アリスに変な事と言われると、急にサクラが胡散臭くなってくる。いや、もともと胡散臭いけど。なんにせよ安易に賛同はできない。

自然、アリスとの距離が縮まる。今度はサクラを避ける。

「んと……。開拓つて、具体的に、何するの？　体で覚えられるものなの？」

「もちろんじゃ！　体で覚えてこそなんぼのもんじゃ。具体的には言にくいのう……。じゃが、簡単に言えば、『痛いのと気持ち良いのを交互にやる』かのう」

放言している時のサクラの怪しい手つきに背筋がゾツとした。さりげなく、アリスの影に隠れてみる。その意味合いは、逃亡よりも欲望だろうか。

アリスは軽く溜息をついて、サクラに言う。

「あんだねえ……。あたしが、そんな簡単に屈服するとも思っただの？ ましてやノアに？」

「いやいや。案外わからんぞ。あまりに快感過ぎて、そんな自尊心などどこかへ行ってしまいかもしれん。ariusがどえむ……。むふつ。それはそれは可愛いじゃろうなあ……。！」

「うふふ。あんまり馬鹿なこと言っていると、開拓するわよ？」

暫くの間、二人の間には微笑みだけが飛び交った。挟まれた自分は、その気迫を感じて変な汗をかいていた。

沈黙を破ったのはariusの優しい声だった。

「ノア。あなたも気にし過ぎよ。いつも、言っているでしょう？」

あたしは誰とも付き合う気は無いつて。もう少し、彼女を信頼してもいいんじゃないかしら？」

「ア、arius……。っ！」

もう、抱きつきたい一心だった。

そう熱く想うと、ariusの耳がじんわり赤くなる。

ariusは感情を手前に出さないけれど、頬や耳には顕著に表れる。最近、近くでariusの顔を見ることが多くなって気付けたこと。自分の想いが、確かに伝わっている証拠。

自分は、その赤を見るたびに高揚する。

「さ、さてっ。馬鹿はほっとして次の授業に行きましょう。三時限目は移動よ」

「うん！」

「手のひら返し、鮮やかじゃ……。！」

色々と納得できたので、このあとの授業は集中できそうだ。次の授業の体育は自由席みたいなものだから、またariusの隣に座ろう。少し気が乗る。

変な事を吹き込もうとしていたのかもしれないけれど、相談に乗ってくれたのだ。サクラにお礼を言おう。

「あ、ありがとサクラ……。相談に乗ってくれて……。！」

「わしは何も言っとらんぞ」

そのサクラのセリフの下から、「ためになることは一つもね」とアリスが付け足す。「うるさいわい」と言い返すサクラは、笑っていた。いまだ、サクラの発した開拓への興味が冷めない自分を笑っているのかと錯覚して、恥ずかしくなった。

「さ。アホな事してないで、さつさと行くわよ。さつきから放心状態だけど、あなたも準備しなくていいのかしら？」

アリスの後ろの席に座っている自分の友達は、アリスにそう言われて初めて、次が移動教室だと言うことに気付いたらしい。

心根の優しさが滲み出る端正な顔立ちで、全体的にスリムな体型。深海や樹林を思わせる爽やかな碧緑の瞳。頭が良くて、他の追隨を許さないサッカーの腕前も持っている。とても落ち着いていて、困ったときはものすごく頼りになる。それでいて、アリスには敵わなという面白さも兼ね備えている。

それがルート。友達だ。

アリスに指摘されて、いつも通りあたふたしているのが、面白い。「そ、そうだった……。次、体育か」

「全く。抜けてるわね。待っていてあげるから、早くしなさいな」

「ご、ごめん。ありがとう。でも、悪いよ。先に行っていていいよ。」

僕は大丈夫だから」

「みずくさいのう。わしも待つぞ」

「ええ、あ、うん……。ありがとう」

ルートの周りには自然と人が集まる気がする。別段、何かで呼び寄せているということはない気がする。でも、ルートの周りにはたくさんの人がいて、みんなルートを頼って、ルートも支えられている……。そんな感じがする。自分もその輪に入れたことが、心の底から嬉しい。

でも時々、みんなで支え切れないほど大きな、黒くて重いモノを抱えこんでいると感じる時がある。

触れてはいけないことなのかもしれないけれど、隙あらば覗きたいと思う。ルート、隙だらけだし。

多分、ルートに集まってくる人はみんな、そう考えているのだと思う。

何もせずに待つのが億劫になったのか、サクラが話題を振ってくる。

「再来月じゃったか。文化祭」

「そうみたいね。掲示板に書いてあるわ。他校と合同ですって。だから、準備も早いのね」

ドア横の掲示板に張ってあった、文化祭準備委員を募るポスターを見ながら、アリスが言う。

サクラも同じポスターを見ていたようだ。自分がなぞった視線の通りに、文字を読み上げていく。

「今年の一学年は劇！ じゃと。男と女一人ずつ主役を募集しておるのう」

「募集をかけると言うことは、生徒会か文化祭実行委員みたいな団体が監修するのかしらね」

「そのようじゃな。生徒会監修と小さく書いてあるのじゃ。るーとお主はるりから何か聞いておらんのか？」

「うーん……。恋愛モノにするみたいなのはしてたかな……」
あの会長のことだから、劇の演出は途轍もなく派手なものになりそうだ。

その会長ととても気が合うらしいサクラは、恋愛モノだと言うことを聞いて、悪い顔になっていた。

「むふふふ……。恋愛モノとな……？」

そして、こちらを見てニヤリ、アリスを一瞥してまたニヤリ。嫌な予感しかしない。

身構えていたので、急にサクラに名前を呼ばれても大して驚かなかった。

「のあよ」

「どうしたの……？」

「まだちゃんすはあるのじゃ」

サクラの瞳は、目先にある面白さ目当ての私利私欲で鈍く輝いていた。

興味に関する貪欲さに若干引きつつも、その話には耳を傾ける。自分を気遣ってくれている感謝を前面に出して。

「チャ、チャンス？」

「そうじゃ。ちゃんすじゃ」

ぐいぐいとパーソナルスペースに攻め入ってくるサクラを制するかのように、アリスの溜息が聞こえてくる。

「はあ……。あんたまだ言ってたの？」

けれど、今度は強気だった。

「ふっ。今度は調き……。開拓など回りくどいことはせん。あの悩みなど、一瞬にしてなくなってしまうじゃろう！」

「こ、今度はなに……？」

得意げに胸を張るサクラに、恐る恐る尋ねてみる。聞かないでいる方が恐ろしい気がするから、というのはいわれないでおく。

「二人で劇の主演をやればよいのじゃ！」

「え？」「はあ……」

自分の疑問がアリスの溜息に打ち消されたため、場にはそこはかとなく陰鬱な空気が流れた。その雰囲気には気圧されたのか、サクラは一言二言言い添えていく。

アリスはあまり聞きたそうにしていなかった。

「恋愛モノの主演と言えば、最後はちゅーと決まっておるじゃろ」

「はあ……。あんた、頭の中どうなってんのよ……」

「ナニっ！？ それ以上がいいのかのっ！？ やっぱりそうなのかの！？」

「うっさいわね！」

「ぬっははっ！ まあ落ち着け」

アリスをおちよくることが出来る人間なんて、サクラ以外には知

らない。サクラと一緒にいると珍しいアリスが見れて、少しだけ嬉しくなる。自分には引き出せないアリスだから。

そういう意味で、サクラはすごい。

そのすごいサクラが、またすごいことを言い放つ。

「大勢が見てる場所ですが、つり事を済ませれば、それはもう公認カップルじゃ。演技じゃとわかると意味が無いから、長いやつをな。この国では、同性でのそういうのは禁じられとるらしいが、劇ということじゃから合法じゃ」

法という言葉を持ってくるあたり、妙に生々しい。他にも、長いやつを……とか、事を済ませる……とか、色々が生々しい。

サクラは【魔法】が使える割に現実主義だから、現実的なセリフには一定の説得力がある。人間の羞恥や先入観などを取り払った、現実ギリギリのラインを攻めてくるからこそなのか、何かそそのめるものはあった。

聞かないように視線を散らしているルートも、耳は正直に茹で上がっている。自分の顔も熱いから、きつと真つ赤になっていることだろう。

追い打ちをかけるように、サクラが「どうじゃろ」と問うてくる。今、返せる答えは、下心など無い本心か。

「でででもでもっ、ノノ、ノアなんかには主役は、無理……だから……！」

自分の隣には、憧れの王子様もしくは麗しのお姫様がいて。一体、自分はどの立場の人間として、その唇を奪うのか。果たして、嘗めとってしまったもいいものなのか。願わくは、後任に。

そればかりが脳裏を過って、理性などは後回しになった。呆れているアリスを見たり、赤面しながら視線を逸らすルートを見たり、期待に目を輝かすサクラを見たり。目が泳ぐ。

大量の情報をいっしょくたに享受することは、すでに脳が諦めている。

だから、三人がなにを言っているか、イマイチ理解できなかった。

「大丈夫じゃろ、のあは。かわいいからのう」「そうね。ノアは可愛いわ」「僕もそう思う」

「……………」
そして沈黙が訪れる。

おそらく、自分が受け答えをしなければいけないタイミングなのだろうけど、そんな余裕はない。でも、三人は自分の反応を待っている。だから、静寂が生まれる。

沈黙が破られた数分後。
教室には、厳しい現実と焦燥だけが残っていたのだと思う。

「……………時間っ！！！！」「……………」

青春イコール苦悩。

そんな格言を引っ提げて、自分は廊下をひた走るのだった。

悩殺ジエーン（後書き）

【あとがき】

なんだか、ノアがヤンデレ臭を漂わせ始めていますね。
けれど、ノアはヤンデレになれるほど力が強くありませんので、
なりきれはしないのだと思います。ヤンデレって強くてなんぼです
からね。精神的にも、物理的にも。

皆さんはヤンデレ、好きですか？

私は程度によります。

The Neighborhood of Traveling Hearts・(前書き)

【まえがき】

アリス編です。

今章は、オムニバス作品であることが如実に現れる章でもありません。視点がコロコロと替わっていくので、感情移入が単純に難しくなっています。

ですが、感情移入することができれば、物語の核心が見えてくると断言できます。

では、本編をどうぞ。

「どうしたの？」

「あ、あの、あの……」

円らな瞳で、無垢な心で訴えてくる。それぞれがあたしの心を上手く掴んで、絡みついて離れなかった。ただ、そもそも咎めるつもりなど無かったから、一方的に言葉を浴びせようとは思わない。

「……………」

アイスリンクへと身を乗りだすカーリング部マネージャーの頭は、非常に撫でやすかった。引き寄せ合う磁石のように、髪を梳く右手に頭が吸い付いてくる。以前、「そんなに心配しなくても、急にやめたりしない」と言ったことがあったけれど、「これがノアの思う恋人」と思われたので、そういうことにしている。

そう言う意味では、今こうして部活中に恋愛を愉しむのは如何がなものかしら……と、誰かしらに苦言を呈したくなる。

「わかったわ。最近、朝も早いし、寝るのも早かったから。ノア、あなた、欲求不満なのよ」

「よ、欲求なんて……！ ノア、アリスとられるだけで幸せだし……………」

あたしは、この子のすべてを知ることができる。望むことも望まないことも、事実も虚偽も。だから、腹の底に抱えた黒い感情の正体も、あたしの意識から認識できる。

人間だから、時折、道理から外れた論理を考えついたりもする。比較対象が無いから、ノアを憎むことなんてできやしない。ましてや、ノアのことには嫌いになれない。あたし自身、どこかでノアを求めているから。

だからこそ、あたしはノアの求めるものに答えようとするのだ。あたしがいつまでたつても解り得なかった『欲求』に気付かせてくれたのは、ノアだったから。『誰かの言いなりにはなりたくない』『大切な人と一緒にいたい』という大きくて黒い感情に、あたしは気付けたから。

「隠し事が下手ね」と冗談を交えて、あたしはノアの望みを聞き出す。あくまで、あたしが叶えるのは『形の無い願い』ではなくて、『ノアが本当に求めるもの』。実際に、それをノアの口から聞いたのだ。

「あたしに何をしてほしいのか言ってみなさい。みんな聞いてないから、大丈夫よ」

ノアは、周囲を二度三度確認してから、尚も耳打ちを誘ってくる。人前でキスをしようとしている人間が、随分と慎重なこと。

「あ、あのね……。劇、出たいなって……。アリス、と……」

それは用意されたセリフだった。この時まで、何度も何度も推敲されてきた完璧な文句だった。そしてそれは、あたしの選択肢を著しく削った。

「劇ね……。別にいいわよ」

「ほんと……!?!」

「ええ。でも、動機が不純ね。ノアらしいけど」

「だ、だって……!」

「はいはい。わかってるわよ」

何か言いそうにするのを、ぐしゃぐしゃと強引に髪を撫でて妨げる。

部活中なのだから、これ以上くだらない話をするのはよくない。ノアにしてみれば、くだらなくも無いのかもしれないけれど。そろそろ頃合いだと、その場を後にしようとした時だった。

『生徒会より連絡です。カーリング部のノアさん……ノア・グリニツチさん。一七時になりましたら、生徒会室まで来てください。…以上です』

若干のあどけなさを含んだ放送は、暫くの間巨大なアイスリンクに反響していた。それが小さく、そして聞こえなくなるまで、リンクには静寂が生まれていた。

カーリング部と聞いてはっとしていた部員たちも、自分に関係ないことがわかると練習を再開し始めた。また、ストーンのぶつかり合う鈍い音が響きだす。

重く響く音に埋もれそうな小さな声で、主張する人物がいた。

「ノア、悪いことしてない……」

「どうせルートが適当に呼んだだけだから、気にする必要ないわ」
放送という合図だけでそう確信を持てるのは、せいぜい『人の心の中が見ることができない』人だけだ。

あたしは、不安を隠せないでいるノアに一言、言い添える。

「あたしのノアに何の用かしら」

その瞬間、ノアの心は緩む。

その瞬間、あたしの心は淀む。

『願い』とはそういうものなのだと、最近つくづく思う。

「ごめんね。部活中だったのに」

「ううん。大丈夫……。それより、ノア、何すればいいの……」

黄昏た夕日でできた桜の影に沈み込むように小さくなりながら、

ノアは贖罪のことを考えていた。場所を屋上に変えるように伝えたのは正解だったけれど、やはり一人で行かせたのは間違いだったか。「いやいや、別に何もしなくてもいいんだよ！ 悪いことしたわけじゃないんだから！」

「そ、そうなのかな……」

相手が人の良いルートだから、何とかなるとは思っただけで、不安ではある。ノアが泣きだしたら、ルートになす術はないだろうし。

……泣き出すって、子ども扱いしすぎよね。

「そうだよ！ だから、大丈夫。安心して」

「う、うん……」

「ただ、話がしたいなって。それだけなんだ」

「それだけ……なのに、放送、使っていないの……？」

確かに。

まあ、致し方ない状況ではあったかもしれない。そう考えると、圧力のかかった状況を作り出したあの会長に非があるのだろう。

あたしはどうも、ああいうタイプは苦手みたいだ。考えなしに首を突っ込んだり、面白いつてだけで決断をしたり。理解しがたい。

クラスメイトの誰それと話していると、そんな嫌悪感に駆られる。ということとは、真逆の性格と言っても過言ではないノアのこと。好きなのもしれない。本当に胸がどきどきと音を立ててしまうような特別な情緒をもって、時々、そう思う。そしてそれをあたしは、おかしく思う。

「なんだかよくわからないけど、大丈夫らしいよ。会長が言うには」

「ふ、ふうん……。さっき、ルート、会長さんの好きなところ言っただけど、あれもいいんだ……」

「えっ？」

「そうだ。話って、何の話……？」

聞き捨てならないぞと聞き返すも、華麗に流されてしまう。ルートは最近、ノアの天然が一番怖いと思っっているらしかった。

ルートは言いづらそうにしながらも、口を動かす。会長のミッシ

ヨンのついでにノアを呼んだのではないということをし、あたしは知っている。

「あ。いや、大したことじゃないんだ。ちょっと気になっちゃって……なにが？」

ルートは大したことじゃないと何度も言いながら、大したことを言う。それは、ノアにとってもルート自身にとっても、もちろんあたしにとっても大したことだった。

「ほらさ……。サクラが『魔法』を使えるのは願いの夢のおかげだ』って言ったこと、気になって仕方なくて……」

ルートは視線をノアの背後の観葉植物に映して、ぎこちない素振りを見せる。それでもあたしの感覚は、『願いの夢』という言葉だけ綺麗に抜き取ったかのように、確りと聞き取っていた。それはきっと、あまりにも言い慣れ過ぎているからなのだと思う。

わざとらしさが露呈しないように、ルートは口早に言葉を重ねていく。

「その時さ……。ノアさんも言ったよね。『願いの夢』を見たって……。あ、違うよ！ ノアさんが間違ってるとかおかしいとか、そういうのじゃないんだよ！ ただ、サクラさんみたいに【魔法】が使えるたり、現実に影響があるっていうのは、もしかしたらすごく恐ろしいことなのかもって思って……」

「それはそう、かも……」

ルートの言うことは正しい。【魔法】なんて摩訶不思議な力を使われた暁には、その力を求めて世界中が戦争を始めてしまつかもしれない。

でも、ノアは違う。

ずっと不幸だった自分に漸く訪れた『幸せ』なのだ。それだけなのだと思いついていたノアにとってみれば、ルートの論理は否定に値する。

そういう二つの意見があるからこそ、ノアもサクラもルートも、無論あたしも、『願いの夢』を見たということをし、ひた隠しにして

きたのだ。サクラというスリリングな登場人物がいなければ、ノアの願いも永久にあたしとの秘密で終わっていたのだと思う。

けれど、知られてしまった。

そして、知ってしまった。

『願いの夢』を見ている人は、自分だけではない？

疑問が確信に変わった瞬間、あたしの中には一つの懸念が芽生えていた。

人間の欲望には良し悪しがある。しかし、大きな欲望には大きな代償が必要になる。では、今回のように代償がなければ、人は一体何を望むのか。

あたしの恐れるものは、今、ルートの恐れているものとイコールで結ばれるのだ。

「もし、さ。ノアさんやサクラ以外にも、同じ夢を見ている人がいて、その人たちが悪いことを願ったら困るなって思ったんだ。良いことだと思って願ったことが、本当は悪いことだった、なんてこともあり得るだろうし、ね……」

ルートはぼそぼそと呟きながら、真っ黒い自分の影を見ていた。黄昏の明るさでは、ルートの後悔を照らすことはできない。小さく笑うルートは、ノアの目に安寧を映した。

「ふふっ。ルートって、すごいね。ノア、みんなのこと考えたりできないもん。本当に『願い』が叶うんだってなったら、絶対、自分のことお願いしちゃうから……。ほんとに、そう、だったし……」
でも後悔はしていないのだ、とノアは伝えようとした。

「……………」
けれどそれは、ルートも知っていた。

「……………」
だからだろうか。沈黙は、二人の心を傷つけはしなかった。

「そ、そうだっ！ 今年の文化祭の劇、なにやりたい？」

「え、うーん……。アリスと出るなら、なんでもいい、かな……？
あれ？ 劇の内容、ルートが決めるの？」

「そうみたいなんだ。本当は会長が決める決まりになってるんだけど、せつかく一年生が副会長だからって僕に振るなんて……」

それは、放送を終えた直後、会長から言い渡された試練だった。あの生徒会長の考えることだから、気まぐれでやっているのかもしれないが、ルートはそうは思っていなかった。

ルートはある程度の尊敬の念とともに、絶大な信頼を会長に寄せていた。だからこそ、その話を聞いたとき真っ向から拒むことはしなかったし、むしろ、内心期待してもいたのだ。

ノアもルートの表情を覗きこんで、その一家言に気付く。

「でも、ルート、嬉しそう……」

ルートは細やかに微笑んでいた。口角が少しだけ上がっていた。きつと、頼られているという実感が無意識のうちにそうさせるのだと思う。

ルートは恥ずかしげに頬を両手で挟み込んで、「か、顔に出た？」と確かめた。ノアは「うん」と頷いて、一つ笑った。

そういう自然な微笑みが、二人の間にゆっくりと流れていた。

笑顔に対する答えは、笑顔しかない。そう知っているはずなのに、あたしにはできなかつた。そしてあたしは、それが 笑えない自分が怖かつた。

そう思うと、今の二人が羨ましくなる。覗き見ている自分が、本当に屑な人間なのだと、いたく実感する。

「ね、ルート」

「ん？」

「ルートがお話、書いてみたら？」

「僕が脚本ってこと？」

「うん」

「無理無理無理！ 絶対無理だよ！ 大体、会長が
ルートは両手を大きく振って、拒絶の意を示す。」

けれども、生徒会長はそれを拒絶しないだろう。

「ノア、そんなことないと思うの」

「ええ……いや、だって……。ええ……。どんな話を書けばいいかなんて、皆目見当もつかないし……」

「ルートのお話、書けばいいんだよ」

毎晩寝る前に、ノアと話し込んだことが思い出される。

下らない話や真面目な話、昔の話、二人のこれからの話……。いろいろな話をした中には、もちろんルートについての話もあった。『ルートの心を覗ける』ようになったあたしにしかわからないこと以外を、ノアの満足がいくまで話した。

結局笑い話にしてしまったけれど、ノアの心には何か響くものがあつたようだ。

笑い話にされたことを知らない本人はと言えば、頭にはてなを浮かべて、心中過去を顧みていた。

「ぼ、僕の話……?」

「うん。ルートのお話」

「うん……。果たして、お話にするようなことなんかあるかな……」

ルートは左斜め上の小枝に視線を移して、深く考え込んでしまった。遡れる限界まで記憶を辿って、何かないか何かないと模索していた。

気になったのか、ノアもルートと同じ小枝を一瞥した。ただし、感じたのは懐疑心ではなく、「そろそろ暗くなってきたなあ……」という若干の焦りだけだった。

ノアは結論を急ぐ。考え詰められたその言葉には説得力があつた。「ノアね。ルートに会えて、本当に良かったって、そう思ってるの。アリスと仲直りできたのも、ルートのおかげ。同じ学校に行けたのも、アリスの家に居られるのも、毎日が楽しいのも、ルートのおかげ、だと思っの……」

「ノ、ノアさん、そんな、どこか行っちゃうみたいなこと言わない

「でよ……」

「あう……ううん。違うの。それをお話にしたら、どうか、と思
って……。アリスは恥ずかしいって言うかもしれないけど、ノア、
すごく嬉しかったから」

ノアの脳内には、すでに劇のヴィジョンが出来上がっていた。

でも、その劇の展開は、あたしの予想したものと大きく違ってい
た。

「そしたら僕は、僕役？」

「うん」

「アリスもノアさんもそのまま？」

「うん……」

「主人公は誰がやるの？」

主人公は、お姫様と王子様。そして最後は口づけを交わす。そう
決まっているのだと、誰かが言っていた。

だとすればノアが望むのは当然、お姫様だと思っていた。あたし
には王子様役をやらせるつもりでもいただろう。

けれど、違った。

「ルート」

「え？」

ノアは、鈴の音のように透き通った声と、ぶれることのない真っ
直ぐな瞳で主役を捉えていた。そこには一点の曇りも無く、下心に
淀んでいるということも無かった。

「ルートが主人公」

「僕、なの？」

「うん」

「ノアさんじゃなくていいの？ アリスと一緒にやらなくても」

「大丈夫……。それより、ノア、ルートに主役やって欲しいの……」
それがノアの答えだった。

あたしに伝播してこなかったその思いは、あたしに多大な驚愕をもたらした。それと同時に、ノアのことを知った気になっていた自分が、心底恥ずかしかった。

ノアは純粹な気持ちをダイレクトに表現した言葉を紡いでいく。

「ノア、アリスと一緒に劇でできるだけで嬉しい……。けど、それと同じくらい、ルートが……。友達が、主役をやるの、嬉しい……。う、嬉しいというか、なんか……。！　うう……。わかんない……。」

適当な言葉が見つからなかったようで、言い淀む。けれど、ノアはそれも誤魔化したりはしなかった。

今あたしが屋上にいれば、ノアの気持ちに毒をおり混ぜてルートに伝えてあげるのだからうけれど、今回は無理かもしれない。

ノアの気持ちが掴めない。

それはノアとの心の距離が離れているからだだった。いつものあたし中心な考えじゃなくて、本当に他人のことを思っていることだからこそ、そうなったのだと思う。

今回は、ルートのこと。

あたしはそんな些細なことが、どうでもいいはずのことが、心底悔しかった。自分の思い通りにならないことが、これ以上ないくらいに怖かった。そして、そんな自分が、本当に嫌だった。

認めたくないだけかもしれないと、自分を律する自分もいた。それも理解した上で、心のどこかで認めるのを拒んでいた。でも、どうして拒むのかは疑問のままだった。

嫉妬しているのかしら。あたし。

要は、あたし自身が主役を　王子様役をやりたいと思っているということ。それはまさしく、ノアの望む形。

それを裏切られたから、妬いているということ？

思考が深^ふけ込むほどに、ストーンのぶつかり合うリンク^{こっち側}の音が遠退いてゆく。このままいくと、昏睡しているのと同じ抜け殻になっ
てしまう。

本来、人間は一つの自意識しか持つことができないからなのか、
どちらかに意識を集中しすぎると、もう片方の情報はシャットダウ
ンされてしまうようになっていた。アリス・ナイブスという自意識
から乖離しすぎれば、アリス・ナイブスの体は気を失っているのと
同じ、無意識状態になってしまうということだ。

さすがにそれはまずいと判断して、あたしは飛んでいた意識を急
いで自意識へ近づけた。

そうしてアリス・ナイブスに帰ってくる途中、あたしは　アリ
ス・ナイブスは躓いた。あたしという広い精神世界をゆらゆら漂っ
ていた意識は、仰天して何かにしがみついた。

その瞬間、考えた。考えてしまった。

今のあたしって、本当にあたしなの？

ルートの体の動かし方も、ノアの独創性も、全部知ることが
できる。ここ最近^{ここ最近}は、ある程度なら行動の予測もできた。

それは、ルートなの？ ノアなの？ あたしなの？

躓いた時、傍にあつた石ころのような感情が、羨望とか嫉妬とか人間の欲望そのものだったから、多分そう感じてしまったのだと思う。

あたしはあたしなんだ。ルートが、ノアが、そう教えてくれたのだ。

あたしはそう持ち直して、重いストーンを投げた。

ストーンは氷上を真っ直ぐと進んでいき、前の人が投じたストーンにぶつかった。ぶつかったストーンは鈍い音とともに場外へと撥ねた。慣性で進んでいたあたしのストーンは見事に場内に留まり、どっしりと中心に腰を落ち着けた。

ふう、とため息が出た。

部員たちの「ナイス」という声が聞こえて、あたしは少し嬉しくなった。

少し。

少しだけ。

ほんの少しだけ、胸糞悪い。

The Neighborhood of Traveling Hearts・(後書き)

【あとがき】

一言で言くと、モノローグストーリー。
アリス編に情景描写が多くなるのは、『願い』の副作用でもあります。

同時に三人もの意識を所有しているのですからね(自分含め)。
努力家で決断力も兼ねたアリスだからこそ、自分を見失わずに使いこなせる能力なのだと思います。相手の気持ちを知ると言うことは、時に恐怖ですからね。ルーマスを読んだみなさんは、そんなアリスの苦勞がわかると思います。

今回は『サブエピソード』かルート編あたりを。

ゆっくりと。(前書き)

【まえがき】

まさかのリズ編になりました。

ゆっくりと。

「はあああああ……………」

ここ最近の私の学校生活を一言で表すなら、その二文字プラス長音記号のX倍に他ない。もっとわかりやすく言うと漢字一文字になる。それをクイズにして、答えを聞いて回るといふ遊びを思いついてしまうくらい「暇」だ。自分で答え言っちゃうしね。

アリスお姉ちゃんがいなくなつて、放課後の部活に楽しみはなくなった。うちの学校は一応強豪校という扱いだけど、皆が皆上を指しているかと言つたらそれは違う。私のように、遊びでやっている人だつてたくさんいる。石投げは普通に楽しい。石投げつて、カールングのことだよ。

放課後でなくても、つまらないものはつまらない。休み時間はよくルールの教室に遊びに行つていたのに、それももうできない。

休み時間の外出をしなくなると、教室にいるしかなくなる。

教室には、私を嫌っている女子カールング部の連中もいるし、私を好いている男子連中もいて、何かと面倒なんだよね。別に私は、嫌われようとはしてないし、嫌われるほど好かれようとも思わない。平和が一番。

そももいかないお年頃なんじゃるか、とおばさん臭く独り言ちてみる今日この頃。

私は一人、昼ごはんを食べようとしていた。

「やあハニー。僕……………じゃなくて、俺とランチでもどうだい？」
していたはずなのに。

強制的に二人にしようとう入り込んでくる男がいた。この男が入っ

てくると、他に誰も寄り付かなくなるから、二人きりを強制される。いやこの男も嫌われる嫌われる。嫌われてると言ったらないよね。ちなみに私も嫌い。

なぜそんなに嫌われるのかは、顔と中身を見れば判然とする。

シユツとした立ち振る舞いに、自己顕示欲の激しい金髪。イケメンを提言するかのように張り付けられた顔のパーツ一つとつてみても、どれも非の打ち所がない。全部非の打ちどころがないから、集合したそれにも非の打ちどころはない。頭も良いし、運動だつてできてしまう。おまけに性格は温厚で優しく、声は甘つたるく高い。

私自身もそう感じてしまうのだから、嫌いというのは言い過ぎで、「なんなのだこの男は」というのが正直なところ。いや、やっぱり嫌いだ。ハニーとかキモイし。

女子の人気を一心に集めて歩く姿は、男子勢の敵以外の何物でもない。

私に女子は寄り付かない。こいつに男子は寄り付かない。

ああ、ほら二人きりだ。嫌すぎる。

こういう時は机に突っ伏しての現実逃避に限る。

「ちよっ、無視しないでくれよ」

「……………」

ルーとアリスお姉ちゃんは今頃、何してるかな。

『紆余曲折あつたけど、やっと四人で同じクラスになれたんだ!』
つて言つてたけど、紆余曲折つてなんだろ。紆余曲折したら同じクラスになれるもんなのかな。

ん？ 四人つて、あと二人誰だろ。

アリスお姉ちゃんと、あと、アリスお姉ちゃんの幼馴染の……………ノ、ノ……………ノ……………。まあいいや……………。

ルー、友達出来たのかな。なんかちよつと、悔しいな……………。

私、最近、ルーの周辺事情全然知らないなあ……………。

「起きてくれよー」

「……………」

学校違つとこんなに不便なんだなあ。この頃部活も全然面白くないなあ。早く卒業したいなあ。

……卒業かあ。

私、卒業したらどこに行くんだろ。やっぱり、ルーと同じ学校かなあ。アリスお姉ちゃんもいるし。

あ。そうだ。ノエルさんだ。思い出せた。良かったー。

「はっ！ まさか、具合が悪いんじゃない？」

「……………」

でも、そうやって進学して、私は一体どうするんだろ。ずっと追いかけていくわけにもいかないよね。

はあ……。

一人になると、考えちゃうなあ。

「それで、僕……じゃなくて、俺の看病待ちとか！？」

「うっさいっ！」

「おお！ やつと反応してくれたぞ！」

嬉しそうな顔をするそいつが、ものすごく腹立たしい。結構な声量で言ったのに驚かないし。がさつだ。本当にがさつだ。男ってこれだからヤダ。

「反応したわけじゃないし。アレンが五月蠅過ぎて周りに迷惑だと思っただの」

「そ、そんなに僕……じゃなくて、俺の心配をしてくれてたのか！

！ 感動だよリズ！！ というわけで、結婚しよう！！」

「なんでそうなる」

はあ、と一つ溜息を重ねる。

けれど、最初にした溜息よりは気持ち、軽かった。この男のために深い溜息など吐いていられない。勿体ない。

「運命だよ！ さあ、僕と……いや、俺と結婚しよう！」

盲目的でしょうもない求婚は、いつもの光景。

二年生になつてクラス替えがあつてすぐ、この調子だった。何かにつけて私のことを追い回すのだ。なんでも一目惚れだったとか何とか。知らないけど。

三度目の溜息が吐き出される前に、私はそいつをいなす。^{アレ}

「はいはい。嫌です。あっち行つてください」

適当に流して、拒否はしっかり、最後は突き放す。これが、私が習得した必殺の『三段論法』。

三段論法が別の何かを指しているのは知ってるけど、本来の意味は知らない。でも、語呂が良いから気に入っている。それだけ。

私の口から放たれたそれは、そいつの心になかなかいい感じに突き刺さつたと思う。

あまりのショックで言葉も出ないかと思つたら、そうでもなかった。

「まあ、今はテスト前だから僕に気を遣つてくれてるんだよね。

無理を言つてごめんね、リズ。テストが終わつたら、結婚しよう！」

必殺だと思つていた私の三段論法も戦火に散つた。全然必殺じゃなかった。思えば、今もこうして求婚されてるんだつた。三段論法、ダメじゃん。

「はああああ……」

乗じて、遂に三度目の溜息が漏れてしまふ。これは、もしかしたら三段論法よりも効果的かもしれない。主に私に。

机に頂垂れて、また現実逃避しよう。

アレンを王子様だと比喻する人たちがいるのは知っているけど、こいつはそう称するほど麗しい存在なんかではない。ただの五月蠅いやつだ。うざ男だ。金髪色白美男子とか、正直三日で飽きる。

「ああ！ また寝てしまった！ 起きてくれよー」

まったく。煩わしいにもほどがある。

ここは早々に返事しておくのが、最善かな。もちろん拒否とい

う返事を。

「今度は何。私、眠いの」

「テスト終わりに」

「はいはい。嫌ですー。もういいでしょ」

また、三段論法を使ってしまった。必殺でもないのに。

でも、アレンの答えはいつもと違った。

「違うんだ。いや、厳密には違わないけど……」

いつも断言し切るといのがそいつなのに、なんだかまごついている。結婚とかデカいことをあんなにも大言するわりに、なんなんだろう。

男の人が一世一代の覚悟を決めてするのが結婚だと聞く。そんな結婚よりも言いにくいものって、なに？ まさか、よくないことなんじゃ……。

あれ？ 私、気になってる？

実のところアレン以上にまごついていた私は、静かに耳を澄ますしかない。

「ぼ、僕……じゃなくて、俺と……、い、一緒に文化祭に行ってくれないかー!!」

「なんだ。そんなこと」

正直に思ったことを口にした。

「え？ いいの？ 本当に？ やったー!!」

「え、あ、ちよつと!」

しまった、やられた。

「よっし! もう今から入念に計画を立てよう! ありがとうりズ! 僕、じゃなくて俺、すごく楽しみだよ!」

「ま、待ちなさいよ! 何も行くとは言っていないでしょ。それに、場所もどこだかわからないし、何時なのかもわからないし。こっちも予定の立てようがないじゃん」

私はまた、行きたい発言をしている。心の底から行きたくないのに。

自分が自分に何なんだと思う。自分に自分が、かな？ まあどっちでもいいけど。

「場所は……確か国立カシミーヤ^{アフデミ}上級学校だったよ。詳しい時間はまだ未定らしいけど、日にちは夏休み明けの三日間だったよ。開放日なら、何時に行っても大丈夫って言うてたから、そこは気にしなくてもいいと思う」

「あ、あつそう……」

この男が相手だと、本当に調子が狂う。巷では、そういうのを『噛み合っている』だの『喧嘩するほど仲が良い』だの言ってるらしいけど、私としては『そのまま噛み砕いちゃいたい』し『仲が悪くて喧嘩してる』のだと思っている。まず、生理的に受け付けられない理由は何となく。

まあ、最悪ドタキャンしよう。まったく、アレンという男も可哀想だな。

「ん？ 待って。今、なんて言った？」

「え？ いつでも大丈夫だよ？」

「その前。場所」

「ああ。カシミーヤ上級学校？ 実は、僕……じゃなくて俺の姉が、国外の学校で文化祭実行委員になったらしくて。話によると、どうやらカシミーヤと合同でやる文化祭らしいんだ。姉の学校は遠いけど、カシミーヤなら一緒に行けるかと思ってさ」

「なるほどね」

私の頭の中では、カシミーヤという単語を掘り起こそうと脳細胞が必死に活動していた。どこかで聞いたことがあるんだけど、どこで聞いたか思い出せない。

進路説明会の時だったっけ。まあ、ここら辺の地名を冠した学校名だし、わりと優秀で名門な学校らしいから、そりゃ耳にはするよね。

いやでも、そんな薄い感じの記憶じゃない気がする。何かもつと身近に……。

「まあいいや」

「いやあ、本当に良かったー！！　まさか、リズがこんなにあっさりオーケーしてくれるなんて！　その日は国民の休日だから部活も全部休みなはず！　僕……いや、俺のところも休みだしね！」

拳を突き上げて、超絶嬉しそうだ。アレンの後ろを通過した人にぶつかりそうで、大変迷惑だ。まるで、私がそうさせたみたいじゃないか。腹立つし、すごい五月蠅い。

「そっちのいいやじゃないんだけど。……というか、部活も無しかあ」

「口実が一つ減ったじゃない。」

あえてマイナースポーツを増やして全国大会を狙ううちの学校のスタイルだと、部活に関してはかなりシビアだ。そのおかげで、毎年ほとんどの部活が全国大会に出場するという成果をあげている。その部活を口実にすれば、上手く撒けると踏んでたのに。適当にお腹痛いとか言ったら、家まで上がり込んできそうな気配がするから、雑にあしらうのも難しい。これは困った。

「うーん……」

納得してもらえそうな言い訳は……。尚且つ、余計な心配をかける断り方は……。そして一番は、私の体裁が守られる選択を……。文化祭自体、行くことは構わない。でも、この野郎と一緒にいくくらいなら、私は断然一人を選ぶ。もしくは……。あ。そうか。

「カシミーヤって、アリスお姉ちゃんが行った学校だ」

「え？　アリスお姉ちゃん？　リズにはお姉さんがいるの？」

怪訝そうに顔を近づけてくる。私は机ごと後ずさって、距離をとる。今度は、後ろの席の男子が嬉しそうだった。ここには敵しいないのか。めんどくさい。

「いや、アリスお姉ちゃんはそのうちのじゃない。何となくお姉ちゃんっぽいから、昔からそう呼んでるだけ」

「ふうん。そうなんだ」

本当はルーみたいにアリスって呼びたいけど、私にはハードルが高い。少なくとも、敵だらけの部活を卒業しない限りは。

こいつの興味心は私だけではなく私の周囲にまで及ぶのか、さらに詰め寄ってくる。

「そのお姉さんはカシミーヤなのかい？」

「そうよ」

「じゃあ尚更見に行かないとだね！ 今年は劇をやるみたいだから劇か。面白そう。」

大方、ルーが王子様役でアリスお姉ちゃんがお姫様役とかになってるんだろうなあ。あの二人、ちよつとないくらい役にはまってるんだもん。ザ・王道！ って感じで。昔から、おままことをすれば私は、二人の娘役ばかり……。ホント、溜息でちゃうよ。

でもその溜息は、不安定過ぎる二人の距離感を見て、呆れて出たような気がする。二人とも、ホントに不器用だから。

でも、まあ、それが見ていて楽しくもある。ちよつと邪魔をしながらなってしまう。横取りしたらどうなるんだろって、勝手にドキドキする。

今回はそれに免じて、行ってやるか。

「まったく、仕方ないわね……」

私の気怠げなセリフを皮切りに、クラス中がどよめいた。

それもそのはず、私がアレ男性ンの申し出を受け取ったのは、初の事例なのだ。そこにどういう理由があったとしても、それは間違いなく肯定だ。

それだけが癪に障ったが、今回限りで我慢しよう。文化祭だって今回限りなのだから。

「し、仕方なくよ仕方なく。アリスお姉ちゃんを見に行くの」

「……………」

こんなことでしょげるアレンではないはずなのに、急に静かになった。どこか遠くを見つめて、何か別のことを考えているような表情だった。

そうやって静かにしてもらえないのは非常にありがたいことだけれど、今はどうしてか不安になった。

「ど、どうしたのよ」

「あ、ううん！ やった！ リズとデートができるぞ！」
アレンの目の前で手を振る。

その時に、そいつがいつの間にもやら中腰になって、私と目線を合わせていることに気付く。

「浮かれんなアホ！」

私は声を張り上げて、劇的にそっぽを向いた。

そして、今まで会話が成立していた事実を忘れたがごとく、事務的な動作で次の移動教室授業の準備に取り掛かった。もちろん、視界の中心には時計を捉えて。

そうして教室を出る時、ちらりとそいつの方を見てみた。

いきなり大声を出されてびっくりしたのか、腰を抜かして地面に這い蹲っていた。

私はしてやったりと思った。思いながら、一人で教室を出た。
わかんないけど、何となくむかついて、深呼吸した。

「ふう……」

でも、「暇」ではなくなったような気がする。

ゆっくりと。(後書き)

【あとがき】

まさかまさかのリズ編。そして変な新キャラも登場。

百合を際立たせるための男性キャラだと、私自身存在を許していません。男子と女子があって初めて、百合って成り立つと思うのです。隠れてこそこそいちゃいちゃするからこそ応援したくなると思うのです。

アレン君をデイスっているわけではないです。(アレン君はしばらく登場しません)

第一章の一話目ほどに、作品のテーマが「男尊女卑払拭」と言っていたのを覚えておいででしょうか。

そこに関わってくる話でもありますので、どうぞ存在を許してあげてください。

リズ編は特徴的な書き方を試みていて、『リズに感情移入して、感じたことをそのまま書く。体よく』というスタイルをとっています。

感情はその場ですぐ変わったりしないものなので訂正もしない、というのが面白くもなかなか難しいところでもあります。

ルートの妹(想い人)というかなり重要な立ち位置ではありませんので、要注目かもしれないです。作中最も女の子らしくて、私もかなり気に入っている人物です。

【remember】Who's Route? (前書き)

【まえがき】

“誰の道なんだ?”

『Remember』Who's "Route"?

少女は昔から、家の中で遊ぶよりも、外で遊ぶ方が好きだった。何をするでもないけれど、外を駆けまわったりするのが好きだった。友達はみんな家の中でおままごとをしたり本を読んだりして過ごしていたが、その中でその少女だけは、外遊びに夢中だった。

親の目には、外遊びをすることは健康的で印象よく映ったが、一部のごっこ遊びなどに対して嫌悪感を示すことが、気がかりでならなかった。

ある時、父が尋ねた。

『お外で遊ぶのは好き?』

少女ははっきりと即答する。

『うん! 好き!』

予想通りの答えだった。悟られぬよう努めながら、質問を重ねる。

『おままごとはしないの?』

少女はまた、朗々と言い切る。

『いっつもお父さん役だから、嫌!』

父は探りを入れる。

『お母さん役、やりたい?』

少女は表情を曇らせて、言葉を濁す。

『んんー……。それより外で遊ぶ方が楽しいから……。』

その答えに、父は心配と期待半々の感情を抱いたが、それは徐々に期待に支配されていった。やはり、親というフィルターの補正は根強い。

幾数月が経って。

少女の週末はいつも、父と山に登ることで消化された。綺麗な風景の写真を撮ることが父の趣味だった上、学校の宿題で日記を書かなくてはいけなかったので、少女にとってみれば好都合だった。何よりも、外出して自然とともにあることが、その少女にとっての幸せであることに変わりはなかった。

比較的険しいと評される山々も、少女にとってみれば遊び場に相違ない。

そうして毎週毎週と山に通っているうちに、少女は少しばかり顔の知れた存在になった。

そんなある日のこと。少女と父はいつものように山登りに行っていた。

所は、山の中腹あたりだった。

下山してきた父と少女が休憩をとっていると、登山中の男性が、二人の隣に腰かけた。

「君、いつもすごいね……。おじさん、もうへとへとだよ……」

「はははっ！ おじさん、コーチなのにダメダメだね！」

「ははは……。若いつていいね……」

その男性は、登山をトレッキング用のコースの一つとして利用する、スポーツインストラクターだった。毎週通い詰めていた少女は、同じ道に行くその人といつの間にか親しくなっていたのだった。

単に、お弁当を交換したと言う縁で懐いているだけかもしれないが。

「ねえ、お父さん。休憩、もういいでしょ！」

「いや……。もう少し休ませてくれ……」

「ははは！ 本当に元気だねえ、君は！ 見ているとこっちまで元気になってくるよ」

そうやって、自然と距離が縮まる。焦らずゆっくりと、煮詰めるように親睦が深まる。

山とはそういう場所だった。

少女も幼いながらに、それを理解した立派な登山家の一人である。

「ええー。先行つちやうよー」

「それは危ないからダメだ」

頬を膨らますことはあっても、そう言われれば少女は自制し我慢する。

学校でも、先生の言うことはよく聞き、善悪の判断もきつちりと付けられる。少女は、所謂『できた子』なのだ。

そんな様子は、親睦が深まれば自然伝わってゆく。

インストラクター指導者の瞳にはさぞかし、美しく映ったのであろう。

「ねえ。もしよかつたら、うちのチームに混ぜってみないかい？」

「おじさんのチーム？」

「そうさ。おじさんはこんなでも、チームは強いぞー！」

「そうなんだ」

愛想で受け応える少女は、コーチの話にあまり興味がなさそうだった。話の中身を覗いてみれば、あるいは変わるのかもしれないが、好奇心が薄れていることに勘付いたのか、コーチは話を逸らされないうちに結論を急ぐ。焦燥のために口早になってしまうが。

「登山も軽々とこなしちゃうし、おじさんにお弁当を分けてくれる優しさもある。前に、お父さんから聞いたけど、テストも毎回百点だって言うじゃないか。それに、軸のぶれない歩き方……。どれをとっても、逸材だよ！」

少女は頭の上に「？」を作って、首を傾げてしまう。コーチの剣幕に当てられたというよりは、意味を理解しての疑問符だろう。

それを聞いていた父が、簡潔に要約する。

「すごい素質があるから、チームに來ないか、だってさ」

結局は、コーチの言った結論に帰結した。

未だ「？」が消えない少女に追い打ちをかけるように、コーチが

放言する。この場合、父に追い打ちをかけていることになっているかもしれない。

「楽しくなかったら、全然、すぐ抜けてもいい！ その間までの月謝も入会金も、全額免除にするよ！ これは登山家のよしみもあるし、君の才能を見込んでのこともある！ 一度でいいんだ！ やってみてはくれないかい？」

コーチの本気度が通じたのか、父は少し考えた。

答えなど、考えるまでもなく決まっていたが。

「どうだい？ やってみるかい？」

父は少女に問うた。

子供に好きなことをやらせて、伸びるものはとことん伸ばしたいという、純粹な親心がそうさせた。

昔から外遊びが好きだった少女。その遊びは駆けっこだったり、それこそかくれんぼだったりした。けれど、その遊びには明確なゴールはない。だからこそ、終わりが無くていいのかもしれないが、遊びは永遠ではない。

そこに、目標ゴールを設けることによってどうなるのか　はたまた、突き抜けてどこまでも行ってしまうのか、それを見てみたかったのかもしれない。

少女の答えは、思案の外早かった。

「やって、みたい……かも」

次の瞬間、やまびこが歓喜の声を告げた。

そうして少女は、新しい世界を知ることになる。

『Remember』Who's "Route"? (後書き)

【あとがき】

いつも通りのサブエピソードではありません。

最初から読んでくださっている人は「?」な内容だったと思います。
す。

これから、物語はどんどん発展していきますので、頭をゆっくり
整理しながら読んでみてください。

この夏、一番静かな部屋。（前書き）

【まえがき】

今章はサブエピソードの多さも相俟って、視点変更がたくさん出てきます。

一つ一つ整理しながら読んでみてください。

本編です。

この夏、一番静かな部屋。

「掃除つて……。よりによってこの部屋か……」

「かいちよーが隣の部屋におるからサボるにサボれんぞ」

生徒会長権限だとか何とかで放課後の清掃を免除された僕は、同じく清掃を免除されたサクラとともに、生徒会準備室にいた。清掃を免除されるには当然理由があつて、それがまた清掃なのであつた。それ故に、免除のありがたみを感じることはない。

それに、場所が場所だ。相手が相手だ。

「ご、ごめんねサクラ。巻き込んだじゃつて。嫌なら全然僕一人でもできるから……」

「何を言うてる。お主とわしの仲じゃろつて。それにかいちよーの頼みでもあるしおう」

サクラはえへんと胸を張って誇る。夏服が眩しい。

生徒会長と仲が良いというのは、確かに気分がいいことかもしれない。だが、そういう意味で言ったのではなかった。

この『生徒会準備室』という空間に、僕とサクラが、二人でいるというのが問題なのだと、暗に示したかつたのだが。

とりあえず、冷静になつて業務に徹すれば、無駄な感慨など起こさずに済むかもしれない。トライしてみよう。

「そ、そっかありがとう。じゃあ、さっさと終わらせちゃおうか！」

「そうじゃな！」

「文化祭で使えそうなモノを集めて、それ以外は綺麗に整頓してつて、会長結構ざっくりだな……。見ればわかるつて言つてたけど……」

奥の方にちらついている古めかしい書類は使用用途ごとに整然と

陳列されているのに対して、手前側の一番目につくところは、かなり雑然としていて汚かった。最近使ったとみられる卒業アルバム以外は、満遍なく埃を被っていて清掃意欲を著しく削ぐ。

前会長と現会長の性格の差を物語っているようで、少し面白かった。

サクラがその卒業アルバムを手に取って、呟く。

「こないだかいちよーと見たアルバムじゃ。これ」

「会長と？」

明朗で活動的、じっとしているのが苦手そうなサクラが、そんな肅々と過去を見つめるのかと意外だった。

運動している時には照る炎のように奇を衒うその紅茶色の髪も、書物の前ではうつらうつらと傾く灯火になってしまふのだろうか。

「サクラもこういうの好きなんだね。僕もアルバムとか観測日記とか、昔の記録を見るのは好きなんだ」

「気が合うのう！ わしも、過ぎ去った他人の過去を掘り起こす感じが好きじゃ！ かいちよーのあだ名のせんすはなかなかじゃったわい！ めははー！」

「こらっ」

僕の知る追憶とは明らかに違う気がした。

でも、それがサクラの生き方なのかもしれない。

思い起こす過去を作っていくよりも、経験できる現在を満喫する。それが自然と、未来を明るくするだろうし、振り返った過去はきつと、悔いる必要などありはしない真っ直ぐな一本道になっていることだろう。

それを体現したようなサクラの生態とは、『本能』そのものなのだと言っても過言ではないと思う。

その本能を曝け出すように、サクラは体当たりするがごとく僕との距離を手荒く詰める。気圧された僕は後退して、後ろに山積みになっっていた書類にぶつかりそうになる。

「っと……。き、急にどうしたのサクラ」

「のう、るーとよ。わしと二人きりじゃぞ」

サクラは柔らかい声を作って、僕の襟を締めていたタイを緩めた。サクラという人物を知っていても、心臓は勝手に鼓動を早める。

緊張と焦りを隠そうと努めると、慣性で裏声になる。

「えっ……！ はっ、えっ、う、うん。そうだねっ」

「ぬふふふ……。二人でしかできないこと、しよう……。なのじゃ」

二人でしかできない事とはなんだろうと疑問視する時間も無く、タイを引き寄せるのと併行して、顔を近づけてくる。僕がその答えを出せなければ、サクラが答えを出すつもりなのか。

思考を巡らせようにも、首筋に生暖かい風が当たって気が散る。

その度に鼓動は早くなり、冷静な判断ができる心拍数からかけ離れていく。

終いには 僕って節操ないな…… という諦念の心意が脳裏に響いた。

時間稼ぎをしようと思いつたときには、すでに互いの息がぶつかり合う域まで達していた。息を当てないよう。視線と顔を逸らしてぼそりと口を動かす。

「じ、自己紹介とか？」

「そんなの必要ないじゃる。……ん？ 二人でしかできない自己紹介……。もしかして、そういうふれいかのう？ だとすれば気になるのう。詳しく教えてくれんかのお……。！」

猫撫で声のサクラが、僕のあばらをゆっくりと指でなぞっていく。それを追うように、背筋に悪寒が走り鳥肌が立った。腕にまで到達したその鳥肌を見つけたサクラは、卑しくも憎めない確信犯の顔つきで上目に微笑んでいた。

「ぬふふっ……」

「じ、自己紹介は無くてもいいかな……」

「ほう。そうかそうか。じゃ、さっそくするのじゃ！ 気持ちよくしてやるぞー！ とりあえず服を脱ぐのじゃ！」

あばらを伝っていた指は、そのまま緩やかに直下して上着の裾に

辿り着く。そして、流れるように裾を撮むと、今度は来た道を戻るように直上していく。

何となく察した僕は、サクラの手ごと上から抑え込む形で、上着の裾を真下へと引っ張った。反動で襟元が少し苦しくなったが、それどころではない。

「いやいやいや！　ここ学校だから！！　脱がないよ！？　というか、掃除しなきゃだし！　……って、背中摩さすらないで！　変な汗かく、から……！」

僕の制止をすり抜けたサクラの手は、いつの間にか背中に回り込んでいた。痒い所をピンポイントで探り当てていく割に摩るだけだから、変にもどかしい。不思議と　もうちよい強く！　と求めてしまふ。

なるほど。気持ち良いってそういうことか。

「お。する気になったか？　急に体の緊張が解けたのう」

「す、すごいねサクラ。そんなのわかるんだ」

「そりゃ長生きしとるからのー！」

「同じ年でしょ」

一笑して沈黙があつて。

今度は、サクラが落ち着かない様子で尋ねてきた。

「のう……？　本当にするのか……？　ここは学校じゃぞ？　隣には会長さくらもおるし……」

「サクラから言ってきたんじゃないか。それに、そんなにまずいとでもないし。すぐ終わるでしょ？」

「や、やろうと思えばの……。じゃが、声が漏れるかもしれんぞ？」

「こ、声？　ああー。声出ちゃう人いるよね。そこは我慢かな」

「が、我慢じゃと！？　おぬしなかなか……」

困ったり、感心したり、サクラの表情がころころ変わって面白い。人生経験の違いなのか何なのか、そんなにも表情豊かであることが切に羨ましくもあつた。

「それじゃ。しよっか」

「お、おうう……。わかつたのじゃ……。じゃ、服を脱ぐのじゃ。安心せい、わしもちゃんと脱ぐぞ。それとも、脱がすかの？」

「それなんだけど……。やつぱりさ、ここで服脱ぐのは恥ずかしいから、背中側だけとかじゃダメかな？ 他人に、見られるし……。」

「ばばば、背中じゃと！！？？ おぬし、ますます……。」

「バツク？ うん。順番でいいよね？ ……あれ？ でも、これって、別段二人じゃないとできないってこともないような気がするけど」

「ななななな、何を言つとるんじゃお主はっ！！ まさか3び……。まあいけんことも無いが……。それは、わしでさえハードルが高いのじゃ。るーと……。わしはお主を甘く見ておったわい……。顔色一つ変えずにそんなことを……。未恐ろしいのじゃ」

サクラがひどく汗をかき始めた。背中を他人に触れさせると言うことは、一定以上の緊張があるし、その相手が友達であったりすれば尚のこと気恥ずかしさも増す。そして、その光景を第三者に見られるという背徳感は、比類ないだろう。

確かに、これは三人以上でするべきことではないかもしれない。

でも、今はサクラの言う通り二人きりだ。

僕はサクラから一本取ったつもりで浮ついた気分、サクラ自身の言葉を武器にする。

「サクラ、大丈夫？ 今は二人きり、でしょ？」

「ぐぬう……。そうじゃな……。取り乱したのじゃ……。気を取り直して、始めるのじゃ……。初めは慣れんかもしれんが、すぐに気持ち良くしてやるのじゃ。変に力を入れずに、りらつくするんじやぞー」

サクラはそう言つて僕をしゃがませ、強引に後ろを向かせる。

途轍もない違和感を背中に背負っている感覚になる。山積みになった書類を目の当たりにしてふと冷静になると、今していることが異常であることがひしとわかる。

そうは言っても、引き下がることはもうできないのだが。

サクラを納得させる答えもまだ見つかっていないし、強引に押し退けることもできない。今この雰囲気、このタイミングで押し退けたら、色々と誤解を招くかもしれないし。

だから、僕は黙って施術が終わるのを待つしかないのだ。

「ひゃっ」

急というのもあったし、舐めるような触り方だったというのもあって、裏声が出る。それに驚いたのか、サクラの体は一瞬、びくつと反応した。

「な、なんじゃ。ふともをいじっただけじゃぞ」

「ご、ごめんっ。急にそんなとこ触るからびっくりしたよ……。と
いうか、早速違つところじゃないか……」

「まあ、そう急くな。焦らすのも大切じゃろつて」

甘い声で言ったかと思えば、また太腿を撫でられる。今度は前振りがあつてからだだったので、驚きはしなかったが、いやはや何とも
もどかしい。

太腿のサクラに触られているところが、じんわりと熱くなつていく。摩擦熱が生じる程のスピードではないのだが。血の巡りが良くなっているのだろうか。

それは次第に『痒み』と似た感覚をもたらして、僕は比例して高揚する。

「サ、サクラ……」

「むふふ……」

サクラの吐息が首筋に当たって、そこもまた熱くなる。腰回りを這う手つきに気管が呼応して、腫れているのではと錯覚するほどに息苦しい。サクラの思つままに感覚を操られているような感じがして、もどかしさはたまるばかり。これを一気に開放すればどんなに心地よいだらうか。

冷めやらぬこの感情を形容するなら、まさに『興奮』ではないだろうか。

決して変態的な意味ではなくて。いや、今はその節もあるけれど、そう言う意味で、この行為は危険な気がした。誰かが止めに入らなければ、どこまでもいつてしまいたいような、そんな気が。

いつもは何も感じないサクラの声ですらも、少しばかり艶めかしく聞こえてしまう。

「むふふ……。思い出すのう」

「お、思い出す……。？ な、なにを……。？」

「この部屋で思い出すと言えば、アレしかなかるう？」

「あれ……。？」

「えすえむぶれいをしたじゃろ。この部屋で」

「へっ……。？」

腑抜けた声が漏れたのは、サクラの生々しい手つきのせいもあったと思う。けれど、大部分は違った。

僕は、独特な片言で語られるその単語に、聞き覚えがあった。

そんな腑抜けた過去を一つ一つ洗っていくと、綺麗に浮き彫りになる記憶があった。これこそが、「二人きり」に相応しい話題だ。

僕はすぐさま振り返る。思いの外、サクラの顔が遠くにあったので助かった。近くにあつたら、『興奮』でまた答えを忘れてしまっそうだったから。

押し退けるどころか引き寄せるくらいの勢いで、僕はサクラに問う。

「ねえサクラ。『願いの夢』について少し聞きたいんだけど」

それが、サクラの言う「二人でしかできないこと」に対する僕の答えだった。

不正解などとは言わせない。そういう意気込みが、僕とサクラの距離を急激に縮めた。

「な、なんじゃ急に。せつかくのむーどが台無しじゃぞ?」

「それはごめん……。でも、ムードって要るのかな」

「何を言っておるのじゃ! 必要も何も、こつこつのはだいたい雰
囲気じゃろ! その時の雰囲気で、今日はどこまでいけるのかーと
か、決まるじゃろ! 普通!」

「そ、そういうものかな……。たかが背中を搔くだけなのに……」

「背中をかく……?」

唐突に、サクラの顔から生気が抜ける。そうして、ポカンとした表情のまま能面のように固まってしまった。

「あれ? 違うの? さつき、背中搔いて気持ち良くしてくれるつて……えっ? もしかして、僕、勘違いしてた?」

氷のように冷え固まったサクラの表情を溶かすべく、身振り手振りを交えて必死に弁明を試みる。けれど、何を間違えたのか明らかでなかったせいで、すべて空回りした。

てんやわんや右往左往していると、サクラの溜息が僕にブレーキをかけた。

「はぁ……。わしが悪かった……。お主はこつこつやつじゃもんな
……」

「はっ! えっ? あ、ちよつ、待つて!」

サクラが立ち上がったって背を向くと、距離が一気に開いた気がした。こんなにも近くににいるのに、このままでは二度と触れ合えないような、そんな恐怖に駆られた。

思わず伸ばした僕の手は、見事サクラのシャツの裾を捕まえた。

「なんじゃ」

「とと、とりあえず座ろう!」

「はぁ……。なんでじゃ。お主と座ってすることなど無いわ」

「まあ、いいからいいからっ」

多少強引に肩を押さえて、必死で食い止める。

サクラは面倒そうにその場にしゃがむが、顔は出口の方を向いていた。

「ごめんねサクラ。僕、本当に鈍感なんだと思う……」

「ふん。そんなのは別にいいわい」

「何したらいいかわからないけど……これでどう？」

「ふうぬ!?」

シャツの背中側の裾を軽くたくし上げて、その隙間から手を突っ込む。恐る恐る侵入していった手を、人肌に温まった温風が包み込んでいく。それはさらに少し湿っていて、指の間に絡みついてくるけれど、決して気持ち悪くはなく、むしろ安心した。

同じ安堵をサクラにも提供できていればいいなと切望しながら、僕はサクラの小さな背中を撫でるように擦った。

「はっ、はっ、なっ、急になにをしようとるんじゃお主は……!」

「あ、ごめっ! 嫌だったなら、すぐ止めるから!」

そんなことを言わないで、本心は直ちに止めたかった。

柔らかかそうな見た目通りの柔らかい感触と、桜のような甘くて切ない匂いが、僕の脳を襲った。手の甲に彼女の下着が擦れる度に、意識が遠退いていく。

いけないことをしているような背徳と、取り返しのつかない羞恥に晒されている現実が、処理しきれない膨大な妄想を象って、思考のキャパシティを優に超えていった。超過した部分はそのまま汗になって額や脇、背中から噴き出して止まらなかった。体はこれ以上ないくらい熱いが、おかげで多分、暴発はしない。

僕は現実逃避をするのも忘れて、無心で彼女を癒そうとした。

狭い部屋に響いたのは、蕩けてしまっような彼女の甘い声。

「ふあああ………あん……!」

彼女もまた、無心なのかもしれない。

ならば僕は、このまま空っぽの彼女に陶醉してしまっても問題は

ないのだと思う。しかし、人形やぬいぐるみを愛でるのと似て非なる感情だった。

生きているのに応えてくれない確信と、生きているのに答えない絶対とが混在乱立して、生徒会準備室は学校という枠組みから逸脱浮遊した。

僕が、彼女が。浮かれているからだ。

「サ、サクラ……！ 僕、これ以上はもうダメ……！」

「続け………のじゃ……っ！」

「サクラってばあ………」

「やじゃあ……。も、もうちょい左じゃ……！ ふああ、そこじゃああ……っ」

空気が狂い始める。浮遊して、大気が乱れたからか。

どのくらいの時間が経ったのかとか、あとどれくらい続くのかとか、この空間で起きていること以外考えられなかった。

「のう、るーとー……。前も……前もやって………」

強請ったサクラが半身を翻そうとした瞬間だった。

いつも浮遊しているような人よりも、今の僕たちの方が、断然高いところを飛んでいると言っても過言ではなかった。

「なな、二人で何をやっとなるーっ！！ けしからん！！ そういうことをやる時はワタシを呼べー！！！！！！」

落ちた衝撃で、僕はしばらく寝込むことだろう。

この夏、一番静かな部屋。（後書き）

【あとがき】

ちょっとあだるていなお話でした。

サクラ×ルートという組み合わせは、書いていても見てもハラハラしますね。

危ないことをしようとするサクラと、その勧誘を断れないルート。ルートは危機回避能力が高いので、二人ならなんでもできてしまいそうです。

そういう意味では、相性のいい二人なのかもしれません。

次回はルート編の続きです。

お告げが、聞こえる。(前書き)

【まえがき】

ルース編の続きになります。

本編をどうぞ。

お告げが、聞こえる。

八畳ほどの部屋に、大きな長机が一つ。机を囲むようにして備え付けられた六つの椅子は、教室にあるものよりも幾分か貧相で、経費削減の痕が見受けられる。扉がある面以外の壁には壁一体型の本棚が設置してあって、少し息苦しい。その一部分だけを切り取ってできた窓は、さながら虫かごの空気孔のよう。部屋の隅には純白の百合がひっそりと一輪だけ咲いて、仄かに香っていた。

本好きである初代校長の書斎だった部屋を改良しただけあって、本の虫が好みそうな部屋である。

いつも散らかっている生徒会室が綺麗に片付いていると、何となく不和を感じてしまう。これが本来の姿だと思えない。何となく納得がいかない。

でも、片付けた本人はご満悦の様子だった。ちなみに、片付けた人は散らかした人と同一人物でもある。

「いやー綺麗になったねー！　ありがとうルートくん！　非常に助かったよ！　準備室の方もすっごい綺麗になってて驚いたよ！」
「いえ。サクラも手伝ってくれましたし」

「遊びついでじゃ」と言つて、準備室に引き続いて生徒会室の方も掃除を手伝ってくれたのだった。とうのサクラは、珍しく疲れたのか生徒会室の長机の一端で眠ってしまった。

生徒会としては少し困る位置で寝てしまっているのだが、起こすに起こせない。

「よりにもよって、真ん中で寝ちゃうとはね……。実にサクラちゃんらしい」

「そうですね。でも、どうするんですか？　このままだと、寝てい

るサクラを間に挟んで座るしかなくなりますよ」

実はこの後、合同文化祭のミーティング会場として、この場所に隣国アカデミーの生徒会長ら数名が来ることになっているのだ。部屋全体を綺麗に整理整頓したのもそのためだ。

もつと早めに対処すべきだったのだろうけど、会長の性格上、直前対応は納得である。

つまり。

「ま。何とかなるっしょ！ あ、そうだ！ サクラちゃんは人形つてことにしよう」

そういうことだった。

思わずため息が漏れる。失礼なのだろうけれど、場の流れ的に謝る気は生まれない。

この混沌とした空間で、僕だけは平常心を保とうともう一度深く息を吐く。今度は溜息ではない。

「人形を真ん中ですか？」

「うっ……。そ、そう！ サクラちゃん人形はこの学校の守り神なんだよっ！」

「んう……。む……。じゃあ……。……」

「サクラちゃん人形、何か話してますけど……？」

自分の腕を枕にして、満足げな顔で眠っていた。元々の姿勢の正しさも関係しているのか、寝姿勢もすごく綺麗だった。それがいやに寝づらそうに見えて、何となく良い枕を与えたくなる。

それは会長も感じたようだ。

「可愛いなー。サクラちゃん。妹に欲しい」

「それは

きっとそれと似た日常を、僕は知っている。

毎日毎日引つ張り回されて疲れて、とても大変。でもそれが楽しくて。知らなかった色々な面白い事を、見つけたりもできる。そしてまた、新しい愉しさを求める。

少し面倒になることもあるけれど、憎めない笑顔が愛おしい。

まさしく、妹リズのそれだった。

それは、楽しそうですね」

「おう。君もわかるかねー！！ ははは！ あれ？ そういえばル

ートくん、妹いたよね」

「あ、はい。いますよ」

その答えに、会長はどこか納得したように席に着いた。もちろんサクラの隣に。

そうして、僕にも着席を促した。もちろんサクラの隣に。本当にこれで行くのか。

内心焦っていると、会長がサクラの頭を撫でながら漠々と問ってくる。

「可愛い？」

返答する声から何か悟られてしまうのではと無意識に警戒して、頷くだけで言葉を添え忘れてしまう。かえって怪しまれたのではないだろうか。

「ふうん……そっかー。やっぱりねー。ルートくんがこの感じだから、妹さんもね、こう、なんかさ、いい感じなのかなって思って」

「ははは……」

アリスになら、見抜かれていたことだろう。

「妹いいなー……」

「会長、妹好きなんですか？」

「んん！？ 随分と切り込んだ質問だね！ まあ、好きだけど！ 大好きだけど！」

「あはは……」

僕の脳内には、過去、リズにされてきた悪戯の歴史がフラッシュバック再生されていた。喧嘩をしたことは、確かに記憶にあったが、不思議と詳しい内容までは思い出せなかった。

少しばかり補正が効いているのだろう。

「でも、いたらいたで色々大変ですよ」

例外を除いて、大概の妹持ちは「妹は嫌い」だと言う。妹が欲しいと言っている人には、「やめておけ」と注釈を入れる。

それに則って、僕も注釈を入れてみたのだった。会長は全く聞き入れていない様子だったけれど。

「そうやって苦労するのも、全部良い思い出になるんだよー！！」

そう。妹がいればね……！ なんつって！ はっはっははははー！！

「まあ、会長がお姉さんなら、サクラも喜ぶと思いますよ」

朗らかで短絡的であるところは多分、サクラからしても接している気が楽だと思う。それでいて、会長には芯があって心強い一面もある。ただのお茶らけたお姉さんでは終わらない。

会議や演説などの真面目な場でそういう一面を見る度に、そう思う。

「失礼します。生徒会長様は居らっしゃいますでしょうか」

三度のノックの後、入口ドアの向こう側から男子生徒と思われる声が聞こえた。会長の明るい声と相對した、少し冷めた、でもよく通る声だった。

その声を聞くと、自然、背筋がピンと伸びた。

正した姿勢のまま会長の方に視線を向けると、こちらと目を合わせて小声で何やら訴えてきた。

「やべえ。もう来た」

そのセリフは、片づけられて様相を変えた生徒会室にはミスマツチ過ぎる。空しく響いた会長の焦燥は、隣で目を閉じる守り神の寝

息にかき消されてしまった。

「あはは……」

そして残ったのは、一抹の冷静。

「それでは、場所の方は決まりましたので、今度は詳しい内容の方に入っていきますか」

とりあえず、第一印象は『非の打ちどころの無い人』だった。

台本代わりのパンフレットは用意してきたようだったけれど、それを滞りなく、それも僕たちにもわかりやすく弁舌できるといふところにセンスを感じる。聞き取りやすいと言うのは、割に高めの声質というのも助けているとは思うが、言葉選びも上手いようで、一発言の把握がしやすかった。そういう振る舞いからは知的な雰囲気を感じた。

アリスと似た綺麗なブロンドに清潔感のある短髪。一見、壮健そうに見えるも、優しそうな眼差しと頬のラインが均整をとっているようで、荒々しくもなり過ぎない。耳障りな音が皆無な透き通った声質と、心まで見透かされてしまいそうな澄んだ瞳は『その様相にこそ相応しい』とさえ思わせてくれる。

それに加えて、この学校の守り神が会合の場においても、「大丈夫だよ」と柔軟に対応できるだけの余裕もある。もちろん、それが守り神などではなくて、一生徒が寝てしまっているだけなのだということも知りながらである。

まさに『聖人』という感じだった。

「そそ、それじゃっ。具体的ななな、内容を話させていただきますうっ！」

おそらく聖人の正極に位置する会長は、小刻みに震えながら目を

泳がせていた。何に当てられたのかは知らないが、変なことをしていても常に毅然としている会長が、こういう反応を示すのはとても珍しい。

それも見越してなのか、聖人会長はにこやかに微笑んで、また通る声で言うのだ。

「落ち着いてルリさん。そんなに畏まらなくてもいいんですよ。あなたも僕も生徒会長ですし、ただの学生なんですから」

「は、はい！ 失礼いたしましたーっ……！」

会長の反応もここまでくると、わざとやっているのではと半疑せざるを得ない。

そついう時は、大して面白くないことを伝えると真面目になる。

「会長。真面目にやってください。……あれ？ 会長？」

会長は僕の言葉も聞き入れずに俯いてしまった。いつもは快活な印象の髪の毛も、少しだけだらしないように垂れる。垂れた髪の間から覗いた表情は、憔悴。何かを訴えようとする口だけがパクパクと動いて、声にならない声をずっと吐き出している。

「会長、大丈夫ですか？ 具合悪いですか？ 顔、赤いです。もしかして熱があるんじゃない……」

おまけに息遣いも荒く、呼吸が乱れていた。

これは完全に健常者の行動ではないと思う。聖人会長が来る直前までは、あんなにはきはきと活動していたのに。あまりの徳の高さに、解毒され過ぎたのだろうか。

背中を摩つてあげようと触れた瞬間、会長の体全体がビクツと反応した。そして、ふうと深呼吸が一つあってから、弱々しい声はどこからともなく聞こえてきた。

「時間経てばなおるから……」

一瞬、誰の声だろうと思って、周囲を見渡した。

目の前には聖人会長が心配そうに様子をつかがっていて、隣にはサクラが小さな寝息を立てている。当然、声の主は会長である。

一体どうしたのだろう。

対極的な二人の会長を交互に拝み見て、最後は聖人会長の方を向いた。聖人会長が僕法へと目配せしたからだ。

「ルリさんが緊張してしまっているみたいだから、代わりに、説明お願いできるかな」

「わかりました」

らしくない会長が少しばかり腑に落ちなかつたけれど、こういう事態になってしまったのだ。致し方あるまい。文化祭の内容については、以前より会長と話し合いを重ねているので、説明できないことはないはずだ。

とりあえず、自分たちで用意したパンフレットを片手に、対話の口火を切ってみる。

「え、ええと……まずですね……」

文化祭の概要については、あらかた頭に入っている。説明するべきこともわかっている。あれもこれも、説明しなければならぬ。

さて。どこから手を付けていいかわからない。

頭だけが体裁よく回転して、肝心の言葉がついてこない。口はパクパク何かを訴えようと、必死でいる。

勘繰られてしまったのか、聖人会長は僕たちの作ったパンフレットを手にとって、くすりと微笑んだ。

「それじゃ、始めようか。まずそちらの、カシミール校の出し物の概要についてなのだけれど。いいかな？」

「はい、もちろんです！」

また一つ、微笑みを貰える。初対面のはずなのに、何か良い所を褒められたようなそんな気がして、少しだけ心が軽くなる。

「カシミール校は、学年ごとに異なったジャンルの出し物をするようになっていきます。まず一年生が体育館で劇をやります。全クラス合同で一つの劇を完成させるのですが、演目時間によってクラス分けがなされています」

毎年劇をやるのは一年生と決まっているらしいが、それを決めたのは会長ではなく本好きの初代校長らしい。なんでも、気に入って

いた長編小説の内容を劇という形で見てみたかったようで、小説の登場人物たちと同世代であった一年生にスポットライトを当てるところになったという。

それが代々受け継がれて、ずっと同じだった演劇の内容も生徒会監修のものへと形を変え、来たる今日こんにち、生徒会主催終日演劇という伝統となっているのだ。

「一年生の劇は文化祭最終日の三日目、体育館で行われることになっています。三日目は日曜日なので、お客さんもたくさん来ると思っています。忙しくなり過ぎないように、クラス分けは余裕をもって行いました」

「なるほどね……。ルートさん、ありがとう。続けて」

包み込むような紳士的な声で、呼称される。何となくドキリとして、嬉しかったり嬉しいのを抑え込んだりで感情が落ち着かない。

その高揚の内訳には、“名乗った覚えがない”ことも含まれていたけれど。大方、会長が話していたのを聞いただろう。不思議はない。

「二年生は、校内各所で芸術作品の展覧を行います。大きなものは中庭や屋上庭園に、絵画や彫刻などは美術室を中心に廊下全面に飾ります。一般来賓の入場口に投票用紙を設置して、投票の多かった作品は、学校推薦作品としてそのまま秋の国際芸術展へ出品することが決まっています。集計は僕たち生徒会で行います」

「それは、僕たちの学校の三年生のと合わせて展示するんだったよね」

「はい。えっと……、研究成果の発表でしたよね」

聖人会長の学校は、国外でも有名な名門校だ。世に言う偉人たちが、現在も活躍する多くの科学者たちの出身校であり、募った教師陣の中に現役科学者がいたりするということもあって、高みを目指す者からの注目が熱い。前、アリスがそこを目指していたと言えば、凄さが伝わるだろうか。

そんな学校の生徒たちが集って、一つのテーマを追う。その結果

が、カシミーヤに貼り出されるわけだ。天体とか世界についての研究があるかどうか、楽しみだ。

猫に小判とは言わないが、この学校の会長を見てみると、なんとも勿体ない気がしてくるのは僕だけだろうか。

聖人会長がにこやかに頷いたのを確認してから、続ける。

「三年生の出し物は、教室に飾り付けをして、カフェなどの飲食店やワンテーマをポイントにしたレストスペースのようなレクリエーションの場を設けます。全クラスでやると大変なので、一部は二、三クラス合わせてやることにしました。食材の手配は、提携している給食センターに協力いただけることになっていきます。店の利益を八十%、センターに還元することで、了承いただきました」

「ほほう。すると、飲食店は毎年出ているのかな？」

「はい。そうみたいです。どうしてわかったんですか？」

「僕たちの学校でも喫茶店を開こうとしたのだけれどね、見事に断られてしまったんだ。同じ給食センターにね。なんでも、古くからの提携で成り立っているそうで」

「そうなんですか……。あれ？ でも」

目の前のパンフレットを手にとって、疑問をぶつけようとするのと、鋭く切り返しが来る。聖人会長は洞察力も優れていた。

「大丈夫。僕たちの学校は、複数の財閥が協力して運営しているから。ちゃんと屋台を出せるように尽力するよ。こっちの一、二年生も張り切っているから」

おまけになのか主になのか、財力もすごかった。

聖人会長側の一、二年生にはカシミーヤ校の校庭で出店屋台をやってももらえることになっていた。以前に送付されてきた設計図を見るに、校庭いっぱいには露店が並ぶみたいだった。校庭の広さを考えると、本当に『祭り』という感じがする。

疑問が解消されて、小さく安堵していると、不意に聖人会長から質疑が飛んでくる。

「レクリエーションって、具体的にはどんなものをやるんだい？」

うちに送られてきたパンフレット資料にも『レストスペース』ってしか書いてなかったから、ちょっと気になって……。あ、でも、機密だったら言わなくても大丈夫だよ」

「あ、いえ。レクリエーションは、簡単なゲームをしたりして交流をしようというものです。輪投げだったりお化け屋敷だったり、好きな本を読みながらコーヒーを飲んだりできる図書カフェ、生徒たちが思い思いの衣装に身を包んだ異色の喫茶店なんかも企画に挙がっています。手作りした衣装の貸し出しなども行うそうです」

「そっか。面白そうだね。それは、僕たちも利用できるのかな？」

「もちろんです！ 誰でも利用できますよ！」

「そっか。それはよかったよ」

それからしばらくの間、生徒会室に僕と聖人会長の声だけが飛び交って、相互の理解は深まっていった。そうして、一問一答形式の文化祭実行案は、語りつくされたのだ。

聖人会長の帰り際に、会長が小さな声で挨拶するまで、まるで部屋に二人しかいないような感じさえしていた。

「どうして急に黙ったんですか、会長。結局、僕一人で全部説明しちゃいましたよ」

何か悪いものが抜けたようにぐうたらと机に突っ伏す会長に、一つ物申す。

会長はだらしなく机に凭れたまま顔を上げた。

「いや、だって、緊張するじゃん」

「え？」

初見の相手だろうとお構いなしに突っ込んでいくスタイルで通す会長に限って、そんなはずはない。それに今回は、初見とは言え事

前に存在を知っている関係だ。尚のこと、緊張するなど考えられない。

机の上で頭をゴロゴロ転がしながら、会長が何やらぶつくさ放言している。

「あれで緊張しないとかマジ有り得ないよー。だって、あれだぞ？
いや、無理だろー。どこ見ればいいかわからんよー」

「そうかのう。わしは声質が苦手じゃ。わかめみたいにぬるぬるしててもち悪いのじゃ」

「そうかなー。ワタシはあれくらいが丁度いいかなー。聞き取りやすかったし。ってか、サクラちゃん起きてたの」

いつの間にか目覚めていたサクラも会話に参加したことで話題は逸れ、『どういふ声が好きか』という討論が始まっていた。座っている場所もさつきまでとは打って変わって、対面する形となっている。

ただその様子を見ていただけだった僕には、終わらない論争が始まる前に二人の間に割って入る義務が課せられるのではないだろうか。

「ちょ、ちょっと待ってサクラ！ 話逸れてるからっ！ そういうのじゃなくて……。えっと……、会長、結局緊張してたっことですか？」

病気とかでないのならば安心できるが、それはそれで一言欲しいものだ。

丁重に訝ったつもりだったが、会長の答えは溜息だった。言いつ添えられた言葉は、「わかってないなー」という感嘆で、さらに僕の疑念を深めた。サクラも会長と同じ身振り手振りを交えて全く同じ言葉をなぞったが、それはノリでやっているだけかもしれない。もう一度会長の方を見て、尋ねてみる。

「ど、どういふことですか？」

会長は、人差し指をピンと立ててそれを左右に揺らす。

「甘いねルートくん。天然キャラ狙ってるなら、もっとわかりやす

く尋ねた方が良いよ！ ははは！」

「るり。るーとは本物じゃぞ」

「え？ そうなの？ 本当にわかんないの？」

少々食い気味に頷いた。何がわからないのかもわからないので、ここで頷いても意味合いはそこまで変わらないと思っただ。

会長はどこか安堵した様子で、僕の肩をポンと軽く叩いた。

「なんだ。安心したぞ。ルートくんも狙ってるんじゃないかって焦ったよ、全く……。ルートくんが相手じゃ、ワタシには勝ち目がないからね」

「狙ってる？ え？」

会長は「ふう」と一息置いて、目を細めて言った。

「あの会長。かつこよくなかった？」

「えと、聖人……じゃなくて、隣校の生徒会長さんですか？」

心中では終始その呼称だったので、つい口に出してまう。本人がいたらどんな顔をしていたらさうか。聡さく賢いその人の色々な表情が想像されて、少し興味深い。

反対に、本校の会長は瞳だけでなく鼻の穴まで大きくして、若干興奮気味である。押された分だけ、僕は引く。

「そうっ！ そうそうっ！ かつこいいよね！？ 優しいしさー！」

「てんしょん高いのう」

「いやー、ワタシの好みどストライクだったんだよー！ ていうか、かつこよすぎかー！」

あつははは！ もうどうしていいかわからん！！ 助ける！！ ていうか、私の恋路を応援しろー！ セッティングとかな！ はっはっはっはっは！！

何というか、真っ直ぐで純情な会長らしいなと思った。猪突猛進に飛び込んだ壁は、あまりに高くてあまりに堅くて、ぶつかった衝撃で失墜してしまったのだろう。

会長の無言が病的なものでないとわかって安心すると、呆れにも似た溜息が「はあ」と漏れた。呆れ成分の方が強かったようで、す

べからく会長に怒られる。

「あっ！　こら！　今、溜息ついたなー！」

「あ、いや！　これは違いますっ！」

「ははは。ため息もつきたくなるわい」

「サクラまで……！　違うってば！　僕はただ、会長が急に黙るから、具合でも悪かったんじゃないかって思っ……」

「ーと、おぬし……」　「ルートくん……」

「えっ？」

二人に見つめられる。僕は何か間違っただけを言っただろうか。僕を見つめる目が、会長とサクラで一致していなくて混乱する。一つ言えるのは、二人のどちらからも言葉を貰いたくないということだった。

耳を塞ぎたい一心で二人を見返していると、言葉が二人から発せられた。

「ルートくんまでワタシを攻略する気か！　モテる女はつらいぜ、はっはっはっは……！」

勢いを取り戻した会長の声量に飲まれて、サクラが何を言っているのか今一つ判然としなかった。あんな呆れた表情から繰り出される言葉なんて、進んで聞くようなものでもないけれど。

サクラには不得手ながらに努めた愛想笑いを一つして、聞こえた方には言葉を返そう。

「気のせいですよ。会長」

二十分ほど経って。

「さて」と切り出したのは、意外にもサクラだった。サクラが帰りがたがる時刻はとくに過ぎていたが、残ると決めるといつまでも残るのがサクラだったから、少し不思議に思えた。

サクラはすくつと席を立つと、奥に座っていた会長の方を向いた。文化祭準備の手直し作業をしていた会長も、自然、そちらに注目した。

「お？ 帰るのかいサクラちゃん」

「帰るのじゃ」

「何か用事があるのかな？」

「んー……疲れたんじゃ。帰って寝る」

「そっか」

こういう時、僕は基本的に無言で傍聴していることが多い。傍聴しながら、二人のやり取りの数手先を想像するのが常だ。

今日の場合、サクラがどこでどう寝るのか中々想像がつかなくて思案はそこで滞る。アリスが噂していたように木の上なのか、それとも普通に家なのか、はたまた可愛らしい部屋なのか。

小さく笑っていると、いつの間にか目の前にサクラがいた。

「帰る」

「うん。気を付けて。僕は、会長ともう少しだけ作業していくよ。

「じゃないと、サボるからね、会長」

「じゃな……」

「ね……」

「そこ。しみじみとワタシの悪口を言わないでくれたまえ」

そこでまた一笑あつて、それからサクラがまた切り出した。背中を掻いてくれといったり、色々と変だったり、今日のサクラはいつも増して違和感がある。変なのはいつもか。

「じゃ。帰るのじゃ」

「それじゃ。気を付けるんだぞー」「また明日ね、サクラ」

そうして、サクラは生徒会室の出口へと歩く。その様子がいやにあつさりしていて、いつも通り過ぎる僕たちの挨拶が浮いて聞こえるような気がする。まるで聖人会長が 外部の者がこの部屋にいた時のような、どこかピンポイントな蟠りを感じるような、そんな気が。

僕の後ろを通過して出口へと近づいていくサクラを目で追うと、サクラが視界から消えた瞬間、淡泊な答えが返ってきた。

「えっ?」

「じゃあのー」

自分の中にあつた一つの疑問と照らし合わせている間に、サクラは生徒会室を去っていた。サクラからもらった答えを忘れないように記憶に刻もうと意識すればするほど、僕の抱いた疑問からかけ離れていく。時間は早く過ぎて、目の前の作業に集中できない。

保留にして帰ろうかと迷っていると、会長が問うてくる。

「もう遅いし、ルートくんも帰っていいよ」

言われて時計を一瞥すると、確かに、いつも帰り支度を始める時間を十分ほど過ぎてている。視線を戻して手元を見れば、半端になっていたいくつもの書類が無残に散らばっていた。

このままにしては帰れないだろうと、疎かになっていた作業を再開しようとする、会長に制止される。

「あー。いいよいいよ。あとやつとくから。別に明日のお昼休みでもいいし」

「い、いえ。これくらいはやります」

「うん。遠慮しないでいいよ。それに、生徒会長としての威厳も取り戻したいし」

正直なところ、サクラの言葉に遇された意図を考えるために、一人になれる時間が欲しかった。なので、そう言われると甘えたくない。会長の贖罪という大義名分も与えてもらえたわけだし。

「わかりました。それじゃ、お言葉に甘えます」

「うん。それがいいよ」

「会長、ありがとございます」

ふふふっ、という明るい響きとともに「ルートくんはお堅いねー」と批評をいただく。

座っていた椅子に立てかけておいた鞆を肩にかけて席を立ち、申し訳程度に眼前の書類を一つにまとめる。書類を会長に届けるついでに、一つ気になったことを解消しておきたい。

「明日のお昼休みで良いっていうことは、そんなに急ぎの書類でもないんですか？」

「んーん。急ぎだよー。でも、使うのはまた明日の放課後だから。それまでに作っちゃえばオールオッケーってことよ」

「放課後、ですか……」

そのタイミングに一つ思うところがあって、複雑な心境でもって思案に余る。

会長は訝ってくるが、核心は突けるはずもなく。

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 明日の放課後も来るんだよ。愛しの王子様が」

「そ、そういうええばそうでしたよね」

そうして会長はまた、僕に疑問を投げかける。いや、僕が疑問を探してしまっているのかもしれない。すっかり恋色に染まった、会長の果てしない吐息すらも、この世界最大の謎を賛美する歌に聞こえないことも無かった。

「はあああ……。かつこよかったなあああ……。レイル会長」

『明日、放課後、屋上、じゃ』

僕は心の中で二人に謝罪した。

四百四病の外に罹患する会長の歌の意味も、いつもと何かが違うサクラの言葉の意図にも。

僕は、求められたはずの理解に答えることができなかったのだから。

お告げが、聞こえる。(後書き)

【あとがき】

変な生徒会長のさらに変な性癖が垣間見えた今話でした。

今章は、登場人物が結構限られるので、各キャラの個性を見失いがちになります。そういう時は、『今どこで何やってるんだらう?』と想像していただくと、またさらに面白いかもしれません。

夏休みだけど、抱きしめて。(前書き)

【まえがき】

ルート編、続きです。

エンピ。

夏休みだけど、抱きしめて。

「なるほどね。それならよさそうだね」

「はい！ よかったです！」

例によって意気消沈した会長に変わって、再び僕が隣校の生徒会長レイルと話を進めていた。それでも、決して僕の独断で決めることはせず、レイル会長から事項を申告されるたびに僕がルリ会長に再確認するという手筈をとっていた。

小さく頷いたらオーケーで、小さく首を振ればエヌジーである。

この面倒なやり取りを僕と代わってくれそうなサクラは、今頃屋上で待っているだろうか。

今朝方、先日の口約束を確認すると放課後は遅れてしまうということを伝えたところ、「来るまで待っている」という言葉を貰ったのだ。僕自身の理解不足が招いた事態であることに罪の意識を感じて断りはしたものの、「寝てるからいい」と通されてしまった。

サクラが、二人きりで、誰もいない場所に、僕と、放課後、エトセトラ……と、色々と困惑を招くワードが目白押しだった。その上寝て待つほどに緊急で果報は重大な内容なのかと、身構えざるを得ない。

一晩おいて落ち着いた頭なら、そのモヤモヤを抱えながらもいくらか会話できた。

「それでは、次なんですけど……」

「あれ？ 次って、もう終わりじゃないかい？」

レイル会長に言われて自分の手元を見てみれば、両校のパンフレットとも最後のページを開いていた。最後のページに当たる注意事項は、一番初めに打ち合わせて完成させたのであった。

「あ。本当ですね」

「はははっ。ルートさん、真面目だねえ」

聖職者のような澄んだ瞳で真面目だと賞されると、何かばつが悪かった。少しばかり、過大評価が過ぎる気がして、思わず体の前でバタバタと両手を振った。

「い、いえ。そんなことは……」

「ほら。とても謙虚だし。話も上手だと思うよ。僕の質問にもすぐ答えてくれたし、機転も利く。うちの会長補佐に欲しいな」

「なっ、じっ、冗談やめてください。何も出ないですから……」

「はははっ！ 冗談なんかじゃないよ。本当のことさ。あ、でも、うちの学校は途中編入できないから、会長補佐は難しいかな」

「そ、そうなんですか……。あはは……」

会長が目を伏せる理由が、少しだけわかった気がした。

寄せられる期待が大きすぎるのだ。それが形として見えるわけではないし、レイル会長の気取らない性格のせいで本質が曖昧に見えてしまう。

期待の価値というのは、相手によって変動する。

他校であり、同世代であり、生徒会長であることで、距離感が不安定になる。期待の価値を掴むまでにかかる時間が、さらにその価値を高めていく。顧みれば偉大であることに気付く。下らないことで苦悩する自分が、途轍もなく小さく見えてくる。

これは確かに、逃げたくなる。

「そうだ！ 業務も終わったことだし、雑談でもどうだい？」

「雑談、ですか……？ そうですね……」

何を話すのだろうかという期待よりも、ルリ会長の心拍数への心配が勝った。

急にお引き取り願うのは失礼にあたるし、僕自身少しだけ興味があがる。断る理由は希薄だ。

「僕は賛成です。でも、少しだけ休憩時間を頂けませんか？」

僕がルリ会長を一瞥したことに気付いたのか、レイル会長も気を

遣ってくれた。

「わかった。もちろんいいよ。ちょうど、僕もこの学校を探検してみたかったから」

「ありがとうございます。案内できなくてすみません」

「大丈夫だよ。勝手に色々見て回るから」

至らない気持ちで頭を下げると、遠慮される。この人に真面目だと言われたことを思い出すと、本当に情けなくなる。

隣で伏せていた会長を引っ張って、席を立たせる。遠くなった床を追って、会長の体重の一部が僕に掛かってくる。少し重かった。

「どこへ行くんだい？」

「ちよつと外へ出て涼んできます」

それにしても、外が熱すぎる気もするけれど。

「そう。僕は手伝わない方がいい、よね……？」

「本当に、申し訳ないです……」

「ううん。大丈夫。それじゃ、頑張つてね。僕は向こうの方へ行ってみるよ。一通り終わったらまたここへ戻ってくるから」

そう言つてレイル会長の背中を見送つて、僕は 僕とルリ会長は反対方向に歩き出した。

行先は屋上辺りにしようと思つて会長の腕を引いていたが、会長も察したのか、途中から会長の足は僕よりも先にそちらへ向かつていた。ただ、距離が離れたから緊張が解けただけかもしれないが。

「会長つて、意外と緊張しいですね」

「なんかなー。ダメなんだよなー。先生とか先輩が相手だったら全然イケるんだけど、タメつて苦手だなー……。どう接していいのかわからん。まあ、難しい恋ほど燃えるけどね！！ あっはっはっは

っはー！」

ルリ会長の猛り笑いが、校庭中に響き渡る。校庭で部活動い勤しむ男子生徒の何人かが天を仰いで、困惑している。ルリ会長が楽しそうに手を振ると、その生徒たちはにこやかに手を振り返してくれた。気疲れして欄干に凭れていた僕も、自然とつられて手を振ってしまうのだった。

半ば暮れた黄昏の中で、空しさを感じさせることなく声を響かせられるのは、もはや才能だと思う。

「その勢いのままいけばいいと思うんですけど」

「それができれば苦労はしない。つってねー！ ははっ。てか、ルートくん！ 普通に会話するのやめてくれるかな！ ずるいぞ！

なんなんだ！ 緊張しないのか！？ あんなかつこいいんだぞ！？ 完璧じゃぞ！？ じゃぞってなんだ、サクラちゃんか！ ははははっ！」

落下防止の柵から身を乗り出す生徒会長が、この世界のどこにいるだろうか。そうやって声を張り上げて、『楽しい』を振りまいて、誰もかれも巻き込んで、全部笑顔に変えてしまえる人なんてきつとここにしかない。青々と茂る屋上庭園の管理者でもある、ルリ生徒会長しか。

それを曇らせてしまうルリ会長を、僕は好きになれなかった。

「相性悪いんじゃない……」

そう。言わば、雲と太陽のような。

全てを照らすのが太陽だとすれば、それはルリ会長の形容だと言つて相違はない。その反対となると、雲が妥当に感じる。

見た目こそ純白で壮大だが、時に雨を降らし雷鳴轟かせる神聖な様は、非の打ちどころの無いルリ会長に合っている気がする。別段、悪く言っているわけではないけれど、雲に隠された内部に何かあるのではと疑念を抱かざるを得ない。聖人だつて、人なのだ。

「そんなことはないはずだ！ 根拠はないけどな！ あ、わかったぞー！ ワタシとレイル君の間にルートくんがいたから、自然と逃げ

てたのかもしれない！ ワタシはビビりだからな！」

「全然説得力無いです……。というか、逃げてるじゃないですか……」

「言葉の綾だ！ 逃げるっていうか、ルートくんにくっついてたかったんだよ！ ワタシはルートくんのこと好きだからな！ 別に変な意味はないぞ！」

とりあえず「ありがとうございます」と口を動かしておいた。情がこもっていないのは、この場合、致し方ないことだ。

「ルートくんに見縊られてしまった。ははははっ！」

「そ、そんなことないですよ。ただ、一人で応対するのって結構大変だなんて、そう思っただけです。会長はずっと一人でやってきたんですもんね。すごいです」

一瞬、きよとんとした表情になったかと思えば、直後、会長は笑いつつ髪の毛を掻き混ぜて照れた。褒められ慣れているはずだけど、それにしてもわかりやすい反応だった。

「ルート君は褒め上手だなー！ 頑張れそんな気がしてくるもんないー」

肩をポンポンと強めに叩かれる。威厳を取り戻そうと必死だったのか、打点がそれなりに痛かった。

会長はそうやって僕を何度か鼓舞した後、決まりが良くなったのか「ふう」と一呼吸おいた。僕もそこで小休止を入れることで、心持ちを白紙に戻せた。

「でもやっぱ、ありがとうだなー、今は。ルートくん、ワタシのと気遣ってくれたんでしょ？」

屋上庭園へと訪れた意味は、会長の心を落ち着かせるためだった。それが落ち着いたのであれば、本望だ。そうしないと自分が困ると言つのもあるし、他に方法が思いつかなかつたと言つのもあるけれど。

会長の問いへの答えは、すぐに出てこなかった。そうして僕が沈黙を呈する前に、会長が会話を勝った。その瞳は、いつもの会長ら

しく自信に満ち満ちていて、僕の心を期待と不安で一杯にさせた。

「じゃあ、ワタシ戻るね。ルートくんはもう少しここにいます？」

「そうします」

「そっかー。じゃあ、レイル君と二人きり、堪能してきます。よろしく！」

「が、頑張ってください……？」

何かよろしくされたが、いささか難義であった。

会長の背中に手を振って、屋上出入り口のドアが閉じる時に出る重い音を聞く。なんだか、この音を聞くと無性に空しくなる。寂寥感とでも言うのだろうか。『世界に一人だけ取り残された感覚』を再確認するようで、得も言われぬ感情が芽生える。僕以外の誰にも、到底理解できないであろう感情が。

妄想は急速に拡大していくが、日が暮れるスピードには到底叶いそうもない。

気付けば辺りは暗くなり、それまで明るみに出していたすべてのものは、余熱でもって存在を知らしめ、庭園の樹林の影はすっかりと闇に変わって、そこにいた。桜の幼木の影になっていた自分の姿も少しばかり曖昧になってきて、孤独である今を把持しようと、自然、足運びは開けたベンチへと迷い無い。

そろそろ月明りが太陽の代わりをしようかという時だろうか、雲ではなくて月でもよかったかなと、ひっそり反省する自分がベンチに座っていた。

「やっとな終わったかのう」

「待たせちゃってごめんね。サクラ」

ある程度は予測していたので、さして驚きはしなかった。それでも、まさか一番小さい木の中から出てくるとは思わなかったので、少し面白かった。同じくらいの背丈の木に、どうやって忍んでいたのか謎であるが、それがサクラだと言えば頷くしかないのだ。

僕が少しずれると、サクラは肩やスカートについていた木の葉を払って、空いた場所に仰々しくどっかりと座った。

それから、数秒の沈黙があった。元々サクラの言葉を待つ立場であるからか、特に居心地が悪いと言うことはなかった。

「昨日は悪かったのう」
切り出しはそれだった。

いくつか立てていた推測のどれとも合わなかったので、思わず首を傾げてしまう。

「背中じゃ」

「あ、ああ……。あれは、その、僕もごめん……」

罪悪感と羞恥心が同時に襲ってきて、今すぐにも顔を覆いたくなる。きよろきよろと庭園を見渡しても、入れそうな穴は見当たらなかった。

「いいんじゃない。あれはわしが変な事を誘うから悪かったのじゃ。ま、本当は背中が目的ではなかったのじゃが、あれはあれでいいもんじやったぞ。ぬふふ」

「な、ならよかった」

昨日背中に触った時と言い、こういふ話をしている時と言い、サクラはいつもとは少しだけ雰囲気が変わる。何もかも楽しもうとするのではなくて、一つのこと集中して周りが見えなくなる感じが。一生懸命と言い換えたりできるだろうか。……違うか。

気分が乗ったのか、サクラは会話の流れに乗って、体を密着させてきた。もしかしたら、また背中を摩って欲しいとでも言うのだろうか。

「どうしたんじゃないや急に見つめて」

「あ。ごめん。今度は何してくるつもりだろうって思って」

「むふふっ。自己紹介、でもするかのう？」

このタイミングで自己紹介という言葉を用いるあたり、サクラはやはり賢いのだと思える。上手く心を抉ってくるというか。

珍しく授業中に席に着いているかと思えば熟睡しているし、日頃からの天真爛漫な振る舞いを見ていると心配になるのだが、先々月にあった中間考査の結果は、赤点どころか高得点も高得点。その時

僕は、エレメンタリー以来の全教科満点の答案を目撃したのだった。魔法は使っていないと言っていたが、嘘をつく必要は無いし、何故か信憑性もあった。それは多分、こういう時に発揮される頭の回転の速さのせいなのだと思う。

サクラは僕の耳元に口を近づけて言う。吐息が耳に触れて、背中に悪寒が走る。

「『願いの夢』の話をしたいんじゃない？」

どことも知れぬところから汗が噴き出し、それが涼しい夕風に撫でられて悪寒に変わる。絶え間ない風の流れは、涼しさを超越した寒ささえ感じさせる。今、きっと、背中を触られるよりも嫌な汗をかいているだろう。

まず第一に、詳細に心が読まれたことに対して、怯えた。アリスのように自分の意志で言わせたりしないサクラの場合、心の中が丸々読み上げられるような感覚にとらわれるのだ。

乱れる呼吸を気取られぬよう、密かに息を止めて答える。

「あ、ち、ちよつとだけ、気になって……。サクラのこと……」

サクラは少しばかり驚いた表情になって、互いの二の腕がぴったりとくっついた元の体勢に戻った。そうして小さく笑うと、僕の肩に頭を凭れかけてきた。

「んふふ、そうか。どんなことじゃ？ 背中ふれいに免じてなんでも教えてやるぞ」

「あ、うん。ありがとう。眠れないほど気になってるわけでもないし、答えたくなかったら全然答えなくてもいいからね」

「それはつまり、気になり過ぎて眠れないし、今すぐにでも答えが欲しいということか？」

「いやいや、全然！ そんなことないよ！」

あわよくば知ればという心意気である手前、複雑だ。でも、深層心理は確かにそう言っていて、否定はできない。そんなにわかり

やすい表情をしていたらどうか。

「そんな遠慮せんでよい。わしとお主の仲じゃる」

改めて身を寄せられて気付くのは、心拍数でも読み取られたのではないかということ。気になるのは、そのあたりの範疇だと言うこと。

僕から距離をいくら離そうが、サクラ側でコントロールできてしまふのなら、確かに距離は無意味なのかもしれない。身も心も。

そういう風に体よく考えついでにはじめて、僕は一步踏み込める。

「それじゃあ、サクラの魔法についてなんだけど……。具体的にはどんなことができるの？ 初めて見た時は瞬間移動みたいなことしてたし、この前はセミプロの会長にチエスで勝ってたし、テストは全教科百点だし、どこからどこまでが魔法なのか曖昧で……」

「そうじゃのう。魔法と一口に言うても、その形は自分で大体こんとろーるできるんじゃないよ。魔法を使うための源のような何か、わしらの中に満遍なくあつてな？ 例えば、そうじゃな……。わしらが皆、食材を持っておるとしよう。人参でも茄子でも何でもよいぞ。何となく自分の好きな食べ物が浮かぶ。

実際自己紹介も悪くないな、と心の中で密かに笑う。

「さあ、お主はその食材をどう調理するんじゃない？」

「え？ あ……なるほど、そういうことか」

「そういうことじゃ。つまり、わしはその調理法を知つとるわけじゃ。瞬間移動じゃったり、先読みじゃったり、物質生成じゃったり、わしはたくさんレシピを編み出したんじゃない」

それならば、サクラの満点が嘘でないことも納得できる。

全ての問いに対する答えを探るためのレシピを編み出すくらいなら、数字の概念ごと書き換えでもしてしまっただろうから。小物料理のレシピを練るよりも、大きなご馳走に試行錯誤する方がサクラの性にも合っていると思っし。

「ついでに聞くけど、先読みってことは人の心を読んだりできるの？」

「それは無理じゃ。先読みは、実は感覚神経を活性化しておるだけなんじゃ。それで心拍数とか虹彩の動きとか息遣いを観察して……ってことじゃ。心を読むのじゃったら、ありすのが百万倍得意じゃろ。ぬははっ！」

「まあ、確かに……」

しかし、そうなのであれば尚のこと疑問が浮き彫りになる。

「ねえ、サクラ。もう一つ聞いてもいい？」

「なんじゃ？」

「どうして魔法が使いたかったの？」

漠然としすぎていて、難しい質問だっただろうか。言いたくないのであれば、強制して聞き出すつもりもない。

けれど、どうにも腑に落ちない。サクラが、というよりは誰もが、魔法を使いたいと思う前に、ある思いが先行してしまうと思うのだ。

魔法とはいわば『手段』であり、人々が欲する『結果』ではない。空を飛ばたいと願うならば、『空を飛ばす魔法』というのは手段にあたる。空を飛ばたいのであれば、『空を飛ばしたい』と願うことが最短で確実なのだから、その『手段』に付加される価値があるはずなのだ。

サクラがその価値をどう見ているか、気になってしまったわけだ。多少踏み込んだ疑問であることは理解している。

願わくはその答えが、らしいものであることを祈って。

唸りつつも「そうじゃのう」と考えていたサクラから、二の腕を通して閃きが伝わってくる。巧く表現できる言葉が見つかったのだろうか。

「簡単じゃよ？」

「うん」

「面白そうだったからじゃ」

「そっか。そうだよ。サクラだもんね」

「なんじゃそれ？ わしゃ、ばかにされとるのか」

「ち、違うよ！」

色々な意味で焦って、さっと身を引き首を振る。

すぐさま距離を詰めてきたサクラは、ふふつと鼻で笑って、また磁石のように僕の左腕にくっついてきた。

「わしは悪用なぞせんぞ。性に合わんのもあるが、そんなことに魔法を使わなくとも、わしはわしの力で欲しいものを手に入れられると思うのじゃ。わしは結果よりも、そこに行きつくまでの道のりが大事じゃと思うんじゃ」

サクラが言葉を発する度に、心地の良い振動が腕を伝って脳を刺激した。どうして心地がいいのか、流れてきた刺激に従って考えるのと、一人じゃないからだ　とわかった。サクラも同じものを求めて密着してくるのだろう。

僕がサクラの言葉に頷けば、理解や同調の想いすらも全部伝わって、サクラの声はさらに柔らかくなる。その循環が、僕に懐かしさを感じさせた。

「努力は嫌いじゃが、欲しいものを求めているうちに、それが勝手に努力になっていると思うのじゃ。欲しいものを求めることは楽しいことじゃから、気付かないのかもしれないのう」

庭園の中心のベンチに座って、屋上のフェンス越しの空を遠くに見る。夏の涼しい夕風も、肌を炙る夕日も全部、時間の経過を僕に知らせるただけに存在しているように思えた。ゆっくりと、時折眠ったように静止して、サクラが語るから。

「そうして求めておれば、気付かぬうちに手に入れておるものなのじゃ。『願い』というものは。じゃから、わしがあの夢に思っている結果より道のりじゃ。楽しいことがしたいというのは、簡単そうに見えて奥が深い。終わりなんてないのじゃ。あのように一途な恋情があれば、辿り着くところも見えてくるんじやろつがなあ……」

サクラが吐露する厳しい現実、周囲の時を早める。雲は風に吹かれて鬨々として靡くし、水は低い場所へ流れ溜まる。そういう自然の摂理のようなものが全てが、早送りに見えてくる。

それが僕の虹彩を通して像を結ぶ速さを超えるまで、いつもそう長くはかからない。

暑くも寒くもなく、居心地良くも居心地悪くも無い。それはまるで、時が止まるような瞬間で。世界はまた、いつかどこかで見た絵のように、静寂の彼方へと意識を運ぶ。

「わしはおぬしも欲しかったんじゃが」

再び世界が動き出すまで、どれぐらいの時間があっただろうか。

「ずっと……」

何かの拍子に目を覚ますと、今までのことが夢のように、世界は動いていた。夢を見ている時と情景が全く変わらなかったから、目を覚ますと言うよりか、我に返ると言う方が正しいかもしれない。

隣に座っていた少女は、半分だけ動いていた。

「サクラ。おーい……。サクラ……。……。寝てる」

いつの間に眠ってしまったのだろう。僕とサクラ、どっちが先に眠ったのだろう。

それがさしたる問題ではない事に気付いた瞬間、僕の額から嫌な汗が噴き出して止まらなくなる。

「会長、一人で大丈夫かな……」

ルリ会長は期待を裏切らない人だから、おそらくまた失意しているだろう。間に僕を介すればフォローもできるが、一対一では話が違う。相手校が相手校だけに、失礼があっては本校の存続に関わるかもしれないと先生が言っていた気がする。

いくら紳士で聖人な会長であっても、目を合わせずに何かぼそぼそと呟くだけの生徒会長と対等に会話をしてくれるとは思えない。

とどのつまり、こうしてはいられない。

「とりあえず、時間を確認しないと……。この暗さじゃ、多分手遅

れだけど……って、離れないっ!？」

我に返る前の記憶を掘り起こすと、密着していたようだったので不自然は無い。けれど、こうまで寝相が悪い抱き癖があるとは思わない。胴回りの一番柔らかいところを、がっちりロックしてくるあたり、昔のリズを彷彿とさせる。

「思い出に浸っている場合じゃない……。どうしようこれ……」
「るー」

「わっ。びっくりしたー……」

そんな呼び方をするのは、リズくらいのもの。その上、学校でそう呼ばれることもあまりないので、かなりドキツとした。

そんなことよりも、早く抜け出さなくてはいけない。学校の存続がかかっているのだ。

無理くり手を解くのが一番手っ取り早いけど、過去そうして、穩便に事が済んだことはない気がする。そうやって起こされたリズが、不機嫌でないことなどありはしなかった。魔法が使えるサクラが相手の場合、駄々をこねるのでは済まされなくなるかもしれない。

誰かに言伝を頼もうにも放課後に屋上を訪れるのは、園芸部からのものだし、活動時間の昼休みはとうに過ぎてしまっている。万に一つ誰かが来たとして、その人が生徒会役員である確率などたかが知れている。

「起きて、サクラ。僕、ちょっと行かなきゃいけないんだ。サクラー。おーい……サクラー……」

とうとう、機嫌を損ねない程度の声量で名前を呼び続けるしかなかったってしまったようだ。

サクラの寝息を感じながら、サクラの名前を呼び続ける。時折、気恥ずかしさを感じて、ルリ会長の名前を混ぜてみる。二人とも、羨ましいくらい可愛らしい名前だ。

それも飽きて、今度は友人の名前を呼んでみた。生徒会とは無関係だけれど、アリスが迎えに来てくれれば色々と何とかかなりそうな気がしてしまう。ノアさんはあたふたしてしまいそうだけれど、ア

リスに意志が通じているのだから問題はない。

流れてリスの名前も呼んでみる。かなり恥ずかしかった。さすがに、父と母は呼ばないことにする。

さて、一通り点呼したところで、僕は悲しくなった。

こうして一五年もの間この世界で生きてきて、僕が名前を呼べる人が容易に数えられるほどしかない自分の世間知らずさに、である。

エレメンタリー時代の友人や、それより前の幼少期に知り合った人たち。大人であったり、僕と同じ子供だったり。決して忘れたわけではないけれど、こうして何かを求めている今、僕はその人たちの名前を呼ぶことができなかったのだ。そして僕は、その人たちに何の情も抱けなかったのだ。

背景ばかりで中身の無い思い出ばかりが想起されて、心の底に溜まってゆく。溜まったものは、必ずどこかへ溢れ出る。それが溜息なのだと、暗がりにも毒づく。風化して削れることすらない空っぽの思いも、そうしていつしよくたに流せればよかったのに。

「レイル会長……」

比較的記憶に新しいその名前を呼んだ、その瞬間だった。

「呼んだかな？」

背後から声が聞こえた。

サクラにロツクされていて振り向くことができなけれど、この柔らかい声は紛れもないあの人の声だ。あの人ならきつと、僕が振り向かずとも視界に入ってきてくれるだろう。

そして姿を現したのは、よりもよって今一番来てはいけない人だった。

空耳だとか人違いだとか、そう言った類の期待は抱いていなかったが、それでも言葉は喪失した。自責や弁明がごちゃ混ぜになって相殺されたのだと思う。

「あ……」

「僕を呼んでいたみたいだけれど、どうしたんだい？」

どこから弁解すべきか、判然としない。僕は、上昇していく心拍を抑える術を、あのフェンスを飛び越える以外に知らない。

「仲が良いいんだね」

「あ、いえ、僕は……」

呼んでいません、という答えが出遅れていることに気付いて、とっさに引っ込める。それは口ごもることと同義である。言葉に詰まるとはこのことだ。

怒ったり恨んだりしないのが聖人だから、レイル会長を聖人会長だと称していた僕にとって、わずかに曇ったその表情ですら恐怖だった。

「サクラさん、って言っただけ？ その子。いつも眠っているね」

「あ、はい。そうですね……」

僕の中でのサクラのイメージは、元氣よく遊んでよく眠る和少女であるから、「いつも眠っている」では語弊があるけれど。今はそんなことを訂正している場合ではない。

僕が今訂正すべきは、こうして暗くなるまで休憩を延長してしまった過去である。レイル会長に出向かれてしまっただけは、弁明の余地などないのだから。

漸く、最悪の事態を実感し始め僕に追い打ちをかけるように、レイル会長が一步を歩み寄ってくる。物音に反応したのか、その一步が踏み込まれたとほぼ同時に、僕の胸を抱き締めていたサクラの腕が、ぎゅっつと一層強くなる。

その微動を見ていたのか、レイル会長は一步近づいたところで止まり、それ以上は踏み込んで来なかった。遠いと言うには近すぎ、近いと言うには遠すぎる、微妙な距離で停止し、僕たちを凝視した。僕をではなく、僕たちをだっただけだ。

その視線は、贖罪の念で無防備になった僕の心に、ひりひりと沁みだした。その言葉に、僕は死線を彷徨うような心地になった。

「もしかして、付き合っていたりするのかい？」

一文字一文字、槍の雨のように脳天を直撃した。意味を理解するころには、幾分か出遅れているのだからけど、レイル会長は待っていてくれた。

「そそそそ、そんなことはっ……………」

手をバタバタと横に振りながら、首も左右に激しく振る。全力で否定するという意味合いよりも、顔を隠すためにやった行動だった。荒ぶる視界の中、かろうじて見えたレイル会長は、少し物憂げに息を吐いていた。

「ま。それは、そうだよな」

なんだろうか。そうやって、まるで当然のこのように肯定されると、少しだけ悔しくなる。何が正しいのかなんてわからない議題に、唐突に理不尽な『正解』を出されたような気持ちになる。

異議申し立てをできる立場にないし、あったとしてもできていたかわからない。

こういう時、僕はいつも傍聴しているから。

「なんじゃ。残念じゃのう」

その言葉は、誰よりも億劫で幼かったけれど、この空間で最も僕に届いた。物理的にも、精神的にも。

「サクラ！？ 起きてたの!？」

「お主が興奮するから起きてもうたのじゃ」

「語弊のある言い方しないでっ!？」

「なんじゃ。ホントじゃろ。わしに抱きつかれてときどきしておったくせに」

「ちよっ、違っ……………っていうか、起きてるなら離してっ……………」

「わしが寝てたらいいのかわのう？」

「そういう意味じゃっ……はっ！」
往年のサクラ節を回避しつつ、レイル会長の方へと視線をやってみる。

今一番してほしくない微笑みを、僕に向けていた。顔から熱が引いていく。

語られるサクラ節は、対抗するように熱く降り荒ぶ。

「意地悪言うでない。わしらはもう、イッセンを越えたカンケイじやろう？」

「誤解だからね！」

「なんじゃなんじゃ。背中ほくもしたじゃろー？」

「なっ。違います！ 違いますから！ サクラは冗談が好きなんです！」

慌てて弁明を織り交せる。大きく身振り手振りを交えながら、必死に。

「苦勞するね。ルートさんも」

「は、はいっ。そうなんです！ だから」

何か伝わったかとホツとしている暇もなく、サクラ節が聖人会長までをも襲っ。

「なんじゃ。おぬしは。まだおったのか」

「こ、こらっ！」

「わしはるーと んっ!？」

「し、失礼しました！ この子はこっぴどい子なんです！」

自分でも何を言っているのかよくわからないが、そう言うしかなかった。

サクラの口を多少強めに塞いで謝罪に努めていると、手先に鈍痛がやってきた。

「痛っ!!! か、噛むの!？」

まさかとは思ったが、そこはさすがサクラだった。

少し湿った手がどかされると、サクラはまた話し始めた。でも今度は僕に向かって、

「わしは、るーとに話があつて呼んだんじゃ」

「それも微毒を含ませて。」

「生徒会長が、とんでもなくアブナイやつじゃとな」

「え？」

二の腕を通して、サクラの鼓動がわずかに早くなるのがわかる。

わずかであるうと、その変化は僕に大きな恐怖を抱かせた。尚もレイル会長を捉えていたサクラの視線は、わずかなりとも動きはしなかったけれど。

サクラに注目していたから、レイル会長の声に少し驚く。鼓膜を効率よく震わせる透過通った声質が、今ばかりは強引に耳に突き刺さってくるかのように感じられた。

「確かに、そう感じる人も世の中にはいるかもしれないね。否定はしないよ。でも、ルートさんもいるから、一応言っておくよ。心外だな」

聖人会長という呼称を撤回したくなるほど、その言葉には恐ろしく説得力がなかった。レイル会長の信憑性がないというよりかは、サクラが嘘をついているように思えないと言うのが正しい。

僕は殊更に言葉を添加せず、サクラの言葉を待った。

「僕のどこがそんなに気に食わないんだい？」

「……………」

「治せることであれば、最大限努力するよ」

「嘘臭いのう」

「嘘じゃない、つていうしかないよ。僕は」

「お主。普通じゃないじゃろ」

レイル会長が首を傾げるのと同時に、僕も思わず首を傾げた。

哲学的なことを言っているのか、感覚的な事を言っているのか、全く掴めない。すでに「普通でない」サクラが「普通でない」と指摘することが、果たして形式として正しいことなのか、それすらもわからない。

しかし、それは「普通でない」からこそ知っている「普通でない」

なのかもしれない。それなら、一度きりの人生を生きていない僕にも、その断片くらいは理解できているのかもしれない。

踏まえれば、サクラの言葉の意味はつまり、『願いの夢』に絡んだ言葉に聞こえなくもない。

「普通じゃない、か……」

「レ、レイル会長？」

レイル会長は天を仰いで、まるで独り言のように呟いた。

荒唐無稽な行動だったので、少し不安になる。視線がこちらに向いていないと、何となく安心できない。そんな思いから、レイル会長の名前を口に出していた。

力の無い僕の呼名で、わずかな心情の変化すらも伝わったようだ。サクラがまた腰に抱きついてくる。何も言わずに。

「それは、僕を恐れているのかな？」

「違うわ。いちやいちやしとるんじゃ」

反論するサクラのセリフには覇気が全くなく、自然、説得力も抜けていた。凄んだ割に声量も心許なくて、腰骨を通して伝わってきた振動が発声によるものでないとすぐわかった。僕が言えた義理ではないけれど、サクラは嘘が下手なのかもしれない。

焦りとともに感じたのは、守らなくてはいけないという使命だった。

「ふうん……そっか。それじゃ、仕方ないね。僕はもう行くよ」

「そうじゃそうじゃ。早う行くのじゃ」

「サ、サクラ！」

「ルートさん。僕は大丈夫だから、あまり気を遣わないで」

「あ、いえ……」

「それから、今日の会合は楽しかったよ。ルリさんともちゃんと話せたし」

「そ、それはなによりでした……」

「どうせお主が何かしたんじゃろっ」

ぶつぶつと会話を切るように、サクラの横槍が刺された。でも、

勢いが無いせいで、すべて空を切っている気がする。槍だから、核心を突けていない感じだろうか。

的外れな小言は、無視される形となって会話が繋がる。

「それじゃ、サクラさんの気に障るみたいだから、僕はもう行くね。次に会えるのは多分、本番の少し前のリハーサルの時だと思う。夏休みの最後の方かな。それまで、文化祭の準備頑張ってるね。僕たちの方も、色々と手続きを頑張ってるよ」

「は、はいっ。ありがとうございますっ！」

僕が受け答えすると、サクラが「ぬう」と唸った。何となく睨まれているのがわかったので、レイル会長の方を向いたままでいた。

「それじゃあ、ルリさんにもよろしく」

「はい。今日はお疲れさまでした」

僕がそういう頃には、レイル会長はいつもの柔らかい笑顔に戻っていた。これで背景が夕焼けであれば、哀愁があつたのだろうけれど、今はほとんど暗闇だった。仄暗い空間の中で月明りに照らされ浮かぶその背中が、何とも不気味だった。レイル会長の微笑みを見た直後としては、妥当な落差だと言えるだろうか。

そして、小さくなっていくその背中を目で追う。暗闇のせいで距離感が把握できない。視界から消えはしたが、もしかしたら、そこまで離れていなかったのかもしれない。

その声は『願いの夢』のように、僕の頭に直接響いたのだった。

「僕は間違いだと思う」

翌週、長い長い夏休みが始まった。

それまで、僕とサクラは一言も話さなかった。

夏休みだけど、抱きしめて。(後書き)

【あとがき】

もうお気づきの方もいると思いますが、今章のサブタイトルは、夏定番映画のパロディになっております。意味はあつたりなかったりいつも通りの感じですが、一応映画の内容を踏まえて選んではいます。

この終わり方だと、次回は難しそうな雰囲気があります。

『M o t i v e』W h o s
” M o s t ” ? (前書き)

【まえがき】

“誰が一番かなんて”

『 motive 』 Who's " Most " ?

「楽しい！」

広いグラウンドを端から端まで駆け巡り、一心不乱にボールを追う。それを繰り返しているだけなのに、何故だか少女は楽しそうだった。

ゴールを与えてやればすぐに到達し、更なる高みを目指す。そこは少しだけ登山に似ているのだと、少女は若いながらに悟っていた。登り切つて終わりではないことだつて、少女は知っている。だからこそ、ゴールまでの道のりに余裕を見ることができた。

どんな技術であろうと、彼女の好奇心がそれを覚えさせた。「知らない」を「知りたい」に変え、「できない」を「できる」へと変え、ついには「楽しい」に変わった。その循環を、彼女は心から気に入っていた。

父から勧められた登山と大きく違うことは、ゴールを見据えて追わなくてはいけないことだった。山は逃げないが、ゴールは奪われることだつてある。

でも、それは少女にとつてさしたる問題にはならなかった。

「彼女には天性の才能がある」

少女を勧誘したコーチは、たくさんのインストラクターが集まる席で、少女を称讃した。

すぐに認められることはなかったが、練習試合を通じて少女の名

は徐々に周知されるようになっていった。一試合一試合、勝とうが負けようが確実に。

少女が色々なチームから欲されるようになるまで、さしたる時間はかからなかった。

それは彼女の試合を見れば、誰もが予測できることだった。

「このままいけば優勝だ！ 力を合わせて頑張るぞ！」

コーチの一声を追いかけて、「おー！」とか「わー！」とか、言葉にして表せない叫喚が轟いた。十歳に満たない者だけで構成されたそのチームの咆哮は甲高く、どこか驚の様だ。

暫くして、フィールドの反対側からも猛りが聞こえてくる。今度は、驚ではなく虎だろうか。平均年齢的に三〜四年ほどは年上の男子で、しかも人数が多かった。

驚であれば戦うことはできなくとも、逃げることはできる。そう勘付いてしまった驚のチームメイトたちの一部は、戦意喪失してしまっていた。その一員であった少女は、無論、自信に満ち満ちた表情で「勝つぞー！」と未だに意気込んでいたけれど。

選手交代をする余裕すらないチームだということは、事実としてチームメイト全員が知っていた。それが後半戦の勢いを削ぐ要因だと言うことも、実感として知っていた。だから、失意しても仕方のないことなのだ。

チームメイトの中には「見た目だけだよ」と励ます者もいたが、頷いたのは少女一人だった。「ワールド勝ちすればいい」という者もいたが、前半を乗り切れる自信を持っていたのは少女一人だった。そんな当たり前の上で、少女は飛んで跳ねて目立っていた。

すべては「楽しい」からやっているだけ。「勝つこと」はあくま

でも、それに追隨する結果なのだという持論を持つ少女には、簡単すぎることもあった。

少女の笑みは、すべてを物語るように肅々とそこにあった。

そして、試合開始のホイッスルが鳴る。

虎のような雄叫びを上げていたチームが先攻だった。

まず様子を見る作戦なのか、ボールをあまり前に出さずに警戒しつつのパスが続いた。少女チームは、それについていこうと右往左往する。試合開始前に事細かに伝えられた作戦などすっかり忘れてしまったように、一対三の構図が出来上がってしまった。無論、その分のプレッシャーを相手にかけることができるが、抜かれてしまえば三人分手薄になる諸刃の剣だ。『堅実に確実に勝利を掴む』を基礎精神とするサッカーという競技では、あまり好まれない作戦ということになる。

つまり、それに関する練習まで行き届いていないのが実際である。左右に振られて疲弊した隙を見事に突かれ、ロングパスを通してしまう。そして、絶対的な力量の差を周囲に知らしめるように、ボールはゴールへと吸い込まれていった。

ボールがバウンドしているのは、空しくもゴールの中だった。その様を見てしまった少女のチームメイトたちの士気は削がれ、急速に戦力のダウンへとつながった。ボールを貰っても、上手く連携が取れないのである。チーム競技のサッカーではチームの半分以上が諦めてしまえば、チーム全体が諦めているも同義になる。

一点、また一点、と点が入るたびに観客からの声援も遞減し、気付けば前半戦が終了している、というような事態に陥った。

前半で十点差がついたらコールドゲームという特別ルールが適用されなかったこと、それがまたギャラリーの歓声を曇らせた。圧倒的な力の差を、また見ていなければならぬからだ。観客のほとんどは身内であろうから、尚のことだった。

あるにはあつた声援も、「我が子」を応援するものだった。サッカーはそういうものではない。個人でやるものではないのだ。そんな思いでいた一人の少女は、インターバルの間、ベンチに座りながら何も喋らずにギャラリィを睨みつけていた。そんな時だった。

「はい集合ー！」

不意に、コーチの一声がある。インターバルが長めに取られていたためなのか何なのか、チームメイトの足取りはやたら軽かった。グラウンドの一角に十一人が集まると、コーチはゆっくりと諭すように話し始めた。

「どうだみんな。疲れたか？」

チームメイトたちは、互いに顔を見合わせてから、少し間をおいて頷いた。少女は一番後ろからそれを見ていた。

「そうか。みんな頑張ってたもんな」

その言葉に一部のチームメイトは笑顔になった。少女はまた、それを見ていた。

「練習とどっちの方が疲れた？」

再び顔を見合わせると、誰かが「試合」だと言った。それから賛同の声が続いて、小さくガヤが湧いた。

コーチは誰が口火を切ったのかすぐにわかったようで、そちらの方を向いて淡々と言い放った。

「嘘はつかなくていい」

ガヤは一瞬にして消え失せ、残ったのはコーチの話をいやいや聞く、我儘な耳だけだった。そこに何かを期待したのは少女だけで。

「君たちが嘘をついているのは、君たちのお母さんに聞けばわかる」
チームメイトたちの頭上には、密かにクエスチョンが浮かんでいることだろう。

それを見越していたコーチの二言目は、捲し立てるように紡がれ

た。

「今、君たちが着ているそのユニフォームを洗濯しているのは誰だ
い？」

チームメイトたちは、互いのユニフォームを見て黙った。中には
俯いてしまう者もいたが、コーチの言葉の真意を理解している者は
まだいないだろう。

その真意はコーチの言葉によって徐々に明らかになってゆく。

「君は自分で洗濯するかい？ お仕事から帰ってきたお父さんが全
部やってくれるかい？ 違うだろう？ そう。全部お母さんだ」

一人一人、どこか非を詰るように尋ねてゆく。それでもなお優し
い声色に、チームメイトたちが理不尽を感じることはなかった。不
甲斐ないという思いが芽生える年齢でもないはずだけれど、何らか
の責任は感じたのだと思う。

「そのお母さんに聞いてみればいい」

コーチは、ふと少女の方に視線をやった。コーチの視線を追った
チームメイトたちの視線も、自然と少女に集中した。コーチを取り
囲むように並んでいたはずが、それを皮切りに少女が中心になった。
コーチはゆっくりと少女に歩み寄ると、その髪を優しく撫でてチ
ームメイトたちの方を振り返る。

「今日のユニフォームを洗濯するのは大変でしたか？ って。一つ
も泥がついてないユニフォームは、洗いにくいですか？ って」

少女の髪に付着した泥を払いながら、コーチはチームメイトたち
に問うた。

走って転んで泥だらけになった少女のユニフォームと、逃げ惑っ
て立ち止まって白いままのユニフォームが、ただただ空漠とフィー
ルドに対峙した。少女は何も言わなかった。チームメイトたちもま
た、何も言わなかった。沈黙がまた、そのコントラストを際立たせ
た。

コーチには、沈黙を破る義務があった。

「どうだ？ みんなのユニフォームは洗うの大変そうか？」

チームメイトたちは大きく首を振った。そこには異様な一体感があつた。少女はただただそれを見ていた。

コーチは大きく頷いて、続けた。

「そうだ。それじゃあ皆、やることはわかったか？」

チームメイトたちが頷くと再び、練習の時のような一体感が生まれる。それを待っていたかのように、コーチは笑顔になる。しかし、少女の表情はいまだ曇ったままだつた。

コーチはチームメイトの士気が上がったのを確認すると、今度は少女に尋ねた。

「やることはなんだい？」

少女は視線をグラウンドに向けて、淡々と答えた。

「洗濯してくれてありがとうってお母さんに言う」

「あ……ああ、なるほどな！ そういうことだ！ 皆、お母さんに感謝するために、たくさんユニフォームを汚すぞー！」

コーチが叫ぶと、チームメイトたちがそれに続いて「おー！」と掛け声を上げた。グラウンドに轟いたその声は観客たちにも届いたようで、そちらも少しばかり活気づいた。結局、言葉は何でもいいのかもしれない。

少女がそうであるように。

休憩時間。

少女は、集合が解除されて方々に散っていたチームメイトを見送って、その場に留まっていた。コーチに呼ばれたのである。

「早くやりたいか？」

「やりたい。休憩は退屈だよ」

少女の視線はグラウンドを捉えて微動だにしない。休憩中の使用禁止ルールさえなければ、すぐに走り出してしまいたいそうだった。

「疲れてないか？」

「だいじよぶ。全然動いてないし。山登りの方が疲れるかも」

チームで一番動いていたのは、ユニフォームを見れば一目瞭然だった。前半戦の失点を十点に抑えたのも、すべて少女の働きだった。それどころか、一点を返してさえいるのだ。コールドゲームをコールドでなくしたのは、紛れもなく一人の少女の力だと言える。

それでも、少女の目に「勝利」が宿ることはなかった。ただ只管に、「楽しい」だけを求めていた。

コーチはそれが、少しだけ心配だった。

「楽しいか？」

「うん。楽しい！ ありがとうおじさん！」

少女は満面の笑みでそう答えた。それだけを求めている彼女からすれば、当然と言えば当然の答えなのかもしれないが、コーチからすれば歓喜極まりないことだろう。

コーチは仕草に表さぬよう感情を抑え込むが、口角は自然と上がっていく。

「はっはっは！ それはよかったよ。それならおじさんも嬉しいよ。今は、おじさんじゃなくてコーチだけだな」

「ありがとうコーチ！」

コーチは微笑んでいたが、心の中では不安が渦を巻いていた。

楽しみだけを求める少女を、チームメイトはどう見るか。世界はどう見るか。少女を突き放して、必然を嘲り笑ったりしないか。それだけが気がかりで。

「ねえコーチ。これが終わったら、また来月なの？」

ふと、少女が疑問をぶつける。逸る想いを前面に押し出したような問いかけだと、コーチは密かに思った。

「ここで勝てば、来週、地区大会の決勝に出場だぞ」

「そうなんだ」

「それも勝てば、今度はすぐにエリア予選。それも勝てば、全国大会。それも勝っちゃえば、ジュニア部門の世界大会だ！」

「ふうん……。来週の次は次の日？」

少女が気にするのは頻度だった。

コーチはまた、かつてのおじさんのような笑い方になる。

「はっはっは！ さすがに毎日は大変だぞー？ それに、練習しないと上手くなれないぞ」

「だいじょぶだもん」

頬を膨らます少女の小さな憤りには、確かな説得力があった。

コーチが教えていない技術を、少女は試合の中で編み出していたのだ。それがぎこちない動きだとは言え、体の駆動効率の高さからくる成功率などは、もはや神がかっていた。

だから、笑うしかなかった。まさに天賦の才だと。

「はっはっは！ さすがだなあ！」

「世界大会で勝ったら毎日できる？」

「え、あ、ああ……。できると思うぞ」

底知れぬ期待で爛々と輝く少女の瞳に射られて、コーチは断言できなくなる。その期待がすべて裏返しになってしまうことが怖かったからだ。

その無垢を汚すような真似をする度胸など、到底ありはしないのだ。

ふう、と一息ついて背伸びする少女を遠目に見て、コーチはまた微笑む。少女のバックに広がる背徳の新緑が、やけに毒々しくコーチの目を嬲った。

一も無い可能性を捨つのがコーチの宿命なのだと一言を口ずさんで、試合に臨む選手たちの背中を見送った。

未だ頼りない小さな背中たちだけれど、少女越しには途轍もなく大きく見えた。

「勝つぞー！」

少女はそう言って、ホイッスルを待った。

沈黙の間を通り抜ける風が、疲弊したコーチの瞳を弄んだ。

『Motive』Who's "Most"? (後書き)

【あとがき】

今まで読んでくれていた方はお気づきかもしれませんが、度々挟むWho'sシリーズは、普通の『サブエピソード』ではありません。ですが、まだ本編からは遠いお話でもあります。まだ、というのがポイントですね。

一筋縄ではいかないかもしれませんが、逆に案外簡単かもしれません。色々と仮説を立ててお楽しみください。ふふふ。

次回はまた誰かの視点でのお話にしたいです。

妄人ファインディング（前書き）

【まえがき】

タイトルは“もうにんふぁいんでいんぐ”と読みたいところですね。

某魚群アニメ映画のもじりになってます。

そんな原作とは無関係の百合百合した今話、どうぞ。

妄人フラインディング

「はああああああ……めんどいのう……」

その人は息を吐くように呟いて、机に突っ伏した。教室の机は堅くて痛かったのか、すぐに顔は上がった。

その流れでこちらを向いたので、何か言わなければと思った。

「でも、ノアたちは部活やってないから、やらないと……だよ」

正確にはカーリング部のマネージャーだ、と訴えたいところだけれど、さしたる仕事もないから心が痛むだけだと思った。アリスにタオルを渡したり、アリスに飲み物をとってあげたり、アリスを応援したり、エトセトラ……。もはやアリス部と言っても過言ではない。

顧問が認めてくれてはいるが、学校的にはマネージャーの存在が不確定らしいので、放課後業務の手は逃れることができない。

来月ほどに迫った文化祭の準備は、学年とクラスごとに分担されて仕事を課されることになっていた。ルートやアリス、そして、うなだれながら小道具にハサミを入れているサクラも所属する自分のクラスは、劇の小道具づくりを任されている。決められた期限や小道具の種類などは特にないが、予算内に納めてかつ劇に間に合わせなければいけなかった。

冠と思しき小道具を遠方へ放って、サクラがまた何やらばやく。

「わしは生徒会部じゃー」

「あ。王冠が……」

王の威厳を示すものであるから、小道具とは言え重要な気がするのだが。

誰かが拾ってくれるかと思って見ていたら、特にそういうことも

無く、暫くしてサクラが自分で取りに行った。「可哀想なわし……」
と文句を言っているのが、少し面白かった。何となく自業自得な気
もするけど。

席に戻ったサクラは、また作業を再開した。やりたくないとか、
疲れたとか、言いながら。

自分は、そんなサクラを観察するのが好きだった。何故かって、
面白い。

「どうしたんじゃ。そんなにわしを見つめて」
「わ」

不意に反応されてびっくりする。言葉に詰まる。

とりあえずやましいことは何もしていないので、「なんでもない
っ」と首を振って視線を逸らした。面白いから見ていたなんて失礼
なことは、口が裂けても言えないから。

気を紛らわせようと作業の方に集中する。葉っぱと思しき下書き
をなぞって丁寧に厚紙を切っていくと、その切れ込みから視線を感
じた。集中できない。

葉っぱは早々に終わらせて、糊付け作業に移ろう。あれなら隙間
は無い。

元々、こういうことは得意なので、滞りなく終わる。でも、でき
あがった葉っぱを机に置けなかった。ちょうど葉の中心で目隠しし
ているので、これをどけたら間違いないと見てしまおうと思うのだ。サ
クラを。何故って、面白いから。

でも、ずっとこうして目隠しているわけにもいかない。

意を決した慣性で葉っぱをどけると、勢い余ってこつんと机に手
の甲をぶつけた。痛い。

「痛っ」

「ぬはっ！ いやー、のあは面白いのう。見てて飽きないのじゃ。
やっぱり、ありすはこういうのが好きなのかのう」

サクラの方が見ていた。自分も見ってしまったから目が合った。サ
クラは椅子ごとこちらを向いて、にっこりと微笑んでいた。何から

何まで観察されていた。

恥ずかしくなって、自然と葉っぱが顔にくっついた。

「なんじゃよー。ああ、可愛いのう。わしのものにしたいくらいじゃ」

人のものになるということは雪辱だというけれど、ずっと一人で過ごしてきた自分にとれば幸福だった。だから、嘘にも聞こえる言葉よりも、その冗談が少しだけ嬉しかった。

アリスのように桜がいつも隣にいる　いてくれるということ。それはもう毎日が刺激的な事だろう。心臓がもたなそうだ。

葉っぱで顔を隠しながら少し笑う。

「あ。今笑ったじゃろ。冗談じゃないからのー。本当に連れ帰ってやるのじゃー！　ぬっふっふっふ……。毎日あんなことやこんなこととして遊んでやるのじゃー」

視界が塞がっているせいで「どっこいしょ」という掛け声しか聞こえなかったが、桜が席を隣に移したようだ。アリス以外の人の声が右耳に入ると、何となく変だ。

もし仮に桜のことが好きだったら、この変な感じとも付き合わなければいけないな、と心で語った。

ふと、気になることがあった。

ゆっくりと葉っぱをどけて、桜の方を見る。桜は笑っていた。

「ね、桜……」

「なんじゃ？」

「桜の家、どのあたりなの？」

桜という人間は、兎にも角にも目立つ。どこにいたって何をしていたって、頭一つ抜ける。だからこそ、誰もが桜に興味を持つ。でも、誰も桜のその先を知ろうとはしない。それは桜が興味を興味で上書きしてしまうからなのだと、最近分かってきた。気になることが多すぎてどこから手を付けていいかわからないのだ。この間授業中に起きた、男子生徒が桜に告白をするとい

うカオスな事態も、多分、サクラの人物像をちゃんと掴めていないからなのだ。

割とサクラの近くにいる身上、変人天才破天荒なんて大衆に見せる顔よりも、優しくて人情味溢れる可愛らしい女の子に見えてしまう。だから、現住所なんて小さなことが気になってしまった。

どんな答えが来るかなと期待していると、それを勘付かれる。

「むふふ……。知りたいかのう……？」

「し、知りたい……」

上目でそんなことを言われると、あまり意味を求めずに聞いた問いに価値が生まれるような感じがしてくる。まるで、その情報はトップシークレットでサクラ以外誰も知らない、みたい。あ。でも、実際そうか。

話の盛り上がり比例して高揚する気持ち、文化祭の準備作業に昇華出来たら、なんてものは机上の空論。きっと理性とは裏腹に、瞳なんか輝いてしまっていることだろう。

「それじゃあ。わしの膝の上に座ったら教えるのじゃ」

「うえ……！？ そそ、そんな無理……っ！」

そんな大胆な行為はアリスとすらしたことが無い。別に嫌ではないし、人とくっついてるのは好きだからむしろ大丈夫な方だけれど、どうせならアリスとしたい。最悪、アリスとしてからサクラとしたい。それは最悪じゃなくて、最高の贅沢かもしれないけど。

「わしとは嫌か？」

「い、嫌じゃないよ……全然っ！」

それでサクラのことを色々教えてもらえるなら、むしろ良かった。

ただ、サクラという人間の信憑性は、アリスへの好意云々以前の問題だった。こういう悪戯話の時は、たいていが嘘だったりするのだ。隠しきれていない下心が、にやけた表情に浮かんで見える。

でも、ここまで詰められてしまうと断る術がわからない。ただオ―ケーを出すのも怖い。

ならば、その間をとるまでのこと。

「わかった……乗る……。でも、嘘、つかないって約束……」

「ぬははっ！ その約束、破ったらどうなるんじゃない？」

「アリスに言う……」

多少盛って、と付け加えようと思ったが、露骨に苦痛な表情をするので思いとどまった。多分、盛っても盛らなくても、サクラへの効果は絶大に違いない。

「わかったのじゃ。それなら仕方ないのう。正直な事しか言わんのだ。その代わり、わしも質問したいのじゃ」

「ノアに？」

「そうじゃ」

「ノアなんて何も無いよ……？」

自分の存在のほとんどがアリス成分でできているというのは知っているはずだけど、これ以上何か聞くことがあるのだろうか。悲しくなるとともに、甚だ疑問だった。

訝るように首を傾げると、サクラは首を振って言う。

「話すことなんてなんでもいいのじゃ。のあを知りたい。そう思っただけじゃ」

「う、うん。わかった。いいよ」

サクラはこうして、意味の深いことを言う時がある。いつも朗らかで身も心も軽いと推し量っていると、そういう時、距離感に困る。サクラの根底にある優しさをちらほら感じて、最近では慣れてきたけど。

「それじゃ、ほれ。乗るのじゃ」

椅子を引いて、太腿辺りをポンポン叩きながら手招きしている。すぐに応えないと強引に座らされそうだったので、潔く席を立つ。

まだ教室に残っていた男女数名のクラスメイト達の一瞥を浴びながら、サクラの元へ小股一步半。まじまじとサクラの目を見ると、

「んー」と催促される。

「じゃ、座るよ……？」

サクラに背を向けるのは気が引けたが、前向きに座るわけにもいかない。背中に悪寒を感じながら、ゆっくりと腰を下ろしていく。暫くして、臀部にふにつ、という何とも言えない感触があった。

何だろう。大きな耳たぶ？ の上に乗った感覚。

それから、ウエストをぐるりと一周擁ようされる。絶対やると思っただからそんなに驚きはしないけど、そこから手が上に行ったり下に行ったりしないか寒心に堪えない。

少しだけ高くなった目線で辺りを見渡すと、いつもより教室全体が明るく見えた。白い壁もふわふわ揺れるカーテンも、談笑しながら作業する皆の表情も。気を良くしていると、聞きたいことを忘れてしまいそう。

万に一つの可能性を視野に、臍の横辺りにあったサクラの両手をとりあえずどつちも掴んでおいて、話を始めることにする。

「サクラのおうち、どこにあるの？」

「木の上じゃ」

顔が見えないから余計、冗談に聞こえない。というか、嘘はつかない約束はどうなってしまったのだろう。

「ほんと？」

「本当じゃ。木の上じゃぞ。今度遊びに来るかの？」

「いいの？」

「よいぞ。のあは特別に歓迎するのじゃ！」

「閉じ込めたりしない？」

「し、しないわい！」

しそうな気しかないけど、家を案内してくれるのはとても嬉しい。

木の上、ということとはツリーハウスのような家なのだろうか。でも、適したような大きな木は国内には無いし、あっても竹だから趣が異なる。それに、木の上に家を作るほどアクティブな家族とは一体どんな人たちなのか、大変気になる。

「サクラのお父さんはどんな人？」

「ん？ そうじゃなー……、太っておった」

「お母さんは？」

「痩せておった」

何となく言いたいことはわかるけれど、あまりに大きすぎる括り。ただ、サクラの両親という材料があれば、その単語からいくらでも想像できる。でも、もう少し詳細が欲しかった。サクラの口から。

「何してる人なの？」

「はて、なんじゃったかのう。いなくなったのが昔のことじゃから、さっぱり覚えとらん」

その言葉は無機質に背中を擦った。心臓の辺りを、手で直に弄ばれているような気分だった。でも、変に憐れんだりもしなかった。

自分も「同じ」だったから。

「じゃ、ノアと同じ……だね」

「そうなのかの？」

「うん。ノア、お母さんは生きてるけど、お仕事、忙しくて、ノアが寝てる時にしか帰ってこないの」

「そうか……。父親はどうしたのじゃ？」

「いないの」

物心ついた時には、母がいつも自分の世話をしていて、それを不自然に思ったことも無かった。初めに「父親」というものが世界に存在することを知ったのは、エレメンタリーの授業参観の時だった。自分に父親がない理由を尋ねて母を悲しませてしまったことは、今でも深く心に残っている。傷として。

「同じじゃな。わしと」

「うん……っ！」

さりげなくお腹の辺りを摩ってきたけれど、今は何となく嬉しかった。

エスカレーターすることはわかりきっているので、早々にその手を握って、話を進める。今度はあまり悲しくならなそうな話題を。

「サクラって、何が好き？」

「柔らかいのと温かいのは大体好きじゃ」

柔らかくて温かい物といえば、高級なステーキとか肉まんだろうか。でも、噛むのが面倒だとかなら、麺やパンだって考えられる。お米にも言えることだし。

もう少し情報が欲しい。

「甘いのが？」

「んー……。あんまり甘くはないのう。どっちかと言えばしょっぱいじゃ」

柔らかくて温かくてしょっぱいと言えば……。さっきのとあまり変わらないか。

的を一つに絞って、質問してみよう。

「硬いのは嫌い？」

「そうじゃなあ。別に、カタいのはカタいので、柔らかくする楽しみがあるから良いのじゃが、柔らかくなるころにはびっしょびっしょじゃ」

元々硬くてもだんだんと柔らかくなる。そして、温かくてしょっぱくて、液状のもの。これは間違いない。

らーめんだ。

その後、「のあは結構柔らかそう」だとか「ありすは最初のうち硬そう」だとか言い出すので、気になって仕方がなくなつて詳細を尋ねてみたけれど、それは忘れたことにする。耳たぶがものすごく熱いのも気にしないでおく。

そうだ。自分は何も聞いてない。

「そ、そういうば、文化祭の劇、サクラはなにで出るの？」

「わしはー、そうじゃのう、木かのう」

「木……」

「あの会長のことだから、木にもセリフがありそうじゃがな」

「会長さん？」

「るりじゃよ。台本はるりが自分で書くと言っておったんじゃ」

「あ。それ、変更になったって。ルートが」

最近、休み時間も作業をしているようで、ルートは教室に不在のことが多かった。それでも、サクラは生徒会長と仲が良いから、同じ生徒会に属するルートとは放課後に会っていると思っただけけれど、そうでもないようだ。その情報を知らないと言うことは、生徒会室自体に顔を出していないのかもしれない。

そう言えば、このところサクラとルートの会話が減ったような感じもする。前から一方中心の会話ではあったけれど、最近はそれすらなくて、どちらかと言えば、ルートが気を遣って話しかけているようにも見えた。

二人の間に何かあったのだろうか。

「サクラ」

「なんじゃ」

「そ、その……。ルートと、何か、あった……？」

「急にどうしたんじゃ？」

推測でも何でもなく、ただの実感としてそれは言うことができた。

「ルートって言った時、ちょっとだけ、ぎゅってなったから……」

「そうか……」

「あつ、でもでもつ、言いたくないなら……別に……」

言って欲しかった。

自分に相談して何かが大きく変わるとは思えないけれど、こうして膝の上に座らせてもらっている身上、そう思ってしまった。頭で勝手とわかっていても、どうしても、気がそちらばかりを向いてしまう。人に体重をかけるというのはそういうことなのかもしれない。不意に、背中に何か重みがかかってくる。

「のあはやさしいのう」

声が直に響いて、体全体でそれを聞いているような感覚になる。

しこりのような小さな突起を感じる。どうやら、耳をぴったりと背中にくっつけているようだ。

「そ、そんなこと……ない」

何だか、温かくて落ち着く。それはサクラから香る、緑の匂いのせいもあるかもしれない。

「すうー……はあー……。良い匂いじゃー」

「や、やめてよ……！」

同じことを感じていた事実には恥ずかしくなつて、首筋に悪寒が走る。

どうにもサクラと話していると、論点を忘れてしまいそうになる。もしかしたら、それがサクラの言う魔法なのかもしれない。

我に返るのはいつも、サクラの手つきが怪しくなつてくるあたり。上へ上へと這つてきた手を、しっかりと捕まえる。そうすれば、変な魔法は解ける。

「なんじゃ。よいじゃろー、ちよつと触るくらいー」

「よ、よくない……」

「わしは柔らかくて温かいモノが好きなんじゃー」

「そ、その話は、ないっ。ないのっ！ なかつたのっ！」

「強情じゃのう……。それなら、ちよつと触らせてくれたら、わたしとるーとの間に何があつたか教える、のはどうじゃ？」

「何も、無かつたら、触られ損……」

「そんなことないじゃろー。何もないってことは、今まで通り平和ということじゃから、それがわかると言うだけでも万々歳じゃろ？」

「それは確かに、そう……。じゃないっ！」

サクラは本当に話が上手いと思う。危うく乗せられるところだった。

極論、真実を話すかどうかというよりは、触れるか触れないかというところなのだろう。サクラの中では。

品の無いタイプのそれだから、別に好んで触られるような価値のあるものじゃないと思う。それに、聞きたいことが聞けるかもしれない。嫌われたりするの嫌だから、という理由もある。素直に頷きたいところではあるけど、内容が内容だけに頭が重い。

「大丈夫じゃて、痛くはしないのじゃ」

「ね、ねえ。他の、ないの……？」

「他？ そうじゃのう。ありすの秘密を教えてくださいたらよいぞ」

その答えには考える素振りが無かったから、元々あった選択肢な
のかも知れない。自分の胸を触るか、アリスの弱点を知るか。それ
を天秤にかけていいのか怪しいけど、サクラらしいと言えば納得。

アリスの秘密を知って何に使うのかは想像に易い。そう簡単に口
を割るわけにはいかない。

でも、どのラインから秘密だと言えるのか、サクラがどこまでア
リスを知っているのかわからない。もし大それたことでなければ、
答えてあげたい。

「た、例えばどんな……？」

「休日はいつも何をしとるんじゃ？」

そのくらの情報なら悪用も難しいだろうと思う。

「夕方頃まで部活、で、家に帰るとすぐに宿題するの。そうすると、
学校生活と私生活でメリハリがつくんだった。ノアも、その時、一
緒にやる」

「やっぱり真面目じゃのう。して、その後は？」

「あと？」

「あとじゃ。遊んだりせんのか。花札とらんぷでも将棋ちえすでも」

「ん……。すぐ夕飯になっちゃうから、あんまりすぐ遊ばない。

それに最近、お見合いの人、おうちにお招きしたりして忙しいから
……」

「令嬢は大変じゃのう」

アリスの家のメイドになって暫く経つけれど、最近は本当に増えて
きた。それも、不特定多数の人ではない。アリスのお父様も「大
体は決まっている」みたいなことを言っていたから、もしかしたら
自分にとる最悪の事態に陥ってしまうのでは、と恐怖する。

でも、毎晩アリスと同じ布団で眠って、同じ朝を過ごして、同じ
場所に帰っていることを思い出すと、「絶対負けない」という自信

が湧いた。アリスが自分を見捨てたりはしないのだと、心から信じられた。

そういう自信が、自負があるから、こうして自分は自分でいられた。

「ノア、アリスのこと、信じてるから……」

「むふふっ。妬けるのう……。して、つまるところ、どこまでしたんじゃ？」

急に小声になったかと思えば、やっぱりそういうことなのか。基本的に、サクラの興味は他人のそういうコトなのだろう。

自分とアリスとの関係を知っているのは、今のところルートとサクラだけ。禁忌を犯していることを知った上で、自分たちの関係を応援してくれている二人でもある。もちろん、自分を家に置いておいてくれるアリスの家の人たちも、関係を知っているかどうかは別として、必要以上に仲が良いことを特別咎めたりはしない。

事情を知って理解してくれる人を増やしていくことは、これからのアリスとの関係性を守っていくためには必要不可欠なのだという自覚は確かにある。自分にそんな勇氣はないから、誰かを頼るしかないことも。

でも、相手は選びたい。

サクラが悪いと言うのではなくて、サクラの場合、拡散のスピードが異常に早そう。

「み、みんな、いるから……」

「場所変えるかの？　一瞬で移動できるぞ。記憶は飛ぶかもしれないがの！」

「な、なんで……？」

魔法を行使できる事実があるから、その言葉には説得力がある。けれど、そうして人知を超えた存在であるから、信用は信用ではなく『畏敬』に変わる。

人は信用の前に吐露し、畏敬の前では懺悔する。

自分は今、懺悔したいわけではない。

「や、やっぱり大丈夫っ。ノア、ルートに聞いてみる」

「んええー……。そんなにわしのこと嫌いかー？」

「そ、そういうんじゃないの。もちろん、サクラのこと、す、好き、だし……。でも、今一番は、アリス……。なの……。……」

解わかつてよという意味で、サクラの手をぎゅっと握った。決して危険ではない。

サクラはそれでも尚、不満そうに唸っていた。

「んもおおー。わしは言いたいのじゃ、るーと何があったのかー。言うから触らせるなのじゃー。というかもう、触るから言うのじゃー」

「やっぱり何かあったんだ……。って、サ……。ッ！」

結果として、自分の思いやりは保険として適用されることになる。こういう時、自分にもっと力があればと思う。物理的な。

それはそうと、何だか色々まじく弄られているみたいだ。サクラの配慮なのか欲望なのか、背中側から制服の裾に手を入れられて、あとは、そう、色々。

元々、触られること自体に抵抗が無かったため、抵抗の術を全く思いつかなかった。だから、事後対応になった。まだ、終わってないから事に対応かも。

「や、やめてよーっ……。……！」

「よいじゃろー。減るもんでもないし、そもそも揉むためにあるよ。うなもんじゃ」

「み、身勝手……。……」

「んー。のあはわしよりやつこいのう。返しはあるが、大きさ相応つてところじゃの」

「は、恥ずかしいから分析しないでっ……。……!!」

「ありゃ？ のあは割と平気なんじゃな。るーとなんてすぐに変な声出しておったのに。ちと残念じゃのう。柔いからよいが」

「へ、平気は平気、だけど……。ル、ルートにもしたの？」

「したぞー。るーとは中々弾力があった」

軽々しく言っただけで、もしかしたら二人の間の確執はそれが原因なのでは。だとすれば、確執だなんて頭痛のしそうな言葉を使うのも、大分筋が違いそう。

自分に平気と言われて悔しかったのか、それとも時間の流れなのか、サクラの手つきがさらに妖しく激しくなってくる。

「んっ。サクラ、ちよつと痛いよ……」

「すまんのじゃ」

「というか、そろそろやめてよ……。なんか、悪いこと、してる気分……。かも」

膝の上に座っているあたりから、すでに社会的に良くない。さらにその水面下で、色々やっている。水面下というか、服の下だけど見つかつたら、一日中説教されそう。

「もうちよつとじゃ、もうちよつとだけっ！　したら、その罪悪感が癖になるぞー」

「罰、^{バチ}当たりそう……」

サクラの場合、その天罰すらモノともしなさそうだけれど。

でもそれは、相手が神様だったりご先祖様だったり、法律だったり……。目に見えない畏怖のような衣に包まれている存在だからこそだと思つ。サクラみたいに実感を大切にすると、そんなものは何にもならない。

だからサクラは、アリスを怖がったりするんだと思う。

「大丈夫じゃ、大丈夫じゃ。天罰でも何でもこい、なの」

急にサクラの勢いがなくなつたかと思えば、その刹那。

「ごんっ、という重たい衝撃がサクラを伝つて自分の胸辺りにまで響いてきた。

「じゃっ　！？　い、いつたいのじゃああ！！」

その弾みに腕のロックが解除されたので、椅子から跳ね降りて少し距離をとつた。何が起きたのか振り返ってみると、そこには神様

でもご先祖様でもない人が拳骨を引つ提げて立っていた。

「あんたねえ。ちよつとは人目を気にしなさいよ！」

「あ。アリス。部活、終わったの？」

「まだよ。けど、教室でおかしなことしているみたいだから、早く上がってきたわ」

自分の感じていることは「伝われ」と思えば、アリスに伝えることができる。『願いの夢』という都市伝説的な力であるから、概念的なモノかと思っていたが、最近アリスと二人で実験して、色々わかってきたこともあった。

意図して感情を送ろうと思わなくとも、「助けて」だったり「暇だな」だったり、自然とアリスを連想してしまう情動は勝手に伝わってしまうということもその一つだ。こういう時は助かるけれど、常日頃してしまう妄想が欠片でも伝わってしまうと考えると複雑。「伝わらないで」と強く思うと伝わってしまうのも弊害か。

でも、アリスにならないのだと思えるから、正解なのだと思う。これももし仮に、罰を受けた頭を両手で押さえながら涙目になっているサクラなんかには伝わっていると思うと、日常生活に支障をきたしそうで怖い。休み時間の度にどこかに連れていかれそうだ。保健室とか。トイレの個室とか。

「痛い……。痛いのがじゃあ……」

「自業自得よ」

「本気でぶつことないじゃろお……むー……」

「全然本気じゃないわよ」

「筋肉女め……」

「もう一回欲しい？」

「んんん……っ！ もう嫌じゃー！」

アリスの笑顔を見かねたサクラは、教室を飛び出してどこかへ走って行ってしまった。ふと周囲を見れば、くすくすと小さな笑いが起きていた。改めてサクラってすごいなと思った。アリスも。

「あれは泣きに行ったわね」

取り残された形になった自分は、サクラと親しく接していた手前、少しだけばつが悪かった。

アリスを視界に入れたり外したり、その瀬戸際でちらちらやっている、急にこちらを振り向いた。

「ノアもノアよ。嫌だったら、もっと抵抗しなさいよ。それに、あいつと駆け引きはしちゃダメ。どうせ嘘と冗談しか話さないんだから」

「ごめんなさい……」

「いいのよ」

アリスの中でのサクラの評価が、自分とかなり違っていた。アリスが言うと、そっちの方が正しく見えてしまうけど、自分はそんなに悪い人じゃないと思う。

でも、そんなことはアリスもわかっているようで。

「ノアはまだ仕事があるのかしら」

「ん。大丈夫。今日の分はもうやったから……」

「そ。じゃあ、帰りましょ。ちょっと寄るところがあるんだけど、いいかしら？」

「どこ？」

正直、どこにでもついていくのがノア・グリニッジであり、それが自分だから、どこでもよかった。けれど、結果として荷物をまとめる間の会話を繋げたのと、アリスの優しさというのを実感できたから、間違いじゃなかったと思う。

「屋上よ」

アリスみたいなセンスは自分には無いから巧い言葉が見つからないけど、そういう『芯の温かさ』みたいなものが、サクラにはあまり無いのだと思う。どうやってたら身に付くかもわからないし、そもそも存在しえない概念かもしれない。

それでも、自分だけがそれを知覚し得るなら、一つ思うのは

「やっぱりアリスの方が好き」

ということ。

自分に何かを選ぶ権利があるのかと言われたら微妙だけれど、これだけは言える。

「サクラ。ごめんね」

二つの意味で。

妄人ファインディング（後書き）

【あとがき】

ノア編も割と増えてきました。

最初は人称が無くて書きづらいなあと思っていたくらいでしたが、今は、一番書きやすいキャラだったりします。素の自分に近い感情論者なところがあつたりするので、結構楽しいです。

動きが出ないのがノア編でしたが、今回は活動的な女の子サクラがいてくれたので、かなり動きました。

サクラおそろべし。

The Summer Wars (前書き)

【まえがき】

アリス編です。

アリス×ノアは定番化していますが、今章はそれ以外の珍しい組み合わせになります。

お楽しみに。

The Summer Wars

文化祭の準備も半ば、カシミールや上級学校は夏の長期休暇に入った。俗に言う夏休みというやつだ。

当然、夏休みの間は授業が無いので、今この時期に学校にいる学生は、部活動か文化祭準備かの二つに一つになる。後者には強制力がないので、それで学校に来ている人は、心底文化祭を盛り上げようとしている見上げたやつらか、本当の本当に暇なやつらだということになる。まったく、ご苦労な事だ。

でも、そういう人たちがいるからこそ文化祭は成り立っていると言える。そう考えると、こんな白昼堂々、仄暗い氷の上で重石を滑らせているだけのあたしには、心から文化祭を楽しむ権利などありはしないのだろう。

適材適所と、先生方は巧い言葉を使うけれど、今日みたいな晴天の日に「暇だから」と言つて文化祭の準備を手伝っている根無し草と、あたしはさして変わらないのだと思う。もしくは、それ以上に無益かもしれない。

「が、頑張つてー。アリスーっ」

こうしてあたしを応援してくれる一人のギャラリィに應えるためだけに、あたしは重たいストーンを投げているのだから。

カーリングというのは、冬に本格化するスポーツだ。だから、こういう夏場の練習は力を入れづらい。それは設備の整ったアカデミーであっても、ミドルと変わらなかつた。

結果を残している手前、他の部の活動中に休むわけにもいかない。それは部員の誰もが思うことである。

この場合の適材適所を言うならば、カーリング部総出で文化祭の

準備をした方がよっぽど学校のためであり、有意義な時間を過ごすことができるから自分のためでもあるわけで。

「休憩ー！」

顧問の先生の掛け声のもと、部員たちはアイスリンクの方々に散っていく。

ミドル時代と比べて倍ほど長くなった休憩時間では、顔を洗いに出る者もいるし、飲み物を飲み部に戻る者もいる。個人練習をしている方が、圧倒的に厄介者扱いされる。けれど、そういう人は試合になると輝くから、部員たちから嫌われることもなかったりする。

そうやって、暑いんだか寒いんだかよくわからない雰囲気があたしの周りにはあった。

あたしは例によつて、ノアの元へ足を滑らす。

「お疲れさま、です……」

タオルを手渡す時、ノアはいつも片言の敬語を喋る。何故に敬語なのかは、つい先日の練習の時にノアの葛藤が伝わってきたからわかるが、大した理由でもなかった。

無理をしているようだったのでやめるよう促したが、首を横に振った。だからあたしは、カーリング部唯一のマネージャーとして威厳を保ちたいのだと思うことにしたのだった。

手渡されたタオルで軽く顔を拭いて、ノアに返した。

「ありがとう」

「うん……」

さて、休憩時間がまだ残っている。

進んで自己練習に励んでもいいけど、今日は正直気乗りしない。週末だからというのもあるかもしれないが、確かな理由は別にあった。

このままアイスリンクの縁へりに座って休むのが本来の休憩なのだろ

うけど、そうできなくなる理由があった。

「なんじゃ、のあ。今日はたおるの匂い嗅がんのか？」

「い、言わないでーっ…………！」

「ぬっはっはは」

「あはは」

どこで入手したのか、一丁前にカーリング部のユニフォームを着て部活に忍び込んでいる少女がいた。顧問含め部員全員が侵入に気付いていたから、正確には忍び込めていないが、何故か黙認されていた。

ノアが喜ぶからと言って、早い段階から排除しないでいたあたしにもいくらか非はあるのだと思う。それに、思いの外部員から人気のあるそいつを、公衆の面前で怒鳴り散らしても、また色々と面倒そうなので仕方がないというのもあった。

「あんたって年中暇よね」

「なんじゃよ。あたかもそれが悪みたいに」

「暇人は悪よ」

「よう言う。そうやって忙しい忙しい言うとして、いざ本当に暇になったらどうするんじゃ。どうせ、なにもせず一日を消化するんじやろ？ それこそ悪じやろ。じゃが、わしはやることがたくさんあるぞ！ わしは暇に慣れとるからな」

「あんたの論理って、一周回って気持ちがいいわよね」

「そうじやろ？ ぬははは」

「こう言いたいんでしょ？ 『暇人は暇だから本当に暇になっても大丈夫だし、暇じゃなくなっても元々暇だから大丈夫』。違うかしら」

「その通りじゃ！ さすが頭が良いのう！」

「でも、その論理を通すと、『暇人に選択肢はない』ってことになるわね」

「な、なんでじゃ」

「あら、当然でしょ？ あれをやりたいたかこれをやりたいたか、

そうやって何かをしたらそれは『暇』ではなくなるんじゃないかしら？ つまり、矛盾した論理ということね」

「め、めんどくさいやつじゃのう！ 暇人は正義なんじゃっ！」

「そうね。じゃあ、暇人に告ぐわ。文化祭の準備を手伝いなさい」

「あれは暇じゃから嫌なんじゃーっ！」

「暇は正義なんですよ？」

サクラが頭を抱えて地団太を踏み出したあたりで、ノアがくすつと笑った。

それをサクラが咎めて、「だって、面白いんだもん」とノアが言うのが一連の流れになっていた。そういう欲ばかりで中身の無い討論は、本当に下らない。下らなくてどうでもよくて、自然と笑えて来る。

あたしとサクラ、そこにノアを交えたその絡みを高みから見るのが、ここ最近カーリング部の休憩時間の使い方である。見物では決していないのだけれど、別段怒られたりしないだけマシかと割り切ることにしていた。

あたしは寒い方が好きだから、あまり暑くなりたくはないのだけれど。

「くつ。わしの力を見縊りおつて……」

「変な力使うのはやめなさいよ」

「ノアも、それはやめたほうがいい、って思う……」

サクラは嘘と冗談しか言わないけれど、その【魔法】は本物のようだから。

あたしたちのクラスを同じにしたり、瞬間的に長距離を移動したり、近い未来を予知したり。今のところはそれくらいしか見ていないけれど、実世界に及ぼす影響の大きさはどれもが途轍もない。

その片鱗だけでも、使うことは控えて欲しいというのが、あたしとノアの本心だった。

快樂主義のそいつには、あまり伝わっていないみたいだったけれど。

「ぬづうう……!」

「もしやったら。わかってるわよね?」

「アリス、笑顔が怖い……」

もう少しプレッシャーをかけておきたかったが、ノアに言われてしまったので、仮面は早々に外す。

すると、早速だった。

「こうなったら勝負じゃー!」

中途半端に脅迫をしたおかげで、サクラに変なスイッチが入ってしまった。こうなると止まらないのは、ルートやノアなんかとよく似ていたりする。あたしの周りには、そんな人間ばかりだ。そういう友を持つということは、あたしもその類なのかもしれないけれど。一つ、諦念の溜息を吐いておく。毒は溜め込むとよくない。

「はあ……。なにで勝負するのよ」

「そんなの石投げに決まっておるじゃろ!」

「カーリングであたしに勝てると思ってるのかしら」

人生をかける程ではないにせよ、競技歴はかなりのものだから、ある程度の自負はあった。初心者に負けるほど、あたしは弱くない。初心者だと、そもそもリンクに上がれないという問題だ。年功序列ルールとかではなくて、紛れもなく実力、そしてセンス的に。

「あんだ、滑ったことある?」

「ん? わしは滑らんぞ!」

「話じゃなくて」

「氷か? 初めてではないはずじゃが、もう何年も前のことじゃかな……。忘れとるかもしれん。教えてくれんか」

「その時点であたしの勝ちじゃないかしら?」

「そんなことないのじゃ! わしは成長が早いからのう。正々堂々勝負じゃっ!」

「……つたく、仕方ないわね」

こうなると何をしでかすかわからないのがサクラという人物だ。あたしとしては面倒ごとなど真つ平ごめんだ。

どうせ、部外者の立ち入りを顧問が許すわけなどないから、勝負は始まる前に終わっているようなものだけだ。

あたしたち三人が戯れていたあたりから階段を五、六段登ったところ先生はいた。この茶番を楽しみにしている部員たち同様、終始、あたしたちの様子を伺っていたみたいで、話は早かった。

「全然いいよ」

「はっ？」

「いいよいいよ」

「本当にいいんですか先生。絶対荒らしますよ、あいつ」

「そんなに荒らせるようなものはないけどなー」

氷上で何かを荒らすという意味ではなくて、雰囲気どころの話である。

しかし、ここの顧問の先生の性格を考えると、それも上手く伝わらないはずだ。

あたしの知り合いの妹様に似ているかということはないけれど、学生としてアカデミーに編入してもそこまで問題は無さそうな浮ついた見た目。同じユニフォームを着て、髪の毛を一つにまとめて縛っている、少しばかり茶目っ気が出過ぎていた。そんな外見に見合った緩い声色で、間延びした口調。どれをとっても、色んな意味で不安要素だらけだった。

ここで許可を出してしまうくらいだし。

「いいじゃない。教えてあげて？ ね？」

「ね……って」

「サクラちゃんだっけ、あの子。よく見に来てくれるし、もしかしたら興味もつてくれるかもだからさ。ほら」

「だから、なんですけどね」

興味を持つ持たないの前に、サクラにはおそらく天賦の才が備わ

っている。あれは【魔法】よりも恐ろしいあいつの力だ。天才というよりは、順応性や環境適応能力が異常に高いと言った方が正しいかもしれない。

全ての『できない』は、あいつの前だと『楽しい』に変わってしまっ

まう。サクラを見ていると自然とそう思えてきて、できないでいる自分が嫌いになってしまっただった。泣くほどに苦悩して手に入れた『好き』を、一瞬で滅茶苦茶にされそうで、腹が立つのだ。

その腹いせにこそ、あたしの言葉は服毒した。

階段を下りてサクラにオツケを出すが、どれだけ辛かったか。サクラと勝負することが、台風や地震と生身で戦うような感覚と似ていることに、誰が気付くのか。

そんなのは、あたし以外にいなかった。

十五分後。

「ルールは簡単よ。ストーンを一投ずつ投げて、その得点を競うわ。ブラシングは自分でやること。投げ終わったストーンは回収。一対一だから、弾き出したりはしないルールよ」

「わかったのじゃ」

前言通り、サクラの成長は途轍もなく早かった。

最初くらいはぎこちないのだろうと思っていたら、ごく普通に滑ってのけた。初心者立っていることすらままならないのだけれど、そんな気配など微塵も感じさせなかった。あたしが教えたのはブレキくらいのもので、あとは本人が勝手に「思い出した」らしかった。

そうになると本当に、『正々堂々』な気がしてくるから不思議だ。

「のう。ありすよ」

「何よ」

「何か賭けんか？」

サクラは、そうでもしないとあたしが本気を出さないことに、完全に気付いていた。それも、負けを覚悟でとかではなくて、本当に正々堂々を望んで。

「随分となめられたものね」

「ぬははっ。よいではないか」

「何を賭けるつもりよ。そこも対等じゃなきや意味がないわ」

「そうじゃのう。わしが負けたら、幼気いたいけなこのぼでいを」

「要らないわ」

「釣れないのう」

「あんたがあたしの体を触りたいだけでしょ？」

「なんじゃ？ もう負けた時の話をしておるのか？」

「うるさいわね！」

甘ったるい花の香りを漂わせているのも、話に熱が入ってなくて生暖かいのも、本当に調子が狂う。中途半端に謎で、中途半端ではない部分は大体がどうでもいい。いつもお気楽で、面倒そうなおことは一切やらずに逃げ出す。

あたしとは何一つ交わらなそうなのに。こいつはこうして、あたしという氷の一部の、すぐ隣にいる。

「そうね。じゃあ、あたしが勝ったら、あんたのこと教えなさい」

「き、急にどうしたんじゃ」

「いいわね？ 何一つ隠さず話してもらうわ。あたしが嘘だと思ったら、即刻おしおきよ」

「ひっ。それは拷問じゃろ！ わしは、うけは嫌なのじゃっ」

本当は、そうして相手のことを知って、それから勝負をするのだらう。

でも、あたしとサクラの場合は、『交わり過ぎていた』。いつの間にかそうなっていたわけだけれど、そういうスタートを切ったのは確かな事だ。だから拗れた、と言えるのかもしれない。それがこ

うして、『拷問』などと呼ばれる羽目になっている所以であり、あたしがそいつを嫌いになれない理由でもあるのだと思う。だから、知ろうと思った。順番はどうあれ、サクラという人を。ただ、それだけのこと。

五分後。

「アリスー、頑張つてー」

たった一人の声援のためにでなく、今回限りは自分のために勝負しよう。

余計なものまで見えてしまいそうなギャラリーには目をやらず、あたしはその少女だけを視界にとらえた。

「のあはわしの応援はしてくれぬのじゃな」

「負けるとわかっていている方の応援なんか、普通しないわ」

「おぬしと世界一強いやつが戦つてもかのう？」

「そうね。ノアに応援されれば、あたしは勝つわ」

そのセリフがあまりに空虚だったので、言つて少し恥じた。

涼しい顔で氷上に佇むそいつが、ひどく大きく見える。半ば太陽のように、そいつはどっしりと構えていて、振る舞いには少しの間も無い。かつてのミドル時代に、他校の生徒から『氷の魔女』なんて呼ばれて誇っていた自分は、どれだけ小さかったことが。

「まあいいわ。さつさと始めましょう」

「後攻がいいのじゃ」

「いいわよ。別に有利不利はないから」

「同時にはできるのか？ いっぱいあるじゃろ？」

「さすがに、遊びでレーン使いたくないわ。どうせ、あんたは掃除しないでしょ」

「せんのう。まあ、それなら仕方ないのじゃ」

「こういつ時に素直だと、人生損も少なそうだ。」

「どの石を使えばよいのじゃ？　これか？　これは重いのもう。こっちは……持ちやすいのじゃ。これにするのじゃ」

「サクラがおもむろに持ち上げたのは、部長のストーンだった。」

ストーンは個人購入もできるが、一般的には学校側で複数個仕入れる。単価が高くて個人ではとても購入できたものではないからだ。だから、ストーンに目印か何かを入れておいて、それをマイストーンとして部活で使うのが定石であった。そうすることで、コストも抑えられるし、何より練習で同じストーンを集中して使うため、扱いに慣れることができるのだ。

他人が使うことは多くはないが、そこそこある。

けれど、あたしのように自分用のを持っていたり、持ち手部分に若干のカスタムをしたりしている人は、あまり貸したからない。

部長は後者であった。

「それは部長のだからダメよ」

「部長？　部長どれじゃ」

「きよるきよると辺りを見回すので、小声で呟いてやった。」

「出入り口近くの席の方よ」

「サクラが何をするかは何となくわかっていたし、結果も何となく見えていた。」

「うおーい！　これ、使ってよいかーっ？」

建物内に響き渡るその声は、屋上で叫んだりするどごその生徒会長を彷彿とさせた。

部長はあまり大声を出す方ではないから、手合図か何かで返答するだろう。だからきつと、そのうちサクラがこつちを向いて、「大丈夫みたいじゃぞ」とか言いながら、したり顔をするに違いない。

「ふっふっふ。大丈夫みたいじゃぞ」

「そう。良かったわね。あんたって、偉い人に好かれるわよね」

「どうしたんじゃ、急に寝めて。そういう作戦か？」

「そうね。そうかもしれないわ」

「まあ、そんなものは効かんがのう！　じゃ、早速やるのじゃ！　早う投げろ！」

「はいはい」

あたしは、ルーティンワークの一環のように溜息をついて、開始位置についた。

正直なところ、勝敗はどうでもよかった。どうせ、お互いに真実は明かさないのだろうし。わかるのはせいぜい好きな食べ物くらいだろう。

そんなのは、きっとサクラだってわかっているのだ。わかっているはずなのに、こうしてあたしと関わりたがるのは、彼女が太陽のように寛大であるから。

氷上に浮かぶ太陽は、それはそれは熱くて大きく見えるものだ。リンクが削れてできた氷の粒が、その光を受けて乱反射するのが、また、超自然的に綺麗で、魅せられる。あたしにはできないな、と素直に思った。

それでいい。

彼女について知ることは、何か知ってはいけない何かを知るような、そんな危うさを感じるから。サクラの正体は人の形をした高圧の蒸気だ、なんてことは考えたくも無いし、面白くない。面白くないというのはサクラ自身が一番嫌うことだ。それに、仮にそんなことになったりしたら、きまりが悪すぎる。あたしに関わろうとしていたサクラが、とても可哀想に見えてくる。

まあ、言ってしまうえば、あたしの持っている秘密を明かすくらいでは、到底、対等には及ばないのだろう。

極論、サクラとの付き合い方なんて、多分、もうわかっていたのだ。

「早う投げんか！」

「じつをいわね。黙って見てなさいよ」

全く。もう、暑いのか寒いのかわからない。
まあ、夏に氷の上にいたら当然か。

The Summer Wars (後書き)

【あとがき】

今章は良い意味で、三人の性格が出た章だと思います。

ルートの話題も、本人も全く登場しませんが、いつもと雰囲気が変わりませんか？

ルートがいるといたくないのでは、やっぱり物語全体の雰囲気も変わってくるものなのです。改めて主人公補正というものを痛感した今章でした。

次回は、順番的にリズム編でしょうか。

アレンと……。 (前書き)

【まえがき】

なんか隠語みたいな章題になっておりますが、そういう展開はありません。

しっかり全年齢対象です。

アレンと……。

「はあああつああああ、あつつうううー……」

今年は本当に憂鬱な事が多いな。窓際に男子がたまつてよく換気できないおかげで、蒸し暑いのもそうだし、何より暇。あ、これ、前も言つたか。

とりあえず去年のことを思い出すと、今年の夏の中身の無さに空しさがこみ上げてくる。こみ上げてき過ぎて逆上せる。

往年のこの時期は、頻繁に上級生のクラスに遊びに行つて、夏休みの予定を立てていたんだけど、もちろん、ルーとアリスお姉ちゃんがいるクラス。

アリスお姉ちゃんは大会ばかりで、なかなか予定が合わない。曲者なんだこれが。逆にルーは何にもなくて、妹として少し恥ずかしかったりして。それもそれで楽しかったりして。

あ。ほら。また空しい。

考えるのよそう、と思うことはあつても、昔から基本的に私の頭の中は遊びのことで一杯だから、自然、そういうことを考えてしまふ作りになっている。言つたら現実逃避。

一足先に夏休みに入ると言う禁忌を犯したルーたちを、みすみす見過ごすわけにはいかない。あ。みすみす見過ごすって面白いな。

一先ず、それはおいといて。

予定が立てられないのでは、遊ぶこともできないじゃんかー、というお話。

立っている予定と言えば、死ぬほどどうでもいいやつが一つ。

「暑いね、マイハニー」

「ありがと。涼しくなった。後は用済みだからどっか行つて」
学校内では麗しの王子様と名高いこいつと、一緒に文化祭を見に行くという予定だ。

確かに、こいつの隣を歩いていたら色んな人から羨ましがられそうではあるけど、そんなの別に要らない。

「リズは今日も一段と元気だね」

「どこがよ。あなたのおかげで余計に暑苦しいわ」

「僕……、じゃなくて俺のおかげ……！？ リズに褒められた！」

「あんた、頭に虫でも湧いてんでしょ」

こつして話す時の距離がいちいち近くて、むかつく。離れるよ、と手で退けたら喜びそうだし、言葉で伝えても引き下がるはずはないし、他も色々めんどくさい。学習能力はあるくせに、モラルはない。

そついうやつ。

だから、そのスタンスを話題にすることは諦めた。というか、もはや、教室の一部だと思ふことにした。多分、椅子の足についてるゴムとか、その辺の仲間。

「あ。そつそつ。劇、決まったらしいんだ」

「あつそ」

「ま、でも、決まっていたのは、生徒会の誰かが台本を書くってことだけみたいなんだけど。前までは、普通にロミオとジュリエットとかをやつてたみたいだよ」

「あつそ」

何だかあまりにもそつけない気がするけど、仕方がないんだ。話す理由がないなら、あんまりこの男と会話したくないし。

ただでさえ友達がないのに、さらに誰も近寄らなくなったら、本当にこいつと二人きりになってしまいうさだから。そんなのは、不登校必至だ。お父さんお母さんには悪いけど。

まあでも、その時はアリスお姉ちゃんの家に住み込みで働かせてもらおう。

あ。でも確か、誰か先客がいたような。

そうだ。確かそれがノアさんだ。あれ？ ノヴァだっけ。

どうして住み込む展開になったかは知らないけど、アリスお姉ちゃんの家に就くということとは、ノヴァさんはアリスお姉ちゃんのことが好きに決まっている。そして、アリスお姉ちゃんもノヴァさんを気に入っているということになる。気に入らないものを傍に置かないのが、アリスお姉ちゃんだから。

幼馴染みたいだし、同じ学校だし、私と共通な点は結構あると思うけど、思うに、その人はちょっと大人しめの人なのではないか。昔、私がアリスお姉ちゃんにべつたりだった時、結構煙たがられたことがあったし。

ノヴァさん、適度な距離を置くタイプの人だと見た。

私の敵じゃないな……、とは思うけども。

「どんな劇になるかとか知らないの？ 誰が何の役で出るとか」

「なんでも、文化祭当日まで劇の内容は明かさないらしくて、今のところ全く分からないみたいだよ。文化祭の役員にも教えてないみたい。それも楽しみの一部だって、……姉も、そう言った」

「なにそれ。随分と自信あるじゃん」

「そりゃそうさ！ カシミーヤ校の文化祭と言ったら、毎年たくさんの人が集まるからね！ 国内一の祭りだっていう人もいるくらいだしね！ それに、今年は合同だから期待もすごいんじゃないかな」「ふーん」と、鼻から空気が抜けた。

生まれも育ちもここなはずだけど、そんなの全然知らなかった。知ろうとしなければ、周知の事実も知り得ないんだなあと、改めてアレンを見た。全然知ってなくなかった。でもそれは、私が知ろうとしたからじゃなくて、アレンが押し付けてきて知ってしまったから。

結局、「知っている」に違いはないけど。なんて考えると、こいつは案外、策士なのかもしれないと思ってしまうたり。

策だっってわかっていても、何かを求められたら、私は応えてしま

う。どうせ私は、敵の弱点を知るためだとか口ごたえしながら、こいつと話してしまうのだろう。

「そういや、お姉さんいるんだよね」

アレンに有利な今の話題をぶった切りたくて、そんなことを聞いた。

「うん。いるよ」

アレンは、一瞬、視線を逸らしてからそう答えた。

ん？ まさかまさかの弱点発見か！？

「お姉さんはなんて名前」

「レ、レーアだけど」

目が泳いでるし、間違いないな。こいつの弱点は姉だ。

それじゃ、私に軽々しく口を利けなくなるような弱点を引き出してやる。かつての三段論法が馬鹿らしく見えてくるくらいの武器を、私は手に入れてやるんだ。その、レーアさんとやらからね。

「レーアさんってどんな人？」

「そうだなあ……。生きるのが上手い人、かな……」

「なにそれ。馬鹿にしてんの」

「いや、してないよ。本当にそうだと思う。僕……いや、俺にはあんな生き方できないから」

狂おしいほどに愚直なアレンがそこまで直ってしまうんだから、余程だな。

「いや、でも……。もしかしたら、下手だからあんななのかもしれない……」

馬鹿でアホなこの男を真剣に悩ませてしまっくらい複雑なお姉さんって、一体……。金持ち家系に混血云々の泥沼騒ぎも考えにくいし、本当に人間として難しいのかな。

「ま、どうでもいいや。それじゃ、レーアさんの写真とかないの？」

「昔撮った家族の集合写真なら持ち歩いてるけど……。な、なんかリズ、さつきから姉のことばかりじゃないっ！？」

「うるさいなあ。初めて出てきた登場人物だから、興味湧いたの。」

早く見せてよ」

「リズが言うなら見せるけど……」

差し出された薄い紙を、シュバッと横薙ぎ一閃。アレンの手からそれを掠めとる。

写真を取り出すまでの過程で、制服のポケットから出てきた悪趣味な黄金財布さえ無ければ、もう少し穏便に事を進めたかもしれない。かもってだけで、そうとは限らない。

それそうと、早速拝んでみる。

すっかりした写真館で、すっかりした人が、すっかりした機材を使って、すっかりと時間を使って撮った感じが、すぐわかった。

悪趣味財布に入っているから歪んだり皺ができたりはしているけれど、写りはいい。褪せることなく当時の姿を写して、そこにいた左のダンディズムが父親で、右のマダムが母親で。その間に挟まれる二人の子供が、アレンとレーアさん。見たところエレメンタリーに上がる前くらいか。何となく、この両親にこの子ら有りみたいな顔をしているし、現にアレンは父親に似ていた。ということは、レーアさんの方は今頃、この美人妻みたいなべっぴんになってるに違いない。

「可愛いじゃん」

「えっ！？ ホントっ！？ ありがとう！ 嬉しいよ！」

「馬鹿じゃん。あんたな訳ないでしょ。レーアさん」

「じゃあ僕……、じゃなくて俺は？」

「そうね。なんか、そのまま大きくなっただけって感じね」

「褒められてるのかっ!？」

モテそうな顔だなとは思った。親もきつとそう思ってた育てたろうに。まさか、この写真を撮る時は、我が子がこんなキモイストーリーカ
ー野郎になるとは思いもしないだろう。ああ、なんて可哀想な。

まあ。知らないけど。

「写真のあんたがバスケツトボール持ってるのは、何？ 昔からや
つてたってことなの？」

「あ、そうなんだよ。最初は普通のバスケットやってたんだ」

「なんで今はトランポリン飛んでんの。ス、ス……スライムボールだっけ？」

「スラムボールだよ。五年くらい前にバスケットの試合を見に行ったんだけどね。実はそれ、スラムボールの試合だったんだ。母親が間違っただけでね。その時はショックだったんだけど、実際に試合を見てみて、なんか魅かれちゃってさ」

「それであんな変なスポーツをやっているのか。トランポリンを体育館一杯に敷き詰めて、ピョンピョン飛びながらバスケットをするアレを。楽しそう、と思ってこの前体験させてもらったけど、凄く難しいから。あと、トランポリンって全然楽しくない。むしろ怖い。変に着地すると死ぬから、とか言われたら楽しいわけない。」

「物好きね」

「私のことを追い回すのも含めて。」

「まあね！」

「そんなに威張られても、暗に皮肉られても困るし、なんか腹の立つスマイルだ。」

視線を写真に戻す。もう一つ、話題があった。

「これさ。レーアさんはサッカーボールみたいな持ってるけど」

「ああ。それはフットサルのボールだよ。姉は昔、フットサルをやってたんだ。というかまた姉のこと……」

「フットサルねえ……」

「フットサルって、確かサッカーの小さいバージョンみたいなやつだよな。優しいそうだし、ちょっと美形の顔立ちだし、何となくルーと似てるなとは思ってたけど中身まで似てるとは。」

成長した二人を逢わせたらなんか面白いことが起こりそう。

あれ？ 今、やってたって言った？

「今はやってないの？」

「そうだよ。すごい大会まで進んだんだけど、そこで負けちゃって……。それ以来、やってないんだ。僕……いや、俺はその時の姉が

好きだったんだけど……」

「シスコン」

「ち、違うよ！ そういうのじゃなくて！ 僕、じゃなくて、俺の一番はリズだから！」

あまり人のことを言える立場でもないけど、無感情に出た言葉だから仕方ない。

なんだかよくわからないけど、ルーとレーアさんはよく似ている気がしたから。

それに、私とアレンもまた、似ているのかもしれないと、つくづく思う。

まあでも、こいつに好意を向けようなどとは一切思わない。何となく、そうしちやいけない気がする。こればかりは乙女の勘だけ。

「ねえ。今の写真は？」

「ごめん、ないんだ。姉が一人で撮ってるのはたくさんあるんだけど、この頃家族で撮ることって無くて」

「レーアさん、ナルシズムにでも目覚めた？」

「目覚めたというか、昔からそんな感じだよ。なんていうか、自分の長所と短所を良く知ってるって感じかな」

「そういうこと」

さっきアレンが言ってた、“世渡り上手”の意味が何となく分かった気がする。

レーアさんは自分が持つてる武器とその扱いを知っている人なんだろう。

その武器の中には自分を傷つけるものもあって、レーアさんがそれを厭わずに使うから、アレンは「違うかもしれない」と言ったわけ。

なんだが、ますますルーを見ている気分になってくる。

そうなると、写真を撮る意味も何となく分かってきて悲しい。

「その写真は何に使うの」

やらされて撮った、その写真は。

何か特異な感情が湧いてもいいはずなのに、アレンの口調は淡々と。

「お見合いだよ」

私だったら、ルーがそんなことをしたら黙ってない。お父さんとお母さんはともかく、私がルーに怒ってしまいそう。

それなのにこの男は。

「お見合いはもう始まっての？」

「うん。もう何回かしてるみたい」

「それで、レーアさんはなんて？」

「ん？ 別に何も言っていないよ？」

まあ、レーアさんのその性格からして、文句も言わずに全部やり遂げそうではあったけど。

自分の気持ちを隠してまで、誰かのために尽くすなんて、どっかの誰かさんとそっくり。自己犠牲で誰かが喜ぶなんて思ってる、バカでバカでどうしようもないくらい優しい誰かに。

「レーアさんは好きな人とかいないの？」

「昔はいたみたいだよ。それこそ、フットサルをやってた頃は、よく告白されてたみたいだし」

「オーケーは？」

「してなかったよ。全部断ってた。あんまり興味が無かったんだと思う。そんな余裕も、無かっただろうし。……あれ？ でも前に一人だけ……っていうか、僕……じゃなくて、俺の話しようよ！」

それほどまでにフットサルに打ち込んでいたのに、急にやめるなんて、何か事件があったに違いない。“あの時”、私が起こしたような悲劇が、レーアさんにも。

何となく、首を突っ込んではいけないプライバシー領域な気はするけれど、アレンは教えてくれるだろうか。そうして、私は贖罪できるだろうか。同じ悲劇を收拾することで、私は何かを学べるのだ

るうか。

知らないけど、知りたい。知らないから、知りたい。

こいつの姉、レーアさんのことを。

「レーアさんがフットサルをやめたのって、本当におっきい大会で負けたからなの？」

「もう、リズってばー。僕……いや、俺の話を」

「教えてよ。ねえ、アレン」

アレンの表情は一気に暗くなって、「はぁ」という気だるげな溜息が余計に際立った。どことなく教室も一段階静かになったような気がする。アレンの一挙手一投足を観察するのを特技としている女子たちが、あまりのギャップに静止してしまった影響か。

でも、私には武器があった。

「アレン、お願い」

「……………」

他人の好意だ。

レーアさんも多分、同じ武器を持っていたと思う。この諸刃の剣を。

「わかったよ。なんでそんなに姉のことを気にするのかわからないけど、リズが言うなら教えるよ」

ありがとうとは言わない。癪だから。

アレンが二の句を継ぐまで待つてみると、思いの外早かった。

「実は、姉がフットサルをやめるきっかけになった試合ってというのは、フットサルの試合じゃないんだ。それに規模も、大きい大会どころじゃなくて、全国大会なんだ。優勝すれば、世界大会に進める国内最高峰の大会」

「フットサルの試合じゃない？ どういうこと？」

それじゃあ、そもそも負けても失うものなんかないじゃん。ずっとやってきた練習とも関係ないものだったら、負けても仕方がないって思うだろうし。いくらプライドが高いと言ったって、積み上げてきたものが無ければ崩れもしないんだから。

もしかして、その試合にも無理やり出場させられたとか？

いや、有り得ない。全国まで進んでしまうのだから、一定以上の意志はあったはず。

それはつまり。どういうことだ。

人が必死に推理してるというのに簡単に答えを言うもんだから、若干むかついた。

「サッカーの、試合なんだ」

「フットサル少女が、なんでサッカーの全国大会に出てんの」

「フットサルのコーチをやった人が、サッカーのチームも持ってたんだ。毎年全国大会に進むくらいの有名なコーチでさ。その年ももちろん全国大会出場を決めてただけ、大会前に問題が起きたんだ」

「コーチが幼児虐待で逮捕されたとか？」

「違う違う。出場メンバーの一人が骨折しちゃったんだ」

そんなことだろうとは思った。そして 代わりの選手もどうのこうのなつて、つまるところフットサルクラブのエースストライカーのレーアさんが抜擢されたと。

悲劇までの筋書きはそんなところかね。

「それは大体わかった」

「いやでも、待てよ。」

それで短期間にたくさん練習したからって、フットサルをやめることには繋がらないんじゃないか。勝ったにしろ負けたにしろ、フットサルをやっていたレーアさんがサッカーを続ける理由はなかったはずなんだから。

理由は他にあるんだ。

「もしかして、やめるきつかけって、試合と関係ないこと？」

「そう！ さすがリズ！ 洞察力もすごいよ！」

洞察したところで、そんなのは洞察に過ぎない。私は真実が知り

たい。

それなら埃を少し叩いてみる。ゴミは舞うんだろうけど、叩いたものは綺麗になる。そういう意味でも、諸刃の剣。ちよつと言いたくなる言葉。諸刃の剣。

「それで、何があつたの。レーアさんに」

あくまで、私の興味はレーアさん。それを強調するために、語気を強めてみる。

諦めたのか何なのか、アレンは渋々という風でもなく、普通に口を割つた。

「すぐく言いにくいことなんだけど……。これはリズだから教えるんだからね？」

「前置きはいらさないから、早く」

「実は……。えつと……」

口の横に手を宛がつて、顔を近づけてくる。ちよつとどうかと思つたけど、まあ欠片でもプライベートなことを教えてくれるのだから仕方ない。申し訳程度には耳を傾けてやるとする。

そうして微温湯みたいな声で囁かれたのは、私の推理を大きく覆す真実だつたりする。

「対戦相手に一目惚れしたんだ」

レーアさんは別に失つてなかつた。むしろ、得ていた。

というか、私が言葉を失つた。一刻も早く返して欲しい。

「それで、男っぽいことはやめるって言つて……」

これは、こいつと一緒に文化祭に行く理由が一つ増えてしまったということか。もう最悪だよ。一目惚れとか、正直全然面白くないし。

うん。まあ、これは義務でもあるな。

レーアさんに会えば何かわかるかもしれないし。アレンとは言え、家庭の事情めいたプライバシーを覗かせてくれたんだから、少しくらい報いないと。

でも。

でもなあ。

暑い。とにかく暑い。

おかげで怠い。それでも世は夏だ。

少しくらい、羽目を外してもいいかな。

なんて、思わなくもない。

「でも、全然嬉しそうじゃなかったな……。僕……。俺ならリズに巡り合えたら、絶対喜ぶのにな……。」

「あっそ」

毒づいてるうちに、夏休みは始まっていたりする。

アレンと……。 (後書き)

【あとがき】

百合でならR18も厭わない……、と言いたいところではありませんが、そういうのに関しては書き方が理解らない次第です。やったことないし。やらないし。家から出ないのが私たるもの。

でもよくよく考えると、『毎晩布団でキスしてる』人もいれば、いわゆる『一線』を越えそうな人もちらほらいるので、微妙なライン。もしかしたらもう……。

あとはご想像にお任せして、次回予告もご想像にお任せします。

【Reason】Whos
”Make”？（前書き）

【まえがき】

“誰が作ったかなんて。”

【Reason】Who's "Make"?

そのメイドは、ただ働き同然で執務をこなしていた。

様相はみすばらしく、食べている物も賤陋せんろうであったため、体も強くはなかった。先の戦争で死んでしまったために身内も無く、住む場所、もとい自分の居場所というのが、その屋敷にしかなかった。メイドも、それを承知で働いていた。

メイドは来る日も来る日もダメ出しを受け、それでも言い抗う事などできず、それすら受け入れていた。いくら完璧な清掃をしたとしても、それが認められることは一度も無かった。

何度も何度も同じことを繰り返し、いつしかメイドは自分のことを『そういう役目を持った人形』なのだと思うようになっていった。メイドにとって、生きること是不幸の底を歩くのと同じだった。

痛くて、寒くて、ひもじくて、辛くて、苦しくて、もう何もかも嫌で。

そんなある日のこと。

「これからお城の舞踏会に行くから。しっかりと掃除しておきなさい」

屋敷の主人が言った。中年とまではいかにせよ、三十路ほどの女性で性格は激しく、耳障りなほど声高だった。

無論、メイドに発言権と拒否権はないから、頷くことしかできない。そこで涙を流そうものなら、一週間ほど蔵に監禁されることになる。

白雪の舞うこの季節。あの蔵に閉じ込められれば、凍死の危険だつてあった。

「それじゃあ行ってくるわ。帰ってきたらさぞ綺麗になっているこ

とでしようね！」

屋敷の主人が言った。

綺麗になどならないと、メイドは身をもって知っていた。

『自分が汚いから、何をしても綺麗になどなるはずはない』

そんなことを言われながら十時間も平手を食らえば、嫌でも刷り込まれる。それに、本当に綺麗になったとして、暴力を振るわれることに変わりはないのだ。

そのために、メイドはいるのだから。

一日が過ぎて。

屋敷の主人が外出をすることは、メイドが務めるようになってからも少なからずあった。どこかの財閥が主催するパーティに呼ばれる、ということが何度か。

主人が外出している間、メイドの心は踊った。

一夜限りの舞踏会さながらに。

でも、今回は違った。

一日経っても帰ってこないということは、今まで一度たりともなかった。

そうしてメイドの心に芽生えたのが『心配』ではないということ
は、言うまでもない。

また一日が過ぎて。

メイドはその夜、心を決めた。

手にした自由を、視界に入った一筋の光を、逃がしたくはなかったから。これを逃したら、きつと一生不幸のままだろうと、心のどこかでそう思ったから。

そんなのは当然だった。

ここで執務を続けてしまえば、それは差し伸べられた手を払いのけて、不幸を受け入れるということだ。

そう。それはきつと、神様がメイドに与えた報酬なのだ。今までずっと積み上げてきた、『綺麗』を形にした、何かしらの報いであるのだ。

メイドは覚悟した。

自由を追うことで、本当に自分の居場所がなくなってしまうという事実も、確かにあったから。生かされている現状が無くなれば、メイドは死ぬしなくなる。

メイドは、それでも構わなかった。

手にしていた掃除用具を捨てて、寝泊まりしている屋根裏から見用のフリルを取り出して精一杯のおめかしをして、玄関の重い扉を開けた。靴は、ずっと使われていなかった主人のローファアを拝借した。メイドは思い切り走ったことが無いから、表の外出門までは早歩きで行った。

そして、メイドの手によって門は開かれる。

その先に広がっているのは広大な樹林だ。

メイドは走り出した。覚束ない足取りのメイドから、光を求め奔る少女になってゆく。

樹林の先に何があるかも、この世界がどこまで広がっているのかも、自分が何者なのかもわからない。それがメイドだった。

でも、メイドは笑っていた。

とても嬉しそうに。泣きながら。

まだ、笑えたんだ。

二時間ほど経ったのだと思う。

樹林は延々と続いて、進んだのか戻ったのかもわからないままに夜は更けていった。

でも、メイドは足を止めようとはしなかった。そうすることで求める光に近づけなくとも、少なくとも過去からは離れると思ったからだ。

“信じられるものなど、自分以外に無い”

そういう固い意志が見せた幻影だろうか。

ふと、メイドの前方に見えてきたのは、樹林の中に存在するには異質な物体。それは黒々としていて大きく、人型をしていた。

それが動き出すとは誰も予想できない。

「お腹は空いていないかい？」

突然のことで腰を抜かしたメイドは、すぐに応対できずに後退した。

するとどうだろう。

黒い物体が少しずつメイドに近づいていくではないか。

まただ。

「お腹は空いていないかい？」

使い古されてしわがれたような、それでいて作られたばかりのように真新しい響きだった。

恐る恐る上目を使ってみれば、そこにあつたのは黒いローブからひよっこりと飛び出した女性の顔だった。表情は読み取れず、笑っているとも怒っているともとれた。

お化けではないとわかって安心したメイドは、腰のごみを払って、

その女性と視線の高さを合わせた。何せ低かったから。

メイドが凝視していると、また女性が言った。

「お腹は空いていないかい？」

そればかりだった。

無視して歩こうにも、ゆっくりと後ろを尾行けられるような気がして不穏でならなかった。答えるまでどこまでもついてくるような、そんな。

メイドは少しだけ考えた。

“今日”という日のことを。決心の日である今日のことを。

なぜかはわからないが、その女性は悪い人ではない気がしてきた。今まで生きてきて、そんな優しい言葉をかけてもらったことが無いから、錯覚かもしれなかったが。

女性の言葉通りに空腹だったメイドにとって、選択肢は二つに一つだった。

メイドが大きく頷くと、女性の表情が笑顔に変わった。その笑顔は少し不自然なくらい、メイドの心を落ち着かせた。

「これをお食べ」

違うことを話したかと思えば、ローブの中腹あたりから白くて細長い腕が出てきた。その手には赤々とした球体が収められていて、仄かに甘い匂いを漂わせていた。

「リンゴだよ。知らないかい？」

メイドは頷く。

何度か見たことはあつて、食べられるものだとは知っていたが、名前までは知らなかった。知らないことを知れたというのも含めて、メイドは嬉しそうに笑った。

メイドはそのリンゴを受け取って、じっと見つめた。

大層赤かった。赤くて、良い匂いがした。良い匂いがして、食べてみたくなった。食べてみたくなったが、食べなかった。食べられなかった。

「おや？ 食べないのかい？」

メイドは頷いた。

メイドが今まで食べてきたものは、調理の過程で出た食材の端や縁。良い時で、主人が机に食べ零した料理だった。端材も食べ零しも無ければ、庭に生えていた草花を食したりもした。どちらにせよ、結局は戻ってしまったのだが。

だから、メイドは誰も手を付けていない食べ物を食べられなかった。自分に食べられるために、そのリンゴは赤く色づいたわけではないのだと、知ってしまったから。

メイドが俯くと、漆黒のローブから出た白い腕が伸びた。リンゴと同じく甘い匂いを漂わせた御手は、そのままメイドの髪を梳いた。印象と行為がかけ離れ過ぎていて、沈黙した。樹林の呻きが聞こえる程に。

「可哀想に……。命令が無ければ食べることもできないなんて」
「……………」

まさにその通りだった。

こうして屋敷を抜け出した今も、忘れろと命令された声を思い出すことはなかった。

そんなメイドに、ローブの女性は言った。

「あの屋敷を抜け出したのは、お前の意志だろうか？」
「思い出せ、と。」

「食べるとは言わない。だが、食べるのなら、一つ頼みを聞いてはくれないか」

メイドは目で答えた。

「ここから南に歩いたところに大きなお城がある。今、そこでは舞踏会が執り行われている」

今行われていると聞いて、メイドはハツとした。

主人が帰ってこなかったのは当然として、舞踏会がそこまで長い間開催されているものではないはずだからだ。基本的に何かの記念であったりとか季節の節目であったりとか、短期間で限定的に行うものはずだ、ということ。

お城で何かが起きていると言うのは自明だった。

ローブの女性は続けた。

「その主催である王に、それと同じリンゴを食べさせてあげて欲しい」

そう言つて、もう一方の腕を出した。手には、やはり赤々としたリンゴが握られていて、甘い香りを漂わせていた。

メイドはそれを受け取つて、息を飲んだ。

そのリンゴが何を意味するのか、何となく分かったから。

それでも、メイドは首を横に振ろうとはしなかった。思い出し得る笑顔の限り、ただただ頷くことに努めた。あるいはローブの女性の微笑みを真似たのかもしれない。

でも、それが空腹だったからなのか、はたまたメイドの意志なのか、それは判然としなかった。きつと、メイド自身にもわからなかったのだと思う。

「頼んだよ」

ローブの女性の言葉に背中を押されて、メイドは歩き出した。覚えてたの方角、南へ向かつて。着実に、でも確実に。

メイドは立ち止まり、振り返る。そこに女性の姿はなく、あつたのは木の枝に引っかかって風に靡く黒色の布きれだけ。聞こえるのは古された優しい声などではなく、不規則に頬を切り裂く冷えた風の戦ぎ。

そんな樹林に飛び込んで、メイドはまた一つ自分の意志を刻む。手にした赤い木の実に思い切り齧り付いて、噛み砕いて、飲んでそれを繰り返した。回数とは言え、今までにしてきた執務の積み重ねと比べれば塵のようなものだった。

しかし、そうして生かされた幾数年をいくら思つても、リンゴの一齧り一齧りの方が、遙かに有意義だった。生きていた。生かされているのではなく、自分で。そう感じていた。

食べ終えて、思い出す。

「ありがとう」

その声は誰もいない樹林に、空ろに響いてすぐ消えたが、メイドの意志は確かにメイド自身に刻まれた。

根拠はないが、確かに、誰かの耳には届いているのだろう。冷たい風に乗ってでも、物言わぬ木々を伝ってでも、静かに眠る小動物の生き方に倣ってでも。それこそ誰も聞いていなくなつて。

メイドの表情は、何となくそう思わせるようだった。

そしてまた、歩き出した。光を求めて。

リンゴを片手に、メイドは歩き出したのだ。

これは、誰のための物語でもない。

ただそこにあつて、時間とともに縷々と刻まれ、滔々と流れた一
つの話。

誰かが幸せになつて、誰かが不幸になる。

それだけのお話。

A u t h o r : L o o t e = Q = U e e r

【Reason】Who's "Make" ? (後書き)

【あとがき】

書き直して書き直して、また書き直して。
出来る、物語。

頑張つて、いきたいところ。(前書き)

【まえがき】

ルート編になりました。

今回は、意外な過去が明らかになったり、何かラブコメ感すごい
んだけど状態になったり、結構忙しいです。

どうぞ。

頑張つて、いきたいところ。

「あ、あんた……。結構作り込んできたわね……」
「演目時間が半日強だつて言うから、頑張つて調整したつもりなんだけど……」

夏休みに入つて一週間と経たないうちに、僕はまた学校に、教室に来ていた。それはなにも僕だけの話ではなく、文化祭準備やら劇の準備やらで、部活動に所属していないほとんどの生徒が登校していた。

今日はアリスも珍しく部活が休みで、教室へとやってきていた。アリスのいない休日くらいはダメ出しをされずに過ごせる、と安心していた手前、少しシヨクだった。というのは建前だということにして、意気軒昂と一年生劇の台本を見せたわけなのだが。

「これ、演じる方も本気でやらないとじゃない……」

生徒会長、クラスメイトのみんなには「泣ける!」、と好評をいただいたのだが、アリスにはあまりウケがよろしくないようだ。

確かに、考えてもみれば、観るなら「泣ける!」のかもしれないが、演るなら「別の意味で泣ける……」のかもしれない。重厚に作り上げられたストーリーを余すところなくお客さんに伝えるというのは、所謂『演者』、『俳優』という人たちが長年積み重ねて漸くなされるというものだ。それを、たかだか十五年生きただけの若者が演じる、というのは少々無理を感じなくもない。

まあ、僕が任されたのは『劇の脚本であつて、演出ではない』などという大義名分もある。

あるのだが、それも認可されない空気が漂ってきていた。

「んー……。ルート、これ……」

「ど、どうしたの、ノアさん」

少しだけ日焼けしたノアが、台本を片手に唸っている。日焼け姿は初めて見る。休みに入ってから屋根の掃除でもしたのだろうか。前は色白で人形のようにであったけれど、少し黒くなっているのもまた健康的で可愛らしかった。

丸っこくて可愛らしい見た目とは裏腹に、発言は切れた。

「これ、なんか、違う……」

悪気など一切無く、瞳にも屈託が無い。

ここ二〜三週間で積み上げた苦労が、その一息ですべて吹き崩されそうだった。

ただ一つの救いは、自分自身で作り上げた主人公にダメ出しをされている感覚になったということだろうか。ノアもきつと、台本を読んでそう思ってしまったのだろう。

だから、ノアの評価は素直に受け入れることができた。

「ごめん……。最初のうちは意識して書いていたんだけど、いつの間にかそうなっていたんだ……」

「ノ、ノアは嬉しいけど……。主役なんて、そんなの、無理、だから……」

夏休み前にノアの助言を受けたのを基盤に、劇のストーリーを練り始めたのは確かな事だ。『僕の身の回りで起きたこと』を、『公開できる範囲内』で、という前提条件と照らし合わせながら熟考したのも確かだ。その結果、『既存のストーリーに自分を投影しつつ、少し改変を加える』のはどうだろうという話に落ち着いたのも記憶に新しい。

そうしてできたのが、白雪姫とシンデレラを足して二で割ったような物語なのだとすれば、相次ぐダメ出しで失意した頭でも大体の合点はいく。

僕が劇で表現しようとしているのはつまり、『僕自身』ではなく『アリスとノア』になってしまっていたと、そういうことなのだろう。

う。自分で言っていてわかるのは、僕、また逃げてるなあ……
という自責である。

でも結局、僕が二人に働きかけたことなど、夜中に電話を一本かけたくらいのもので、特に何も無いのだ。

ノアの言う感動のシーンも、みんなが言う「泣ける」というのも、僕がそこにいなくともきつと成り立つのだから。僕が何かをしたからではなく、二人が心の内を明かした勇氣にこそ涙は流れるのだから。だろうからというより、そうあるべきなのだ。

そんな思いが綺麗に形になった、最初にしておそらく最後の今作であった。

「本人役つていうのは無理そうかな……」

「ノア、無理、だよ……。絶対……」

「練習したら何とか……」

「ならないわよ。そもそもノアが嫌がつてるのよ。諦めなさい」

そもそも本人が本人の役を演じると言う案は、他でもないノアが出したもののなのだ。なんて反論は、口が裂けてもできない。その時に、主人公は僕だとも言えられたのだから、咎められるべきは文才の無い僕なのだ。

あえて一人称を第三者にしたのは狙った演出だったのだが、それでもスポットの当て方は主人公を肅々と明示してしまっている。

「だ、誰か、代わりにやってくれる人は……」

極貧のメイドという設定がいけなかったのか、教室にいたクラスメイトたちからはノア主演案しか上がらなかった。おまけに、王子様役はアリスという、何とも皮肉な顛末までついてきた。

でも、アリスが王子様役を引き受けてくれれば、ノアの気持ちが変わるかもしれない。

弄ばれそうな一抹の期待を抱きつつ、アリスに尋ねてみる。

「みんな期待の目でアリスを見てるけど、アリスは王子様役やってくれるの？」

「やらないわよ」

その瞬間、クラス中から「ええー！」と嘆声が上がった。どれだけアリス王子を期待していたのだろうか。

僕も同じく「ええ……」と嘆いたが、明らかに意味が違った。期待を裏切られたところの話ではなく、確実なキャストイング破綻に憔悴しての「ええ……」だった。

アリスは言い訳するように付け加えたが、正直あまり聞きたくはなかった。

「やらないというより、できないが正しいわね。部活もあるし、家の用事もあるし、劇の練習なんてほとんどできないと思うのよ。それだから、主人公の相手役だなんて、そんなセリフの長そうな役はさすがに無理よ」

まっとうな事だ。

適材適所という言葉の意味をそのまま引用するのならば、アリスの適所は劇の王子様役ではなく、氷上でストーンを操る戦乙女といったところだろう。

でも、そうになると、もう本当に、劇の開演が危うくなってくる。

「どうしよう……」

僕の頭の中、それから台本の中では、すでに黒髪のメイド姫とブルンドのツンデレ王子様が舞踏会でエンジョイしているというのに、現実にはその影も無い。

計画があまりに一気に破綻したせいで、気持ちの整理がつかない。様々な思いを込めて執筆したから、尚のこと、路線変更の必定に処理が追いつかない。

僕の想像通りに配役できさえすれば丸く収まるというのに。

頓挫した計画を思い逡巡する僕の肩を叩いたのは、とても台本通りに動いてはくれなそうな人物だった。

「わしがやるか？」

散らかった感情の整理もついでいなければ、改善策の目処すらも

たっていない今、勇んで言えることではないと思ったけれど、脚本として言うしかないとも思った。

「あ、ありがとうサクラ。でも、大丈夫だよ」

これ以上の破綻は、僕の話を読んで感動してくれた人達に申し訳が立たない。この劇は、意地でも完成させなければならぬのだ。

「サクラにそう言ってもらえて、僕ももうちょっと頑張ろうかなって思えたよ」

「馬鹿にされておるような気がするのはわしだけか？」

「だって、あなたバカよね」

「なんじゃと。てすとも全部満点じゃぞ、馬鹿ではないのじゃ」

「どうせカンニングでしょ？」

「ちゃんとやっとするわい！」

「ははは……」

文化祭当日まで何の劇をやるか非公開にしておくという会長の目論見は、こういうことを懸念しての選択だったのかもしれない。そうしておけば自然と客の興味を引けるし、万一の事態にも対応しやすい。つくづく、抜かりの無い人だ。

そう。非公開であるのならば、際限のない修正が可能なのだ。この際、話をまるつきり別の物にしても構わない。それが劇として演目に数えられればいい話だ。

ノアの言った条件を守ったとして、物語を一度悲劇へと持ち込む必要も無いかもしれない。泣ける話と称されるほど作り込まなくても、コメディが何かに変えてしまえば、それなりの出来であっても後味が悪くなることはないだろう。

長時間コメディを演じ続ける方が色々危うい気もするけれど、今は四の五の言っている場合はない。

「あ。サクラ。少しお願いしたいことがあるんだけど。いいかな」

「なんじゃ？」

黒板のすぐ前あたりで和気藹々と談笑していたクラスメイト達の中へと飛び込もうとしていたので、呼び止める。

コメディと言えば、サクラしかない。

「台本書き直そうと思ってるんだけど、手伝ってもらえたりしないかな……？」

「なんでじゃ？」

サクラは半身を黒板の方へ向けたまま、首を傾げる。

「なんでって……、今から一人で考えてたら間に合わないから……」
「そうではないのじゃ。どうして、台本を書き直す必要があるのか、ということじゃ」

「主役の二人が難しいみたいだから、やむを得ないよ……」

「なんでじゃ？」

とても簡単な話だった。

サクラは、さも当たり前のように、それを話した。

「お主が主役をやればよいじゃろ？」

突飛な発言こそ茶飯事だから構えてはいたけれど、余裕綽々と斜め上を行った。それでもサクラの言う事は、一切難しいところなどなくて、誰にでも理解できた。どんな人でも、解決の糸口を掴めしてしまう、魔法のような言葉だった。

「僕が、主役……？」

確かに、台本を書いたのは僕だし、途中から別人にすり替わってはいえるものの元々の主人公像は僕自身だ。僕が主役を演じることは、理に適っていると言っても過言ではない。

密かに頷いていると、サクラが何やら付け加える。

「それに、お主が主役なら、意外と早く見つかると思うんじゃないの。もう一人の主役」

「どづいこと？」

「お主は鈍感じゃから気付かんじやろうが、意外とたくさんいるみたいじゃぞ。お主のふあん」

「えっ？ 不安？」

それと鈍感であることに、一体何の因果があるのだろう。確かに今は不安だけれど。

「ふぁんじゃ。頭が切れるし、運動もできる。加えて、可愛いも力ツコいいもいける。極めつけは、やさしさじゃ。お主、意外と人気者なんじゃぞ？ 男からも、女からもものう」

「そ、そんなはずないって……お世辞なんてサクラらしくないよ！」

「別にお世辞じゃないのじゃ。試しにちよつと聞いてみるかの？」

「え、いや、大丈夫だよ……」

半端に制止する程度では、サクラは到底止まらない。十一名のクラスメイトが溜まって話をしている輪に、何気なく突っ込んでいってしまう。サクラはあつという間に輪の中に飲み込まれて、見えなくなった。

そして一瞬の沈黙があつたかと思えば、どこからともなく聞こえてきたのは、どんな静寂をも打ち破る甘いあの声で。

「るーとのこと好きなやつ、手を上げるー」

何か反応があるかと思えば無く、教室に僕の名前が肅然と響き渡って、僕だけがひっそりと辱めを受けているようだった。ふと、アリスの方を見れば僕を見て鼻で笑っているし、ノアはといえば固まっていた。この瞬間の空気はと言えば、時が止まったかのように重く、吸えも吐けもしなかった。とりあえずできたのは、目を瞑ることくらいのもの。

それから十数秒ほどあつただろうか。

それくらいの時間が経つと、何事も無かったかのように談笑が再開されて、凍り付いた空気も解けて、呼吸もできた。これはきつと「忘れる」という誰かからの暗示に相違ない。

そうだ。忘れよう。それがいい。

その矢先、輪の中から体をうねらせながら這い出てきた少女が、暗示を解く。

「みんな恥ずかしがり屋なんじゃよ。この間なんか、学級委員長が
「もう大丈夫、うん！ わかったよっ！ 僕が主役をやることにす
るよっ！ はははっ！」

これ以上の失態は、今後の学校生活に響いてきそっだ。色々な意
味で。

「そうか！ それなら、お姫様役が見つかるまで、わしが練習相手
になってやろう」

「うん！ ありがとうサクラ！」

迷いを断ち切ってくれた意味では、感謝しているとも。

「ルート、笑ってるけど、険しい表情……」

「しょうがないわよ。自分で作りだしたお姫様像と、その本人が恋
をしなきゃいけないんだから。……ぶっ、くくくっ……ホント傑作
……………っ」

「ははは……」

農民Cあたりを所望していた手前、もう笑うしかなかった。

これで、誰もお姫様役に立候補してくれなかったらと考えると、
さらに笑えた。そしてきつと、その劇の結末は「泣ける」のだろう。
笑えない。笑えないけれど、笑えてしまった。

サクラくらい気持ちの切り替えが早かったら、と時々、その清々
しい笑顔が羨ましくなる。

「それじゃ、さっそく練習するかのう」

「そう、だね……」

「最後のきすしーんはどれくらいの長さにするかのう？」

「そ、そんなシーンは作ってないよっ！？」

まあ、迷ったところではあるけれど。

それをするフリにせよ、あるのとないのとは、確かにクライマ
ックスの迫真度が違ってくるのだ。それは、憎しみの裏側にある愛
という無形のテーマを、わかりやすく伝えられる最善の方法だと思
うのだ。

そういうのは小説の中で誰かがしているのを読んで想像したくらいだし、むしろ、一介の学生が軽々しく愛を説いていいのかも少々疑念に駆られるところではある。

そう言えば前にアリスが熱を出した時、そういうことが起きそうになったような気がする。あの瞬間は、ドキツとしたかと言われれば確実にしたのだけれど、特別、恋慕の念を抱いたわけではなかった。

そういうことを逡巡して、結局キスの価値などわからなかったから、愛情表現はハグに留めて自制したのだった。

「そういう問題じゃないよ！」

サクラに価値を聞いたら、どんな答えが返ってくるだろうか。

そんなことをテーマにディスカッションしたら、ハッピーエンドの悲恋劇が知らぬ間にバッドエンドのコメディ歌劇に変貌してしまいきそう。

僕を主演として、クラス内だけで一通りの配役を決め、軽くセリフの読み合いをしたところで下校時刻となった。

いつの間にか日も長くなっていて、夏であることを実感すると同時に、下校することにどこか物足りなさを感じる。

それでも、皆どこか晴れやかな表情をして帰宅していたから、とりあえず配役ミスなどないようで安堵した。言いたくないセリフを言ってもらつというようなことは、あつてはならないのだ。

とりあえずは及第点としよう。

でも、劇は学年全体でやることになっているから、これを残りのクラス分やらなくてはいけない。さらにその後、全体練習をして、

リハーサルを何度か積んで……。

色々と不安要素は残るが、どれも時間と要領の良さがあれば何とかなりそうな問題だ。そう考えると、本当に生徒会副会長としての資質が問われているような感じがして、背中がピリリと緊張した。「あたしたちは部室に寄ってから帰るわ。それじゃ」「じゃあね、ルート」

「うん。それじゃあ。また明日」

王子様殺害を企てる黒ローブの魔女役アリスと、その手先でスパイとしてお城に潜入しているメイド役ノアも、不服ではないらしかった。結構、皮肉染みているポジショニングだと思っただけけれど。

何となくだけれど、皆が晴れやかな表情をしているのは、自分の役に満足がいつているからではなくて、主役の枠が僕で埋まったからな気がする。

台本を読んでわかる通り、ダントツのセリフ長とスポットの演出。それから特筆すべきはラストに用意されたハグシーン（とキスするふり）。それを大勢の前でやってのけなければいけないとは、とんだ外れ籤ではないだろうか。

自分で脚本を書いておいてなんなのだが。

まあ、その役は僕で埋まったわけだ。自分に言い聞かせた通り、今は四の五の言っている場合ではない。

アイスリンクへと向かう二人の背中を見送って、僕も帰路へ着くとする。

正門から一步踏み出す。

夕日は低く熱く、僕の頬をじりじりと灼いた。額に汗が滲むのをよしとしつつも、シャツの襟をパタパタと開閉して換気した。少しだけ汗の匂いがして、ふと周囲を気にすると、三階の生徒会室から見るいつもの下校風景とは一風変わっていてどこか新鮮だった。

何だろう。

僕もこの学校の生徒の一人なのだと、単純にそう思えた。

考えてもみれば、入学当初からこうした変哲もない日常というも

のを送れていなかった。色々な要因があってそうなっているわけだけれど、さして悔いることも無かった。

全部楽しかったから。

「そんなにきよるきよるしてどうしたんじゃ？」

「おわっ」

唐突に、聞き慣れた声が背中にぶつかってきた。

背中を押されたわけではないが、何となく圧を感じた。

振り向けば、そこには非日常がいた。紅茶色の髪は夕日に紛れて、柔らかな白肌がにっこりとこちらを覗いて。確り着こなされた制服が、若干の青さを演出していた。

「びつくりしたー。サクラか」

「なんじゃ、失礼じゃのう。わしが来てやったんじゃから、もっと喜ばんか」

「あ、ありがとう……じゃないよ！ サクラ！ さっきの劇の練習っ。もうちよつと真面目にやらないとダメだからね！ 本番はお客さんたくさんくるんだから！」

「姑みたいじゃのう。というか、あれはお主が拒むから変になったんじゃぞ」

「そ、そりゃそうだよ。急に、き……キスとか、できるわけがないよ！ それに、相手がサクラなんて、余計……」

もし、あの劇の練習中、サクラの猛襲を受け入れていたら、僕の日常は確実に変わってしまっただろう。それに、一度跨いだら二度と戻れない気がする。

「なんじゃよ。きすくらいよいじゃろ。そんなにふぁーすが大切かのう？」

「そ、そんなこと……ま、まだ、わからないよ……。わからないけど、とにかく、軽々しくするのもあまり良くないと思うんだ。そういうことたくさんしてるサクラにこう言う事言うのは酷なんだからうけどな」

「わしだって、まだ一回しかしたことないぞ」

「……………」

何となく、反応したら負けだと思った。

真つ直ぐ帰路を見て、沈黙を貫いてみると、サクラの方から何やら語りだした。

「昔な。たつた一人、大好きな人がおつたんじゃ。そやつも、わしのことを好きだったんじやと思う。両想いじゃな。それがな、ある時からそやつは別の奴のことを好きになってしもつたんじゃ」

昔？ 唯一人？ 両思い？ 色々突つ込みたいところはあるけれど、真面目に話を聞く体でいけば、サクラがその後キスをするという話なら、それは完全なる嫉妬心なのではないだろうか。

嫉妬など、今のサクラからは到底考えられない。

それが本当の話なら、僕はもしかしたらものすごい話を聞いているのかもしれない。

「それでな。わしは、そやつにきずしたんじや。長いやつを一回だけじゃ。そうすれば取り返せると思つてのー」

「それで、どうなったの？」

いつもの作り話だとしても、結末は聞いておきたかった。

「わしの負けじゃ」

「そつか……………」

こんなにも、その人らしくない話というのが、この世に存在するものなのだろうか。捏造された違和感というよりか、ごくごく自然な哀愁物語を読んでいる感じが強い。

「だからわしは、いろんなやつとつるむのじゃ。見せしめにのう」
それで気を引こうという算段だろうか。

浅はかだけと真つ直ぐで、それは確かにサクラらしい。

「あんまり効果はないみたいじゃがな」

「それは、サクラが女の子ばかりつけまわしてるからじゃないのかな」

「それじゃなきや意味が無いのじゃ。わしが大好きだったのは姉^ねじやからな」

「え？ そうなの？ というか、お姉さんがいたんだ」

思えば、サクラについて知っていることが少ないような気がする。どちらかと言えばオープンな性格をしているから、結構筒抜け感はあるのだけれど、いざ何を知っているか考えると、驚くほど実情が無かった。こんなにも親しいはずなのに、おかしなことだ。

ともすれば、知ろうとすることが普通だろう。

「そう言えば、随分進んできちゃったけど、サクラの家ってこっちななの？」

「わしの家はどこにでもあるのじゃ。でもそろそろ疲れたから早く帰りたいのじゃ」

それは野宿という意味なのか、はたまた【魔法】とかけて解く心なのか、判然としないままにはぐらかされてしまった。

一つ言えるのは、サクラは普通を嫌うのだということ。

今度、暇がある時に家に呼んでみようか。入浴とか就寝あたりにイベントが起こりそうだけれど、それはそれで楽しめそうだ。

「サクラ、明日も学校来る？」

「暇だから行くのじゃ。るーとも来るじゃろ？」

「うん。色々やらないとだから」

「劇の練習はするののか？」

「ま、まあ。時間があればやる、かな……って、まさかサクラ、またアレやるの!?!」

「当然じゃ！ 一番の見せ場じゃからな！ 念入りにじゃ！」

生き生きと話すサクラの背中はとても楽しそうだった。あのシーンを演じることに、かなりの愉悦を感じているのだろう。僕が拒むので本当にしたりはしないものの、抱きついたり頬を擦りつけたりしてくるのだ。

だとすれば、早くお姫様を見つけなければ と思うのは、可哀想なのかもしれない。捨てられた仔猫を看過できないような、そんな感覚に近いか。

暫くの間、僕の少し先を歩いていたサクラが急に立ち止まると、

振り返って言った。

「わしはこの辺で帰るのじゃ。じゃあの」

「うん。また明日ね、サクラ」

「また明日なのじゃ」

くるりと小気味よく回転すると、サクラは少し先の細い十字路右に曲がって行った。追うつもりはないけれど、自然気がかりになつて小走りしたが、その道にサクラの影はない。まるで路地裏に住む猫のようだ。

普通に走って帰ったと考えられるけれど、サクラの場合は違う気がした。

それはやはり、サクラは普通が嫌いで、普通ではないからなのだと思う。

そんなサクラが僕を『特別』だと言ってくれたことが不意に想起される。

何を思ってそう言ったのか、いつものように思わずして行動したのか、疑問になる。『僕のファン』がいると言う発言も経緯が気になつてしまふ。

もしかすれば、サクラが僕を『特別』だと言うのは、僕が本当に『特別』であるを知っているからなのではないだろうか。サクラも『願いの夢』について知っているし、現に『魔法を使いたい』と願つてもいる。ノアや、ノアを通じて知っているアリス、それから僕のような、言わば、知っている側の人間になるわけだ。

つまり、サクラ自信が『特別』というのは、僕ら知っている側の人間にとってみれば否定の命題になる。所謂『特別』の中の『特別』は、普通だという論理だ。

でも、それなのにサクラは僕を『特別』だと言った。

いつもの気まぐれなのだろうけど、一つ利己的な理由付けをするなら、サクラが本当に特別な想いを持ってくれているからなのかもしれない。ということだろうか。

「そ、そんなこと、あるはずないよね……」

少なくとも、お姫様がサクラである今、そんなことはあってはならない。

そうでなければ僕は……。

『僕は間違っていると思う』

「あ。ルー」

これまた聞き慣れた声が、今度は前方から聞こえてきた。

気付けば帰り道は、半分より少し過ぎていて、あともう少し歩けば家に着くくらいのところまで来ていた。ちょうど、ミドルから帰る道との合流地点　あの丁字分岐に。

そして振り向けば、そこには日常がいた。

「や、やあ。リス」

頑張つて、いきたいところ。(後書き)

【あとがき】

書いていて気付いたのですが、今章は夏なのになんか全然暑くない気がしますね。

書いている今が冬だからかもしれませんが、どことなく寒い気さえします。

気のせいかもしれませんが、ちょっと熱中症には気を付けます。

続く。

彼女が、夜更かししていたら。(前書き)

【まえがき】

結構ラブコメラブコメしてる話が多いですね。今章は。

どうぞ。

彼女が、夜更かししていたら。

「た、大変そうだね。部活」

年上であるわけだし、僕が切り出さなければと思った。

とっさに動いた口は、割に相手の服装の乱れをしつかり洞察していた。

リズは昔からこういうずぼらなところがあるから、見てくれる人がいないとだらしがなくなるのだ。前はアリスがいたからちゃんとしていたようだったけれど。

「そうだよ。アリスお姉ちゃんもいないし、全然つまんなーい」

リズはそう言いながら、シャツの襟をつまんで換気する。

馴染み深い石鹸の香りが漂ってきて、少しだけ懐かしくなる。同時に妄想が拡大していくのも、紛う事なき事実。

いつもと何かが違っていて、でもそれが必然に僕の心を掴む。僕は、そんな汗ばんだような甘酸っぱい香りがすごく好きになってしまった。

内心、もつと気温上がれば などと邪心を抱きつつも、歩き慣れた道を歩き慣れた人と歩いた。

「……………」

「……………」

間がもたなかった。

二人が別々の制服を着て、この見慣れた帰宅道を歩くと言うのは、何とも形容しがたい感情になる。少なくとも、変わったことを実感しているのは僕だろうから、リズはそんな感情を抱いてはいないのかもしれないが。

それでも、沈黙に沈黙で答えるのは、何ともリズらしくなかった。

どうやら、何かしらの異変を感じ取っているのだと思う。霧囲気の変化とでも言うのだろうか。

この道を歩く時に、今までどんな話をしていたのか、全く思い出せない。

若干、息苦しくなってくるが、日中に温められた地面から出てくる放射熱のせいだと思いたい。

暫くの間、会話が無かった。

その間のもどかしさを一気に解放するかのようになり、突然、リズが僕の左腕にしがみついていた。リズは少しばかり震えていて、心なしか体温が高かった。

「えっ？ ど、どうかしたの？」

「な、なんでもないからっ。気にしないで！ うん！」

気にせざるを得ないぞと周囲を見渡せば、目前に竹藪があった。

私有の藪に道路を敷設したという経緯があつて登下校の道になっているけれど、本数もさることながらかなりの背丈があつて、本格的な藪となっていた。

ここ数年でこうなつたというわけは無く、記憶をエレメンタリ―より前に遡れば、小さな竹林がそこにある。振り返ると、僕たちと一緒に育つたような感じがして、僕はこの場所が結構好きだつたりする。

夕方という時間帯も相俟つて、藪の中はほとんど真っ暗だった。

進むほど暗くなつていくので、目が慣れるのに時間は必要ないが、どこからどこまでが舗装されているのかは注視しないとわからないレベルだった。

そうやって成長する度に藪は暗くなっていくけれど、僕たちは果たしてどうだろうか。

「リ、リズ……」

「どうしたの、ルー」

「腕、ちよつと痛いかも……」

「大丈夫大丈夫！ 気のせいだよっ！」

「あつ……。そんなに強く掴まないで……。っ！」

リズはこういう暗がりだとか暗所全般に苦手意識を持っていた。そして僕は、下心を隠すのが下手くそだった。

二人ともあまり成長していないようだ。

暗くないだけマシなのかもしれないけれど、それとなく気恥ずかしく思う。

「……………」

「……………」

また、沈黙が訪れた。

でも今度は、ぎゃあぎゃああというような鳥か何かの鳴き声が聞こえるから、変に息苦しくはなかった。

いくら規模が大きいとは言っても、竹藪は五分歩けば抜けられる。息苦しくない闇の中にいるうちに、布石をうっておきたかった。鎮まらない鼓動を隠すように深呼吸して、それから口を開いた。

「そっ」

息を吸って吐いたら、また吸わなければいけないことを忘れた。肺に残っていた酸素の残量は、その一文字だけを告げて藪に消えて行った。

次の言葉を紡ぐための充填は、リズの返しに追いつかなかった。

「そ？」

せつかく息苦しくなかったというのに、勝手に息苦しくなる。

吸って吐いての循環を誤らないように、一拍二拍おこうと思ったが、リズの心配は休符を挟まずやってきた。

「そば？ そば食べたいの？」

「あ、いや……。うん……………」

この状況で、唐突にそばが食べたい発言をするなんてどんなひねくれだろうと、心の中でツッコむ。脈絡が無さすぎて面白かった。リズがそれを言うと、可愛らしく感じてしまっけど。

「ルーって、ほんとそういう変なの、好きだよな」
「す、好きだけど……」

まあいつか と内心諦めて沈黙を呼び込もうとすると、勘付いたのか、リズが会話を続ける。

「うそうそ。冗談だよ。ほんととはなんて言おうとしたの？ もしかして、添い寝してくれー、とか？」

「いや、違うよー！」

そんなこと、大いにして欲しいけれども。

「なんか、真っ向から否定されると傷つくなあ」

「でも、本当に違ってなくても違くないとは言えないし……。それに、あんまり正しくないかもってさ……」

だけど、これが『間違っている』のかもしれないから

そんなことを思ったりもして。

そういう僕の疑心暗鬼をかき消すのは、いつも周囲の人の勢いだったりもして。

「ま、まあそうだけど……。ふふっ！ ルーってわかりやすいよね！」

「そ、そうかな……。リズだって、言いながらドキドキしてるよね」
「はっ。してないよ。してない。そんなの、暗いからちよっと興奮してるだけだって」

そうやって左腕に密着しているせいで、鼓動がダイレクトに伝わってきていた。

添い寝だとか、好きだとか、息苦しい沈黙だとか、僕の心臓が高鳴ると、その度にリズの拍動も早まった。その逆に、リズの脈拍が早くなれば、僕の鼓動も早くなっている気がした。順番を見いだせる程冷静になれないし、距離が距離だけに混同する。そんな同期が心地よくもあるのだけれど。

道端から何か小動物でも飛び出してこないかな、などと少しだけ

期待しながら歩く。もしそんなことが起これば、二人して高揚してどうにかなってしまういそうだ。

スキップしたくなる気持ちを抑えると、今度は顔がニヤけそうだった。

「あ。ルー、なんか邪な事考えてるでしょ」

「別に考えてないよっ!」

「ニヤけてるよー? あ。さっきの、添い寝とか想像してたんでしょ?」

「し、してないよっ!」

「でも、してみたいでしょー?」

「してみ……って、こらっ」

「あはははは!」

何だか、この軽快なやり取りが懐かしく感じた。

真つ暗な竹藪にいるからなのか、懐かしく感じる程にリズムとの時間が無かったのか、はたまた両方なのか、わからない。わからないけれど、それでよかった。

僕の中にあつた感情が、一切変わっていなかったことを少しだけ誇りに思えたから。

沈黙の竹藪を抜けると、自然とリズムが離れた。

代わりにやってきた涼しさを、空しさと勘違いする前に。

今度は僕から。

そう言わんばかりに、僕は口を開いた。

「あ、あのさ。リズム」

「ん? なに?」

僕が思う主役は、そこにいたのだ。

ずっと昔から。隣に。

「劇とか、興味ある？」

感想を交えた近況を延々 つもる話、と僕たち若人が言っているのか怪しいが、そういう話を家に着くまでしていた。

家に着いてからは、いつも通りに夕飯を食べて、いつも通りにズの後に入浴して、いつも通りに居間で夕涼みをして、いつも通りに自室に帰った。驚くほど、自分の中にある『いつも通り』が変わっていないくて、ちよつと笑えた。

このところ、生徒会で僕が遅かったり、大会でリズムが遅かったりで、同じ空間にいられる時間があまりなかった。そのせいで、どこか“家”とか“家族”という当たり前の枠組みが有耶無耶に、希薄になりつつあったのだ。

それで今日漸く、安心できた。

こういう時間もたまには必要だなと、部屋でゆっくりと深い呼吸をしながら、しみじみ感じた。久々に、布団がフカフカだとも思えた。毎週末干しているのは知っているけれど、それをこうして体感している暇がなかったのだ。

リズムがいると、どこか心にゆとりができる気がする。

でも、あまりに近すぎてもいいものではないのだ。

妹とはいえ、心底愛おしくて緊張してしまい、いつも通りではないらなくなるからだ。

そう思うと、俄かに背中が汗ばむのだ。

夏だからという建前は、数週間後に控えた劇が形になっていくごとに、風化して薄っぺらくなっていくことだろう。そうしてすっかり浮き彫りになれば、後に残るのは劇のラストを飾るあのシーンか。サクラが言うようなことを僕が進んでやるつもりはないけれど、

吹き込まれたリズが積極的な姿勢をとれば、やらなくてはいけなくなる気がしないでもない。「しようよ」と言われればするけれど、「してよ」と言われたら躊躇う。そこがあやふやなのは、僕自身の気持ち整理しきれないからに他ならない。

やはり、リズに主役を任せようという試みはよくないだろうか。生徒会的にも。いや、学校的にも。もはや、世間的にも。そして、僕的にも。

でも、リズはオーケーしてくれた。

何をやっても飲み込みは早いし、機転も利く。要領もいいから、台本だつてすぐ覚えられてしまうだろう。エレメンタリーの頃、発表会か何かで主役を演じていたこともあった。なにより、街の有名な人であるリズなら、主役にも相応しいと思う。

ただ、大事なのはそこではなかった。

本当に、僕が主役でいいのか？

主役という枠組みに収まりきららない魅力をもっているリズなら、確かにステージ上でも映えるだろう。つまりそれは、対をなす役割である僕も、同じだけ輝かなければ劇は成り立たなくなると言う事にもなり得る。

だから、互いが互いを引き立て合っているアリスとノアを主役に抜擢したのだから。

では、僕はリズを引き立てることができのだろうか。『好き』などという漠然とした感情だけで、僕はリズに何かを伝えることができるのだろうか。そして、リズはそれに応えてくれるだろうか。それはまるで、キスをする前の、告白を、しているようではないか。

息がつまる。

肺に溜まった空気は、いやに太陽の匂いがした。こういう時ばかりは、サクラの生き方が羨ましくなる。

こういつ時、サクラだったらどうしてしまうだろう。

アカデミー生になって新しい視点を手にした僕は、一人でそんなことを想像した。

それは、それは、空しかった。空しくてどうしようもなかった。こんな気持ちになる時は、決まって昔の夢を見る。

初めは空を飛んでいる。着地の方法を覚えて地上に降りられるようになる、僕はヒーローになった。空の飛び方を忘れなかったおかげだ。暫くは、誰しもが僕を称える。翼があれば、困っている人を助けたりできるからだ。しかし、また暫くすると、金縛りでもないのに身動きが取れなくなって、色々な人にもみくちやにされてしまう。今まで優しく接してくれていた人たちが、僕の翼を挽もいで、最後には丸めて捨てられてしまうのだ。

僕にしかわからない、皮肉な夢だった。

やはり、夏の夜に良い思い出など無い。眠るに眠れないではないか。
ならば。

「あ。ルー」

「え？ リズ？」

居間で冷えたミルクか何かを飲みながら、本でも読んで眠気の到来を待とうかとやってきたら、ソファに先客がいた。

その人は僕が着ているのと似た柄の寝間着に身を包んで、コップ片手にこちらを見ていた。

対する僕が手に持っていたのは、下らない都市伝説を下らなくないように必死に語る一冊の本だった。

「ルーも眠れないの？」

「少し暑くて」

主に頭の中が。

だからこうして、僕が一番読まなそうな本を本棚から抜いてきたわけだ。熱中もせず字の羅列だけ見ていればじきに冷めて、そのうち睡魔はやってくるはずだと踏んだのである。

うちの居間には年中通してソファがある。年中同じソファかというところもなくて、春夏用のメッシュ生地のもので秋冬用のウール生地のものが、交替で物置から出されるシステムになっている。

今はもちろん夏用のソファだけれど、メッシュ生地にも限界はある。蒸れてくると、逆に居心地が悪くなったりするのだ。

そういう理由で、僕は食事をするテーブル備え付けの木製椅子に、腰かけた訳だけれど。

背後に座られるということに抵抗があるのか、リズは体を捻ってこちらを向くと、背もたれ部分に肘を付けて手招きしてきた。

「ねえルー。こっち座らないの？」

「あ、いや、うん……今行く」

リズに招かれれば、そこが多少暑くとも行くしかない。のっそりと立ち上がった僕は、気取られぬよう足早に、リズの隣に移動した。少し仰々し過ぎるくらいに自由落下で腰を下ろすと、ぼふっとソファから空気が出て、埃とリズの匂いがあたりに蔓延した。

また頭が熱くなったのは、何かに感染したからか。

「落ち着きないね。ルー」

「そ、そんなことないよ。リズだって、前はこんなことしなかったじゃないか……」

「こんなことってー？」

「い、一緒に座ろうとか……、そういうさ……」

リズは、そうすると僕が喜ぶことを知っているから、僕の機嫌を損ねた時にそんな提案をしてくることもあった。けれど、今は別に

機嫌が悪いわけではない。悩みの種の一つがリズのおかげでなくなったわけだし、むしろ上機嫌なくらいだ。

でも確かに、リズの言う通り、僕の方も落ち着きがなかった。

「も、もう。そういうこと、すぐに口に出さないでよっ」

「リズが聞いてきたんじゃないか」

「そうだけどさあ……。ルー、いつもならそこであたふたするじゃん」

「そ、そうかもしれないけど……。今そんなこと言われてもな……。どこかそそっかしいというか、何というか。」

互いが互いの触れ合い方を忘れてしまったような、そんな浮遊感が漂っている。

「……………」

「……………」

時計の針が時を刻む音が、やけに大きく聞こえた。風はなく、雨も降っていない。深夜、僕たち二人だけが部屋にいるからだった。僕の心音にしてはゆったりとしていたから、それが刻時だとはわかった。

僕の決心は、二十二回、刻時の音を聞いた瞬間に。

「そっだ！」「ねえねえ」

見事に被ってしまった。しかも、リズの声ばかりを聞いていたから、自分で自分が何と言ったのかわからなかった。

とりあえず、リズに譲ろうと思う。

「リズ、先どうぞ」「ルーいいよ」

まただ。

もしかしたら、リズも自分が何と言ったのかわからなかったのではないだろうか。

それでは何か。

今の沈黙には、全く何の意味も無いということになるではないか。無理矢理に意味を持たせるのなら、二人きりという事実をひっそり心に反芻する時間になるかもしれないが。

「……………」

「……………」

自分の刻時が早くなる度に、時間経過は遅くなっていく。どんどん時間はゆっくりになっていく。このまま時が止まってしまえば、ここで眠ってしまえるのかもしれない。

けれど、今微睡んでは、せつかくの邂逅が勿体ない。ならば、この沈黙を続けたい。

もはや、終着点のある会話よりも、終わりの無い沈黙の方を、僕は願う。

「……………」

「……………」

リズの優しい匂いと、温かくて柔らかい重さが、ふわりと僕のところへやってきた。

「リ、リズ？」

「……………」

リズが言うのなら、もう沈黙は要らないというのに。もどかしくてならない。

右肩に掛かるリズの体重に、僕の心臓は押し潰されそうになる。そんなにくつついたら、僕の時間が止まってしまうかもしれない。

できるだけ時計の音を聞くように留意すると、僕の方に凭れる人の息遣いの方が余計に耳に入ってきてきて逆効果だった。心臓がパンクしそうとは、まさにこのことか。

「どどど、どつしたのリズっ」

「……………すう」

「あれ？ 眠っちゃったの？」

思えば、リズも部活で疲れているのだった。

学年も上がって頼られるようになって、色々大変なことも増えるだろう。けれど、それは僕の背負えないものだし、何よりもリズ自身の誇りとしてリズが背負うべきものだと思う。そうして、色々なものを背負うことが、リズを何倍も輝かせるだろう。何かに立ち向かう力を、与えてくれるだろう。

それに対して、僕がリズと同じ第二学年の時は、空っぽだったと言ってもいい。

今だって、正直、枠組みを作ってもらわなければ、何も判断することはできない。それくらい、僕は今までずっと逃げてきた。

それを踏まえての決心が生徒会であり、その証としての文化祭なのだ。

これを成功させるこそが、僕が“僕”として漸く何かを背負えたという事実につながるのである。大々的に豪語するくらいしなければ、またどこかに逃げ道を作ってしまうかもしれないから、僕は自分自身に強く言い聞かせることにしていた。

そして今できることは、せっかく見つけた主役を、いかに輝かせるか。いかに応援するか。いかにして、対等に並ぶか。

それは、相手のことを　リズのことをよく知っている僕だからこそ、できることなのかもしれない。他の人に任せられるかと言ったら、確かにそれは不安だし。

思えば、記憶の中にいるリズは、いつも僕のことを応援してくれていた。

怪我をした時も、過ちを犯してしまった時も、辛く苦しい時も、泣いてしまった時も、絶望の淵に立たされた”あの時”も。どんな時だってリズは僕の隣にいて、僕を鼓舞してくれてたではないか。でもそれは、僕だって同じだ。

僕も、ずっとリズの隣にいたのだから。

リズの激励を聞いて、僕は笑い、リズも笑う。そんな簡単なやり取りが僕は大好きで、リズはそれを知っていた。それだけのことだけれど、僕にはリズを笑顔にする自信があった。

それが、それだけが僕の誇りで、ただ一つ逃げなかったことだ。

リズにだけは笑っていて欲しい。

そんなことは、何かに願わなくても叶えられる。現実に向き合つて、次へと進んでいけば確実に、誰かを幸せにできる。リズを喜ばせることができる。

必要な事は、一步を踏み出す小さな勇気と、誰も遅れないようにと待ったための足踏み。それだけなのだ。そう教えてくれたのは、他でもない。

「ありがとう。リズ」

寝ているのをいいことに、久しぶりにリズの髪の毛に触れた。前からこんなに柔らかかっただろうか。それに、これほど良い匂いがしたものだろうか。身震いする。

寝ているからなのか、ノアほどの反応はないけれど、リズ表情が和らいだ気がする。乗じて、僕の声の大きさは漸減する。でも、言葉は紡いでいく。

「リズが主役をやってくれるなんて、夢みたいだよ」
でもそれは、決して叶わないものではなく、夢というには惜しい。そうとわかっていいるからこそ、僕は文化祭に招かれたのかもしれない。

言うなれば、これは一連の夢を見ているだけだということ。

こんな最高の夢、二度と覚めなくていい。現実であれば、僕はまた歩き出せるはず。逃げ場どころか、今あるのは進路だけだ。

今まで恐れていた脇道すら、リズと二人なら明るい近道に早変わりしそうだ。サクラのように謎を楽しむのではなく、すべて照らして解明するのがリズだから。

僕は、ただそれについていくだけ。時々、リズの手を取って歩いたりして。

「リズ。いつも味方でいてくれてありがとう」

リズは僕が失意した後からずっと、責任を背負い続けていたのかもしれない。そうなる前の関係を思い出せないくらいに、リズの負担は僕の習慣になっていた。

でも、僕が逃げることをやめなかったから、根本の解決には至らなくて。負担を軽くしようと磨り減らした僕の想いも、結局は無駄になって。

だから、僕とリズの間にある笑顔なんて、負担の結晶のようなものなのだ。

それを解消する方法は、きっと、いつもそばにあった。弱い所を知られることを恐れて、ただただ目を背けていただけ。

でも、アカデミーに入ってから密な春を過ごして、僕は少しだけ変わったのだと思う。

自分自身の意志ではない部分もまだたくさんあるから、誇れるものではないけれど、これから誇れるように生きていければいい。

「僕が生徒会に入ったのはね。何か変えられるかも、って思ったからなんだ。すごく小さいかもしれないけど、この世界に……間違いないんだって、誰かに聞いて欲しくて……」

生徒会は成り行きかもしれないが、正直、形などなんでもよかった。

とにかく僕は、僕の心を、誰かに理解してもらいたかった。それが、すべての償いになれば。なんて妄想をしつつ。

「全部、リズのおかげだよ」

僕を一番理解してくれたから。

「リズ……」

だからこそ僕も、逃げずに立ち向かいたい。

最初で最後の、一度限りのこの世界で。

リズの気持ちにだけは。

「好きだよ」

そうしてまた、時計の針は時を刻みだす。でもそれは、今から世界が始まったということではない。世界は確かに存在して、僕がそれに気づいただけの話。

それと、同じことなのだと思う。

「……………」

チク、タク、と時計が刻時する度に、僕はリズの髪を梳いた。本物のお姫様の匂いがした。僕はできるだけ優しく、それを続けた。

『自分と同じ』を、心に反芻して。

まるで、『世界が幸せでいっぱいになった』ようだった。

それで僕が眠れるわけはなく、それこそ、魔女の林檎が欲しくなったけれど。

彼女が、夜更かししていたら。(後書き)

【あとがき】

つつひゃあどきどきするぞ。

次回もルート編でしょうか。

何歳の夏、僕は生まれた？（前書き）

【まえがき】

姉妹姉弟が学校に来ると、すごい違和感を感じますよね。

あんな感じの今章です。

あと、ちょっと急展開も。

どうぞ。

何歳の夏、僕は生まれた？

「名前なんて言うのー？」

「リズだよ」

「可愛いー！」

「ありがとー」

「あとで遊ぼうよー」

「うん。いいよ」

教室に入るなりクラスの女子達に囲まれたリズは、暫くすると応対にも渋みが見え始めた。

けれど、そこはやはりリズで、終始にこやかにしていた。年上相手であるにもかかわらず物怖じしない様子は、少しだけ僕の自慢であった。

「か、可愛すぎね？」「やばいな……」「誰だよ……」「俺、告るわもつ」

教室の後ろの方でも、何やら始まっていた。こっちは嬉しいやら、恐ろしいやら、複雑だ。

まあそれでも、誰かが主役に名乗り出ると言う事は無く、主役は僕で決定になったわけだけれど。それはそれで嬉しいことだと思っ。おそらく、僕が認められたと言うよりかは、家族だからやましいこととは何もないと思われるだけなのだろうが。

虚空を見つめて、一人、首をぶんぶん横に振る。

いや、やましいことはないけれどと心中弁明じゅうちゅうへんめいしておかなければ、自分の気持ち的にも色々と負荷がかかってしまいそうだ。それに、何よりも友人の目が痛い。

僕の肩をポンと叩いて優しい表情をした後、部活に行ってしまったアリスが、非常に　いや、非情に印象深かった。その後ろに隠れていたノアの赤面も、大分意味深だった。あれは、誤解を解くのに時間を要しそうだ。

とはいえ、このままりズの包囲網を観察しているわけにもいれない。文化祭実行委員兼生徒会副会長という飾りのような大義名分もあるわけだから、少しは責任を果たすべきだろう。

「みんな！　そろそろ練習始めよう！」

クラスメイトの視線が一気に僕に集中する。その数に圧倒されていると、人込みから低い声が聞こえてくる。

「そうだな。役も決まってるわけだし、練習しないとさすがにまずいよな」

「そうだねー」「やろつかー」「合同文化祭で失敗したら、またあの学校と比べられちゃうからね」

続いて二、三名の女子が口を開いた。そちらの方は、見覚えがあった。

球技大会の試合中も、終始場の雰囲気盛り上げてくれていたムードメーカーのグループだ。

最初に発言した男子含め、彼女たちは、クラスの中での立ち位置としてはかなり上に部類する。なので、彼女たちが何か始めれば、クラスはそれを真似、ついていく。

副会長としては少し悔しいけれど、それがこのクラスの良い形だとも思える。

それに、ムードメーカーグループの中の一人の女子とは、球技大会以来それなりに親しかつたから、悪い気はしない。試合終了後に呼び出されて、それから、”友達”になったのだ。

「それじゃ、どこからやるー？」「リズちゃんも来たわけだし、さっそくキスシーンを……」「自重しろ」「最初からでいんじゃないね？」

「最初だと、あたしら出番くない?」「そうだねー」「じゃあ、皆出始めるあたりからがいいよね」「そうすると、あの辺かなー」ムードメーカーグループの会話を皮切りに、クラスが活気づき始める。

あまり話をしない人も話に混ざって、強面で敬遠されていた人も楽しそうに談笑していた。

何だろうか。

ますます、僕を小さく感じてしまう。

「ふうっ」

「あん……っ!? って、サクラ!?!」

急に、耳にこそばゆい強風が吹いたので、つられて変な声が飛び出た。向かい風の方を向いてみれば、紅茶髪の少女が口をすぼめて笑っているではないか。顔と首筋が熱くなる。

何か、家から大きな家具が無くなったような違和感はしていたが、サクラがいなかったからだったようだ。あると便利だけど場所をとって、ないと見晴らしはいいけど不便、という感じ。

今まで一体どこで息を潜めていたのだろうか。

「やっぱり良い反応するのう」

「びっくりするからやめてよ……。というかサクラ、今までどこに行ってたの?」

「いや、ちよいと盗聴器をな」

「と、盗聴器?」

何かの隠語だろうか。文化祭とは無縁だし悪い予感しかしないので、触れないでおく。

「それよりサクラ。これから練習やるから、暫くどこにもいかないでね」

「わかったのじゃ。けど、わしが王様役というのは、未だに納得いかんのじゃ」

サクラは目を細めながらそう言うが、準備運動に肩を回す様は満更でもなさそうだった。

というのも、クラスメイトからの精力的な推薦があったからだろ
う。

国王イコール黒幕というブラフを掲示しておいて、最後は結局のところ黒ローブの魔女が主犯格であると言う結末で、国王は物語が終わるまで何も知らない。怪しい匂いを漂わせておきながら、本当は何も知らないという間の抜けた設定が、皆どこかしっくり来たらしかった。

「ん？ お主、今良くない事を考えておったじゃろ」

「そ、そんなことないよ。さあ、サクラは髭を付けて待ってて」

「ふうん……」

サクラはポケットから付け髭を取り出すと、ものぐさに鼻の下に白い毛玉を生やした。満たされた仏頂面で大人しくしている様は、まさに無害の王様だった。

王様が話すと、その度に白髭が揺れて滑稽だ。

「というか、誰も衣装なぞ着ておらんではないか。なんでわしだけ付けんといかんのじゃ」

苦言を呈してはいるが、以前、付け髭をした姿を「可愛い」と褒められたからか、語勢は本気ではない。サクラは案外、褒め言葉に弱かったりする。

「でも、似合ってると思うよ。僕も」

「そ、そうかのう。ん、まあ、るーとがそう言うなら、付けといてやるのじゃ」

ご満悦の王様は、また不満を繕ってクラスメイトたちの輪の中に消えて行った。「ふおっふおっふお」とか「ぬはははっ」とか色々
と、それらしいセリフが聞こえ始めた。

暫くすると、サクラの周りには人だかりができていた。

「サクラって本当すごいなあ……」

周囲を期待させる魅力と、それに応えられるだけの力を持ってい

るのだ。言い換えれば、サクラは相手が誰であっても、自分を輝かせるための材料にできてしまうということだろう。それは、相手の良い所をいち早く察知できると言う事でもあるわけだ。

僕にそれが無いかと言えば、極微ではあるものの皆無ではない。けれど、それ以前の問題なのだと思う。

『人間、誰もが磨けば光る原石だ』とは昔からよく言われるけれど、僕の場合は、磨いても仕方がない曇り硝子ガラスなのだから。

「ルー」

「わっ！ ……なんだ、リズか」

「何それ。失礼かも」

アカデミーの教室にリズがいるという事実に加えて、昨日久しぶりに二人で眠ったということもあったから、会話する時の緊張が倍増する。ダイニングのソファとは言え、密着していたし、何やら、聞かれていたらひっくり返りそうな恥ずかしいことを言い放った覚えもある。

視線は当然のように窓の外へと逃避して、積乱雲の大きさなどという非常にどうでもいい情報が、余計に頭に雪崩れ込んできた。ちなみに、結構大きいと思う。

「……ま、いいや。それよりもさ、衣装ってどんな感じなの？」

「あ。衣装はね、毎年劇で使ってる物が倉庫にあったから、それをリメイクして使う予定」

「どんな感じなの？ 派手？ 地味？」

「結構派手かな。だから、劇の雰囲気に合わせて、少し大人しめに作るよ」

「え？ ルーがやるの？」

「ま、まあ。うん……」

「手伝う？」

「あ、うん。お願いしたいかな」

「わかった。じゃ、早く練習やつちやお」

僕は二度頷いていた。過剰な一回は、リズと話すのっていつもこんな感じだよね……？と、自分に。

リズも続いて頷くと、僕が立っていたところの一番近くの席に座った。アリスの席だ。

リズの視線は黒板の方を捉えたり、クラスメイトの誰かを目で追ったりしていた。不安そうな様子はなく、逆に楽しんでいる様子だった。

僕は、黒板の上の時計を見て一人、不安になった。

ちょうど二十秒後に、短針が十四時を指しそうだった。予定では、セリフ合わせが終わっている時刻だ。

もし僕がシンデレラだったら、それはもう色々と手遅れだっただろう。

「だいたい形になってきたね」

夕焼けが教室の壁の色をオレンジに塗り替え、それがそのまま大炎上のシーンのセットのようだった。けれど、セットを用意して練習するには、まだ早いということを実感しただけというのが実情だ。早いと言えば時間経過で、練習に打ち込んでいるとやけに時間は早く進んだ。

ただ、詰め込んだ感否めないにせよ、今日できることはできたし、有意義であったと思える。

途中、家の用事があるからという理由で十名ほど帰宅してしまっただから完璧だとは言いがたいが、それなりにやれたのではないだろうか。

クラスメイトのうち元気がある人達は、そんな僕の言葉に同意し

てくれていた。

皆、形になってきたと言う自覚が出てくると、何かを演じる羞恥心も無くなっていくようで、少しばかり演技に熱が入っている人も見受けられた。町民Cが白熱の演技をしだした時はさすがにどうかと思っただが、場は和んだわけだし、それはそれで良かった。

時計の針は、ちょうど十九時を指している。

今は、談笑と反省を半々、各々でしていた。

グループごとに別々の話をしているようではあったが、一部の話題が揃うと自然に全員が輪になって話すようになっていた。

生徒会副会長であり劇の脚本を書いた人間でもあった僕は、取りまとめ役としてその光景を傍から見、愉悦にどっぷりと浸っていた。

「あんた今、凄い顔してるわよ」

「えっ!? あ、アリスっ。おかえり!」

「ノアもいるよ」

「お、おかえりノアさん」

自分の席に座っていたから、後ろ側のドアから教室に入ってきた二人に気が付かなかった。というよりは、浮かれていて周囲の状況把握が疎かになっていただけか。

アリスは僕の隣のサクラの席に腰を落ち着けると、クラスをぐるりと見渡す。ノアはいつも通り自分の席に着いて、きよるきよるするアリスを見ていた。目の前にアリスが座っている珍しい光景を堪能しているのだろう。

「相変わらず大人気ね。あの子は」

「うん。そうだね」

黒板前の教卓の周りにできた人だかりを指差して、アリスは小さく笑う。

正直なところ、笑っていられる状況でもないから、返した笑みには苦みが混じってしまっ。

アリスがそれを見逃すはずも無く。

「複雑そうな顔ね」

「ま、まあ、そりゃね。誰かに変な事されたりしないかは、不安だけど」

「ふふつ。いつそのこと『リズは俺のものだ。触れたら殺す』くらい言ってみれば？」

「なっ！？ そんなこと言えるわけないって……！」

そんな僕の心配を、アリスは鼻で笑ってくれる。そこまで割り切られると、僕の方もかえって清々しい。ネチネチと陰で笑われるより、百倍マシだ。

「でも言いたい、と」

「そ、そんなんじゃないって！」

「ルート、汗すごい……」

「ち、違うよ！ そう！ これは涙！ 涙だから！」

「ルート、泣いてるの……？ ノア、相談、乗るよ……？」

「あ、ありがとう……！ ああ、泣きたくなってきた……」

アリスが声を殺して笑い出したあたりで、途中からずっと行方不明だったサクラが教室に帰ってきた。今度は前のドアから入ってきたので、すぐに気付けた。

「練習、終わったんじゃない」

サクラは自分の席がアリスに占領されているのを一瞥してから、僕の机に凭れるようにしゃがみ込んだ。ふわりと木の香が漂ってくる。

「もしかしてサクラ、昼寝してた？」

「うむ。眠かったから寝てたんじゃ」

悪びれる様子など全くなく、然も当然のことのように頷いた。そうまでされると叱る気も起きない。アリスと言いきいサクラと言いき、色々と割り切り過ぎではないだろうか。

少し強気に尋ねる。暖簾に腕押しというやつかもしれないが。

「まだ一回しか練習してないけど、大丈夫なの？」

「余裕じゃ。まだ時間はあるのじゃ」

「その余裕は一体どこから来るのよ」

「ぼてんしゃる、じゃな」

小胸を叩いて、サクラは言った。ポテンシャルを直訳すれば、この場合はきつと、魔法のことになるのだらうけれど、サクラが諭したいことは別にありそうだ。

誇らしげに胸を張るサクラは、色々小さかった。

あはは、と社交辞令を交えていると、後ろの席から不安が飛んできた。

「ノア、自信ないかも……」

「あ。そうだよね……」

それもそのはずだ。部活で練習に参加できていないアリスやノアからすれば、サクラの不真面目な一回も笑ってはいられないのだ。サクラは何故か笑っているのだけれど。

「それなら、今からやればよいじゃろ」

「え？ いいの？」

ノアはわりと乗り気に目を大きくしていた。ノアの瞳は、物欲しそうな子犬のようにアリスと僕とを行ったり来たりしている。演技の練習という名目で合法的に、魔女アリスに頭を撫でてもらえるからだろうか。いや、それくらい合法だけど。

一方、目配せされた魔女アリスはと言えば、「はああ」と大きな溜息を前提して、怠そうに一蹴するのだった。

「そんなのいいわよ、めんどくさいから」

「え……。ノア、自信……ない……」

賛同を得られなくて余程ショックだったのか、演技の練習ができなそうで落胆しているのか、ノアは泣きそうな震え声でそう言うて俯いてしまった。

まるでそうなることがわかっていたかのように、アリスはノアの頭を優しく撫でた。ノアが俯くと、ちょうどいい角度になるというのがまた、計算されているように美しかった。アリスなら感覚を共有していなくてもやってのけそうだけれど。

「大丈夫よノア。あなたが出る場所は、首謀のあたしと話してる場面だけなんだから、家でも練習できるわ」

「あ。そっか……」

安心するやらがっかりするやら、ノアは微妙な表情をしていた。

出会った頃よりも遥かに表情が豊かになって、魅力も増している。情報通の会長から聞いた話によると、『小さくて黒髪の一年生』には隠れファンがいるのだとか。

それを聞いて以来、僕は簡単にノアの頭を撫でられなくなった。アリスほどの人物ならまだしも、僕はファンを敵に回したら勝てそうもないから。

逆に、アリスに撫でられるノアを見ていると落ち着いたりするけれど。

そういうわけで、僕は満足だったりするわけなのだが、皆が皆そうだとは限らない。

「ええー、やるのじゃー。見たいのじゃー」

サクラが僕の机の上に顔を擦りつけて、駄々をこね始めた。思ったことをすぐ口に出す忌憚の無さはいつも通りだけれど、今日はイマイチ合理性欠ける。大方まだ眠いのだろう。

振り乱れるサクラの髪の毛を直そうと手を伸ばそうとすると、それよりも先に、アリスがサクラの頭をがっしりと鷲掴みにした。

「いたっ。痛いじゃあ……。やめるのじゃー!!」

「あんまり騒がないでくれるかしら」

「べ、別に騒いでないのじゃ。……くうっ! お主、握力どんだけあるんじゃ……。まるで……」

「まるで、なにかしら?」

「ゴリっ、痛い!! 割れるのじゃあ!! あああああ!!」

僕の机の上では、紅茶色の毛玉がすらりとした剛腕と格闘していた。

止めるべきか迷っていると、クラスメイトに取り囲まれていたりズが戻ってきた。

「ねえルー。……って、あー！ アリスお姉ちゃんが何か楽しそう
なことしてるー」

「別に楽しくわないわよ。こんなの」

「そうなの？ じゃ、いいや……って、あれっ？ その人、ルーじ
やないの？ 似てる人？」

アリスにいじられるのは確かに、僕の役割のような雰囲気はあっ
たけれど、紅茶色の毛玉に間違われるとはなかなか心外だ。

僕と間違えられたその毛玉は、「違うのじゃあ……」と呻いてい
た。

「のじゃ？ なにそれ？」

「この毛玉の口癖よ。そして、この毛玉は鷺掴みにされると喜ぶと
いう特性があるわ」

「て、適当言うでないっ」

「あら。本当のことじゃない。おまけにビンタが好物なのよね」
いくらなんでも、それは詰め込み過ぎだと思う。

そうやって平然と虚偽を吹聴する時のアリスの顔はいつも、酷く
笑顔だったりする。

「ふうん……。そういう人なんだあ……。えっと、桜さん……だっ
け？」

リスは赤い毛玉を見下ろして、少し残念がって言った。

毛玉は、遂に手を出してアリスの腕に抵抗しながら苦言を呈して
いた。

「ご、誤解じゃぞ小娘。んんー……っ！！ 顔が見えん！ これ、
ありすっ！ いい加減やめんかつ！」

「はいはい。わかったわよ。そろそろ蒸れてきたし、離すわ」

そうしてサクラが顔を上げれば、リスと初対面と言う事になるだ
ろう。なんとも喜劇的な初対面だ。加えて、乱れに乱れたぼさぼさ
髪であったが、サクラにとってはさしたる問題ではないだろうか。

オープンな性格を極めたサクラとアイドル的存在のリスであるか
ら、自己紹介は不要になる。

「お主……」

「なにー？」

一度目を合わせたかと思えば、二人とも何かに頷いて、すぐに話し始めた。軽い会釈なのかもしれないけれど、僕にしてみれば、二人の間に何か通ずるものがあつたのだと思えた。

サクラとリズが対面していると、どことなく雰囲気に近いことがわかる。

サクラは奇天烈だから印象浅く感じてしまうけれど、快活で穏やかな物腰。それを自分でわかっているかのようには、髪の毛は長めのショートで赤みを帯びた茶で、人の目を引き付ける力もある。それでいて服装に乱れはないから掴みどころを失う。そこから一度声を発してしまえば、すべてが吹き飛んで、それは『サクラ』という無二の存在に変貌するのだ。

それはリズも似ていて、リズが一声発すると、やはり『リズ』という無二の存在になる。一目見ただけでは、抜け目のない可憐な女の子というくらいにしかわからないだろう。

うちに秘めている太陽のような温かさというか、柔らかい部分がよく似ているのかもしれない。

サクラの第一印象が『妹に似ている』だったから、やっぱり納得できる。

一つだけ違いを挙げるとするなら、受動的か能動的か。それくらいだろう。

先に近づいたのは、紅茶色の太陽だった。

「お主、誰かに似ておるな……」

「ルーじゃないかな。私、妹だから」

「むふふっ。そうかそうか」

サクラは、にやけながらこちらに視線を飛ばしてくる。

嫌な予感しかしないけれど、「どうしたの？」と聞いてみれば、俄かに毛玉にしてやりたくなった。

「るー、か……。ぬふっ」

どきりとして周囲を見渡したが、誰も聞いていないようだった。

一息ついてから、声を抑えてリズに訴えた。

「リ、リズっ！ 学校では、あんまり言わないでっ……」

「私の学校、ここじゃないもんねー」

「うっ。そうだった……」

こういう時、リズは変に鋭い。

「のう、るー。わしもるーって呼んでよいか？」

「ノアも……」

「ノアさんまでっ！？ 恥ずかしいから、や、やめて……！」

「あほらしいわね」

その後、「はははは」と一笑あつて、話は落ち着いたけれど、どこまでが笑える冗談なのか微妙だった。

それから次の話題が出るまで、そう長くはかからなかった。似たような話を続けるのがあまり好きではないリズがいると、アリスにいじられ続けなくて済む。

「そうそう。私はルーに聞きたいことがあつたんだよ」

「僕に？」

そう言えば、リズがこちらに来る時に、僕の名前を呼んでいたよ
うな。

「どうしたの？」と尋ねてみれば、リズは意気揚々ととんでもない
ことを提案してくれた。

「私、歌なんてどうかなって思ったの」

「えっ？ 歌？」

さすがに驚きを隠せない。

シンデレラと白雪姫を足して二で割ったような話のどこに、歌要
素があるのだろうか。

首を傾げていると、リズがものぐさながらに説明し始めた。

「そう。歌。んと……最後のさ、私とルーが抱き合うシーンあるで

「しよ」

「へあ、うんっ、そう。だ、抱き合っねっ！」

思わず舌を噛んで、言葉に詰まる。危うく、色々と良くないものを嘔き出してしまつところだった。僕が妥協に妥協を重ねて書いた脚本ではあるけれど、リズがそれを言うのは少しばかり刺激が強い。噛んだ舌の傷の深さを口の中で密かに確かめつつ、その痛みで正気を保つことにする。

「その後、エンディングのための場面転換があるでしょ」

「うん。あるね」

「場面転換してる間を語りで繋ぐんでしょ」

「うん。そうだよ」

いくら照明を落とすとは言え、セットの搬出は多少のノイズが出る。それをカモフラージュする意味合いというのが大きい。薄らと転換の様子が見えてしまつのもいただけなので、暗幕も垂らすことにした。確かに、何も見えず何も聞こえない空間という演出も無くはないが、客層が広いのでできるだけ万人受けする方を選択したのはあった。

そうすると、なるほど。

その間を、語りではなく歌で埋めると言う事か。

なるほど、という表情していたのだから、リズが途中で話を区切って「あ。わかった？」と聞いてきた。

「大体、何となくね。でもそれだと、暗幕垂らすのは不自然かもね」

「無くていいんじゃないかな。暗幕」

「それだと、セットを片付けてるのが薄っすら見えちゃうんだ」

「逆に見えた方が良くない？ 段々、場所が変わっていく感じとか出るかもだし」

「あ。なるほど」

これは二人でする話ではないなと思つて周りを見てみれば、クラスメイト達は僕たちの話を聞いているようだった。

それもそのはず。さっきも、男子が「あの子の歌声を聞けるぞ！」

など大喜びしていた。おかげで傾聴の呼びかけをする手間が省けた。

顔を伺った限りでは、反対意見は無さそうだった。むしろ賛同の方が多かった。

はつきり言ってしまうえば、僕的には気乗りしないけれど、リスの言うことにも確かに一理ある。語りを入れる部分は、最後まで悩んだ拳句に消去法で選んだものだったし、繋ぎとしてのエッセンスくらいに考えていたが、見直すべきかもしれない。

しかし、やりたいやりにくい以前に、練習する時間があるのかという問題がある。このクラスだけでやるならまだしも、劇は学年単位でやるものなのだから。

「そうすると、劇の練習は少なくともあと一週間くらいで完璧にしておかないと。歌の方にまで手が回らないかもしれないよね」

自問自答してみるも、答えは僕より先にリスが出した。

「うーん。まあ、何とかなるでしょ！」

論拠こそ無いけれど、そんなことをリスが呼びかけたら、本当に何とかなってしまいそうだった。学年全体の士気を上げるくらい、リスならやっつてのけそうさだ。サクラも乗り気なようだし、心強い。そうなると、問題はぐんと少なくなる。

「歌は何を歌えばいいんだろう。作曲とか、さすがに僕には無理だし……」

「それなら大丈夫だよ！ アリスお姉ちゃんが作れると思うんだ！」
「はあっ？」

不機嫌そうな疑問符に、教室にいた誰もが固唾を飲んだ。

それを和らげるように、リスは物腰柔らかく下手に言った。

「アリスお姉ちゃんって、すごくピアノが上手なんだ。だから、できないかなあ……って」

「弾くのと作るのでは勝手が違うわ。それに、歌詞なんて作れないわよ、あたし」

「それは私とルーが考えるけど……。やっぱり難しいかなあ……」

僕なの!? とびつくりしたけれど、僕に断る理由はない。逆に断る理由のあるアリスは、リズに上目遣いをされてとても迷惑そうな表情をしている。リズを煙たがっていると言うよりは、クラスメイト達の視線を気にしているのだろう。

暫く、皆でアイコンタクトをとる時間があつて、それから直にアリスの深い溜息が教室に響き渡った。

「はああ……。わかつたわよ。やるだけやってみるわ。適当に……」
「やった! ありがとう! アリスお姉ちゃん!」

抱きつかれたアリスは面倒そうにしていたが、クラスメイトは湧いていた。ただ、アリスも温度差があるかと言えばそうでもなく、満更でもない様子だった。

その中で、一人だけ氷点下を誇っていた人物がいたけれど。

「歌詞、ノアやるから……。アリスと……」

小さな声だったが、とても透き通っていて良く通った。リズの耳にも届いたようだ。

「えと……。ノ、ノ、ノ……。ノア……。じゃなくて、ノエルさん!」

「ノアっ! あっ……。ノア……。です」

ノアがむきになって声を張るところを初めて見た気がする。大きな声を出しても、鈴の音のような声は全く濁らなかつた。雑味が無いと言うか、無駄な響きが全くない感じが。わざわざ怒らせてすらその声を聞きたくなるようだ。ノアを見ているといたたまれなくてそんなことはできそうもないし、何よりもアリスに怒られそうだから、やはりはしないけれど。

「そう。ノアさんだ! 歌詞、やってくれるの?」

「あ、うん……。やる……」

「そっかー。ありがとう!」

「うん……」

相性が良いのか悪いのか、ノアは委縮してどんどん小さくなっていく。やはり、ノアにとつての光はアリスだけなのかもしれない。初対面で話ができたのはノアの成長もあるし、リズの人当たりの良

さもあるだろう。見ていて微笑ましかった。

「それじゃルー。あとは何かある？」

「そうだなあ……」

そうか。

これで、僕が歌わなくてもいい理由は無くなってしまったわけか。主役二人が歌わないと言う展開であれば、農家たちの牧歌で十分成り立つが、今回は訳が違う。クライマックスのシーンの後、エンディングに向かって、主役二人が城を飛び出して旅に出るという壮大な展開だ。

合唱にするにしろ、当然、主役は歌うべき存在なのだろう。もはや、独唱でも成り立ってしまうくらいだ。

歌にすると言い出したのも主役を担うリスであるわけだし、主役が歌わない手はもうないと言っても過言ではない。

けれど、僕はできれば歌いたくはない。というより、歌えない。歌っていいのか、わからない。どうして僕が歌うのか、意味が解らない。僕が歌って、誰かが喜ぶというのだろうか。僕だけが、傷つくのではないだろうか。

誰だつて損得を考えて役を演じているわけではない。

けれど、この劇の主人公は僕だ。僕が作り出した”僕”なのだ。

その”僕”が僕であると言う事を、本当に僕が歌ってもいいのだろうか。

いや、いいはずなんてない。

「ありえ、ない……」

本当のお姫様ではないリスが僕にとるお姫様であるように、リスにとる”僕”は本当の僕であってはならないのだ。

そう。『間違っている』のだ。

でも、そんな矛盾した持論を持っている限り　リスがそれを認めていてくれる限り、僕は、僕と”僕”との狭間を彷徨うことを許される。不当と正当の判決を、際限なく遅らせることが可能になる。

今までずっとそうしてきたのだ。”あの時”から、ずっと。
だから、僕は歌えない。歌わない。歌う事から、逃げたい。
それはきつと、自分の気持ちに目を背けることにはならない。
「ルー？」

ああ。

「な、なんでもないよ。こっちの話」

ああ。何でもなくない。

お姫様から、逃げたい。

何歳の夏、僕は生まれた？（後書き）

【あとがき】

文化祭って、準備してる時が一番楽しいんですよ。

やってる時は色々忙しくてあまり楽しくなかったりで。

でも、それも総じて文化祭。

みんな、あの面倒ごとに向かっているいろいろめんどくさい準備をせかせか楽しむわけです。みんな根はマゾなんでしょうかね。わたしはちよっかいを出してその邪魔をするのが好きですね。

「邪魔ばっかしてないで手伝え」って、どこの変態ですかね。

それでは、文化祭の完成まで何悶着か有りそうですが、みんなで待ちましよう。

“僕”と。(前書き)

【まえがき】

리즈編に戻ってまいりました。

感情的な文章、賛否ありそうですが、書くのはすごく楽です。そういう意味では리즈大好き勢だったりします。

どうぞ。

“僕”と。

「それじゃ。僕は生徒会があるから、先に行つて。場所、大丈夫だよな？」

私が頷くと、ルーはそそくさと靴を履き替えて、廊下の奥へと消える。

最近、ずっとこの調子。

飾りつけだったりデカイ看板だったり、校内の風景からも本番に近づいてるのがわかるから、忙しいのはわかる。でも、おかしい点もある。私の目を誤魔化せると思つたら、そんなのは大間違いなんだぞ。

まず一つは、朝、家を出て学校まで来る時、一緒に来てくれることだ。

さすがに、三回も四回も来れば私も道を覚えるし、何より、忙しいなら朝早く家を出て早々に生徒会の仕事とやらに取り掛かった方がいいに決まつている。確かに、道中隣にいてくれるのは心強いけれど、矛盾してる気もする。

そしてもう一つは、練習が終わつた後、一緒に帰ってくれることだ。

これは一つ目のやつと繋がっていて、遅く来て早く帰るという構図を作り上げている因子になっている。要するに、遅く寝て早く起きるみたいなことだ。なんだ全然寝てないじゃん、というあれ。

私がそんなことを邪推してしまうので、帰り道は少し気まずい。私は悪くないぞ。

そんなこんなで、私は一つの仮説を立てたわけだったりする。

『ルーがサボってる!』

仮説どころかその通りであった。

いくら用事があるとはいえ、主役が練習に来ないなんてことは演劇業界ではありえない。ここは演劇業界ではないけれど、俳優じゃないからこそ練習がたくさん要るわけで。

私はこうというのが得意だからいいけど、ルーはそうでもないと思うんだよね。すごく頭が良いし想像力もとい妄想力もありそうだから、台本を書いたり、構成をまとめたりするのは得意そうなものだけ。

書くのと、演^やめるのでは、全くわけが違う。使う脳の部分が違うみたいなき感じ。

ああ、ほら。あの人。桜さん。

桜さんなんかは、絶対演^やめる方が得意。何となくだけど、これは当たる勘だ。

ノアさんは……書く方かなあ。でも、すごく可愛いから、それは勿体ないかも。

そう言えばノアさんって、アリスお姉ちゃんと同居してるんだよね。羨ましいなあ。

そっか。

じゃあ、アリスお姉ちゃんとセットで、演^やる側に回したら丁度いいのかも。ノアさん、アリスお姉ちゃんにずっとべったりだったし。そして、私は勿論! 演^やる方!

「……………」
そう考えてみると、ちゃんと皆の長所を考えて、ぴったりの配役がなされているような。

ルーの采配は完璧なのかもしれない。
やっぱり、そう言う事なのかな。

『ありえない』と言う言葉を口にしたことも、ルーが自分で作り出したキャラクターを演じるということに大きな抵抗があるからなのかも。脚本家が自分の作品に登場するってなかなか聞かない話だし、やっぱりそういうものなのかな。

いやでも、それにしたって、私の相手役なんだから少しくらい喜んでくれてもいいと思うんだけど。

昨日の夜だつて、何気も無くあんなことを言っておいて……。

結構ドキツとしたじゃん。こんなの、動揺損だ、動揺損。

まさか、あのルーがあんなことを言おうとは思わないよ。それも私に。

ルーが私のことを特別好きなのは、お母さんからの含みのある物言いで何となく理解したつもりでいたのはいた。けど、その気持ちを間近で体験すると、やはり考えさせられるもんだ。

「……………」

私は、アリスお姉ちゃんのこと好きだ。見た目も、性格も、その他諸々大体好きだ。

だから「好き」だと言うし、態度にも出す。

それは、相手に自分の気持ちを知って欲しいからで、知ったうえで答えが欲しいからだ。それも、自分の望む答えが。

でも、絶対に成功する恋なんてものがこの世界に存在しないことくらい、誰だつて知っているはず。だから、気持ちを伝えるのを躊躇したりもするわけだし。

もしそういうことなら、黙っている意味がわかる。

でも、私は違う。

私はルーに「嫌い」と伝えたことはない。というか、むしろ好き好きアピールが過ぎるくらい。

声を聞いているとやっぱり安心するし、隣にいてくれると頼りがいはないけど何故か心強い。見た目も全然好きだし、性格に至っては優し過ぎて心配になる。血の繋がりがあからアレだけど、もし無かったら、キスとかも平気な気がする。いや、うん。多分、平気。

今までずっとそう伝えてきたのに、ルーは只管に答えをくれなかった。NGもOKも、何の反応も無かった。答えを出すことをただただ拒否して、盲目的に逃げ続けていた。

あれ、でも、待てよ。

私はどうなんだ？

確かに、アピールはしているかもしれないけど、それは自己認識であって、伝わっているかどうかはルーが決めることじゃないか。待て待て待て。何を考えているんだ、私は。

これじゃあまるで、ルーのことが好きみたいじゃないか。いや、好きだけど。好きだけでも、それは人としてじゃなく、家族として……。家族としてじゃなくても、まあ、好きか……。いや、でも……。わけが分からなくなってきた。

「というのは、昨日の話だったり」

劇の練習は、ルーを呼んでくると言って抜けてきた。

というわけで至る今日、モヤモヤを解消するついでに真相を確かめるべく、生徒会室にやってきたわけだけでも。

なんなのよ。生徒会室なんだから、ドアに小窓くらいつけるべきでしょ。中で何やってるかわからなかったら、色々まずいでしょよ。

ま、いいや。

それでは早速、正面突破……はさすがにまずいか。

それこそ、中であからぬことをしていたら、相当まずいことになること必至だ。サボってる時点でよからぬことだから、別にいいのかもしれないけども。まあ、やっぱり相手がルーだし、日常生活に支障をきたしそうなので、節度を持つとう。

ということ、節度を持って盗聴といきましょう。

さつき確認した限りでは、隣の生徒会準備室には誰もいないみたいだったから、そこを根城にしよう。壁に耳をつければ、このくらの薄壁なら少しくらい聞こえてもいいはず。私、耳良いしね。

「お邪魔します」

申し訳程度の礼儀を払って、生徒会準備室の扉を開ける。スライドドアだから、がらがらと音が出ないようにゆっくりと開けて、同じように注意して閉めた。

見渡す限り倉庫っぽい趣はあるけど、とてもよく整理されていて印象は明るい。印象どころか、高い位置にある小窓から太陽光が差しているから、もはや普通に明るい。日の光に照らされた中空に埃は浮いていない。空気まで綺麗か。

こんなに澄んだ場所で、盗み聞きなどしてよいものなのか。罪悪感に苛まれるね。まあ、汚い場所なら盗み聞きしてよいということもないんだろうけど。

でも、怒りの感情の方が上だったりするわけで。もう、ぶんぶんなんだぞ、私は。

「おっ」

ちょうど生徒会室側の壁際にソファがある。背丈の小さい人なら横になって眠れそうなサイズで、右側には枕の代用と思しきクッションが置いてある。一見するに、クッションはよく使い込まれていて、綺麗に人の頭大の窪み型に皺が寄っていた。不良生徒あたりが使っているのかもしれない。

人の寝床を荒らすのは趣味じゃないけど、今は仕方ない。不良生徒のベッドという響きも多少気になるけど、今は仕方ない。

「よっ」

ソファの上に膝立ちすると、思いの外反発が無くて、相当沈み込んだ。もふっ、というよりは、ぼすっ、となった。反発を予測していた手前、腰がおかしくなりそうだった。

でも、ソファから舞い上がって来た匂いが、想像していた不良生

徒のそれじゃなかったのよかった。春っぽい、甘い果物みたいな匂いだ。そんな匂いにする男子はまずいないだろう。女子ならいいんだ、女子なら。うん。

さて。安心できたところで。

「ふう……」

一息ついて。さあ、始めよう。盗聴。

壁に耳をつけると、最初ちょっとだけ頬が冷たかったけど、すぐに温かくなった。

「ルートさんらしくないじゃないか」

お。男の人の声が聞こえる。

……というか、『さん』だって。聞き慣れないから、なんか変な感じがする。

あ。今度はルーの声だ。

「……らしさ、ですか。それって、一体何なんでしょうか……」

哲学ですかね。耳が痛くなりそうですね。

あれ、ちょっと待って。

確か、この学校の生徒会長って女子じゃなかったっけ。こないだお父さんが取材してた、毎日変な放送をしてるって言う生徒会長、ルリなんとかさん。

まさか。男になったとか？ という冗談は置いて、一体誰なんだ。哲学者にしては、声が若すぎるし、こんな真昼間から語りだすものなのか、哲学者というやつは。

哲学者の笑い声が聞こえてくる。

「はははは。ルートさんにわからないんだったら、僕にもわからないよ」

哲学者だ。これは哲学者に違いない。

答えの無い学問だからこそ、疑問を疑問のまま残しておくことも多いという話をどこかで聞いたことがある。これこそまさに、それではないか。

そうすると、なんだ？ ルーは、練習をサボって哲学者に会っていたと言う事か。私にも、クラスのみんなにも隠してまで。

何のために？ いや、ホントに何のために。それこそ哲学だよ。「わからないけど、言葉をかけてあげることができるよ」
哲学者の格言タイムが始まるのか。

ルーはそういうの好きそうだから、聞いちゃうんだろうな、きっと。

「……お願い、します」

やっぱり！ ……さすがに、少しがっかりだよ。

みななでここまで作り上げてきた劇よりも、どこその哲学者の一言げんの方が大切なんて。どうせ答えなんてないんだから、そんなものに意味なんて無いのに。逆に、完成っていう答えがある劇の方が、価値があると思うんだけど。

仕方ないから、聞いてやるけどもさ。

「物語を考えたの、ルートさんだったよね」

「はい。そうです」

「僕は素直にとても良い話だと思ったよ。言葉選びから演出まで、本当に素晴らしいなって思った。殊更、心理描写は繊細に表現されていて、かつ共感しやすかった。何より、展開と構成にルートさんらしさが出ていて、僕はすごく好き」

なんだ、べた褒めじゃないか。

ルーは褒められ慣れてないんだから、そんな言葉をいっぺんに浴びせかけたら思考停止してしまうぞ。あと、好きとかあんまり言うな。

「僕らしさ、ですか……」

「そう。ルートさんらしさ。まだ、わからないかな」

「はい……。すみません。僕、鈍感で……。昔から、よく言われるんです」

「なんだか、私のことを言っているような気がする。まあ、心外でもない。」

哲学者は「そんなことはないよ」とやんわり否定して、続けた。

「この物語の主人公、ルートさん自身がモチーフでしょ？」

「えっ？ どうして、ですか……？」

思わず「えっ」と声が漏れたが、ちょうどルートと被ったから聞こえてはいないはずだ。

にしても、それは本当なのか？

どうなんだ哲学者。どうなの、ルート。

「台本を貰って読んでいたらね。何となくそうかなって」

「すごい自信ですね」

珍しくルートが食って掛かった。

哲学者の顔が余程堂々としていて、居丈高だったのだろう。

「そうだね。初めて会った時から思っていたけど、僕とルートさんって似ているような気がするんだ。何というか、雰囲気かな。いや、雰囲気よりももっとスピリチュアルなところかな。それで、台本の主人公も自分と重なる部分が多くて、何となくね」

何を言い出すかと思えば、この哲学者はルートのことを口説こうとでもしているのか。そんなの百年早い。片腹も痛いぞ。

まあでも、哲学者がルートに共感していることはわかった。それでさつき、自分らしさについて諮問していたわけか。

「僕と、レイル会長が、ですか……？」

「そうだ。気になるぞ。何となくで済ますんじゃないっての。」

あと、相手の男はレイルという名前みたい。……って、え？ 会

長？ 哲学の先生じゃなくて？ 哲学学会の会長ってこと？

「そっちもばっちり気になってきた。」

「そう。僕とルートさん」

「ど、どの辺がですか？ 僕なんて、何も良い所が無いし。何でも

できるレイル会長と、同じことなんてこれ一つも無いと思いますよ」
そこまで自分を貶められると、妹として少し悲しくなる。

会長はきつと、微笑んで応対するのだろうけど。

「そんなことはないと思うけどな」

そこは私だつて同じだ。いや、きつと誰だつて同じだ。

ルーこそ何でもできるし、かつこいいし、ホント完璧なんだから。
「でも正直言うと、そういうところも似ている部分かな。あ、これは馬鹿にしてるって訳じゃなくてね。僕も、何にもできないから」
「会長……？」

「何にもできないから、こうして生徒会長なんかをやって、できるふりをしているだけだから。そうしている方が楽だから」

ルーは答えなかった。答えなくなかったのか、答えられなかったのかは全然わからない。

私にわかつたのは、せいぜい生徒会長が性転換をしたということくらいか。

ああ。お父さん、大スクープですよ。ルリさん、男になっていましたよ。名前もなんかレイルとか仰ってました。

そう考えると、ルーはそんなやばい人の話を大馬鹿大真面目に傾聴しているわけなのか。生徒会長という肩書はあるけど、今自分で何もできない発言をしていたし、信憑性なんてあるんだろうか。いや、無いでしょ。普通に、無い。

アホらしくなってきた。練習に帰ろう。

結局、ルーがサボっているのは証明されたわけだから、帰ったらとつちめてやろう。どんな辱めを受けてもらおうかな。

裸エプロンでイカ墨。パスタでも作ってもらおうかな。……誰得ですか。

逆に私が裸になればいいんじゃないか？ そうしたら、絶対恥ずかしがるぞ。……私が損してるな。

まあ、いいや。壁も温まって来たし、そろそろ

「か、会長っ……。ち、近いですって……!!」

聞き捨てならないルーの声が、隣の部屋から聞こえた。今まで聞いたことが無いような、ひどく狼狽したような、上ずった声だった。何事かと、すぐさま壁に耳を密着させて、向こう側に意識を向ける。

「ごめん。びっくりさせちゃった？」

「き、急にどうしたんですか会長」

哲学者は会長でもあり、性転換もしていて、甲斐性無しなのか。設定盛り過ぎじゃないか。

それはそうと、このままだとルーの体裁が危ないかもしれない。いざとなったら、乗り込んで……乗り込んでどうするんだろう。その場に私が出て行ってすることは、なんだろう。そこでしたことはすべて、私の嫉妬なのではないだろうか。私は何に嫉妬するんだろう。

全然わかんない。

でも、なんか嫌。背中がムズムズする。

そんな気持ちはどんどん向こう側に偏って、体重を受けた白壁は冷酷に、私をソファごと跳ね除けた。

「ちよっとね。ルートさんって、誰かに似てるなって思って」

「会長……のこと、ですよね……？」

「ううん。違うんだ。昔、好きだった人に似てるなって」

「すっ……!!？」

『そんなの結婚詐欺師の常套句だつてば!』

遂に心に留めておけなくて、小声が漏れ出る。そうしないと、むず痒さが胸をも締め付けるようで。でも、小声では薄壁を越えられないことを知っているから、もどかしさは残った。

「今も、好きなんだけどね」

「そ、そうですね……」

「はははは。ルートさんは面白いな」

「べ、別に面白くないか……」

「ふふつ。ルートさんは好きな人いる？」

「いいいいいい、いませんよ!」

『まつ、まずい。ル―は押しに弱いから』

なんかよくわからないけど、おたおたする。手なんかはバタバタして、ソファの上で私はピョンピョン軽く跳ねている。どうしよう。いや、ホントどうしよう。

「それじゃあ、さ」

『んんー!』

「僕が……」

『いやいや……』

まあ、ルーだから、そういうことに頓着しないはず。

「僕が?」

『でも……』

「ルートさんの……」

「や、やつぱダメー!」

「っつおおおおおお……え!? んうおおおおおおお

おおおおい!」

私の叫びは、別の誰かの猛りにかき消されたと思う。

絶叫の響きのに、隣 生徒会室の中で鳴ったものだ。

かなりトーンの低いどすの効いた雄叫びだったけど、女子の声だ
というのはわかった。あと、何かを目撃してしまったということも。

石の壁が凹むんじゃないかってくらい、私はまた隔たりに体重を
かけた。

「お邪魔しているよ。ルリさん」

「いえいえ、ワタシの方こそお邪魔ですよー。ははははー……っ
て、違うわ！ 真昼間から何してんですかレイル会長！ つーか、
生徒会室だし、それ以前に学校だし、いやそもそも二人がそういう
関係だったなんて……」

やっぱり、そういう関係に見えることをしてたんだ。どこにどの
くらい近づいたんだろう。レイル会長もとい、ルリさん。

『……ん？』

今入ってきた女子ってルリさんだよ。レイル会長にそう呼ばれ
てたし。

でも、レイル会長って、ルリさんが性転換をした果ての姿のはず。
ということ、どういうことだ？ 性転換が家族にばれないように
代役を立ててるとか？ そしたら、レイル会長もといルリさんって
一体何者？ というかもはや、存在してるの？ てか、会長何人い
んの？

ダメだ。カオスすぎる。深夜テンションなら何とかやっていける
かもしれないけど、まだ昼間だから理性が優位。脳が『関わるべき
でないぞよ』とか言って、目の前の論題について深く考える気にな
れない。

でも、ここまで来たら聞くしかないのも摂理。

「ご、誤解ですよ会長！」

「そうだね。ルリさんが思っているようなことは、決してしてない
よ。安心して」

「し、信じられませんーっ。証拠はあるんですかーっ？ つーかさ
つさと離れんかい！」

「あ、すみません。しょ、証拠ですか？ それは……」

「あははは。その質問はズルいなあ、ルリさん。僕はただ、知り合
いに顔が似ているなと思ったから、少し近づいてみただけだよ」

「少して距離じゃなかったぞー！！ そっちこそズルいぞ！ ん
もー！」

「口調が戻ってますよ、ルリ会長……」

「はっ。しまっ」

「僕はそういうルリさんの方が、ルリさんらしくて好きだけどな」

「……………」

「ルリ会長……？ ああ、また放心状態に……」

「はっはっは。本当に緊張しいだよねルリさん」

何だこれ。とんだ茶番劇じゃないか。

変な哲学者とニセルリ会長と、その間にルーがいて。なんだかよくわからない哲学の話をしている。事実は小説よりも奇なりとは言うけども、こんなのは奇なんてレベルじゃない。異次元だ。異次元奇が何なのか知らないけども、薄壁一枚隔てた向こう側は、奇よりも奇な異次元ワールドが広がっているに違いない。

そうなってくると、もはや楽しくなってくる。まさに、推理小説よりも面白くなってきた。推理小説、読んだことないけど。ただ、気が動転してるだけか、私。

「まあでも、誤解も解けたところで、ちょうどよかったよ。今日はルリさんにも用事があったから」

「そうだったんですね」

にも、ということとは、ルーに会うことは初めから予定に組み込まれていたってことか。これまでの話の流れから推測して、予定を組んだのはルーだろう。

「最終ミーティングみたいなものを軽くする程度だけどね」

「それなら僕も」

「ルートさんは、練習があるでしょ。ルリさんなら大丈夫だから、心配しないでいいよ」

それで、ここへ来て用済み宣言と来た。

「で、でも」

「昔から家が厳しくてね、五体満足ならできるだろうという理由で、色んな習い事をさせられたんだ。口があればできるから外国語、手

があればできるから剣道、足があればできるからサッカー、耳があればできるから楽器、目があればできるから抽象画。もちろん、演劇の稽古なんかもね」

「レ、レイル会長？」

「でも、全部ダメだった。完璧にこなそうにも、僕にはセンスがなかった。何をやってもセンス、才能のある人には勝てなかった。それでも、上手い人達の真似をするぐらいはできた」

「きゅ、急にどうしたんですか？」

本当に急だ。さつきまでの穏やかな口調はどこへやら、講論の色は非常に冷たく淡々と壁を伝つてくる。どこか切なくて息苦しくて、耳が拒絶するようだった。壁に耳をつけたままにしていると、背中がもぞもぞした。

「この間、ルートさんが書いた脚本を貰って、良い話だなんて思ったんだ。それで何度も読み返した。セリフを覚えてしまっただけ、ね」

「……………」

セリフを覚える程…………？ すごい記憶力だなあ…………、じゃなくて

「もし、どうしても無理だと言うなら、また僕のところに来て」

「…………はい。ありがとうございます…………」

これはつまりどういうことだ。ルーがわざわざどこぞの会長を呼びつけてしていたのは、代役を立てるための会合だったの？

そんなの…………。

そんなのどうかしてる。

「なんで…………？」

私はルーが王子様だから、お姫様になろうと思ったんだ。めんどくさいけど、楽しそうだなって思って、それで引き受けたんだよ。ルーだって、納得してくれたんじゃないの？ それで、閉じ切った心のドアを開けてくれるんじゃないの？

ああ。胸が痛いなあ。

そんな胸中を抑えつつ、私は生徒会準備室のドアをゆっくりと開けて、廊下に出た。でも、その扉は私の息苦しさを開放してくれたりはしない。別にもう閉めなくてもいいかと思っただけで、ドアは閉めた。

「なんで……っ！」

私にルーを惹くだけ魅力が無かったとか、レイル会長がどれだけ魅力的かとか、そんなじゃなくて。ルーの気持ちに全然気付いてあげられなかったことが、ホントに悔しい。ホントに悔しいし、わからなかった自分が情けない。

今までずっと傍にいて、わからないことなんてないと思っていたのに。ちょっとくらいだったなら洗脳できてたような気もするのにな。洗脳というか悩殺だけでも。

ルーが拗ねたら私が近づいて、私が離れたらルーが近づいてきて、でも、近づきすぎるとルーは離れて、私も近づかれると一歩退いてしまっただけ。そんな微妙で絶妙で至妙な距離感を、ずっと、ずっと、貫いてこれたのに。

それなのに、どうして。

『また僕のところに来て』

そんな言葉に、頷くの。

ああもうわかった。もういい。全部伝えればいいんだろう。そうすれば、こんな罪悪感消えてなくなる。そしてそれは、全部ルーが背負うんだ。”あの時”と同じく、そして、今まで通り。

もう知らない。

「失礼しました。……って、うわあ！ リズ！ 迎えに来てくれたの？ ありがとう。でも、僕はもう少し仕事があるから、先に行っ
ていいよ」

「なんで練習来ないの。ルー、主役でしょ？ 主役いないと練習で

きないよ」

「本当にごめん……。でも、終わったらちゃんと行くから」

「嘘」

「う、嘘じゃないよ」

「本番終わったら行くとかじゃ、全然意味無いよ。ねえ、私がお姫様じゃ、やつぱり嫌？」

これは私にしか言えない、最強の武器。ルーの気持ちと自分の気持ちを混ぜて叩いて打った諸刃の剣。一番鋭くて、一番痛くて、一番汚い。だから、私に相応しい。

そして今、言わなきゃいけない。

今、ルーにも本当のことを言っただけから。

「い、嫌なはずないよ！　むしろ、その……嬉しいくらい……だし」「じゃあ、じゃあなんで……」

ああ。胸が痛いなあ。

でも、これを言ったら、ルーはもつと傷つくよね。諸刃の剣って、そういうものだし。しょうがないよなあ……。

「なんで。なんで降板しようとしてるの……？」

ルーの顔なんか見れるわけも無く、私の視界は廊下の橙色と白線で完結した。

きつと今頃、ルーの顔は惨たらしく斬殺される落ち武者みたいな蒼白さになっていることだろう。私はそんな覚悟も無く剣を振ってしまった臆病者だから、ただただ棒立ちになって俯いて、戦き震える自分の御々足あみあしを拝むことしかできない。

今怒鳴られたら絶対泣いちゃう、というくらい目頭が熱い。何で言っちゃったんだろう、という自責も感じる。謝って即刻逃げようかって、そういう理性もある。これからルーの奴隷にでもなっても償えるかな、みたいな希望的観測もあった。

でも、私はそこにいた。

何でだろう。

昨日、「好きだよ」って言われたからかな。良い気になっちゃっ

てるのかも。不思議。

「私もだよ」とか言いたいのかな、私。わかんないけど。

「ごめんねリズ……。でも僕……」

幸いにも、私は怒られないで済んだみたいだった。

「僕、もう、“自分”が嫌なんだ……」

でも私の剣は、^{（剣）}また、ルーを殺してしまったかもしれない。

ルートが立ち去ってから、私は少しだけ泣いたんだと思う。

多分、文化祭の準備で廊下がすごく散らかっているのが、嫌だったんだと思う。

“僕”と。(後書き)

【あとがき】

冒頭部、リズ大好き勢とか言いましたが、ここまで書いてくるとそれなりに愛着というものも芽生えてきます。キャラクターにも、世界にも。

結構、街並みとかの広い枠組みでの情景は固定していないのでふわふわしてますが、逆にあの教室の角の席の椅子のパイプの錆具合とかは頭の中で固定化されてます。

なんでだよって感じですが、私にもよくわかりません。

ただ、度々登場する生徒会準備室の置物に関しては、かなりの思い入れがあります。サクラとルートがなんやこらしたり、リズが立ち聞きしたりしております故。記憶もとい空想の物ですが、捨てるに捨てられ無さそうですね。

次回もリズ編です。

二人と。(前書き)

【まえがき】

どんどん物語は進んでいきますが、時間はゆっくりです。

無^らず^もじ^いに^や。

二人と。

「やっぱり今日も来なかったわねルートさん……」「そうだねー」
「仕方ないよ。この時期は生徒会も忙しいでしょうし」
「ルートの奴今日も来ねえのな」「みたいだねー」「まあ、あいつなら台本くらい完璧にしてそうだけだな」「それなー」

ルーのクラスメイトたちは、納得したような言葉を口々に、気怠そうに衣装を脱いでいた。学生さんたちが気怠そうにしているのが、所謂”大人の余裕”だと言うのは最近分かって来た。

でも、全部が全部、余裕からくる溜息かと言ったら、この場合は違った。

『もしかしたらサボリ?』という疑念だったり、『本当に劇は出来る上がるの?』という不安だったり、そういうものも多分に含まれているんだと近頃思う。その証拠に、皆がものぐさになったタイミン
グは各自セリフを覚えたあたりだった。お兄さんたち、わかりやすいな。

そして、それと近いタイミングで、私は「ルーは生徒会の仕事があるから」と告げる役目を勝手出していた。一度それをしたら、翌日から自然と皆が求めてくる感じになった。

本当は、本当のことを言ってルーを追い込んでやりたかったけど、できなかった。今度は私だけじゃなくて、ルーも泣いちゃうかもだから。あ。私は、泣いてないけどね。

でも、このままだと本当にまずいとも思う。

ルーの学習能力がいくら高いと言ったって、主役に課された(課したのはルーだけ)膨大なセリフ量を、残る日数で覚えきるのは不可能に思える。

そうすると、視野に入ってくるのは謎の哲学者レイル会長。

あのルーが頼ってしまいうくらいだし、かつこいいとか色々ものすごいとか噂には聞くけど、実際に見てないから何ともなあ、という感じだな。

だからと言って、かつこよくて好みのタイプだったらいいのかというのも違う。

やっぱり、「代わりは誰それにしよう」じゃなくて、私は「ルーに出て欲しい」のだ。この間、それを生徒会室のところで伝えたり、後は待つだけなのだけ。

いや、もどかしい。

「そろそろ帰ろうかなー」「そうしようかな」「あ、待つて私も帰るー」

「帰るっぽいけどどうする?」「この後どっか寄ってく?」「そんなじゃ『遠い方』で」「お前彼女いなえだろ。っーか、今は近いし」「ルーのクラスメイトたちは和気藹々と駄弁りながら、教室を去っていく。皆、私に「じゃあね」と挨拶をしてくれる。私も「うん。バイバイ」と返す。そして、教室に取り残されるいつもの顔ぶれ。

今日も、私は何かを待っていた。

いや、私たちは、かもしれない。

「さて。わしもそろそろ帰るかのう。それじゃ、ありすよ、いつも通りわしを家に」

「泊めないわよ」

「ふんっ。ケチじゃのう。どうせ部屋なぞたくさんあるじゃろうに」

「そうね。でも、残念ながらあたしの両親は公安なのよ」

「な、何が言いたいんじゃ!」

そんな桜さんとアリスお姉ちゃんのやりとりを、私とノアさんが優しく見守る。時間の使い方としては、悪くない。

でも、待ち人は来ない。そんな毎日。この時間だと、もはや、来ても遅いけど。

だから、悪くはないけど、意味はない。

私のこの愛想笑いと同じで。

「さ、ノア。こんなアホは放っておいて、早く支度をしましょう」「う、うん。あれ、でも、アリス、用事……あるんだよね？」

「そうよ。暫くかかるかもしれないから、先に帰っていてくれるかしら」

「ん……待つ。ノア、待ってるよ」

弱々しくて、ここに一人で残れるのが非常に心配だったが、桜さんが待っていてくれそうだ。

つくづく思うけど、アカデミーの人たちってものすごく暇そう。

みんなどこかふわふわしてるし、やることないのか大人の余裕なのか、なんか瀬戸際な気がしてきた。

「わかったわ。それじゃあ、一緒に帰りましょうか」

「わーい。やったのじゃー」

「あんたじゃない。というか、あんたは木の上に住んでるんでしょ？ 帰る必要もないじゃない。好きな時に適当な木に登って寝てれば」

「なんじゃ。やっぱりケチじゃのう」

「強く抓るわよ」

「ひいっ」

なんか色々おかしいけど、話が済んだのか気が済んだのか、桜さんはノアさんを自分の膝の上に座らせた。そして、まるで人形で遊ぶみたいにノアさんの手首をもって、その手でアリスに手を振った。「悪い女はばいばい、なのじゃー」

何だろう。

物凄くバカっぽい。

それはそうと、アリスお姉ちゃんがどこかへ行ってしまった。

教室には、私とノアさんと桜さんだけが取り残された。桜さんが何かすればいいのにしないから、やけに静かで、時計の音と桜さんがノアさんを摩る音だけ聞こえた。

二人がなにをやってるか気にはなっただけど、二人のどちらともあ

まり親睦が深くないので遠慮した。そっちの方を見るのが忍びなくてつい視線を逸らすと、なんだか私だけが仲間外れみたいだった。まあ実際、ここは私のクラスじゃないし、私の学校でもない。

……って言っても、自分のクラスに置き換えたところで、果たしてそこが仲間だらけの空間かと言うとそれも違うけど。

「……………」

ただ突っ立って待ってるのは性に合わない。

ちよつと、散歩がてらルーの様子でも見てこよう。怒りに行くとかそういうのじゃなくて、ただ暇だから会いに行くだけ。

「ん？ どこ行くのじゃ小娘よ」

「ちよつと散歩。すぐ戻るよ」

「わしらが案内しようか？」

「んー。遠慮しとく」

ちよつと面白そうだと思ったけど、もし入れ違いになって教室に誰も居なかったら、アリスお姉ちゃんもルーも困ると思う。それにルーの様子を見に行くのに人手は要らない。

「そうかの。それじゃ、わしらは待つておる。お互いの貧相な胸を揉み合いながらのう」

「うん。お願い。それじゃ」

ノアさんが「え？」という顔をしていたけど、腕でロックされているので逃げられないだろう。きっと、私が帰るまでには仕上がってると思う。

まあ、それはいいとして。

こつ何回も生徒会室へ行くと、近道も見えてくるなあ。自分の学校じゃない学校の近道なんて、本当にいつ使う情報なんだろう。どうでもいいけど。

どうやらこの学校は、同じような造りの校舎四つで構成されているらしくて、それぞれが役割を持っているみたいなのだ。

例えば、私がさつきまでいた教室は、昇降口のある校舎”教室棟（仮）”に属している。そして、美術室とか音楽室とかがある体育館側の校舎”アーティス棟（仮）”、実験室とか視聴覚室とかの”実習棟（仮）”、職員室とか保健室がある”事務棟（仮）”が他にあって、それぞれ三階建て。各階層とも渡り廊下で繋がっていて、三階の渡り廊下は青空になっている。三階の渡り廊下からは、結構洒落た屋上庭園に行くこともできる。

その中でも生徒会室は事務棟の三階にあって、教室棟からだに行くのがめんどくさかったりする。

そこで、私が見つけた秘密のルートというのは、ずばり『アーティス棟の三階から屋上庭園に抜けて、そこから渡り廊下を伝って事務棟に行く』というもの。

外からではわからないけど、実は屋上庭園の入り口はアーティス棟の三階の踊り場にもあって、そこからだと螺旋階段をぐるっと一周するだけで裏手に出られるようになっている。

ところどころに飾り付けとかポスターが見受けられるから、文化祭の準備かなんかで解放されて、知っている人もいることはいるみたい。

ホントなんの情報だよって感じだけど、別にここの生徒じゃないから、立ち入り禁止だろうと堂々と歩ける。そういうのって、割と気分が良い。

そうやって悠々と立ち入り禁止区域を歩いて、裏口から屋上庭園に潜入していく。わざとらしくちよつと身を屈めてみたり、何度も背後を振り返ってみたりしながら。気分はスパイか。あほか。

でも、それが功を奏した。

「あなた。また来なかったわね」

庭園の方から聞こえたのは、紛れもないアリスお姉ちゃんの声だった。いつもよりワントーン低くて、どこか圧がある。「あなた」ということは誰かと会話していて、しかも「また来なかった」と言えば、その誰かなんて一人しか思いつかない。

ルーとアリスお姉ちゃんが何かしてる。

アリスお姉ちゃんならまだ全然許せるけど……と言う話だろうとなかろうと、私がここにいることに気付かれなくてよかった。裏手から入ってくると少し低くなっている花壇の前に出るから、見つかりにくい。ちようど身も屈めてたし。

何だかこの頃盗聴ばかりしている気がするけど、そんなの人聞きが悪い。ただ、そこに居合わせちゃっただけなんだから。

「ごめん……」

「別に謝らなくてもいいわよ。本番さえ完璧にやってくれれば」

現実主義なアリスお姉ちゃんらしい言葉だけど、今のルーには結構痛いんじゃないかな。

でもやっぱり、アリスお姉ちゃんも心配してくれてるんだ。優しいなあ。それはそうと私にはそんなこと言ってくれないのに、ルーはっかりズルい。

「そうだよね……」

「だからって、来なくていい理由にはならないけど」

「わかってる。わかってるよ……」

「あたしは別に、あなたの心配をしているわけじゃないのよ。心配してる。心配してる。」

アリスお姉ちゃんってやっぱり可愛いよねー。

「うん……知ってるよ」

「そう。あなたも色々学習したのね」

「うん……」

「得意教科は逃亡かしら」

「そうかも、しれないね……」

「それなら、主役交代はあなたの中では百点満点中何点かしら？」

「知ってたの……？」

同感。知ってたんだ。アリスお姉ちゃん。
でも、どこで知ったんだろう。

あの場には私しかいなかったし、あの後は誰にも会わずに帰ったはずなんだけど。まさか、サボってる張本人のルーが他人に言いふらすわけもないし。……はったり？

「あら。やっぱりそうなのね。顔に書いてあるからまさかとは思ってたけれど」

「ははは……。僕の顔ってなんでも書いてあるよね……」
やっぱり、はったりだった。

昔からそうだけど、アリスお姉ちゃんに嘘つくのって、すごく難しい。私はまだいいけど、ルーなんてやたらに嘘が下手だから尚更アリスお姉ちゃんの目を誤魔化すことはできないんじゃないかな。

「そうね、なんでも書いてあるわ」

「他には何て書いてある？」

「……め、珍しいわね。自分からそんなことを言うなんてそれって珍しいんだ。」

「そうだね。それを聞いたら、自分が何者かわかるかもしれないから」

「そう。今日はいつにも増して随分と女々しいわね」

「どうなんだろう……。それは僕の顔に書いてある？」

「残念ながら書いてないわ。けど、自分が一番よく知ってることだつて、そう書いてあるわ」

「そっか……。でも、僕は僕がわからないから……。どうしようもないや」

「そうね。どうしようもないわね」

確かに、ルーって昔から自分より周りの人優先だった気がする。おもちゃの順番はいつも私が先だったと思うし、自分が食べたい物だったはずなのに、私に譲ってくれたりもしたし。

一言でいうと、自己犠牲。自分が傷ついても代わりに誰かが喜ぶ

なら、という精神論。

どうなのそれって思うは思うけど、私もそれに甘えてきたから何も言えない。

ともすれば、今アリスお姉ちゃんが言ってくれていることは、本当に射ている。核心をついている。私の気持ちを代弁してくれている。

「でも、あなたはそれでいいかもしれないけれど、他の人はそうじゃないかもしれない」

「どうということ？」

学校の勉強はできるのに、そんな簡単なこともわからないんだ、ってバカにしてやりたい。

そうやって自分を削って誰かを幸せにして、ルーは満足するのかもしれないけど、自己犠牲はそれで終わらないんだよ。幸せになった人は、ルーに感謝して、お返しをしようって気持ちになるんだよ。なんでわかんないんだろう。

知ってる。それは私のせいだよ。

「あなたのことを信頼してる人、意外とたくさんいるのよ。副会長だからって理由じゃなくて、もつと単純に『信頼したい』って、それだけの理由だね。……ああもうっ！　なんであたしがこんなこと言わないといけないのよっ！」

「アリス……？」

そこから少し沈黙があった。

気になって少しだけ頭を上げてみれば、アリスお姉ちゃんがルーのネクタイを強引に引っ張って顔を近づけていた。遠いし木の陰になってるから表情は読み取れないけど、絶対穏やかじゃない。

「明日から練習に來いだなんて、そんなことあたしは言わないわ。クラスの人も、仕事が忙しいから仕方がないって、そう言ってるでも、そうやって口には出さないかもしれないけど、あなたを待ってる人たちはたくさんいるの。それを早くわかりなさいって言うてるの」

「それって、本当に僕を待っているの？」

「そうね。確かに、あなたじゃなくて”王子様”を待ってるだけかもしれないわよね」

王子様役のルーじゃなくて、ルー役の王子様をという意味だよ。悔しいけど、それも正しい。ルーがいなくなつて、王子様さえいれば物語は進んでいくんだから。例え、あの変な哲学者だつて。

「そういうこと。別に、あの物語は僕でなくたって始められる。だから、主役交代は僕の中では及第点だよ」

「それをあの子が聞いたら、なんて言うかしらね」

調子に乗って大分頭を出していたから、どきりとする。

変な汗を袖で拭いながら、また少しだけ頭を出す。私の話をして
いるのだから、聞き逃すわけにはいかない。

「リズには、きちんと話すから……」

「何をよ。あの子が満足するような話を、あなたができるのかしら
「できる、よ……」

ふんつ。意地でも満足してやらないよーだ。パスタ貰っても無理。
「どんな話をするのよ。あの物語は僕じゃなくても始められる、な
んて言うつもり？ あなたの言う通り、確かにそうかもしれないけ
どね。物語は、始めたら終わらせなきゃいけないのよ？」

「そうだよ。だから、それだつて」

「無理よー！」

その言葉は、私が心に抱えた濛々とした部分を吹き飛ばすようだ
つた。夏風というのだろうか、私という湿気を乗せて軽やかに、ど
こかへと轟いて消えた。

「そんなの、あの子が望むと思う？」

「……………」

望むはずない。

私が望むエンディングはただ一つ。

「わかってるなら、あたしについてきなさい。少しだけ練習に付き合っただけよ」

「えっ、ちょ、ちょっとアリスっ。待って……！」

魔女でも、お姫様でも、メイドでもなく、王子様でもない。他でもないルート役のルートと、リズ役の私は結ばれたい。深い意味じゃなくて。

いつからとかどこがとか家族とかそういうの、もうなんかよくわかんないけど、多分、好きだから。いや、好きだから。アリスお姉ちゃんとも少し違う意味で。

だから、あの物語は貧乏メイドとお城の王子様の花物語じゃない。私とルーが今まで生きてきた贖罪の履歴と、これから起こる二人の未来をパロディしている実話なんだ。ルーだって、そう思っただけだと思っただけだ。

今回、お姫様を演じてすべてが償われるわけじゃない。そのすべての愛のセリフが真実であっても、きつとそれは王子様の希望を奪ってしまうことと対等にはならない。だから、林檎で毒殺してしまったからキスをして揺り起こすなんて都合の良い展開は、この物語には出てこないのだ。

「ん？ アリスお姉ちゃんがこっちに向かってる……！？」

魔女という名の『逃亡』がそこにはあって、責任はすべてそいつが掻っ攫って行く。

結局、私はその魔女を退治するわけだけれど、それで王子が目覚めますはずはない。王子が目覚めるのは、私が祈りつつ「好きだ」と訴えるからだっただけ。

「待って。待ってよアリス……！ 僕はまだ……！」

やっぱり、この物語は確実にルーの潜在的な心の動きを反映している。

あの変な哲学者も、何故かそれに気付いていた。

つまり、ルーの言う通り、あの哲学者も王子様としては適役であるわけだ。哲学者自身も似ていると表現してたけど、自分と重なる

部分があつたんじゃないだろうか。

でもそれは、ルー側の王子様サイドの話。

「アリスお姉ちゃんも隠し通路知ってたんだ。わっ。ルーも来たっ。こっち方向ってことはアーティス棟？ もしかして音楽室かな。あそこ、前探検したとき確かステージがあつたし」

物語に主役は一人じゃない。もう一人、お姫様が、私がいる。

王子様が死の眠りから目覚めるためには、私の祈りが必要なんだ。それでこそ物語は動くし、それが無ければ物語はバッドエンドになる。

そして私は、王子様を起こすかどうか選ぶことができる。魔女退治という危険を冒してでも、王子様を起こすべきかどうかを。

まあ正直言うと、私は今までずっと起こす側の人間ではなかった。逆に、起こされる側で、いつも迷惑かけてた。起こしてもらってるのに、機嫌が悪くなるし。

そんなんで、”あの時”のこと許してよ、とか償えてるのかとか、そればかり気にしていた。

すべては、私の甘えだった。

だって、ルーは許してくれたから。王子様はいつだって優しくかったから。

それが結果的に、本当の王子様の夢と希望を奪って、殻に閉じ込めてしまった。

それなら、その殻を破れるのも、やっぱり私しかいない。王子様を蘇らせることができるのは、お姫様である私だけに許された役目なのだから。

「とりあえずこの中に隠れてよう」

私は音楽室に先回りした。そして、部屋の隅にあった、一人がやっと入れるサイズの掃除用具ロッカーに身を潜めることにした。

ちょうど目線の高さに覗き穴兼空気孔があつて、覗く方に集中すると、胸が締め付けられるように苦しくなった。真っ暗で、窮屈で、埃っぽい。

そんな鉄棺桶の中で、私は寝ている時王子様がどんな気持ちでいたかを考えていた。

会いたくて、会って抱きしめたくて、抱きしめてもらいたくて、仕方がなかった。一人って寂しくて怖い。

ルーがミドルになって、部屋が別々になって、アカデミーになって登下校も別になった。そんな変遷が思い出される度に、ロッカーの中の空気は淀んで、自分の心音がそつと背筋をなぞった。

そして、ルーはやって来た。アリスお姉ちゃんに連れられて。

アリスお姉ちゃんは魔女の衣装を着たままだし、私はロッカーに入っているし、ルーに至っては涙目だった。おかしい構図だけど、久しぶりにまた三人が揃った。

それなら、演じなきゃいけない。

私は私を。ルーはルーを。

せいぜい眠らないように、いや、眠ってしまったてもキスをしてもらえるように。

「結局ついてきたわね。いいわ。それじゃあ始めましょうか」

「だから、ダメなんだって……。そう言ったじゃないか……！」

「僕は、主役なんかできないんだって……！」

「知ってるよっ！ そんなこと！ だけど、無理なんだよっ！」

「ごめん……。ごめんよ……。ごめん、なさい……」

「愛、してる……」

息苦しさなんて無くていいはずなのに、胸はぎゅうぎゅうに締め付けられて。箒かなんかがあばらを圧迫してるんじゃないかって一瞬疑ったりもしたけど、別段そんなことなくて。

気付けば溢れてた涙が滴って、ロッカーの中は棺桶どころか蒸し風呂だった。

怒ったアリスお姉ちゃんのと泣いたルーの気が鎮まるまで待つていたら、時刻は程なく六時つてところだったけど、二人が出て行った後の音楽室はまだ結構明るくて。

私は蒸し風呂好きだけど、これはちょっとなあってまた、泣いた。

二人と。(後書き)

【あとがき】

胸の苦しいお話の時は、私も胸が苦しかったです。
果たして、すぐ解消されるのか。

次回は、もしかしたら、分かる人には『ルーモス史上最大の大団
円』になるかもです。

お母さん。 (前書き)

【まえがき】

もうレギュラーにしちゃおうか悩んでるルート母が登場です。
おかあさんを想像して読んでくださると幸いです。

ぶしぞ。

お母さん。

「おやすみなさい」

「はい。おやすみー」「うん。おやすみ」

明後日に本番を控えているという自覚があるにせよ無いにせよ、随分とお早い就寝だと思った。まだ七時を過ぎたあたりだということに。どうせすぐに寝たりはしないのだからうけど、お年寄り感は否めない。

まあ、でも私も早くお風呂に入って寝床にいきたいところではある。この期に及んで、やりたいことが数件あつたりするし。

まあ、それはもう、ルーに釘を刺すようなことではないんだけど。タイミングというのモやはりあるし、それにもう、ルーは出てくれないような気がするから。これ以上、互いを傷つける諸刃の剣を振る必要も無いと思う。そんなことよりも、見ず知らずの王子様に愛嬌を振り撒けるような余裕を見出す方が、よっぽど有意義ではないだろうか。それは要するに台本の確認とか言うやつで。

「次私お風呂入るー」

「あら？ リズ、宿題は終わったの？」

「八分の五くらいは終わった。お風呂あがったらまたやる」

宿題が途中だった。今ちようど関数のグラフを書く大問をやっていたところ。

いつもは遊びで手付かずということが多いけど、今年は役者の仕事がちよつと忙しくてね。みたいな感じの心意気で、今年の宿題は割と不機嫌にならずに終えられそうだ。

「そう言っつていつもここで寝ちゃうのよね。今日はルートが先に寝ちゃったから、起きたらやってあるパターンは無いわよ」

「やるもん！」

そうやって失礼な事を言うから寝ちやうんだぞ、と矛盾した楽天的論理を翳したい。

「はいはい。上がったらここに帰って来るのよ。髪の毛乾かしてあげるから」

「はい」

思えば今年の夏はこれの思い出しかないなあ、みたいなことをしみじみと感想文に書き連ねている暇は、言ってしまうえば皆無なのである。もう、宿題は諦めたいところだ。というか、物理的に無理だ。こつこつ時ルーがいてくれると助かる、なんてずっと思ってきたわけだけれど。今こつこつ改めて感じるのは、私が居間で眠っちゃうのはルーが隣にいてくれる安心感からなのかもしれないということ。だから多分もう寝ないと言いたいということ。

いや、そこはまあ、多分普通に寝るんだろうけど。

シャワーを浴びている間もそうだったけど、やっぱり体を温めるのは良くない。もう眠いつたらありゃしない。

少しでも早く宿題に取り掛からなければならぬとわかってはいけるけど、睡魔って強い。おまけにお母さんがタオルで髪を乾かしてくれてるから、ヘッドスパ的感觉でさらに眠くなる。ホント、睡魔最強説。

今、背後のお母さんの方に凭れたら、確実に数秒で逝ける自信がある。お母さんと一緒に寝るなんて、そんな年頃でもないけど。

いやでも、これはまずい。気を抜くと瞼がくっついてしまいそう。居間のソファはふかふかで柔らかいし、ヘッドスパはなんか気持ちいいし、お母さんもふかふかで柔らかいし。もう反則だ。お母さん

ズルい。

とりあえず何か喋ってないと、思ったらお母さんの方から話しかけてくれた。

「明後日の劇、お昼頃からだっけ？」

「ふわあ……。んーそーだよー。明日はリハなのー……」

「主役のお姫様なんでしょう？　ちゃんとセリフは覚えたのかしら？」

「んー、覚えた」

「リズはそういうの得意なものね」

何か馬鹿にされてるような。

まあ確かに、セリフ自体は劇の長さに比例して結構長かった。けど、不思議とスツと入って来たからそんなに苦にはならなかった。なんていうか「私ならこう言うかな」ってという言葉が、そのまま台本に書いてある感じだったから。

つまりアドリブでもいける！　なんつって。

「今年の劇はルートが脚本なんでしょ？」

「え、あ、うん……。そうなの？」

「夏休みに入ってから、毎晩部屋でこそそやってたからねえ」

知ってたんだお母さん。何でも知ってるなお母さんは。さすが。

「そうだったんだ」

「そうよ。何でもかんでも引き受けちゃうから、無理やりやらされてるのかと思って少し心配したわよ。あの子、優しいから」

「違ったの？」

「そうなのよ。何回も書き直したりしてたみたいだし、夜遅くまで大変そうだったけど、楽しそうにしていたの。本当に安心したわ」

何でもそつなくこなしてしまうルーは、昔から、何かに熱中すると言う事は稀だった。趣味が高じて何かに発展することはあつたけど、簡単すぎると、それすらも些細な日常の一部にすり替えてしまふのだ。

そのルートが、また何かに熱中していると言う事に、お母さんは

安心したんだろう。

「ルーがそんなに真剣にねえ……」

ともすれば、今回の劇を成功させることは、私に課せられた義務になる。義務どころか、責務だ。違いがよく分からないけど、とにかくそういうもの。もっと言えば、『運命』みたいな。

そう考えると、私たちの関係って、とっても尊い。

「そう言えば、ルートは何役で出るのかしら。リスばかり劇のこ
と話すから、聞きそびれてたわね」

「それは……」

手持ち無沙汰になったのか知らないけど、お母さんは乾かした私の髪の毛を手櫛で梳かし始めた。指の通りが良くなると、一回撫でてから別の場所を梳かす、いつものやつだった。昔はよくしてもらっていたけど、今そうされるのは変な気分。

身長だつて伸びたし、距離感だつてそう。会う時間も部活のせいで減ったし、心も体も育つて、秘密も増えた。全部色々変わって、昔のいつも通りは『変』になっていた。

そんな変な気分は私を支配して、言葉のコントロールを奪った。

「ト、トップシークレットっ。本番までのお楽しみねーっ」

お母さんが鋭いのは、お母さんが変わらないからなんだと思う。変わらないからこそ、私たちの変化に敏感なんだ。

隠さなきゃと思つて不意にそうしたけど、そんなの隠せるわけない。私にだつて、隠した意味がわからないんだから。

「うふふっ。主役かしらねえ」

「もー、お母さん！ ホントは知ってたんでしょ！ 私を嵌めたわ

ね！ おのれい！」

「はいはい。上手上手。眠いのよねえー。よしよし」

「んーもー……」

お母さんに頭を撫でられると、不思議と気持ちが和らぐ。お母さんつて、そういうのもズルいと思う。

結構演技じゃなかっただけに、なんか悔しい。ていうか、お姫様

は「おのれ！」とか叫ばないな。眠いのは事実だけど。

「あの子、また悩んでたわね」

「うん。ルーっていつつもなにか悩んでるよね」

「ルートはとても優しい子だから、仕方ないわよ。どこかにいる誰かのために、自分は何ができるんだろうって、色々考えちゃうのよ」
それって優しいって言うのかなとは疑問に思いつつも、私の記憶の中のルーはいつも優しくかった。

そう。少なくとも、ルーは私に優しくかった。

それが、本当はルーの苦悩の上に成り立っているとするのは、紛れもない事実。

「どうしたらいいかな……」

「あらあら？ リズがそんなこと気にするなんて、珍しいわねえ」

「ち、違う違う。ただ、ルー、練習にも来ないから、皆にも心配かけてるし、それだけ」

「リズムも素直ねえ。やっぱりルート、そんな感じだったのね？」

「あっ、うっ……うん、そう」

うっかり口が滑ってしまった。

互いの顔が見えないからって油断してた。

「なにも、隠さなくたっていいじゃない」

「だって……」

「リズムのせいじゃないんだから、別に怒ったりしないわよ」

「私のせいじゃ、ない……？」

そんな言葉を久しぶりに聞いたから、一瞬、“あの時”のことを言われたのかと思った。でも、私の周りの空間は過去に時間逆行したりせず、刻一刻と本番への時を刻んでいる。

あれは私のせいなんだから、そんなことあるわけないし。

「気持ちわかるわ。でも、お母さんにならなんでも話していいのよ」

「そうなの？」

「そうよ。そういう決まり！」

「ふーん」

撫でて落ち着かせたり、なんでもお見通しだったり、そういうお母さんという存在がもつポテンシャルと引き換えに、私たちの悩みを引き受けなければいけないということだろうか。だとすれば、妥当なのかも。

じゃあ、お父さんってなんだ？

お父さんはなんていうか……変な人だけど、凄く優しいし、別に嫌いというわけではない。むしろ好きな部類に入ると思うけど、それは『父』としてだと自分の中ではつきり線引きされている。

別格なのはわかるけど、その格ってなんだ？ 低いのか？ 高いのか？

「ねえ、お母さん。聞きたいんだけど」

「どうしたの？」

「お父さんって何者？」

自分でも不躰過ぎるなとは思ったけども。

数秒の間があつてから、お母さんは「突飛ねえ」と反応した。

「お父さんはお父さんよ。あなたのお父さんで、ルートのお父さんでもあつて、お母さんの旦那さんでもある。本の編集をしていて、頭は良いけど目は悪い。すぐカッコいってことはないけど、とても素敵な人なのよ」

「そのセリフの方が突飛だよっ」

なんかそういうのって、こっ恥ずかしい。劇の練習し立ての頃みたい。

まだ自分の役どころが掴めなくて、言葉を発するのに躊躇いがあつたりするあの感じ。

それを見ると、人のことなのに顔が熱くなつたりする。

「うふふふっ！ そうね。今この場に居ないから言えるのかもしれないわね。でも、そういうのも大事なのよ。口に出したりしなくても、気持ちって言うのはね、少しづつ伝わるものなの」

「そういうもんなの？」

「そつよ」

そつよまで自信ありげに言われると、確かにそんな気もしてくるよ
うな。

そう言えばこの前、ルーが言ってきた「好きだよ」って言葉もそ
うか。面と向かって言われたら、言った方も言われた方も顔が赤く
なるに違いない。あれは、（フリだけど）眠ってたからこそ聞けた
んだ。

それこそが、お母さんの言う『少しづつ伝わった』結果なんじゃ
ないかって、都合よく解釈してみたり。

「だから、リズも言ってみたら？」

「なにを？」

「本当はどんな気持ちなのか、とかかしら」

「え、だって、お母さんいるじゃん」

「お母さんはノーカウントよ」

「えー、なにそれズルい」

お母さんはステルスまで使えるのか。万能すぎる。

まあ、本当の気持ちって言ったって、そんなに特別言う事もない。
「大好きです！」なんて、それこそ、そんなに声を大にして言わな
くても伝えられるし。

でもやっぱり、劇には出て欲しい……かな。

「出ようって言ったなら、出てくれるかな……」

「さて、どうかしら。どう言えば出てくれるかしらねえ」

「ルーが王子じゃなきゃだー、とか？」

「それだと、出てくれたとしてもルーが可哀想なんじゃない？」

「だよね……」

それじゃ、今までとまるで構図が同じ。ルーが私の幸せのために
傷つくことになる。

そしたらこれはどうだ。

「一日私を好きにしていから、出てよ！　とか？」

「リズって、つくづく刺激が強いわよね。大胆というか、アグレッシ

シブというか。わかってると思うけど、男の子がいるところであんまりそういうこと言っちゃダメよ？ 一体誰に似たのかしら……」

首を傾げるお母さんに「多分あんただよ！」と、無言でツッコんだ。さすがに、私の頭皮ではそれを伝えられないはずだ。お母さんの大きな胸でも、さすがにそれを勘繰ることはできまい。

それはそうと、これもダメか！

「やっぱりダメかな……」

「何よ。やってみればいいじゃない。色仕掛けでしょ？ どうせル

ートなんだから、大丈夫よ。失うものはないわよ」

「なんかそう言われると複雑だよ」

「自分で言い出したんじゃないかなかったかしらねえ」

この人は、結局私にどうして欲しいんだ。

なんていうのは論点のすり替えで、本当のところ大事なのは、私はどうしたいか。お母さんはそれを伝えようと私をおちよくって、感情的になるよう仕向けているわけだ。人は怒ったり泣いたりすると、本音を喋ってしまうものだから。

そう考えると、音楽室で泣いていたルーの言葉は、本音か。

“あの時”の言葉も、そうなる。私も泣いてたな、そう言えば。

なんだ。別に、ルーが泣いてなくてもわかってるじゃないか、私。

「わかった。あとでやってみる」

「そう？ それなら応援するわ」

そう言って、お母さんはまた私の頭を撫でた。そんな年頃でもなはずなのに、すぐ落ち着く。素直になれる。安心する。答えが見える。お母さんってやっぱりすごい。だって、このままものすごい甘えちゃいたいもん。

そうだ。私もルーの頭、撫でてやるか。

何も学べてないな、私。……いや、冗談だけど。

まあ、ちゅーの二つや二つくらいしてやってもいいのでは？ とは思う。やっぱり、そういう年頃だし。減るもんじゃないし。

「もう大丈夫かも。うん、大丈夫だ。髪サラサラ」

「そう？ それならよかったわ」

最後の一撫でまで、お母さんは優しくかった。お母さんの優しさが、何の犠牲の上に成り立ってるのか、それを考えるのは野暮だ。

知りたい知りたくないの前に、そんなの知ってもどうにもならない。私はそんなの気にしない。そうやって私が私であるように、お母さんはお母さんなんだ。だからルーもルーであるべきだ。

「お母さん。ありがとう」

「どういたしまして。明後日の劇、楽しみにしてるからね」

「うん」

頷くと同時に、サラサラの髪が踊った。軽く目に刺さりそうだったけど、いち早く瞬きしたから大丈夫だった。

すつくと立ちあがると、少しばかり温まったソファは、未だ母を乗せたまま哀愁を漂わせていた。私の座っていた空間は地味に広がったみたいで、いやに物悲しい。

「おやすみ。リズ」

「うん。おやすみ」

お母さんが言い放ったその言葉でもって、私は漸くその場を離れられた。

廊下に出ると、少しだけひんやりして、また眠気が到来した。

でも、まだ眠るわけにはいかない。

私は階段を上がって、また廊下に行く。そして懐かしい道を通って、昔の二人部屋　ルーの部屋の前に辿り着く。

思えば、ルーの部屋で二人きりになるのは、部屋が別れて以来か。記憶から変わっていないはずの場所なのに、色々と様子が違うような感じがする。

ドアは見上げる程大きかったような気がするのに、なんか「普通のドアだ」みたいな普通サイズだし。廊下の突き当りはもっと真つ暗で怖かった気がするのに、今はそんなことないし。天井にあった顔みたいの木目は、もう見つからないし。

何より、ノックしないと部屋の扉は開かないし。

そんな当然の時間の流れを代償に、私は、私たちは成長しているんだなあ。なんてしみじみ感じたり感じなかったり。

兎にも角にも眠いから、結論は急ぎたいところなんだけど。ノックをするのにこんなに勇気がいるとは。

やっぱり、これからやるうとしてることを頭がわかっているからなんだろう。

この前お風呂に侵入しようとした時も、なんかすごい緊張して断念しちゃったし。……あれ？ 断念しちゃったっけ？ 断念というか、そもそもそんなことしたっけ。してないか？ してないな。

まあ、それはいいとして。

さっきからこうやって、私の右手がルーの部屋のドアの前中ほどで止まって動かないんだけど。

このまま振り下ろしてしまえばいいだけなのに、そうならないようにどこかで逆方向に力が働いてるみたい。どうしよう。

手よ動け！ 手よ動け！ みたいな一人芝居はあまり得意じゃない部類だけど、演技じゃないからすごく迫真だと思う。一体誰の真に迫るのか知る由もないけど。

いや、あった。

ルーだ。

私はそのためにここに

「えっ？」

「私、何のためにここに……？」

唐突に耳へと飛び込んできたルーのセリフは、私にそんなセリフを想起させた。

でもそれは、ルーの書いた言葉であり、ルーの考えた心情であり、

他でもないルーの本音だった。でも、私もその言葉を知っていた。

「な、なんで……？ だって、えっ、それ……」

だからこそ私は “私” は何のためにここに来たのか、その理由がわからなくなった。

「私の……セリフ………？」

お母さん。 (後書き)

【あとがき】

次回は……どうしましょう。

【Matter】Whos
”Moth”？（前書き）

【まえがき】

“最下位という勝利を”

【matter】Who's "Moth"?

大人と同じ時間段取りで試合をするのは初めてのことであった。少女は肩で息をしながら、チームメイトたちの顔色を伺った。

練習はいつもそれ以上の時間やるのだが、やはり勝手は違うもので、動けそうな人は見つからなかった。芝生である分、練習場よりは動きやすいが、継続時間が継続時間だった。

少女にはまだ余力があったが、一人で点数を決めるのが難しいというのが、このスポーツの醍醐味であった。つまり、もう攻めることは不可能であると言っても、過言ではなかった。

一つ希望を見出せるとすれば、相手側の状況が。

全国大会決勝戦という折、相手チームにそんな役不足はあり得ないかもしれない。

しかし、今回は訳が違うのだ。

プロフェッショナルルール適用が宣言されたのは、まさに今朝のことであり、条件は相手とイーブンであるからだ。

思考を巡らせつつ、少女は少し走って相手選手を牽制し、戦況を伺った。

今、ボールを所有しているのは相手チームの男子。そのカバールをしようという算段だろうか。一応、背後にはもう一人取り巻きがいる。周囲を見渡す様子から、早めにパスを出したいようだけれど、少女がブロックしている選手を含めて、ほとんどの人がリードの声を上げないでいた。

やはり、少女のチーム同様に、相手チームもかなり消耗している様子だった。

だから、その声がやけにフィールドに響いたのだろうか。

「こつち！ パスっ！」

少女が急いで振り返ると、それがハーフラインを切ったところから聞こえたことがわかる。まさに、完全なるカウンターだと気付く。そういうものは大抵、監督と呼ばれる大人が支持するのが常だったから、少女はそちらに気を配っていた。今まで、それで何度もカウンターを防げてきた。カウンターだけでなく、相手陣営の作戦だったり、弱点を把握できたりもしたから、相手チームの監督を監視することは試合を確実に有利に進められた。

でも、今回はそれが無かった。声で指示しないにしろ、サインはあるかもしれないと踏んでいたが、それすらも無かった。完全に、読み違えたのだ。

「……くっ」

苦言を呈したくなる気持ちを抑えて、少女は体制を整える。

試合時間が残っている以上は余力を残しておきたいところではあっただろうが、今まで一点も防げていないキーパーは、どうしても心許なかったのだ。

少女は走るスピードを上げ、ボールとその選手を追った。

その選手は、ものすごく早かった。ボールをドリブルしているはずなのに、少女が素で走ってやっと追いつくくらいだった。少女が追いつく前に、すでに何度かディフェンスが仕掛けているが、見事に躲かれてポジションングを崩され、ゴール前がから空きになってしまっていた。

これまでのキーパーの防御率を鑑みるに、少女が抜かれれば、確実に点が入ると言っても過言ではないだろう。

また一つ希望を見出すとすれば、その選手の表情ということになる。険しい表情であれば、シュートを外してくれるかもしれない。

逆の表情であれば、当然、失点が危ぶまれるのだが。

どちらにせよ、ブロックをするためにはその選手の前に回り込まなければいけない。

少女は腕を強く振って、もう一段階スピードを上げた。

体感数秒で追いつく。

ファールルールに抵触しないよう、気持ち外回り気味に懐に入ろうと試みた。

ブロックを仕掛ける直前、相手選手も大きく腕を振っていたことに留意し、脇の空間に体を捻じ込むのは難しいと判断した。

ゴール前という位置取りも視野に入れると、このタイミングでブロック行為に及ぶのはハイリスクだからだ。背後にポジション取りをしているが、すでに勘付かかっているのもある。そのためか、若干スピードを落として、身構えているようにも見える。

そこで、少女は勝負に出た。

ボールを奪い取ることは考えずに、時間を稼ごう。

ここでは、相手がスピードを落としたのなら、自らもそれに合わせる、と言うのがセオリーだ。温度差の違うプレーは結果としていなしやすいという事実と、回避されたときのリスクが大きくなるからである。走るスピード一つとってみても、猛ダッシュを躲かれた時のロスが目に見えて大きいことは明々白々だろう。

しかし、少女はスピードを保ったまま、攻めた。

まさに、相手の意表を突く動きだ。

すると、相手選手はそれを待っていたかのように身を翻し、自らにブレーキをかけた。

慣性で転がっていくボールを素早く足で引き寄せると、その場で泳がせ、まるで子猫をじゃらすかのように少女を待っている。

それでも、少女のスピードは落ちなかったのだが。

目的は、奪う事ではないからだ。

奪わないのであれば、テクニクも策も必要でない。相手がボールを操るよりも早く動けばいいだけの、至極簡単な話だ。ボールの軌道など、注意するまでも無い。猛進するのみ。

近づくほどにわかるのは、その相手選手がとても華奢であることだろうか。

もう一つ、少女の意表をつくかのように、推測と逆方向にボールを運んだということ。

「そ、そっちななの!？」

そうして少女は、その選手に勢いよく激突した。

少女の体重に、躊躇無く上げていたスピードがすべて上乗せされた、途轍もなく重い一撃となった。二人は力がかかった方向に勢いよく倒れ、数メートル芝生の上をゴロゴロ転がった。ボールは二人の後を追いかけるようにフィールドの外へ転がってラインアウトになったが、それよりも先に「ファール!」との審判が下された。

「ファール……」

突進する方もする方だが、相手方の突進に対する行動としては結構グレーだった。なので、どちらのファールになるのか、微妙なところだった。

しかし、少女はそんなことよりも気になることがあった。

「あ……」

相手選手の容態だ。

動いているから生きてはいるようだけれども、どうしてか少女のタックルを抱き入れるように受け止めたので、衝撃をもらに腹に喰らっていたはずだ。

立ち上がった少女は、とりあえず膝の泥だけ手で払って、近くに横たわっていた相手選手に近づいた。

内臓が破裂でもしたのではと、少女は心配になったのである。

「う、ごめんなさい……」

左腕で顔を覆うように転がっていたその選手の横にしゃがんで、恐る恐るそう口にした。ファールよりも大変な違反を犯してしまっ

たかもしれないと、瞳を潤ませながらも、
反応が無い。

これはまずいと危惧した少女は、遂に相手選手の両肩をもって、
強く揺さぶりだした。

「ねえ！ ご、ごめんなさいって……！ ねえ起きてよお！」

少女がそんな行動を起こすので、不審に思った審判が数名集まっ
て来た。周囲にいたチームメンバーと、相手チームの何人かも寄っ
て来た。

いつの間にか少女の周りには人だかりができて、ぐるりと取り囲
んで見守るような形となっていた。

そのことに気が付いた少女は、すぐさま立ち上がると周囲に呼び
かける。

「誰か、この人を助けて！」

右を見て。

「お願い、助けてよ……！」

左を見て。

「誰かぁ……」

その時だった。

「痛い……」

「あ……起きた」

その瞬間、少女は初めてその選手の顔を見ることができた。

走っている時はボールの動向にばかり注目していたから足が速い
人という印象しか抱かなかったが、止まって見れば印象がまるつき
り変わった。

どこにそんな力があるのだと疑問に思うほど華奢で、声色も相応
にして高い。ただ、叫ぶにもキンキン煩いということはなく、鈴の

音のように綺麗で透いていて、フィールドに良く通る。

遠巻きに見てみれば、見るからに優しそうな丸っこい顔立ちで、それでいて輪郭はすっきりと整っている。走って乱れた髪の毛は、逆に、セツトされたかのようにうねっていて、少しばかり見目麗しく感じる。どこぞの俳優の息子だと言われても十分領けそうだった。さらに観察すると、体躯のバランスがとてもよかった。その細身の体つきにはどこにも無駄がなく、むしろ必要な膨らみすらないように思えるほどだ。

そんな体の一体どこにあんな力があるのか、少女はただただ不思議であった。

そして少女は同時に、今日の試合は負けるだろうと確信してしまった。

「だ、大丈夫……?」

すぐさま駆け寄って、声をかける。

「うん。大丈夫だよ。でもまさか突っ込んでくるなんて。はははっ、あははは……!」

その子はとても楽しそうに笑っていた。

こんな大事な試合で笑っていられるなんて、少女がそう思った瞬間、少女は負けたのだ。

勝たなければ捨てられる、もう二度とフィールドを走れなくなる。そんな義務を背負っていた少女が、笑えるはずも無く。

「それはごめん」

「あ、ううん。いいよ。だって、勝ちたかったんでしょ?」

「え? 何で知ってるの?」

少女がサッカーに賭けたものを、という意味だった。

その子の答えは、清々しいほどに端的に。

「当然だよ」

「そうなの?」

試合に勝たなければ自分がサッカーを辞めさせられるということ、全員が知っているとしたら、どれだけ幸せだろうか? 少女は

ふとそんなことを考えた。それなら誰もが同情して、わざと負けてくれるだろうと、そんなことを。

でも、その子は違った。

「だって、勝ったらみんな喜んでくれるでしょ？」

少女一人の幸せよりも、たくさんの人間の幸せの方が、重いに決まっていた。賭けるものの数でさえ勝てないのに、勝てるはずなどありはしない。

親に命令されて動くだけのからくり人形など、天秤にかけるまでも無かったのである。

少女は絶望した。

楽しむ者と、義務を果たそうとする者、行きつく所は見えている。笑ってプレーできなければ、その選手に勝つことはできないからだ。

もうこれも終わりが。少しだけ楽しかったな。でも、辛いな。楽しかったからだな。じゃあ、こんなの最初からやらなきゃよかったな。やりたくないって、言っておけばよかったな。

せめて、涙は流すまいと、少女は気丈に振舞うことにした。

「立てる？」

「あ、うん。ありがとう」

敵選手の肩を持つわけではなかったが、負けるなら負けるで――
〇〇対〇くらいで負けてやりたい。

手を差し伸べながら少女は憤り、心の中で泣いていた。

「本当にごめん」

「大丈夫だって。気にしないで。そんなことより、上手だね。サツカー」

「え？」

「パス正確だし、指示出すのとかも、うん。今までで一番上手いかも」

それを、親の前で言って欲しかった。

口に出したところでどうにもならない、そんなどうでもいいことを、少女は考えてしまった。少し、腹が立ったのだと思う。

「でも、もうこれで辞めるんだ。あなたはまだ続けるんでしょ？ 頑張ってるね。それじゃ」

淡々と述べたのが気に食わなかったのか、その子も少しだけ声が大きくなる。

「待って！ 何で辞めるの？ それってこの試合に負けるってこと？」

「そうよ」

「どうして……？」

「そういう言いつけだから」

「違うよ。どうして本気でやらないのってこと。勝てば辞めないで済むんでしょ？ サッカー続けたくないの？」

色々と反論されて、少女はついに堪忍袋の緒が切れる。

「あなたに言われる筋合いなんてない！ そういうものなんだから仕方ないでしょ！？ 私じゃ、あなたに勝てないの！ 何回も言わせないでよ！」

その子も負けじと応戦する。

「そんなのやってみないとわからないよ！ 何でもいいから本気でやってよ！ じゃないとお互いに楽しくないもん！」

試合運びからしてそうだったが、完全に二人の世界だった。呆れたギヤラリーも、元の場所に戻っていった。

少女は変に目立つのが嫌だったので、その子を制止した。

「わ、わかったから！ もう静かにしてよ！」

「ご、ごめん。でも、絶対本気でやってね」

そう言って、その子はゴール前へと走って行った。

そうしてフィールドに試合らしい雰囲気に戻って来ると、ファールプレーとして相手チーム側のPKの準備がなされた。

自陣のゴールの前にボールが配置され、チームメイトたちは目眩ましの盾のように横並びになった。

少女は、キツカーがパスする危険性を考えて盾の一部にはならなかったが、パスなどしないだろうとも思った。

キツカーが、相手チームのあの選手だったからだ。

これは入る。

そんな諦観の念を抱きながら、レフェリーのホイッスルを聞いていた。無常だなど、少女は普段は言わない独り言を言いもした。

その刹那の出来事だった。

力強く蹴られたボールは、弾丸さながらに真っ直ぐと飛んでいき、思い切り盾に弾かれる。そして弾かれたボールは、まるでブーメランのようにその子の足元へと帰っていく。その子が動きを止めた瞬間、フィールドの時間が止まったように静かになった。一切の時間が停止したような、そんな世界になってしまったようだった。

そう。まさに、それを知覚しているものだけが動ける世界。

その子の視線が、ふと少女を捉えた。

「無情だよね」

「そうかな」

十数メートルも距離があるにも関わらず、不思議と声が聞こえた。少女の声も届いているらしかった。

本当に時が止まっているからなのか、互いに透き通った声を持っていたからか。

「そうだよ」

「うーん……」

「私、あなたのこと知ってるわよ」

「なんで？」

「あなた、有名だからよ」

「そうなの？」

「そうよ。あなた、山登りする人でしょう？」

「うん。するけど、なんで？」

「聞いたの」

全国大会の決勝戦ともなれば、下調べは必須になってくる。程度の違いはあれど、毎回どこのチームも同じようなことをやる。対策を立てるためだ。

少女のチームも例外なくやっていたが、少女の場合は個人的にもやっていたから精度が違った。卑劣なほど大人びていると言えばそれまでだが、少女が勝つためにはやるしかなかったのだ。

危険人物と呼ばれる選手がいれば、過去の試合の記録を見たり、あるいは学校に上がり込んで試合を見学したりもした。そうして立てる作戦は、完璧だった。それは少女のインストラクターすらも認める程の徹底ぶりだった。

しかし、今回はそれが意味をなさなかった。

試合当日、いや、試合中に至るまで、相手選手の情報が無かったのだ。おそらく、現存するどの選手よりも危険な天才についての情報が。

無理もなかった。

今までずっと無名で、一度も全国大会などに出場したことはない弱小チームなど、端から眼中になかった。一回戦で敗退するようなチームに興味などあるはずもないし、労力の無駄になるのだから。

情報は、前半戦を終えた休憩時間に、インストラクターから入ってきた。相手のコーチにしつこく自慢されたそうだった。

『足が速くて、ボールのコントロールも上手い。一番は、教えてない技術を勝手に編み出すところ。おまけに、山登りをしているからスタミナもある』

そんな完璧な選手が、今、一人の少女に勝負を挑んでいるということになる。

勝負を買わなければゴールを決められてサッカー人生が終わる。最初のシュートがフェイクであったことは、何となく少女にもわかった。

そして、そんな芸当は天才にしかできないということも。天才の

フリをしているだけの人形が、本物の天才に勝てるはずもないだろうということも。全部。

でも、勝負するしかなかった。

でなければ、このまま世界は停止したままだろう。

「本気で、やればいいんでしょう？」

勝つことも、その子を満足させることも、少女にはできはしないだろうが。

それでも、少女は逃げなかった。

「本気でやるから。最後、だから……」

少女は汗と混じって塩辛くなったそれを舐めて、一步踏み出す。強かに。

時は呼応して流れ、延長残り時間が三分切っているということを、少女に知らしめる。

「受けて立つよ」

一步、一秒、また一步、また一秒と、フィールドは完全に少女にリンクする。

そして、世界は動き出す。少女の、絶望へと向かって。

冷酷無慈悲なホイッスルは事務的な響きとともに、少女たちに敗北を告げた。

しかし、少女は負けなかった。

結果として、PKで敗北したと言う事。つまりそれは、少女が勝利を守り通したと言う事。その先はチームとしての実力であるし、少女の得意とする情報分析も、とうとう何の役にも立たない。

少女は、ある意味では勝利したのだ。

ただそれが、少女の目に　少女の両親の目にはどう映るのか。

論を俟たない。

最後の希望として少女の心の片隅で光っていた『MVP』の栄光も、あの子は当然のように奪っていった。少女の未来も楽しみも、幸せも、全部同時に。

少女は試合に敗北した日、夜が更けるまで説教された。「なぜ試合に負けたのだ」と、手を上げられた。簡単な話、「天才に勝つだけの実力が足りなかった」のだと言えればよかったが、できなかった。

それは、少女もまた、周囲から「天才」だと称されるからだった。でも少女は、自分がそうではないことを知っていた。

ただ、努力することが嫌いで、どうしたら楽をできるかを考えているだけだったのだから。そうしたら、いつもある程度の水準には収まっていただけという話。あの選手もきつと、同じようなものなのだろうけど、程度が違った。それだけの話。

少女は抵抗しようとはしなかった。それも道理なのだを知っているから。

少女の達する水準が、両親の望む水準に達しなかっただけで、そこに何も不思議はない。ただ、少しでも少女が楽しめて、ほんの少しだけ笑顔になれた。ただそれだけ。

少女は、エレメンタリー入学前からそんなことを繰り返しているのだ。

華道、舞踊、演劇、剣道、習字、絵画、料理……数えることを途中で放棄したくなるほど、少女はチャンスが無理矢理に与えられた。無論、それはこれからもだが。

でもきつと、終わりはある。自分の才能に、誰かが気が付いてくれるはずだから。

それはきつと、あの時の相手選手のように……など、幻想を抱いてみるも、実情は変わらない。そうやって現実逃避をすることが、

紛れもない少女の才能で、周囲に「天才」だと称される所以なのだから。

そうして数多の業をこなして、残ったのはたった一つの敗北の思い出だけ。

年月を経て、少女は少女ではなくなった。

そして、天才からも逃避することができた。代わりに両親から得たものは、無色の諦念という質量。その重みで、少女は被っていた仮面を外され、心はぐしゃりと拉げた。

それでも、彼女の才能は衰えることなく、残っていた。それはもう「天才」ではないが。

その才能を補うように備わった彼女の美貌。そして、今となっては皮肉にしかない、無限の知識と経験。それらは、彼女を周囲の圧力から保護した。

少し善い人のふりをすれば、異性は思うままに動いたし、子供は懐き慕った。それは学校の先生であろうと同じだった。様々な経験で培った『ある程度の水準』があったことで、同性からも尊敬された。

それらすべては、計算のうちだった。彼女が望めば、大金だろうと地位や名誉だろうと簡単に手に入る。

これが絶望の代償なのだと、彼女は笑う。

そうしていつか、彼女はこう思うようになる。

これなら、すべてを手に入れることができる。

両親よりも権力のある誰かを味方にすれば、両親だって見返すことができる。それこそ、御曹司を何人かつかまえて強請れば、欲しいものをすべて手に入れることができるだろう。結果として大規模紛争になるかもしれないが、彼女ならそれすらも解決できるかもしれない。

それも、今日思えば明日には事を起こせるのである。

でも、彼女はそうしなかった。いや、できなかった。

簡単な話だ。

彼女の欲しいものは 欲しかったものは、すでに奪われていたからだ。数年前の、あの場所、あの試合、あの瞬間、“あの時”に彼女がいくら望もうとも、時間を巻き戻すことはできないのだから。あるいは、時間を巻き戻すことができる神様を味方につけるとも、自然、不可能なのだから。

しかし、彼女の中で、その記憶は希薄になりつつあった。経時という理由ももちろんあったが、何より、別の幸せでいくらでも彼女自身を満たすことができたからだ。

食べたい物があれば、それを持っている人に媚びを売り、腹の立つ人間がいれば、敵対する人物をぶつけて昇華する。テストが難しければ、先生を呼び出して誘惑し、点数を捏造する。面倒ごとは、演劇の稽古で覚えた涙を見せれば解決した。

どれも、彼女にとってみれば容易いことだった。

これ以上、失うものなどない。あの記憶さえ、なくなれば。

そんなある日のこと。

ふと新聞を読んでいると、彼女の記憶を呼び起こさせるような記

事が、たまたま彼女の目に入ったのだ。もはや運命なのかもしれないが。

『登山のすゝめ』と題打たれた、小さなコラムだった。新聞の最後のページから一つ前、左下の端の方に、それはあった。

別段、彼女が登山に興じていたわけではない。それも、かつて捨てた業の一つ。

偶然彼女の目に飛び込んだのは、とある一人の人間の名前だった。聞いたことがあるどころか、それは、紛れもなくあの選手の名前だった。同名の人も存在はするだろうが、『登山』というワード、それからサッカー経験があるという記事を看過することはできなかった。

見たところによれば、記事の著者は父親。

内容は、しがないライターの名が登山に打ち興じている経緯と近況。健康維持のために始めたが、『我が子』も気に入ってしまったらしいということ。夜登山すると、空気が澄んでいて星が綺麗だと言う事。誰か、『我が子』と一緒に登山するのは楽しいと言う事。

そして『我が子』は、サッカーを辞めたという事。

刹那、彼女はその新聞を千切って丸め、すぐさま屑籠へと放った。あまりに軽かった切れ端は舞い、屑籠から幾らか溢れた。床に散った新聞は単なる文字の羅列から憤怒の象徴へと変わり、事実として取り返しのつかない破滅を、彼女に覚えさせた。

彼女は不思議に思った。

「なんで……？　なんで、なんで、なんで」

彼女から希望を奪ったあの選手はもう、選手ではない。彼女から MVP まで奪って、そのまま逃げた逃亡犯。罪を裁くことはできても、もう一度彼女に勝利のチャンスが巡ってくることは決してない。

彼女には、あの選手を奪えない。

「意味が解らない。なんで……」

少なくとも、あの天才が世界を相手に戦っているのなら、戦い続けていたのなら、彼女は潔く諦めることができたはずだ。敗北の記憶を良い思い出に、あるいは忘れ去ることができたはずだ。

そうすれば、『本気でやれ』と言った意味も、彼女自身が『本気でやった』意味も、納得できるのだ。言い換えれば、それこそが彼女の本当に手に入れた平穩なのかもしれないのに。

しかし、それは叶わない。

「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで」

誰かに媚び諂^{ウツク}おうとも、事務的な涙を流そうとも、体を売ろうとも、魂を売ろうとも。どれだけ祈っても、願っても、もう叶いはしないのだ。

あの子が、そういう場所へと逃げたから。

『山は空が近いので流れ星もたくさん見ることができます。皆さんも何かお願いがあれば、是非とも誰かと山に』

彼女の心には、正体のわからない大きな感情が渦巻いていた。泣いていいのか、怒ればいいのか、それすらもわからないほど大きくて、黒い感情だった。

誰かに伝えれば同情してもらえることはわかっていたが、彼女はそうせずに、自分の中に蓄えた。

床に散らばった紙片を拾って屑籠に捨て、彼女は一人、居間を出た。廊下を歩いて階段を上り、自室へと向かう。そうして屋根裏へ辿り着いて、流れるようにベッドに寝転んだ。

二階建ての家の屋根裏部屋を改築したワンルームが彼女の部屋だ。つまり、家の中で最も高い場所。山だった。空気の澄んだ、綺麗な星空を見られる唯一の場所。

「なんで……」

泣けも怒れもしない彼女は、胸中を叫んだ。

「本当に『願い』を叶えられるなら、私は……」
でも、決して空は見上げずに、山に吐き出すのだ。
彼女のすべてを。

「私は、『願い』を無限に叶えられる『願い』を」

【M a t t e r】W h o s ” M o t h ” ? (後書き)

【あとがき】

昔の記憶って、温かいのと冷たいのが入り混じっているような気がします。

人肌、というのでしょうか？

なので、逆引き的なアレで、人の温かさに触れると、色々思い出してしまうのかもしれないね。

みんなと。(前書き)

【まえがき】

リズ編戻ってまいりました。

物語はどんどんクライマックスへと近づいていきます。

ぶいぞ。

みんなと。

明日に本番を控えた今日、私はアカデミーの一年生に混ざって、リハーサルに勤しんでいたわけだけど。相変わらずの場違い感はないし、何故か部外者の私が主役だし、肝心のもう一人の主役は結局来ないしで、結構アレな感じだった。

とは言っても、劇の仕上がりはかなりのものだと思う。セリフとちったりするのは茶飯事みただけど、そのカバーがホントに上手。セリフ覚えてる意識高い系の人が、上手く切り返して繋げるんだよ、すごくない？

ミドルでこんなことを企画しても、誰も真面目にやんなさうだし、やってもできなさそう。そこを、面倒くさがりながらもやってのけちゃうんだから、アカデミーのお兄さんお姉さんってやっぱりすごい。そんな中に、私はやっぱり主役として君臨しているわけだけれど、今更ながら、ホントにいいの？ って感じで複雑だ。みんなは喜んで推薦してくれるけど、別に、私はそんなすごくない。言ったら、ただのミドル二年生。たかだか十三歳のうら若き乙女。

「セリフが飛ぶとは珍しいのう。どうかしたのかの、小娘」

「あ。ごめん。ちょっと考え事……っていうか桜さん。小娘って言うのそろそろやめてよー。リズって名前があるんだから」

知らぬ間に抜けた敬語も含めて、この人たちは全部許してくれる。桜さんとかいう謎のおばあちゃんは例外な気もするけど。

「よくあるよくある」「全然大丈夫！」「忘れてもわたしたちがカバーするよー！」「疲れちゃった？ 休む？」

「やっぱり緊張するのかな」「馬鹿が、そんなわけねえだろ」「ずっと練習続きたったから、疲れてるのかも」

「えーと。ごめんなさい。ちょっとだけ休憩してもいいですか？」
こうして、主役の私が抜けることも快諾してくれるのだ。優しいのは私的に嬉しいけど、この期に及んででもだと、少し心配になる。なんだか、テスト前に勉強しない人を見ているみたい。ああ、まあ、私もそうか。

いやでも、例外もあるもんだよ。
いつもテスト前にしっかり復習するタイプの人が、それをやらな
いなんてこともあるんだからさ。

「あ。君がルートくんの妹の？」

「えっとー……」

ステージから飛び降りた私に話しかけたのは、リハ中ずっと特等席で観覧していた、優しそうな雰囲気のお姉さん。

大人びた雰囲気を醸すつやつやの髪の毛と、それに見合った丸い声。誰もが感じそうな『お姉さん感』めいたものは、初対面なのに安心感さえある。それでいて高圧的な感じは一切無くて、逆に私的には、下手に出るかフレンドリーで行くか、その対処に困るところ。

「あ。自己紹介がまだだったね。ワタシはルリ。生徒会長だよ。お姫様役よろしくね、リズちゃん」

「よ、よろしくおねがいますー」

生徒会長か。ルリが私のことをべらべら話すとは思えないけど、色々顔が広そうでなんとなくやりづらいな。美人だし、聞き出し上手そうだし。美人で聞き出し上手なのは、危険人物の証だからな。
……ん？ あれ？ 生徒会長？

「あ。休憩だったよね。呼び止めちゃってごめん。どうぞどうぞ」

「あの……」

「ん？ なんだい？」

「ルリ生徒会長さんって」

ここの生徒会長って、確か女体化哲学者だったよね。
逆だっけ。ま、どっちでもいいや。少し聞いてみよう。

「ルリでいいよ」

「はい。じゃあ、ルリオ姉さんって」

「うっ！？ お、お姉さん！？ ちょっとドキッとしたよっ！？」

でもなんかいい気分っ！ リズちゃん、中々優秀だね……っ！ リズちゃんのお願いなら、お姉さん、なんでも聞いてちょうから！ 言っでごらんなさい！」

なんかちよろいぞ。カシミーヤの生徒会長。

アリスお姉ちゃんなんか、いくら言っても眉一つ動かさなかったのに。

まあ、色々寛容そうなのは助かる。哲学者で性転換してるとか、その時点でかなり人生を達観してる気がしないでもないけど。

「ルリオ姉さんって、本当は男の子なんですよね」

「えっ」

何もそんな、「嘘でしょ？」みたいな顔で固まらなくても。

ふふふっ。隠し事はいずればれるんですよ、ルリオ姉さん。

ルリオ姉さんの軽やかな性格から察するに、早くからカミングアウトしておけば、これからもっと楽だと思っただよね。きつと。

「この前、学校探検したら、偶然、生徒会室から声が聞こえて。悪気はなかったんですけど、ルーもいたみたいだったから少し立ち聞きしちゃったんです。会長とルーの話」

そしたら、女だと思ってた会長が男だったし、なんか知らないけど哲学者だし、名前も確かレ、レ、レ……レール？ レーラだった？ ……とか、まあ、そんなだった。

色々カオスで混乱したけど、要するに『カシミーヤ校の生徒会長は変態』ってことでそんなに間違ってるはずなんだ。

さあ、結局どうなのそこところ。

「ルリオ姉さん……？」

ルリオ姉さん、固まっちゃった。

無理もないか。仕方ない。とりあえず今はこれで保留にしておいて、後でちゃんと謝ろう。

誰か他の人にルリ姉さんを託して、さっさと休憩に行かなければ演技してる時は気にならないけど、割とホントに疲れてるっぽいし。

周囲を見渡してみれば、ちょうどよさそうな優しいげな男子生徒がパイプ椅子に座っていた。その人なら、ルリ姉さんでも許してくれそう。例によって、私はああいう顔は好きじゃないけど、世間一般で言う“イケメン”っぽい。

「あー。すみませーん」

ステージに見入っているのか、私の方を向いてくれない。ま、そんな大きな声で呼んでもないから、普通に聞こえなかったのかも。

「すみませーんっ」

少し大きめの声で呼びかけてみる。

呼びかけていて気付いたけど、その人の手には劇の台本があつて座っている場所もルリ姉さんがり八中座っていたあたりに近かった。もしかして関係者？

「僕のことかな？」

やっとこつちを向いてくれたと思つたら、なよつちい一人称でげんなりだ。期待はしてなかったけど。

まあ、そんなの別にどうでもいい。ただ、どっかの誰かを見てるみたいで、じわじわ腹が立つてくるのは確かだけでも。

「そうですー」

「あれ？ きみは主役の……。僕に何か用かな」

見るからに年少の私のために、わざわざ席を立てて話しやすい距離まで来てくれるあたり、優しいのは見た目通りみたいだ。

近くに来て思うけど、ホントにどっかの誰かさんに面持ちが似てる気がする。優しいやつって、みんなこんな雰囲気になつちゃうのかね。

色々頼みやすいし、しかもいじりやすいからいいけどね。

「このお姉さんのこと、見ててくれませんか？」

「お姉さん？ あ、ああ、ルリさんか。この状態になっているということは、また何か……」

「私が『ルリお姉さんってホントは男なんですよ？』って聞いたら、こうなっちゃいました。あ。当てずっぽうじゃないですよ。この前、生徒会室でルーと男が話をしたんです」

「男？ ルリさんは男じゃ……ん？ 生徒会室？ ルーと？ ああ。それって、もしかして僕のことなんじゃないかな」

「ん？」

「なんだ。どういうことだ。幽体離脱的な話か？ 首を傾げていると、別に聞いてもないのに、「申し遅れました」とか言って自己紹介をしてきた。流行ってるのか、それ。なんか申し遅れるやつ。」

「僕はレイル。今回の文化祭で、カシミーヤ校と合同でやらせてもらっている学校の生徒会長です」

「あーはいはいなるほ……えっ？」

「ここへ来てのどんでん返しだどつ。いや、まあ、どうでもいいことなんだけども、なんか敗北感があるのは気のせいじゃない。」

「要するに、この前ルーと哲学を語っていたのはこのレイルとかいう優男で、ルリ姉さんとは別人物。そんなの見りゃわかるけど、確かに言われてみれば、なんか聞いたことがある声なような気もしないでもない。」

「つまりとところ、『カシミーヤ校の生徒会長は変態ではない』と。」

「じゃあ、変態は一体誰なんだ。」

「そもそも、あの空間に変態なんていたのか。」

「あー……、いたよ。」

「あー……」

「盗聴してたやつが約一名。」

「うん？ どうかしたかい？」

「いえ。何でもないです」

まあ、うん。

気を取り直して。

「じゃあ、レイルっていう人はあなたのことで、このルリっていう人と同一人物ではないわけですよね」

「そうだね。僕は僕だし、ルリさんはルリさんだ」

「よかったー。ここの生徒会長、性転換でもしたのかと思ったんだー」

「それは……。僕はどう反応すれば正解かな」

何だか笑いながら困っている様子だったけれど、やっぱりどこか余裕があつて、なるほど生徒会長だと思わせる。そんなオーラみたいなものが、ある気がした。

それはさておき、さっさと休憩に行かないととうとう休めないぞ。休憩するついでにルリの様子も見に行く予定なんだから。

あ。そうだ。

「あの一。ルー見ませんでした？ 生徒会室に行くって言ってたんですけど」

「ルー？ ああ、ルートさんのことかな」

「うん、そう」

私は、別段そういうのを隠しはしない。恥をかくのはルーの方で、私は恥をかって赤くなっているルーを見ているのが好きだから。

「ルートさんなら、さっき」

「あ」

「え？」

しまった。ぬかった。

ルーと話をしていたのがこの男なら、話の内容も全部知ってるんだった。知ってるどころか、その言葉を口にした張本人なんだから、あの急展開の会話の意図も知ってるわけだ。

主役を代わる。

その提案をしたのは、紛れもなくこの男。

そいつが今この場所について、ルーがこの場所にいないということ
は……。もしかしたら、そういうことなのかもしれない。この男は
自分の出番を確認するために。ルーは自分の出番を忘れるために。

じゃあ、なに？ ルーはやっぱり劇に出ないの？ 私がお姫様だ
からダメなの？ こんなどうでもいい男と私が結ばれてもいいって
言うの？ 違うの？ そういうことだよな？

「ルートさんならさっき

「うるさいっ！ わかってるよそんなのっ！！」

帰った、いなくなった、閉じこもった。どうせそんな言葉が続く
んだったら、最初から聞かない。聞く価値なんかない。聞きたく…
ない。

でも、わかってるんだ。私は、それを。

私は、王子様じゃなくて、ルーのことが好きだから。きっと、お
姫様もルーのことが好きだから。だから、私は待っているんだ。多
分、お姫様はそうするしかないから。

「えっと。ごめん。無神経だった」

王子様は、普通、お城に閉じ込められたお姫様を救いに行くもの
だ。

だとすれば、お姫様にできることと言えば、待つことぐらいなの
だ。王子様が迎えに来てくれることを祈りながら、王子様が無事で
いてくれることを願いながら。

「なんか怒ってるみたいよ」「何かあったのかしら……」「ルート
さんがどうのって聞こえたけど……」「まさかルートさん……」

「マジか。天使も怒る時があるんだな」「可愛いけどなー」「あれ
？ でもさっき、ルーって言ってなかったか？」「何かあったのか
？」「逃げちゃったとか？」

無神経なのは、私の方。本当に無神経なのは、兵を殺してでもお

姫様を求める王子様じゃなくて、空を眺めて偽善を貫くだけのお姫様。

「ごめんなさい……。目上の人なのに、私……」

「いいよ、僕なら大丈夫。でも皆きつと、すぐに気付くと思うよ。」

隠すのは無理だ」

「わかつてるけど……」

「それとも、僕が王子様というのは不服かな？」

「うん」

「ははは。そこは即答なんだね」

この人の言う通りなんだ。

主役が二人であるストーリー構成上、片方が欠けると物語は成立しない。私の好き好きで、この大きなステージをすべて無駄にすることも、もちろんできるわけがない。

あなたが嫌いなんじゃなくてルーとやりたいのだ、というのが一番の気持ちではある。だけど、今のこの悲惨な状況を見てそれを言おうものなら、それこそが『夢物語』に成り下がる。

大勢の人間が長い時間をかけてここまで作り上げてきたものは、劇じゃなくて信頼だ。

「これなら面白い」って脚本を信じて、「自分ならできる」って配役を信じて、「完成させるぞ」ってみんなを信じて。セットとか小道具一つとってみても、全部が信頼でできてるんだ。

そう思ったから、ルーだって代役を立てたんじゃないか。

だから、ここで「でも私は……」と私情を挟むのは、完全無欠の駄々っ子だ。合理性の欠片もない、感情論だけの子供のそれと一緒に、けれど、万が一ルートさんが帰ってこなかったら、その時は僕が代わりをやるから。不服かもしれないけど、僕も生徒会長だから失敗するわけにはいかないんだ。悪いけどその時は、僕に合わせてくれると助かるよ」

「そんなのわかつてる。それよりお兄さん、セリフは覚えたの」

「何度か台本を読んだから覚えてるよ。とても面白くて、セリフ

も覚えやすかったよ」

「知ってる」

「そうだよね」

何度か読んだくらいで覚えられる文量じゃないんだけど、この男の言葉には何故か説得力があった。説得力なんかあっても無くても、信じる信じないは私次第なんだけど。

お兄さんを仰々しく睨みつけていると、お兄さんもまたわざとらしく小さく笑って言った。

「本当はどうするのが一番良いか。それも知ってそうなものだけ」

誰に言った言葉なのか知らないけど、風船みたいな心を割れない程度に針でツンツンされてるような感覚だ。

「……………」

全く。なんなんだこの男は。気持ちの悪いやつめ。

でもこれで、今、私にやるべきことが できることがあるってのがわかった。

「私、休憩に行くところだったんだけど」

「……………ああ、それはごめん。悪かったよ」

こんなどうでもいい男に構っている場合じゃない。私にだってできることがあるんだから。

お兄さんはせいぜいステージ裏で見ているがいいわ。わははは。

……………なんかこれ、魔王みたいだな。

私は魔王よろしく威風堂々猛々しく壇上に登って、一声上げる。

その声はきつと、悪政に支配される国で一人、決起して立ち上がるお姫様の一声と同じ。

「ーと、どうしてしまったんじゃるか」

小さくて、儂くて、でも輝いていて。真っ暗で見えなくなった民

の未来を、わずかな希望の光で照らすみたいに。それこそが、いつも通りの役割なのだ、知らしめるみたいに。

「もしかして、ノアの演技、下手くそだから……」

確かに毎日祈るくらいしかできないかもしれないけど、王子様と早く出会う方法はあるんだから。非力な少女じゃなくて、誰もが憧れるお姫様なんだから。

「まさかここまで女々しいとはね。ま、仕方ないことなのかもしれないけど」

女々しくてごめんなさい、アリスお姉ちゃん。

でも、今日からは違うから。

「ねえみんな！ ちょっと聞いて欲しいの！」

ちようどステージの真ん中、主役が観客へ呼びかけをする時に立つ場所に来て言い放つ。今は観客の方へ背を向けているけど、背中に突き刺さる視線を感じる。同じように、壇上にいた役者たちの視線も、全部私へと集まってくる。さっき怒声を上げたからか、何人かの人はもともと私のことを見ていたみたいだ。

けど、生憎、私は人目に慣れてるんだ。

「ここにルーがないのは私のせいなの……。だから皆、ルーを攻めないで、お願いっ。怒るなら……私を怒って」

全員が衣装を身に纏っているということもあって、本当に物語の中に入ったみたいなの錯覚に陥る。私は本物のお姫様で、不安に駆られた民衆に物申しているシーン。とか言ったら、割とそう見える。

「今言われてもなあ」「うーん……」「リスちゃんのことを怒ったりできないし……」

「俺は怒ってないぞ」「おれも別に。だけど劇は難しそうかな……」
「代役つつつてもなあ。セリフ長いからなあ」

お姫様の一声なら土気を取り戻せるかと思っただけど、さすがにここまでくると民衆の反応は鈍い。あまり未来を期待されていないと言っるのが妥当かも。

でもそんなの当たり前だ。

何の政策も計画も掲げない指導者に、誰がついていくと言っただ。私だってそんな人についてくのは嫌だ。まあ、顔が好みならちよつと考えるけど。……考えるんかい。要は、これでついてくるようでは私の体目当てだと言っ事だから、逆に安心くらいの話だね。さて。

ここから、私の演技力がどれだけのことを成し遂げてくれるのか、それに掛かっている。小さいものをいかに大きく見せて、つまらないものを面白く見せるか。果ては、無いモノをあるように演じたり、あるものを無いように演じたりできるか。

彼女より上手くできるか、正直ちよつと心配だけど。

まあ、きつと大丈夫。

いつかこうなるような気はしてたから。ずっと。ずっと昔から。

彼女が笑ってくれた“あの時”から。

だから“私”も笑うのだ。

『女優 R i z e = Q U e e r』の名に懸けて。

特に誰が保証してくれるとか、別にそんなの知らないけど。

「みんな！ 一つ提案があるの！」

私は妹だから。

みんなと。(後書き)

【あとがき】

ここまで来たら、リズの進学先は決まったも同然ですかね。
ルートが三年の時に入学してくることになると思いますので、またひと悶着ありそうですね。

それで気付いたのは、このルーモスの世界が途轍もなく温かいということですよ。

大学、社会、とこれからも続いていくルートたちの人生なわけですが、イメージしてみてください。

どうですか？

この何となくふわっとした感じ。親からすると心配かと思いますが、何でしょう、この、幸せな感じ。

ということまで、目指しているところに近づけていて少し嬉しかった話でした。

次回はとうとう、クライマックス前哨戦です。

私と。(前書き)

【まえがき】

みんな言へ文化祭だ。
という前哨戦です。

ふんぞ。

私と。

「やぁリズ。僕……じゃなくて、俺が来たよハニー」
「おうえ」

急にそれは酷くないかいたかなんとか抜かしていたけど、正直どうでもいい。今、気になるのはめんどくさいクラスメイトよりも、生徒会室にも体育館にも見当たらないルーだ。

すでにリハ中の教室から、別のクラスが出し物（クイズ大会かなんか？）をしている体育館、ものすごい人込みになっている校庭屋台、休憩スペースになってる屋上、一番怪しい生徒会室までくまなく探して、また体育館に舞い戻ったところなんだけど。

そして、なんか知らんがアレンに会った。

顔も見たくないって言うのも正論だけど、今は会いたい人に会えないことに嘔吐えずきたくなる。

「ごめんアレン」

「えっ！？ なにっ！？ 会ってそうそう破局したの僕っ！？ じゃなくて、俺」

「破局も何も付き合っつてすらいらないから。前も言ったけど、私、劇に出るから、一人で回ってね。あと、絶対に劇の邪魔しないでよ」

「し、しないよ！ するわけないって！」

「あっそ。じゃ、私行くから」

「うん、わかったよ……って、えっ？ ちょっと」

そうして背中に浴びた言葉は、いつ頃終わるんだいとかどこで待ち合わせだいたか、やっぱりどうでもいい内容ばかりだった。

まあ、悪いと思わなくはないけど、劇の方が大事なのも確かだ。

私は超満員の人込みを切り分けて、その場を後にする……つもり

だったけど、出入り口付近は入る流れと出る流れが乱立してるせいで、出ようにも出られない。

せつかく昨日、劇をすべて壊しかねないような無謀な提案を皆に承諾してもらえたんだ。ルーのためにも自分のためにも、今日は失敗するわけにはいかない。

元よりルーがいないと劇は始められないし、昨日私がした無謀な提案も、やっぱりルーがいないと始まらない。でも、少なくとも私の案なら、王子様の演技を完璧に仕上げたルーじゃなくてもちゃんと劇になる。

どうだすごい提案だろー。……じゃなくて。結局、ルーがいないとダメなのに変わりはない。

大事な事だから何度も言うけど、「ルーがいないとダメなの」。

そんなこんなを逡巡していたら、ストーキングされてることに気付かなかった。不服。

「ちよ、ちよと待っててば……」

軽く肩口を掴まれて、びっくりして振り返る。

「おっ、脅かさないでよ。キモいなあ……。それで、なに？」

同じように人込みを掻き分けてきたんだろうけど、アレンぐらい長身で体格がしっかりしていると流されたりしないもんなのか。不思議と、観客が私とアレンを避けて通っていく。なんだか、川の真ん中にある大きい石になった気分。全然風流じゃない。

全然風流じゃない男は、私の耳に顔を近づけて、息を吹きかけるみたいに喋る。

「十一時になったら、教室で最終打ち合わせやるみたいだから、それまでには教室に戻ってないとだから。気を付けて」

「そんなのわかって……ん？　なんであんたが知ってるの」

「僕、いや俺は、リズのことなら何でも知ってるからなあ」

「そっか。じゃあ私の嫌いな人もわかるよね」

「な、なんでそんなに僕を、じゃなくて俺を睨んでるのかなっ!？」
それにしあって、私に関しての情報収集に抜かりが無いにもほど

があるぞ。

あと、色々知ってて当然みたいな顔で言うんじゃないよ。腹立つなあ。

「で。どこで聞いたの」

「あ、ああ。ついさっき、姉と……会ってさ」

「ああ。なるほど」

そう言えば、アレンのお姉さんは文化祭の役員だつて言ってたな。けど、変だな。

アレンのお姉さんって確か、相手校つつつてたよね。カシミヤ校の文化祭実行委員には何回も会ってるし、顔も覚えてる。でも、相手校の文化祭役員なんて一回も会ったことない。今日の最終打ち合わせを知ってるってことは、少なからず劇の制作に関わってなきやおかしいんだけど。

「お姉さんとはどこで会ったの」

「生徒会室だけど……って、まさか!？」

「会ってみたい。レーアさんつつつたっけ。名前」

アレンがこの顔で、昔の写真があんな感じだから、今頃きつとお姉さんは美人だ。美人に違いない。昔フットサルをやっていたとか前に言ってたし、今はショートの反動でロングかな。片手間気味に気になる。

「よ、用事があるって言ってたし、もう帰ったんじゃないかなあ……!」

「よかった。まだ帰ってないのね。生徒会室ね。行ってみるわー」

「うわーっ! ま、待ってくれー!」

どうしてそんなに頑なにシスコンなのか甚だ気持ち悪いの極みだったけど、今はそんなことよりもお姉さんだ。……自分で言ってる「何言ってるんだ」って笑えてくるよね。

けど、生徒会役員だったらルーの居場所を知っているかもしれないって大義名分もある。

「ふう。やっと出れた……」

先を急ごう。

アレンは気持ち悪いストーカーだけど、嘘はつかないからな。体育館と校舎を繋ぐ渡り廊下をトコトコ歩いて校舎に入る。校舎内の飾りつけは、これでもかかってくらいに力が入っていて、目がちかちかする。白壁には目まぐるしい数の出し物ポスターが隙間なく貼られて、天井からは何かよくわからない物体がぶら下がっている。まさに、異文化交流の祭典。

校舎に入っただけ見えてきたのは、もはや定番のお化け屋敷。なんでも、クオリティが商業顔負けらしくて、人だかりができていた……と、思えば、そんな人だかりは幾つもの、至る所に蔓延っていて、なんかもうわけがわからなかった。

廊下も階段も体育館の出入り口程じゃないにせよ、ひどく混雑しているせいで何となく酸素が薄いような。

そんなわけで、空気を求めて階段を上がって、屋上に出た。

一応、屋上庭園はレストスペースに指定されているみたいだけど、存外眺めが良いという噂でも広がったのか、こんな僻地にも関わらず、うじゃうじゃ人がいる。欄干にずらっと人が並んでいて、電線に集る雀を思わせた。

今朝、ルーを探しに来た時よりも、確実に人が増えている。

あの欄干から、屋台が出ている校庭なんかを眺めたらきつと、想像を絶するような人の海を見ることができんだろう。

屋台は夜通し営業しているみたいだし、夜になれば大玉火花が上がるなんて話も聞く。どんだけ金賭けてんだよってツツコみたくなるのと同時に、これだけの人が集まる理由に頷ける。頷くどころか、頷きすぎて脱帽しそう。

まあでも、今はそんなことに感服している場合じゃない。

逆に、この大勢の人たちを感服させなくちゃいけないんだから。

足早に庭園を後に、屋上渡り廊下を伝って生徒会室に向かう。

事務棟には出し物があまりないし、庭園みたいにベンチが置いてあるわけじゃないからか、こっちにはあまり人がいなかった。おか

げで、事務棟まではスムーズに移動できた。

この部屋も結構見慣れたなあ……、なんてことを私が言うのも変な話だけど、実際かなり来てるな。こんな縁日にまで来るくらいだ。余程生徒会室好きなんだなあ、私は。

「失礼します。入りますー」

コンコンコンと、ノックも中ほどに、多少食い気味でドアを開けるのが私流。

「あ。昨日のおにーさん」

「やあ。リズさん……で、よかったよね。どうしたんだい？ まだ打ち合わせまで時間があるけど」

生徒会室の中はいつも通り、程よく片付いていて文化祭っぽさが無かった。奥の大きめのデスクには見覚えのあるお兄さんが座っていて、急な来客に目をパチパチしていた。

眼鏡をかけていたから、一瞬誰かわからなかったけど、この形容しがたい雰囲気は、間違いなくその人のものだ。物腰柔らかで、しかもなよなよで、それなのに荘厳。一挙手一投足、体中から漂う『ただの男』じゃない感。でも、どこか弄りやすい面持ち。

「レールって言ったっけ。やっぱり誰かに似てるんだよねー。やっぱりルーかなあ。でも、なんか微妙に違うんだよねー。やっ

ま、いいや。

「ルー見てない？」

「ルートさん？ そっか……リズさん、諦めないんだね」

「悪いの？」

「いやいや、そう言うつもりじゃないよ。ただ単に、一人の男として負けたんだなって、しみじみ語ってみただけさ」

「そうなの」

「そういう気障めまなところがルーには無いから、何となく似てない感じがするのかもしれない。

「気取るっていうのは、要するに、自分の長所を周りにひけらかすことだから、良く言っちゃえば『自分のことをよく知っている』っ

てことだ。良い所も、悪い所も。

ルーは、良くも悪くも、自分のことなんて気にかけない。いつも他人優先で、自分は後回し。誰かが幸せになる選択なら、自分の順番を後にしてでも、それを選ぶのがルー。だから、何かの勝ち負けを気にしたりもしないし、結果論に泣くことも無い。

もし仮に、涙を流す理由があるとするならば、それは他人のためか、あるいは自分じゃない“自分”を知った時じゃないだろうか。簡単に言うと、『本当の気持ち』めいたものを感じてしまった時。溜め込んでいたものが、一気に崩壊する時。

もしかしたら今が、“その時”なんじゃないかな。

「それならいいや。別の場所探してくる」

「そうかい。それじゃあ、あまり遅くならないようにお願いするよ。こんなでも、今日は僕が王子様だから。戻って来てくれよ」

適当に返事をしてさっさと帰ろうと思った矢先、用件を一つ思い出してしまったから、「はい」という返答が拍子抜けで、若干空気が浮ついた。

「そういえば、ここにレーアさんって人がいたらしいんだけど」

「レーア……？ どこでその名前を？」

「クラスの男子から聞いたの。その人のお姉ちゃんがレーアって言って、今回の文化祭の役員らしいの。さっきまでここに居たって聞いたから」

「クラスメイト……。ああ、そういうことか」

何か思い当たる節があったのか、酷く落ち着いた笑みを浮かべている。どことなく、引き攣っているような、作られたような、わざとらしい笑みっぽくて不気味だった。

「レーアさんのこと、知ってるの？」

「まあ、知っているよ。でも、もう、ここには来ないよ」

「もう帰っちゃったかー。ちょっと見てみたかったんだけど、仕方ないか」

うんうん頷いていたルール会長さんは、なんとなく安堵している

ようにも見えた。アレンにしるこの人にしろ、皆してレーアさんを隠したがるのには、何か良くない秘密でもあるんだろうか。美人ほど隠したくなるとは聞いたことがあるけど、そんなになのか。

気がかりだけど、今はそれどころじゃない。ルーを探さなきゃ。

朝は一緒に出てきたし、昇降口前までは隣にいたんだ。生徒会室に来ていないとなると、別の場所に潜伏してるんだな。ルーのことだから、絶対帰ったりはしてないはずだ。

「じゃあ、探しに行くから」

「戻って来ておくれよ。お願いだから」

「気は進まないけど」

「その時は、レーアに会わせてあげるから」

そんな取引みたいなやり方は気に食わなかったから、無視して回れ右してやった。

生徒会室を出ると、息つく暇も無く人に出くわす。今日は登場人物が矢継ぎ早に出てくるな。なんかの総集編みたい。

「おっ。リズちゃんだ」

「ルリお姉さん」

「お、お姉さん……っ！ お姉さんの破壊力凄い……っ！ ぐっ、死ぬ……」

心臓を射抜かれたみたいなりアクションをとってその場に倒れ込んでしまった。なんだかめんどくさい空気だったけど、とりあえず、「大丈夫ですか？」と肩を貸してあげた。「大丈夫大丈夫」とか言いながら起き上がったけど、息遣いは正常者のそれじゃなかった。

アカデミーって、やっぱり変な人ばかりだな。

「はあ、はあ……。……どうしたの。生徒会室に用でもあった？」

「えっと。ちよつとだけ、です」

私が生徒会室の扉の前に立っていたせいで、ルリ姉さんの進路を妨げてるみたいになっていた。なので、半歩ほど横に移動してさりげなく道を開けてみる。そしたら、ルリ姉さんも私と同じ方向にずれてきた。意味無いじゃん。

駄弁る時は向き合って、みたいな一家言でもあるのかな。

「そっかー……あ。もしかして、ルートくん？」

「え？」

生徒会室に来てただけなのにどうしてそうなるんだろうなって、単純に不思議だった。

「あれ？ 違う？」

「ううん。そう。けど、なんでわかったの？」

「リズちゃん、いつもルートくんのこと気にしてるっばいから。」

リズちゃん、ルートくんのこと大好きだもんねー」

「そ、そんなんじゃないもん」

「可愛いなー。リズちゃん。構いたくなるなー。うちに欲しいなー」

熱くなつたほっぺを指でつつつかれる。なんか珍しい生き物をつつくみたいな感じで。お母さんの友達に撮まれたりすることはあつたけど、初めてやられたよそれは。

「行かないですー」

「ああん冷たい。ルートくんと同じくらいワタシのことも気にかけてー」

まあ、ルリ姉さんの言う通り大好きで、気にかけてるのは確かなんだよな。そんなに顔に出してたつもりはないけどなあ。でも、考えてみれば、しょっちゅうルルー言つてた気もするな。

そんなに求めてたんだなあ、私。ちよつと恥ずかしい。

「あ。それなんですけど。実はルー、いなかったんです。ルリオ姉さん、何か知らない？」

「うぐっ……。お姉さんの破」

「え。まだやるの？」

また変なりアクションに入りそうだったから、直前で止めた。丁寧語を考えている暇が無かったおかげで、ぶつきらぼうになつたけど、あれ見てるの、結構時間かかるんだよね。

「ちよ、そんな目で見ないで！ しょうがないじゃん！ 結構ね、こう、来るものがあるんだよ！ ……ああ、ますます憐れみの目に

……！」

「だってー……」

「わかったよ！ お姉ちゃん、我慢するから！」

「わ、わーい？」

よくわかんないけど、喜ぶところなのかな。

「ルートくんとは、今朝、生徒会室で会ってそれっきりだなー。やつぱり、本番前で緊張してるみたいで、表情が強張ってたから、マッサージをちよちよっとね……」

「そしたら？」

「痛がって出て行っちゃったんだよねー」

「んもー！ それじゃ、ルリお姉さんが悪いんじゃない？」

「待って待って！ まだ続きがあるんだよ！ 出て行っちゃったんだけど、すぐ戻って来たんだよ。ホントすぐだよ。もうね、七秒くらい」

「早いですね。何かあったんですか？」

「レイル君が廊下にいたらしくて。レイル君がルートくんに用事あるからって言って、一緒にすぐ戻って来たよ。あ。レイル君って、私の彼」

「生徒会長さんだよ。それくらいは知ってるよ」

あれ？ この前自己紹介みたいなことしたような気が……ああ。そう言えばルリ姉さん、気絶してたっけ。なんで気絶したんだろう。溢れ出る私の魅力に心を奪われたのか。

……ふう。まあいいや。

「それで。それからルーは生徒会室にいたんですか？」

「そうだよ。ワタシがついさつき職員室に出かけるまではいた。ルートくんがどこか行っただとしたら、その間だね」

まあ、代役候補の人と同室なんて気まずいもんね。ルリ姉さんが席を外してからというタイミングも、なんかルーらしい感じがする。ルリ姉さんに気を遣わせるのも良くないとも考えたんじゃないかな。

良かった。それなら、まだその辺をうろついているかもしれないね。表情が強張ってたらしいし、人のいない所で考え事でもしてそう。

……あー。思い浮かぶなー。

でも、文化祭中でも人のいない場所。どこかあるかな。来訪者みたいな外部の人は勿論、この学校の生徒でも知らないような、隠れ休憩所みたいななんかそういうアレは。

「ルリオ姉さん。人が少なそうな場所ってありますか？」

「人が少なそうな場所？ 今日？ うーん、そうだなあ……。学校のほとんどの教室を解放してるし、お客さんも二万人くらいは来るみたいだからなあ……」

「ほとんどってことは、空いてない教室もあるの？」

「教室は、職員室と校長室、出し物準備部屋、そしてここ生徒会室以外はフルオープンだよー。保健室も、今日だけ増員して医務室として稼働してるね。あと、教室じゃないけど、体育館のギャラリート、屋上庭園下の渡り廊下は立ち入り禁止にしてあるよ。そっちはいつも立ち入り禁止だけどね」

「屋上庭園……？ あ。あそこって立ち入り禁止だったんですね。

ポスターとか色々貼ってあったから、普通に入っているとまってましたー。あはははは！」

「はははははっ！ そっかそっかー………ああ！？ ポスターだよ！？ 聞き捨てならん！ あそこは平常時から立ち入り禁止のはずだぞー！」

なんか急に怒り出したぞ。腐っても生徒会長は生徒会長なんだなあ。

一回だけぶんすこー、って地団駄を踏んだと思ったら、私の横を通ってどこかに行こうとしていた。

「あ。ルリオ姉さん。どこ行くの？」

「行って確かめてくる。校則違反は許されんのだよ」

「私も行くー」

「そうかそうか。なればついてくるがよい」

ルリオ姉さんって、一個一個のネタが長いよね。私は同じポケをずっと続けるなんて怖くてできないよ。みんなも飽きちゃうしさー。そういうところは尊敬するなー。

それはおいといて。

屋上庭園の下のところか。確かにあそこは知る人ぞ知るって雰囲気出てるし、まさにルーが好きそうな廃墟感。それは偏見か。

生徒会室からなら、屋上渡り廊下を伝ってアーティス棟に直通なので、割と遠くない。ただ、休憩してる人たちの目につかないようにするのに、一度屋上庭園からアーティス棟に入って、それから階段の踊り場の隠し扉を抜ける手順を踏んだ。

「うわっ。マジか。かなり貼ってあるな……。立ち入り禁止って書いてあんだけどなー。これは管理体制見直さないといけないなー」

「……………」

ポスターだけじゃなくて、文化祭の道具の片鱗的な何かも床に散在してる感じからして、立ち入り禁止の意識は相当低いみたい。私が前に来た時よりもポスター増えてるし。

「しかし……。宣伝ポスターを貼るとは、愚かよのう。クラスが丸わかりではないか！ ふはははははっ！ さっそく剥がしてやっか！ ちよつと手伝ってくれるかな、リズちゃん」

「……………」

私は別にポスターを探しに来たわけじゃないんだけど。

「リズちゃん……？」

「ルリオ姉さん……」

「えっ？ なになににどうしたのー。よしよし」

別に泣くつもりなんてなかったけど、なんか色々溢れてきて。任された大役を担えそうもない事とか、大好きな人に裏切られたこととか、思い通りにならない事とか、ホント色々。

ここにならいてくれると思ったのにいない。ここしかないと思っ
ていたのに、いなかった。

私の妹としての自負が、全部勘違いで終わってしまうようで、捨

てられてしまうみたいで、怖かった。どうしていいかわからなくて、近くにあった適当なものにしがみついてしまった。

「お姉ちゃん……」

「ああ可愛い……っ！　やばいなこれ。なんか良い匂いするし。はっ！　ワタシってまさか、そっちの人！？　待て待て待て。私はちゃんと、レイル君が好きだぞ。……でも、それって、顔が良いから、『かっこいい！』ってなってるだけで、『かわいい！』ってなるのと本質的には同じなんじゃ……？」

不意に縋った小枝は頼りないかもしれないけど、それでもいけると落ち着くし、私の心の支えにはなってくれる。たとえ偽物のそれだとしても、私のために萎れてくれることなんてきつとない。

代わりの利かない本物ほど儂いものなんてない。

それは一人の人間の夢も同じなんだ。

私はそれが壊れる瞬間を、目の前で、見たことがある。そうして人は泣くし、変わる。変わるための綺麗な涙なんだって、そう言って立ち直る人も、きつといる。誰かが笑ってくれているならって、そう言って逃げる人もいる。

でも、痛いよ。痛いんだよ。私だって。償いの形を考える人生なんて、嫌だよ。

だってそんなの、好きになっちゃうに決まってるじゃん。

もっとちゃんと好きになりたかったよ。間違ってもいいから。

もっとちゃんと、好きになって欲しかったよ。正しくなんか、なくっていいから。

「お姉ちゃん……」

私と。(後書き)

【あとがき】

人は誰かを傷つける時、その人のことを考えます。

人は誰かに謝る時、その人のことを考えます。

人は誰かを好きになる時、その人のことを考えます。

きつと、そういう感情には色々似ているところがあって、それでいて少しだけ違う感情なのだと思います。そういう意味では、感情って、どこかDNAとかの繋がりと似てます。

DNAには間違いなんてないけれど、やっぱりマジョリティとマイノリティがあります。あることができる人とできない人がいますからね。

でも、それでいいんだと思います。

べたですけど、支え合うことができるのって、みんなが同じ「DNA」とか「気持ち(量的な)」を持っているからなんだと思うんです。

そんなことを考えながら、物語はクライマックスへ向かいます。

次回です。

『Right Who's Stomach?』 (前書)

【まえがき】

“身も心も砕けてしまっしょ”

【right】Who's "Stomach" ?

掃除、掃除、掃除、また掃除。終わったかと思えば、掃除。これよりも前にしていたことを思い出せない。それすらもはや、掃除な気がしてくる。

それが、紛れもない私の人生だった。

何度やってもダメ出しをされる私の掃除と違って、そればかりは絶対であった。

今日もまた掃除か、という言葉には語弊がある。

私の中には、今日も明日も昨日も無いからだ。掃除が私の過去であり、未来であるから、時系列という概念は必然的に価値を失う。

簡単に言えば、年を数えるだけ無駄だと言う事。

それは当然のこと。

私の誕生日を知っている人物も、それを祝ってくれる人物も、もうこの世にはいないからだ。私の誕生日には、私は掃除をするのだ。私が生きていることに、私は感謝をして、私は私のために、床を磨くことに精を尽くす。

だから、きつと私はもう、やめろと言われてもやめられない。

やめる理由など、この屋敷へ来てから一度も考えたことがない。

そういう概念は私の中にあるのに、どうしてやめなければいけないのか全く分からない。嫌なはずなのに、やめることができない。

そういうわけで、私の手は、日照る夏で痙攣けいれんしようとして、凍える冬で悴かじもうとも、休まない。

布切れ一枚身に纏って、私は床を磨いて汚すしかない。

休んだら、私の人生は終わってしまうから。

「それじゃあ、私^{わたくし}たちは城へ行ってくるわね」

「しつかり綺麗にしておくんだぞ。屋敷中、くまなくだ。もし汚れが残っていたら……どうなるか、わかるだろう？」

私は頷く。

「そうよねえ。当然よ。それじゃあ行きましょ」

「ああ。そうするか」

私をおいて屋敷を出ていくのは、この屋敷の主人夫妻だ。

私は発言と拒否の許可を貰っていないので、基本的には都合の良いように頷くことしかできない。言葉を失っているわけではないけれど、最近は、発音の仕方がたまに怪しくなる。

だから、こうして二人が外出するタイミングで、言葉の練習をする。ただ一つの救いは、手を動かしながらでも、言葉は操れると言
う事。

「お、しろ……」

二人の言っていた、城というのはおそらく、街外れにあると言う古城のことだろう。二人の話を立ち聞いてしまった限りでは、何でも、お金という価値のある何かをたくさん所有している人物が住んでいるらしい。

あの二人と似たような人物なのだろうと、勝手に想像が膨らむ。

自然、悪いイメージしか浮かんでこない。

私とて、痛いとか苦しいとかは理解^{わか}る。

主人の方が言っていた、「掃除ができていなかったら処罰を与え
る」というのは建前で、「処罰を与えるから掃除をしなければなら
ない」というのが実情なのだ。

裸にされるのはとくに慣れたが、平手は応える。色々なところ
を抓られるのも痛いし、何よりも縛られるのが嫌だった。唯一の自
由である身動きさえ封じられてしまうのが、堪らなく苦痛になる。

本当の自由など知らぬ身なはずなのに、皮肉なものだ。

そうして一日が過ぎるのを、ただただ待った。

二人がいない時は大概、付き人たちも一緒にいなくなる。

恰幅の良い料理人や髭を伸ばした執事、白と黒のメイド服を着た本物のメイドなど、それは複数いた。

だから、二人が不在の間は、私は何も口にすることができないということになる。例え主人方の食べ零しだろうと、端材やメイドのまかないの残飯であろうとも、それは私の食糧であったから。

加えて、お仕置き以外で家の外に出ることを許されない私は、雑草を食べて空腹を満たしたり庭の池の水を飲んで喉を潤したりすることも不可能だ。無論、屋敷の中にあるものには触れることすら叶わない。私が触れていいものは、身に付けている薄い布切れと床を拭く雑巾、それから壁や床だけだった。

主人が出かけることは過去に何度があったが、回数や頻度までは覚えていない。ただ、夏に小旅行へ行ってしまった時のことは、脱水症状に陥ったことが印象深く、鮮明に記憶している。

あの時は、体に力が入らなくて廊下で往生してしまったのだ。その後、奥様に悲鳴を上げられて、幸か不幸か主人に庭の池に放られたのだ。陸に上がってすぐ水を吐いてしまったが、それはそれは潤った。目から溢れるくらいには。

それさえなければ、二人が外出する瞬間という事変は、息を抜くことができる好機になったかもしれない。

いつの間にか、また一日が過ぎていた。

楽しいを、楽しいのまままでいられることが 夢が、夢のまま続いていくことが、どれだけ幸せか、考えたことも無かった。

そして、周囲から笑顔が消えた時、わたしの居場所が無くなるなんてことも、考えることは無かった。

勝利を手にしたわたしは、栄光すらものにして、ただただ立ち尽くす。

「全国大会優勝だ！ やったな！ やったな……」

「よかったじゃないか！ MVPだなんて！ 父さんは嬉しいぞ！」
それで喜ぶことは、結果として敗北者を嘲ることと同義なのかもしれない。自分の持てるすべてを賭けてぶつかって来た、あの子を笑うことと。

わたしが手にした勝利はつまり敗北を生むことで、相手が泣くこととはつまり自分たちの笑顔を生むことなのだ。笑顔にも代償が必要なのだ。

試合中は「楽しい」だけで、自分は笑顔であるはずだし、恐れられることはあってもそれが誰かを泣かせることはない。それなのに試合が終わった途端、ゴールを相手よりも多く決めた途端、手に入れた得点と栄光の分だけ、誰かが涙を流す。

当たり前のことだ。

当たり前のことなのに。

わたしはそれを、受け入れられそうもない。

二日が過ぎた夜、私は不審に思った。あるいは、心を決めた。

このままでは確実に餓死してしまうということは、頭よりも体が

わかつていようで。雑巾を持つ手に力が入らないし、足の裏の感覚が鈍い。目は乾くし、なんだか無性に眠い。

そう言えば、蝸ひぐちが夕方一頻り喚こゑいていた。

気付かぬうちに汗をかいているだろうし、すでに空腹であることは明白だ。ということは、水分も養分も足りていない。日頃から腹が膨れるほど食しているならまだしも、未だに「食べた」と実感できると物を口にしたことすらない私にとって、これは由々しき事態。

満たされていると言う感覚はないものの、不可思議な事に苦しくはなかつたが。

以前、死ぬ前は一層楽になれると言う話を、主人からお仕置されている時に聞いたが、あれは本当なのかもしれない。

今ならわかる。

あの二人は「屋敷が汚いままだ」と嘘を言っていて、私はそれに騙され続けていたということが。確かに私は汚いのもかもしれないが、屋敷は綺麗なのだ。綺麗なものをいくら綺麗にしたところで、結果は同じ。

私はずっと、無意味な事を続けていたのだ。

掃除をすることだけが私の生きていく意味なのだと、勝手に決めつけていたのは、他でもない私なのだ。生きることは苦しいことだから、それは仕方のないことなのだと目を瞑っていた私の罪。

ご主人様たちは、そのことに気づかせるために私を痛めつけ、辱め、そして今日突き放したのかもしれない。すべては私のために。

思えば、あの二人が私を捨てた本当の理由はなんなのだろう。

私の親は、私が物心つく前に死んだことは聞かされて知っている。吹けば飛ぶような下の下ほどの百姓だったらしい。

そんなゴミのような存在をわざわざ拾って育てるなど、相当な偏屈か、それこそ何かの理由があるとしたか考えられないのだ。放っておけば、直まじ、私はのたれ死んだだろうし、それで誰かが咎められることも無かつただろうに。

だが、もし仮に、誰かが咎められることがあるとするなら。
例えば、この屋敷の主人が私の親を殺した場合。

「……………」
怒りも悲しみも、私にはもはや何もない。

第一に、私は親の顔を知らないし、この屋敷の外に出たことが無いから、この屋敷で必要な無感情だけ持っていれば生きていける。
否、生きていった。

何にせよ、私は生きているのだ。年齢、十五を数える程に、生かされてきたのだ。

酷い仕打ちを受けてきたと言えば、それまでだ。私の人生は、それで終わる。

しかし、私は生きていたし、生きている。

これはもしかしたら、神が私にくれた、チャンスなのかもしれない。

決めていいはずの無い生存価値を勝手に決めた罪を、償うための。
そして、二人の犯した罪を、裁くための。

「……………っ！」

私は、ここにいてはいけない。このまま命を終わらせてはいけない。歩かなければ、走らなければいけない。見なければいけない。聞かなければいけない。知らなければいけない。伝えなければいけない。

何も知らないから。

玄関の扉がこんなにも重いことを、知らなかった。拝借した夫人のローファーがびつたりサイズのサイズになっていたらと、知らなかった。外は屋敷の中よりも幾分か涼しいのだと、知らなかった。それでも太陽は等しく私を灼くのだと、知らなかった。

何も知らなかった。けれど、知った。知らなければ、生きてはゆけないから。

そつだ。生きていくのだ。生きなければいけないのだ。この世界で、私は。

こうして私は、屋敷の外へ。深い深い、闇の樹林へと進んでゆく。立ち止まれば私は死ぬ。故に走れ。

今度は、生きることが私の生きる意味。

「楽しい」が続くこと。

それはまさに、わたしが願っていたことだった。

父と母は、「新しい」をわたしにくれたが、それらはすぐに「新しかった」に変わった。

初めはわからないことだらけで、それを紐解いていくのが、楽しくて。程度の差はあれど、その謎は一段階二段階と、常に幾つか存在する。それが多ければ多いほど「新しい」は続いて、結果として「楽しい」ことになる。

元々運動が好きだったから、運動系の競技を筆頭に、手芸だったりとか料理だったりとか、絵画も習ってみたりした。与えられたものだけではなくて、自分でも、興味を持ったことについてはとことん調べたし、詳しい人に聞いたりもした。

本当に色々なものを教えてもらったと思う。

それでもやはり、じっくりくるものは無かった。

ずっと続けてきた登山と、それに付随している天体観測は、もはや日常の一部だと言っても過言ではない。楽しくないことはないけれど、自分の心に強く響くかと言ったら、それもまた違った。

そんな中出会うのがサッカーだと言うのだから、私は少しばかり可笑しいな と思った。そして、同時に 運命なのだな とも皮肉った。

自分の興味が、いわゆる“普通”のそれではないことには薄々気付いていたが、ここまで来て何かに当たるとは思いもしない。

でも、そこからは早かった。

自と他との差を埋めるのは、わたしの持つ才能だった。見渡せば、そこかしこに「新しい」が落つちちていて、わたしはそれを見つけて自分のものにするだけでよかった。結果として、それは「楽しい」わけだし、何よりも周りの人が喜んでくれた。

そうやって、落ちているものを拾って繋げて切り捨てていたら、いつの間にか一番になっていた。全てを賭して戦ってくれた子よりも自分の方が格上だという事実が、わたしの目の前に蕭々しやうしやうと雑に転がっていた。

「まずは優勝おめでとうございます」

「ありがとうございます」

コーチと、それからわたしと父が、フィールド中央に設置された表彰台の下で大会の組織委員会の話を聞いていた。

静かになったフィールドはやけに涼しく、若干の寂莫の念さえ感じました。

組織委員会の男性は淡々とした口調でコーチに説明していくが、事務的かつ早口で理解できない部分も多い。後半の方は右耳から入って、そのまま右耳から出て行った。

「MVPの副賞として、選手育成学校の入学費用免除、並びに近接している学校寮への入居費用も免除されます。世界大会に選出されるメンバーも、数多く輩出しているサッカー界では超名門の男子校ですので、是非ともご一考ください。答えはすでに決まっています、と思いますが」

「はい。ありがとうございます。こちらの親御さんと、それから……お子さんとで、話し合ってみますので、少々時間を……」

「わかりました。どうぞ」

わたしたちに背を向けていたコーチは、振り向いてまず、わたしを褒めた。それは難しくないのです、わかった。

「よかったな！ 一番だぞ！」

父も続いてわたしを褒め、頭を撫でた。

「おお。頑張ってたからな。やっぱり上手だったよ。カッコよかった」

普段、あまり撫でられることが無いからか、どこかくすぐつたい気持ちがあつて、誰かに見られる前に早く終わらせたかった。

「ねえ。これで毎日サッカーできる？」

コーチに問うた。

「あ、ああ。強い気持ちを持っていれば、できるとも……！」

それはわたしではなく、サッカーという競技そのものに対しての確認作業になる。わたしにとる「新しい」を、その競技は生産し続けられるかというところだ。

答えは、コーチの表情を見ればわかった。

自然と、涙が零れた。

「や、やったあ……っ、嬉しいよあ……」

父が撫でてくれているからか、コーチが見ているからか、はたまたフィールドにいるからか、あくまでわたしは気丈たり得ていた。

視界も朧に霞んできて、わたしは比較的泥のついていない左腕で顔を擦る。それでも泥はついていて、擦っている拍子に口に入った。すぐに摘^{つま}んで取り出したが、ジャリっ、という一瞬の不快感は強烈にわたしの中に取り込まれた。

「うわああああん……！！」

涙は止まらなかつた。

代わりに、誰かが笑顔になっていれば、いいのだけれど。

暗黒の樹林は延々と続いて、進んだのか戻ったのかもわからない

ままに夜は更けていった。

でも、私は足を止めようとはしなかった。休んだり、振り返ったりもしなかった。とりあえずの目標である城まで、文字通り闇雲に突き進んだ。方角も、城がどんなものかも、知らないけれど。

太陽と同じで月もまた、私を照らしてくれたから。

報いなければなるまい。生きなければなるまい。

その一心で、ただただ奔った。

暫くして。風景が変わらないことと、樹林の絶望的な広大さを、知ろうかという頃。

木のシルエツトの間に見えたのは、樹林の中に存在するには異質すぎる物体。それは黒々としていて大きく、人型をしていた。樹林には植物しかないのだと知る矢先だった。

それが動き出すとは誰も、知る由無い。

「お腹は空いていないかい？」

突然のことですぐに対応できなかった私は、後退する足を何かに蹴躓いて尻もちをついた。布切れ一枚しか纏っていない私には、酷く効いた。

「……っ！」

どうしたことだろう。黒い物体が少しずつ私に近づいてくる。樹林の闇よりも遙かに黒く、距離を詰められるほどに、身も心も飲み込まれそうな気がしてくる。

そして、また。

「お腹は空いていないかい？」

使い古されてしわがれたような、それでいて作られたばかりのように真新しい声色だ。

どうやらそれは、喋るらしい。

恐る恐る上目を使ってみれば、そこにあつたのは黒いローブからひよっこりと飛び出した女性の顔だった。輪郭が男性のそれとは明らかに異なっていたのでわかった。しかし、表情は読み取れず、笑っているとも怒っているともとれた。

お化けではないとわかって安心した私は、尻のごみを払って、その女性と視線の高さを合わせた。何せ低かったのだ。

凝視していると、また女性が言った。

「お腹は空いていないかい？」

そればかりだった。

無視して歩こうにも、ゆっくりと後ろを尾行けられる予感がして不穩でならなかった。答えるまでどこまでもついてくるような、そんな闇の深さ。

“今日”という日のことを 決心の日である今日のことを、少しだけ考える。

なぜかはわからないが、その女性は悪い人ではない気がしてきた。今まで生きてきて、そんな優しい言葉をかけてもらったことが無いから、錯覚かもしれないのだが。

女性の言葉通りに空腹だった私にとって、選択肢は二つに一つだった。

「……………」

私が頷くと、女性の表情がゆっくりと笑顔に変わった。その笑顔は少し不自然なくらい、私の心を落ち着かせた。

「これをお食べ」

違うことを話したかと思えば、今度はローブの中腹あたりから白くて細長い腕が出てきた。

その手には赤々とした球体が収められていて、仄かに甘い匂いを漂わせていた。

「リンゴだよ。知らないかい？」

私は頷く。

何度か見たことはあって、食べられるものだとは知っていたが、リンゴという名前までは知らなかった。知らないことを知れたというのも含めて、私は嬉しかった。

自棄ギリギリの勇氣にかまけてリンゴを受け取り、じっと見つめた。

大層赤かった。

赤くて、良い匂いがした。良い匂いがして、食べてみたくなった。食べてみたくなったが、食べなかった。食べられなかった。

「おや？ 食べないのかい？」

「……………」

私は頷く。

私が今まで食べてきたものは、調理の過程で出た食材の端や縁。良い時で、主人が机に食べ零した料理だった。

だから、私は誰も手を付けていない食べ物を食べられなかった。自分に食べられるために、そのリンゴは赤く色づいたわけではないのだと、知ってしまったから。

俯くと、また漆黒のローブから出た白い腕が伸びてきた。リンゴと同じく甘い匂いを漂わせた御手は、そのまま私の髪を梳いた。印象と行為がかけ離れ過ぎていて、沈黙した。

その静寂たるや、樹林の呻きが聞こえる程に。

「可哀想に……。命令が無ければ食べることもできないなんて……………」

まさにその通りだった。

こうして屋敷を抜け出した今も、忘れろと命令された自分の声を思い出すことはなかったのだ。

そんな私に、黒ローブの女性は言うのだ。

「あの屋敷を抜け出したのは、お前の意志だろうか？」

思い出せ、と。

「食べるとは言わない。だが、食べるのなら、一つ頼みを聞いてはくれないか」

私は目で答えた。

「ここから南に歩いたところに大きなお城がある。今、そこでは舞踏会が執り行われている」

今行われていると聞いて、私はハツとした。

主人が帰ってこなかったのは当然として、舞踏会がそこまで長い

間開催されているものではないはずだからだ。基本的には、何かの記念であったりとか季節の節目であったりとか、短期間で限定的に行うものはずなのだ。私の知る限りでは。

お城で何かが起きていると言うのは自明だった。

黒ローブの女性は堂々と続けた。

「本物の王子様は偽の王子様に匿われているわ」

黒ローブの女性がそう言うと、もう一方の腕が、逆側から生えてきた。手には、やはり赤々としたリンゴが握られていて、甘い香りを漂わせていた。

私はそれを受け取って、思わず息を飲んだ。

『え、どうしたの？』

黒ローブの女性は、一体何を言っているのだろうか。物語から、逸脱しているにもほどがあるではないか。

私は、声にできない焦燥を、必死に伝えようと眼に力を入れた。

想いが届いたのか、黒ローブの女性は私に耳打ちするかのようになり、本当に小さな声で囁くのがあった。

『囚われのお姫様は生徒会室よ。早く行きなさい』

「……………っ!？」

一気に飛び出しそうになる疑問符を、全力で抑え込むので精一杯になる。何か滞ってしまったのではと、気が気ではなくなる。もともとセリフが無いことだけが救いか。

段取り通り黙っていると、黒ローブの女性は何事も無かったように繋げた。

「そうかい。ありがとう。頼んだよ。それじゃあね」

私は遅ればせながらに頷いた。

『王子様は偽の王子様に匿われて』いて、『囚われのお姫様は生徒

会室に』いる。

そういうことか。

黒ローブの女性の言葉に背中を押されて、私はまた走り出す。覚えたての方角へ向かって。着実に、でも確実に。

「……………」

ふと、私は立ち止まり、生まれて初めて後ろを振り返る。

そこに女性の姿はなく、あったのは木の枝に引っかかって風に靡く黒色の布切れだけだった。聞こえるのは古された優しい声などではなく、不規則に頬を切り裂く冷めた風の戦ぎと樹林のどよめき。けれど過去は確かにそこにいて、私をしんと凝視していた。それについて何か凄いいことができるわけもないが、心を蝕まれぬよう見詰め返すことはできた。

手にした赤い木の実に仰々しく齧り付いて、噛み碎いて、飲んで吐き出しそうになるのを堪えて、それを繰り返す。回数とは言え、今までにさせられたこと。してきた前科と比べれば塵のようなものだった。

しかし、そうして生かされた幾数年をいくら思い返しても、リンゴの一齧り一齧りの方が、遥かに有意義に思えた。

生きていた。

生かされているのではなく、自分で。確かに、そう感じていた。

食べ終えたところで、私は思い出す。

「ありがとう」

その声は誰もいない樹林に、空ろに響いてすぐ消えたが、私の意志は確かに私自身に刻まれた。あるいは、遠い過去に刻まれていたものが、痛々しく蘇ってきた感じか。

根拠はないが、確かに、私の声は誰かの耳に届いているのだろう。

冷たい風に乗ってでも、物言わぬ木々を伝ってでも、静かに眠る小動物の生き方に倣ならってでも。

それこそ誰も聞いていなくなたって。

『ありがとうアリスお姉ちゃん。なんで知ってるのか、知らないけど』

覚えた表情は、私自身にすらそう思わせるようで、それでいて、私たり得ていない。それどころか、的を外している。

私は、それを覚える必要は無いのだから。

そうして急いで樹林を抜けると、そこにはページ数を間違えた王様と無関係の一読者がいて、何事かという顔で語りかけてくるのだった。

「りずよ。そんなに急いでどうしたのじゃ？ 出番は暫く無いじゃろ」

「大変なの……っ」

「り、リズ！ な、なんて大胆な恰好……！ 布一枚なんて、僕……じゃなくて、俺はなんてコメントすればいいんだ……っ！ 可愛いのは当たり前だけど、それは決して似合っつてると言う意味ではなくて」

「アレんうるさいっ」

「っごめん!？」

「どうどう。そう騒ぐでない。体育館の中に聞こえてしまうじゃろが。それと、服着るのじゃ。ほれ、わしの脱ぎ立てはやはやじゃぞ」
王様がそう言うと、赤ローブの中からアカデミーの制服スカートと体操着的な白ティーが出てきた。林檎の匂いはしなかったけど、ちよっただけ甘い、良い匂いはした。

言われてみれば、さすがに布切れ一枚で文化祭を徘徊するのは、臍長けた女優魂でもない限りは厳しいな。一応、下は履いてるけどね。

厚意に甘えて、スカートと白ティーを着る。悪いことをしているわけじゃないけど、人の服を着るのってなんかこそばゆい感じがする。それも、こんな公然の場を借りてだし。

まあ、今はそんなことも言ってもらえないかな。

「ありがと桜さん。意外と丈長いんだね」

「深情けじゃ！……それで、一体何があつたんじゃ」

「あ、うんっ！ それは……わからないんだけど……」

それは私も知らない。

だけど、とにかく走らなくちゃいけない気がするのだ。

そんな感情こそ、まさに王子様であるような気も、しないでほしいけど。

前のめり気味に軽く足踏みしながら、私は言う。

「そっ、それが……。んーと……、とにかく！！ 王子様がつ、じやなくてお姫様……でもなくて……。えっと、その……」

「なんじゃ」「えっ、なにになに!？」

「ルーが」

思えば、大切な言葉を封じてきたのは、他でもない私自身だった。罪の意識からそうしてきたけれど、そもそもそれが間違いだったのかもしれない。小さいことかもしれないけれど、確かにそれは重要な歯車で、私の心とお姫様の心を繋ぐ架け橋のようなことでもあるのだ。

劇の主人公の衣装を纏って、主人公の気持ちに触れて、わかった気がする。

私、知ってるんだよ。

ルーの気持ち。

「私のお姉ちゃんが、大変なのっ！」

だって、私、好きだもん。
お姉ちゃんのこと。

物語にする価値などない。

けれど、見世物でもない。ましてや偽物でもない。

ただ、わたしの目の前にあって、きつと誰の心にもあるはずの真
っ白な気持ち。

誰かの幸せを願って、わたしも幸せになれるような、夢のような
お話。

生きている限りは、例え間違っていて、続けることができる。

『Right』Who's "Stomach" ? (後書き)

【あとがき】

ここまできて、とうとうルーモスの意味のヒントでした。

さて。

一応、ここまででルーモスの主要登場人物は全員登場したことになります。

入れ替わり立ち替わりということもないですが、話にだけ出てきたりという人はいると思いますが、こんなところでしよう。

そこで、ここまで読んでく出さった皆様のために、フルネームを表記してみることになります。

誰得って感じですね。はい。

ルート

Loote=Q=Ueer きょーしゅーる

リズ

Rize=Q=Ueer りずーしゅーる

アリス

Aryss ありす Naibs ないぶす

ノア

Noah のあ Greenwitch ぐりんいち

サクラ

Sakura さくら Misaki みさき

アレン

Alien あれん White ほわいと

レイル

Lair れいる Eiwth えいわす

ルリ

Ruri るり Lillium りりあむ

レーア

Lair れーあ White ほわいと

結構名前は大事にされていて、深い意味はありませんと言ったらそれはウソになってしまいます。色々勉強している人はわかるかもしれませんが、たくさんメッセージが込められているので、是非読み取ってみてください。

R o u t e M o s t M a k e (前書き)

【まえがき】

いつもより少し長めです。

ゆっくり整理しながら読んでみてください。

Route Most Make

納得のいくまで生まれ直せればいいなと思つたことは、思案の外少ない。

どちらを選択するにしても、不自由は必ずあるし、選択しなかつた方と優劣がついてしまふと思つからだ。結果論の通用しない修正無制限下であつたとして、果たしてそれは、論じるに値するテーマなのかと疑問視もできる。

仮に、宇宙的な確率で瞭然の優劣がつくとする。

それで宇宙の仕組みが変わるかどうかなど、明々白白、言を俟たない。

しかし、多少げんがくてき術学的に語つたところで人間は人間たり得ている。狎なれ、驕おこり、嘯うそがく。それこそが、自己を自己たり得るものへと変貌させ、やがては“僕”や“私”、あるいは“わたし”であるとか、そういうものに膠着する。

誰しもがそれを、そういうものであると理解し、そういうものであると納得し、そういうものであると受容している。

だからこそ、人は笑うことができる。

そういう感情的な結論に辿り着く以上は、これはただの空事ではない。自然主義のような学問と逆に、変に利己的でないから良いのかもしれないが。

僕か、私か。

どちらかを選ばなければいけないとするなら、どちらを選ぶだろう。

重量挙げで世界一を目指したい、子供が欲しい、可愛らしくおめかししたいのように、目的が決まっているとすれば、話は早い。早いのだが、それは不可能だ。不可能どころか、それは人道的でない。生まれつき目的が決まっているのなら、それは道具と同じなのだから。

掃除をさせられるために生まれたとか、子孫を繁栄させるためにだけ生まれたとか。そんなものは、僕だろうと私だろうと願いたい下げだ。

ともすれば、目的もわからないまま、取捨選択をしなければいけないということになる。

どちらかを捨てて、どちらかを取る。どちらかを笑顔にして、どちらかは泣かせてしまおうということ。得てして、一つの疑問が浮かぶ。

果たして、選んでいいのだろうか。

話は最初に戻るが、結局のところ『論じるに値しない』が正解と
言う事になる。そうして誰もが平等を手に入れるわけだから、なに
という事はない。仮に、不当だと主張するのであればそれは、明らか
に傲慢である。

そのことに気付けたとて、人間は論じる。
そういう生き物だ。

生きているから、死者を厭うということ。それもまた同じこと。
議論の必要のないことを、わざわざ話にする。死者は満足したりし
ないから、結局は、生きている側の都合になる。でも、だからと言
って、無下にもしない。

そうやって人は続いてきたわけだから、これからもそうあるべき
なのだろうと思う。

それが正しいことであるとか、それ以前の話。有無を言わせず、
そうした柵しかいみの中に人は生まれるのだから。だからこそ、平等である

と言えるのだから。

それなのに、私は今日、“私”でいいと思った。

「君は聡明だ」

「……………くっ。ど、ど……………してっ、こんなこと……………っ！」

縄で後ろ手に腕を縛られて、足首も椅子の脚に、僕は座らされていた。

縛る順序がどうであったとか、どういう経緯でこういう状況に至ったかは思い出せない。まるで、その記憶だけ綺麗に抜き取られたように無い。そればかりか、体が火照っていて気怠い。眠くも無いのに瞼は重いし、あらゆる感覚が鈍磨しているようだ。

顔を上げる気力も無くて俯いているうえに、目が霞んで良く見えないけれど、誰かしらが見張っているらしいし、もはや、脱出は不可能だ。

少なくとも、外から誰かが助けに来てくれなければ。

「君は聡明だ。だから、覚えているだろう、僕のことを」
「僕……………？」

感覚が鈍っているせいでわずかにしかわからなかったけれど、どうやら、頬を触られたらしい。若干の温かさが頬を撫でた後、僕の視界は唐突に開けた。

「え……………っ」

そこにあっただのは、他でもないレイル生徒会長の顔だった。この状況だということにも関わらず、一瞬だったが、安堵した。慣れだろ
うか。

「レ、レイル……………会長……………？」

「違うよ」

安堵はすぐに、驚愕と焦燥に変わった。慣れから逸脱したのだから当然かもしれない。

レイル会長でないのならば、一体誰なのだろう。籠って聞こえる声も、ぼやける輪郭も、どことなく身に覚えがあるのだが。

でも、レイル会長は、人の体を不必要に触ったりはしないだろう。

「な、何、して……………るん、です……………っ」

「こうすれば思い出してくれるかな、と思っただけ」

「や、やめてください……………っ！　ここは学校、だって……………っ！　ちよつと待、え？」

右肩の辺りにあった生温い触感、そのまま腕を伝って下へ行く、と、手首の手前で徐に進路変更を決めて背中へ回った。追うように、反対側も同じようになつた。それに乗じて、レイル会長の体が僕に密着する。瞬間的に体温が下がった。

でもすぐに、体が熱くなった。

これは知っている。

エンディング、王子様がお姫様にするものだ。

「何を……………」

「思い出さないかな。僕を」

耳元で囁かれるその言葉だけがやけに鮮明に聞こえ、続く外界の音は霞がかかっているように閉ざされた。体の調子が悪いせいだけではない気がした。

しかし、思い出せと言われて、従順にも思考を巡らせたが思い当たる節など無い。ことレイル会長に関しての記憶など、思い返すほど遠くにはないわけもあるし。

責任逃れをしようと沈黙していると、背中に新たな触覚があつた。服が擦れているような摩擦を感じる。温かくもあり、くすぐったくもある。摩られているということが如実にわかって、発熱に拍車がかかる。

「や、やめて、ください……………レイル会長」

「でも、これは君が望んでいることだろう?」

「ここは学校で、それも僕たちは生徒の模範であるべき生徒会の一員。それはレイル会長だって、当然知っているはずなのに。一体、何を言っているのだらう。」

「何を言ってる」

「じゃあ、どうして抵抗しないんだい?」

「縛られているから、できないんです……!!」

「そっか。そうやって、また逃げるんだね、ルートさん」

「に、逃げてな、あ……?」

僕の腕を封じていた縄はいつの間にか、取り除かれて、地面で蜷局を巻いていた。

抱擁している最中にでも解いたのだろうか。そんな素振りなどありはしなかったし、ハグしながら解ける程緩くは無かった気がするが。

「違うよ。最初に頬に触った時にはもう、外してあったんだ」

「そんなはずは」

「あるよ」

いやに断言してくる。相手が相手だけに、相当な信憑性があった怖い。

僕も、反駁の余地が無くなる。

ということは何か。

僕を縛っていたのは僕自身で、その僕は『逃亡』を望んでいたとでも言うのか。

どうして。

どうしてわかるのだ。

「ははは。君の考えていることは、すべてお見通しだからね」

「……………」

俄然、口を開くのが恐ろしくなってくる。口調や所作から読み取られると聞くし、僕の知り合いにも心を見透かしてくる人がいるから、わかる。

沈黙は金という金言を信じて罷り通そうと思ったが、やっぱり勝てない。

「わっ……」

背中を撫でられると、それどころではなくなる。落ち着いてはいけない状況で、落ち着きそうなことをされて、自分はどちらに身を振ればいいのかわからなくなってしまっただ。

現に抱かれてしまっているから、身動きは取れないけれど。

このままこうしていたら、遂に飲み込まれてしまうような感じがして、無理やりにも口を動かさなければ平常心でいられなかった。

「ああ、あのっ、レイル会長……いつまでこうして……」

「ルートさんが抵抗するまで、かな」

「そんなの、すぐ」

「本当にそうかな」

「そうだ。」

僕が押し退けようとするのを妨げたりしなければ、そんなこと、すぐにできる。だから、できないでいるのは、意志を遮るレイル会長のせいなのだ。もしかすれば、さっきから大きく変動する体の調子も勘違いも全部、レイル会長の仕業なのかもしれない。

「そうだ。そうに決まっている。」

「ルートさん。これは僕の厚意だよ」

「……………」

「好意、でもある……かもね」

一体なぜ。なぜ、僕に厚意をなんて下らない事ばかりが、頭の中で渦を巻いた。そんなことを考えている暇があったら、さっさと突き飛ばせばいいのに。突き飛ばさなければいけないのに。

「いいよ。蹴ったって、殴ったって。絶対怒らないから。そんな様子見なんかしなくていいよ。それとも、望んでいるのかい？」

「そんな……。ど、どうして……」

断言できない。

無いと言ってしまうば、それはレイル会長の厚意を真っ向から否

定することになるから。でも、だからと言って、無言は肯定だ。肯定すれば、僕の意志は消滅することになる。

レイル会長は、間違いなくそのことに気付いている。

気付いていて、積極的に危害を加えようとしなのはなぜ？ そんなに僕を気に掛ける意味はなんだというのだろう。本当に、好意があるわけでもないだろうし。

僕はレイル会長の余裕につけこんで、少しだけ解釈の掘り下げを求める。

「どういう、こと……ですか」

どうして、僕がレイル会長に何か致されることを望んでいるという結論に至ったかという事。そして、どうして僕が選ばれたかという事。

曇る瞳に含めたつもりだが、語調ないしは息遣いにも寓くされていたらと思う。

レイル会長の答えは、あまりに的確だった。

「似ている、から……かな。僕と」

僕も僕で、その言葉に寓された何かしらの悲劇を感じることができていた。竹藪よりも暗くて深い闇に、四六時中尾行されているかのような感覚の共有。振り返ることへの恐怖めいた何かを。

「私が望めば、大抵のものは手に入った。けれど、手に入らない、叶わない願いが一つだけあったんだ」

その悲哀に満ち満ちた物言いに、恐ろしいほどの共感を抱いてしまつ。

自然、その答えも“永遠”であると知っていた。

「それは奇しくも、『人の願いを叶えることができない』という不条理の上に成り立った、呆気ない逃亡だった。僕もそうだった。ずっと逃げていたんだ」

終わりがある事象ならば、継続意志は逃亡を示唆する。逃げたくない一心で次にとった行動は、いつの日も諦観だった。何度思い返しても、省みても、選択肢は見つからなかった。

その思いさえ、知っているのか。レイル会長は。

「君と同じ」

刹那、ゾツとした。

何かと思えば、背中感触とは別に、今度は太腿の横辺りに着物が擦れる感覚があった。

「……………」

「助け、求めたりしないのかい？」

もう、声も出ない。出せない。出すという選択肢が、排除されてしまった。結局、そういう選択肢を、選んでしまったのだ。選んでいいはずなどないのに。

同じだ。僕がずつとしてきた逃げることだって。

あれだって、一つを選択だ。

だから僕は、運命に立ち向かえる人たちに顔向けできないのだ。その人たちが輝いて見えるのではなくて、自分の醜悪さが浮き彫りになるから。

「……………」

「ふふつ。君は本当にずるいよ」

ああ。そうだ。本当にそうかもしれない。

だから、罰を受けなければならない。

「ねえ、ルートさん。僕なら君を赦^{ゆる}せるって言ったらどうする？」

レイル会長の言葉は、決して冗談や空事ではない気がした。

もし本当に赦されると言うのなら、僕は悦んで条件を呑むだろう。「僕は知ってしまったから。ルートさんが、本当は王子様なんてやりたくないってことを」

そうだろう。それは、最悪の事態に備えて、僕がレイル会長に相談したことなのだから。

ならばこそ、レイル会長には僕を赦せる力があるはずだ。

「僕は君を赦すよ。コウイで」

その“含み”が急にわからなくなる。また少し、意識が薄れる。今度は、気絶しそうと言うよりも、なにか我を忘れそうなそんな感覚だった。

触れられている部分にのみ感じる温感が、血流でもって全身を巡って末端までをも火照らす。しかし最後には確りと心へと戻ってきて、それにまたもどかしさを催す。

「僕が、君をお姫様にしてあげるよ」

罰への覚悟なのかなんなのか、目頭も熱くなってきた。

でもきつと、処罰への申し立てはしない。

だから

「だから、ルートさん」

罪状を僕に。

「ルートさんのすべてを僕に……いや、私に頂戴」

あげられるようなものなど、僕にはないが、それでもいいのなら。喜んで差し出そう、私を。例え好意であっても、私はそれを厭わない。

そして、“僕”は頷くのだ。

「そして君は、私に負けるんだ」

それは違う。私はすでに負けたのだ。

「君が逃げさえしなければ、丸く収まったのに」

そうかもしれない。

過去のことは振り返れても変えることはできないから、結果としてそうなった。それに、もし変えられるとするならば、僕はきつと、選択を放棄する。そういう選択をする。

だから、願わくは教えて欲しい。敗北だろうと、雪辱だろうと構わないから。

僕のすべきことを。

そして、赦して。

「聡明な君ならわかるよね。僕が欲しいって言った『すべて』の意味」

もう子供ではないのだ。それくらい知っている。

けれど、もしかしたら子供のように泣いてしまつかもしれない。

それも含めて赦してくれるなら、私は頷ける。

「やっぱり嫌？」

嫌なはずなど無い。

他人の選択につべこべ言える立場に、人間はいないのだから。ましてや、決めかねているそれを、決めてもらえるのだから、大いに喜ばしいことなのだ。

僕は首を横に振る。

「そっか。何か気になることはある？ 答えるから」

レイル会長が優しく投げかけると、急に喉の緊張が緩んだようになる。抑え込まれていたホースの口が開けられるような、そんな感覚に。

「レイル会長……」

僕の一言は、複雑怪奇に渡る感情が込められていて、溜息のように重かった。

でも、言いたいことは呼名ではなくて、ただ一つの問いかけだけ。

「好き、ですか……？ わたしのこと……」

だって、僕は好きではないから。僕は僕を殺すために、努力しなければならぬ。

レイル会長の微笑みは、淡々と僕を蝕んでくれた。

「嫌いかな」

多分その笑顔は、レイル会長自身も傷つけている。

それを事実たらしめるように、レイル会長の影は仄暗く僕を覆っている。手は何かを求めて尾骶骨のあたりを彷徨い、肩は頬をアトランダムに撫でる。少しでもだけ体重がかかっていることもあって、木の椅子は僕を撥ね退けようと必死に努めている。

流石に、にこやかにしていることはできなかつた。

笑顔でいる資格も意味も、僕には無いのだからうけど。

「そうですね」

「そうだね。君も、僕が嫌いかな？」

「いえ。わたしは好きですよ。レイル会長のこと」

「はははっ。やっぱりずるいな。ルートさん」

笑うレイル会長の感情は一切読めない。必死に合わせるこちらの声色からも、自然と情が失せる。それでも、来たるべき時に備えてなのか、脇の辺りがきゅっと締まる感覚を覚える。不思議と汗はかかない。

ふふふっ、と小気味よく微笑みを演じると、尾骶骨を摩っていた手がお腹へと場所を移して、また盛んだった。

「可愛い、って言ったら信じる？」

「信じます」

「嬉しいかい？」

「嬉しいです」

「可愛い君のこと、もつと見たい……って言ったら？」

「どう、すれば……いいですか？」

レイル会長は、またにこやかに微笑む。

そして怯えたわたしは、潔く目を瞑る。

僕と私の選択を、今、レイル会長が代行する。その意味では、レイル会長は本当の聖人。神様のようでもある。なればこそ、畏敬の念を持って肅々と。

精神が研ぎ澄まされたのかレイル会長の匙加減か、感覚はいつも以上に鋭敏になっているようだった。この部屋が静か過ぎるせいもあるだろうが、どうにも僕の心音は騒がしい。意識して細やかにした息遣いも、鮮明に聞こえるせいで余計に拍動を速める。襲い来る闇には滔々と、外界の光に透かされた血潮が浮かぶ。

僕の見ていた醜い世界は一度閉じて、もう認識もできない。

新しい世界はとも息苦しくて暗くて、風さえ沁みる。心はそれでも変わらずにいて、不思議と違和感は無い。ここに居て然るべきなのだと、そう感じられる。

「ふふふっ。おかしいね。ルートさん」

言いながらその人は、私の襟元に触れた。背中を辿って首元まで来たらしく、その軌跡が鈍行して弥立よたった。

「蝶ネクタイの結び方。間違ってるね。外しにくい」

「ごめんなさい……」

「いいよ。外れたから。でも意外だな。昔から天才肌なのに」

「そう、ですか……？」

僕の苦言は瞬く間に沈黙の中へと埋まっていった。そして部屋にはまた、しんとという無音が響いて、わたしの心音と共鳴した。一段緩くなった気道は、かえって呼吸を乱れさせた。

浅めの呼吸をしていると今度は、襟から一番近いボタンに手がかる。

「さすがにボタンは掛け違えてないね」

「は、はい」

ボタンが一つ外れる度に、僕の心臓は張り裂けそうなくらいに高鳴って悲鳴を上げている。体の中を一気に駆け巡る血流は、僕を内側から洗浄してくれているようでもある。三つ外れた時にはすでに息をするのを忘れていて、さすがにこの時ばかりはもっとボタンがあればなと思わなくもなかった。

私が僕を捧げたとして、レイル会長には何の利点も無いのだからけれど、これが贖罪の楔なのだから仕方がない。非情なまでの椅子の硬さが、それを物語っている。

ボタンはまだ三つある。時間が長く感じられる。

ボタンがすべて外れた時、僕はもう僕たるものではなくなるのだろうけど、反対にわたしはわたしたるものになる。鑑みればボタンは、わたしにこびりついた穢れの暗喩になっているようでもあった。レイル会長は掛け違えていないと言ったが、それは間違いだ。

僕は盛大に掛け違えたボタンを誤魔化すのに、生地を伸ばしたのだ。途中から、もうどこが始まりかも終わりかもわからなくなってきた。そうしているうちに未練は募って、汚れを払うのに時間を要するほどに長くなってしまったわけだ。

なるほど、こんなにも道理が立っているのは、僕史上初かもしれない。

さて、ボタンがすべて取り除かれたわけだけど。

そろそろワイシャツのフロントもはだけてきて、下に着ていた文化祭Tシャツが大部分露わになった。僕の嫌いな部分が曝け出されていくようで、途轍もなく惨めだ。

「Tシャツ、着てたんだ」

「着てました」

「……ま、いいよ。上はそのままでも大丈夫。下、汚したくないよね」

「汚したく、ないです……」

もう、汚れているのだらうけど。

「わかった」

でも、これでやっと僕の罪は晴れる。赦されるのだと思えば、惨めさも恐怖もさほど問題とは感じない。痛みも伴うのであろうが、それこそあって然るべきだ。この瞬間逃げさえしなければ、今までの長い逃避行が赦されるのだから。

「……………」

ああ、僕は愚かだな。心底そう思う。

僕は、レイル会長の言うような『聡明な人』ではない。そうであればきつと、逃げるよりも賢い選択をすることができるはずなのだ。逆に、この状況を受け入れる方が聡明であるというならば、それは成り立つのかもしれないが。

しかし、それは僕がちゃんと、『女の子』を演じきれていればの話。

でも、僕は僕だった。

レイル会長はそれを無理矢理に『お姫様』というフィルタを透過させて、僕を美化したのだ。その中で僕はわたしになって、わたしは初めて『お姫様』でいられた。

だとすれば、わたしはきつと正しい。間違っていない。閨秀だ。

「可愛いつて、さっきの言葉。嘘じゃないよ」

「ありがとうございます……」

例え嘘でも構わないけれど。

「最初に僕に衝突してきた時から、そう思ってた」

「……………」

「良い匂いがする女の子だなんて」

「……………」

「今も、あの時と同じ匂いがする」

「そう、ですか」

徐に、鎖骨の辺りにレイル会長の顔が飛び込んでくる。触れないギリギリのところまで近づいたせいで、レイル会長の呼吸が生暖かく感じられる。心臓によくない。

それでも頭には薬なのか、自然と過去のことが思い出された。

あの時”の記憶だ。

何か大きな試合の時の出来事だったと思う。わたしはその試合で初めて本気になったのだ。そして試合に勝利して、栄光も手にしてわたしはわたしでなくなった。

その時きつと、誰かしらは幸せになって、誰かしらは不幸せになった。

まるで、僕の書いた台本のように。キャスティングは至って正確で、要ったのは多少の時間と羞恥心だけだ。

そして今、主人公が降板する。

たったそれだけのことだ。

「キス、しようか」

胸から離れたレイル会長は、また微笑んだ。

そこにあの日の面影はなく、郷愁や回顧の念に明け暮れていたのは僕だけであると知らされる。部屋はひっそりと僕たちを静観しているけれど、その色調はどこか僕だけを追い出そうと脅迫しているように冷たく感じる。それでも僕は、僕を椅子に縛りつけて、そこへ固定した。

「わたしでよければ……」

そうして目を瞑ると、また、感覚が鈍磨したようになって、体も同じように重くなった。ただし、足の先であるとか指の先であるとか、末端だけは部屋の緊張を感じてピリピリと痛痒かった。

唇も例外ではなかった。

鼻息か吐息かもわからないが、しっかりとした厚みの風がわたしの唇に触れた。

もう、僕は終わる。いや、わたしは始まるのかもしれない。

「好きだよ」

さようなら、僕。

「待つんじゃないあああ！！」

僕の知り合いと似たような声が聞こえたと思えば、いつの間にか僕は床に寝ていて、謎の金マントの人が僕の上に乗っかっていた。さっきまで僕の上にはいた人は、跡形もなく消えて、どこかへ消えた。まるで最初からこの状況であるかのように、ごくごく自然にそうなった。

「お、重い……」

「ふう。間に合ったわい」

胸の辺りに跨るようにして乗っていたので、マントの隙間から然るべきものが見えてしまった。

一五歳にしては少しばかり大胆過ぎるランジェリーとさっきの叫び声、それからマントという容貌から察するに、知り合いは知り合いで合っているらしかった。

「サクラ？」

「そうじゃ」

視界を遮っていた金マントがばさりと捌けると、そこに現れたのは小さな王冠を被った友人だった。付け髭は無いようだけど、元々童顔で円いので、普通に似合っていた。

「見えてるよ」

「見せとるんじゃ。えろいじゃろ。……じゃ、なくてじゃ」

「うん」

サクラの表情が急に真剣になる。

あまり見ない表情ということもあるし、サクラだからというものもある。何か大変な出来事の予感がする。

「お主は、自分のした選択を後悔しない自信があるかの？」

「え？」

「もし、間違っている選択をしていたとしても、それを肯定できるか、と聞きたいのじゃ」

世界をやり直してしまった僕には、反省や後悔をする権利はない。仮に反省する機会を与えられるなら、きつと後悔するだろうけれど。

だから、答えは。

「しない、じゃなくて、できない……かな」

「そうか。お主らしい答えじゃのう」

サクラの笑顔は、僕の心を酷く安心させた。夢と現実の狭間を彷徨っているさなかに、正しい方向へと導いて貰える感じが。

それでいて、すぐにどこかへ行ってしまういそうな儚さもあった。

「ねえ、サクラ」

「なんじゃ」

でも、そんな時は、僕が手を離さないから。

「大丈夫だよ。記憶戻しても」

「……気付いておったのか」

「何となく、ね。体、重かったから」

「それは悪かったのう」

「あ。違うんだ。僕は、ほら、女だから……ね」

「あ……それは、もっと悪かったのじゃ。すぐ降りるのじゃ」

サクラが降りると、確かに軽くはなつたが、胸のあたりの痞えつかというか、上腹部の圧迫感というか、そういうものだけはやはり体に残存した。

よっこらせと息を吐いて僕の隣に正座したサクラは、僕の首の後ろ辺りに手をつ突っ込んで、上体を起こしてくれた。自分でもちゃんと起きればするが、そうしてもらえるのは嬉しかった。おまけに手まで握ってくれて。

「やっぱりサクラって優しいね」

「じゃる。好きになりそうか？」

「うん。なるかも」

「かも、か……」

「うん。かも、だね」

「冗談ではないからこそ、サクラが寂しそうにしている意味がわかるような気がした。

それでもサクラは気丈で、どこか昔の自分を見ているようでもあった。

「それじゃ、仕方ないのう」

「ごめん……」

「いいのじゃ。ちゃんすはいっぱいあるからのう」

「そっか……」

そう。『チャンスはある』。

僕にだって、わたしにだって。

「もう大丈夫かの」

「大丈夫だよ」

「やつは一応、椅子に縛つとるが、時間の問題じゃ」

「わかつてる」

何がどうなっているかはわからないけれど、自分がした選択とその結果は知っている。

だから、怖くない。

「あやつもそろそろ来てくれるはずじゃ」

「うん。ありがとうサクラ」

誰が嫌いとか、誰のための犠牲とか、何かを演じきれないとか、そんなことは全くの問題じゃなくて。その結果が間違っているとか、はたまた正解だとか、そういうのでもなくて。そんなのよりも前に。

「手、繋いだままでいい？」

「よいぞ」

僕が誰かを好きだということ。

それは確かに心にあったのだということ。

「じゃ、戻すのじゃ」

僕はわたしを好きだし、お姫様も好き。わたしは僕を好きだし、王子様だって憧れる。それでも、わたしはわたしを好きだし、僕は僕を好きだ。

ずっとそう選んできたではないか。

それを後悔するかしらないか？ 愚問だと、僕は思う。わたしは思う。

僕は　わたしは、果たしてそれを後悔できようか。

問われればきつと、わたしは笑って答えられる。

「レイル会長……」

さっきまで僕が縛られていた椅子には、今度はレイル会長が縛られていた。

その光景を目にするまで、全くの時間経過を感じなかった。やはり、最初からそうであるように、自然に世界は繋がった。

先ほどまでと違う点はまだある。

登場人物が一人増えていること、それからボタンがすべて閉じられていること、そしてこれからもう一人、増えるということだ。

「くっ……。君がしていることは、僕だけじゃなくて、ルートさんの邪魔もしているんだ。それがわからないかな」

「わからのじゃ。わしは授業サボっとるからのう」

今は、サクラの適当ぶりがとてつもなく頼もしく感じる。

離すまいと手を握れば、蒸れて滑りそうになる。かえって離れてしまいそうになるけれど、それでも握ったままでいたかった。握られていたかった。

「レイル会長、一つ聞いていいですか？」

「なんだい？」

レイル会長は平常心を装って、僕に微笑みかける。気丈に振舞う姿は、僕のようにわたしらしかった。本当の意味で、わたしたちは似ているのだと思う。

だから、この後どうなるのか何となくわかった。

「最後の、本心ですか……？」

僕がリズにかけた言葉とたまたま同じだったから、聞いてみたくなかった。

わたしは大概狡猾だ。

レイル会長の言うような聡明ではないにせよ、狡猾ではある。同じことを意味するのだとレイル会長は言いそうであるが、自称か他称かという大きな違いがあると反論したい。

であれば、にこやかに微笑むレイル会長もまた、狡猾なのだろう

けれど。

「本心、だよ。良い匂いがするって言ったのも、可愛いって言ったのも、全部。だから、君のすべてが欲しくなった。君を負かすだけじゃ、足りなくなった」

「そう、ですか」

それが僕かわたしかはわからないけれど、嬉しいとは思えなかった。

レイル会長の笑顔はただの仮面だからだ。

僕にはわかる。

僕も、それと同じものを持っているから。

「色々相談に乗ってくれてありがとうございます。レイル会長」

「もういいよ。僕も、嬉しくないから。確かに、これは仮面なのかもしれないけど、みんなにはちゃんと笑顔に見られるから」

「投げ槍じゃのう」

「察しの通り僕は狡猾で、君も狡猾だ。そういうところは似ていると思う。……どうだい？ これで自称と他称の境界が無くなったよ」

そこの境界が無くなったとしても、同じことだ。

現に、僕はサクラに手を握られているのだから。わたしはサクラのことを好きだし、サクラはわたしを特別に思ってくれている。この意味合いは、レイル会長の言葉と大きく食い違う。

要は、方向は必ずしも一つではないということ。僕からかもしれないし、サクラからかもしれないし、その真ん中から双方向に伸びているかもしれない。

「理解に苦しむよ」

「いいんです。わかってもらえなくても。どうせわたしたちは間違うんですから」

「天才の君がそれを言ったら、僕には、存在価値なんて無くなるね」

「それなら、わたしが赦します。だから、僕も赦してください」

「無理だよ。もう。僕にできるのはせいぜい、君を滅茶苦茶にすることぐらい」

「なんだからさ」

その瞬間、体がふわっと浮遊する感覚に囚われた。しかし、それもほんの一瞬で、後からやって来た強烈な重力のようなものがすぐに僕の膝を折った。

気が付けばまた椅子に座らされていて、レイル会長はごくごく普通に立ち歩いていた。

先ほどまでと違う点を挙げるのならば、椅子が一つ増えていること、その椅子にサクラが縛られていることだろうか。

あともう一つあった。

ボタンがすべて外されていることも、だ。

「往生際が悪いのう。わしのまんとは外されとらんし」

「外して欲しいかい？」

「興味無いならいいわい」

この環境の変化に順応できてしまうのだから、レイル会長もきつと何らかの力を持っているのだろう。

不用意に刺激しない方が良いとは思うが、サクラの余裕ぶりは、明らかにそれを超越している気がする。すべてが想定内だと言うよ
うな、そんな。

隣にいて心強くもあり、恐ろしくもある。手の届くところにいるのに、届きそうもない。

そうか。手が離れてしまったのか。

「手、繋ぎたいかい？」

「そう、ですね」

「彼女はそうは思っていないみたいだけど」

言われてサクラの方を見てみれば、さっと視線を逸らされてしま

う。

弁明をするように言葉を紡いだサクラの輪郭は、どこか寂しそうに縁取っていた。

「わしよりも、そうすべき人がおるからのう」

「そうかい。まあ、いいさ……。君がどうやって僕の精神干渉を防いでいるかはわからないけど、厄介だね。何をしでかすかもわからないし。それに――」

急にサクラの声にフォーカスが当てられたように感じた。レイル会長が何か話しているのは、わかったけれど、そちらのピントが外されたようになった。

視線が、交わっているからだろうか。

「もう大丈夫じゃろ」

「うん。わかつてるよ」

「わしは悔しいんじゃないかな」

「そうかな。サクラは特別だもん。わからないかもよ」

「そうかの。そう言うなら安心じゃな。ぬはは！」

「はははは！」と笑い返す僕をきくと、レイル会長は見えていないのだろうけれど、それはまた僕も同じで。僕は僕が笑顔で見ることができないから実感に欠ける。

でも、相手も笑ってくれたのならそれで、笑い返せたならそれで、幸せの方向は二つになるではないか。

「だから、君にはこの部屋から消えてもらいたいな。今すぐに」
「そう言われると、逆にここにいたくなるのう」

突如として戻って来たその声に対しても、サクラはサクラらしさを貫く。レイル会長の思う一方向の幸せを感じた僕も、僕らしさというものを探す。

今見つけられなくとも、せめて誰かを思う心を忘れないように。

「それなら追い出すまでだ」

「魔法を使えるこのわしを、無力のお主がか？　ぬはっ。それは笑

い話なんじゃろか。それとも、そんな無謀な『願い』を叶えるような魔法が使えるとでも言うのかのう？」
「使えるともさ」

ガラツ、という小気味のいい音が聞こえたと思えば、誰かがわたしの元へと駆け寄って来たようだ。

わたしはと言えば、どこかの床に寝そべっているらしく、足音がやけに頭に響いた。山積みの書類と若干の埃臭さから、この場所が生徒会室であることがわかってきた。

首筋に誰かの手の感触があつたかと思うと、次の瞬間、わたしの視界は大きく変わる。

「もうバカ！ バカお姉ちゃん！ 探したじゃん！ 本当に帰ったかと思つた！」

「えっと……ごめんね？」

「ごめんじゃないよっ！ 全くもう！ 心配、したんだから……！」
上体を起こされたのち視界一杯に広がったのは、紛れもなく“あの時”と同じ涙の彼女の。

わたしのための涙を、わたしはわたしの手で拭う。リズの胸に抱かれて、わたしはそれくらいしか返せなかった。

「ごめんリス……」

「いいよもうっ。怒らないっ。だから謝らないで、バカ……」

「バカは酷いなあ。ははは……」

「バカだもんだって。私から逃げ出すなんて、ホントにひどいよ。私は、相手がお姉ちゃんだからやろうと思つたのに……」

「あ、えっと、うん。ありがとう……」

戸惑う間もなく彼女の涙は流れて、ぽたぽたとわたしの頬に滴っ

た。そして、わたしの涙とでも知らしめるようにゆっくりと、わたしの顎のラインを伝うのだ。そのくすぐったさはきつと、久しい呼び名で呼ばれたことに対する気恥ずかしさも兼ねている。

「いいよ。でも、どうしてこんなところで寝てたの？ どこか痛いのか？」

どう言い訳しようにも、意識が少し朦朧としていて覚えていないのだから、説明し難い。

「大丈夫」ではないことは確かだからこそ、「大丈夫」と言うしかなかった。

「大丈夫なはずないでしょっ！　すぐ嘘つくんだからっ。怒んないから、ホントのこと言っつて。ねえ……。もう、いなくなったりするのイヤなの……」

それは、わたしも嫌だ。

できることなら離れたところにいたくないし、ずっと隣で見守っていたい。ずっと隣にいて欲しいし、どこかへ行ってしまうのも嫌だ。

それが、本当のことだ。

「ずっと考えてたんだ。リズのこと」

罪の懺悔と後悔の意味を、一人でずっと。

そうして出た答えは、リズの思う幸せとわたしの思う幸せを知ることだった。

沈黙という否定を繰り返して、漸く見つけた、たった一つの肯定だ。

涙を拭う罪滅ぼしと、わたしの隙間の埋め合わせをするリズの涙はきつと対等で、他の誰も代わることができない。

そういう意味では、わたしの配役は正しかったのだろう。

「いいんだよ、私のことなんか考えなくて！　もっと……。もっと自分のことっ、考えてよ……。だから、お願いっ。ねえ、お姉ち

「やん……」

「うん……。そうする……」

「ホントにい？」

「ホントだよ」

「じゃあ証拠」

やり方は知っている気がする。

まずは、こちらから幸福を要求するのだ。

「劇の練習、したい……かも……」

「し、仕方ないなあもつ。じゃあお姉ちゃんは……」

「お姫様……」

その言葉を待っていたかのように、リズの表情がパツと明るくなる。

心底、安堵する。

「じゃあ私もおんなじのー」

「へ、変じゃないかな……」

「いいじゃん変だって！ 王子様が女の子だって、お姫様が二人だって、いいんだよ。お姫様が大好きになっちゃいけないなんて、そっちの方がもつと変」

そうか。そんなに単純な事だったんだ。

結果やルールがどうであったとしても、誰かを思う気持ちには、誰にも違いなんてない。虐げられた召使いだろうと、悩み多き国王だろうと、一アカデミー生だろうと、気持ちは平等にある。

それを思えば、罪などすぐに溶かしてしまえる。

そうして今度は、『幸せ』の型を作っていけばいいのだ。そこへ流し込んだ時、罪の大きさの分だけ愛せる様に。

「ねえ……。したいんでしょ……？」

わたしは頷くだけして、一足先に言葉を犠牲にした。おまけに視界も捨ててやった。

残された感覚は、待ち伏せる様に研ぎ澄まされて、それが少し卑しくもある。

「じゃあしょうがない」

案外、沈黙は早く訪れて、代わりにわたしたちに『幸せ』を置いていった。

リズの言葉も犠牲になって、聞こえるのはとうとう微かな鼻息だけになった。

「……………」

「……………」

わたしの犠牲はリズの犠牲を生んで、互いの罪は互いの温度でどろどろと溶けていった。混ざり合った湿潤の味は無味に近い仄かな甘さで、猛烈な速さをもつてわたしの中に浸透していった。しかし決して苦渋くくしくなくて、むしろ温かくて柔らかい、包み込まれるような尊い息吹に思えた。

「……………んつにゃ、にゃがい！」

僕の世界は、変わった。

「そ、それはっ。リズだって……………！」

わたしの世界も、変わった。

「んまあそうかも、あははっ。で、どうだったー？」

今まで固定されてきた二人の世界が、変わった。

「い、言わないから……………っ」

そして、わたしは『幸せ』になった。

「それずるーい。私は気持ち良かったよ……………？ ねっ、お姉ちゃん？」

「は、恥ずかしい……………やめてっ」

「あっははは！ 冗談冗談！ 嘘じゃないけど冗談だよー。本番も、そんな感じでよろしくね」

「えっ、あっ、そうか……………」

「大丈夫。私がお姫様だって王子様だって、お話の主人公はお姉ちゃんなんだからさ」

遅いか早いかわからないけれど、今日僕は、生きていたいと思っ

わたしは、生きていると実感した。

「リズがそう言うなら、頑張ってみるね」
それだけは確かな事なのだと、わかった。

「わたし」

Route Most Make (後書き)

【あとがき】

次回、三章の最終話になります。

ルートたちが作り上げる物語の結末を、是非ご覧になってください。

L o o t e M o t h S t o m a c h (前書き)

【まえがき】

お待たせいたしました。

三章ラストです。

ゆっくりと、でも着実に進んでいく時間をお楽しみいただければ。

L o o t e M o t h S t o m a c h

「でも本当にいいの？ 僕、女だよ？」
「いいよ」

きつちり妹と手を繋いでおいて何を言っているんだと、自分に喝を入れたい。出番間近の舞台裏という逼迫した状況において、僕という存在はあまりに頼りが無さすぎる。舞台裏の中でも、最も舞台に近い位置に値する舞台袖の階段の一番上にいることも相俟ってか、足ががくがくと震える。

こういう時ばかりは、本当に自分の度胸の無さを恨む。

「姉だよ？」

「今更じゃん。いいの。決めたんだから。みんなもいって言うってたもん」

それは姉妹だからいいだろうと言う意味だ。

邪心丸出しの僕では、そこらの純情な男子よりもダーティだと思うのだが。しかし、認められるのなら、進んで譲ろうとは思わないけれど。

「リスはいいの？」

「いいよ。衣装が一つしかないんだから仕方ない」

勿論、リスは王子様姿も軽々着こなしてみせた。愛くるしいライオンを描く顔の輪郭も、若干の化粧で細めれば、凜とした面持ちを成した。

そういう僕は

「ふふふっ。かわいいね。やっぱりドレスも似合うよ」

「も、もう。やめてよ……っ」

すっかりお姫様気分でした。

鏡を見たわけではないけれど、クラス中からお世辞を言われて舞い上がっていたのだ。この調子では、任された数少ないセリフすら嘸み嘸みになりそうである。

少ないとは言え、それらが物語をまとめあげるセリフであるわけだから、無下にできるはずはない。

度々ある主人公の登場シーンは、サクラが何とか凌いでくれたようだった。一度だけ挟まれる王子様の葛藤シーンも、どこかの男子生徒が代わりをしてくれたら良かった。

僕とリズが不在の間も劇は当然のように続いていて、確りと辻褃が合うように物語は進んでいたのだ。

そして今も、刻一刻と僕たちの出番は差し迫っているわけで。

「あ。アリスお姉ちゃんとノアさん戻って来た」

確か、場内に潜入した主人公を貶める算段を打ち合わせるシーンだった。

「二人ともお疲れさまー」

「うん。おつかれさま……」

「ええ。疲れたわ。もうこんな面倒ごとはごめんだわ」

それはきつと僕の配役のことだろうと、アリスの眼力がそう伝えて来るようでかなり痛い。

勿論、それだけのことではないとわかっている。そのせいで、アリスともノアとも視線を合わせられそうもない。

そんなしょうもないプライドは、アリスに簡単に見抜かれてしま

う。

「あら？ そっちの方はどちら様かしら」

僕がこんな格好をしていたら、笑われてしまっても仕方がない。

本当は、クラスのみなんだってそうしたい気分のはずなのだ。

台本だけ放っておいて、「あとは頼みました」なんて、虫が良いにもほどがあるというもの。主役という重要な担当を背負っておきながら、果てはドタキャン。そのくせ、最後には別の役をやりたい

と言い出して、花形を奪い去る。

どれだけ酷い事をしているか、おかしなことをしているか、僕のも思っている以上にそれは最悪の最悪で下の下なのだろう。

でも、僕は決めたのだから。アリスはそのチャンスを、僕にくれたのだ。

だから、許しを請うしかない。赦されないとわかってても、何か変えられるということを信じて。僕を信じてくれる人を、信じて。

「ごめんなさいっ!!」

僕は立ち上がり、そして思い切り床を見た。

一瞬、くらくたときて足元がふらついたが、倒れまいと堪えた。こうしたままでいれば僕の謝罪の念も幾らか伝わるだろうとは思っていたけれど、それよりも皆の顔を見なければと思った。

床を見るのと同じくらいの勢いで、また顔を上げた。

目の前にはアリスとノアがいて、少し首を曲げればクラスメイトたちもいた。舞台裏は真つ暗に近くて、全員がいることは定かではない。しかし、用意された小照明がちょうど僕だけをスポットのように照らしてくれた。

そのおかげで、僕はまた言葉を紡げるのだ。

「全然練習に参加しなくて……っ。逃げてばっかで……っ」

劇の邪魔をしないよう、でも少なくともここにいる皆には聞こえるよう、限界まで声を平たく潰した。息が詰まるくらいに、お腹に力を入れて。

しかし、反応は無かった。そのうえ暗闇だから、皆の表情の軽微な変化まで感じ取ることもできない。本番中だから、がやになることも無い。本当に無だった。

仕方がないと思った。

割り切った僕はしゃがんで、また前を　表舞台を見据えた。決して諦めたわけではなく、今自分にできる最善の選択をしよう、そう思ったのだ。

何せ僕には、信じてくれる人がいるのだから。

終始手を握ってくれていたリズは、優しく柔らかい笑顔で頷いて、もう一度手を結び直してくれた。僕も呼応するように握り返して、最後のシーンに備えた。

やがて、王子様と召使いの脱出劇が始まる。

このシーンは、城に行くまでの間に会った町民たちが召使いを助けてくれるという盛り上げの場面だ。召使いの厚意が初めて認められて、それがたくさんの人を動かす瞬間なのだ。罪だと思っただすべてが、ここですべて昇華されて善意に変わっていくという重要な意味もある。

まさに、僕とリズが積み重ねてきたそれと構図が同じだ。

「さあて。そろそろ出番か」「そうだな。行ってくつか」「まあすぐ終わるんだけどなー」「それなー」

「声裏返ったりしてー」「ありそうありそう！」「あー、あー。大丈夫かな」「まあ大丈夫っしょー。何とかなる」

鍬やら鎌やら、町民の武器と思しきものを手に、ふと皆が立ち上がった。

そして、袖口に座る僕たちの横を通り過ぎ、舞台へと

「大丈夫だって。全然怒ってないからさ」

「えっ」

「そうだよ。ルートさん。だから安心していいからね」

「あ……」

「変にプレッシャーをかけてた私たちの方がむしろダメだよね」

「違っ」

「じゃあ、俺らが盛り上げてくつから。最後、バッチリ頼むぜー。お姫様！」

「ちよっ。あの、えっと……」

僕の横を通過したのは、一町民などでは決してなく、れっきとしたクラスメイトそのものだった。

言葉を貰ったたびに、肩をポンと叩かれるたびに、僕は決壊しそうになる涙の池を必死でガードしなければならなかった。

「よかったね。でも、泣いちゃダメだからね」

「うん……っ」

頷けなかった僕は、また、声を殺して言った。

「本番まで取っておかないと」

「うん。我慢するよ」

人の気配は舞台上へと移って行って、僕たちはすっかり暗所に取り残された。

でも、アリスもノアもいるし、リズもいる。

「……あーあ。べたべたべたべたと……。これだからバカップルは嫌ねえ。背中が痒くなってくるわ。ノア、出番まで二十分そこらあるし、どこか別の場所で休憩しましょ」

「する……」

居づらくなったのか、アリスが仰々しいセリフを吐いて立ち上がった。ノアも追うように立ち上がると、僕とリズの方を一瞥してから、ぴたっとアリスの腕に絡まった。

もしかすれば、言わなくてもアリスには筒抜けなのかもしれないが、それでも僕には言わなければいけないことがある。

僕はまた、立ち上がる。

「アリ」

「おお。ありすにのあか。出番終わりかの？」

「なんで僕、じゃなくて俺は、見知らぬ人にご飯をご馳走しているんだ……」

タイミング悪く登場したのは、王様の格好をした友達とタキシードのような正装に身を包んだ見知らぬ男子生徒だった。タイミング

の悪さはアリスも感じたようで、目を細めなくなるような舌打ちを聞かせてくれた。

「なんじゃ。怒っとるのか？ 失敗でもしたか。それなら、ほれ。このたこ焼きでも食って元気を出すのじゃ。校庭の端のところの屋台のは、なかなかうまいんじゃぞ」

「いらないわ。大人しく一人で食べてなさい。というかあんた、色々買い過ぎよ」

差し出されたタコヤキを拒んだアリスは、男子生徒の腕いっぱいには掛かった袋を指差して毒づいた。

「このやつが買ってくれるというからのう」

「お腹空いてるって言うから……。一つくらいならと思って……。でもまさか、本当に全部回るとは……」

「サクラがアホなのはよくわかってるけど、買ってあげるあんたもあんたね。嫌なら途中で逃げればよかったじゃない。こんなポンコツなら、いつでもできたでしょうに」

アリスの言葉は、魔女よろしく言霊が込められていて、誰に対しても鋭利だった。

一方、男子生徒の方は対照的で、なんの悪気も後悔もなさそうに頬を掻くだけだった。

「はははは……。美味しそうに食べてくれるので、つい……」

「ぬっはっはっは！ 聞いたかありますよ！ こやつの方がポンコツじゃ！ ぬははははっ！」

「ささ、さすがに、それはっ、失礼だようサクラー……」

「ああーっ、いいんだいいんだ。僕、じゃなくて俺は。お腹が減っ
てお姫様が機嫌を悪くするのも嫌だったしさ？ ははははっ」

「お主はいいやつじゃのー！ ぬっはっはははは！」

「はあ……。なんなのよこの茶番。ノア、もう行きましょ」

「う、うん」

楽しそうにしている四人に割って入るような性分ではないが、そんなこと、気にしていられなかった。

極めてアリスに向かって、僕は潰した声を張る。

「ありがとう」

一瞬、立ち止まったと思ったけれど、振り向いたのはノアとサクラだけだった。

それでも、伝えたいことが伝わったという確信は、そこはかたなくあったと思う。

僕の声に気付いたサクラと付き人のような男子生徒が、てくてくと足軽に近づいてきた。サクラは、まじまじと僕たちを見下げて最後、繋いでいた手を一瞥してからニンマリとした表情になった。

僕は平常心を装って、熱くなつてゆく顔を小照明のせいだと責任転嫁する気持ちで、それに応えようと思った。

「サクラもありがとう。迷惑かけてごめん」

「ふふつ。わしいいいんじゃないよ。ちゃんすはあるって、お主に言ってもらえたからのう」

「チャンス？」

「こつちの話じゃ。それよりも、このやつにも礼を言わんとじゃぞ」大股で一步横にずれると、サクラは男子生徒の背中を押して、僕の目の前に突き出してきた。見知らぬ人というのもあって、気持ち的に少し身構えはしたが、サクラと仲良くなっていることと、ふわりと漂ってきた屋台料理の芳香のおかげで、それはかなり軽減されたと思う。

「え、えつと」

僕としてのファーストインプレッションは端的に、優しそうだった。

かえって特徴付けをさせないような整った顔立ちと、柔らかくも芯のある声色。それでいて線の深い輪郭は、他と一線を画す雰囲気。言わば『モテるオーラ』のような何かの存在感をひしひしと感じさせる。

僕が言ってしまうのは、今はあまりよくないことなのかもしれないが、それこそ“本当の王子様”のような出で立ちではあった。

「アレンだよ」

「え？」

「こいつの名前」

「リズ、知ってるの？」

リズから『こいつ』なんて呼ばれ方をされたら、僕は絶対に部屋に引き籠ってしまうだろうと思うけれど、アレンと呼ばれた男子生徒はそんなこともないらしかった。

「んーん。知らない」

「なっ、酷いよりズー。同じクラスじゃないかー」

「あ。そうなんだ。僕はルート。リズの」

「いいよー！ こんなやつに自己紹介なんかしなくてー！」

「ルート、さん……」

「ほらあ。覚えちゃったじゃん！」

「まあまあ。減りはしないから」

僕のことを『ルー』と呼んでくれるのも、『お姉ちゃん』と呼んでくれるのも、ずっとリズだけだったから、そこは不安になったりしなかった。リズは頬を膨らませて、大変に不満そうであったが。

でも、それにしても、リズにもちゃんと、こういう優しい友達がいて安心した。その感情は結構強いと思う。

「えっと。アレン君？」

「……………」

「アレン君？ どうかした？ 僕の顔に何かついてる？」

「い、いえっ！ えっと、何でしょう」

「あ、うん。アレン君は、一人で文化祭に来たのかな？」

こういう質問をすると、先輩になったような気分になれる気がする。

少し新鮮だ。

「い、いえっ。リズと二人でデ」

「嘘つくなっ！ 仮にそうだとしても、私はアリスお姉ちゃんを見に来たんだから。あんただって、なんか、誰か探しに来たんじゃ、なかったっけ……？ あれ？ 違うっけ？」

学校が同じだった頃、何度か先輩後輩の絡みを目撃することはあったが、大概は女子どうしだったので、こういうリズは珍しく感じる。

本当に物怖じしないんだと、少し複雑である。

「僕、じゃなくて、俺の姉さんのことだね。リズが見たいって言うから、僕……じゃなくて俺が、連れてきてあげたんじゃないか！」

「だっけか。ていうか、あんたにお姉さんなんかいたんだ。初耳」

「えっ。ちよつと、もう。リズが気になるって言ったんじゃないかー！」

「まあ、あれんよ。そうぶりぶりするでない」

「あ、うん、まあそっか。男っぽい恰好してるリズも見れたし、良かったかな」

「見んなっ！」

舞台裏は平和そのものだった。

しかし、表舞台はそうもいかないのが、僕の物語だ。

「逃げた王子を探せっ！！ 邪魔者は殺して構わん！！」

城に潜入した召使いが、王子様を連れ出すシーン。王子様は召使いに惹かれて、閉ざした心を徐々に開いていく。召使いは王子様の人柄を知って、城から救い出そうと心を決める。道中に人助けをした召使いの思いに応えるように、城下町では対国王の狼煙が上げられ、二人の逃亡の助長をする。

そういう展開が待っている。待っているはずだ。

いや、僕にはもう、この先のストーリーはわからない。きっと、誰にもわかり得ない。

でも、僕はこの先へ進むのだ。

「ほれ。そろそろじやる」

「頑張つて。二人とも」

僕は僕であり、“僕”でもある。わたしはわたしであり、“わたし”でもある。僕も、“僕”も、わたしも、“わたしも”、誰しも、物語を進めることができるのだから。

「いたぞっ！！ 追えっ！！ 侵入者も一緒だっ！！」

わたしはリズとアイコンタクトをとって頷いて、それから同時に立ち上がった。

わたしが身に纏ったドレスは、あまりに白く長く、そして温かかった。それは王子様が、布一枚ではみすばらしいからと、わたしに着せてくれたものだからだ。

「それじゃ、行こっか。お姫様」

「うん」

わたしはリズの手を引いて、もう片方の手でドレスを撮んで、世界へと駆け出した。

初めはゆっくり。でも、中ごろにはスピードに乗って。わたしは、洗われるような心情とともに、確りと静かに大地を蹴った。

「ここまで来れば大丈夫でしょうか」

僕は木陰にしゃがんで王子様に言う。

「そうだね。暫くはこの影にしよう」

王子様はそう言って、わたしの体を自分の方へと抱き寄せた。

「もう半日はこうしていますね」

僕は、少しどきりとしながら、王子様に問いかける。

「本当にすまない。限界になったら、私のことなど放って逃げてくれよ」

ぶつきらぼうに口を動かす様は、どこか寂しそうにわたしを求めているようだ。

「絶対に嫌です！ あなたが『一緒に逃げよう』と言ってくれたのだから。一緒に、なんて初めて言われたから……」

だから僕もまた、あなたを求めているのだと、伝えたかった。

あなたは微笑んで、わたしの手の甲にキスをくれた。

「ありがとう。君のような人に、もつと早く出会いたかった」

そんなことを言い添えられると、死期を悟っているようで不吉に思えた。

「そんな、これから死ぬみたいなこと……」

わたしが言うやいなや、王子様は徐に懐から赤い球体と指輪のようなものを取り出した。

その球体は確か、暗闇の樹林で出会った魔女に貰ったもので、初めて王子様に会った時に手渡していたものだった。指輪の方は、城から脱出する際に王子様が持ってきたものだったか。

王子様はわたしを一瞥してから、遠いところを見るような瞳で言った。

「城へ侵入したのは、私が協力を煽った怪盗。私は城からの脱出を試みるも、道中で裏切りに会い、殺害される。怪盗は初めから金が目当てで、私は利用されただけ」

「え……？」

「君を自由にしてあげたい」

わたしが首を傾げると、王子様はまた、安らかに微笑むのだった。わたしは、早く林檎を森へ投げ捨てなければいけないと気付いた。その笑顔は、いつしかのわたしと同じで、絶望に染まっていたから。

「ま、待って！ ダメっ！」

僕が手を伸ばした時にはすでに遅く、黒ローブの意志は果たされ

ることとなる。

林檎は地面に転がり、それを折っていたはずの僕の手は、今は王子様の背中を支えている。

「どうして……っ！？ どうして、こんな……っ。あああ……っ！」
わたしの中には、悲しさよりも先に怒りが芽生えていた。

どうして、その林檎が毒林檎だと知りながら口にしたのか。どうして、それでわたしが自由になれようものなのか。そしてどうして、一緒にいてはくれないのか。

そんな疑念が、憤怒と区別がつかなくなるほどに溢れ、後出した悲哀の念にくどくどと絡みついていった。

「怪盗は、処刑される……ことになっていた罪人の……はあはあ。

……罪状を、『王子誘拐の主犯』に書き換えておいたんだ……。これで……私がいなく、なれば……君は、どこへでもゆける……はずだ……」

頼りがいのあったあなたの肩は、こんなにも弱々しく上下して、わたしを大層不安にさせる。

「冗談であるなら、またわたしの手を取って、ここから連れ出して嫌っ。やだっ！ どうしてっ！？ 一緒について、約束したじゃない！！ いなくならないでよっ！」

唐突に、視界が歪んだ。

そして世界は拉^{ひしゃ}げていって、僕を押し潰そうとした。

こんなこと、生まれて初めてだった。

怖い。

怖くて、怖くて、どうしようもない。もっと、あなたの息吹を感じたい。わたしの息吹を感じて欲しい。あなたが死ぬのが、どうしようもなく嫌だ。生きていて欲しい。一緒に、生きていたい。

僕はそんな感情の洪水の中、必死であなたの手を、体を探した。

「私はどこにも、はあはあ……いかないよ……。ああ……。君はどこにいるんだい……。いたら、手を……。手を握っては……。くれないか……。？」

あなたの手は、わたしを探していた。その瞳にはもう、何も映らないのかもしれないけれど、わたしはあなたの手をとって、潤む世界に繋ぎ止めようと強く握った。

「ここですっ！　ずっと一緒にいます……っ。だから……！！」

自分の指の関節が外れるのではというほど握った。過去の懲罰が想起されたけれど、そんな痛みは今、とても些細な事だった。

肉体よりも、心から悲鳴が聞こえるのだ。

骨と血肉が乖離してしまいそうになるほど粗の無い白さで、魂との結合を一気に剥がしてしまうような感覚。自分の中にある“無”の部分が、自分のすべてを染め上げていく感覚。

追いかけても追いかけても追いつかない、絶対の拒絶。

それはただ漠然と、僕の前に。

「……………」

それが今度はどうしようも無く痛くて。耐えられなくて。

わたしは泣いた。

「うわああああああ　っ！！」

多分、この森は知っているのだと思う。

僕が屋敷を飛び出してきた時に、僕が教えたから。

あなたの胸で泣いたら、案の定何も聞こえなかった。でも、愛した温もりはまだ生きていて、わたしはそれをかき集めるように、ただただ強く体を揺さぶり抱いた。

静かだった。

聞こえたのはせいぜい、木々が戦ぎ、息吹く声。

でも、もう一度だけ決断できる力を、暗闇の樹海が与えてくれた気がした。

「一緒じゃなかったら……っ！　どこに逃げたって、意味が……無

いんですっ!!」

いや、これは違うか。

あの時僕の投げかけた問いかけに、今、答えをくれたのだ。

犠牲は、犠牲しか生まないということ。

あなたの言葉を奪ったのがわたしなら、わたしはあなたに言葉を奪われる。そうすれば、それは幸せに変遷して、果ては無へと帰す。森に存在する自然淘汰の摂理と、同じこと。

そうやって、世界は差し引きゼロに成り立っている。

「だから……」

わたしは物言わぬあなたと、口づけをした。

これで、わたしもあなたも言葉を失った。

幸せだった。

手を繋ぐ、傍にいる、抱きしめる。そして、口づけをする。

それはお互いの選択が、ちょうど重なる時。

犠牲は犠牲を生むけれど、互いが互いを思っていれば、きっとそこには幸せが生まれるのだ。それが循環することで、世界は幸せで一杯になる。

それが、僕の出した結論なのだと思う。

「君は幸せかい？」

「はい……っ！ 幸せ、ですっ！」

そしてわたしの小さな世界は、終わりを告げた。

ただの召使いである僕が、お姫様になるということ。

そんなことは、天と地がひっくり返らなければ有り得ないけれど。諦めずに、一途に、只管に誰かを信じ積み重ねることで、天と地はひっくり返せることだってある。

それはまやかしかもしれないし、最後には逆に何かを失ってしまいかもしれない。

目に見える犠牲は、恐怖として心を蝕む。立ち向かわないことが正しいとさえ思えてしまうような、強大な力積がある。実際、流れにのれば間違う事はない。

でも、生まれた時から、僕は召使いだっただ。

それはもう、そういうものなのだとして胸に、心に刻みつけられた。

だから、いざ立ち向かうことを強要された時、苦しかった。見なければよかったことを目の当たりにしたような、どうしようもない絶望感に、儂い感情が埋没した。

間違ったことをやっている自分が、とてつもなく惨めに思えてきて、また逃げようと思った。そうする方が確実に楽だから。

案の定、それは楽だった。

夢を見ることもなく、ただ床の凹凸を覚える。不思議と、窓は絵画の一つに見えてくる。課せられる体罰は、自分を清めるための儀式になる。

そうしているうちに、楽は体に染み付いた。

この世にあるすべてが楽であればいいな、とも思った。

ふと気づいた瞬間だった。

それって幸せかな。

ただ漠然とした、“楽”という作業があるだけの世界。すべてが絵画と変わらなくて、色にも配役にも意味がある。その意味がすべて。

その中には、偽りしかないということ。

絵本の中では、“普通”王子様はお姫様にキスをするものだ。それが当たり前で、誰しもが理解する事実。

でも、僕は知った。

それは幸せの手段であって、幸せそのものではないと。僕にだって、間違っていたって、幸せを感じることができると。

確かに、王子様はお姫様になることはできないし、お姫様は王子様になったりしない。願う役割になれないことだって、あるのだ。言い換えれば、そこに幸せの犠牲があるのだから、きっと償うこともできるということ。

そういう、想いの力が存在する。

だから僕は、僕であり、わたしでもある。

そしてあなたは、あなたたり得る。

お姫様に憧れる二人の少女が、互いの罪を認めて赦して。過去の涙を思い出して、笑い合えるくらいに言葉を交わして。

そうして漸く、この物語は幕を閉じることができる。

次に言葉を紡ぐなら。せめて、罪滅ぼしの懺悔でなく。

「好きだよ」

密かにそう言って、もう一度だけお姫様を抱きしめた。

今日は、僕の誕生日だから。

L o o t e M o t h S t o m a c h (後書き)

【あとがき】

本作に隠されたトリック「ルートの性別」が、解決した今章。いかがでしたでしょうか？

ルートとリズだけでなく、周囲でそれをみていた人たちも、きつと成長できたと思います。吹っ切れた、というよりか受け入れた感の強い決意ですが、まだ不安定な部分もあると思います。

書き始めは第一章だけで終わろうという短い話の予定でしたが、どうやらもう少し続けていけそうです。とある夜にパツと思いついただけなのに、すごい。

実はトリックはもう一つあります。

ルートモストマックは、常にそこへ向かって進んでいます。

ルートの性別と同じように、伏線はすでにたくさん書いております。

心理学者クリエイターである私のもてるすべての知啓をもって、それは成っています。

読者の皆さんの興味が冷めないよう、シナプスを刺激できればなと思ったり思わなかったり。

次章のころにはきつと、夏も明けて秋。

芸術、運動、食事、恋愛……色々なものが盛んです。

「贖罪の今章」……。これまでも結構重い話が多かったので、次章はちよつと羽休めでもできればと。

それでは三章お疲れさまでした。

次回をお楽しみに。

深まる秋、親睦を添えて。(前書き)

【まえがき】

第四章始まってみました。

まだ描き途中ですが、第一話だけ前のめりで登場です。

季節は秋口あたりです。

ここから読むと言う方のためにキャラ紹介はしていますが、章が進むことに浅くはしています。是非是非、三章から読んでみてくださいませ(なぜ最初からでないのか)。

ではよいしょ。

深まる秋、親睦を添えて。

夏を定言するかのよう開催された政も無事に終わりに、秋の迫りとともにそれらの熱気も次第に深けていった。

その様子を、祭りの中心で見ていた僕は、いたく物悲しく思ったけれど、これからのアカデミー生活に待っているであろうイベントの数々への期待の方が程強く心中占めていたのも確か。

四季のある温帯に属する、このカシミールヤ国の冬は、寒い方だ。

今年はどうか今年はどうかと、毎年気になる時期ではあるが、氣象学者の権威によれば例年通りということらしい。ワイシャツの上からカーディガンを一枚羽織るだけで済むのにも合点がいく。

この時期、教室へ行くと、大概が重ね着をしているというのが、所謂例年通りであったけれど、今年は アカデミーは少し違っていた。

頭から毛布を被っている者もいれば、夏とほぼ変わらないスタイルを通している人もいる。にもかかわらず、クラスに統一感も疎外感もないのがまた面白くて、少し笑えた。

アカデミーは、隣国や遠くの国から通学するものもいるから、冬の寒さに慣れている人と慣れていない人で差が出るのだろう。

これからは、この光景が秋恒例となっていくのだと思う。そんな恒例の中、一際ホットな話題があった。心寒い者もそうではない者も、皆こぞってその話題に乗っかるので、秋だと言うのにまさしく夏のように熱狂し、飛び交う声が渦を巻いていた。

興味を示さなければきつと、渦の外側はきつと、季節の通りに秋恒例が広がっているのだろうけれど、僕の位置からはどうにも抜け出せそうになかった。

「で？ ホントにしたの？ リズちゃんと、ちゅー」

僕は何度目かの溜息をついて、飛んできた声を力なく打ち返す。

「もっつ、しましたってば……。ほんの少し、触れただけですけど

……」

「うひゃあ！ 学校でちゅーするなんて……。つ。ワタシ、そんなの考えられなーいっ！」

僕の溜息の数と同じだけ、そんな仰々しい返事が部屋に木霊するので、さすがに雰囲気も飽きっぽくからからとしている。限りなく沈黙に近いと言ってもいい。

望むレスポンスがなんであるのか、僕には皆目見当もつかないけれど、そろそろやめてくれる頃合いだと思う。

「はっはっは！ からかってごめんねー。でもほら、今さ、学校中その話で持ちきりでしょ？ そんなで、情報通のワタシも真実が気になっちゃってさー」

「ははは……」

苦笑する僕の肩を、会長はポンと叩いて持ち上げてくれる。

僕から拝めるのは会長の満面の笑み。美人寄りの面持ちではあると思うが、闊達な身振りと落ち着いていてふくよかな声が、ちょうど人情を演出しているようで親しみやすい印象を与える。肩まで一本結びは左肩に乗って鎖骨に流れてきていて、気品すら漂っている。まさに“みんなのお姉さん”のような、絶妙な雰囲気。

そんなお姉さん生徒会長の口調は、どこか姉御のようで。

「そんな気にすんなー。いくらディーブだったからつつたってな？ 皆も緊張しちゃっただけなんだからな？ きつとな？ うん」

「うっ」

気にしているのは僕よりも周囲の人の気はするけれど、痛いところを突かれて反論できない。

恥ずかしながら、あれは確かに、そう言われても申し分ない長さ

だったと存じている。

「それで、皆がルートくんのことを見損なうとかなんか、絶対ないからさ。ワタシが保証するよ、そこは」

「会長……」

真剣な眼差しで僕を見たり、紛れもない事実を突いてきたり、フオーしてくれるのか見損なっているのか微妙なラインだった。

それでも僕自身会長を慕っているから、その言葉を信じてみようと思えた。

会長の中ではとりあえずひと段落したのか、仕上げと言わんばかりに僕の肩を二度、ポンポンと軽やかにタッチして、所定の席に戻っていた。道中、書類がばさばさと地面に落下さえしなければ、少しばかり頼りになる会長として再び、僕の心に映ったかもしれないの。

僕は会長の後を追うように椅子から立ち上がって、散らばった書類を元の場所に戻す。

「そろそろ片付けないとですね。会長」

生徒会室の全貌を見渡しつつ、申し出してみる。

「えっと、一体何のことかなっ……?」

「会長……」

できるだけ目を細めて、含みのある返答を試みる。

「なあんもうっ。い、いいじゃないかこのままで！ 何がどこにあるのかわかればいいんだろっ？ じゃあ大丈夫だよ！ ははははっ！」

「僕はわかりませんけど」

受け答えしつつ思ったのは、妹と話をしているようだ、ということ。

そういう経験則ミニコトワザがあるから、僕は大概、会長に口舌で負けない。

「じゃあ、ルートくん掃除してー。お駄賃上げるからー」

「それだと会長がわからなくなっちゃいます。なので一緒に片付けしましょう」

「えええええ……。んじゃ、明日ねー？」

「昨日も言つてましたよ。それ」

「そ、そうだったけ？」

「そうである。」

そして、いつも通りであるならば、次に会長が取る行動は、気を取り直すことだ。

「まあ、そのうちまた思い立つよ。気を取り直して、今日の分の業務やっちゃおう！」

「ははは……」

逆上しないあたりは妹と違って少し拍子抜けするけれど、それこそが会長を会長たらしめているとも言える。会長というよりか、ルリという人間をか。

僕はまた席について、静かに作業を始めた。

本日の作業は、生徒会発行のアンケート調査の集計だ。学校をより良いものにするために行うものだが、全校生徒の分数え上げなくてはいけないため、意味や甲斐はあるのだと思う。何より、その結果を見る人がルリ会長であるから、価値は大いにあるだろう。

学年、男女、一問一答番号形式全十問、それらの答えをすべてメモしていく。

書き写す手間はさすがに惜しいので、別紙に対応表を作って、どこにどのくらい票が入ったかをカウントするやり方で進めていた。

最初のうちは、一問一問入念に目を通してチェックしていたが、慣れてくると、一目で十問の答えを記憶して、後は学年と性別を確認すると言う方法で楽できた。ルリ会長がはじめに教えてくれたやり方だった。

幾らか余裕ができると、作業しながら会話することもできた。

それだから、ルリ会長のように沈黙を苦手とする人の場合は、作業片手間にお喋りをするのが常である。いつの間にか、メインが入れ替わるのも常である。

「そう言えばさー。来月って、シルバーウィークあるよね」

僕も作業をしながら返答することができる。

「シルバーウィーク、ですか？」

シルバーウィークとは、休日と祝日が重なって連休になることだった。ゴールデンウィークから派生したネーミングらしい。確か。

それはそうとルリ会長らしい話題だなと率直に、心中笑った。

「ルートくんは、シルバーウィークの予定ある？ リズちゃんとかするの？」

「今のところ予定はないですけど……」

「予定はない、ということはおうちデートだねー？ ひゅーひゅー。

『保健の問題がわかんないのー』』どれ、僕が教えてあげるよ。カラダでね！』……とかやるんだろー？ ええのうええのう。楽しそうじゃのう。ぐふふふ」

まあ、その通り、大量の宿題でそのほとんどが消化されてしまうのだろ。妹のリズも、僕も。そう思うと、長期休暇の魅力も半減する。

残った半分は、リズと一緒に宿題ができるということだろうか。

だから、ルリ会長の冷やかしも、あながち間違っではないなかったりする。

これ以上詮索されるのも不服なので、会長の語調に肖って話題を変えてみる。

「そう言えば、ずっと寝てますね」

「ん？ ああ、サクラちゃんね。そうだねー。よく寝るねー。いいことだ」

向かいに座って机に突っ伏しているサクラは、僕から見れば紅茶色の毛玉だった。赤毛の合間、肩に覗くセーターは桜の薄染めで、こだわりを感じる。髪を辿れば、鼻の前に雪崩れた先端のあたりが、さらりと寝息で動いている具合が何とも可愛らしく、起こすに起こせない。

作業の進捗を考えるなら起こさない方が無難だろう。

でも、普段威勢が良い分、こうして静かなところを見ていると、

逆に構いたくなる。

何か悟ったのか、会長が「起こす？」と提案してきた。それはサクラが可哀想だったので、「大丈夫です」と皮肉交じりに返しておいた。

その後、暫くサクラの寝息をバツクに、作業に没頭した。

そして直ぐ、ルリ会長が大欠伸を一つしたところで、僕も集中が切れた。

「ところでさ。ルートくんは、シルバーウィーク何すんの？」

「またその話題ですか……」

「ごめんごめん。違うの。予定ないなら、ワタシが誘ったら遊んでくれたりとかするかなあ、と思つてさ。いや、本当に予定ないならでいいんだけど」

ルリ会長らしからぬ遠慮を感じて、僕も少し自信が無くなる。

「あ、いえ、大丈夫だと思います。予定は多分、無かったので」

「お、おう。そっか。ありがとう」

「全然です。それより、何するんですか？」

ルリ会長の人柄というのは、半年ほど側近だったのであらかた分かつてはいるが、立場上は役員の付き合いだ。その立場が無くなった場合のことを考えると、急にルリ会長を掴めなくなった。

生徒会長ルリ・リリアムであれば僕をどうするかではなく、一人の女の子としてのルリ・リリアムが僕と何をするのかということ。少し考えただけでは、結論にありつけない。

「そうだなあ。デートする？」

「ええと……。ただの別称ですか？」

「うわあん、そう言うこと言うのやめてよお。悲しくなるじゃんかー。女同士でデートしてもしょうがないんだよー。ワタシは別に、そういうんじゃないしなー。やっぱ男だなー」

「か、会長は男好きですねー……」

仰々しく目を細めると、ルリ会長は満足そうにウインクしてきた。男性の前だと極端に委縮してしまう性に合っていない、何とも緋背な

対応である。

それは一旦おいておくとして、ルリ会長のデートコースというのが気になりはする。

「会長は、どこに連れて行ってくれるんですか？」

「あ、それ聞いちゃう？ 聞きたい？」

そんなに言われると、逆に聞きたくなくなってくるから不思議である。

とりあえず頷くも、苦笑は免れない。

「やっぱり定番は、近くのモールだよー。色々見たり、色々食べたりできるし、一日遊べると思うよ。遊び終わった後の、アフターフオローも完璧だしね」

「アフターフオロー？」

「アフターフオローだよ。わからんかね。カップルが一日遊んで、辺りは真っ暗。帰り道、周囲に立ち並ぶピンク色の宿泊施設……」

ミドル時代、似たような話を男子たちがしていた気がする。“遠い方”がどうのこうのと、ルリ会長同様耳を赤くしながらも。

「会長、耳赤いですよ」

「なな、なんだとっ。そんなことはない！ ワタ、ワタシは決して産とかじゃないからなっ！？ ぱりっぱりのベテランだ！」

「その言葉の方が余程狼狽ものだと思いますけど。というか、そんなところに連れて行って会長は僕をどうするつもりなんですか……」

「そんなもん決まっつるばい。とりあえず脱がす。そして、見る！

ワタシは見たい！ ルートくんの体が！」

ルリ会長は目を大きく見開いて、何かを求める犬のようにけたたましい。どことなく、僕自身をも辱めている気がするが、いちいち頓着していたら会長のスピードは収まらないだろうと踏んだ。

会長は楽しそうだし、僕的には満足いく帰結だと思った。

「あ、ありがとございます……？」

スタイルが良いと褒められたと割り切って、また別の話題を探そうとした矢先。

「ふぁーあ……………」

遊び疲れて寝ていたイベントメーカーが、再起動した。

「お。起きたねサクラちゃん。おはよう。一八時だよ」

「なにや……………」と柔らかい声を発したサクラは、瞼を擦ってまだ眠たそうにしている。危惧されるのは夜眠れなくなるのでは、というところだろうか。さすがに夜泣きをする心配はないにせよ、似た感覚である。

「何の話じゃ……………」？」

サクラは僕とルリ会長の顔を交互に見て、言う。

欠伸混じりながらも話題を気にするあたり、同色感は強いけれど驚くなかれ、サクラは生徒会役員ではないのである。悠々と生徒会室の一席を占領して、居眠りまでしてしまうくらいに溶け込んでいるが、無関係の生徒なのだ。

それどころか、ただでさえ人手の足りていない生徒会の仕事を増やす厄介者ですらある。

それでもサクラがここにいるのは、僕とルリ会長がサクラを必要としているからなのだろうと、分析を交えて語ることができる。特にルリ会長は、サクラのことをとても可愛がっていて一番弟子のよくなことを宣っていたのは記憶に新しい。サクラ自身も、僕のことを“特別視”しているようで、僕や僕の周囲の人たちに色々と手を焼いてくれる。

一言でいうと人情家で、持ち込んでくるトラブルも、言ってしまえばその賜物なのだと理解できるのだ。

それが普遍的な日常に彩を添えるようで、最近では、トラブル対処が少し楽しくもある。

「今度のシルバークウィーク、何するかって話だよ」

「しるばーういーくとな……………」？」

唐突に、眠気が醒めたかのように、サクラの瞳がギラリと冴える。

結果的に楽しいトラブルも、予感の段階では底無し不安でしかない。

息を飲んで、サクラの言葉を待つ。

バン！ と大きな音を立てて、サクラが席を立った。

勢いよく立ち上がったために、椅子が後方の書類棚に激突して煩雑に置かれた書類の一部が床に散った。その様子があまりに急だったので、僕もルリ会長もビクツと反応して、揃って目を丸める。

ごくり、という音が沈黙を割いた。

「お泊まりパーティじゃ！」

一瞬、何らかの間があつて、それから「お、おおー？」というクエスチョンの後、「おおー！」となつた。実にサクラらしい提案だと思つると同時に、波乱の幕開けを予期させた。

「お泊まりパーティかー。いいねー」

「しかも、りぞーとでじゃ」

聞き慣れない単語を追うように、問うてみる。

「リゾート？」

「そうじゃ。りぞーとじゃ。海と砂浜と、その他色々のりぞーとじゃ。それなら、るりの見たいと言つた、るーとの体も拝めるじゃろうて。水着でも風呂でもものう」

「おおー！ それは合法だし、いいね！」

「じゃー」

観点も規模も趣旨も、色々とおかしい気がするが、ことサクラに限ってはそうでもなかった。いや、僕を含む『願いの夢』を知るメンツからすれば、別段飛び抜けておかしな話でもないと言う方が正しいか。「どんな『願い』も叶います」と夢の中で言われ、その願いが本当に成就してしまうという都市伝説の渦中にある僕たちから

すれば。

サクラは、それで『魔法を使いたい』と願ったらしかった。それには、入学したての頃、僕の親友であるアリスにとっ捕まって白状した経緯がある。

アリスの彼女で、僕の友達でもあるノアという少女も、その時に『アリスにすべてが伝わりますように』という『願い』を叶えてい、と暴露したおかげで、その都市伝説による力は公のものとなった。

公とはいつても、それを『願いの夢』の力だと認識しているのは、僕含め、アリス、ノア、サクラ、の四名だけだから確証はない。だが、三名がその力を所有していることがわかって以上、少なくともこの世界のどこかに所有者が存在していても何ら不思議はないと言えるのだ。

危険に使うと思えば、危険にも使える力だからこそ、慎重に付き合いたいものではある。

そういう意味で、「気軽に使うけれど、目的は遊び」というサクラは良い模範と悪い模範を同時にこなせる、最高の先駆者と言える。「でも、サクラちゃん。リゾートなんてどこにあるの？ それに秋だし、リゾート地も寒そうだよ」

「安心するのじゃ。リゾートとはいつでもリゾートとなのじゃ！」
「ははは……」

そういう意味合いも込めての僕の微笑みは、途轍もなく苦いと思う。

そんなことはいざ知らず、興味を纏ったルリ会長の瞳は熱い。

「そんでそんで！ リゾートはどこにあるの!？」

「わしの家からいけるのじゃ」

「サクラちゃんの家？ 木の上ってこと？」

「そうじゃ。ただし、リゾートとに辿り着くには二時間くらいかかるのじゃ」

「よくわからないけど、二時間あれば行けるんだね!？」 リゾート

にっ！」

「行けるのじゃ」

サクラの摩訶不思議な話には異様な説得力があるので、ルリ会長も信用しているのだろうけれど、それもそれで随分と異様な寛容さだ。

ツッコむ気力も無くした僕は、黙々と作業を続けながら二人の間に流れる混沌を心に反芻するだけだった。

四十六枚目が終わったところだったろうか。賑やかな話声が止んだのは。

ふと顔を上げると、二人の視線が僕に刺さった。何かを求められているようだった。

「えっと……」

僕は二人の顔を順番に見て、瞳の輝き具合を比べた。四十六枚の校閲の間に何があったかは定かではないけれど、二人の熱意が同じ方を向いているのは確かだった。

僕は作業がひと段落した意味で、一つ息を吐いて、もう一度二人の顔を見据えた。

「来るよね？」「来るじゃろ？」

もとより、求められたことを否定したり断ったりするような性分ではない。何に、どこに、何をしに、いつに、などというのは僕には存外関係のないことだ。

友達、大切な人、エトセトラ……その人たちがいるのなら、僕はそこに行くだけだ。

僕は小さく笑って頷いた。

いつも通りに遠慮がちに。

深まる秋、親睦を添えて。(後書き)

【あとがき】

季節は秋の入り口ということで、涼しいと寒いの間くらいのが温ですね。

よく、“秋は の季節”と言われますが、旬とは裏腹に、人間は明らかに適していません。

食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、恋愛の秋、エトセトラ……。

リゾートの話など持ち上がっておりますが、はてさて。

ルートたちの秋は一体何に染まるのでしょうか。

続きをお楽しみに。

四つ折り、恋文を添えて。(前書き)

【まえがき】

お待たせしました。新章続きです。
ちよつと青春します。

じじじ。

四つ折り、恋文を添えて。

「ただいま」

玄関の扉を閉めると、外気との温度の差に秋の深け込みを改めて感じさせられる。文芸家の父が性に合わない薪割りに悪戦苦闘していたのは、ついこの間の休日のことだったか。

学校の噂の渦中でもみくちやにされてホットなのは確かだが、気温とそれはまた別の話だろう。

「おかえりー」

靴棚に靴をしまおうとしていると、奥の居間から体操着姿の妹が出てきた。

「うん。ただいま、リズ」

大きくて丸い瞳、白くて柔らかそうな頬、それ以上に柔らかそうな唇、サラサラのセミロング、背丈は僕より低いがそこまで変わらない。可憐にも凜麗にも受け取れる細い輪郭と、包み込むような温かくて優しい声。勉強も、スポーツも、芸術的センスも、才色兼備たらしめるに必要なものは大体持っていた。

足りないものを先に述べるならば、「今日も体操着だ」ということくらいか。

「いいじゃん。動きやすいんだよ、だって」

ハタハタと襟を靡かせて、体操着の機動力をアピールしてくる。

僕は、色々な意味でドキドキしながらも、「知ってるよ」と流すに留める。

自慢の妹であることは確かであるが、このようにずぼらなので、時たまひやひやさせられる。階段の下に僕がいても、全く気にして

くれないという事例もあった。

幾度となくしている注意は、真に受けてもらえず、からかわれて終わるといふくんだり常習化しつつあった。

小突いたりして警告できるほどの度胸が無い僕にも、それなりに問題はあるのだからうけど。

「今日はトマトスープだよ」

「うん。じゃ、手洗ってくるよ」

廊下の途中でリズと別れて、僕は洗面所に入る。

手提げを床に置いて、手を洗う。外と同じ温度を肌に感じながら、丁寧に、爪の隙間まで洗い流す。指と指の間を洗っている時、ふと顔を上げて、目の前の鏡を覗いた。

何を反射しているのか、あるいはただの虚像なのか、それは誰にも証明できないけれど、そこにいた僕の顔は仄かに赤く火照っていた。僕は外気を顔にもう一度浴びることで、平常心でいられた。心拍数が落ちないのは、水を浴びた副作用だと思いたい。

やっぱり隠せないな、と独り言ちた僕は、背後を気にしながらも一旦自室に向かった。

荷物を置いて、部屋着に着替え、ベッドに飛び込んで深呼吸をした。半身を起こして、顔を両手で覆った。ベッドが冷くて、頭が冴えた。電気をつけていない窓越しの夜空には、高等級の星が幾つか瞬いていて、僕の心はすっかり僕から乖離しそうだった。

近頃、僕はこうして放心状態になることが多かった。特に家では急に痴呆がやってきたということは無いにしても、この状態下にある時は、本当に何も手につかないのだから、それ相応に近いものなのかもしれない。

病気と言えば病気だし、そうでないと言えばそうでない。

“恋は四百四病の外”^{しやくしよびょう}だとは、よく言ったものだ。

自分の中にある気持ちを抑え込もうとするとストレスになるし、隠そうとすると今のように気が散る。吐き出すには勇気がいるし、その勇気を求めるとまたストレスをため込んでしまう。

そう言ったやり場のない想いが、僕の心の中をぐるぐると蜷局を巻くように、いや、竜巻でも起きそうなほどに渦巻いているのだ。誰のせいなどという議論は後を絶たないけれど、今はそれ以上に“逃げられない関係”にあることが最大の悩みの種だった。物理的にも、精神的にも。

一切の気抜きをしなければ、僕はどうなってしまうだろうか。全く想像がつかない。

平穩無事な気もするが、その逆に修羅場になるような気もする。煮え切らない。

こういう悩みというものは、往々にして負の輪廻を引き起こすものだと、去年の冬辺りに思い知った気がするのだが。一人では解決できないのだということも、その時に。

であるから、“家”という環境は難しい。距離感が把握しにくい。「リス……」などと申し訳程度に気を緩めれば、すぐ。

「ん？ 呼んだ？」

「わっ」

「あ、ごめん。入っちゃダメだった？ ノックしたんだけどなあ。

……まさか、夕食前になんかしようと

「し、してないよっ」

モノローグの世界に飛び込んできたのは、ちょうどよくもちょうど悪くもリスだった。なかなか来ないのを心配して見に来てくれたのだろう。

勿論これは嬉しいことだけれど、でも、一人になれるタイミングを自分で作り出すことは、やはり、家という環境においては困難極まることが如実に証明されたわけだ。

しかし、そうやって一人になってはいけな……という堂々巡りがいけないのは重々承知なのだけれど。如何にもこうにも、である。

「どうしたの電気消して。具合、悪いの？」

「あ。うん。大丈夫。ただの考え事」

「ホントにー？ あのさー……。なんか最近多くない？ 帰って来てすぐ横になっちゃうの。やっぱり、こそこそなんかしてたり」

「し、してないって！」

病気だと言えば即刻心配されるだろうし、本当のことを言う勇氣もすぐには用意できそうもない。そのおかげで、四百四病の外に侵されているわけなのだ。

だから、誰が悪いということも無いし、病原があるわけでもない。要するに、僕だけが色々と“怪しい”ということになる。

「ふーん。じゃあ私、熱無いか診てあげるー」

「えっ……」

民間療法というかオカルトというか、とにかくその検温に信憑性は無いのだからうけれど、それ以前に、僕が正確な体温を保てるかが危ぶまれる。

リズがベッドに腰を下ろすと、ぼふつと僕にまで反発が返って来た。視界が瞬間的に上下したと思えば、目の前にはリズがいて、距離も近かった。

僕は思わず、無言で後ずさった。

「ちよつと、なんで逃げるのー。もしかして、私のこと嫌いになっちゃった？」

「い、いや、そんなはずないよ……！ 本当に熱があつたら移しちゃうしさ……！」

僕の全力がそれだった。

ここでリズを抱きしめて、耳元で本心を呟いたりすれば、とりあえず僕は色々と楽になれるのだろうとは知っていた。リズの答えが何であるうと、きつと。

でも、できなかつた。小さい頃から互いを知っているからなのか、形容しがたい気恥ずかしさというベールが何枚も折り重なって、僕の言葉は停止した。

結局、その程度の度胸なのである。

せめて、リズの一挙手一投足各々から、リズの本心を掴めはしないかと、短絡的にそう思ってしまった。

「大丈夫だってー。ん、ほら、おでこ」

「いやいや、うん、大丈夫！ 元気だから、僕は！」

「そ。やつぱり、私のこと嫌いに……」

「違う、それはずるいよ、もう……わかったよ。やる、やるから……」

…

「はい、よくできましたー」

僕は渋々、前髪を分けてリズと向かい合う。合わせられる器量も無いと存じているので、とりあえず目は閉じて肩には力を入れ、それから待機した。

カチカチ、という時計の事務的な音にできる限り耳を傾けて、布の擦れる音や息遣いなどを聞いてしまわないよう努めた。

カチカチより、ドキドキの方が五月蠅くなり始める頃。

ぺたつ。

何かが額に触れた。

熱いと冷たいの中間、湿潤と乾燥の中間、そんな独特な特性で、柔らかいの奥に少し硬い感触もある。まさしく、おでこのそれだった。

何かを悟られそうな気がして、思わず動けなくなる。息も止まる。それは、まるでサクラに瞬間移動をさせられた時のような浮遊感だった。

どこか危なげで、でもそれでいて何かを期待させるような大きな違和感。それを柔らかく包み込むかのような安心感と、決して拒めない儚さもある。

そんな、至妙な心地だった。

「熱、無いね」

「あ、うん。ならよかった。ありがとう」

「つてことは、やっぱりなにか……」

「し、してないってば！」

終始顔は熱かったはずだけれど、どうやらオカルトだったようだ。もしくは、リズの鼓動もまた、僕と同じだけ高鳴っていたのだろうか。

リズ的笑顔を見れば、そんな些事な逡巡は、さっきまでの葛藤と一緒に吹き飛んでしまう。僕はこの人が好きなんだという、整然とした気持ちだけが吹き飛ばずに残るのだ。

そうやって落ち着きを取り戻した偶然を、利用しない手はない。

「それじゃ、お腹も空いてきたし、そろそろ下に行こっか」

僕が勇んでベッドから立ち上がると、不意に右手を掴まれた。

「あ。ねえ。ちょっと待って」

「な、何かな？」

あくせく齷齪しつつも、リズに手を引つ張られて再び、自分のベッドに腰を下ろすこととなった。また舞い上がってしまったぬうちに、ケリをつけたい。

「気になって見に来たのもあったけど、そのほかに用事もあったんだ」

「用事？」と訝ると、リズは何やら懐からこそごと取り出して、それを「んっ」と、ぶっきらぼうに突き出してきた。

「えっと……」

「クラスの男子から手紙預かったの」

「僕宛てに？」

「そっ」

言われてみれば、それは丁寧に折り目のついたダイヤ貼りの手紙封筒で、良質な紙でできているらしかった。白くて飾り気のない、無機質なものだと思った。

リズから受け取って全貌を窺うと、それには差出人の名前も無く、僕へという宛ても記載されていなかった。

宛名も差出人も無いということは、その部分をリズに伝えてもらおうと頼み込める立ち位置にいる可能性が高いということ。察するに、手紙の差出人はリズと親しい人だろうか。

リズと親しい男子生徒に、僕は文化祭で出会った覚えがあった。

「もしかして、あのアレン君から？」

「おー、すご。え、なんでわかったの？」

感心した様子ではあったけれど、一瞬顔を顰めたような気もした。僕の察しの良いことが、何か不服だったのだろうか。

そう言えばリズはあの男の子のことを煙たがっていたな、と追憶しながら推理を披露する。

「宛名無いから、リズに「伝えて」って頼んだのかなと思って。そんなことが言えそうな男子っていうと、こないだのアレン君くらいしか出てこなかったから。思い当たる節」

それに、自分に興味の無いリズに手紙を渡せば、途中で中身を覗き見られることも無いだろうし。

「なるほど。それで、開けるの？」

「え？ あ、うん。開けるよ」

せっかく僕宛てに書いてくれたのだから、開けないわけにはいかない。マナーというか道徳というか、僕のために割いてくれた時間が少しでも有意義に昇華されたら嬉しいから。

依然としてリズは仏頂面だったけれど、そんなに何が嫌なのだろうか。

まさか。

本当はリズ、アレンを好きなのでは。それでやきもちを焼いているとか。

だとすれば、僕がこのダイヤ貼りを解くというのは、もしかすれば複雑な三角関係の火蓋を切って落とすのと同義なのではないだろうか。

そんなことになれば、僕に勝ち目はない。物理的にも、精神的にも、勿論“社会的”にも。

そう思うと、急にこの手紙の質感が鉄のように冷たく重く感じられた。リズの確認作業には、そういう意味合いが込められていると、かも十分あり得る。

当然、すぐには開けることができなくなる。

封筒の口に手をかけて数秒静止したのち、やはり確認するしかないだろうと心を決めた。

「えっと……。アレ君って確か、リズのこと好きなんだよね」

これも僕の精一杯だった。

婉曲に婉曲を重ねたような表現に、リズの頭上にもクエスチョンマークが浮かんでいた。タイミングという要素もあっただろうか。

「んー。そうなのかな。わかんない。私、モテるから、それでじゃないの。目立ちたがり屋だし、あいつ。ちなみに私は嫌いな」

「そっか」

自意識十分なことの再確認もできたし、嫌いだという事実も偶然聞き出すことができた。

これだけあれば、封を切るのには万々ではないだろうか。

「それじゃ開けるね」

破くのは忍びなかったので、糊付けされている部分を慎重に剥がした。

そして、中から出てきたのは一枚の紙。これまた丁寧に二つ折りになっていて、うまい具合に中身が透けない。

肝心の中身は文章だろうか、絵だろうか。一体、何が書かれていることだろう。

僕の部屋全体に妙な緊張が走る。

「もったいぶらないでいいのに。そんな価値無いって絶対」

「そ、そんなことはないと思うけどな。じゃあ、見るよ」

恐る恐る、ゆっくりと紙を開いていく。開くにつれてリズが密着してきて気が狂いそうだったけれど、途中でそれが絵ではないことはわかった。

遂に開ききって、そこにあったのは、綺麗な字で綴られた短い文

章だった。

『明日土曜日の正午。ルートさんの学校の正門で待っています。
Alien W.』

文章の意味を読み解くのか、状況を把握するのか、十秒ほどの間があつて、その間僕はどこを見ていたか記憶が定かではない。空ろな意識が回復してくると、いつの間にかリズは僕から少し離れたところに座っていた。その表情はどこかやるせないように弱々しく、乗じて僕は悪寒を感じた。

「よかつたじゃん。ラブレターだよ」

ぶつきら棒に放たれた言葉は、その視線と同じで正しく的確を射ない。無機質で、何か思っているようで思っていない。そんな投げ槍の昏迷を、その語調に感じた。

数分前の僕を、思い出してしまった。

だから、もし今、素直な心中を晒すのなら、これしかないのだと思つた。

「リズ、もしかして気付いてたの？ 中身」

答えは、思つたよりも早く返つて来た。

尚も素っ気なく、リズは言う。

「何となくねー。いつも私につきつきりだったのが急にそうじゃなくなつて、そこで封筒を渡してつて頼まれらさすがにね、気付くよ」
勘の鋭いリズであれば、それは自然な事だと思えた。

その上での素っ気無さとは、一体何を意味するのか。「よかつたじゃん」というリズらしからぬ不躑躅な語調は、一体何を寓するのか。僕は、僕という立場を利用して尋ねてみることにする。

「リズ……やきもち焼いてる？」

仰々しく壮語するも、恥ずかしいという感情は大いにあつたと思つた。

リズはもともと大きい瞳を一段と大きく見開いて、僕の肩辺りを

ボンボンと叩きながら切り返してきた。

「んなつ、なんでだし……っ!!」

「痛たたたつ、痛い痛い! 結構痛いっ。じ、冗談冗談、冗談だよ。あ、ごめん……。いや、えつと、そうだったらな……。っと思ったり、思ってたなかったり……。ってこと、です……。うん。あはは……」

自分の発言の方が痛かったと気付いて、途中から僕の口調は曇った。

でも、率直に、リズの返しも切れが無いとは思ってしまった。それで、リズの本心をすべて掴めたことには、到底なるはずもないけれど。

これ以上掘り下げれば、それは互いの傷を広げ合うのと同義であると推測した僕は、再度視線を文面に戻して、その意味を考察した。「これ、本当にラブレターなのかな」

「絶対そうだよ」

単純に疑問だった。

確かに、僕はリズに絶対の信頼を置いている。

だから、信じようと思えば、それはもうなんでも信じられるだろう。けれど、それがそのまま物的証拠になるかと言えば、それはまた話が違うのだ。物的ですらないし、論拠がリズの記憶頼みなのも、証明力としては脆弱と言っても過言ではない。

結論として、この手紙をそうだと決めつけるのには、現時点では不十分なのだ。

「だって、僕にだよ?」

「うん?」

リズは気にも留めていない様子だったが、僕は何よりそこが気がかりでならなかった。

リズという存在が傍に居ながら、一度顔を合わせただけの僕に、どうしてラブレターなどを書けようか。そんなに特殊なおもてなしをした覚えもないし、ラブレターをくれと自演を強要した覚えもな

い。

つまり、本当に僕のことを好きか、何かの間違いだということになるわけだ。しかし、ミドルにしてはかなりしっかりした印象だったあの子が、そんな大事なことを間違うとも思えない。

要するに、この手紙がラブレターでない可能性は十分にあるということ。

第一、リズのことを好きだと言っていたのではなかったか。なるほど、そうか。そういうことか。

僕を利用して、リズとの交流を深めようという算段か。視点を変えれば、リズを経由するという手法を使うことで、リズに下心を気取られずに済むとも考えられるではないか。

するとどうだろう。

僕は、複雑な感情で応対しなければならぬのではないだろうか。「うーん……」とわざとらしく唸ってそれを演出してみれば、それを断つかのように、リズが音吐朗々と言い放った。

「行ってみたらいいじゃん」

相も変わらない無愛想な口振りであることが気になったけれど、一理ある。

結局のところ推論は推論で、答えは行ってみななければわからないのだ。行くべきか行くべきでないかの議論をするならば、それはきつと“行くべき”なのだとなんでもできる。

それに、土曜日は一日空いている。

「うん。そうするよ」

「そー」

部屋に入ってきた時よりもかなり落ち込んでるように見えるけれど、もしかしたら気分でも悪いのではないだろうか。暗い話題でもないはずだし、少し心配だ。

こういう時は、楽しい話で釣るに限る。釣れれば、大丈夫だ。

「そついえばさ」と切り出すと、すぐにリズがこちらを見た。好感触だ。勿体ぶる方が食いつきはいいのだろうけど、相手がリズの場合、焦らしというものは意味をなさない。

「今度のシルバーウィーク、みんなで勉強合宿をするんだけど、一緒に」

「合宿っ！？ どこにーっ！？」

僕の言葉を遮って、前のめりに詰めてきた。特に瞳は輝いていて、暗い部屋にぼつつと明かりでも灯りそうだった。おまけに背筋までピンと伸ばしていて、とても威勢がいい。

「どうやら、上手くいったようだった。」

大人げないような姑息なような勝負に負けたようなで、色々悔しい部分はあるけれど、とりあえずはひと段落だろう。

ただ、一つ気がかりがあるとすれば、僕が待ち合わせ場所に行かないと言っていたら、リズの表情は晴れていただろうかということ。

「どうしようもない“たられば”ほど、空腹を紛らわせるものはない。」

早く夕食を食べて、明日に備えて早く寝よう。

そう思った。

四つ折り、恋文を添えて。（後書き）

【あとがき】

さらっとした青春感でした。

酸っぱいですね。みかんみたい。

さて、恋文が届いたわけですが、ルートの動向やいかにも、リスの心情も少し気になる今日のこの頃。

次回へ続きます。

実直に、勇気を添えて。(前書き)

【まえがき】

せいしゅんです。

びゅうという風、感じていただければ幸いです。

ふんぽ。

実直に、勇気を添えて。

未確定であるにしろ、あれは恋文というものだと思えて間違いないだろうから、雑誌で読んだセオリー通り十分ほど早めに到着するようにした。雑誌によると、そうして先に着いて待つことで、相手にプレッシャーをかけられるという寸法らしかった。

学校前の直線通り、すでに学校の白壁が見えている。

春、夏、ツーシーズンに渡って僕の登校道に彩を添えてきた正門の双子桜は、すっかりと葉を落としてしまつて、黒い斑模様を白壁に残すのみとなつていた。制服シャツの上にカーディガンを着るのと反対に、桜は脱いでしまうのだなと寒かった。

そろそろ正門前の状況が見える頃、僕の気まぐれな作戦は敢え無く撃沈することとなる。

その人は、駆け足を始めた僕に気付いて、にこやかな表情で手を振ってくれていた。

年下とは言え、結構なプレッシャーであった。

「はあはあ……。ごめん、ちよつと遅れちゃった？」

「いえ。まだ十分前です。俺が早く来すぎただけですから。それよ、大丈夫ですか？ 呼吸、整えてからでいいですよ」

肩で息をする僕に優しい言葉をかけてくれるこの男の子はアレン。リスのクラスメイトである。

僕とは、文化祭で顔を合わせているので、面識がある。

文化祭の時はフォーマルに身を包んでいたからか、制服姿はだいぶ違った印象を受ける。どちらも黒ベースのシックな雰囲気ではあるものの、制服はどこか丸みを帯びていて親しみやすい雰囲気がある。

タキシードの時もそうだったが、どうもミドルには見えない大人びた雰囲気があるから、アカデミーという場所にもなんら違和感なく溶け込めそうだった。

聞いたところによると、学校では相当な人気を博す好青年で、人柄も相俟ってか先生からの信頼も厚いらしい。それに、リズは嫌いだと言っていたが、そんな耳が腐るような声でもないと思うし、薄っぺらいというよりむしろしっかりしている感じがする。

僕も年長者らしく、しっかりしなければと思ってしまう。

「ありがとうアレン君。もう大丈夫だよ」

「はい。あの、どこか座りますか？」

「長くかかるかな？ 僕は大丈夫なんだけど……」

「俺も大丈夫です。それに、そこまで長くはかかりません。用件は一つだけなので」

アレンは真つ直ぐと僕を見据えて、そう断言する。

周到に用意された勇気を、僕はその瞳の奥に感じた。

「うん。それなら黙って聞くよ」

僕は頷いて、気持ち程度に直る。それでも、アレンの表情を直視することはできなくて、代わりに僕はアレンの右手を見ていた。そうして少し俯き気味になると、ノアの繊細さの所以がわかったような気がした。

でも、前向きにとらえようと思う。僕が俯く意味も、アレンの右手が震える意味も。

僕は今日、あの手紙の意味を確かめるためだけに、ここへやって来たのだから。

「それじゃあ言います」

「うん。何かな」

アレンの言葉は、いや、アレンはとても真つ直ぐだった。同じくらい、声も真つ直ぐに心に届いた。真つ直ぐで強くて、僕には無い何かを秘めているようなそんな気さえした。

「好きです」

小説の一文を呈したかのような、小枝がささめく微風そよかぜがそこにはあった。

僕の背後の桜の小枝が俄にわかに揺れたのは、少なくともアレンの言葉のせいだと思う。

どうしてかその言葉は、僕の持っているそれとは違って、そこに存在する説得力は雲泥の差がある感じがした。何か時代背景などの大きなものに裏付けられたような、誰かが「間違っていない」と断言したかのような、そんな説得力とでも言うのだろうか。

僕の言葉には、それがなかった。

意味は同じはずなのに、色が、形が、大きさが、重さが、何もかも全部が質を異にした。僕のはそこまで白くなくて、丸くなくて、小さくなくて、重かった。せめて温かければと思うけれど、それが温かいのか暖かいのかの違いも、わからないのだ。

だから僕は、アレンの言葉によりもそのことに際して酷く狼狽うろたえ、言葉を失ったのだった。

それでも先輩としての威厳を保とうと頭を働かせると、口だけがパクパクと動いて、肝心の言葉は出てこなかった。この場合、イエスカノーかの二択なのだろうけれど、それすらも。

結果として、「あの手紙は本当に僕宛てのラブレターだったのだ」という事実を反芻して、黙っているしかできなかった。

その様子を察してしまったのか、アレンが少しばかり愁眉を開いて明るく振舞う。でも、まだ、表情の奥には真剣さが潜んでいると思う。

「はははっ……。すみません、急にこんなこと……。俺、年下なのに生意気ですよね」

僕はすぐ、首を横に振る。

自分の気持ちを相手に伝えるということは、元来、生意気になつてしまうものだから。

アレンの表情がさらに和らいでいく。僕がそうさせたという感覚もある。一種の達成感なのだと思う。

でも、それは返事にはなり得ない。

無論、それはアレンも感じ取っていて、尚も真剣なその眼差しが、浮遊する僕をさらに追い込んでいく。

「でも、俺は本気ですから。本気で、ルートさんのことが好きですから」

二度目のその言葉に、僕はついに心拍数が上がった。

乗じて顔も赤くなって、秋風の涼しさなど微塵も感じなくなった。それなのに手の先は震えているし、目は泳いでしまふし、口は乾く。刻んだ感情の、さらに微細な部分一つ一つが揺れ動く感覚。

詰まった息を吐く前に、アレンの言葉は紡がれる。

「今はまだ、答えを出さなくても大丈夫です。でも、必ず答えを教えてください。イエスだったら、俺と付き合ってください。お願いします」

どんどん心拍数は上がって、もう自分では数えられないくらいになる。今まで感じたことのないレベルの動揺に見舞われて、頭が真っ白になる。もはや、嬉しいのかも悲しいのかも、整理がつかない。どうしたらよいだろうという疑問符だけが、膨らんでいく。

おたおたと蹠^よ跟けてしまって、どうにも地に足がつかない。

漸く、藁を見つけたけれど、それは縋れるほど強靱ではなくて、もう一度揺さぶられれば、たちまち僕もろとも流されてしまいそうだった。

片手にそれを絡ませつつ、僕は潜めいて。

「え、えつと……。リズムの間違いじゃないかな……。？」

「いえ。俺は、ルートさんのことが好きなんです」

手摺は思ったより早く流されたようで、応じて僕は狼狽した。

「僕、なの……。？　リズムじゃなくて？」

「はい」

少しも言い淀む素振りを見せず、瞳には一点の曇りも無い自信が宿っている。何時間も推敲された末に完結したような、否定できない想いが溢れている。

その自信に反射して像を結ぶのは、狼狽えた僕の姿で、虚像ではなく実像。

紛れもない“告白”の瞬間が、目の前の小さな鏡に映し出されていた。

「えっと、あの……その……」

沈黙だけは避けようと、僕は秋風に頼らず感嘆を撒き散らす。

嫌な汗が背中から噴き出しそうな予感に駆られ、身震いする。決して、寒さに煽られたからではない。

「そんなに焦らなくてください。焦らなくても大丈夫ですから、ルトさんの気持ち、聞かせてください。それでダメなら、俺、諦めますから」

「えっと、あの……、うん……。はい……」

僕自身の気持ちの整理はまだつかないけれど、真意は薄らとわかってくる。

アレンが僕を好きだということ、僕はまだアレンのことをよく知らないのだということ、同じくアレンも僕を知らないのだということ。

だから、知る必要があるのだということ。

今、冷静さを欠いていては、それができない。でも、もう、平常心も難しいのでそれはそのままに。残った心情のうち、探求心とか猜疑心とか、とにかく使えそうなものを寄せ集めるしかない。

僕が僕として、後悔しない選択をするために。

「十日だけ、待ってくれるかな」

「もちろんです！」と、アレンは笑って頷いてくれる。

こんなにも純粋な人の気持ちを、無下にはできない。

だから、過ちも迷いも全部煮詰めて煎じて、灰汁のような後悔も

溶けてなくなるころに、答えを出さなければと強く思った。
そうすればきっと、僕に何が足りないのかもわかるような気がする。

「それで、一つ提案なんだけど……」

「なんですか？」

「アレン君は、今度のシルバーウィーク、予定あるかな」

「今は無いです。あつたとしても、ルートさんのためなら全部キャンセルします」

「ありがとう。でもそっか、無いならよかったよ」

「何かあるんですか？ デートなら大歓迎です！」

「ははは」という僕の微笑は、場を濁す意味合いを多分に含む。
何も疚しさは無いのだと、僕は結論を急ぐ。

「あ、うん。えっとね。友達を連れて合宿するんだけど、一緒にどうかなって」

「えっと……。お、俺が行ってもいいんですか？」

「うん。大丈夫だよ」

確かなことではないけれど、サクラはたくさん呼べと言っていたし、ルリ会長なら容姿の良い男子は歓迎なはずだ。ノアは人見知りをするだろうけど、アリスがいるから問題は無い。残るリスは十中八九反対するだろうけど、その点は僕がアレンの相手をすれば解決する。

そうすれば僕も、アレンの気持ちに真剣に向き合える。そして、それを肌で感じたリスがどう出るかということも、確かめることができるのだ。

所謂、一石二鳥なのである。

「あ、でも、一つ注意があつてね。ちょっと遠いかもしれないんだ」「そのくらい、全然平気です！ そんなことより、俺、凄く嬉しいですー！」

アレンはとても嬉しそうに話していて、どこか年相応の幼さもあのように感じた。僕がそれを感じ取れる分は、少なくともアレンよ

り大人なのだろう。その感覚に一種の感銘を覚えたのは確かなことだった。

でも同時に、大人になることがとどのつまり“当然”の中にあつて、僕が一番大切にしている気持ちはその“当然”からはかけ離れていることも如実にわかった。

今までそうであるからこれからもそうであるとか、普通そうであるから僕もそうあるべきだとか。そういう自然主義的な事を誰かに諭されているような不穏が、僕の心にはひっそり存在していた。

そいつを追い出すことが、今の僕が望む答えであるとはわかつている。わかつていてもできないのは、勇気が無いから。“当然”を敵に回すことを恐れられないだけの勇気が。間違っていることを、間違っていないのだという勇気が。

一般的な指標が無いから、シルバーウィークという時間が短いか長いかはわからない。

それでも、僕は答えを出さなければならぬ。
今回は逃げることもできる。

でも、逃げて誰も幸せにはならないと知っている。その逆に、僕が意志を貫き通すことで、誰かと幸不幸を分け合わなければならなくなることも、知っている。

けれど、答えを出さなければならぬ。

「それじゃ、合宿の詳しい話はあとでするね」

「はい！ 楽しみに待ってますね！」

アレンは、僕が逃げずに立ち向かうことを待っていてくれる。

そのプレッシャーにも似た熱意が、今の自分にとってはとてもありがたかった。

「うん。ありがとね、アレン君。それと、ごめんね。色々待たせちゃって」

「いえ。自分の気持ち传达されたので、良かったです」
そういうことか。

だから、告白の言葉を言った後、アレンの表情が満ち足りたよう

に晴れていたのか。

でもそれは、勇気さえあれば、何も難しいことはないはずだ。無論、僕にだってできるはず。僕もそつという素敵な表情になればと一心に思う。

果たして僕はこの長期休暇で見つけられるだろうか。

僕自身の、本当の気持ち。

実直に、勇気を添えて。（後書き）

【あとがき】

音楽の方に身が入ってしまったって色々更新が遅れました。遅れましたが、もともと遅いのでそんなに変わってない気もします。

さて。酸っぱい。

酸っぱいです。

これから合宿が始まっていくと思いますが、それも多分酸っぱいです。

今までも結構、苦酸っぱいお話が続いていましたので、今章はその中に少しでも甘味成分が入ればなと思ったたり思わなかったり。お楽しみに。

旬も外れ、桜花添えて。
(前書き)

【まえがき】

夏ではありません。
秋です。

どしどし。

旬も外れ、桜花添えて。

一日目。

木陰を飛び出せば、そこはまるで別世界。

紺碧の海、純白の砂浜、豪華で味のあるログハウス、そこまでは完璧だと思った。

季節というものを無視したかのように照る太陽が、そこはかたない違和感を演出していて不安極まりなかった。この場所ビーチの近くには超大型モールがあるらしく、それもまた非合理性に一役買っていた。そもそも、ここへ来るまでの道のりすらも道理が立っていない。

第一に、合宿メンバーが集められた場所。

リゾートに行くと言っただから港だろうと想像していたのだが、それは今の時代、もはや先入観でしかなかった。

僕、リズ、アリス、ノア、ルリ会長、アレンの六名が集められたのは、紛れもなく学校アカデミーの屋上だった。朝起きて、支度をしてその後、僕はなんと、登校したのだ。道中、見慣れ過ぎた風景に何度首を傾げただろうか。

第二に、ビーチに到着するまでの道程。正しくは歩いていないから、道程というにはあまりに事足りないけれど。

そう。僕たちは、歩かずにしてここまで来てしまったのだ。

疑心暗鬼になりながらも一人一本ずつ屋上サクラの家の木に入り、サクラに言われる通りに目を瞑って眠ることおよそ二時間。僕の目を覚ましたのは、聞き慣れないカモメの鳴き声だったわけだ。

そして、それがつい十五分前のこと。

初めて海を見て燥ほしぐリズムとノアの眩しさよりも僕は、矢鱈に熱視線を注いでくる太陽が気になって仕方なかった。

「すごい！！ ホント綺麗っ！！ まじすごい！！」

「海って、本当に大きい……」

「りずも可愛いとこあるのう。のあも瞳がきらきらじゃ。やっぱり旅行はこうではなくてはのう」

「サクラちゃんっ！ これは旅行じゃなくて、合宿だからねっ！

遊びもほどほどにねっ？」

「一人だけ水着のあんたが言うのね。生徒会長さん」

「綺麗なビーチだなあ。でも、俺が見たことないってことは……西の方か？」

皆、非日常に慣れ過ぎてはいやしないだろうか。何となく溶け込めないのは、僕に環境適応能力が足りていないということなのだろうか。

とりあえず僕が言えることは一つしかない。

「……、……」

太陽が沈んでくれるかどうかも怪しいこの空間で、僕は皆についていけるかどうかすらも不安だった。証明された胡散臭さをもつ、あのサクラが管轄する場所なわけだし、気を抜いてはいけないうう。

早速泳ごうとしている人もいるし、ログハウスの方に探検しに行こうとしている人もいるし、確実に皆の籠たがは外れていると見える。

とりあえず目を離さないように注意しなければ。色々な意味で。

あちこちに視線を配っていると、熱中症でたちまち目が回ってしまいそう。時折吹きぬける潮風も、涼しい顔をしてあっさり僕の意志を刈り取るうする。はっきり現実との差異を意識していないと帰れなくなる、なんて設定があってもおかしくはなさそうだった。サクラはそういうことを、終わった後に言うタイプだから、一分一

秒も油断ならない。

きよるきよると辺りを見回しても、風景は変わらない。砂粒も、暑さも、本物だ。

ふと気になって、ここへ来たときの木の方を見た。ビーチには場違い過ぎる桜は何本かあって、もう、どれだかわからなかった。

途端に怖くなって、僕はサクラを探す。

いつも通り、サクラはいて欲しい時にいない。それを安堵する気持ちと懸念する気持ちが、同じだけあって、僕はますます、ここがどこだかわからなくなった。

ここはこういう場所なのだとか割り切るにも割り切れず、どうにかして理解しようとしてしまう。違和感を理解しようとするればするほどに、不条理が募って、僕の意識は空ろになっていく。

こんな状況の中、信頼できるのはサクラだけなのだけれど。それは皮肉だろうか。

ふわふわと目の前が揺らいで、足元も覚束なくなってきた。砂浜が本物だからだろうか。この暑さも本物だからだろうか。

体に力が、入らない。視界がぐらついて、砂浜が僕を飲み込んで

「ルートさん！？　だ、大丈夫ですか！？」

崩れかけた足場を支えてくれたのはサクラではなかった。

「様子がおかしいなって思っではいましたけど……。倒れるなんて……。あ、とりあえずその木陰に避難しましょう！　歩けますか？　肩、貸します」

アレンの言葉にも肩にも甘えて、木陰まで移動する。

そうして、力なくその場に腰を下ろしたところで、自分が暑さに

やられていることに気付いた。

「どこか痛いですか？ 気持ち悪くないですか？」

「……うん。大丈夫。ただの熱中症だと思うから。もう大丈夫だよ」
何の根拠もないけれど、そう言ってみる。

誰かに心配されているという安心は、密かにあったかもしれないけれど。

「ダメです。ちゃんと休んでください。俺、水とタオル持ってきてます。あと、何か欲しいものありますか？ さっき、何か探してみたいですけど」

「あ、うん。サクラを探してたんだ……」

それには帰り道サクラという意味合いも、強くあったと思う。

それを感じ取っていたにしろいないにしろ、アレンは心優しい男子なのだと思う。

「サクラさんって、よく食べるあの……。わかりました。それじゃ、サクラさんも呼んできますね」

「アレン君、ごめん……」

「全然です。ルートさん、女の子なんですから。頼ってください」
ダッシュでログハウスの方へ向かって行ったと思うと、数秒で出てきて、また僕のところへと戻って来た。

「どうぞ」と、水と冷えたタオルを僕のもとに届けると、今度は砂浜の方へ走って行く。アレンの走った軌跡をなぞるように白い砂が飛沫しぶいていて、そのうちの必死さは僕にまで飛んできていた。

僕はと言えば、相も変わらず立ち上がれなくて、根拠のない強がりやを独り言ちるくらいしかできなかった。できれば、皆にも気付かれたくない。

「女の子……」

水を飲んだ後の息継ぎに出た言葉だった。そこに特別な感情というものは無かったと思う。ただ単に、アレンの言った言葉を想起して真似ただけで、これという意味も無い。

冷たいタオルで顔を覆いながら、アレンの走る姿を見て、僕は何

も思わない。

あるとすれば“等身大の感謝”。それだけ。

「優しいやつじゃのう」

「うわっ！ サクラっ!？」

僕の探していた人は、唐突に木の上から飛び降りてきた。僕の胸を跨ぐようにして立って海を眺めている姿は、まさに場を支配できそうなほど様になっていた。

何やらぶつぶつ呟いているが、後ろを向いているから、あまり聞き取れなかった。それどころか、横になっている僕からすると、サクラのお尻が喋っているように見えて滑稽なのが気になって仕方がない。

ただその、ペールグリーンのビキニボトムから伸びる白々とした二本の脚が、確りと制服を着こなす硬派サクラにしては、少し露出が多いなと率直に感じた。視線を上を持っていくと、桜色のラッシュガードが対峙していて、そこで改めてサクラらしいなと気付けるのだけだ。

そんな絡繰りに感心していると、サクラが振り向いた。尚も僕を跨いで。もしかしたらサクラは、僕を跨ぐのが好きなのかもしれない。

「のう。お主もそう思うじゃろ?」

腰を折って、僕に顔を近づけるようにいて問ってくる。

大半を聞いていなかったから、とりあえず聞こえた部分にだけ返答する形で頷いた。

「じゃよなあ。そんなやつにコクハクされるなんて、幸せものじゃの」

「えっ。何で知ってるの?」

そういえば、あの告白は桜の木の下でだったような。どこの木の上にも家がある、というようなことを言っていた記憶も確かにある。

それはつまり。

「さつき、ここに着いたとき、皆に言っておったぞ。聞いてらんかったか？」

「あ。そうだったんだ……。僕、全然　えっ？」

「熱とかは無さそうじゃな」

一瞬だけ視線を逸らしたのを戻すと、サクラの顔がすぐ目の前にあった。

サクラは何の躊躇も無く額と額をつけて、どこかで見たようなオカルトまがいの生兵法を僕に施していたようだった。

それこそ、僕の強がりと同じで意味を成すものでもない。

それなのに、不思議と気分は軽くなった。サクラの『魔法』のせいだろうか。

「サクラ、今のって」

それを尋ねようとしたら、人差し指で口を塞がれてしまった。また、どこかで見たような光景だった。感触は、少しだけ違ったけれど。

そのままサクラは何も言わずに頷いて、僕の上から退いた。そして、「どっこらせ」と僕の真横に腰を下ろして、海の方を見ていた。僕も、何も言わずにそれを目で追って、サクラが落ち着いたところで、視線を海に移した。

浜と対称の青は、沖へ行くほどに黒く、水平線へと辿り着くまでに刻むグラデーションは無限に相違ない。ちょうど白と青を足して水色というところに、幾つか肌色が奇を衒っていて、自然、視線はそこへ向いた。

違和感は確かにあるけれど、同じだけ幸せもあった。

サクラはそれを見つけてるのが、とても上手かった。

「こういふ場所は苦手かの？」

「ううん。そんなことないよ。ごめんね、サクラにまで気を遣わせ

ちゃって……」

「いいのじゃ。それより、わしに何か用でもあったかの？」

「あ、いや、大したことじゃなかったんだけど」

本当は大したことなのだけれど、皆がそれを気にしないのはサクラを信頼しているからなのだ。おそらくこの場で一番サクラを信頼しているはずの僕が、聞くのもおかしいことだと思った。

でも、言わないも言わないで、またサクラに気を遣わせてしまいそうだったから。

「実は、家に忘れ物をしちゃって……」

僕は、サクラのために嘘をつくことにした。

「そうなのかの？ 大事なものか？ それがないと夜寝られんとか、いつも使ってるのじゃなきゃだめとか、そういうアレか？ それならすぐに戻すが……また二時間くらい眠らんとじゃ」

「いや、うん。大丈夫。筆箱忘れただけだから。リズの支度手伝っておきながら、自分の忘れちゃうなんてだらしないよね」

「なるほど。そういうことか。わしも持つとらんから、あとで一緒に買い物にでも行くか」

「なんで持ってないの……」

「ぬははは」と流されてしまったが、その流れで、気になることが一つ聞けそうだった。

「そのさ。モールがあるって聞いたけど、人ってちゃんといろの？」
栄えているのかと言う意味ではなく、存在しているのかという意味で尋ねた。

何となく、この場所には僕たち以外に誰もいないような気がしてしまっただけから。世界から隔絶されたような、いつしかの生徒会準備室のように世界から浮遊しているような、圧倒的な不快感とともに「いるわい」というサクラの自信は、どうにもこの場所の雰囲気と溶け込んでいて、それがまた不思議だった。

まあでも、後で行ってみればわかるだろう。

だから今は、わかった後に僕がどうすべきかを考えている方が有

意義なのかもしれない。

僕は重い上半身を起こして、木に背凭れた。多分、一人でも起きることはできたのだろうけど、途中、サクラが背中を支えてくれた。「もう大丈夫なのかのう?」

「うん。まだちょっとだけくらくらするけど。こうしてた方が風が涼しいから」

「そうか。無理は禁物じゃぞ」

「ありがとう、サクラ」

「好きになったか?」

「うん」

海の方を向きながら言ったので、すぐに冗談だとわかった。

だから、僕も海の方を向いていた。

サクラの横顔は満足気に縁取られていたけれど。

「嬉しいのう」

「うん」

「のう。るーと」

「うん?」

「わしも好きじゃ」

「うん。僕も嬉しいよ」

「だから、今日は一緒に寝るのじゃ」

「え、えつと?」

冗談に冗談を被せたようなやり取りの中、唐突に現実味を帯びた話が飛び出したので、口ごもる。これは、いつものサクラの常套手段だと気付いた。というよりこれは、サクラの性格なのだと言った方が近いかもしれない。

冗談ウツと現実ホントウの境界を曖昧にして自分の説得力を増すという、なんともサクラらしい生き方だ。特に、悪い意味は無い。

話すサクラの口調はすでに、冗談と現実の境目がわからなくなっていた。

「言ってなかったかの? ベつどが三つ足りないのじゃ。そのろぐ

はうす」

「言っていないね……多分。でも、三つもか……」

「ま、ありすとのあは同じ布団でも大丈夫じゃろ」

「そんな勝手に……。あ、でも、それなら僕はソファとかで寝るよ」
「木の椅子しかないのじゃ。連休中ずつとはさすがに腰を悪くするじゃろ」

遊びに関して抜かりないサクラのミスではないだろうから、アレ
ンが来ることを直前連絡にしまった僕の過失と言って相違ない。
それならば、その責任を取って、僕が別の場所で寝るべきなのは
自明だ。体調を崩しておきながら言える立場でもないが。

「ちなみに、ベッド対部屋割りはどうなってるの？」

最悪、誰かの厚意に甘えるにすると、それは重要になってくる。

誰も疚しいことはないにせよ、「個室で」しかも「同じベッドで」
というシチュエーションはさすがに一悶着ありそうではない。

それに、今回はアレンもいる。

アレンはそんなに悪い子ではないから僕は気にしないけれど、ア
レン自身、女子に囲まれて眠るといふのは気まずい話だろう。サク
ラの言う通り、連休中ずつとは応えらると思う。

「部屋割りは、べつど一つの部屋が四つあるのじゃ」

「なるほど……」

「うち一つはわしの部屋じゃ」

「うーん……」

それを踏まえて、誰も損しない振り分けを頭の中に思い描いてみ
る。

サクラとアリスを同室にするというのは小規模戦争のようなもの
を想起させるが、二人とも常識はあるから大丈夫だと思う。ノアと
だと、サクラがちょっとかいを出しそうだ。リズとも……というか、
サクラは誰にでもちょっとかいを出しそうだ。合うとすればルリ会長
か、やはり僕なのだろうか。

アリスとノアなら無問題で、サクラとだと喧嘩が、リズとだとア

リスが気疲れしてしまうだろうか。ルリ会長はOKしただけれど、さすがに顔見知り程度の関係で一夜を共にすることをよしとはしないだろう。僕とは……、アリスは気にも留めないのだろうけど、僕自身が変に緊張してしまいそうだ。

ノアは文句一つ言わないかもしれないけど、色々無理をしそうだ。本人もアリスとがいいと密かに主張するだろうし。

ルリ会長はどうだろう。基本的に誰でも歓迎そうだけれど、リスやアリス、ノアと言った親交の浅い人との相室は避けてあげた方がいい気はする。

リスも、基本的には分け隔てなく対応してくれるだろうけど、考えてみれば年が離れていたり学校も違ったりと、何かと距離を感じる点も多い。

女子同士では絶対的に仲が悪い組み合わせというのは無いと思うので、誰かと必ずペアを組まなければいけないという条件は特に問題なさそうだ。

問題はアレンだ。

僕は同室程度なら平気だけど、その他各人はそれもNGを出しそうだ。サクラはどこまでOKかわからないけれど、逆にアレンが気を遣ってしまいそう。

そうになると、アレンは一人部屋に寝てもらうのが最善そうだ。

残るはサクラの部屋ともう一部屋。

サクラの言う通り、アリスとノアなら誰も文句は言わないだろうから、そのペアは確定か。あの二人なら個室でもよさそうな気がするが、個室はサクラが使うようなので、自然と部屋は決まる。

あとは、余った僕とリスとサクラ、それからルリ会長の中からツーペア抽出しなくてはならないわけだ。

「あ、あれ？」

「どうじゃ。わしと寝たくなってきたじゃろ？」

あくまで、サクラは嬉々として提案してくる。

胡散臭さを感じはするが、それを超える説得力というものも確か

にあるから困る。

「寝たい……というか、選択肢がそれしかないような……」

僕がルリ会長と一緒に寝ること自体は問題ないのだが、その選択をすることによって出来上がってしまうサクラリスペアに頓着せずにはいられない。何というか、娘を嫁に出す親の気持ちに近いと思う。

だからと言って、僕とリスが同じ布団で寝ることも好ましくない。昔はそうしていたけれど、今そんなことをすれば、また、アリスの毒舌が炸裂してすぐに致死量に達しそうだ。加えて、文化祭劇でのキスの一件もあるわけだし、皆きつと、よからぬ夜伽話に花を咲かせるに違いない。

それは僕としても、願い下げなわけで。

「なんじゃ、そんな照れなくても。わしと一緒に寝たいならそう言えばよいのじゃ」

「いや、そういう意味じゃなかったんだけど……。でも、サクラがいいなら。うん。一緒に」

まあ、良いと言われていたのだから断る理由もないだろう。僕とサクラ、ルリ会長とリス、アリスとノア、アレンが一人部屋、という割り振りも理に合っているとえば理に合っているのだ。サクラにはめられたような気がしなくてもないが、そこはいいだろう。

自若として海を遠目に見ると、「ぬははっ」と笑うサクラの表情が間近にあった。そんな静謐せいひつを反芻しながら僕は、ひっそりと不思議にとらわれる。

僕とリスが同じ布団で寝れば、これに勝る選択は無い。

そうすれば、少なくとも連休中の課題の半分は無くなってくれるかもしれないのに。どうして僕は躊躇してしまうのだろうか。そんなに簡単なことを。

不思議でならない。

第一、昔はそうしていたわけだし、今だって、それをすることが直接悪事に繋がるわけでもない。倫理的禁忌に近い環境になるのは確かだけれど、血縁であるという建前も無くはない。

だからと言って、不躰もこの論理の正当性を主張するのは変だと思っ。

そして、それを吟味して辿り着くのは、愛情恋慕の念に換言されるであろう「現実と理想の巨大な隙間」で、言うなれば「関係性の脆弱さ」、だったりする。

口語すると、保護するものだったり保護してくれるもの、証明するものだったり証明してくれるもの、そういう自然の風除けが無く、ただ微かな主張をするしかないのだということ。

いや、主張をできればいい方だと思う。それは主張が主張となる前に淘汰されてしまうほど脆く、しかも悪なのだから、仕方がないことではあるけれど。

結果として、諦めるか隠すかしかなくなるわけだ。

その二者択一の葛藤の中で、不思議にも僕は温かさを求めていた。逡巡で浪費した部分を満たそうとして、無意識のうちに心を紛らわせる刺激を欲してしまうのかもしれない。

だからなのだろう。

僕がサクラを「好きになるかもしれない」と思うのは。

それから皆が遊び終わるまで、サクラはずっと僕の隣にいてくれた。

相変わらずアレンは戻ってこなかったけれど、「やつなら大丈夫じゃ」とサクラが笑うから、本当にそんなような気がした。

もし、隣にいるのがアレンだったら、リズだったら、アリスだっ

たらと、色々考えた。

でも、わかりたいことは、一つもわからなかった。わかったのはせいぜい、目の前にいる一人の女の子が僕を想ってくれているということ。

そして、その間は僕も、その女の子のことを想っているということ。

大切なのは、“時間”と“告白”。

昼間の太陽に、そう教わったのだった。少し厳しめに。

連休明け、果たして僕は答えられるだろうか。
いや。

どう答えるだろうか、か。

旬も外れ、桜花添えて。（後書き）

【あとがき】

ルーモスにもようやく肌色成分が。

温泉会とか水着会って、アニメだと結構大事みたいですけど、こ
ういうところでもやっぱり大事に思います。想像が膨らみやすいと
いうか、ゆめがいっぱいというか。

でも、書いていて気付いたのは、私自身がほんわかオンリーが苦
手ということですかね。やっぱりどこかに、不安が匂ってないと逆
に心配になります。

うん。渋い！ 太陽怖い！

でも、読者の皆様もそれだけだと疲れると思いますので、努力し
ます。水着会、温泉会ができるということは、掘り下げができるく
らいは続けられているということなので、それを励みに。

癒しの四章になりますように（黙祷）。

次回、癒します。

常夏の夜、浜風を添えて。
(前書き)

【まえがき】

自重しようと思った今回です。

夏ではなくて秋です。

ちょっと長めです。

びしぞ。

常夏の夜、浜風を添えて。

一日目。

夜。

昼食は、近くにあるモールで食材を買い込んでのバーベキューだった。

あまり信じていなかったと言ったら嘘になるが、モールにはサクラの言う通り普通に人がいて驚いた。それも、外国語を話しているようだったので、尚のこと。

原住民だろうと思われるサクラも言語を理解していないようだったが、コミュニケーション能力の塊である会長とのタッグで、無事に食材を買うことができたのだった。アレンが代金を支払っているのを見たのは確か、その時で二度目な気がするけれど、誰も何も言わなかったのは凄まじかった。また後で、何かお礼をしようと思っ

た。

バーベキューはうちでもよくやっていたし、ビーチだから火事の心配も無い。何より、アレンが取り仕切ってくれたので順風満帆だった。……のだが、紆余曲折あって結局、波乱となってしまった。事の発端は確か、サクラが唐突に水着コンテストをやると言い出した件だったか。

飾り気のない漆黒のチューブトップのアリスは、確か「強気な性格がそのままこーでに出ているのじゃ」だとかなんとかか。その近くにいたリズも、白のフレアビキニ姿を「あざといのじゃ」と難癖つけられていた。

ポルカドットのキャミソールにショートパンツという、まさにアリスのおさがりを身に纏っていたノアはと言えば、「てーまが可愛いだったら優勝じゃが、今回は違うのじゃ」と仕分けられはてなを浮かべていた。

ルリ会長の品評には時間がかかっていたのを覚えている。胸元に大きなリボンをあしらった黒いホルターネックと白黒ストライプのボトムで、腰にパレオを巻いていたのだが、その一体何を選定していたのかは知らない。

それを見て「ははは」と苦笑していた僕にも、当然お鉢は回って来た。

無難な寒色系グラデーシヨンのタイサイドを着ていたわけだが、たまたま羽織っていたラツシュガードがお揃いだったと言う事で、僕が優勝になったらしかった。

僕はまた苦笑しながら、相変わらずサクラは変だと思った。

そして最後には、全員でビーチバレーをするというカオスな事態になったのだった。

そうやって遊び遊び作っていたおかげで、今日の昼食は夕食とほぼほぼ同義になってしまったのだった。さらに、駄弁りながら食べたり、後片付けもものぐさにしたりすれば、一日の大半が終わってしまうというのも当然のこと。

“リゾート”という響きを、これでもかというくらいに味わっている気がする。

暑いくらいだった気温も夜の帳とともに下ってきて、真っ暗闇になる頃には非常に過ごしやすくなる。僕たちがいるログハウスの居間の大きな窓からは、黒々とした海に浮かぶ黄色い満月が真ん中に見えた。手前にあるヤシの木の輪郭が月光に照らされて、ちょうど切り絵のように浮き出していて、とても幻想的だ。

例えるなら、美術館の大部屋にあるような巨大絵画か。

リゾートがもたらすそんな独特な空気の中、僕たちは、生徒会長という権力の前にひれ伏して、教科書という無機質な白と黒に相対

していた。

「眠いよー……」

「僕もさすがに眠いかも……。サクラ……教科書に涎が……」

「こらこら。ルートくんもリズムちゃんもサクラちゃんも、もつと集中しないと。まだ勉強始めてから十分も経ってないじゃないか」

先輩風もとい會長風を吹かせるルリ會長であったが、こちらから吹いた向かい風の方が圧倒的に強かった。

「な、なに……!? そんな、みんなしてワタシのを見つめて……っ！ あっ。もしかして、食べようとしてるっ!? いやあ、やめてー!」

「あんたがサクラを煽るからでしょうが」

「あ。はい。ごめんなさい……」

アリスは誰にでも強いなあと思った。

「でも、今、何時なんだろ……。ノア、さっき、時計探したけど、一個も無くて……」

「そう言えば……」と辺りを見回してみると、確かに。

これだけ広い居間なのだから、家族が集う場所であるはずなのに、卓上どころか壁掛け一つ見当たらない。時間を忘れて家族団欒するのだとか、サクラが寝て起きたらそれが一日だとか、そう言われれば納得な気もしないでもないから怖い。

とは言え、勉強をするには不便である。

「誰か腕時計とか持ってたらしらないかな」

「あ。俺、してますよ。ただ」

拳手したアレンの左手首に、確りとそれは巻かれていた。

口ごもるのには理由があるのだらうけど、往々にして朗報ではないだろう。

机の端の席で対面して座っていたアレンに、僕は恐る恐る尋ねてみる。

「ただ？」

「このビーチに来たあたりから、拳動がおかしくて……」

手首を前に出す形で見せられた腕時計の盤面を見てみると、想像の倍以上におかしな挙動だった。停止とか時差とかいうレベルではなく、時計の針が戻ったり進んだり、もはや小規模超常現象の域。^{リセット}この場所の謎は深まるばかりで未恐ろしいが、遠巻きに見ていたリリ会長が「ふむふむ……」と考え出す今の展開の方が余程怖い。トラブルが起きないように祈りつつ、「どうしたんですか？」と聞くのは副会長としての義務だと思った。

「そう言えばさっきさ。お風呂にさ」
「はい」

ログハウスのサイズ感からすると、浴場もそこそこの大きさがありそう。

そこに、ノアさんが見落としていた時計でもあったのだろうか。

「お湯がさ」

「お湯？」

「そう。お湯。お湯が張ってあったんだけどさ。あれって、誰が沸かしたんだろうって」

「……」

全員分の沈黙と、サクラの小さな寝息が、会長の威厳をそれとなく削いでいく。微かに耳に入ってくる波の音もまた、同じ効果があったと思う。

いつになったら真面目に考えてくれるのか、はたまたこの環境では無理難題なのか、静寂の中で考えていると、唐突に答えはやってきた。

「それ、私やったの」

「え？ リズが？」

僕の隣に座っていた妹が犯人だった。

多分、愉快犯だ。

「うん。おつきいお風呂だー、と思って沸かしたの。全員でも入れそうだったよ」

「そ、そっか。ありがとね。沸かしてくれて」

見え透いた私利私欲は、相応に愛くるしかった。

僕は視線を逸らすことでできた虚空に、情状酌量の余地を作った。どことなく清々しい表情のルリ会長が、ちょうどその空間に入り込んでくる。

「みんなで風呂に入れて天の思し召しだね。これはもう」

「やったー！ 入るー！」

「あたしは後でいいわ」

「じゃ、ノアも……」

アリスもノアも入る体で話しているが、その点についてはいいのだろうか。

勉強時間十分足らずで初日を終わると言うのはどうにも本末転倒、^し誣いては目的変更になってしまっている気がするのだが。

「僕、じゃなくて俺は、一番最後に入ればいいですかね？」

「最後の人風呂掃除ねー」

「ちよつ、リズ」

睡魔に襲われて威勢の悪かったリズも、アレンをからかって調子がよさそうだ。

「それじゃあ、風呂組はさっそく風呂へゴーだ！ ルートくんも入る？」

「えっと……。後で、入ります……」

僕も負けたな、と思った。

「そうかそうか。じゃあ、リズちゃんとワタシで入るかー」

「おー！」

二人同時のタイミングで教科書を閉じると、早足で部屋を去っていった。

教科書を開くのも、それと同じくらいのスピードでやって欲しいところだ。

そうやって今溜息をついたら、皆と入れなくて悔しいのだと思われてしまいそうだったから、それはお腹に力を入れて我慢した。最初に社会をやると言った人が浴場へ繰り出した後、僕たちは静

かに社会を勉強していた。健やかな不均一間隔で聞こえる、サクラの寝息を刻時代わりにして。

ちようど、深呼吸のような胎動があった時だった。

「まだ、間に合うんじゃないかしら」

アリスの鋭い言葉の矛先は、僕の方を向いているのだと如実にわかった。

一体何に間に合うのか。

それは、倫理を記した社会の教科書ではなく、自分の心を綴った巻物にでも書いてありそうだった。

ゆっくりと視線を上げて、僕はその巻物を申し訳程度に隠す。

「僕？」

「そうね」

自然、アレンとノアの視線もあるから、隠すに隠せない。無論、アリスに隠せるとは端から思ってもいないが。

それに、アリスのことだからきつと、僕がアレンに告白されたことも知っているはず。その上で、僕の気持ちを試そうとしているのだろう。

アリスには勝てないだろうが、傷は浅い方が良い。

「もう少し勉強しようと思ったから。うん。大丈夫。途中から入るのも微妙だし」

「あら？ お風呂とは一言も言っていないわよ？」

「うん。でも、アリスならそのことかなと思って」

そう言われてアリスは、一瞬目をパチリとさせたけれど、すぐに不服そうな仏頂面になって「あらそうなの」と言い捨てた。

「アリス、一緒に入る？」

歯の浮くようなセリフとあるが、あれは心まで浮かすものなのか。背中がむず痒い。言っている自分がドキドキしてしまう。

精一杯の反抗をしたつもりだったけれど、アリスの前では何のこ

とはないようで。逆に「へえ」と感心されてしまった。

「あんたがそんなこと言うなんてね。成長したわね」

「え？ あ、うん。ありがとう……」

「ま、遠慮しとくわ。あたしと入浴しても、別に誰かに得があるわけでもないしね」

呆れるアリスの隣に座っているノアこそ喜びそうなものだけれど、アリスは何でもできて完璧だけれど、昔から自分に対するハードルが高い。高いからこそ何でもできるようになった、とも言えそう
だ。

そんなアリスを好きになったノアの気持ちを知れたら、それこそ社会の教科書なんかよりも数段有意義に思える。まあ確かに、学校のテストには出ないかもしれない。けれど、この休暇に課された課題を紐解くヒントにはなるはずだ。

一緒にお風呂に入れば、そういう込み入った話もできるかもしれない。

「ノアさ」

と、思いはしたものの、ノアの気持ちはアリスに一方通行である。無理矢理そこへ割って入るとするのは、がめつい感が否めない。

アリスに気取られてしまったようで、その口ぶりは含みたっぷりであった。

「そんなに誰かと入りたいなら、そこの寝てるバカとでも入ったらどうかしら」

「そ、そんな、別に僕は……」

ここまできると、大人しく引き下がるのが一番被害を抑えられる。僕が気付くのではなく、それよりも先に、アリスがそう掲示してくるのだ。

それがアリスの常套手段だとわかっているにもかかわらず引つかかってしまうあたり、先の「成長したわね」というのも皮肉な気がしてくる。

「でも、そうすると、ちょうど部屋割りと同じになりますね」

「あ。確かに」

アレンの言う通り、気付けばそれがかなり合理的だったりもするから、アリスは侮れない。こういうやりとりも含めて、すべてが計算された策なのだ。

それでも勝負を挑んでしまうのは、やっぱりアリスが『親友』だからなのだろう。

アリスは僕で遊ぶのが好きだし、実は僕もそうやってアリスと遊ぶのが好きだったりする。決して、いびられるのが好きというわけではない。アリスと話しているといつも、新しい発見があったり、大切なことに気付けたりするから。

いつも、ありがとを言い忘れてしまっけれど、ちゃんと感謝しているのだ。

そして、そういう目でアリスを見つめると動揺するというのは、アリスの一番好きなところだったりする。

アリスの方は一瞥するのに留めておくとして、僕はサクラの方を見る。

気持ち良さそうに寝ている様子はどこかあどけなく、勉強をサボってはいるのだけれど憎めない。時々、何かをしゃぶる仕草をするのが、いわゆる乳幼児のそれにそっくりだ。とても愛らしいと思うのと同時に、夜泣きに似たトラブルを心配してしまうのは僕だけだろうか。

「うわっ。みんな勉強してるっ！」

「ホントだー」

そうこうしているうちに、会長とリスが戻って来た。

二人ともパジャマのような趣のある衣服を着ているが、まさか寝るつもりか。

「会長、うわって何ですか……。一応、勉強合宿なんですからね、これ。忘れてません？」

「ルートくん怖い。ルリ、困っちゃーう」

「会長？」

これ以上は、学校の品位が下がりそうだったので、やや強めに制止した。一緒にお風呂に入ったリズは（そもそも気にしないだろうが）手遅れだとして、この場にはアレンがいるわけだし。

「ごめんごめん。冗談だよ。ただの深夜テンション。はははははっ！！」

朗笑する声の大きさも助けて、勉強合宿はとうとう不安である。でも、どうやら何か策を練って来たらしく、「甘いね。ルートくん」と立てた人差し指を振っていた。

「ちゃんと考えているともさ。勉強合宿を計画したの、誰だと思っているんだい？」

会長です、とは言わないでおきたい。

とりあえず、視線だけ送ってみると、滞りなく話は進むようで。

「そう……。ワタシだ」

手を広げてなにかのポーズを決めているようだけれど、パジャマだし髪の毛も半濡れで、空回りしている感は否めない。

僕が求めているものはそれではないのにと、内心残念がっていると、一拍おいてまた。

「ずばり。合宿五日目の最終日」

会長の口から急に意味のある言葉が出てきて、隣にいたリズも面食らっている。

それが、浴室で考え付いた策ではないということが、そのリズの表情によって証明される。

午前中は遊んでいたし、午後もし楽しそうに食べていたし、大方今考えたのだろう。

僕は密かに息を吐いて、また、飲んだ。

「テストをします！」

「テスト、ですか？」

「そう。テスト。シルバーウィーク明けのテスト対策テスト。リズ

ちゃんもワタシらも、ちょうどテスト科目が五教科あるでしょ？

だから、五日目の午後テストをやればちょうど、全教科の勉強をやったことになるってわけ」

やはり、根は頼れる生徒会長らしい。一応は、理に適っている。

ただ、その場合、誰かのせいで社会科を捨てることになりそうだ。「問題は誰が作るんですか？ 僕、じゃなくて俺とリスはミドルですよ」

アレンが切り込んだ。

「それはもちろん、ワタシが作るよ」

「えー……。やだー。めんどくさーい」

確かに、リゾートまで来てテストなのかと愚痴ればそうかもしれないが、あくまでこれは勉強合宿であると主張したい。

どこぞの誰かの動向のおかげで快諾する気にはなれないが、ルリ会長反駁の意は無い。

「大丈夫！ そんなに難しくはないから。リスちゃんもアレンくんも賢いから、簡単に満点とれちゃうよ！ ルートくんたちのもちやんと作るよー。もちろん、そんなに難しくないやつね。とりあえず、赤点は回避できるような感じかなー」

学校のテストは毎回教科ごとに同じ先生が作成しているから、問題に傾向がある。一年生の時にそれを受けているルリ会長が問題を作れば、もしかしたら傾向対策に効果的なのかもしれない。

「遊んで食って風呂入って、寝るかと思えばテストだなんて、やれやれね」

「ノア、ダメかも……」

アリスもアリスだし、ノアもノアである。それを見て、はははと傍観する僕もまた、僕なのだろうけれど。

うんうん頷くルリ会長が、今最も胡散臭かった。

「全員合格しなくても罰ゲームとかにはしないから。できないところはできる人に聞いて、みんなで百点とろう！ 勉強合宿って、そういうものなんだからさ！」

びしつと人差し指を立てて言い回しを強調するけれど、やはり会長はパジャマであったし、ここへきてのサクラの存在が大きかったと思う。すやすやという寝息が織りなす場の雰囲気というものは素晴らしくも厄介であると、僕は一つ学ぶ。

誰かが寝ているところでは、決め台詞を吐くべきではないだろう。「アホらし……。お風呂空いたみたいだし、あたしたちも入りましょよ」

「うん、入る」

アリスとノアも教科書を閉じて席を立つと、せつせと部屋を出て行った。何事も無かったかのように振舞ったおかげで、ルリ会長にそこはかたない哀愁が漂いだす。

それに関して、僕はどうすることもできない。

しんとした空気が、数秒間続いた。

そのせいで眠気が到来したのか、リズが大あくびをかいていた。

「ふわああー眠いよ……。もう寝よー？」

「おっと。おねむだねリズちゃん」

リズはそうなるともう手遅れだ。意地でも寝る。

「うううう眠いー。寝ようよー」

「仕方ないなあ。じゃ、寝よっか」

リズが眠たそうに会長の袖を引っ張ると、会長も大人しく引き下がってしまふ。その気持ちはわかるけれど、さっきのポーズの意味が無くなりそうだ。……。それは元々無いか。

「社会全然やってないけど、ま、大丈夫でしょ」

「やったー寝よー」

十分足らずではやってないも同然なのではないだろうか。それにやってないなら、それはリズがもともと持っているポテンシャルによるところが大きい気もする。

「それじゃ。リズちゃんがこんな感じだから、ワタシたちは先に寝るねー。君らもあんまり遅くならないうちに寝なよー。おやすみー」
なんとも理不尽な気がするけれど、どうしようもない。時計があ

れば、あるいは引き留められるかもしれないが、それは無理だ。

廊下の闇に消えていく二人の背中を、僕は見送るしかない。

一段と静かになった居間の空気は、はじめの頃よりも幾分か薄くも涼しくもなっていて、幻想的だったあの雰囲気も無くなっていた。皆がここにおいてこそ完成するのだなと、少し面白かった。

気を取り直して勉強を再開したところに、アリスとノアが戻って来た。

「今上がったわ。あら？ 生徒会長とリズがいないわね」

「ついさつき寝たよ」

恥ずかしながら、うちの生徒会の会長はそういう人である。

アリスが溜息をつく気持ち少しだけわかる気がした。

「まあ、あの生徒会長に期待しても無駄よね。あなたはかなり信頼してるみたいだけど。そうね。あたしからは特に何も無いわ」

「ノア、少し……眠いかも」

「そうね。寝ましようか。言い出しつぺもないのに、やってられないわ」

言われてみればその通りだが、会長の性格上、五日目のテストはきつちり決行されそうだから、気は抜けない。自主的にやるということも大事だろう。

とは言っても、不真面目な人こそ今回の合宿メンバーの中にはいないのだが。

「そっか。じゃあ、おやすみ。二人とも。また明日」

「起きてもまだ夜、とかありそうだけどね」

「や、やめてよアリス……」

ここから永遠に真宵なんて縁起でもないけれど、本当にあり得そうで怖い。

「ふふふつ。来るといいわね。明日」

「日沈んだんだし、大丈夫だよ、きつと……！」

サクラが寝たまま五日間が終わる、なんてことはないだろうから。「そうね。じゃあ、おやすみなさい」

「ルート。おやすみ」

「うん。おやすみ」

また、二人の背中が廊下の闇に消えて行った。

そうなる度に、辺りはどんどん静まり返り、僕はどうしようもない疎外感だとか、取り残されたような感覚を覚えた。アレンとは同じ感覚を共有しているようで、時折聞こえる小さな波の音にぴくつと反応するのがほぼ同時だった。

恐怖で終わりそうな感覚も、アレンがいてくれるおかげで、どこか円満に解決しているように思う。勿論、サクラも。

ただし、それにも制限時間がありそうだった。

「俺たちもそろそろ寝ますか？」

アレンがそう切り出す頃、体感で一時間は確実に経過していたと思う。勉強の進捗的にも、そんなところだろう。

決してそれが長い勉強時間とは言えないが、独特な環境のおかげである意味で記憶には残せたと思う。そういう意味では、合宿というものを勉強法としてカテゴライズするのがいいかもしれない。

「そうだね。そうしよう」

現時点で眠いと言う事はまだなかったけれど、これからあと四日もあるしアレンも疲れているだろうから、このあたりで切り上げるのがいいところだ。

僕たちは開いていた教科書とノート、それから参考書などを閉じていく。僕もアレンも教える側だったから、他の人よりも余計に多かった。

それらを鞆にしまいつつ、アレンは言う。

「えっと……、お風呂どうしますか？」

僕も同じく、収納がてらに口を動かす。

「あ。そうだね。アレン君が先でいいよ」

特に急ぐわけでもないし、この外気温であればすぐに湯冷めということも無いだろうから、先輩風という追い風に靡いて譲ってみた。「あ。それじゃあ、俺と一緒に入りますか？」

アレンの表情はにこにここと綻んでいたけれど、口調は真剣そうだった。なんとというか、確りとした覚悟を持って放たれた言葉な感じがした。

そのせいで、言葉を失いかけた。

「あ、う、えっ、えっと、あの……」

いや。そのせいではないのかも。

ただ単に、選択に葛藤が生じたということもあり得た。

一日目の僕には、それはまだ早かったのだと思う。

「ごめんっ。サクラを一人にするの可哀想だから、遠慮しておくねっ。ごめんね！」

「あ、いえ。さすがに冗談ですから。でも、入ってくれるなら、俺は嬉しいです」

「う、うん。ありがとう」

「それじゃ、先にお風呂いただきますね」

「うん。どうぞ」

アレンは「ありがとうございます」とドアのところで振り返って、一度お辞儀をしてから部屋を後にした。

意外にも大きい背中中は、暫くの間廊下の闇の上に浮いて、それからゆっくりと消えた。

単純に確りしているなと思った。

リズが成金野郎だと罵っていたけれど、優しいし頼りになるし真面目だし、他にも良い所がたくさんある。変に気取ったりしないところだったりとか、笑顔が素敵だったりとか、そういうところもすごく好感が持てる。

そう思ってしまうのは、やはり、告白されたからなのだろうか。

本当に、あの出来事だけが、僕にそう思わせているだけなのだろうか。仮にあの告白がなかったとして、それでも僕は、アレンのことをこんな風に見ていたのだろうか。

その答えこそ、一緒にお風呂に入ったり一緒に寝たりすれば、自然と体が気付くものだと思う。

でも、そんなこと、今の僕には到底できないから。

だから今は、じつくりと、ゆっくりと、誰もいないこの一人の空間に自分を馴染らすしかない。

遠くには黒い海がどっしりと腰を落ち着けて、月は薄笑いを浮かべている。その月の明かりは海の上で刻まれて、鋭い瞳のように数多に並ぶ。幻想という評価をした絵画も、僕一人が見るとたちまち現実味を帯びてきて圧倒される。とてもではないが、勉強に集中できる環境ではない。

僕は間違いなく試されているのだ。色々なことに。

そう思った。

思ったが、違った。

「んうん……」

まだ、サクラがいた。

サクラは良くも悪くも、僕に選択肢をくれる。いや、選択肢をくれること、それ自体が良いようにも悪いようにも解釈できてしまうだけか。今回もまさしくそうだ。

トラブルを蔓延させながらいつも僕たちを振り回すけれど、サクラがいなければこの合宿自体が破綻になっていたはずだから。

ほとんどは気まぐれでやっているのだろうけど、ちゃんと皆にも楽しんでもらいたいと思う心も持っているのがサクラだ。

そうやって気疲れしてしょっちゅう寝ているのだと思うと、途端に寝顔が愛おしくなるし、人にちょっかいを出すのも可愛く見えてくる。

そう思うのが、もし“特別”だからなのであれば、僕は僕の気持ちを理解できるのに。

僕は一つ席を詰めてリズの席へ サクラの隣へ移る。

開きっぱなしの教科書は、ちょうどカシミーヤの建国について記述されているページで、透き通った唾液らしき液体が初代国王の写真の上に池を作っていた。

「ああー……。これは乾かさないと……」

その教科書は僕が貸したものだっただけだ。

「だけど、怒りの感情は湧いてこなかった。嫌じゃなかった。これがアレンだったらと考えた。」

間違いなく怒ったりはしないだろうけど、それが嫌かと言われるとそれはそうかもしれない。別に、アレンのことを生理的に拒否するきらいはないけれど、少し考えてしまった。

それがつまるところの“特別”であるからなのか、僕の優しさのせいなのか、僕には区別がつけられなかった。ただ、似て非なるものなのだとわかる。

ヒントに気付けるかと思って、サクラの髪を撫でてみた。流れのままに、梳くように、優しく。肘をつけて腕で頭を支えるようにして、机に体を預け、僕はサクラの表情を覗く。

「小さい子供みたいだ……」

サクラは僕に、選択肢しかくれなかった。

答えは、僕が出すしかないのだ。実感をもって、そう思えた。

「僕たちも寝よっか。アレンが戻ってきた。」

「んっ。ねえ……」

猛烈な質感と圧倒的現実が、唐突に僕の唇を襲った。窓に展開された畏敬の絵画などどうでもよくなるほどに、その実感は確かな熱を持っていった。それが僕の持っていたそれと合わさって、どうにかなったのだ。

僕の目は相当に見開かれていただろうけど、サクラの目は依然閉じていた。

「あ、えっ？　ね、寝て？　僕、キス、され……えっ？」

髪を撫でていた腕を辿ってそうだったのだけど、触れられた二の腕辺りから首筋にかけて、未だに満遍なく鳥肌が立っていた。

夜船に揺られる彼女と違って、僕はまだ冴えていていざとい。

唇には、まだ若干の湿り気と、教科書の池と同じ粘り気が少しあるのがわかる。

「サクラ、『ねえ』って言って……。お姉さんの夢、見てるのかな……」

だとすれば、僕はサクラに選択肢をあげられる。

「何も、無かったよ」

サクラが起きていたら、一体なんと答えてくれただろうか。お姉さんがいたら、サクラになんと声をかけてあげただろうか。

それはわからない。

けれど、僕は覚えているしかなかった。

今日はよく眠れない気がする。

常夏の夜、浜風を添えて。(後書き)

【あとがき】

冴えない主人公にモテ期到来の予感。

前章もルート(とリス)がメインでしたが、今回は焦点を変えています。

前章は、サッカー、王子様、女子からの告白と、男性的なことの悩み。

今章は、実際に男子と付き合うということで、女性的な悩みに苦しむことになります。

ただ、性が不一致なわけではないのです。

たまたま好きな人が女の子で、たまたま相手のためなら自分をも変えてしまうくらい優しい。それだけなのです。

一般に性同一性障害と言われる方も、そういう方、多いのではないかなと思います。

私は決して、障害じゃないと思うのです。

ただの恋の形なんじゃないかって思うのです。

漢字も「生涯」の方がいい。

性同一性生涯。

ほら、すごい生きてる感じがする。

『dissent』お姉さん。(前書き)

【まえがき】

限りなくピンクに近い肌色のサブエド。
全年齢対象です。

どしどし。

『dissent』お姉さんと。

一日目。

夜。

「おおー」

ルリ姉さんの声が反響する感じが、ホントにどこかの温泉施設みたい。リゾートなんだから温泉くらい湧いてもいいんじゃないのって思ったけど、なかなかどうして。蛇口。

ま、入浴剤を持参してたからそこは大丈夫だけだね。

問題はそこじゃないんだ。

「結構おつきいねー」

お風呂もそうだし、声もそうだけど、ルリ姉さんのおむねが一番でかい。目が覚めるよ。

比較対象は比較の間違ってない方だと思う。

お母さんと、アリスお姉ちゃんのも昔見たけど、そんな感じのアレじゃなかったし、毎日見てる自分のもそんな感じのアレじゃない。ルリ姉さんのは、将来垂れるんじゃないかって心配になるアレ。いわゆる、走る時痛いアレなんじゃないか。

そう。触ってみたいアレだ。

「そうなのー。おっきいのー」

私の声も、浴場に木霊する。天井に壁にと跳ね返って、多分最後には、ルリ姉さんのアレに弾き飛ばされる運命なんだ。

悔しくない。悔しくない。

だって、ただの脂肪だもん。触りたいだけだもん。

「体洗うところもいっぱいあるねー。ここ、本当に何する施設なんだろう」

「わかんない。じゃあ私、ルリオ姉さんの背中流すー」

話をぶった切って洗面台の前に座らせると、ルリオさん、ちょっと焦り気味だった。

前も隠さない割に。

「あ、ありがとリズちゃん。でも、恥ずかしいからいいよー、ワタシは。そ、そういう感じでもないし？」

「そういう感じ？ わかんないけど、いいのいいの。気にしないの。肩をモミモミするとぴくっとなって、それがそのまま鏡に映って恥ずかしくなって、目が泳いでちょっと可愛い。怯えたメダカみたい。」

まあ、メダカはいいんだ。

おむねは、一体なんなんだ。クラゲとかかな。

「あの、リズちゃん？ 明らかに触ろうとしてない？」

「え？ してませんよ？ ちゃんと洗ってまーす」

「いやいやいや。ボディソープつけてないからね、まだ。うん」

「ボディソープつけたらいいですか。わかりましたー」

許可を貰ったので、ちゃっちゃとボディソープを取って、さっさと泡立てちゃおう。

うわあ。結構ぬるぬるしてる。ブレーキ利かないかも。知らないっつ。

「あ。うん。そんな感じ。ありがとー。あいやー、誰かに体洗ってもらった初めてだー。こりゃ新鮮新鮮。なんか、こっ、アレだねっ。ちよっと気恥ずかしいねっ！」

「そうですか？ 普通じゃないかなあ」

普通に言いつつ、普通じゃない自覚はあったりする。

「普通ではないよー」

罪悪感に似た達成感を感じさせながらも、ルリオの背中をボディ

ソープのついた手がぬるぬる滑っていく。

ニキビも何もない綺麗な背中。

お肌を労わるならやっぱり素手ですよね。

「ルリオ姉さん。背中、綺麗ですね」

「ありがとー……はっ！ まさかりズちゃん、ワタシを狙ってる！？」

「狙ってないですー。ホントに綺麗なんだもん」

どさくさに紛れてそろそろ揉もつかなどは思ってたけどね。

「あ。そう？　ありがとねー。なるほどみんなこうやって骨抜きにされるのかー」

「ひどーい。それだと私、軽いみたいじゃーん」

「ははははっ、ごめんごめん。でも、リズちゃんの可愛さが身に染みたよ」

「そんなに褒めても何も出ませんってー」

鏡に映ってる私の顔、やらしいっいたらないなもう。
見られたし。

肩の辺りを揉み解す要領で、疲れと一緒に忘れてもらおう。

「えい」

お母さん直伝のこのツボ、大概の人が効くんだよねー。

「あゝあゝ……イイっす……」
よし忘れたな。

「あの。ルリオ姉さん」

「ん？　なんだい？　そろそろ替わる？」

「揉んでもいいですか」

「もん？」

「むね」

「むね？」

急すぎたかな。

でも、触ってみたいしな。お母さんのよりすごいやつ。

「うん。むね、もみもみしたいの。おっきいから」

「え？ ワタシの？」

「うん。すごい柔らかそう」

「まあ、柔らかいけど。え？ マジで？」

「うん。軽い気持ちだよ」

「あ、そうなのね」

「そうそう」

「いやまあ別にいいけど……。あんまり強くやらないですよ？」

「やった」

思ったよりも驚いてない感じだけど、減るもんじやない精神かな。

ま、いいや。

それじゃ、さっそく。

「いつていい？」

「うん。いいよ」

許可してくれたけど、別段ルリ姉さんが何かをしたというわけじゃない。気持ち、脇が緩くなったかなってくらいで。

ゆっくりとそっちに手を滑らせると、二の腕から緊張が伝わって来た。

「あ……」

「え？」

「触……」

クラゲだ、クラゲ。間違いない。

クラゲ、触ったことないけど。

x x x

小型のプールを思わせる大きな浴槽は、二人でくつついてると広く感じたけど、端と端に陣取ると足がくつつきそうで微妙だった。前を隠していたタオルを外したこともあって、向かい合うのはち

よつと恥ずかしい。

とりあえず、そうしなくて済むように、並んで浴槽の縁に背凭へれてみた。

「ふう……。湯船に浸かるつても、悪くないねー」

「お風呂おつきいといいですね」

うちでも、風呂に湯を張る人がいたりするからたまに入るけど、バスタブが小さいと閉塞感がすごいんだよね。壁に挟まれてる感というかなんというか。

でも、こういう広いお風呂場になると、急に開放感が出てくる。でっかいベッドで寝てる感じというかなんというか。

そんなこんなで、私は温泉が好きだったりする。サウナあるしね。顔の知れた人が二人、風呂に入ると濃い話に恋話になるのは温泉あるあるだ。

「リズムちゃん」

「はい」

「リズムちゃんてさ」

「うん」

さすがにもう慣れたけど、ルリ姉さんって結構、間が独特。

多分、自分のペースみたいのがあって、その間でリズムを掴んでるんだと思う。

いや、適てきとりだけ。

「リズムちゃんて、女の子が好きなんだよね」

急にそう言われると迷っちゃうけど、さっきあんなだけモミモミしとしてはぐらかすのはないよね。

まあ、漠然とそう問われると困るのは確かなんだけどね。

だから私は、こういう時に「男子が嫌いなんです」ということにして、否定はしない。肯定しないのは、なんでだかよくわかんなかったりする。なんかちよつと怖いのかも。みんなから変な目で見られるの。

「なるほど、男子が嫌いなのかー。昔嫌な事でもされたの？ あ。

思い出したくないことなら無理しないで」

「大丈夫。何かあったってことじゃないんだけどね。男子ってなんか、汚かったりガサツだったりするし、イマイチ何考えてるのかわかんないだもん」

「あー、まーわかるよ。色々さっぱりしてて適当で、そのくせ変なところだわったりね？」

「そーそー」

「そりゃ、体のつくりからして違うからしょうがないと思うけどさ。ちよつと、こつ、重い時とかさ。イライラしちゃう時とかさ。もうちよつと、優しくしてくれてもって、思うよね」

「そーそー！」

なんだ。わかってるじゃんルリ姉さん。

「男の前だと気絶しちゃうのに、そういうのはわかるんですねルリオ姉さん。すごいです」

「き、気絶っ？ ワタシがそんなことになるわけじゃないじゃないか」

「文化祭の時気絶してたよ。立ったまま」

「立ったまま！？ なんだそれ、変態か！ はっはっは！」

どうしてそんなに白々しいんだ。

まるで、その間の記憶だけ無いみたいにさあ。

「えー。覚えてないのー？」

「覚えてないも何も、ワタシは生来健康体だぞー？ ちなみに、何の時に直立気絶してたんだワタシ」

「それはですねー。えーつと……あれ？」

少し前まで覚えてた気がするんだけど。ど忘れなんて、いやいや、そんなはずない。

あれあれあれ。

「忘れちゃった？ ははは。大丈夫大丈夫」

「ち、違って……！」

喉まで出かかっているとか靄がかかっている感じじゃなくて、そもそもそんな記憶がなかったような感じ。遠い昔のことのようにうつす

らと枠だけ残つてあるみたいな。

うーん。思い出せない。

「うんうん。わかっているわかってる。いやまあさ。超絶イケメンが口説いてきたらそうなるかもしれんね。あっはっはっは!!」

「冗談に思われちゃったみたいだけど、冗談なら別にそれでもいいか。」

なんでそんなこと聞いたか、自分に疑問だけど。

「いやあ、リズちゃん、冗談の感じも可愛いなあ。ワタシはやっぱり、リズちゃんは妹に欲しいかなー。彼女とかじゃなくてさ」

あ。話戻すのね。

「ルリオ姉さんの妹、楽しそう」

「だろだろー?」

それはホントに楽しそうだなって思うけど、なんか気を遣わせちゃってこっちも気疲れしちやいそう。互いに理想の存在であり続けようと思つた連鎖みたいなのが起こる、王道パターンのやつっぽい。

だから、本物のお姉さんよりも姉御かって遠慮する。

「逆に、リズちゃん的にはさ。ワタシってどう?」

「付き合えるかどうか、ってことですか?」

「そんな感じ。あ、いや、何か気になつてるとかじゃないよ。笑い話にするつもりでもないし。ただ単に、リズちゃんにどう思われているのかなってね。また後でモミモミしてもいいからさ。お姉さんに教えてよ」

「わかりました。それなら」

そんな取引をされると、付き合えませんがとも言いつらい。それでクラゲをいじらせてくれなくなったら損だ。

でも、ルリオ姉さんの無垢な問いかけに嘘で答えるわけにはいかない。

「ルリオ姉さん。ごめんなさい」

「うおっう……!! でもまあ、そっか。本気なんだもんね。いやでもこれ、結構効くなー……。フラれたわけでもないのに、フラれた

かのような感覚……」

「ルリオ姉さん……」

「ん？」

「大好きー！」

失恋中のルリオ姉さんの右腕に絡みついでみる。

「おうっお、圧倒的發展途上……っ！？」

満更でもなさそう。

私のは所詮、水風船くらいだけど、これならルリオ姉さんも大丈夫そう。

「慰めてくれてるのか、優しいなー。ワタシの自業自得以外の何物でもないのに」

「失恋って辛いから」

「ありがとー。失恋はしてないけどなー……って、あれ？ リズちゃんって失恋したことあるの？」

「ありますよー」

変なところに食いつくなあ、ルリオ姉さん。

「だれだれ？ 女の子？ 男の子？」

「アリスお姉ちゃん」

「アリス？ アリスって、あのアリスちゃん？」

ルリオ姉さんの指は、水色のタイルのどこかのマスを指してるけども、それはアリスお姉ちゃんじゃない。

そういえば、アリスお姉ちゃんが寝てる部屋、お風呂の隣だったっけ。

「うん。アリスお姉ちゃん」

「あー。そういえば、みんな学校一緒だったんだよね」

「うん。エレメンタリー初級学校から同じなの。部活も一緒」

「へえ。なるほどねえ。カッコいいもんねー、アリスちゃん。でもそっかー。フラれっちゃったかー」

面と向かってごめんなさいされたって訳じゃないけどね。

私の方も、ラブアピールは盛んにしていたけど、真剣にお付き合

いしてくださいとは言ったことがなかったし。今思えば、あんまり本気じゃなかったのかも。

まあ、アリスお姉ちゃんで色々妄想とかしてたけどさ。そういうことだから、フラれたというより、自然消滅に近い気もしないでないんだよね。

結果的に、私のアリスお姉ちゃんへの気持ちが冷めちゃったっていうのもあるし。

「私はくよくよしないタイプなので大丈夫なんですー」

「そっかそっか。リズちゃんなら大丈夫だ。きっと、運命の人に出会えるよ」

「うん。ありがとお姉さん」

運命の人ね。

お母さんもそんな言葉を使ってたけど、乙女はみんな好きなもんなのかね。

私のはあんまりなんだよな。運命。

なんかさ。行き止まりな感じがするし。

代わりの言葉をあげようかになってばーっと探してみると、お姉さんが聞いてきた。

「そうだ。ルートくんはどうだった？」

「へっ？」

私の上擦った声がお風呂に木霊して、かなり恥ずかしかった。

なに動揺してんの、私。

「あの、えっと、どうと言われましても……」

「アレンくんに告白されたんでしょ？ どんな感じになってるかなって」

「あ。そっちな」

そりゃそっか。

確かに、血の繋がりって運命に等しいけど、そういう意味じゃないもんね。

「ちよっと困ってた感じかなあ」

「あははは。ルートくんらしいね。リズちゃんはどう?」

「私?」

「そ。リズちゃんはどう思ってるのかなー、と思ってさ。ちゅーしてたし」

「あ、あれは別に、何も……っ」

ぐいぐい来るねー、ルリオ姉さん。

言葉の準備が追いつかないぞ。

「ま、だよー。劇だったし。相手がお姉ちゃんだしね」

「……そ、そうですよーっ。そうに決まってるじゃん!」
なんだ?

どうしたんだ。私。

「でも、あんなに長いのに、人前でやったらダメだぞー? お子様たちの教育によろしくないからなー。隠れてれば良いってもんでもないけどな」

「ですよ。あはははー……」

なんでこんなにモヤモヤするんだ。

冤罪で起訴されたみたいなの、勘違いの風評被害を浴びてるみたいなの、そんな感覚になる。どっちもよくわかんないけど。

そっか、あれか。

私、逆上せてるんだな。

「ね。ルリオ姉さん?」

「んー?」

お姉さんは、あたかもお姉さんであるように優しく問いかける。

私はその熱に当てられたんだなって、そう思うことにする。

「私、そろそろ上がるのかなーって」

「お。熱かった? ごめんね。長話して。大丈夫? 一人で上がれる?」

「うん大丈夫」

「それじゃ、ワタシも上がる……っ」と

ざばっと小気味よく立ち上がったルリオお姉さんは、二秒静止した

のち、そのまま後ろに倒れた。ちよつと沈んでから、顔のようなものが浮いてきて、それは笑った。ちよつと、怖い。

「えつと……」

「ごめん。ちよつとくらつと来た」

故意かと思つたら、普通に違つた。^{ギャグ}

逆上せたの、私だけじゃなかつたみたい。

「だ、大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫。大丈夫なんだけど、ちよつと陸に上げるの手伝つて」

「う、うん。わかつた」

「ありがとう」

それつて本当に大丈夫な部類に入るのかなとは思いつつも、対価はいただきたいところ。

「えつと。引き上げる時、触つちやうかも」

「うんうん。いいいいいよ。仕方ないよ。だから、ちよつと急いでもらえるかな。耳がもんもん言い出してるんだ」

もんもんが何か気になつたけど、今はそんなことより、顔と一緒に浮いてた二匹のクラゲ。

無防備も無防備なルリお姉さんの脇に腕をスルツと、ちよつとクラゲの中央のところであつちりと いや、もつちりとロック。そのまま浴槽の段差を上つて、どんどん陸の方へと引き上げる。

私は今、貴重な体験をしています。

クラゲの水揚げです。

x x x

「いやあ……。すまんねー……」

「いいですよ。いっぱい触らせてもらいましたし」

洗面所の腰掛で横になるルリオ姉さんに、風を送りつつ駄洒落でみる。

「はははっ、という景気の良い小笑いが広い洗面所に響いた。

別に、大うけを狙ったわけじゃない。

沈着を装っていると、ルリオ姉さんが急だった。

「リズちゃん。ワタシに何か感じる？」

「えっと……膝枕、してるからですか？」

「うん」

私は、ルリオ姉さんの興味を察して言葉を準備していたので、返答に困らない。

ルリオ姉さんは、すごく鋭い人だと思う。年上な分、私より。

多分、隠していることがあるのも、気付かれているのだと思う。

「ルリオ姉さん。それ、すごく気にしますね」

別に嫌味で言ったわけじゃないけど、そう聞こえていても否定しないと思う。

ルリオ姉さんは、また軽く笑って、私の高ぶりを淀ませる。

「ごめんごめん。興味本位なんだ。言っただけだけど、嫌だったら言わなくてもいいよ。でも、ワタシの胸は有料だから」

「ずるいです」

「全くもう。」

分かってるくせに、そうやって焦らすんだ。

「だって、まだ触る気だろー？」

「はい。その間で寝てみたいです」

「素直だなあ。いや、まあ、そんなに言うほど谷無いけど……じゃなくてだな」

知ってるよ。わかってる。

ルリオ姉さんが聞きたいのは、私と私の

「お姉ちゃん　って呼んでるなって思ったんだけどさ。劇の時から」

“お姉ちゃん”

ずっと昔は確かそう呼んでいたけど、途中であだ名が変わって、最近また戻った。

戻ったはずだった。

だけど、そこには明らかに以前との違いがあった。

「でもさ。その時からさ。あの、キス……の時からさ。何となくね」
わかってる。

わかってるんだけど。

「あんまり、呼ばなくなっただよな気がしてさ」

『前なんか日夜ルールールー言うてたのに』なんて、今なら言える。

恥ずかしいとかはまだ特にないけど、何故か、そう呼べない。

アリスお姉ちゃんとかルリオ姉さんと同じ、“お姉ちゃん”でしか私の声は形にならなくなった。

それが変にもどかかった。

「だからさ。もしかしたら、何かあったのかなって」

「お姉さん……」

「悩んでることがあつたらさ。何でも話してみよ。看病されてる人のセリフじゃないけどさ。ワタシじゃリスちゃんの力になれないかもしれないけど、ルートくんの力になられるかもしれないからさ」

ルリオ姉さんは、私が楽になるように体勢を変えて続けた。

今度は、顔がこつちを向いているから、表情がダイレクトにわかる。

「お姉さんに言ってみな？」

私のお腹に一番近いところで、そんなことを呟かれる。

赤ちゃんばいのかお姉さんばいのかお母さんばいのか、よくわからないけど、なんか心が落ち着いた。

逆上せて多少熱があるからか、ルリオ姉さんが頭を凭れていると

ころのあたりがじんわり温かくなってくる。

「どうしよう、ルリオ姉さあぁん……」

これが、ルリオ姉さんに対する反応？　もしかしたらこれは、私がお風呂に混入した入浴剤の効能なのかも？

いや、でも、さすがに、瞳の端っこがキュっとなるとか、そして潤ってきちゃうとか、そんな効能なんてないよね。ヒノキ風呂の入浴剤に。

「おうおう。どうしたどうしたー」
変なの。

涙がお湯みたい。いや、お湯が涙みたい？

どっちでもいっか。

「私、もう、ルーって呼べないよう……」
ホント、どうしたんだろ私。

前は、自分だけの名前だと張り切ってたはずなのにね、今はそう呼ぶのが、恥ずかしくて恥ずかしくて仕方ないんだ。

【dissent】お姉さんと。（後書き）

【あとがき】

今回のサブエピソードが、結構今章の核心をついている気もしないでもないです。

恋路と関係ない、むしろそれを外側から見ると「第三者視点」という部分が大きなき意味を持つてくるような感じがしますね。

今章は、肌色とは別に、そういうところにも留意していただけると幸いです。

今回は本編に戻ります。

今章では、また度々サブエピソード挟みますので楽しみに。

産地直送、スパイスを添えて。(前書き)

【まえがき】

ちよつと熱情的だった今章に、よつやつと冷房が。
良心ほど厄介なものはないですね。

どしぞ。

産地直送、スパイスを添えて。

二日目。

朝食が無いことに気付いたのは、すでに太陽が空に昇りきった後だった。相変わらず時間はわからないままであったが、それがすでに朝食ではないということは、何となくわかった。

全員でモールに買い出しに行つて献立を決め、食事を作っていたら、昼食かどうかすら怪しい日の位置になつていた。例のごとく、誰かさんと誰かさんが進行を妨げるので、そういう結果になつた。さつき、その誰かさんに時間を聞いたら、午後三時くらいだと思つと言われた。

そこからおやつタイムを挟んだから、現在時刻は午後三時半くらいだろうか。

頼りが太陽の位置と気温くらいなので、そうと言われればそんな感じがするし、四時半と言われればそうとも言えそうである。

現地人顔負けであるうアナログな合宿をしているなど、呆れてツッコむ気力も無くなる。

それはもしかすると、全員がそう思っているかもしれない。

「ルリオ姉さん。これどうやんのー」

「おう。今行くぞー。……んで、この公式は展開するとこれと同じになるわけよー。オツケーかな、アリスちゃん」

「なるほど。そう言えばそうだったわね。助かったわ。要するに、この問題はさつき教えたやつ応用よ」

「わかった。それならできるかも。やってみる……」

「のう、のあよ。こっからどうしたらよいんじや。輪郭は描けたが、陰影と言われてものう」

「あ。それなら、先に黒く見えてるところに影を落とすといいですよ。そしたら、次にそれを指で撫でて光源と逆方向に伸ばすんです」
一部、ベクトルが違う気がするが、一目目とは打って変わって各々が集中しているようだった。

一日経てば、この独特な雰囲気にもなれるものなのだろうか。
なかなかその輪に入れない僕は、いまだに青い海と太陽のコントラストに猜疑心を抱いていた。無関係の美術科目にせよ、サクラが落ち着いて椅子に座っていることが特に。

こうして紙面上に並んだ見慣れた数列が、心の拠り所となるとは思いもしない。

そういうわけもあってか、席順は同じはずなのに居心地はかなり違った。

「……………」

リズがルリ会長に、ルリ会長がアリスに、アリスがノアに、ノアがサクラに、アレンがサクラに。時折、矢印の向きは変わって、その度それは学年や学校の垣根を超えた。

数列にも似た矢印を線で結べば、何か法則性が見えてくるだろうか。

僕は自分のノートにこの空間の間取りを書いてみた。キッチン、木の棚、ベランダ、窓、それから席順もしっかり模倣して、最後に自分を書き足した。

分かったのは法則性ではなく、みんなと僕との距離だけだった。

「ルートさんも美術ですか？」

そんな中、アレンから矢印が飛んできて、漸く、僕にも線が繋が
る。

「あ、いや、ちょっとね。うちと似てるなと思って。間取り」

「あ。そうなんですか。へえ。間取り図、すごい上手ですね」

「あ。うん。ありがとう」

アレンが僕のことを見てくれているのだと思うと、自然と安心する反面、少し気恥ずかしくもある。

褒められた間取り図ばかりを見て考察していると、斜め横からも矢印が飛んできた。

「あら。あなた、随分と自信があるのね」

アリスの鋭い指摘はある程度のベクトルを持って、僕にぶつかった。

流れるように視線が僕に集まったところで、アリスが続けた。

「どっかの誰かと同じで」

アリスの視線を追いかけるように、皆の視線が僕の二つ隣へと移っていく。

相変わらず凄まじい発言力だ。

「なんでみんなわしを見るんじゃ。わしは、ちゃんと勉強しておるぞ」

「言っておくけど、一年生に美術のテストはないわよ」

ノアに勉強を教えている身上、そのノアの邪魔をするサクラはアリスにとって目の上のたん瘤なのだろう。今日の口調は、いつにも増して刃先が鋭利に感じる。

落ちて着かせようと、ルリ会長が遠くから口を挟む。

「まあまあアリスちゃん。絵を描いて公式覚えるって人もいるからそんなに怒らないであげて」

「そうじゃそうじゃー」

それが果たしてフォローなのか、怪しいところな気がしないでもない。

「へえ。進法を覚えるのに、裸婦画ねえ……」

「なんじゃ。もちーふはちゃんとりーとじゃぞ」

「えっ」

ぎょっとして立ち上がり、サクラの後ろから絵を覗いてみれば、

そこには確かに僕がいた。おまけに僕は全裸で、どこかで見たことのあるソファに横に寝かされていた。

完全にとぼつちりである。

「ちよ、ちよっと、これは……っ！ サ、サクラっ」

途轍もなく上手いのが逆に仇となつて、異様な艶めかしさがそこにはあつた。まじまじと鏡を見たことはないけど、頭の方から爪先の縷々に至るまで、その絵には不自然な点が一つも無い気がする。

これは、明らかに公の場に出していいものではない。

そう思つて、没収しようと手を伸ばしたは良かったものの、リズが掠めるほうが早かつた。

「わあ。すごい。ホントだー。はだかだー。ちゃんとおへその下に小さいほくろついてるしー」

「ノアも、見てみたい……かも」

「その次ワタシなー。アレンくんは最後でな」

「えっ？ いいんですか。やった！」

利便性を重視してか、追いかける僕から遠ざかつてか、サクラの絵は見事に机の中心部に掲示された。みんながそれを囲む形となっているから、僕もなす術がない。

「うわああああ個人情報っ！！」

ハイエナに集られる食肉の気分だと言つたらわかりやすいか。……分かりづらいか。

一人、満腹気なハイエナが輪からはみ出して、僕に言う。

「別にいいじゃない。絵だし。まあ、でも、確かにこれは、ちよっ

と……エロ」

「あああああ！ もう見てもいいから、それ以上言わないでください……」

「なんじゃ。わしが描いたんじゃぞ」

今度は不服そうな人が出てきて、どうももつともらしいことを宣つているようだった。

しかし、こればかりは被写体兼被害者である僕に分がある。

「そ、そんなの僕、描いていって言うてないよっ」

「ダメとも聞いとらんのじゃ。それに、お主は海を描く時に、海に確認するのかの？」

「いや、僕は海じゃないし……」

問題はそこじゃないのだと、僕の口は止まらない。

「それに、半裸くらいならまだ許したかもだけど、本気で全裸だなんて……。何かを失った気分だよっ。というか、なんでほくるまで知ってるのっ!? そんなの、お母さんとリズくらいしか知らないはずなんだけど!？」

「実は風呂を覗いてたのじゃ」

「え」

刹那、背筋が凍りついた。

そして、リゾートにはミスマッチな感覚だと、知った。

「冗談じゃ」

「あ……よかったー……」

何か汗のような露結のような、よくわからないものが体表からふわっと噴き出してくる。

サウナ上がりの水風呂に入った時のような、体が勘違いしている感じに近いと思う。

色々と聞きそびれていることが多い気もするけれど、頓着する余裕はなかった。

「と、とにかくっ。その絵は没収っ!」

僕は輪に切り込んでいって、自分の絵を強引に取り上げた。破いたらサクラに悪いと思ったので、とりあえず絵の描いてある方を内側に、丸めて筒状にしておいた。

僕が保管するなりどこかに隠すなりするとは思うが、この作品は残ることに変わりはない。

アーティストの強大さというのはこういうことかと、身に染みめる思いである。

その強大さは、往々にして作者が理解していなかったりする。

「ふん。なんじゃあ。わしがですとに落ちたらるーとのせいじゃからな。その時は、責任をとってもらうのじゃ」

「いや、別のやり方で勉強しようよ……」

「わしにはこれしかないんじゃ」

言った下から「今日の気分的に」と聞こえた気がするけれど、サクラに関してそこは大前提だと思うので、別段気に留めなかった。

サクラと口論するのは暖簾に腕押しに構図が似るので、ここは一つ試してみよう。

僕が受けた辱めの分だけは、取り戻せればと思う。

「じゃあ少し聞くけど、僕の顔は進法のどの辺？」

「そうじゃのう。第二項くらいかのう」

「第二項……」

僕たちの教科書の括りは、項ではなく章だったはずだけれど。

理由はよくわからないが、もしかしたら、サクラはそう呼んでいるのかもしれない。

「二だと、どれくらいだろう。十二進法とかわかる？」

続けて尋ねてみれば、多少被せ気味に返してきた。

「時計のことじゃ。あと、暦の月もじゃな」

「そ、そうだね。じゃあ、七進法は？」

「週間のことじゃな」

何となくこうなるとはわかってはいたけれど、少し悔しい。

僕のヌードがみんなに安く買われてしまったような、脱いでないのに脱がされてそれをひけらかされたような、そんな空しい喪失感に囚われる。

リスのように明るく振舞うのなら、「減るもんじゃない」というところなのだけ。自分をもっと大切に、とも言われたし、どっちもどっちである。

でも、今できることはせいぜい、良い隠し場所を模索することだろうと思う。

「はあ……。わかったよ……。とりあえず今は返すけど、絶対その

辺に置いとかないでね。捨てるなら、僕が処分するから」

「わかったのじゃー！」

その底抜けに明るく朗かな声色を聞くと、残りの三日間という期間がやけに長く感じられる。でも、もしかしたらそれは、たった今勉強をしているから、時間が長く感じられているだけなのだとも思えた。

ふと外を見れば日は暮れていて、あながちそんなこともないようだったけれど。

数学が僕なら理科はアリスだろうか。なんて密かな期待は、伸びた影と夜の帳との間に上手く隠せたと思う。

ほっと胸をなで下ろすと、それをまた逆撫でするかの如くサクラが閃く。

「そう言えば、七進法で思い出したのじゃ」

自然、ドキドキと鼓動が速まる。

瞬間的に静寂に包まれた居間は、どこか昨日の静寂を想起させた。構えているのは僕だけではないようで、ルリ会長とアレンは顔がこやかな笑みのまま能面のように固まっていた。ノアはアリスに密着して、アリスはポーカーフェイスで静観しつつも肩に力が入っているような気はした。リズは髪の毛で遊びだした。

僕は立ったままで、サクラの横顔を見ていた。

そのままであればよかったのだが、なかなかどうして。

恐怖である。あるいは、畏怖である。

サクラは僕の方を一番に見て、言うのだった。

「しるばーういーく、伸ばしておいたのじゃ」

誰も微動だにしなくて、まるで沈黙という光景が具現化して目に見えるようだった。

それはそうと、だ。

七進法となんの関係があるのかわからないけれど、どうやら伸びたらしい。

それは一体、僕のどの辺に書いてあるのだろう。伸びると言えば、身長だろうか。

「じゃから、十日間になるのじゃ。たぶん」

なるほど、それは五進法ということになるだろうか。

五進法と言えば、指。僕の指に書いてあったのか。なるほどなるほど。

「安心するのじゃ。時間はちゃんと五日間じゃ。十日分、ゆっくり時間が経つのじゃ」

言われた途端、吸う空気が重くなった気がした。当然ながら呼吸もそうなるので、居間に占める空気はたちまち重量化していった。誰も言葉を発せないというのも、そのせいだとすれば合点がいく。ともすれば僕たちは、やはり、とんでもない場所に來てしまったことになる。

五日が十日になる国とは一体どこなのだろうか。そういう言葉の綾ならまだしも、サクラにはそんな洒落たことをする生態はない。もつとストレートな自己表現をするはずだ。

いやしかし、サクラの言う通りなのであれば、僕たちは現在進行形で歪曲時空を体感していることになる。逆に冗談なのであれば、僕たちは倍のシルバーウィークを謳歌させられてしまうことになる。まずい。このままでは、良識ある人間に戻れなくなってしまふ。そう思って目を動かせば、見識の広いアレンもアリスもすっかり黙ってしまっていた。この重い空気にやられているようだった。

思い切りのいいリズムも、底力のあるノアも、頼れる生徒会長も、完全に固まっていた。

サクラが軒昂と語るうち、僕は金縛りにも似た感覚に見舞われた。それなのに、しっかりと海は揺れていて、本当に時間がゆっくりになっってしまったようだった。

手遅れになる　　その時だった。

ぐうううう。

風船と風船を擦り合わせたような、どこか間の抜けた音が鳴った。どこからともなく聞こえてきたそれは、居間中に蔓延した重空気を吸い込んでいくかのように良く響いた。余程、力の込められた音なのだろう。

僕もつられて鳴りそうだった。

「よし。メシにしよう」

満場一致の點頭から、何かの公式を閃きそうだった。

産地直送、スパイスを添えて。(後書き)

【あとがき】

この間を感じていただければ、あなたもリゾートに行けます。

今回は、ちょっとだけ胸がきゅって締まるお話を。

【dumping】Runs upon Awakening
前書き)

【まえがき】

出てくる人はいつも通り子供ですが、今回はちょっと大人な話です。

少し苦しいかも。

どうぞ。

『dumping』Runs upon Awakening

二日目の夜。

「アリスお姉ちゃんとお風呂に入りたーい」

誰かさんの妹は、誰かさんと似て面倒な性格をしていたので。

あたし自身、断る理由はと言えばノアの外存在意外にはない。けれど、あたしがどうこう言う前に生徒会長だの破天荒娘だのがノアをたぶらかすので、それも無くなった。

結果として、ノアは会長とルート、それからサクラの三人と入ること合意したので、あたしは妹様の申し出を受け入れる運びとなった。

気乗りするかしないかで言われれば、しない部類に入るだろうけど、きつぱり拒否するほどのことでもないと思った。面倒なのは確かだけれど、ちゃんと話せば、どこか憎めない可愛らしい後輩なのだ。

そういう一定の距離を、あたしはあたしなりに保ってきたつもりだけれど、どうにもこの子にはそれが通用しない。ルートやノアのように、正確に心の距離を押し量れるわけではないから、何とも言えないのはそうだが、それ以前に、この子の踏み込みが速すぎるのが難だった。

ついさつきも、洗面所の鏡越しに私の裸を見て鼻血を流していた。その瞳に凄まじい性的エネルギーを感じて、あたしは身震いした。最近はおたしに冷めたと思っていただけ、そんなことはないのか

もしれない。付き合つてと言つたら付き合つてくれるだろうし、気を許したら襲われそんな気もする。

さすがに、その程度の方は落ち着いてきているのだと思う。

それこそ、あたしが冷めているからというのも無論あるのだろうけど、近頃は得にリズの方からのアプローチが減った気がする。

気がしていたのだけれど。

そうやって不足したあたし成分を補充するかのように、浴場へ来てからはあたしの左腕に絡みついて離れなかった。勿論、湯船に浸かってからもだった。

あたしから見るのは頭頂部がほとんどだったので確かなことはわからないけれど、どことなく物悲しさが漂っている感じがした。

あたしはそれを押し退けるようにしながらも、心では撫でていた。「お湯に浸かつて熱いんだから、離れなさいよ」

「……………」
触れあう二の腕から、離れたくないという意志が伝わってくる。

でも明らかに、これまでとは違う感情だと思う。何も言わないのは、あたしの真似だろうか。

あたしはしびれを切らして、問う。

「なによ。どうしたの」

「……………」
「話があるなら、いいなさいよ。そのために一緒に入ろうなんて言い出したんでしょ？」

あたしと密着している割に何もしてこないなんて、昔じゃ考えられない。

あたしもあたしで、めんどくさくなって途中退出したりはしないのだ。する気が起きない。

それでも変わらないと言えば、あなたのその狡賢こつこつさかしら。それならそれで、あたしも沈黙するまで。

「……………」
ひたひたと、どこかで雫の滴る音がする。

「……………」

一日の長とでも言うべきか、沈黙を破ったのはリズだった。

「ね。アリスお姉ちゃん」

あたかも不都合そうに「なによ」と、あたしはそう返す。

「知ってる」とでも言うかのように、リズはあたしに体重をかけてくる。そして、「ねえ」と間をおいて、自分のタイミングで続けるのだ。

それはとても、リズらしかった。

「アリス、って呼んでもいい？」

昔から、意味の無い言葉を言ったりしない子だったから、その脈絡の無さには正直、瞠目した。昔のように、似非^{えせ}でも愛を感じていたら、それこそ憎らしく思っていたかもしれないけど、今はそれが無かった。

あたしはそれに応えるように、確固たる意味を口舌に乗せる。

「ノアがない時なら、いいわよ」

やきもちを焼いてしまうから、とはあえて付け加えなかった。

あたしがなのか、ノアがなのか、それはあたしが気付きたいから。

「けちー……………」

「ええ。そうね」

毒づくリズに覇気は無く、対するあたしも往々にして張り合いが欠如する。

こんなにも靄のかかった湯に浸かっていると、エレメンタリーの頃の記憶が蘇る。パジャマパーティーをした日、三人で一緒に入浴した記憶だ。

ルートが緊張してそっけなくしていたのを、リズが気を遣ってあたしとくつつけたというところまでは良かった。しかしその後、面食らったルートが風呂場から出て行ったおかげで、あたしはリズと二人きりになってしまうのだ。

話を通じないし、そもそもあたしはリズが嫌いだったから、あの時は本当に困った。

十中八九騒ぎ出すだろうと思った。

しかし、意外にもリズは静かにしていて、むしろいつもと逆に、一歩距離を置いたのだ。

当時、その意味はよくわからなかったけれど、今なら、折に何となくわかる気がする。

今の距離感は、それと似ているのだと思う。

密着しているようでしていない。離れているようで離れていない。言い換えれば、この大浴場で触れ合う行儀と、あの小さな浴槽での振る舞い。

そんな絶妙な距離に、あたしたちは今、いる。

形容するならば“姉妹”のそれ、かもしれない。

別段意識をしなくとも、あたしの手はリズの濡れた髪を梳かした。

「わっ……。アリス、お姉ちゃん……。？」

「呼び捨てにするんじゃないのかしら？」

「いや、そのっ、だって、あたまっ。私……」

「嬉しい？」

リズはゆつくりと頷いて、そのまま顔を湯船につけた。

暫くは、泡がポコポコと水面に浮かんでできていたけれど、それもしじきに途絶える。そうするとすぐに、リズの頭があたしのもとに戻って来た。

浅く、深い、疑問とともに。

「なんで……。？」

「さあ。なんでかしら」

あたしは疑問を疑問で解決する。

フラれた理由を事細かに知る必要は、女の子にはないのだと言う事だ。今まで諦めないでいてくれてありがとうという思いも、確かにあったと思う。

「ねえ、なんでなの、アリスお姉ちゃん……。っ！」

「アリスでいいわよ」

時には、突き放す厳しさも必要で。

「もう、いいよ……」

リズがまた潜ってしまう前に、あたしはリズを包み込むようにして抱きしめた。

あたしとリズとの間にあつた温かいお湯が捌けると、今度は涙に変わった。ゆっくりゆっくり、それはあたしに浸透していく。心はまだ染み渡るように熱く。

暫くそうしていると、胸がちりちりと痛んだけれど、それは我慢した。

リズがあたしから離れた時、リズはあたしにフラれたことになるのだから。

だから、リズの涙が止まるまでは、あたしの胸を貸すしかないのだと思つてしまった。今までの気持ち分を返せるはずもないけれど、せめて。

それから数分、リズは嗚咽して泣いた。

あたしはリズを撫でたのも、抱きしめたのも初めてだった。

こんなに可愛い子なんているものなのねと、しみじみ思った。

そうしてまた、どこかで雫が落ちる頃。

「そろそろ大丈夫かしら」

「うん。もう平気。でも、このままがいい」

「このままは嫌だわ。あたしだって、向かい合うのはそれなりに恥ずかしいの」

「えー。今日の入浴剤は濁ってるから見えないよー」

「そういう問題じゃないのよ」

「じゃあ、背もたれしていい？　そして、またにはさんでー」

「別にいいけど、その言い方はやめなさい」

「わーい。アリスお姉ちゃんのおまたに挟まって共依存だー」

「そっちじゃないわよ」

今、あたしから見える頭頂部にさっきまでの悲壮感はなく、あつ

たのはいかにも能天気な旋毛二つだけだった。

少し甘い花の匂いが漂うシャンプーは、サクラの趣味を感じる。

そんな香りに気付いて漸く、あたしの心は今に戻ってきたような気がしてしまった。

「ねえ。アリスお姉ちゃん？」

「なによ」

「アリスお姉ちゃん、前と変わったよね」

「そうかしら」

リズはいつも通り小気味がいい。

あたし自身も、どことなく本調子の感覚に近づける。

一呼吸おくと、リズはまた「ねえ？」と話の口火を切る。

「ノアさんって、どんな人？」

いきなり直球でくるとは、何ともリズらしい。

読んでいたあたしは、リズのお腹の辺りを撫でながら返す。

「小さくて、弱くて、でも正直で。強い子よ」

「ふうん。なんかお母さんみたいな言ぶんい分」

伝わりはしたのだろうが、欲していた情報ではなかったのだろう。

随分と乾いた反応だ。

それでも、あたしの手を探って握ってきたりと、きっちり効果は出ているようではある。

「でも、可愛いよね。ノアさんって」

「ええ。あたしもそう思うわ」

「なんかふわふわしてるし」

「ええ。そうね」

自然、ノアがあたしの後ろにひよこひよこついてくるイメージが浮かんで、小さく笑う。

気にしたリズが振り向かないように、あたしはリズの横腹を軽く撮む。

「やんつ。くすぐりたいよ……」

「あら。ごめんなさい。あまりに可愛いから、つい」

「ふん。何それ。……意地悪」

不貞腐れていることを矜持するように、リズが凭れてくる。

「あたしがとつた距離感を、それがあたしの故意だと知りながら詰めるのだ。」

「いつもなら小賢しく思っていたかもしれないけれど、今はもう、可愛くて仕方がなかった。」

「そうね。意地悪かもね」

「アリスお姉ちゃん、やっぱり変わったね」

リズは、とても勘が鋭い。

しんとした空気のせいかな、あたしに掛かる重みが、一段と増したように感じる。

その点では、変わったのはあたしではないと言える。

「どのあたりがかしら」

「うーん。なんていうか、お母さんっぽくなった」

「あたしはその言葉について感じることはほとんどないけれど、リズは別だろう。」

ウェール家にお住まいの物腰柔らかかなあの素敵な婦人を思えば、

あたしは少なくとも批判されてはいないはずだ。

「ただ、それを言葉にする時に、「ありがとう」なのか「違うわよ」なのか判断に困るのは確かなことだ。」

「肯定否定どちらの意味も込めて「ふうん」と息を抜くと、リズがくすりと笑った。」

「私さ。自分が本気でアリスお姉ちゃんのこと愛してると思ってたんだ。それは勿論、性的な意味でもね？」

「身も蓋もないわね」

リズがまた、小さく笑う。

「だけど、違ったんだ。アリスお姉ちゃんは私にとって、ホントにお姉ちゃんみたいな存在だったんだなって最近気付いた。それが、嫁いで疎遠になっちゃった気分かも」

「えぐみの多い比喻ね」

言いたいことはわかったけれど。

「小さい頃から遊んでくれて、色々お世話もしてくれて。そしたら、いつのまにか好きになってたんだ。そして、気付いたら会いに行ってた。同じ部活に入れた時は、すっごく安心した」

「褒めても何も出ないわよ」

「揉んだら出るかもよ？」

「冗談に聞こえないから」

はははと一つだけ軽い笑いがあつて、また静かになつて。

あたしは彼女の重みに耐えきれず、黄昏たそがれの肩をそつと抱いだいて、姉を演じることにする。

「アリスお姉ちゃん、柔らかい……」

「あなたもね」

リズが、水が、段々と軽くなつていくのを感じる。

年上であるあたしが気を遣うという責任めいた行為が、そう感じさせているのだと思う。

周囲を心配してばかりいるリズにとって“姉”というのは、唯一甘えてもいい存在だと言える。リズぐらいの年齢だと、どうしても母親には甘えられないだろうから。

リズには本物の姉がいるけれど、リズがあたしのことをそう呼ぶのなら、あたしも姉だ。

それぐらいのことは、今までしてきたと思う。

「どうしよう。アリスお姉ちゃんが、なんか優しい」

「そうかしら」

「やっぱり、ノアさんの影響………？」

「そうね。そうかもしれないわ」

リズの言葉を借りれば、ノアはあたしの嫁ぎ先とでも言えるだろうか。

その言葉を皮切りに、リズの興味はまた、整然と移り変わっていく。口調は策が張り巡らされたように緊張していて、自分で口にした『影響』という言葉の意味を、只管に追っているような必死さも

あつた。

「一緒に、住んでるんだよね」

「ええそうよ」

いかにも興味無さそうに装うのは、花の香漂わす円っこい髪か。

その毛先はと言えばとても綺麗で、そして尚、真っ直ぐで。

「アリスお姉ちゃんから言っただってことだよ」

「ええそうよ」

あたしがリズのことを避けていたから、『あたしは傍に置く人を選ぶのだ』と、そう思ったのだろう。

あたしがリズを嫌っているということはないにせよ、それは得てして間違いではない。

あたしはノアを選んだのだから。

「こんな感じでお風呂も一緒？」

「ええそうよ」

「それもアリスお姉ちゃんから？」

「ええ。最初は強引に入れたわ。あの子、満足にお風呂にも入れなかったから、それが変に習慣づいていてね。今はいくらか慣れたようだけれど」

「そうなんだ。寝る部屋も一緒？」

「ええそうよ。同じベッドでね」

「キスは？」

「したわ」

「それも？」

「ええそうね。初めはあたしからだっただわ」

ここであたしはようやく、試されていたのかと気付いた。

感情が一方向性のものであるかどうかということ。試すのは得意だと自負するが、どうやらあたしは試されるのは不得手らしい。

でも実際のところ、あたし自身がこの感情の正体を掴めていないから、結局リズの問いかけは意味をなしていないことになるのだけだ。

そう思えば、リズの問いは甚だ興味に染まって見える。

「そっかー。他も色々やつちやったの？」

「色々つて……。別に、キスだけよ。まあ、手を繋いだりはするけどね」

「アリスお姉ちゃん。全然わかってない」

少し呆れを含んだ物言いだと思った。

あたしは、鋭く「何がよ」と切り返す。

「手を繋ぐのつて、キスなんかよりぜんっぜん愛が深いんだからねっ？」

「そう、かしら？」

今あたしがリズとそうしているから、見栄でそんなことを号しているのかも思ったが、どうも違うようで。

「そうだよ。考えてもみて？ もちろんキスはね、見るからにラブ度高いよ。だけど、キスつて、拘束時間に限界があるの。一瞬の愛なの。でも、手繋ぎは違うでしょ？ 恋愛における肉体的な拘束は、最終的には精神的拘束とイコールなの。だから、半永久的に拘束できる手繋ぎはキスより強いんだよ」

「そんなことを惜しげもなくよく言えたものね。息継ぎもしないでペンは剣よりも強しと言わんばかりの長広舌だったけれども、論拠の希薄な持論を挟んでいるせいか、説得力はイマイチだ。いつも通り、何となく伝わってはきたが。」

聞いていて苦しかったので一呼吸おくと、リズがまた口を開いた。どうやら、まだ続くらしい。

「だつてさ。キスなんて結構、勢いでできるじゃん」

「ルートが泣くわよ」

「あっ、あれはいいのっ！ 今はアリスお姉ちゃんの話だもんっ！」
「はいはい」

膨れてパシャパシャと水で遊ぶので、あたしはまた横腹を撮む。そうすると大人しくなるとわかった。

一旦落ち着くと、また思い出したように話をしだした。

「そうそうそれで、手繋ぎね。手繋ぎはさ。キスと違って、こう、引っ張ったりできるじゃん。だから、やっぱり、次のステップに行くなら手繋ぎなんだよねっ。……ほらさあ、あれだしさあ。応用力ってやつ？ だから、手繋ぎは……」

「どうかした？」

「いや。なんか、私がアリスお姉ちゃんに力説するのって、ものすごく悲しいなって思っちゃって……」

急に勢力が弱まったと思えば、割と本気で凹んでいるようで、その後が続く言葉は待っても出てこなかった。

せっかく一緒にお風呂に入っているのだから、また湿っぽくさせてしまうのは気が引ける。

とりあえず「そんなことないわ」から会話を初めて、申し訳程度には報いてみる。

「話してくれて、嬉しいわ。プライベートな事だし、あまり誰かと話せるって機会もないから。あたしだって、そういうの、全く興味無いわけじゃないもの。どこでそんな知識を会得してくるのかは知らないけど、あたしはいつもリズを信じて聞いているのよ」

一拍おいたタイミングで、リズのわざとらしい溜息が聞こえて、安心する。

本当に手間のかかる妹だと思わざるを得ない。

「アリスお姉ちゃん、優しー。襲いたい」

「巴投げするわよ」

「なっ、なんで私が攻めだ^{ウエ}とわかったのかな……っ!？」

「ややこしいからやめなさい」

こういう時は、横腹を撮むに尽きる。

くすぐったいのか気持ちいいのか、リズはそうして平静を取り戻す。

「ま、いいや。でもさ、結局、アリスお姉ちゃんはどこまでわかるの?」

「ほとんど何もわからないわ。だから、何もしないのかもしれない

し。何もしないから、何もわからないのかもしれないし」
「わかったら、するの？」

そこは不思議なくらい未知数だった。

ノアの感情、感覚、意志、すべてを共有することができるあたしにとってみれば、それ以上のことというのがわからないのだ。

年を経て、あたしの体も成長してきたと思うし、その中で心変わりというものも、確かにあったように感じる。女性という一つのカテゴリに当てはめられていくような、そんな自然的かつ必然的な圧力めいたものも、感じた。

だから、そのカテゴリの意味は自然とわかった。あたしの体が、そういう風に適合していったから、それらの機能なんかも何となくそれはきつと、種の存続本能と呼ばれる何かなのだと思う。

しかし、ノアとあたしとは種を存続できない。逆に、存続したいと思えるものはすべて揃ってしまっている、今の状況。

問われるのは、ノアに求められているものと同じ、“単なる感情論”だとも解釈できる。

ただし、そこに自然主義的な意味や価値は、絶対に発生しない。

“愉悦”や“幸福”と言った、個人的主張が募るばかりなのである。ただ、主張も募れば意見だと思ふのだ。

だから、「わかったらするのか」という問いに答えるためには、あたしは感情論にすら「まだ」と付け足す他ない。

「そうね。まだ、わからないわね」

「そっか」とは、何とも味気無い反応だが、致し方ない。

リズは少し優しい口調になって、平坦に言う。

「してみたい？」

あたしは用意していた言葉を読み上げるだけでいい。

「あの子が望むなら」

あたしは、湯船が風呂なぐのを自業自得だと心の中で力なく笑った。

リズはまた、あたしに優しく語りかける。

「多分ね？ 最初はすごく恥ずかしいし、怖いと思うんだ。それで

も？」

「嫌じゃないわ」

リズはどうしても、あたしの答えを　今の感情論を聞きたいらしかった。向き合っていないのに、瞳を捉えられているかのような圧を背中に感じる。優しい口調は、その目くらましだろうか。未練を感じたのは、あたしのエゴだということにしておく。

「教えても……いい？　私が、アリスお姉ちゃんに。何も、しないからっ」

リズの言うことは、もちろん信頼している。彼女があたしに嘘をついたことはないし、つまらない冗談も言わないからだ。

だけど、それに気付くのは、せめてノアの前でありたかった。

それが、あたしなりの恩返しになると思うから。

だから今は、無理やりにもお茶を濁すしかないのだ。あたしたちの体も心も隠す、このお湯で。

「あたし、そろそろ上がるわね。逆上せそうだわ」

「あ。うん……。ごめんなさい……」

「謝らないで。ありがと、リズ。また、お話ししましょ」

慕ってくれる後輩から逃げたりして、謝るのはあたしの方なのに。あたしはポンポンとリズの髪に触れてから、後ろ髪を引かれながらもゆっくりと浴槽から上がった。

今宵、湯に浸かることで何かを洗い流せていたのだとすれば、それはきつと、劇毒であったに違いない。

【dumping】Runs upon Awakening
後書き)

【あとがき】

アリスは貧困と裕福のどちらも体験している上、身上、恋沙汰も多いです。プラスアルファ、ルートとノアの知識や経験も持っているので、経験値という意味では幼馴染組中トップに思います。

だからこそ頼られるし、頼る大切さも知っている。

自分から助けを求めるノアだったり、助けなければと思わせるルートと違って、リズは大事なことに關してすっかり不干渉を決め込むタイプ。

無視するかと思いきや構ってしまいたくなるアリスは意外と、お節介なのかもです。

みんなから怖い怖い言われていますが、根は優しい子なんです。アリスを攻略するなら、素っ気なくしていたらいつかデレるかもですね。

次回は本編に戻ると思います。

高揚効用、友情を添えて。(前書き)

【まえがき】

甘酸っぱい演出できていれば幸いです。

ちょっと長めなので、眠い人は明日にでも。

エンゼル。

高揚効用、友情を添えて。

三日目。

「国語つて、漢字以外にやることあるの？」

「誰しもが思ったであろう重要項を、公言したのはリスだった。」

「各々が黙々と漢字の書き取りをするという合宿個人学習に打ち興じていた僕たちにとって、その一声こそ勉強になる。」

「みんなもなにか吹っ切れたのか、そこから次々と意見が飛び交い始める。」

「暗記教科ではないからのう」

「そうだねー。文章題は毎回違うからねー。だからつつつて、行間を読む力はテスト期間ごときの短期間でなんかそうそう身に付かないしね。そうになると、勉強は暗記できる漢字とか古語に限られちゃうよね」

「でも、国語、配点高い……」

「そうね。数学は理論と統計、理科は生物と科学、社会は地理と歴史、みたいに二分されているから。国語は配点を倍にしてウエイトをとっているということよ」

「あ。アカデミーはそうなんですよね。聞きました」

「そうそう。二百点満点だよー。一個一個の配点低いと問題多くて辛いし、逆に高いとミスできないから答えを完璧にしないとイケない。これがまた、結構きついんだー」

「国語は二百点満点じゃったのか。初耳じゃ」

「サクラさんは知らないダメなのでは……?」

確かに、ミドル時代は平等な扱いをしていたはずだ。それがアカデミーにきたら、この通りである。

中身に関してはもちろん、難解な小説や論述書など、相応に深くなったと思う。けれど、国語でやる内容はエレメンタリーから変わらないので、特に難しいということはないのも事実。

「だけど、文章をよく読めば、大丈夫だよ」

文才の血が流れているというオカルト染みた評判もいただいているように、僕は少しばかり国語ができた。リズの言う通り、漢字こそ暗記だから間違えることは多々あるけれど、文章問題などの記述で間違えることはそうそうなかった。

得点に換算すれば、文章題は漢字の数倍も重みがある。なので、国語は文章題ができれば追試になることはない。一見、簡単そうではあるがこれがまた難しい所でもある。

理解している側からすれば何のことはない記述問題も、理解していない側からすれば数学の難解な公式よりも遥かに難しいものなのだ。

なぜならば、それは解答を導く方法を教えられないからだ。不可能ではないけれど、それこそコメントーターのような自己表現力なんかがなければ、到底は無理だ。

僕にそれが備わっているという確証はないけれど、少なくとも、文学者である父の血を引いているということくらいは、僕の説得力を助けてくれるだろう。

そういうわけで、コッではないけど、何とかいうか、言うところの心得のようなものは、何とか教えられる気がしたのだ。

「ゆっくり文章を読んでね、まずは情景をイメージしてみるんだ」
それは、僕がいつもテストの時にやっている方法だった。

ノアとアレンはおもむろに目を閉じて、さっそく実践しているらしい。ルリ会長もうんうん頷いて、僕の話に興味を持ってくれているようだった。アリスはお節介を流すように無表情で僕を見つめ、リズとサクラはペンを回していた。リズには何度か話していたから

いいとして、相も変わらないサクラの余裕は、もはや尊敬に値する。とりあえず、ノアとアレンのために話は続ける。

「情景の次は、登場人物たちの容姿かな。文に書いてある通りに、想像……創造してみるんだ。絵なんかを描いてみてもいいかもね」
教科書にはよく挿絵が挟まれているが、それも文章を読み解くのはとても有効だ。

しかし、テストにはそれが無い。無いのなら、自分で創ってしまえばいい、ということだ。

赤という色一つとってみても、解釈は読み手の数だけあるから、間違いも正解もない。だからこそ、創つくるというわけなのだ。

絵が上手なノアやサクラであれば、描写を完璧に表現できそうだが、そうすると、どこで誰が、なにをしているか……そこまでの整理ができたことになる。次に何が必要か、それを踏まえて文章を見返すと……」

とりあえず開いた教科書の一文に視線を落として、僕も想像しようとするれば、アレンの情報整理は思ったよりも早く終わったようである。「動き、ですか？」

「そう！ アレン君、正解」
ノアも続いて閃いて。

「会話も……？」

「うん！ 当たり前当たり。そんな感じでね、シーンに動きを足して実際に登場人物を動かしてみるんだ。頭の中で演じてみてもいいかも」

そうすることで、完全とは言えなくても感情移入をすることができる。そのシーンの情景を思い浮かべれば、次に何が起こるかはある程度予測ができるのだ。いきなり、登場人物の気持ちを答えると言われてもピンとこないけれど、その予測ができれば気持ちの逆算ができる。

この手法で急に得点が伸びるかと言われたら、それは保証できないけれど。

僕がいつもそう言い添えるのを覚えていたのか、今度はリズが言い放つ。

「で、でもさ。それだと確かに登場人物の気持ちはわかるよ。でもたまにさ。作者の気持ちを答えるって問題が出るじゃん。そんなのわかるわけくない？ もしかしたら、パスタ食べたいとか思ってるかもだし。登場人物も同じでさあ」

リズはそう言うだろうなというも考えていたから、僕の言葉は淀みなく流暢に。それでも視線は散るけれど。

「そういう時は、誰に伝えたいかっていうのを見るんだ。登場人物なら、会話の相手がいるでしょ？ 作者なら、相手は読者になるよね」

同意を求めれば、「そしたら？」とリズが急かす。その時、一瞬目が合って、つい逸らしてしまった。

ノアとアレンも、同じように目が物欲しそうだったので、ためを惜しんで続ける。

「何か思ったり話したりするときは、みんな、誰かに伝えようって思っただけだと思うんだ。だから、その次の相手のセリフには届いたっていう証拠があると思うんだよね。地の文なら、次の文章かな。そこに、何を伝えたいのかが描いてあるはずだよ」

サクラのように“魔法”が使えない限り、本は作者の気持ちを代弁してくれたりはしない。登場人物になら言葉を与えてあげられるけど、作者はそうもいかない。そうなってくると、作者の気持ちというものは、文にして表されるようになる。

勿論、登場人物と同じで性格とか思考もある。だから、ストーリーに表現することもあれば、暗に諭すこともある。

僕たちに求められるのは、それを見つけて精一杯の感想を述べること。作者の気持ちを受けて、今自分は何を思っているかを話すこと。そこに尽きる。

それはつまり、自分も作者も登場人物の一人　読み手として話に交ざると言うことだ。

実はそれは難しそうに見えて簡単で、物語のタイトルを読み上げた時から、すでにできていることだったりする。

そこになにか合点がいったのか、リスも「ふーん」と徐々に息を抜いて静かになった。ノアとアレンも、感心した様子で頷いている。とうの僕も、教え切った気持ちで一言だけ添える。

「あとはそうだな。慣れかな」

ふうと一息つく頃に、ノアが言葉をくれた。

「ルート、すごい……。すぐわかりやすかった、かも。ノア、国語はあんまりだから、今の聞いてて、少し、できそうって思えたよ」「そっか。それはよかったよ」

アレンは言葉を選んでいようだったけれど、成績が良いのだから当然か。

でも、アレンには別の興味があったらしい。

「俺もすごく勉強になりました！ それに、ルートさんの考えてることが少しわかった気がするので、ラッキーです」

「そ、そうかな。それはよかった、ははは」

いびられ慣れているアリスならまだしも、ルリ会長やサクラがいるところで、それも無垢に微笑まれると背中に変な汗をかいてしまっている。いそうだ。

アレンの笑顔が居間を漂おうという時、リスの「キモい」というぼやきがそれを断った。

その瞬間、居間という空間は停止した。

誰もが沈黙を転嫁して、会話という空気を繋ごうとしなかったからだ。真空の圧力を最も感じるリスが何かを発言できるはずもなく、僕もそれについて口を出すことができなかった。

その停止はほとんど一瞬だったのだろうけれど、僕には途轍もなく長く感じられた。

だから、余計にアレンの言葉が明瞭に聞こえたのかもしれない。

「ひ、ひどいよりズー！」

アレンはまた爽やかな笑顔になって、そう言うのだった。

僕はアレンの、リズへの優しさに気付いてしまった。

三日目。

夜。

午前午後夕方と、かなり学習に集中できた一日だったと、浴室の鏡を見ながら振り返る。気分は疲れていないように感じるけれど、どこか体は重くて、何か背負っているような気もしないでもない。

自分の肩に手を当てて、ぐるりぐるりと二周半。

脇の間に小さく映ったのは、湯船に浸かるアリスの姿だった。

いつの間にか風呂は順番で誰かと入るシステムになったようで、今日は僕はアリスとだったのだ。後のメンバーはみんな一緒に入るらしい。

腕がもう二周したあたりで、鏡越しにアリスの圧を感じた。

「腕なんか回して、なにをしているのかしら」

アリスは木製の縁に凭れかかるようにしながら、僕に問うてくる。苦言ではないけど、ガードの硬い親友が衣服を着ていないと、なかなかやり辛くはあった。

僕はとりあえず、シャンプーを泡立てながら肩の調子を見る。

「ちょっと肩が凝ってて。勉強疲れかも」

アリスは、「そう」とだけ反応して、その後は僕が体を洗い終わるまで何も言わなかった。

静かな浴場は、水の流れる音や揺れる音が良く聞こえた。

沈黙も、それなりに痛かった。

僕はひたひたと水面に近づいて、アリスから遠くも近くもない中

間くらい的位置から、足を浸けた。僕の嵩かさの分だけ、お湯が浴槽を出て行く。わざとらしく音を立てる様子は、どこか不満そうに感じる。

その不満を肌に擦りこめば、見事に復讐が浸透した。

「うっ。今日、透明なのか……」

リズがうちから持って来たらしい入浴剤は、どうやらまだ入っていないらしく、お湯はガラスの如く澄んで透明だった。裸であるということが、水上からでも容易にわかるほどに。

少し距離をとっておいてよかつたなど、一人で安心していると、早速アリスに嗅ぎつけられる。

「どうしてそんなに離れるのかしら。あたしのことは嫌い？」

独特の苦みというか渋みのある言い回しは、好き嫌いの問題ではないとすぐにわかる。

しかし、本心など隠したところで直ぐに見透かされてしまうから、素直に申告することにした。そっちの方が、痛くないことは、長年の付き合いでわかってきたことだ。

「ちょっと緊張してるんだ。裸だから。僕も、アリスも」

「女同士なのにな？」

それでも、アリスの言葉は痛い。

距離を詰められないだけ、まだマシかもしれないけれど。

「そ、そうだけど……うん。やっぱり、ちょっと恥ずかしいよ。見られるのも、見るのも」

「おかしいわね。普通じゃない」

さすがの僕も、今夜はそう言う話をするのだと悟る。

アリスと話をすること　それはつまり、逃げられないのだと言う事。今のこの距離が、僕を縛り付けると言う事。

僕は、屈折した自分の体を見るしかない。

「そう、だよな……。変なんだ、僕」

何がと言わなくとも、アリスには伝わる。伝わるというか、バシる。

「そうよね。あんな公の場で、妹とキス、したりするしね」

「あ、あれは演技だから……」

「そうね。昨日、リズもそんなことを言っていたわ」

「そ、そうなんだ」

何だろう。少し残念に感じる。

「そうよね。残念よね」

「ち、違っ」

「くないわよね？ キスなんて、台本に無かったもの」

「そ、それはっ……し、してないからっ」

アリス相手に言い訳などできるはずもなかった。

確かにあれは劇であり、二人の関係は演技で作り上げられたものだ。だからこそ台本通りの感動があるわけだし、だからこそ台本外の衝撃もあるわけだ。

あのキスは、紛れもなく台本外の衝撃。フリという演技ではなく、事実という衝撃だ。

一応、あれはフリだと言うことで鎮静化したけれど、台本を所有している一年生の間では、未だに話題になることもあるらしい。

傍^{はた}から見ていたということと終わればいいが、舞台袖で僕たちを見ていた者もいるのだ。

そう。アリスやノア、サクラからすれば、事実は事実のままということ。つまり、同意は得られないと言う事。

「してない……？ そうだったのね。あたしはてっきり、本当にしたのかと思ったわ」

「ははは……」

「でも、疑問ね。顔を上げた後のあの晴れやかな笑顔とか、ちょっと荒い息遣いとか、劇が終わった後の上の空感とか、家までずっと手を繋いで帰るとか……。あれは一体何だったのかしら」

「……………」

ちりちりと、アリス側の半身が熱くなっていく感じがした。

「そう言えば、劇が始まると思ったたらずぐにいなくなったわね。同

じくらしいにリズもどこかへ消えたし。と、思えば今度は二人一緒に戻って来て。その時も確か、手を繋いでいたわね。顔もなんかすこいスッキリで」

「ごめんなさいしました……っ！ も、もう勘弁してくださいっ」
そこで初めて、僕はアリスの方を向く。顔は下を向いていたけれど。

このまま頭を水の中に押し込められてしまいかもしれないと心配ではあったけれど、顔は上げられない。

暫くそのまましていると、アリスのため息が聞こえた。

「はあ。手間のかかる……」

「ごめんなさい……」

「まあ、よく謝るものね。あんたらも」

「えっ？」

僕の狐疑はちょうど水面に反射して、そのまま浴場に木霊した。

何度目かの残響の後、満を持ってアリスが嗤う。

「ふふつ。なんでもないわよ。そんなことより、もっとこっち来なさいよ。声が響いて聞き取りづらいでしょう？」

「ぼ、僕は大丈夫かな」

「え？ なんて言ったのかしら。よく聞こえないわ」

反射して聞き取りづらいのは間違いではないけれど、聞こえないということはないだろう。

それなのに、アリスはその残響のどれにも耳を貸してくれない。

「もう、アリスっ。……わかったよ」

僕は堪忍して、距離を詰めることにする。

ゆっくりゆっくりと、水上を漂うようにしてアリスの方へと近づいていく。近づくのに比例して、ちりちり感じる熱さも増してきているように思える。視線を逸らしながらの移動だから、どのタイミングで止まればいいかは、勘に頼る以外なかった。

僕の勘は、思ったよりも鈍かった。

気付けば、勘よりも先に感覚が、僕の脳をいっぱいいっぱいにし

ていた。

「あつ。ごめつ……」

「何よ。手が触れただけじゃない。そんなことで謝られてもね」
アリスの声が、耳のすぐ近くで聞こえる。

そしてまた、ちりちりと体が熱くなりだす。今度は、心臓が脈打つと同じリズムになっていて、それは自分の耳でも聞き取れそうなほどだった。

「それだけ緊張するって、どうなのかしら？ あたしは喜んでいいのかわいのか。反応に困るんだけど」

「そ、それは僕悪くないよ？」

「まあ、いいわ。昔はよく一緒に入っていたのに、あなたも変わったわね」

「い、いや、それはっ……そうかも、だけど……」

「ええ、本当に。まさかあなたが、あたしのことをそういう目で見ているなんてね。ちよつと引くわ」

「ち、違っつて！ そんな邪な目でなんか見てないよっ！」

思わずアリスの方を向きそうになったけれど、どうにか抑え込んだ。

それが邪なのだ気付いた時には、すでに遅く、仰々しいアリスの言葉が僕の心に刺さった。

「あら？ 邪なんて言っていないのだけど。ルートさんだったら、やっぱり邪な目で見ていたのね。いやだわ」

「うくっ……。もう、それでいいよ……」

口ごたえは無意味に感じたので、大人しく引き下がることにする。目も合わせられない現状、余計な事は控えるべきだと思ったままで。すると、どうだろう。

いつもなら追撃をしてくるところなのに、今日、アリスはそうしなかった。

「冗談よ。真に受けしないで。それに……」

「それに……？」

何だろう。逆上せているのだろうか。

アリスが、いつになく丸い。

「あたしも、あなたのことあまり直視できないから」

「えっ？」

その言葉を受けた衝撃で、ぴしゃりと波が立つ。

僕はそれを隠そうと、少しアリス側に揺れる。

「じゃ、じゃあ、もしかしてさっきの、『あなたも変わった』って言うのは、アリスのこと？」

「そうね。昨日、リズに言われたのよ。変わった、って。自覚はないのだけどね」

アリスの言葉の切れ味が鈍ったのは、研ぎ澄ます余裕が無かったからだったようだ。

「へえ。リズがそんなことを……」

「ふふっ」とアリスは不敵に笑う。

続く言葉は、どこか、子供の成長を喜ぶ親の声色に重なる。リズの言う通り、アリスはやはり変わったのだと思った。

「そうなのよ。他人に変わったって言われるのって、複雑ね。一体、いつから変わったのかしら、あたしは」

しみじみと語る口調こそ印象的で、いつのまにか僕も、アリスにつられて記憶を探ってしまった。

深みのある言葉とともに、僕の視線は水面に沈んでゆく。脚、それから浴槽の底、その手前に像を結ぶ自分の顔は、記憶の中のそれとは確かに変わっていて、たった今も留まることなく揺れ、そして歪曲を繰り返していた。

その、いつ、を見つげる前にアリスが言う。

「あなたを知りたいと思った時かしら」

「えっ？」

「冗談よ」

「そう、だよな。びっくりした」

アリスはいつも先手を仕掛けるから、ズルい。

「でも、昔はそうだったわ」

「んっ？」

毒味の無さすぎるセリフに、肩透かしを食らう。

事実確認の術がないのだと心中右往左往していると、アリスが言葉が続けた。

「エレメンタリーくらいの頃かしら。あたしは、あなたのことを半分男だと思っていたわ」

「ま、まあ、今より髪短かったし……」

「そして、ある事件があつて、それ以来は好きだったわ」

「すっ……！？」

腰のあたりが、一気に熱くなってくる。でも、湯温のせいにしては、一過性が過ぎる気がした。

熱を帯びたところを冷ますかのように、アリスの口ぶりは淡泊に、且つ、冷たく尖る。

「小さい頃、あたしは自分のことをお姫様だと思っていたから。突然現れたあなたは王子様に見えたのね。観察してみれば、頭が良く、サッカーが上手くて、顔も女の子みたいで、馬鹿みたいに優しく」

「あ、あははは」と頭をかいて照れを表現してみれば、「そして、妹が好きで」と刺すような一言を浴びせられる。思わず、「うっ」と腹から声が出た。

気にも留めずに口調を戻して、アリスは続けるのだった。

「そんな王子様の正体が女だって知ってからも、あたしはしばらくの間好きだったわ」

「そう、なんだ……」

アリスに似合わず、接する温度は僕に適している気がした。これが、裸の付き合いの力というものなのだろうか。

僕はアリスの言葉と、水音に、耳を貸すだけでいい。でも、あなたは変わった。あたしと同じようにね。瞳は円くなって、肩はなだらかになって、腕は細長くなって、当たり前前に胸が出

てきて、声は涼風みたいに綺麗になって。あなたは、あたしの想い描く王子様から、どんどんかけ離れていった。そして、漸く気付いた。あたしはあなたのお姫様じゃないってね」

アリスが身体を言及する度、その箇所がじんと痛むように返事をした。きつとこれは、アリスが変わった時に感じた痛みの追憶だろう。

その痛みを今も感じているかどうかは、僕にはわかる由もない。けれど、その痛みを拭うことができるのであれば、それは僕だ。

「アリスは、ノアさんのこと」
その矢先だった。

「ねえ。ルート」

アリスは僕の言葉を妨げるように言う。

そのリズムはどこか、事を急くように感じた。結果として僕の言葉は、すべてが出切る前に浴場を乱反射することになる。

「えっと……なに？」

「あたしを見てドキドキする？」

「う、うん……。する、よ……」

僕の口舌は、すぐに跳ね返っては来ない。

アリスの問いかけの方が、遥かに夙はやく。

「それはどうして？ あたしは女よ？」

「そうだけど……。アリスは、僕から見てもすごくかわつ、可愛いから……。アリスも、ノアさんとお風呂入る時、ドキドキしたりしないの？」

「そうね。わからないわ。どうして可愛いとドキドキするのよ」

「どうしてって……。ええと……。す、好きになっちゃいそう、だから……？」

「好きになったら、どうなのよ」

「どつって……それは……」

「言つて。あなたなら、別に嫌じゃないから」

連なる問答に口ごもる僕を、アリスは鋭く、尚も円く睨む。
毒気など無いはずなのに、それがどうにも心に染みだ。

意志がふやけてしまう前に、僕は感じたことをそのまま吐き出す。
決して、アリスには手向けずに。

「えと……。触れてみたいとか、キスを試してみたいとか、手を繋ぎたいとか……。もっと知りたいって、そう思っちゃう……。と、思う……。のでは、ないかな……。って……」

「そう。じゃあ、はい。手」

そうして僕の視界の右端に、肌色の指が飛び込んでくる。

「えっと……？」

「繋いでいいわよ」

アリスはそう言うけれど、いまいち飲み込めない。

「あの、えっと、待って。どういうこと？」

「空気読みなさいよ。さっさとしなさい」

「ななな、なにっ？ どういうこと？ って、……あわっ」

はあ、とアリスがため息をついたと思えば、次の瞬間には僕の右手はすっかり固められてしまっていた。

でも、思いの外それは優しくて柔らかくて、僕の勘違いかもしれないけれど温かかった。

アリスと手を繋ぐのは、きつとこれが初めてで、そして最後になる。

そんなことを、アリスの言霊に感じた。

「あたしはノアが好きで、あなたはリズが好き。そういうことになっているの。確かに、あたしは昔、あなたのことが好きだった。リズは、あたしのことを好きだった。でも、今は違うでしょう？ あたしとあなたの関係は、そういうものじゃないでしょう？」

そう。これは、僕がアリスをフるといふ行為に値する儀式なのだ。でもそれがただの関係性の破綻ではないのも確かだ、友人という関

係の始まりも意味するはず。

それはつまり、繋いだ手の意味が変わると言う事。
僕にとって。

「うん。アリスは僕の、一番の親友だよ」

それから、アリスにとって。

「そう。よかったわ。なら、あたしはあなたを見るわ。だから、あなたもあたしを見なさい。得られるものなんて無いだろうけど」
得ることだけが大切なわけではないのだから。

「僕も自慢できるほど無いから、それはお互いさまかもね」

「も、だなんて、言うわね」

そして、失うことでも、人は成長できるものだ。

「アリスにそう言われるなんて、僕も成長したんだなあ」

「黙ってなさい。ああ、そうよ。先に手を離したら罰ゲームだから」

「わかった。いいよ。僕も考えとくから。罰ゲーム」

「あっそう」

それから、自然な流れでもって対面することに合意した僕たちは、ひと時の間に肖って、わざとらしくも不可抗力を装って向かい合う。覚悟があつたおかげで制御されてはいるものの、心拍が加速しなかつたと言つたらそれは嘘になる。それは勿論、他でもないアリスだからだろうとも思う。

制服の上からでも際立つ体の横のラインは、そのままの対比を保ちながらも、さらに細く縁取られ美しい。部活動で鍛えられているからか、二の腕周りや腰回りは、すっかり理想の範疇に収められている。そうして、出る必要のないポイントがおさえられているおかげで、結果として出るところは出るという、なんとも均衡のとれた体躯に仕上がっている。

ただ、スレンダーで引き締まっているゆえ、僕よりほんの少し陰影が薄く見えはした。

「悪かったわね。あなたより小さくて」

「いや、別にそんなつもりは……っ。僕も小さいし。鍛えてるから、

アリスは。すごく綺麗だと思う！」

少なくとも、昨日の三人よりは。

「ええ、ええ。わかったわ。もう止めましょ。こんな空しい争い」

「あはは、そうだね……」

少し間があつて。

僕が、アリスと手を繋いでいるということ思い出して、勝手に熱くなる頃。

「ふふっ。できてよかったわ。普通の会話」

「うん。そうだね」

「……………」

「……………」

「いつまで、こうしているつもりかしら」

「アリスが離すまで、かな？」

「そう。それは普通じゃない、わね」

「そう、かも」

何がそうさせたのか、今日に限っては僕も強情で、その後も着替えをすることで済ませずと手は繋いだままだった。蒸し蒸しと熱かったけれど、最後と思うと恋しくて、正直、少し勿体なくも感じたのだ。それに、離してと言われなかったというのも、密かに嬉しかった。

結局、Tシャツに袖を通すところで離れてしまつて勝敗を決めることはかなわなかったけれど。

そうになると、僕は 僕たちは罰ゲームを受けなければいけないことになる。

でも、それももう、決めていた。

「僕はルート。よろしくね」

「あたしはアリス。ノアの恋人よ。アリスでいいわ」
そう。

少し汗臭くなった手を、僕は今夜、洗えないのだ。

高揚効用、友情を添えて。（後書き）

【あとがき】

姉妹ってやっぱり似ますね。

でも、リズの時よりも、ちょっと大人な会話が目立ちます。

アリスも露出が増えて大変です。乗じて、身体の特徴の表現が増えましたが、大事な部分です。

整理しつつ、見逃さず。

大人に近づくってそういうことかも。

次回に続く。

【flattened】ノアサクと。(前書き)

【まえがき】

フラれたことで早速カップリング判定発動しています。
リス編です。

エンゾ。

【flattened】ノアサクと。

三日目。
夜。

昨夜、アリスお姉ちゃんにフラれたから、気分転換にみんなとお風呂に入ることにした。

今日こそ、寛ぎの檜温泉の素もとを入れたいところだったけど、生憎、在庫が無い。

でも、少し気になってたノアさんのボディを拝見できて、いろんな意味で元気が出た。

天は二物を与えないんだったら、私にはそろそろラッキーな出来事が起きてもいいはずなんだ。

そうだなあ。髪が超さらさらになるとか。手櫛で揃うとか。現実的か、私は。

「ノアちゃん。髪、洗ってあげようか」

「ん。大丈夫」

「じゃ、背中。背中流す？ 流していい？」

「ん。大丈夫」

何やら隣が賑やかだ。

頭を洗っていて目を開けられないけど、ルリ姉さんの欲というところはしっかり感じる。

ノアさんもノアさんで、ああ見えて意外と意志が固いところあるよね。

アリスお姉ちゃん一筋ってというのは、今の私からしたらちょっと

複雑なところだけど、そのうち安心に変わると思う。それくらいアリスお姉ちゃんを想ってくれているなら……って、そんな気にもなるだろうからね。

いや、でも、そっか。

アリスお姉ちゃん、小さいのが好きだったのか。なんつって。

いけないいけない。邪心丸出しにもほどがある。これは恥ずかしいぞ。

さつさと水でも被って、頭を冷やさなければだな。まあ、お湯だけ。

「ん？ あれ？ ねえ、ちょっと誰かー！ シャンプースパイラルしてるでしょ！ もー、やめてよー」

こんなことをする人なんて、この合宿に二人といないから、犯人が誰かなんてバレバレだけど。さつきから妙に静かだったし。

でも、珍しいかも。桜さんが、私にちよっかい出してくるのって。もしかして、私が傷心なの知ってたりして……なワケないか。

「どーせ桜さんでしょ？ 髪傷む気がするからやめてよー」

見切つて言えば、しばらくシンとなつて、もしかしたら誰もやってないんじゃないかって、なんかちよつと恥ずかしくなる。

けど、笑いを堪える声が聞こえてきたので、私は間違つてなかったようだ。

「んくくつ。今、ちよつと恥ずかしかつたじゃろ。耳が赤くなつておつたぞ」

「う、うるさいつ。桜さんが面倒くさいことするからじゃん！ とにかく、やめてよつ」

キューティクルのダメージはおいとくとしても、この謎のお転婆を相手に、盲目はかなり厳しい。元々、何をするかわからない人なのに、そこへさらに目隠しをするだなんて。

一体、何プレイだよ。

性格はともかく顔は可愛いしスタイルもいい。それに、色々タイ

「コトを知ってそうだからリードされるのは……って違う違う。」

「もうっ！ いい加減にしないと……揉むよ！」

「出た！ リズちゃん揉み攻撃ッ！」

何故か、桜さんよりも先にルリ姉さんが反応した。

それほど鮮烈に記憶に残っているということなら、正直なところ、誇れる。

そのよくわかんないプライドを踏んづけるように、桜さんが誘う。「揉めるもんなら揉むがよい。じゃが、子供のお主には、刺激が強すぎるかもしれんのだ」

そここなくちゃと、売られたものを買うことにする。

「何さ。ちっさいくせに」

着替えの時にチラ見したモノは、確か、私とそんな変わらないあれだった。

モノの大小という観点に関しては、的は射てると思うけど、形とか感度とか、言い訳するのは目に見える。

前方はシャンプーで塞がれてて見えないけど。

「大きさを気にするとは、子供じゃのう。大事なのは手触りじゃろうて」

おちゃらけた人相に見合って、詰めが甘いね桜さん。

ちよっと可愛く見えてきた。

いや、前は見えないけどね。

「触る時しか意味をなさないじゃん。手触りなんてさ。見る機会は多いけど、触る機会、そんなないし」

「そうかそうか。なるほどのう。経験が足りんのじゃな」

反論したかったけど、桜さんに“経験”って言葉を出されると、何故か「うっ……」ってなって口が重い。そんなに歳変わらないはずなんだけどな。

「やっぱあれか。これが俗に言う、ばばくさいってやつか。」

「何……。経験って」

渋い顔で言う私は、すでに知っていた。

おばあさんたちが拳つて話す、どうでもいい武勇伝の、圧倒的に無駄な長さを。

そしてどうせ、聞かずとも言うし、聞きたくないと言っても言うというのを。

対抗策は、先に結論を引き出してしまふことだつてことも。

「経験は経験じゃよ。言葉にはできんのじゃ」

「それじゃ、桜さんが言ってる事はデタラメかもしれないってことだよ」

ちよつと撒き餌を試してみれば、食いつく食いつく。

これなら、目を瞑っていても釣れるんじゃないか。

「すつとれーとじゃのう。るーとの妹なのに。……まあ、よいわ。そこまで言うのなら、試してみればよいじゃろう」

「触つていいの？」

私も私で、その興味はかなりあつた。

撒き餌したところに自ら飛び込んでいくスタイル。それが私だったりする。

「よいぞ。但し、目はそのままじゃ」

「いいよ。わかつた」

なるほど。負のシャンプースパイラルは、これの伏線だつたというのか。

抜けてるように見せかけて、実はなかなかのやり手だな、桜さん。

そうなつてくると、このブラックな視界も、俄然、演出チツクに思えてくる。目隠しをすると視覚以外の感覚が鋭敏になるという話は聞いたことがあるけれど、ホントにそんな感じがしてくる。

あんなお転婆のちっさいアレなのに、なんかよくわかんないけど緊張する。

すごい。すごいぞ、桜さん。

私も、その経験とやらを是非、してみたい。

「興奮しすぎじゃろ」

「は、はあっ？ しし、してないしー？」

「鼻息が荒いのじゃ。もしやお主、はじめてか？ 他人ひとの」

「ち、違うしっ？」

私は母乳育ちだからな。昔、お母さんのを、そう、やってるはずだ。

「ぬははっ。かわいくないのう」

「何がだしっ！」

「ぬふっ。まあよい。今、お主の前に行くから、そのまま待つとれ」
桜さんが背後でそう言うと、ペタペタという音が私の前側に移動するのがわかる。同時に、背後にあった人の気配も、何となく前側に来たような気がする。

私はもう、目を開けられない。

「どれ。座るのじゃ」

座るとは言っても、高さ的には中腰くらいになるだろうか。

そうなると、足腰が辛いだろうからなるべく早く触ってあげよう……とは思っけども、そんなすぐ手を出したら、はしたない女だと思われちゃうので、とりあえず我慢する。

この時点で、大分はしたない気がするけど。

「ほれ。目の前におるぞ。好きにせえ」

「そうなの。じゃ、じゃあ、さ、触るね」

心置きなく揉めるよう、手を伸ばす前に、一旦この状況を整理する。

かたや泡で目隠ししていて、かたやその前に全裸で胸を張っていて……。そこへ手を伸ばそうとしている輩は多分、わりと、そう、満更でもない。

そんなわけで、脳の司令塔からもゴーサインが出た。

私はゆっくりと、恐る恐る手を前に伸ばしてみる。

いつくるかな？ いつくるかな？ なんて感じに湧き上がる興味心なんかは、本当に目隠しの賜物だ。役に立つ役に立たないは棚に上げて、これを経験できたのはかなり大きいんじゃないかと思う。

それはさておき、そろそろ到着なのではないだろうかという頃。

なかなか着かない。

桜さんの大きさからすれば、そろそろ到着してもいい頃なんだけど。

桜さんには興味ないのに、何だか凄くそそられる。つまり、桜さんの言う大きいさ意外の魅力というのは、この時点ですでに始まっているというわけね。

腕を伸ばすにつれて高鳴る鼓動は、何とも形容しがたい感情を連れてくる。今、目を開けたら、きつと、とんでもなくいやらしい顔をした美少女が映ることだろう。

「んんっ」

「あつ……」

その特有の感触とそれとない罪悪感、予告なく私のもとへやって来た。感想を述べるのに堪えない、それだった。

けど、ある種の責任感から、私はその手を決して離そうとはしなかった。今離しちゃいけないと思った。そして、無理くりにもフオローをしないととも悟ってしまった。

桜さんは、実は小さかった。

「えつと……。ちよつとだけ、触るね？」

自分が今、どの辺にいるのかもわからないので、とりあえず探検はしなればならない。

ここまできて嫌なんて言うはずないだろうから、積極的にやった。目隠し探検だからこそなのかもしれないけど、大きな山も谷も無いことがこんなにも興味心をそそるなんて。全然、想像もしなかった。

「んんんっ」

「あ、ごめん」

あんまり平坦だから何か隠されているのではないか、と疑ってかかってしまつうちに、手が柔肌を貪ってしまった。肌トウー肌

でダイレクトに返ってくる反応が嬉しい。これは初めての心地かも。平坦平野とは言っても、ちゃんと少しある。

それが、こう、なんか、すごぶるイイカンジだった。

「桜さん、すごい柔らかかー。おっきい冷えピタいじってるみたいで、気持ちいいー」

「ん……」

おっきいという言葉に悦に入っていたのか、暫くは大人しくて私のなすがままだった。

私の指遣いも手練れてくる頃、再び罪悪感が頭角を現してきた。

いつまでもやってていいって言うならそうしてたいけど、そんなことはないと思うんだ。

それに、そろそろ遠慮しておくくらいの奥ゆかしさみたいなのがあれば、きつと、また今度触らしてくれるはず。

「まだいい？ もうやめたほうがいい？」

一旦、手練れは休業して、尋ねてみる。

けど、返答は脈絡が無い。

「んーっ！」

そうやって艶っぽく唸るばかりで、意味のある言葉が返ってこない。艶めかしいという意味はあるけども、今、そういうのは欲しくない。

……待てよ。

私は欲しくなくても、桜さんが欲しちゃうってことはあり得るんじゃないか？

つまり、艶っぽいと言うのは、無言の肯定。やめないで、という心の声。体は嘘をつかないとか言う、アレそか、そういうものなのではないか。

「んんっ……」

「え、えつと……。やめない方がいい……みたいなの？」

「んんんーっ……」

一際大きな反応、ということとは。

「し、仕方ないなあ。じゃあ、少しだけ付き合おうかな」

とりあえずの許しを得たということになるということで、やれやれ感を装ってみる。尚も、手は平野を鋭意探検中である。

「んー……っ！」

「ね、桜さん。声さ、ちょっと狙ってるでしょ？」

「んん……？」

「うん。かわいい。ちょっとドキドキするかも」

「んんーんっ!？」

いつもより、ツートーンほど高めで、でもそれでいてどこか夜っぼい暗さで、生々しくもダークな声色。声を我慢してお腹に力が入っているせいか、質はちよっともっている。

「ね。桜さん」

「……………」

「目、開けてもいい？」

「……………」

私の問いかけに対して、桜さんは無言の肯定をした。

「じゃ、開けるね……………」

目のあたりを一度擦って、泡をどかす。

そして、自分自身を焦らすように、わざとゆっくり瞼を開けてみる。

大きさよりも大切なことがあるのなら、これでわかるはずだ。

「え」

私の腕は卑しくもそこへと伸びていて、その先の五指の合間からは肌色の温かい冷えピタが、白々とこちらを見ていた。言うところの平坦で、よく言えば可愛い。それでもやっぱり丁度いい柔らかさで、私の物欲のほとんどが吸い尽くされるみたいではあった。

せめてその人が、半泣きじゃなければ。

「ええっ！？ ノアさんっ！？」

私が触っていたのは、桜さんではなくて、ノアさんだった。
当の桜さんは、ノアさんの口を塞いだまま羽交い絞めにして、年
寄り臭く笑っていた。私の手は、強制的にはだけさせられたそれを、
優しくも心許なく、隠していた。

「ぬっははは！ お主はヘンタイじゃのう！ はっはっはっは」

「ばっ
」

ノアさんには悪いけど、なるほど理解ってしまった。

私は、ぺたんこも好きなのだ。

【flattened】ノアサクと。(後書き)

【あとがき】

ハイテンションなメンバーが揃いも揃ってお風呂場に。

そんな中に一人、ノアが。

嫌な予感しかしませんね。

許諾したノアは成長していると言えるでしょうけど、他の人たちは全然な感じがすごいですね。完全にリゾートの空気感に飲まれます。

そう言えば、時間表現が曖昧になってきていることにお気づきでしょうか。

これがやり辛いつたらないのです。

感覚ってすごい。

次回は本編です。

試験前日、決意を添えて。(前書き)

【まえがき】

今回はさつぱりです。

前書きに味を書いていたのは、実は食欲の秋を意識したりしてな
かったり。

ちよつと短めです。

どうぞ。

試験前日、決意を添えて。

四日目。

「はあああ、明日テストかああ……。せつかくの休みなのに、テストなんて、なんか損した気分……」

「徹夜するよりいいでしょ。そもそも今日は雨よ。諦めなさい」
今朝方始まったブルーな気分を余計に冷ますリズの溜息を止めたのは、元々冷めているアリスだった。

昨日、リズがアリスにフラれたと言う話を聞いていたから、気まぐずい空気になるかもと危惧したけれど、それは杞憂だったようで。

「もー、雨きらい。せつかくのリゾートなのに」

「元々、勉強合宿じゃなかったのかしら？」

アリスもリズも互いにいつも通り接していて、何かに突っかかることは一切ない。

きつと昨日、二人の強い決心があったのだと思う。その時には、アリスが言ったような痛みというものも伴っただろう。

でも、そのおかげで、二人の間に未練のような粘り気が残らなかったということだとも思う。

そんなことを気にしている僕はまだ、わずかに右手に汗をかいてしまうのだった。

僕はそれすらも雨の理不尽性になすりつけて、ノートの罫線を埋める糧とした。

「理科、得意な人」

気遣いか飽きたのか、ルリ会長が唐突に挙手を要求する。アリスくらいの度胸がないと無視はできないので、正直に挙手することになる。

僕の十八番である天文分野も理科に分類されるし、その原理を使って研究される天体もあるから、理科が好きか嫌いかわわれれば好き。得意という表現をされると挙手するのは気が引けるが、無下に不得手を晒すのも恰好が悪いと思った。

周りの目を気にしながらゆっくりと左手を挙げれば、倣うようにアレンが続く。

へえ、とは思ったけれど。

「おっ？ ノアちゃん、理科得意なんだ」

そんなことよりも、僕やアレンの真面目さよりも、ノアの純情が―際目を引いた。勉強が苦手なのにといい理由ではなくて、単純にこういう場で挙手をしたことにかもしれない。

「うん。ノア、設計図とかは、少し、好きだから……」

「せ、設計図？ なになに？ ノアちゃん、なんか作ったりすんの？」

「そりゃのう。もう、どえらい器具を」

「ノアさんのことだから、きつとすごいものなんだろうー！」

「そりゃあそうじゃ。もう、どえらい器具を」

「あんたは黙ってなさい。諦め悪いわね」

「ふふふふっ」

ノアが笑顔になるまでの流れは、さながら、僕らのいつも通りのようだった。

そうか。

三日三晩という時間を共に過ごして、みんな適応して変わったのだ。

そう思えば僕も、ある意味では変わっているのだろう。いや、変わっていないければならない。

自分にそう迫られている感覚に僕の手は湿気るようで、事務的に動く右手が文字を並べていくことに、掌は蒸した。

状況は、テスト前の小休憩に少し似ている。それも自信がある教科ではなくて、全く自信の無い教科。

周りの人たちはしつかりとした復習をしているのに、その中で一人だけ、初めて教科書を開くような焦り。答えは埋めなければいけないからと思って、公式よりも、綺麗な文字の羅列を優先して記憶するのだ。そうして記す解答は中身が無く、それにつけられるバツ印の分だけ、後悔が生まれる。

前までは、確かにそう思っていた。

けれど今は、違った。

いや。変わった、と言うべきか。

テストは確かに大切で、ミドルの時よりも人生におけるウェイトは増した。赤点を取ってしまったえば追試の分時間を失うし、何度も落第すれば進級すら揺らぐ。

だから勉強をするわけだし、遊びの時間も削らなくてはならない。その中には、テストよりも大切なことだってきつとある。テストより大切な事のために、テストに受かろうとする構図には矛盾がある。でも、そのテストで正しい答えを知ることができれば、いいと思うのだ。

一度だって二度だって、間違えることにだって意味はあるはずだ。僕はすでに、それを知っているはずだ。

テストの対策テストの勉強合宿という位置付けが、僕にそんなことを思わせるのだった。

「……い。おーい、ルートくん」

「あ、はい！ どうしましたっ？」

会長の手がちらちらと、僕の目の前を忙しなく往復していた。

窓を流れる重い雨と、その奥の黒い海をばかりを見ていたから、

気が付かなかった。

「大丈夫？ 具合悪くない？」

「え？ いえ、全然そんなことないです。どうしてですか？」

「いや、ずっと放心状態だったから。ま、大丈夫ならいいんだ。そろそろ夕食にしようかと思って。みんな準備し始めてるから、ちょっと手伝ってくれないかな？」

「夕食っ！？ もうそんな時間……」

外は暗いままだったから、純粹に自分の中に流れた時間だけが時差のように脳裏に映った。

電波時計のようにぐるりぐるり針が回転して、時刻は夕方頃を指す。

「あつはつはつは！ さすがルートくんだね。集中力すごい。でも、あんまり根詰め過ぎないでね。ワタシのテスト、そんなに難しくしないし、ここで力使い果たしちゃったら本末転倒だからさ」

「はい。わかりました」

ルリ会長はあくまで会長らしく、それでいて友人のように、年下の僕に目を合わせて言う。リズが称する“お姉さん”の意味が解った気がした瞬間だった。

「それじゃさっそく、キッチンへレッツゴー。あの連中はワタシだけじゃ手に負えん」

「了解しました」

僕は教科書を閉じて、一人になった席を立つ。背後からは、賑やかな話声が聞こえてきた。こんなにも雨が降っていると言うのに、どうしてか、盛り上がっていた。もしかしたら、合宿中、一番盛り上がっているかもしれない。

雨が僕の決断を延期してくれたというならば、晴れた明日には答えを出せる気がした。

僕はルリ会長の後ろについていきながら、記述問題の答えを考えた。

キッチンから漏れる笑い声と、しとしと冷たい雨音とが混ざり合

って、空間は安らぐ。

それでも、根を詰め過ぎていた僕の集中は数秒ともたなかったけれど。

今、みんなと一緒にいることが、きつと明日のテストの自信に繋がるから。

明日のテストで間違えても、まだ延長された分の時間は残っているはずだ。

そうして最後にやってくるテストで、後悔の無い解答を導ければ、きつと雨は上がる。それまでは、僕の平静を装う助けになってくれる。

そう信じて、僕は髪を結った。

「ごめん。お待たせ」

「遅かったじゃない。全く。早く手伝いなさい。バカ娘が邪魔ばかりするから、一向に終わらないわ」

「今日は……カツ丼かな？ わかった、今手伝う」

アリス担当のメイン部分は衣をつける段階で、コンソメスープと思しき付け合わせはリズとノアが手分けして具を作っているところだった。その奥ではアレンがキャベツを千切りをしていた。サクラはその中の色々なシーンに登場して、楽しそうに遊んでいた。

僕は人手の足りていなさそうなアリスのところへ赴いて、油の加熱を始める。

「あら？ 懐かしいわね。あなたのポニー」

「うん。短いけどね」

エレメンタリーの頃、一時期、耳に掛かるのが嫌でそうしていたことがあるのだ。

そうしたら急に、背中に視線を感じるようになったのですぐやめたけれど。

「ルート、かわいい……」

「本当？　ありがとう。ノアさん」

「すごく似合ってます。可愛いです！」

「あ、うん……ありがとうアレン君」

可愛いなどと言われるのは、いつぶりのことだろう。

よく話す友人と言えばアリスくらいしかいなかった僕にとって、そのチャンスは案外少なかったように思える。そうすると、幼少期に父や母に言われたきりくらいの話になるのだろうか。

今、ノアとアレンに言われた感じがちょうどその時の構図に似ていて、少し背中の端の方がむず痒くなる。

その時の僕は、果たしてその言葉を嬉しく思っていただろうか。

ノアに言われた時の　嬉しい　という感情と、アレンに言われた時の　嬉しい　という感情の間には確かな違いがあるけれど、これは昔と変わっていないだろうか。

変わっているなら、往々にして気付けるはずだ。

そうして試せるはずだ。

すべては明日のテストで。

試験前日、決意を添えて。（後書き）

【あとがき】

詳細は無いですが、現在のルートの髪表現が初めて登場したと思います。子供の頃ショートだとは言ってたと思いますけども。

髪の毛は女性の象徴なので、ここへ来て少し違和感があったと思います。

ですが、それこそルートが歩いてきた道。

ルート、勝負に出ます。

私は応援します。

次回、覚悟つばい匂いがします。

試用試験、覚悟を添えて。(前書き)

【まえがき】

物語、よりも人間的な部分が進む今章です。

真ん中で割るなら、ここが前半のラストですかね。

どうぞ。

試用試験、覚悟を添えて。

五日目。

夕方。

昼食を食べた後に開始したテストは、ちょうど日の沈む頃に終わりを告げた。会長がみんなの進捗を確認して、全員が終わったらそこで終了という形式をとったために、この時間になった。

時間が不明瞭である以上は仕方がないことなだけけれど、全員で歩幅を揃えて助け合っている感じがして、僕は少なからず気分が良かった。

誰かに甘えるなど叱咤されそうだから口には出さないでおく。

それはそうと、結果の方だが。

合格できるかどうか不安がっていたノアも、ここへ来てから遊ぶか寝るかしかしていなかったサクラも、他のみんなも全員、見事にルリ会長お手製テストに合格することができた。

その時、「別に嬉しくないわ」と冷めるアリスと、「ここからは遊び倒すのじゃ！」と燃えるサクラが対照的で面白かった。ルリ会長がサクラに賛同したあたりで、今晚の台所事情は察しがついた。

答え合わせを手伝っていて、テストの問題が一人一人違っていることに気付いた時は、「やっぱり会長はすごい」と見直したのだけれど、差し引きゼロになった。

今はみんなと一緒にキッチンで、夕食作りに取り掛かっているよかったです。

そんなこんなで、一つのテストが終わったわけだけれど、僕には

もう一つテストがある。

アレンが僕を試すのではなく、僕が僕を試すテストだ。そう思ったから、僕は、アレンをテラスへ呼んだのだ。

居間の大きな窓を開けたすぐその、海を臨むテラスだ。そして、みんなに臨まれるテラスでもある。

アレンが告白のことをみんなに話したのだから、僕もそれに応えなければと思ったのも、この場所を選んだ理由の一つだった。

だから、夕食の支度中に僕がアレンを誘ったことも、みんな静かに許してくれた。顔がにやけていたのは、気のせいではないのだろうけれど。

これでも緊張はかなりした方で、アレンが告白を公にしていなければ、多分僕はこういう形で答えることはできていなかったとさえ思うのだ。そういう意味では、このテストは義務だけれど、答えを書くかどうかは任意だ。

僕が書くことを決めた時は、すでにテラスに夕闇が差しっていて、サンセットというには少しばかり遅すぎた。

自ら何等かの雰囲気を求めるわけではないけれど、サクラの言う“ノリと場の雰囲気”というものに肖れば、こんな風に尻込みせずには済んだかもしれないなどと、思わなくもない。

「どうしたんですか？ ルートさん」

「あ、うん……。えっと……」

真っ直ぐに僕を見つめるアレンの瞳の奥には、慌ただしく蠢くキツチンが映っていることだろう。

僕はなるだけ言葉を急がなくてはならない。

「その……ごめんっ。き、急に呼び出したりして……！」

「いえ。全然です」

解答をミスして怒られているわけではないはずなのに、なかなかどうして。

脇のあたりから、妙な汗が噴き出してくる。

それがまた恥ずかしくて、顔が熱くなる。そうして延々、汗をか

いた。

「ええと……き、聞きたいことがあるんだけどね……っ」

「はい。なんですか？」

生憎、今夜は肌寒く、汗をかいた部分が余計に冷えた。

脇、腰、背中、と順に冷えていって、最後に喉が凍えて固まったようになった。当然のように言葉が詰まって、呼吸も覚束なくなつた。

そうして黙っていると、一晩で木に染み込んでいたのか、昨日の雨がやけに匂った。眠れぬ夜でも、安眠の夜でもなかった昨日のだ。僕は昨夜の出来事もなかなか思い出せない記憶力を、心の中で笑つた。

「昨日は、よく眠れた？」

「昨日、ですか？ はい、ぐっすりだったかと」

「そっか。実は僕もなんだ」

「あ、そうなんです。雨、好きなんですか？」

「熱い夜に降ってくれるのは、好きかな」

「わかります！ 音もいいですよ。なんか落ち着きます」

「うん。そうだね」

同じ匂いを感じながら、同じ昨日を思い起こす。思い起こした先は空っぽで、それはまさにテスト勉強をせずに開き直るかのような、ただならない心持ち。

僕もアレンも規律違反をしないだろうから、それは空想に過ぎないけれど、共感を抱くには十分なリアリティだと思った。

点数も評価も無いけれど、現実的留年はありそうだ。

「告白……のことですよね？」

アレンは端から察していたように、僕に問う。

僕は順番が怖かったのだと、暗に答えた。

「うん、そう……です。あの……ごめんね。僕、度胸無くて」

「いえ。俺こそすみません。試すようなこととして。こういうことは、男の俺から切り出すべきですよね」

それは違う、と言おうとしてやめた。

それは、僕が女だからだ。

でも、僕は先輩でもあるのだから、言い淀んでは不格好だろう。

「アレン君に告白されてから、すごく考えたよ」

「はい」

それはもう、堂々巡りの連続だった。

何かがわかるのではないかという期待と、何かが変わるのではないかという不安とが、ぐるぐると血管を伝って、全身を巡るようになった。それで、熱が出た。

「本当はドツキりなんじゃないかって、少しサクラを観察したりもして」

「ははは……。やりそうですもんね」

それでも、要因ははっきりと僕にだけわかるようになっていた。

その猜疑心の矛先がまた、自分自身に向けられて、余計に苦しくなった。

「でも、すぐわかった。アレン君が本気だったこと」

「はい」

だから、僕は解答を導き出さなければならなかった。

「やっぱり、嬉しかった」

そう思うと同時に、僕の心は厳しく試されたかのように窄まったのだった。

でも、感情に嘘は無い。

あるのは、程度なのだけだと思った。

「……………」

「……………」

何か不躰だと思ったのか、アレンは頷いて瞬くだけになる。

僕は腹に留めた言葉を紡ぐしかない。

「本当はね。わからないんだ。アレン君の気持ち、受け止めていいか」

けれど、イエスにせよノーにせよ、返事をするということは何か

を決めるということだから。

アリスが自分をふるように仕向けたのも、きっと、僕の選択肢を削るためだ。ただ、それだけではなくて、あれはアリス自身の決断でもあったと思う。

だから、僕が返事をすれば、何かが変わるのだ。
それが少し、怖くあった。

「僕、よく臆病だって言われるんだけど、その度に違うつて言い返しててね。でも、全然違くなかった。本当にその通りだなんて思った。……あ！ 違うよ！ アレン君が怖いんじゃない……！」
アレンは頷いて微笑んでいた。

“僕の言葉”という答えが欲しいに決まっていた。

「アレン君と、その……おっ、お付き合いしたら……みんなと遊んだりできなくなりそうで……。会長とかアリスにいじられるのは、わかるんだけど、ノアさんとサクラ……との距離感というか、その……」

誰よりも、リズとの付き合い方が想像できなかったけれど、それは口に出さなかった。

僕がリズを好きでいることが、アレンと付き合い合うことには関係ないはずだと思っただからだ。

それは、“好き”とは別のものなのだろうと、そう決めていたから。

「ご、ごめんね！ 返事する前にこんなこと言って」

それでも、聞いておいて欲しかったのだ。

およそ五日もかけて必死に勉強した、この浅はかで愚昧な言い訳を。

カンニングをしないことを誓うかのようにならたらと前提すると、アレンが小さく笑った。

「はははっ！ いえ、大丈夫です。すぐには答えを頂けないだろうなって、割と構えてましたから。それに、急いで出した答えは、嫌ですから」

「アレン君……」

斜陽に照らされた陰影の加減か他か、心なしかアレンが大きく見える。

アレンの影に入った僕はきつと、途轍もなく小さく見えていることだろう。

「じゃあ、俺から聞いていいですか……というか、こつこつなのは“男”である、俺から聞くべきですよね」

僕が言葉を投げようとすると、被せるようにアレンが笑う。

僕の中にはまた、疑心が残った。

「じゃあ、聞きますね」

何かに迫られている感じがして、自然、ピンと背筋が伸びた。五日という時間でもって疑心を押し潰して、僕は構えた。

夕日はやけに冷たく、僕の肌を焼いた。

「俺、ルートさんにフラれますか？」

僕は野次馬の視線を感じながらも、確かに返す。

「フラれない、よ……」

指の先は感覚が無くなったように所在を失って、真っ直ぐだと思っていた瞳は未だ覚束ない。どこを見て、どう感じたかという記憶が刻まれる代わりに、風邪とも似た体の火照りが度を超してきた。

アレンの沈黙は、まるで僕の言葉を待っているかのように、静かに波の音を打ち消していた。

どれくらい、間があったかわからない。

ここへ来たときから、すでに時間は忘れていた。
それでも、言う前から唇が震えていたことと、次の言葉を用意していることだけはまだ覚えていた。

「お試し、しても、いいかな……」

それが今回のテストに記述する、僕の答えだった。
意味を求めて五日練った答えだったせいで、論拠が溢れた。

「贅沢だつてわかつてる。わかつてるけど、後悔はしたくないんだ。
結果後悔することになつても、アレン君のこともみんなのことも
誰かを嫌いになるなんて、僕は嫌だから」

今の僕なら、この解答に五十点を与えることができる。

その得点は赤点ではないけれど、自主的に補修を受けられるのだ。
満点の告白をしていたアレンは補修を受ける必要は無いはずだ。
けれど、僕はそのアレンを補修に誘つたわけだ。

迷惑に他ならないはずなのに、アレンはどうしてか笑顔でいた。

「ははははっ」

「ア、アレン君……？」

靨の影の具合が少し怖く映つたけれど、それはすぐになくなって。
いつも通りの頼もしい肩と実直な瞳とが、僕の背筋をまた少し伸ばすのだった。

「それはつまり、俺がルートさんを攻略すればいいってことですよね？」

至妙な解釈だと　アレンらしい解釈の仕方だと、純粹にそう思つて少し笑う。

その槍のような問いに、僕は水流のように返す。

「ま、まあそうなるかな……？」

言下に、アレンが笑つたのにつられて笑うと、何も無い吹き抜けのテラスに、何かしらの薄い膜が張つたように空間が出来上がった。
当然のことながら風除けにも日除けにもならないはずだけれど、

どうしてだろう。

少し、温ぬるい。

「わかりました！ それじゃあ、お試しで残り五日間！ 俺の彼女
になってください！」

「はい……。よろしく、お願いします……」

「こちらこそ！」

ピンと伸びた背筋の真ん中がこそばゆいのは、僕が若いからか。

それとも、僕が“女”だからか。

それとも、僕が。

試用試験、覚悟を添えて。(後書き)

【あとがき】

シルバーウィークの終わりとともに第四章の前半が終わった感じ
です。

サクラがちゃんと仕事をしていれば、次回からはもう一回シルバ
ーウィークです。

皆、リゾートの雰囲気にはだいぶ慣れて、時間もあまり気にしな
くなりました。慣れてって怖い。

便宜上、冒頭に何日目かを記しておりますが、ルートたちからす
ればもつとあやふや。寝て起きたら一日経った……そんな感覚。な
ので、結構人が出るところだと思えます。

さて、次回からは物語も進んでいきます。

ゆっくりと。

お楽しみに。

アリノアと。(前書き)

【まえがき】

リズ編です。

ここからはルート編と並行してお話が進んでいきます。

悩むルートを見たい方は、是非、サブエピソードも読んでみてください。

アリノアと。

六日目。

今日は、食材の買い出し係ってことで、ログハウスの近くにあるモールに来た。

独……じゃなくて、一人だと荷物を持ちきれないから、アリスお姉ちゃんとその付き添いのノアさんカノジヨも連れてきた。

さすがの私も気を遣って、二人から若干の距離を置いてみたりはしたけど、アリスお姉ちゃんのそういうとこの鋭さは、やっぱり変わってなかったみたいで。

買い物も後半、休憩ってことで広いフードコートのベンチに腰掛けると、説教タイムが始まってしまった。それはもう、ノアさんが疲れて寝るのを見越してたみたいなの、絶妙なタイミングだった。

「損な性格してるわね。あなたも」

「そうかなー」

も、っていう部分が妙に引っかかった感じがしてモヤモヤするけど、アリスお姉ちゃんにマインドコントロールされてるみたいでちよっと嫌なので、やっぱりモヤモヤしてません。

「そうね。昨日、ルートがアレンの告白にOKしたから、一緒にいるのは居心地悪くて、結果、こっちに来た……でも結局、あたしらにも気を遣っちゃって、さあ大変。違うかしら？」

「ち、違うし？」

「あら、そうなの？　じゃあ、あなたもあっちに混ざって来ればいいんじゃない？」

アリスお姉ちゃんの指差す先には、ビンテージライクな洋菓子店の軒先でお菓子を選んでいるアレンたちの姿が。ゴシップ！

「アリスお姉ちゃんの意地悪」

「まあいいけど。何か言いたいことがあるなら、言っておいた方がいいわよ。ルートの言う通り、後悔はしたくないでしょうから。まあ、あたしが言えた義理でもないのだけれどね」

「言いたいこと、ねー……」

結局、私は何を発信したいんだろう。

最近、よくわからなくなる。なる、というか元々良くはわかってないけど。

ただ単に、その時その時でやりたいことみたいなものはあって。それこそ、その時その時で全部やって消化しちゃうのが私流だったんだけど。

こないだの文化祭、キスをしたのもそのうちの一つ。

でも、あの時から、何かがおかしくなった。

それもいつも通りの私流のつもりだったんだけど、結果としてそれが“一線を越えちゃった”ことになるわけで。一線がどこにあるか知らないけど、とりあえず、人前であんなことをして、しかも姉妹で、それもやばいことに私から、などなど……色々と超越してることは確かだ。

まあ、私としてはキスくらいどうということでもないっちゃない。相手が相手だし、好きだし、普通に良かったし。噂になるのも別に慣れてるし、事件が事件だけに誤解っぽく鎮まったし。

そう。

あれはただの、ひと夏の思い出……みたいな感じで、終わればよかったのに。

ばかアレンが告白なんかするからこういうことになるんだ。

あーあ。昨日、何で拗ねちゃったかなあ、私。もう、恥ずかしいじゃん。

「そんなの無いよ……別に」

告白の返事を聞いた今、言いたいことなんて、無いんじゃないかなって思う。

そうだなあ……。「私のお姉ちゃんを返して！」とか言っておけば、アリスお姉ちゃん的には楽しいのかな。

「そう？　公認カップルを祝福する言葉とかもないのかしら」

「無いもん」

「強情ね」

「アリスお姉ちゃんって時々ヒドいよね」

「あなたはいつもそんなよね」

そんなって、何となく馬鹿にしたような口調で言われたけど、私はいつもどんなだろう。

詳しく知りたいけど、アリスお姉ちゃんは大体、私の質問に真面目に答えたりしない。人には色々際どいこと聞くくせに。

「何か言いたげな顔ね」

「別にー」

「可愛くないわね」

「いいもん。彼女いる人に媚びても意味無いもん」

「身も蓋も無いわね」

そして、私の場合、身もフタも中身も無かったりする。

考えなしに反射で喋っているとはきつと、今のことを言うんじゃないだろうか。言ってみた後で失言に気付くみたい。往年の政治家がやりそうなことだ。

ぶりぶりと言句を言っていると、「まあいいわ」とメ切られてしまった。

そこでアリスお姉ちゃんの声のトーンが変わったと思ったら、急に中身も詰まりだして焦る。

「それで、結局あなたはどつするのかしら」

「どつって？」

「端的に言えば、このままいくかいかないか」

「なんのこと？」

「あなたは昔から勘が良いし、あの子も顔に出やすい。そんな状況で、ずっと一緒にいればさすがに気付いていると思うのだけれど」「わざとらしく首を傾げてみれば、呆れてやめると思ったのに。」

「ここはあえて言ってみようかしら」

「……………」

もう遮れない。

私はアリスお姉ちゃんの言葉を待つしかない。

「気付いてるわよね？」と銘打った時点で、私はもう、待ちきれずに頷いていた。

「ルートがあなたを好きだったこと」

助詞が間違っていることを指摘する前に、アリスお姉ちゃんが訂正してきた。珍しく確証はなかったみたいだけど、大体は合ってた。「あなたがどうかは知らないけど、あんな長いキスを人前でするくらいのは、最低でも感じているはずね。あれをやるうと言いだしたのがどっちかは言うまでもないでしょうし」

我ながら高すぎる最低ラインだなと思った。

アレ以上は、つまるどころ公開処刑だ。

「さて。そんなルートが同級生に告白されて、そして、まさかのオ―ケー。今も、進行形でデート中。傍からそれを見てぶつくさ言う者がおりました。その少女の名は」

「そ、そんなのアリスお姉ちゃんが言わせてるんじゃない！ っていうか、なんで昔話口調だしっ。読み聞かせとかすっごい下手だったのに！ なんてオオカミと赤ずきんのトーン同じだったのか、今でも謎なんだからねっ!?!」

ぶつくさ言い始めるとすぐ、言葉を止められた。

勢いを堰き止められたから、その分顔はくしゃっと顰め面になっ

たと思う。

「あなたも、好きなんでしょ？」

アリスお姉ちゃんにしてはストレートだなって思った。
右見て左見て、俯きながら。私は返って拗れた。

「まあ、好き、だけど……？」

「あら、素直ね」

「素直だもん」

「それじゃ、どうするのかしら？」

「もー！ アリスお姉ちゃんは、私をどうさせたいの？」

「そうねえ。『私のお姉ちゃんを返して！』とか言って、修羅場になっただら面白いかもね」

「完全に遊ぼうとしてるじゃん！」

こちらら真剣なのに。

……えっ。

私もしかして、シンケン……なの？

「それはさすがに冗談よ。ただ、あなたってそんなにお淑やかだったかと疑問に思ってしまった」

「おしとやかだもん！」

その答えが全然おしとやかじゃなかった。

「……………」

「だけど、おしとやかにならないといけない時だってあるんじゃないかな
いかって思う。」

「どうしたのよ。急に大人しくなって」

「いや、だつてさ……」

アリスお姉ちゃんの撫でるような優しい声が、私の心に滞留していた言葉をどんどん吸い上げていく感じがする。聞き上手、すごい。これは人見知りの子が、好きになっちゃうわけだ。

生憎、私は吐き出せるタイプだから、あんまり合わなかったんだな。

けど、今は甘えちゃおうかな。

「私と恋人になるのって、普通じゃないじゃん。選択肢がそれだけって言うんだっいたらわかるし、私も嬉しいけどさ、違うんじゃない？普通の恋もあるじゃん？　だったら普通の恋をした方が幸せになれると思うじゃん」

アリスお姉ちゃんは「ええ」とか「そうね」とか、少し相槌を打つてくれるだけ。

無表情よりかは笑顔に近い口角のラインに、どれだけ私の心は癒されたか。

「私と付き合うのって、言ったらルール違反だからさ。それもどうかなって。だったらこの際、応援しようかなって思わなくもないよ？　けどさ。応援したくない小さい自分もさ。どこかにいるんだ」

「嫉妬、してるのね」

「おかしいけど、そうかも」

言っちゃって気付く。

あー言っちゃったよ、と。

それが私流。

「アレンとあなたが付き合ったら、あたしはルートの相談に乗ってたかしらね」

「それはないかなー。そんな選択肢、私には無いし」

「ルート一筋ってわけね」

「そうそ……って違ーうっ！　あ、いや、まあ、違くは……ないかも、だけど……」

「ふふふっ。似合ってるわよ。嫉妬」

アリスお姉ちゃんと話をすると、時々チクチクって胸が痛むけど、それが結局どういう意味かわかるから、真っ向から否定したり目を背けたりってことはできないんだよね。

アリスお姉ちゃんは、当たり前のことを当たり前のように攻めてくるから、それが痛いってことは、私が何か隠し事をしてるってことだから。

それって結構、予防接種の注射とかに似てる気がする。お節介な

感じとか。

よく泣いてたなあ、私。

それでいつも慰められたりしてたっけ。

「もーっ！ あんまり言うのと泣いちゃうよっ」

今は昼間だからアレだけど、夜で一人だったら本当に泣いてたかもしれない。

けど、相変わらず、乙女の涙に強いアリスお姉ちゃんなのであった。

「あなたを泣かせたら、どっちが先に助けに来てくれるかしらね」
アリスお姉ちゃんの眼にキツと力が入って、普通に怖かった。けど、何されるのかということよりも、純粹にその問いの解答が気になる自分がいた。

私が今泣いたら、助けてくれるのはどっちだろう。

いや、違う。そうじゃない。

助けてもらいたいのは、どっちだろう。

.....

答えは驚くほどすぐに出て、どうしてそうなるのかもわかった。

それで大した言葉を思いつくわけでもないけど、言いたいことっていうものが、私のなかに一つや二つあるような気はしてきた。

「もしさ。私とかノアさんとか、ルリ姉さんとか、みんな泣いてたさ。アリスお姉ちゃんは誰に声かける？ やっぱりノアさん？」

「何よその状況。できれば関わりたくないわね」

「いいからー。ちゃんと答えてよー」

「はいはい。そうね。ノアかしらね」

「そんなテキトーみたくう」

「別に適当じゃないわよ。事件性のありそうな人物を除外していったら、そうなたただけよ。お転婆と会長は言うまでもなく、ルートが泣いてたらそれはかなり恐怖よね。ノアならせいぜい、誰かに怒られたとかそんなのでしょっし」

「もー。素直じゃないなー」

「あら。心外ね。あたしは大好きよ、この子のこと」

そんなわざとらしくなでなでされると、ちよつとだけぐつとくる。見せつけられるのって、結構辛いもんだね。

見せつけられるなら見なきゃいいだけだし、辛いなら諦めればいいんだと思う。思うんだけど、そう簡単にいかないようにできてるもんなんだよね。

だからって、垂涎するほど当事者になりたいわけでもない。告白したりとか、恋人関係をせがんでみたりとか、あんまりそんな気はなかつたりもして。

今は、相手と自分の都合を考えて、合えば、そういうのもアリかなって思うけど。

そんなことをしていたらライバルに先を越されちゃうよって、アリスお姉ちゃんはそう言いたいんだよね。ライバルとかそういうのバカっぽいし、人を取り合うのなんか想像もしてなかつたから、全然実感湧かないけど。そもそも、私がそういうことで悩むなんて思いもしないしさ。

でも、そういうことになっちゃったんだよね。

私が声を発しなければ、二人は私からどんどん離れて行ってしまふこと。もし、二人が別れなかつたら、私はすごく惨めになるってこと。

そういうことには。

「ん……」

「あ。起きた」

「ごめんなさいね。起こしちゃったわね」

「ご、ごめんなさい……！ ノア、寝ちゃった……！ 時間、過ぎて……」

「大丈夫よ。そんなに経ってないから」

アリスお姉ちゃんにとっては、この小一時間が「そんなに」に含

まれるのか。あるいは、私の感じた肩の凝る長時間が、十五分とかそこらなのか。あとで合流した二人が言っていた、三十分くらいというよくわからない時間が正確なのか。

昔、相部屋だった頃の感覚と比べたら何か閃きそうだったけど、特にそんなことはなかったと思う。

アリノアと。(後書き)

【あとがき】

腕時計をしている人は多くないように思いますが、今は携帯がありますので、自然と時間は把握しているのが現実です。

腕時計も壁掛けも携帯もない。

一日やってみると、時の重さがわかったりわからなかったりします。

次のサブエピソードはルート編です。

【1st】越くじや、黒じぬじや。(前書き)

【まえがき】

ルート、初デートです。
酸っぱい。

よんね。

六日目。

「じゃあ、こつからは自由行動ねー」

一通りの買い物が終わった後、リズの言うままに、モールの休憩スペース前で解散した僕たちだったけれど、何となくその狙いはわかっていた。ただ、特に咎めるつもりもないし、今日はそういう風にしようと思っていたから、ありがたいと言えばありがたかった。

昨日、アレンの告白をオーケーした後、あからさまに機嫌が悪かったので心配したのだが、あの様子なら一先ずは大丈夫だろうと思う。

はてさて、そんなことよりも気にしなくてはいけないことがある。

「ルートさんは、休日とか外出するんですか？」

「へっ？ 僕っ？」

他でもない、自分のことである。

「そうです。まだ、ルートさんのこと全然知らないのです」

「そそそ、そっか！ そうだよねっ！ 休日ね、休日！ 休日は読書かなっ！」

男子と話し慣れていない感じが前面に押し出された口調になってしまう。

本当に話し慣れていないのだから仕方がないのだが、一先輩としては、もう少し頼もしい雰囲気で接したくはあった。

そんな薄っぺらな心持はすぐに、しっかりした後輩に吹き飛ば

されてしまうのだけれど。

「読書ですか！ いいですね。なんかルートさんっぽいんです。あ、俺も結構本読みますよ。ミステリーとかSFとか。最後にどんでん返しがあるやつが好きですね。ルートさんはどんなのを読むんですか？」

気を遣われているな、と感じながらも僕は答えるに尽くす。

未だ定まらない視線というものを気にするには、もうしばらく時間がかかりそうだった。

「ぼ、僕？ そ、そうだなあ……。天体の本を読むことが多いかなあ。小説も、星がテーマなものが好きかも」

「うーん……」

こういう時は、少しでも好みを合わせるべきだったろうか。

機嫌を悪くしてしまったら謝らないとだけれど、男の子の顔を覗く勇気がなかった。

唸るのが収まるまで待つことしかできない適応力の無さが情けなくて、初デートには似つかわしくない溜息が出そうだった。

「“星の譜面”……」

「え？」

急に、お気に入りのタイトルが聞こえてきたので、少し驚いた。それも、自分の口から出たものではないらしい。

「“星の譜面”とか、読みました？」

「う、うんっ。読んだよっ！」

読んだも何も、内容すら覚えるくらい読み返した一番好きな本だ。幼い頃に父からもらって、今では背表紙までボロボロになっている。大まかなストーリーとしては、音楽生を志す少女が道端に落ちていた楽譜を拾うところから始まるファンタジーで、構成は上中下巻の三部。全体的に子供向けな内容ではあるけれど、笑いあり涙あり謎あり恋あり……と、今でも学ぶことがあったりする。謎かけに関

しては、「説」のような解説書がたくさんあったりして、それを読むのも面白かった。

決してメジャーな本ではないけれど、それら含めて、僕はとても好きだ。

「あれ、面白いですよ！ ルートさんはどの説だと思ってましたか？ 俺は未だに偶然説信じてます！」

「僕は、五秒前誕生説かなあ。偶然説もすごかったね！ 思わず『なるほど！』って言うっちゃったのを覚えてるよ」

“星の譜面”を知っていても、説の話まで知っている人にはなかなか出会えるものではないから、僕も少しばかり高揚を隠せなくなる。

願わくは座って心行くまで語り合いたいけれど、そんなことをした暁には、後で恥ずかしくなって布団に埋まるしかなくなりそうなので、自重したい。

僕はあまり盛んになってしまわないよう、歩くスピードで流れる商店街の風景を目で追って、逸る気持ちをそれに同期させた。

「ルートさんは知ってますか？ ルカ賞」

「あ。うん。知ってる。僕も応募したことあるよ」

ルカ賞とは、“星の譜面”についての自分の解釈を論説文にして応募すると、学会の人に読んでもらえるというイベントのことだ。

アレンが言った偶然説や五秒前誕生説もそのうちの一つ。誰もが納得できるものであったりとか、思わず膝を打ってしまうような斬新な解釈文には褒賞もあつたりする。

小さい頃の僕は、それで自分の解説書を出せばなんて思っていたり、いなかっただり。

ちなみに、ルカ賞のルカは作者と言われている人の名前“ルーカス”からとられている。

「へえ！ 応募もしたんですね！ 俺も出したくて書いてはみたんですけど、描いてる途中で別の説が浮かんできちゃって、全然上手くいかなかったんですね」

「うんうん。わかる。小さい子にも理解できるような内容だから、たくさん解釈できちゃうんだよね」

現役の天文学者が一年かけて読み解いたものもあつたし、解釈が飛躍しすぎてスピノフノベルになった作品もあつたような記憶がある。絵本化したのは通の間では有名なことだ。

「そうなんですよね。あ、ちなみに、どんな説で応募したんですか？」

「あ、うん。大したもの出してないから……」

「そんなそんな。俺、聞きたいです！」

あまり人に言いふらせるような優れた説でもないのだが、左肩に興味の熱を感じたので言つてあげよう。

「え、えっと。ル、ループ説……みたいなの？」

持論を説く恥ずかしさより先に、大きくて複雑な感情があつたと思つ。

同士はアレン優しかったけれど。

「へええ！ ループ説、ですか！。なるほどって感じですよ。明日でも明後日でも、お話聞かせてください！ 興味あります！」

「うん。いいよ」

頷いた時、僕はやっとアレンを見ることができた。

瞬間的一瞥だったけれど、楽しそうにしていたようで、僕はすごく安心できた。

「あれ？ でも、待ってください？ ループ説って、俺、何かで読んだことありますよ？ もしかして、賞とかとつたり……」

「ルカ賞じゃない別の賞なら、一度だけ……。で、でも、全然小さい賞だよ」

一口にルカ賞と言っても種類があつて、僕が受賞したのはその中でも下の方だったはずだ。

というのも、父が僕の原稿を偶然見つけてそれを勝手に応募した経緯があつて、記憶にあまり残らなかつたのである。大した賞ではなかつたことは自分で調べたのでよく覚えている。

それでも父は最優秀賞ばりに喜んで、僕より燥いでいた。

「いや、すごいですよ！ 大人でも普通に落選するみたいですから！ 多分、雑誌とかにも載ったんじゃないですか？ もしかして最年少受賞とかかもしれないよ！？」

「あははは」

「お、可笑しかったですか？」

「あ、いや、ごめん。違うんだ。言い方がお父さんにちょっと似てて。僕が賞を獲ったって、僕より喜んでたのを思い出しちゃって。あははは」

湧いた語彙を連想して繋ぐように捲し立てる父の熱と、どこか重なる部分があった。

「お義父様、ですか……」

少し気迫の抜けたアレンの声は、どうしてか僕の罪悪感を肥大化させた。

対処できない今の状況、嫌な汗をかく前に。

「ごうご、ごめんっ。一人で盛り上がったちゃって……」

「あ。いえ。ルートさんのお義父様、どんな感じかになって、ちょっと気になっちゃって。確か、文芸家……でしたっけ？」

「あ、うん。雑誌のコラムとかそのくらいで、紹介できるような作品は無いんだけど……」

アレンのそこはかとなない気遣いを感じて、心の中で溜息をつく。

アレンはまた朗らかに返すけれど、今はそれが痛い。

「へえ！ でも、すごいですよ。そういう仕事って、なんか憧れま
す」

「そ、そうかな。ありがとう……」

言っていて自分の返答に興味が無くなる。

一人で盛り上がった罰だと、視線が進行方向の遙か遠くへと散る。

僕が静かになると、アレンが地続きの話題をくれた。

本当は僕がそれをやりたかったのだと、情けなくて涙が出そうである。

「お義母様はコーヒー園を経営してるって聞いたんですけど」

「……うん。してるよ。水やったり、収穫したり、お店見たり。庭園も狭くないし一人だと大変だから、お昼頃には閉めちゃうみたいなんだけど」

「なるほどなるほど。アルバイトと違って、募集してないんですか？」

「アルバイトかあ。猫の手も借りたい、みたいなことは言ってたけど、そういうのは聞かないかなあ」

「休日だけでもお手伝いに行ったりしたら、迷惑ですかね……？あつ。給料なんてむしろゼロでいいです。ルートさんに会えれば、それで俺は満足ですから」

「え、えーと……」

母の負担が減ることは素直に嬉しいし、母自身も確かに喜ぶと思う。アレンなら信頼もできるし、何より僕は今、アレンと付き合っているのだ。断る明確な理由など見当たらない。それなのに。

「……あつ。あのお菓子屋さん、入ってみたい？」

僕はまた、意気地なく延長を望んでしまった。

「あ、はい。いいですよ。行きましょう」

右手に見えたお洒落な軒先に魅かれて誘えたとしたら、僕も成長できていたと言えるのかもしれない。

僕を感じる僕という空気の中に、立場を改めてアレンが入ってくることが恐怖でならなかった。単純な怖さではなくて、未知数な部分に対する不安が大きいだろうか。

僕の頼りは今、サクラの作り出したこの異質な空気だけなのだ。

古めかしい雑貨を塗した外觀からわかるように、取り揃えてある洋菓子にもどこかお洒落な要素が漂っていた。普通、お菓子の袋というものは、赤かったり黄色かったり、どこかに欲をそそるものがあるのだと思う。このお店のお菓子の包装は茶色で、無機質な紙袋の様相を呈していた。

店の奥に見える店長らしき黒髪の女性の趣味だろうか。その佇まいもまたアリスとは違う、飾らない美しさのような洗練されたものを感じた。

気の迷いで選んだのが失礼に思えてくるくらいは、気に入ってしまった。

「お洒落なお店ですね」

「あ、うん。そうだね」

きよろきよろとお店を見渡してアレンを視界から省いたら、少しは冷静になれるかと思っただけで、特別そんなこともなかった。それどころか、話題を思考できない分、返って、話しかけられた時びっくりした。

でも僕の中にもやはり、“こうあるべきだ”とか“そうしなければならぬ”のような、確執めいた金言はあった。だからこそ、男の子の隣を歩く女の子という枠にははまれていたのだと思う。

「ルートさんは、好きな食べ物とありますか？」

「食べ物？ うーん、そうだなあ……」

間を考えなければ、和食と答えることはすぐできた。

「んんー……」

でも、それでは話題が終わってしまうから、少し考える素振りを見せた。

嘘でも必要な間なのだと思うけれど、それでも沈黙はひりひりと沁みた。

「そ、蕎麦……かな？」

「蕎麦ですか！ 渋いですねー。でも、実は結構和食好きなんです。お茶漬けとか、家族に内緒でやったりします。……あ。もしかした

ら、和つばいお菓子があるかもしれませんよ。ちょっと探してみましよう！」

ある程度考えたら、それなりに攻め込まれない答えは見つかるが、その分、言葉に重みが出ることに気付く。確かに蕎麦は好きだけれど、今の間と同じ価値はそこには無い。

そのウエイトに責任を持っているノアが、何だかとても大きく見えた。

恥ずかしさからか、もどかしさからか、緊張からかわからないけれど、僕は僕自身の言葉に押し潰されそうだった。

「あ。あつた」

「早いですね！ えっと……『蕎麦パンケーキ』ですね。謎の組み合わせですけど、美味しそうです。なんかこう、すっきりしてるんですかね？」

「蕎麦の香り、するのかな」

そりやるだろうと、自分に喝を入れてみる。

空しくなる。

アレンの心遣いが、また眩しい。

「どうしますか？ みんなのおやつに買って行ってみますか？ ルリさんから預かった夕飯代も結構余ってますし」

「うーん。僕は嬉しいけど、遠慮しておくよ。僕の好みで決めたら悪いし」

和食自体、そもそもが好みを分ける。

記憶が正しければリスとアリスは好きではなかったはずだし、おやつにするにはそれだけで不適だと思った。

「そうですか。でも、そうですね。結構、好き嫌いあるんですよね」「うんうん。わかる」

「あ、やつぱり経験ありますか？ なかなか理解されないんですよ。味が嫌いとか、風味が苦手とか、薄いとか。濃いのもあるし、種類もたくさんあるのに、全部一緒にされちゃったりするんですよ」

ね

「そうそう！ それで僕も、リ
リスとの和食を巡るしょうもない口論が思い出されたけれど、ま
た一人で盛り上がってしまいそうだとハツとして、一度空気を吸っ
た。

装った息継ぎもわざとらしくなり過ぎて、噎せた。

「こほこほっ……！ ごめんっ！ 変なところに空気入った……」

「はははは。ルートさんって時々熱くなりますね！ そんなに俺に
気を遣わなくてもいいですよ。熱く語るルートさんも、好きなので
「すっ……」と僕は云ったけれど、目がパチパチとするだけで息を
吐いたか吸ったかイマイチ判然としなかった。

「はははっ。そういうのも好きです。……それじゃ、無難にプレー
ンのやつ、買ってきますね。ちょっと待っててください」

あたふたしていると、アレンはパンケーキと何種類かのお菓子を
手に取って、すたすたと奥へ行ってしまった。

見事に一人取り残されたわけだけれど、僕の隣が空いてもまだ、
熱は冷めなかった。

気遣い？ 僕が？

アレンの言葉の一部を撮みとって、一人疑問に思っていたからだ
った。

気を遣わなくてもいいとアレンは言っていたけれど、それはつま
りどうすればいいと言うことなのだろうか。僕はアレンに気を遣っ
ていたのだろうか。

アレンが僕にそうしてくれていたことはわかるのだけれど、僕は
そんなつもりは……ある。あるのだが、きちんと機能しているかと
いうのと、アレンの気遣いと比較して劣っているのだという自負が、
その前提にあった。

なにより、僕が不甲斐ないから、その分はすべてアレン任せにな
っている背景がある。

そうしたら、僕は何をどうすればいいのだろう。

「お待たせしました！ はい、これどうぞ」

「えっ？」

気付いたらアレンは目の前にいて、気付いたらアレンのことを正面から見据えた回数はずが三回くらいのもので。その三回で何がわかるかなど、程度が知れている。

改めてアレンの表情に直面して、僕の心は変わったと思う。

「蕎麦の方です。これは俺からなので、みんなには内緒で食べてくださいね」

「えっ、あの……」

意図せずとも、いつぞやのノアのように慌てふためいてしまう。

これではノアのことを見てほっこりしたり、不器用さを可愛がったりできないではないか。これならよっぽどノアの方が、愛情表現が上手いと思う。

恥ずかしくて物も言えないけれど、差し出されたものを乗せる手の平くらいは頑張った。

「い、いいの……？」

「全然いいですよ！」

「あ、ありがとうアレン君……！ あの……嬉しい、です……」

「それなら良かったです。俺も嬉しいですよ！」

「はははっ。でも、内緒って難しそう。あのメンバーだと」

「ですよ。それでなんですけど」

こういつのを青春と呼ぶのだろうか などと心の中で哲学してみても、生まれる解答は愉悦と高揚、それから少しばかり鋭い気恥ずかしさの三段論法だった。

僕の中に残っていた あるいは、新しく誕生した“普通”の二文字が、それによって急速に証明されていくような、清々しい感覚に陥る。

僕はアレンの冷めない瞳を見ながら、その言葉を待った。

「ルートさん、スポーツは得意ですか？」

「スポーツ？ 得意ってほどじゃないけど、体を動かすのは好きかな」

「あ。それなら、良かったです。モールに来る途中にあった公園、覚えてますか？」

「テニスコートとかあったところ？」

「はい、そうです。あそこでキャッチボールとか、しませんか？」

「キャ、キャッチボール？」

久しぶりに聞いた単語だなと、意外だった。

一瞬、それが何か忘れたような感じになったけれど、幼い頃に父とやった記憶が蘇ってきてなるほどと思った。

あれは、力の弱い方に合わせることを余儀なくされる遊びだ。それでいて、弱い方も弱い方で気を遣う。

今の僕らにはちょうどいいのかもしれない。

「そうです。キャッチボールデートってことにしましょう」

「キャッチボールデート……。いいかも……」

デートが何かを僕はまだ知らないが、それはデートではないような気がした。

けれど、それをすることが結果としてアレンと向き合うことになると思う。

そして、それが今とても大切なことなのだと知っていたから。

だから僕は頷いて、限りなくアレンの彼女を演じられるよう笑って見たところだ。

「良かった！ じゃ、そろそろ帰りましょうか」

「うん」

僕がアレンの彼女だとするならば、他のみんなとの関係はどうなってしまうのだろうか。

僕の明日にはまだ、不安がたち込めていたと思う。

『1st』越くじとど、興じるじと。(後書き)

【あとがき】

ルート、はじめてのお付き合いです。

ぎこちない感じ、まだつかめていない距離感、異性としての気持ち、エトセトラ……。

青春はこれまでも語ってきましたが、今回は新鮮です。

今回のルート編。

長くはならない予定ですが、“好きになるということ”をテーマに、また一つ成長していくので、見守っていただければなによりなにより。

ルリ姉さんと……。 (前書き)

【まえがき】

私は中学時代、ソフトテニス部でした。

柔らかいボールをガットを張ったラケットで打つスポーツです。
バドミントンと同じくらい楽しいスポーツ。

そんな感じですよ。

ルリ姉さんと……。

七日目。

休みも伸びたし、その分は何かをして消費しないといけないわけだけ。

生来遊び上手な私でさえ、一週間もリゾートにいればやる事が無くなるもんだ。

青い海と白い砂浜には、よく半永久的な快樂なんかを求めたりするけど、そんなのはどこ吹く風。

確かに、初めて見た瞬間はときめいた。いつ頃だったか、家族で流星群を見た時の感動に似ていると思う。

でも、海なんて見慣れちゃえばしょっぱい水だし、砂浜はただの細かい砂。同じように、星も一週間見てたら飽きちゃう……なんて夢のないことを考えていたら、紫外線にしてやられそう。

なんて思いつつも愚痴れない清々しい空気というのが、リゾートという場所がもつ力の根源だったりするのかも。

そんな朗らかな陽気に肖って、無下にぐうたらして過ごすのもいいけど、皆の前で服を脱ぎ捨てたりはできるはずもない。最悪、部屋でそうするのもいいかもだけど、なんか損してる感はすごいあった。

そういうわけで遊び相手を探すんだけど、アリスお姉ちゃんがノアさんと二人でどこかに出かけちゃったから後がない。絡まれる覚悟はしていたけど、桜さんもぐっすりだったし、起こそうとは思わない。

もうダメだつて諦めて部屋で寝っ転がってたところに、ちょうどいい人が来て。

結果的に消去法みたいにはなっちゃったけど、私は今日、ルリ姉さんと外に出ていた。

「急に誘ってごめんなさい。ルリ姉さん、何かやることとかあったよね」

「ううん。大丈夫。本読もうかなくてくらいだったから、逆に誘ってくれて嬉しいくらいだよ。みんな無言で置いてきやがってよー」

朝食はみんな食べてたはずだから、非はお姉さんの存在感にあるんじゃないかって思う。

「置いてきたと言えば桜さん。そのままにしてきちゃいましたけど、大丈夫かなー？」

「大丈夫だと思うよー。後で拗ねそうだけど。起こして不機嫌になるのも面倒だからさ」

「……………」

「ん？ どうしたの？」

「いや、なんか、ルリ姉さんが言うとなんか変だなって」

特別仲良くしてる桜さんに関して、“面倒”なんて言葉が出るとは思わなかったから、ちよつとだけ意外だった。

私の言葉の意味を汲んだみたいで、ルリ姉さんは少し話しづらそうに見える。

「ああ、まーね。ワタシにも限度はあるよ」

「そりゃそうですよー」

「無邪気で可愛いし、見てると楽しいから、大部分は認可してるんだけどね」

認可のハードルが低すぎるような気がするんだけど。

逆に、一大部分……以外が何か気にもなる。

「ルリ姉さん。あの」

「お。着いたつぽい」

「……ホントだー」

尋ねようとしたところで、どうやら到着してしまっただけだ。

今日の目的地、“テニスコート”に。

無理して聞くことでもないし、気分を入れ替えていこうと思う。

「いやー広いねー。何コートあんのこれ」

「十くらい？」

なんとなくで言ってみただけ、無料開放だとすればちょうどいい数かもしれない。ラケットとボールも無料で貸し出し……というか投げ捨てられてるみたいで、庭球が無料でできる。

ここら辺の地域がシルバーウィークかどうかはわからないけど、かなり空いてた。フェンスのある奥のコートで、ラリーをしてる男女がワンペアいるくらい。

さすがにその隣は嫌だから、逆側　公園に面したコートでやることにした。

ネットのところを立てかけてあったラケットをとって、プロテニスプレイヤーばりにベンチに腰掛けてみる。水を飲むでも作戦会議をするでもないけど、気分だった。

すると、隣に相手選手が座ってくるという椿事が。

「お。いいなー。リズちゃんの結構キレイ」

「わあ。ルリお姉さんの、黒ずんでますね。手、ベタベタになりそう」

「ま、長年使われてたら、そりゃあね」

持つとこの布はボロボロで、元の色がわからないくらい黒くなっていた。鼻を近づけたら年の功が匂いそう。アリスお姉ちゃんだったら完璧に拒否してるところだけど、ルリ姉さんは平気みたい。

私もそうというのはなんか大丈夫だった。

「しばらくしたら交換するー？」

「んー。いや、大丈夫。なんせ初めてだから、ちゃんとできるのが心配。慣れたら慣れたの使った方がいいっしょ」

「わかったー」

「そんじゃ、やるつかーテニス。やったことないけど」

「私もなーい」

「……………」

「……………」

「「え？」」

一時は野球になりかけた庭球も、奥でラリーをしている二人に指南してもらって、一命をとりとめた。

何でも、飛んできたボールを打ち返して相手の四角に入れれば勝ちらしく、相手も同じことをするからラリーになるというアルゴリズムなようだった。なるほど納得。野球より全然簡単だった。

それを覚えてからは、私の独壇場。

ルリ姉さんなんか、クラゲみたいにふわふわ左右に揺さぶられてすぐにバテちゃう。フォームとかは綺麗だし運動神経全般としては良いみたいなんだけど。そう。アレだ。まだまだなんだよね。

苦手なコースも見えてきたところで、私はルリ姉さん相手に加減できるくらいにはなった。

加減してやると割と疲れる。

休憩しようって先に言い出したのがルリ姉さんで良かったー。

「いやー。上手だね、リズちゃん」

「ただ、飛んできたのを打ち返してるだけだよー」

肩で息をしながら、呼吸ついでに無理して会話してる感じだから、なんか気を遣う。

ルリ姉さんにはクラゲっていうハンディキャップがあるから、自業自得なんだけども。

「それが出来ちゃうからすごいよね。ルートくんも褒めるわけだー」
「……………」

平日の生徒会室の情景が思い浮かんで、思わず感情が詰まる。

出所は結構、待ったら出てくる。

「ん？ あれってルートくんじゃない？ 隣にいるのはアレン君で……………」

「きき、気のせいですよー。ボール投げなんかしてるしー」

「だよー。ルートくんならリフティングしそうだしねー」

ルリ姉さん越しに公園の放物線を覗きながら、それはないなと息を吐いた。優越感で気持ち良くなれたのは、私の方がテニスが上手いからだと思う。

私があの手を受け取って投げ返したらどうなるかなんて、今は考えることもできない。

そんな自分が嫌になって、こうしてラケットを強く握ってみるわけだったりする。

「そういえばリズちゃん。なんかワタシに言いかけなかったっけ？

ここに着いたときさ」

「着いたとき？ あー、桜さんの話ですねー」

「サクラちゃんがどうかしたの？」

「いや、えっと……。ルリ姉さん、桜さんのこと気に入ってるよね。限度があるなんて当然だけど、それをルリ姉さんの口から聞いたというところに驚いた。

ともあれ頷いてるみたいだし、聞いていいなら聞いちゃうぞ。

「大部分は許してるってことは、許さない部分もあるのかなって思っ
つて」

非人道的な事だったりとか、犯罪に準ずる何かとかだったりとか、そういうのはルリ姉さんも絶対注意すると思う。相手が誰でも、正しいことは正しいんだって言うてくれそう。イケメンだなルリ姉さ

ん。

でも、私が思う理由ってというのはそこじゃなかった。

ルリ姉さんも、それを何となく感じていたみたいで。

「そうだなー。時々、キスしろとか触らせるとか言ってくるんだけど、それは拒否してるね。ハグくらいだったら別にいいんだけどねー。ちゅーってなるとさ、別だよねー。もちろん、法に触れそうって言うのもあるけど、それ以前に、女の子にちゅーするっていう知識？ 概念？ なんていうの？ よくわかんないけど、とにかく、なんか違うなって思う」

どうしてハグはいいんだろっていう疑問こそあるけど、それをルリ姉さんにぶつけたとて、私の求める答えは返ってこないんだろと思う。

だって、私がこれまでずっと私に問い続けてきて未だにわからないんだから。

「嫌な気分になせちやってたらごめん」

「ううん。大丈夫」

首を振って見えたのは、少し大人なルリ姉さんの笑顔だった。

「そっか……。でも、ごめんね。ワタシにはリズちゃんとかノアちゃんの気持ちはわからないや。ルートくんもアリスちゃんも二人とも素敵だけど、ワタシはそういう目では見れない。リズちゃんは嫌だって思うかもしれないけど、ワタシはやっぱり、手を繋ぐのも触られるのもキスするのも、男の人がいいって思う。とびっきりのイケメンで優しい背が高い細マッチョ」

「はははっ。理想高すぎー」

なんておどけながら、少し胸が苦しかったのは確かなことだった。ルリ姉さんの気遣いもあるし、隠さなければいけない物すら隠せない器量にも問題はあるけど、何よりも私の尊大な強がりのせいで。今は、ルリ姉さんの他愛のないどうでもいい話が私の心を休ませてくれるかもと、思ったり思わなかったり、口角は機嫌取りに努めているみたいだった。

「実はさ。ワタシの家、代々棟梁をやつててね。できれば、それを継いでくれるような人がいいかなって思ってる」

「へえええ、そうだったんですねー。ルリ姉さんからはそんな匂い全然しないから、結構意外。あれ？でもそしたら、国外の学校とへ行つた方が良かったんじゃないですか？あつちには確か、工学科みたいなのがあつたようななかつたような……」

進路希望調査で見たような見てないような。

私は進学先を決めている口なので、そつちらへんの覚えは定かじやない。

「無理無理。代々棟梁なんて言うて聞こえいいけど、ウチはそんなに立派なもんじゃないんだよー。アリスちゃん家みたいな豪華絢爛な感じじゃないんだ全然。ただ、大工を長くやつてるってだけでさ」

「ふーん……」

ルリ姉さんは捨てるように言うけど、その目はどこか勿体無さそうにそれを追っているように見えた。

そんな性格こそ大工に向いているんじゃないかなって思うけど、越えられない壁があるのを私は知っていた。ルリ姉さんはきつと、それを身をもつて知つたんだと思う。

慰めるじゃないけど、私は巧い言葉が見当たらなかつたから、座つたままでテニスボールを地面についた。ポンと弾んで手元に帰つて来た。

そしたら、私が気を遣つたのを、ルリ姉さんは気付いたんだと思う。「ふふふつ」と爽やかに笑つて、目で合図してくれた。「まだ聞く？」ということだと思つたから、「聞きたい」と少し首を傾けて、それから小さく笑つて見せた。

「一時期はね、考えたんだよ。大工も。『女大工かつけえ！』とか自分で自分に言つてたこともあつた。父さん、喜んでくれた。それで、行きたいなら工学科に行つてもいいなんてことも言つてくれた」

「優しいお父さんだね」

国外の学校は授業料とかその他諸々が高いみたいで、アレンみた

いな成金野郎じゃないといけない。その代わり、名門校って呼ばれるだけのハイレベルなことを学べるから、目指す人は少なくともない。だから目指す人もたくさんいる。学費免除の特待生枠を狙って。

生徒会長をやったりしてるルリ姉さんなら、勉強の方は大丈夫だと思っ。

それを知ってながら「行ってもいい」って言うルリパパは、ホントに凄いなと思う。それで棟梁なんて、かなりかっこいい。

「でもね。ワタシにはできなかった」

ルリ姉さんの口から「できない」なんて言葉が出るなんて思わなかったから、びっくり。

おかげで、空気を和ませる台詞を選ぶ方にまで処理が行き届かない。

「どうして？」

「どうして……か。どうしてだろ？ あははは」

ルリ姉さんの笑顔が歪む前に、謝ろうと思った。

私はボールをベンチの溝において、ルリ姉さんの腕に手を伸ばした。繋ぎ止めてないとどこかに行っちゃいそうだったから。純粹に

「あつ……。ごめんなさい……」

「うっん。いーよ。大丈夫」

相手がルリ姉さんだったからこそ、傷つけてしまったのが目に見えた。

わざとじゃなかったから、自分も痛くなった。そして、悔いた。

「どうしてできない」なんて、そんなこと私が一番知っていてもいはずなのに。それなのに人の気持ちも考えないで私は……。

「まあね。一応、ワタシなりに色々やってはみたんだ。父さんには内緒でね。とりあえず体力は必要だろうから、筋トレもすごいやってた。工学系の参考書なんかも何冊も読んで頭に入れた。こっそり父さんの現場に行ったりもしたし。でも、全然ダメだった」

朗々と過去形が話される度、押し掛かる後悔の影は大きくなっていく。

私には謝る以上のことをルリ姉さんにはできないから。だから私は、ただただ涙をこらえるしかない。どうやってやるのかわかんないけど、とにかく楽しいことを 好きな人のことを考えていた。でも、もうすでに終わりは来てたんだ。

「それでね。最後には見つかったちゃったんだ。父さんに。その時父さん、ワタシになんつったと思う？」

口から声を出したら、目から一緒に何か出そうだったから、ゆっくり首を横に振った。

ただ、声を出せたとしても、私には言葉を選べなかつたんじゃないかと思う。

「本当にやりたいことをやれ……だって。なんだよやってるじゃん！……って、その時は思ったんだけど。その言葉の意味に気付いたのは、その日の夜……だったかな。風呂入って寝るって時にね、何となく気付いたんだ」

ルリ姉さんの何を知っているでもないけど、さすがだなんて思った。

今も昔も。

「ワタシのやりたいことは、ずっと続いてきたウチの一門が続いてくれることかなって」

そっか。

私がルリ姉さんを見ていてすごいって思ったり、傍にいて安心してたりするのは、ルリ姉さんが強いからなんだ。強いつて、物理的にじゃなくて……そう。なんていうか、お母さんみたいな強さ。

桜さんにもノアさんにもなくて、アリスお姉ちゃんにはちょっとある。そんな強さ。

私も欲しいよ。

こんな時、素直になれる力。

「だからさ。ワタシ、子供欲しいんだ。四人くらい、わさわさって優しいイケメン細マッチョと結婚してお嫁さんになって。そうやって、ウチが続く……。それが結局、ワタシのしたいことかな」

「ごども……」

今の私に親の気持ちはわからないし、この気持ちのままいたら一生わからないのかもしれない。けれど、ルリ姉さんの見ている幸せのビジョンは、私にもしっかり見えた。

「おっと、すまんすまん。一人で盛り上がっちゃったぜー。あんまり興味ないよね。こういうことは」

「んーん。そんなことない」

弱い私は、それくらいいしか返事できない。

私が感情の波を均すのに必死になっているのに気付いたのか、ルリ姉さんはそれを手伝うみたいに背中を押してくれた。

「そつか。でもさ、リズちゃんとかノアちゃんの気持ちも、きつと本物なんだと思うよ。険しい道かもしれないけど、それを乗り越えた先には何かいいことがある。そう言ったら、同じだしさ。だからリズちゃんのも一つの道だと思うよ」

「ルリ、姉さん……」

気持ちはホンモノ。一つの道。

あのキスも、その後私が恥ずかしいのも、名前を呼べなくなった病も、全部ホンモノ。

それが一つの道だとすれば、この先には何が待ってるのかな？

その道には、二人で歩けるくらいの幅があるのかな？ 歩いた方がいいのかな？ 走った方がいいのかな？

平日、朝起きて、その後どこに行くかなんて、大体みんな一緒に決まってる。

その時私は、誰と一緒に歩きたい？

「なんかそろそろ暗くなってきたし、帰るかー」

「んー」

言われて気付くのは、ネットの影が足元まで伸びてきてアミアミで気持ち悪いつてことと、奥にいた男女ペアがすっかりいなくなってるってこと。

それから、夕日がそれほど赤くないってこと。

「よし」と勢いよく立ち上がって、二人でラケットとボールを元あった場所に戻しに行く。

その途中、公園をちらりと見た。そこには、太陽と一緒に私の気持ちが落ちていた。

別段意味の無い溜息を、ルリ姉さんに聞かれていたみたいで。

「よし。今日はお姉さんとお風呂入るっか。体、洗いつこしよう」「え？ いいの？」

浮足立つ私を、ルリ姉さんは責任で沈める。

「リズちゃんが悲しそうだと思んな悲しくなっちゃうからなー。ここは年長者のワタシが文字通り一肌脱がないとねー。ただし、今日だけ特別だぞー？」

「うん。ありがとうルリ姉さん。カッコイイ彼氏、できるよ。きつと。そのうち。多分。多分ね」

「あれ？ この展開にしては確率低くね？」

道は険しいからこそ、誰かと歩きたくなる。手を取って、壁を乗り越えたくなる。遠回りの道も、きつと楽しくなる。辿り着けた喜びが、倍増する。

そうでしょ？

だって。

「だって、お姉さんがオトコにとられちゃうの、もったいないんだもんー！」

ルリ姉さんと……。 (後書き)

【あとがき】

そういえば、気付いたら100話超えていますね。

おめでとう。大しておめでたくも無いけど、おめでとう。

合計文字数が70万文字近くまで積み重ねられた達成感たるや、大したことない。

それはおいておくとして。

はじめの頃、あんなにおどおどしていたルートが、いまや男性とお付き合いですね。リズもすっかり垢抜けて、アリスは円く、ノアは明るく、ルリ会長は別にならならず、サクラはサクラ。

100話って長いですね。

まだまだ続いていきます。いくと思います。

次は200話くらいの時に同じような事を言いそうな気がします
が、200はいかない。
多分。

『2000』優しいことと、厳しいこと。(前書き)

【まえがき】

サブエピソードではありますが、結構サブじゃない内容になりました。サブじゃない気持ちで読んでみてください。

エンゾ。

『2nd』優じいじと、敵じいじと。

七日目。

“デート”だなんて言葉、後からよく噛み砕いてみれば、自分には合わない味しかなかった。けれど、自分としては勇気を出せたことでかなりの自信が持てたと思う。

ちようど、ブラックコーヒーに挑戦した時に似ているかもしれない。

「ルートさん、上手いですね」

「うん。ありがとう」

生まれてこの方、父以外の男性と二人で出歩いたりしたことが無いものだから、圧倒的に方向感覚が掴めない。肝心の距離感の方は、このキャッチボールという至妙な遊戯によって、近くも遠くも無い心地の良い均衡が保たれていた。

会話も、順番を設けたわけではないけれどタイミングをとるのは容易で、ある程度話しやすかった。何より、相手の加減が上手いのだと思う。

途中で誰かにあげようと思ったブラックも、温めると多少は飲み下せるのだと、思い出して一人で勝手に感心する。

「アレン君は、野球とかやってたの？」

左手にはめたアレンのグローブの中でボールを温めて、それからアレンへと投げ返す。

言葉を探して言い放つのと、とてもよく似ている。

「やってみました。小さい頃に少しだけ」

アレンの投球は緩やかな放物線を描いて、吸い込まれるように僕のグローブへと飛び込んでくる。アレンの言う“少しだけ”が、どれほどの期間を指すものなのか気になったけれど、これ以上僕に合わせてもらうのも忍びない。

僕は「そうなんだ」と相槌を打つだけにして、ボールを返した。

「ルートさんって、確か、バトン部でしたよね？」

「えっ。う、うん。そんなのよく覚えてるね……」

帰宅部同然のあの部活で、しかも、やる気の無さから人前に出る機会などほとんどなかった僕を。

そんな僕を知っていてくれることが嬉しくて、同時に恥ずかしくもあった。

「そんなの勿論じゃないですか……と、言いたいところなんですけど、正しくは順番が違うんです」

「そ、そうなんだ」

そんなことは言わなければ分かるはずもないのに、などと思いつつも、僕は程よく加減されたアレンの投球を受ける。

「新人生歓迎会、覚えてますか？」

「えっと……。うん、覚えてるよ」

アレンの学年がリスと同じだったことを思い出すと、自然とその時の記憶に結びついた。

浮かんだ光景は、わずか数日で詰め込んだ動作とその場しのぎの表情で、見るに堪えないものだったけれど。

でも、アレンの目にはそうは映らなかつたらしい。

「俺、歓迎会でやった部活紹介の時、衝撃を受けました。正直、それまでは、部活って面倒そうだなって思ってた。そうしてどうせまた、つまらない放課後を過ごすんだろうなって、期待もしてなかつたんです」

温厚な性格は勿論のこと、マナーも良いし博識で頼りになるし、人間としての面白さでもいうのだからか、教養のようなもある。ただ、傍から見ていると、簡単な感想しか述べられないけれど、

こうしてアレンの言葉を聞くと、やはり裏付けがあるのだろうかと思えてくる。マナーも知識も教養も、そのすべてが何かを失って手に入れたものなのだろうと思えてしまう。

そんなごくごく自然な事を、ことさら思い浮かべてしまうのは僕だけだろうか。

「バトン部の部活紹介の時でした。俺、バトンのことはさっぱりわからなかったんですけど、何か目を引く人がいるなって、そう思っ
て。もちろん上手だったんだと思います。けど、それ以外にも何か他の人と違うものがあつたんです」

「違うもの……？」

自分の中にある、他人と違う部分。

それは自分では気付けない。

だから知らなくてはいけないのだと、僕は強めにボールを返すのだった。

「はい。一つ一つの動作がとか、表情がとかそういうのじゃなくて……。ストレートに“伝えたいこと”が伝わってくる感じ、ですね」

「伝えたいこと、か……」

「はい、そうなんです。あの時は、とても迷っていた感じがしました。自分はここで踊っていていいのかな……って。別に、目が泳いでたというのでもないですよ。本当に上手でした。けど、どこか迷っている感じが出て……」

アレンから帰って来たボールはやけに弱かった。

けれどその代わりによく温められていて、受け取った後、僕は少し落ち着けた。

「その時は確かに迷ってたかも、色々……。進学とかもあつたし」

「俺はその感じにどうも魅かれちゃって。しかも、よく見てみたら、すごく可愛くて、素敵で。飾らない中に、魅力がたくさんあつて。」

たちまちファンに　好きになつたんです」

「そっか……」

飾らない魅力なんて綺麗な言葉で表してくるけれど、僕としては特に目立とうなどとは思ってもいないし、むしろその逆だっただけなのだ。

その中に、迷いや不安という部分が表現されていて、それを感じ取られていたのならば、僕の舞は、ある意味では優れていたのかもしれない。

何かを言い忘れたと気付いた時にはすでに、ボールが手元から離れていて、少し焦った。

僕の手が遊んでいたのを見て、アレンは小さく笑った。

「その後でした。リズと会ったのは」

緩やかに放たれたボールは、また、僕の手の中へと迷いなく飛び込んでくる。

手を出した場所とほぼ変わらない所へと飛んでくるそれは、僕に何らかのプレッシャーをかけていたのだと思う。

僕は手元に球体を含むと、往々にして温めるのだった。

自然、沸々と湧き上がるのは、嫉妬とも似て非なる複雑な感情。

さらに、それに埋もれながらも見え隠れする、黒い疑心もある。

僕が投げる球はいつも通りゆったり遅かったけれど、アレンの体軸中心をめぐけて、いつになく素直だった。

「アレン君、リズのこと気にかけてたんだよね……」

「あの……怒らないで聞いて欲しいんですけど、実は、最初は間違っていたんです。人違い、が正しいですかね」

「僕とリズを、ってこと？」

「えっと、はい」

確かに、昔から似ているとは言われるけれど、容姿で間違われた覚えはない。瞬間的な差別で言えば背丈だってそうだし、何より、髪の毛の長さを揃えたことがないのだから。

ただ、それで本当に齟齬が発生してしまったのなら、僕は形式上でも謝る必要があるだろうと思う。加味しつつ、ボールを待つ。

「今言ってしまうと言いつに聞こえるかもしれませんが……」。

部活紹介の後つて放課になるじゃないですか。その時、俺、すぐにルートさんを探しに行っただけです。遠目に見ただけでしたし、名前も言っただけだったので、衣装を着替えてしまっただけ……って焦ってました。せめて名前くらいわかれば、なんて期待を持ちながら」

アレンの手で温められたボールは、きつとまた温かいのだと思う。もしかすれば今度は、湿気も演出されるかもしれない。それこそ、グローブをはめた方の手のように。

「そして、漸く見つけたんです。赤と金を基調にした中世騎士風の衣装がかなり印象深く、それを頼りに走っていたら、意外とすぐ見つかりました」

アレンが校内を駆け回る光景が、俄かに思い浮かんだ。

僕のためにビーチを奔走してくれた数日前の記憶があったから、イメージはスムーズに出てきて、それもどこか劇風に美化されていたけれど。

ただ、小さな違和感があった。

「そこが昇降口です」

確か僕はあの後、すぐに教室に帰って着替えて、それから部室に寄った。

以前に、僕はその間に昇降口を介していないのだ。

だからつまり、アレンが見つけたと言うのは僕以外の人間だということになる。話の流れから察するに、それはリスなのだろうけれど、そうなるかどうかにも辻褄が合わない。

「目印にしてたんです。羽付き帽子」

ボールが綺麗な放物線を描いて飛んできた。

僕はそれをキャッチして、なるほど と閃いた。

「そういえばあの後、すぐ教室にリスが来たっけ……」

そして、僕の衣装を褒めたり茶化したりした。それで確か、僕よりも絶対似合うからという話だったかなんだったか、リスが羽付き帽子を被ってどこかへ行ってしまったのだった。

動向を辿るには遅くて、諦めて部室に貸し出し申請をしに行った

わけだ。

「やっぱりそうでしたよね。その後、暫くの間、リズのことをルトさんだと思っていました。お姉さんがいるって聞いたときはまさかと思っただんですが、話を聞きたびに別人のようで……」

「リズは年上の人のことをみんな“お姉さん”って呼ぶからね」
サクラとノアにはつけないあたり、年以外の部分も見ているみたいだけれど。

「本当にそうみたいで。後から照らし合わせたら、アリスさんのこと喋ってたって気付きました。でも、その後の夏、文化祭でお姉さんに会えるって聞いて、前傾でした。自分の目で確かめられる、って」

ここまでの話を聞くと、何となくその積年の想いの片鱗は感じられた。

そこから、あの告白までの経路と今の結果は、アレンにとってどんな経験になっているだろう。ここまで大人なアレンでも、成長する余地があるのだろうか。

知りたい そんな気持ちでもって、ボールを投げた。

ふわりと浮いたボールは、うまくアレンのグローブへと落ちた。

「すぐわかりました。俺が探してた人は、『アリスお姉ちゃん』と呼ばれた人ではなくて、『ルー』と呼ばれた人の方だって。何となく、勘なんですけど」

「勘、か……」

そうして帰って来たボールは、まだ温かった。

それってすごいなと、心のどこかで誰かが独り言ちるようだった。まるで他人事のように言うから、少し可笑しかった。自分のことなのに。

自覚すると、自然、違和感が浮き彫りになった。

ボールを投げ返す時の慣性力に肖って、僕は尋ねる。

「アレン君、リズのことは好きなの？」

とんでもないことを聞いているなと気付いたのは、アレンの手元にボールが渡ってからのことだった。だから、何かの言い訳をすることもできなかった。

ただ、アレンの返事を待つばかりになる。
自然の音を堪能できる程の間は、そこにはなかったと思う。

「好きですよ」

これまたとんでもないことを聞いてしまったなと気付いたのは、僕の手元に発言権が戻って来てからだだった。

ただ、何を喋ればいいのか、難題だった。

だから僕は、何も言わずにボールを投げて、また待つしかない。
「勿論、友達としてですよ」

優しい球が返って来て、ホッとした。

ボールが少し冷たくなっていたから、今度は僕が温める番だと自負があった。

「確かに、初めの頃は本気でルートさんだと思っていましたから、恋人として好きでした。ただ、途中で人違いだと気付いて。けど、すぐに身を引いたらリズだって困惑するだろうから、ゆっくり距離を置こうと思ったんです。元々、嫌がられてはいるみたいだったので、周りからの目は気にしなくていいですしね」

「それって、アレン君は辛くないの？」

「心配してくれて嬉しいです。でも、俺は大丈夫です。慣れてますんで。それに、結果としてルートさんところして仮恋人みたいな感じになれたので、万事解決です」

「な、なら良いんだけど……」

「リズのことなら心配しないでください。僕が守りますから」

僕がそう叫ぶのとは違う、何か圧倒的な根拠がある気がして、不思議でならなかった。

「勿論、義妹いもむとこにする覚悟もできてます……なんて。あははははっ」
「も、もうっ。アレン君っ」

甲高い言葉が素早く飛ぶように、少し強めに投げた。

でも、そういうことになるよなあと、心中では惚けていたのだけ
れど。

「はははっ。すみません、つい。でも、守るのは本当です。ルート
さんのことも絶対守ります。それくらいはさせてください」

捕球した時、パンという小気味のいい音がしたのに合わせて、僕
は瞬きした。

そして映し出されたのは紛う事なき安心と、それから頼れる笑顔
だった。乾ききった敗北感を感じてしまったのは、僕が口に出すこ
とではないと思う。

潤いが欲しくて、僕は濁した茶を浴びる。

「ア、アレン君は兄弟とかいるの？」

濡れた言葉は淡い回転を帯びて、やっと、相手のグローブに収ま
るところを知る。

それでも淀まない微笑みは、責任をも一蹴した。

「いますよ」

「あ。そうなんだ。弟とか？」

今まで接してきた長男の人は、比較的穏やかで真面目だったから、
何となくそう思っただけだった。常に積極的だったりする次男ポジ
シヨンの比較してみたり。

「姉です」

「へえ。お姉さんがいるんだ。学生さん？」

アレンを弟に持つ女性というシルエットを想像すると、どうして
だろう、胸騒ぎがする。胸よりも少し下の、体の中心の辺りがモヤ
モヤと生暖かくなってくる。不思議と、イメージも頑なで確固たる
ものがある。

そして、それはきつとりゾートを包む穏やかな気候のせいではない。

「はい。学生です」

淡白な答えが返ってくる。

多少慣れた僕は、それを心地良い音が鳴るように勢いをつけてキヤッチしてみる。

手の平がピリピリと痛んだのを、僕は瘦せ我慢した。

「名前は……、名前はなんて言うの？」

捕る方の手と投げる方の手が別々で良かったなと、投げながら思った。

ピリピリと痛んだ方の手は、まだ全面が痛くて、その上熱かった。それを我慢して顔色を変えずにいることは、出来立てのブラックコーヒーを飲むよりも遥かに難しかったと思う。

「レーア……いえ、レイルって言います」

『2nd』優しいことと、厳しいこと。(後書き)

【あとがき】

こんな道端で、また新しい事件でしたね。
色々整理&推理しつつ、次回もお楽しみに。

ノアさんと……。 (前書き)

【まえがき】

気付くとみんな結構恋してる。

そんな秋の日、シルバーウィーク。

ユウキ。

ノアさんと……。

八日目。

今日は朝から雨だった。パーツとひと泳ぎしようかと思ってたから、結構シヨックだった。

ルリ姉さんの隣に寝てたところを雨音に起こされた私は、テキトーにトーストを食べて、テキトーにお風呂に入って、テキトーに部屋に戻った。

そしたらなんと、その間に誰とも合わなかった。

だから、部屋に戻って来てルリ姉さんを叩き起こしたわけだったんだけど。

そう言えばルリ姉さんと遊ぶこともないなと思って、すぐ寝かすつけた。

リゾートに来てただ寝るだけなんて……みたいなことを、一週間前の自分だったらぬかしてたかもしれないけど、今は胸を張って言える。

リゾートは寝てこそなんぼっ！

実際に口には出さないけど、いいことを学べたなと思わなくもない。

そうやって一日が終わったとか、恥ずかしくて人には言えなそうだけだね。旅行に連れてってくれた人にも悪いし。

そういうわけ（お礼とか言うわけじゃない）で桜さんを探しに、

一人、ダイニングにやってきたわけだけど。どうゆうわけかノアさんが単独でいて、ものすごく気まずくなっ

た。目が合って挨拶したから立ち去るに立ち去れないし、でももうすでに居ちゃってるし、居ても結局何もできないから、非常に困った。ダイニングのソファに私が、テーブルにノアさんが……という絶妙な配置で、五分くらいたった今も会話はまだ無い。ノアさんの性格だから話しかけてはくれないだろうし、今もごそごそ何か作業をしているみたいだったので、私からも話しかけにくくなっている。

それ以前に、数日前のアレ以来、接し方がわからなくなったのが大きな要因だと思うんだけどね。私も、ノアさんだつて知らないで結構がつつりいつたし、さすがに鮮烈な記憶になってると思うんだよね。お互いに。

でもどうするんだ、コレ。

このままいったら、誰か来るまで一日中沈黙なんじゃないか。いや、待てよ。

途中で誰か来たら、確実に私はその人と話しちゃうよね。

そしたら、ノアさんが取り残されて、私との距離感がもつと複雑に……。別に仲悪いわけじゃないのに、話すことも無いから何となく会話しないみたいなの、そういう関係だと思われちゃうじゃないか。それは、嫌だ。

こんなかわいい娘、探してもなかなかいないし、せつかくこうやって親しくなれたんだから、私ももつと積極的にいってもいいのかもしれないな。

誰も頼れないんだつたら、やっぱり自分しかないか。

「あのー……」

思い切ったはいいけど、ルリ姉さんと同じで話題が無い。おまけに返事も無い。

急に、揉んじやったことについて語りだすのもアレだろうから、ちよつと考える。ノアさんが話しやすそうな話題を。

そんなのは二つに一つしかない。

「アリスお姉ちゃん、どこ行っちゃったんだろー」

すぐに返事はなかったけど、作業もあるだろうからと少し待つと小さな声が聞こえてくる。

私の座っているソファとノアさんが何かしてるテーブルだと、少し距離があるから、耳の神経を研ぎ澄まさないと聞き逃しそう。

「買い物……。サクラと……」
うんうん。

やっぱり、アリスお姉ちゃんの話だと食いついてくれた。

この盲目さ加減、凄いと思う。とても素晴らしい。

でも、いつにも増して声に張りが無いのはアレか、私の勢いに競り負けてるのか。それは冗談だけでも、なんか嫌われてるみたいな感じがして、俄かにちよつと悲しくなったのは本当。

だから、攻めるじゃないけど、単純に気になって。

「桜さんとかー。珍しい組み合わせー。何買いに行ったんだろー」

馬の合わなそうな二人が小競り合いをしながらも、結構ちゃんと買い物できてるイメージが浮かんで面白い。しかも、帰り道とかで荷物半分ことかしそう。そっぽ向きながら、実は相性は悪くなかったりとか。

なんだ意外と仲良さげ……。なんて言ったら、アリスお姉ちゃんが笑顔で怒りそう。それにノアさんも……。あー、なるほど。それでちよつと機嫌が悪いとかかな。

わかるわかる。その気持ちは何となくわかる。私も昔、ル……。じやなくて。

どうしてアリスお姉ちゃんはノアさんを置いていたりなんかしたんだろ？ 桜さんがいたところで、別にノアさん関係ないと思うんだけど。こないだもダブルデートみたいなことしたしさ。

「くすり……」

急に笑い出したのかと思ったけど、イントネーションが違った。でも、なんか笑われてる感じがしたから、とりあえず首を傾けて聞く。

「えっと？」

「お薬、買いに行ったの……」

ああ。その“くすり”か。

でも、今度こそなんで？

「ノア、朝から、調子悪くて……。それで……」

「え、嘘」

必要も不必要も、嘘なんてつけなそうなのに、びっくりしてつい乗り出してしまった。

ソファの上で膝立ちは不自然だなと思ったから、勢いでノアさんの隣まで行った。

「騒いじゃってごめん。どこか痛い？ 安静にしてなくて大丈夫？」

「ん。だいじよぶ。ちょっと頭痛いだけ……」

ノアさんも誰かに似て顔に出ないから、こっちから色々言っただけ。ため込んでやって最後、大変になりそう。

頭痛いって言うてくれただけ、今は良い方かも。

「じゃあ寝てないと！」

「いいの……。何かしてる方が、落ち着くから……」

「ええ……」

いやいや。落ち着くって。

テールいっぱいに工具を広げて、やたらに頭を使いそうな作業をしているみたいなんだけど。ノアさん、なんかの職人なんだろうか。

まあ、本人が落ち着くって言うならいっか。

「な、ならいいんだけど……」

そう言えば、ノアさんを間近に見たの、初めてな気がする。

近くに来て思うのは、やっぱり可愛いつてのが一番かな。あと、ちょっと動きが変。

なんか歯車みたいな小さいパーツをいじくってるみたいだけど、私なんてそれを見るだけで頭痛がするのに。すごいというか、変わってる。こんなに可愛いのに。

……って、不謹慎か。

でも、このまま見てるのは性に合わない。

ウザがられるかもしれないけど、何かしてあげたくなくなっちゃう。

「なんか手伝う？」

「ん。だいじよぶ……」

丁重にお断りされた。

まあどうせ、ノアさんの手助けになるようなことはできないんだけどさ。

見てるだけなんて、もどかしいじゃんか。具合悪くなかったら、ちよっかい出したりできたんだけどな。

まあでも、看てるってのも大切なことかもしれないよね。

「……りがと……」

「んっ？」

ちよっと待ってもう一回、なんてことは言えないけども。

だからこそ沁みるのかもしれないという言葉もあったりするわけなんだ。

私の耳には小さすぎる、ノアさんの声は。

ただ、やっぱり無言で見ているだけってのは、どうにもうずうずしちゃうって。

「この間はごめんね。ノアさん」

沈黙の十数秒後には、すっかり砕け切った口語を並べ立てる自分がいた。

しかも、話題はあの事件のこと。

違うの。違うんだよ。別に、落ち着きないわけじゃないんだよ。気になったら気になったままで置いとけないってだけなんだから。私が隣にいても何ら気にせずには作業するノアさんが言うには。

「うん。いいよ。痛く、なかったから……」

痛い痛くないの話じゃない、って言うのは私が言うことじゃないんだけども。全面的に許してくれるみたいなので良かった。

でも、そう言われると、せっかくの話題が途切れちゃうじゃんか。いや、まあ、ノアさんと胸について語るのもどうかと思うんだ。

互いの傷を舐め合うと言うか塩を塗りあうと言うか、とにかく、そんなことをしても誰も幸せにはならないんだよね。

「あ……うん！ そっか。でも、ごめんね！ ホントに！」

「だいじょぶ」

ほらー。また作業始めちゃったよ、もう。

何でもいいから話題、話題！

「そ、そう言えば、桜さんも買い物に行ってるみたいだけど、大丈夫かな。アリスお姉ちゃんの邪魔とかしてそう」

濡れ衣だったらごめん桜さん。後で笑いに変わってください。

とかなんとか汚いことを考えてると、ノアさんの美声に心打たれてちよつと痛い。

「邪魔は、しない、と思う……。休み伸ばしたの、すごい気にしてたから……」

「えっ？ そうなの？」

あれ？ あの人そんな優しい人だっけ。

ちよつかい出してるイメージしかないから、なんか意外。

そうなつてくると、とうとう私のイメージが悪くなつてくるわけだ。テキトーな偏見を持ちだすし、年上の人にタメ口だし、具合悪いつつてるのに構うし。

「サクラ、時々変、だけど、いつも優しいの」

「そうなんだ」

それは逆な気がするけども。

「朝起きたら、調子悪くて、体重くて動けなかったの。そしたらサクラ、すぐに部屋に来てくれて……。手、握ったり、頭撫でたり、色々してくれた……。なんか、お父さんみたいだった……」

「そこはお母さんじゃないんだ」

色々の中に何が含まれるのか気になるけども、ツッコむのが先になる。

でも、ノアさんのその様子だと、シルバーウィークを延長して被害が出たことについて責任を感じるのはホントっぽい。どうせ無計画でやったんだろうから、こういうことになるって想像してすらいなかったんだろうね。桜さん。まあ、なんかアホっぽいもんね。

でも結局、皆、そのアホさ加減に付き合ってるわけなんだよね。

「でも、桜さんってケツコー滅茶苦茶だよ。あ、悪い意味じゃないよ」

「それは……そう、かも」

お。ノアさんの中でも、合点の行くことがあったみたい。

それはもしかして、こないだの胸揉み事件とは別の何かなんじゃないか。斜め上の虚空を見つめて閃くあたり、やたら匂う。いや、別に掘り下げはしないけども。

病人の看病をしている時って、何となく愚痴りたい衝動に駆られる。

「シルバーウィーク伸びたとか、わりとまだ半信半疑なんだよねー。いざ帰ってみたら普通に五日間サボってたとか、全然あり得そう。」

そして桜さんは笑ってそう「

付き合い長いわけじゃないけど、イメージが容易に湧くから、なおさら怖い。別に信頼してないわけじゃないけど、そういう人だと思っただけ信賴してるから、かえって恐怖が尾を引く感じかな。

程度の違いはあっても、その根底は皆同じなんじゃないか。

同じであってほしい。

いや、お願いします。同じであってください。

じゃないと、なんか、ここから一生帰れなさそうな気がするのです。

「伸びたか、わからない……けど」
「けど？」

何か話したそうに見えたから、わざとらしく首を傾げてみたけども。ノアさんの前でこういう仕草をするのって、わかっているも結構辛いな。一応、年下のはずなんだけどな。おかしいな。

ぼそぼそと呟くノアさんの声は、井戸の水みたいに綺麗で冷たくてどこか丸っこい。それだけで、やましいことだらけの心の中が過敏に反応するみたいになった。

「サイクル、違ったから、時間列が歪んでる……多分」

「ゆがつ……。サイクル？ は、ははあ！ なるほどねえ……。！」
なるほどわからない状態だった。というよりか、脳が理解を諦めてくれていた。

そんな世渡り上手な脳に対して、ノアさんは追い打ちを仕掛けるように、しとしと呟く。

「一日目と六日目、七日目と三日目も同じだったの。太陽の位置。あと、お店の人。外歩いてる人と、その時間帯も……」

「それってつまり？」

しれっと解答を求めたら、大人しく「時間が戻ってる？」と首を傾げ返された。

そう言えば最初にそう言っていたのと、凄く恥ずかしかった。

面目を保とうと、まとめ役を勝手出してみる。自分の思考の整理をする意味も兼ねて。

「シルバーウィークが伸びたんじゃなくて、似たような日を何回も体験してるみたいな感じ？」

「そう……だと、思う。わかんないけど、伸びてはない……」
今更だけでも、相当やばい会話をしている気がする。

リゾートに行って開放的な気分になるって言うのは何となく合点がいってはいたけど、ここまでくると、ちょっと自慢したくもなってくる。自分に不都合にならなければだいたい何でも許せちゃう、この心の広さを。

そうになると、議題に挙げるべきなのは「どうするこうする」「じゃなくて、「信じる信じない」になるわけだ。……とは言っても、ここまでくると、それすらも話のネタくらいにしかならないんじゃないのかなにかって思うけど。

「サクラ、“魔法”を使えるって言うてるけど、違うような気がする……。魔法は魔法かもしれないけど、もっと別の……」

「超能力とか？」

つられてであったとしても、恥ずかしげもなくそんなことを言える自分が、もしかっこよく見えなくもない。

「んー……。もっと、概念みたいないな……」

予想以上に難しい返しだと思って、私は軽く返答を放棄したくなつた。

でも、また沈黙が訪れるのは嫌だと思って、急いで誰かの言葉を借りた。

「そしたら、運命だね！ もう、運命」

事の善し悪しはノアさんしか知らないだろうから、ちょうど中間くらいのトーンの言葉を抽出した。言うてから、中々な答えだと気付いた。

ノアさんも「近い、かも」と結構な頷きぶりだった。次の瞬間には「予定調和が……」とか閃きだしたので、これ以上は無理だとして別の答えを捻り出そうと努めた。

運命に近い言葉ならちよっと自信があったから、音吐朗々、ノアさんのぼやきの上に乗った。

「恋だね、恋」

なんか知らないけど、さっき言ってた超能力よりは断然恥ずかしくなつた。

加えて、余程的外れな事を言ってたみたいで、ノアさんが黙り込んでしまった。

“恋”なんて興味を形にしたような言葉、別にふざけて言ってるわけじゃない。

それだけに、無反応というのが結構悔しかった。

やり返す、という大義名分を背負って、聞いてしまえ。

「ノアさん」

「……なに？」

「ノアさんって、アリスお姉ちゃんと付き合ってるの？」

「あつ……え……」

「私も」

さすがに不意打ちは非道ヒドいかなって思って、その場しのぎの緩衝材なんかを準備してみた。そしたら、意外にもそれが強固で。おまけに、痛みの塊のように真っ黒だった。

「私も、アリスお姉ちゃんのことずっと好きだったから」

「そ、そう、なん、だ……」

上手く機能したようで良かったと、内心ほっとした。

そしたら、ノアさんが話してくれるまで、私はあなたに負けたのだと、遠回しに言うだけでいい。勝ち負けじゃないなんて慰めてくれたらいいな、なんて期待をしつつね。

「お風呂一緒に入った時、それを伝えたら、盛大にフラれちゃった。彼女がいるから無理だって」

「う、ごめんなさい……」

心のどこかでは言うと思ってたけれど、言下に「でも……」と続けたときのその瞳が意外にも煌々と照り輝くもんだから。

あ、なるほどな……って、私は炯眼に射られたように怯んで、後に続く言葉を待つしかなくなるわけ。

「ノアも、好きだから……。ノアは、もっと好きだから……」

私は具に頷いて、飾らずに「うん」とだけ言った。

「アリスの気持ち、本物かは知らない……。けど、ノアの本物の気持ちは、ちゃんと伝わってるから……。それで、いい……」

同棲からキスマまでしておいて、それはどうかと思ってしまうた。

確かに、アリスお姉ちゃんは顔に出ないから、分かりにくいこともあるかもしれない。それ以前に、その人の心はその人にしかわからないとか、そういうこともあるかもしれない。

それでも、アリスお姉ちゃんとノアさんを繋げるものが、人に言うのも恥ずかしいような“恋”ならば、それ自体は本物なんじゃないかって思うんだ。

だから。

「伝わってるよ！ 絶対！ 嫌いな人とキスなんて、絶対しない。嫌いじゃない人とも、絶対しない。好きだから、したいって思うんだよ。だから、本物だよ！ アリスお姉ちゃんの気持ち」

「う、うん……。ありがと、う……。そうだと、いいと思う……」

「ううん。絶対そうだから。あとで直接聞いてみて！ 答えを濁したら、もっと詰めて！ アリスお姉ちゃん、意外と押しに弱いから」

二人の関係がどうこうとかの下心ももちろんあるけど、なんか反射的本能的にそんなことを口走っていた。

「え、えと……。ノアは……」

「あつ、ごめん！ 私、また……」

多分、アリスお姉ちゃんにフラれたことを、心のどこかでまだ気にしてるんだと思う。だから、このまま二人が結ばれちゃえば諦めがつくのに……。なんて、都合の良い解釈してるのかもわからない。でも、なんでだろう。

「う、ん……。だいじょぶ……」

このままが続けばいいという小さな願いを目前に、私はどうしてこんなに焦っているんだろう。

そんなもの、答えは簡単だ。

「ホントにごめんね……。もう、行くね……」

“恋”の意味すら分からないほど、私がまだ子供だから。これからも、本物の意味を理解できないような、どうしようもなく出来の悪い子供だから。

それだけ。

「い、いいよつ。話してるの、好き……だから」

それだけ　なんて嘘を、否が応でも“ホント”で通してしまうからに決まっている。

私にとつての本物、私にとつてのキス。それは確かに、記憶の中にあつて。それが経験と混ざり合つて気持ちになつて。それが今度は“恋”に似てきて。

それこそ、夕焼けみたく赤くなつた自分を水面に映してみれば、すぐわかる。

伝わるし、本物なんだつて。

だから、ホントだつたらこの伸びすぎたシルバーウィークのために宿題を用意しなければならぬ。休み明けのテストで酷い点を取らないように。追試で、余裕が削り取られないように。

せめて、こういう雨の日くらい、彼女を目で追わないようにしないといけない。

「テラスに誰か……？　あつ……、ル」

「そそ、そういえばノアさん！　さっきから何作つてたの？」

「えつ……と。これ、だけど……？」

「円盤？　円盤と……棒？」

「時計……」

「えつ、すじ」

影が差す時刻は、やっぱり誰の思うものでもなくて、ただ淡々と細く伸びて、さらに黒かつた。

アリスお姉ちゃんたちが戻つて来るまでの時間には、遅いも早いも分別すらないんだと思つた。

ノアさんと……。 (後書き)

【あとがき】

旅行に行くとも具合悪くなりますよね。

基本的に家から出たくありません。

海外なんて行った日には発狂必至です。

次回は、皆さんお気づきの通り『ルート編』です。

【3rd】雨降ることと、波打つこと。（前書き）

【まえがき】

ルートデザート三日目です。

初々し。茶々入れたくなりますね。

どっぞ見守っていただいて。

【3rd】雨降ることと、波打つこと。

八日目。

海を臨むテラスには、テラス全体を覆う巨大なサンシエードが設置されていて、それが雨除けの役割も兼ねていた。とは言え吹き抜けだから、このくらいの湿っぽい降り方でなければ、とても寛げたものではない。

幸い、今日の雨はしとしとと疲れていて、サンシエード下に響く音も小さかった。目を遊ばせれば見える海も黒々と蠢いて、自由な時間にも飽きが来ない。

でも、そのおかげで、僕の自信の無いか細い声もすんなり通る。

「雨、だね……」

「そうですね……」

木製テーブルの向かい側に座るアレンは、無機質に口を動かす。嬉しくも悲しくもない、あるいはその中間。そんな表情だった。

急いで海辺に赴いて自分の表情を写したら、もしかすれば僕も同じ表情だったかもしれない。

「賑やかなのは好きだけど、静かなのもたまにはいいかな」

「はい。そうですね。一週間、ずっと楽しかったですから。楽しい時間って、その時気付かなくても、体は結構疲れてたりするんですよ」

「うん。わかる」

今朝は起きたら隣にサクラがおらず、探しに居間に出てみたらアレンがいた。誰も起きてこないから、何はともなく朝食を一緒に作

って食べ、今に至る。

常夏を冷たく彩る天気も、休憩を恵んでくれているのだと考えれば、急に愛おしくなる。

「アレン君、料理とかも習ってたの？」

「はい、小さい頃習ってました。けど、さっきのフォーは旅行先で食べたのが美味しかったので、自分で色々試してできた我流だったりします」

「そ、それもすごい……」

同時に感じたのは、到底語れるはずもない“アレンらしさ”だった。素直な頑張り屋で謙虚だという姿勢が何となくそう見えてしまう自分の浅はかさが、どうしようもなく恥ずかしい。

だから僕は、知ろうと焦った。

「習ってたことって、他にもあるの？」

「習い事、ですか。うーん……。かなりやりましたからね……。全部は覚えてませんが……」

「じゃ、じゃあ、一番好きなのは？」

「一番好き、ですか？ 意外かもしれませんが、今やってる部活が一番好きですね。普段から話さない仲間と協力プレーしたり、友達が練習で敵になったら性格から分析してみたり。もちろん、基礎練とかもですけど。やってることはそんなに大変じゃないんです。

でも、すごく濃密だと思います。というか習い事……じゃないですね。すみません」

「あ、ううん。いいよ。でも、確かに意外かも」

「ですよね」と頷くアレンの表情は非常に穏やかで、所謂羨望の色というものはすっかり剥げ落ちているように見えた。

その表情は、別段、意外でもなんでもなかった。

「ルートさんは、何か習い事とかやってますか？」

「今は全然。小さい頃は、色々やっては辞めを繰り返してたかな。長く続いたのは、ピアノとサッカー。長いって言っても、たった三カ月だけ」

「ピアノとサッカーですか！？ 俺のより全然意外度高いじゃないですか！」

両方とも、人に聞かれなければ話題にすることはないし、素振りも見せなければ経験の片鱗も無いからだろう。特に忘れたわけではないけれど、僕にとっては、その思い出に絡みつく黒ずんだ光景の方がゆうに大きい。

「それじゃあ、ルートさん。もしかして、ピアノ弾けるんですか？」「本当にちよつとだよ。簡単な楽譜をゆっくり読んで、練習すればって感じだから。ピアノだったら、アリスの方が全然上手いよ」

「へえ。でも、素敵です。俺も一度習っていたことがあるんですけど、難しくて……。バイオリンは感覚でそこそこ頑張れたんですけど……。俺は見てみたいですよ。ルートさんがピアノ弾くところ」
メヌエットくらいならそこそこ仕上がるだろうけど、その“そこそこ”ではアレンの“そこそこ”に遠く及ばないだろうと思う。それに、感動させられるような努力の痕もそこには映らないはずだろう。

何にせよ、見せられるような程のものではない。

「む、無理無理っ。無理だよ……！」

「はははっ。そう言うと思ってました」

「えっ。あっ。ごめん……」

「いえいえ。いいですよ。でも、デュエットしてみたいです。機会があれば」

「あははは……。お手柔らかに……」

アレンがサッカーについて触れないのは、リズから何か聞いているからだろうか。

何から何までこちらに合わせてもらっている身上、俄かに断れなくなる。

でも、男の子と付き合うということは 女性として振る舞うということとは、こういうことなのかもしれないと、思わなくもなかった。

「ピアノはどうして長く続けられたんですか？」

「あ、うん。リズムも一緒に習ってたから、それでかな」

「なるほど。なんとなくわかります。誰かと一緒にやるのって、楽しいですからね。しかも、リズムですしね。ピアノの先生も巻き込んで楽しそうです」

次の言葉は、衝動的に浮かんだ。

それは彼女としての言葉だからなのか、それとも誰かの感情を傍受したからなのか、判然としなかった。

それでも、聞かなければと思ったから。

「アレン君も、誰かと一緒にやってた？」

不思議と確信があった。

けれど僕は、どうしてか、その確信が誤解であると願っていた。

いや、ただの空想で終わらなければならぬような気がしていた。

せめて、話すアレンの表情が、期待かあるいは失望か 準ずる

何かに彩られていればよかったのだけれど。生憎、僕には汲み取る

勇気も無くて。

頼りの声色は淡々と白んで。

「はい。姉と」

アレンが何を知っているのかというよりかは、自分がどこまで知っているのかという未知は黒く、声色とちょうどコントラストになる。

「お姉さん……？」

静寂を繋ぐ言葉は淡く響いて、それこそ調律の為なされていないピアノの音に似ていた気がした。

聞き分けの無い僕の音色がそれだとするならば、アレンの音色は雨音だろうか。

「一緒にと言っても、特定のやつだけですけどね。それに、一緒にやってもあまり構ってくれませんでした。まあ、姉は俺よりもたくさん習い事やっていて、いつも忙しそうにしていたんで仕方ないんですけど」

「そっか……」

「はい。でも、一緒にやるの、好きでしたよ」

湿っぽい過去形が募って、思考が風化しそうになる。

でもそれは、もしかすればアレンにとっても同じことで、腐らないようにこうして話をしてくれているのかもしれない。

そんな拙い思考に至る僕こそが、それを乾かせるとするならば、できることは二つに一つ。

「レーアさん……だったっけ？」

「はい。そうです」

あくまで未知を装って僕は尋ねる。

実際に未知の部分があるからこそ、信憑性には自信があった。

「昨日、違った名前に聞こえたんだけど、僕の気のせいかな……。なんだか聞いたことがあるような気がして……」

「えっ？ 本当ですか？ 確かに、レイルって言いましたけど……」
レイル。

昨日聞いた時と同じ不審感、それから、雨が降っていて暗いせいで時間感覚が余計になくなる疎外感、波の音と混ざり合う雨音の孤立感。それらが、アレンの言葉と一緒にくたになって、僕の中にどつと押し寄せてきた。湿潤であるとか流量がどうであるとか、そういう一切の匙勘定を無視したような勢いだった。

でもその中に、何か柵しがらみが解けたような、葛藤が解決したかのような、そういう心地の良い感情も確かにあった。

今回は、ねじれの位置にあった点と点が、一つの線で繋がったような感覚というのが適しているかもしれない。

だから、僕は今ここで、アレンに同調できる。

けれど、僕はそうしない。

「レイル……。んー。聞き間違いだったかなー」

僕の中にある確信が証明された今、アレンの中にある確信と照合することほど危険なことはないと思う。

それはまさに、夢が現実になる瞬間で、現実と夢がごちゃ混ぜになる時なのだから。

結果そうであることがわかってしまった以上、逃げることはできないだろうけど、少なくとも延期はできるはずだ。

時間すらも延期できてしまう、夢と現実の狭間のようなこの場所
でなら。

「そうですか……。あつ、いや、突拍子もない話なんですけど、実は俺の姉、最近どこかに消えてしまって。今ちよつと探してると言うか。まあ、昔から結構家出することはあったんですけど、今回はなんか違うと言うか……」

「何か違う？」

その違いは、形がわからないほど小さいものなのだろうけど、シルエットは大きいはずだ。

「そうなんです。前いなくなった時、部屋から無くなったのは財布くらいだったんです。大きい意味で言ったら、生活感ですかね。生活感が無くなりました。でも、今回は名前が消えたんです。大きい意味でなら“存在感”が、と言いますか……。鞆から服、靴まで、戸棚にあったノートも、いつも使ってたコーヒークップも全部です」

「お、お引越……？」

家出とするには、確かに存在感の欠如が甚だしい。家族の誰にも言わず嫁いでしまうことも考えにくいし。

消えたものがそれだけならば、僕の推理も少しあてになりそうだったのだけれど。

「俺も引越しかないと思いました。無断で出て行くなんで、姉なら極々倅々とやりそうですから。それで、父に聞いてみたんです。そしたらビックリ、なんと『記憶』が無くなってました」

「記憶が……？」

「はい。姉など最初からいないって平気で言うので、どんだけ怒らせたんだよって笑えましたね。でも、姉の記憶が無くなったのは父からだけではなくて、母は勿論、姉の付き人もクラスメイトも、誰も覚えてないみたいだったんです。むしろ覚えてる俺の方がおかしいみたいな空気になってですね。何となくただ事ではないなと思っ
たところ、ルートさんが合宿に誘ってくれて、今に至るわけです」

そんな状況下でラブレターを書いたり告白できたりするアレンの器量には正直脱帽だけれど、今は、兜の緒も締めておきたいところ。それこそ僕の記憶を覗かれてしまわないよう。

「確かに。それはただ事じゃないね」

「はい。そうなんです。このままだと、俺まで忘れてしまいそうな気がして……」

「アレン君……」

僕も覚えている。

そう言えば、アレンは喜んでくれるだろう。でも、言えないのだ。現時点では、アレンの冷静さにすらも何らかの非現実的な力が働いている可能性が否めないのだから。

かと言って、このまま何もせず放っておくことも、僕にできるはずなどなくて。

僕はアレンの彼女、なのだから。

「そ、そうだ。サクラなら何か知ってるかも……!!」

「サクラさん、ですか？　そうですね……。サクラさんも色々すごいですからね」

「あははは……。じゃ、後で聞いてみよっか。まだ寝てたから」

こういう時、サクラならどこかで話を盗聴していて、一人ニンマリしていてもおかしくはない。重要な話ほど見られている感覚は強くて、途中から割り込んで来て一気に話の核心をついてしまうような展開に、身構えてしまう自分がいる。

それはもはや、期待の領域かもしれない。

それが無いということはつまり、これ以上の詮索は控えるべきだ

と言つ思し召しとも言えるだろう。

この問題の審議を問うのは、少なくとも、アレンやリズのいない場所であればならないとも思うのだ。

「そういえば、一つ気になったんですけど、聞いてもいいですか？ ちよつとプライベートな事かもしれませんが」

「答えられる範囲でなら、いいよ」

一体何を聞かれるのだろうと、色々な意味で身構えてしまう。

自分の未知の部分を最大限に露出させて、首を傾げる。

「えつと……。何もされてないですよ……サクラさんに」

「えつ？」

傾いた首がさらに角度を増すようだった。

そのような言葉に対して身構えていなかったせいか、返答に詰まる。

「ほら。サクラさんって、結構スキンシップが激しいじゃないですか。男の俺でもお構いなしに叩いたり引っ張ったりしますし……。それに、言い回しが普段から隠語っぽいところありますよね。それで……」

「な、なるほど……」

僕自身が警戒していたくらいだから、大いに納得できた。

「うん。大丈夫。別に何もされてないよ。ベッド自体が狭いから、寝ぼけて抱きついてくるくらいは許しちゃってるけど、僕も身構えて警戒してるし。それに、ああ見えて意外と寝相はいいんだ」

寝相だけではなくて、学校での立ち居振る舞いや所作も褒められたものだと教えてあげたかった。何に報いているのかイマイチわからないけれど、そういう思いに駆られた。

どこかで話を聞いているなら、機嫌を損ねてしまっただけじゃないと無意識のうちに思ってしまったからだろうか。聞いているのなら早く出てきて欲しいと、意図せず思ってしまったからだろうか。

「へえ！ サクラさんの寝相がいいなんて、今日一番意外です。布

団もシートも蹴っ飛ばして、逆さまになったりしてそうなのに。元気な子供っぽい無邪気な感じでいいな、と思ったんですけど」

「あははは。だよな。サクラって、そういうところ意外としっかりしてるんだ」

いや、無意識どころか、発言は依然として僕のコントロール下にあった。

どこかで聞いてくれているはずだという安堵を求めて、僕は言葉を選んでいっているのだから。

だというのに。

「あつ。いつの間にか、テーブルのところリリースとノアさんが座ってます。珍しい組み合わせですね。他の人たちは、まだ寝てるんでしょうか……？」

「そう、かもね」

ダイニングとテラスを隔てる透明な窓ガラスには、確かにリリースとノアが映っていたけれど、視線は交わることはない。それがどうにも異様な疎外感を生んで、足が竦む。

それからそこへ映し出されたのは、僕とアレンだけで、探している人は見当たらない。

二人の表情は嬌やかな小雨の中で、得も言われぬ微笑のまま固まっていた。

【3rd】雨降ることと、波打つこと。（後書き）

【あとがき】

またも不思議なことが判明した今回でした。

気付いている人は気付いているかと思いますが、実は今回の『Rize-4』では、各キャラの距離感を大事に書いてみております。皆がいる場所をイメージしながら読んでみると、倍面白いです。

ルリ会長は今頃……とか、アリスは今頃……とか。

色々と思いを巡らせながら楽しんでいただければ。

次回はリズ編に戻ります。

桜さんと……。(前書き)

【まえがき】

思えばリゾートも九日目。

海の音も潮風も飽きてくる今日この頃。
黄昏てみます。

では、どしどし。

桜さんと……。

九日目。

「まさかアリスお姉ちゃんがあそこまでするなんてねー」

「相当しょつく受けとったのう。口開いたまま固まつとったの、かなりあほっぽかったぞ」

「べ、別に？ 急に倒れるからびっくりしただけだしっ」

桜さんに諭されるとなんかイラつくけど、確かにショックはショック。

でも、今度こそ割り切れたと断言できるようになったと思う。

気持ちを繋いでた細い糸みたいなのが、心のどこかでプツリいった……そんな感覚を味わってる真っ最中だったんだから、口が開いてたつてのもしょうがないでしょ。

「というか大体、昨日のアレはキスじゃなくて、ただの“口移し”だし。」

あれ？ そつちの方がラヴい？

「ま、でも、ノアさん何ともなくてよかった。アリスお姉ちゃん帰って来た途端倒れるから、何事かと思つたよ」

「安心して気が抜けたんじゃろな。それか、お主があまりにうるさかったか、じゃな」

「う、うるさいっ。てか、そもそも、勝手に休み伸ばすからこついうことになつたんでしょ！ ……あつ」

「そう言えば、昨日ノアさんが、桜さんを責めないでって言ったな。」

それに、薬を買って帰ってきた後の桜さん、お湯沸かしたり着替え取ってきたり、誰より一番世話を焼いてた気もするし。

こんなもん、言い切ってから言い過ぎたことに気付いたんじゃないってのは道理だね。例え、相手が桜さんでも、言っていることと悪いこと、あると思うし。

私は桜さんの表情すら見ないで、言っただ下に続けてみる。

「ご、ごめんっ。それは、関係ないよねっ。休日伸びて私も喜んでたし、桜さんだって皆のためにやったんだもんねっ！ 誰かのせいとか、無いよねっ」

「悪いのう……。こんなつもりはなかったんじゃない……」

「違っ……。そうじゃないって！ 桜さんのせいじゃないから、大丈夫だって！」

「じゃて、のあが倒れた原因は、わしが休みを伸ばした以外に考えられん……」

「そ、そんなこと言わないでっばー。旅行に行くとは体調崩す人多いって言うし、環境の変化に対する耐性もあるって。桜さんだけのせいじゃないよ」

いつになくブルーな声が聞こえてくるので、こっちもちよつとむきにならざるを得ない。

一回不機嫌に転がると、意地を張ってるのか被害妄想なのかすぐに回復しない、という感じがどっかの誰かとよく似てるから、ここからの要領は人より何倍かはわかってるつもり。

「大丈夫大丈夫。私、たくさんぐうたらできて幸せだったし、ルリ姉さんも久しぶりにゆっくりできたっつって喜んでたんだよ。アリスお姉ちゃんだってノアさんだって、口移しができたから喜んでるよ、きつと。アレン達も、デートできてるわけだしさ」

勿論、そういう濃くて強烈な思い出も大切だけど、何より、一緒に過ごせる時間ができたこと。薄くて羽衣みたいな優しい時間が。それが一番だと思う。思うけど、それは言わないでとっておく。

「そ、そうかのう……」

「ここまで言うると漸く、俯き加減だった桜さんの顔が、雲間の夕日を浴びて幾分か明るくなった感じがした。

無論、照らされたのは、私もで。

テラスを縁取る欄干に凭れた私の肩口辺りから、煌々と赤らんでいくのがわかる。諄々と温度も兼ねているのがわかるのは、尊い時間を想う気恥ずかしさを溜め込んだせいが大きいと思う。

「そうだよ。だから、元氣出しながら」

初めから相も変わらないタメ口は、初めから相も変わらないお転婆な先輩に黙認されて、また初めと同じ、冗談に戻る。

「お主が言うなら信じるわい」

まるで、寄せては返す波のように。心地の良い音色を奏でながら。

「なんか、桜さん素直過ぎ。変なの」

ああ。お恥ずかしい。

「わしは生来素直じゃ。お主がへそ曲がりなんじゃ」

「な、なにそれ。どの辺がよっ」

おへそだってちゃんとお風呂で綺麗にしてるもん。曲がるわけないし。

「そうじゃのう……。居間でのあを構ってみたり、急にテニスに打ち興じてみたり、果てはダブルデートに混ざりこんでみたり。今だっつてそうじゃる。テラスで海なんか眺めてみたりのうち。どうしてそんなことをしとるんじゃ？ 言えるもんなら言ってみい」

「そんなの、ノアさんとお話したいと思っただけだし、テニスも急にやりたくなっただんだもん。ダブルデートに混ざったなんて、飲み物買っただけだし。別に、今もそうだから。明日でリゾートともお別れだなんて、黄昏たそがれたくなっただけだから？」

一週間ちよい停泊すれば、そりゃ情も湧く。

このログハウス自体にもそうだし、特に自分の使ってた所定の椅子なんかは一種の寂しさもある。布団の柔らかさとか、あのクラゲの触感とか、この風の感じなんかに。

だから九日目、夕飯後の夕涼み、こういう時間はあって然るべき

なのだ。

「そういうのがへそ曲がりと言っんじゃない。じれったいのう。早く認めちゃうのじゃ」

「認めるって何を」

私の視界に映るのは、丸くて大きくて橙色をした半欠けの太陽と、それに照らし出される名も無きカップル。ただそれだけ。南国の植物みたいな影と一緒に、カップルの影がこちらまで伸びてきている。ただそれだけ。

「全く……。るーとがあれんに告白されたぐらいで、何をそんなに拗ねておるのじゃ」

「別に、拗ねてはないけど」

そんな単純な感情、湧いた覚えもないんだけど。

現に拗ねてるとすれば、それは桜さんに対してなんじゃないかと思ったり思わなかったり。

「よく言うわい。それだけるーとのことを監視しときながら」

「なっ。監視とか、全然してないから！ 行く先々で見かけることはあつたかもだけど、そんなただの偶然だし」

「ぬっ！？ あれんがるーとにきすを……っ！」

「えっ、嘘……！」

発言者が桜さんだと言うことも忘れて、影を辿る自分がそこにはいて。「嘘じゃ」と笑う横顔に、私は言い返せる言葉も持っていなかった。

ただ浜辺を歩いてるだけの二人の姿が無駄にロマンチックに見えるたのは、ほんのちょっと心にぐつと来てしまった。

「これぞまさに、“からだは正直”というやつじゃな。ぬははっ」「う、うるさいっ、ばかっ」

思わず桜さんの肩を叩いてしまったけど、その点に関して後悔はない。

「なんじゃ？ 本当はあれんが気になっつるとのことか？」

「違っつ。おねっ、じゃなくて、ルっ……でもなくて……。そう！

海っ！ 急に海が見たくなつたの！」

何となくテンションで乗り切れるかもって思ったけど、先に桜さんが冷めちゃつたから、それも無理になる。

「そうかのう。じゃあ、るーとはわしがもらつことにするのじゃ」

「……………」

「まあ、お主がいようがいまいが関係ないがのう」

「……………」

やたらわざとらしくアイコンタクトをとって来るけど、桜さんは私に何を求めてるんだろ。

そう言えば、アリスお姉ちゃんも私に何か期待してたな。修羅場とか言つてたけど。ホントのとこどうなんだらう。

棚上げるじゃないけど、今はとりあえず桜さんの言ったことが気になつたから。

「それって本気なの？」

「当然じゃらうて。あんなに優しく面白くていじり甲斐のある人間、他にはおらんぞ。ましてや、おとこにくれるなぞもつたいたいのじゃ」

「へ、へー。本気なんだー」

「本気じゃ。おもにからだが目的じゃ」

「ば、ばかなの……………？」

半分冗談の匂いがあるけど、後の半分は自分と同じ匂いがしたから、無下にはできない。

男にくれるなんてもつたいたい。

思えば、私もそんなことから色々考えるようになった気がする。

この歳になって、周りの男の人の見た目も見る目も変わってきて、私自身も恋愛の意味をふわふわと理解し始めて。行きつく先がキラキラと輝かしい未来というよりか、ぬるぬると生々しい未来だと、何となく知って。

そんなことを考えてたら、男の人に手を引かれるのとか、言いなりになるのとか、段々できなくなっていくたんだっけな。

だからって恋愛したくなくなるかって言ったら、それは年端の乙女には愚問ってもんで。一番身近にいた、カッコいいサッカー少女とか完璧超人ツンデレお嬢様とかを皮切りに、私の対象はそっちに移っていたわけなのだ。

そんなフィルターで見た時、好きだとか嫌いだとかそう言うの以前に、私の傍から離れて男の人のところに行っちゃうことがすごく怖いって感情が大きかった。

「劇で本気ちゅーしておったお主は、何か言うことはないのかのう」
「本気じゃないしつ。ふつ、りつ！」

本気じゃないって、初めはそう思ってた。まだ男の子が好きだった頃も、恋や愛なんて遊びの延長線上にできる友情かと思っていたはずだ。

今まで、好きな子は何人かいた。皆、女の子だった。

その中では月並みに優劣があって、順番に並べることができた。

その順番は、触れたい触れられたい順番だと、私はそう自分に振舞っていた。

「わしは横で見とつたんじゃぞ。音も聞こえなし、よだれも」

「わわわわわかったあー！ わかったからもー黙ってー！ ……したよっ、したっ！ 本気でしましたーっ！ 劇で主役だから気分乗ったのっ。いいでしょ、別に！」

友達としての“好き”との区別は、初めはついてなかったんだと思う。カッコいいと言う言葉も、男子だけに感じるものではなかった。

でも、体育の時間とかに気になってる子とハグしたりすると、心臓が変になったりするようになって、“この気持ちはそうだよな”ってすぐわかった。

「本気なんじゃろ」

そんな感じで私は出来上がった。

「本気、だけど」

そして、あの文化祭での出来事があった。

友達でも意中の人でもない、ましてや恋人でもない 家族という枠組みに感じた“好き”が、元々ごちゃごちゃな私の中の境界線を、もつとごちゃごちゃにしてしまった。

「だけど、なんじゃ」

「桜さんと一緒なのはヤダ」

気になった友達と手を繋ぎたいと思ったことは、何度もある。キスしてみたいと思ったことも、何度もある。体を触りたいと思ったことは、数回ある。それらを逆にされてみたいと思ったことも、数回ある。

それは、私を知らない相手だから。知って欲しいから。そして、私も知りたいからだ。

「ぬつ。お主もからだ目当てかつ？」

「ばかなんだよね？」

でも、私はその人を知り尽くしていた。そして、私も知り尽くされていた。

手を繋いだ時の湿ってくる感じとか温度、キスならほっぺたとかに何回もした。体はたくさん触ったし、裸も見た。見られたいとは思ってなかったけど、とっくに見られてた。

そんな相手とキスをした。

おかげで、お国の法律に違反してるだとか騒がれた。

ただの演技だつて嘘をついたら騒動は収まったけど、私の胸はきゅうつと苦しくなった。

「でも、そうかも」

「そうじゃろ。いい感じに引き締まっつって、出るところは出とる。触ると適度に柔らかいし、肌はすべすべじゃ。何より、反応が良いんじゃ。あの甘い声にもそそられるのう」

「悔しいけど、わかる気がする。決して、そういうやましいことは考えてないけど」

「じゃが、結局脱がすんじゃない？」

「脱がす」

知ってる。ホントは言っちゃいたかったんだ。

大袈裟でも、「私のだから、誰にもあげない」って。

「助平じゃのう」

「それだけは桜さんに言われたくない。それに私、最初は主導権渡すつもりだし？ 年下だもん、なんもわかんないから」

「ほう。じゃ、わしはその逆でやるのじゃ。もう、わし無しでは生活できんくらいにしてやるわい。ぬははっ」

「へ、ヘンタイ……っ！」

ここまでは全部私の気持ち。

私が知らないのは 知りたいのは、相手の気持ち。

とくに知り尽くしているはずの少女が隠した、か弱い恋心。その

選択、答え、返事、回答。

「……………」

「……………」

「じゃ、待つしかないのう。やつの答えとやら」

「そう、だね」

だから今は、雲間に覗く赤々とした球体と、その下でランダムに揺れてる副産物の隙間からでも、遠巻きに眺めて待つしかない。影にすら触れないんだから。

明日答えが出るか、もしくは出ないのか。

そんなこともわからない。そもそも時間もわからない。せつかくノアさんが作ってくれた時計も、見方がわかんない。

けど何にせよ、このメンバーで、この場所で、この時間に見られるパノラマは、最初で最後になるような気がしないでもない。

あつたとしても、その時に私の頬を染めるのは一体誰の役目なんだって、沈む前に一つ答えてくれたなら、部屋に帰った後に良い夢見れたかもなって思ったり思わなかったり。

桜さんと……。 (後書き)

【あとがき】

前回あとがきでも述べました通り、距離感というもので遊んでみました。

やっぱり気になって仕方がないリズ。

デート開始以来、ルートの監視をしてました。

サクラがなんかおちよくってましたが、仮に二人が本当にキスしていたら、リズは果たしてどうしたんでしょうか。啞然呆然か、敵前逃亡か、飛び出して行ってやんややんや……。？ それとも……。

妄想パラレル広がりモス。

まだまだ続くよ。

『4th』信じるにしよう。気付くにしよう。(前書き)

【まえがき】

ルート、ちょっと選びます。
サブエピソード。

エンディング。

【4th】信じることで、気付くこと。

九日目。

「ごめんねアレン君」

「い、いきなりどうしたんですか？」

みんなと少し距離を置いて冷静になった僕は、自分の非力さが恥ずかしくなってしまうた。その分アレンと近づけたとは思うけれど、迷惑をかけ続けている気がしてならないのだ。

それが恋人になるということならば、僕はきつと的確な振る舞いを行えていないと思う。

だから、この日没の寂莫に託^{かこ}けて言葉を並べられたらと、そう考えた。

「恋人らしいこと、全然できてない気がするからさ……」

「うーん。そうですね……。でも、焦る必要はないと思います。俺はいくらでも待ちますから。プレッシャーをかけないように三歩後ろで待ちます」

「あははは」

笑っていられるのは、多分、夕日が赤いせい。

波間に見る白い影は明滅を繰り返して、僕の判断を急^せく。対比する水の色は、焦燥を泳がせたように深く黒い。

そうして僕の感情は入り乱れて、灰に染まる。

「実を言うと僕、恋人らしいことがなんなのか、まだわからないんだ……」

「わかります。俺も、彼氏らしいことって何だろってずっと考え

てますから」

「アレン君も？」

それでも僕たちは、潤いと乾きの狭間を歩いてきた。今までよりもずっと強くなったその音を聞きながら。

「でも、こうやって隣にいるのって、すごく近い気がします。もっと近づきたいと思える距離にいること、言葉で心に触れられること……そういう形の無いことなんじゃないかなって」

「形の無いこと、か……」

だとすれば、僕がアレンにできる彼女らしいことは、返事をすることになるだろう。

サクラのおかげで、形式上は延長がかかったけれど、心は当日で止まったままなのだから。

けれど、僕の中で育った答えは、花を咲かせないまま実をつけてそのまま自重じゆうじゆうで傾いて、強烈な照り返しに草臥くさぶたれてしまったかもしれない。

「アレン君」

「なんですか？」

怒らないで聞いて欲しいから、僕は何も言わない間を作って、その隙に微笑んだ。

僕が覚えた、“彼女”の仕草だった。

「アレン君はすごく優しく、物知りだし力持ちで、いつも頼りになる。一緒にいて安心するし、年下なんて思えないくらい真面目で面白くて素敵な人。これならモテるはずだって、そう思う」

アレンに近づくことで見えた言葉。昨日の雨を受けてますます蠢動する波の調べに、負けないよう努めた。

「そんなアレン君が、僕のことを好きだって言ってくれた。すごくびっくりした。びっくりしたし、嬉しかった」

手も繋いでいないはずなのに、どうしてか僕の掌は熱く、そして汗ばみ始めていた。

キスもしていないはずなのに、僕の唇は震え、そして思い出して

いた。

「僕はアレン君のこと、嫌いじゃない。いや、違うんだ！ むしろ、好き……なんだと思う。だけど、アレン君が言ってくれた好きと、僕の好きの重さは全く違う」

合宿を終える頃の僕なら、『好き』という言葉投げかけることは可能だと感じる。

でも、それがアレンの覚悟の力に追いつくなど、あるはずもない。「好きって、僕は多分、言える。けれど、その後に僕はアレン君と手を繋げるかわからない。キス……できるか、わからない……。それに、子供なんて、僕には到底……」

具体的なビジョンになるほど、想像ができなかった。想像が出来なければ、当然、それをすることもできない。

見るこのできない夢は、現実になるはずもないのだから。けれど、僕は気付いた。

僕が好きなのは、アレンという人間というよりも、アレンという人間を作り上げている空間なのだ。決してまやかしゃ錯覚ではなくて、アレンの仕草だったり優しさだったり、そういう目に見えない要素が僕を彼女らしく仕立ててくれたのだと。

だからこそ、彼女が僕である必要性について憂慮してしまう。

「ア、アレン君のことが嫌なんじゃないんだよ！ そうじゃない。そうじゃないんだけど……。今は、できない、気がして……」

僕が、彼女という呼称を自覚する度に、そういう不安は膨れ上がっていく。

当然のように、不安には形が無くて、ただの見間違いなのではないかと思ってしまうのだ。

僕の弱音を黙って聞いていてくれる、その笑顔ですらも。

「アレン君は待ってってくれるって言うけれど、本当にいつになるかわからないと思うんだ。もしかしたら、ずっとダメなままかもしれない……。アレン君の気持ちに、応えられないかもしれない……」

こんなにも“好き”であるはずなのに、僕はそれを他と同一視す

ることができないのだ。同じものだと考えるほどに、それを拒絶する自我が芽生えてしまう。

そうやって葛藤していることが、アレンを悩ませるのだと知っているのに。

軽率に決定している事項ではないけれど、問いの答えならすぐそこに見えているはずなのだ。

どうして、僕はそこに、手を伸ばしすらないのだろうか。

それは至極簡単な事由だった。

「ルートさん」

彼の 私から見た彼の、淀まない決意と笑顔がそこにあるからだ。

「それなら、もう答えてくれているじゃないですか。『まだわからないから待つてほしい』って。だから、待つんです。俺は。いつまでも待ちます。例えそれが望まない答えでも、です。それでも、今、この瞬間、俺はルートさんのことが好きなんです」

その“瞬間”が続くこと、それが僕の望むことで、僕が恐れることでもあった。

摂理に逆らって時間が伸びることは、僕にとって、現実を否応なしに直視させられることに等しい。

逃げるこの意味を知った僕にとって、現実には、恐ろしくも眩しいものだったからだ。

だから、瞬きをするわずかな時間には、淡い感情を伴って僕の息は止まる。

沈黙の回答は、また、決意と笑顔だった。

「いいんです。俺は、それで。家も跡継ぎも、俺はどうでもいいんです。俺がルートさんを好きなのは、俺の気持ちです。だから、俺はいくらでも待つんです。いくら遅くなっても、それが答えです」

愛を含有した言葉の重量に見合わず、不思議と、プレッシャーというものは感じなかった。

それはきつと、答えがイエスかノーかの二択であるからだろうと思う。それも、その二択はどちらも正解であり不正解でもある。そのせいで、選択に際しての難詰もない。もしあったとしても、僕は同じように昏迷の不断を極めていたのだらうけれど。

だからこそアレンの意志の強さは、僕の中の何かを貫き、そして断ち切るのだと思う。

「あの。一つ、聞いてもいいですか？」

どんな難しい質問でも忌憚なく答えようと、僕は頷いた。

浜風に靡いた髪が目に入らないように、僕は蟀谷の辺りを右手で堰き止める。

「ルートさんは、リズムのこと、好きですか？ それとも、嫌いじゃない……ですか？」

皮肉にも言葉は、汐の香りとともに脳裏に張り付いてきた。僕が用意してきたどんな言葉よりもその言葉の方が確実に速く、強く、大きく、正しく、深く、尊く、重く、清く、そして悉く不慣れであった。

それでも、まだ、選ぶ余地はあつたはずだ。

でなければ、何のための追試なのだ。何のための、合宿なのだ。何のための、予習なのだ。何のための、雨なのだ。

幸い僕は、波の奏でる頗る爽やかなノイズに、耳を貸していたから。

「……………」

それから僕たちは暫くの間、並行して濡れた浜辺を往復した。波が打ち上げられるタイミングに垣間見る煌めきを、窪んだところに流し込むようにしながら。溢れないうちに捨てる、その時の途方もない青さを、反芻するのだ。

結局、どうしようにも新しい足跡がついてしまうことを、僕たちは心底悔いるのだけれど。

「好き……」

アレンは、笑って頷いた。

【4th】信じることで、気付くこと。(後書き)

【あとがき】

それってどういう……。

と傾聴したくなる今回。

続きは次回。

あ。

そう言えば、ノアの過去話のタイトルから「の」をとりました。

折悪しくも何ともない、なぜにこのタイミング。

それは私が聞きたいくらい。

潤つことぞ、明日を据えて。
(前書き)

【まえがき】

ちよつと長めで、ちよつと大事。

秋の夜長に読んでみてね。

眠い人は明日にしましょう。

では、どつぞ。

潤うことで、明日を据えて。

九日目。
夜。

海水にやられた肌を洗い流す意味を考えると、この合宿での入浴というものには一定の特別感情があると思う。

海に入ったわけではないのだけれど、半日その傍を歩いていたら、風と飛沫は相当量浴びたはずだ。おかげで、入浴前は髪の毛がパサパサで、手櫛は通りが良くなかった。手櫛が通らないのは、石鹸でも落ちなさそうな汗のせいでもあったのだろうけれど。

それはそうと、夕食の時に誰かが言っていたけれど、ここにいられる時間はあと一日らしいのだ。いつも通りの睡眠時間と帰る際も二時間ほど木の中で眠らなくてはいけないことを加味すれば、満一日は無い。

特別な感情を抱いてしまうのは、そういう時間的な問題もあると思う。

「あ。月。すごく綺麗……」

浴場前廊下の窓に臨む晴れの夜空には、真っ白な満月が浮かんで、無数の星をアクセサリーにして堂々と円かった。大きさもそうだが、こういう綺麗な真円は久し振りに見た気がする。

そして前に見た時も、確か、見ようとして見たわけではなかった。だからこそ、心は潤った。

別段、乾いているわけではないけれど。

「どうしたのじゃ？」

『ユカタ』という、布切れを縫い合わせただけのような衣服一枚を纏った少女が、近寄って来て訝る。

「いや、なんでもないよ。それより、サクラ。前の紐くらいはちゃんと結ぼうか」

お手製なようで軽くて風通しが良いと自慢していたが、当然のように、ガードは弱い。今も、胸元と太ももが大胆に露出していて、オープンな性格が前面に主張され過ぎている感は否めない。

夕食も入浴も終えて、あとは寝るだけだからという言い分もわからなくはないけれど。

そう。

女性として。

「結んでー、なのじゃ」

「はいはい」

女性として、僕はサクラのユカタの腰紐を締める。

夕食の時は蝶結びになっていたから、同じようにすれば、女性らしいだろう。きつくなく、解く時に解けやすいよう程度に、優しく結べば。

太ももの前辺りを踊っていた二本の紐の先を捕まえて、まず、サクラの臍の前でクロスする。ユカタで影っていてよく見えないけれど、クロスする箇所がちょうど体の真ん中になるように注意しなければならぬ。すぐ解けてしまうから。

「結びづらいならもっと近づくのじゃ」

「あ、うん」

交差した紐の先は別れ、今度は胴を回った先　背中中で再会する。

そして、離れないように、そこで結ばれるのだ。

「おお。るーとが、わしを抱いとる」

「えっ……って。し、仕方ないでしょ！」

そう言われると、どうしても、満月が誰かの瞳に見えてしまう。

これくらい、見られてどうこうなるわけでもないけれど、僕は恥ずかしいと思ってしまうのだ。

直ぐに立ち退こうとすると、頭をきゅっと抱かれてしまった。

「ま、待つんじゃないっ。もうちょっと、このままでいたら、だめかの……っ？」

「サクラって、僕と二人の時、すごく甘えん坊だよな」

「……………」

気が緩んだのか、腕のロックが甘くなる。

抱きつかれること自体は嫌ではなかったけれど、呼吸が少し苦しかったのと目のやり場に困っていたのとで、さっと抜けることにした。

「な、なんじゃ。のりが悪いのう……………」

「あはは……。怖いなら手でも繋いで行こうか？ 部屋まですぐだけど」

「特に怖くはないが、手は繋ぐのじゃ」

合宿中に知れたことの中でも、サクラが怖がりであることは特に印象深い。

お化けであったり幽霊であったり、そういう形の無い恐怖に対してとても敏感らしく、夜の小道の暗がりなどに極度の苦手意識があるようだった。

僕にだけ見せる弱みなのだという事に普段の性格とのギャップの激しさも助けて、強烈に記憶に刻まれていった。

それに乗じて、遠い過去に存在した感情が温度を帯びてくる。

繋いだ手の温もりが僕の心を潤すように、その感情もまた、何もない心を濡らすのだ。

「ねえ、サクラ」

「どうしたんじゃない」

「言ってもいいかな」

「妹のことじゃったら、だめじゃ」

左手を握る力がきゅっ、と強くなる。

それだけに限らず、サクラのことも話そうとしていた僕は、少し強かった。

「サクラがね。なんか妹みたいだなんて、そう思ったんだけど」
言下の出来事。

「わしの方がお姉ちゃんじゃっ!」

僕の左手は、一度ぎゅつと握られてそれから、そこらに雑に放り投げられた。あまりに勢いがよかったから、指の辺りの血管がジンジンと未練をばやいていた。それからいくら省みても後悔は消えず、そこに残ったのは、何となくそうかも と思う薄い壁と、温もりの残滓だけだった。

「え、えつと……。ごめん?」

機嫌の悪いのを「ふんっ」と声に出して表するあたり、よほど気に障ったのだろうと思う。

僕にも悪気はないのだけれど、そういうところが尚更、小さい頃の誰かに似ているのだから世話がない。ただ、決して貶そうなどは思っていないし、むしろ愛らしくて良いと思っっているくらいなのだから、そう臍を曲げないでほしい。

「あー、うん。ごめんね。もう言わない」

「もーいいのじゃ。るーとなど知らん。わしは部屋に戻る」
そそくさと早歩きで階段を上がっていくので、止めるにも止められなかった。

サクラの行きつく先に僕も行くのだから急ぐ必要も無い。

ゆっくりと階段に足をかけようとすると、ふと、あの円月の瞳が目に留まる。

「……………」

どこか、お咎めを受けているような気持ちになってしまって、僕

の足は自然、悔俊の窓辺に向いていた。

ただ、冤罪を着せられたとは言え、サクラを部屋に一人で居させるのもあまりに忍びないので、きつと懺悔できるのは一問程度だろうと思う。

「サクラのお姉さん……」

僕は何を思うでもなく、言いかけた言葉をただ、事務的に飲み込む。

仮に、もう片方の瞳が他の誰かのものであるとするならば、僕はきつと許されない。

けれど、少なくとも、僕の心の中は見ることができないだろうから。だから僕は、こうして静かに窓の棧を模倣なぞのだろう。

「さて、と。戻ろう。拗ねたら、寝てる間に色々悪戯されそうだし」申告の重さは決して沈黙の長さに比例しないが、確かに心は軽くなったと思う。今なら、答えを口に出すこともできると思う。そうして何かが変わることで、僕もまた成長できるのだと思う。でも、どうしてだろう。

どうして胸は、こんなにも高鳴るのだろう。

耳に五月蠅く感じるほどに、どきりどきり、何かを知らせるかのように鳴っている。

その拍子とできるだけ合わせないように、僕は廊下を大股で跨いだ。月光に従う窓枠の影に括られる僕の影が、やけに華奢に見えて焦った。すっかり降りた夜の帳に溶け込めない僕は、真一文字まいちもんじに目を細めるしかない。

こんな時は、誰かの温もりが欲しくなる。

早く部屋に戻ろう、そう思いながら、僕は再び階段に足をかける。

その時だった。

「「あ……」」

僕と似たようなトーンが、そこには混ざっていたと思う。

僕が視線を逸らす理由は彼女の寝間着が八分丈であったから、感情的なそれに絞られる。それでも僕は月の方を顧みないよう、焦りを映す右手を凝視する。

「「まだ……」」

再び、僕と似たような声色が混ざる。合図でもしたかのような夕イミングだが、目を外しているのだ、それはあり得ない。そこに何かあるとするならば、言わば“運命”的なものであってもなんらかしくはない。

奇跡を信じるか信じないか、と言ったところだろうか。

それから稀有な沈黙があった。

僕は、言おうとしたことを忘れてしまった。

こんな時、いつものように制服を着ていたら、波の音に酔うこともないだろうけれど。

「まだ、起きてたんだ」

彼女は、まだ覚えていたようだった。

僕は右手に答える。

「う、うん。リズこそ」

「喉乾いたから、お水」

その言葉に悪意はなかったけれどどうしてか悔しくて、不本意ながら、思い当たる節に野次りたくなってしまった。

「ごめん。ちよっとしょっぱく作り過ぎちゃったかも」

サクラが隠し味にチョコレートをと張り切るので、味を直すのに塩をかなり入れた覚えがあった。体感、しょっぱすぎると言うことはなかったけれど、入っている塩の量が少ないわけではない。

あれは、水分を奪われて然るべきグラタンだった。

「う、ううん！ 違うのつ。グラタン、美味しかった。私が塩胡椒かけすぎたんだと思う。ほら、私、しょっぱいの好きでしょ？」

「ああ……。隠しておいたのに、いつの間に……」

甘いのも辛いのも、とにかく味は濃いものを好む性格だから、心配で戸棚にしまったのだ。

サクラもいるわけだし、目立ちたがり屋が二人いると何が始まるか予期できないので、ゲームの小道具になりうるものは排除したままでだ。

でもそれも、九日間あればさすがにばれるか。

「か、隠したんだ……」

「あ、いやっ、うん……。みんないるところでかけすぎ注意するのモアレかなって思ったから……」

「し、心配し過ぎだってー。たかが数ミリグラムくらいしか変わらないよ」

「その積み重ねで病気になっちゃうんだよ。一日に五ミリグラムでも、十年だと二十グラムくらいになるんだから」

昔から、人のことになると極度の心配性のわりに、自分のことになると目先の利益ばかり考ええるストレートな性格。

注意しても暫くすると元通りになるので、説得力と信憑性の獲得のためにそういう計算をしたのだった。説教臭くも恫喝らしくもなかったけれど効果は薄く、データで攻めるのが効果的だとわかってからは、僕の注意に芯が通りはじめて段々と磨きがかかっていった。

気持ちで通じないものかと、最後は僕の方が気に病んでしまうけれど。

「大丈夫大丈夫。私、よく動かし汗かくから」

「全くもう……」

何だが、久々に説教したような気がした。

ここへ来る前まではほぼ毎日、何かしら説いていたのに、このところめつきりだった。

それはまあ、悪いことではないのだろうけど、自然、喉は乾いて

いきそつだ。

「……………」

「……………」

弁舌直後の沈黙は酷く沁みる。

できたばかりの擦過傷を負ったまま、海で泳ぐようにヒリヒリと。そしてまた喉も乾いて。

「僕も水飲もうかな」

「ただ、大丈夫だし！ そんなん一人で行けるからっ」

「あ、うん」

そういう心配をしているわけではないのだが、そう言われると一緒に行くと言い出しづらい。サクラもあの様子だから部屋から出してもらえなさそうだし、できれば今行っておきたかったのだけれど。まあ、サクラが寝てからこっそり行けばいいか。

「じゃあ、もう寝ようかな」

「うん」

「……………」

「……………」

誰かが昇りもしなければ、誰かが降りて来もしなかったから、沈黙の間は階段が自重で軋んでいた。

「な、何してんの。早く昇ったらいいのに」

「り、リズこそ。お先にどうぞ」

視線を逸らして俯いているのが僕だけでないとすれば、圧倒的に僕の方が不利だ。右手しか見えない僕と違って、上段からは僕の表情までしっかり見えるはずなのだから。

逆に、僕からは何も見えなくて。

「い、いいよ。譲る。だって階段恐怖症でしょ」

「いや、まあ、そうだけど。あんまり関係無いような……………」

譲り合いが発生するような道幅ではないはずなのに、なかなかどうして。

合点のいく説明は見つからないし、別段、互いに譲れないものが

あるわけでもない。

心に迷いがあるだけで。

「そんなこと言って、ホントは私のパンツ見てるんでしょー？ 懲りないなあ」

「なっ！ 違うよっ。スカートじゃないんだから、見えるはずないじゃないか」

思わず振り向いてしまう。

やましい心は無かったと言えば嘘になるけれど、それは結果論に過ぎないのも道理。それを覗くことが、僕にとってやましいことであると言う事實は、すでに明白に胸に刻まれている。

「や、やらしー」

「想像しちゃうリズムも、同じくらいやらしいんじゃないかなっ」

「い、妹の見て喜ぶ方が変態だし……っ」

「喜んでないし、見てないっ。だから、見えるはずないって……あ。見えたかも」

ただいつも通り、僕は反論しなくなっただけ。いつも通りに小突いて、そして当然、いつも通りのどこか満足気な表情があるはずだった。

いつも通りに言葉が続かなくなったのは、きっと、喉が渴いているからなのだと思う。

「えっ。ちょっ、嘘。わっ」

スカートであれば舞うのをおさえれば事が済むのに、今日は八分丈のパジャマだった。

「リズムっ！！」

胸、腰、太腿、何故か胸を隠す仕草をものすごいスピードでしたのは見えた。しゃがもつとしたのか退こうとしたのかは、僕の位置からはわからなかった。

でも、向き直っていて良かったと思った。

リズムが、足を踏み外した。

瞬間的に、時間が遅くなったようだった。時間延長だろうと瞬間移動だろうと起こり得るこの世界で、僕にもその力があるような気がする。

「くっ！」

決して狭くはない階段だが、傾斜は激しい方だと思う。だから、ステップを転がる心配よりは、直滑降が危惧された。どちらにせよ、当たり所が悪ければ、もしかする。

幸い、位置関係の掴みやすい下段の対角線にいた僕は、必死で踏み込んで、思い切り腕を伸ばした。体ごと、その真下に移動する勢いだった。最悪、クッションにでもなるつもりだったのかもしれない。

階段恐怖症であることは、たった今思い出した。

でも、僕は落ち慣れている。

ここからどうすればいいか、感覚的にわかった。

何とか落下地点の真下にありついた僕は、一段下に左足を添えて腕を開いて来得る衝撃に備える。瞬間的に一瞥した階段下には、記憶通り床がひっそりと寝そべっている。下に僕用のクッションを準備している暇はさすがに無い。それよりも、飛び込んでくる彼女の表情に気を遣う方が先決に決まっている。

踏ん張りよりも思い切りが勝つたらしく、彼女は宙を舞った。

ただし、先に待っているのは僕か痛みか、あるいは死かだ。

だとするならば、彼女は僕を信じて踏み切ったのだ。転がって痣を作るより、僕が受け止めることを信じて、飛んではずだ。

だから いや、そうでなくても、僕は彼女を受け止める。

そして、これは百パーセント成功するのだ。

僕が、彼女のことを好きだから。

「ルっ！」

「リズっ！」

彼女は僕の広げた腕の形にぴったりはまるよう腕を伸ばして、腰より少し上目に来た。

時間がゆっくりになって、重力というものは変わらない。それはわかっていただけで、当然踏ん張って止められるものではないことも知っていた。

僕が踏ん張ったのは、ある程度、衝撃を吸収できると思ったからだ。

お互いに、成長したのだ。心も体も、女性らしく。

一度目の衝撃は一瞬だった。

跳ね返りもなければ玉突きも無い。あったのは、恥ずかしさの先にある不安。

僕は彼女を抱きとめてから、刹那ほどの頃合いを見計らって、自らの意志で落下した。

そう。

月に背中を向けるようにして、僕は落ちた。

彼女を外に出さないよう、今までしたことが無いくらいに強く、包み込むように抱きながら。月を目印にすれば、二人の居場所を見失わずに済むような気がしたのだ。

それから、二度目の衝撃があった。こちらは一度目よりも酷かった。

僕を押し返すような凄まじい力積と、覚悟の重さ、それから圧縮された時間が重く押し掛かってきて、骨も皮膚も 全身の細胞が声なき悲鳴を上げ震えた。それが最後に右肩甲骨辺りに集約すると、異様な存在感を放ち、堂々と騒音をかき鳴らしながら居座りを始めた。

それでも僕は、彼女を撫でた。

「痛^{いた}た……。リズつ、大丈夫っ？」

「ば、ばか……。っ！」

胸の辺りをポンポンとノックされた。それと同じリズムで肩が応

えて、激痛が身体全身に響いて鳴った。声すら殺してしまっただら、それらがどこかへ行くことはなく、僕の中をぐるぐると廻った。酔って吐きそうになる。

でも、そんなことよりも遙かに彼女の無事が嬉しかった。使命を果たせた報酬よりも、ただそこにある存在が僕にとっては嬉しかったのだ。

「嘘ついてごめん」

「い、いいよ、そんなのっ！」

「あの時と逆だね」

「あの時？ 夏休み……？」

ふと過つたのは走馬灯のように鮮明な、あの日の情景。僕が一人で、怯えた拳句に転げ落ちてしまう椿事。その前哨、僕がリズに覆い被さるように転落した事故。

幸い二人に怪我はなかったけれど、もしかしたら病にはかかっていたかもしれない。

四百四病の外 恋の。

「でも、よかった」

「良いわけではないでしょ……！ 怪我、したでしょ……？ 痛いでしょ……！ ホントばかだよ……。ルー……！」

どうしてそんなに怒るのだろう。

肌はこんなにも近くて、息吹はこんなにも温かいのに。恋を、感じるのに。

「やっと」

「ど、どこか痛い？」

「やっと、呼んでくれた」

「えっ？」

そして、やっと僕のことを見てくれた。

だからもう、他のことなど、どうでもよかった。幸い頭は打っていない。

「リズ……」

「な、なに　っ!？」

彼女のうなじの辺りに目論見をつけて、使える方の手を伸ばす。ふわりと下がる髪の毛を横切って、僕は腕で彼女の脈動を感じる。そして、重力の助けを借りて、床へと掻き寄せた。

利き腕でないからか、それこそ慣れていないからか、傍からは少々不恰好に見えているだろうと思う。月などはてらてらと、嘲り笑っているように見えなくもない。

でも、堂々としていよう。

僕と同期する鼓動を　息吹を感じられるのは、今、この世界でたった一人、僕だけなのだから。

「好き……」

そして、僕は彼女にキスをした。

「……………」

心地の良い沈黙は、確か二回目だったと思う。

あの時は彼女の方からだったけれど、僕からしたとしても静寂は甘かった。甘くて、そしてほろ苦い。多分これが、大人の味なのだと改めて思った。

僕はまだ、味わい方を知らない。

けれど、温かいか冷たいかはわかる。

「……………」

沈黙はまだ続いた。

僕はまだ、彼女の顔を見られていなかったと思う。

心配そうに歪んだ顔が残像のように視界に見えて、あとはそれっきりだった。

それでも月は、やはり綺麗だった。

「寝たの……？」

「起きてるよ」

「目、開けないの？」

「リズの顔、見れなそうで」

「……ばか」

きつと、彼女がどんな表情をしていても、僕は目を逸らしてしまっただろう。

そして僕は真っ先に、窓を覗くのだ。月に笑われているのを見て現実を投影して、透かしたガラスに映る自分を見て夢を濾過するのだ。そうするしかない。

現実と夢が入り乱れる今、信じられるのはこの温度だけなのだから。

「あ……」

今度は僕の右の頬へ、また、温もりが訪れる。

「私も真っ赤だよ、多分。同じくらい、顔、熱いもん」

「手も、熱いね」

僕の頬もそれに合わせて熱くなっていくけれど、同じように彼女の掌も徐々に温ぬるくなってきて、そこだけ自分の体の一部になったようないきさえしてくる。

それは、血が繋がっているからだろうか。

いや、多分違う。

「嫌じゃなかった？」

「嫌じゃないよ。ルーだもん。すっごい恥ずかしいけど」

「僕も。リズだから、した。恥ずかしかったけど」

「いいの？ アレンがいるのに」

「良くないよ。でも、これが僕の答えだと思うから。アレン君にも、ちゃんと話すよ」

愛か恋か友情かなんて、たった三パターンで区切れるほど、人間の感情は生易しいものではない。経時で変遷していくし、刺激でも変化する。感情が感情を変えることだって、少なくないのだ。

だからこそ、決断というものは存在するし、選択を迫られる時だつてある。

「じゃあ、なんで付き合つたの？」

「嫌いじゃない、からかな……。 “嫌いじゃない” と “好き” って、何が違うんだろうって思って……。 もちろん、そんな実験みたいなこと、許してくれるなんて思わなかつたんだけど……」

そこに良い結果を期待して、ではなかつた。

ただ、刺激や時間の経過で変化していく感情を、見ることしかできなかつたのだ。

「文化祭の時、なんで私とキスしたの？」

「好き、だから……」

「今と同じ？」

「だと、思う……」

感情が感情を変える瞬間、僕の温もりが誰かの温もりと繋がる瞬間、“好き” になる瞬間、キスしたくなる瞬間。すべて、同じ時間を指しているのだと思う。

それは時計などなくてもわかる。

温かい時間が僕たちの間を流れる。

僕は目を開ける。

月が円つぶらに廻っている。

時を知ることが、どれだけ尊いことなのか、実感する。

「ルーの好きは、どの好き？」

「キスしたい好き、だよ」

「あんまりわかんない」

「ええ……」

「わかんないから、もう一回」

近くで感じる吐息はあまりに緩やかだったけれど、吸うのと吐く

のどで調子に淀みがあるのがわかる。それに合わせようとするも難しく、時折息吹は混ざり、嘆息は重なった。そこにも温度があつて、僕の中でまた、あの瞬間が訪れる。

そのリズムが合わないのが、これ以上なく尊かった。

それでも合わせようとしてくれる彼女が愛おしくて、たまらず抱き寄せようとした。

右腕は僕に、自制をかけた。

「痛っ……」

「あつ、ごめん……。ねえねえ、ホントに大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ。ただの打撲だと思うから。それより、リズに怪我がなくてよかった」

そう考えると、この痛みも暫くは消えなくていいような気もしてしまふ。

みんなとの距離感を図る道具としてとっておきたい、そんな気が。

「この体勢のままは色々まずいから、そろそろ起きよう」

「あ、うん。今どく。ルー、一人で起きられる？」

「大丈夫。……よいしょ」

「あははははっ。なにそれ、おじいちゃんみたいっ！」

「ひ、ひどい言われよう……」

左腕と両足の三点を主軸にして立ち上がったから、かなり歪いびつな立ち上がり方になったのは否めない。笑われたのは、若干不服であるが。

全身が自動的に右腕を庇うような動作をしてきているようで、重力に対する感応は少ない。単なる打ち身としての鈍痛だけが、エンジンと時間を刻んでいるように打ち鳴っていた。何のおかげとは言わないが、気分は悪くないし吐き気も無かった。

立ち話になると気を遣ってくれたのか、リズは階段の二段目に腰かけ、「ここ」と僕を呼ぶ。

厚意に甘えて、僕は隣に座った。

「……………」

「……………」
月を観る時間かと思ったが、どうやら違ったようで。

「ねえ？」

「どうしたの？」

少し警戒してしまって、首は傾げられない。

「これからどうする？」

リズの問いは思いの外漠然としていて、それが逆に安心できた。
今夜のことなのか、明日のことなのか、それとも未来のことなのか。

僕は それなら未来でいいか という気持ちで小さく笑う。

「お風呂、入りたい……かな？ ちょっと肩は痛いけど」

気候的な問題もありき、事件的な問題もありきで、嫌な汗を嫌な部分にかいていた。

出来れば、そんな汗臭い未来は嫌だと思って。

「……………」

「リズ……？」

「いやぁ……。お姉ちゃんと抱き合ったりキスしたり……。そしてお風呂だなんて、だいぶ……。だなぁと思ひまして。もしかして、寝るのも？」

「リズがそうしたいなら、するけど……。サクラ、待っていてくれると思うから」

「あー、二股だぁ。愛人だぁ」

チクチクと責めてくるけれど、自分を一番にするこだわりようは、なんともリズらしい。

それなら僕も、同じく返す。

「痛っ。あいたたた……。っ。急に肩が……。っ」

「も、も……。わ、わかってるよっ。ごめん。冗談だから」

「うっん。いいよ」

小芝居などという科目はなかったはずだけれど、これなら及第点を与えてもいいと思った。

例えばそれは、僕がずっと知りたかったことの一つなのかもしれないから。

「オフロ……。お風呂、ね……。じゃあ、体、洗ってあげる」

「えっ!? いっ、いや、いいよ。そこまでは。さっき入った時洗ったし」

「汗、かいたって言ってたじゃん。私のせい、みたいな顔して。いや、まあ、私のせいだと思っただけ……」

「き、気にしないで。本当に大丈夫だから!」

「何よ。嫌なの? 私のこと、嫌いなんですか?」
「そうだ。」

これが、“嫌じゃない”と“好き”の狭間なのだ。

「うっん。嫌じゃない」

目を開けていられないほど恥ずかしくて、それから少し痛くて、最後はほろ苦い。感情は感情の形を歪ませて、表情は透過できないほどに淀んでいる。潤んだ瞳で見ると、三日月のように。

嬉しいのかも悲しいのかも後回しにして、ただただ美しい満月が像を結ぶ光景。

僕は今までずっと、それを見ていたのかもしれない。

記憶の中の潤んだ月は爛々と、とても綺麗に輝いて。物心ついたときから隣にある尊さと、変わり映えのしない愛おしさとが、延々と共生生きてきた。

大きくなる感情は、僕の身長が伸びたから。近づく距離は、彼女の心が成長したから。

線引きをしたのは、他でもない僕だった。

だとすれば、線を踏み消して引き直すのも、また僕でなければいけない。

そんな瞬間を、僕は見た。

そうしてやっと　これからもきつと　ただずっと、僕はリズムのことを、キスしたいくらい“好き”だから。

「大好きです」

潤つことので、明日を据えて。(後書き)

【あとがき】

作者自身も、きっとルートもリズムも、強く実感していない気がします。

今章今話で漸く、二人の想いは叶ったのですけれども。

前章のような「贖罪」ではなく、本当の意味での愛……。

思えば長かった……。(いつの間にか百話超えた)。

そう。始まりは、とある夜に思いついたトリックと、三行半。さ
んぎょうはんです。

ここへ来るまで、二年強かかりました。

感慨無量です。よし、これで安心してあの世に……。

潤ってます。

暫くイチャイチャすると思いますが、許してあげてください。

元々こつこつ話です。

次回は、愛と勇気のおはなし。

繋がること、明日になって。(前書き)

【まえがき】

四日目ですからね。注意です。
時間は早く流れます。

ぶ・

繋がるのが、明日になって。

四日目。

昼。

「自分ちに入るのにこんなに緊張するなんてね」

「そ、そうだね」

ただいまと口を揃える前、玄関の扉に手をかける時から、すでに軽く震えていた。いつぶりになったか、二人で手を繋いで家に帰ったからというものもあるけれど、それよりも不安が勝ったと思う。

昨日の夜、アリスとノアの二人に一部始終を話したら、「家族に伝える」というアドバイスを貰った。許してもらえない覚悟で話すことになるけれど、気持ちを知ってもらうことができるし、伝えることで色々吹っ切れるとのこと、リスと二人で納得して今に至る。おかげで、いつもなら安心する母の声も、耳の奥の方ではひっそりと拒んでいそうだった。

「あら。おかえりなさい。早かったじゃない。夕方頃戻る予定じゃなかったかしら」

台所の方から、エプロン姿の母が出迎えてくれる。

髪を結んでいて、さらには左手に菜箸を持っている。僕たちの前に立ち止まると、ふわりとバジルの香りが漂ってくる。我が家の休日の定番昼食パスタの支度中だろうか。

「あ。うん。ちょっと忘れ物」

このあと、また戻らなければならぬから、二人で口裏を合わせ、てそつという設定にした。

このまま玄関に突っ立っているわけにもいかないので、もう一度「ただいま」と返事して、そそくさと靴を脱ぐ。「とりあえずただいまー」と、リズも続く。

「忙しないわねえ。何を忘れたの？」

「えつと……」

「下着」

母に差し止められる僕の横からリズが捨て台詞を吐いて、そのまますたすた歩いていく。

急いでいる感じがするのは、時間があの場所よりも早く過ぎるせいか。

「あら？ バッグにちゃんと入れといたわよ。五日分」

「プールと温泉に毎日入ってたら、採算が合わなくなったのー」

限りなく嘘に近い真実なので堂々としていられるけれど、言っていることはかなり混沌としている。思わず笑ってしまいそうになる。

リズが洗面所の方に消えると、僕に飛び火した。

「ルートも？」

「ま、まあ、うん。そんなとこ。あははは……」

「あら、そうだったの。ふうん……。プールと温泉ねえ。あなたたち、道理で……」

「えつ……」

唐突に、母の視線が僕の爪先に飛んでくる。そこからじわりじわりと上に移って、僕の目のところで暫く止まった。仕上げと言わんばかりに、母は多少強引に僕の頭を撫でくり回した。

恥ずかしさと緊張で、酷く動悸がした。

「どどどっ、どうかしたの？」

「道理で、なんだか懐かしい匂いがすると思ったのよ。誰かにシャンプーを借りたのね」

コーヒー園を経営しているからか生来か、母は鼻が利く。それはもちろん、色々な意味で。

そういう前置きなのかもしれないので、僕はまだ気を抜かない。

「ああ、うん。借りたよ。サクラの」

「お友達？」

「うん。アカデミーで同じクラスになった……ほら、前に話したでしょ？ 和っぽくてトラブルメーカーの」

「噂の子ね。でっ、可愛いなの？」

「うん。すごくかわ……って！ そ、それは、僕に聞くことじゃないってば！」

「そうなの。すごく可愛いよねえ。うふふっ」

不敵に笑う母の表情は、今まで通り一ミリも読めなかった。

何に対しても泰然自若な態度を貫く瞳には、もうすでに真実が映ってしまっているのではないかという気さえしてくる。これまで、一度たりとも隠し事が成立したことが無いから。

まあ、今日、端から隠そうとは思っていないのだけれど。リズムも僕も。

ただ、下着を回収する時間くらいはあってもいいと思うのだ。

「桜ちゃんだっけ？ その子の家はどこなの？」

「えーと……木の、上？ ログハウス？ どっちだろ。というか、あれは家なのかな」

「まあ。随分クリーンな家なのね。ご家族は？」

「まだ見てないかな。多分、出張か何かだと思う」

サクラはそこに関して全く触れようとしないし、話題が出るとすぐに脱線させてしまう。

そうする詳しい理由はまだわからないけれど、余計な情をかけてサクラに負担はかけたくない。だから僕は、いつかサクラの方から話してくれるのを待つことに決めているのだ。

「そう。それは可哀想ね……。それなら今度、うちに連れていらっしやい。少しは寂しいの忘れられるでしょ？ もちろん、桜ちゃんが来たかったらでいいわよ」

「うん！ ありがとう。今度誘ってみる。サクラなら絶対来るよ！」
そして荒らすよ、特に僕の部屋を……とは、一先ずは言わないで

おく。

「桜ちゃんはボディタッチ激しめなんだっけ？」

「う、うん。まあ」

以前、サクラを話題にしたときに、それに準ずることを発信した覚えがあるが、そんなにストレートには表現していなかったはずだ。鋭い洞察力はさることながら、記憶補間能力も誰かと似てかなり前衛的である。

「それなら、その子の髪を触る時は優しくしてあげなさいね。肌ももちろんだけど」

「ん？ どうして？」

過剰なくらいがちょうどいいと思っていた手前、疑問が生じる。

口から出任せなど発しているはずもなく、母の言葉は母たり得た。髪の手がとつても繊細だからよ。その子。多分、肌も」

「繊細？ ダメージに弱いつてこと？」

ガサツとまではいかないけれど、その表現はサクラには不似合いだと思ってしまった。神経質なイメージの強い言葉だからだろうか。あの寛容な笑顔には見合わない気がするのだ。

その前に、一度も会っていないはずの母が「どうしてわかるのか」というところを、率直に聞いてみたくなる。

「それはもちろんわかるわよ。あなたたちも、昔使ってたんだもの。同じシャンプー」

「あ。そうなんだ。ということ、僕たちも髪の毛が……？」

今まで気にしたことなかったけれど、もしそうなら、ガサツな扱いをしていたのは僕の方なような気がしてくる。

「そんなことはないわ。ちゃんと立派に育ったもの、二人は」

「二人、は……」

意味ありげな笑みに不信感を抱きつつも、僕は少し照れて見せた。でも、対称となるサクラはどうなのか心配になってしまって、何となく表情は晴れなかつたと思う。

母は、一瞬、正面から視線を逸らして言う。

「乳幼児用なのよ。そのシャンプー」

「そう、なんだ……」

薬用成分が少ない造りになっているくらいだろうから、僕のような健康体の人間が使用するのに問題はないはずだ。けれど、その健康体の中でも飛び切りの健康体である人間がそれを使用しているということへは、若干の衝撃を受けた。

でも、なるほど道理で。

今思えば、ビーチにいた時もバーベキューをしていた時も、一貫してパステルグリーンのパーカーを着用していた。あのサクラの性格からすると、せっかくのリゾートなものにも関わらず露出が少なかつたように思う。ずっと木陰にいたようだったし、屋外に長くいたような気もしない。

つまるところ、あれは自己管理だったわけか。

もしかすると、学校でいつも身なりがきちつとしているのもそのせいかもしれない。

「あのサクラが、ねえ……」

「ま、そうじゃなくても、女の子には常々、優しさが必要ななのよ。

あなたたち、そういうところ疎いから」

「そ、そうだけど。そんな別に……」

お付き合いをするわけではないからと続けようと口はもごもご動いたが、どうにか声は心に留めた。

これから、それについて話すのだ。自分の首を締めてはいられない。

「友達だしさ」

「友達でもよ。いくら仲が良くても、きつく当たっちゃダメなものなのよ。女の子は特別柔らかくできてるんだから。誰かを優しく包みこめるようにね。いろいろ適当な子だけど、リズムも。もちろん、ルート。あなたも、ね？」

「うん」

「だから、女の子どうしの友達だって、どっちかが強く当たったら、

二人とも破けてしまうの。姉妹だっで一緒よ？」

何となくわかってしまった。

母が、もうすでに何かを感じ取っているのだということ。僕たち二人の距離感の概算を、僕たちよりも遥かに早くしているのだということ。

あるいはそう言う口車なのかもしれないけれど、今日は、その車に乗ろうとも、目的地は同じはずなのだ。

なぜなら僕は今日、両親に告白をしにきたのだから。

「お母さん」

「うん？ どうしたの？」

僕とリスとが望む、二人の在り方を。

「えっと。お話が、大事なお話が、あるんだけど……」

僕が父に「ただいま」と言うと、「早かったじゃないか」と、母と同じようなくだりがあった。

父は母ほど勘が鋭くないから、やり取りは何事も無く終わって、後は出されたパスタを食べるだけになった。

ただ、すぐに食べる気にはなれなかった。

大事な話をする宣言をしたこともそうだし、そのためにリスがないのもそう。もちろん、パスタの味が苦手なバジルだということもある。

だから、僕はリスを待つ。

リスと、母を待つ。

少し息がしづらかった。

その時だった。

神妙な顔つきの二人が、ここダイニングに帰って来たのは。

リズの表情は、お腹が空いている時の不機嫌そうなあの表情とはまた違っていて、思うところがある。共感にも似た、安堵だろうか。これから振り絞る勇気の対価より、それは重かったのだと思う。

リズは足音も立てないで僕の隣に座って、母は僕の向かいに座った。いざ面と向かうのは怖くて、僕はリズを一瞥した後、父を見た。“新惑星発見”の見出しが目立つ新聞を読みながら、すでにパスタを啜っていた。

少しだけ間があって、何となく父が浮いた。

父は、割と早くそれに気付いた。

「ん？ なんだ、どうしたんだ？ みんな、食べないのか？」

また少し間がある。

僕は、母とリズを一瞥して、また父の方に向き直る。

「えっと。ちよつと話が、あるんだけど……」

こういう時、初めに口を開くのは大抵リズなのだけれど、そんな様子はなかった。先に母と何か話してきたのだろうか。用意してきた言葉をすでに、全部言い放ってしまったようにも見えた。

昨日の作戦会議が水の泡だ。

「どうしたんだ急に、畏まって。欲しいものでもあるのか？」

「あ、うん。ちよつと違うかな。いや、違くもない、かも……」

与えられたものだけで満足できた僕は生来、おねだりというものをしたことがない。

つまり、父も強請られたことが無い。

互いに不慣れな会話であるからか、僕と父との間の温度差が縮まっていく感覚に囚われる。

もう手に入れているような気すらする妹を、改めて欲しいなど、一周回って言えない。

「ど、どうしたんだ？ まさか……、なにか悪いことでもしたのか？」

「うーん……」

「な、なんだなんだ？ 母さんは知ってるのか？」

「ううん。知らないわ。ねっ？」

何か知っている口調で、母はリズに振る。

リズの沈黙は、僕の沈黙に被ったようになって、自然、母の巧言がそのまま僕に回された形になる。

互いに出を窺っているからか、空気は少し張っている。

この静けさに名前を付けるとするならば、僕の沈黙ということになるのだろう。

例えば、この場で「僕たち二人で罪を犯しました」と言って、許されようなどとは初めから思わない。言い逃れるために帰って来たのではなくて、試されるために帰って来たのだから。

だから、ぶつからなければならぬ。

誰よりも一番、距離感のわかる“家族”だからこそ。

「あの……」

僕は重い口を何とか動かした。

父の、それから母の、ストレートな視線を浴びる。

昔からずっと、見つめられてきた優しく暖かい眼差しそのものだ。

そのはずなのに、今日この瞬間は、温度すら感じない。

ダメだ。これでは、助走が足りない。

「あのさ」

もう一度踏み切った、まさにその時だった。

僕の手になじみかきかき温かいものが、ふわりと触れた。

リズはこういう時、ずるい。

息をつく隙に一瞥すると、それがリズの手であることがわかる。

テーブルの下、父からも母からも見えない位置で、それは僕の手を握っていた。表情は汲み取る時間がなかったけれど、握り返すことはできた。

記憶を掘り返すような速さで経過する時間を、僕は肌で感じるこ
とができる。

そして、僕は告げる。

「好きになっちゃったんだ。リズのこと」

間があるものだろうと覚悟していたから、二人の反応に意外性はなかったと思う。

確りと、追いかける言葉も持っている。

「だから何かをして欲しいって訳じゃないんだ。ただ、知って欲しい
くて……」

知った上で切り離されるのであれば、それはもう仕方のないこと
ただし、それは諦めるのではなくて、会うこと自体の価値がその分
大きくなるだけだということ。

一秒や一分の価値は、決して変わらない。

時間は、経つべくして経つものではなく、自分で気付いて、そし
て刻むものなのだから。

「私も……」

漸く聞こえたリズの声は、いつもより遙かに小さかったけれど、
繋いだ手を通して僕に一番早く、強く響いた。

僕が頷けば、リズの気持ちが伝わるような、不思議な自信を覚え
た。ノアの気持ちも少しだけわかった気がする。

元々、家族の前で公言するというアドバイスを考え付いたのは僕

自身だ。ノアにそんなアドバイスをして、実際に同棲する結果になったのだから、裏付けはなされている。

まさか当事者を演じることになるとは思いつきもなかったけれど、けれど、良かった。

僕の手は、こうして温かいから。

「そうか……」

父はフォークと新聞を机の上にゆっくり置いて、一呼吸置く。

母をも捉えない優しい眼差しの奥には、紛う事なき真剣な至言が見えた。

「ルーツもリズも、賢い子に育った。だから、自分たちが何をしているかというの、ちゃんとわかっているんだろうと思う。本当は隠したいことだろうに、そんなことをこうして話してくれるんだ。素直で、思いやりも持っている。その上、顔なんかは巧く母さんに似て。そりゃあ、好きにもなるだろう」

「お父さん……」

僕も、違っただと頷く。

「ああ。わかってる。だけど、なんでだろうな。父さんは、そんなに嫌な気はしない」

「お、お父さん……？」

「仕事が忙しくてあまり構ってやれなかった時期もあったし、スポーツが苦手だから一緒にやるってこともそこまで無かった。だから、自然と引け目を感じて、報いようとしているのかもかもしれない……」

「ち、違っよお父さんっ。お父さんは、夜遅くまで働いてて大変なのに、それなのにいつも優しく、全然怒らなくて、時々鈍くさいけどやっぱり頼りになって、それで……。とにかく、大好きっ！」

リズから感謝が溢れると、それに呼応するように、父の目からは涙が溢れた。

ありがとっ、と真っ直ぐな言葉がリズへと伝わる。それは繋いだ

手を經由して、僕にも伝播した。

「家族が一緒にいられる時間って、長いように見えてそうじゃないからな……。だからなんだろうな。リズとルートがずっと二人で一緒に居てくれるって思ったら、『良かった』って思ってしまったんだ……」

「あらあら。頼りないお父さんねえ」

母はおもむろに広げた食事用ナプキンで、父の目を擦った。
手が、俄かに汗ばんだ。

「それでいいのね？ あなたたちは」

母の慧眼に射られたからだ。

その慧眼もいつもと同じく優しく、僕らをぎゅっと押し込めるように強くて柔らかい。でも、気持ちは決して押し潰さない。

ここに来ていつも通りである母には、まだまだ勝てないなと思っ
てしまった。

「うん」

僕は頷いた。手を繋いでいたから、リズが頷いていたのも何となくわかった。

リズも僕がそうしたこと気付いたのか、知らしめるように握力が
増した。温もりを返すよう、僕もひっそりと握り返した。

母はさらに問う。

「これから、二人を咎める人がたくさん出てくると思うわ。それで
も？」

「うん。僕が、リズを守るから」

「リズなんか、すぐ男の人に誘われるわよ」

「わ、私は男に興味ないしっ」

「人前でキスなんかできないわよ」

「あ、あれは劇だったからで……！」

「子供は、できないわよ……？」

明らかに、声の調子が変わったように思う。
当然だろう。

けれど、僕だってそれは必死に考えた。存在しない答えを、只管に展延し続けた。アレンと付き合って、一人の女性であることを自覚して、わからなくてもがいた。

もがいてもがいて、そうして一つの答えにありついた。

「できる、よ……」

答えが存在しないのならば、作ってしまえば 創ってしまえば
いいのだ。

彼氏彼女という関係性、その延長線上にあるものが夫婦。男性は夫で、女性は婦であるべき。あるべくしてそうなっていて、意味や言葉はあとからついてきた。決まりはないけれど、自然とそうなっていて、そうする者が多かった。

そこに選択肢などありはしなかった。

ならば、僕たちだって同じだと思った。

気持ちを通じ合うことを愛と呼ぶのなら、夫婦は夫婦でなくともよいはずだと。そうしてしまえる世界を、作ればいいのだと。

「僕、生物学の研究をしようかなって思ったんだ……。遺伝子とか、発生とか。元々科学は好きだし、星と似てることもたくさんあって、結構興味あるんだ……」

そうして、僕とリズでも子供ができるのなら。

それは、世界に新しい選択肢が生まれる瞬間でもあるのだ。

「うふふっ！」

母があまりにも唐突に笑うので、僕より先にリズが訝った。

「な、なに？」

「ううん。何でもないわ。ただ、ルートの初おねだりが“リズ”だなんて、ちょっとおかしかったってだけ……ふふっ」

「ちょ、ちょっともう、やめてよ……！」

撫でるように反論すると、一瞬、きゅっ握られる。

ちらりとリズの方を見ると、僕の羞恥が伝播したかのように赤面していた。

確かに、ちょっとおかしかった。

「ふふっ……はははっ」

つられて笑ってしまう。

少しの間後、団欒は笑いに包まれた。

これが、僕が望んだものと、心の底から思った。

「さあ。早く食べましょう。せっかくの Pasta が延びてしまうわ。

今日は、バジルのとアサリのと二種類作ったのよ」

「そうだな。さっさと食べよう」

「お父さんはもう食べてるじゃん」

「ははは、そうだね。じゃあ、僕たちも食べようか。みんな待ってるし」

僕らの半分の時間で、僕らの倍の速さで、止まらない時間の中で。サクラあたりがきつと、待ちきれなくて機嫌が悪くなってしまっから。

リズの分のフォークを取って渡して、僕も自分の分を取る。母も自分の分を取って、父はそそくさとテーブルのフォークを拾う。

「いただきます」

僕の合図を皮切りに、小気味よく三人が続いた。

それから暫くは、磯の香を懐かしんだ。

半分も減ったところで、父が水を一気に飲みほして閃いた。

「そうだ。これから小論を書くつもりなんだ。リズ、悪いけど部屋

をどいて貰えるかな」

「んー……うん」

僕のおねだりに巻き込まれているからか、リズムも断り辛そうにしている。

駄々をこねたから恋愛感情など許さない、ということとは父の性格だから無いだろうけれど、こちらがかなり下手に出た事実には確かにある。暫くは、潔く両親の言うことを聞くことになるのだと思う。

それが、お互いの気持ちに折り合いをつけるために必要だと思う。「すまんなあ。小論なんて久々に書くから、書斎でもあった方が良いかと思つてな」

無い顎鬚を撫でるような素振りでも、どこか得意げに見える。

口調も、父にしては少しばかり仰々しいように感じたので、尋ねてみたくなる。

「なんの小論なの？」

「テーマか？ そうだなあ、心理学になるだろうか……。詳しくはまだ言えんなあ」

父から恋愛などという言葉が出てくることに、不和は感じざるを得ない。

昔から、言語学だったり統計学だったり、聞くからに玄妙なことを題材に話を演繹することが多かったと思う。より具体的に、正確に、というところに重きを置いて。

それが、心理学などという抽象的が過ぎる学問に変わったのだ。

一体、どういう風の吹き回しだろうか。驚かずにはいられない。

「な、何の心理学なの？」

「恋愛、だよなあ……」

「えっ、他人事なの！？ 計画とか立ててたんじゃ……」

「ついさっき思いついたんだ」

「えっ、ついさっきなの！？」

「と、言うわけだから。リズム。帰って来てからでいいから、荷物を運び出して欲しいんだ。重いものは手伝うからな」

「えっ、結局追い出すの!？」

「はい。わかったー」

「えっ、いいの!？」

なんだか色々と曖昧だけれど、そんなことで、序本結は紡げるものなのだろうか。文芸家とは、得てしてそういうものなのだろうか。身の危険をひしひしと感じたようで、思わず鼻息を荒くしてしまふ。

それを鎮めたのは、訳知り顔の母だった。

「ふふふっ。今日のルートはお喋りねえ。鈍感なのは相変わらずみたいけど」

「い、いや、だって……!」

あたふたと視線を散らしていると、母が耳を貸すように小さく手招きしたのに目が留まる。

ゆっくりと顔を近づけると、母は少しわざとらしくはにかんだ。

口元を隠してはいるけれど、そこはさして耳に近くない位置だ。声の大きさを家族全員に伝わってしまうようだけれど、無粋なのは僕だと知っている。

僕はできるだけ、首を伸ばすようにして聞いた。

「お父さんね、すごく不器用なの。これでもあなたたちのこと、気遣ってるんだから、察してあげなさい？」

「う、うん……?」

誠に残念だけれど、現時点では全くわかっていないのが実情だ。

とりあえずで領きはしたものの、リスが部屋から追い出されて嬉しそうにしている意味が理解できていない。それが、どうして気遣いになるのだろうか。父が不器用なのは理解に易いけれど、これでは逆に器用くらいの話なのではないだろうか。

これは、あとでリスに聞いてみるしかない。

「パスタ、お代わりあるけど食べる？」

どのタイミングでどれくらい食べたか全く覚えていないのだけれど、僕のお皿の上にはアサリの殻だけあって、寂しげに口を開けて

佇んでいた。

でも、父の皿も空で、リズの皿も空で、母の皿も同じだった。

そして、時計は確りと家族の時間を刻んでいて、一秒の価値を見出している最中だった。

それでも、「美味しかった」の感想の価値は変わらない。

「ううん。今日はいいや。桜が待ってるから」

「あ。そう言えばそうだったね。忘れてた。まあでも、待たされて強くなる子だから。桜さんは」

「あはは……」

どこからそう言う見解が導き出されたのか気にはなったが、笑い流してしまふことにした。

一つ息を吸って、「さて」と吐く。フォークをお皿に乗せて、グリーンティーの入っていたコップを重ねる。立ち上がるまでに、わずかなりとも無駄な動作は挟はさままない。

傍から見れば、急いでいるように見えるだろうか。

それこそ、始業式に間に合うように匆々と。交わる視線に微熱して、離れることのない距離感に困惑して、遂にはその柔らかさを肌に求めて。もどかしさを超えた先にあるどうしようもない誇りと、絶望を越えた先にある希望。あるいは、また微熱。

僕の求めるものは、遙か前、初めの初めから見えていたことに違いない。

「ごちそうさま、でした」

見ようとしても見えなくて、路頭に迷って、でも目的地は知っている。

そんな安心感にこそ、怯えて泣いて。やり直して、また泣いて。二度とない世界を、もう一度生きて。それでも、僕は嬉しくて泣いて。目に見える悲しみよりも、感じられる温もりの尊さを知って。

だから、僕はリズが好きで。

「行ってきます」

こうして、一緒に歩いていきたいと、そう思えるのだ。

すっかり語り尽くされた僕の気持ちは、形容するのなら「愛」なのだろう。

繋がることが、明日になって。(後書き)

【あとがき】

ここはかなり重要なところなんじゃないかなど。

理解を求める恐怖……。

理解されない覚悟……。

貶され罵倒されるためのレンアイ……。

現実はそのなにより上手くはいかないものですが、諦めなければいつかは叶うものです。

このタイミングで苦勞する表現も、やろつと思えばできましたが、あえてしませんでした。

一回死んだのを見たなんて、つらいにもほどがありますから。でも、負けない。

実はルートが一番強いのかもしれません。

次回は、この続きです。

そらそうか。

前もやったな、このくんだり。

想うほどに、明日は見えて。(前書き)

【まえがき】

ついに十日目。リゾートともお別れか……。
もっと海入つとけばよかったな……。

そんな感じですよ。
どうぞ。

想うほどに、明日は見えて。

十日目。

夜。

月の綺麗な夜は肌寒かったけれど、やはり常夏の空気というものも健在で。

肌を感じる冷気の中に、湿気であったりとか香りであったりとか、わずかなりとも感じる事ができる。

漸く戻ってこれたという感覚は、僕だけのものではないらしく、隣の木で眠っていたリスは瞼が重そうだし、ずっと学校の屋上庭園で待たされていたサクラはとても機嫌が悪そうに見えた。

「今日だけ許すのじゃ」と肩を怒らせるサクラの表情は、その時の僕には複雑すぎたと思う。

風呂から上がると、僕とルリ会長の寝床が反転していることに気付いて、なるほどそういうことかと、膝を叩いたところだ。

昔はこうしていたはずなのに、何とも不思議な気分と、それから不思議な距離感だと思った。別段、何かするつもりもないから、これは相部屋に対する懐古の念であろうか。

変に口数が減るということは、幸い無かった。

「ね」

隣に座ったりズグが、ぴょんと軽く跳ねつつ発音する。

跳ねて近づいたと思う距離を、僕は「どうしたの？」と訊いて確かめる。

「桜さんのこと、好きなの？」

「かつ?!」

夜、大きな声を出すわけにもいかないからと殺すと、反動で掠れる。

グリーンティーを飲んでいたら、きつと嘔き出していたところだろつ。

茶を濁す前に詰め寄られる近さに、僕は懐かしさを覚える。

「ねね。どうなの? 可愛いとは思ってる?」

「ず、随分急な質問だねっ」

「全然急じゃないもん。いいから言っって」

ずいずいと迫られる。

僕はリズから逃げない。

「可愛いとは思ってるよ。好きか嫌いかで言えば、好きだし。でも、リズへの好きとは違うよ」

「ふーん。そっかー。じゃあ、どういう関係なのー?」

「大切な友達だよ。……ど、どうしたの。なんでそんなこと聞くの?」

リズであれば、その辺の事情など、推察で十分満足してくれそうなどころだけど。

僕の言葉が欲しいのはわかるけれど、それならこんなにも密着する必要は無いように思う。僕としてはラッキーなのだが。

「ルーのこと、もっと知りたいの。正直、桜さんに興味は無いんだけど、さっきもルーのこと好きだとか言ってたし、ルーもルーで桜さんに信頼を置いてるから。別に悔しいんじゃないけど、知らないままにしておくの、なんかヤダなって」

「リズ……」

僕自身、リズの交友関係まで知りたいと思ったことがあるから、何となくその気持ちはわかる。そして、できれば同じものを好きになりたいということも。

ましてや、相手がサクラだから尚更だろう。得体が知れなさすぎる。

そういうことなら、僕がリスに口を噤む理由は無い。

「友達が良いんだけどさ。結局何者なの、桜さんって」

「む、難しい聞き方だね」

僕が知りたいくらいだと、目と素振りです。

リスが、むっと頬を膨らますと、ベッドも不機嫌そうに音を立てて軋む。

「まずさ。話し方変でしょ。すぐ嘘つくし。あと、バカそうに見えるてバカじゃない。やらしいことばっか考えてるし。急に変な事思いついて、譲らなかつたりする。都合の良い解釈ばかりで、利益が優先で」

「ほとんど悪口に聞こえるんだけど、合ってる気がする」

「でも、私も桜さんが可愛いのはわかる。元気で、明るくて、笑った顔なんかはすごく可愛い。しかも素直で優しく、誰かが迷ったらとっぴあえず首を突っ込む。人のことなんて考えてないよう、ちゃんと考えてる」

「うん」

見える程に、浮き彫りになっていくのは、夏の陽気にも似た中身の無い暑さ。

あるいは、乾いた冬の寒さのような、深く暗い湖に沈んでゆく情景。

「桜さんって、何者なの？」

だからこそ、僕はサクラの“特別”足り得るのかもしれない。

期待するような返事はあげられないから、僕は首を横に振る。

「リスの言った通りだよ。優しく可愛くて、ちょっと変なクラスメイト」

詳細は話せば長くなるし、話しても話しきれない部分はまだたくさんあると思う。

「ふーん。そー。ま、いいや。桜さんなんて興味ないし」

サクラに限ったことではない。

アリスだって、ノアだって、ルリ会長だって、例外なくアレンだ

つて。僕は、確かに交流を持っているけれど、それですべてを知れたことにはならない。僕に見せていない部分だってあるだろう。

それは勿論、リズだって、僕だって同じはずだ。

「ねえ、リズ」

「んー？ どしたの？」

もし、好きになるということを量的に表せるのなら、それは多分相手のことをどれくらい知っているかということと殆ど同じになると思う。何の証拠にもなりはしないけれど、自分の中にある気持ちの数だけ、それはキスをする時の自信になり得る気もするのだ。

だから僕は、アレンのことを知ろうとした。

アレンが知ってもらおうと話してくれたから、すごく仲良くなれた。

好きだからこそ、知りたい。好きだからこそ、知ってもらいたい。つまるところ、それこそが“好き”という量的なデータの正体なのだと思う。

でも、僕は決定的な過ちを犯していた。

「まさか何かする気っ？ 押し倒すっ？ 押し倒すのっ！？ 私、

押し倒されるっ？」

「ち、違うよ……」

「いやあ、まあ、いいよー、別に。でも、何となく、ルーは断りを入れてからするタイプかなって思ってたねー」

「そうかも……っつて、違くて！」

僕自身を、知ってもらおうとしていなかった。

認知の重さとはその違いなのだと、僕は気付いて。

「僕のこと、もっと知って欲しくて……」

「なるほど。体に覚えさせてやるー、ってこと？」

「お、怒るよっ」

「あはははは。全然怖くない。うそうそ、冗談だよー。……それで？ 何を教えてくれるの？ 私、ルーのことなら大体なんでも知ってるよ」

だから、知ってもらいたくなかった。リズの知らない僕を。そうして、リズの中に僕を溜めていって欲しいと思った。いっぱいになるまで。

遠回しな言葉でも、飾らない仕草でも、ぶっきらぼうな態度でもいいから。

とにかく、僕を。いや、私でもいい。

「じゃあ、リズの知らないこと言うね」

「うん。なに？」

「信じてもらえないかもしれないけど、実は僕」

認知は取り返しのつかないものだ知っている。

だからこそ、アレンの話は重く感じてしまったし、僕の返答は甘くなつた。

認識して知ってしまったら、それは必然的に知識になって、忘却に退路を委ねられてしまう。知識とは、事実上、後戻りはできないもののだ。

今、僕が思うことを話せば、或いは本当に「現実と夢」がごちゃ混ぜになってしまうかもしれない。そうなればきつと、もう引き返せないのは明々白々。リズとの記憶を天秤になどかけられるはずもないのだから。

それでも、僕は知って欲しかった。

狭間にある存在こそが僕であるから。今を生きたいから。

それでも、リズが好きだから。

「世界を一度、やり直してるんだ」

「そんで？ アレンにはレーアって名前のお姉さんがいたんだけど、その『願い』のルールに違反したからって、存在が消えたってこと？」

「僕の推察では、そうかな。というか、人が消えるだなんて非現実的なこと、それ以外考えにくいよ」

元々、ファンタジーが好きだから素質もあつたかもしれない。

都市伝説の『願いの夢』を見たこと、そして僕が世界をやり直したこと、ノアとサクラも『願い』を叶えたということ、レイル会長が存在ごと消えてしまったこと。

僕は順を追って、淡々と、静かに話した。

リズは一切の否定もせず頷いて、寄り添うようにすべて聞いてくれた。

真実か虚構かではなくて、信じるか信じないかの違い。

灰色の狭間は、そんな温かさで満たされたと思う。

「まあ、そうだよな。普通、あり得ないもんね。普通ね」

そう。普通は。

でも、もうすでに、リズにとる普通は普通を超越してしまったのだ。

今まで所有していた物差しでは、もう何も測ることはできなくなる。

そうになると、木の中で数時間眠るとリゾートに到着すると言う方程式も、現実味を帯びてくる。今まで異色だと思っていた空気が、一転して彩りを失い始める。

でも、僕はまだ、色を保っていたから。

リズの瞳にも、僕が宿っていたから。

「でもさ。やっぱり、何となく一つ変なところあるよね」

「アレン君がお姉さんのことを覚えてること？」

『願い』の力の全貌を知ったわけではないから、一概に変であるとは言えない。言えないのだが、そこがどうしても腑に落ちないのだ。当事者である僕からすればアレンは完全な部外者なのだから、記

憶は僕以外の人間様に消えて然るべきだ。それが良いとか悪いとかではなくて、そうでないと不自然なのだ。実に不協和なのだ。

そうでなければ、誰かが特定多数の人間の記憶を改竄したかだ。だが、『願い』の力は、特定多数の人間を対象にできないともあったはずだ。

僕には、それが『願い』の力そのものの“限界”のようにも思えてならないのだ。つまり、為された補填が十分に行き届いていない、という状態。あるいは、曖昧であることの対価。

今まで完全だったものに、突然、亀裂が入っていく感覚とでも言い表せるだろうか。

それが、この違和感を形作っていると言える。

「それはそうだけど、もう一個」

「もう一個？」

この塊のような違和感の他に、何かあるのだろうか。

現段階で疑念が増えるのにはあまり気乗りはしないけれど、リズの声なら聞きたい。

耳と心を、声のする方へ傾ける。

「ルーだよ」

「えっ？ それって僕のこと言ってる？」

言霊を感じて、思わず振り向く。

僕のために色々考えてくれているのか、リズは思いの外神妙な面持ちでいた。

「そう、ルーのこと。私の大好きなお姉ちゃん。ラブマイシスター」

「う、うん、わかったよ。それで、なんで僕？」

わざとらしくすり寄ってくるので、満更でもなくなだめるに尽きる。

「だってさ。ルー、覚えてるでしょ？」

「うん。覚えてるけど。それは、僕が当事者だからで」

「レイル会長って人がアレンのお姉さんだってことも、でしょ？」

「そうだけど。それがどうしたの？」

どうやら、何か腑に落ちない点があるらしかった。

「だってなんか変じゃない？ それだったら、近くにいた桜さんだって覚えてるはずじゃん。ていうかそもそも、その人が強行突破しようとしたのって、桜さんが挑発して誘ったからじゃん？ なおさらだよ」

「それは、そうだけど……。 Sakura、知ってる風な素振りじゃなかったんだ」

隙を見ては、Sakuraに“もう一人の会長”の話題を出してはいるけれど、結果はすべて空振りだったのだ。

関係者であるアリスにも直接尋ねてみたが、「どうかしら？」と如何にも回答を頂戴した。アリスの場合は、知ってる知ってないよりも僕の顔色優先だから、初めからあまりあてにはしていないけれど。

「つまりさ、生徒会長が消えちゃったことについて知ってるって断言できるのって、ルーとアレンだけってことだよな」

「うん。そうなる」

「アレンは百歩譲ってもわかるよー。家族なわけだしさー。でも、ルーは別にそうじゃないのに……。あー、ほら。なんとなくやっぱり変だー」

「なんとなくって……」

リズの思う“なんとなく”が半分以上理解できてしまうのは、やはり血のつながりがあるからだろう。こういう時ばかりは、誇れる。反面、この先の結末も理解できてしまうから、悩む。

「そう。そうだよ。愛だ。愛」

「アイ？」

リズらしい偏った言葉選びに戸惑う僕は、思わずカタコトで返事をしてしまう。

「愛だよ。愛」と連呼するリズが楽しそうなのは、気のせいではないと思う。

「愛、がどうかしたの？」

「アレンだけが覚えてたらさ、それは愛の仕業で決まりだと思うんだよね」

「は、はあ」

「わかんないかなあ。なんかこう、ねえ、なんとなくさ。そっちの方が絶対ロマンティックだと思うんだよねっ！」

「やっぱりリズらしいな、としみじみ感じてしまった。少し、年寄りくさいか。」

でも、素敵な考え方だと思う。偏にポジティブであると評してしまつのが、本当に勿体なく思えるくらいだ。使い道というと冷たくなるけれど、リズの声は間違いなく多くの人の心に届くだろう。

そんな声を僕は、僕だけのものにしてしまったわけだ。

極度に嬉しい反面、かつてのプレッシャーが、ついさっきから息を吹き返し始めていた。

それに対してできることと言えば、せいぜい隠していたことを洗いざらい話すくらい。

「あ。それなら、少しロマンティックな話があるよ。言っても、僕自身の話だけだね」

「ほおん。じゃあ、寝物語に聞きましょうか」

リズはそう言い捨てると、ぼすつと無造作に枕へ頭を投げた。

僕の横から一気に飛んだので、刹那、埃と香が宙を舞った。

宙を舞ったので、窓の外を見た。

「えっ。もうそんな時間……って、時計はテラスか。ノアさんが作った日時計（ひげこ）。ごめん、リズ。こんなに長く話すの久し振りで、つい……。長話になっちゃったね。眠かった？」

「もー。空気読んでよー。あと、こっち見てよー。今なら、あられもない妹の寝姿が拝めるかもしれないのにー」

「あ、あのねえ……！ そんなこ」

何かどうしようもないようなことで反論しようとしていたはずだけれど、ぐいっと腕を引つ張られて、大方忘れてしまった。おかげで、残ったのはどうしようもない下心くらいだったと思う。

ぼすっ。

ああ。何年振りくらいだろう。

狭いベッドで、同じシーツをかけて、他愛ない会話を楽しんで、呼吸と寝息の混じったような心地の良い温もりを肌で感じるのは。形だけの話であれば、昨日までのサクラとなんら変わりないはずなのに。むしろ、サクラよりも寝相が悪いくらいなのに。

それなのに、こんなにも熱い。

絶賛展開中であろう“あられもない姿”というのも、まだ見られていない。

「え、なに。ルー、緊張してるの？」

「そそ、そりゃあするよ。いくら妹とは言え、好きな人と一緒に寝るんだから。逆に聞くけど、リスはしないの？」

「私がか。緊張してるって言っちゃったらさ。それは、もう、とうとうマズいからね。してないことにしとかないと」

「そ、そうだね……っ。じゃ、じゃあ、お話でもして落ち着こうか」「うーん」

そそくさと掛け布団を煽る僕は、きつと、目が点になっていることだろう。

どんな体勢で居ようとも、必ずどこかはリスに触れてしまう状況。大義名分の裏には何も隠れていないはずなのに、背中が中心がムズムズして視線は定まらない。

自然に眠れていた頃の僕が羨ましく感じる。

そもそも、そんな時代はあっただろうか。

小昔話を掘り起こすついでに探すけれど、そんなものは無いような気がして胸が熱い。

「えつとね……。一度目の世界の話なんだけれど……」

「私とアリスお姉ちゃんが死んじゃうってやつ？」

「あ、うん。だから、ちょっと不謹慎な話かも」

「ルーが辛くなければ話していいよ。ロマンティックなんでしょ？」
そう言われると何だか恥ずかしくて、僕は声無く頷いた。

思い出せば、胸が締め付けられるように痛む。けれど、今はそれよりも、二人が生きていることに心が竦むから。リズの温度を感じられることに、唇が震えるから。

引き換えに失われた二十二という数字は確かに存在しているから、無論、笑い事にするつもりはない。

けれど僕は、そこに幸せも存在しているのだと主張したい。

「その事件の夜は確か、雨が降ってたね」

「あ。それって、もしかして長くなる？」

憎らしくも愛らしくも、妨げるように小さく拳手される。

リズの気遣いであると、僕は勝手に解釈した。

「も、もう！　じゃあ結論だけ言うよ！」

「まあまあ、怒らない怒らない。ロマンティックは雰囲気大事」

「ちよつと……っ！　まあ、いいや」

元々こういう環境に強いから、こせつかないのだろうか。大人ぶっているだけか。

それとも、もしかすればリズは、この先の展開を察しているのかもしれない。ロマンティックであると言うヒントもあるのだから、可能性は大いにある。

それでは、僕が醜態を晒しているだけになってしまわないか。時宜は得てないけれど、僕は深呼吸を一度して、それから不謹慎を語り始めた。

「キス、したんだ。リズに」

「……………」
いつ、とは言わなかったけれど、言葉の流れとニュアンスで伝わったとする。

それくらいは、わかる。

血の繋がった家族であり、姉妹だから。

「えっと、ごめん。ロマンティック、ではなかったかも……」

「……………」
当時ほど辛くはないけれど、罪悪感が無くなったわけではない。
それに、僕のした選択に苦しむのは、なにも僕だけということでも
ないのだ。

この話で、リズが辛くなるのなら、もうする意味はない。

掛け布団に隠れて震える肩を、僕は静かに手首まで撫でた。

「本当にごめん……………」

「……………ねえ？」

「ん？」

怪訝に上がった語尾に対して、僕も問いで返す。

何かあるのかもしれないと構えて、僕は手首から指へと手を這わ
せた。五本の指は僕の気持ちに答えるように絡まってきて、自然な
流れで結ばれた。それは、布団の中で熱く固くなって、そのあと湿
気^けった。

「ホントそうなの、ズルい……………」

「え？」

「可愛い……………」

「えっ？」

「好き」

「えええっ!？」

僕の中に無い要素を指摘されたような気分だ。

でも、どうにかして見つけ出そうと探してしまっ自分がある。

「ねえ。冷たかった？」

「えっと、何が？」

「私のくちびる」

僕の耳がいけないのだろうか。リズの声がいけないのだろうか。

フォーカスがそこにしか合わなくなっているような、それ以外は
鈍磨になっているような、無二の感覚に陥る。

僕は、僕の声も聞こえないと思う、

「ま、まあ……………、うん……………」

「ごめん」

「ど、どうしたの？」

また傷つけてしまっただろうかと、焦る。

謝り、そして癒せるのなら、是が非でもそうしたい。

今度は確りと、気持ちでもって。

「ごめん……」

「リス？」

「私、死なないから。ずっと、生きてるから」

「そ、そんなこと……！」

言って欲しかったわけではないのか、言われてしまったらどうしようもないのか、僕はどちらでもよかった。どちらの自分も、リスを愛していたから。

言葉よりも思考するよりも早く、僕はリスを抱き寄せていた。

「僕も生きてる。ずっと」

「うん……」

互いの心臓の音が混ざって聞こえる程近くで。同期する瞬間、息を飲んで。スローになる世界で、ただ二人だけの小さな時間を生きている。

通じ合うことだけを願って、笑って。理解されることを望んで、泣いて。それでも生きていることに感謝して、また笑う。

その繰り返しは、簡単なようで難しいのかもしれないけれど。友達、恋人、家族、兄弟、姉妹、夫婦……。形は何でもいい。もはや、数だって問われないかもしれない。僕は性別だって問いたくないのだ。

だからこそ、それには愛という名前がついていて。

しかも特別、難解に構成されていて。でも、解答は誰もが知っている。

「リス。大好きだよ」

「私も、大好き。じゃあ、とりあえず、キスでもしよっか。温かいの」

その理由を探す旅を、僕たちはしている。

想うほどに、明日は見えて。(後書き)

【あとがき】

今章には「愛」と言う言葉がたくさん出てきます。

使い過ぎると軽くなると言いますが、私は結構軽々と使います。ジャンルもジャンルですので、共通語として「恋」よりも「愛」がしっくりくるのもあります。

けど、それよりも、言葉より伝わるものがあると思つので。

それは、サクラが一番得意そう。

今回は、シルバーウィークが明けます。

山折谷折、返事を添えて。(前書き)

【まえがき】

短めです。

悲しか。

ぶじぞ。

山折谷折、返事を添えて。

シルバーウィーク明け。
ノア宅前公園。

「ごめんなさいっ！」

平身低頭して叫んだ言葉は、地面はおろか金物の遊具を軽く共振させたと思う。

但し、音量がいくら大きくても、相手の心に届かなければ近所迷惑の絶叫に成り下がる。

でも、テスト期間中にも関わらず待ち合わせてくれる彼の器量であれば、意味は届いているはずではないか。

理解も納得も、求めるつもりは毛頭無い。

けれど、自分の中にある気持ちは 彼の告白に対する答えは、ちゃんと示さなければならぬ。時期を早めたのも、そのためなのだ。

僕は少し頭をあげて角度を調整して、もう一度、念を押すように言う。

「本当にごめんね。アレン君……」

謝罪には、『願いの夢』についてアレンに隠すことを決めたのも含まれていた。

そこに何かを期待するわけでも、ましてや失望するわけでもないけれど、やはり顔は見なくてはいけない。

そう思って瞳を開けば、アレンは微笑んでいて。告白の答え……そして、その応えは想像だにしなかった。

「ありがとうございます。お返事、ただけて嬉しいです」

はきはきと喋る素振りは何とも彼らしく決まっていたけれど、どこか無機質な面持ちというか悲壮感がある調子に思えた。

「それから」と言い添える、その声色もまた、仮面のせいでもって聞こえる。

「謝らないでください。ルートさんが悪いわけないですから」

「アレン君……。で、でもっ」
過程も結果も、そのすべてが謝れと言っている。

謝らなければならないのだと事急ぐ僕を、アレンは変わらない笑顔で止めた。

「どうしてフラれたのか……それを聞いたら、非道い（ひど）いですか？」

僕はアレンの彼女だ。

望むなら、それくらいの報いは笑って背負える。

「うっん。アレン君がいいなら、話すよ」

彼は「お願いします」と、二度頷いた。

僕も「わかった」と頷いて、少し待ってから告白した。

「好きな人が、いるんだ」

その表情の中に、語弊は無かったと思う。

そして、その返事にも語弊は無かったと思う。

「リズ、ですか？」

僕は口を開かずに「うん」とだけ言って、後は待った。

僕の後ろから、ひゅうと空風（からかぜ）が吹いた。

時を止めるように間隙を裂いて、どこへとも消える様は、アレンの告白をした時にも感じた他人行儀な素振りを反省しているように

もとれる。温度差という意味であれば、それは確かに物事の終わりを知らしめているから、納得できた。わずかに錆臭いのは、揺れる遊具のせいだろう。

暫くは忍び、噤んで、冬の始まりを感じていたのだと思う。

あるいは、常夏の思い出に耽っていたか。

その始終、僕はアレンを見ていたから、発言しようとしたのはすぐにわかった。

「俺、ルートさんと恋できて、幸せでした。会えてよかったです」「うん。僕も。短い間だったけど、すごく楽しかったよ」

次に温もりを感じれば、それは秋の終わりなのだろうと、名残惜しい。

けれど、仮に、僕が季節を司っていたとして、いずれかに傾倒することは無いのだと思う。

そうでなければ、何も省みることも無い。新しい発見をすることも無い。何も学ぶことができない。何かに出会うことも、できない。別れることは辛いけれど、でも、だからこそ、出会えた喜びと繋がれた幸せを、人は愛おしく感じられるのだと思うから。

「ルートさん。最後にもう一つだけ、聞いていいですか？」

「うん。いいよ」

「テスト、受かりそうですか？」

「あはははっ。当然だよ。皆で、合宿したんだから」

「それもそうですね！ 良かったです」

一つ間があつて。

そこには少し、距離もあつて。

「寒く、なってきましたね……」

「そうだね。少し着込んできたから僕は大丈夫だけど、アレン君、軽装じゃない？」

「いえ。大丈夫です」

また、一つ間があつて。

でも、そこに誰かが入り込めるようなものでもない。

「それじゃあ、そろそろ帰りましょうか」

「うん。そうだね」

「では」

僕は頷く間だけ、アレンのことを忘れようと努めた。

顔を上げた時、目の前に入る人が、笑っていてくれれば。

それだけを願って。

友達、恋人、家族、姉妹、兄弟　形は何でもいい。距離も、数も、性別も何でもいい。

幸せや愛を感じる心に、違いなどありはしないのだから。

「さようならです。ルートさん」

「うん。さよなら、アレン君」

山折谷折、返事を添えて。(後書き)

【あとがき】

これにてお役御免になるでしょうか。

実はラスボスであったりとかするかもしれないけれど、そういうお話ではないですね。

暫く考えてみたいと思います。

次回は今章まとめの最終話。

果たして、まとめられるのか。

いや、まとめる。

冬始まりて、秋終わる。(前書き)

【まえがき】

リア充がある。

ルーモスにリア充がある。

前からいたから、増えたのか。

最終話です。どうぞ。

冬始まりて、秋終わる。

数週間後。

これなら知らなくてよかった。

近頃、よくそう思うようになったのは、僕が適当にやり過して
いた制服の蝶ネクタイを、結んでくれる人ができたからに違いない
だろう。

間違った結び方を晒していた半年強と、彼女につけてもらう一分
弱。

後者の方が何倍も焦る。

「もー、ちゃんと前向いてよー。やり辛いなあ」

「ご、ごめん。慣れなくて」

首を触られるというのは、人間なかなか体験できるものではない
と思う。小動物らしいノアであっても、首よりは頭だろう。

おまけに、蝶ネクタイを固定する輪っかがワイシャツの後ろにあ
るらしく、そこに通す時、必ずリズの胸部が顔に当たるのだ。

慣れてはいけないぞと、僕は朝から必死なのだ。

いや、幸福絶倒であるか。

「はい、できたー」

「ありがとう。じゃあ、髪、梳かすよ」

「うん。お願い」

僕が立ち上がると、今度はリズが僕の座っていたところへ入れ代
わり立ち代わりで座る。

結構な勢いがあったからか、痛そうにベッドが軋んだ。

毎日そうしていたら、いつの日か拗ねてしまつのではないかと少し焦る。

ただでさえ二人用ではないのだから、例えば片足でも壊れてしまうのは困るのだ。

僕はリズの隣にゆっくりと腰掛けて、リズが好む力加減で髪を梳く。

「うんうん。そんならーい」

「わかってるよ」

こんなことをするのは、おそらく四歳とか五歳とか、それ以来ぶりだと思つ。一時期、僕も髪を伸ばしていた時期があつて、その時はよくこうしていた気がする。

同じ部屋で、同じベッド。もちろんお風呂も一緒に、パジャマも色違いだったりする。そうして同じ時間に寝て、また同じ時間起きる。

今は体が大人に近いからか、何となく不思議な感じがする。

リズの部屋として明け渡した書斎を父が再起動させたおかげで、僕たちは昔とほぼ同じ状況になった。それが父の計らいなのだ。知つたのは、リズにそう告げられてからだ。

何も言わないのが粹かと思つて、父には特に何も言っていない。

この気持ちは、父の日にも表現できればなと思つ。

「あ。そーいえば、テスト、どうだった？」

「僕は大丈夫だったよ。アリスもノアさんも、合格したみたい。サクラはテスト当日に休んでたけど、その後の再テストで合格してたよ」

「桜さんらしい」

「あはは……。リズの方はどうだったの？」

「私は勿論セーフ。アレンも、どうせ不合格じゃないよ」

それならば、実行委員会としては本望だと言えよう。

思えば本当に急な提案だったけれど、やってよかったと思つ。またやりたいかと訊かれたら、その時は、場所をもう少し熟考するべ

きだと言い添えさせてもらおう。

「こんな感じかな」

「おー。さらさらだー」

「うんうん。可愛いよ」

ブラッシングもほどほどに、手櫛でも滑らかに走るようになる。

元々の素材が良いのが一番だけれど、僕が手を加えたとさらに輝きを増していく。一役買っているその優越感が、僕の原動力になる。

「ルーは髪伸ばさないの？」

さらさらになった髪を撮みながら、リズが尋ねてくる。

僕も、遊びの無い前髪で頑張つて遊びながら答える。

「うーん。伸ばすのも、嫌ではないんだけど……。なんせ、似合う髪型が無いからなあ」

洗ったり乾かしたりする手間がかかるし、寝る時の後頭部のあの感じも苦手なのだ。

それに、昔からこのセミショートを続けてきているし、愛着が無くも無い。

「そんなことないって、ずっと言ってるじゃん。ルーはツインテール以外なら似合うから、絶対。流行りのコーデさせたら、モデルみたいになるよ、きっと」

確かに興味深いけれど、それは別人というものなのではないだろうか。

自讃するわけではないけれど、できることならありのままの自分を見て欲しかったりする。そして同じように、リズにもありのままを見せて欲しかったり。

「まあ、リズが伸ばしてって言っなら、伸ばそうかな」

「そう言われると、なんか違うなってなるなー。私はいつものルーも十分好きだから」

「あ、ありがとう。じゃあ、ちょっと考えてみるね」

つまるところ、それくらいに留めておくとする。

今考える時間は無いけれど、これからはきつとたくさんあるはず。

寝ても覚めても、起きていても。授業中でも、お昼休みでも。

髪を伸ばした自分を想像して、にやけないように。

「あ。リズ、そろそろ時間？」

「あー、ホントだ」

時計のあるありがたさを感じつつ、同時に、過ぎ行く愉悦が惜しまれる。間を取って、あの日時計が懐かしくなる。

「じゃ、行こうか　って、ちよっ!？」

「……ねえ」

すくと立ち上がろうとする僕の右手を引っ張るから、立ち切れずも戻り切れずも、ベッドに勢いよく尻もちをついてしまう。痛くは無かったが、埃が舞ったのが目に見えた。

「なに、どうしたの？」

差し止めた理由をさんざん妄想しながらも、僕はリズの身を案じるふりをする。

リズが笑顔でいるわけを、僕は知りたくもあつたし知りたくなくもあつたから。

宙を舞う埃も落ち着く頃、リズはつらつらと疑問を投げってくる。

「ちゅーとかしないの？」

久し振りに、「へっ?」と空気が漏れた気がする。

僕のあまりの中身の無さに、リズは驚いている様子だった。

「えっ、いいの? 帰ってくるまでできないよ?」

「そ、それはそうだけど……。でも、さすがに朝からは……」

それこそ当然だと言うように説明するので、僕も冷静さを取り戻せない。

追い打ちをかけるように、リズは妖しく言う。

「えー。じゃあ、夜はバンバンしちゃうんだ……?」

「語弊があるよ?」

したくないわけではないので、自然と否定表現は控えめになる。

むしろ、肯定気味の対応をすることも増えたように思う。

最近では、リズの方からそう言う話題を振ってくることが多い。そもそも、僕からそう言う話を振るということ自体、相当な一大決心が必要であるから、必然的に受け手に回することは多くなるのだけだ。

誘っているのか、茶化しているのか、それとも見栄を張っているだけなのか。

そこに、アリスのように高尚な知略は感じられないし、自惚れも見えない。

そのせいか、本当はリズも、僕に色々されたいのでは？ という考えに至ってしまう。

昔と同じ距離感に戻ってみて、知らなくてもよかつたと思うことは、確かにあった。けれどそれよりも、まだ知らないからこれから知りたいことが、たくさんあるのだということもわかつた。

未だ踏み出せない一歩も、この距離でならすぐに超えられてしまおうだろう。

少なくとも、これから来る冬の寒さに凍える心配は無い。

「じゃあ一回だけ、しよう」

「うん。長いの？」

彼女を想う十年も、一年も、十分も、一分も、十秒も、一秒も、それ以下もすべて、僕にとっては大切な時間であって、これからもそうであると思う。

その中で、できるだけ彼女を愛せたら。彼女に愛されたら。

「中くらい、かな」

そう。

早起きは三文の徳、だと思つ。

道中、いつもの交差点でリズと別れて、ノア宅前の公園を通過、
順路通り学校へ歩く。

リズの部活と僕の生徒会では勝手が違うし、ましてや学校も違うから、下校時刻を合わせるのは困難であった。それで、消去法的に登校時刻を合わせようということになったわけだ。

以前はこの時刻に起きていたし、別段、苦にはならなかった。強いて苦言を呈するならば、あまりに早く学校へ着きすぎると、教室に誰もいなくて怖くなることくらいだろうか。

宿題も済ませている質だから、やることも無い。一時間もある空き時間、ずっと妄想しているわけにもいかない。

一度家に帰るのも疲れるし、家にも特にこれと言った用事は無い。改めて、空虚な生活をしているなと思わなくもない。

だから、今日こそは、アリスたちに早起きのすゝめを諭そうという所存なのだ。

「あ。サクラだ」

教室も賑わい始めて、そろそろ来るだろうかとドキドキしていると、アリスよりも先にサクラが教室にやってきた。

鞆を持っていないのはいつも通りだけれど、この時間帯に来るのは珍しかった。珍しかったが、近々見慣れつつあった。

クラスメイトに笑顔を振り撒きながら、真っ直ぐ席に着いた。

「おはようなのじゃ。最近早いのが。妹と毎朝なんやこらしとるんかの？」

「し、してないよっ」

アリスもノアも知っているし、仲間外れにするのは忍びなかったと言つのもあって、僕はサクラにも早起きの事情を説明していたのであった。

心底悔しそうにしていたけれど、このところサクラも朝が早いから、一緒に居られる時間という意味で言えば決して負けてはいない。それに気付いたら、やっかむのを控えてくれるだろうか。

「サクラ、最近朝早いよね」

「勿論、お主に会うためじゃからな。勘違いしないでくれなのじゃ」「う、うん？」

耳の脇のところの髪の毛を払って仰々しく言うので、誰かの真似かと思っただけで、特にピンとは来なかった。

それでも、相変わらず制服の着こなしは完璧で、これで授業もちゃんと受けていたら、結構すごい人なのではと思ったり思わなかったり。面白いし、頭も良いし、機転も利くし、可愛らしいし。

「授業はまだサボるつもり？」

「そうじゃのう。授業中、手を繋いでくれるなら考えるのじゃ」

「ま、また一段とハードだね……」

「本当は抱きついていたところじゃが、それでは前が見えんからのう」

「抱きつくって、えっ、前からなの!？」

これでは、授業に出たら出たで、色々問題がありそうだ。

だからと言って、出ないのが正解だとは思わない。

サクラのためにも。もちろん、僕のためにも。

「僕は、サクラが授業ちゃんと受けてくれたら嬉しいんだけどな」

もしも、サクラだけ進級できないなんてことになったら、僕は悲しい。

それも、なるべく不正を働かないで欲しいのだ。それこそ、“逃げること”のツケと言うのは、必ずどこかで清算しなければならぬから。無論、その時が来れば手を貸すつもりではいるけれど、サクラの意志が曲がっていたら、それは嫌だ。

サクラはサクラのままいて欲しい。

「ぬー……。じゃ、つまるんのがいけないのじゃ。紙ですとのための勉強なら、わしはせんでよい。先生が作ったてすとなぞ、所詮は統計じゃからな」

「そうかな？ 僕は楽しいって思うよ。サクラは、楽しくなかった？ あの合宿」

こういつ時、思い出すのが苦しい記憶ばかりではなくなってよかったですと思う。

あの場所に笑顔で居られた理由を、サクラもきつと知っているはず。

「ぬぬぬ。ずるいのう……」

「ははは。それと一緒にだと思えば、授業もきつと楽しくなるよ」
アリスも、ノアも、サクラもいる。そんな空間に、僕がいる。

確かに、ここには時計もあるけれど、僕はこの光のような早さも同じように尊く思える。

個性的な先生だったり、優しいクラスメイトだったり、時には厳格な風紀委員がやってくるかもしれない。その度に、毎日は色付いて、一分一秒の価値は次第に大きくなっていく。

誰かが喜んで、誰かが怒って、誰かが悲しんで、誰かが愉しむ。

そんな毎日を縁取る瞬間が、これからもずっと続いていけばいいのに。

「お。ありすが来たのじゃ」

「おはよう。ア」

「ノアが……っ。ノアが、いなくなったわ……っ」

窓の外の平穏を彩る輪郭は、上下するアリスの肩に擦られて薄れゆくようだ。暈^はけていく形は、徐々に黒い塊へと変わって、最後には平面から浮き出たような、病的なしこりとなっていく。不和と道理とが渦を巻いて、心を飛び出して近くを屯^{たむろ}し始める。

それでも、依然として時間の価値というものはイコールのまま、それがかえって事態の深刻さを如実に表していたと思う。

僕はふと、時計を見る。

午前八時三十九分を指し示している途中だった。

さっそく、予鈴が今日を始めようと、忙しく鳴った。

冬始まりて、秋終わる。(後書き)

【あとがき】

なんと、今回。

このような形で終わりを迎えます。

これは紛れもなく続くやつです。

ですが、ちゃんと収束点には向かっているつもりですので。

さて。

次章ですが。

メインのお話は「アリノア」になりそうな気がしないでもないです(2017/07/10 時点)。

ルートとリスは、今章で「恋人の“好き”」を見つけられました。ノアとアリスでは、まだ有耶無耶な感じになったままです(主にアリスが)。すでにべったべたですけどね。これ以上何する気だ。全年齢対象続投で。

次章は、きつと冬も真っ盛り。ミドル時代を思い出しますね。冬は事件がいっぱいだった。

できれば、もっと、こう、心の繋がりの温かい何かをお届けできればと思っております故。

お待ちいただければと。

それではお楽しみに。

『blink』妄滅アフレイド（前書き）

【まえがき】

音楽していて前章より時間が空きましたが、なんとか始まりました。

前回の思わせぶりエンディングから何となく予想はしていたかと思いますが、そのままの通り、今回は「ノア×アリ」が主役です。

ここから、ぐっと『願い』の秘密に迫っていきます。

少し辛いことも見えてくると思いますが、成長にはつきものなのです。

どうぞお付き合いしてやってください。

新章始まりのサブエピソード。

どうぞ。

『blink』妄滅アフレイド

身支度をする時間を貰っただけ、自分は幸せかもしれない。

そんな幸せに浸れる時間は、思ったよりも短い。

学校用にと買って貰ったコートはそれなりに温かいけれど、人間とは斯くも贅沢なもので。それとは違った温かさを求めて、鞆を漁ってしまつたのだ。

本来の意味での温かさを知ってしまった自分には、コートでは薄すぎる。

いざ知らずに荒ぶ雪風が、顔の露出した部分から熱を掠め取っていく。

ぎりりつとフードの口を固めて歩けども、ゴールはおるか目的地すら無い。

見えているのは顛末だけ。

理由があつて、そして結果がある。

因果応報とはよく言ったものだ。

「……………」

言葉を失くす。

元々、言葉というものに信頼を置いていなかったからか、沈黙することに対しての恐怖はそこまで無い。誰かという時の沈黙は、また別の話。

どちらにせよ、自分は、沈黙が怖いことであると知ってしまったから言えることだ。

沈黙すること　それはつまり、生かされていると感じること。

真の静寂に包まれてこそ、それはわかった。

時は昨日、場所は確か公園だったと思う。

ベンチと築山とを行ったり来たりして疲れて、休んでいた時のこと。襲い来る眠気と戦っている最中に聞いたのは、雪の降りつもる音。そして、それを台無しにするかのように鳴る、心臓の音。

その時は思わず、心が走った。

「どうして自分は生きているんだろう」

そこには、確かに結果への怨恨があつて、単なる疑問ではなかったのだと思う。「久しぶりだな」と思う自分もいて、それがさらに息苦しさを加速させたこともわかっている。

でも、自分の力ではどうにもできない。どうにもできないなら、諦めるしかない。諦めるしかないなら、忘れるしかない。忘れるしかないけど、忘れられない。忘れたくない。

だからなのだろう。

行く末すらも見えないこの雪道を（ある意味では見えているのかもしれないが）、一人で歩いていけるのは。

助けは求めない。求められない。

迷惑をかけてしまうから。

迷惑をかけてもいいのだと、誰かが言ってくれたことがあった。

でもそれは、進んでそうしていいということではないから、でき得る限りは避けなければならぬ。

以前の自分であれば、一歩二歩歩いたところで音を上げていたかもしれない。

でも、今は違う。

まだ、頑張れる。

まだ、もう少し。

ただ、その“もう少し”は永遠に続くのかもしれないけれど。

「痛っ……」

あまりに不意なことだったので、発言に責任を持ってない。

下腹部というのだろうか。応急的に手で抑えたところの、ずっとずっと奥の方から、痛みが絶え間なく湧き上がってくるようだった。倒れる程ではないにしろ、立っているのは辛い。家の外で、こう痛いことも稀であるから、精神的にも削られる。

細目を開けて周囲を見渡してみると、ちょうどよさそうなベンチが宵闇に一つ、見慣れない構成の公園にポツンとある。さほど、雪は積もっていない。

誰もいないのを確認して、そこへ寄った。

「ん……。痛い……」

痛みは、良くも悪くもならない。ただ同じ分だけ、腹部と心を締め付け続けた。

暫くして、長めの呼吸をすると多少落ち着くことがわかる。これにはコツがあつて、お腹に少し力を入れながらやると、気が抜けなくて靦面だった。

ただ、息を吸って吐いて、痛点を摩る。

言葉は発しない方が楽だった。

「はぁ、はぁ……」

数分間続けると、それなりに疲労した。

そして、汗をかくほどに体は熱を持った。なんのおまけかわからないけど、頭痛もした。

その時だった。

顔に、何か触れた。

形も重量もわからないけれど、それはとても冷たかった。

雪だった。

風はそこまで吹いていなく、火照った体には頗る心地の良い温度だった。

そう。コートを脱いでちょうどいいくらいの。

「……………」

途方もない静寂。

今宵はどきりどきりと、痛みが音になって聞こえそうだった。

そう言えば、視界ががらりと変わった気がする。

そうだ。自分はベンチに横になったのだ。

すごく、すごく気分が良いと思う。

このまま眠れてしまいそうなくらいに

「……………」

「……………きんか！」

大地震が起きて、たくさんの人が死んでしまつて。誰かが誰かの名前を呼んでいて。地を揺さぶつたのが誰なのか、恨みの瞳を血走らせて探す。そして、永久に帰らない人を思う。

こんな感じの夢を、見たことがある気がする。

もしかすれば明日は、その続きなのかもしれない。

「のあ、起きるのじゃっ！」

『blink』妄滅アフレイド（後書き）

【あとがき】

ノアは、すごくお腹が痛くなるタイプです。
苦労します。

今回は、「いよいよ」本編「入っていきます」。

A f r a i d i n t o C a v i t y (前書き)

【まえがき】

ノアとアリスがメインということで、今章は抽象的表現がかなり多くなりそうです。先入観と偏見と、色々初期化して、小学生くらいの気持ちで読んでもらえたら幸いです。でも、漢字は忘れずに。

それでは激動の第五章、始まります。

A f r a i d i n t o C a v i t y

「お早うございます。アリスお嬢様」

メイドに起こされるよりも、カーテンの隙間から差す陽の光の方がより目が覚めるといふのは、皮肉でも何でもない。

どちらがあたしの機嫌を損ねないか、近々、コンテストを開催してもいい。

その勝敗は、皮肉にもゼロ対ゼロで引き分けになるに違いない。「すでに朝食の準備ができております。お父様がお怒りですので、お急ぎくださいませ」

「そう。体調、良くないから、後で行くわ」
あたしは、厚みのある掛け布団を盾に言う。

「か、かしこまりました……。そうお伝えいたします。では、失礼いたします。お大事に……」

さすがに勉強してくれたのか、今朝はなかなか手際がいい。

このところ、体調が優れないというのが、あたしとメイドの間での合言葉のようになっていた。確かに体調は優れないが、言うほどではない。

それくらいが、あの朝食の席を外す言い訳には丁度良かった。

暫くすると、ドアの向こうからあたしを気遣う男女の声が聞こえてくる。あたしはそれに、「大丈夫」とだけ答えて数分間浅く眠る。あの人たちの気配を感じなくなつて、それから起きて着替える。朝食は余つた食材を使って自分で設える。メイドたちには休むよう言

つてある。

積極的に甘えたくないわけではないのだけれど、一定の距離を保ちたくはあった。

あたしという存在を構成する何かに、ぽっかりと大きな穴が空いてしまったからかもしれない。そこから、人相やれ人情やれその他諸々が零れ落ちていつている感覚は確かにあるのだ。

つまるところ、あたしはきつと、ノアがいなくなつてかなり落ち込んでいる。

それに気付いたのはほんの一週間ほど前のことで、朝にあたしを起こしに来たメイド長から話を聞いてだ。経緯、行先含め詳細はメイド長も知らないようで。

それは百歩譲っていいとして、あたしすら気付かなかつたということが不吉でならない。このあたしが現在進行形で『知らない』と言つのも、また不安感を助けている。

あたしの従者であるノアの考えていることは、例外を除いてはすべてあたしに伝播するはずなのだから。ノアにとってのあたしに関する体験であれば、感覚も、興味も、脳の指令すらもすべてだ。

例外というのはつまり、あたしのことを一切考えていないということになるが、それは到底有り得ないと思う。これまでの統計的にも。

ノアはあたしの従者であり、あたしのクラスメイトであり、あたしの幼馴染でもあり、あたしの恋人でもある。おまけに、そう言った伝播を意図して始めたのだ。そんな人間が、あたしのことを丸一日考えないなど、そうあるものではない。

そうあるものではないからこそ、今、あたしは不安なのだ。

あたしから離れてどこかへ行つてしまっている現状も無論、最近の『願い』の力の曖昧さにも、だ。

こういう時に求められるのは、何かに頼つた紛い物の力ではなく、互いを想い合う時に生まれる感情の力……などと熱いことを申し立てるのはあたしの仕事ではないけれど。

そろそろ、家を出なければ学校に遅れてしまう。

恋人がいなくなったのに、悠長に学校になど行っていていられるかも言えるが、しかし、うちの親はそうはいかない。

ノアが来て一悶着があったことを思い出したのか、ノアがいなくなつてからはやけに元気になった気がする。いや、まあ、そういうことではなくて、単に『いないものとして扱う体』が上手かった。

何かを隠しているのは確かだろうけれど、策も無しに下手に突っ込むのは素人だ。

あたしはただの娘ではない。

親が嫌いな娘、だ。

……………。

さて、と。

あたしの近況はこれくらいにして、一日を始めなければならぬ。

x x x

暖房のように温かい「いつてらっしやいませ」を背中であいて、玄関を開ける。びゅうと冷気が雪崩れてきて、思わず、寒い方が好きなのだど強がりたくなる。入れ替わり立ち替わりであたしは外に出て、傘掛けにぶら下がった折り畳み傘を鞆に忍ばせて、この場を後にする。

今宵も、雪が降りそうな気がした。

この国の冬はそれなりに冷えるし、雪も降る。降った年よりも降らなかった年の方が少ないし、降った量も隣国に比べると多い。でも、数日の間に急激に冷え込むような極寒地帯ではない。

違うのにそんな気がするの、見越して着重ねてきたカーディガンがあまりに薄かったからではなく、数日前までベッドにあったあの温もりが無いからだと思う。

バカと色ボケしかやらないと思つていたおやすみのキスも、いざ無くなつてみると喪失感がそこはかとなかった。それは、下心の無いノアに限つてのことなのかもしれない。

こういつ時のための布石であつたとすれば、何も心配は要らないのだが。

あの子はそこまで強くない。

あたしがいないと、あの子は　　。

「お邪魔します」

玄関灯の電球の下にある鍵を使って、その一室の扉を解錠する。

内と外の温度がさほど変わらないのか、どうやらあたしはその部屋に歓迎されていないようだった。

この家はいつも人氣が無いからこれで正常なのかもしれないが、今日が正常ではないことはすぐにわかった。

一つは、さつき開けた扉。

あたしが昨日張つておいたテープに剥がされた跡が無かった。少なくとも昨日中、その扉を使つての出入りはされていないということ。

もう一つは、オイルメーター。

オイルを溜めておく貯蓄タンクのメーターが、全く動いていない。少なくとも昨日中、誰もこの部屋で生活していないということ。

ここが、あたしの知つているこの場所なら、あたしを除外しても二人の人間が出入りをしていなければならぬのだ。

うち片方が家に戻らないことがあるのは、昔からのことだけれど、もう一方は違う。

あたしのところにはいないならここしかないと思つて、早や数日が過ぎた。

ノアは一向に現れない。

「隠れているなら、出て来なさいよ」

特に返事は無い。

「出て来て。お願いだから……」

また、返事が無い。

「ノアのして欲しいこと、なんでもするわ……」

心にも、答えは感じない。

ともすれば、今はここにはいないとするのが最適なのかもしれない。

であれば当然、今は別の場所にいることになるのだけれど。

登校から一時限目までの数十分、昼休みの三十分、部活終わりから門限までのおよそ四十分、合わせることの一時強。その程度の時間では、探せる場所など限られてしまう。

ましてや、ノアを見つけられる目は、あたしのこの二つしかない。公安に失踪届を出そうにも、親が何かしらの手を打ってくるだろう。それで好転する気が全くしないし、万に一つで現状打破できるようなイベントが起きるとも思えない。

だから、頼れるのは自分の勘と忍耐力、それから『願い』の力に絞られる。

そうやって、さしたる進歩も無く数日が経過しているわけで。

牛歩であっても進歩は進歩であるという言い分もあるかもしれない。けれど、何に逆らえないでいるのか分かりたくないでいる自分が、どうにも楽をしているように見えて仕方がないのも確かな事で。

「ノア……。どこに行ったのよ……」

なかなかどうして。

アカデミーとは、義務的な教育機関ではないのだ。

あたしは、他でもないあたしに、縛られていることになる。

A f r a i d i n t o C a v i t y (後書き)

【あとがき】

早速、重い雰囲気です。

ここから物語がどう進んでいくのか……。

ハッピーエンドなのか、バッドエンドなのか……。

次回、お楽しみに。

Stay on Afraid (前書き)

【まえがき】

いつも休まない人が学校を休むと、変な感じがしますよね。
それが友達、それ以上の存在だと、尚の事。
何で休んでるのかわからないと、モヤモヤしたり。

そんな感じです。

Stay on Afraid

ローファーを下駄箱にしまって、上履きに履き替える一連の動作をしていると、後方から誰かがついてきているような気がしてしまふ。

気配を辿ると、そこには同じクラスの女生徒がいて、控えめながらもあたしのことを邪魔そうに見上げていた。

あたしはあたしらしく「ごめんなさい」と挨拶して、場を後にする。

昇降口を抜けるとすぐ、廊下が二つに分岐する。

右に折れると体育館側の棟、直進すれば教室棟になる。

ただの遠回りになるだけだから、今まで、右に折れたことは無かったのだが、今日は右回りで行った。

何の真新しさも発見もありはしない、体育の時間に通る道でしかなかったけれど。

さて、遅刻ぎりぎりで入室したわけなのだが。

「おはよう、アリス。遅かったね。顔色がよくないけど、大丈夫……？」

教室の一番後ろの席を陣取るあたしの、一つ前の席にそいつはいた。

本人はいつも通りを装っているつもりらしいが、微笑みの奥に潜ませた心労の色をまるで隠せていない。それでも瞳は真っ直ぐと、前髪の隙間を縫いつつもあたしを捉えて動じない。肩につかないほどの長さの髪の毛は艶めいていて、誰かの匂いがしそうだ。そう言う不器用バカなところも含めて、いつも通りと言えはいつも通りであるのだが。

そしてあたしがいつも通りであれば、その言葉尻を捉えて、一針二針くらいは突いていたところだろう。

生憎、今日はそんなつもりにはなれず、肩を撫でてくれる親友の健気さに溺れるしかない。

「大丈夫よ。変に心配しないで、ルート」

などというあたしらしくも無い御託をつらつらと並べ立てながら、あたしは鞆を机の横のフックにかけた。そのまま崩れるように椅子に座ろうとすると、スカートが浮いて、辱めを受けそうになる。防ごうとしてすぐさま手で抑えると、これまたあたしらしくない。

じゃあどうすればあたしらしいのか　それを知っていても、振る舞う気力が無かった。

「ノアさん、まだ帰ってこないの？」

「ええ、まあ」

あたしとこいつは旧知の仲だ。

だから、これくらいの距離感が丁度いい。机と机、前後の席からの距離が。特に今は。

「すぐに帰って来るよ、絶対」

「この世に絶対は無いのよ」

やはり、ルートと話していると多少なりとも確実に元気になる。機構はよくわからないけれど、昔からそう言う力があつた。

いや、そうだけどさあ……。今はそういう展開じゃないよっ！

「そう言う展開よ」

「こ、心を読まれたっ」

恥じらう様子で顔を覆うルートだが、それでは所詮隠せない。あたしの力は誤魔化せない。

実は、今回の一件で一つの要因と考えられる『願い』の力を、あたしも持っているのだ。

詳細は省かれた黒歴史になるけれど、あたしは『任意でルートの

感覚をすべて知る』ことができる。中身としてはノアの力に似ているけれど、あたしの場合はコントロールが効く。

今のルートの反応も、当然ながら予測できたし、結果との相違もほとんどない。あたしがそう言う力を持っているということもルートが知らないのも、分かる。

そういうつまらない力だ。

「まあ、落ち着きなさい」

「あ、はい、すみません……」

覇気のない表情を縁取る輪郭は細く、健康的な肌の白さすら醸していた。限りなく黒に近い茶髪は対照的に煌めいて、覗く瞳は適度に潤んでいて円い。制服にはしわが無く、少し膨らんだ胸元からスカートのラインまで、緩やかな曲線を描いている。素行は良く真面目で、順当にいけばただのバカであるのに、頭は切れる。おまけに、スポーツをさせれば右に出る者はいない。

そういうギャップを演出しようとしているのかと思えば、そうではないところがさらにすごい。文化祭の時の、お姫様ぶりはどこへ消えたのか。

本当に、ルートがあたしの前の席で良かったと思う。特に今は。

「ほんと、お節介よね。あんた」

「ごめん……。でも、放つても置けないし」

「ま、好きにしなさい」

「お主も大概、素直じゃないのう」

どこか上から視線で、そこそこ粘り気のあるその声は、いい加減鼻につく。

今まで突っ伏して居眠りしていたのか、顔は蒸れてどこか湿潤に見える。円くて柔和な大人の雰囲気と、大人ぶって背伸びしたよう

なあどけない雰囲気とが織り混ざった、中途半端な人相。性格は底抜けにポジティブで飛び抜けた破天荒。その様は、魔法を使えるようになりたいという『願い』にもよく表れていると思う。

良いところなんて一つも無さそうだけれど、その明るさからか、クラスでは冗談半分に可愛がられている。しかし、文字通り半分は本気で、真面目な顔で常軌を逸した発言をしてよく周囲を困らせる。最近はず隣の席のルートにべったりで、「すでにイケナイ関係なのだ」と吹聴するなど、どこまで本気かわからない。まあ、本気にせよ冗談にせよ、本来なら関わってはいけない相手だとは切に思う。

現時点で、あたしたちの中で内密としている『願い』についても、何の拍子に公開してしまうかわからないので、あたしとしても要注意人物だからだ。

「人間、素直過ぎると失敗するものよ。サクラ。あなたみたいにね」「なんじゃと？ そういうことばかり言うから、のあも嫌気がさして出て行ってしまったんじゃないののう？」

サクラはルートと違って隠す気も無い。
かえって、そういう方がこちらも気を遣わずに済む。

「そう言えばノア、サクラに無理矢理触られたって言っていたけれど……。もしかするわね……」

「くっ。なんじゃなんじゃ！ あれは合意の上じゃぞ！」

「あら？ あたしにノアの意志を問うの？」

「はんつ。そんなもん、何の証明にもならんわっ」

「ふ、二人とも、そろそろ授業」

ルートがサクラとあたしの仲裁に入るタイミングで、ちょうどよくチャイムが鳴った。

乗じて、席を立っていた者が自分の席に着き始める。がやも次第に収まっていくから、二人で騒いでいれば目立ってしまう。

諧謔も控えなければならぬ。

「おいーす。数学始めるぞー。席に着けー」

青髭を生やした中年の男性が、教科書片手に教室へと入ってくる。暖房の作用に限りがあるせいで寒く感じているのか、ワイシャツの上から紺色のジャンパーを着用していて、上半身がいつもの倍ほどに膨れていた。

黒板の真ん前に坐する教壇に立つと、慣れた手つきで出欠を目検で確認していく。

さすがにアカデミーともなると点呼はやらない。

「ん……？ グリニッチは今日も風邪か。長引いてんなー。皆、カバーしてやれよー。まあ、グリニッチは成績良いから心配ないかもしれんがなー。学年末テストはかなり範囲広いからなー。四月からの総集編だぞー」

クラスから弛んだ悲鳴が聞こえてくる。

先生は立ち込めるプレッシャーを一蹴して、何事も無かったように授業を開始した。

そう。何事も無かったように。

数学など、四則演算を使った方法論に過ぎない。

改めて学ぶことなど何もない。

けれどもし、それを使って距離の計算や場所の把握ができるなら、あたしは進んでノートに方式を書こうとするだろう。

あの子の ノア・グリニッチの居場所に通ずる道を、弾き出す方式を。

x x x

昼休み。

三日もあれば、学校の搜索は一通り終わる。

ノアが移動していることを考慮して探していたから、学校にいる可能性は極めて低いと言えるだろう。

けれど、出てこないとは言いい切れない。

だから……ではないけれど、あたしはこのところ、学校全体が見渡せそうな屋上庭園のベンチで昼食をとっていた。

「ぬっ。るーとの弁当、美味そうじゃな。わしのと交換するのじゃ」

「あ、うん。いいよ……って、丸ごとっ!? 丸ごとはダメだよっ! どれか選んでっ!」

「むー。仕方ないのう。じゃあ、きゅうり」

「えっ、キュウリなの!? 切っただけのだよっ!?!」

「きゅうりでいいのじゃ。下手なの選ぶと、あの小娘が作ったやつが混ざってるかもしれんからのう」

「ははは……。そういうこと……。卵焼きだけそうだから、それ以外にする?」

「きゅうりでよい。わしは、“あーん”ってして欲しいだけじゃかならな」

何を中身の無いことをやっているのだと、わざと聞こえるように溜息をつく。

ただし、悪いことは言わない。

「なんじゃ。景気が悪いのう。飯が不味くなるじゃろが」

「重箱みたいな弁当箱持って来て。あんたの味覚がおかしいんじゃないかしら?」

「なんじゃとっ。お主はあほかっ! 愛妻弁当と言えば重箱じゃろうが!」

「まあまあ。そう言わないの。アリスも。ちよっかい出すのって、サクラなりの気遣いなんだと思うんだ。ほら。サクラが落ち着いて無言でいると思うと、怖いでしょ?」

間に挟まれたルートが、あたしとサクラの距離を計る。

一人分無いからか、近すぎるように感じ得ない。

近すぎていいことなど無い。

「はあ……。まあ、どうでもいいわ、そんなことは。それじゃ。あたし、食べ終わってるから。先に行くわね」

「あ。アリス、待って！」

ルートが、立ち上がるうとするあたしを引き留めるので、仕方なくまた座る。腰を擡げるのが面倒になるから、考え直したくは無かったのだけれど。

首を傾ければ、奥に舌を出している人もいるし。

「なによ」

あくまで白々しく返す。

「もう少し居てくれたり、その……しないかな？ 僕もサクラもまだ、だから。それに」

言葉に詰まる感じが誰かと似ていて、少し委縮してしまう。

その隙を突かれただけだと思いたい。

「それに、アリスがいないと、寒いんだよね……。アリスも、寒くない？」

「そうね。こんな寒空の下、ピクニックしてればね」

銀縁の曇天を見上げながら、毒づく。

ルートは嬉しそうに肩を寄せてきて、温かい。

こういう時、揮われる優しさには少し腹が立つ。

「ノアさん、見つかった時、アリスが冷えてたら温めてあげられないと思うんだ」

そう言うのが自然であるように、さも当たり前のように言うので。

「そうね」

あたしも下手に突っ込めず、そう返すしかなくなる。

毒を浄化するどころか吸い出してしまうのが、ルートだった。

「そう言えば、外で食べようって言い出したの、あたしだったわね。責任、とるわ」

「お主は、ほんっとーに、可愛くないのう」

「それはどうも。あなたはとても可愛いわよ」

「おお？ そつかの、むふふっ……むふっ……ふっ……。なんか、思ったのと違うのじゃ……」

「あははは……」

この二人と話していると、自分がいつから笑っていないか数えてしまいたいそうになるから、たまに苦しくなる時がある。比べて得るものなど無いと言うのに。

そう。

ノアを手に入れる前も後も、あたしは笑っていなかったように思う。

あたしが笑顔を失ったのは、もっと前の話。誰かがあたしをノアを、否定するようになってから。

笑ってなにになるかなど知る由は無いけれど、少なくとも、あたしはあの子の前で顔を顰めていた気はしない。

失ってはならないと、はっきり思うのだ。

「聞いていい？」

サクラが何かぶつくさ物申しているのを後目に、ルートが問う。

こいつも時々、残酷ではある。

「なにかしら」

それこそ、大したことを聞くつもりなんだろうけれど、責任は取るつもりだ。

「えっと……」

言い出した割には多少の躊躇が見られたが、その後は案外早く口を開いた。

「昨日、どこを探したの？」

あまりに想定通りの質問に、鼻から息が抜ける。

「あなたの家の方よ。結果は、知っての通り。ノアの行ったことが無い場所だから、最初から望み薄ではあったんだけどね」

「そっか……」

巻き返しを思考している身にしては、なんとも残念色の強い反応だなと思った。

なるべく心配を拾わないように、あたしは言葉を選ぶ。

「落ち込む必要は無いわ。あの子は必ずどこかにいるんだから。あたしを必要としているかどうかは別としてね」

ノアがいなくなってしまうと、夕方以降に空白の時間ができたから、色々な憶測を立てた。

誰かの家に間借りしている可能性、父の配下の者に監禁されている可能性、誘拐された可能性。そして、あたしとの繋がりを断ちたくなった上での行動である可能性。

ルートを通して、『願い』の力が曖昧であることを知ったからこそ、それは言えた。ノアの心があたしに伝わってこないのは、そういう確たる意志の力が働いたからなのではないかと。

そんなはずはない、とは言い切れなかった。

サクラの言う通り、この力は証明力というものの一切を持たないのだ。

本人たちの間でだけ通じるように、きっちりとしたルールも設けられている。外部に情報が漏れないように初めから設定されているのだ。

そんな不安定な力に頼ったあたしとノアの関係は、こうした事件で簡単に解けてしまった。

そう思いたくはないけれど、誰かに言い切られてしまったら、きっと捻じ伏せられてしまうことだろう。それが例え、サクラであっても、両親であっても。ましてや、ノアであっても。その程度だと言われて終わる。

「予鈴ね。今日の責任は果たしたわ。行くわね」

だからかもしれない。

毎晩、せがまれて答えていた口づけも、途端に意味を失ったことも。寒い部屋で身を寄せ合ったことに、懐疑心を抱いてしまうのも。愛や恋、それに準ずるもの。そんな関係はあたしたちの間には無

かった。そこに、ただの利害の一致があっただけ。

否定しても否定しても湧いてくるその情念に、あたしは“誰か”と名前を付けた。

「あ。うん。ごめんね。呼び止めたりして」

「いいわ。それより、次の美術は欠席するから、よろしく伝えておいて」

「えっ？ アリス？ ちょっと！」

「忙しないやつじゃのう」

誰かは、あたしの中を暴れまわっている。

きつと、そのうちにノアを食べてしまっただろう。

そうさせないために、あたしはノアを探すのだ。

いや、ノアの戻る場所を探すのだ。

寒かろうが、寒かろうが、寒かろうが。

そのために、あたしはこの場所を空けておこうと思ったまでだ。

Stay on Afraid (後書き)

【あとがき】

お気づきの人はお気づきだと思いますが、ルートの容姿について語られたのが、今話で初です。

どうぞでしょう。

皆さんの中にあつたルート像、途轍もなく膨らんでいたことがわかると思います。

人の想像力つてすごい。

次回、どこへ。

『imbibe』懲諦ルックフォア（前書き）

【まえがき】

サブエピソード編です。

同時進行な感じなので、今頃ノアは……と気になる方は読んでみてくださいください。

ぶしぞ。

【imbibe】懲諦ルックフォア

間取りはと言えば、前に訪れた時と全く同じ。家具の位置が微妙に違うだけで、材質から何から同じ場所らしかった。お風呂も夏休みの思い出のまま、ちゃんと大きかった。匂いや気温こそ季節らしさを感じるけれど、心理的な温かさというものは確かにここにあった。

数値で表すとするなら、九割はあのログハウスだと思った。残り一割、確実に記憶を否定する要素が窓の外に広がっている。

ご主人様の言いつけで外には一切出ていないが、どこか絵画的ですらある。西側にある（どっちが北かはわからないが）暖炉の火も、消えそうで消えないのが怖い。

そのせいか、未だに閉塞感が身に刺さる。いや、実際のところ、閉塞的生活を送っているから、そうではあるのだけだ。

「ただいまなのじゃー」

玄関の方からご主人様の声が聞こえる。

相も変わらず時計は無いが、自作の日時計を目処にそろそろだとは思っていた。

出迎えるよう指示されているので、急いでソファを発つ。

玄関に辿り着くと、ちょうどご主人様が靴を脱いだところだった。立ち上がるタイミングで、決め台詞を言う決まりだ。

「お、おかえり、なさいませ……ご主人、様……？」

「ぬおーっ！ ええのう、りあるめいど！ りあるめいどは、やっぱり違うわい！ ぬははっ」

自宅にあがって早々、メイドの尻を触るご主人様にだけは仕えたくない、ちようど思っていたところだ。

数日前に公園で倒れているところを助けてもらって、それから身寄りのない自分を居候させる対価として、主従関係になったのだが、メイドをやれと言われた時は致し方ないと思っただけれど、このご主人様はかなりひどい勘違いをしておられるようで。本物のメイドリアルとしては、多少の不甲斐無さを感じなくもない。

本当にいやらしい手つきで触るのに堪え切れず、思わず友達に戻る。

「サクラっ。や、やめてよ……っ。これは、さすがに、違うと思うの……」

「なんじゃあ、けちけちせんで」

どこかのおじ様にこういう方がいらっしやると聞くけれど、まさにそのような有様。

相手と同じクラスの友達だから、ある程度は許せるけれど、限界だつてある。

「ね、ねえ……」

「なんじゃ？」

「なんで、裸にエプロンなの……？」

「んえ？ そんなもん、めいどは昔からそう決まっておるじゃろー」
どこの文化の習わしか聞いてみたいところだけれど、今は、衣服を纏うのが先決だ。

サクラに悪びれる様子がないから、たまに、自分が間違っているような気がしてくるけれど、そんなことは無い。自分は、ちゃんとしたメイドなのだ。

こういうサービスは、やったことがないし教わってもいない。

「そ、そろそろ……服、着たい……」

「そんなもん別に良いじゃろー。女どうしなんじゃから。寒くないように火も点けといたしのう。なんならわしも脱ぐか？」

「だ、だいじょぶっ」

ご主人様もメイドも裸とは、どんな境地だろうかと、少し可笑しかった。

いつだったか、みんな水着で登校している夢を見た時があったけれど、多数派でないだけで、もしかすればそれもまた一興なのかもしれない。理解する気は、今のところ無いけれど。

「強情じゃのう。前掛けがあるんじゃないから、全然せーふだと思うのじゃが……」

「さ、触るからダメなの……っ」

食住を提供してもらっている身だから、大方の方針には従うつもりだったけれど、度が過ぎていている気がする。友達という関係を挟んだとしても、お尻を直接触るのは如何ほどのものかと思ってしまう。友達のお尻を触る友達　文字の羅列が為せる混沌、と言ったところだろうか。

そんな体裁などいざ知らず、ご主人様はいつも通りご乱心であった。

「服の上からならおっけー、なのかの……?」

「……………」
自分の置かれた状況を脳内で再確認すると、自然、考えてしまっ

た。
沈黙した代償は小さくない。

「し、しないとダメなら……。恥ずかしいけど……。うん……」
頷いた反動で頭が持ち上げられなくなる。

肩から伸びた二本の腕は白く、細く伸びて、戦く手先は目的を失くして呆けて絡まっていた。

自分の体、知識含め、存在というものに誇りなど、持ったことは無かった。

それなのに、身を守ってしまうという矛盾。

視点を換えれば、影にはその人がいて、すべてはその人のために成り立っている道理であった。

形の無いプライドも、そういう観点で見れば尊大で、余計に自分

が小さく見える。太陽が近づくと影は消えると理科で習うけれど、まさにその通り。

近づきすぎたら、消えてしまったではないか。

そうして残るのはわずかな光、どこるか無色の闇だったと思う。

知りたくなかったことを知るために、その人を知りたかったわけではないのに、結果としてそうなってしまった。

後悔に沈む頭を撫でてくれるのは、優しい人なら誰でも同じことだろうか。

「冗談じゃ。裸エプロンで我慢するのじゃ」

「ごめん、なさい……」

字面こそ慚愧とは解釈し難いけれど、髪を梳かす指はしかと訴えていた。

この恥ずかしさに慣れなければならぬ不安はある。けれど、お仕えるご主人様は、あの夏の劇に出てくるような悪役でなくてよかったと、心から思った。

涙の栓が外れそうになる瞬間、サクラが、自分の肩を擡げた。

「おうおう。泣くでない泣くでない」

「うん……。だいじよぶ……」

「こんな時こそ、尻……じゃな！」

「や、やめてよう……」

撥るような素振りを見せたかと思うと、サクラはそのまま自分の手を引いて歩き出す。何をされるのかと怖かったけれど、大人しくついていくしかない。

「わしが急に襲ったりしないこと、お主もわかつとるんじやる？」

そんな気にして、びくびくせんでもよいじやる。逆に委ねてもらっても困るが、これはこれで妙にそそられるわい」

「だけど、服、着てないし……」

「そこは譲れんが」

「ええ、なんで……」

今しがたの発言も、限りなくブラックに近いグレーだったし、頓

着しない方が難しい。

確かに、お風呂は一緒に入るし、裸になることに関してはある程度の自制が効く。サクラだって、下から覗いてくるわけではないから、対策もできなくはない。

そういう際どさにスポットを当てるサクラのやり口に、途轍もない恐怖を感じるのだけれど。

「まあ、安心せい。お主とはぶらとにつくな関係をしよう、結構努力するつもりじゃからな。お主には、すべてを捧げたい人がおるのじゃろつから」

「……………」

でも、それも“今のところ”の話であって“これからも”そうであるとは限らない。

もしそうだった時に今の自分は どうしてしまふのか、まだ考えることもできない。それも、いずれは答えを出さなければならぬことだとはわかつている。

今は、それがサクラとの関係をきっぱりと決めてしまふことにならないのを祈るしかない。

「さあ、のあよ。今日は肉じゃがを作つて欲しいのじゃ！」

「にく、じゃが……………」

キッチンに立たされたと思えば、知らない料理名が飛び出す。

料理名はおるか、調理器具の使い方も知らない。そんなメイド始めたての頃の焦燥が想起される。

懐古の念に浸っている暇はないのだと、サクラが背中を絶妙な塩梅で摩こすつてくる。

「ひゃっ、んっ……………」

「ほれ、肉じゃがじゃ、肉じゃが。肉は牛肉で、じゃがはじゃがいもじゃ。つまり、略さずに言つと牛肉じゃがいもじゃな」

「牛肉じゃがいも……………」

サクラが買い出してきた材料をキッチンに並べていくと、牛肉とジャガイモだけではない。人参、玉ネギ、それから何故か紐状に搾

えられたコンニャク……と、ジャガイモ料理であることを加味すると、完成系はかなりベジタリアン寄りに思える。

脳内では、蒸したり焼いたり燻したり……様々な過程を経て、飛び切り辺鄙な芋料理が出来上がっていく。肉は添えるか詰めるか、飾ってみたところだ。根菜メインともなると、肉の扱いが限られてくる気はするけれど、真偽のほどは不明だ。

ヒント欲しさにサクラの顔を見ると、首を傾げられた。

「焼いてから、煮るんじゃないよ？」

「う、うん。わかった」

そこまで調理方法を教えてもらえれば、何となく完成系は見える。あとは、そこへ向かって形を整えていくだけだ。

「じゃ、作るね」

「頼んだのじゃー。わしは着替えがてら少し部屋で、休むのじゃ」

「あつ……」

そそくさと立ち去ってしまいそうだったので、早急にサクラのブラウスの裾を捕まえなければならぬ。期待薄ではあるけれど。

「ん？ なんじゃ？ どうした、寂しいかの？ 心配せんでも、出来上がる頃には戻るぞ」

「そ、そうじゃなくて、服……。服、着たい……。油、撥ねたら、ヤケドするから……」

「あ……。じゃ、特別にこれを着ることを許すのじゃ」

肩にかけていた鞆から取り出したのは、鼠色の長袖Tシャツだった。

「朝、中に着ていったのじゃが、暑くて脱いだんじゃ。別に汚して構わんやつじゃから、気にせんで着るとよいぞ」

「あ、ありがと……。じゃあ、着るね」

「こつも普通に優しいと、どうにも調子が狂つ。」

「ぬおう！？ ここでえぶろん脱ぐんかっ」

「あつ、そっか……。ノア、裸だった……」

習慣とは、かくも恐ろしい人間の性である、とはよく言ったもの

だ。

恥じらうより先に、Tシャツを着てしまった。いや、拒まなければならなかった。

「お主、たまにやらかすのう。ま、そういうところもかわいいんじやがのー」

「うう……」

そそくさと袖を通す。

「ぬっ。ていーしゃつえぶろんも、なかなかじゃな。むふふっ」

「そ、そんなに、下、見ないですよ……っ」

ぬはは、とサクラ節で笑われる。

危惧していた恥ずかしさは、さほどでもなかった。

「んじゃ、わしはさっさと部屋に行くのじゃ。あとは、よろしくなのじゃ」

「ん。わかった……」

それどころか、自分に対する興味が希薄であることに、一抹の不安すらあったと思う。にくじゃがにくじゃが、と鼻歌交じりに連呼しながらキッチンを後にするサクラの指に、未練もあったと思う。

それほどまでに、自分は飢えて 満たされていないのかもしれない。

このままだと、サクラよりも先に手を伸ばしてしまいそうで、怖くなる時がある。

優しくて、頭が良くて、運動ができて、明るくて、面白くて、時々変で、柔らかくて、可愛くて、ちよつと大人で、でも子供で、やっぱり温かい。

そんな彼女を、本当に、好きになってしまいそうで。

一つになれる方法を知っている彼女に、仮にそれを教わって、その上で本当に一つになってしまったとしたら。そうしたら、もう二度と過去を顧みることができないだろうとさえ考えてしまう。

メイド長に「イメージした結果に踊らされないようにするのが大切」と言われたことがあったけれど、それは難しい。料理にはレシ

ピがあるから対処できるけれど、感情には参考書すらないのだ。

完成した後に調味料を加えるなんて、そんな芸当はシェフにはできるはずもない。

だからこそ、自分は過程を大事にしてきたし、例え同じ調味料であつてもその采配には細心の注意を払つた。そう習つたし、自分でもそう思つていた。

でも、それこそ、出来上がった料理にスパイスを足す人もいるのだ。何かが足りなくて、あるいは何かを打ち消したくて、かもしれない。

だから、「誰かと一緒に結果をイメージする。出来上がったものも一つの正解」とするサクラには、叶うはずもない。

厨房に上がり込んで来て一緒に作る主人など、自分からすれば変り者でしかない。

でも、それがサクラだったら。

「だ、だめだめ……！　こんなこと、考えちゃっぺしぺしと、頬を痛くなく平手で挟む。

手に持ったナイフを振り回せば、見えない靄は軽々と吹き飛んでいく。同時に、宙に刻まれるのは儚くも濃密な、彼女の待機時間。甘くて切ない、あの小さなベッドの匂い。切り裂かれた二人の運命を見ようと思うと、刃先は自然と自分の心臓を捉えていて。

涙よりも塩辛い調味料など無いのだと知つたあの夜、自分はまだ、愛というものを覚えていたはずなのに。全てが赦される彼女との関係を断つのが、自分を抹消することよりも遥かに怖かつた。

「ん……。泣か、ない……。泣かないの……。しよっぱく、なっちやうから……っ」

際限ない優しさで真新しい心地よさが入り乱れた、この空間。温かすぎて、目が霞む。

自分には、服が無いくらいがちょうどいいのかもしれない。

【i m b i b e】懲諦ルックフォア（後書き）

【あとがき】

今章、わりと肌色成分多めです。

肌色成分多めに作った前章よりも、多めです。

女性とは、男性よりも「評価される性」ですから、仕方なくはあります。

なるべく全年齢対象で続けていく予定ですので、ご安心を。

そういうのが好きな方は期待せず。

次回は本編に戻ります。

Look for Friend (前書き)

【まえがき】

アリス編に戻ってきました。

寒くなってくる時節、温かくして読みましょう。

今回、アリスが始動です。

では。

Look for Friend

「ナイクスさん、そつちお願い」

「……………」
体中に纏わりついたこの束縛感を形容するなら、重力が何倍もある天体の地表に立ったかのように、だろつか。果てしない諦念と一周回った絶望には、重力という名前がついている。

「あのー。ナイクスさん……………」

「……………」
これは多分に、あたし以外の人間があたしに対して齎しているものであつて、他ならない。

たった一つの抜け道に逃げ込むとするならば、若干の代償は見過ごさなければならぬ。文字通り。

ただ、本当にそうなのか。

あたしが、あたしにそうしていたら、逃げても戻つては来れない。
「ナイクスさんっ。このままだと……………！ あ、ほらっ。いつちやう

よー！」

「……………」
「ごつ、という低い音が足の裏を伝つて、神経をも鳴らす。途中、鈍い痛みに変つたかと思えば、遂には頭を中心に掻きむしるかのよう尖つた。

立っていられなくなったあたしは、その場にしゃがみ込んだ。

「ああー……………。失敗だあ。やり直しだよー……………つて！ ナイクスさんっ！？ 大丈夫っ！？」

「……………」
誰かを毒にかける者は、必ず解毒剤を所有していると言うが、ど

うにも見当たらない。

見当たらなければ、代替品を使うしかなくなる。

それこそ、少しでも触れれば大層に危険な、甘い猛毒などを。

「頭、痛いのか？ セ、センサーっ！ ナイブスさんが」

「……………」

言葉を、表現を忘れたわけではない。

ただ、代償が怖いだけ。返答が、怖いだけ。

「ねえ、大丈夫？ 背中摩る？ よしよし」

「……………」

それから限界が来て、あたしは少しの間だけルートの感覚でいた。

氷上でなければ、二度と目覚めなかったかもわからない。

「お。起きたね」

女性らしく細長いながらも丸みを帯びていて、とてもよく使われた感のある声が、あたしに向いていた。

視界一面が物々しい天井だったので、すぐに意味を理解した。

「ごめんなさい」

「謝らなくてもいいのに」

先生はそう言うけれど、これはあくまで、部員としての言葉だ。

大方、次は保健体育の先生としての言葉があるだろうか。

「最近、ちゃんと寝てるかい？」

「いつも通りよ」

あたしの観ない間に、あたしは四肢欠損などしていないか、念のため確認しながら答える。身体の内部のことに関しては、もはや気に留めない。

先生は少し疑り深く寄ってくる。

「いつも通り、寝てないのかな？」

「どうかしら。寝ているつもりでも、そうっていないのかもしれないわね」

そこはあたしにもわからない範囲なので、語尾を濁す。

拗れたことが特別嫌いそうであるから、このような過程など、意

味を為さないのではないかとは思うが。

紡がれる言葉には、意外性も何もなかった。

「ここ最近、ミス連発してるよね」

「反省しているわ。本番までには必ず何とかするつもりよ」

あたしは立ち上がり、来月にある中規模大会を見据えた一言を吐き捨てる。
いちげん

現在進行形で練習しているチームメイトたちからすれば、こんなにも弱いエースは不要かしら、と青白いリンクを睨みつつ。

一瞥した先生の表情こそ、腑に落ちなかったが。

「なんとか、ね……。確かに、ナイブスさんならできちゃいそうだね……」

「当然よ。しますから」

出来る限り事務的に答えると、逆に先生は熱かった。

「でもね、違うんだよ。先生ね、今は結果よりもっと、過程を大事にしてほしいと思うんだ。まだ一年生なんだから」

リンクが溶けてしまわないよう、あたしは静と務める。

「ああ。追隨を許さない個人よりも、崩れないチームワークの方が強いって、いつもの熱いあれですか。言っていることは、理解できるわ。でも、結局は結果だと、前のコーチは言っていたわ。現に勝っているコーチと勝っていないコーチ。選ぶなら、あたしは前者ね」

「ナイブスさんは、いっつも手厳しいな……」

瞳が潤んでいるようで、言い過ぎた感否めない。
生徒が先生に気を遣う意味はもはや理解不能だが、あたしなりの優しさを示しておく。

「あたし、勝たないと怒られたので。昔は」

そんな簡単な話ではないと、少し悔しいけれど、先生には関係は無い。

前回の練習試合、このチームへ来て以来初めての敗北を味わったツケを払わせようと言う根端だったのだが。

思ったよりも機嫌は取れたので、良しとする。

「そっか……。そうだよ。ナイブスさん。ものすごく上手だもんね」

「そうでないと、勝てないのよ」

敗北という言い訳に埋もれている人間になら、尤もらしい嘘を教えるよりは、経験した真実を説いた方が適当だと思った。

どれだけ努力しようとも、結果が出なければ、努力は認められないのだ。無駄だったとマイナスになることすらない。ただ、ゼロになる。やっていないことと同じ。

だからこそ、結果は出さなければいけない。

「でも、ねえ。ナイブスさん……？」

結局、結果が無ければ、意味は無いのだ。

それも、出来るだけ多く。誰かの目に留まるような、確実さと迅速さで以って。

そのためには、過程を

「ナイブスさんは、それで楽しい？」

いつの間にか、先生は笑顔であたしに聞いていた。

結果を射止めるためのプロセスに、楽しいもへつたくれも無い。

そう言う持論をあたしは持っていたはずなのに。
どうして。

楽しい今日と、楽しくない今日を比べてしまったのだろう。

「っ」

思わず息を飲む。

勝手に、言い負かされたような気持ちになる。

「なんか、ノアさんが部活に来る前のナイブスさんに戻っちゃったな」と、思ってたね」

「……………」

そんなのはあたしが知ったことではないと、目で言う。

先生は、はははと小さく笑って答えた。

「ナイブスさん。チームのみんながね、ノアさんが来てから優しくなっただって言ってるの。それで連携がしやすかったって」

「あたしのせい、ですか」

違うとわかっているのに、何故かそう言われている気持ちになっただ。

あたしが、あたしに暗示しているからだっただ。

「違うよ。そうじゃない」

先生の言葉ごときで、暗示が解けるとは思えない。

でも、熱があれば、氷は解けて水になるのかもしれないけれど。

「もっと、皆のこと、頼ってみたら……？」

そんなこと、氷漬けのあたしにできるわけがない。

孤独という薄い膜を凍結させ続けてきたあたしにとって、あの子一人背負うのだったって、やっとだったのだ。それが急に増えるなど、もつての外。

逆に、氷点下のあたしから滴る冷酷な雫に迷惑するだけなのではないか。あるいは、あたしの不慣れな気遣いに、不安定な意志が結露するだけではないか。

それこそ、勝利から縁遠くなる。

「勝って評価されるのが楽しいんじゃないかって、みんなやって勝つから楽しいんだよ」

勝つためには、努力が必要で。どうして勝つのかは、評価されるため。評価されるためには、努力が必要で。どうして評価されたいかは、もうわからなくて。わかるためには、努力が必要で。どうしてわかりたくないかは、リンクサイドに書いてあって。リンクサイドには、誰もいなくて。

ああ。

一体何をしているんだろう、あたしは。

友情だって愛情だって、上手く使えば勝利に近づけるだなんて、そんなこと、とっくに知っている。今までだってそうしてきたのだから。そのために、こんなにも時間をかけて。

何を焦っているのだろう、あたしは。

この時間が一番無駄じゃないか。

「ごめんなさい。あたし、疲れているみたい……で。今日は、もう、帰ります……」

そう言う結論に至った以上は、あたしは眩暈未満の仮病以上で演^やる。

「調子、戻らなそうかな？ どうする？ 暫く休む……？」

「ええ。そうするわ。次の試合までには戻るから」

「そっか。それじゃあ心配いらないね」

大概、先生もあたしを過大評価しすぎだ。

x x x

さて、今日からは、放課後の時間が三時間ほど伸びたことになる。ただ、疲れは確実に日々溜まってきていて、一段と億劫がっている重力を実感する。結果の出ない失望感も相俟って、もはやあたしを動かすのは責任感だけになる。

それだけでは、見つかるものも見つからない。誰かと勝ってこそ勝利なのだ、そんなことは、言われずともわかっているつもり。あたしにできないことも、誰かができれば、それはプラスに働くのだから。

そう言うわけで、あたしの行き先は学校の外に出ない。

天井裏と壁の中以外を探しつくした廊下も、こうしてプロセスを変えて見れば、陰りが伺える。校舎に何か秘密があるかもしれない

と、幼稚な考えまで浮かぶ。探していなかったところは無いだろうかと、意識が前を向く。

そういつ探し方だって、あつて損は無い。

そして、一人でなければ急ぐ必要は無いのも道理。

「失礼するわ」

二度、ノックをしてからドアをスライドする。

一瞬、温かい空気が肌を撫でた気がしたけれど、錯覚だったようだ。

如何にも経費削減の至りであろう、暖房のついていない八畳ほどの部屋。空気の動きが殺されたこの場所には、纏まりの無い書類群とは裏腹に整然とした紙の香りが留まっている。光は一つの窓に集約され、それが動的に部屋を分断しているように見えなくもない。

数秒で埃が積もるのではという不衛生な長テーブルには、席が三つ設けられていて、そのうち二つはすでに埋められている。

情報に埋もれたここ 生徒会室に立ち寄ったのには、当然ながら訳があつた。

「あ。アリス。どうしたの？」

まずあたしに声をかけたのは、幼馴染でもあり副会長でもあるルートだ。

あたしが自発的にこの時間に来ることはまずないからだろうけど、少しばかり不安げな問いかけであるには違いない。

生徒会とて、一生徒ではある。重々承知でここへ来ているのだ。

「ちょっと用事があるのよ」

当たり前のことを、強く言った。

そうすると、何かに反応したのか、テーブル奥の眼鏡をかけた女生徒がおもむろに本を閉じた。いよいよもって眼鏡を外す。

「あら？ アリスちゃん？ どうした？ まだ部活じゃないのかね？」

今しがた読み耽っていた小説の登場人物の口調でも映ったのか、おかしな口調ではあるけれど、とりあえずは生徒会長だ。色々足りない部分が多そうな人物ではあるが、ルートは絶大な信頼を置いていて、あたしもそれなりに重鎮だと思っことにしている。

合ったその日からちゃん付けて呼んでくるフレンドリーな人柄ではあるが、そういう配慮もあつてか、あたしと割と距離はある。

「今日は休んだわ」

事務的な口調で答える。

会長の答えに熱があるせいで、部屋の寒さが余計に際立つ。

「ええっ！！ 休みかい！！ どうしたの、今日は！ んっ！？ 用事でもあつた！？」

「よくいる親戚のおじさんみたいになってますよ会長。あ、それです。アリス。生徒会に用事？」

「じゃなきゃ来ないわよ」

「だよね。ははは……」

「それもそうだよな！。あっはっはっは！」

現時点では障害でしかないけれど、あたしの事情を知れば、この人もきつと手を貸してくれるだろう。でも、微力でしかない。あたしの力が及ばない。

それではだめなのだ。

猛々しく響く笑い声の一切をかき消すように、あたしはできる限り鋭利な言霊を乗せる。

「^{ルート}副会長、借りてくわね」

しん、と本棚が軋む音がした。

割って聞こえてくるのは、あまりに品の無いパートナーの謎めきだ。

「へっ？ 僕？」

あたしに誰かを震わせる才能は無いけれど、手を引いて連れ出す

努力はできる。

多少強引に鞆を準備させて、あたしはルートの腕を掴んだ。
抵抗も合意もない、中途半端な重さだった。

「ちよちよちよ、アリスちゃん!? 駆け落ちなの!? 駆け落ち
展開始まったの!？」

「違うわ。少し、探し物を探すのを手伝ってもらおうのよ」

あたしがそう言うと、自然、ルートの腕が軽くなる。

表情を見るとやる気に満ち溢れていたので、それならばと、そっぽを向いておく。

「探し物っ!? それってまさか……。愛、とか言わないよねっ!？」

「愛、ではな」

「もう古いんだかねそんなのっ! 近頃はね、もっとこう……。ア
レなんだからねっ!」

「ルリ会長……。思いつかないなら言わないでください……」

これ以上はアリスが怒りそうだと、言う理屈には溜め息が出るけれど、さすがだとも思った。伊達に長い付き合いではないな、と「なんだとー」という合図を皮切りに、長編小説を朗読しているのではというくらいに雑言が飛び出す。

ルートが、その中を踏み慣れた足取りで掻き分けて突き進んでいった。

「ルリ会長。今週の仕事はあらかた終わってますので、アリスの手
伝いしてきますね。仕事が増えたら来ますので、その時は呼んでく
ださい。でも、会長の仕事はちゃんと自分でやってくださいね」

「来期のイベントスケジュールは……」

「それは、さつき会長が本を読んでいる間に終わりました」

「新年度の予算案は……」

「それは会長のお仕事だと思います」

鬱憤を晴らしているような構図ではあるものの、邪心が無い。

生徒会長自ら招いたことだから致し方ないが、この学校の一生徒

としては見苦しいことこの上なかった。

それだけ、副会長の存在が大きいのかもしれないけれど。

「すみません。行ってきます」

「うわーん。寂しいよー」

わざとらしく突っ伏す会長を、副会長は苦笑いで見ていた。

「あはは……。サクラがいればよかったんですけどね。今日は、早めに帰っちゃったみたいで」

「サクラちゃん、最近早いよね。ワシは悲しいのじゃあ……。あつ。まさか、彼氏か！？ 彼氏なのか！？ いや、サクラちゃんは彼女か……。？ 今頃、リゾートでいちゃついているってことかっ！？ くらう。まあでも、サクラちゃん可愛いしな。男子が黙ってないよな！。はああああ……。なんでワタシには」

「行きましょ。ルート」

「うん。行こう」

そして、あたしは あたしたち二人は、生徒会室を後にした。

この後の宛は無い。宛は無いが、目的はある。

探す力は増えていない。増えていないが、瞳は倍になった。

力なき者に歩幅を合わせるということ。誰かを頼るということ。

それはつまり、歩みを遅らせるということ。でもそれは、確かに進んでいるということ。

結果というものに向かって歩くなら、一人より二人。

Look for Friend (後書き)

【あとがき】

さあ、アリスが動き始めました。

どことなく漂う安心感……さすがアリスです。

ルートの協力も得て、ノア搜索完遂なるか……！

次回、ルートと一緒に探します。

Look for Excuse (前書き)

【まえがき】

アリス編です。

親友との共同作業、少しづつが悪そうです。

どしどし。

Look for Excuse

ルートの家のコーヒー園を通り過ぎて暫く道なり、少し坂を上ったところに小川を跨ぐ橋が佇んでいた。あたしはおるかルートも行ったことの無い場所であるようだ。

橋の中央まで行って、下流を見渡す。

高さは三メートルそこらで、川の流れは緩やか。辺りにはぼつぼつと住宅があつて、家並みは木造が多い。背の高い木が無い見晴らしの良さから、開拓がなされているとわかる。

仮に橋から落ちてしまつていて、ここら一帯のいずれかの家で匿われている可能性もゼロではない。

ああ。それを言つたら終いよね。

「ここ、どこよ」

言わずに留めて苛立ちは募るものの、あたしが口に出すのはそれくらい。

連れは、学校を出た時よりも少し疲れが見える。

「えっと。国境まで大体二十キロの地点かな。さっき、看板に書いてあつた」

荷物は、道中、ルートの家に置かせてもらっているから、身体は軽い。

それを補つて余りある、手がかりのなさだと言える。

二人でいるとお互い、案外お喋りである。

「ヒントも何もないと、さすがにきついわね」

「うん。さすがにね。ねえ、情報収集はやつぱりダメなの？」

「ええ。もし、ノアを人質にされるようなことがあつたら困るもの。ノアを拾つたやつが心の清い人間だとは限らないわ。まあ、拾われ

ているかどうかも微妙なところだけれど」

「うーん……。そうだよ。ああ、何か手がかりでもあればなあ。

アリス、ノアさんが近づくと電波強度が良くなるのかないの？」

「ないわよ。ラジオじゃないんだから。それ以前に、元々ノアの感情伝播はあたしのコントロール下じゃないの。距離どころか、近況もわからないわ」

コントロール下に無いと言うのは『あたしがノアを知る能力』ではなくて、『ノアがあたしに伝える能力』であるから頷ける。

とは言っても、方角とか距離くらいはわかったものだ。ノアの記憶にあたしが存在していることの賜物だと思う。

それがこの頃、めつきりと無くなった。ルートの言う電波のように、何らかの遮蔽物に遮られてしまったかのように。

それでも、繋がりには確かに感じる。ノアは生きている。

惜しくも、今は紛いものの繋がりだけが頼りだった。

もしかすれば、その繋がりにはあたしの気のせいであるかもしれない。二人で作り出した幻に過ぎないのかもしれない。

だからこそ、こうして歩いて探した。

「どうする？ 橋、渡るの？」

「そうね。今日は橋の手前を探しましょう。考え無しに搜索半径を広げるのも良くないわ」

効率を考えて、円状に探す範囲を拡大していたから、順通りいけば橋の手前ということになる。もしも橋の向こうにノアがいたら、ということも考えなくはないが、反駁こそ論を俟たない。

そんなあたしだから、何事にも感情的になれるルートを選んだのだった。今のあたしの冷静さでは、かえって火傷を負ってしまうだろうから。

「ねえ、アリス」

「なによ」

陸へ向かう途中、ルートが話しかけてきた。

こちらを向いていなかったたので、あたしも同じようにした。橋が

長く感じられた。

「もし、さ。もしもだよ」

小さなステップを踏むもので、あたしも足踏みすることにする。
何歩か於いて、ルートは問う。

「ノアさんが国境の先に行っても、アリスは行くんだよね」

「当然よ。あなたには来てほしいと思うけれど、そこからは無理強いはしないわ。さすがに、危険だから」

その国境に関門こそ無いけれど、跨げばそこは紛争の只中だ。

平和の中でのうのうと生きているあたしたちでは、到底生き抜くことができない。

でも、ノアがそこで息をしているなら、あたしは行くしかない。
覚悟の意味も含めて、あたしは橋をじりじりと仰々しく踏む。

「アリスってさ」

ルートの声色が簡単になる。

「なによ」

あたしはいつも通り、淡々と返す。

ルートは少し恥ずかしそうに微笑して、それから一言する。
いちげん

「優しいよね」

まさに、全身が「はあ？」だった。

さすがださすがだと茶化すのも、正直言つと飽きてきたところだ
というのに。

ともあれ、問いかけたつもりは無かったのだ。

「ノアさんのことももちろんだけど、誰に対しても。思いやりを感じ
るよね」

「ビンタするわよ」

「ひいっ」

「冗談よ」

「だ、だよ。ほら、優しい」

「強くぶつわよ」

「ひゃっ」

「……つたく。こんなところで遊んでないで、さっさと探すわよ」

あたしは少し歩くスピードを速めた。

それに気付いたルートが駆け足でついてくる。

ふと、ノアが帰って来た時のことを考える。

ほんの少しだけ、ルートが可哀想に思えた。

「結構、遠くまで来たよね」

暫く道なりに歩いたところで、ルートが口を開いた。

時間は言うほど経っていないと思う。

「そうね」

「ここ、どこだろうね」

やけに辺りを見回しているかと思えば、いつの間にか迷子になっていたのか。

無論、あたしは覚えているけれど。

「さあ？」

「えっ……」

「冗談。覚えてるわ」

「よかったあ……」

それから、また三十分ほど歩いた。

一日はますます更けて、寒気は氷点こひょうちに接いで、また一つ凜れんとした。

ルートの感情から焦りが除外される頃、ちょうど入れ違いで疑問が湧いたのがわかる。

「ねえ、アリス」

「なによ。今日はよく喋るのね」

「うん。まあね」

言葉を削られることを恐れて、あえて言い添えたのだが、読み違えたよう。

逆に選択を迫られることになる。

「一つ、思うことがあるんだけど。聞いてもいい？」

「ダメって言ったら？」

「アリスなら聞いてくれると思う」

「酷い価値観の押し付けね。正直、耳を塞ぎたくなるわ」

「ねえ、アリス」

「お願い、アリス……！」

あまりに強く思うので、あたしの息は白く、そして重く落ちてしまった。

「はあ……。なに？」

耳を塞ぎたいのは、嘘ではない。

「アリス、何か隠してない？」

その瞳は真つ直ぐにあたしの瞳を捉えて、その奥にある芯の部分をぎつちりと握っていて。あたしが身動きできないように、色感というものの均衡を、悉く崩してしまったのだ。助くは身震いするほどの、透明な寒さだろうと思う。

我に返ったあたしは、気怠さにも似た反骨心を口にする。

「あたしが、一体何を隠すのよ」

「ノアさんのこと。何か、隠してるんじゃないかって心外である。」

心外ではあるけれど、思い当たる節はないとは言わない。推測の段階であるから、誰かに進んで話そうとは思えなかった。

それでも、この未踏の街路を歩くためには、今、話すしかなかった。

「両親よ」

「良心？」

微妙に違うニュアンスで訝られるので、分かりやすく言い直す。

「両親、よ。パパと、ママ」

「あ、ああ。そっちか……えっ？ アリスのお父さんとお母さん！
？ 関係してるのっ？」

「あの二人、ノアがいなくなった後も、特に何も言わないでいつも

通りの生活をしているの。ね？ 怪しさ満点でしょう？」

「なるほど……。なるほどじゃないよっ！ なんでもっと早く言うてくれなかったの!？」

「推測の段階だから、言いたくなかったのよ」

「じゃあ、確かめようよ！」

「人の話聞いてたのかしら？」

さも当たり前のように言うので、あたしが間違っただけをしようとな気すらしてくる。

そうしない理由があるとは、思わないのだろうか。

「確かめるって、あなたね……。もし本当にあの人たちがノアを監禁しているとしたら、どうするのよ。監禁しているなら、間違いなく生殺与奪の環境下に置いてあるだろうし、状況が悪すぎるわ」

「そ、そうだけど……。もしかしたら、すぐそこにいるかもしれないのに……。っ」

そう。

あたしがこうして遠くまで足を運ぶのは、そういうしからみから距離を置きたいというのもあった。少なくとも、ノアがその仕切りの内側にいると、思いたくも無くて。

あたしがノアと距離を詰める度に感じていた、しがらみとの距離感を、元通りにはしたくなくて。

もしかしたら、本当にあたしの両親が、ノアを隔離しているのかもしれない。そう言う心的ショックが、ノアの心を閉ざしたのかも。しれない。

だとすれば、あたしは両親を叱責、鞫問するべきなのだ。そうして対処されたとして、あたしは意志を貫くべきなのだ。

どうしてそうしないのか。

自分に問うのは、あまりに怖かった。

「そろそろ暗くなってきたね。アリス、今日はもう、帰らない？」
横から言われて、日の沈む圧倒的な早さに気付く。

さしてどこかを注視していたわけでもないのに、何だか意外だっ

た。

「そうね。帰りましようか」

目的はただ一つ、探し物を探すと云うありふれた事案。失くしたものはこの上なく大切で、世界に二つとない、あたしだけのもの。

それなのに、あたしは帰り道がわかった。

相反する感情に押し潰されて、あたしたちは言葉を失った。

「それじゃ、また明日」と挨拶する間際まで、あたしはあたしの仕掛けた罠に、繰り返し繰り返し胸を刺されるのだった。

ルートの家で鞆を回収してからも、家に帰るのを躊躇う。

このまま帰らなければ、ノアのもとに行けるような気がして。

x x x

門限を破った時は、いつもこっ酷く叱られる。酷い時は十二時も回る。

父は手を出さずに声を張り上げて、耳を虐める。母はただ傍で見ている、心を虐める。

見え隠れする心配という文字列が、絶対的な文章量の前では霞んで見える。

あたしはそれに反駁もせずに、ただ時の流れゆくように静かに、心をどこかへ放り投げた。

戻ってくる頃、あたしの体は、暖かい浴槽と冷たい食堂を通過して、満たされている。

ふと、家の裏口へ赴いた。

誰も帰ってこないことはわかっていた。

あたしは、あたしの部屋のブレーカーを落として、それから部屋に帰った。

そういう気分だったのだ。

自室の布団に潜って思うのは、大して冷めなかったなということ。それから、あまりに疲れていないということ。

満たされてしまったあたしの身体に、少しでも傷をつけられたら、そう思ったのに。

刻一刻と経過する時間は、今日も慈悲深く、あたしの背負う負債を嵩増ししてくれる。

どれだけあたしが傷つけば、ノアはここへ帰って来られるのだろう。あたしはノアのために、どれだけ傷を負えるのだろう。ノアの負った傷を、あたしはどう癒せるだろう。

ああ。そうだ。

明日は、国境を越えよう。

学校も、行かなくていいかもしれない。

「……え」

「……ねえ」

「……ねえ、サクラ……」

×××

今朝、あたしはメイドたちよりも早く、そして静かに起きた。

熱に魔される自分の身体など一切観ず、颯爽と家を出た余りの冷たさに呼吸は断続的になる。それすらも気に留めず、靴だけ履いて衣服は寝間着のままだった。

紺に染まる夜空の下を、あたしは必至で駆け抜けた。
誰の為だと知らずとも、ただ、ただ只管に。

Look for Excuse (後書き)

【あとがき】

親しいからこそその厳しさみたいなのが、出ていたのではないかと思います。

他人に口出しできる関係になるというのは、結構難しいことだったりします。

信頼とは砂の城を築くようなもので、そうやって出来上がったものは複雑で美しいのです。

壊れる時は確かに一瞬なのかもしれませんが、一度は作っているのです。二度目は、もっと綺麗で丈夫な城を、立てられるかもしれませんね。

次回は……お楽しみに！

【rubbish】残光フェアウェル（前書き）

【まえがき】

サブエピソード編です。

今章は結構、涙するシーンが多いので、書きながら泣いています。
悲しい。

どろぞ。

【rubbish】残光フェアウェル

新しいご主人様に使えるようになって数日が経って、残念に思ったことが『起こす楽しみがない』というものであったのが、自分でも意外であった。

家具の配置、家訓やルール、好きな物と嫌いな物、嗜好品の傾向、自分のやるべき業務範疇、その他。あらかたは把握できたのだと自負できる。

メイド長の教えのもと働いてきたおかげで、ここまで一人でできるようになっていた。

けれど、一番大事だと教わった『日々の業務の中に楽しみを見つける』という心構えは、以前よりも見つけるのに梃子摺る。

多くは、ご主人様のちよっとした気遣いや仕草であったり、そういった些細な事から見つけ出すのが定石らしい。そうすることで、変に心酔することなく（自分の場合、例外かもしれないが）、情愛を以って奉仕することができるのだと言う。

実際、お仕えしていたお父様にも、厳しい中に優しい一面も持っていて、それを垣間見た時は心底安堵したことだ。

けれど、今回はどうだろう。

メイドを雇う身であるという格式を微塵も感じさせない学生服を纏い、声色は見た目通り幼くて時たま危うい香りを漂わす。身分の差を弁えて距離を置こうにも、当人が詰め寄って来てしまう責務感覚の無さ。要求されるのは、露出という酔狂な熱意。

そして、そもそもの日常生活が楽しい、などというのは反則だろうと思う。

「今日のご飯はなんじゃ？」

「えっと……、にら玉と、あとハンバーグ……」

決められた献立の中で使う食材を選ぶのではなく、決められた食材の中で献立を作る楽しさを、ここに来て初めて知った。

ネタに詰まりそうになる焦燥と、つついっい楽をしたくなる自由との葛藤が、一人ですっと面白かった。

今日は、蕪とミンチ肉と玉ねぎを買ってきたようだったので、好き嫌いの少なそうなら玉と、得意料理のハンバーグにした。

「おー。久し振りじゃのう、そばろ団子を食うのは」

「そばろ？」

「はんばーぐはそばろの塊じゃから、そばろ団子じゃ。一人で居るとな。手の込んだ料理は作る気がせんじゃ。外食だと、はんばーぐは何となく食う気にならんし」

「じゃあ、何、食べるの？」

好きな食べ物が分かるかもしれないと、勇んで聞いてみた。

暫く、そうじゃのうと悩んだ挙句、腰に抱きついてきた。

「のあを食べるのじゃー」

「だ、だめだよ……！」

勝手に情を抱いておきながら、本当に体が目的なのだなど、少し寂しくなる。

でも、サクラの言うままに身を捧げたら、今以上の安堵と信頼を手に入れることもできるのだろうか。突然捨てられることも、無くなるだろうか。

知りたい。

知りたい。

サクラのことが、知りたい。

「サクラ、あのね……」

腰に巻き付いたサクラの腕の上から、静かに手を這わせる。辿れば背中にあるついて、自分たちの距離はぐつと縮まった。肌を感じる温もりは、暖炉のそれと相俟ってさらに熱くなる。自然、頭もぼーっとして空ろになる。

「ん？ なんじゃ。わしに食べられたくなつたか？」

エプロン越しに感じるサクラの吐息は、あまりに熱く、あまりに湿っぽかった。

じんわりと温まった臍の辺りから、こみ上げるものがあつたと思ふ。

例えばそれは、真つ黒で鋭利な爪を持った魔物の腕であつたりするのかもしれない。

「もし、食べてもいいよ、って言ったら……。ノア、捨てられない……？」

「何を言うかと思えば……」

サクラはぼそりと呟いて、それから背中にあつた自分の手を解くように上半身を起こした。立ち退いたりしていないから、距離はかえって縮まって、顔はすぐ目の前にやってきた。

襲われる覚悟で強く目を瞑れば、俄かに、胸の辺りに柔らかな感触がある。仄かな弾みでもって押し返されると、背中から腕で守られるような感覚とで、自分は改めてハグされているのだと分かる。暗闇の世界に、春がやってくるようだった。

「今、ちゅーしたいと言えば、絶対に断らないじゃろうな」

「……………」

本当に、そうだろうと思った。

確固たる見返りを求めて、自分はきつとそうしてしまつたろうと。

「目、開けるのじゃ。ちゅー、せんから」

ご主人様の言う通り、静かに瞳を開く。自分では眉をあげるイメージだった。

視界に現れたのは、一段と近くに移る友達サクラの御顔。わずかばかりの恐怖はあれど、厳かな緊張は無い。サクラの瞳に移った自分の顔に、そう書いてある。

温もりは、あくまで世界に残っていて。

「そんな怯えとるやつを襲つたりはできんのじゃ。そもそも襲わんしの。わしは基本的に、合意の上でなければ何もせんじゃ。のあ

が可愛くないからとかでは決してないのじゃ。できれば襲いたいくらいじゃし。でも、襲わん」

首を横に振られることを目の当たりにすると、自分を全部否定されたようにも感じてしまう。サクラが決してそう言う人でないともわかってはいるはずなのに。

自分はどうしてこうも弱い人間なのかと自責の念が推されて、涙は堪え切れなくなった。それを慰めてもらうことで、また一つサクラの中での自分の存在は大きくなってくれる気すらしていて。

「ああー。泣くでない泣くでない。よーしよし。一人は怖かったんじゃないー。もう大丈夫じゃからなー」

「わああああ……っ！捨てないでえ……っ！お願い……っ」
いつそのこと、そういう驚沢な自分を、滅茶苦茶に壊してもらえればよかった。

激痛が伴っても、羞恥が伴っても、或いは狂おしいほどの悦楽に陥っても構わないから。

「のあ。もううちの子になるかの？」

「なる……っ。なりたい、です……」

そのままノア・グリニツチが、もうノア・グリニツチでなくなればいいと思った。それこそ、ノア・ミサキだってよかった。むしろ、それがよかった。名前すら、無くていいと思った。

ただ、ずっとそばに置いていてくれれば、それだけで。

「本当じゃな？」

「うん……っ」

「本当に、本当なんじゃなっ？」

「本当に、本当……なのっ」

もう、一人になりたくない。

本当に、そう思う。思ってしまう。

今までのことをすべて忘れて、新しい自分になりたい。過去の自分と今の自分を結ぶ鎖を断ち切って、別の人生を歩みたい。

もう、そうするしかない。

「ありすのことは、もういいんじゃない？」

「だって……、しょうがないもん……！　こんな、ノアだから……」
ノア・グリニツチ　雨水で解けた泥で創られたような、低俗で憂い存在。不釣り合いかもしれないのだと、さんざん苦悩したけれど、釣り合う釣り合わない以前の問題だった。

太陽などの光の前では、自分など鑑みるに値しない地^じでしかないけれど、彼女は選択肢をくれた。

「お主は、のあはどうじゃ。本当は、どうしたいのじゃ？」

「一緒、がいい……。サクラと……」

「本当か？　わし以外とは、会えなくてもいいののか？」

自分の作った沈黙は寓された文章の空白であると、サクラが行間を読んだ。

「お主にどんな事情があつてあの公園で寝ていたかは知らん。知らんし、知る必要もない。じゃから、何も聞いとらんし、これから聞く予定も無い。そんなもんはわしには関係ないんじゃない。わしはただのあのやわらかぼでーがあればそれで、万事解決じゃからな」

言葉一つにこそ棘のようなものを感じたけれど、その羅列は角が取れて円く、それでいて確りと生きていた。

体全身で感じる彼女の体温、それから鼓動などが、余計に心を震わせるのが分かる。

単純に、今、この瞬間、離れたくなくなって、サクラの肩を強く抱いた。

「ぬははっ。可愛いのう。じゃが、あんまりぎゅってすると、こっちからも尻が見える」

「いい……。それくらい……。離れたく、ない……。の……」
「なんじゃあ、説得しようと思つとつたのに。困つたのう」

強く。もつと強く。壊れるくらいに抱きしめた。このままずっと離さないでいてもいい。そうすれば、自分も同じようにしてもらえ
る気がした。

でも、それで記憶が書き換わることも、あり得るかもしれない。

少なくとも、サクラとなら。

「のう。のあ？」

「なに……？」

言葉より早く、鼓動が伝わる感覚。

一つ、また一つ速まる鼓動の中に、すでに答えは書いてある。鼓動が次第に同期していくことで、それは読めるようになってしまう。事細かに、僅かに、縷々が。

離れたくない。ならば、耳は塞げない。

「一人はのう？ 確かに怖いんじゃ。わしだって、ここでずっと一人じゃ。面白いことを思いついても話せない、風邪を引いても誰も助けてはくれない、暖炉の火を消しても怒られない、いつ死のうが誰に気付かれたりもせん。もしかすれば、わしの存在は風前の灯火なんじゃないかと、怖い。じゃから、のあの気持ちも少しくらいならわかる」

「い、いいよ……。寂しい、なら、一緒にいよ……？」

どきりどきりと鳴る音は、自分のものだろうか。それとも、サクラのものだろうか。

それが小さな嗚咽と混ざり合うことで、徐々に呼吸は乱れていった。循環を為さなくなった自分という枠組みは、一番太い枝が折れた樹木のように遣る瀬無くも無常に佇んでいた。折れたところから溢れ出る膿のようなものは灰色で粘性があつて、ゆっくりとまた幹を滴っていく。そうして最後にはまた、自分を肥やした。

だから、止まらなかった。

「でもものう、のあよ。一人で居るのが怖いなら、二人で居ればよいのじゃ。簡単じゃる？ 二人でも淋しいなら、三人。三人でも淋しいなら、四人じゃ」

「や、やめて……っ」

恐怖という身勝手を動機と解釈することから、自分の物語は始まった。

物語が長引けば長引くほど、呆気ない終幕は陳腐に感じる。

「これはいいことばかりではないのじゃ。なぜなら、また一人になった時、もつと悲しくなるからのう。贅沢じゃと思うかもしれんが、人間じゃから、仕方がないのじゃ。のあだつて同じじゃ」

「聞きたく、ない……っ」

優雅な終焉を迎えたいとは言わない。

けれど、せめて、あの人に駄作だと覚えられるくらいなら。

「でも、もうわかつとるんじゃ。また会いたくなるのがのう。二人でいることの温かさを、教えてくれたのが誰だか知つとるはずじゃから」

「サクラ……っ」

「一番会いたいののは、一番一緒に居たいのは」
「いっそのこと、ここで終わりにしたかったのに。」

「開いてるから、勝手にお邪魔するわ」

また、思い出してしまった。

また、謝ってしまった。

また、声を出して泣いてしまった。

「玄関のどあ、開けっぱなしじゃったのー。にしても、遅かったのう」

「ねえ、待つて！ 待つてよ、サクラっ」

幹に枝を括りつけて無理くり修繕しようとしたせいで、落とした言葉が再び溢れてくる。必死で繋ぎとめようと、心の真ん中から魔物のような腕が飛び出して、それを支えているようだった。そんなことをしても、繋がるはずなのに。

でも、すぐに繋がった。

それが何故かも、同時にわかった。

「のあが、選んでいいんじゃないよ。お主には、その資格があるんじゃないよ。」

して、それは誰かに横取りされることは絶対ないんじゃない。誰かを好きになるとは、そういうことなんじゃ」

「サクラが結びつけた枝はきつと、ついさっき落ちたそれではないのだから。」

その枝は、色が違うかもしれない。長さも、葉の数も違うかもしれない。誰かが他の枝を持ってきたとしても、それはまた木の形になる。落ちた自分の枝であっても、その衝撃で伸びた小枝が折れたりするかもしれない。

様々な色、バラバラの長さ、不安定な硬さ。それらは時に、不格好という結果をもたらすのかもしれない。けれど、それでも木になる。人になる。

物語も同じ。

過去を間引いたり記録を塗りつぶしたりしなくても、これからの未来が綺麗に咲くように接ぎ木することはできる。彩りも、形も、自分で選べる。

「さあて。出迎えるかのう。ああ、怖いのが。絶対ぶたれるわい」
自分のもつ色ではもうどうしようもない時、自分に無い色でなら何とかなるかもしれない。

「誰しも、存在は無限ではない。だからきつと、迷惑になることだろう。」

でも、最後に完成した一つの木と一緒に眺めた時、その人と同じ想いを抱けたら。こんなに簡単で、こんなに幸せなことは他に無い。「行くかの？ 隠れとるかの？」

「反対に、誰かの助けになる時。」

根っこから抜かれてしまってもいい。見られたくないところも、恥ずかしいところも、全部、何もかも。肥やしになってでもいい。

黒と茶色の混じった泥土であっても、認められる 赦される時が来るのなら。

もう一度。

もう少しだけ。

「行きたい……っ」

太陽の傍にいたい。
そう思った。

【rubbish】残光フェアウエル（後書き）

【あとがき】

人の生とは、悲しみばかりではないと思います。

誰かが凹んでいる時は、必ず誰かが凸っていて、それって男女の関係にも似ていたりします。

でもそれは、互いに理解できないのであって、決して相容れ無いものではないと思います。

ルーモスの世界でも隣国は常時戦争中ですし、この世から争いは無くなることはあり得ませんが、大事なものは、理解しようとすることだと信じてみたいこの頃です。

次は、本編……かも？

Farwell and Rendezvous (前書き)

【まえがき】

雨が降っていたので、早めに上げてみました。

本編に戻りました。

今章はアリスの気持ちになって読んでいただけると、きっと面白いです。

どしどし。

「開いてるから、勝手にお邪魔するわよ」

そもそもこのような場所に、家明かりがあること自体摩訶不思議なのであるが、どうやら、そこにあつてしまった。まるで挑発するかのように。ドアのようなものが。カシミ^{アカデミー}ーヤ上級学校、屋上庭園の桜の木の中に。

都市伝説を信じるか信じないか、あるいはオカルトを信じるか信じないか、という話がある。

現実味を帯びたそれらには、論ずべき点が多い。故に、派閥が生ずるのは想像に易い。

童話を信じるか信じないか、神話を信じるか信じないか、という話がある。

言つまでもない。

当たり前のように存在する嘘には、存在する理由があるからだ。

童話を例にとれば、早い話が『面白い。笑える。子供にうける』と言つたところだろうか。

そついうわけで、童話や神話を『事実』だとして息をする人間は皆無と言っても過言ではないと思う。一口に信じているとは言つても、心のどこかでは嘘であると、そうフィルターしているのだ。

当然、あたしもその一人。であるからして、一学校の屋上の木の中に、明らかに人工物と思われる引き戸が無理に捻じ込まれていれば、それは歎かざるを得ない。

誰の仕業であるかとか、それもわかつてしまふのだから、致し方

ない。

おかげで、童話世界の入り口から漏れ出る妖しい温風にも、畏れを抱くことは無い。

「なんて角度でついているのよ、このドア……。入りづらいわね、まったく」

ドアの下半分が幹の奥まったところに吸い込まれている感じ。この空間的間取りだと、空の方向にお邪魔することになる。開閉スペースは無いが、かえって開け方を悩まずに済む。

ノブに手を伸ばして、できるだけ隙間を広げてゆく。

暖かい光と湿った空気がたちまち溢れて、伸ばした腕を伝って首筋を撫でる。彼の人物を彷彿とさせる花の香りは、童話世界への誘いか。それとも、現実に腰を据えた根城のあしらいか。

ただでさえ、空に向かう非日常に立ち眩んでいるという最中、さらにもう一打、衝撃があつた。

「くっ、これは……っ」

指の先からドアに吸い込まれるのと同時に、背中を面で引っ張られる感覚。重力の方向が変わるとでも表せばよいだろうか、大きな括りで万有引力の法則が崩れるとも言えはよいだろうか。誰かの意識と同調する時のような精神的乖離感ではなく、身体を実世界に留めている何らかの力を、同じか若しくは強い力で打ち消される脱力感。

数秒間の体感の後すぐ、背骨に固い棒を巻きつけられたかのような修正力が訪れる。

気付けば、見覚えのある玄関にいて、目の前では、見覚えのある人物が固い笑顔で以ってあたしを出迎えていた。

「おかえりなさいませ、ご主人様？　なのじゃ」

どうしてだろう。

憶測も無ければ確証も無い。

それなのに、あたしの右手は浮ついて。平手の形を作って、彼女の左の頬を撥ねて、それからヒリヒリと熱くなった。靡いた心は思いの外痛くて、あたしの瞳は忽然と腫脹した。

膝を折って咽び泣く彼女の姿が、静かに像を結んだ。

もしかしたら、そこに傷を作ってしまったかもしれない。

そう思ったにもかかわらず、懺悔できなかった。無論、振り抜いた右手を、取り下げることすらもできはしない。

「……んう……」

そして、あたしは、ただただサクラを見下げているしかなかった。湿った室温の訴求を肌を受けながら。

「……！」

その時だった。

全裸の少女があたしとサクラとの間に割って入ってきた。そうしてサクラの肩を抱くのだ。白くて細くて弱々しい背中から腰下にかけてのラインと、丸みを帯びた肩をこちらに覗かせながら。

その刹那、背筋に氷柱を突き立てられたようになった。

「やめて……っ。サクラは、悪くない、からっ。サクラは、助けてくれたの……っ」

誰かが、誰の為に。悪い、悪くない。良い、良くない。助けられる、助けてあげる。誰かが、誰かの為に。どうして、こうして。結果と因子が、繋がらない。まるで、複雑多岐に絡みついてきた蔦が、一糸乱れず解れていくよう。

そうやって綻んだ淵から、数多の想いが零れてゆく。

「なによ……。なによ、それ……！」

その人の小さな肩は、あたしにでも驚掴みできた。

酷く顫動していることに、あたしはまた苛立ちを隠せなくなるのだけれど。

「あたし、ずっと探してたのよっ！？ 急にいなくなるし、あなた

から何も伝わってこないし……。本当に……。あたしが、一体、どれだけ心配したと思ってるのよっ!？」

それなのにどうして、あたしではなくサクラを擁護するのか、詰っているのだ。肩を捕まえてまで。

どうしてこちらを見ないのか、尋ねているのだ。怒鳴ってまで。そんな横顔を見たいわけでは、毛頭ない。

「どうして出て行ったのよ？ あたしに何も言わないで。どうして？ どうしてこんなところにいるのよ？ ねえ。誰かに吹き込まれたのよね？ だから、こんなおかしな格好しているのよね？ ね、そうよね？」

片言隻句、反省している暇すらなく次の言葉が装填される。

これが所謂、考えるより先に口にしてしまう状態かもしれなかった。

理性という言葉で以って栓をしていた水溜りのような場所に、ぽっかりと大きな穴が空いた感じになる。それこそ、元々が蔦や枝なんか複雑に絡み合ってきた、やわな器だったのかも知れない。

「お願い。答えて。ノア」

彼女の中にある鉄の如き冷静は、今のあたしには到底理解できそうもなかった。

「ノア、ノアは……。自分の意志、で、ここにいるよ……。ここにいたくて、いる……。し、服を着てないのも、そう……。サクラは、悪くない、の……。悪いのは、ノア、なの……。だから、叩くなら、ノアのこと、叩いて……。黙って出て行ったの、ごめんなさい……。でも、言えなかった、の……。」

「それはノアの意志じゃないでしょう？ 言えなかったなら、誰かに口止め」

「違うのっ！ それも、ノアが自分で……。っ。だから、叩くなら、ノアを叩いて……。お願い……。傷に、なってもいいから……。アリスが、つけた傷、なら、ノア……。っ」

「バカ……。っ」

彼女を強く抱き締めるように、二人が息をするように、あるいは心臓が拍を打つように、その言葉は飛び出していた。一番早く伝わるように、それだけを考慮して、あたしは一番近くに彼女を感じた。そうしてまた、自分の支配下に置きたくなった。

「そんなこと、もういいから……っ！」

でも、思案の外、彼女がそうさせなかった。

「よくないっ。よくない、の……っ。このままじゃ、ノア……」

彼女を離さぬよう抱き締めながらも、彼女の口を塞ぐ方法は確かにあった。

けれど、そうしなかった。

あまりに綺麗で美しく、そして儂い。それでいて芯の強い彼女の声を、あたしも一番近くで聞きたいと思ってしまったから。

「ノア……。消えるしか、ない……」

「あたしは、ノアに消えて欲しくないわ」

「アリス……。でも、もう無理、だよ……」

「そうかしら。わからないわよ」

「ううん。わかるの……」

「それはあたしにはわからないわね。あれだけあたしにキスしておいて、『全部無かったことにして』は無いんじゃない？」

「そ、そう……。だけど……。違うの……」

先刻より、少しずつではあるが、段々とノアの思考こえが聞こえるようになってきている。チャンネルがぴたりと合って、耳障りなノイズが晴れて解像度が増していくような、そんな解決感を感じる。

同時に強まっていく理性が、至極勝手に、以前のあたしらしさを掘り返してゆく。

それではダメだと、直感した。

もし、このまま『願いの力』に頼って事を済ませてしまえば、あたしに何も言わずに出て行ったノアの気持ちを汲み取ることはできないと思うのだ。

だから、今、するしかないと思った。

今、不可抗力に対抗できるとすれば、以前のあたしが持っていたのと同じ『愛の力』、それ一つだけなのだから。

「それでも、違う……?」

あたしは彼女を抱いたまま、ゆっくりと頬にキスをした。

今一度、彼女の顔を見る。

「……ち、違うっ」

目も合わせぬままにそう言うので、あたしは小さく笑って皮肉った。

「それじゃ、こうかしら……?」

今度は、ついさつきキスした頬とは反対側の頬に優しく手を添えて、鼻と鼻がぶつかるほどに接近する。逆側の手は、彼女が逃げたままならないよう、ごく自然に肩を捉えている。怯えているのか、はたまた諦めているのか、瞳を閉じたノアに倣って、あたしもそうした。もう、距離感は覚えているから、あの力も詮索も必要ない。

そして、あたしはクラスメイトの目も憚らず、クラスの女子と、恋人同士のキスをしていた。

どこからどこまでが冷静だったか一切覚えがないから、多分、今も興奮状態にある。

でも、あたしはあたしだ。それは、確かなこと。

「……………」

「……………」

暫くは、黙って見つめ合っていた。

あたしはノアを見つめて、ノアはあたしを見つめていた。さらに、あたしはノアの瞳に映ったあたし自身を遠巻きに見ていた。ノアが、あたしの瞳に映ったノア自身を見ているのも、わかった。

冷たくて温い時間を、ひしと感じた。

「帰るわよ」

あたしはノアの手を引いた。

「えっ……でも、ノアは」

「いいから、帰るわよっ!」

ほんの少し、怒りの気持ちの方が勝っていたと思う。それから、それを拭うように抱き締めたい気持ちが滔々と流れていった。

だから、痛くなるほどノアの手を握った。

無音に沈むノアは思いの外軽くて、逃げられない確証はなかったけれど、ノアの意識を介して伝わるあたしの温もりは本物だと自負できる。

それがあれば、ここから現世へ帰ることもできるだろうと思う。

一つ、未練があるとすれば。

「サクラ」

床に手をつけて頂垂れる彼女に、声をかける。その調子は暗くも明るくもなく、相手に深い印象を刷り得ないよう、あたしによって最大限繕われる。

とどのつまり、返答など無くとも冥利。

あたしは、他でもないノアのために言うのだ。

「顔。傷になったら、責任取るから」

この静寂は、あたしの漸進を許可してくれているだろうか。暖炉で爆ぜる材は、ガヴェルが打ち鳴るように聞こえなくもない。それが、気の毒な少女を嘲あざわらっているように思えてならないのだ。

しかし、元々がそういうものであるならば。

紛い物であろうとなかろうと、あたしの足は地面というものを踏むしかない。

Farwell and Rendezvous (後書き)

【あとがき】

優しい友人とは、いつでも優しいもので、皮肉にもその恒常性が日常と非日常を分けます。

忙しい時に「大丈夫？」と声をかけてくれる優しさ。怪我をした時に「大丈夫？」と声をかけてくれる優しさ。違うように見えて、同じもの。

そのはずなのに、その優しさにイラッと来てしまったり。逆に、恋に落ちてしまったり。

不思議です。

実は、優しさというのは、その人のマイペースさの現れだったりします。

そして、辛い時にこそ、そのマイペースさを求めてしまったりとかするわけなのです……。

本当に困っている時、優しくしてもらえると嬉しいものです。

次回に続く。

U n f a i r o n F a r e w e l l (前書き)

【まえがき】

ノアの奪還に成功したアリス。
青春です。

エンゾ。

U n f a i r o n F a r e w e l l

サクラのログハウスを出ると、すぐに元の場所に出た。時差は多少あるかもしれない。

とりあえず、ノアを裸で移動させるわけにはいかないので、部屋に寄ってジャンパータイプのユニフォームを着せた。

それから家までは、早足で帰った。

熱り立っていること以外、理由は無かった。

あまりに露出しすぎているからか伝わっているようで、ノアは一言も話さなかった。それでも手を引くと、重くも軽くもないベクトルのままあたしについてきた。

だから、あたしも特に振り返らずに、真っ直ぐ歩いたのだ。

暫くして、玄関の扉の前に辿り着く。音をたてないようにノブを引くと、鍵が閉まっていることがわかる。巡回のメイドが施錠したのだろうと思う。昨夜開けておいた裏口も同じなようだった。

何となくこれは免れないだろうと危惧していたから、さして焦りはしない。

あたしは正々堂々と玄関のチャイムを押した。

この時間であれば、父も母もまだ起きてはいないはずだ。早朝の来客はメイドがすることになってるので、出てきたメイドに協力を仰げば気付かれずに家に入れるはずだ。

この子を連れて。

「……………」

おかしい。

ノアを追い出したのが父ならば、あたしはどうして、またここへ戻って来てしまったのだろう。ノアに何かあるかもしれないからと、踏み込んだ捜索もしなかったのに、結局ここへ連れて来てしまったら、何の意味も無いじゃないか。

それならば、ここではないどこかへ行けばいい。

ここではないどこか、とは？

あたしはどうして、ここへ来てしまったのだろう。

「ナイブス家に何か御用でしょうか……あら？ アリス様に、ノア様……？」

開いた門から、見覚えのあるメイドが出て来た。最近従事することになったうちの一人で、同年か一つ二つ下くらいの子だったから、印象に残っていた。

室内から漏れ出た生暖かい空気が、身体を覆うようにぶつかってくる。

「どうかされましたか……って、えっ？ どうして外に……？」

「ただの散歩よ。気にしないで」

不信を抱くのも無理はない。

ただ、散歩は散歩。結論を急ぎたい。

「それより、あたしを中に入れて。二人に気付かれなあいつらいように」

「ご主人様ですか……？ えっと……。はい……。了解しました」

ゆっくり扉を開くと、ギイと音を立てて軋むことを知っているのか、そのメイドはすつと扉を開けてくれた。

あたしはドアを跨ぐまで、宙に漂う最善策を見ていた気がする。

それなのに、ノアが扉を跨いだ時にはもう、それは見えなくなっていた。

そのせいか、行きの扉が締められることが、途轍もなく怖かった。

「旦那様はおそらくまだ寝ておられます。今でしたら、アリス様も部屋に戻れるかと……」

「扉はこのままにしておいて。すぐ戻るわ」

「かしこまりました……」

「ありがと。ノア、行くわよ」

踏み切ってしまったのだから、進むしかない。

大義名分を失ったとて、あたしはここへ無策で来たわけではない。音を立てないようにすり足で、騒ぎを起こされないようにメイドの目を盗んで、あたしは自分の部屋へと駆けた。

厨房前の廊下を抜けて二階へ上る。二階の奥の部屋があたしたちの部屋。その向かい側の部屋が、二人の部屋だ。それぞれ、出入り口は対面していないので、今起床したとしても、入れ違いを狙って一度だけ抜け出せる。

「さあ、着いたわ」

相変わらず重さを持たないノアに声をかけるよう言いながらも、あたしは振り返らない。

ドアを開くと、今朝飛び出してきた時のまま、部屋はあたしを待っていた。

雑に折り返された掛け布団を擡げて、あたしとノアがそこに挟まれば、途端にいつも通りの風景になるだろう。思わずイメージした構図があまりにいつも通りで、ありもしない時差に感覚が狂いそうになる。

時差ぼけを直すのに時計を見ようと、今、それを信じられるほど余裕は無かった。

「悠長にもしていられないわね。さあ、ノア。まずは服を着るのよ。それから、旅行用のセットを……」

「……や……め」

「ノア……?」

「やっぱり……だめ……」

「何が……ダメなのよ」

「全部……。だめ、なの……。守って、もらうのも、もう、だめなの……。好きなもの……。全部……。わああああん!」

ノアは表情を両手で隠して、その場にしゃがみ込んでしまった。

あたしの前でこんな風に泣くことは今までにも何度があったけれ

ど、そのどれとも似ていなかった。感情をため込んで爆発させるこれまでの涙とは、形も色も温度も、全部違っていて。

あたしはこの涙の拭い方を知らなかった。

そして、ノアも教えてはくれなかった。

「どうして、何も言ってくれないのよ……」

サクラの家からノアを連れ出した時と似た感情が、瞬間的に湧いた。

それは、一方的に情報を知らされない時に、あたしが他人にする対処だった。

あたしは洋服棚からノアの服をとって、それを強引にノアに着せた。自分が乱暴なのを見せつけるように、あたしはノアを初めて雑に扱った。シャツに袖を通す時、スカートを履かせる時、ノアの軽い体重はあたしの手で左右に揺れた。

どうしてか感じる優越感の中に、罪悪感はずっかり埋もれていた。「はあ……」

これで、とりあえず、家に来た目的は果たせたと言える。

衣服の調達、資金の確保、それくらいだが。

ノアがここを出て行くと言うのなら、あたしは留まる理由が無い。格がある。目的の無い場所に、あたしは留まる理由が無い。

自分の布団の乱れを直して、あたしたちは部屋を後にする。それから、玄関で待機させたメイドのところまで急いだ。

「待たせたわね。もういいわよ」

「はい……。あの……アリス様」

策があつて引き留めている風ではなかったなので、立ち止まる。

「様はやめて。はあ……。何かしら？」

「もしかして、家出、なされるのですか？」

“家出”とは、確かに言い得て妙だと思った。

そう題するのが許されるのならそうしたいところではあるが、生憎、それすらもわからない。

「散歩よ。ノアの行きたいところに。海、山、丘……川、かもしれ

ないわね」

「で、ですが……！」

個人的にあたしに畏敬の念をもって接してくれるのはありがたいけれど、あたしが欲しいのは、そういう上方ベクトルの意志ではない。そう言いつけているはずだ。

ああ。

言いつけている、のか。あたし自身も。

「ええ、そうね。傍から見れば家出かもね。でも、違うの。そうじゃない。あたしはこの子の行きたい場所に行くつもりなのよ。でも、そこがどこだかわからないの。だから、散歩よ」

「散歩……」

何日か考えて出た結論でもない、不落の論理が伴っているわけでもない。その言葉には、深い経緯など無くて、こんなメイドにすらも説破されてしまい得る。それでも、いや、だからこそか、あたしはその言霊を繰り返す。

「それなら聞くけれど、あなたは、この子がどこへ行きたいかわかる？」

「それは……」

「わからないわよね。それなら、これは散歩よね？」

「わ、わかりました……。ご主人様にはそうお伝えします……」

どうせ隠しても、じきに無駄になることはわかっている。

それならば、言伝に嘘を吹き込んでも仕方がないと思った。

「それじゃ、行くわ」

会話という繋がりを断つように事務的に吐き捨て、あたしはドアの隙間を潜る。いまだ変わらないノアの気持ちに答えるためなのだと、他でもない自分自身に言い聞かせながら。

その矢先だった。

「どこへ行くつもりだ」

遠くから聞こえた声はあまりに聞き慣れ過ぎていて、誰のものであるかすぐにわかった。同時に、こちらに向かつて廊下を歩きながら、それを話していることもわかる。

今、あたしはこの場からすぐに立ち去るべきなのだ。にも拘わらず、あたしはそうしなかった。

ある意味で最後のチャンスなのではないかと、思ったからだ。た。「さあ。知らないわ。この子の行きたいところに、行くつもりよ」あたしの声が届こうが届くまいが構いはしないが、下手な口述はしないでおく。

この時点で、あたしは限りなく無策に近かったと思う。

「……どうして連れ帰った」

敷居を隔てた位置から、何の圧も無く訝られる。その口調は確かに重く、聞き古された乾きがある。あたしは正直に答えることもできるし、嘘を繕うこともできる。

敷居という境界を意識しつつも、あたしは淡々と答える。

「ノアはあたしの恋人よ」

ノアはあたしを必要とし、あたしはノアを必要とする。そういう、“居場所”のようなものを互いに共有しているのだ、と言って伝わればいいのだけれど。

そうは問屋が卸さない。

「学校はどうする気だ」

その程度の諮問であれば、多少は覚えがある。

「学校へ行けば、どこへ行ってもいいのかしら」
揚げ足をとられた父は強く息を吐いて。

「ダメに決まっている。いいから戻りなさい」

その言霊の矛先は、仰々しくもあたしへ向かっていた。

言葉の綾に罫を仕掛けられるほど口が達者ではないはずなので、あたしはストレートに矛盾性を責める。

「それなら、どうして追い出したりなんかしたのよ」
別段、泣いて詫びて欲しいとか、そういうわけではなかった。何か特別な反応が欲しいかと言うと、不思議とそんな感覚はないのだ。そういう、想定外の反応を除いて。

「その子のためだ」

もう、我慢ならなかった。

自棄であると称されれば、それはそうなのだと思う。
はじめてノアにキスをした日の感情と、本当に似ていた。

本気で誰かに怒りをぶつけるとか、心が揺らいで自然と涙が出るとか、日夜触れなくなるほどに誰かを愛おしく思うとか、あたしにはそう言うのは無い。だから、こういう感情たちに名前はまだ無い。だから、今は、誰かの言った名前を借りて自棄でもいい。

怒りでも悲しみでもない、呆れでも愉しさでもない。大きくも小さくもない、暗くも明るくも黒くも白くも無い。形があるのか、それは長さで表すのか深さで表すのか。ましてや、向きなど無い。その“自棄”というものはたちまちにあたしの心を占拠して、統治していったように感じた。

暫くすると、それは心からも溢れた。

「それなら、あたしも出て行くわ」

自分の中にあつた無策の策と、その“自棄”はよく混ざつた。よく混ざつて、固まつた。固まつて、あたしの盾になった。

「お、おいつ！ 待てっ、アリスっ！」

あたしは盾を手に入れた。

そう確信した左手に重みは無く、ただ冷たい雫と噎せるような殻だけがあった。

あたしは憚らず、遮二無二道路を駆け抜けた。

西に、東に。

そうして、疲労した。

目的地が無いのだから、その疲労に意味は無い。あたしはそれでもいいけれど、ノアはよくない。

それならばと、あたしは仮の目的地を設けた。

「とりあえず、あなたの家に行って休みましょう」

休むと言うのが、一体どれくらいの期間のことを指すのか、自分でもわからなかった。

何泊するかを伏せられてホテルに行くような不安はあるものの、疲弊には勝てない。

とりあえずの目的地に向かって、歩くスピードを調節した。

あたしの家とノアの家はそこまで距離が無いものの、重い体を引きずって歩けば数十分はかかるところだ。積雪はないが、低い気温下では体の動きも鈍る。

腕時計を忘れたことを思い出したのは、その時だ。

憶測二十分、ノアの家が見えてくる。

築年数を伺いたくなるような草臥れたマンションで、道中に見える大型マンションとは違って部屋数もかなり少ないし、今明かりの灯っている部屋自体少ない。あたしは来慣れているから何も感じないが、普通の人なら嫌悪感を抱かざるを得ないだろう。

その二階部分の一室が、ノアが母と暮らしている家になる。

マンションが近づくと、少し様子がおかしいことがわかる。

明かりの灯っている部屋が少ないにもかかわらず、マンションの前に二十名ほどの人が屯している。居住者全員が外に出て来たにしては多すぎるし、何より黒服に身を包んでいるのが怪しい。おまけに手袋までしている。

葬式にしては賑やか過ぎるし、手袋は必要ないはずだ。

「何よ、アレ……」

こんなことは、今までになかった。

今までになかったことが、あたしの身近でもう一つ起きている。

第六感に他ならないが、そこに妙な繋がりを感じて、あたしは自然と隣のマンションの影に身を潜めていた。

そこで初めて、左手に重みを感じた。

すかさず、あたしは振り返る。

「大丈夫。怖くないわ。あたしがついてるから」

「ん……」

ノアは酷く安心した表情で、あたしの手を強く、そして重く握り返してきた。

自分が安堵したのがわかった。ただ、表情までどうなっているかはわからなかった。

しかし、こうしている場合ではない。

得体の知れない集団の間をすり抜けることほど無益な行いをするつもりはない。一刻も早くこの場を去るべきだろう。

静かにノアにそう伝えようと、頷いてくれた。

そうしてあたしたちは物陰を伝って、もと来た道に戻っていった。

「はあ……はあ……」

戻り道を半分ほど来たところで、嗚咽するのはまた違った荒々しい呼吸が聞こえてきた。

あたしがしたのではないので、誰のものかすぐわかった。

「疲れたわよね」

「……………」
何か後ろめたさがあるからか、ノアは何も言わずに遅い呼吸をした。

そんなことをされて、あたしは盾を翳さないわけにはいかない。

「その木陰で少し休みましょう？　ね？」

力なく頷くノアの小さな手は、今までで一番重たくて冷たかった。夏にならないと葉すらもつけないのか、あたしたちが寄りかかった木は細くて鋭利で、歓迎されている気は全くしない。あっちへ行くとばかりに地中から突き出した根の上に、わざわざ座ってやった。布団程の柔らかさは無いにせよ、落ち葉が良いクッションになる。ノアを横に寝かせて、あたしの太腿を枕にした。

「……………」
「……………」

冬の朝とは相当静かで、ノアの心音が太腿を伝って聞こえそうだった。それを数えては、あたしの鼓動と比べるけれど、意味は希薄だ。

そういうことを、以前もしていた気がする。

ノアの家狭い部屋で。二人しか入れない空間で、くつついて。

いつでも温かくて。特別な感情などなくて。ただ、幸せの時間がそこにあつて。

そういうことを。

ああ。それなら、いつぞ。

いつそのこと、このまま行き倒れて、この木の養分になってしまってもいいかもしれない。

そうすれば、一生そのまま。ずっと、一緒に居られるかもしれない。

「ノア」

「……………」

「今、キスしてって言ったら、してくれる？」

「……でき、ない……」

何を言っているのだろうと思った。

これではまるで、盾があたししか守らないようではないか。

あたしがしたいのは、保身などではないはずなのに。

「ノア」

「……………」

「ここで、あたしと一緒に死んでくれる？」

「……………うん、いいよ」

何を馬鹿なことを言っているのだろうと思った。

あたしの盾が、あたししか守れないガラクタだったからだ。それならばいっそ、捨ててしまおうと思ったからだ。

それで誰かが何かを思うとすればきっと、この子が愛してくれるはず。

それだけあれば、今は十分に感じた。

もはや、あたしにはそれしかないのだろうけれど。

一つの歯車が朽ちて、残りのすべてが狂っていく感覚。そう表現しても、全く過言ではないと言い切れる。誰も信じないと言つのなら、あたしたちが命という器で以って提言してもいい。

あたしはノアを信じるし、ノアもあたしを信じてくれる。

歯車が二つしかない世界なら、どんなに楽か。

でも、ノアはそれを増やしたのだった。

誰かに心を開くということ、それこそが新しい歯車が回り始めるということ。そうすることであたしが止まるわけではない。むしろ、自分のもつ歯車が大きく回りだすということ。

そうした結果が今、ではないのだと思いたい。

だからもし、仮に潤滑剤のような希望が、この世に存在するならば。

「あれ？ アリス……？」

「と、ノアさん？」

U n f a i r o n F a r e w e l l (後書き)

【あとがき】

終末感漂うところに、仏の光ですね。

ここで二人が発見されないパターンも、きっとあったと思います。
そんな気がしてくる、限界点の今話でした。

次回は結構肌色です。

禁隸ネイチャー（前書き）

【まえがき】

ここからノア編です。

ノアに視点変更致しますので、抒情表現のオンパレードです。

独特な擬音語があったりなかったりです。その辺も整理して読み進めてみてください。

あと、カウント始まります。

どうぞ。

禁隸ネイチャー

家出一日目。
昼過ぎ。

「ちよつともー。早くしてよー」

「少しずれるから、半分ずつ使ってみる？」

「うちのシャワーはそんなに射角ないよ。洗う、流す、替わりばんこしかないの」

「だよね……というか、わざわざ四人で入らなくてもよかつたんじゃない……」

湯気で半曇りの鏡面越しに視線を感じる。

自分は何かを言うべきなのだろうけれど、その何かを言える立場にない。黙って、その人と向かい合うしかできない。

お湯がいつも以上に熱く感じるのは、冬だからだろうか。その人の体と触れ合ってしまったているからだろうか。“想い”からだろうか。それとも。

「それにしても驚いたよ。まさか登校途中、二人が木陰に倒れてるなんて……」

「話しかけても反応しないしさー。頑張ってうちまで背負ってきたけど。私たちまで泥だらけ。あんなところで何やってたの？ まさか野外プー」

「逃げてたのよ」

その人の言葉を合図に、しとつ、と一瞬だけ風呂場の時が止まったように感じた。

浴槽に溜められたお湯に映った、自分とその人との距離感を推し量る間に、水の流れる音が世界を再開させてしまう。

「アリス、誰かに追われてるの？ ……まさか。ノアさんがいなくなっただのも、それと関係してるとか……？」

「教えないわ」

「えっ……。どうして？」

「巻き込みたくないのよ。あたしの問題に」

そう言っつて、その人はこちらへ足を延ばしてきた。サクラのログハウスのように広くないから、互いに避けようと意識しなければどこかしらは確実に触れ合う。

身構えていたつもりはないのだけれど、いざ、その人の足が腿の裏を掠めると、ぴくりと体全身で反応してしまう。答えてはいけな
いのだ。そんな資格など無いから。

「ノア……」

鏡に逃げても水に逃げても、まるでだめだった。不自然に目を閉じることもしかない。

それならばいっそ、沈むのはどうだろう。

覇気の抜けるような熱さの中に思い切り身を投じてしまって、感覚というものはさっさと捨ててしまふのがいいだろう。自分というおもり錘だけ残して、遠のいていく感情とともに存在すらも圧縮されてしまいたい。

させまいと手を握るのは、また、その人だ。

大好きな、大好きな、恋人アリスなのだ。

「この子が何か話してくれればいいんだけど……」

身体全体を両脇から覆われるように、ゆらゆらと胸に抱かれる。柔らかい腕の感触と優しい肌触りが、沈みゆく自分という存在に鎖を巻く。アリスとの間にあるものが温水であることも相俟って、逆上せてしまいそうだった。

そうして、俯くしかなかった。

自分の胸の前で交差するアリスの腕がいやに細く見えるのは、光

の屈折のせいだ。

「ノアさん……大丈夫なの？」

「この通りよ」

「え。なにに？ ノアさん、喋らなくなっちゃったの？」

「近い状態ね」

「あれ？ でも、アリスならノアさんのことわかるんじゃない……」

「それが、失踪以来伝わってこないのよ」

「それじゃあダメか……」

「えー……。せっかくノアさんがうちに来たのに、そんなのつまんなーい」

冬の風呂場には、やはり温度差がある。

「リ、リズっ！」

「なによー。だって、今日はお泊まりになるんですよ。これからいっぱい遊びたいじゃん。主にノアさんを弄る方向で」

「こらっ。その前に僕たちは学校に行かないとでしょ？ それに、遊ぶのは宿題やってからだからね」

「ケチー。今日くらい休んじゃおうよー」

「ダ、メ。僕たちは用事も何もないし健康なんだから、ちゃんと行かないと」

「なんだよう。妹と風呂入ってるくせにー。ルーの担任だった先生にバラしちゃうよー」

「そ、それは……っ！ べ、別に、全然っ？ いいけど……っ？」

「はいはい。仲が良くっていいわねー。そろそろ交替してくれないかしら？ さすがにふやけるわ」

「あ、ごめん……」

絞っていた蛇口を緩めて、シャワーを全身一通り潜らしてから、ルートとリズが浴槽の方へ寄ってきた。一連の動作が臆長けていたから、そういう習わしなのかもしれない。

二人はアリスもろとも自分も、陸へと引き上げるように催促する。立ち上がるくらいは自分ですべきと思っていたのだけれど、上

手く足に力が入れられなかった。出遅れたらしいことに気付いたアリスは、自分の脇の下に腕を入れて抱きかかえるように立たせてくれた。

「……………」
言葉は、見当たらなかった。

箕子の敷かれた床は冷たくないけれど、その隙間に飲み込まれそうな恐怖を感じた。

「ほら。前向きなさい。あたしが洗ってあげるから」
「……………」

そんな資格はないのだと、思った。思ったが、言わなかった。

こんなガラクタを磨いても意味はないけれど、空ろながらも方向をもった意志はある。

羞恥心という箍の無い今だからこそ、なのかもしれない。

「ん……………」
「痛かった？　じゃあ優しくするわね」

アリスの手が目の粗いタオルのようなものを纏って、自分の全身を這い回る。初めからアリスは優しいのだから、痛いわけではない。でも、すごく痛い。

そう。出会った時からずっと。

「すごい…………」。なんかアリスが優しくて別人みたい…………」

「う、うるさいわね。本当は嫌なのかもしれないけど、ノアがこうなったのはあたしが原因なのよ。仕方ないじゃない」

そんなことはないのだと、自分が一番よく知っている。

アリスは世界で一番、誰よりも、ノア・グリニツチに優しくかったのだから。

でも、言葉は見当たらない。喉に薄くて強固な幕が下りているような感覚になる。

「ねえねえ。言葉を話させればいいんでしょ。簡単じゃないの？　そんなの」

「だったら、こんなことになってないわよ」

「もー。アリスお姉ちゃん、わかってないなあ。簡単だよ簡単。キ
「この子とあたしがキスすればいいとか言っただけでしょ？ あなたの
ことだから」
「うっ。ちち、違うし！ もっと簡単だもん！」
ぱしゃぱしゃと荒れるので、こちらまで飛沫しぶきが舞う。
大袈裟に盛り立てられた場の雰囲気は、彼女の大言を期待してい
る。

「あんまり聞きたくないんだけど」
アリスの作った選択肢を拭い払って、彼女は自分を指差した。
「そう。私と、するんだよ」

「「「え」「」」

一体感はいま座に散開しながらも、余韻は糸で繋がっているように
伸びていた。

アリスの重い溜息が、張りつめた糸を裁断する。

「はあ……。何言ってるのよ」

ルートバカンスの微笑の奥底は陰っていて、とても黒く見える。

「ははは……。何言ってるの、リズ……」

確かに、何を言っているのだろうと、思ってしまった。

彼女の中で口づけという事柄が、どういふことに当たるのか、疑
問だ。

「ほ、ほら。こないだの夏合宿バカンスの時さ、一緒にお風呂入ったじゃん
？ その時の感触が、実は忘れられなくてー。その……。ちよつと、
良かったかもー、って……。ね？」

「ね？ じゃないわよ。見なさい。ルートがただならぬ形相で水面
を睨んでるわ」

「と、とにかくっ！ するの！ すればいいの！ すればいいんでしょ!？」

「滅茶苦茶ね」

「いいのっ。わかつたら、アリスお姉ちゃんと私の場所交換ね！」

「リ、リズ……? 無理はしなくていいんだよ？」

「はあ……。それをあなたがリズに言ったらダメでしょ」

アリスはシャワーで体を一通り流すと、すぐさま水を止めてしまう。面倒だと口にしながらも、そのまま湯船の人員と乗り換えを果たしてしまった。湯船から出て来たその人は、どこか委縮しているように見えなくもない。

話の流れが掴めないまま、事は過ぎようとしている。

「えええええ!! ほ、本気なのアリス!？」

「なによ。五月蠅いわね。まだ朝方よ」

朝方にしては浴槽の温度が高めに思えたのは、きつと気のせいではない。

「いやいやいや! だって、ノアさんはアリスの彼女だし、リズは……」

「僕のだから……って? 別に、あんたのもんではないと思うわよ。なに口説いてるかわからないから、一概に言えないけどね」

「そ、そうじゃないけどさ! この複雑な光景を目の当たりにするのは相当きついよ!？」

「あら? そうかしら。あたしは別にいいと思うけど。したいことをすればいいと思うわ。なんなら、あたしたちもしましょうか?」

「冗談やめてよっ! それは力オスすぎるよ!」

何を言い合っているのだろうと首を傾げていたら、誰かに真っ直ぐに正された。

目の前にいたのは、ルート妹であり恋人でもある、リズという少女だった。

当然だが、全裸だ。

おかげで、この光景には思い当たる事故があった。

「お姉ちゃんたちうるさいから、勝手に進めちゃおっと」

「……………」
あの時の瞳は確か、塞がれていて無だった。

それが今は、真剣と諧謔を足して二で割ったような、収まりのよくない眼差しであるように見えた。これからすることに意義を見出せてはいるものの、そのあとの結果がどうなるかは考慮しない時の表情らしかった。

「ねえねえ。キス、何回したことある？」

「……………」
それと似た風情の悪戯話がエレメンタリーの時に流行っていたよ
うな気もしないでもない。

もとより答える義理は無いけれど、あくまで目は背けないでいた。
「なんか子供くさいこと聞いてしまった……。でも、絶対百回はし
てるでしょー」

「……………」
その人は、ははは、と瞳で息をついて。

「じゃあ、ノアさん。ノアさんは、私のことどう思ってる？」

「……………」
今度は妖しく機嫌を伺うように。

「ふーん。そしたら、目は閉じてね。私も後からそうするから。雰
囲気大事ねー」

「……………」
他人の言動に槍を突き立てたいわけではないので、言われた通りに
にする。

改めて、湿った肌の感触が頬を撫でた。それでも、濡れたままの
髪を梳くのは難しくくて、ちょうど耳の前の毛が頬に吸い付く様にな
ぞられてゆく。

アリスがよくそうしてくれたのとは、違う感情が湧いた。

「じゃあ、ノアさんがリードしてね」

「……………」

感じたことのある中でも強烈な印象の記憶が、まず脳裏に浮かんでくる。その日の前日、その日の後日、と順に記憶が掘り起こされていく。同時に、自分視点での感覚だけがそこから切り離されていくような感じがした。超常的潜在的な力を、根こそぎ奪われるかのような、そんな得も言われない感覚だった。

ただ、それを受け入れるかそうしないかは、自分で選ぶことできた。

誰かとの繋がりを持つという意味合いで言えば、どちらの選択をしても同じこと。優劣など無い。

それなのに、自分の中の誰かが否定をした。

どこかの誰かのために、どこかの誰かの上書きはしたくないのだと。

「だ、だめ……っ」

「あう」

腰の傍にぶら下がっていたはずの両手が、いつの間にか胸の前まで来ていた。おまけに、そこにいた人物の肩辺りを押し出した形跡があるではないか。

何もした覚えがないので、すぐさま、周囲の状況を確認した。

「あ……」

鏡に映し出されたのは、時の流れよりも遙かに無責任な重罪人の顔だった。自らの命の重さを勝手に決めつけ、償おうとする意志すら無い。そんな表情が見て取れた。

でも、それだけではなかった。

瞳越しに像を結ぶ姿が、途轍もなく温かくて、少し恥ずかしかった。

「えっ。躲すの？ ちょっ、まっ、恥ずかしいからやめてよーっ。

私だけ、欲タカリみたいじゃなか。もー、無理矢理にでもしちゃお
！」

「や、やめて……っ」

それが欲集りなのではないかという真っ直ぐな疑問^{ベクトル}で、出され
た胸を押して返した。

「あれ、ノアさん……？」

「そんなバカな」

「バ、バカだなんて、アリスお姉ちゃんひどい。ノアさんも避ける
しひどいなあ」

「えっ……ごめん、なさい……」

「別にいいけどさー」

「リス。あなたって、馬鹿なのか天才なのかたまにわからない時が
あるわ」

何かに導かれて、誰かのもとへ帰る。自分が誰かもわからないま
まに。リスに導かれて、皆のもとへ帰る。少なくとも自分が”ノ
ア・グリニッチ”であると信じながら。

決して許されたのではないけれど、何か吹っ切れたような気がし
た。

欲望という強大な意志の塊を目前にしたからか、自分の中にあっ
た意志のベクトルに力が宿ったのかもしれない。誇れるほどの意志
はないし、揺らがない強靱な心もないけれど、思えば欲望は確かに
あった。

どうして掴めなくなってしまったのだろう。

自分が見失ったからだろうか。

それとも、誰かが奪ったからだろうか。

だとすれば、誰が、そうしたのだろう。

ベクトルは、簡単にその答えを示してしまうので、遣る瀬が無か
った。そこには逆説も背理も必要としない。いきなり出た結論に、
納得する自分がある。

自分はそのまま矢印の向く方へひたひたと歩いて、また、その人

の隣に居るだけだ。

それは何かに縋るのではなく、ただの死に場所選びに他ならない。

禁隸ネイチャー（後書き）

【あとがき】

シリアスとコミカルが入り乱れる中、かなり肌色成分多めだったと自負しております。

裸の付き合いという言葉があるらしいですが、それよりも素晴らしい「吊り橋エフェクト」という言葉があったりします。今回はちよっぴりその応用でした。

今章は、他の章よりも「体」についての表現が増えると思います。恥ずかしいこともあると思いますが、心とは切っても切れない大事なもののなのです。

それでは次回、「ノア編続き」です。

躁樂ドミナント（前書き）

【まえがき】

ノアアリ編です。

メッセージを頂いたり、知人に声を頂いたりすると、特にリズムが
気なのですが、私の一押しはノアだったりします。貧弱だったり
ネガティブだったりしますが、可愛さは特別です。

あと、触り心地が良いです。

色々と妄想を膨らませつつ……。

どうぞ。

躁鬱ドミニオン

家出二日目。

朝。

母が夜仕事を始めた四歳の頃から、自分は早起きだった。

保育所へ行くまでの間、それから学校へ行くまでの間、少しでも長い時間一緒にいたいと思ったからだった。初めのうちは、それで満たされていた。自分も、母も。

しかし、そのうちに母が時間をとれなくなっていった。その分、自分は削れるだけ時間を削って、母にあげた。

そんなある日のことだったろうか。母に泣きながら「もうやめて」と言われたのは。

それからというものの、母と自分が一緒に居る時間は一切無くなる。余った時間は『自分のため』という枠組みだけを残して、すっかり空洞と化してしまうわけだ。

積もりに積もった洞ほらには、すぐ、虫が湧いた。少しの言葉を水に膨らんだ欲望を餌に、それらはどんどん増殖した。出来上がった巣は居心地が良くて、自分はそこから抜け出せなくなった。

幼い日、いじめに耐えられたのも、そういう絶対的な根城があったからなのかもしれない。

余った時間が巣を広げ、塔を固めて、城を成す。

食糧はすぐに底をついた。

その時だった。

一人の少女が「可哀想だ」と、自分の手を取ったのだ。

少女は強く、繭の城も解けてしまつほど輝いていた。そして不思議だった。絶対的な根城が崩されていつているはずなのに、不安も恐怖もないことが。それどころか、一緒にいれば自分もそうなる気すらした。

虫でできた少女は、陰ながらにそう思ったのだ。

できるだけ近く、長く、深く。生憎、余らせていた時間はたくさんあつたから。

そうしているうちに、変わった。

誰かを、好きになった。

そんなことを、思い出した。

「あら、おはよう」

生まれて初めて聞くその言葉は冷たく、ひっそりと紙の匂いに滲んでいった。

いつも目にする空とは違う景色の中で、自分の瞳は冴えわたる。髪を撫でてくれる主人の優しさを、精一杯読むために。

「え、と……」

まずは、耳を見た。さらりと垂れ下がったブロンドを追うと、パジャマの襟元から覗く鎖骨が目に入る。いつも寝る時着ていたきめの細かいレース生地ではなくて、使い古された感のあるワンサイズ上のパジャマ。モノトーンのチェック柄という珍しい配色すら操るブロンドカラーは、さながら太陽のよう。

書齋部屋だというこの場所に現れた、新しい光とでも言えるだろう。

「何。胸なんか見て。ノアらしくないわね」

「ち、違う……のっ」

ルートのを借りずに、ルートの母のをわざわざ借りるあ

たり、何か目論んでいそうな気がしなくてもないのだが。

吸い寄せられないように、視線を背景に飛ばす。

“戦闘メイドVS特捜部隊”というタイトルの小冊子が、いやに目を引いて困った。ルートの父の守備範囲の広さに感服である。

「まあ、別にいいわよ。見たって触ったって、好きにして。減るものでもないし。逆に、減るものでも。今、あなたにあげられるものなんて、この身みくらいしかないんだから」

一つ息を吐いてから、アリスは言う。

主人アリスに身体を捧げられてしまったら、自分メイドには対価を支払うことができない。その上、痛みという贖罪すら受理されないなら、権利を差し出すしかなくなる。

「アリス……」

「どうかした？」

無償で振る舞われた微笑みは、受け取らずに。

「ごめん……なさい。ずっと、黙ってて……」

「ふふっ！ いいのよ。あなた、もともと口下手じゃない。今更よ」

それでも今は、あなたという主人に無償でついでに行くしかない。

いや、ついでに行きたい。

「ね……」

「なにかしら？」

二度捨てられる、その日まで。

「要らなくなったら、すぐ、捨てて……ノアのこと……」

「……」

何か気に障ったのか、アリスは額に皺を寄せて、自分のことをきつく睨みつけた。自分はその瞳を、ただ見返した。そのまま透明になっててしまいそうなほど。

アリスが、ふつと吐いた息が頬を撫でた。

「あたしの唇をさんざん奪っておいて、その発言はないんじゃない

？」

「う……」

微笑をもらすアリスからは、ほんのわずかだけ自分と同じ匂いがした。

少なくとも、お互いの身体に染みついたこの匂いが落ちきるのを確認するまでは、息吹は続けなければいけないだろう。

そう思つて、試したくなつた。

「あら素直ね。……好きよ、ノア」

「ノアも……」

自分の布団を抜け出して、隣へ滑り込む。そのまま拒まれずに囲われて、寝床一つというスペースに収まる。必然を装って伸ばした両手は、アリスの腕と背中を覆つていった。そして、”アリス”の匂いを、存在を、必死で体全身に受けた。

そうすることで、また、”自分”をアリスに与えることができる。

「いい、匂い……。アリスの匂い、好き……」

これが最後になるかもしれない。

思えば、アリスとの関係には常に感じていたかもしれない。いつ消えてしまふかわからないような”自分”という存在に、アリスの光は明るすぎた。ノア・グリニッチという影が、真つ黒い輪郭だけを残して消滅してしまふ気がしたのだ。

実際、自分には中身というものが無かった。そこに、強制的に詰め込んだに過ぎない”アリス”が、”ノア・グリニッチ”の幻影を見せてくれていただけなのだから。

「そう。ありがと。あたしも好きよ、ノアの匂い」

「アリス……」

それが今こうして欲望に満たされて、希望がそれを肥大化させて、実感が袋の口を閉じた。

心のどこかで、アリスも自分を求めてくれているような感覚。絶対的に服従し支配されているという、太く生々しい結束の力。そういうものが重さの無い枷となり、それは同時に精神を支える手摺にもなつたのだ。

恐怖が皆無だと言えば、それは嘘になる。

しかし、”自分”を受け止めてもらえなかった時、日の当たらない場所へ身を投じる覚悟はできたと思う。そうして、空疎な影が暗闇を這う翳かげとなることを、漸く、認められるようになった。

そういう意味で言うなら、今、怖いものは無いのかもしれない。

「ノア、もっと、アリスの匂い、嗅ぎたい……かも」

「ノア……？」

「首……」

「ちよつ、こら……！」

背中を掴んでいなかった方の手で、そそくさとブロンドを掻き分けた。ぴくつとアリスが反応する間に、その隙間を縫って首元へと顔を割り込ませた。予定通りとはいかず、鼻よりも先に唇が着いてしまったが、全く構わなかった。

今は、匂いも風味も同じようなものだ。

一番初めに知ったのは、朝の彼女が仄かに甘いこと。次に知ったのは、少しばかりの汗ですら、自分には刺激の強すぎる火酒であるということ。自分というフィルターを通しているからか、その後についてきた芳香は、少しばかりアクが強く、酔った。

あまり長い時間は舐めていられず、すぐ、早い息継ぎをする。すると、また、ぴくつと反応がある。そうやって奮い立って、また香る。目の前の幸福に流されて、悪酔いしてしまいそうだった。

それでもよかった。

「別の、ところ……」

「ノア……」

首のラインを伝って肩へ、そのまま脇のところまで来た。

お酒というものを飲んだことが無いからわからないけれど、ウオツカをストレートで飲むような危険性がある感じだろうか。心臓が規定数を超えて脈打つ感覚。

怖いもの見たさというアリスに失礼になるから、飽くなき探求心が働いたことにする。

嘘をついてまで潜り込んだ場所は、まるで砂糖のように甘く、ハ

チミツのように纏わりついてくる。それでいて、牛乳バターのような懐かしさと、焼けたパンのような真新しさとが混在している。

この匂いを一言でいうなら、そのまま

「朝トーストはんできてるよー……」

書斎の扉が開いていたのは、一体どのタイミングからだったろうか。極まりのよくない時機に、極まりのよくない場所へ、極まりのよくない人物が立っていて、大変に極まりがよくなかった。

おまけに、鼻を弄んでいた香りはその扉の向こう側から、一度でわかるほど鮮烈に漂ってきているではないか。焦げた小麦のトトーストの匂いが。

掛け布団とアリスの胸とに挟まれた間から望むリズの表情は、興味と好奇のちょうど境目。進退を強行しない距離感と、咄嗟の行動は遺傳的にも思えてくる。

誰かに見せるものでもないけれど、こんな姿はできれば見られたくは無かった。

「ノアさん、朝なのに、その……、すごく……激しいねっ」

花柄のエプロンに袖を通したりズは、恥ずかし気に言った。

忌憚のない追及に返す言葉は無いけれど、アリスのしたり顔には我慢ならなかった。

「いつ、いやあああああっ……!」

ノア・グリニッチは、この世界で誰よりも愚直に盲目に、最後はやはり虫のように主人を愛していた。

長方形の天板を有したテーブルは重めの焦げ茶色で、作られてからどれだけの時が経っているか安易な想像をしては、都度頷けそうだ。年輪を読めば実が分かるのかもしれないけれど、表面の光沢を作っているニスは厚く、信憑性はそれほど高くない。

ただ、それでも、ニスの表面の年輪にはため息が出そうだった。何かをこぼしたり汚したりして、その度拭いて。誰かが飯台にあがつたのを注意して、叩いて。客が来るのをもてなすのに花を売って……。少なくとも、この家族の樂らんの一部がその円状の傷に刻まれていると思う。

果たして、その樂に自分がいていいものだろうか。昔から付き合いのあるアリスは何となくわかるけれど、今日初対面の自分を、そんな大切なところに招き入れても大丈夫なのだろうか。こんな疫病神を座らせて、力場が拗れたりはしないのだろうか。いつも以上に神経を尖らせていると、毛の逆立ったニの腕を、唐突に背後から捕捉される。

「おはよう。あなたがノアちゃん？ まあ、可愛いわ」

「え、えつと……」

明朗快活な表情と弁舌ぶり、はつきりした目鼻立ちは見覚えがあるような無いような。リスとルートを掛け合わせて二で割ったら、こんな人になるような、ならないような。以前に、そもそのルーツがここにあるような。

だからか、その人が誰なのか言われなくとも自然とわかった。

「ごめんなさいね。急にこんな、困るわよね。『新しいお友達すごく可愛いんだ』って、ルートが事あることに話していたから、ノアちゃんに会うの楽しみだったの。そしたら、こんなに可愛いんだもの、我慢できないわよー」

「んうう……」

顔を合わせて数秒で人一人を胸に収めてしまう展開力たるや、ルートの素直さとリズムの表現力の根源足り得ていた。昨日は、早くに寝てしまつて顔を合わせていなかった。

それにしても、この包容力はあるの二人のものを足しても到底足りない気がするの、気のせいではない。肺と心が息苦しく、そう訴えていた。

「はい。おしまーい。本当はもつとしてあげたいけど、二人ともご飯までしょ？ それなら、ご飯が先よね。それに、ノアちゃんにはアリスちゃんがいるし……ね？」

「なっ」

するりと髪を梳いて微笑むその人には、きつとどんな力も敵わないだろう。

そんなことを思わせる瞳をしていた。

萎縮したのはアリスも同じだったのか、言葉で追いかけた割に、声色には覇気が宿らない。

「い、いいのかしら？ 泊まらせて頂いた上にご飯なんて、もらつてしまつて」

「あらなにアリスちゃん。遠慮なんかしないでいいのに。ちょっと大人になつて、ませちゃつたのかしら？」

「い、いえ、違うの……。ただ、平日にもかかわらず、あたしたちが学校へ行かないのを何も言わないで享受するなんて、そんなの……」

「おかしい、よね。でも、いいの。確かに、アリスちゃんもノアちゃんも不思議に思つてるんだと思う。でも、アリスちゃん、『何す

る気だ』って睨んだりする？　しないわよね。だったら、私はそれでいいのよ。私にはそれだけあれば十分、料理を作る理由になるわ」
解答を求めたアリスの言葉に仕組まれた誘導灯すらも、捨てて並び替えるくらいは平気な顔でやってのけてしまおう。それこそ、文字通り”朝飯前”に。

ルートの母はすごく強かった。

こんな人のもとで育っているのだ、あの二人の強さの所以には頷ける。

「さて、と。ノアちゃんは、食べられないものがある？」

気を取り直す合図をするように髪の毛を束ねながら、ルートの母が尋ねてくる。

食べられるものと食べられないものの境目すら怪しかった身上、そういうものはこれといって決めていなかった。厳密にはあるかもしれないけれど、アリスの家に来てからもアレルギー反応が出たことはないから、おそらくは大丈夫な体質なのだろう。

首を二度横に振ると、「偉いのね」と優しく頭を撫でてくれた。

何故か自分は頭を撫でられることが多い。

人によって感触が違い、思う心も違うけれど、今回はその中でもどこか特別に感じた。

「じゃ。二人とも、少し待っていて。好きに寛いでいいからね」
何かいいことでもあったかのように、鼻歌交じりに部屋を出て行ってしまった。ふわりと、深みのあるコーヒーの香りを引き連れて
そういえば、ルートの家はコーヒー園を営んでいると言っていた
気がするが、情報は定かだったか。広間にいる今はもちろん、入浴中すらも、あの黒い飲み物の匂いがしていた。

リズとルートは鼻が慣れてしまっているのだろう。アリスも、何度も訪れているから、こういうものだと情報を飲み込むことができているのだ。

往々にして、自分は慣れなかった。

コーヒー自体は、甘くして飲むので嫌いではないと言える。匂い

も、変に感覚を刺激しないし、むしろ落ち着く部類に入ると思う。こうして、家中がその香りで充滿する体験はしたことがなかったけれど、これそのものは別に嫌ではない。

慣れないのは匂い自体ではなくて、匂いが作る雰囲気だ。

誰かの当たり前が、今ちようど、自分の当たり前と拮抗しているから、妙な疎外感を感じているのではないだろうか。この匂いの充滿する空間はすべて、この匂いに慣れていている者たちの所属する空間であるということ。

学校の廊下の壁が窮屈を匂わすのも、サクラの家が誘惑を香らすのも、きつとその機序だ。

同じように、自分とアリスだけの空間もある　草臥れたマンシヨンの一室、その物置部屋。確かに、あの空間には、自分とアリス以外は排他されるような力があるように思える。意図してでない、それでいて強力な力が。

そう思うと、急激に吸気が途轍もなく重たく感じられた。息をしようとして試みる度に、体ごと地面に引きずり込まれそうになる。

そこには、懐かしさすらあったと思う。

その時だった。

「はい。あーん」

実際に重たい空気の中、顔をあげた先にあつたものは、一口大の何かだった。その奥には、ルートの母が笑顔でそれを撮んでいる構図が見えた。

まごついていると、その人は今一度タイトルを号した。

「はい。あーん」

題の意味はよくわからなかったけれど、どう応えればいいかはわかる。

差し出された何かの辺り、その人の周囲だけは驚異的に空気が軽いのだ。さつき、撫でてくれたからだろうか、その人の周りだけ、やけに桃色に霞んでいた。

であるから、という前置を於いて、自分は自然的に生を求めたのだと思う。

「っんむ」

舌の上に展延していく奥深い香りは、どこかで嗅いだことのあるようなノスタルジックな塩味。幾重にも積み重ねられた風味は、味という直接的見解をも覆す、どんでん返しの重厚なストーリーを想起させる。果物のように艶めいた甘さもあり、焼き物のように直情的なベクトルもある。引き立てられた根菜のようなものは、根菜たる証拠を残しながらも、えぐみも苦味も皆無。極めつけは、本来の触感が活かされた調理法にしてあるという徹底ぶり。

口に入れてから食堂へと消えるまで、終始、発見だった。

その何かは、魔女的な美味しさがあったのだ。

「これ、なに……？」

「今の？ ブリ大根の、大根の方よ。さつきルーたちに持たせたお弁当にも入れたんだけど、どう？ 美味しい？」

どちらかというところ、物ではなくて事に対する疑問だったのだけれど、やはり伝わらなかつただろうか。

「ブリ、大根……」と、覚えてたの単語を口ずさんでたじろいでいると、その人がこちらを見てにこりと笑んで、また魔女らしかった。「ノアちゃんは、『あーん』ってやってもらったことない？ ノアちゃんくらいの歳の子は普通恥ずかしがるから」

先ほどの行為を、いや、厚意を指すのだろうけれど、その実は不明なので、頷けも否定もできない。端から記憶の中に無いのは道理で、首を傾げるに尽きた。

「あら、そう……。じゃあ、これからアリスちゃんにやってもらう

といいわ。ノアちゃんもやってあげたらいいし」

「な、なんであたしまで……っ」

「そんなこと言いながら、こっそりやるのがアリスちゃんよねー？」
「な、なんでよっ。やらないわよ！」

確かに、アリスが恥ずかしかがっているように見える。

自分はそんなことは無かったし、むしろ嬉しかった。単純に食が提供されたわけであるうえに、口元へ運ぶと言うこと自体が授受についての許諾になっているのだ。教養も暗黙の了解も必要としない、言わば『提案』という形。

これはつまり、そういう行為なのだろうか。詳細はわからない。

わからないが、アリスの表情がこんなにも緩んだのは初めて見た。

要は『あーん』とやらは、試す必要があるということだ。

「私は好きなだけどな……。まあ、確かに子供じやないんだし、一人で食べられるとは思う。でも、これって愛のおすそわけだから。愛は人にあげても減らないんだもん、おすそわけすれば増えるのよ。好きな人となら、尚更ね？」

物理法則を容易く捻じ曲げた発言だが、言わんとしていることは自然と理解できた。愛とは超常的なものだと思っているし、そう実感もしているから尚のこと。

愛という情念がそういった壮大な力であると感じている瞬間だけは、か弱い自分も強く大きくなれていると思う。アリスの隣に居れるくらいには、身も心も。

食卓へ並べられた料理は、アリスの家に比べれば遥かに少量で、非情に主観的だろう。けれど、料理の並んでいる位置はアリスからも自分からも同じくらいの距離にある。しかも、自分がその一杯をスプーンで掬って、アリスの口元へ運べば、それは愛になるらしい。

「ね。アリス」

「な、なによ」

もしそうなら、最後にはそうして同じスープを啜るのも悪くないと思った次第だ。

こんつ、こんつ。

アリスの気が抜ける瞬間を見計らって『あーん』を試行しようと目を凝らした矢先のこと。

廊下の奥の方、おそらく玄関の方から金属が硬いものにぶつかる鈍い音が聞こえた。ちょうど、アイスリンクでストーンとストーンが衝突した時のような、黒々とした緊張感があった。

アリスの家と同じノック式のチャイムだろうか。

「ベルチャイムじゃないってことは、お店じゃなくてうちに用ね。こんな朝早くに、誰かしら。牧場のメイリーさんは今日じゃないって言ってたし……つと、ちょっと出てくるわね。二人とも食べていてね」

自分たちがここにいるというタイミングも相俟ってか、保護された空間の入り口を開けられることには若干の抵抗があった。開けてはいけない、開けるべきでないのような、虫の知らせとも言えるだろうか。

アリスも何か思うことがあったようで、表情が暗い。

「嫌な予感がするわね……」

「そう、かも……」

「十五分」

「ぼそりと時間が聞こえる。」

「え？」

「十五分戻ってこなかったら、どこかに隠れるわよ」

「う、ん……」

機嫌の悪い時以上に眉間にしわが寄っていて、訳を聞いても答えられなさそうだった。もとより、アリスの勘は良く当たる。以前に、アリスの言葉はどんなことがあっても信用しているのだ。諄々くさくさ

と詰め寄る謂われも無い。

小計画を構えていると、ルートの母がすたすたと居間に戻って来た。

「二人とも、暫く外出を控えた方がいいかもしれないわ」

唐突に聞いた口調は険しく、事の重大さを感じさせるようだった。しかし、それに対しての驚愕や動揺というものは限りなく小さく収まった。

アリスは平静を装って尋ねるが、その食は細い。

「来たのは、誰？ 用件は？」

「黒い服を着た人達よ。ノアちゃんのことを探しているみたいだったわ。何十人もいたからびっくりしたけど、知らないことにしておいたわ。あんな怪しい恰好してるんだもの、易々と教えられないわ」

「そう……。ノアを、ね……」

また、何か重たいものが自分に押し掛かったように感じた。今度は、自分から遠い人物も巻き込んでしまった。代償は小さくなるどころか、大きくなっていく。

それは、償わなければならない。

少なくとも、一人で。

「なるほどね」

そんな暗雲を一挙に晴らすが如く、アリスの一言は凄まじく冴えた。

捨て駒にされる可能性も考慮しつつ、自分はアリスの瞳を見つめ返し、それから等しく愛した。

「あたしが目的ではなくてノアが目的……にも関わらず学校から離れたウエル家を訪れたということは、少なくとも詮索方法が学校単位ではないということね。背理的に、あたし伝いで情報を元にここへたどり着いたと言うなら、黒服の正体にも合点がいくわ。大勢で移動していることを考えると誰かの指示に従って組織的に動い

ていて、かつ正体を掴めていないといったところね。写真すら持っていないかったみたいだから」

「ど、どうするの……?」

いつ、何を、どうするのか、まとめて訝ったつもりだった。

解っているのか否か、アリスは小さく頷いて手を握ってくれた。

「大丈夫よ。あなたはあたしが守るわ」

約束のキスを求めるには、少しばかり口の中が塩辛過ぎたから、手を握り返すに留めた。

仲介したルートの母は、その慣性力さえも見越して、結論を急ぐ自分たちに歯止めをかける。

「出て行くなんてダメよ。危険すぎる」
最もであった。

しかし、その危険は分散してはいけない。掻い摘んだ一部と言えど、簡単に分け合えるような代物ではないのだ。

伝えたかったそのことを、アリスが代弁する。

「これ以上、迷惑はかけられないわ」

浴びせかけてしまった借款の大きさに懺悔しては、まさにその言葉に尽きた。

自分たちがすぐにこの場を去るということが、そのまま、責任を返還させるということになる。一番わかりやすい、等価的代償の形なのだ。

そこへ水を差す想いは、確固たる思いをふやけさせる。

「それで出て行ってケガなんてしたら、もつと迷惑になっちゃうでしょ? それじゃ、アリスちゃんの言っていたことがそのまま総崩れになるわよ。そもそも、二人を危険な目に合わせるなんて、看過できないわ。親としても、人としてもね」

そうして言葉を信用しきって殻に閉じこもれば、確かに被る痛みというものは少なく済むかもしれない。けれど、そうやって外界からの光さえも閉ざしてしまえば、肝心の欲望すらも影を失くすことになる。アリスに会わせる顔が無くなる。アリスに、好きと言えな

くなる。

そう教えてくれたのは、他でもない、この人の子供なのだ。だからだと思う。

確信的な当事者意識が、自分の原動力になった。

「ノア、それでもいいっ!」

自棄ではない。それでいて、打算的でない。

利己的でない。それでいて、絶望的でない。

そういう気持ちだが、弦を張った器うつわのように声を奏でたのだと思う。

「アリスに、ついていきたいのっ!」

振幅の見えなくなるまでずっと、半永久的に、自分の言葉が響くのを感じていた。誰かが共鳴してくれることを、ただ只管に祈りながら。

「ノア……」

アリスは静かに聴いて、優しく観想した。

その数秒後だったか、ルートの母が重々しく口を開いたのは。

「そっか……。んー……。でも、ノアちゃんがそこまで言うなら、分かったわ。アリスちゃんもきつと、考えあつてのことだと思っし。でも、そのかわり、ケガだけはしないようにね」

「勿論わかつてるわ。でも、ごめんなさい……」

「謝らないで。あなたたちは、まだ子供なんだから。我儘でいいの。もし、口を噤むのも開くのも許されるなら、またアリスの手を取って歩きたい。叶うはずもない願いが叶うような気さえする、途方もない未来の話をしながら。」

今、ゴールを見据えるのならば、果たしてそこは温かいだろうか。この冬のように寒いだろうか。

「それでアリスちゃん、これからどこへ向かうつもり? コーヒー

園の移動販売で、荷車を出すんだけど……それ次第では行先も変えられるわよ。アリスちゃんは知ってると思うけど、夕方頃にね」

「荷車ね……」

「アリス……？」

時間帯か、移動速度か、人力かもしれないことか、何か腑に落ちないことがあるようで、アリスの返答は俄かに淀む。

それでも、再び考えが纏まるまでの速さは、さすがアリスだった。「ごめんなさい。荷車は遠慮しておくわ。それと、場所も教えられない。もしもの時、疑いたくないの……」

「やっぱりアリスちゃんは優しいね。うん。そっか。わかった。それじゃあ、私はガーデンの小屋の方にいるから。あとは好きにしていからね。念のため、出て行くときは裏口を使うといいかもじゃないわね」

ルートの母が指差した方は、確かコーヒー園がある方だ。

なるほど。ガーデンはこの家に面しているし、自分たちが家を後にする様子を遠くから確認することができるというわけか。おまけに、表立って外に出なくともよい。

「ええ。ありがと。それじゃ、先にお礼を言っておくわ。ほら、ノアも」

「え、あ、うん……。あ、ありがと、う……」 「急だったのに泊めたりしてくれて、ありがと。助かったわ。また、遊びに来るわね」

「はい。勿論よ！ ノアちゃんも、また来てね！ …… よーしっ。手入れ手入れー」

台所に行ったり玄関の方に行ったりしながら、日除け帽子や剪定バサミを装備して、たちまちいなくなってしまった。

ルートとリズを掛けて二で割ったのが母だと感じていたが、あなたがち間違っではないと思う。いつも通りの、一人になりきれない感覚に似たものを受容した。

そんな自分の隣には、いつもアリスがいた。

「さて。ノア。ご飯を食べたら、行くわよ」

「うん。でも、ノアたち、出てつたら、鍵、大丈夫……？」

「今はルートのお父様がいるはずだから、泥棒は問題ないわ。エッセイを書いてるらしいから、留守番の機能は低めだけど」

「いたんだ……」

父親、という存在を見たい気はするけれど。

それは今度、また、二人で遊びに来た時にしようと思う。

「えと……。それで、どこに行くの？ あっ、ノアは、別に、言わなくても……ついて、行くよっ」

「そう。それはよかった。ありがと、ノア。あなたがそう言ってくると、あたしも安心できるわ」

アリスが息をつく調子はどこか遣る瀬が無くて、今なそらその髪を撫でられそうな気さえした。この弱々しく穢れた枯れ木の手で、触れるはずはないけれど。

けれど、ついて行こう。実は結ばれるのだ。

「誰にも見つからない、かつ宿泊するのに十分な空間。殊更、信用のおける人物の管理下にあること。そして、いざとなったら身を隠せる、学校から近い所在……」

「そんなところ……」

「あるわ。一カ所だけ」

鋭く突き立てられた言葉には、割に希望という温度が無い。

そうして、冷たく言い添えられた口調は静かに、堆積してゆく雪のように、仄暗く温かいように思えた。

「あなたも知っている場所よ」

躁鬱ドミナント（後書き）

【あとがき】

今回、少し動きがありましたね。

このくらいのローペースこそルーモスらしさです。

一日って、思ったより長くて、思ったより短いのです。
そんなことが表現できていれば幸いです。

次回、二人はどこへ……？

捧奉サクリフェイス（前書き）

【まえがき】

間違った常識人が登場です。
でも、とっても優しい人。

ぶいぞ。

捧奉サクリファイス

家出二日目。

昼下がり。

「なんじゃあ、お主らは。学校には行かなくていいのの?」

「あなたこそ何よ。学校に行かなくていいのかしら?」

「昼休みじゃぞ。家に帰ったってよいじゃろ」

「昼休み中の帰宅、および校内から出るのは校則違反よ」

「わしの家は校内じゃ」

「ふ、二人ともつ、止めてえ……」

危険極まりないショート回路が形成されるのを、指を銜えて見ているわけにいかない。これはリスク管理にあたるとしておく。

どちらかが口を開けば、例外無く諍い沙汰になり、二人の笑顔は笑顔のまま周囲の空気をこれでもかと歪ませる。一方の手が出る間際まで匂う友情も、もしかすると、すでに生々しい愛憎模様へとパラダイムシフトを済ませているかもしれない。

そんな重力の歪みの中に飛び込める不思議を、なんと表したらよいか。三思に入って半年は経つけれど、未だに妙案は浮かばない。数日間、同じ屋根の下で暮らしてみても何か掴めそうだったのは、記憶に新しい。以前に、このログハウスに屋根があるかは怪しいけれど。

それも含めて、また、歪んだ時間を暮らせたなら、今度こそはわかるかもしれない。わかるうと努力しようと思う。

「まあ、いいわい。それより、わしに何の用じゃ。学校をさぼって

おきながら、わしの家にはくるなんて。さてはお主、わしのことが好きなんじゃない。それでらぶこーるしに来たと」

「そんなわけがないでしょ」

「ほうほう。なるほどのう。ありすはよっぽどわしのことが好きなんじゃない。じゃが、わしも忙しいのでな。きすくらいならしてやつてもよいのじゃが。……まさか、このたいみんぐで泊めてくれなどとは言わんじやろ。まさか、のう？」

二人の間にあるはずの隔たりは、さしずめ槍の盾と言ったところだろうか。手癖を読み合って、互いを突き放したかと思えば、次の瞬間には鎧を削っていたりする。

二人ともタイプは違うのに、どこか似ている気がする。基本的な指針は違うのに、本質は同じような感じだろうか。あるいは、同じ木に属する葉と枝のような違いだろうか。

「わかつてるのよね？ あんたは」

「そのせりふ、そっくりそのまま返すのじゃ」

心理戦というタイトルをつけるには泥臭くて、でも、自分には介入できるような神経はない。そのせい、かえって槍の盾というものが目に見えるようであった。

アリスが疲れた顔で息を吐くと、目の前の槍が引っ込んだ。

「はあ……。あたしとノアを暫くここに泊めて欲しいのだけど。どうすればいいかしら」

「なんでうちなんじゃ。向こうのらぶほにでも泊まればよかる。綺麗じゃぞ意外と。安いし」

外泊なんて興味のそそられる題材にも関わらず、サクラには熱が感じられない。

それでも、自分のことは置いておいてくれたのだ。そうすると、アリスを泊めたくない理由でもあるのだろうか。個人的にアリスのメイド姿は見たいのだけだ。

「信頼よ。あなたの方が信頼できるから」

「信頼、のう……」

サクラの気持ちになると、何となくアリスがもたらすものが分かってくる。物凄く優秀な人間が付き人になると謀略を張られる可能性があると、お父様は仰っていた。言葉は飛躍してしまうが、『暗殺』に向いているポジションなのさそうだ。

だから、そういう人にこそ、高い代償を支払う価値が生じるらしかった。

「わしの信頼は高いぞ。らぶほなんかより、全然」

「買うわ。晚餐ごと」

「ほう。大きく出たのう。それじゃあ、楽しませてもらおうかのう。そしたら、まず手始めに着替えじゃ。……ほれ。これを着るのじゃ。もちろん、できるじゃろ？」

サクラがブレザーの内ポケットをまさぐると、そこから見覚えのある一枚の布が現れた。

長方形の上部二カ所が丸くカットされていて、その頂点から柔らかい紐が延びている。材質は綿で、中央右寄りにポケットがあるだけで特に柄は無い。

数日間お世話になった、あのエプロンらしかった。

「めいどはめいどらしい恰好でなければ、帰って来た主人のてんしよんは上げられんからのう。こいつを身に纏ってご奉仕するのじゃ」
「……………」

渋々という心持ちを前面に醸しながらも、その着用はすぐ終わる。

アリスも自分も、一ミリの期待すらしていなかったと思う。

「何をしとるんじゃ。早く服を脱ぐのじゃ。今ここでな。それ着とるんじゃから、上手く脱げば見えはせんじゃろ」

「普通、メイドは服を脱がないのよ」

「うるさいわい！ つべこべ言わず脱ぐのじゃ！ 下着も全部な。

脱いだ服はわしが大事に預かっておく。今は暖炉消しとるから寒いじゃろうが、もし寒くて耐えられない時は二人で温め合えばよいじやろう。夕方、わしが帰ってくるまでな」

「はいはい」

気怠そうに見えるものの、不思議と極端な抵抗は無いように思えた。諦めているのか呆れているのか、脱衣という選択に迷いはない。途中までは直視できていたけれど、スカートを下ろしたあたりから恥ずかしくなって、見られなくなった。視界を覆った指の隙間から覗き込むと、ちょうどアリスの背中とその下が見えて、さらに恥ずかしくなった。

アリスの方がきつと恥ずかしいはずなのだから、我慢しなくてはいけない。

それは理解できるのだが、自分が服を着ていてアリスが裸であるという状況については、おそらくこれ以降も慣れないと思う。可笑しい話だが、せめて、自分も同じ格好になれば幾らかマシになる気もしないでもない。

「あ、の……。ノアは？」

余計な妄想をしないよう、アリスの前に割って入る形で切り出した。

こちらからであれば、涼しげなノースリーブエプロンになるはずだろう。

「お主はそのままだよいのじゃ」

「えっ」

「ぎゃっぶじゃ、ぎゃっぶ。全員裸じゃと面白くないじゃろ。ありすだけ裸だからよいのじゃ」

「結局裸って言うてるじゃない」

「お主はいちいち細かいのじゃ。姑か。とにかく、お主がここに居る間、お主は服を着る権利を失くす。わかったかの？」

理解るけれど納得らない。いや、納得るけれど、理解らないか。

どちらにせよ、サクラの価値観はよくわからない。

「はいはい。わかったわよ。それで、あたしは何をしていけばいいのかしら」

「適当に掃除じゃ。あとは二人でいちゃいちゃしとれ。部屋は好き

に使ってよいぞ。わしの部屋はわしの匂いがするからわかるはずじや。なんか汚すつもりなら、そこ以外でのう」

数日間過ごしているから匂いでなくとも、間取りはすでに知っている。サクラの部屋だけでなく、自分たちの部屋があったこともなぜなら、この家は、あの夏休みに合宿をしたログハウスと全く同じ間取り、空間だから。

そういう意味でも、この場所は安全だし、信用できる。つまり、そういう理屈なのだろう。

「それじゃあ、わしは教室に戻る。五校時目は保健体育なのでな」
「そう」

「るーとに色々聞くと、赤くなつて面白いんじゃない。赤ちゃんの作り方とかのう。『確かに、そうかもね!』とか妙に明るいのう。んんー? なんじゃ、羨ましいのかのう? ぬはっ」

「さつさといつてらっしゃいませ。ご主人様」
「な、なんじゃ、このぺてんめいど! 後で尻を叩くからの! 覚えとれ!」

アリスの強めな後押しもあつて、多分、サクラは時限通りに教室に辿り着けることだろう。

ただ、サクラを信用できても、時間の進退は信用できないのだけれど。

酒乱ばりの主人が出かけると、この屋敷は酷く静かになった。

窓の外に微笑む無限の花畑から、楽し気なポルカでも聞こえてくるようだった。自然的でいて不自然な静寂というものが、以前からこの空間にはあつた。

それこそ、サクラという人物が時計を動かしているかのような、大きな歯車とでも呼べばいいだろうか。静寂は、言わば狂った歯車の音だった。

付け焼き刃に潤滑油をかけても何にもならないのは知っている。それでも、不自然に調律されるのが怖かった。

「アリス」

「なにかしら」

アリスと面と向かうことが、こんなにも安心することなのだとは思ってもしなかった。

今までどれだけ斜に接してきたか、あるいは接されてきたか。如実に理解されるのは、自分の中にあつた欲望が、どれだけ肥大化してきたかの顛末だ。

そうやって大きくなったものは、決して小さくはならない。

破裂する、その時まで。

「寒く、ない……？」

「全く寒いわ。でも、暖炉に火を灯すわけにもいかないし、我慢するわよ」

「風邪引いちゃう……」

「どうってことない……っしゅん！」

いつもと同じ声の中に一際強調された湿気は、とてもレスポンスの良くしゃみのようだった。可愛いとは言えないけれど、好きだとは思った。

「ダメ……。冷えちゃう……」

「まあ、そうだけど」

「……………」

「……………」

意図して目が合う。

何か、電氣的なものが脳を奔った。

「はあ……。昼間から寒さに震えるのもだけど、サクラの思い通りになるのはもつと癪ね」

「ん……………」

「わかったわ。それなら、あなたに従う。今はあたしがメイドだし」

「ノアは、アリスのメイド、だよ……………」

解任された記憶は無い。辞めたく無い。

務める理由も努める理由も、それだけあれば十分だ。

「そうね。それじゃあ、ノア……………いえ、ご主人様。あたしを温めて

くれるかしら？」

「アリスの、ご主人様のことを、全力で、温める……から」

ノースリーブエプロンと学校指定制服の二人の関係は、ひっそりと密に確かめて。衣服を差し引いても、冬は等しく人を俟つもので、そう知っているからこそ、感情と息吹の交わるこの距離で、自分たちは繋がれる。肌を寄せ合って、過ぎ去った時も凌げる。

心はずでに、夏を懐古する。

「ただいまなのじゃ」

「おかえり。サクラ」

空気が流れが変わると形容するのが一番しっくりくるだろうか。サクラの帰宅する少し前に、サクラが帰宅するような予定調和を現実と感じた。

特にすることも無いというどうしようもない大義名分を引っ提げ、彼は、彼の者に導かれるように玄関の前に二人で立っていた。

それから少し間があって、ご主人様の帰宅となった。

「ただいまなのじゃ！」

「お、おかえり。サクラ」

以前、自分の立ち位置は、アリスの真横であった。

いつもは一步半後ろを歩くようにしているけれど、改めてアリスの横に立つと特別な緊張感がある。誰かに注目されているのではないかと、ひよっとしたら疎まれているのではないかと、常に気がかりなのだ。

誰の目も届かない、辺鄙な場所であってもだ。

「ただいまなのじゃ……！」

「お、おかえり……！」

やはり、サクラが玄関を跨ぐと、カチリと何かが嵌ったように時間動き出すではないか。

小鳥の囀りだとか、鳥の猛りだとか、様々だ。それまで黙り込んでいた水流ですら、その帰りを歓迎するかのように歌い出す。

「た、だ、い、ま、な、の、じゃー!!」

「あら。お帰りになられたのね。気付かなかったわ」

「くっ……。お主は自分の置かれた状況がわからんのか……」

「メイドに裸を強要させる人に言われたくないわ」

「うっさいわい！ お主はそればかりじゃな！ それしか言えんのかー！」

「メイドにだって誇りはあるのよ」

「誇り……。誇りのう……。誇りがあるわりには、ついさっきまでいちゃついとったじゃろ。匂いがするのじゃ」

「ご命令に従ったままでよ。ご主人様。どこかで覗きをしているのかと思つて、少し張り切っていたんだけど。違ったのかしら？」

「むうう……。どこまでわしを馬鹿にすれば……。っ!! これはもうあれじゃな。お尻叩きの刑じゃな。わしが飽きるまでやっちゃるわい。のあの見てるところでな……。むふふふっ」

「や、やめてよう……」

さっそく賑やかだった。

潤滑油というのは、回っている歯車に注すものだと一人で密かに頷いてみる。

「まあ、それは夕飯の後でじゃ。わしは腹が減った」

からりとした口調でそう言うと、サクラは手に持っていた買い物袋を玄関に叩きつけた。そうやって置くのはサクラの悪い癖で、荷物之余計に重く見える。

袋はいつも通り一つだったけれど、中身は違っていた。

およそ三人分、あるのだ。

「えっと……。たまご、トマト、タマネギ、挽き肉と、あとはブドウ……？」

「食べたかったんじゃ。ぶどっ」

「これでどうしろと？」

「そんなもんは知らん。いつもめいどに任せとった。だから、また任せる。ただし、不味い料理を作ったら足舐めの刑じゃ！」

「色んな刑があるのね」

「しかもあれじゃぞ。お主が足を舐めるのではなく、お主が舐められるのじゃからな。のあに」

「別に聞いてないんだけど」

「な、なんでノアなの……っ」

「その方が面白い」という如何にもな返答にどこか安心する自分がいて、俄かに否定したくなる。そのはずだけれど、今はできそうもない。

自分たちと外界とを繋ぎとめる歯車であるサクラを、見失うことはできないから。

少なくとも今は、その姿だけでも。

「いいから早う作るのじゃー。腹が減ったのじゃー」

「はいはい。わかったわ。そっちで待ってなさい」

アリスがそう言ってキッチンの方へと歩いていくのを、自分はそのだけ見送らない。

心臓と脳と、その他色々……と負担がかかって、そのうち脱水しそうだから。

「はー、行った行った。それじゃあ、邪魔者もいなくなったわけじゃし。のあと遊びたいのじゃ」

「遊ぶ……？」

妖とか艶とか危とか、そういう文字が脳裏に浮かんでは消え、そして浮かんでは消えた。

最後はやはり、その口から放たれる。

「今日な、保険で習ったんじゃ。医療が発達すれば、わしとのあでも子供が作れかもしれんのじゃと」

「う、うん？」

「なのでな？ 世の医学の発展のために、わしと子作りして遊ぶのじゃ」

「む、無理だよ。遊びじゃないし、無理だし、もしできてもダメだよ……そんなことっ」

「すまん。回りくどかったのう。何でもいいから、わしと、こっ……交わってくれ」

「だ、だめ……」

「寒いんじゃー」

「暖炉、ある……」

「心がー」

このままでは倫理的にも発展的にも、いけない方向へ歯車が回り始めそうだったので、とりあえずの線引きを決めて言う。

いつしかしたように、優しくサクラの手を引いて。

「じゃ、あっち……」

「おっ！？ ついにのあがやる気に……っ！？」

「前もそんなこと、言ってた気がする……。夢で……」

「お、おお……。のあはわしの夢を見るのか。嬉しいのう。ぬはっ、ぬはは……」

だとすれば、リビングで夢を見させてあげよう。いや、見させてもらおうが正しいと思う。

ただし、眠るわけではない。

向かい合ってソファに座って、そこにある温度を感じるだけ。

「じゃあ、する……」

「お、おうおう！ かもん、なのじゃ」

サクラの両の手を潜って、自分の重責をサクラの胸に転嫁した。自分の指は勢いを落とさずにサクラの細い背中を這って、間もなく交差した。同時に、自分の胸にもサクラの温度が伝わってくるのがわかる。耳をピタリとつければ、歯車が時を刻むように生きていて、乾いた涙はすぐに円くなる。

愛情、友情、それとはまた似て非なる情動。また、鼓動。

互に通ずるものがあるからこそ、感じる事ができるのだと思
う。

「これでいい？」

「……………」

「えっと…………ぎゅー…………」

「……………」

けれど、これ以上は無い。

そういう意味。

「サクラ…………？」

「……………る」

「……………？」

「す、好きになるじゃろ！」

「あ、あれっ…………？」

よつやく一日が終わった。

そう思えるのは、自分の中での時間の価値が重いからだろうか。
それとも。

捧奉サクリファイス（後書き）

【あとがき】

親と喧嘩して家出すると、殆どの人は知人伝手で宿泊場所を求めます。

一人でも生きていけるのだと見せつけて、精神的に仕返しするのですね。そのまま学校へも行かないで、一日寝ていたり。

でも、そうやって人生を生き抜いた人って、そんなにいないのだと思います。

なぜなら、明るい道を歩きすぎたから。

でも、それが小学生や幼稚園生であれば、話は変わります。

そういう幼い人間の場合、それはもう、そういう道になってしま
うのです。

ただ、そんな小学生は居ません。

上手くできてます。

人間は。

次回は何日後……？

慣生リフューズ（前書き）

【まえがき】

アリスの新たな特技が判明。
でも、こういう人、たまにいます。

ぶっぞ。

慣生リフユース

家出七日目。

夜。

「はあ……。ただいまなのじゃ」

「おかえりなさいませ。ご主人様。溜息なんかついて、らしくないわね」

「誰のせいじゃ！ 毎晩毎晩おむらいすばっかり作りおって！ おむ殺しされるわ！」

「仕方がないじゃない。美味しく作れる自信があるの、オムライスだけなんだから。でも、あなたは不味くなければいいんでしょう？」

「そう言ったわよね」

「確かに言ったが、程度つてもんがあるじゃろ！ どうしたら焼肉せつとおむらいすになるんじゃ！ けちやつぶ隠しても、なんですぐ見つけるんじゃ！ あと、たまごはお主が産んどるんか！」

夕食にオムライス、朝食にはその残りを消化するというサイクル。昼食は二人で一緒に作るから、彩に富む。どういうわけかオムライスの作成手順に手が動くアリスを、上手に誘導するのが新開発のゲームのようで面白い。暖炉の着火許可を貰った三日目あたりから、食事の時間は密かな楽しみだった。

差し引いても、エンドレスオムライスは苦行と言える。

アリスの作ったものだからと、脳では受け入れ態勢が万全なのに、延べ五キロほどを食すと、身体がそれを拒んでしまう。嘔吐きそうになるけれど、あと少して何か見えてきそうな気がする。

「今日の食材はこれじゃ！ もうあまり期待はせん。早う作つてくれ！」

「カツオにネギ、レモン、パスタ、ハチミツ、イカ、エビ、ね。わかったわ。作るから、そつちで待ってなさい」

カツオをレモンで仕立ててマリネ風、イカとエビを和えてシーフードパスタ、という路線が自然と見えてくる。思索は多少前後しても、サクラも同じことを考えて買ってきたのだらうと思う。パスタという大きな力を持ったベクトルが、食の提案を切に訴えている。

サクラでない誰かが期待をするかもしれないけれど、それは筋違いだ。

このあと食卓に並ぶのは、おそらく、美味しいオムライスなのだ。希望を持つなら、アリスと結婚して料理を教えたいということ。

「あああああ……。絶対またおむらいすじゃ……。おむらいすに呪われる……」

神を信じ続けた村人が祟りにあつた時のような、沈んだ空気がリビングを覆っている。心無しか、大きな窓の外に続く花畑も輝きが褪せている。

せめて、厨房に入れればよいのだけれど、当のサクラがそれを許さない。矛盾した摂理よりも、サクラはサクラらしさを選択する。言い分もわかる。ならば自分は受け入れる選択をして、柔軟に付き従うだけのこと。

アリスのお尻が叩かれるところなど、もう見ていられないから。

「ん？ これ……」

「あああああ……」

程よい奥行きを演出するチキンの香ばしさ。それから、舌に感じる植物的な酸味と、生き生きとした赤の味。丸みを帯びていてかつ量感のある直情的で豊満な芳香。愛と美の融合。

他でもない。

オムライスの匂いが漂ってきた。

アリスのお尻が腫れて大変なことになってしまわないよう、先に

自分のものを差し出そうかとも覚悟した。
徐々にリビングに近づいてくるのは、食事の匂いと足音と。
「できたわ。どうぞ、召し上がれ」

オム・ライス
悠久の黄昏。

「限界じゃ」

食後、間をおいてサクラがソファを立った。天井にぶつかるとはという勢いで、声は小気味よく部屋を跳ねた。チクタクと、ちょうど刻時するように。

それからすると、一瞬だった。

「もう、出て行くのじゃ」

頭頂部に鉄剣を振り下ろされたかのような、途轍もない衝撃が体を巡った。

為す術もなく、経時、アリスとサクラを順番に見るしかできない。宣告の後、二人とも表情を変えないでいた。

いつもと同じなはずなのに、アリスが何を考えているのか余計にわからなかった。

だとするならば、自分が尋ねるべきだと思った。

「サ、サクラ……」

「なんじゃ」

「ノアが作るじゃ、ダメ……なの？」

「そういうことじゃないのじゃ」

だから、なのかもしれない。アリスが話さないでいるのは。サクラが表情を変えないのは。

アリスはもう、次の現実には立ち向かっている。サクラは、アリスの未来を案じている。

「のあはこのままでいいのの？」

とても簡単な話だった。

その問いに自分はずいぶん言葉を失って、息をするしかなくなった。

「同じ布団で眠れなくてもよいのの？　一生わしの抱き枕でいいのの？」

毎晩、アリスが隣に居てくれる幸せ。毎朝、アリスが傍に居てくれる幸せ。サクラが知るはずもない、けれど、誰でも知っている。

そんな幸せが、心と記憶の溜まり場から強引に掘り起こされていく。涙が出る程、痛かった。

「い、嫌だよ……。それは……。でも、サクラのっ、サクラのことも……。心配なの……。っ。好き、なの……。っ」

サクラの叫びは、重く深く。心という目の細かいフィルターを通っているのか、酷く響く。

「欲しいもの全部手に入れるなんて贅沢、許されないのじゃ。命と引き換えにでも、そんなことは絶対に有り得ないんじゃ。お主は心が決まっておるんじやろ？　なら、そのために動くんじや！　わしくらい、捨ててしまえ！」

そうか。

手に入らないとわかっているものを、あたかも手に入れるかのように見せびらかされて、気分が良くなる人はいない。自分は、サクラにそう感じさせてしまったのだ。

そして、自分のすべてを与えれば、両方とも手に入れることができるのだと覚え違った。自分の価値がゼロなのではない。そもそも与えることなどできないのだ。

ああ。そうだった。ルートの母が言っていた。

それは一方的に与えるものではなく、二人の間に生まれるものだと。

「ごめんなさい……」

「なんでじゃ」

「ごめんなさい……。でも、ノア、謝りたい、の……。サクラに、酷いこと、する……から」

「どういふことじゃ」

「ノア……。ノアは……」

与えられないから、与えたくなくなるわけではない。生まれないから、諦めるわけでもない。そこには確かに、繋がりがあって、それは時間を刻む音として記憶に残っているのだ。

だから、自分はその譜を読み解いて、奏でる義務がある。

「ノアは、サクラのこと、嫌いになるなんて、絶対、無理……だから……」

「何度言わせれば」

義務ではなく、権利だと言いたかった。

「だって！　だって……優しい、から……。面白い、から。可愛い、から。頭、良いし、頼り、なる……。ノア、信じるから。大、好き、だから……」

家族というパーツを失くしたことを知った時から、いや、水着せいふくを褒めてくれた時から、ずっと信じて来たのだ。

自分は捨てない。絶対に。

「はぁ……。それは、まじ告白の時に言うやつじゃぞ……。ほんとにのう……。のあも、つくづく馬鹿じゃ……」

「バカだもん……」

自分が思うよりも、多分、余計に。

トクントクンと、そういう想いが溢れる音がサクラの胸で鳴った気がした。

きつめに抱き合っていると、サクラが話すたびに顎が肩に響く。

「のう、ありすよ。これからどうするんじゃ」

「ここまでされたら、出て行くしかないじゃない。もともと、長居するつもりは無かったけれど。できるとも思っていないし」

「そうか」

「せいせいするわ」

「ふんっ。お主も馬鹿じゃが、可愛くない馬鹿じゃ」

「余計なお世話よ」

やはり、この二人の距離感是不思議なもので、簡単な言葉を少し交わしただけで、物事に整理がついてしまう。

ひと段落したと見做したのか、サクラに両腕を剥がされた。

「全く。のあは甘えんぼじゃのう」

「サクラだって……」

同じように、自分とサクラの距離感もまた特別なのかもしれぬ。自分たちの持っていないパズルのピースを、お互いの駒で無理くり埋め合うような、押し付け合いの幸福感。でも、それが嬉しいことに変わりはないし、埋めこまれたピースも簡単に外そうとは思えない。

本物のピースを手にしても。きつと。

「今日はもう遅い。泊まって行ったらどうじゃ」

「助かるわ」

「寢床は、いつもいちゃいちゃしとった二番目の部屋を使えばよい」

「み、見てたの……!?!」

「冗談じゃ。しかし、その部屋で何かしてたんじゃな……」

「し、してないっ」

「じゃあ、後で匂い嗅いでみるのじゃ」

「や、やめてよ……!」

「はあ……。本当に馬鹿なのかしら」

サクラがサクラらしいと、無限の花畑も常夜の満月も、そのどれもが生き生きと煌めいて見えた。そう考えると、あの夏の日の風景は、サクラが作り出したものであったのかもしれない。あの潮風もきつと。

順風満帆の中に遊ぶ微風を溜息とするのなら、自分の叫びは風船の自由も奪えない。ルートという言葉は小春日和の空風。サクラの笑い

声はさながら台風だろうか。

「ありがと。サクラ」

聞こえないように話したアリスの吹雪はきつと、これから自分の心の春風になる。

慣生リフューズ（後書き）

【あとがき】

たまに授業に出てきてテストは宣言満点。運動はやる気を出せばセンスが光る。好き嫌いは態度に出しても、気遣いは怠らない。空気も読めるし、面白い。

サクラも大概モテます。

でも、不思議と、誰にも触れられない。

なんだかそんな感じがしませんか？

次回、物語が大きく動き出す……！

再原デイスカード（前書き）

【まえがき】

今章ノアパートのラストです。

少し大事な部分。

眠い人は明日にでもどうぞ。

再原デイスカード

家出七日目。
夜。

人込みに紛れて移動するかと思っていたが、それだと探す方も紛れることができるからということ、出発は夜になった。確かにアリスの言う通り、暗闇の中から二人の人間を探し出す方が遥かに難易度は高い。

それにしても、夜の学校からの脱出を試みた学生が、一体この世に何人いるだろうか。

状況が現実離れしすぎているおかげで、冷静さを失うことは無かった。

とは言っても、内側からの脱出だ。適当に鍵を開けて、一階から出ればよかった。

正門から一番近い教員昇降口から外へとアクセスする。屋上から校舎を見た時に真つ暗だったので当然だが、校舎隣接の駐車場にも車は止まっていない。明かりは、どこにも灯っていない。澄み渡った空に昇った月の頑張りだけが、自分たちの瞳と足を助けた。

「……………」

ざつ、と大地を踏みしめる音だけが、耳に触れた。当然、不安はない。

終焉という二文字が浮かぶ自分の脳裏の片隅にアリスは居て、自分は今、そちらを見ているのだから。

ナイブス家を出て十数日あまり、何者かからの逃亡は続いている。逃げてても逃げてても、それらとは距離が変わらない。終わりの文字を引っ提げて、いつの間にか背後にいる。

では、何者かとは一体誰なのか。

あの黒服か、それともアリスの両親か。あるいはサクラか、はたまたルートか。

違う。

自分だ。

「誰も、いないわね」

何処かの道端でアリスが立ち止まった。

ぶつかりそうになる慣性は、ぎゅっと胸を締め付け止めた。

「夜中、だから……？」

ふと、辺りを見回す。

見覚えのある金属成形物が数点、それぞれ奇妙な間隔を置いて佇んでいた。視野のすべてを月光に委ねたその場所は、とてもではないが、観覧するのに適しているとは言えない。闇に慣れた目でも、中央にある錆付いた時計塔の針を追うことすら難しい。

それでも、自分の家の前の公園であることがニュアンスでわかった。

「ここ、ノアの……」

「ええ。まさかと思って来てみたけど、誰もいないわね」

昼ですら人気のない公園なのだ、夜ともなれば、この光景は領ける。

口ぶりから察するに、アリスはここを目的地に歩いてきたようだ。人影の有無を懸念するということは、今日はここで寝泊まりするということだろうか。

そろそろ氷点下を下回ってもおかしくはない外気の中、ベンチで一夜明かすのは危険かもしれない。だとすれば、風を凌げる築山の中で体を寄せ合うしかない。肌と肌とが触れ合う最善の方法で。

滅相なく妄想が膨らむ。

「覚えてるかしら」

「えっ？」

「ここに来ようとした時のこと」

「そ、それって……」

エレメンタリーでアリスと出会い、それからアリスが初めて家に来るまでの出来事だろうか。

忘れるはずなどない。誰かと会話をすることがどんなに楽しくて、どんなに嬉しくて、どんなに幸せか知った瞬間だったのだから。

折しも、その話を持ち出すのはどうしてだろうと戸惑ったが、すぐに言葉の綾に気付いた。

「そうよ。いないのよ、黒服が」

ここに来ようとした時の事とはつまり、家を出てすぐの事。

画策のために自分の家を訪れようとしたあの時、ここには数十人規模の黒服が屯していて、近づけなかったのだ。昼ですら人氣が無いのだから、当然、イレギュラーな事態であることが自明になる。戦う術も持たない自分たちは、その場から離れることしかできず、そのまま、来た道を引き返したのだった。

「黒服が、いない……っ？」

これまでのアリスの推論ひていりを聞いてみると、あの黒服の者たちは言わば『敵』だと言って相違ないだろう。十中八九、その狙いは自分で、間接的にアリスを狙っている可能性もあり得るわけである。

家の周りをうろついていた、尚且つルートの家にまで訪ねて来たということとは、身元は殆ど割り出されていると言っても過言ではない。どんな種類の情報網を這っているのかは不明だが、対象を自分もしくはアリス以外だと仮定するには、現時点で無理がある。

しかし、そう絞れるのならば、現状は推測できる。

ターゲットの住所情報を持っていて、しかも数十人規模の組織レベルで動いているのならば、見張り役がいてもおかしくはない。缶蹴り戦術とは、そういった人海戦術の応用であり、『ターゲットが必ず通過するポイントには見張りをおくべき』なのだ。缶蹴りであ

れば缶の前、今回であれば家の前だ。

にも拘わらず、一週間程度で捌けてしまった。そして、ルートの家にも数十人規模で現れた。

例えばそれは、ターゲットがどういった人間か、というところまではわかっていないということかもしれない。

つまり、アリスに勝機があるということ。

「……っ！」

皮肉なものだった。

そうやって演繹して並べ立てた御託が、全部、罪状の重さとなって自分に帰納するわけだから。諦めない苦しみと死への懇願が、繋いだこの手に滲む、透明な汗となってしまうのだから。

離さないでいてくれる優しさが、ずきずきと、劇毒のように沁み
た。

「ノア？ 大丈夫？ 手、凄い力よ」

「あっ、ごめんなさいっ。大丈夫……っ」

「そう？ 怖かったりしたら言いなさいね？」

目の前にある劇毒は、一滴で自分を死に至らしめる。

今までずっと求めて来た、霊薬だった。

「なににせよ、このまま突っ立ってたら凍えるわ。とりあえず、ノアの家にあがらない？」

「う、うん」

自分の不治の病が治るのなら、今すぐにも飲みたかった。

優しさの奥にある笑顔も涙もすべて、見たいし触れたいし、そのまま飲み込みたかった。階段を一段一段上がること、自分の家が近づくことにその気持ちは高ぶって、確固たる意志に変わっていった。

その情緒たるや、悪魔的だと言ってもいい。

「鍵は…… あった。まだ玄関灯の中に置いてるのね」

だからだろうか、歯止めが利かなくなることに危うさを感じ得ないのは。

アリスに支配されるはずの自分が、アリスを支配しているような感覚。劇毒に身も心も侵されて、綻んだ欲望の輪郭から、自分が

ノア・グリニッチが流れ出て行く乖離感。

このままではいけないと、勢いよく唾を飲んだ。

いつかのアリスの味がした。

「邪魔します……って、寒いわね」

「電気……」

「ダメよっ。電気は点けない方がいいわ。生活があるとなれば長居できないわ。寒いのは仕方ないし、なんとか我慢するわよ」

「そ、そだね……」

久し振りの我が家はいつも通り、寒くて暗かった。

でも、いつも通り、温かくて明るかった。

「とは言っても、寒いものは寒いわね。二人で布団に包まればなんとかなるかしら」

「二人で、動けば、温まる……かも」

「ノア……」

「……」

「あなたって、時々そういうこと言っわよね」

「えっ、あ……」

一人熱くなる顔の熱を、アリスにも分けてあげられたら、これほど便利な事は無い。

ふふっ、と笑うアリスの息に触れて、そのままその一部にでもなっってしまったかった。

「行くんでしょ？ 部屋」

「うん……」

恐怖という壁に覆われた根城であっても、決して足取りは重くない。時折聞こえる床が軋む音すらも、自分たちの存在を隠してくれているようで安心した。

その扉を二人で一緒に開けたのは、初めてだった。

畳四畳もない物置部屋には一面布団が敷かれ、尺が足りなくて折

れた角は、綺麗に跡がついている。決して狭くはなかったはずなのに、二人で手を繋いでいるととても狭く感じた。夜という時間のせいかもわからない。

そもそも足の踏み場では無いが、寝る場所ではある。

足側に位置する段組みに分けられた押入れ部分から、冬用の掛け布団を取り出して、雑に広げた。埃っぽいと思って二三度叩くと、辺りに記憶が舞った。アリスと自分の匂いが混ざったような、過去の残滓が宙に散ったのだ。

心臓が壊れそうなくらい五月蠅かった。

余りに静かなせいで気付かれてしまったのか、アリスは一つ笑いを見せて、繋いだ手をそのまま布団の中へ引きずり込んだ。頭と足との向きを意識する間も無かったから、中途半端な勢いで敷布団と掛け布団の間に挟まった。いや、アリスと掛け布団の間に挟まった。右手に胸の感触があったから、今顔が触れているのはお腹だと思う。柔らかくて、生きていて、良い匂いがした。

ずっと歩いていたからか、そこは少し汗ばんでいた。多分、自分もそうだと思う。

掛け布団の中でアリスの顔は見えない。それに布一枚隔てているし聞こえないだろうから、言っていないと思った。

「アリスの、匂い……」

この匂いの中にだっていい。この暗闇の中にだっていい。

埋もれて堕ちて、沈んで死んで、そのまま消えてもいいと思ってしまうた。

「ノアの匂い、わかるわ」

こもってはいたが、そう聞き取れてしまって、急に恥ずかしくなってくる。

そう言えば、今の自分の体勢も色々と変そうだ。

もそもぞとアリスの体を伝手に、闇の中を這って、また闇の中に出た。明るい闇の世界には大好きな笑顔があった。

「ぶはっ……」

「あなたって意外と大胆よね。いや、……意外でもないか」

「ア、アリスが引つ張るから……」

「ふふふっ。どう？ 温まったかしら？」

「アリスは……？」

「温まったわ。だから、ありがと、ノア」

それから二人の心臓の音が部屋の時間を決めた。時々早くなったり遅くなったり、自分の声に呼応してずれて、アリスが笑って追いついて。心地の良い平均律を刻んでいたと思う。

その音が聞こえるまでは。

しく、しく。

なにせ心臓の音が聞こえる程の静寂だ。何か鋭利なものが街路を突き刺す音だつて、聞こえて不思議ではない。秋が食される瞬間を目の当たりにしたつて、矛盾は無い。

二人の熱の高まりが呼び寄せたのだろうか。

掛け布団と自分たちとの間から漏れる薫風は、ほんの数分前に止んだと言うのに。代わりに、湿気を帯びた命と命の息吹が、そよそよと萌動していたと言うのに。

「なんだか、落ち着く音ね」

「うん……」

整わないリズム、不規則な音程、冷たい属性。少し自分たちと似ていた。

だから、時折それが合う瞬間、心は凜と鳴った。

「今はあまり言いたくないけれど、”お腹の中”って表現がしっくりくる気がするわ」

「ノアの……？」

「ち、違っわよ。ノアのお腹の中の音聞いてどうするのよ。……まあ、でも、いいわね。それでも。ノアがママだったら、将来がちょっと心配だけど」

「ノア、アリスがお母さんだったら、嫌かも……」

「あら、意外ね。どうしてかしら？」

「だって、お母さんとは……キス……しない、し……」

「そうね。まあ、普通は女同士でもしないと思うけど」

「アリス……」

「何かしら」

「ノア……したいよ」

「そう」

そうやって言葉を削って、遂には沈黙した。

そして次に「おやすみ」と口を開くまでは、本当に雪と心の音だけが部屋に充満していたと思う。

今、どれくらいの間時間が経ったのか、もう検討もつかなかった。

ただ一つ、恒常的心拍数とそれに付随して感じた手触りが、永遠にも似た過去の記録として脳裏に焼き付けられていた。

「アリス、まだ起きてる……？」

「起きてるわよ。どうしたの？」

多大な期待を言霊に放言した手前、裏切られた時のショックを見込んで、すでに顔は冷めきっていた。

それでも、アリスはやっぱりアリスであり続けてくれる。自分の中の、太陽で。

「……怖、い」

「そう。どうして欲しいか言っただらんなさい？」

太陽は優しく囁いて、自分に問う。

照らされて解かされて、そのうちに身も心も裸になる。

「ぎゅって……。ぎゅって、して欲しい……」

「はい。わかったわ」
深夜、だと思っ。

何者かが迫る足音を聞いたわけでもない。良心との境界を啓発する夢を見たわけでもない。ただただ急に、怖くなった。雪の降りつもる音も、風が大地を撫でる音も、何もしい音も。勿論、自分の吐く息の音も、アリスの心臓の音も。

逡巡に耽って、戻れなくなりそうだった。
思わず、縋ってしまった。

それだけはずっと、我慢してきたのに。自分の中に抑え込んできたのに。

限界なのかもしれない。心が。

目を覚ました場所が、絶対零度の氷で築き上げられた監獄かもしれないという途方もない不安に。繋いだ手が、また引き離されるかもしれない憂鬱に。もしかしたら、目も覚めないかもしれない息苦しさに。

一人で生きてきた自分にとって、二人になると言うことは一つの褒賞なのだと思う。だからこそその代償も、肌で感じてきた。

それはアリスのお父様が、ご主人様が自分に与えたプレッシャーもそうだし、時折感じるアリスとの温度差もそうだった。いつ、それらが失われるのか、常に怖かった。

常に怖かったけれど、隣にはアリスがいてくれた。

だから、その恐怖も幾度となく乗り越えられた。明日というものを信じて、いや、信じるためにアリスとキスをした。毎晩毎晩、願っていた。

それ以上だつて、本当はしたかった。触りたいし、触られたいし、全部知りたいし、全部知って欲しかった。でも、思いは留めておいた。

払いきれない代償が、明日すらも奪ってしまうと思ったから。

今日も何度かキスをした。

幸せだった。今も幸せだ。

だからだった。

これほど明日が怖いことは、今までに無かった。

「大丈夫よ。あたしはいなくなったりしないわ。怖くないから」

アリスはそう言っつて、強く抱きしめてくれた。いつまでだって抱きしめていてくれた。温かくて燃えるかと思った。不死鳥のように灰になって、アリスの為に生まれ直したかった。

どうしようもない自分のことを、こんなにも想ってくれているのに、自分はその人のために何もできていない。それどころか、見て見ぬふりをして避けようとしていた。

どうしてそんなことをしてしまったのだろうと、後悔の念が湧いた。

「アリス……」

「落ち着いたかしら？」

アリスが頭を撫でてくれると、怖いものなんて、何もなくなった。

「アリス、あのね……」

「話せばよかったのだ。」

「うん」

背負うかどうかなど、端からアリスが決めることなのだから。

「ちゃんと聞いているわ」

「最初から。」

「ノアのお父さん」

「すべてを。」

「人を……、人を、たくさん……死なせちゃったの……」

再原デイスカード（後書き）

【あとがき】

さて。

今章の一題タイトルが掲示されました。

ルーマスらしからぬ冷たい展開。

ルーマスの冬は、いつも寒いです。

今はもう少し考える時間が必要かなと思います。
なので次回は、サブエピを。

『birth』誕生日、彼女と家で。(前書き)

【まえがき】

サブエピソード。

サブエピソードは明るい話題が多い傾向でしたが、前後の章の影響を受けやすいようで、こっちも少し寒くなってしまいました。心の暖房をオンにして読みましょう。

どうぞ。

【birth】誕生日、彼女と家で。

「ふあああ……」

「ちよつとルー、なあに。昼間からそんな大あくび」

今日は家族全員が休みになることの多い日曜日で、そういう日は大抵、僕が昼ご飯を作っていた。ここ最近はず妹のリズとの関係が変わってからは、二人で家族全員分の食事を拵えていた。

生来、早寝早起きが得意な僕が、昼間から欠伸をすることが珍しかったのだろう。眠気を誘うような小雨が降っているわけでもなかった。尚のこと。

涙ぐんだ瞳を擦って、僕はフライパンの火にできるだけ注視する。「昨夜、ちよつと考え事してて……」

「……」
「がみがみと愛らしい屁理屈が無かったので、気になってリズを警告する。」

ゆっくりだけど決して下手ではない、そのナイフ捌きを幼気な人參に浴びせる表情はつんと尖っていて、それもまた愛らしかった。

しかし、こちらにも牛肉の行く末を預かる身。ずっと見ているわけにもいかない。

ちよつといい焦げ目がつく頃、僕は火を止めた。

そのタイミングでリズが口を開いたのが、スイッチの操作に準じているようで、少し面白かった。

「アリスお姉ちゃんとノアさんのこと、だよな」

火炎の揺らめく音がしないせいか、キッチンがやけに静かになった気がした。

でも、今は真昼だ。

胸騒ぎをかき消すように無音が鳴るのは、冬の太陽が遠くで騒いでいるに違いない。

「あ。うん……」

アリスとノアがこの家を後にしてから、教室から姿を消してから、もう、かなりの時間が過ぎたように感じる。実際は一週間程度なのだろうけど、時間の経過を感じる神経が逼迫されているかのように疲弊している。

サクラもルリ会長も「大丈夫だ」という姿勢を貫いているからこそ、僕が心配しないといけない気がして仕方がないのだ。忘れてたりなんてことはあり得ないにせよ、状況に慣れてしまうことだけは避けるべきなのだ。

サクラの『魔法』だったりとか、僕自身の『願い』だったりとか、そういう経験をしているからこそ、それは言えた。

「大丈夫かなー。あの二人」

「きつと大丈夫だよ。アリスもいるし」

大丈夫と言われると心配になるのに、大丈夫かなと問われると大丈夫だと言いたくなる不思議。誰もが大丈夫だと返事してくれる理由が、何となくわかった気がした。

当事者ではないけれど、彼女たちは一人ではないと知っている。

ただそれだけで、一つ声明できた。

「えー？ アリスお姉ちゃんの方が心配なんだけど」

「え？ どうして？」

友達同士を比べる謂われはないけど、ノアよりはアリスの方が幾分か強いように思える。力も知識も、意志も言葉も。ノアにも、確実にそれらはあるが、差は歴然に見える。

ミドル時代に部活動で活躍していたアリスを間近で見ているのだから、リズも何となく理解していると思うのだが。

「アリスお姉ちゃんって、すごく頭良いけど、なんか世渡り下手そうじゃない？ 変なところでプライド張っちゃうとか。ノアさんのためなら……って張り切るところとか。すごく強く見えるけど、そ

れはサバイバルと毛色が違っかなくて。一途で可愛いんだけどね」
「うーん、まあ、言われてみれば……？」

いざとなったら、という仮定をアリスとノアにあてがってみる。

リズの第六感に影響を受けたからか、何となくノアの生存力に軍配が上がる。

「ほら。じゃあ、例えばさ。二人の人が無人島に取り残されたとしてますー」

「うん」

頭の中に、ヤシの木が一本生えた小さな島国がぼつりと浮かんだ。
「最初に取り残されたのは、ルリ姉さんと桜さんですー。……どう？」

「えっと……。どうって？」

「二人が脱出できそうかってこと」

「あ、そういうこと」

ぶかぶか波間に揺れていたヤシの木島が、急に大規模化して、ジヤングルなんかも鬱蒼と併設するようになった。沖合には大きな鮫とか鯨とかが群雄割拠していて、磯部には洞穴も口を開けている。近くを大型客船が通ったり、上空をセスナが飛んだりするかもしれない。

そんな島に降り立つは、我が生徒会の会長であるルリ・リリアムと、破天荒転入生のサクラ・ミサキ。なんて大々的に話したら、盛り上がりそうだ。

話を戻す。

確かに、脱出や生存という括りになると、人間としての性能はそこまで重要視されないように思う。

「うーん……。でも、ルリ会長とサクラだったら、ある程度までは楽しんじゃいそうかな。ルリ会長って、家が大工さんだって言ってたし、居住スペースの確保は現実的かも。サクラは、脱出用の筏にすら遊び心を混ぜ込んできそう……」

「あー。わかるわかるー。あの二人って、息が合っってそうで意外と

合っていない感じがするよねー」

あはは、と息を吐いて笑うリズは、とても楽しそうだった。果たしてそういう話をしていただけだったか、そろそろ記憶が怪しくなってくるころ。

「次ね次。次はー。……あつ。違うよ。そうそう。アリスお姉ちゃんとなアさんの話だよ」

今思い出したらしかった。

気付かれないよう僕は、ははは、と小さく笑った。

「二人が無人島に取り残されたら、どう？」

「うーん。そうだなあ。脱出用の筏はちよつと耐久性に難がありそうかな。でも、危なくなったらノアさんが発明したアイテムを出して……まあ、ものすごく何とかかなりそうな気はするけど……」

我ながら雑な返しだと思うが、実際、言葉にできない不安な部分があるのだ。

例えばそれが、リズの言う「アリスのプライド」なのかもしれないかった。

「脱出に関しては、私もそう思ったよ。けどねルー。無人島は脱出だけがすべてではないんだよ」

「ほ、ほお……」

無人島を熱弁するリズの温度とえば、それはもう、超ト口火よりも熱かった。

無人島が好きという情報が、これから先の未来にどう役立つかわからないが、意外な一面を知れた優越感というものはあった。

僕はすでに、彼女に熱されて蕩けていたのであった。

「無人島に漂流して、三年がたった……」

「三年!？」

「そういう設定。三年も経つと、とうとう島からは食糧が無くなってしまうのだー」

食用の草とか、それこそヤシの実だとか、島から姿を消したわけだ。

つまり、この先を生き抜くためには、少し島の外側に出なければならぬのだ。

海 常に死と隣り合わせの危険な世界に。

「さあ。漁をしなければなりません。どうするー!?」

気を遣っているのかいないのか、リズは劇のような口調になっている。

合わせるべきか一瞬迷った僕がいて恥ずかしい。

「う、うん。それは、やっぱりアリスが行くんじゃないかな。ノアさんを危険な目に合わせられないし」

「そう！ それが命取りなんだよ。一人で漂流したのならそれで間違っていないけど、今回は二人だからね。二人で流れついたら、絶対に一人では行動しちゃダメなの。それは鉄則だから。三人だったら、三人ね」

リズらしいと言えばリズらしいけれど、今回はどこか理屈染みていた。

だから、少し噛みついてみようと思った。

「でも、それじゃあ、島の食べ物尽きたら終わりになるよ?」

「そうだよ?」

「え? そうなの?」

「うん」

リズはやっぱりリズだった。

何となくの思いつきで出来上がった島は、これまた急に沈没していった。

一番生き残れそうな組み合わせは「リズとサクラ」な気がした。

でも、リズの勘は鋭い。適当に見えて、何かを掠めてはいると思う。

もし、本当にその状況になったら、確実にアリスが海に出ると言っても過言ではない。ノアに水泳が得意だという隠れ資質があれば別だが、そんな話は聞いたことが無い。むしろ、体育の授業を苦手としていたくらいなのだ。

そうやってアリスは疲れていくだろうし、それを見ているノアも相当磨り減るに違いない。それでもアリスは海に出なければならぬいし、ノアは窮屈で居なければならぬ。そうして気負ったノアがいつも以上に張り切る姿を見て、アリスはさらに苦しくなるだろう。そうやって張りつめた糸は、ふとした時に切れるものだ。

アリスが波に攫われるかもしれない。ノアが床に臥せるかもしれない。猛烈な嵐が来るかもしれない。一人しか乗せられないヨットが通りかかるかもしれない。

そうなった時、アリスに物理的な負担が強くなるのが目に見えてわかる。ノアが癒し得る精神的な傷よりも、正直、僕はそういう痛みを懸念していた。

気丈に振る舞っているけれど、アリスだって、一人の女の子なのだ。

一人の人間としても、一番の友達としても、二人に怪我をして欲しくない。

そう思った。

「次はー。ルーと私ね」

「ま、まだやるのね。しかも、僕と……」

「漂流したルーは、二人きりなのをいいことに、私を食べようと

」

「しない！」

「お腹が減って我慢できなくなったルーは、私を食べ」

「ない！ そんなことしないし、無人島関係なくなってるよ！」

「えっ……。無人島とか関係なく私を襲」

「こらっ。からかわないの……って、うわっ。焦げるっ！！……

っふう。危なかった……」

気付くと、牛肉から赤信号が出ていた。

僕は基本的に肉を焼く時は目を頼りにする。

余程よそ見をしていたのだと、牛肉の匂いが訴えている。それは、もう、皮肉にも。

「もー。よそ見ばっかりしてー」

「リスが変なこと言うからでしょっ」

いや、そもそも欠伸をしたのが始まりであるのだから、僕のせいかもしれないのだけど。

リスはそういう細かいことを気にしたりしない。

しないはずなのに、リスの表情が唐突に曇った。

「だって……」

「リ、リス……？」

「今日、私の誕生日なのに、アリスお姉ちゃんの話ばかりするんだもん……」

「リ、リス。あの、ごめん……。そんなつもりじゃなくて……」

「じゃあ、百回キスして……？」

少し理不尽が過ぎる強烈なイメージが、視界いっぱい飛び込んでくる。

これは反則だ。

そのうち心臓が飛び出すかもしれない。

「あ、あの、えっと……」

「……………ぐすっ」

「はい……」

控えめに言っつて、胸などはち切れそうなくらいに大好き過ぎた。

「……………ぷっ。あっはははは！ 冗談だよーっ。ルーわかりやすい

「！」

「なっ…………。リ　っ！」

そこまでは想定内だったのだけれど、さすがにこれは予測できなかった。

ふわり、リスの両腕が僕の胴を一周、背中優しくクロスした。

激昂しそっになる僕の胸に耳を密着させて、リスはぼそりと呟いた。

「ありがとう」

どのタイミングでどう伝わったのか判然としないけれど、何かのリズに伝わったらしかった。

なので、僕もお返しにお返しをしなければなるまい。

「うん。誕生日おめでとう、リズ」

そして僕も、リズの小さな体を抱いた。

疲れたとか焦りだとか、そういう雑念めいたものが、不思議と消えていく。

僕とリズの関係よりも、単純に恋愛に近いアリスとノアならば、同じことをしても効果が倍になるのではないか。僕たちが追いつくには、何度こうすればよいのか。

そんな下らないことも、すべて試してみたくなくなってしまった。

愛とは不思議なものだ。

「あ。ルー、今、変なこと考えたでしょ。変な風にドキドキしてた」

「え？ 考えてないよ？ 愛って不思議だなんて、思っただけ」

「へ、ヘンタイ」

「な、なんでっ！？」

「ん……？」

「なに、どうしたの？」

何か気になることがあったのか、リズが徐に前方へと手を伸ばす。その先にあったのは、あるうことか僕の胸だった。

「えっ、ちよつと……？」

「んんんんっ！？」

触るな、というのではない。むしろ、こんな僕のそれに興味を持ってくれただけで嬉しいくらいだ。なのだが、しかし、時と場というものがある。

さすがに、白昼堂々キッチンでというのはいただけない。それは、もう、キッチンだけに。

俄かに抵抗しようとするも、リズの勢いは止まらない。おまけに、

脇周辺が弱い僕にとって、抵抗することは難しさを極める。

「あつ……」

「えっ？」

「んっ……」

「えっ？」

「ご、ごめん……って、なんで僕が謝って……」

「ねえ、ルー。言いくいこと、言っていていい？」

「な、なに？」

まあ確かに、僕はよく男子と間違われる。けれど、最近はそれも少なくなってきたのだ。

勿論、劇でヒロインを演じたと言つのもあるし、もう一つ決定的な事がある。

それは、胸だ。

女性らしさの象徴と言われるその箇所さえおさえてしまえば、いくらでも弁明が可能なはずだ。つまり、僕にとっては最後の砦だったのだ。

だから大事にしてきた。密かに計測を続けていたのだ。

母に気付かれないように実行するのは諦めていたものの、他の誰にも気取られていないと言い切れる。

僕はずっと、こっそり牛乳を飲んでいた。勿論、胸の為に。

その成果が、最近出たばかりなのだ。

頻繁に触ってくるリズムに何かとやかかく言われるような、疚しいことなどありはしない。

さあ、羨まれたし。

アカデミー入学より一年未満、一・四センチの成長を。

「ルー。胸になんか入れてる？」

体全身を殴打されたような衝撃力を持ったセリフだったのだ、体全身を殴打されたようなショックを受けるのも無理はない。

好きな人の前でかつこ悪いからと、涙が出そうになるのは何とか持ち堪えた。

それでも、足元なんかはふらふら蹠跟けてだらしが無い。手遅れだ。

「い、いいいいいい、入れてないよ!」

リズは大きい方が好きだから、喜んでくれるかと浮ついていた自分が恥ずかしい。

暫く、この話はしないようにしよう。

そう覚悟するの東の間。

「あ、そう。なら、いいんだけど。この頃、せつかく大きくなってんだし、なんにもしない方がいいよ。うん。して欲しくない」

「えっ。気付いてたのっ?」

「気付くよ。そりゃあ。好きな人のことだもん」

浮つくどころか、今度は有頂天気分そのものであった。

ただ、心から溢れ出たのは喜びだけではなかったようで。

感極まるとは、このことを言うのだと思う。

「う、嬉しい……。本当に……」

「な、なんで泣いてんのよー。もー。ルーは私のことになるとすぐこれだなー」

「ごめん……。今日はリズの誕生日だって言うのに……」

「本当だよー。まったくう」

「あっ」

「えっ?」

迂闊だった。

つい昨夜も朝方まで作業していて、それをどこに収納したのか、ほとんど記憶に残っていなかった。大あくびをかくほどには疲れていたみたいだし、もしかすると、サプライズする予定などを立てていたのかもしれない。

そう。

それは例えば、エプロンの内ポケットなどに隠しておいたりして
「あああああっ！」

「な、なに急に。びっくりするじゃん」

僕の叫びに驚いたリズが一瞬、わっとなつて、それから目をパチ
パチさせた。

その反応が、欲しかったのだ。

昨日の僕は。いや、あれは今日の僕か。

僕は苦笑しつつそそくさとエプロンの内ポケットから、小包を取
り出した。それをリズの目の前に差し出しては、また、はははと苦
笑するのだ。

「リズ。誕生日おめでとう」

「うん。ありがとう。でも、存在忘れてたでしょ」

「すみません……」

「うん。いいよ。開けていい？」

「うん。喜んでくれるかわからないけど……」

「変なのだったら、キス百回の刑ね」

「えっ……」

手抜きしておけば今晚…… と思つたり、思わなかつたり。

期待に満ちた表情で包みを開くリズの表情を見ると、努力が報わ
れた気分になる。これで、喜んでもらえたら、キスより嬉しい。い
や、キスも嬉しいけれど。

「あ、これ……」

「うん。セーター。お母さんに聞きながら編んでみたんだ。どう、
かな……」

いつもはチョコレートとか、アクセサリーとか、市販のもので済
ませてしまうことが多いのだが、今回は『彼女』のために、勇んで
手作りしてみた次第だ。元々、手先の器用さには自信があったから、
セーターという大作にトライすることにした。

その目論見は外れてはいなかったようで、時間を要したものの、

きちんとしたものが出来上がったと思う。サイズに関しては多少大きめにはなったが、みてくれは悪くない。ただ、こういう結果にはなってしまったが……というところ。

まあ、僕の努力より何より、今はリズの答えが気がかりだ。

僕の渾身のセーターを凝視するリズを、僕はさらに凝視した。焦点が合っているのか合っていないのか、セーターを透かして作者の心でも読んでいるのか、眼光は品評会の目利きのように鋭い。

「うーん……。うーん……。……。うん。うんうん」

暫くの間唸っていたようだが、急に頷きだす。

別の意味で心臓を高鳴らせる僕に、リズはすっぱりと評した。

「じゃ。キス百回ね」

「えっ……。？」

申告はあまりに辛辣で、返す言葉にまで沁みだ。

そうやって俯く僕を掬うように、いや、救うようにリズは言うのだ。

「じゃ、今日、寝る時着るから」

「うん……。うん？」

「このサイズおっきいのって、つまりそういうことでしょ？」

「そ、そういうこと？」

正直なところ、衣服であること以外の意味を込めた覚えはないのだが。

リズが何か見出したのなら、そういう付加価値があっても僕的には全く問題ない。

「だ、だからっ。裸の上にこれ着るってことでしょ？ 裸セーターっ。言わせないでよ、恥ずかしいなっ……。あっ！ 言っとくけど、さすがにパンツは履くからね。どうしても履かないでって言うなら、それは、うん、考えるけどさ……。いい？ 私、まだ十四歳だからね？ ルー、わかってる？」

どういうわけか、僕の知らない所でとんでもない付加価値が添えられてしまったようだ。

とは言え、欠伸に始まった一日も悪くないものに変えられそうだが、キス百回だけでも、徹夜した甲斐があったと思える。

それがリズにとる幸せなのかどうかはわからない。けれど、少なくとも、リズに百回なのだと裁かれたのならば、今夜はできるだけ眠らないように彼女を祝おう。

「リズ、いつも大体履いてないよね……」

「パ、パンツは履いてるでしょっ」

彼女の寝相にひれ伏すまでの、無慈悲なまでに短い時間の話。

【birth】誕生日、彼女と家で。（後書き）

【あとがき】

後半にかけてのぬくぬく具合……。感じていただけましたでしょうか。

冬は寒くていやだと言う方をよく目にしますが、冬が寒くなければ、春の温かさにも夏の暑さにも感動を覚えることは無いと思います。

涼しさと寒さを想いつつも、温かいものがより温かく感じられる季節。

何だかお得感がありませんか？

バレンタインもクリスマスも元旦も素敵です。私の誕生日もあります。

私はその一連の流れを「四連単」と呼んでいます。

四連単って、FusionとかSocaのシャッフルノートみたいで響きがいいですね。意味は知らないけど。

次回は、本編に戻ります。

前話の復習をしてから読むのがお勧めです。

Nature by Wonder (前書き)

【まえがき】

” 生命の躍動とは自然の上に成り立つものである。
”
語られない美しさこそ、人が気付くべき価値なのです。

収束のアリス編。
どうぞ。

家出七日目。

未明。

「ノアの、お父さん」

「人を……、人を、たくさん……死なせちゃったの……」

まず衝撃だったのが、ノアの口から『父親』という人物像が登場したことだった。

感情伝いで存在を認識していたことはあつたが、ノア自身の言葉に彼の存在が認められたことは無かつたのだ。だから、意識的にそうしているのだと思つたし、あたしはその情報に関して強く求めなかつた。

そうして追い打ちをかけるように、『死』という事実確認がやってきて、あたしは身動きが取れなくなる。無論、身も心も。

でも同時に、物語の真相に触れたかのような解決感、解放感というものもあつた。

でなければ、あたしはこの子の傍にいて、こんなにも冷静でいられるはずがない。

「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ、ごめんなさい……っ」
そうだ。

あたしは今、ノアの一番近くにいる。手を伸ばさなくても、声を掛けなくても、互いを感じられる場所にいる。この場所は、他の誰にも居座れないようノアが作ってくれた場所で、あたしもまた、そこでノアを受け入れる。

あたしがノアの背中に手を回せば、心の距離感がそっくり現実に表れてくる。

あたしはノアに言われた通り、ノアの小さな体ごと抱きしめた。ノアの嗚咽の震えが止まるよう瞬間的に強く、そして自分本位なれど優しく、あたしは一心に抱きしめ続けた。

ノアの言葉は以外にもしつかりしていて、とてもよく伝わった。それが余計に心苦しかったけれど、彼女の大きな声は、あたしにとつて嬉しいものだった。

「何でも言ってみなさい。あたしはここにいるから」

「ごめんなさい……っ」

「うん。わかったわ。ずっと、ぎゅってしててあげるから」

「うううう……っ」

「そうよね。怖かったわよね。もう大丈夫よ……」

「アリスううー……！」

甘えと怯えとが合わさったような、今までノアの声聞いてきた中でも、類を見ない声色だった。それでも、甘えの声も怯えの声も知っているからか、あたしは何となくノアの調子がわかった。

あたしはノアをぐつと自分の側へ寄せて、抱えるように抱きながら頭を撫でた。ノアの胸ですら弾力を感じる程に密着することになる。少しばかり難のある右手の使い方だけれど、それでいい。

尊さも愛しさも、今は全部肌で感じたいだろうから。

「甘えていいわよ。今日は特別」

「んん……」

ノアとあたしの関係からすると、四六時中甘えているように思わなくもないのだが、改めて言葉にすると、その行為に分かりやすい意味が宿る。あたしは、“言霊”というオカルトを自分の都合の良

いように解釈していた。

信じてさえいれば、結果論というものもそこまで悪いものではない。

「アリス……。アリスう……。アリスう……。好き……。アリス、アリス……。っ」

「ちょっと。くすぐったいわよ、ノア」

ノアは、ちょうどあたしの胸の中に埋まる様に顔を押し付けて、そのまま左右に首を振った。そんなに勢いよく擦って顔を火傷しないか心配だけれど、そうやって落ち着くのなら仕方ない。まあ、厚手ではあるにしてもTシャツだし、大丈夫だと思うが。

それにしても、ノアの動きがとても新鮮だった。

あたしの想定外の行動というか、不随意的というか。他人^{ノア}の意志で以って動いているから、全く予想できない瞬間があるのだ。それが危つくもあり、面白くもあつた。

「ぎゅって、もっとして……」

「はいはい」

「んん……。もっと……。潰れちゃってもいいから……」

「わかつたわ」

潰れる程とまではいかないが、あたしは思い切りノアを包んであげた。ノアという存在がずぶずぶと自分の中に沈み込んでいくような感覚になった。委ねるのも受け入れるのも、同じだけの力がかかると、分かるものだ。

ノアからあたしに充てられる、『想い』の大きさが。本質が。

それは悲しみだったりするし、喜びだったりする。あたしを好きな気持ちと愛情を満遍なく混ぜて、最後に甘えたい気持ちと性に対する価値観を内側から外側に向かって鏝めて。

全部見えた気がした。

そう。

ノアには今まで、誰にも甘えてこなかった。甘えられるような人が周囲に居なかった。あたしだけがその役割を担うことができたけ

れど、そうすることはノアにとっては複雑な事に分類される。

出来るだけ同じでありたい『恋人』という関係。上下関係を持たない『クラスメイト』という関係。その全く逆の『主従』する関係。甘えるということに関しては、そのどれも相性が悪い。

あたし自身がノアと『親子』ではないとわかっているから、それに対する明確な正答を持ち合わせてもいないし。

不発の感情は結果として、キスに昇華した。

『甘え』になりきれなかったノアの『欲望』と、それに対するあたしの答えが、それだった。

仮初であつても、『親子』になれる気がしたのだ。『恋人』であるから、義務に感じたのだ。

そうやってあたしたちの関係は、情性的に進んでいたのだと思う。でも、こうしてノアに触れてみると、あたしがいかに凍っていたか浮き彫りになっていく。ノアの温度で、一拳に溶けていく。それこそ、昇華する速さで。

乞われなくても抱きたいし、あげられるものはすべてあげたい。もはや、この子の言うがままになっても構わない。この胸に感じる儂くも確かな鼓動が、愛しくて愛しくて敵わない。あたしのこの感情を知って欲しい。今、羞恥も厭わず曝け出したい。

それでノアの『願い』が、あたしのもことになる。いや、あたしの願いがノアのものになる。

そのためならあたしは、太陽にでも月にでも牙を向ける狼になる。

「ねえ。ノア？」

「ん……」

おそらく世界で一番近い場所で唸るので、体中どこまでも響いた。今なら脚でも返事できそうだった。

しかし、皮肉にも、言葉は”唇”から生まれる。

「キス、していい？」

「……………」

ノアが口ごもるのは簡単に予想できた。

だからあたしは、言下に添える。

「代わりに、あたしに話して欲しいの。少しづつでいいから」
「うん……」

ノアの必要としているものを、あたしはできる限り与える。

それだけのこと。それ以上の関係。

「それじゃあ、目を閉じて」

「ん……」

「ノアの心臓の音、聞こえるわ。すごく、速い」

「アリスも」

無音と重なり合う命の響きは神秘的で、どっちがどっちの音かなんて、至極どうでもよかった。あたしのも、ノアのも、今、力強く生きているから。

そういう意味で、部屋は無音にならない。

「いい？」

「うん……」

それからゆっくりと、あたしはノアへと宥恕を運ぶ。

なるだけ音が出ないよう努めても、仕方がない瞬間はある。

それはお互いがお互いを赦した。

息をつく間に、あたしは問うのだ。

「どうして、出て行ったの？」

運動をしていない分ノアの方が、息継ぎが深い。

背後で動く何かがずり乱れないよう、あたしはノアにすべてを合わせる。

そうすると、カチカチとそれが回る感覚になって、頗る気持ちよかった。

すう、とノアが気を飲む。

「絶対、迷惑かけるって、思ったの。でも、違かったの……。アリスは、ノアのこと、ずっと信じてくれたのに、ノアは……」

「いいのよ、ノア。こうやって、またあたしの隣にいてくれるじゃない。それで十分」

「本当？」

「本当よ」

「……………」

「……………」

それからもう一度、二人で時を飲み込んだ。

ノア風に言うならば、『それはノアの味がした』だろうか。

今度は息をつくタイミングも、ぴったりと合った。

「ノアは、パパに何か言われて出て行ったのよね？ それは、いつ言われたの？ その時言われたこと、思い出せる？ 無理しないで答えて？」

「うん。大丈夫。えっと…………。ノアが出てった日の朝、ノア、アリスのお父さんに、呼び出されたの。それで、出て行けって…………」

「急に？」

「あ、ううん。アリスのお父さん、公安でしょ…………？ それで、調べたらわかったんだって言われたの」

「ノアの父親が、人を…………って、ことね」

「うん。それで、危険だから、家から出て行けって…………。あ、でも、着替え準備する時間は貰えたよ…………。教科書とかも、持って行っていないって…………」

「何よそれ。追い出す気満々じゃない。鬼畜ね」

「…………ううん。しょうがないと、思う…………」

いつになく素直に首を振るものだから、その姿自体に違和感があった。

雇用主であると同時に義父とも見れる人物の一言なのだ、ノアのように気の弱い人間が何か言い返せるはずもないけれど。

とは言え、やけに段取りが良すぎる気がする。躓きなく、ノアの排斥を遂行しているというところが、どうも腑に落ちない。それは、あたしの存在が証明しているのだ。これほど密着していたあたしの目を盗んで、というところが不可思議だ。不可思議でならない。

以前に、しょうがないからという理由で少女一人を外に出すなど、

至極ふざけている。

「しょうがなくなんかないわ。だって、ノアが何かしたわけじゃないでしょう？ ノアのパパが何かしたのを知って、きっと、そのリスクを背負いたくない一心だったのね。仕方ない男だわ。欲に溺れて、情けない」

そうはなりたくないと言っていたことすらも、きつと、忘れてしまったのだろう。

もう、そんな人間に守られたくはない。

そして、今度はあたしがノアを守っていくしかない。その権利も義務も、あるはずだ。

そのために、あたしはノアのことについて知らなければならぬ。幸い、今、あたしには痛み分けの劇薬のレシピがある。

「ノアはたくさん言って言っただけ、パパは何人って？」

「えと……。に、二十、二……？」

「えっ？」

別に不吉な数字の羅列でもないし、予告犯のメッセージを解いたわけでもない。

しかし、その数字を耳にして自然、当時のまま綺麗に掘り起こされる記憶があった。

「それって、まさか、あの事件の……」

「多分、アリスの言ってるので、合ってる……。事件って、言っただし……」

このタイミングでの調査といい、事件という大題。

それはまさしく、ルートが世界を捻じ曲げることになった、『遠い方』での事件のことだ。

犯人は一人の男性で、死者は二十二人。ターゲットは不特定で、犯人は警官に取り押さえられ懲役中のはずだ。

あたしとルートの価値観での解釈になるが、あたしとリスは、その二十二人の命と引き換えに生かされていると言っても過言ではない。付け加えるなら、一度目の世界では射撃され死亡しているのだ

から、その男もだ。

つまり、ノアのパパがノアのもとを離れたのは最近かもしれないということになる。

にもかかわらず、今までノアの口から『父親』に関するワードを聞いたことが無いのはおかしい。それがおかしくないとするならば、それはそのまま世界の振る舞いの不自然さを立証する一題になりかねない。

ノアの気持ちもあるから、あまり聞きたくはないが、これは義務なのだ。

「ノアは、ノアのパパのこと覚えてる？」

「んん。全然なの……」

「小さい時のことも？」

「う、ん……。小さい時は、いた、ような気がする……けど、いなかった、感じもする……。けど、多分、いなかったと思う……」

何か肌に恐怖を感じることもあると、その出来事と一緒に関連する物事を完全に忘れてしまうことがあるらしい。もしかすると、ノアはそれなのかもしれない。

あたしの”ノア知覚”でも、記憶までは探知できなかったのだ。ノアが自身の記憶から抹消しているのであれば、筋は通っている。

偶然性が絡んでいるからなのか、どこかしっくりこない感がある。ピースがはまらないような。逆に、もっと非現実的な事が起きているような懸念すら否めない。

だとするならば、何か希望めいた光のようなものが見えなくもない。

「じゃあ、ノア。少し嬉しい感情もあったんじゃないかしら」

「う、うん。少し……。お父さんは遠くに行っちゃったって、お母さんずつと言ってたから……。もう、死んじゃってるんだなって、どこかで思ってたの……。すごく悪い人なのかも、だけど、生きてた、から……」

「ノア、あなた……っ」

本当に芯の強い子だと思ったけれど、あたしは口に出すのをやめた。不躰にそんなことを言い放つよりも、恋人のキスの方が百倍も千倍も、痛みを吸い出せる。

一度抱きしめる工程を経て、あたしはまたキスをした。

そのまま耳元で囁くのだ。

「大丈夫？」

「うん。平気。どっちかって言うと、アリスと……キス、する方が変になりそう……かも」

「いいじゃない、変になったって。ノアがどうなっても、あたしはそばにいるわ」

「あり、がと……！ 大好き……。アリス……」

その後、ノアはすっかり眠りについた。

その状態を守るために、抱きしめながら頭を撫でるあの難しい姿勢を、夜明けまでキープし続けた。あたしの睡眠時間は犠牲になったが、それでもしなければ、ノアは眠れなかっただろう。

ノアの父親が、あの『モール二十二名殺人事件』の犯人。

ノアにそれを告げる勇氣はあるくせに、弁明を聞く余裕はなかったのだろうか。そうして、唐突に事実を突きつけられて迫害されてあるうことか、その宣告で父親の生存を知るだなんて、非情にもほどがある。

けれど、可哀想と思うことは無い。

同情から始まったあたしとノアの関係は、もうすでに、別の形へと遷移しているからだ。互いが互いを求め合うような、友情が懐かしく感じてしまうような、儂くてほろ苦い確かな情動とでも言えようか。

だから、それに関しては特に言うことはない。

事件に関して、霽はほとんど晴れたように思うのだが、まだ謎がある。

どうしてこのタイミングでノアに言うのか、自分で逃がしておいでどうしてまた探すのか。

かなり高い役職にいるパパであれば、その辺のコントロールは上手くできるはずだ。重要参考人が家の中にいるのだとわかれば、尚の事だ。

業績のため？ 地位のため？ 正義のため？ 組織のため？ そのため、パパ自身のタイミング調整なのだろうか。

まあ、何にしても、今はこの状況を打破することが大先決だ。

「……………」

それはつまりどういうことなのか、考えるのが嫌になった。

散り散りになった今を元あった場所へ返すことは、あたしのしたいことではないからだ。

ノアを見捨てるような人間がいる場所へは行きたくないし、ノアをそこに行かせるのも嫌なのだ。でも、その結果として”家出している今”があるわけで。

裏返しにすれば解決するかもしれないのに、それをしないのは他にもないあたしだ。

だからと言って、無策に溺れるのは本末転倒になる。

家出とは、あたしたちの辿り着くべき場所ではなく、時間を稼ぐための手段なのだ。

ノアが話してくれたおかげで、黒幕が怠惰な人間であるとわかった。

ともすれば、この冬。

自分たちの力だけで、生き抜くしかない。

いや、生き抜いてみせる。

Nature by Wonder (後書き)

【あとがき】

二人一緒によかったと、書いていて切に思いました。

これからかなりキスする回数が増えそうですが、どうか見守ってあげてください。

それが彼女なりの、精一杯の、解釈なのだと思います。

次回、生きます。

Dominant at Emotion (前書き)

【まえがき】

”感情が支配するか、支配したそれが感情か”
所有する順番を理解してはいけない。

読み終わった後、温かくなるか寒くなるかで分かれそうです。
少しみぞれっぽい今話です。

どうぞ。

家出八日目。

朝。

いつの間にか眠りについていたあたしの目を覚まさせたのは、ノアが作っていた料理の匂いだ。食糧棚にあった保存食と調味料を組み合わせて、ガレットに似たものに仕上がったようだった。

メイド業務の経験に元々の器用さも相俟って、ノアの料理は素晴らしく美味しかった。

完食後にそう伝えると、「愛情だよ」と言い切られてしまって、困った。

食欲に答え得るものが愛であるならば、その愛情が尽きないように、次の一秒から何かしらの手を打たなければならぬ。

何もしていなければ一日一度の摂取で事足りるだろうか。いや、それでは根本的な解決にはならない。食糧が逡減していくことは目に見えているのだ、何等かの供給が無ければ底が尽きるのを待つだけになる。

では、供給とはどのようにすればよいか。

方法は単純で明快だ。

そのものを創りだすか、創りだしたものを手に入れればよい。

では、どう創りだすか。また、手に入れるか。

生なるものであれば、地を耕し育てればよい。生まれるものであれば、血を肥やし馴ならせばよい。難しいなら、そうしている他人から買えばよい。

買ったためには、等価交換をすればいい。
そう習った。

であれば、あたしは次の愛を育むために、買い出しに行かなければならない。

「あ。そう言えば財布がないわね」

仕方がないことだ。

あれは、あたしのものではないのだから。

「ん……？ アリス、どこか行くの？ ノア、財布あるよ……？」

小さなバッグをひっくり返して中身を漁っていたあたしに、お手洗いから帰ってきたノアが言う。隣にびったりくっついてくるあたり、一人になるのが心細いのだろう。

でも、外出する場合、ノアを連れていくことはできない。

街中では、いっどこで黒服に遭遇するかわからない。二人で徘徊することは、学生服しか外着を持たないあたしにとつて、これ以上ないリスクになり得る。それに、見つかった時に逃げられる確率も半減してしまう。

そうなってしまうては、この戦いは負けなのだ。命の保証もない。

「そ、そう」

「アリスなら、いいよ。ノアの、全部使って？」

何か察したのか、話が飛躍する。

でも、あたしには断れる理由が無い。

「ありがと。それなら、使わせてもらってもいいかしら？」

「うん」

「ごめんなさい……。ありがと……。絶対、返すから」

「いいよ。ノア、アリスにたくさん、もらってるから……」

それと引き換えに同行を申し出ると思っていたから、特に言及がないことに不信感が募る。

あたしはあたしを隠さないつもりだから、ノアに見えない部分があるのは嫌だ。

「ねえ、ノア。あたし、お買い物に行くつもりなのだけれど、お留

守番できる？」

「大丈夫……」

「……………」

「……………」

心配になって、是非を尋ねたくなる。

ああ。

淋しそうでないのが悔しかったただけかもしれない。

「本当に？」

「うん。本当。外、危ないし。アリス、連れて行かないって、言う
と思ってたよ。仕方ないもん、大丈夫」

なるほど。ノアの中では、すでに役割分担がなされていたということか。

ならば、答えなければなるまい。

「良かった。さすが、ノアね」

「……………」

ノアの髪を撫でると、目をぱちりと見開いて愛らしい。

しかし、息を飲むとは珍しい反応だ。

「どうかした？」

「さすがって、褒められたの、初めてだったから……びっくりした、
かも……」

それもそのはずだろう。さすがと褒めるのは、良さの再認識が実感
できる芸事の師匠か、それこそ親くらいなのだから。

「ふふふつ。あたしはいつも思ってるわ。ノアは、すごく素敵よ」

「な、なんか変な感じする、かも……。でも、嬉しい……………」

ノアの頭を撫でると、そこへ被せるように手を重ねてきた。

それは、あたしも初めてだった。

「冷たいわ、ノアの手」

「アリスは温かい……………」

だからこのままでいい、とでも言いたげな口振りだった。

ノアがそれでもいいと言うのなら、あたしはもつと幸せにしてあ

げたい。二人とも温かければ、肌が触れ合った瞬間に喜びが溢れ、そして二人の世界は希望に満ちる。

そう思うから。

だからこそ、生き抜くのだ。

「ねえ、ノア」

「ん」

「お腹減ってない？」

「んーん」

これからの暮らし、食糧には難がありそうだ。

資金繰りも、直ぐに取り掛かるべきだろう。

「そう。よかった」

「アリスは？」

「大丈夫よ。寒くはない？」

「太陽出てるから、温かい。あと、アリスも、温かい」

「ありがと。よかったわ」

こと気温気候に関しては、現時点で問題は無い。

昨晚も雪が降って非常に寒かったが、この国は一日を通しての平均気温が氷点下を下回りにくいので積もることはそうない。二人で密着して毛布に包まって一夜過ごしたが、汗をかくくらい温かった。

汗が冷えないよう加減すれば、怖いのは夏の暑さくらいか。

「夕方くらいに買い物に行こうと思うのだけれど、大丈夫？」

「うん。ノア、何か準備する？」

学生の帰宅する時間帯に合わせて外出すれば、制服のあたしも紛れることができる。人気がある分、こちらからの発見は遅れるかもしれないけれど、そういう場所で堂々と人攫いをやってのける連中ではないはずだ。数十名規模で移動していれば、あたしでもさすがに気付くか。

ノアの言う準備は、武器を携えるべきという意味ではない。

「いえ。いいわ。水道すら最低限しか使えないんだもの、休んでな

「さい」

「わかった。じゃあ、何か創ってるね」

「久しぶりね。ノアの発明。いつも斬新で好きよ。楽しみにしてるわね」

「うん！」

時に印象派、時に現実派、時に抽象派。それは一種のボードゲームかもしれないし、一種のごっこ遊びの道具かもしれない。明確な目的をもった彼女の独創がそこにあって、あたしはそれが好きだった。

帰ってくる楽しみもできたわけだ。

それは同時に、絶対に帰らなければならないという責務をも授ける。

でも、もうこれで、この場所は氷漬けの監獄にはなり得ない。

二三追って注意を説明して、それから、六時までの四時間を布団で蓄えた。

力も、勇気も、責任も。

その足で、その手で、あたしは生存戦争へと赴く。

x x x

いくら、あたしがツインテールを催しているからと言って、ノアの眼鏡を借りているからと言って、見破られない保証はない。警戒しながら歩けば怪しまれるだろうし、変に隠れられもしない。それに、買い出しに行くにも限りがあることはわかっている。

大事なノアのお金を、それこそ大事に使っても、永久になくならないわけではない。

今回は、その打開策というものを練りながら、見慣れた街の見慣れない道に行く。

道がわからなくならないよう、とりあえずの目的地を”あのショッピングモール”に絞って、そこからの位置関係で現在地を把握することにする。

円弧を描くよう、大回りで歩く。距離が倍々に増えていくおかげでエネルギーの消耗が激しいけれど、得られるものも相応に大きかった。

ショッピングモールを中心に、ノアの家とは真逆辺りの位置に来たところ。要は、ショッピングモールを抜けた先にある宿泊施設通りの、また、さらに奥ということ。

そこには小さな学校があるらしかった。時間帯が時間帯だけに下校生徒の影も見えなかった、ということとは、その学校には放課後の部活参加を義務付けない、エレメンタリーだということになる。

その学校からすれば『遠い方』が近いのだなと、妙な不和を覚えた。

さておいて、その学校の隣のベーカリーの軒先に出ていたポップを目にしたあたしは、その目を疑うこととなる。

「美術学校生に、端材パンを無料提供します……？」

確かに昔、絵画を習わされた時、パンを使って何かした覚えがある。それで、キャンバスがやけにパン臭くなって、作品を台無しにされた気分になった流れだったか。

パンを絵画に使う意図は未だに理解しかねるが、端材でもパンはパンだ。

誰かに譲れるだけの余裕があるのならばと、あたしは美術を志す者であると偽って、厚意の提供を受け入れる運びとなった。

帰る足で、ショッピングモールに寄った。

必要最低限の飲み水と、向こう一週間分の食材、それから蝋燭を買った。

飲み水は飲み終わった後に器をリユース可能だから大きめの物を、食材はできるだけ加熱調理を必要としないものを選んだ。蝋燭は深

夜に何かあった時のために買った。

シヨップピングモールを後にして、あたしはまた円弧を描くように歩いて、部屋へと帰る。

同じ公園を出入りしなくて済むよう、水の汲めそうな公園の場所もあらかじめマークできた。

部屋に着いたら、これからの計画を立てなくてはならない。

それは義務だし、生活だし、必然だ。反面、それは権利だし、放棄だし、必然でない。

そう、わかっているはずなのに。

「ただいま」

「あつ！ おかえりっ、アリス！」

「お待たせ。早々ハグなんて大袈裟ね。どこにも行かないって、言っただじゃない」

「帰って来たから、だよ……っ」

「そうね。……ありがとう」

「そだそだ。創ってみたの」

この子の隣にいと、錯覚する。

この子はあたしを必要としていて、あたしはこの子を必要としている。だから、得意と言いつ切るあたしの力も、今はもう必要ないのかもしれないのだと。

それでも、微笑んでしまうというのがあたしの答えなのだろう。

廊下キッチンとドアを隔てたダイニングのテーブルに、買ってきたものを並べていく。ついでに、束ねていた髪を解いて眼鏡も外した。

「あ……」と、ノアがすっかりそうにあたしを見たのは、食材が貧相だったからではない。

あたしはもう一度、今度はポニーテールにして、柔らかく笑ってみせた。

「可愛い」と、ノアが褒めてくれたのが嬉しかった。

心臓がトクンと脈打った。

「さ、さあ、夕食を作りましょ」

「うん！」

迷うほどのレシピを持っていないあたしに代わって、ノアが献立を考えることになっている。料理に限らず材料に一通り目を通すと、大体の完成イメージが浮かぶらしい。

あとでまた、さすがだと撫でてあげようとあたしは横顔を見つめているだけだ。

ノアが抽出したものを以外を棚にしまつて、それから二人で狭いキッチンに立った。

「今日は、何を作ってくれるのかしら？」

「んと、ハンバーグ。茹でて作る、から……つみれ？」

鍋に水を沸かしたり、根菜を刻んだり、忙しく動く手には無駄が無くて素敵に見えた。

ジャガイモの皮を剥くくらいしかできないことが、少しもどかしい。もどかしいのと同時に、相手に対する想いが高ぶるのがわかる。普段、ノアを格好いいと思ったりはしない。そういう潜在的な想いが光を帯びてくる感じが。

あたしが部活をしている間、ノアもこんな気持ちになっているだろうか。

ジャガイモのごつごつした角よりも、隣で張り切る彼女を意識してしまうのは、ごく自然な事と言える。

「痛っ」

集中をかいていたバチが当たった。

ピラーが左手の小指を掠めて、血が出てしまったのだ。痛みはそれほどなかったけれど、出血が大袈裟に怪我を演出した。

水で洗い流すまでも無いとは思ったのだが、ノアが何か言いたそ

うに口をパクパクさせているのがわかった。何を訴えたいかわかったので、ものぐさに小指を差し出すことにした。ノアはきつと、お腹が空いていた。

「早くしろ」とばかりに小指を差し出したところは仰々しくもノアの唇の真ん前、その上で微笑むあたしはさながら策士だ。策士もきつと、お腹が空いていたのだと思う。怪我をしているところに息が当たって攪ったかった、というのもあったかもしれない。

小指を啜えようと近づいてくるノアの唇に、あたしは思わず口をつけてしまった。驚いたノアの体がびくつと反応するのが、そのままそこを通してあたしに伝播した。

せつかくまた、二人の歯車が合う音がしたのに、痛く無かった傷口がジンジン鳴るのがやけに五月蠅かった。

そうだ。

それは、忘れ去られたジャガイモの悲痛な叫びだったりするのかもしれない。

「りよ、料理中、だから……っ」

「ごめんなさい。お腹が減ってつい、ね？」

「うんっ。急いで、作るね……！」

ノアの耳が真っ赤に茹で上がるのが、またさらに美味しそうだった。あたしを意識しないように細々と手を動かす姿が可愛い。

それにしても、手際が良い。

「すごく上手ね」

「えっ？」

「料理よ。あたしはそんな速くできないわ」

「ああ、うん、ありがと、う……。いつも、やってるから……。でも、アリスのも、美味しいよ。あの、オムライス……」

「あら。ありがと。昔、ママに教わって、それで……」

それでその一品しか作れないなんて、なんて恥ずかしいのだろう。だったら、これから変えていけばいい。

「ねえ、ノア？」

「なあに？」

「あたしに料理を教えてくださいませんか？一緒に何か作れたらなって、思ったの。それに、あなたが熱出した時、オムライスが出て来たら嫌でしょ？簡単なものからでいいから。お願い……」

役割は奪うのではなく、分け合って。愛は創りだして、感じ合っ
て。

あたしはそれを覚えたかった。

「うん、いいよ」

「ふふふつ。ありがと。知ってると思うけど、あたし、覚えたことは完璧に再現できるの。だから、ノアの好きに仕立てていいわよ」

「ノアの、好きに……」

ノアが想いに耽ってすぐ、ぐうとお腹が鳴った。

誰のとは言わない。

「さあ。早く作っちゃいませよ。明日になってしまおうわ」

「そだね。じゃあ、ジャガイモ潰すの、一緒に……しよ」

「いいわよ」

長期保存できないことを理由に生肉類は買っていないから、ハンバーグと聞いたときは疑問だったのだけど、なるほど。合点がいった。

下茹でしたジャガイモをすり潰して、それを固めるということなのではないだろうか。焼かないようにしたのは、茹で汁を何かに再利用したりするとかで。

それにしても、あの一瞬でそこまで計画できるとは、さすがノアだ。

温まったジャガイモを大きめの袋に入れて、二人で一緒にそれを叩く。それなら、あたしでもできる。

「あ、そう言えば、ね。さっき、二人、来たよ」

「二人？え、来た？待って……。ここに誰か来たのっ!？」

思わず、振り下ろす綿棒の勢いが増す。

高揚を鎮めようと、ノアはあたしの腕を触った。

「う、ごめんなさい……。ルートと、リズ、来た、から……。開けちゃった……」

「い、いや、いいのよ。来てくれたのに帰ってもらうわけにはいかないもの。激昂して悪かったわ……。それで、二人は何をしにうちに？」

今、あたしたちが学校でどういう扱いになっているかはルート伝いにしかわからないが、この状況は理解できているはずだ。ある程度のリスクもあるのだ、理由もなく訪れはしないだろう。

ノアを間に挟むことになるけれど、あたしはその純度にこの上ない誇りを持っている。

「えっと……。まず、お菓子くれた」

「お菓子って……」

ノアがこそこそとダイニングの戸棚を漁ると、アソートのような小包がたくさん出て来た。

溢れんばかりの量然り、和テイストな種類然り、彼女らの趣味らしかった。

「あとあと……。これから、どうするの……。だって」

「まあ、そうよね」

友人二人が連日欠席していたら、あたしも同じことをするだろう。

あたしの場合、茶々入れたい一心もあるけれど。

ルートは決してそんなことはなくて、純粹に心配してくれているのだと、あたしは確信的に知ることができる。ついてきたリズはどうだかわからないが、ルートの嫌がることはしないとと思う。

それどころか、何か助けになれることはないかと、またお節介を焼いてくれている。

でも、今は、今回ばかりは、助けを借りてはいけない。

せめて、二人でも生きられるのだと、愛があれば生きていけるのだと、証明されるまでは。

ルートの心を做わないのは、証明の第一文だと自負している。

いや、単に向き合っているだけか。

「リスがついてたんでしょ？ 次いつ来るかとか言っていなかった？ あの子、そういうところ鋭いから」

「あ、うん、言ってたよ。明後日、サクラの家、だって」

「サクラのね……。まあ、そうね。わかったわ」

ここ最近、あの場所に行くことが多いせいか、『願いの夢』による超自然的な力が、酷く身近に感じられる。今を冷静でいられるのは、そのおかげもあるのだと思うけれど、あまり良い気はしない。

あたしに立ちほだかる一連の出来事も、なにか繋がりがあのような、何か大きくて黒い影が背景で蠢いているような、そんな気がしてならないのだ。

「ねえ。ノアも、行っていい？」

「ええ。一緒に行きましょう」

あの異空間が関係者のみを集める場所になる。そういうことなら、かえって同伴させた方が二人のリスクは減らせると思った。家に一人で待たせる心苦しさも、あたしにとって危険なものだと今日知ったし。

そういう意味で言えばリスは部外者に近くなるが、夏にリゾートを体験していることもあるから心配はない。不用意に『願いの夢』について漏らさないようにすると、今回もあの最強の母から譲り受けた適応能力を信じよう。

とは言うものの、リスも来年十五歳になる。

万に一つ、あり得ないことではない。

免疫ではないが、それに近いものを彼女に知ってもらえれば両得だと思う。

『ルートの手紙を知ることができる』あたしには、どうすれば正解だったのかわからないが。

それは、ルートもサクラもノアも、本人も同じ。

知ることはできても、知られてはいけない。

分担できても、共有はできない。

でも、妙案があるはずだ。

あたしたちが恋人になった時のように。二人で潰したジャガイモが、ハンバーグに形を変える時のように。

あたしたちが生きること、それは証明される。

少し、大袈裟かもしれない。

Dominant at Emotion (後書き)

【あとがき】

電気も水も使えないというような旨をアリスが話しましたが、全く使えないということではありません。

電気は使わずとも待機電力を消費しますし、水はリットル管理です。

それに、ノアの家には元々人がいないわけではないので、一人分の範囲内での使用は可能です。

ただ、夜に電気が点いていると目立つので、控えています。

次回は、あの方再び。

Sacrifice the Innocent (前書き)

【まえがき】

”あなたの殻を破れるのは、あなたの無垢”
人生に犠牲は付き物です。

落差のある今話、わりと長めです。
眠い人は、明日の夜に読みましょう。
夜に。

では、どうぞ。

S a c r i f i c e t h e I n n o c e n t

家出九日目。

例によつて、夜が明ける前に家を出た。お菓子持参である。

最近、闇夜の中で行動する時間が増えたからか、夜目が素晴らしく機能するようになってきた。昼と同じとは言わないが、街灯と月光のもたらず光量だけで視界は冴えた。

そんなあたしを導くように、学校の教員出口の施錠はされておらず、屋上へと続く道のりにも覚えがあったのだ。その上、見込んだとおりに鍵は開いていて、気分は頗る最悪だった。

いつもの木の前に立つと、今日は張り切っているのか、梢から家明かりが漏れ出っていて、非常に不審だった。それを目撃したノアが嬉しそうにしながら眠気を堪えているのを見て、あたしは溜息を吐いた息そのままに「ははは……」と少し笑うのだった。

今宵は大義名分があるのだ。その異次元の扉を開くのに、躊躇う理由は無い。

敷居を跨いだ瞬間の無重力感覚は、何度体験しても慣れない。玄関にありついた後も少しの間は立ち眩みで動けなくなる。それでもサクラに会いたかったのか、ノアはすぐに靴を脱いで廊下を駆けて行ってしまった。個人差があるのか。

あたしも後に続く。

「遅かったのう」

「遅いだなんて、心外だね。むしろ、あなたにそんな概念あったのね」

家に時計すら置かない人に言われたくはない。

実際、この家に時計を置いてみたいとは思わないけれど。

「あるわい！ お主の中には気遣いという概念がないようじゃがのう」

「あなたにはあえて遣ってないのよ。それに気が付かないだなんて、気が使えてないわね」

「ぐぬう……！ なんじゃ、せつかく鍵を開けてやったのに！ そこへ寝やがるのじゃ！ 皆の前で尻を叩いてやるわ！」

「喧嘩、しないで……」

揮って仲介するノアの表情は嬉々としていて、目はどこか輝いて見える。ひよつとすると、ノアはこれがやりたかったのかもしれない。

ともかく、ソファへ寝てもいいなら座ってもいいはずなので、腰を落ち着けるとする。

「落ち着かない家ね」

「落ち着かせんわ」

因果も時系列も捻じ曲がって非線形を象っている気さえするといふのに、サクラ自身が落ち着けているか気がかりだ。常軌を逸した破天荒の振る舞いが、この空間の為せるものであるのなら、逆に追い出してしまいたい。

皮肉にも、そうやってあたしが興味心を抱いてしまうのは、他でもないサクラが本来もつ魅力によるものなだけだ。

「それはそうと、ルートたちはまだなのかしら」

「色々準備しとるんじゃる。側らが遊ぶ気満々じゃったからのう」ということは、至る今日の会合というのは、偶然仕組まれたものということになる。

本当に勘が鋭いのか、欲望に忠実なだけなのか、いや、両方なのだろうけど。選択肢の両取りとは、なんともリズらしい。

「あーそうじゃ。風呂が湧いとるぞ？」

「あーそうなの。……それで？ 何が欲しいのよ」

その手はいい加減に見え透いているので、段取りを省く。

要求を呑まなくとも押し付けられることになるのなら、あたしから要求するまでだ。

「明日は休みじゃし、今日は泊まっていくんじゃろ？ それなら、のあと寝たいのじゃ」

「そういうこと」

「あー、悪いことはせんよ。寝るって、そういう意味じゃなくて、純粹に寝る方の意味なのじゃ。わしの抱き枕になれと、そういうわけじゃ」

「説得力皆無ね。でも、まあ、ノアがいいなら、いいわよ」

何かしらをすてかしてくれそうな気配しかしなにも関わらず、手を出したりしないのだと確信が持てる矛盾。彼女特有の立ち回りの為せるそれだ。

さらに、念には念を入れて、ノアに決断を委ねることにしたのだ。つた。

「ノア、いいよ」

「そう？ 無理してない？」

あたしのため、と思ってやってきているのなら、やめるべきだ。あたしは、ノアのために何か行動したいだけなのだから。

「ううん。だいじょぶ」

「む、無理じゃとっ？ 失礼な。そんなこと言っていると、わしがのあを」

「ノアに何かしたら、ただじゃおかないから」

それがノアのためにならないことなら、死力の限り阻止するつもりだ。

ノアは素直だから、あたしが裁き違えることはまずないだろうし。「ほほう。それは楽しみじゃのう？」

「それは良かった。手足を紐で縛って、心ゆくまで擦って、それから泣くまで絶対に解放しないで、お花を積みにも行かせないつもりだから、是非楽しみにしてなさい」

「お、鬼かつ」

「何もそんなに嬉しそうにしないで……。正直、ちょっと引くわ」「くっ。お主、わしを変態に仕立てよう……！」
「あはははっ」

下らないやり取りに、安堵する自分がいた。

でも、もう、誰かに守られることは辞めなければいけない。少なくとも、もう、その義務はあたしたちには付随しないのだから。

今日は、そう話すためにここへ来た。

「ま、いいわ。ノアがいいなら」

「うん」

「それじゃ、お風呂借りるわね。行きましょ」

「うん！」

それは、決して独りよがりなどではない。責任を転嫁することでも、させることでもない。

そう理解することが、あたしたちの励みになる。望みになる。

「何してるのよ」

「な、なんじゃ？」

「あなたも行くのよ」

「ふえっ？ わしも？ なんでじゃっ？ よ、よいのかの？」

「あなたの家でしょう。ここは。だから、流すわよ。背中くらい」

ノアは嬉しそうに微笑んでくれたが、当の家主は未だ戸惑ったままであった。

仕方がないので、あたしはサクラの服の襟を撮んで、風呂場へと赴くことにする。

別段、何か企んでいるわけではない。

「ま。あなたが嫌なら、やらないわ」

「い、嫌ではないが……。なんかきもいのう……」

確かに、ものすごく気持ちが悪い。

目下の者に媚びを売っているかのように、体中を毒がぐるぐる回って気怠くなる。正直なところ、眩暈すらする。

「それでも一応、心配はしてるのよ。あなたの顔」

「顔を、心配じゃと？ なんじゃ……失礼なやつじゃのう……っ」

「良かったわ。痕になってなくて」

「んぬ……！」

わかったような素振りを見せてくれるのが、少し嬉しい。

何の力か知らないけれど、サクラも大概勘は鋭い。

「ごめんなさい。あの時は、あたしもイラついてたから。大人げな
かったわ。反省してる」

「き、きもいのう……」

そして、ストレートに見せておいて案外気難しかったりする。皆で楽しくやるのが好きそうに見えて、一人が寂しいだけだったりする。それなのに、一人で居なければならぬと無意味に格好つけたりする。

それくらいは、あたしも知っている。

「ふふふつ。どう？ あたしのこと、好きになったんじゃない？」

「……っ！ お主いいい……っ！！」

だからこそ、あたしはその手を取りたかった。

あたしから手を取ろうとも、サクラから手を取ろうとも、あるいはノアを経由してそうなるうとも、繋いだ手は変わらずに温かいものなのだから。

×××

パリパリだのバリバリだのカシャカシャだの言う音は、多少無責任に感じた。

状況が状況なだけに、今必要な擬音は不穏なドキドキなのだ。良い意味でも悪い意味でも、学校の友人というものは、聊か愉快で、誠に不愉快であった。

きちんとした談義の場が設置されたのは、ルートとリズが訪れて

から半日ほど、感覚として午後十一時半頃。夕食後、全員が入浴を終え、円卓に腰掛けて静かになってからの事だった。

テーブルには初めから五人分の椅子が用意されていて、夏休みの合宿の時の座席とは互換しなかった。円卓であるので特に関係性は無いが、あたしの隣にノア、ルートの隣にリズ、あたしとルートの間にサクラが座る形になっていた。

「わしはこの”わさび煎”がいちおしじゃ。っーんとくるたいみんぐを見計らって玄米茶を煽るのが、最高の組み合わせなんじゃ」

「なんかどこかのオジサンみたいだね……。うーん……。僕はこれかな。」チーズ&アーモンド”。味もいいけど、この絶妙なサイズ感。気付くと、いつの間にか全部食べちゃってることあるよ」

「全部？ 食べ過ぎじゃない？ ま、ルーは太んないからいいのから。私はそうだな……。やっぱり、”お母さんのクッキー”が一番好き」。ミルク味が美味しいから、いっつもコーヒー味が残るんだよね」

「ノアは」

「ころ」

「あう」

嬉々としてチョココレートの小包を持ち上げようとしたので、手の甲を軽く叩いた。

丸いチョココレートは、ノアの手から零れて転がって、そのまま元の場所に収まった。

「あなたが混ざってどうするのよ」

「ごめん、なさい……」

しょげて俯くノアの頭は、とても撫でやすい位置にあったので、気の向くままに手を伸ばした。

そうして欲しい、そうしたい。そんな想いすら交差せず、ただ単に成り行きであった。

「あー。アリスお姉ちゃん、そうやってまた見せつけてえ……」

「そんなつもりはないわ。悲しそうにしたから、あたしはただ……」

ただ何なのだろうと、あたしは沈黙の中で考えた。

言い訳にも似た言葉が際限なく脳裏に湧くばかりで、至妙な例えなど浮かばなかった。

だから、あたしは言い淀んだ。

せめて経過した時間を数えるための時計があればどんなに楽だったか、など、悔いても仕方がないことだ。実際、静寂は解答を啓発しない。転嫁する術を見失ったあたしには、何かを待つしかできないのだ。

別段、仕組んだわけではない。

違うのだが、あたしはルートの瞳に見入っていた。

「その……。大丈夫なの？ 二人は……」

悪いことをしたと、反省した。

なるべく早く、答えを口にするつもりだ。

「大丈夫と言えば、大丈夫。そうじゃないと言えば、そうじゃないわね」

「……………」

余計な発言をするべきでないと判断したのか、リズとは中々視線が合わない。

確かに、こういう場合、ルートの方が口舌は明るい。

「学校はどうするの……？ ノートだったら見せられるけど……」。

アリスもノアさんも頭良いからテストは心配いらなただけど、出席日数がある程度ないと進級ダメらしいよ……？」

「今はそんな場合じゃないの。その時はその時よ。それに、アカデミーはもう、「義務」じゃないのだから」

あたしはその言葉をなるだけ強調して言った。

この空間の中で、自分に一番響いた。

「それは、そうかもしれないけど……」

「心配してくれてありがと。でも、仕方がないのよ」

「そんな……。でも、僕はアリスと一緒に卒業したいよ。ノアさんと一緒に卒業したい。サクラだってそう思うでしょ？」

「ん？ お、おう。そうじゃな。わしも、そう思う……」

己の力との葛藤でもしているのか、サクラの曇った表情は珍しい。それこそ、これから途方もない天変地異でも起こりそうで不安だ。

実際、サクラなら起こせるのかもしれない。

けれど、あたしはそれでサクラに頼らないし、サクラもきつとそれを分かって提案してこないのだ。今日の会合を自宅にしたのも、リズの気まぐれやルートの知恵ではなくて、サクラの確信に思えてならない。

そのサクラが見放すのだから、あたしの答えは間違っていないはずだ。

「ありがと。そうやって言ってくれれば嬉しいわ。でも、もう決めたことなの。だからお願い。分かって……」

「アリス……」「アリスお姉ちゃん……」

あたしたちの心を繋ぐ、細い線のようなものがピンと張りつめたようになる。

それが溜息やら瞬きやらで震えて、残像が過去を浮かべる。

そこにいたあたしたちは、まだ、人の死を知らなかった。

「のあは……。のあはどうなんじゃ？」

あたしの意志が固いことを見越して、サクラはノアに問う。

ノアの考えがあたしと違うなら、それはそれで仕方ないことだ。けれど、それはないと言い切ることもできる。それほどに、あたしたちの線は濃く太く、酷く歪んでいる。

ノアはいつも通り、若干吃りつつも真っ直ぐだ。

「ノアは、アリスに、ついて、いきたい……。それが、ノアの、気持ち、なの。ずっと、変わらないよ……」

「そうじゃのうて。のあはやりたいこと、ないのかの？ 料理人になりたいとか、発明家になりたいとか、そういう」

「ある、けど……。隣に、アリスが、居なかつたら、全部、やる意味ない、から……」

いつしかの夜、ノアが微睡みの中で言っていた。『世界中の誰が

ノアを認めても、あたしが認めなければ、どんな最高傑作だろうと破棄する』と。

絵画や音楽を嗜んでいるから、破棄がどんな行為かは容易にイメージがつく。ノアがあたしに求める繋がり強さが、痛いほどわかった瞬間だった。

それに対して思い悩んで来て、あたしは遂に決めたのだ。

ノアが捨てなければならぬのなら、あたしはあたしをノアにあげる。そして、あたしはノアの捨てたものを拾うのだと。そうすれば、ノアからなくなるのはノア自身でなくて済む。あたしは絶対になくなるから、ノアの幸せは増大していくはずだから。

正直、あたしは感情論が得意ではない。

けれど、ノアの部屋で、ノアの布団で、時にノアの衣服を借りて、ノアの間を感じて、ノアを受け入れて、ノアと触れ合って。分かった。読心ではなく本音を語り合って、声をぶつけて感情が交わった先にあるものの尊さが。

そして、生きてこそ、為せると。

「私は応援するよ」

そういう意味で一足先に行く、リズの瞳は煌々と鋭い。

リズにはまだ敵わないなど、心のどこかで思った。

「ノアさんがそこまで言うんだもん。それに、アリスお姉ちゃんがついてるし。大丈夫だよ、きっと。根拠はこれと言って無いけど」

「リズ……。リズがそう言うなら……。って、僕も同じなのか。リズがそういう状況になったら、同じことするよ……。だから、正解とは言えないけど、アリスは間違っていないって、僕はそう思うよ」

「根拠はないけどー」

「あ、あるよ！」

「適当じゃのー……。じゃが、まあ、わしも勉強は嫌いじゃし、そこは同じになるわけじゃな。さぼり仲間」

「ノア、別に嫌いなわけじゃ……」

「いいのいいの！ そんな遠慮しないで！ 私にはわかる。うんうん。勉強なんて、やったって何のためになるかよくわかんないよね！。円周率とか日常で絶対使わないでしょって思わない？」

「太陽仰角方位角時間計算は……？」

「ぎよ……？ えっ？ あ、うん。あれだよ。やつぱり、二人の話聞いてると、よく出てくるアリスお姉ちゃんのお父さんがムカつくね。もう黒幕みたいなものなんだしさ。みんなで懲らしめちゃダメかな」

随分と強引な話の戻し方なのが目立つが、ノアとリズの力関係がまだ未構築らしいところを抜き出して、あたしはくすりと一笑するのだった。

しかし、出任せなのか精練された言葉なのか知らないけれど、的は外れていなかった。

「確かに懲らしめたいところではあるのだけど、現実的でないわ。今は、相手陣の疲弊を待つのが確実だと思うわ」

たかだか女子学生数人が、あの黒服数十人に立ち向かうのは無謀極まりない。あたしたちの正体をはつきりと把握できていない現状、おそらく武装しているだろうし。

ただ一つ、そこへ抜け道を見出すのなら、その規模だ。

大勢の人間を動かすには、組織単位でもそれなりの負担がかかる。全員に団体行動を強要させるくらいだし、警戒レベルは最大と言っても過言ではないだろう。厳戒態勢が敷かれれば、組織も応じて大きくなって当然だが、今回は数十人だ。あの人数でのフル稼働ができるのは、せいぜい三十日といったところだろう。

そうなれば、こちらも行動しやすくなる。

「待って、それから、どうするつもり？」

「そうね。どうしてノアが追われる羽目になるのか、突き止めるわ。そして、ノアを捕らえる必要はないって証拠を突きつける。それに尽きるわ」

「アリスらしいね……。だからかな。なんか、余裕で終わらせてしまいそうなのは……」

「だといいのだけど。あまり楽にできるとは期待しないわ」

「そう、だよな」

明確な敵意というものが無い今、向こうからの攻撃は無い。

つまり、時間との勝負。いや、飢えとの勝負になるのかもしれない。

ともすれば、いかにしてこれまで通りの供給を作り上げるかは生存に置いて最重要になる。

「雨風を凌ぐ場所は大丈夫として。まず、食べ物を確保しなくちゃならないわ。水の汲めそうな水道の位置はあらかじめ記憶したけど、食糧ともなると難しいわ。パン屋で端材を貰えるらしいけど、そんなのは一時凌ぎにしかならない」

「ゴミ捨て場は？」

「リス、それすっごい忌憚ないっ！」

リスが言うのと真面目に言っているのか怪しいけれど、自分たちでも検討はしていたから、普通に答えることができる。

「それは考えたけど、却下ね。もしそれで体を壊してしまったら、かえって面倒になるわ。今のあたしたちにとっては、風邪ですら大病なんだから」

「うーん……。それだと、やっぱり、アルバイトなのかな……。普通に、食料を買ってなると、それしかないような気がするよ」

「そうなるわよね」

やはりありつくところはそこなのかと、少し気落ちする。

別段、それをやりたくないと言うわけではないのだけれど、不安に駆られる要素が多いような気がするのだ。ノアを長い時間一人にしてしまうのもあるし、その前に、まず雇用契約が結べるのかというところ。身元を隠して勤めているのが判明して公安の世話になったら、洒落にならない。それでも、収益というものは安定して入るし、ハイリスクハイリターンと言ったところだろうか。

そこで第一に考えたのが、ルートの家のお手伝いだった。

それはすぐに、却下になったのだけれど。

「それじゃあ、うちの」

「それはダメよ。前に、黒服がやって来たでしよう？ 危険だわ。

それに、いつまでもお世話になりたくないの。あなたとの関係、おかしくなりそうで嫌だわ」

「う、うん。それは僕も嫌かも」

「じゃあ、そのパン屋さんは？ 人にミミをあげるくらいだし、優しそう」

「悪くは無いんだけど、少し遠いのよ。それに女性の店員しかいないようだったから、黒服が来たら、もはや誰も太刀打ちできないわ。小型店だし、全滅かもね」

「全滅のう……。そいじゃ、『遠い方』ならよいのではないか？

あそこなら見つかっても隠れやすいし、店もいっぱいある。対抗措置も取りやすいじゃろ」

「ええ。そうよね。今、一番有力よ。でも、あそこにも問題があるの。部活の先輩から聞いた話のだけど、学生のバイトは絶対取らないそうなの。嘘は前提にせよ、疑って来られたら対策のしようがないわ」

「むう……」

それから幾つか案が出たものの、デメリットの閾値が低すぎてしまつて、すべて却下となった。

こういふ話をしたことを無いから実態は知らないけれど、普通は夢が膨らむやり取りなのだと思う。

これ以上、あたし以外の人間の夢を摘み取るのはよそうと、あたしから切り出す。

「まあ、ここで案を出し合っても煮え切らないのはわかっていたわ」「アリス……？」

伝えなければいけないことを伝えて、今日はもう休もうと思う。

何せ、今日の夜、あたしは寒くて寝苦しいはずなのだから。

「言っておきたかったのは、これから、会うのが難しくなるってこと。それだけだから」

何者かの声にならない声は、誰にも聞こえはしないはずだったのに。それなのに、暖炉の火炎は唸って、見事にそれをかき消すように静寂を裂いた。酷く静かで、酷く五月蠅い。その中で、歯車が鳴るのがわかる。

その間隙にあたしは泣いて、そうして一種の覚悟をしたのだと思う。

あたしの瞳が捉える未来像は、犠牲の上に成り立っているのだから。

×××

家出十二日目。
夜。

サクラの家から帰ってすぐ、あたしたちはあたし自身に厳しくルールを課した。基本的にはあたしが提案して、それをノアが飲み込む形だったけれど、否定の言葉が出るとは端から思わないし、結果無かった。

そんな決めごとの中には、プライバシーに関わる事案もあった。歯を磨く時には二人でコップ一杯の水を使うようにした。お風呂は週に一度、交替でサクラの家を借りることにした。トイレは一日一度だけ流すことにした。そうやって切削して出た必要分はすべて食料に充てることにした。

暗黙の了解であつた事柄を、改めて文字に起こすと、使命感が酷く心を縛つた。それを互いに慰め合うことで、繋がり of 強さに変えて、あたしたちは生存を凌いだ。

全ての資金源であるノアにばかり負担をかけるわけにもいかない、あたしはあたしで職に就ける場所を探して回つた。つい昨日は昼間、買い出しに行くついでに、遠回りした。

分かつてはいたけれど、なかなか思い通りにはいかなかった。

そこには父の根回しが無いとわかつているから、尚更悔しかった。それでも、あたしはやめなかった。

やめられなかったのだ。この義務を。

そんな一昨日の事、ついに恐れていた事態が起きた。

ノアが熱を出したのだ。

幾らか予測はしていたので、精神面で対策することは可能だつた。そのはずなのに、あたし自身も心労からか、いつも通り冷静に看病することができなかった。

体重も生理周期も大体同じくらいだと言うサクラから、解熱剤を分けてもらつて難は去つたけれど、予断を許さない状況に変わりはない。この負の輪廻を断ち切るためには、やはり、安定した供給が不可欠なのだ。

だから今夜、あたしは歩き出すことにした。

そう。ノアを置いて。

それだけがネックだつた。でも、仕方がなかった。

そんなことを、昔、誰かがしていた。

体が弱くて病気にかかつて、お金も無いのに高い薬を買つて来て。食欲がなくても食べやすいようなゼリーとか、好物のハラスとかも探して来てくれて。

そうやって、また家を出て行つて。すぐに戻るからという言葉が、信じられなくなつて。仕方がないのだと言う言葉が、嫌いになつて。それでも、その苦しみを、自分の苦しみと重ねて泣いて。

やり場のない気持ちの中、眠る少女は不安と安堵の境を彷徨うの

だ。

そんな誰かの気持ちを、今、あたしは、漸くわかってしまった。醜くて、面倒で、でも、ものすごく、愛おしいのだ。

だからこそ、自分の身など削ってしまいたくなる。そうすることで、あなたが幸せになるのならと、代償が小さく見える。

アプローチは違えども、根底はきつと同じなのだと思った。

「少し、行ってくるわね。すぐ、戻るから」

そしてあたしは、誰かと同じ台詞を吐く。

寝息を妨げないよう、あたしは二度だけ髪を撫でて、忍ぶように部屋を後にした。

このあたしが無策で危険を冒すはずはない。

前日、質屋の店長に面接を申し込んだ際に言われたことに、ピンと来たのだ。

なればと、あたしは急いでいるわけだ。

この身を捧げるのであれば、ちょうど昨日、お風呂を借りたのだ、この機を逃す手は無い。あたしはそこまで腑抜けていないと思いたい。いや、せめて、このブロンズが艶めいている間に獲得したい。

そこへ何か価値を見出すのなら、一度しかないということに尽きるだろうけれど、あたしにそれは必要ない。不要なものが、必要なものへ変わってくれるのなら、このチャンスに賭けると言う選択は間違っていない。

ああ。そのはずだ。間違っていない。

でも、はつきり知っている。正解でもない。

だとすれば、この身で試すしかない。待っている人がいるのだ、迷っている暇はない。

「へ、変ね。着込んできたのに……か、身体が震えるなんて……」

目的が近づくとつれ、”遠い”は”近い”に変遷していく。それがまた、”遠く”なる頃、腕の裏辺りには悪寒を感じていた。目に悪いピンクネオンの街並みに、吐く息すらがぐと音を立てて震えるのだ。不安も恐怖も、そこにはある。

あたしを前に進ませるのは、義務感、ただ一つだけ。

「こ、こ、かしら……」

『遠い方』を抜け、賑やかな宿泊施設通りへ辿り着く。

今なら、まだ、仕方がないと言つ言葉で片づけてしまえるかもしれない。

Sacrifice the Innocent (後書き)

【あとがき】

アリスを操作できないのがもどかしい今話です。

ノアとの約束もあるのに、どんどん暗い所へ行ってしまう。何か、そういう夢を見ている気分です。

早く覚めるといいのですが。

次回は、夜の街にて。

『Lenoah』嬉しかった。巡り合えて。(前書き)

【まえがき】

夜の街……の、その前にサブエピを挟んでみました。

少し暗すぎて、また暗いです。

でも、結構大事だったり。

どうぞ。

『Lenoah』嬉しかった。巡り合えて。

神様はいつも意地悪だった。

運動も、勉強も、美術も、音楽も、何もかも、私より姉さんを鼻屑するんだから。あなたはすごく優しいじゃない、と声をかけてくれる気遣いも、きつとその意地悪の一環なんだと思ってしまう。

どうして、同じ日に同じ日から生まれて、同じ環境で育って、同じ時間過ごしてきたのに、テストの点数は倍違うのかお尋ねしたい。そうやって学校のテストの点数で、お姉さんを決めるのはなんなのかお尋ねしたい。

だからあれば、必然だったのかもしれない。

私の、神様に対する反抗。

いや、姉さんに対する嫉妬、か。

姉さんはいつも、私の先に行く。私は、姉さんの後について行く。不都合はある。

私が意志を持って感情を出しても、姉さんの真似になってしまう。姉さんは、私よりも優しく、私の意見を尊重してくれるけれど、それがまた、姉さんの株をあげる。それを知らなかったのが、姉さんの罪。

罪を犯しているのに咎められないだなんて、被害者は憤るに決まってる。

勿論、日々、私は姉さんに怒っていた。

だから時々、私も姉さんに意地悪をした。

学校で仲間外れにしようと思いつくのを流した。雨の日は、わざと傘を忘れて、姉さんの傘で帰った。掃除の時間、よくスカートが覗かれるからチリトリばかりやらせた。給食の時、嫌いな物をたくさんあげた。夜寝る時、布団を独り占めした。

神様の真似だから、許されると思った。

けれど、やっぱり神様は意地悪で。

姉さんが優しいから、みんな、私に返って来た。

優秀って、すごく酷い。

そうじゃないって、すごく酷い。

私たちは、髪の色ありき人の良さありきで、よく人を寄せた。

私に集まる人は遊びの話が好きで、姉さんに集まる人は姉さんが好きだった。

姉さんは、すごくモテた。

そこに劣情を抱かないという嘘になるけど、はじめのうちはそれでいいと思っていた。

ある時、姉さんのことが好きだという人が、妹の私に相談をしてきた。

その人は、私からすると遊び仲間の一人でしかなかった。

私は姉さんのことを狂おしいほど嫌っていたわけじゃないから、姉さんが喜ぶことはしてあげたいという気持ちは月並みにあった。それと同時に、姉さんが嫌がるようなことをするのも好きだという、相反する気持ちも月並みにあった。

その日は朝から姉さんが褒められていてむしゃくしゃしていたの

もあって、やめといた方がいいと懇切丁寧に日頃の恨み辛みを語ることにした。

そしたら、見事に破談になって、姉さんが告白されることはなかった。……なかつたわけなんだけど、なんか負けたのと勝つたのと半々くらいで煮え切らなかつた。

今思えば、それが始まりだつた。

子供という時代を抜けても、私たちの差はさして縮まらなかつた。それどころか、姉さんは頭一つ抜けて優秀であると評価されるようになった。

大人になつた姉さんはますます可愛く、しかも美人になつて、弱点という弱点はなかつた。私服もセンスがあつて、仕事も上手いって、運も良さそうに見えた。

変わらずに同じ環境でやって来たのに、神様も相変わらずだつた。対する私は、時々姉さんに悪戯しながらも墮落しないようにと努めて、言わゆる普通の人をやつていた。

そんなある日の出来事だつた。

姉さんが、私を食事に誘つたのは。

とうとう毒でも盛られるかもしれないと一瞬思つたけど、姉さんはそんなこと絶対にしない。でも、気の利いたような面白いこともしないだろうなと、期待はしない。

皮肉のつもりで姉さんのおさがりを着て行つたら、喜んでくれて肩透かしを食らつたことはいいとして。

姉さんが、私を食事に誘つた理由。

それは、恋愛相談だつた。

勝つた、と思つた。

私が唯一、姉さんに譲らなかつたのは対人関係だつた。対人とは、友人、恋人、愛人、色々だつた。

勉強も運動も芸術も、嘘みたいにできない私には昔から特技があつた。というか、それを特技とするしかなかつた。

それこそが”妄想”と言うやつで、メルヘンの世界に陶醉し切れる程よい情緒を、私は長年の虐げられる生活の中で会得して来たのだ。

その妄想の延長には理想があつて、それはいつも姉さんだつた。

私は姉さんの一番近くで生きて来たから、姉さんに足りないものはすぐにわかつた。

自分を姉さんのような完璧な人だと仮定して、恋する相手を探すのが楽しかつた。自分の事なのに、姉さんの弱点探してみたいで、勝ち誇つた気分になれたのだ。

いつしか、妄想は妄想の域を超えた。

アカデミー、いや、ミドル二年生くらいだつたか。

姉さんにすごく似合いそうなクラスメイトが居て、そのクラスメイトがたまたま私に相談してきたことがあつたのだ。勿論、姉さんのことが好きでだ。そのクラスメイトも、結構妄想に登場していたさせていたんだけど。

そこで魔が差した。

姉さんとすり替われるんじゃないか、と。

そこで、上手くいってしまったのが、良くなかつた。

神様は、そういう時、意地悪してくれない。

それから、私の妄想は止まらなかつた。

妄想の延長にはいつも、姉さんがいた。

姉さんは、色々な人と関係した。
男の人は勿論、女の人もいた。

そんな姉さんが、唐突に恋愛相談を持ち掛けてくるのだ、ついに
してやったりと思った。

だって、妄想が現実になったのだ。

今まで通り、自分が姉さんにすり替われば、漸く日の目を浴びる
ことができるんだから。

私にとって、それは、とても簡単なことだった。

翌日には行動を起こしていた。

だって、初めて姉さんに勝てるんだから。

そして私は、彼に出会った。

姉さんの瞳の奥に燃えていた情熱が、どうしてそこまで熱いのか、
イマイチよくわからなかったけれど、やはり姉さんは姉さん。自分
ではない。

そう思いながらしないといけない相手とするのは、私も初めての
経験だった。

だから、イレギュラーだったんだと思う。

いや、私が馬鹿なのは、神様のお墨付きだったんだっけな。

「レノツ！ どうして……っ」

姉さんは水を含んだ声で叫びながら、私の前で泣き崩れた。不思議
だった。

そこで湧く感情は、来たる日々の”怒り”ではないのだろうか、と。

私が今まで抱いてきた感情と、姉さんの反応は全く違った。

不思議だった。

不思議でならなかった。

不思議と、涙が溢れた。

「あつ…………ごめ…………つ。ごめんなさいっ！！ ああああ…………！！

私…………、こんな…………っ！ 姉さん、ごめん…………つ。ごめんなさい

…………。うわああああああああ

姉さんはやっぱり優しかった。

神様も、大概、意地悪だなと思った。

他人の恋人をとつたら、不倫と言って、犯罪になるのだと後で知った。

そう気づく頃にはもう、私は、誰かの不倫の相手になるような仕事をしていたから、実感なんてほぼほ皆無だった。

不倫の現場を目撃されてから、私と姉さんは疎遠になった。

いや、私が進んでそうしたと言っべきだろう。

姉さんが私のことをどう思っているかなんて、きつと、快樂の中に置き忘れをしてこれるんだと思っていたから。それこそ、わざと家に傘を置き忘れた時のように。

そのはずなのに。

姉さんは私のところへ来て、こう言うのだ。

「レノ、大丈夫？」

土砂降りの中、その手に折り畳み傘を持って。

双子というのは強縁で、再会は早かった。

どうという経緯だったかはあまり記憶にないけれど、モールかどこかで偶然鉢合わせたとかじゃなかったかと思う。

でも、その再会を決して喜ばしいものにはできなかった。

笑顔で傘を差しだす姉さんの頬に、大きな痣が青々と奇を衒っていたからだ。

「どうしたの」と尋ねると、「何でもない」と言うので、私は場所を変えて姉さんの服を無理矢理脱がせた。この辺、手慣れている。

私よりも少しだけ色白なのとか、私よりも少しだけすべすべなのとか、私よりも少しだけ胸が大きいのか、全部すっ飛ばして、責任感に思わず涙が出た。

姉さんは、まだ、彼のことが好きだったのだ。

抓られた痕、引つかかれた痕、叩かれた痕。

私の方が痛かった。

姉さんの体のどこにも、愛の痕はなかった。

それでも、姉さんは笑っていた。

それはもはや、姉さんに課された義務なんじゃないかとも思った。ひよっとしたら、ものすごく馬鹿なんじゃないかとも思った。

「何笑ってんの……？」

この慣れた体勢のせいだろうか。

反射的に、唇を奪っていた。

姉さんが犯罪を犯せば、その義務から解放されるんじゃないかと思っただの。あんなに嫌いだったのに。急に肩を持つなんて馬鹿らしい。馬鹿らしいんだけど、私は馬鹿だ。少なくとも、大馬鹿の姉

さんよりも。

その先は特に何もしなかった。

それなのに、「ごめんねごめんね」と姉さんは謝り続けていて、私は心が痛んだ。

初対面の人と同じ布団で一夜過ごすよりも、遥かに、心が痛かった。

そんなの、私が「ごめんね」だった。

私は、最初からずっと、姉さんのことが大好きだった。

私は、最初からずっと、あの日の姉さんになりたかった。

それから、時々、仕事の合間に姉さんと会うようになった。

正直、会いたくなかった。

会うたびに窺っていく姉さんを見ていられなくて、ドタキャンしなくなる時もあった。それはもう、絶対に萎れない思い出が、根っこから絶えていくような感覚だった。

でも、姉さんのために会った。

私の力無い悪戯を笑って返す姉さんに気は無くて、それを見守る私たちの意地悪女神様にも覇気が無かった。

それでも何となく笑い返して、姉さんの思い出話を聞く。

姉さんが帰った後、私は、一人で泣いていた。

そんなある日の事だった。

私たちの間で週末恒例になっていた、『パスタのお店』での待ち合わせに、姉さんが現れなかったのだ。

約束事の遵守はおろか、有言実行という言葉自体に表したような人だ。すぐに何かあったとわかった。その何かが、次の週末わかった。

長かった姉さんの黒髪が、全部無くなっていた。思わず、姉さんの頬を平手で強く打ってしまった。

姉さんは、わんわん泣きだした。

姉さんが泣いているところを生まれて初めて見て、私は酷く安心した。

「私、子供がいるの……。だから、私が我慢しなくちゃいけないの……。私が、あの子を守らなくちゃいけないの……。私も……。彼も……。親なのよ……。」

酒に狂って妻の髪を売り払う夫が、一体この世のどこにいるんだと憤りを感じ得ない。頭が良くて、顔もよくて、性格もよくて、私の大好きな姉さんの、その夫なのだと、底知れぬ空しさに感情が押し潰される。

全てを擲って、殺してやりたくなる。

でも、姉さんの愛を、壊すことはできない。

「ねえレノ？ あなたは、願いが一つ叶うなら、どんなお願いごとをする？」

「何、言ってるの……？」

今ならば、私は、『姉さんの髪の毛を元通りにしてやりたい』と願うだろう。

姉さんがそんな言葉を吐くのだ、きつと、なんでも叶えられる。

「わ、私のことはいいいよ……。姉さんは？」

「ふふふつ。やっぱり優しいね。レノは」

神様は、いつも意地悪だ。

だから、神様なんか大っ嫌いなんだ。

「うるさい。バカ姉さん。……。大好き」

「ありがとう。レノ……。それじゃあ、姉さんからお願いな……？」

神様は、いつも意地悪だ。

だから、神様が大好きなんだ。

「もしも、あの子が私のことを忘れてたら、面倒見てくれる？」

『Lenoah』嬉しかった。巡り合えて。(後書き)

【あとがき】

結構前のめりな話になってしまいました。

色々と想像しながら、次の話に進んでいただけると、それが少しだけ心の支えになってくれます。

次回は、本編に戻ります。

Refuse never Today (前書き)

【まえがき】

”今日を捨てること。それが明日を捨てること。
時には痛みを伴うかもしれませんが。”

ここから結構話がびよんびよんします。

【あとがき】を呼んでも「うーん？」だった人は、一度戻ってみると発見があるかもしれません。

びよんぞ。

Refuse never Today

「合言葉は？」

「郷に入っては郷に従え」

いつしかの面接官から聞いた通り、黒い声に返答すると確かに、その鉄扉は開いた。しかし、誰かが出迎えてくれるということはない、完全にあたし自身の意志を反映する運びとなっている。

暗闇の中に見える一抹の明かりを頼りに、あたしはその中へと歩みを進めた。

建物内は特に強い芳香も無く、不和な視覚情報も無い。どこかで暖房がついているのか道は暖かい。そのはずなのに、身体の震えは収まらなかった。

暫く真つ直ぐ歩いてこられたのだけど、ここは廊下なのだろうか、なかなか行き当たらない。

漸く角に辿り着く頃には、入ってきた扉が見えなくなっていた。不安に駆られるあたしの心を、唐突な衝撃がまた囃す。

「何、君。こんなところに女の子が一人。新入り？」

どこから話しかけられているのかも、一瞬わからなかったが、振り返るとそこには確かに何かがあった。

先方は相当に夜目が利くらしく、あたしの姿を捕らえられているのだろうけれど、あたしからその人の姿は確認できない。分かるのは、落ち着いているけれど、すっかり燻された声色くらい。

その目に、あたしはどう映るか。

さっそく試されているのかもしれない。

冷静さを装って、竦む足で確りと地を踏んで。

「はい。そうなんです。どこに行けばお金がもらえるかなと思って……」

「お金なんて、客から貰うんだろ？ ……あ、そう。本当に初めてっつてか」

とりあえず、お金は客と呼ばれる相手から直接受け取らなくてはならないことがわかった。この女性も、同業者ということになるだろうか。

であれば、一体どうすれば何かを始められるのか、是が非でも聞きたい。どうすれば、生きられるのか、今すぐに知りたい。

「あの」

「ここは三階建ての空きホテルだ。適当にウロチヨロしてれば、普通に声が聞こえるだろうし、たまに開けてるやつもいるから、適当に覗いてみな。その真似をすればいいのさ。相手は、街中に無限に転がってるさ。金を持ってそうな奴を捕まえな」

「それって」

狙ったようなタイミングで、その声は聞こえた。

誰かに耳の裏を擦られるような、意図して背中を摘まれるような、聞いたことも無いような甘い嬌声だった。肩から左腕にかけて悪寒が走って、ちよつど霜焼けのように痒くなった。

身の毛も弥立つとは、言い得て妙だった。

「はっはははは！ そりゃ馬鹿だ！ そんなんでここに来んなつつの。帰んな」

「あつ、ちよつと……！！」

制止にならない制止は、あたしの歩みを数歩進めるに留まった。その人は暗闇の中に消え、その後気配もしなくなった。

あたしはまた、一人、取り残されることになった。しかし、ただ立ち止まっていることもままならなくて、すぐに歩き出す。何かに背中を押されるように、あるいは何かに胸倉を引かれるように。

暫くすると、廊下の輪郭がぼやけて見えるようになってくる。

先の宣告通り、廊下には一定間隔で部屋が設けられており、その中には光と音が漏れるものもあった。そんな回廊に覗く申し訳程度の月明りも、監獄のような鉄格子窓からでは頼りなく映った。その扉を隔てた向こう側では、紛う事なき等価交換が行われている。

欲望と誇張に塗れた声が、それを牢乎として物語っていた。

「階段、あつたのね」

暗闇に慣れた目でもって、あたしはそこを上がっていく。

入口から遠ざかっているからか、そんな高さではないはずなのに、少し息苦しくなる。いや、あながち間違った感覚ではないのかも知れない。

二階であることを示すライトの明かりに照らされて、人の蠢きに感応する自分の肌が露わになる。戦々恐々と拒んで震えるのが如実に分かって、我慢しようとして額に汗が滲む。気分は悪くなるばかりだった。

それでも、何のラインの収穫も無しに逃げ帰ることはできない。畳まれたあたしのプライドは、ノアの前で衣服をひん剥かれようときつく縛られようと、もう構わないと言っている。それならば、羞恥も恐怖も売りに出せる。それならば、歩くしかない。義務、なのだから。

前方に、一筋の細い明かりが見えてくる。

わざとらしく蛍光管の様を呈していたから、それが月の知らせではないとすぐわかった。

故意か、単なる閉め忘れなのか、知る由は無い。

だけれども、その明かりの中に、生きるための方法があるのは確かだろう。誰かがそう言っていたし、部屋の奥からも、生きる苦痛に耐える悲鳴が聞こえてくる。

あたしに選択肢は無かった。

「……………」

刹那、あたしは廊下の隅に倒れ込んだ。

一瞬よりも短い時間であったにも拘らず、その時の造景は非常に鮮明で、潜在的意識下にまで悠に入り込んできた。不要な情報だけを吐き出そうと逡巡を試みると、それと一緒に酸っぱいものが喉を通過した。それを抑えようとお腹に力を入れると、今度は目から情動が零れていった。

先生のためになる話も、友人の馬鹿な話も、少しだけ意識してしまつた心の話も、全部勘違いなんじゃないかと、思わされる。勘違いではないけれど、思い違いではあるのだと自分に反論する。自然と不自然の境界、故意と事故の境界、そこにあるものとは、誰かによって創りだされた本能であると結論付いた。

殆ど何も食べていなかったから、嘔吐できずに涙だけ毀れて情けない。

「う、ううう……。き、気持ち……。悪い……。なん、なの……。はあ、はあ、はあ……。もう、嫌……。帰りたい……。っ」

誰かの助けも無ければ、息をすることもままならないなんて。誰かを守ることもできないなんて。その誰かを愛することもできないなんて。

一人で何でもできると思っていたのに、その真逆。

何のための性格なのか、何のための頭脳なのか、何のための顔なのか。そう定めた二人の人間と、意地汚い神を呪ってやりたい。どろどろに溶けて消えるまで、怨みも恨みも憾みも全部、吐き出してしまいたい。

そうしたいのに、それすらできなかった。

本当に、情けなかった。惨めだった。

「うっ……。んん！……。はあ、はあ。んあっ……」

何を我慢しているのか、意味も分からなくなってきた。どうして息をしなければいけないのかも、疑問に思えて来た。あたしがこんな目に合わなければいけない訳を、信じたくなくなってきた。

やっぱり、あたしは誰かに背中を。

「大丈夫？」

背後の影を気取る余裕も無かったせいか、誰かが近づいてくるのに気付かなかった。涙で聴覚の調子も良くないのか、声も聞き取り辛かった。

でも、確かにわかった。

誰かが、あたしの背中を摩ってくれていることが。

「んぐっ……。はあはあ……」

「そんな我慢しない方がいいって。吐いちゃいなよ」

確証はない。

確証はないが、声質といい触れ方と言い、一階で出会った女性とは全くの別人に感じる。

焼け爛れたような声ではなく、女性らしい澄んだ声だった。

でも、少し疲れているようで、その質は重い。

「なに。口？」

「く、ち……？」

「いや、なんでもない。つか、逆に何その防寒体制。もしかして新入り？ 胸はそんなにないみたいだけど、冬でも露出度は高めの方がいいよ。人目で見分けつかないと、不利。金蔓捕まえれば、体も懐も温まるでしょ」

どういっつもりか、あたしに親切をしてくれているようだった。

貸しを作っておいて、後で金品を要求する算段かもしれない。

「あたしに、構わないで……」

「だよ。それが普通。まあ、こんなところで倒れてたら、襲われるからね。そう思って、あっちも来るから。んじゃ、行くわ。ばいばい」

「あっ、ま、待って！」

そそくさと行ってしまふものだから、思わず、干渉してしまう。

その人は、面倒臭そうに振り向いて、あたしの手を振り払うのだった。

「何？」

ここで初めて、あたしはその人の姿を視認した。

暗いということもあって、確かなことは言えないけれど、包容力がある割には小柄で、ぶつきら棒な態度をとる割に瞳は優しく思ったと思う。薄墨色のキャミソールのような衣服と、正面のボタンが留まっていないジーンズを着用していて、季節感は待ったく無い。加えて、背景に馴染む具合から珍しい髪色をしていると何となくわかる。

輪郭は細いようだけれど、個々のパーツまでは認識できない。

もっ少し、顔を上げれば見えるかもしれないけれど。

「あの、お、教えて欲しいのだけれど……」

「幾ら？」

幾度となく読んで古したセリフを舐めるように、その人は言う。あたしはその人の苦勞を知らないはずだけれど、どうしてかそこに同情を覚えてしまった。

さりとて、あたしに出せる賃金は無い。

「ごめんなさい……。何も……」

「バカだね」

「……………」

「何？ ショック？ 意気地無し」

それは、人生で初めて、言われたことだった。

どちらかというと褒められることの多かった人生だ。いや、そうなる様に努力してきた記憶もある。でも同時に、決して褒められるような人間ではないともわかっていた。

だからこそ、その言葉に、小さな胸が打ち震えた。

同じように小さな胸のその人は、あたしを嗤う。

「いいよ。ついてきて」

右も左も、何もわからないあたしに、手を差し伸べてくれる。あたしを褒めても何も対価は無いのに。喜んでくれるかわからないのに。全くの興味本位なのかもしれないけれど。

その様はまるで誰かの親を見ているようで、極めて胸糞悪かった。でも、どうしてだろう。

あたしは、その人について行ってもいい気がする。

x x x

あたしは、二階の廊下を少し進んだところにある一室に連れてこられた。あたしの背中を押すように案内されたから警戒していたけれど、その人が入口の鍵を閉めることは無かった。

部屋には大きめのベッドが一つだけで、これといった家具は無く、照明もいわば間接照明のようなインテリアめいたものしかない。外を見渡す窓は無く、それとは逆に、曇り硝子張りになったシャワールームが敷設されている。何かの匂いがするということも、特に無い。

抱いていた印象からすると、遥かに清潔で、普通の宿泊施設と何ら変わらないように思える。

何かしらの仕掛けがあるかと思っていた手前、構え損をした感はある。

それはこれから、あたしに直接仕掛けるのだろうけれど。

「何にも持ってないって言ったよね。じゃあ、体でいいよ」

「体……？」

何のことを言っているのか、一瞬わからなかった。

部屋に入るなり、あたしに服を脱げと命令していたことを思い出して、理解が追いつく。

「男の相手するの疲れたし。いいよね、たまには。女同士なんだし、別に何も問題ないでしょ？ デキたりしないし。さ、早く。顔、見せて。ああ、下着はまだそのままでもいいから。さっき、暗くてよく見えなかったから」

催促されるままに、あたしは必要分の衣服を脱ぎ捨て振り返る。
風呂以外の用途で脱衣することは無かったけれど、躊躇ってもしられなかった。

それに、何か……。

「ああ。おお。へえ。すっごい可愛いね。モテるでしょ実際」

「え、ええ。まあ……」

そういう根端なのだど割り切って聞くにしても、齒の根から浮いているのではないかというくらいのセリフに鳥肌必至だった。それを隠そうと、自分の二の腕を掴む。何のつもりも無いのに、視線も合わせられない。

絶妙な感覚だった。

「隣、来て。何もしないから。まだ、気分乗ってないし」

「わかったわ……」

とぼとぼと歩くと、交差する自分の太腿が見えた。

それはいやに肌色で、急に、辱めを受けているような気分になる。何しろ、その人は衣服を脱いでいないのだ。完全に、分が悪いではないか。

善策が作り上げられる時間など、あるはずもないけれど。

「警戒しすぎ。嫌われるよ」

「……………」

その人の話のトーンには独特な間があって、それがどうにも謀略の邪魔になっていた。

せめて、その人の口元でも拝めたら、違つのだろっけねど。

「こっち見て」

思っていることが見透かされでもしているのだろうか。それこそ、強い力でもって透視されているのかもわからない。

頬を両側から挟まれ、首ごとぐるりと回された。

そうしてあたしは、その人と再会することになる。

「あつ……」

「別に何もしてないでしょ。わざとらしいよ、それは」

「その……、ごめんなさい……」

「謝らないでよ。萎える」

指摘されながらも、あたしは絶対に俯くことは無い。それどころか、瞬きすら忘れそうだ。

あたしは、その人を知っていたのだから。

夜をそのまま模写したような黒髪に、顔の小ささが際立たせる大きな瞳。澄んでいるにもかかわらず、芯の詰まったような確りした声質。そして、昔のあたしが抱いた”華奢”という感想が、まだここに生きている。

幼い日に数えるほどしか見かけていないが、間違いない。

この人は、ノアの母親だ。

「ま、いいや。じゃ、遠慮なく」

手慣れた勢いで抱きついてくる。そこそこ柔らかい胸の感触が伝わって来るのと同時に、背中を不定周期で摩られる。さつき介抱してもらった時とは、リズムも強さも全く違う。ノアの母親だとわかってしまったからか、緊張は無くなったように感じる。

その代わりに、かなりの拒絶感があった。

「硬いよ。もっとリラックスして。別にすぐにどうこうするわけじゃないの。どうこうする時には、そっちから強請ってると思うよ」

あたしは特に強い反応は示さないで、小さく頷くだけした。

その人は、そんなことには頓着せずに、背中をくるくると優しく撫でまわし続けた。

あたしに気が付かないのも、無理はない。

あれから随分と時は流れて、あたしも相応に成長しているから。心も体も。

それがこんな形で試されようとは、あの時のあたしが思うわけも無い。

さて、そろそろ背中が温かく、いや、熱くなってくる。一定の恥ずかしさも助けて、少し逆上せそうになる。血の巡りが良くなったせいか、鼓動も速くなっていく。ちょうど良い所で止める、などという事は無いから、その感覚は、次第に次のステージの閾値を踏む。

何か、大切な場所の栓のようなものが抜けそうなイメージが、俄かに脳裏を過った。

「ん？ 大丈夫？ 痛くない？」

「大丈夫よ……」

「ちよつと熱っぽい？ 疲れてない？」

「少しだけ……」

「じゃあ、横になるっか。はい。いいよ。ぱたーんと、ここに寝ちゃおっか」

「ええ……」

「撫でててあげるからね」

急に声のトーンが跳ね上がったと思えば、あたしはいつの間にか横になってしまっていた。

暫くの間、そうやって、あたしは為す術も無くその手に甘やかされることになる。

「学生でしょ」

「え？」

「親と喧嘩して家出してきて……とかじゃないの。迷惑かけてやりたくてとか」

「そうかもしれないけど、違つかもしれない」

何もかも見透かされて、その掌の上で踊らされているようで、癢

だった。

でも、嘘もつけなかった。

「適当。そんなんで人生捨てていいの？」

「捨てないわ。絶対。一つも」

「あ、そ。若いね。けど……、初めてでしょ？」

「ち、違うわ……」

さすがにそれは誤魔化せないと思ったから、言下に訂正した。

不都合も大いにありそうだ。

「だよ。さつき廊下で吐いてたし」

「別に、吐いてはないわ」

「まあ、それはいいよ、どっちでも。でも、部屋の中見たんでしょ？」

「じゃあ、結局、あれができるかどうかだから。廊下で吐こうが、自分を捨てられるならそれで成り立つの」

「自分を、捨てる……」

それはどうということなのだろうと、あたしは心中、今までの経験に置き換えてみた。

一番印象に残っていたのは、カーリングでの辛い合宿練習だった。

自分を捨てて新しい自分になれば、勝利は見えてくると、名門のコーチに叱咤されたのだった。今でも、その言葉の真意は知り得ないけれど、要約は済んだのだと思っていた。

結局それは、名称を変えただけの代償なのである。

「そういうことだから、私のこと楽しませてよ。重い日とかも知らないし、そんなの関係ないから。ただその本能を、私の遊び道具にさせて」

「……………」

あたしは、黙って、頷くしかない。

その人の求めるものを、供給し続けるしかない。

「キス、していい？」

「構わないわ……………」

喜ぶ、という様子も無く、その人は横たわるあたしの両手を押し

付けて、そのまま唇を重ねた。恋人の母親とキスしているという額面もさることながら、誰とも知らぬ人間と重ねたそれを、自分に重ねることが気持ち悪くて仕方がなかった。

吐きそうになってくる。

でも、あたしには、この行為を止めさせることもできるはずだ。

勿論、代償はある。

だから、あたしは我慢しなければならなかった。

「何。そんなに嫌？ 私、そんなに色んな人と軽々しくキスなんかしないって。女の子だから特別に前戯してるだけで。かなり可愛いし」

「で、でも……」

「ああもう、わかった。じゃあ、いい」

吹っ切れたような一言の後、その人はあたしの胸元へと飛び込んでくる。そうして、大きく深呼吸したかと思うと、あたしの匂いを褒めた。依然、両手は押さえつけられていて、ある程度の不自由があった。

それからすぐのことだった。

「やつ………！」

鎖骨から脇、脇から首、そして耳の裏の方まで、仄かに温かく湿った刷毛で、ゆっくりとなぞられたような感じがした。その軌道は順次ひんやりと冷えて、その温度差に身震いした。

これに耐えなければ、体のどこかから何かが溢れだしそうな気がして、怖い。

「んっ！ はあ、はあ………」

でも、どうすれば耐えられるのかわからない。

鍛えているのに、どうしてか息が上がる。

その人が何食わぬ顔で居るのが、信じられない。

「あれ？ 体とか舐めたりしたことなかった？ さつき、キス、異様に上手かったから、誰かとしてるのかと思うんだけど。まだ学生だし、真面目そうだし、そこまではいってないか。……てか、何？

彼氏いんの？」

「……………」

策略に耽る。

「い、いないわ……………」

「そ」

ダメだ、頭が回らない。

「けれど、彼女が、いるわ……………」

「あ。そっちの人なんだね。じゃあ、遠慮なんかいらないわけか」

「そ、そうね……………」

「彼女、名前なんて言うの。私のこと、その人だと思って思いつきりしていいよ」

間違いない。

ここで、ノアの名前を出してしまえば、あたしの目論見はすべて崩れ去ることになる。決意も覚悟も策略も、すべてが泡沫に消える。けれど、もう、引き返すこともできない。さらさら、引き返すつもりも無い。

ならば、あたしはあたしそのまま。ノアは、ノアのまま。少なくとも、代わりはいない。

「それよりも先に、あなたの名前、聞きたいわ」

「代わりにはならないってことね。お熱いね。真面目そうに見えて、実は毎晩色々やってる系か。なるほどね。じゃあ、ここへ来たのも、彼女のためってことか。それは泣けるね。ははは」

「いいから、教えて」

「はいはい」

あたしは結論を急ぐ。

あたしに残された時間は、そこまで多くない。

「レノよ。レノ・グリニツチ」

「レノ・グリニツチ……」

「何よ。変でもないでしょ。そっちは？」

一瞬、偽名を使おうか迷った。でも、真実を述べることにした。

人生の分岐を、自分の手で作り出すのも悪くはないと思ったからだ。

気付かれれば小さな可能性が、気付かなければ大きな墮落が、そこにある。それはあまりに近すぎて、どちらに歩いてても同じように見えなくも無い。

でも、ノアの名前を汚すくらいなら、あたしはあたし自身を捨てることも辞さない。

そんな選択肢になり得る言葉は、惜しくもあたしの名前。

あるがままに譲り受けて、怠惰に供給され続けてきた響き。

アリス・ナイブス。

「アリス・ナイブス」

あたしの名前が、ここまで誰かの心をかき鳴らしたことは無いだろうと思った。勿論それは、あたし自身のことを言っている。誰かというのはいつも、あたしの中にいて、それはあたしたり得ている。そのはずだった。

けれど、可能性は鈍色にでも、輝きを放っていつて。

「アリス・ナイブス？ アリス……ナイブス……。アリス……。えっ……？」

あたしの自信がノアの勇気を灯すように。

最後には、月光がレノの表情をこれでもかと照らしていった。

「まさか、あなた、ノアの……!？」

月が昇ったことへの驚愕なのか、太陽が沈んだことへの疑問なのか。はたまた、月が沈むことへの期待なのか、太陽が昇ることへの不安なのか。レノの表情が二転三転とすると、あたしもまたそれを受けて、感情を変えた。

偉そうなことをするくらいはないけれど、あたしはごく自然な本能で、レノを抱きしめていた。

「ち、ちよつとつ、何してんの……?」

「ごめんなさい……。本能、かもしれない……」

「え、なに? どうゆうこと……? 何言ってるの? ていうか、なんで? どうしてここにっ? えっ? ホントにアリスさん、なんだよね……? 嘘、じゃないでしょ……?」

「嘘じゃないわ。あたしは、アリス。アリス・ナイクス。ノアの、恋人よ」

あたしがそう言った途端、その人はものすごい勢いであたしを抱き返してきた。それからボロボロと大粒の涙を零して、それらであたしの下着をびしょびしょに濡らすのだ。あまりに大声で泣くので心配したが、あたしはレノの背中を撫でられなかった。

事情という物語は、あたしもレノもきつと、何一つ理解できていないのだと思う。

あたしは、「ああ、終わったな」とだけ思った。

あたしがレノに対して失えるものは、もう、無くなってしまったということだから。

それでも、あたしは服を脱がされた拳句に濡らされたわけだ。

その責任をとってもらったために、レノが泣き止むのを待とう。

あたしはすでに、家に帰ってノアにする言い訳を、考えていた。

その言い訳は、もう、通用しないのだけれど。

ありがとうございます。アリスさん。

あの子にも、やっと、信じられる人ができたのね。

あの子にも、やっと、好きな人ができたのね。

あの子も、やっと、幸せになれたのね。

あの子も、やっと、愛されて生きられるのね。

ありがとうございます。アリスさん。

これで、やっと、『願いの呪い』が消えるのね。

これで、やっと、あの子の笑顔が見られるのね。

ありがとうございます。本当に、ありがとうございます。

よかった。あなたに会えて。

Refuse never Today (後書き)

【あとがき】

おそらく今話がルーモス史上最も「性」に関して濃かったと思います。

そうやって奥まったところをつつくたびに、何か核心めいたものが見えたのではないかなと思いますがいかがでしたでしょうか。

そして今回は、『願いの夢』についての強力な輪郭線も見え隠れしました。

果たして、そこには関係があるのでしょうか。

次回に続く。

Discarding is Selecting(前書き)

【まえがき】

” 捨てることは、捨てることである。”
言葉にするようなことではなかったとしても、事実。

前話、前々話との繋がりが強い話ですので、覚えていないと言っ方は、是非一度戻って確認していただけると嬉しいです。
きっと、彼女たちの息遣いまで見えてくると思います。

どうぞ。

Discarding is Selecting

『ありがとう。アリスさん……。あの子のこと、お願いします』

「お願いしますって、何よ……っ！」

あたしは部屋を飛び出して、ノアの元へと急いだ。

今何時かもわからない。ここがどこかも、知らない。自分が、何者かも忘れた。でも、もうどうでもいい。

あたしはノアを覚えていて、ノアはあたしを覚えていてくれる。それだけでいいと思った。

『私なんて、傍にいてもできないダメ親だから』

「そうやって想っているんだから、何もダメな事なんて、ないじゃない……！」

あたしがあたしを捨てても、あたしの中にノアは居て。ノアがあたしを忘れても、あたしはノアを覚えている。

そんなことは、とづくに知っていたのに。

あたしは一体、こんなところで何をしているのだろう。

『親、失格だから……。ただの、裏切り者、だから……』

「勝手な事ばかり言って……。本当、迷惑よ……。っ」
それでもきつと、今まで伝えてきたこと、伝わってきたことが無
駄になることはない。

あたしがさせない。

どれだけ格好悪くても、どれだけ苦痛であっても、そういう選択
をすることはできる。

だから、走る。

走る。いや、奔るのだ。

ノアの待つ場所へ向かって、只管に。

『親、じゃないし……。』

「親じゃなかったら、諦めていいのっ!? いいわけ、ないでしょ
う……。!?!」

二人の関係がどうであるとか、呼び名などどうでもいい。

その間を繋ぐ糸があれば、弛もつが切れてしまおうが、あたしは
また手繰り寄せるだけ。

その糸が、固く結ばれるまで。

『あの子。私のために毎日毎日お弁当作ってくれるの。手紙まで添
えて。それがね、すごく美味しいの……。バカだよ……。そんなの、
泣いちゃってしよっぱくなるに決まってるじゃん……。!』

「当然じゃない……。っ。あなたの、娘でしょうがっ!」

あたしは奈落へ垂れ下がった糸を引いて、どんとんと手に巻いて

いく。無限の闇から掬うそれは、とても細く儂くて、でも、束になると痛かった。そうやって、指の骨がはち切れそうになるのも、あたしは厭わない。

いや。むしろ、もう、あたしはその奈落へ飛び降りてしまいたい。飛び降りたその先が、永遠の闇でもいい。

あなたがいない世界より暗い世界なんて、この世に一つも存在しないのだから。

『ありがとって、ずっと思ってたよ……。でも、もう、会えないから……。会っちゃいけないから……。』

「その言葉で気付いたわ……。あたし、言ってることとやってることが滅茶苦茶だった」

せっかく確かなことを見つけたのに、あたしはあたしたちの関係ばかりが気がかりで、出鱈目な行動をしていた。その手触りを手に入れるために、必要のない遠回りをしていた。他人に迷惑までかけて得るものなど、風に饅たなひく叢のようなものだった。

でも、それがあったからこそ、あたしはこうして歩く。音を奏でて走る。

そうして世界はどこかへ転ぶ。

当たり前だったものが失われてゆく恐怖に、立ち向かえる。

『でもあなたが、アリスさんがいてくれるから、安心した。これでもう、あの子は大丈夫』

「勝手に罪を背負った気になって……。馬鹿みたいね……」

「ただ、その気持ちも理解できる。」

「あたしも、同じ経験をしたから。」

「あたしとパパの関係と、ノアとレノの関係、レノとレノの姉の関係、あたしとノアの関係は、何かしら同じ糸で繋がっているからだと思う。ここへ混ぜるべきではないだろうけど、”彼”も、きっとそうだ。」

「義務と希望とを天秤にかけて、その秤が壊れてしまったのだ。」

『じゃあ、さっさと行きなよ。ここは、アリスさんみたいな人が来るところじゃない。あなたの居場所は、ここじゃないでしょ。だから、行きなよ』

「わかってるわよ!」

「でも、秤は直すことができる。」

「右と左、同じだけの気持ちに乗せて、もう一度目盛りを振り直せばいい。」

「それができるのは、今、あたしとノアだけだ。」

『行って。……お願いっ!』

「ノア、待っていて。すぐ、行くから……っ」

レノの話によれば、レノはノアの本当の母親の妹であり、本当の母親の記憶はノアの中から一切消されているということ。気付けば、ノアの前にレノがいたことになっているという筋書きで。

記憶の消去を行ったのは、ノアの本当の母親で、その手段が思案の外、『願いの夢』だったのだ。悪い印象を持っていたレノは『願いの呪い』と呼んでいたけれど、都市伝説云々の話を添えていたの、同じものを指していそうだ。

ただ一つ、【『願い』の目的が達成されると、『願い』はその効力を失う】というルールの違いを除いては。

『願いの夢』に関する新しいデータが垣間見えたのは、今はとりあえず置いておく。

ノアの記憶から消されたものが、『ノアにとっての悪い記憶』であつたのなら、それはおそらく、関連する事象も含まれる。

例えば、傷とか。

ノアの父親　彼は、ノアや母親に暴力を働くような男で、ノアの供述が正しければ、あの二十人殺害事件の主犯だ。それをノアが記憶していれば、あるいは、思い出すような要素があれば、ノアの母親のした『願い』の力によって封殺されている可能性が非常に高い。

ともすれば、ノアの母親の『願い』の目的が達成されたであろう今、ノアの心身に何か影響があつてもおかしくはないのだ。

裏付けるように、ここ長らくノアの心はあたしに伝播しなかつた。それは、ノアの抱いた『アリス・ナイクスに自分のすべてを知って欲しい』という『願い』の目的が叶っていたからなのではないか。同じように、ノアから消された記憶の痕が、掘り起こされているかもしれない。

そう思うと、居てもたつても居られない。

多分、今のあたしを止められる人はいない。

公安だろうが、黒服集団だろうが、勿論ルートだろうが、立ちはだかる者はすべて蹴散らす。

急がなくてはならない。

一分でも早く、一秒でも早く、ノアの元へ辿りつかなければならぬ。

「はあ、はあ………！」

これは、もはや義務ではない。

義務よりも重い、愛だと知った。

「なんで、もっと早く走れないのよ………っ」

もつと、ノアを知りたい。ノアのすべてを知りたい。ノアのことを知らなければならぬ。これから二度と教えてもらえないのなら、あたしが探る。

「ノアっ」

見て、聞いて、触れて、感じて。

見せて、聞かせて、触れ合つて、笑つて。

そんな日常を供給するために、あたしはノアの傍にいる。

「ノアっ！ ノアっ！！」

戦うために、あたしはノアの傍にいるのではない。

ノアを幸せにするために、居る。

ずっと、居る。

「ノアーツ！！！！」

正直、ドアなど蹴破つてしまおうとも思っていたのに、開いた。

鍵が開けっぱなしだったから、誰かが忍び込んだのではと焦ったけれど、開けたのはノアだった。玄関口のすぐ前に立っていて、今ちょうど鍵を開けたらしかった。

何も喋らずに微笑んでいたノアを、何も言わずそのまま部屋へと連れて行って、かなり強引に布団に押し倒した。形式上両手は押さえつけたけれど、抵抗なんてするはずもないから、衣服は簡単に脱がすことができた。

ノアは「あっ」とだけ言って、その後すぐに泣いた。

「み、見ないでっ」

「見るわ。全部。ノアのこと、全部知りたいの。あたしは、どんなノアも、大好きだから。だから、見せて……？」

ノアは一度だけ頷いて、それから少し笑ってくれた。

あたしはノアの両手の縛りを解いて、そのまま優しく肩を撫でた。

「ああ……。どうして、こんな……」

ノアの右肩には青々とした痣と、抓られて内出血したような痕が浮かび上がっていた。今まで、そんな傷なんて、一度も見たことが無かったはずなのに。

でも、ノアが自暴自棄になってやってしまったなんて考えは、毛頭無い。

今日ばかりは、『願い』を信じて幸福の痕を見る。

「やっぱり、ノアのこと、嫌いに、なった……？」

あたしの瞳を見つめてそう試すので、あたしはすぐさまノアの口をキスで塞いだ。

薄目を開けると、ノアの眦からポロリと一つの涙が零れるのが見えた。

「好きよ、ノア。大好き。愛してる……」

そう口にしてズボンを脱がしてしまうのは、ありふれた必然だった。

ノアは何の抵抗もせず、あたしに体を曝け出す。

「ノアも、アリスのこと好き……。全部、全部、全部、好きだよ……」

毎晩のキスのお返しとでも言わんばかりに、ノアは気持ちをぶつけてくる。

効力を失った『願い』の影響でノアの心がわからなくなっても、自然、ノアの気持ちはすべてわかる。

目的と手段が一致しているから、という道理もあるだろう。

でも、それ以上に、あたしとノアの気持ちは強く何重にも結ばれて解けなくなった。例え燃やされても同じ灰になることだってできる。紛い物の『接着剤』など、もう必要ない。

あたしはそれを、目で見て、肌で感じて、ノアと確かめるだけでいい。

「この傷も、この傷も……。全部、痛かったわよね……。ごめんなさい……。守ってあげられなくて……」

ノアの肌に触れる指と唇で、彼の母よりも優しく確かめて。記憶の中の母の愛を、あたしはあたしのもので塗り替えていく。

「ノア……。好き……。もう、絶対、離さないから……」

首、肩、両腕、腰骨の出ているところ、脹脛、爪先も。背中も、太腿の内側も、臍の周りも、小さなお尻も、恥ずかしい所も。痣と傷を一つ一つ数える様に、あたしはノアの全身にくまなくキスを振り撒いた。

そして、ノアを全部見て、全部知って、全部愛した。

そこにあつた過去の片鱗も、全部あたしで上書きした。

これは義務でも何でもない。あたしがしたくて、ノアがして欲しくて。ノアがしたくて、あたしがして欲しくて、ただそれだけのこと。いわば、本能。

あの人は、レノはそう生きていた。

ノアにそう伝えようと、柔らかく笑って、その後あたしの唇を奪っていった。

ノアは、そう生きている。

あたしはノアの吐いた息を吸って、またノアに返す。愛おしくて、愛おしくて、とてもではないが気が狂いそうだった。肌に触れたい、もう一度キスしたい、一つになりたい。

あたしは、そう生きている。

そこには正解も不正解も、きつと無い。

「ねえ、ノア」

「なに、アリス」

「学校、卒業したら、二人で一緒に暮らさない？」

「うん……っ！」

「絶対よ？」

「絶対、ねっ」

大地を踏みしめて時折、人は何も思わない。

Discarding is Selecting (後書き)

【あとがき】

本当の意味で二人が繋がったと同時に、また一つ『願い』の絡繰りが明らかになりました。

『願い』とは、効力を失い得る。

人工的かつ自然的で、本当に何の力なのかわからなくなってきましたね。

私もわかりません。

そういうことも踏まえつつ、次回へ続きます。

Don't be Afraid (前書き)

【まえがき】

”学んだ恐怖は、失われぬ知恵となる。”
それが失われた瞬間に、きっと目に見える世界は形を留められなくなる。

もう、見逃せる部分もなくなってきました。
今章、重いです。

どしどし。

Don't be Afraid

家出？日目。

朝。

二人して汗臭くなった体も、もう、洗っている暇がなかった。今朝、外が騒がしいので目が覚めて、その後すぐ、嫌な予感は予感ではなくなった。

キッチン横の換気扇のファンの隙間から外を覗くと、黒い服を身に纏った者達が公園に十数人いたのだ。缶蹴りでもしているのならよかったところだけど、狙いは十中八九、あたしたちの城だ。

でも、この間とは確かに様子が違うことがある。

周囲を搜索しているという動きはあまりなく、どちらかというところ先遣隊をこちらへ派遣して偵察しているようにも受け取れる。決してランダムに行動するのではなく、ある程度の計画性があると言えよいだらうか。

そして、もう一つ。

数の少なさだ。

おそらく、ターゲット像をかなりの精度で絞ることができたための対応だろう。ドアを一つ一つ打ち破ってしまわないあたり、公安の無駄な慎重さが垣間見える。それで今回は、水面下の我慢大会を申し込んできたと言うわけか。

正直、争い事は真っ平御免だ。

でも、あたしたちの愛を邪魔されたくはない。

「アリス、どうするの……？」

すっかり長い口づけを覚えたノアは、あたしを意識してか、胸元を掛け布団で密かに隠して若干の距離をとる。ノアに対して”女性らしい”と思ったことが無かったから、不思議な気持ちだ。ただ、汗など生理現象なのだから気にしたりしないのにと、少し残念でもあった。

主導権を握るあたしは、あまり汗をかいていない。

「そうね。策はあるわ。でも、少し考えさせて」

あたしもノアも不幸にならずに済んで、尚且つ、誰も咎められない逃げ道を探した。

一番初めに浮かんだのは、『願いの夢』の力を使うことだった。

一番初めに却下されたのも、それだった。

なんてことはない。

サクラがここへ来ないのだから、あたしがたった今選択することに、不正解は存在しない。

あたしが傷つこうが死のうが、ノアには指一本触れさせない。そしてあたしは、絶対にノアの傍を離れない。

そういう想いだけ、持っていればいい。

「アリス……」

「なに？ どうしたの？」

「ぎゅ……っでしたい」

「ええ。いいわよ。少し汗臭いけど」

高揚したままの心臓が、小さな胸を透過してダイレクトにあたしの脳を鳴らす。特別、緊張もしないけれど、今はもう安堵もしない。欲望と期待とが心を乱して、静かにあたしの全身を巡る。

ノアは、あたしの恋人だ。

全部、知っている。

だから、もう、知らなくてもいい。

これからは、あたしがノアの過去を作る。

いや、二人で未来を創ろう。

「ノアって、温かいわ」

「アリスも、温かい」

「一緒ね」

「うんっ」

同情は愛情を築いて、あたしはそこに運命を見出した。

運命は心と心に橋を架けて、その間に険しい河を流すのだ。

ノアがいると知ったら、あたしは勇んでその橋を渡る。

「あたし、謝ろうと思うの」

「謝る、の？」

「ええ。それで、あたしの気持ちを全部伝えるわ。きっと、なあなあにしてきたから良くなかったの。だから、言うわ。パパに」

「アリス……」

もしそれで、ノアが迫害されるようなら、その時こそ、あたしの目的地は決まると思う。

ノアがそれで不幸になるようなことは、絶対にありえない。

「あたしね、実は、ノアの気持ちがよくわからなかったの。あたしを好きなのはわかっていただけけど、求める意味はイマイチ理解できなかった。キスという行為がもたらすものが、あたしに責任を感じさせていたの」

失ったら、それは悲しいだろうけれど、きっとキスに執着はしないだろうと思った。ノアの妄想に付き合えなくなる寂しさはあるだろうけど、冬の寒さに泣くことになるとはあり得ないと思っていたけれど、違った。

「ノアがあたしの前からいなくなって、気付いたわ。誰かが隣に居てくれること、その誰かが好きな人だったら、どんなに幸せだろうって」

ノアの母がそうであったように。ルートの母がそうであったように。

だからわかる。

「だから、謝るわ」

あたしのパパも、きつとママも、同じことを覚えているはずだ。

どうしてそんなに努力するのかって、どうしてそんなに厳しいのかって、伝えることつてもものすごく恥ずかしいではないか。

ノアと裸になって触れ合っても、まだ、恥ずかしいことがある。簡単ではないはずだ。

でも、それでこそ一層、あたしたちは強く繋がれる。

「あたしは、今、幸せなもの」

「ノアも、幸せだよ……」

その瞬間、ぽうつと、蝋燭の火が消えて、部屋がわずかに仄暗くなる。

それこそ、誰かが恥ずかしくて吹き消したのではないだろうか。

「消えちゃったね……」

「そうね。でも、ノアがいるの、わかるわ」

「ノアも、アリスいるの、わかる」

「そう。良かった……。ノア、立てる？」

「うん。大丈夫」

「手、貸すわね」

「ありがとう」

あたしたちは、温まった布団の上で起立した。

あたしもノアも、行く末は見据えている。

不安は残るが、それを免れるための策であり、立ち向かうための愛チカラでもあった。

「手を繋いで行きましょうか」

「うん」

その扉の先に光がある確証は無かった。

早朝だと言うのは建前で、未来を切り開くには力不足だということも知ったからである。

ただ、それを知っての選択であるのだから、決して自棄にはならない。

少なくとも、あたしとノアはここに生きていたのだと、とことん意地悪な神様にでも、見せつけてやることはできるのだから。

覚悟と決意の念を込めて、あたしはノアの家の扉を開く。
そして世界は繋がった。

次の瞬間の出来事。

一瞬、また宵闇が帰って来たのかと錯覚したが、現実には素直にあ
たしを襲った。

あたしは漆黒の紫電に腕を拉ひがれて、そのまま玄関床に叩きつけ
られた。構えが甘かったために、その反動で敷居に頬を強打した。
ナイフで指を切った時よりも熱く、頬がじんじんと痛んだ。

父の差し金だからと、油断してしまった。
大量の血液が頬を伝うのがわかる。

「確保っ！！」

それは当然のことなのかもしれない。

重要参考人を匿う意味とは、社会の末端に位置するあたしにして
みれば恋人と愛を育むことと同義だった。でも、きつと、家族を亡
くした者からすれば、床にできた血溜まりの淀むことなど、些事な
儀式に過ぎない。

それと同じで、ノアとあたしが引き剥がされることなど

「嫌っ！ 離してっ！！ ノアっ！ ノアーツ！！」

同じなはずはなかった。

ルートがあたしとリスを選択したように、あたしもまたノアを選
ぶのだ。選びたいのだ。

失われたことを忘れれば良いと言いたいのではない。

まだ、失っていないのだ。

まだ、この世界は終わっていないのだ。

涙するのは、一度戦って知ってからでも、遅くは無いと訴えたかった。幸福を見出すことだって、不可能ではないのだと伝えたかった。

だから、それを呈するために、あたしは全力で抵抗した。

恰好は一切気にしなかった。

とにかく、あたしの上に押し掛かるそれを、どかそうと努めた。

除けられないのだとはわかっていたけれど、信じていたから絶対に諦めなかった。ノアが視界に映らないのが不安だったけれど、声が聞こえたから必死で蹴もいた。助けを呼ぶのではなくて、立ち向かおうと叫び続けた。疲れなんて、全く感じなかった。

その時だった。

ふわりと、背中が軽くなる印象。

あたしはその隙について、もう一段踏ん張って、黒い錘を跳ね飛ばした。

「はあ……はあ……。ノアっ、ノアっ！ どこにいるの！！」

キョロキョロと周囲を見渡すと、すぐ、あたしの目の前に忽然と、真っ白なそれはいた。

フリルドレスとエプロンを着用していて、髪は綺麗に纏められた黒。あなたに付き従うという意味合いを持った薔薇蕾のブローチを拵えた、頗る規律正しい装い。ある一定の場所なら理解はあるが、こんな辺鄙なところに居ると、甚だ場違い。

それは、紛れもなくメイドだった。

「ご無事で」

「あなた……！ 一体、何、やってるのよ……」

「そう言われましても……」

あたしの錘を取り除いたのは、どうやら、このメイドらしかった。いや、今はそんなことはどうでもいい。むしろ、その冷静さに腹が立つ。

あたしは見覚えのあるそいつに、食って掛かった。

「ノアはっ!? ノアはどこよ!?」

「ああ。ノア様でしたら……」

「アリスう……」

メイドが一步後退すると、その影から、ノアが出て来た。

「ノアっ。良かった……」

怪我は無いらしかったけれど、そうだった。あたしが怪我をして
いたのだ。

ノアが見逃すはずもない。

「ア、アア、アリス……っ!? 血が、血が……! 血が出る
よ……っ!? ああああ、どどど、どうしよう……っ。ノアは、ど
うしたら……! ノアのせいで、こんな……!」

「ふふふっ。絶対そう言うと思ったわ。でも、心配しないで大丈夫
よ。その代り、あとで、キス……して、ね?」

「……うんっ!」

おたおたと泡を食っていたノアも、すぐに察してくれたようだった
ので、助かる。

今は、とりあえず、事情を飲み込むのが先決だろう。

「ねえ。あんたはどうしてここに来た訳? 黒服の仲間じゃないの
?」

「申し訳ありませんが、詳しく説明している時間はありません」

メイドが何やら手旗で合図すると、新たな五人のメイドが参上し
て、玄関前通路は狭くなる。

メイドの視線がすべて一カ所に集まっていると思つて、それを辿
つてみると、そこには黒服が集合していた。メイドとは対照的な黒
の塊で、サングラスで隠れているものはいるものの、そちらの視線もすべ
てこちらへ向いていた。

「いいですか。アリスお嬢様。わたくし私が合図致しましたら、走ってナイ
ブス邸に向かつてください。現状、あのお屋敷が一番安心です」
「なんとも分かりやすい罷ね」

「アリスお嬢様。お願いです。信じてください……」

状況はわからないが、メイドが味方であるのならば、光はあった。ならば、信じよう。

「わかったわ。あなたを信じる」

メイドは少し嬉しそうに笑った後、すぐ、恥ずかしそうに口角を下げた。

可愛らしい顔をしているかと思えば、あたしが一度家に戻った時、玄関の扉を開けてくれた子だ。もしかしたら、格闘技でもやっているのだろうか。こんな力があるなんて驚きだ。なるほど。

最近、また少しメイドが増やされたわけは、要するに戦闘用だったということか。メイドに戦闘をさせるとは、一体、どこの国の習わしだ。

何かが、どこかで繋がった音がした。

「ご理解いただけで何よりです。それでは、頃合いを見て合図を出します。合図は手旗し　っ!？　ア、アリスお嬢様!？」

「あたしが撫で終わったら、でいいでしょう?」

「は、はい……」

今まで、あたしがなあなあにしてきた部分。

それは、メイドたちとの付き合い方にもあったと思うのだ。

確かに、家族ではないけれど、家族の一員に数えることもできる。厨房を覗き込んで、昔のように料理を教えてもらったりできる。

あたしはずっと、そうしたかった。

「そ、それでは、あの……。ナイブス邸まではですね……。っ。そちらのメイド長が、お二人をお守り致します。なので、全力で走ってください。ここは、私たちが引き受けます」

「四人でも平気な確認があるのね」

「はい」

「そう。信じるわ。ノアは大丈夫?」

「うん、大丈夫」

「それじゃあ、行くわね……」

「はい。いつでも」

雪は降っていなかった。

それなのにどうしてか、しんと、積もる音が響くのだ。余りの静寂さに誘引されたその音は、公園とここを往復して、対立するコントラストの中で遊んでいるように鳴っていた。遊んでいれば寒さもわからないだろうと、いつしかの記憶が戯れて、冬であるのに寒くなかった。朝であるのに、暗くなかった。

朝日の示す光を辿れば、きっと、今回のゴールに辿り着く。

例え雪に乱反射しても、あたしがそれを見失うことは決して無い。そう心に決めて、あたしはそっと、メイドの髪を撫でた。

そして、次の一瞬。

あたしはノアの手を取って、雷のように駆けた。

追うように黒い塊がこちらへやってくるのがわかる。

四人のメイドが二階から飛び降りて、そこへ応戦する形となった。金属がぶつかる音、布が裂ける音、皮膚が張る音、そのすべてが静寂という無音の世界に否が応でも入り込んできた。

あたしはそれから、後ろを振り返らなかった。

ノアは、あたしの横を走っていた。

「はあ、はあ……。はあ……」

でも、運動が苦手なもの、知っていた。

メイドたちがそれを知っているかどうかは知らないけれど、あたしは知っているのだ。

置いていけるわけではない。

「頑張つて、ノア！」

ノアの背中を叩いて鼓舞するけれど、それで足が速くなるわけも無い。

火事場の馬鹿力とはいうけれど、この状況だ。ノアの中で危険信

号はすでに出ていいるはずだろうから、これ以上は見込めない。

あの黒い対抗馬は、確実にあたしたちよりも捷い。

いくら四人で抑えているからと言って、多勢に無勢だ。時間の問題になる。

このままでは……。

「私が抱っこして走ります」

少し後方を走っていたメイド長が、あたしに並走してそう言ってきた。

深いことなど考えず、あたしは了承した。

メイド長はノアと進行スピードを合わせて、そのままノアを抱き抱えるように持った。

なかなか快調だった。

ノアの体重は三十四キロと軽量であるが、それ以上に、メイド長と相性が良いからだろう。ノアの方も、できるだけ負担にならないようにと、体を縮めてぐつと芯に近づいていた。

こちらの走りの重心が安定したようになって、ぐんと一段二段スピードが上がった。

「悪いわね！　お願いするわ！」

「お安い御用です」

メイド長の言葉には一定の安心感がある。

メイドの中では一番長い付き合いでもあるわけだし、パパに肩入れし過ぎないなど、信頼がおけた。料理は上手だし、勉強も教えてくれるし、何より人が良かった。

それなのに、あたしは名前も知らなかった。

メイドは外部の者だと言う想いが強かったからだ。

でも、もうそれは、違う。

「あなた、名前はなんて言うの？　こんなタイミングになってごめんなさい」

「いえ。どうかお気になさらず。名乗るほどの者でも、ございませ
んから」

「あたしは聞きた　っ!?!」

トンネルに差し掛かった時だった。

気圧の変化のせいだろうか、大きな空気の壁にぶつかったような
感覚になった。

その反動で、メイド長のブリムが飛んだ。

「えっ……?」

今まで、メイド長の顔をまじまじと見たことが無かった。いつも
目を瞑っているし、時折、眼帯などをして特徴的だった覚えはある
ものの、メイド長であるが故と頓着し得ない。それだから、ノアと
見比べる機会などあるはずも無い。それを知らないことが、気がか
りにもならない。

でも、今、確かに、影を見た。

似ていたのだ。

いや、同じだった。

あたしに、生きるということの難しさを教えてくれたあの人と。

あの、レノと。

「あなた、まさか……!」

耳が巻風を作っただけでははっきりと聞こえなかったけれど、メイド
長は確かにそう言った。

「リノ、と申します」

目的地へと辿り着く頃、ノアはリノの胸の中で、眠ってしまっ
ていた。

きつと、疲れていたのだろう。
つい嬉しくて、ノアの髪を撫でながら、「ごめんね」と少しだけ
泣いてしまった。

Don't be Afraid (後書き)

【あとがき】

目まぐるしく展開が変わっていく感じ、書いていて忙しいです。

きっと、読む方も目が回ることでしょう。

ですが、見逃せない動きがたくさんあるので、立ち止まってスロウにしてみるのも悪くないと思います。それが文の良さであり、悪きところでもありますから。

次回は、騒動の原点へ……。

Look for Truth (前書き)

【まえがき】

” 探し求めれば、それは進まずとも歩みである。”
歩いている人は生きていて、振り撒く勇氣は美しいものです。

すべての真相が明かされます。

まだ「？」な部分が残っているかたは、もう一度 Arrys - 6
の初め辺りから読み直すと、いいかもしれません。新しい発見が、
きつとあるはずですよ。

どうぞ。

Look for Truth

ナイクス邸客間。
昼。

「ごめんなさいっ!!」

謝罪の言葉のために口を動かすのは、一体いつぶりの事だろう。
ノアがぼろぼろと涙を零しながら胸にしがみついているせいか、
体の髄から熱くなる。

いや、誰かが供給する暖房のせいかもしれない。

でも、今は、そんなことよりも、あたしの率直な想いが前面に出
た。

「心配かけて……。挙句怪我までして、本当に……っ」

あたしの生きた証拠を撫でるようにして密かに隠すと、思い出し
てジンと痛んだ。

医者に診てもらって傷は浅いとわかったけれど、痕にはなっ
てしまっただけだった。

これで、名実ともに”顔に傷がついてしまった”というわけだ。

「こんな顔じゃ、もうダメよね。パパ、ママ、ごめんなさい……」
汚れ傷ついた体を自ら抱いて、あたしは少し安堵していた。

二度とその名で呼ぶなと言った、その厳粛な瞳から、大粒の涙が
溢れていたから。

「アリスっ！ 本当にすまなかった！！ 許されないことを、私はしてしまっただ……！ すまなかった……。私を、許してくれ……」
「ごめんなさいアリスっ。ああ、痛かったでしょうに……」
「ノアのためにアリスがこんな……っ！ うわああああっ！！」
アリスっ、アリス……っ！」

三人して、あたしを囲って泣くものだから、まるで水責めを食らっているようだ。少し苦しいし、それが恥ずかしくもある。傍で見ていたメイド長と目が合って、あたしは情けなくも言葉を失った。

そんな感情的な人間だったろうか。あたしとは。

「パパもママも、やめてよ、もう……。苦しいじゃない……」
傷になってしまったものは仕方がない。

そういう過去があつてこそ、あたしは今、ここに立っているのだから。これから先の未来 いや、今だってそうだ。ノアのキスがこの傷を癒すたびに、あたしは生きている意味を思い出すだろう。でも今は、あたしだけは、泣かないように努めた。

それから、三人が纏わりつくのを止めるまで、暫くかかった。

あたしとノアが来客用の椅子に座って、パパとママが向かいに座す。テーブルの真横あたりにメイド長は居て、仲介をするように見守っている。まるで、恋人を両親に紹介しているみたいだ。

ここ最近の暮らしの癖が出たのか、両親の前だと言うのに、ノアがあたしの手をぎゅっと握って来て、変に緊張した。

でも、当然なのか。

パパから見たノアは、少なくとも重要参考人の一人に変わりはないのだから。

パパが妙にノアを睨みつけているという事は無かったけれど、言葉選びに手古摺るのは、つまりそういうことだろう。最低でもあたしには気を遣って、どう切り出すべきか模索していると。

静寂に包まれていると、また、どこからか喧嘩が入り込んできそうだったので、あたしは先手を打つことにした。無論、無策ではな

い。

「パパ」

言い慣れた言葉であるから、あたしは言い淀まない。
枷も錘も無いから、毒を含むことも無い。

ただ、あたしにしては、やけに可愛らしく、無駄にストレートであつたと顧みて、耳の裏辺りがチクチク痒い。

パパもパパで、言われ慣れているからだろうか、返答には圧が無かつた。

「ああ。分かっているとも」

俄かに家族の繋がりを感じてしまつて、少し可笑しかつた。

けれど、別段、全然、頼りになるとかは思わない。

「どんなことでも聞いてくれ。全部答えよう。アリスたちを襲つた者達は、ついさつき逃亡したと連絡があつたから、安心して質問してくれていい」

あたしは隣のノアと目を合わせて、それから続けられた。

それは、聞いてもいいかという意味だつた。

「それじゃあ聞くわ」

ノアの握る力が、少し強くなる。

大丈夫、怖くは無い。

あたしはそう握り返して、また続ける。

「どうして、ノアを追い出したの？」

名前が出た時、ノアの肩がびくつと反応したのがわかる。

我慢ならなくて、あたしはそのままノアの肩を自分の方へ抱き寄せることにした。

ちょうどパパも沈黙してしまつたので、その間に、メイド長にブランケットを持って来てもらった。ノアに羽織らせて、あたしもそこへ半身交わつた。

申し訳なさそうに、でも、はっきりとパパは言う。

「それに関しては、私は手助けをしただけなんだ」

「つまり、ノアが出て行きたいって言つたってこと？」

あたしは、少しだけ言霊の切先を研いで言う。

「そうだ。確かに、そういう状況を作り出したのは、私だった。でも、あの事実を伝えた時はまだ、処遇も決めてすらいなかったんだ」
「そうなの？ ノア」

「うん……。そう、なの……」
なるほど。納得だ。

宣告されたことに重責を感じてしまったノアが、自らあたしと距離を置こうとする構図が容易にイメージできる。確かに、そのパターンも考えなくはなかったけれど、すぐさま却下してしまって演繹せずにいた。

「信じてはくれないかもしれないが、私はあの時、すぐ止めたのだ。さすがに、危険すぎると思ってな。でも、強く断られてしまったんだ……。だから、せめて暫く凌げるようにと、十分な資金を渡して見送ることにしたのだ」

その後、メイドを派遣して探させたが続いたが、そこそこ聞き苦しくはある。

あたしも少しだけノアの方に身を寄せて、また尋ねる。

「どうして、それをあたしに言わなかったの」
「そうしてくれと頼まれたんだ。もし言ってしまうえば、アリスが助けに来てしまうから、と……。確かに、それでアリスが探しに行つて危険な目に合う可能性もあったんだ。だから、言えなかった……」
「ノア……。あなたそれで……」

あたしに保護されてから暫くの間、言葉を話さなかったのは、そうやっていれば見捨てられると思ったからだということか。見捨てられたくない、その隣で思いながら。

でも、どこかできっと、期待はしていたのだと思う。期待、してくれたのだと思う。

サクラの家でノアと再会した瞬間が、あたしの人生で一番尊いシーンになった。

ノアが、世界で一番尊い存在になった。

だから、できるだけ速く、ノアに着いた汚れを払ってしまいたかった。

「もう一つ聞くわ」

それこそ、お風呂に入って互いの体を洗い合っつて。目についた傷と汚れ全てに、キスをしてでもいい。あたしが今欲しいのは温もりで、それはノアの温度だ。

またいつもの夜のように、口づけをして、それから明日を待ちたい。

隣にあなたがいる喜びが、あたしは喉から手が出るほどに欲しかった。

それを手に入れようと、あたしはノアの背中に手を回して、それから小さな体を抱き寄せ言った。

「あの事件の犯人が、ノアの父親なの？」

そう言えば、あたしはその情報を知らないはずだった。

いや、もう、知っていてもいいのか。

願いはすでに、叶ったのだから。

「ああ。そうだ。間違いない」

僅かな期待はやはり儂くて、そのまま薄まって消えてしまった。

けれど、不思議と落胆はない。

メイド長が場を見守っているからか、ノアも思案の外落ち着いている。

「証拠はあるの？」

当然ながら、犯人がノアの父である証拠という意味と、もう一つ、ノアの父が本当に血の繋がった人間であるかという意味。二つの意味であたしは追及する。

少し高圧的になるあたしの口調を抑えようと、パパの言葉は俄かに凹む。

「現場にあった刃物に付着していた指紋の一致と、目撃者の情報か

ら、まず間違いはない。当人も自供している。親子かどうかは、血液検査で判明した。九十パーセントの確率で親子関係にあると言う結果から、二人が親子だとわかったんだ」

同じ家に居るわけだから、採取しようと思えばできなくはない。それが、ノアに血液検査を受けるよう促したのか、自分で申し出たか。

声をかけたにせよかけられたにせよ、ノアの勇気は確かだと思った。

手を握ってくれるのを、褒めてあげたくなる。

だけど、それはもう少し我慢しよう。

まだ、知らなければいけないことがある。

いや、決めなければいけないこと、か。

「それで、パパはノアをどうするつもり？」

あえて、強い口調で言わなかったのは、莊嚴な父を誘い起こすためだった。

策士とは本来、敵がいないとただの口下手だ。

パパはまた、終始穏やかでいたけれど、それでも、あたしはしっかりとノアの肩を抱いて、視線も雑言も、間に何も通さないよう努めた。

「ここで保護する」

パパはそう言っつて、一つも表情を変えなかった。

それは、ある責任を背負った親の顔そのものだった。

「今は、まだ連中が騒いでいる。あと数日は学校にも行けないだろう」

「連中って……黒服よね。あの集団は一体何なの？」

びくっと、ママが反応した。

ということとは、やはり、そういうことなのか。

あの黒服も、公安の人間であると。

「アリスなら察しているかもしれないが、あれは、強硬派だ」

「強硬派？」

「そうだ。公安内部で派閥ができていて、その中でも報酬と名誉に貪欲な者たちがそう呼ばれている。監査の居ない時は、犯人検挙に手段を選ばない危険な連中だ」

意図せず、あの夜街の真つ暗なビルディングの情景が想起される。欲に埋もれた世界に生きる意味を、あたしは知っていた。

欲しいのは、温もりだった。

淀むあたしに、パパは静かな解説を交えた。

「あの事件のあと、あの男は逮捕され、そのままうちの部署へ来た。動機も手段も取調室で丸一日話をさせたんだ。私が取り調べを担当したわけではないのだが、覗き窓から見た光景はよく覚えている…

…。異質だったからね……」

異質、と言われると、背中の横辺りがぞくつとそそり立つ。

ふとした瞬間に『願いの夢』の話が出たのと似た感覚だと思った。続きは、あまり聞きたく無かった。

「何を尋ねても、事件のこと以外の記憶が無くてね」

なるほどな、と思った。

「自分の名前もすら、一カ月後に漸く思い出したんだ」

そこでまた『願い』の力が、不確かさを強めた。

忘れるよう願われたのにも、関わず、その事項を思い出し得る。忘れている状態に『する』だけであって、『し続ける』ものではないと言ふことなのか。

加えて、目的が無ければ意味を為さない。

解釈によれば、『願い』のそれというものは、いかにも人間めいているではないか。

言ふなれば、『人間の作ったもの』であるとも言える。

人知を超えるには人知を知らなければならぬし、違つてはいな

いはず。現実と非現実が入り乱れるような不快感と違和感は、その無矛盾性が齎していたということになる。

この騒動が落ち着いたら、あたしは行動を起こそうと思う。

それまでは、直面した現実と向き合うのだ。

「それから暫く経つてのことだ。妻子がいるのだと言い出したのは」

「そういうことね……」

「どうということ……？」

一先ず、ノアが追われていた理由は掴めた。

あたしはパパの言葉を待たずに、ノアへと説いた。

「犯人に事件前後の記憶が無い場合、問われるのは社会性と責任能力。意識がしっかりしていようと、そのどちらも、当人のみでは証明しきれない風潮があるの。社会性も責任も似たようなもので、それらは信頼と殆ど同義のものになるから。それが無いと、償わなくちゃいけない罪の重さも計れないのよ」

「罪の、重さ……」

ノアの父は殺人をした。もう一度、人を殺める可能性は簡単には拭えない。そんな可能性がある人間を、無い人間と一緒に扱うことはできない。これで、信頼を失ったことになる。

そういう理屈だ。

まだ、続きがある。

「そういう信頼の無い人が、信頼してもらうにはどうしたらいいと思う？」

「が、がん、ばる……？」

「ええ。それも勿論大事よね。けど、それだと何百年もかかってしまっわ。……そうね。じゃあ、あたしが信頼を失くしたら、ノアはどうする？」

「ノアが、皆に、アリスを信じてって、言ってる……」

「ふふつ。ありがと。そうよ。それと同じことなの」

信頼は一でもあれば、地道に増やすことはできる。これは、ルートの母が言った、愛の理論の応用で解釈できる。つまり、それと逆

のことも言えて、信頼がゼロであれば、それはもう増えることはできないのだ。

それを元に戻すための方法は、ただ一つ。
信頼を分けてもらうことしかない。

「どれだけ希薄と言っても、身上、血縁というのは信頼に値する一つの形よ。それがあれば、少なからず量刑を課すことができるようになるわ。つまり、償えるようになるの」

矢継ぎ早に言い放ってみるものの、ノアが窮屈ではないか心配だ。あたしの胸で溺れてくれるのなら、それでいいのだけれど。

声の調子は、できるだけ暗くならないように気を付けた。

「ノアのパパは、記憶が無いと言っていた。それでは、身内が無いのと同じになってしまう。信頼が無いままってことね。そんな中で口にした『妻と子がいる』という言葉……。欲たかりの公安がすることなんて、たかが知れてるわよね」

妻子がいる、もしくはその名前を吐いたのならば、間違いなくその人物は重要な参考人となる。子であろうが妻であろうが、信頼の片鱗を持ち合わせているわけだから。

強硬派とまで言うくらいだから、自分らの良いようにデータ改竄でもしてくれるのだらう。場合によっては、判決内容もある程度操作できるかもしれない。

正当に罪を裁くよりも利益の出るやり口など、いくらでもありそうなものだ。

負い目でも感じているのか、パパはふうと息を吐いて少し目を細める。

「アリスの言う通りだ……。私も、初めに『ノア』という名前を聞いた時は驚いた。うちで働くメイドに、同じ名前の者がいたからな。同時に、まずいことになったと思った。だから、考えたさ。最善の策を」

腐っても公安の犯罪科の長だ。

自分の名誉を守らなければならないという大義名分もあるだらう。

二の次にでも、ノアのことを考えてくれたのであれば、あたしも少し見直したくはある。どうにも気は進まないけれど。

「色々な部署に根回しをして、強硬派に圧力をかけるので精一杯だったがな……。そうこうしているうちに、『出て行く』と言い出してしまったわけなのだが……」

「いいわよ。もう」

面目ない、と手で顔を覆う姿があまりに痛々しかったので、荒っぽく水を差した。

少しだけ、気恥ずかしい。

ノアを一瞥すると、泣いていなくて、心底安堵した。

「それで、これからどうするのよ」

「鎮静化を図るつもりだ」

どうやってだ、と瞳で訝った。

「それは、ノア・グリニツチ ノア君に、決めてもらいたい」

「ノ、ノアに……?」

「どうということよ」

身振り手振りを交えながら、父は諄々と説明する。

言葉に詰まる瞬間もあるからか、ぎこちなさが珍しくて印象深い。

「方法は二つある。そのどちらかを、ノア君に、選んでほしいのだ」

「二つ……?」

「ああ。まず一つ目は、定石通り重要参考人として裁判に出ること。勿論、強硬派の介入はさせない。それは私が保証しよう。ノア君は、思ったことをそのまま喋ってくればいい」

少し荷が重すぎやしないだろうか。

仮に、その一言で死刑が決まってしまったら、どうするつもりなのだろうか。

無論、支えるつもりではいるけれど、あたし一人で支え切れるものではないと思う。ノアがあたしにくつついて、一ミリも離れなくなってしまうイメージが容易に浮かんでしまう。

でも、それが信頼と等価なのかもしれない。

だとすれば、ノアがそれを欲するならば、必然だとも言えるわけか。

「もう一つは。そう。なんだ。こっちは結構、簡単なことだぞ……？」

「うふふふつ。あんなに考えて決めたのに、恥ずかしがって。らしくないんじゃない？」

父がどもって母が煽るといふ構図を幾数年ぶりに見た。

途轍もなく気味が悪かったけれど、不思議と心は和んだ気がしたけれど、あたしはその輪に混ざらないで、ノアと居た。

支離滅裂に脈絡の無い単語が飛び出して、漸く、意味のある連なりが聞こえた。

「ナイブス家の養子にならないか……？」

思わず、下あごが落下しそうになった。

犯人との縁を強制的に切ってしまうという真意を差し置いても、少しばかり急展開が過ぎた。

それはつまり、ノアがあたしの妹になるということだ。

それはつまり、ノアがあたしの家族になるということだ。

それはつまり、どうということなのか。

あたしの心には多種多様な感情が、それはもう大量に流れ込んで来て、悠長に処理している暇など無かった。だから、感覚で、あたしは「えっ」と表情を出してしまっていた。

反応は、確実にノアよりも先だった。

パパの考えは、道理が立っているように思えた。

ならばこそあたしは、嬉々としてノアを抱きしめるべきか、何故か迷った。

何か、間違っている感覚があった。

ああ。そうか。

これは、あたしの選択ではない。

ノアの、選択だ。

「……ノア？」

ノアは一つ頷いて、あたしの方を見て言った。

その言葉はきつと、あたしに向けてではない。

「裁判、出るよ……。養子は……。少し、考えさせて……。ください」

ぱつと突き放された感じがして、あたしの右手は知らぬ間にノアの衣服の裾を強く撮んでいた。あたしは、ノアが欲しくて仕方がなかったのだ。

「だ、だが、それでは、ご家族が……。それに、アリスは……」

「いいの。ノア、アリスの妹じゃ嫌だから……。ちゃんと、もっと、好きになりたい……の」

また目が合つて、顔が熱くなった。

パパの手によってあたしの中に作り上げられた氷の彫像は、もう融けてしまって何も残っていなかった。それが今度は蒸発して、白い霧となって、あたしの視界を隠す。

もう一度目が合つたら、多分、あたしはノアにキスをしてしまうだろう。

ノアも、もう、パパの言葉に表情を揺らさなかった。

なにか、王子様にハートを射止められた気分だった。

まさか、ノアにそんな気分になれるとは、エレメンタリー時代のあたしも思っまい。

もし、もっと早く気付けていたら、あたしはルートではなくノアの心を覗いていたことだろう。

でも、仮に『願いの夢』をもう一度見ることができたとして、あたしはそこで何かを願うことは無いのだろうと思う。

二人に永遠の安寧を、などというのは無粋なことだ。

願いたいというのは、決して、輝くダイヤなどではない。

汗と血と涙、それからそういう泥臭いものでできている。

あたしは生きて、そう知った。
そして、あたしは生きていたと思った。

Look for Truth (後書き)

【あとがき】

家出の終わりとは、こんなものであったりします。

さて。

なんとなんと。

ノアに養子の話が吹きかけられました。いつかは来るのではないかと思っていました。やはり両親はアリスのことは信用しているのです。二人の応援と更生を、同時にしてしまおうと言う根端です。読み返してみると、両親はノアには一切謝っていませんね。

ですが、ノアは見事に断りました。

これできっと、アリスはノアに惚れてしまうわけですね。

アリスは一体どこからどこまでが策の一部なのかということが論議されますが、そんなことはもうあり得ないと思います。そういう意味で、アリスはただの乙女になったわけです。つまりノアには、アリスを乙女に変える能力があったということ。

そう考えると、確かに『願い』の力というものは儂く思えてしまします。

儂いけれども美しい。

何か、それに似たものを知っています……。……。

F a r e w e l l a n d B e c c o m i n g (前書き)

【まえがき】

” 別れとは、出会いを成立させるただ一つの方法である。
”
意図しても意図せずとも、等しく。

アリス編、今章、まとめです。

重く冷たかった雪の名残が、まだ、少しだけ感じられそうです。

最後です、どうぞ。

F a r e w e l l a n d B e c o m i n g

「おはよう。アリス。朝だよ」

「おはよう。ノア」

ここ最近、朝、あたしの目を覚ますのは、小鳥の囀りでも陽の光でもない。

包み込むような優しい声と、決まって左手の甲へしてくれるキス。それから、何てことはない、いつも通りの時間感覚であった。

寝相が悪いと言われたことは無かったが、ノアがあたしより早く起きて布団から出てしまうので、起床時はよく布団がずれている。ノアが寝ていた方の布団をかき集めて、それを抱き枕にしていることが多かった。

そんなあたしを見て嬉しそうにキスしてくるものだから、恥ずかしくてならなかった。

早起きしよう早起きしよう意識はしているのだが、ノアに勝てたことは無い。いつも、キスで目が覚めるのだ。まるで、どこぞのお姫様みたいで、また恥ずかしい。

「アリス、いつも左側が、癖になるね」

「そうね。旋毛が左にあるからかしら。ま、ともかく、顔を洗ってくるわ」

「ノアも行く」

あたしは上半身を起こして、一つ伸びをした。

天井は白っぽく、冗談かというくらい愚直だった。

部屋のカーテンの隙間から覗く光は乾いていて鋭く、目を細めな

いと直視できなかつた。其の奥に、冬の寒気を断絶する透明な壁があつて、そこにはあたしとノアが密着している残像が浮かんでいた。特別変な顔が映ってしまわないように、あたしはそそくさと部屋を後にする。

その後を、ノアがとことことついてくる。手を繋ぎたそうにしていたけど、あたしはノアの腕をとった。

根拠は無いが、家の中の短い距離なら、手繋ぎで移動するよりも腕を組んだ方が良い気がしたのだ。ずっと狭いと思つていた二人だけの世界は、そうやって広げることができそうだったから。

洗面所へは、わずか一分ほどで到着する。

ノアも一緒について来はしたが、朝の支度などとつくに済ませているはずだろう。自然、あたしが顔を洗ったり寝癖を直したりするのを、傍で見ているだけになる。

以前も時々そんなことがあつたけれど、別段気にしたことは無かつた。

でも、今は違う。

鏡にノアが映ると、キスしたくなつた。

ノアはそれを知つて、ついてきてくれる。

だから、あたしも前を向けた。前を向かなければならなかつた。そつだ。

義務ではなくて、きつと、これは本能。

「ノア」

「うん？」

「こつちに来て。髪を結んであげる」

「うん」

隣に居てくれる安心感と隣に居なければいけない強迫観念はすべて、自分の心が作り出した不可欠な成分。独り占めにした支配欲が拍車をかけて、ノア越しに映るあたしの表情は、いつかのノアの瞳を思わせる。

恋愛の「恋」の字も知る必要が無いと思つていたから、そのあま

りの説得力の無さに、内心で自信が消失する。でも、またすぐに「愛」へと続く不思議はない。消滅することを知らないそれは、二人の間で共有されて無限に増えていく。

自分という存在が　アリス・ナイブスという存在が、希薄になつていく感覚に陥る。

では、それは一体誰のせいかな。

対称的に増加していくのは、ノア・グリニッチという存在。その中には、確かにあたしがいて、そのあたしの中にもまた、ノアがいる。

だから、お互いの願いに、方向性などありはしない。

ただ一つ、目的があるだけで。

「ノアは、髪伸ばしたりしないわよね。どうして？」

「昔、アリスに、こっちの方が良いって、言われたから……」

「それですつとショートだったのね」

確かに、昔そんなことを話した覚えがある。

目が隠れると暗い印象を受けると、アドバイスしたのだったか。あの部屋で。

潜めて恋を感じてしまうのは、多分、鏡の向こう側が別世界だからだ。

「それじゃあ、伸ばしてって言ったら伸ばしてくれる？」

「うん」

その別世界ではきつと、あの暗かった昔のノアともキスをしてしまっただろう。

そうやって一冬を乗り越えるくらいは、できるはずだ。

「ノアはどうしたい？」

「アリスのして欲しいように、したいな」

「じゃあ、そのままにしましょう。伸ばしたら可愛すぎるもの」

「うん。えっ？」

「二人で暮らすようになったら、お願いするわね」

「……ん、うんっ」

方向なんてありはしない。
目的がそこにあるだけで。

「……………」
「……………」
だとすれば、キスするしかなかった。お互いの傷を舐め合うように、優しく苦いキスを。

あたしたちの目を覚ましたのは、命の鼓動、それから愛の息吹。

「アリス……。痛く、ない……?」

「ええ。心配してくれてありがとう。でも、もう大丈夫よ」

「痕に、なっちゃったの……」

「気にしないで。こんなでも、ノアはあたしのことを愛してくれるんだもの。これ以上は望まないわ。それに、今は、かえって感謝してるの。こうやって、ノアが毎日キスしてくれるから」

「する……。するよっ。何回だつてするっ!」

黒服に突き飛ばされた時、あたしは頬骨のところを思い切りぶつけてしまったのだ。大量に出血していたが痛くは無かったので、その時はあまり頓着しなかった。

後になって、パパが呼んだ医者処置を受けたのだけど、縫合するからということ、痕になるのは確定になったのだった。パパとママは大いにショックを受けていたようだけど、あたしは特に、感嘆もしなかった。

顔に針を入れられる恐怖はあったけれど、そんなものは、ノアがいなくなってしまう恐怖とは比較にならなかったのだ。手術中も、ノアが手を握ってくれていたから、頑張れた。

天罰でも、因果でも、運命でも、名前などどうでもいい。

この傷は、あたしにとって記念品みたいなもの。

糸、だった。

x x x

二人とも同じ場所へ行くと言うのに、あたしたちはまた、行ってらっしゃいのキスをして、それから学校へと向かった。勿論、手を繋いで歩いた。

途中にあるノアの家へ寄ると、どきつとすることがあったけれど、きつとそれは、婚約者が義理の両親に顔を合わせる時のそれだ。

あれ以来、レノがノアの手紙に返事をくれるようになった。

初めに返信をくれた時の内容は、家賃だとか生活費だとかについてで、実に事務的だったけれど、回を重ねるとそれは次第に砕けていった。

字は汚いし文章は拙いしで泣けるけれど、ノアは嬉しそうに笑っていたから、あたしも嬉しくなった。あたしのことについて書かれていることがたまにあるのだけど、それは少しばかりむず痒かった。やっぱり、親なのだあたしは勝手に思った。

「そろそろ出ましようか」

「うん。そうする」

最後に、ノアとあたしの思い出の場所を軽く掃除した。

もう、布団も家具も、何も残っていない。

でも、ノアとの思い出はあたしの胸の中にちゃんとある。

この場所がまた、誰かの思い出を作ってくれることを切に願って、あたしたちは部屋を後にした。

レノの事情でこの部屋の賃貸契約は終了となるけれど、無くなるわけではない。無くなるわけではないけれど、ここへ来ることがなくなると思うと寂しくはあった。

しかし、これでノアの住所は、住み込みメイドとして正式にナイブス家となったのだ。

今はそれを喜ぼう。

「ねえノア？」

「なに？」

「今、幸せ？」

金属製の階段を下りながら、あたしはノアに問う。
ぎしぎしと家全体が軋む耳障りな音の合間に、ノアの声が涼風の
ように鳴った。

「うん。幸せ」

「そう。良かったわ。それならあたしも幸せだわ」

少なくとも、現世が平和であるとあたしは確認したかっただけだ
った。

びゅうつと風が強く吹くタイミングがあった。

あたしはその中に、また、戦火の声を聞いた。

尊さと愛おしさの隣にある狂気もまた、人間の本能の一部であっ
た。

ノアの家族を巡る今回の騒動で、あたしは新しい視点を得たのだ
と思う。

ノアの父は、ノアの素直な証言もあって、無期懲役に刑を留める
こととなった。ノアはあたしの思っていたより事情を知っていな
かったけれど、もっと別に、たくさんを知っていた。

ノアの父は、ノアに会いたいと言っていたけれど、後でノアは会
わないと言った。

瞳を染めたのは怒りでも恐れでもなくて、愛なのだわかった。
今は、それだけで十分だったのだけだ。

「あ。アリスたち来た」

「おっそーい。中で絶対キスしてたでしょー」

「いや、もっとすごいことしてるかもしれないぞ？」

意地悪だった神様が詫びているかのように、こんな贅沢も許され
た。

いや、さすがにそれは、神様の責務が大きすぎるか。

ただ、目的地の近い人間同士が集まって手を取り合う、それだけ

のことなのだから。

「待たせたわね」

「あれ？　なんで、サクラ、いるの？」

「昨日、るーとの家に泊まりに行ったんじゃ」

そうやって誰かと繋がりを持つことが、つまり、世界を共有することになる。一人一人の願いの目的が作り上げた世界を、見たり聞いたり、知ったりできるようになる。そうやって、友達になる。恋人になる。

それは決して目的の先にあるものではなく、共有した世界を広げていって辿り着き、含むもの。義務などではなくて、ごくごく自然な行為と厚意。

誇るなら、あたしのそれは好意であつたということ。

「アリスお姉ちゃん、体の調子は大丈夫？」

学校へ赴く足でリズが聞いてくる。

歩幅はそれほど広くない。

「別に、大丈夫よ。あなたにも迷惑をかけたわね。ごめ」

「あつ、謝らないでっ」

「……………」

そうか。

世界を共有する時間が長くて思慮しなかつたけれど、リズはまだミドルの生徒なのだ。

あたしたちとはそろそろ分岐路だった。

でも、それは帰りにはまた繋がる道だ。大きな視野をもってみれば、それもまた前へと進む一直線の道ではないか。急ぐことは無い。

「その代わり、今度、私とデートして欲しいな」

「はいはい。いいわよ」

それじゃあねと丁字路を曲がって、リズはリズの道を歩いていった。

彼女が離れてゆくことに、世界を繋ぐ糸のようなものが色濃く見えた気がした。

とても、素敵なお事だ。

目的地の近い人と、こうやって歩くと、あたしたちの周りに薄いベールができていく感じがする。その中はとても温かくて、雪も冷たくない。心が寒くなる夜も、全員で乗り越えられそうな、そんな感じが。

「ルート」

「ん、なに？」

「はい、これ。昨日借りたノート返すわ」

鞆からルートのノートを取り出して渡すと、あたしの横からノアが言い添えた。

「ルート、ありがと……」

「あ、うん。どういたしまして。学年末だから結構な量あったと思うんだけど、さすが早いね。テストの方も大丈夫そう？」

「ええ。問題ないわ。学年末テストって、今までの総集編みたいな問題がでるらしいから、逆に楽だわ。休んでいてできなかったところは、今、ノアに教えている段階だけど、テストまでには何とかなると思う」

「アリス、教えるの上手、だから……」

基礎が不安定なノアにものを教えるのは簡単なことではないのだけれど、それはそれで楽しかった。ノアの奇才的発想を、いかに噛み砕いて公式に落とし込めるかが、一つのポイントだったりして、そこからあたしが学ぶことは少なくない。

他の人には感じられないであろう、あたしだけの世界だった。

「ほおあああ。ようやるのう。すっかり、毎日毎日ちゅっちゅべたべたしまくって、頭ぼかばか白紙状態かと期待したのに。全くつまらん女じゃ」

「悪かったわね。あなたと違って出来が良くて」

「な、なんじゃと、このお！ 舐め回すぞー！」

「そ、それはっ、ノアがやる……のっ」

「そんなことさせんのだじゃ！ のう？ ーと」

「ぼ、僕っ！？ む、無理だよ。いや、無理って、汚いとかってことじゃないよっ？ そうじゃないけど……ダ、ダメダメっ。ダメだよっ！ アリスのことを、そんな……っ」

「変態なのかしら。この人たち」

三人に全身をくまなく舐め回されるなど、考えただけでも鳥肌が立つ。

こんな朝方から本当にやめて欲しい。

「相変わらず毒舌じゃのう」

「誰のせいよ」

でも、サクラにも思うところがあるらしかった。

それもそのはず、長期欠席していたクラスメイトが帰って来たと思っただけ顔に傷があったなんて、動揺ものにも程がある。しかも、サクラに関しては「顔に傷が出来たら責任をとる」とまで言っていた相手だった。実際、そのサクラの顔に傷は無いけれど、あの平手の因果応報なのだどと気負ったりしなないとに限らない。

そういうところで情が深い子だから、最近、あまり怒らないように努めていた。その成果もあって、サクラの方も、あたしに執拗に迫ってくることはかなり少なくなった。

だからだろうか。

この頃、何となく、サクラの影が薄い。

良い相手を探してあげようかと思ったりは、しなくもない。

「外、寒いわ。さっさと学校に行きましょう」

「うん。行く！」

「くう……っ。堂々と手なんか繋ぎおって。ずるいのう。わしもしたいのう……」

「あはは……。そんなに僕のこと睨まなくても。サクラって、時々奥ゆかしいよね。はい、どうぞ。僕で良かったら。学校着くまでね」

こうして出来上がった珍妙な行列は、同じところへ向かって小さな世界を広げてゆく。

ルートはくしゃくしゃに丸めた新聞紙を広げるように。サクラは

雪道を縦横無尽に走って掻き分けるように。ノアはお湯を沸かす方法を考えるように。あたしはその誰かの気持ちを共有するように。

目的があつて、手段があつて。その先には願いがあつて。

そして、『願い』は手段であつて目的ではない。ならば、逆もまた然り。

願いがあつて、手段があつて、その先には目的があつて。

目的のあるものは、願いをもつてして生まれたのだと言っても過言ではないのだ。あるいは『願い』をか。

例えば、学校もそう。

カシミールヤ校が学び舎として欲されるのなら、誰かが学び舎を欲したがために、カシミールヤ校はそこにあるのかもしれないということ。手段としての『願い』に応じて、その目的は達成されるに至ったのかもしれないということ。

演繹すれば、国だつてそう。世界だつてそう。あたしたちだつてそう。

あたしの頬にできた傷のように、大地もまた、大地が大地として欲される時にできた『願い』の証なのかもしれない。誰かが、そうあるように願ったから、大地もまた大地なのだ。

振り返れば、この物語には幾つかのルールがあつた。

『願い』はただ一つ、それがすべてで、決して無視されず、思った本人にしかわからない。作り上げられた世界を共有できても、作り上げられた手段を共有することなど出来はしない。

すべてが、それを如実に謳っているではないか。

だからきつと、『願いの呪い』なのだろう。

だとするならば、収束していないサクラやルートの『願い』をどう見守っていくかは、とても重要なことになる。友達としても、人としても、勿論、『願いの呪い』を終わらせた者の一人としても。

サクラの『願い』の先にある目的はなんであるのか。

ルートの『願い』の先にある目的は、あたしたちのそれと近いものなのか。

少なくとも、誰かの目的が手段を生むならば、『願い』が世界から無くなることはない。

でも、それでいい。

そうして世界にはきつと、何も残らない。

あの花畑を舞う紋白蝶の夢がまた、世界を作ってくれるのだから。

Farewell and Becoming (後書き)

【あとがき】

お疲れさまでした。今章終了です。

今までとは少し違った視点のルーマス、どうでしたでしょうか。何かが悪い何かが良いと言うことだけでは語り尽くせない世界、正解の無い世界。裏を返せば、人が悩む為にこそ世界は存在して、苦悩を望む何かがある……。得体の知れない空気は、いつだって確率的に存在しているのです。

じゃあ、それは一体何なのか。

それを解くことができるのは、何かに苦悩する人間だけ。

面白い世界だと、私は首を傾げながら笑うものです。

さて、気付けば三年間も続いてきたルートモストマック。

略してルーマス（流行らない）。

次回、次回、と一人で盛り上がっていた物語でしたが……。

次章、最終章！

です。

ついに、ここまで来てしまったのだなど、少し寂しくはあります。しかし、始まってしまったのですから、終わりだってあるのです。この、【あとがき】をどう深読みするか。

ここまで読んでくださった方であれば、にやりと来るものがあるのではないのでしょうか。

そうです。

私にもやりとしております。

それでは。

私もそろそろ眠くなってきたので、寝ます。
今、大体三時ごろ。

次回、お楽しみに……!!

『Linnoah』よかった。ありがとう。(前書き)

【まえがき】

おまけです。

温かい温かい温かい。

世界一温かい、冬のお話。

『notice』と『Lennoah』も読んでみると、尚ほかほか。

と。

『Linoah』よかった。ありがとう。

妹と彼が不倫している現場を目撃してからも、私は彼と付き合い続けた。

許すも何も、過ちを犯すことは誰にでもあると思っていたからだ。それに、昔からレノと私は見間違いをされることが多々あった。その時は、その延長だろうと短絡視していた覚えもある。

彼はものすごく真面目な人で、二度としないと誓ってくれたから、私はすごく嬉しかった。

それがかえって仇になった。

私ではなくて彼の方が、不倫に後ろめたさを感じてしまったのだ。謝罪しているのだから大丈夫だと私が言つと、彼は私に不信感を抱き始めた。でも、どうしてそういう思考に至るのか全く理解できなかった私は、黙っているしかなかった。理解できないのなら、理解しようとするしかないし、何よりも彼のことを愛してしまっていたから。

私は、間違いの少ない道を通り過ぎて、過ちに関しての感度が皆無に等しかったのだ。

夜、彼がベッドで私に暴力を振るうようになった。

初めは、男性はそういうものであると受け入れたが、それから回数が増えていって、徐々に凌辱的な内容も多く、色濃くなっていた。

暫くの間は行為の延長だと信じていた私も、日常生活で同じことを強要されるようになってからは、耐え忍ぶ日々だった。痛みを愛に変換するのも、限界があった。でも、必要なことだと思った。

そんなある日の事。

私は子供を身籠った。
嬉しくて、人生で初めて声を上げて泣いた。
でも、この時に気付くべきだったのだ。
彼と私との温度差に。

そして、冬。

二月十四日に、ノアが誕生した。
姓を決めていなかった私は、この時に、彼との結婚を決めた。
子供が生まれればあの頃の彼に戻ってくれる。結婚して家族になれば、また幸せな日々がやってくる。レノに自慢だつてできる。

そう期待して、私は職とリンドバーグの姓を捨てた。
私の考えは、甘かった。

結婚して三人で同じ姓を名乗れるようになって、暫く経って。
彼はノアの成長を喜ぶどころか、ノアに暴力を振るうようになった。それを庇う私も、酷く痛めつけられた。つまり、失敗だったのだ。

でも、守るしかなかった。

選択肢を削ったのは、他でもない。私自身の無策の期待であったのだから。

それからすぐ、彼は酒乱になった。
私たちには家賃分を渡すだけで、後はすべて酒に充ててしまった。
私のインターン時代の給料にも手を出され、当然ながらそれは底をついた。

負の連鎖は続くのだと、この時に思い知らされた。
外科医となった彼が、術中に医療ミスを犯してしまったのだ。
それには私もとうとう堪忍袋の緒が切れて、彼を怒鳴りつけてし

まった。

過ちの大きさも形も知らない私が、そんなことをするべきではなかったのに。

私は彼に暴力を振るわれて、片目を失明した。

そうして私は、光を失った。

それから間もなくの事。

彼がああ醜い事件を起こしてしまった。

その時すでに同居していなかったのが、不幸中の幸いだったと思っただ。自然、ノアは不審がることも無かった。

当然のことながら、刑事事件だとしてうちにも捜査が入ったが、文字通り得られるものなど何もなく、それは通り過ぎた。逆に、失うものばかりだったと思う。

事件のおかげで、私は家族とも疎遠になった。

そうして私の元に残されたのは、彼の作った多額の借金と、ノアだけだった。

生命ノアに比べれば、借金など背負うに値しない軽いものだ。

でも、ノアノアの存在は途轍もなく重かった。

子供の育て方など、教科書に載っているはずもないし、ケーススタディをしてもすぐに例外が生まれて対応できなかった。母乳を絞る体力よりも先に、振り回された精神が音を上げてしまった。

ノアは言葉を発するのも、はいはいを始めるのも遅かった。

誰かと比べるということはないけれど、私はその事実ノアに、信じられないほどのストレスを感じた。

ノアが笑ってくれるとすべて吹き飛ばけれど、そのストレスの元凶はノアだった。幸せが不幸せを作るという矛盾したサイクルに、

私の頭はパンクした。

けれど、酒や薬物に逃げると言う選択肢は私には無かった。精神的にも、無論、金銭的にも。

彼と住んでいた部屋を売って、家賃の安いマンションに移住した。また伸びるだろうと、長かった髪もほとんど売った。もう諦めようと、インターン時代に使っていた手術道具も売った。魂だって、売れるものなら売ってしまいたかった。

もう、限界だった。

だから、助けを求めるしかなかった。

救いを願うしかなかったのだ。

レノはショッピングモール奥にある夜営の宿泊施設通りで、流れの娼婦をしていた。

双子というのやはり運命なのか、情報を探す前に街で偶然にも出会うことができた。

レノは疲れていたけれど、私はどうだっただろうか。

再会を果たした時の、お互いの表情なんて、もう思い出せない。

レノが私のことを嫌っていると知っていたけれど、私はレノのことが大好きだった。明るくて前向きで、素直で、真似したがりで、とても可愛かった。そして、何よりも、人との関わり方を知っていた。

それから、レノと会う回数が増えた。打ち解けるのなんて、一瞬のことだった。

レノは全く変わっていないかった。変わっていないねと、私も言われた。

私は小さく笑って、その時、心を決めた。

レノになら、ノアを任せられる。

私は、私の持っていた財産すべてをレノに渡すことに決めた。ノアと住んだあの一室も、彼から貰ったこの姓も、三人で生きていた記憶も全部だ。

レノは別にいいよと言ってくれた。

その時にレノがどう思っていたかは、正直わからない。そんなことは無いだろうけど、家が手に入るからという理由だったのかもしれない。

でも、それでも、構わない。

それはすべてノアの為なのだから。

せめて、ノアにだけは、こんな思いをして欲しくなかったから。

そうして、ノアは私と彼のことを忘れた。

居場所も職も失って、どれくらいが経っただろう。

私は空っぽになった。

鏡を見ることも水面に姿を映すこともなかったから、未だに知らないけれど、きっと、相当にやつれていたことだろう。お腹が減ることは無かったけれど、嘔吐することはあつたし、指も見るからに細っていたから。

そのまま竹藪で死んで養分になっても良かったのだけど、神様とは慈悲深いもので。

私は通りすがりの農夫に命を救われることとなる。

いや、命を救うことになる、か。

その場で、コメを握って三角にしたものと、水筒の水、それから山菜を分けてくれた農夫が食べていたキノコがたまたま猛毒だったのだ。意識混濁に陥った人を見て、私の体は、条件反射で動いていた。

気道を確保して人工呼吸、それから心臓マッサージ。延命出来得る限界まで、続けた。得体の知れない成分を服毒したのだ、丸腰で治療できるはずがないと知っていた。

あり得ないことも連鎖するのだと、その時に思い知らされた。

たまたま竹藪を通った人が公安の人で、これまた偶然にも、馬車を引き連れていたのだ。気付いたのも、向こうからだった。

農夫の男性は馬車で運ばれ、そのまま病院へと直行した。私は医師に交代するまで延命を続け、それが結果として、男性の命を救うことに繋がったらしかった。

こんな細い指でも救える命があるのかと感心してしまった。

その後で皆から拍手されて、なんだか幼い時代に戻ったような感覚になった。

だから、あれは子供心だったのだと思う。

その人の提案を承諾したのは。

「うちで、働いてみないか？」

農夫を馬車に乗せてくれた公安の人こそ、今のご主人様、アバン・ナイブス様だった。

詳しい採用理由などは知らないが、今思えば、私の天職なのかもしれない。かつて目指していた医師というのも、誰かに進められて作り上げられた目標だった気がする。

資格マニアだった私は、アカデミー卒業までには百を超える資格を取得していた。

掃除検定、庭師検定、監査検定、事務検定、エトセトラ。二十を過ぎたあたりから、記憶するのは諦めたけれど、認定書の山を見るとそれだけで和んだ。

そんなどうでもいい資格の数々が、こんな形で役に立つとは夢にも思わない。

いや、きつと、これは夢なのだ。夢の続きに違い無い。

そんなことを考えながら、住み込みメイドとして忙しい日々を送るのだった。

ある日を境に、夢は夢ではなくなった。

いや、ある意味では、夢のまた夢かもしれない。

「は、はじつ、初め、まして……。ノア、です……。ノア・グリニッチです……っ」

どういうわけか、ノアがナイブス家にやって来て、しかも同じ場所でもメイドをやると言い出すのだ。もう、天と地が逆になるのではないかと思った。全身を巡る血が沸騰するのではないかと思った。信じられなかった。

私の手元を去ったノアが、大きくなった姿で目の前にいるのだ。手が震えた。

我が子を今一度抱きたくて、仕方がなかった。

「大きくなったね」と、「ごめんね」と、声をかけてあげたくて、

気が狂いそうだった。

でも、そんなことはしてはいけない。

我が子を愛することから逃げた私に、そんな資格などありはしないのだから。

こんな時ばかりは、光を失った瞳を褒めてあげたくなる。

涙なんて、我慢できるはずもなかった。

ノアがナイブス家に定着して、仕事ぶりにも落ち着きが見えてくる頃。

ノア側の事情も、少しずつわかってきた。

ノアに好きな人ができたということ、その人というのがナイブス家のお嬢様であるアリスという女の子であるということ、そのためにここへ来たのだということ。

一瞬、立ち眩んだけれど、私の立場は決して揺らがなかった。

親が応援しなくて、一体誰が応援するだろうか。

それから私は、二人の恋路を陰ながら手助けすることにした。

ノアがこっそりお弁当を作っているのを見つけて、次の日にさりげなくアドバイスをしてみたり。メイド勉強会と称して、お嬢様の好きそうなセーターを編む方法を教えたり。二人が同じ部屋で眠れるように旦那様をお願いしたのは、他でもない私だったり。

そうやって二人の距離が縮まることに、ノアが笑顔になるのも増えた。

嬉しくて嬉しくて仕方がなくて、私は部屋で一人泣いた。

この気持ちをレノにも知って欲しくなった。

私がレノを想起するのは、至極自然な事であった。

今、どこに居るの？

お母さんへ

こんにちは。

あ。この手紙を読んでもう時は、きっと夜だから、「こんばんは」かな。

気を取り直して……。

お元気ですか？ ノアのお弁当だけじゃなくて、ちゃんとご飯も食べてますか？ しっかり眠れていますか？

質問ばかりしてごめんなさい！

でも、心配なの……。

もちろん、お仕事忙しいのは、ずっと昔から知ってる。

だから、お母さんがお休みの時でいいんだ。

たまにでいいから、一緒にどこかに行こうね！

そうだ！

ノアね。なんと、アリスの家でメイドをすることになったんだよ！

ノアもお仕事だよ！

毎日すごく大変だけど、みんな優しくしてくれるの！ だから、

全然大丈夫！

それにね。毎日、アリスの部屋でお泊りできるの！ お風呂も一緒に入ってるの！

アリスって、すごくいい匂いなんだよ！ 寝顔もすごくかわいいし！ 寝てる時、髪の毛が少しチクチクするけどねっ。アリス、髪長いから。

そうそう、それでね！ アリスって、寝てる時、すごく抱きついてくるんだよ！

アリスは覚えてないっていうんだけど、ノアは全然眠れないから、覚えてるんだよ。すごく、柔らかいの！

あ！ ずっと眠れないわけじゃなくて、いつの間にか寝ちゃうの！ だから、ちゃんと眠れてるからね！

アリスって、いつもクールなんだけど、本当はもっと……なんだろ。もっと、温かい？ もっと、優しい？

と、とにかくね！ アリスって、すごく素敵なんだ！

……………

書こうかどうか少し迷ったけど、お母さんだから、やっぱり書くね。

ノアね。

アリスのことが、好きなの。

それでこの前、好きって言っちゃったの。

でも、それで良かったと思うんだ。だって、好きなんだもん。ずっと、好きだったんだもん。

結婚は無理でも、一緒にいたいって思えるの。結ばれなくたって、繋がっていられるならって、そう思うの。

今度、おうちに連れてくるね。

お母さん、多分、反対するだろうけど、ノア、諦めないと思う。そのくらい好きだし、ノアだって十五歳だし、大人だもん。

うん。諦めないもん。

だからね。これは、秘密なんだからっ。

あとね。

ノア、友達ができたんだ！

ルートっていうんだけど、すごく優しいんだ。

ちょっと変わってて、それがまた面白いの。でも、すごく頭良いし、運動もできちゃうんだよ！

アリスもそうだけど、ノアの周りって、すごい人ばかり……。

二人とは、クラス別々になっちゃったんだけど、また、友達ができそうなんだ！

サクラっていう、すごく可愛い子！ おばあちゃんみたいなしやべり方なんだよ！ また変だよ！ でも、すごく面白いんだよ！

ふう……。

ノアも、みんなみたいに頑張らないと、だね。

そろそろ学校へ行かなくちゃ！

それじゃ。また、手紙書くね。

お弁当、食べてくれて嬉しいです。体に気を付けてください。今度一緒に、どこか行きたいです。何か食べたい物あれば、言ってね。最後、かなり詰め込んだね。

でも、これでもまだ伝えきれないくらいなんだ。

だから、お母さんとお話したいな……なんて。

忙しくなくなったらでいいんだ。

お母さんのこと、ずっと待ってるから。

それじゃ、体に気を付けてね。

ノアも、気を付けるね。

ノアより

ありがとう。
大好きです。

ノアへ

いつもお手紙ありがとう。なかなか会ってあげられなくてごめんなさい。

お母さんは元気です。もう少しお仕事が落ち着いて来たら、どこ

かへ遊びに行こうね。

海が良いかな？ 山が良いかな？

どこでも好きなところに連れて行くから、考えておいてね！

あ。でも。

もしかしたら、お母さんよりもアリスさんと行きたいんじゃない？
凶星でしょ！

そしたら、お母さんはお邪魔かなー？

冗談だよ。

でも、たまにはお母さんにも甘えてね。
家族なんだから。

勉強、頑張ってますか？

難しいことがあったら、すぐに先生に聞くんだよ。わからないまま放つてくと、どんどん置いていかれちゃうからね。あとで頑張ろうとすると大変だよ。

お友達、たくさんできたみたいでお母さんは安心してます。

ノアなら大丈夫だと思うけど、お友達には優しくね。そうすると、ノアも優しくしてもらえるから。勉強も、みんなでやると楽しいものだったりするよ。

あ。あと、運動もしなくちゃダメだよ。

筋トレとか無理なことはしなくていいから、毎日柔軟体操くらいはしなさいね。そうすれば怪我も減るし、いざって言う時に体が動かないなんて困っちゃわよ？

でも、本当によかったです。

ああ。文字を大きく書きすぎちゃったみたい。

書いてる途中にお茶を零しちゃって、ちょっと滲んでるけど気にしないで。

お手紙ありがとう。嬉しいです。

それじゃあ、また返信するね。

お母さんより。

お母さんも、ノアのこと大好きよ。
生まれてきてくれて、ありがとう。

【meet you】登場人物紹介（前書き）

【まえがき】

最終章へ行く前におまけです。

作者の確認用として、時折更新されます。

ネタバレはほぼありません。

【meet you】登場人物紹介

【ルート Looote=Queen】

現十六歳。八月三十日生まれ。おとめ座。本作の主人公。

勉強はかなりできる方、運動もかなりできる方、料理もすごく上手。特技は、フットサル。趣味は登山。好きな物は和食で、特に蕎麦は語るほど好き。その他に、天体観測も好き。本人が気にしているあまり口にしないため誰も触れないが、オッドアイ（青と緑）である。視力は悪くない。

性格はかなり温厚でお人好し。自分のことよりまず他人で、しばしば気を遣っては自分のことが疎かになる。一つのこと集中すると周りが見えなくなるのはご愛敬。その優しさから、味方をするものは多く、友人に助けられることも少なくない。

【リス Rize=Queen】

現十四歳。十二月十二日生まれ。いて座。本作のヒロイン。

勉強はやらなくてもできるタイプ、運動はセンスで何とかなるタイプ、料理はそこそこ。特技は、編み物（自称）とたくさん食べること。好きな物はイカ墨で、特にルートが作るイカ墨パスタを好む。他に、温泉も好き。

【アリス Arrys Naibs】

現十六歳。四月九日生まれ。牡羊座。ルートとは旧知の仲。

勉強はトップクラスにできる人、運動も万能、料理はレシピを完

全再現することができる（レシピが無いと他の料理になる）。特技は、ピアノ。好きな物はハラスと、ノアが時々作ってくれる謎のボードゲーム。

【ノア Noah Greenwitch】

現十五歳。二月十四日生まれ（本人は二月十六日だと思って育ったけど、実は違った）。みずがめ座。アリスとはルートよりも旧知の仲。

勉強はものすごく頑張っている、運動は基本的に苦手、料理は食材選びから味付け、盛り付けまで料亭のプロ並みに仕上がっている。特技は図画工作。好きな食べ物はしじみ。誰かに頭を撫でてもらうのも好き。

【サクラ Sakura Misaki】

現十六歳。カシミア校にやって来た謎の転校生。

勉強は百点宣言の成功率は百パーセントという胡散臭さ、運動は基本しないが本気でやればそこそこ、料理は一つもできない（野草は食べられる）。特技はバストサイズを当てること。好きな物は和食と天体観測で、ルートと気が合う。美人系よりは可愛い系の女の子が好き。

【ルリ Ruri Lilium】

現十七歳。カシミア校の生徒会長。

勉強はかなりできる方、運動は普通だが水泳は得意、料理は味付けが微妙。特技は、水泳とDIY。好きな物は二日目のカレー。イケメンは誰でも好きか。

【アレン Alien あれん White ほわいと】

現十四歳。リズのクラスメイト。

勉強はかなりできる方、運動もかなりできる方、料理は上手いが盛り付けが男っぽく荒い。特技はチェスとガーデニング。好きな物は光り輝く物。宝石でも人でも。

【レーア れーあ Lair ほわいと White】

?歳。アレンの姉。

勉強は普通にできる、運動は努力でセンスを打ち破るタイプ、料理は普通。特技は、サッカー。

【レイル れいる Lair えいわす Eiwth】

?歳。カシミーヤ校と親交のあるアカデミーの生徒会役員。

勉強はできそうだが普通、運動は大人しめのならやる、料理は普通だが盛り付けがお洒落。特技は、人の顔を忘れない事。

【ルート母 るてつた Lozette きゅー Ueer】

?歳。先祖代々続くコーヒー園を営むルートの母。

勉強は昔よくできた、運動は今でも割とできる方、料理は喫茶店を構える程上手い。特技は、編み物と恋愛相談。ミドルネームのQは、喫茶店の名前「Q」から。

【ルート父 らふち Rants きゅー Q=Ueer】

現三十九歳。雑誌の編集者でルートの父。

勉強は頗るできる方、運動は頗るできない方、料理は研究熱心で

味にはうるさいが作れはしない。特技は、論文を書くこと。

【アリス母 えりーせ Elise ないぶす Naibs】

現四十四歳。公安で働く役員兼秘書でありアリスの母。

勉強は努力して何とかした、運動は努力してついていった、料理はこっそり教室に通っている。特技は、睨みつけること。

【アリス父 あぼん Avant ないぶす Naibs】

現四十三歳。公安の事件対策本部の統括でアリスの父。

勉強は努力して何とかした、運動は剣道・逮捕術含めてそれなり、料理はガッツだが味付けはとても上手。特技は、推理小説で犯人を当てること。

【レノ れの Lenoah ぐりーんわいち Greenwitch】

現三十五歳。なかなか家に帰らないノアの母。

勉強は今もできない、運動は微妙、料理はそこそこになった。特技は、人とすぐに親しくなれること。今作中、最もキスの上手い人物。

【リノ のり Linoah リンダーグ Lindberg】

現三十五歳。アリスの家に仕えるメイドリーダー。

勉強は言語検定一級をとるほど、運動はテニスのインストラクターの資格を取るほど、料理は洋食検定一級をとるほど上手い。特技はたくさんある。趣味は、資格取得。

【カーリング部顧問の先生 みしえる Michelle るいず Louise】

現二十九歳。カシミール校の教員で保健体育の先生でもある。

勉強はそこそこ、運動は割と得意な部類、料理はそれなりの腕前だが披露する相手はいない。特技は、アイスホッケー。

【meet you】登場人物紹介（後書き）

【あとがき】

あまり登場しない人たちにも、一応名前を考えておいたのでした。名前の由来は、同性愛者の理解運動をしている人たちだったり、そういう人達のデモがあった場所だったり、結構そういうところから来てたり来てなかったりします。

アレンとかロゼッタとかグリニッチとか、変な綴りなのは、そのせいです。

絵も、そのうち描こう。

わたしは将来、絶対に漫画家になるんだ。

そのつもりでいる。

『account』眺めて。(前書き)

【まえがき】

ルーマス最終章、始まります。
悲しくもなく嬉しくもなく、複雑な気持ちです。

それではどうぞ。

【account】眺めて。

ある時、私は夢を見た。

私は、夢の中で、花園を舞う一匹の紋白蝶だった。

目を覚ますと、そこには研究者たちが犇いていて、私は水槽で延命される脳だった。

目は覚めたのだが、実は、私に目などなかった。

では、私が見ていた蝶の夢は、一体何だったのか。いや、それ以前に、蝶の夢を見る前の 人間だった頃の記憶は何だったのか。

記憶が事実を証明しうるなら、海馬に接続されたケーブルに流れる電氣的神経興奮こそが、その正体だろう。見た、聞いた、話した、すべてが電氣的神経興奮の疑似体験。

疑似、ではないかもしれない。

私は私であると言えるし、やはり私は私であって私ではない。

私は考えた。

しかし、それを知ってどうするのだ。

何にもならないではないか。

ああ。そうか。

私は、私たり得る私を、何にもならないものに変えたかった。

+++

ある時、私は考えた。

私が見えていない部分とは、もしかすれば、存在し得ないのでは

ないかと。

私が見ていないのだから、電子的興奮の疑似体験もシミュレートされる必要が無い。想像することはできても、創造には至らない。そして、私とその空間を認識した瞬間、その空間は創造されるということ。アルゴリズム的に言えば、“Down-loading”されるということ。

振り返らなければ、背後には世界が作られていない。私の瞳に映らない建物の影や、マンホールの奥、林道の幹の裏、他人の心の中、その他。

考えると、外を歩くのが怖くなった。

誰に聞いても、私を納得させるような解答は得られなかった。

だから、私はまた、考えるしかなかった。

世界について。

私について。

+++

世界は三分十二秒前に誕生した。

私が今こうして私なのも、地球が地球なのも、息ができるように空気の要素が固定されるのも、すべて。森羅万象と言つべきか。

そう言ったものすべては、三分十二秒前に生まれた。

三分十二秒前には昼食を食べていたから、世界は創造されていない？

そのあなたも、その三分十二秒分前に生まれたのだ。

予定調和。

あなたが三分十二秒後に昼食を食べるように、三分十二秒前に世界が誕生した。

三分十二秒という数字は、世界が“Insta11”される時間。

電気信号を脳に適合するように“Convert”して、それから人間の瞳に最適化するための、初動時間。夢から覚めるのに必要な簡単な経験と浅い記憶。

そして、それは”私”の最初の実測値。

+++

ある時、私は夢を見た。

私は、夢の中で、花園を舞う一匹の紋白蝶だった。

目を覚ますと、そこには研究者たちが轟いていて、私は水槽で延命される脳だった。

目は覚めたのだが、実は、私に目などなかった。

では、私が見ていた蝶の夢は、一体何だったのか。いや、それ以前に、蝶の夢を見る前の人間だった頃の記憶は何だったのか。

記憶が事実を証明しうるなら、海馬に接続されたケーブルに流れる電気的神経興奮こそが、その正体だろう。見た、聞いた、話した、すべてが電気的神経興奮の疑似体験。

疑似、ではないかもしれない。

私は私であると言えるし、やはり私は私であって私ではない。

私は考えた。

しかし、それを知ってどうするのだ。

何にもならないではないか。

ああ。そうか。

私は、私たり得る私を、何にもならないものに変えたかった。

+++

ある時、私は考えた。

思考の中で、私は私たり得た。私たり得ない所まで、私は考えようとした。

思考は電氣的神経興奮の逆流だった。

過去に戻ることもできるし、未来を覗くこともできる。叶わない願いは存在しないし、摂理も概念も必要としない。そういうものにするのができた。

では、何にもならないものとは何だろう。

私が存在し得ない世界。

三分十二秒前、三分十二秒後に私が存在しなくなることが決定される世界。

三分十二秒を無限に辿って、行き着いた先こそ、何にもならないものだ。

だから、私はまた、考える。

世界について。

私について。

あなたについて。

「ねえ。わたし」

【account】眺めて。（後書き）

【あとがき】

サブエピソードも残すところ数回になりました。
思えば、この場所こそ持論を演繹する場でした。
少しばかり物悲しいです。
でも、始まったものは、いつか必ず終わります。
人はそれを、物語と呼ぶのです。

次回は、いよいよ本編。

終わらなくて、桜月。（前書き）

【まえがき】

最終章は、読み手によって時間の経過するスピードが大きく異なります。

だから、ルーモスのあらすじには「ゆっくり」と書いていたのです。

ここから読んでも、分かる人には話のすべてが理解できるかもしれません。

それだけ大事です。最後というのは。

では、本編をどうぞ。

終わらなくて、桜月。

三年生のいなくなった学校は、確かに寂しくもあり空しくもある。しかし、卒業が身近に無い僕たちにとってみれば、それはほんの些細な事柄の一つに数えてもいいかもしれない。

「僕たち」という括りは、何も真新しいものではなく、言ってしまうえば、すでに古された関係であって相違ない。そこへ抱く関心は、恒常的な安堵と、それこそ些細な事柄の連続。誰かがいなくなる、忘れないよう努める、そういうことは望まない。

普通の一年生なら、こんなことを悩むことも無いだろうと、僕は思う。

僕が生徒会副会長だから、だろうか。

いや違う。

僕が来月から二年生だから、だろうか。

いや違う。

僕が『願い』の力を持っているから、だろうか。

いや違う。

僕がルート＝Ｑ＝ウェールだから、だろう。

見回りで誰もいない空き教室に入ると、空虚な時間と空間がすぐそこにある感覚を思い出してしまいそうになる。確か、その場所の色は白だった。所在は一切把握できず、方角すらも認識下に無い。それでいて記憶にあるようなないような絶妙な疎外感で肌に触れ、僕は心内戸惑うことがある。

俯く僕の背中を、矢鱈と強めに叩いてくれる人がいた。

美しい茶金の髪を靡かせた、心優しい親友だった。

息苦しさ悶える僕を、励ましてくれる人がいた。

華奢な体躯に大きな心を宿した、勇気ある親友だった。

諦観の念に駆られる僕を、救ってくれる人がいた。

一番近い所で、ただ一緒に居るだけで、それだけで僕は満たされた。

勿論、それらだけではない。

クラスメイトも、先生たちも、変わらなかった。

だからこそ、僕はまた、歩き出そうと思えた。

初めの一步は小さくてもいい。その瞬間、世界は輝いているから。

そう教えてくれたのは、一体誰だったろうか。

僕は初めの一步を踏み出す勇気を、腹のうちに蓄えて一人で謎めいていた。

「あら？ ルートくん今日は早いね」

「放課後の掃除が早く終わったので。会長は珍しく遅いですね」

生徒会室の扉をノック無しに開けられる人物こそ、カシミヤ校の現生徒会長であるルリ唯一人。実は、生徒会室前の階段を上がってくる時によく鼻歌を歌うので、ノックをしなくても前もって知れたりするのだが。

先刻は、鼻歌が聞こえるにしては、遅いなと思っていたところだ。「いやー。担任が進路について長ったらしい説教し始めてなー。大変だったよー」

生徒会長を任される人物としてはフランクが過ぎる発言であるが、会長らしさというものがあつた。多分、僕以外の生徒が聞いても、失望することは無いのではないかと思う。

生徒会室最奥の横長のデスクに腰かけて、手に持っていた鞆を足元に添える。一つ伸びを見せると、引き出しから何やら書類を出して唸りだした。

若干俯く形になって、肩から垂れた髪が書面の真上を踊る。わざ

と喉をガラガラ言わせて唸る技は、普段のどっしりと温かみのある柔らかな声質とは、また一つ違った印象だ。

そうやって大人しく物思いに耽っていれば、どこかのクラスの男子から声がかかるかもしれないのとは、いい加減言い飽きた。とは言え、スタイルは良いと思うし頭は良いし、性格だって明るくて頑張り屋だし、何より面白い人だ。僕から見ても、会長は素敵な人だと思う。にもかかわらず、彼氏欲しい彼氏欲しいと喚けるのは、あるいは、僕よりも全然男らしい。

別に小馬鹿にしているわけではない。

「会長、どうしたんですか？」

「あ、うん。進路どうしようかなと思ってさ。ワタシぐらい頭良いと選択肢が多くて困っちゃうんだよね……」

「……………」

「うそ。ごめん」

「いえ。別に」

そんな目で見ないと、何故か自分の目を覆う会長であったが、それはなるほど合理的だ。

そう言いはしても、実際、会長は明晰なのだから特に皮肉でもないのだが。

淡い対応が気に触れたのか、会長はさっそく僕に噛みついてくる。

「ルートくんは、確か、もう決まってるんだよね。なんだったっけ。理系だよな？」

「そうですね。理系です」

来学期から二年生の僕が進路を語るのと、来学期から三年生の会長がそうするのでは、少し重みが違う気がしたので、何となく一呼吸置いた。

すかさず潜り込んでくるのが会長流だった。

「理系ねー。ワタシも一応理系んだけどなー。ジャンルが違いそう」

僕の将来の話など、他人に何度もするような誇れるものではない

から、多分一度二度しか言っていないと思うのだけど。会長は知ってて言っているのか、単に興味で言っているのか、掴めない。

「僕は遺伝子学です。まだ志望ですけど」

「遺伝子かー。いやいや。やりたいことがあるだけ立派だよ。ワタシなんて、全然決まってるからねー。まあ、まだ一年はあるし、考えるのやめよ」

自分から持ち出した話をきっちりと後片付けするから、割ときまりは良い。

会長は間を持たせるように一つ伸びをして、それから目の前のプリントを手に取った。机に広げている書類は、すべて昨日の作業の残り分だ。

会長は確かにこのような性格をしているが、やる時はやる人だ。作業スピードも元々速いから、翌日に仕事を持ち越すことはそうない。

にもかかわらず溜まっている書類が、新学期の慌ただしさと、変わらぬ平穩を物語っていないでもない。

昨日できなかったことは、今日やればよい。

それだけだ。

「何か手伝いましょうか」

「じゃあ、ワタシが書類にサインするから、押印お願い」

「わかりました」

うんうん頷くと、会長は書類に目を通さずサイン欄に記名している。隣の机に座る僕の元へ流れてくる書類は、ちょうどサインの真横にある四つの小窓を残して不完全だ。

この書類は昨日、僕と会長で作成したものだ。四つの小窓はそれぞれ、担任、学年主任、生徒会、教頭の四名のためにあって、確認したことを証明できるような仕組みになっている。

勿論、文面も考えたのだから、わざわざ目を通す必要も無い。

僕も黙々と、この『新学期の抱負』へと、意気込みを振り下ろすだけだった。

話題は尽きない。

「ルートくんは、新学期の抱負とかある？」
サインの片手間に会長が尋ねてくる。

毎度の如く、本気の度合いが測れないので、僕は盾を構えて出方を伺う。

「どうせ、僕が書いたのを見つけて読み上げるじゃないですか、会長」

「まあ、それはそうだがな！ いいじゃないか！ 生徒会長だぞ、ワタシは」

「生徒会長のセリフじゃない……」
職権乱用も全くだいである。

ただその、今を生きる姿勢には感心させられなくもない。

「そうですね。皆が平和に過ごせれば、僕はそれでいいかなと思います」

「そうだね。色々あったもんね。前期。いや、前章と言うべきか」
「物語チックにしないでくださいよ。本当に大変だったんですから」
会長が目を細めてしたり顔をすると、真実なのに嘘臭く聞こえる。
本気の会長とは、泣くほど笑っている感じがする。

「いや、まあ、そうだよな。アリスちゃん、顔、怪我してたもんね……」

「はい……。後遺症とかは無いみたいですけど。さすがにあれは酷いかなと思っちゃいます。まあ、ノアさんがいるから大丈夫かとは思いますが……」

「ちなみに聞くけど」
「なんですか」

こういう時、会長は大体ちなんでない。

「アリスちゃんさ。もう、ノアちゃんと一線越えたんでしょ？」

軽度な時が止まったかと思っただ。

「し、知りません！」

「ははははははつ。ご冗談を。耳が赤く
「なってますん……っ」

言う通りになっているかどうかは鏡を見ていないからわからないけれど、そう言われると、反射的に隠してしまう。それ自体が恥ずかしくて、きつと今頃、良き塩梅に茹で上がっていることだろう。

生徒会会長、生徒会副会長とは、このような人間であった。

「ま。でも、いいんじゃないかな。平和。ジジ臭いというかルートくんらしいというか」

「そこを並列しないでくださいよ」

もう一度「ははは」と会長が笑うので、少し頭にきた。

「会長は、新学期の抱負、なんですか？」

ありますかではなく、なんですかと、少し強めの口調で詰めてみる。

仮にも生徒会長だし、今年受験生だし、今の話の流れだしで、ありませんとは笑えない状況になったはずだ。

久し振りに会長の良い所が見たいと思ってしまう僕も僕で、職権乱用もいいところだ。

会長は「そうだな」と、視線を書類に戻して言う。

「ルートくんと同じかな」

「会長……」

「皆、はっちゃけてエキサイティングしたら、それでいいかな」

「真逆!？」

冗談は時間とともに、古された紙の匂いを漂わせるようだった。

僕は心配と不安を同じくらい持ち合わせて、それからまた作業に没頭できたと思う。

「お。そろそろ時間じゃね？」

「いいですよ。会長、残りますよね？ 僕も手伝います」

例によって終わらなかつた作業は、サイン押印から来月のイベント企画書の推敲にシフトしていた。会長がメインで考えて僕が書記をするような、いつものスタイルをとっていた。

確かに僕は、会長のような面白い企画は考えられない。書記と言つても、ローペースだし、別に僕でなくとも務まるだろう。

それでも、会長一人を残してそそくさと帰宅するには、僕の気が重い。

「いいよいいよ。ワタシもそんな長く居ないし。ルートくんも早く帰りたいでしょ」

「会長、いつも残ってるじゃないですか。積み重ねたら長いです。僕も生徒会の一人なんですから、手伝わせてください」

「イケメンだ。でも、遠慮しとくよ」

そうやって帰宅させられても、後々、夕食中なんか考えてしまうのだ。

会長がまだ仕事をしているかもしれないとか、今帰宅中だったら真っ暗で怖いだろうとか。翌日にいつまで残っていたのか聞いても、五分や十分程度としか言わないが、もしかすればそれも気遣いなかもしれないとか。

最近では、逆に、何かしているのではないかと疑心暗鬼をこじらせる。

「か、会長。もしかして、残って何かしてます？」

「その質問はするいぞルートくん」

「え？」

「それは、ワタシが何をしてもしなくても、損する質問じゃないか。そりゃあ、何もしてなくはないから、何かはしているが、その何かとは別に悪いことをしているわけじゃないぞ。あー、ほら、なんか説得力無くなった」

「し、知らないですよ」

「あー、これ、生徒会長の威厳が損なわれたやつだよ」

「責任取りますから、手伝わせてください」

「だよなー。じゃ、仕方ないか。ごめんね。ありがとう」

堪忍したのか、会長の返事は速やかに軽い。

会長の性格からして、そこまで意固地になるのには理由があるの
だろう。

どうせ、業務は発案であり会話だ。

この折に、訊いてしまおうと思った。

「一つ聞いていいですか」

「え？ 美容の秘訣？ そうだなー」

「どうしてそこまで、居残りさせないようにするんですか？」

「スルーされた」

「クラスの人からも聞きました。会長のクラスは、居残り禁止なん
ですよ」

そう。

実は会長は、生徒会長以外にクラス委員長も務めていて、去年か
ら引き続いて今年も委員長を任される人望者なのだ。推奨ではなく
禁止という、厳しい強制力にも関わらず再就任してしまう信頼には
驚かされるけど、僕はそれよりも、居残りに関しての徹底ぶりに目
が行ってしまう。

そこまでいくと、もう、ポリシーというよりかは信念というか金
言というか、掟めいた人生観を感じる。

つまり、だからなんだということではなくて、ただ、会長に対す
る僕の興味だ。

「あははは。よく知ってるねー。調べたの？」

「噂で聞いたので、確かめました」

「なるほど。そりゃそうだよな。噂にもなるわ」

語り口調で口ずさむ会長の表情はどこかつまらないものを見てい
るようで、怖くもある。

聞いてはいけないことを聞いてしまったと、今更耳を塞ぐことは思わないけれど。

少し黙ると、会長が会話を繋いでくれた。

「大工の言葉でね。『家作る時は、まず自分の家を作れ。他人のはそれからだ』っていうのがあってね。大工というか、それは父さんなんだけど」

「まず自分、ですか」

「そうそう。学生だし、家作るわけじゃないから、真に受けるワタシがおかしいんだけど。的外れじゃない気がするんだよね。それって」

色々な人から、『自己犠牲』だの『自分を大切にしろ』だの言われているせいか、心にヒリヒリと沁みる部分が大いにあった。

だからなのか、会長の父が言いたいことは、その金言から自然と理解できた。

「分かる気がします」

「うん。自分の家って、多分、建造物的な意味の『家』と、家族団欒的な意味の『家』のどっちのことも指してるんだよね。自分の家を作れないようなやつに、他人の家なんか作れるわけないってさ。

極端に、ワタシらで言うと、宿題とかやってないやつは、恋愛とか部活とかやっても上手くないかって感じ？　なんか急に軽いけど」

「ですね。軽いです」

とは言え、これで納得できた。

ルリ会長がルリ会長たる所以、と言ったところだろうか。

僕も一つ、経験を通して知っていることがある。

犠牲と犠牲が織りなす、共感という力。それはきつと、こうして居残りして会長という事によって、進行形で証明されているのだ。

それから、三十分ほど経った頃だっただろうか。

小休止を入れて企画書の作成を再開しようとした、その時だった。

こん、こん。

「はい、どうぞー」

急の来客があつて、どうしてか背筋がピンと伸びる。先生か生徒しか来ないとわかつていても、生徒会副会長という面子もあるからかもしれない。というか、背筋はピンと伸びていなかったらしい。会長は会長だけあつて余裕があるものの、机の上はそのままでいられるようだ。

少なくとも僕は、生徒会室が書類倉庫と見間違われるようなことは避けたい。

その一心で、机の上全面にとつ散らかった楽しい書類を一カ所に纏めながら、来客の様子を伺えば。

「あれ？ ノアさん」

「ノア、です。ノア・グリニッチ、です……」

ペこりと会釈するのに合わせて、黒髪が古本臭い生徒会室を踊る。黒髪はこの国では非常に珍しいこともあつて、その人の印象は遙かに華奢で儂げだ。以前よりはかなり明るくなったように感じるものの、まだ、どこかおどおどときこちない印象を受ける。それでも、ひんやりとした声質は澄んでいて、どんな場所でもよく通った。

冷たい声に呼ばれた彼女は、ミドル時代からの知り合いで、アカデミーでは同じクラスになれた。共通の友人もあつて、かなり親しいと言える。

かなり親しいはずなのに「さん」付けが抜けないのは、その友人の庄のせいだろうか。

「あら。ノアちゃんどうしたの？ なんがあつた？」

「え、えっと、その……」

「なになに？ アリスちゃんと喧嘩でもした？」

「し、してないよ……っ」

「はっはっはっは！ だよー」

確かに、そんなことはしないだろうけど、だとするならば、こんな時間にこんな場所にたった一人で来る理由がわからない。ノアは

目的も無く僕のところへ来るような性格ではないし、何より「その友人」とやらの恋人なのだ。

彼女を置いてわざわざ僕のところへ来るというのだから、余程のことなのだろう。

余程のこと、となると自然、良い気分ではなくなる。

ノア達の家出騒動も、それによって友人が怪我をしたのも、つい最近のことなのだ。解釈は偏るけれど、生々しく悪い予感がする。

だから、あまり来訪の理由を尋ねたくなかったのだが。会長は確りと職務を全うした。

「でも、やっぱり、なにかあったんでしょ。アリスちゃんもいないしさ。あつ。その前に座って座って。好きなところどうぞ」

「うん……あつ。はい……。ありがとう」

ノアは忍び足のように音を立てずに近づいてきて、僕の隣のパイプ椅子に座った。意図してか不意にかわからないが、会長の位置からは半分くらいしか見えなさそうだ。

「そんでそんで？ どうしたの？ もしかして、言にくいこと？」

「ん……。半分……」

「半分？ あー。そっか。わかった」

何が半分なのだろうと考えていると、会長の洞察力がきつぱりと冴えわたった。

勘の鋭い人とは、どうして勘が鋭いのか不思議だ。逆に自分はどうして勘が鈍いのかも。

「ワタシが外せばいい？」

「ん……」

「わかった。後からルートくんから話聞いてもいい？」

「だめ……」

「なんだよー。ケチー……。いや、まあ、いいんだけど」

「ごめん、なさい……」

「いいよいいよ。じゃあ、二人が行くよりワタシが出た方がいいね」二人とも結論をズバズバ言うタイプだから、話の展開が早い。

一人おたおたしていると、会長が勇んで席を立つ。どうやら省工
ネを拗らせたらしかった。

「んじゃ、ちよっくら外すよ。五分くらいで戻るけど、足りるよね」
「ん。足りる……」

「オツケー。じゃあ、行つてきまーす」

そうこうしているうちに会長は生徒会室を出て行ってしまった。
会長が差し引かれた空間には自然、僕とノアの二人だけが残ること
になる。それから、沈黙もか。

ともかく、ノアがここへ来た理由は僕だったらしい。

人払いをしてまで、という事実で不信感がまた一つ増えたこと
なるわけだが、これはつまりそういうことなのではないだろうか。

ああ。これが勘なのかもしれない。

勘とは、自分と似たものを引き寄せる力のことを呼ぶのではない
だろうか。

「……………」
「……………」

どうして向かいに座らずに僕の隣に座ったのか、なども考えてし
まう。アリスが居ないから、僕で埋め合わせているのかと思っただ
れど、違ったらしい。

沈黙していて静かだから、聞こえる。

ノアが震えているのが。

聞こえたから、沈黙しているわけにはいかなかった。

「えっと……大丈夫？」

「うん……大丈夫」

大丈夫なら、震えている理由を話してくれるだろうか。
いや、きっとそれは無理だろう。

「僕に何か話があるの？」

「うん」

言葉選びは簡単だった。

「もしかして、『願い』の……？」

「うん」

叶わないはずの、という前置で以って語ることのできるそれは、僕が唯一勤を働かせられるもの。ノアとアリスと僕、それから不特定数の人間が関与している、摩訶不思議な力のこと。

つまり今回は、僕に関係しているということ。

「……………」

「……………」

再び沈黙が訪れる。

この沈黙はさっきまでのそれとは意味が違う。秒読みの意味合いもある。

最終チャイムも打ち尽きた今日は、目印にする音すらも無かった。だから、会長がここへ戻ってくるまでの五分を限りなく無限数に刻んだこの平べったい空間を、基にするしかない。だとすれば、もう、次の言葉は『願い』を刻むはずだ。

「アリスね」

「アリス、ルートのこと全部知ってるんだって」

終わらなくて、桜月。(後書き)

【あとがき】

これで、ルートたちも二年生になりました。

物語が始まったところは中学三年生でしたから、作者は彼女たちの心にも体にも成長を感じます。

不思議な感覚です。

確かに自分自身、最初は彼女たちの成長を願っていました。でも、いざそうなると思う。

彼女たちは紙面上の人物に過ぎないのに、「心」に成長を感じるなんて不思議。

ここまで読み進めてくださっている皆さんはどついででしょうか。時は経ちます。

次回、第二話。それは当然か。

始まらなくて、夏端月。(前書き)

【まえがき】

なつはづき、と読みます。
古い暦です。

本編とついで。

始まらなくて、夏端月。

情緒蠢く季節。過ぎ行く寒さはダウンとともにタンスの中へしま
い込んだばかり。懐かしさからか、やはり情緒の騒ぐことからか、
時折恋しくなるのは、人工的かつ自然的な火照り。

この時期の校舎は、風前の灯のように風に揺らぐ。

寒い日は厚着が増えるし、そうでない日は薄着が増える。温度を
感じられない体になったとしても、外の様子を伺えば、寒いかそう
でないかわかりそうだ。

年間通して四季が明瞭なこの国では、それがごくごく当たり前の
光景であった。あつたのだが、生徒会の役員になってからは、い
や、アカデミーになってからは、その変化が少し面白くもあつた。

少し背も伸びたらしい。

そのせいもあるだろう。

なにせ僕は、もう二年生だ。

気分、歩幅も広めに、僕はいつもの道を通って学校へ向かう。い
つも通りは、昇降口で覆される。一年間を共にしたロッカーと無言
の別れをして、新しいロッカーへ靴を入れる。特に何も思わないけ
れど。

この学校は二年生の時に、希望進路によってクラス分けされる
から、僕にとってはそっちの方が気がかりだからだ。

“新米”が蠢く昇降口は、早々に脱出するとして、僕は早足で二
年生の教室へと歩き出す。生徒会役員だけあって、目的地への歩
みに迷いはない。

教室移動の監督もさせられたのだ。それくらいの特典があっても
いいだろう。

二次のクラス替えは、一年生のクラス発表ほど大袈裟にはやらない。各教室に名簿が貼り出されて、それを頼りに席に着くというもの。あらかじめモニタリングされた、理系、文系、芸術系の三分野の希望に沿って決められるため、ヤマは張れる。

僕の場合、理系希望なので、理系の教室の名簿の「ル」のところに名前があるはずだ。

さすがに二年生ともなると、知り合っている人も多いし、わいわい騒ぐようなイベントにもなり得ない。そのせいか、名簿の前には五名ほどのグループがいるだけで、後続は、並んでいると言うよりは空き次第見るスタンスでいるようだった。

これまた二年生だからか、グループは男女で綺麗に分かれている。とは言え、これと言って目立ちたがり屋でもないし、キャラチェンジする予定もない。

僕も例に倣おう。

三十秒ほど待つと、順番が来た。

僕単独というわけではなくて、何名かのグループがそこへ追加される形になった。

急ぐ用事でもないから押し引きすることはないものの、ある程度場所を譲ると、割と見にくくはなる。自然、首をぐんと伸ばして覗き込むような体勢に、わざわざなるわけだ。

「ル、ル、ル……あ」

自分の名前を探して口ずさんでいると、途中で目ぼしい羅列を発見した。

「ノアさん、理系なんだ」

「うん。クラスも、また、おんなじ」

「あ。ホント？」

「うん。ほんと。下の方に、あったよ」

「どれどれ……って、わっ！ ノアさん……っ。い、いたの？」

ごく自然な振る舞いだったので、独り言に誰かが応えてくれることに疑問を抱かなかった。

隠れているわけではなかったらしいけど、僕の位置からだ、華奢なノアは視界に入らない。それでも、ノアの声は抜けが良い。掲示板に跳ね返って、ちょうど僕と応対するような形になってもおかしくはない。

僕と壁の間くらいに、ひよこつと入り込んで、ノアが頷く。

「いたよ」

「いたんだ」

「うん」

「そっか」

言葉を迷う。視線を合わせられない。ドキドキする。

ひよつとしたらこれは前例があるぞと、勝手に高鳴る鼓動を抑えるのは、他でもない理性。それも、あの力に関してだけ働く抑止力のようなもの。

ルートのこと全部知ってるんだって。

先月の初めころだったか、そんなことをノアに言われてからというもの、こんな調子だった。この胸のドキドキが速くなるのも、恋で片づけてしまいたいところだけれど、それは無理そうだ。

あれ以来、ノアはそのことを口にしないし、いつも通り接してくるのだ。腐りそうなほどいつも通り過ぎて、あの言葉が酷く鮮明に、温度とか引力すら感じるほどだ。

警戒しないというのが無理な話。

ただ、僕の身がどうというよりは、ノアが心配だった。僕が何かを話したせいでノアが傷ついてしまうということが、今は一番怖い。

そっ。

今、ノアは恐怖を孕んでいるということになる。

いざ知らず、ノアが問うてくる。

「ルート、理系なの？」

「あ、う、うん。そうだよ。ノアさんも理系？ 料理人って理系なの？ なんとなく、理系は調理実習ってよりは、実験実習って感じだけど……」

ノアは確か、料理人になると言っていたはずだ。

汎用性の高そうな文系とか、創作料理の観点で有利そうな芸術系の道もあると思うけれど、どうやらノアには意志があるようだ。

「栄養とか、生き物の作りとか、理系だと思うし……。それに、メイド長、理系だって言った」

「あ。そうなんだ。その道のプロが言うんだから間違いないね」「うん」

ノアの場合、それだけに思えないのだが。

もう一つ理由を上げるとすれば、あの人を除いて他にない。

「もしかして、アリスも一緒？」

「うん」

それならばどうして、ノアはここでクラス確認する必要があるのか。ましてや、人見知りのノアが人込みに紛れてまで確認することができたのか。

答えは簡単だった。

最初から、僕がいるのを見ていて、尚且つ、知人二人に挟まれる状況だったから。

つまり、こういうことだろう。

「失礼ね。あたしと一緒に嫌なのかしら」

「そ、そんなことないよ。逆に、ずっと一緒にクラスで居れて嬉しいよ」

「白々しい」

「酷いっ」

振り返ればまばゆいブロンズが、校舎のアイボリーと綺麗に線引きされていて、一挙手一投足に合わせて一コマ一コマ、シウルレアリスムの絵画のようだ。長らく僕は、その髪を太陽のようだと呼んできたけれど、ここ最近では輪郭線がくつきりしてきて、暮れなずむ

目を思わせるように変わってきた。黒髪のノアとの美しい対称もさることながら、目を引くことに変わりはないけれど。

そんな髪的美しさに劣らぬプロポーションと、きりっとした面立ち、役者のような甘辛くて芯のある声質に、文武両道の肩書。思わず不平等を呪いたくなる。

しかし、その不均衡を修正するかのようには、アリスの頬には中程度の傷がつけられていた。

先月、二人が家出騒動を起こした時に、不慮の事故で怪我をしたらしいのだ。アリス自身は、思い出として大事にしているというけれど、それにしても痛々し過ぎて、僕が代わりに神を呪ってやりたくもなかった。

なにを呪わばなんとやらとはよく言うが、アリスの場合、そんなことしなくても毒を盛ってくれそうに清々しいのだが。いや、清いのだが。

そんな付き合いは初級学校時代から続いていて、クラスもほとんど同じだった。家もそこそこ近くて、昔はかなりの頻度で遊んでいたと思う。今は部活があるから昔ほどではないけれど、昼休みも放課後もイベントも、時間がある時は大概一緒に居る。

ノアと違って、僕とアリスはどちらが好きでそうしているわけでもない。

気付いたら隣にいて、居心地が良いから、そうしているだけだった。どう関係が始まったのかもあまり覚えていないし、それに関してお互い負い目もない。でも、いなくなってしまうのは絶対嫌だ。

それくらいには、親しいと自負できる。

最も、今、アリスはノアの恋人だから、なにということはないけれど。

「というかアリス、理系なんだ。てっきり文系かと思ったよ」

「何を根拠に言ってるのかしら」

「だ、だって、家が公安だから……」

公安とは、国の治安を維持する国営の組織のこと。暴徒鎮圧だっ

たり密輸だったり、物理的被害の及ぶ危険のある事件には必ず関係してくる。

アリスの両親は、両名とも公安で活躍する役員なのだ。父親の方はかなり高い役職に就いていて、母親はその秘書官だと聞く。至極自然な流れで、アリスの家は豪邸で、メイドも何人もいる。実は、ノアもそのメイドの一人だったりして、とりあえず「かなり充実している」と言っても、何ら過言でもないはずだ。

とは言え、二人で家出してしまうくらいだ。

両親の職務についてここで言及するのも、無粋なのかもしれない。「ま。あながち間違いないわ。でも、あたしは理系ね。一応、鑑識を目標しているつもりだから」

「へ、へええ」

「興味ないなら聞かなくてくれるかしら」

「興味あるよっ！ ありまくりっ！」

「嫌だわ。気持ち悪い。行きましょ、ノア」

「ひ、酷いっ」

はあ、と呆れた溜息をついて、アリスは僕を睨む。

この慧眼に、僕は勝てたことが無かった。

「結構楽しめたわ。ありがと」

「いやいやいや！ 今の、そういうフリじゃないよ!？」

軽い口喧嘩のようにも見えるかもしれないが、僕らの間でくすくすと笑うノアがいるおかげで、場は弛緩する。アリスも、ノアが喜ぶからとやっているのがわかる。変に真面目に受け返してプライドを守っても好ましくないと、最近思う。

ちょっと悔しいけど。

「はははっ。どえむ、だね……っ！」

「うああっ！ ノアさんの言葉の破壊力すごい……！ というか、そんな言葉どこで覚えて……っ」

ぴりりっつと、胸が痛くなる。

「……………」

追い打ちをかけるように、アリスの毒舌が浴びせられる。

「あの妹と恋愛するんだもの、そうよね。どうせ、いつも媚びられて言いなりなんでしょう？嫌われたくない一心で。そりゃ、マゾヒスト具合にも磨きがかかるわけだわ」

「こ、声が大きいからっ！」

「え？ 昨日は抱きしめ合いながら寝たって？ あら、そうなの。

どうでもいいわね」

「ほ、本当にやめて……っ。社会的に死ぬ……っ」

くくくっ、と声を殺して嗤うアリスを見て安堵してしまうのは、長い付き合いで体に染みついてしまった良くない癖だ。これを見ると、アリスが元気になっているのが確認できるのが、いや、本当に良くない。

でも、近頃、アリスの頬の傷ばかりに目が行ってしまっているので、こう接されるとありがたいのは確かだ。気が紛れるというか、なんといいか。僕のせいではないのだけれど、友達として何かしてあげられなかったのかと、重くとらえてしまうから。

ただし、あまりに加担しすぎると、すぐ中毒^{あた}する。

「事實は事実でしょう？」

「いや、違っ、それは、まあ、えっと……」

「大好きなんでしょう？」

「そ、そんなの……」

キョロキョロと周囲を見回して、危険はないか確認する。

僕の想いに、この作業は必須だ。

「はい……」

「顔、真っ赤よ」

「いや、アリスのせいだよ！ 大体、それは学校では無しだって

」

「行きましょ、ノア」

「うん」

「待っ！？ ちょっともう……っ」

幕引きは意外とあつけなく、それはもう理不尽なくらいに。アリスとノアは揃って教室の中へ行ってしまった。僕もその後について行くけれど、そこに距離を感じてしまった。間にあつた、何か緩衝材のようなものがすっぽりと無くなってしまったような気すらした。これでは、白々しいなんて台詞も、アリスの方がよっぽど

「……………」

そんなことが頭をよぎったのがわかって、僕はすぐさまそれを対岸で堰き止めて籠へ入れることにした。

そうしなければ、誰しもが深層で繋がっている心情の漚^みで、網に掛かってしまふかもしれない。そう思ったからだ。

けれど、情動のコントロールとは、そう上手くはいかないもので、とことと俯き歩く僕に向かって、彼女の声は槍のように、いや懼^{かい}のように銛^{もり}のように、鋭く深く突き刺さったと思う。

「そんなところで何してるのよ。あなたの席、ここみたいよ」

どうやら返しが付いているようで、今の僕には抜けそうもない。

僕がそれを抜くのが先か、毒が回り切るのが先か。

釣り針を喰らったまま生きる魚の気持ち、僕は知る由もない。

始まらなくて、夏端月。（後書き）

【あとがき】

危なくないはずなのに、危ない気がする。不安はないはずなのに、心が惑う。

二年生の四月って、どうしてかそんな感じな気がします。

二度と来ないと知っているその瞬間を、もう一度体験できるとも知っているからでしょうか。

恋だと気付いたあの時の静寂が、私は好きです。

次回は、なんでしょう。

今章、めまぐるしいですね。

続いていて、早苗月。(前書き)

【まえがき】

そうびょうげつではなくて、さなえつきです。

これも古い暦です。

わかっています。次回からは言いませんよ。

では、本編を。

続いていて、早苗月。

「へー。そんなことがねー」

いつも間延びしたような調子なので、真面目に聞いてくれているのかそうでないのか判然としない。とは言え僕は、抱えていたモヤモヤを打ち明けて気を楽しにしようと思ったただけだ。

お風呂上がりの寝室で彼女と二人。ただでさえ幸せな会話だ。

きちんと聞いてくれているかどうかなど、今なら二の次にできる自信がある。

まあ、それは置いておくとして。

「アリスが直接言いに来ないところが、変なんだよね」

「ま、確かに。アリスお姉ちゃんのことだから、絶対考えあつてのことだと思っけど」

「それがなんなのか」

「わかんない、ってことなんだよねー。うーん……」

打ち響くように返して唸る彼女の声は、アリスやノアともまた毛色が違う。目立つ角はないものの、僕の聞きたい音にはまる様に柔軟に形を変えて、耳をふわりと包んでくれるよう。属性も、どちらかと言えば温かい方に属する気がする。可愛いけれど、可愛すぎないところか。僕は比喩が得意でない。

比喩しない方針で行くと、彼女は真正銘僕の妹で、そして僕の恋人でもある女の子。名前はリスで、姓は勿論僕と同じウエル。

目鼻立ちは町内一の美人と称される母親似で、大雑把で楽天的な性格も上手に引き継いでいる。変なところで空気を読まないのは父親譲りか。僕は好きだけれど。

風呂上がりで就寝前ということもあって、今は髪を下ろしているけれど、肩辺りまでのセミロングにストレートというのもとてもよく似合っている。唸りつつ考えているのか半分寝ているのかわからないが、健康的で白い肌はやはり目を瞑って耽っていても様になるものだ。緩めの寝間着だからわかりにくいけど、スタイルもすごく良くて、いつも目線が吸われてしまう。全部、素敵だと思う。

……………。

ただの彼女自慢が始まった。

浮かれるのもほどほどにすべきだ。

「アリスお姉ちゃんが尾行か……。なんでだろ」

「心当たりないんだよなあ」

普通の人なら信じるはずもないだろうけど、リスならわからないくらい好きな人だとは言え、『願いの夢』に直接関わっているわけではない人間に、すべてを話すわけにはいかない。

僕は幾らか話をすり替えて、リスに話していた。

今回は『僕がアリスに尾行されていると、ノアに伝えられた』ということにした。

「実は、まだルーのこと好きとか？」

「え……。そんなこと……。っ」

「なんでちよつと嬉しそうなの」

頬を隠す仕草は、すぐに指摘された。

リスに隠し事はできない。

「あ、いや、そういうんじゃない……。ま、まあ、でも、嬉しいのは嬉しいかな」

「もー、ルー。真面目にそういうこと言わないでよー。時々シヨックだよ」

「ご、ごめん。一番はリスだから」

「まあ、ルー。そういうこと真面目に言わないでよー。恥ずかしい。ぺしぺしと肩を小突かれる。多少痛い。」

ふわふわとリスの匂いが漂って来て、それどころではない。むし

る、こつちが恥ずかしい。

こほん、と一つ咳払いして、僕は仕切り直す。

「それにしても、何考えてるんだろつ。アリスは」

「え。戻すの」

「あ、飽きちゃった？」

こういう時、リズは露骨に意志を示す。会話にはクッションも何もありはしない。それはブレーキかもしれないし、アクセルかもしれない。絵本のページを捲るのが、急にリズに変わったようになる。その生き方が、時々羨ましくある。

「飽きちゃったというかなんというか。直接聞けばいいんじゃないかな」

「直接？」

「直接」

「アリスに？」

「アリスお姉ちゃんに」

「どうして尾行するかって？」

「どうして尾行するかって」

確かに、それは空気抵抗も何もない理想空間で演^やる思考実験のよ
うで、至極、全うな話である。

アリスと僕が仲違いしたわけでもない、ノアとアリスが破局した
わけでもない。論拠は手薄だが、際どい質問をして怒るような人
でもない。今のところ、僕に非はないと思う。

どこからアプローチしても、直接聞くことが最短距離に思えてな
らない。

でも、考えるべき点が一つある。

それは、『ノアが僕に伝えた』という点だ。

僕と距離を置く、あるいは間に誰かを介入させるということ。意
図せずして、この構図を構築することはできない。どうにも、それ
が何か大きな意味を成している気がする。

そしてアリスのいつも通りの態度を見るに、これは何かの暗示な

のではないかと。掌の上で僕とノアを躍らせ、文字通り“掌握”するための前準備なのではないかと。

そう。

例えば、『有効範囲を調べている』とか。

とは言え、現段階では推測の域を出ない。

「さすがに直接は聞けないよ。だって、尾行だよ？ 僕よりもアリスにリスクがありそうな気がしない？ アリスが訳もなくそんなことしないと思うし……」

「その訳が知りたいんじゃない？」

「そうんだけど……」

あのアリスのことだ。

僕がダイレクトに聞きにくいことだって、当然策略の内だろう。

僕がアリスに直接尋ねるようになるのは、つまり、相当に危険を感じた時であり、愚鈍な僕ですら感じ取れるほどの脅威だということだ。

こちらからのコンタクトは、アリスにとっていい指標になる。

別段、それが気に食わないわけでもない。

それならばそれでよいのではと、気怠い摂理が勝つだけで。

「んもー。煮え切んないなー」

「リスだったら、こういうのすぐ聞いちゃいそうだね」

「そりゃそうだよ。聞かないで悩んでるより、聞いて悩んだ方がいいもん」

「聞いて悩む、かあ……」

もし、悩みとして抱えきれない問題がそこにあつたら？ そう聞こうとして止めた。

間違いを指摘できるだけの判断力を、僕が持っていなかったから。そんな一抹の杞憂を、リスが見逃すはずもなく。

「あーもー、やめやめ。こんな辛気臭い話やめよ」

「大事な話なんだけど……」

主に、僕にとって。

「はいはい。わかってるって。わかってるから、来週のデートの話
しよ」

「全然わかってないよ!？」

「あー、なに。デート、楽しみじゃないんだ？ 大事じゃないんだ
？」

「だ、大事だよ！ 大事に決まってる」

勿論、主に、僕にとって。

リズがどう思っているかは、にやけ顔を見ればわからなくもない。

「じゃ、デートね。デートの話」

「わ、わかったよ」

いつも通り、話の主導権を握られてしまう。

冗談抜きで真面目な話をする時、どうするべきか、そろそろ考え
なくてはいけない。

新米策士の僕の脳内は、ハグすればいとかキスすればいいとか、
そういう短絡的な事案でいっぱいになる。来週のデートの
話に影響を受け過ぎて、稚拙な脳はたちまち茹で上がる。熱いばか
りで痛くない。

すぐにでも撫でられそうなりズとの距離に、僕は血の繋がりを感
じ得ない。

「来週はさ、三連休でしょ。だから、お泊まりもできるよ」

「おと、お泊まりっ？ それは、さすがに……っ!」

泊まる場所はホテルか旅館か、跨ぐ日は一泊二日か二泊三日か、
二人の気分はきつと小旅行。部屋からはマイナスイオン漂う緑の風
景。あるいはそこは旧市街の高台か。草臥れるまで外を散歩して、
いつもと違う湯船に浸かる。ダブルベッドに身を預け、夜まで語ら
う……。

ダメだ。これはいけない。

僕は一体、いつからこんな妄想をするようになってしまったのだ
ろう。

「うわあ。顔、真っ赤。ルー、変なこと考えてるでしょー」

「ご、ごめんなさいいい！ でも、二人だけでお泊まりはさすがに、まだ、早い……っ」

「そうかなー」

とは言え、両親を誘って家族旅行というのも、恋人同士では不服な感是否めない。その線引きは意外にも、深い溝を為していそう
だ。

いつかは越え得る一線なのかもしれないから、率直に反対だとは意見しないけれど、今は他の代替案があったら、安全策をとろうと思わなくもない。

「お泊まり嫌なの？」

「嫌じゃないけど……。二人だけで何かあったら、母さんたち心配するでしょ」

「まー、そうか。じゃあ、やめとくしかないかー」

溜息を吐くように言うと、リズの表情が暗くなったように見える。もしかすれば、以前から考えていた案だったのかもしれない。

少しばかり不躰だったかもしれない。

「そうだね。もう少し大人になったら行こう」

「えっ。もう少し大人になった私に、何する気？」

「な、何もしないよっ」

「えっ。何もしないの？」

「……………」

生来、この手の質問攻めにはなす術もない。

言葉に詰まるが、黙って赤くなるよりは何か話した方が恰好が
く。

「す、するよ」

「えっ。するの？ どんなことするの？」

「そ、それは……………」

「それは？」

「そ、それは……………」

延命措置を延命措置を、と時間稼ぎをして渾身のワンフレーズが

浮かんだ。

「その時のお楽しみ、かな……っ！」

ぼっ、と顔から蒸気が湧く音が聞こえそうだ。

自分でハードルを上げてしまったが、その頃にはきつと忘れていてくれるだろう。

そう思うことにする。

そうでもしなければ「ま、いや」といつぶっきらぼんな話題転換についていけない。

「じゃあ、何か他にある？」

逆に、リズが尋ねて来た。

確かに、デートの話は何日前から聞いていたけれど、これと言つて良い案というのは無かった。むしろ、すべてリズ任せにしようと怠情を決め込んでいた。

頓珍漢なことを抜かして怪我をするのも格好悪いので、とりあえずのクツションを挟む。

「シヨップینگ……とか？　いつも行ってるけど」

「シヨップینگかー。確かに、いつも行ってるなー」

「だよな」

「あ」

何か閃いたらしい。

「ん？」

「水着」

「水着？」

「水着まだ買ってたなかった」

そう言えば、ファッション雑誌ではもう売り出しがかかっていた。でも、リズはすでに何着か持っていたような気もする。

「あれ？　秋頃着てなかった？」

「秋？　着てないよ。それより、サイズ変わって買い替えてなかったから、欲しいかも」

「サイズ？　あ、そっか。大きくなったんだよね」

「そーそー。ルーが毎晩、たーくさん触るので。それに呼応してー」
「し、してません、触ってませんっ」
「……………」

遠くを見るような目で、自白を訴求された。

「うっ……………！」

「触ったり揉んだりするとおつきくなるとはよく聞くけどね。私は、
ありがとうとも言いにくいしなー。別に触ってって頼んだわけでも
ないしー」

「うっ……………！」

「まーでも、いつも気持ち良いよ。マッサージみたいで。すごい優
しくしてくれるし。たまにアレだけど。たまにね。たまに。す」

「よよよ、よっし！ じゃ、じゃあ、僕が水着をプレゼントするよ。
試着とかもしてみよう！ その後はリズの好きなサウナにも寄ろう
か。た、楽しみだなあ……………！」

リズは「ははははは」と抱腹して笑った。

そして終わりに言い添える、

「どっちも、ありがとう」

「どっちも？」

「水着と、」

密かに耳打ちされた響きは、鼓膜を伝って、僕の心臓を打ち鳴ら
す。

今宵は眠れないだろうなどと、柔らかい記憶を揉み解して、僕はま
た一つ覚悟するのだった。

続いていて、早苗月。（後書き）

【あとがき】

念願かなってアツアツのラヴラヴです。

これは邪魔すべきでない。

ここで悲報。

同名上書きにて、十日分の執筆データ（最終章後半の5話分くらい）が消えました。泣きたい。

書き直しとは地獄なり。やる気が90%近く削がれた。

次回は、水着を買いに行きますか……？

歩き出して、鳴雷月。(前書き)

【まえがき】

なるかみづき、と読みます。

今年も、しっかり水着選びたい。

本編、始まります。

歩き出して、鳴雷月。

僕たちが腕を組んで街中を歩いていたら、通りすがりの人は特に何も思わないだろう。髪の色は同じ、輪郭も限りなく近くて、同じ匂いがする。一言で言い表すなら、「似ている」だろうか。

おかげで、公然で堂々と腕を組めるわけだが。

先ほどの飲食店で注文したジュースの、あの飲み方はやりすぎな気がする。誘惑に負けて公私混同を指摘できない僕に問題があるのは確かだけれど、お相手の方にも少し節度を持ってもらいたくもある。

「あのさ。リス」

「なに？」

腕を組んでいるから、そちらを向かなくとも音が伝わる。

こればかりは、視線を合わせては話しにくい。

「さっきの、その、ジュース飲んだときのあれさ……」

「えっ、なに？ 変な味したとか言わないでよ、天然で」

天然で、とはどういう意味か。

ともあれ、変な味はしなかったな。メロンソーダの独特な風味と、リスが食べていたクアトルカールの砂糖の焦げた香りがほんの少しだけ……そういう話ではない。

「違うよっ、そうじゃなくて。ああいうことは、もう少し、なんていうか、もっと人がいない所じゃないとダメだって……。もちろん、嫌じゃないよ。そうじゃないんだけど、ほら。僕たちは……」

「はいはい。わかってるって。じゃあ、あのトイレで……キス、する？」

「……」

「あはははっ！ 冗談冗談。……ん？ あれって……」
「あ……」

リズの指差していた公衆トイレから、見覚えのある影が二つ。通りすがりの赤の他人にしては目を引きすぎるブロンドと、それを際立たせる黒髪のコンビネーション。身長差が少しあるからか、その二人が手を繋いでいると「恋人」というよりか「姉妹」な感じがする。

それはそれで、結果オーライそうだ。

視線が合わないだろうと凝視していると、進行方向はどうやら僕たちのいる通りの方面らしく、十秒と経たないうちに、僕たちは鉢合わせた。

“デートタイム”というこちらの都合もありきタイムリーな話題もありきで、なかなか衝撃な巡り合いである。

「あら。お二方じゃない」

「アリスお姉ちゃんだー」

リズのことだから、いつものようにアリスの胸あたりに飛びつくかと思っただけ、さすがに今日は警戒しているのだろう。僕に近くて、アリスとの距離を感じる。

どうして今日、どうしてこの場所へ、どうしてこのタイミングでと、逸る気持ちを抑えようと、僕は言葉の余りを解消する。

「えっと。ノアさんもこんにちは」

「こんにちは。ルート、何してるの……？」

「えっ、何って……、ああ、うん」

漠然とした質問で戸惑ったけれど、ノアはリズのことをあまりリズと呼ばないのだった。会った時からそうだったような気がするし、見ない間に二人の間で何かあったのかもしれないが、仲が悪いわけではないから特に頓着しない。

だからと言って、ノアさんの瞳を見ないわけにはいくまい。

「シヨップिंग……みたいなの？」

「なにそれテキスト。デートでしょ、デート」

茶を濁すつもりが、リズに茶々を入れられてしまう。

巾着の綻びに手を突っ込んで拡げるように、アリスが鼻で笑った。

「まあ。汚らわしいわ。罪人だったのね」

「酷いなー。そういうアリスお姉ちゃんたちだって、デートじゃないの。さつき二人でトイレ行ってたっばいし、個室でコソコソなにかしてたんでしょー？ 女の子同士は法律違反なんだからねー」

「別にいいじゃない。キスくらい」

「うえええっ！！？ あっ……。うんっ……。！」

思わず吹き出してしまつて、アリスに睨まれる。

突然何を言い出すのかと思えば、常識人のアリスらしくない。奥ゆかしさがなくなつたというか、所謂「人気者アリス」ではなくなつたというか。本当に一人の女性として、誰かを愛しているなど感じる。

変わったなあアリスと、僕は心の中で独り言ちた。

「見つからなければいいんでしょう？ それに、弁明できれば問題にもならない。あたしはそう考えることにしたわ。というか、あなたたちに言われる筋合いはないわ」

「なるほどねー。さすがアリスお姉ちゃん。んで、さすがのアリスお姉ちゃんのキスはどんな感じでしたか。はい、ノアさんっ！」

「えっ、ええっ？ ど、どんな……？」

リズが急に遠い。逆に、アリスたちに近い。

話題に取り残された感否めないが、僕はあえて見守る立場にしようと思う。

「え、えと……。アリスの匂い……？」

「し、しっかり味わってますね……！」

「あんたが照れてどうすんのよ。……ったく、馬鹿やってないで行くわよノア」

「あ、うん。じゃね。バイバイ」

リズからノアを引き剥がすと二人は、初めと同じく、指を絡めるようにして手を繋いだ。そしてまた、コントラストが姉妹を演じた。なんの主張か必然か、リズも負けじと僕の腕をひっ捕らえて、強引に腕組みを再開した。

二対二で向かい合うと、背中がむず痒くなった。

「……………」

「……………」

だからだろうか。

並行することにしたのは。

「えっと…………。念のため聞くけど、アリスたちはこれからどこへ？
いや、多分違う。」

これは、予定調和 示し合わせと言うやつなのかもしれない。

「ノアの水着を買いに、向こうへ」

黒地に白のポルカドットが鏤められていて、下部には小さな白フリルがあしらわれている。ボトムもトップスと似た印象で、全体としてみると落ち着いているけれど、ノアという人物を考えるとかなりしっくりくる。メイドカラーだということもあって、自然と馴染む感もある。

なかなかいいのではないだろうか。

本人が良ければ、尚のこと。

「そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃない。似合ってるわよ」
「で、でもっ。ノア、こうゆうの初めてだし…………っ」

言われて納得、ビキニというのは着るのにも買うのにも自信が要る。それに、肌と髪しか要素の無い紙面に彩を与えるものだから、

誰かから譲り受けたものを着るというのも違う気がする。何より、サイズが合わないはずれそうで怖い。

こういふ試着会のような会合があって、ようやく手に入るものだと思う。

「着てるうちに慣れるわ。それに、肌も綺麗だし太ってるわけでもないし。隠すような体じゃないんだから。もっと、自信をもっていのよ」

「う、うん……」

少し落ち着いたようだけれど、まだどこかぎこちなかった。

こうして見ると、少しだけ白いフリルが明るすぎるかもしれない。

「そうね。もう少しシンプルなのも着てみましょうか」

「い、いいよ、これで……」

アリスが新しいものを手に取ると、ノアは苦い顔をした。

あまり乗り気ではないらしい。分かる気がするけれど。

「ダメよ。せつかく大きくなったんだもの、勿体ないわ。というか、体に良くないわよ。胸がきついままにしておく、成長止まっちゃうのよ」

「だってえ……」

なんだ、急にわからなくなった。

リスと言いノアと言い、バストサイズの成長が流行っているのか。

ああ、全然知らなかった。

「大丈夫よ。あなたに似合うものなら、全部わかるから」

「……わかった。じゃあ」

「ああーっ！ ノアさんの首のところに、痕ついてるーっ！」

隣で唐突に声を上げたのが誰かと思えば。

結構ビックリした。

「えっ、あっ、嘘……」

「ちょっとリス。悪ふざけはやめて。ノアを困らせないでくれるか

しら」

「だってー。私には何にも言ってくれないんだもん」

「はあ？ さつきルートが言ってたじゃない。可愛い可愛いって、あれだけ」

「可愛いのは私がでしょー。ルーは私服のセンス無いからダメなのー」

「あははは……」

反駁の余地はない。

とは言っても、リズが可愛いのだから仕方がない。

いくら素敵な水着を用意したって、高級品を用意したって、着ている人はリズだ。反対にポロポロの水着だって、独創的な水着だって、着ている人はリズだ。

元々の素材も良いし、リズはどんなものも輝かせる魔法のような魅力がある。一風変わった趣向も、一時のブームにしまいそうな、周囲とは一線を画すほどの。

僕が褒めない訳がない。

アリスは反対に、そういうものをあまり褒めない。

「そうね。まずそのピンクのトップス。それはあなたには諄すぎると思うわ。下はスカートタイプみたいだけれど、そっちもパステルじゃ、どこを魅せたいのかが一目でわからないわよ。そのチョイスじやあ、ルートがあなたの体しか見ないのも、頷けるわね」

「えー」「うぐっ」

飛び火で皮膚の表面がちりつと軽く焦げた。

「ルー、体しか見てないの？」

「そ、そんなことあるわけないよ！ あ、いや、でも、少しは見ちゃうよ、そりや……」

水着とは本来、水泳をするときに適した衣類である。撥水性に富んでいて柔軟性にも優れ、水の抵抗を受けにくいよう計算されている。

ただし、それは従来の水着に限定した話であり、ビキニは訳が違

う。

ビキニはボディラインを際立たせたり、自信のある部位に注目を集めて苦手な部位をカバーするよう　つまり、体を良く魅せるためにある。その重きとは「泳ぐ」ではなく「魅せる」にあるのだ。であるからして、ビキニを着る以上はそういう感想を持たれてこそ本望なのではと、僕は訴えたい。

でも、わざわざ言わない。

「リズ、だから……」

「ああー」

「……………」

「うん。はいはい」

その言葉で、とりあえず場を濁すことはできたようだった。

とりあえずリズの欲求は収まったらしく、薄ピンク色のビキニを着たまま別の水着を探しに行ってしまった。アリスはアリスで、ノアと試着室に入って着替えの手伝いを始めた。

リズがどこかへ行くのと、ノアが着替え終えて出てくるのはほぼ同時だったと思う。

「今度のはどうかしら」

「あ、うん。良いと思うよ」

「あんたに聞いてないわ。ノアに聞いたの」

「ご、ごめん。僕の方見て言うから……」

「あんたが鏡の前にいるからよ」

アリスがぱたぱたと邪魔そうに僕を除けるので、大人しく従うとする。

アングルが正面から横に変わると、水着はまた違った印象を受けるものだ。

「これはチューブトップ。ノアくらいの胸には一番合うと思うわ。

どう、きつくない？」

「うん……。大丈夫」

アリスの前言通り、今度のはシンプルな無地の黒生地だ。余

計な彩色が無いおかげで、白い肌はより白く縁取られ、華奢なボディラインはより儂げに演出されている。胸の真ん中付近には、小さな黒リボンが拵えてあって、可愛らしい。ボトムスはサイドを紐で結ぶタイプで、腰骨のあたりに、こちらも小さな黒リボンがある。黒髪との一体感も相俟って、ノア自体をとても清楚に見せる。

見惚れてしまいそうだ。

「ノア、これ、いい、かも……」

「そう。それならよかったわ。ええ。やっぱり、すごく似合ってる。

……でもね。このタイプを着る時は注意することがあるの」

「注意？」

「さつき後ろで紐を結んであげたでしょう？ あんな感じで、一人で着るのが難しいこと。それはあたしがやってあげるからいいけど、もう一つ。波に弱い。特に、上から被るとか飛び込んで下から巻き上げられるとか、上下のね」

「波……怖い……」

ホルターネックタイプなどと違って、上から吊り下げられているわけではないのだから、それは道理だ。とは言え、ワイヤーのものは関節の可動域が限定されたりするので、運動の苦手なノアには向かない。何より、金具が当たって痛いだろう。

けれど、ノアが燥いで飛び込みしたり波乗りしたりということは考えにくい。

大丈夫だと思うのだが。

「それも大丈夫よ。浅瀬にいればいいだけだから」

「わかった……」

「じゃあ」ということで、ノアの今年の水着が決まりそうだ。

アリスのカリスマもさることながら、ノアの勇気も大したものだ。ノアが自信を手に入れたら、怖いものなど何も無いのではないか。最近またアリスとの距離が縮まったのもあって、良い意味で未恐ろしい。

部外者らしくただ二人を眺めていると、アリスが僕の方を見て露

骨に苦い顔をした。

何かしたかと猜疑心に苛まれるのと同時に、背後からふんわりと生暖かい衝撃があつて、僕は我に返る。

「わっ。びっくりした」

「おまたせ」

我に返りついでに振り返ると、すぐそこにリズの顔があつて、後悔する。

楽しみに待っていたことは必然も必然、確かだ。大事なのは、どいう路線で来たらどういう反応をしようか、心から解き放つても余りあるこの賛美を、一体どう表現すべきかというところ。

心の準備ができていないとは、まさにこのことなのではないだろうか。

「う、うん。待ってたよ」

ともあれ、「おまたせ」には「待ってた」と答えたい。

肩から首にかけて、ちょうど欄干に凭れかかるようにぶら下がっているから、少し頷きづらい。それ以上に、背中にふわふわした綿のような柔らかい感触があるのが、非情にくすぐりたい。

わざとらしく鼓動が速まるのも、耳がシンシン熱くなるのも、両方とも知られてたらしいのに。

きつとリズは、そんなことを知る由もない。

「えっと、あの……」

「なに」

「見えないよ……？」

大した言葉も選べないくせに、僕は、リズの選んだ新作を早く見たい。

「ふっふっふ。わざとですー」

「わざと？」

「ルー。好きでしょ。ふわふわするの」

「ふわ、ふわ……」

言われてみれば、その通り。

「ごつごつしたものよりかは、ふわふわしたものの方が好きだ。これは、おまけに良い匂いまでする。気が狂いそうだ。」

「あ。違った。もみもみ、だよな」

「もみ、揉……って、こらっ」

とりあえず顔は熱いけれど、満更でもない。

しかし、公衆の場での過度な接触は避けるべきだろうから、振り解くことにする。勿体ない感否めない。それと引き換えに拝む水着は、大層愛おしゅうございましょう。

「あ。うん。いいね。僕はすごく、好き」

「どこらへん？」

「白黒ストライプって、シンプルでかつ大胆だから、リズの体型にも合ってるし、リズっぽさもあって、いいかなって僕は思うよ」

スタンダードなトップスは大胆にも白と黒の横縞に配色されていて、胸の真ん中には大きめのリボンがあしらわれている。リボンもちょうど左右で白と黒になっていて、ボトムスはその配色の逆だ。二面性がありそうな水着だが、シンプルさとインパクトを兼ね備えていると言えるだろう。

まあ確かにインパクトはあったが、僕からすればそこまで驚くほどのことでもない。

実はリズは、所謂“モノトーン”という、この手の配色のものが好きで、衣服は普段着からパジャマまで、それから文房具や趣味の雑貨なんかも、これを採用しているほどだ。

だから、他の人が見たら二度見くらいしてしまいそうところ、

僕はこれをリズらしいなと思えるわけだ。一人美味しい。

「ふーん。じゃ、これにする」

「えっ。いいの？」

「うん。ルーが好きって言うし」

「あ、ありがとう……」

どきり。

「……………」

なかなかどうして。ここまでできてばつが悪い。

ひよつとすると、もう一言くらい添えるべきなのかもしれない。

あるいは、何か行動を。

「えっと……………」

元々、気持ちを言葉で伝えるのは得意ではないから、行動を選んだ。

特に、リズから何かを求められてということではない。ただ、沈黙という重圧を少しでも和らげようかという、ほんの個人的な意向があっただけだと思う。それでも、とにかくリズを褒めたい、愛でたいという気持ちはそこにあつて。

僕はリズの頭を撫でてみたところだった。

「……………」

リズは目を瞑るばかりで、口を開こうとしない。

さらにさらりと綿糸が指に絡むようにうねって、僕は心地が良い。この感慨を表現する言いで得て妙な言葉は無い。心地良いや気持ち良いでは到底事足りるはずもなく、家族の愛の温もりと過去の積み重ねなどは手から溢れて、心を満たしていった。

さて。

引き際など考えもしなかった。

一度こういう状態に陥ってしまうと、どちらかが拒むまで現状を打破することはできない。互いに好き同士、拒むことはないから、それは詰まり、詰みというやつで。

このまま速度を落としていけばいいかと考えはするけれど、それは停止を意味していない。このままエスカレートしていつて、それが頂点に達すれば、自動的かつ平和的に果てるような気はするけれど、場違い感否めない。では逆に、場所が違えばよいのかという

と、それもまた傾倒。

ああ、いけないな。

苛まれながらも、僕は一人、幸せである。

「いつまでやってるのよ。馬鹿なのかしら」

「ち、違……っ」

素早く手を引こうとすると、それよりも早いスピードでリズに確保され、腕を組まれた。その仰々しい微笑みこそ確信犯の顔つきだった。

「あらあらかよしこよしでいいわね」

「棒読みやめて！」

視線もあまりに情を帯びていなくて、正直、凍りそうさだ。

アリスがメデューサの場合、石ではなく氷の彫像になるかもしれない。

「そんなことどうでもいいわ。それより、結局、来月はどうするのよ」

「来月？ ああ……」

来月というと、この水着店へ来るまでの間していた会話の続きになるだろうか。

水着を買ったら普通、そのままタンスに入れて夏は越さない。つまり、お披露目の機会というものが必要なのだ。勿論、海でもプールでもいいし、自分の部屋で二人で見せ合っても面白いと思う。

僕は自分の新作などに興味がないので、披露する側の希望を募るべきだろう。

「うーん。そうだなあ。確かに、私が行きたいのは海だけど、予算的にはプールなんだよー」

「でも、あなたの恋人様は部屋で見たいそうよ」

「えっ？」

「えー……」

おかげさまで、ひやりと背中に汗をかいた。

二人の視線を集めたのもそうだけれど、読心されているかもしれないことを思い出して。

「ばたばたとシャツの裾をはためかせて、僕は仰々しく笑う。」

「あははは……」

「あ。否定はしないんだ」

「ま、まあ、そうかな。人目につくところって、心配なんだよ」

シーズン真っ盛りを外したプールならまだしも、只中の海などもはや気が気ではない。あの砂浜の暑さにやられた連中が、拳つてリズに集るに違いない。

二の腕に当たる柔らかい感触は、それを容易にイメージさせる。

リズは可愛い。可愛いし柔らかい。

心配なのである。

「そんなの、こつやつてれば大丈夫だつて」

「そ、そうなのかな……っ?」

そう言われてみれば、恋人同士だから妥当なのかもしれないけれど、それは別の意味で大丈夫ではない気がする。ああ、いや。確かに、誰も寄り付かなさそうではある。

僕の鼻の下がすごい伸びている気がする。体が熱くて、下着なんかは蒸れそうだし。

言うなれば、水着を着ていなくてよかった。

「大丈夫大丈夫。前はそれで大丈夫だったし」

どきり。

「前? リズ、海に行ったことあったっけ?」

以前はこんなべつたり身を寄せる程、オープンな好意ではなかったのだが。そもそも、行ったことがあるとすれば、僕も一緒に行っているはずだ。僕にリズと海水浴へ行った記憶がなければ、それは無いことになると言っている。

学校の遠足かなにかなら前日に準備があるからわかるし、両親たちとこつそり出かけたのなら、その日僕が家の鍵を預かると思う。言わずに出て行く理由もないし。

僕の知らない所で海に行つたとすれば、それは一体いつだろう。それから、何故だろう。

不安が心の底の方で喚いている。それが枠組みという壁を伝わって震えるもので、直ぐに打ち消せなかった。消えないでいる間、何かしらの不和を感じたけれど、それはリズのふわふわでなんとか打ち消せたと思う。

「ないけど」

「あ。ないのね」

淡白なリズジョークであつたと気付いて、漸く震源を押し込めた気分だ。

しかし、壁には罅が入つた。

それくらいであれば、僕は誤魔化すこともできる、もう一度塗り直せる。

「でも、これでリズを守れるなら、するよ」

「ふわふわしたいだけじゃなくて？」

「だ、だけじゃなくてっ」

要は、含みはするという話。

それは、僕がリズを守るために得る対価かもしれない。

「しかたないな」。ルーがそう言うなら、頼るよ」

腕を組みつかれたのか、腕を絡め直して、今度は手を握ってきた。甘んじて受け入れることにして、僕も意識的にリズの指の隙間を探した。手繋ぎなら歩きやすいから、場所移動を促しているともとれる。

「リズ？ えっ、ちよっ……」

ぐいっとリズの方に向かう強いベクトルを受容して、僕はバランスを崩した。体勢を整えようと左足で地面を押すと、そのまま惰性で試着室のカーテンに飲み込まれた。一瞬、視界が真っ暗になって

焦ったけれど、手は繋いだままだったので、転ばずに済んだ。

急に引つ張るとは、一体どういうことだろうか。

伺ってみようと起き上がると、すぐそばにリズの顔があった。

「ね、手伝って。着替えるから」

深読みを深読みされている可能性だとかなんだとか一切合切どうでもよくなる。

僕は近くにアリスたちがいることも忘れ、二つ返事で頷いて、試着室に入った。カーテン程度では、隠せるものなどたかが知れている。

でも僕は、これを一種の作戦会議だとしたい。

心臓が異様に早く脈打つのを、リズのせいにしたい。

「で。結局、お披露目はいつよ」

どきり。

歩き出して、鳴雷月。(後書き)

【あとがき】

肌色、ドキドキです。

結構ディープに水着を語りますが、実は、あまり興味がないです。水泳をやっていたので詳しいと言えなくもないですが、実際、ビキニは着ません。ちなみに、私は「レーザレーサー」着てました。そして、ゴーグルにこだわるのは素人だと、直ぐに気付いた。

水泳選手も休日に着るのかな。ビキニ。どうだろう。

次回、泳ぎ……ません。

立ち止まって、七夜月。(前書き)

【まえがき】

ななよづき、です。

今話、珍客登場。

わくわくしながら読んで。
意外です。

立ち止まって、七夜月。

夏暑くて冬寒い。春と秋は、それぞれその中間。

当たり前だけれど風情があつて、僕は四季のあることが結構好きだった。

そこに優劣はないが、感想は多分あつて、それがまた折々と境界を引いているように思う。僕だけでなく、過ぎ行く時に思いを馳せるものなら誰でもそのはずだ。

春は言うなれば“変化の季節”で、生徒会副会長に任命されたのもアリスたちと同じクラスになれたのも、それを呈していそうだ。それ以前に、新学期だ。

考えてもみれば、意味は後付けのものだとわかる。

そうやって純粹に四季を感じられる学生だからこそ、一つ一つのイベントを心から楽しめるのだと思う。いや、楽しまなければならぬし、もう一つ、僕は楽しませなければならぬ。

この夏、意気込みを恋愛などにぶつけてみるのも悪くはないだろうけれど、大事なことに、僕は生徒会の副会長でもある。

勉強に励むのは勿論、恋愛を謳歌するのも、思い出を作るのも、相応しい環境というものが往々にして必要だ。

そして、それを創作するのが、我々生徒会の仕事なのである。

とは言え、生徒会はそのままで堅苦しいものでもない。

強制ではないし、取り仕切る顧問もない。温いと言われればそれまでだが、会長の人柄が全校生徒に伝染していつて、カシミーヤ^{アカデミー}上級学校の温かい校風は成り立っているとも感じる。

そういう意味では僕たちがする業務というのは、畑の地均しみたいなものなのかもしれない。

であればこそ、実りの夏にどれだけ笑顔を収穫できるかは見方次第、やり方次第なものも道理なのだ。

前年度は、交流文化祭と公開文化祭がちょうど重なって、かなり大規模なものになったけれど、今年の文化祭はそのどちらでもないごく普通の非公開文化祭だ。

だからと言って、手を抜いていいわけではない。むしろ、無条件的期待の無いところから、どうやって生徒たちのモチベーションを上げるかの設定を練らなくてはならない。

生徒会として難しいのは、予算との兼ね合いだろう。

掛けられる経費が無制限なのであれば、何迷うことは無い、大きな花火でも打ち上げればいいだろう。単純に、そうはいかない。

決められた予算の中で、どれだけ生徒たちの士気をコントロールできるか。つまり、誰もが息を飲むような、あっと驚くような、不確定要素への欲求を露出させられるかの勝負だ。

僕たちに、チャンスは二度ある。

三度に一度は公開文化祭なので、それを除いた二度だ。

一度目の経験上、これからの学校生活を大きく左右する、分岐点になることは間違いない。誰かの運命が変わるとも言える。それくらいイベントだ。

最終決定は校長だけれど、その采配を、会長が握っていると言っても過言ではない。

僕は意見を出せても、決定できるわけではない。

それについては、役職上、言うことは無い。

しかし、その結果について、発言権はあってもいいと思うのだが。

「はい。みんな静かに」

黒板前の教卓で、その場しのぎの号令を張るクラスメイトがいる。一年生の時も同じクラスだった、あの明るいムードメーカーの子だ。確か、成り行きで文化祭実行委員になっていた。

授業中にも関わらず、教鞭を振るうはずの先生が大人しいのは、この科目の主役が僕たち生徒であることに他ならない。

「んではー、ウチのクラスはメイド喫茶に決定ねー」

実行委員がそう言うのと、クラスの男子が「おおー」と大っぴらに期待の声を露わにした。女子も女子で、苦言を呈する人は見当たらず、満更でもない感はある。

僕の隣の席のおよそ二名は、それぞれ単純な表情をしていた。

僕はと言えば、きつと、複雑だろうと思う。

「んじゃ、次はー。メイド喫茶に必要な係決めかー」

実行委員の喋るのに合わせて、板書担当の生徒が書き急せく。焦りからか元々か、殴り書きのような乱雑さであった。

しかし、テンポはそれなりだった。

「係って何必要だろ」

「メイド役がたくさんと……あと、裏方がたくさんやない？ 料理作りの。最初の材料の買い出しとか、部屋の内装するんも要るし……

……あとはー」

「ま、待つて待つて。今書くから。書記が」

別段尋ねたのではないだろうけど、自然、黒板から一番近い席の女子が、流暢な口説で実行委員にアドバイスした。

そう言えば、実行委員に推薦していたのも彼女だったし、二人は仲が良いのだろうか。心なしか距離が近い気もする。

そして、僕は未だにクラスの輪に馴染めていなさすぎる。

「まー、係はこんなもんか。んじゃ、次は誰がどれやるかだね。これは適当にやりたいの皆に選んでもらえばいいか。今年のテーマ、自由”だしね”」

クラスに笑いが起こるが、本当にそのテーマでいいのかと勝手に不安になるし、副会長として若干不甲斐なくもあった。笑われているのは会長なのだろうけど、何となく、圧は感じるべきところだろうと暗示される。

今年のテーマは他でもない、“自由”である。

初めにその熟語を宣告された時は、思わず「深いですね」と相槌を打ってしまった。今考えると、恥ずかしすぎてならない。何が、深いですね、だ。

僕みたいにクラスに溶け込めてない人もいるだろうに。

こういうイベントは下手をすれば、馴染めている人とそうでない人の線引きを一層強固にするのだ。自由とは陰か陽で言えば陽であるし、静的か動的かで言えば動的であるから、どちらにも属さないタイプの人にとってはアウエーなのだ。

いやしかし、会長のことだから、考えあつてのことだろう。

そんな僕の弱音は、クラスメイトたちの笑い声に埋もれて、心に舞い戻って来た。

でも、もしかしたら、誰かには届いていたかもしれない。

そう気付くと、僕の耳が勝手に、隣の友人の口元へとフォーカスを合わせた。

「執事、なんてどうかしら」

それほど大きい声ではなかった。当然、僕に向けられた言葉でもないし、実行委員に向けられた言葉でもない。独り言だろう。

不思議、次の瞬間にはクラス中に木霊していて、終いにはそれが黒板の案に追加されてしまった。そうして、キャスティングは風漬しに、いや、波のように。

何となく、わかっではいた結末。

けれど、きつと彼女は、僕が今彼女と目を合わせられない心情も知っていて、敢えてこうした。無意味に画策はしない性格だ。僕が取るリアクションに、何らかの期待をしているに違いない。

であれば、僕はそれを肯定してはいけない。

そう思った。

「じゃあ、執事役はルートくんね。いい？」

「あ、うん。いい、ですよ」

「ありがと。んじゃ、満場一致い」

快く引き受けるとすぐ、僕の名前が黒板へ書き足された。

さっきまでの殴り書きの文字よりも、気持ち丁寧に書かれているような気がする。僕の名前だけやけに読みやすい。

まんまとしてやられたなど、思わなくもない。

「さすがにルートくん一人じゃきついっしょ。ルートくんはメイドにもなるからね」

「え」

体育会系のノリとは恐ろしい。

「あと二人くらい執事いた方がいいよね。そっちは適当な男子見繕えばいいか」

「……男子の扱い酷いなっ!?!」「……」

男子の内数名が噛みついていたらけれど、その適当に選ばれた人たちとは仲良くできそうだ。

優しい人がいいな、と勝手に期待しておくことにする。

「じゃあ、次はメイドー。メイドはいつぱいいてもいいでしょ。つか女子は全員でもいつか。分け隔てなくね。メイド喫茶だし。交代制にすれば一日中お店回せるしね。男子のメイド希望は顔の審査アリでオーケーにしよう」

「……俺らは分け隔てられてるけどなっ!?!」「……」

「ええねー。でも、一人か二人まとめ役みたいな人欲しない? 午前の部と午後の部で一人ずつ、みたいに」

バリトンのがやを裂くように、黒板がソプラノを跳ね返す。

彼女は合唱部か演劇部だろうか。声が素晴らしく通る。

「あー、確かに。じゃあそれ、料理得意な人にしよう。厨房の監督もやれば大助かり」

それなりに慌ただしい厨房が目に見えかぶ。

その中心に、僕という存在は場違いそうだ。

「そうね。料理得意な人か……。聞いても出づらいやろっし、いっそのこと家庭科のテストの点数で決めてまうとか?」

「甘いね……。テストの点が高いと料理が上手いとは限らないんだよ……」

「や、闇を感じるな」

「そう……。私がそれ。一年の時の家庭科、九十点だったけど、卵も割れん」

「さすがです」

非公開の文化祭とは言え、なるだけ、そういう人に厨房を任せたくはない。

それはクラスの誰もが同じようで、料理下手なクラスと評されて一年間過ごしたくないという意気込みを各々の瞳に感じる。息を飲む音があちこちで聞こえそうである。

それから十分ほどは、苦悩の騒めきが続いた。諧謔の音にも聞こえ得るが、答えが出ないのでは苦悩に相違ない。

さつそく、テーマである“自由”のもつ不自由さが、頭角を現し始めたわけだ。

自由な時、僕は基本的にどうするのかというと、だんまりであった。

ある程度の意志を持ちながら、誰かの回答を待つ。それが楽しかった。

“自由”とは快樂の象徴にもなり得ると、会長が言っていたのをおい出す。

快樂に溢れた場所、その先にあるものは“自由”ではなくて、怠惰による失墜だけなのだと言っていた。快樂とは全く違う、勇気というアプローチで“自由”を手にする、人は成長できるらしい。そんなみんなの成長を促そうという大義名分を、つい最近考えついたらしい。

御座なりなのか真面目なのか、よくわからないあたりが会長らしい。

誰も回答しないなら、僕が、何か面白くないことでも意見しようかと覚悟していると、知った声が聞こえて来た。

小さくて、でも強い。

それこそが、会長の言う勇氣の音だった。

「メイド、やり、ます……っ」

自信なさげにも挙手をして発した声は、一発で黒板まで届いた。

「えっと。グリニツチさん、メイド？」

なるほど。知っていたのか。

実行委員の子は、一年生の時に僕と同じクラスなのだから、ノアとも同じだったはずだ。であれば、ノアが本物のメイドであることも知っているかもしれない。料理の腕前も、調理実習の時に見ているかもしれない。

そのどちらかに該当していたのではないか。

実行委員は、しっかりとノアを見ていた。

そして、ノアはそれに答えたということだ。

僕は会長ではないけれど、「ああ。こういうことか」と思わず頷いてしまった。成長して巣立っていく我が子を見守る気持ちとでも言うだろうか。得も言われぬ喪失感と、際限なく膨張する嬉しさが互いに同居を許している。

あのノアが、ここまで。

なんだか、不思議な心地である。

「あ、そういえばグリニツチさんは、メイドなんだよねー」

「え？ メイド？ マジなん？」

「マジマジ。一年生の時同じクラスで、家庭科の班一緒だったんだけどね。やばいよ。超上手いの。超美味いの。あと、映える。神だよ。料亭並み。料亭行ったことないけど」

「へえええ。リアルメイドがこんな近くに……。一回本物見てみたいと思うとっただけど、まさか同じクラスにいるとは、ラッキーやね。」

んでも、グリニツチさんがオツケーやないとでしょ？ 多分ゆうか、絶対まとも役候補やし」

「うん、そうよー。と、いうわけでグリニツチさん。やってくれたりする？ メイドリーダー。特に良いことって無いと思うんだけどさ」

「ん。いいよ……」

実に珍しいことだ。ノアが条件を挙げないのは。

いつもなら、アリスに目配せなどしていそうなところだけれど、それもない。

巢立ちどころか、追い越されたような出藍の誉れを肌を感じる。別に、ノアが僕から門出したわけではないが、身近な人が変わると驚きはある。

でも、それは僕だけのようで、クラスではどちらかと言えば関心と歓心と感心が、それぞれ混じったような、カオスな歓声が上がっていた。これで、ノアが公の人気者になってしまいそうだった。

「よっし。じゃ決定ね。ありがとグリニツチさん。そしたらー、あともう一人、副リーダーいた方が良くかな。これは男子でもいつか裏方だから」

「自分、さつきから、男子に恨みでもあるん？」

「別に無いけど。あ、でも安心してね。きつく当たるのは好きの裏返しとか、そういうのないから。私、違うから」

「オブラートしいな」

「んま、メイドってやっぱ女の子主役じゃないとだし。あ、そうだ。せっかくだから、メイドリーダーとかの衣装だけちよつと豪華にしちゃおうよ。てか、待って。衣装どうするんだろ？ 借りれるの？」

「確か、演劇部に何着かはあったような気がするけど、クラスの女子全員分はないな。演劇部のを改良してリーダー格に着せて、あとはどっかでチャーターするかーから作ったらええんちゃう？」

「そうするかー」

実行委員と前列の二人のテンポがいいので気が付かなかったけれ

ど、一瞥した時計の針がすでに終了五分前を指しているではないか。特に意見もしくせに、僕は勝手に焦りだす。実行委員の司会進行を見守る担任の先生に、二度三度目配せしてしまった。

その経緯で偶然、アリスと目が合った。

一瞬の出来事だったけれど、一瞬の出来事にしたのは紛れもなく僕だった。

どうしてアリスがこちらを見ていたのか。どうして僕はすぐに視線を逸らしてしまったのか。考え、悔いた。

なかなかどうして。

思うような行動がとれない。何処か、成り行きの調子が狂う。道理の歯車が噛み合わない。あるいは接点の潤滑油が足りない。

この煩悶とする心情を、アリスにすべて曝け出したらスッキリするような気がするの、何故だろう。先生や両親では、きつと解決しない。

夜分、リスと会談したことを思い出す。

直接聞いちゃえばいい。

表現は違ったかもしれないが、リスの伝えたいこととは確かそれだった。

つまり、僕の心の中を覗けるのは本当ですかと、直接、張本人に聞くということになる。それこそ、アリスからすれば『無策』極まらないが、決定力はあるように思う。

心の中を覗けるといのは、覗けるだけであって操作できるわけではない。僕ですら自分の運命などわかるはずもないのだから、他人に予知ができるわけでもない。

例えば今、授業中などに問いかけてみると言うのはアリなのかもしれない。授業中という、ある程度の拘束力がある空間では、アリスも下手な動きは取れないはず。『願い』についての話を公言することは、僕たちの中でタブーなのだから。それこそ、どんな影響が

及ぶかわからない。

アリスは、そんなリスクを冒さない。
であれば

「はい。予鈴が鳴りましたので、今日はここまでです」

僕の決心を解くように鳴ったチャイムに際して、担任の先生が壇上の実行委員を席に退かす。「へーい」とだらしなく席に戻った実行委員は、僕の二つ前の席だった。

チャイムが鳴っている間は至極静かであったが、チャイムが鳴り終わると、途端に賑やかさが戻って来る。文化祭の催し物決めは本日最終授業だったため、このまま帰りの準備へと変遷するからだろう。

それから明日の予定と挨拶が終わって、掃除の時間となるのに、要した時間は相当に歪んでいると思う。

一体何なのだろう。

このところ、時間が経つのがものすごく早い。

何か、歯車の一つでも抜け落ちているのかもしれない。

立ち止まって、七夜月。（後書き）

【あとがき】

ここへ来ての初挑戦。

関西弁キャラ。

合ってる合っていないとかはよくわかりませんが、意外と楽しかったです。

もう少し早く登場していれば、きっと名前を考えたりもしてたでしょうに。

ちよっと不幸な人でした。

次回は、このモヤモヤ、晴れるでしょうか……？

ふと顧みて、葉落月。（前書き）

【まえがき】

はおちづき、です。

二度目の文化祭。

そう言い表すと何か感じるもの、ありませんか？

本編です。

ふと顧みて、葉落月。

熱氣と賑やかさは比例する。

そんな陳腐な方程式を引つ提げて、僕はよくできたタワーホットケーキを席まで運ぶ。お客様の無理な呼びかけを多少無視できるのは、学生クオリティであると言える。

制服なら脚が涼しいから幾らかましだったのかもしれないけれど、このような人の熱氣に中てられては、到底太刀打ちできない。手袋も蒸れてくる。

水を一口飲んで、ふう、と一息つくくと、自分の教室の異様な光景に改めて目が眩んだ。

白黒ゴシックなメイドが多数、うち何名かはタキシードの執事だ。衝突を挟んで向こう側は厨房になっていて、今頃はノアがてきばきと皆に指示を出しているところだろう。そっちはそっちで大変そうだけれど、こっちもこっちで骨が折れた。

一応、午前の部と午後の部で班分けが為されているが、確立されたものではなく、結構自主的な部分が多い。僕もそうだけど、休憩に許可は取らないし、面倒そうな生徒の注文は全面拒否する人も見かける。男子の何名かは、他のクラスへ遊びに行ったきり戻ってこないし。確か、偵察だとか言っていたか。

出来た穴を塞ぐようにして残った者たちの負担は、増えていく。なるほど、そういうことか。

僕も夕涼みに行こうかという所存だったのだけれど。

「あ。ルーだ。やってる？」

一瞬、立ち眩みがした。疲れすぎて、夢でも見ているのではと、思わず自分の頬を抓ってしまった。痛いから、これは夢ではないなんて、安直すぎる。

僕は無意識のうちに、そこへ手を伸ばしてしまっていた。

「な、なんでここにっ!？」

教室のドアを一步出たあたりで、少女の肩を捕まえてそれはどうなのだろうか。

とは言え、今日は“非公開”なはずなのだ。

「驚いた? 今日、日曜日で休みだし、来てみた。そしたら、入れた」

「入れたって……。先生に見つかったらまずいんじゃない?」

いくら在校生の妹とは言え、学校単位からすれば部外者に違いは無い。不必要なリスクを背負ってまで校則を捻じ曲げるなど、あり得ない。

しかし、それに関してリズは一家言あるらしい。

「それは大丈夫。あいつが^{おとこ}困^まりなってくれたから」

「あいつ?」

偶然、捨て駒という名の付き添いでもいたのだろうか。

悲しい香りは全くしない。

それどころか、甘い香りが僕を誘う。

「だーからー。匿^{かく}ってー。……ねえ?」

「匿^{かく}って、と言われても……」

リズの服装は、外出する時によく来ているモノトーンのワンセット。母親に手入れしてもらったのか、髪は艶々していて、瞳にはほんの少し化粧^{けいしょう}つ^つ気がある。所謂、誰かに会いに行く服装か誰かどこかへ出かける服装に見える。

言っなれば、僕の「理想のデートコーデ」かもしれない。

いや、そうではなくて。

ここまで匿われる気が感じられない人を、匿おうとする方の身にもなつてほしくはある。確かに、僕に会いに来てくれたのは嬉しいのだけれど、それ相応の対価は発生するような気がするのだ。

守ってあげたいのはやまやまなのだが、副会長という顔もくはない。

一人でたじろいでいると、やあやあと思覚えのある御仁が久しい面子を率いて廊下の奥からいらした。

「おうおう。やっとなるのうやっとなるのう」

「あ。ルートさん。こんにちは。リズも一緒にいた」

「げっ。もう来た」

「ア、アレン君までいるっ？ なんでだ……」

「しっかりスルーするねワタシを」

非公開文化祭とは字面だけで、実は公開していたとか、そういうサプライズはないだろうかと、会長を睨む。伝わったのかどうかはわからないけれど、何やら首を横に振っていて、否定しているようにも見える。時代劇の殿様のような恰好をしているから、イマイチ説得力には欠けるのだが。

とは言え、リズのクラスメイトであるアレンがここに居ると言うことは、とうとう公開の線が色濃くなってくる。そのうち誰かの保護者が遊びに来てもおかしくはない状況だ。

とりあえず、詳細は一緒にやって来た関係者に聞くとしよう。話したそうにしているし。

「いやあ、まあ、大変だったよ。うちにミドルの学生が遊びに来たって聞いてさー」

「ぼっ……俺は、リズが『公開文化祭らしいよ』と言うので、ついでただけです！ リズは昇降口のあたりで姿を消すし……」

「そうそう。んで、この謎の超絶イケメン、アレンくんは女子が群がらない訳はない。昇降口に人だからができる想定外の事態に、生徒指導部が動いたらしくてね。それで、そのままアレンくんを部外者として生徒指導室に拉致監禁。聞きつけたワタシが駆けつけて、

見事救出したというわけさ」

「ちよつとよくわからないんですけど」

リスが目的達成のためにアレンを利用したのは理解できるとして、拉致監禁からのくだりが適當すぎやしないか。聞いたまま解釈すると、会長が会長の職権を乱用したように受け取れなくもないのだが。目を細めていると、「まあまあ」と会長に丸め込まれた。

「なんにしたって、今日は文化祭。楽しもうじゃないか。はっはっは！」

溜息を一つつこうと息を吸った矢先の出来事。

「ななななな、なんで、来たのっ!?!」

教室奥手の厨房の方から、新米リーダーの声が聞こえてきた。元々、余り大きい声を出す方ではないけれど、ここ最近をよく聞いている気がする。

大人しい人も黙っていられない事件が多発しているということか。生徒会としては、それこそ黙っていられない。

すたこらと現場に急行すると、兎の群れのように会長たち数名も後ろについてきた。

配膳窓口だと邪魔になるので、厨房側の扉から直接アクセスした。「どどどどど、どうして……ここに……。今日、非公開、だよ……?」

狭いので、厨房に入るとすぐ状況が掴めた。

また、予期せぬ来訪者である。

それも二名いる。

「え、えつと……ノアさん、大丈夫?」

ノアはその来訪者のことを知っていそうだったけれど、すでに泣きそうな様子だったので、間に割って入る様にして尋ねた。その時、

来訪者の影が視界をちらついたらけれど、どうやら二名とも女性らしかった。

保護欲を掻き立てられそうになる潤んだ瞳にか、先刻の心からの叫びにか、周囲のメイドの視線はノアに釘付けだ。これは、ノアの苦手な状況なのではないだろうか。

背中でも摩ろうかと寄ると、小さく頷くので、これは躊躇われる。

「だ、だいじょぶ、だけど……」

「そ、そう？ なら、いいんだけど」

「なら、よくない」

厨房の入り口に引つかかっていた会長が、ずいとな前に出てくる。

そう言えば、確かに、よくはない。

「そ、そうですね。えっと……。ノアさん……の、知り合いの方？」

まず、得体の知れない者という称号を取り払いたい。

現時点で実害はないのだから、処遇はそれからでも遅くはないはずだ。

「ん……。お母さん……」

「なるほど。お母さん。お母さんか……。えっ？ お母さんっ!？」

自分の中で、何かのステータスの優先度が一気に上がった感じがした。

次の瞬間には、地面と向かい合って、直っていた。

「は、初めましてっ。ルートと言います！ いつも、お世話になってます！」

「ルート……?」

ノアにタキシードの裾を摘まれて、冷静さを欠いていた事実が判明する。ノアの冷ややかさがまた、肥大化した羞恥心にピリピリ沁みる。

よくわからない勢いで下げていた頭をゆっくりと擡げて、僕はそれ相応の挨拶へと対処を変えてみる。初対面なことに変わりはないし、お世話にもなっている。ただ少し、プロポーズしたみたいで恥ずかしかっただけで。

文化祭特有の空気に助けられた感はある。

「ふふつ。君、面白いね。タキシードなんか着てるし」

「こちらこそ。お世話になっております。ルート様」

「あ、はいっ。えっ、あれ？」

顔を上げると、そこには世にも不思議な光景があった。いや、ノアも気にしていなかったし、別に不思議はないのか。

同じ顔が二つ、そこにあっても。

僕から見て左の女性は黒を基調としたゴシック調、今クラスに犇んでいるメイドの様相にかなり近い印象の洋服を着用している。右の女性も地は黒でまとめられているが、パーカーに七分丈と、ジャンルはモダンでポップな印象である。声も、色は同じなのに塗り方が違う、そんな印象を受ける。

双子、だろうか。

その前に、どちらだろうか。

「ノ、ノアさん」

「なに？」

「お母様はどちらで……？」

その質問には自分が答えようとばかりに、二人の来訪者が訴える文字通り、口を揃えて、彼女らは言った。

「自己紹介がまだだったな。わたしがノアの母親の、リノ」

「わたくしは、ノアの母親のレノ、にございます。いつもノアがお世話になっております」

あまりにテンポが良いので、一瞬、そういうアトラクションかと思った。

「なるほど……！」

心の中でわからないと思いつつも、はにかんでおく。

二人とも美人な雰囲気、童顔なところや優しそうな眼差しはノアを彷彿とさせるけれど、姿勢というか態度というか、どこか違うなとも思った。家庭事情は知る術もないが、双子というポテンシャルは確かなものなだろう。

話を戻すが、二人は一体どうやって校内に侵入したのだろうか。現学生であるリスやアレンなら忍び込める道理があるが、兩名とも大人の女性だと一目でわかる。在校の者からすれば、不審者相違ないと思うのだが。

もし、筋道を通すのなら、『誰かが許可をとった』ということになる。

二人に会った時のノアの反応と、二人がノアの母親であること。二点を加味すると、答えは見えてくるような気がする。

「二人は、あたしが呼んだのよ」

まさに狙っていたかのようなタイミングで、厨房へ戻って来るメイドがいた。

そのメイドは、お盆を片手に所作華々しく、それでいて腕まくりなどして、メイドらしくなかった。メイドの枠に収まりきらなかった、と表現するべきか。

「ア、アリスが呼んだの……？」

必然か偶然か、他の驚愕と被った。

思わず、ノアと目を合わせて、双方照れた。

アリスは「はあ」と溜息をついて、呆れた表情でいた。

「ええ。そうよ。厨房のサポートとして、学校に許可をとったわ。ノアにはサプライズで黙っていたけど、メイド役のミーティングの時に提案したのだから、あなたも聞いていたはずだけど？」

メイド役のミーティングという単語に、その光景がじわりと蘇ってくる。

今は執事をしているが、僕はメイド役もやらされているから、両方のミーティングに出席している。その記憶はある。

ああ。そう言えば。

誰かが、「強力な助っ人を呼べたら呼ぶ」というようなことを言っていた気がする。

しかし、それはアリスだっただろうか。

とは言え、思い出せない僕に非はある。

「あ、ああ。そうだったんだ……」

「全く。ちゃんと聞いてなさいよ」

「ご、ごめん」

「まあまあ。ルーがニブチンなのは今に始まったことじゃないじゃん」

「うう……」

妹の言葉には思い当たる節もあって、言い返せない。

多少歪んだ文化祭の空気を立て直す一声は、やはり生徒会長が発した。

「感動の再会？ も果たせたことだし、そろそろお店も再開した方が良いんじゃない？ 接客のメイドさんたちが音をあげてるよ」

「あ、ほんとだ……。ノア、やらないと……」

「手筈通り運びはあたしたちがやるから、調理をお願いするわ」

「了解致しました。ふふつ。今日はノアが料理長なのね。よろしくね！」

「んじゃ。わたしは盛り付けでもするか」

「俺も何か手伝いますか？」

「じゃあ私は試食」

その後、すぐに厨房はわっと賑やかになって、また元の文化祭の教室が帰って来た。

それから、会長は僕のところに来て「頑張れー」と肩をポンと叩いて、去っていった。

こつこつとところを見ると、生徒会長の凄さというものをひしと感じる。それに比べると、僕はまだまだ成長し足りない感がありそうだった。

ノアのような目に見える成長というのは、どうすればできるのだ

ろう。成長したら、僕はどうなるのだろう。リズは喜んでくれるだろうか。

メイドも執事も、少し疲れた。

考えるのは、夕涼みの後でも遅くはないか。そう思いたい。

「ふう……。涼しいな」

夕涼みというほど日は暮れていないけれど、黄昏時とはこのことを言うというのは決して過言でない。打ちひしがれるのが暮れなずむ街でないと、少々格好悪いけれど。

今年の文化祭は非公開であるから、屋上に誰もいない。数日間をまつりごとに費やすのでないから、大きな休憩所も必要ないのだろう。

去年、公開文化祭という一大テーマを体感したからか、緊張や不安というストレスはあまりない。それはつまり、新鮮味が無いとも換言できて、副会長という身上にありながら、どこか手を抜いてしまっている気もしないでもない。

初めての緊張感がなくなってしまう、所謂“慣れ”に負けて怠惰に走ってしまったということ。それは会長の掲げた「自由」というテーマに潜む、一番の難敵であるとわかっているのに。

少し考え方を変えてみよう。

今回の文化祭と去年の文化祭の最大の違いを挙げるならば“規模”に他ならない。

では、規模とは何か。

ここでいう規模とは、継続時間か。

去年は三日行われた。でも、今年は一日である。

そう言われると、確かに特別なものに思えてくる。

本来なら、あの三日間を今日一日に集約しなくてはならないのだ。それなのに僕は、こんな大樹の前のベンチで、だらり悠長にしていともいいものだろうか。

庭園中央のこの長寿大木なら、答えを知っていそうなものだけだ。

「あなた、この場所好きよね」

その人は、ふわりと僕の不意を攫って、さも当然のように隣に腰かけた。どこかで嗅いだことのあるシャンプーの匂いは、今日のメイドリーダーのそれと酷く似ていた。

その繋がりとは、今の僕の心境を容易に縁取ってしまう。

「わっ、びっくりした。なんだ、アリスか。とか、言いそうな顔ね」

「ア、アリス……」

ちょうど、人一人分、僕らの間には距離があった。

それは僕が無意識に、不意に作り上げたものか、アリスが意図してそうしたものか、判然としない。かつて、その間にはノアが収まっていたけれど、それはもう、なにか不和すら感じてしまう。

陣取るのであれば、僕はアリスと、アリスはノアと、隣り合っていないなければいけない気がする。そもそも、僕が場違いであるとも言える。

結びつけるはずの力は、いつか距離を押し量る道具に成り下がる。と、そう言ったのは誰だったか。

自覚した瞬間から、僕は解答欄を間違えている気がする。

「こ、ここにいるって、よくわかったね……」

「あなた、何かあるとすぐこじやない。この、人の少ない、屋上庭園」

「ま、まあね」

アリスは本来、自然主義でない。

それなのに統計とは、矛盾しているではないか。

「アリスも休憩？」

「ええ。そんなところよ」

「……………」

沈黙が毒のように不味い。これは聊かおかしなものだ。

毒針のように僕の心に突き刺さる、あの冷徹な金言は、一体どこへ行ったのだろう。

あるいは、それをため込んで、一気にぶつけようという算段か。

あり得ない。

確かに、口は悪いかもしれないけれど、アリスは悪い人ではない。それはノアも知っているはずだ。リスが一度好きになっただくらいだ。つまりどういうことか。

「……………」

「……………」

わからない。

わからないが、不味い。

「あ、あははは……………」

「……………」

「へ、平和だね……………」

「……………」

アリスは何も言わない。

僕の作った賄いには、手を付けてもくれない。

「静か、だね……………」

「……………」

その時だった。

予鈴は今日、鳴らない。

「嵐の前の静けさ……かもしれないわね」

明らかに、僕にだけ聞こえるような音量であった。僕以外には聞こえないと言っても過言ではない。ここに僕しかいないからというよりか、そう言った方がニュアンスが近い。

その言葉はアリスが考えてアリスが発したのだから、アリスも聞いていただろう。

しかし、アリスはその言葉を呟くと、僕の返答も待たずにベンチを後にしてしまった。

アリスがどこまで離れても、僕は不思議と不和を感じなかった。

一人になった屋上に吹いた夏風は、往々にして生温いはずなのに、これは飄々と冷たい。去年の文化祭、この場所で僕が感じた息吹は、こんなにも機械的であつたらうか。

ふと顧みて、葉落月。（後書き）

【あとがき】

割とオールキャストな今話でした。

私は、人物ごとに「人称」を変えていますので、書分けは意外と楽だったりします。読み手の混乱を防げる反面、ある程度のメモリを要求するので、あまりに多くの人物を出すことはできないのですが。

そう考えると、現実の人間の人生ってすごい短く感じますよね。

文章に起こすと、他人から見ても区別がつくぐらいの人数しか登場しませんから。

いやあ、ラノベの主人公ってすごい。

長生きしそう。

次回は、文化祭も終わって、遂に嵐が……？

試してみても、菊月。（前書き）

【まえがき】

きくづき、です。

なんだか、この話から始まるような気がします。
ルーマスが。

どござ。

試してみても、菊月。

あれは、もう一月も前のことなのかと過去に思いを馳せるのは、僕にしては少々センチメンタルが過ぎるか。とは言え、副会長としての成功というには、聊か事足りない。愈々、手応えも無い。いや、どうしてか時間が薄い。

時とは本来、薄いと形容されなければ、どうもそれが言い得て妙に感じるのだ。

それは、こうして友に呼ばれて待つ時間を思えば、尚のこと。

「……………」
鈍色空の下、長時間、それも屋上で待たせるような、そんな薄情な人を、僕は知らない。しかし、約束を放棄して帰りもしない。

ああ。そう言えば。

「屋上で待っていて」とだけ言われたのだった。
言葉の綾は怖い。

アリス、ルートのこと全部知ってるんだって。

思えば、あれも言葉の綾なのかもしれない。

ストレートな解釈でいけば、アリスはルートのことを全部知っている。

捻くれた解釈なら、なんであろう。

「……………」
これは訳が違う。それこそ、現実逃避他ならない。

ノアは確かに、『願いの夢』についてだと前置した。『願いの夢』
に關しての話であり、それでいて、アリスはルートのことを全部知
っているのだ。そのセリフを、『アリスに全部知られているノア』
が話したのだ。

信じがたいが、それが現実であるということだ。
いや。

夢であるとも……言えないか。

久し振りにアリスの顔を直視すると、目が覚めたようになった。

「ごめんなさい。日直の仕事が長引いたわ」

「あ、うん。大丈夫」

今来たところだと、僕は仰々しくお道化てみせる。

アリスは「あらそうなの」と重ねて詫びて、さり気なく僕をベン
チへと誘導した。

樹木生い茂るこの広い屋上に、ベンチはあれ一つしかない。

ベンチへは互いに譲りあうこともなく、自然な流れで座れた。僕
たちの間には、頑張れば子供が一人入り込めるくらいの空間ができ
た。それが広いか狭いかは、僕には測りかねる。

「……………」

「……………」

アリスが黙るので、呼び出しておいてなんだとは思わなくもない。
でも、この沈黙も嫌いになれない。

本当に久しぶりだと思ってしまったのだ。

アリスと二人きりの空間が。

アリスはいつも本当に良い匂いがする。髪の毛は艶めいていて美
しいし、顔のパーツ一つ一つが宝石のように綺麗で、これをお手本
にしてできたものが人形なのだと言っても過言ではない。羨ましい
と思う反面、自分がどう見られているか不安になる。狼狽えた心
とどめをさす言葉は、僕の意識を揺さぶる。

あまりの正しさに、人によっては、好意が芽生えてしまうことも
あるだろう。

誰かがそうであったように。リズがそうであったように。ノアがそうであったように。

けれど、僕はそうならなかった。

「どうしたの？ こんなところに呼び出して」

不思議だった。

一本の紐で引つ張られたように、すらりと言葉が出て来た。

言い淀まないアリスは、いつものアリスらしかった。

「そうね。伝えたい事があるの」

耳だけでなく、瞳にも訴えられた。

これまた不思議だった。

「実は、あたし……」

ここ最近、一瞥すら恐れていたのに、今はこの距離で目を合わせても何とも無い。

期待も無ければ、不安も無い。

「あなたのこと……」

間違いない。

やっぱり、アリスは

「全部、知ってるの」

「……………」

ああ。そうだ。

次に続く言葉は、その説明だと僕も知っている。

「あなたの思考、あなたの感情、あなたの記憶、あなたのことすべてよ」

特に意外性もなかったから、僕はこの解放感に肖って、アリスに尋ねる。

相手はアリスなのだ。恥ずかしいこともないだろう。

「それが、アリスの『願い』……なの？」

アリスは答えるのに息を一つ飲む必要があった。

「そうよ。ノアから聞いているでしょう？ あの言葉は真実よ」

「僕の全部を、アリスが……」

告白して疲弊しているのかもしれないけれど、溢れる僕の質疑に
関してアリスが触れないのだから、答えてくれるという解釈でいい
のだろう。

「どうしてか、聞いてもいい？」

「ええ。いいわよ」

「アリスは、どうして僕のことを？」

「多分、好きだったからよ。あなたのこと、王子様だと思っていた
もの。小さい頃」

「僕が、王子様……？」

王子様はどちらかと言えばアリス自身な気がするのだけれど。

そのアリスに王子様と称されるとは、多少複雑である。

「あなた、あたしと会ってるのよ。エレメンタリーの一年生くらいの
頃に」

「一年生？ って、確かまだ、クラスが違ったんじゃないっけ
？」

「ええ。会ったのは公園よ。あたしが虐められてるのを、あなたが
助けたのよ」

「公園……」

エレメンタリー時代の光景がフラッシュバックされるけれど、そ
れほど鮮明でない。思い出はセピア色なのかもしれないけれど、そ
こにアリスがいると思うと、なんだか少し暖かい感じがする。

肝心の当該記憶にはかすりもしないのだが。

どことなくアリスの表情が悲しく見えるのは、何はともない、ご
く自然なことだろうか。

「ま。そうよね。あたしはすぐにその場を離れたし。覚えてなくて
も無理ないわ。逆に、覚えていたらどうということも無いし」

「ごめん……」

「ええ。いいわよ。それより、あの時はありがと。助かったわ」

「あ、えっ、うん……。どういたしまして」

直接的でないにしろ、一先ずこれで、アリスが『願い』を叶えた理由がわかった。アリスのことだから、実際のところは、僕のことを知ったら面白そうだとかそんな適当な理由かもしれないけれど、でも、それでもいい。

僕は今まで、アリスと居て楽しかったから。

「それでね、アリス……」

「ええ。わかってるわ。でもその前に、一つ約束よ」

アリスも勘付いている、というか『知っている』のだろう。

その上で前提条件を課すわけだ。飲み込もう。

「約束？」

「あなたは、それについて強く言及しなくていいから」

「わかった」

とは言え、僕にはもう一つ確認しなければならぬことがある。

それは、アリスの彼女ノアについてだ。延いては、アリスの策になるだろうけど。

問題は、どうして間にノアを挟んだか。『願いの夢』と前提させてまで、どうして僕に意識させなければならなかったのかということ。

今になって僕を呼び出すということは、初めから暴露する気ではいたのだととれる。アリスともあるう者が、暴露するつもりでいたのならば、僕相手に緩衝を挟む必要は無いだろう。策士ではあるものの、高みの見物をして笑うような性格でもないし。

つまり、そこにはアリスなりの思惑があるはずなのだ。

「言って通じるかはわからないけれど、あたしは『願い』の力が及ぶ範囲を知りたかったの」

「『願い』の範囲……？」

「前に少し話をしたでしょう。『願い』にはいくつかルールがある

って」

なるほど。そういうことか。

僕が『願い』について触れる必要がないと言うのは、【『願い』が叶えられる状態を他人にいられてはいけない】からか。そんなルールを律儀に信用するアリスのことを、アリスらしいととるかアリスらしくないととるか。

僕は今、前者だった。

自然、心拍数が上がる。

「じゃあ、アリスはその『願い』のルールが及ぶ範囲を検証してたってこと？」

「ええ、まあ、そんなところね。それは手段であって、目的ではないけれど」

つまりこういうことだ。

僕がノアに「アリスが『願い』を叶えられる状態だ」と伝えることで、アリスに何らかのペナルティは生じるか。今回は安全策を取ったのだろう、ノアが僕に「アリスが『願い』を叶えられた状態だ」ということを伝えて来た。

アリスは、アリス自身でもって、一つの仮説を実証したわけだ。

安全策とは言ったが、実際はそこに安全も何も保障はない。ペナルティが何かもわからないのだから。もしかすれば、それはこれから起きるのかもしれないし、もう起きていて、気付かないだけなのかもしれないし。

『願い』とはそういうものと、理解しているつもりだ。

けれど、アリスはそれを手段だと言った。まだ続きがあると言う意味だ。

では、目的とはなんなのだろう。

「アリスの目的って……」

『願いの夢』の正体を掴んで、何かしようというのだろうか。

それとも、『願い』の力を残した僕に、暗に指示しようとしているのか。

アリスが一つ息を吸って、それから吐いたのは、驚天動地だった。

「大事なものが消えたのよ。あなたの周りで」

その言葉に、思わず制服ポケットを探ってしまった。消えたと言われているのにも関わらず探索行動をとってしまった僕は、得てして、その事実気付いていないということ。

アリスは僕のする反応も、当然見抜いているようだった。

「それが何かまではわからないわ。でも、何かが失われているのは
確実よ」

アリスの瞳は、虚偽を映しているようには見えない。

それ以前に、アリスがこんな大それた嘘をつくはずがない。

困惑を隠せない僕に、アリスは提案してくる。

「それを信じるか信じないかは、あなたが決めて。決めたらうえて、
あたしの話を聞いて」

言う通りにするしかない。

でも、僕は信じようと思った。

今、僕のかつての『願い』をアリスに話したら、きっとアリスは
信じてくれる。僕をすべて知ったアリスが、僕だからこそ告白して
くれたのではないか。

始まりは 目的は、恋心だろうと友情だろうと何でもいい。

アリスが僕を必要として、僕がアリスを必要とする。

それが親友なのだと思うから。

だから僕が一つ頷くのは、覚悟を決めたと言う意味だ。

「話してアリス」

「ええ。まず経緯から説明するわ」

「うん」

「あなたも勘付いている通り、ノアがあなたを呼び出したのは、あ

たしが指示したからよ。さつきも言ったけど、それは少なからず『願い』の範囲を知っておきたかったから。こうして、今、あなたに事実を告白するためのリスクヘッジね」

こういふ真面目な話をするとき、アリスは大抵距離をぐっと縮めてくる。

今までは信憑性を高めるためだと思っていたけれど、違う。

これは、アリスがアリス自身の不安を整理するためにしているのだ。自分は相手を信用しているから、相手も自分を信用すべきだという理屈で。優しく解釈するなら、『寂しさを紛らわせる』ような感じだろうか。

「今日まで、あなたに何も言わなかったのは、ただの様子見よ。特に、あなたに圧をかけていたとかは無いわ。でも、結果としてかかってたら、それはごめんなさい」

「ああ、うん、いいよ。大丈夫。それで……？」

アリスは意外と臆病だ。

その身に纏うベールは、美しくも儚げに。

「ええ。どうしてそんなことをしたかということね。それは、三月まで話を巻き戻すことになるわね」

「三月？ それって、ノアさんが僕に……」

「そうよ。ノアのおかげで、その辺の記憶は印象深く残っていきそうね。まあ、正しくはそれよりも少し前のことなのだけど」

「それよりも少し、前……？」

終業式、卒業式、冬休み、と記憶を遡っていくが、特に思い当たる節というのは存在しない。ここは、「存在しない、気がする」と言い添えるべきか。

来る日に、一体なにがあったのだろうか。

僕はそれを知らなければいけないはずだ。

「正確な日時まではわからない。けれど、その、ある日の朝。あたしは、途方もない喪失感に襲われたの。身の毛も弥立つ、気が狂いそうになるくらいの悪寒とともにね。その時、一瞬でわかったわ。」

“ 忘れた ” っ て

途方もない喪失感と、身の毛も弥立つ悪寒。

記憶を抜き取られると、人間はそんな感覚に陥るかもしれない。有事の表現としてはあまりに至妙で、恐怖というよりかは畏怖の念を抱かざるを得ない。

「 僕は、何かを、忘れている……？ 」

忘却とは、そもそも人間が持つ能力でもあるし、現実味は逆にある。

でも、僕が忘れたのはきつと、もつとずっと大切な事だ。

失くしたら泣いて叫ぶような、心の底から必要なものだとということ。

そんなものが僕の中から消えたというのに、僕の心は、これ一つも痛みがない。

嫌な汗が背中に滲んだ。

「 どうしてそうなったかは、まだわからない。けれど、一つだけ、あたしが知っていることがあるわ。いえ。これから知ることなのかもしれないわね 」

それは僕を通してか、それともアリス自身の経験でだろうか。知り得ないけれど、アリスの口調には何らかの覚悟を感じた。少し震えていたから、そう聞こえたのかもしれない。

僕は一つ、息を飲む。

「 『 願い 』 は、目的が達成されると効力が消滅するかもしれない。

実際、あたしはもう、ノアの思考は覗けないの 」

つまり、それは『 願いの夢 』 の中で触れられた項目の中には無かったルールだという認識になるだろうか。いや、ルールというよりかは、性質というのが正しいかもしれない。

アリスが淡々と言うので、僕もいちいち単語単語に気兼ねせず、意味を追いやすかった。

「あの家出騒動で、あたしはノアを一生愛すると誓ったの。キスもしたし、その後も最後までしたわ。ノアもあたしも、かなりの決断をしたと思う。どの段階の行為がトリガーになったかはわからないけれど、その時確かに、ノアの『願い』の目的は達成されたように感じたわ」

ノアの『願い』は、『アリスに自分のすべてを知って欲しい』というものだった。

その目的は聞かずとも想像に易い。

すると、アリスが言いたいののは、その『願い』の無効化による弊害で僕の周囲から何かが失われた、ということになる。常時発動していた『願い』が、目的達成とともに打ち消されたために、僕に知覚されなくなっただと。

確かに、一理ある。

でも、これは想像に難い。

「もう一つ。単純な話よ」

話には続きがあるらしい。

正直、もう予想の範疇ではない。

「『願い』のルールを破ったから、そのペナルティとして、存在ごと抹消された……とかかもしれないわね」

それは頷くしかない、無否定要素の真理である。

しかし、少しばかり非現実的かもしれない。

一つ間があつて。

「あなた、アレンって子、覚えてるわよね」

「ああ、うん……」

それは、リズのクラスメイトの男の子の名前だ。顔も思い出せるし、声もイメージできる。でも、間違っていない保証はない。

僕の返答に覇気は宿らなかったが、アリスは続けた。

「あの子が口にしていた姉の名前。あたしから無くなったのよ。あ

たしはあなたを通して思い出せた。けれど、あなたとアレンはそんなことをするまでもなく、忘れずに覚えていた」

レーアのことを言っているのだったら、確かに記憶にある。

でも、去年の合同文化祭の時に会ったくらいで、それ以前もそれ以降も接点は無い。

そもそも何故、合同文化祭の時にレーアがこの学校へやって来たかは知らないが、それはそれで間違っていないはずだ。重症項目に関しては、すべて会長が決めたのだから。

それならば、アリスからレーアの名前が無くなるとは一体どういうことなのか。アレンは忘れずに覚えているとは、一体どういうことなのか。

この疑問が湧く中心点に、不可視の黒い点があるような気がするのは気のせいだろうか。

「あたしも、あたし自身の経験で言っているわけじゃないから、確かではない情報になる。でも、この『願い』の力が、途轍もなく不安定であると、あたしは思うの」

「そう、だね……」

やっぱり、そういうことなのか。

僕が『願い』を叶えられる状態にあることを知っていて、アリスはその使用を自粛するよう暗に諭しているのだ。要するに、『願い』を叶えられる状態を知られるというのは、僕主観でもアリス主観でもなく、第三者主観であるということ。

銘々の心の内にだけ締まっておくことで、『願い』は共有できるかもしれない。

でも、何故だろう。

何故、自粛すべきなのだろう。そんなルールがあるのは何故だろう。誰が決めたのだろう。ルールを守らないとどうなるのだろう。本当に消えてしまうのだろうか。そもそも、『願い』とは何なのだろう。どうして、叶うのだろうか。誰が叶えるのだろうか。

僕は、どこまで知っていいのだろうか。

僕は、どこまで知っているのだろう。

「ねえ、アリス。結局、『願い』ってなんなの？ 誰かの幸せのために叶えても、ダメなものなの？ どうして、消えたりするの？ 誰がそんなことしてるの？ それを、僕は知りたいの？ 僕は知ってもいいの？ ねえ、教えてよ！ アリス！」

「ちよつ、やめて！ 痛いわよ！ 落ち着きなさい！ ルートっ」
僕がいつの間にかアリスの腕を掴んで脅迫していたことも、僕が忘れた大切なことも、何もかも知らないでいる自分が憎くなる。痛みで思い出すのなら、それでいい。誰かを傷つけているとというのは、気付くか気付かないかの違いであって、痛みの総和の閾値でないのだから。

すべて知っていそうなアリスに、腹が立ってしまうのも、今の僕では仕方がないことなのかもしれない。

「ごめんアリス……。本当にごめん……」

「い、いいわよ。別に。本当に嫌だったら、思い切り頭を打つわ。そして、その後『襲われました』って吹聴するかしら」

「痛くなかった……？」

「……………」

「ごめん……。ごめんなさい……」

「なんて答えればいいのよ、全く。ああ、これじゃ、昔のあなたに逆戻りね」

「えっ？」

昔の僕、とは一体誰のことを言っているのだろうと、一瞬戸惑った。

けれど、僕は案外すぐそこにいて、その周囲にはアリスもノアもリズも、誰もいない。僕と黒い枠組みだけを残して、皆成長して進んでしまっていた。

取り残された僕はまた、誰かに贖罪していたかもしれない。

「ここ最近のあなた、結構良いと思っていたのに。残念ね」

「い、ごめん……」

言葉は見つかるものではなく、見つかる手間を省けるものだった。それが、僕の逃げであり、選択でもあった。

アリスは、そんな僕を面白がって玩具にする節がある。とはいえ、アリスは聡明で温和な女性だ。それでも、片付けは僕より煩雑で、それでいてスピーディーなのだ。

「謝らないですよ。リズが可哀想じゃない」

「う、うん、そうだね。ごめ……じゃなくて。ありがとう、アリス」

「それでいいのよ。気持ち悪いわね」

「酷いっ」

記憶の旅から戻って来るまでに、一呼吸あった。

秋の匂いが 雨が滲みこんだ桜の匂いがした。

「十二月十二日」

「えっ？」

唐突に聞こえたのは、本格的な冬の入り口あたり。

「あの子の誕生日よ」

「あっ……」

誕生日と言われて、ピンと来た。来てしまった。

十二月十二日はリズの誕生日だ。忘れていたわけではないけれど、まだ三カ月も先のことになるので、一番に意識できなかった。意識しないよう、潜在的に抑え込んでいたのかもしれない。

そう。

リズは、今年で『十五歳』になる。

「あなたがどうなのかは、あたしにはもうわからない。けれど、あたしも、ノアも、ここに居ない誰かも、皆関係しているの。あの子が、『願い』に関係しない確率って、限りなくゼロに近いと思わない？」

あれだけ身近にいる好きな人のことだと言うのに、全く考えてもみなかった。

僕も、アリスも、ノアも、『願いの夢』を見て、それから『願い』を叶えている。都市伝説を信じる信じない、強い『願い』の有無すらも関係なく、それは果たされている。

リズがその例に外れることは、あり得ない。これは絶対と言っても過言ではない気がする。

とは言え、だからどうだということでもないともし言い切れる。今、一つ言えるのは、「備えあれば患うれいなし」だろうか。

「あなたがどうするかは、あなたが決めればいいわ」

「アリス……」

何となく、分かる気がする。

アリスと感覚を共有していた僕だからこそなのだろう。

アリスはもう、僕のことを、何も知覚できない。

だから、言わなければ伝わらないのだと、僕は「普通に」そう思った。

「ありがとう。僕、頑張ってみるよ」

アリスは僕の顔を見て微笑んで、それから言った。

あまりに毒気の無い笑顔に、僕の心は大きく揺さぶられた。

ノアがアリスを選ばなければ、もしかしたら、僕はアリスと付き合っていたかもしれないなど、少し笑えた。

「どういたしまして。ありがとう。頑張つてね。あたしの王子様」

試してみても、菊月。（後書き）

【あとがき】

ルーマスらしさを構成する「ファンタジック成分」の濃い、今話でした。

心理学、哲学、天文学、通じて形而上学。

それぞれについて研究してきましたが、思わされるのは、どれも的を得ているようで得ていない。逆に、得ていないようで得ているということでしょうか。これは物理や幾何にも通じるものがあると思います。

答えとは、無いようでいてあるように私は思っています。

つまり、「心」とは計算で解答を作成することができるものだと。

たった一つの解が、人間には解けない。

解けるとすれば、それはやはり人間の「心」だと言う矛盾。

逆に、代入すれば0か1になるという矛盾。

でも、それを解く方法って、たくさんあるんだと思います。

次回は、学生最大のイベント始動。

往かないで、時爾月。(前書き)

【まえがき】

しぐねづき、です。

今話は短め。

エンピ。

往かないで、時雨月。

まだそんな季節でもないだろうと、僕たちの若さに感けて、体育館にはストーブの一つも焚かれない。そこまで寒くないと高を括っていた非がある僕たちは、反骨心を燃やすように犇いて暖をとろうとしている。

防寒の自由は認められていたけれど、生徒会副会長という“顔”である手前、模範を貫こうとした。して、失敗した。

この時期の体育館は中々寒い。足首が冷える。

せめて、ブランケットでも背負って来ればよかった。

そんなことを考えながら、学年主任の長い話から耳を遠ざける。主任は大体いつも、同じ話を繰り返す。ためにならないことは、やらなくてもいいと。であれば、無限ループする当該人の説教ほど、やらなくてもいいことはないはずだ。

さて、そろそろ収束の目処が見えてくる頃。

教頭が二度咳き込んだら、教師連中は誰も意志を貫けない。

「はい。それでは、一度座ってください」

長話が終わったと思うと、今度は体育担当の若い女性教諭が出てきて、僕たちを冷たい床に座らせてくれるらしかった。善意が見えない。

どっこらせと腰を下ろすと、列が程よく崩れて、僕の隣にノアが来た。一クラス二列編成で並んでいると、時々ノアと隣り合う時がある。

僕とノアの間には、先月先々月までの見えない壁は一切なくなっ

ている。それどころか、文化祭で成長したこともあって今までよりもかなり積極的に、距離が近くなった気がする。会話も途切れたりしない。

そんなこともあってか、ノアは僕に密着するようにわざと詰め寄ってきて、「寒いね」と一つ無色の息を吐くのだった。生徒会副会長は顔いて微笑み返すくらいしかできない真面目人間である。アリスに見つかったら殺されるかもしれない。

ああ。でも、もう、誤魔化せば誤魔化し切れるのか。

「では、結構寒いので、手短に」

彼女の言葉には、教頭に睨まれないようにという意味もあるだろうか。

確か、その先生は僕たちと年齢が十も変わらない。僕たちの気持ちをわかってくれるという意味では、中年の主任よりも信頼がかける。それ以前に、とても優しい先生で、生徒人気は頗る高い。

だから、皆結構すんなり言うことを聞く。

そういう場面があると、会長とどこか似ているなと思わなくもない。

「来月に控えた宿泊学習ですが、予定通り行われることが決定しました」

それが今日、体育館に集められた理由だ。

宿泊学習とは、その名の通り、遠征した土地で学友たちと寝泊まりし、その地域特有の気候だったり言語だったりとかを、実体験に基づいて学習する催しだ。

というのは建前で、実際は、クラスメイトと小旅行に行けるといふ息抜きのイベントと捉えている生徒が大多数だ。例外なく僕もその一人であるし、もしかすると、先生も引率を楽しみにしているか

もしれない。

家族以外の人と、知らない土地で、三日三晩も共に過ごすのだ。特別以外の何物でもないだろう。

二年生たちががやがやと盛り上がりだすのを、「はいはい」と先生が制す。気持ちはわかるけど、これはあくまで学習の一環なのだとはいだけである。

「それでは、これから皆さんには班を作ってもらいます。何人でも男女混合でも、別クラスでも、特に制限はありません。ただし、必ず二人以上であること」

言う通り、外国へ行って個人行動というのは、あまりに危険すぎる。引率する先生方も、各人で散らばられると監視も難しい。

班にしてしまえば、大所帯で見つけやすいし、班の中で問題を解決することもできるだろう。加えて、経験上何となくわかるが、僕たちくらいの年頃になると、自由度をあげれば自然と仲間外れは居なくなる。

でもまさか、文化祭のテーマがここに生きてくるとは。

文化祭の如く湧き上がる生徒たちに、待つてましたとばかりの夕イミングで「ただし！」と同じ注釈を入れるのは、再び先生。拡声器を通してかつ、結構声を張ったこともあって、場は一気に静まり返る。

「宿泊学習最終日、テストがあります！」

直後、「えー」やら「はあ」などで、再び場が湧く。先生も、やっぱりなという顔で、皆が冷静さを取り戻すまで待つていた。絶妙な間の取り方というか、何というか。生徒との一体感がすごい。

「二年生のこの時期、一番楽しい時期だから、皆忘れてるかもしれないけれど、この学校での日々も、もう半分切ってるんです。あと

残り半分をどう生活するかということも、勿論大事。だけど、もう半分過ぎたのかつて、反省復習するのも大事です」

あまりに的を射た言葉に、生徒たちは静まり返る。中には頷いている者もいる。

時の流れる感覚が僕たちに近い先生だからこそ言える言葉だ。

それを踏まえてのテストなのだと、話はスムーズに繋がる。

「今回のテストは勉強だけじゃない、スポーツ、芸術、道徳、家庭科も。全部で五つの種目をすべて、班のメンバーで走り切ってもらいます。ただやるだけではサボる生徒がいそうなので、得点をランキングにして、順位ごとに宿題を出します。遊んでばかりで真面目にやらないと、どうなるか……わかるよね？」

脅し文句に迫力が足りなくて、かえって可愛らしくなった。

該当しそうな男子たちが、小さく湧いた。

「気付いている人もいると思いますが、班の人数と編成は、慎重に選ばないと大変になりますからね」

勉強だけでないととなると、採点基準が不明瞭だが、そこは先生方の裁量でうまく調整されることだろう。ただ、ここまで条件が出揃っているのだ、極端な班編成をする者はそういないはずだ。

話の裏で、すでに段取りを始めているような声が聞こえてくる。

それも少なくない。

その話声の数こそ、宿泊学習に掛ける思いに他ならない。

「それでは、皆さん。これから班を作ってもらいますので、起立してください」

起立する音にざわざわとガヤが混じる。起立するスピードは主任が命令した時よりも、気持ち早い。

僕も割と早く立ち上がったので、後続のノアの右手を取ってあげた。

「はい！ では、これより十五分間ですね。自由に移動して構いません。はい、よろしく願います。では、どうぞ」

その言葉を皮切りに、縦の列が即座に霧散した。

その場に立っていると、右に左に前に後ろに、何だか波に飲まれて島に取り残されたみたいだった。そしてこの後、たくさんの島が誕生するわけか。特に、興味深くはない。

さて、僕も動かなければと、歩き出そうとすると、左手に引力を感じた。

「あつ……。ノアさん、ごめん。手、握ってた」

「ん。いいよ」

そのくらいならアリスも怒らないから、と微笑むノアの瞳はすでに、アリスを探していたようだけど。

「ノアさんは、やっぱりアリスと？」

「うん。昨日、夜、約束したの」

「そっか」

「ルートは、誰と？」

それはさすがに忌憚が無い。

でも、口ごもるわけにもいかない。

「ぼ、募集中、かな……！」

そういうわけだからと、自己PRする場を設けたいところだが、僕にアピール力はそもそも無い。アピールするポイントも見当たらない。班の総合平均点をほとんど上下させないということぐらいか。いや、これがすでにアピールなのか。

ああ。情けない。

「ルートも、班、組も……？」

「いいの？」

「うん」

「ありがとうノアさん……！ 僕、ノアさんには、頭が上がらないよ……！」

色々な意味で、平身低頭して握手するしかない。

持つべきものはやはり親友だと、身をもって実感させられる。

これで何とか、孤島は免れたわけだ。

しかも、ノアは芸術的センスに優れているし料理も上手い。アリ

スは勉強も運動も何でもできる万能だし、二人がいれば合宿明けのテストも怖くない。僕は、平均を下げさえしなければそれでいい。それでいいのだけれど。

果たして、そこに僕は必要なのか。

二人以上が条件だから、数合わせなら、僕は居なくてもいい。それに、テストの点はいいとしても、恋人同士である二人の関係からすれば、邪魔者相違ない。

ここは、遠慮を示すべきところかもしれない。

「あ、ノアさん。やっぱり、僕」

「じゃ、この三人で、いいわよね？」

人込みの隙間から現れた彼女に、ノアの表情は一層明るさを極める。

どうやらアリスは、誰か他の人にも誘われていたらしかった。それを断るのに時間を食ったということだ。それを待つ間に僕を誘うノアがアリスへ寄せる信頼は、相当なものであると感じた。

二人を結ぶ白い線に、僕という点が交わる。線は歪んで、平和へと形を変える。長い時間をかけて。

アリスを支点に通っていた、僕たちの心の澁は、もう、目に見えないものではないのかもしれない。

「………たく。何年一緒にいると思ってるのよ」

僕はノアと顔を見合わせて、それから小さくお辞儀した。

往かないで、時雨月。（後書き）

【あとがき】

彼氏彼女がいる人に恋をしたら、ダメでしょうか。

答えは簡単です。

法律を知らなければ、許される。

心の老いとは、必ずしも穢れているとは言えません。

美しくもあり、醜くもある。

それなのに、生れくる生命は、どうしてもか罪を忘れていて。

次回、修学旅行にレッツゴー。

忘れないで、神帰月。(前書き)

【まえがき】

かみきづき、です。

古い暦です。

忘れてません。伝えないだけ。

どござ。

忘れないで、神帰月。

一日目。昼。

「いや、まさか芸術部門のテストが、班で一つの作品を作り上げるだなんてね」

「別に、意外でも何でもないでしょう」

「あ。ルート、そこ、下地は白がいい……」の

「わっ、ごめん」

ノアに指摘されつつ、えっちらおっちらと絵画の共同制作に打ち興じる。浜風でキャンバスがずれないように錘をするのも、僕の役目の一つである。

百二十センチ平方の白床は、三泊四日（うち一日は帰路）という短期間で仕上げるのにそれなりの計画性を要した。結果、一日目の内に高い水準まで枠を作っておいて、残りの日数で推敲する流れになったわけだ。

それがリゾートへ来てまでやることかとは疑問だが、致し方あるまい。駄々をこねても、滞在時間は延長されたりしない。良く言えば、「あくまで学習だ」とも割り切れる。

青空の下、黙々と描画する心得もまた、学習である。

「遠いけど、波の音が聞こえるなあ」

「遊びたいならそう言えばいいじゃないかしら」

「ん。いいよ。二人でやつとくから」

「えっ、今のそう聞こえた？」

それもそのはず、自由時間で解散になって以降、すぐに浜辺で遊

戯大会が始まったのだ。彼らは僕たちの被写体ではないけれど、その彼らのバックに広がる壮大な背景こそ、僕らの描く主役。海を描いているのだから、画面にボールやらフラッグやらがちらついて集中できやしない。

ベストポジションのヤシの影を陣取ったのはいいものの、このアドバンテージを活かし切れていない感否めない。

ストレートに言うならば、「海ならログハウスからでもかける気がする」だろうか。あの大きな窓は、見るからにオーシャンビューを満喫するためのもののようなだけだ。

いやしかし、到着から一時間と経たずログハウスに籠るのも、中々風情が無いと言える。

二人に任せて遊ぶというのはあり得ないにしても、役割分担という事で買い出しに行くのはありかもしれない。そうは思うけれど、現地語を話せない状況で一人というのは危険かもしれない。

近くにシヨップモールがあると話す話だったが、なるべく単独では赴かないように　つまり、班行動せよと、ここへ到着した時に注意されたのだ。きつと、治安どうこうではなくて、管理面での訴求だろう。

そういうわけだから、一人でモールに買い出しに行くわけにもいかない。

手を動かすしかないわけである。僕の場合、固定だけれど。

「ノアさんは海とか来たことある？」

「……………」

「ええと…………、ノアさん？」

「集中してるんだから、邪魔しないであげたらどうかしら」

「ご、ごめん…………」

「来たことないよ。ノア」

ワンテンポ遅れてノアは言う。

海と砂浜とを隔てる輪郭線を描いていた刷毛^{はけ}を、不条理にも中点で休ませてしまった。それからすぐに再開されたが、輪郭は滲まず、

きつちりと甲乙刻んだ。さすが、素晴らしい見通しだと思った。

百二十センチの境界線は、ノアの手が横切るにはあまりに壮大に感じざるを得ない。

「じゃ、アリス。二人は、旅行とか行ったりするの？」

「じゃ、つてなによ。別に、あなたに関係ないでしょう。全く……」
アリスの吐き捨てた氷の礫は、常夏の陽気に当てられて、たちまちに融けたと思う。

わずかに綻んだその表情が、そうさせたのかもしれないけれど。

「あ」

「え？」

圧の無い声なのに、やけに透き通っていたから、すぐにノアだとわかる。

助手のアリスは、事情の確認に努めた。

「どうかしたの？」

「間違つて、青、塗っちゃった……」

確かに、ノアの左手に握られた刷毛には、青系の絵の具が染みている。それと同じ色が少しだけキャンバスにも載っていて、それは何ら自然。何を間違えたのかわからない。

いや、だつて、そこは、海だ。

「海なら青でいいんじゃないの？」

「海は、赤なの……」

「あ、赤っ？」

「海の底、赤だもん……」

海という言葉の意味を、一体どれだけ掘り下げたら紅に関われるのか。

考えたら頭が熱暴走しそうだったので、この風に感じた。
なるほど、わかったようなわからないような。

「鉄、とか……？」

「ん。鉄」

天体中心で融解する安定物質は、おそらく鉄だろうと、天文学の

本で見たことがある。

高温のマグマとなったそれは、気流の如く流体力学に則って上昇する。それが、海底面の亀裂などから噴き出している個所が無数にあるらしい。普通の生き物には住めないが、所謂深海生物と称される珍しい海洋生命体が存在していると言われている。それらは、遙か昔、恐竜が生きていた時代から……、ではなくて。

どうして、海を描くのに、鉄から描く必要があるだろうか。

「ある色は、できるだけ全部、描くの。海って、深いから」

その抽象的過ぎる答えは、幼い頃に母から聞いたコーヒー作りの話と似ている気がした。

美味しいコーヒーを作るには、栽培する品種を美味しくしないといけない。それから、土を美味しくしないといけない。それから、水も美味しくないといけない。淹れる時、美味しくないといけない。完成するまで通る道が、全部美味しいから、コーヒーは美味しい。

通過した色が、すべて海だから、あの海は黒い。

全く、納得の絵具量だと思った。

「一日目はこのくらいでいいんじゃないかしら」

「そだね。海は、一日で溜まんないもんね」

海は一日で溜まらない。

ノアは、創世を語っているのか、何か遠い過去を見ているような気分になる。

僕が積み重ねてきた一日は、ちゃんと僕を作っているだろうか。

忘れたことも含めてか、忘れたことを思い出してか、塗り直しが利くものなのか。一番下の色はもう思い出せないけれど、今、僕は確かに青い。

水で薄めたとて、もう取り返しはつかない。

なればこそ、僕は僕の上に、また僕を塗るしかない。

「完成、じゃないんだね……」

一日目。夕方。

合宿中の寝床となるログハウスへは、浜から数十秒でアクセスできる。班の数は確か三十数班ほどで、それぞれ異なるログハウスを使用することになっている。

ただし、どれもが海に直近かというと別段そうでもなく、ヤシ林の中やショッピンングモールに近いところ、さらにはモール内のビジネスホテル、という班もあるらしい。

それについては、事前に知らされていたから、誰も文句を言わなかった。班編成における品行や成績の偏りは、ここで吟味修正されているのだろう。

そんなこんなで、僕たちの班は運よく海沿いだったわけだけれど。「うわあ。壁一面窓になってる。これが大パノラマか……！」

「いや、テラスを噛んでるわよ。そこから外に出れば、パノラマね」「パノ、ラマ……？」

ログハウスは入り口玄関が石造りで、それ以外はおそらく木造であった。さすがに隙間などはないから下地は何かあるようだけれど、壁面塗装などは最低限になっていて、木の質感が触れてわかる。

玄関を通って、長くない廊下を歩いた先に、海の見えるダイニングがある。贅沢にも四人掛けのテーブルがあつて、その奥に壁をくりぬいたように巨大な窓ガラスが構えている。さらに、海を見て寛げるように、窓のそばにはソファというかチェアがある。

ダイニング、ということとはつまるどころ、寝る部屋が別にあると

いうことになる。

これは、本当に素晴らしいログハウスらしい。筆舌に尽くしがた
い。

「さ。夕食でも作りましょ」

「えっ。もう?」

確かに、太陽が水平線にくっつきそうであるけれど。

時計が無いのは、『時間を忘れて寛げ』ということなのか、正確な時刻がわからない。でも、とりあえず、まだ夕飯には明るい。

「何もしないでだらけているのは嫌なの」

「だらけて……」

リゾートとは、そもそもそういう場所だと思うのだが。

ただ、アリスがだらけているところはなかなか想像できない。逆に、見てみたくもある。

いや別に、暑さにやられたとかではない。そう企んでしまった。

「根詰め過ぎも良くないと思うよ。アリスっていつもそうだから、わからないけど、疲れたりしないの? 家では、リラックスとかしたりしないの?」

アリスの家は、裕福であると同時に窮屈だという話を常々聞くが、ノアが許容されるようになってからはそれが緩和したらしいのだ。元々、ノアと一緒に居る時間も長いだろうし、どこかしらで緊張は抜けていると思うのだけれど。ノアの優しい心とか温かくて柔らかい肌だとかで、とろとろに溶けたりしているのではなからうか。

「言いたげね」

「あ、いや、別にそういうわけじゃないんだけど……。疲れないうの
かなってさ。リズとか見ると、ストレスなさそうで、なんか……
いいんだよね」

但し、好感度補正は大いにある。

アリスは溜息をつかなかった。どうやら答えないうもりらしい。

「色ボケほど格好の悪いものはないわね。ま、何でもいいわ。あ
たし、キッチンに食材置いてくるから」

テーブルに一時待機させていた買い物袋をひょいと持ち上げると、アリスは不機嫌そうに上機嫌で、ダイニングを後にした。その一連の仕草は、何となくアリスらしかった。

モールで買い出した夕食が、カレーだからだろうか。

勝手に笑ったら怒られそうだ。

「あのね」

「あ、うん」

アリスの背中を見送ったノアが、僕の耳のそばで囁いた。

ふわりと漂うシャンプーの香りは、いつもアリスと同じベールを纏っているようで、何だかこちらまで照れてしまいそうになる。校内だと特に。

僕とノアの身長差はそれほどでもないけれど、少し体を斜めにして、気持ちで聴くつもりだ。

「アリス、家だと、すごく優しいの。でも、多分、ノアが弱いから、気を遣ってるんだと思う。学校で、テキパキしてるの、多分、楽だからなんだと思うんだ。歩幅、合わせるんじゃないかと、皆に合わせてもらえるから……」

「アリスが……」

一番アリスのことを分かっているノアの言葉だ、真実だろう。

でも、ノアの調子は暗くなかった。

「ノア、皆と同じく、されてみたいから、頑張るの。ちゃんと、同じになつて、それから、また好きって言つて、そう決めてるの」

「ノアさん……」

ノアは、体こそ華奢だし主張もないけれど、溢れんばかりの意志と、重厚な存在意義のようなものをいつも感じさせられる。できないことはないのではないかと、思ってしまう。

それを、内に秘めて、秘め続けているところが、ノアは美しかった。

触れられない美しさ、とでも言うだろうか。

アリスはそこに魅かれたのではないだろうか。

もう頑張っているだろうから、改めて「頑張つて」と声をかけるのは無粋な気がする。言葉に迷っていると、ノアが先に思い出した。「だから、ありがと、ルート」
「えっ」

面と向かつて、こんなにもストレートに感謝を伝えられる人とは、なかなかいないのではないだろうか。余りに素直すぎて、受け取りきれなかった。

狼狽していると、ノアの手を煩わせてしまった。

「最初、アリスのパパ、ご主人様が見ている前で、アリス……キスしてきたの」

「そ、そうなんだ」

それは紛れもない、僕が提案した暴挙であるからして、俄かに掘り起こされると恥ずかしくもある。結果オーライ、過去の出来事として誰かの胸に留めておいてくれればと思っていたのに。ノアの胸だったとは。

それならば、溢れてしまうのも無理はない。

「それがきっかけで、ノア、アリスの家に住めるようになったの。それから、ずっとアリスと一緒に。家出した時は、養子になって、言ってもらって……。これ、全部、最初のキスのおかげなの」

「キ、ス……」

「ルートの提案、なんだよね。だから、ノアが、こうやってアリスと居るの、ルートのおかげ。だから、ありがと、ルート」

僕は間を取り持っただけ。二人の間で解けそうになる糸を、手繰り寄せて、また結んでみようと提案しただけなのだ。

結果、繋がれたのは、二人の努力があつてのもの。

それに僕は、もう、お礼まで貰っているのだ。言うことは無い。「うっん。ノアさんたちが頑張ったからだよ。二人の気持ちを通じてるのわかったから、繋がってくれたらなって、僕はちよっとお祈りしてたくらい」

「おい、のり……？ 『お祈り』……？」

「あ、違うよ。『願い』みたいなことじゃなくて、普通に、お互いに好きなら、くつついちゃえって、えっと、興味本位……？ うーん、違うなあ」

「早く手伝いなさいよー！」

アリスを怒らせていいことは無いと、僕は素敵な親友と教訓をシェアして、急いで台所へ向かった。

僕の足取りは軽く、迷い無い。

吸い込まれるようにキッチンへと、辿り着いた。

一日目。夜。

夕飯を食べ終え風呂から上がると、先に上がったアリスとノアが絵画に取り掛かっていた。

モチーフがただの黒布に変貌してしまっていると言うのに、いいのだろうか。昼間、何故外でやる必要があったか、甚だ疑問なのだけれど。こちらを一瞥してきたアリスは、「詮索は不要だ」と言いたげな細い目であった。

ともあれ、あとは全体調整を残すのみで、完成は近いようである。所謂、重ね塗りの部分だけが残っているので、時間をかけてやるしかないわけだ。

他の班の進捗はどうなっているだろうか。

「他の班って、どんな感じで進めてるんだろう」

「昼間の買い出しの時間いたけど、一つを重点的にやって、項目を減らしていく班が多いみたいね。ある程度の期間があると、均すのは逆に計画しづらいから、自然とそうなるわよね。そういう意味では、うちの進行も例に倣っている訳ね」

結構、モールですれ違うクラスメイトは多かったけれど、班行動が主だから、個人交流は無かったような気がする。僕は知らない情報なのだけど、一体いつの間に聞いたんだろう。アリスの情報網は、さすが目を見張るものがある。

こういう時、アリスは頼りになる。

「そうは言っても、テストの中にスポーツが入っている時点で、体育会系の班が有利になるのは確実なのよね。三日そこらだとか、スポーツってそんな一朝一夕でどうにかなるものじゃないから」

「それは、そうだね」

運営の方で幾らか調整は入れられるだろうけど、それにも限界はある。暗記で点数を高増しできる勉強と違って、スポーツは短期間ではどうにもならないのだ。

スポーツ経験者であればこそわかる、積み重ねの大切さとは、個人差はあれどひと月が良い所だと思う。それを管理側が見逃すはずはない。

要するに、勉強も運動も、努力点システムなのではないだろうか。と、そういう結論に至るわけで。合宿で頑張った分だけ、得点というものが班に付与され、そのプラスポイントをランキング化する、と。

そこから導き出された戦略こそ、アリス考案の、この『芸術部門ガチ攻め戦法』なのである。

意地汚いというか、何というか。なんと素晴らしい楽園計画であるのかと、耳を疑いたくなる。人をやる気にさせる“修学旅行”とは、いかに数奇なイベントであるか伺える。

「見てるだけならもう寝てもいいわよ」

「ひ、酷くない！？ ……あ、そうだ。じゃあ、コーヒーでも淹れるよ」

「適材適所ね。助かるわ」

「アリスはブラックで、ノアさんは……甘いのでいいよね」

買い出しの時間に見つけた現地の珈琲豆というのを試してみたいのであって、いいように使われているわけではない。きっかり、フィルターも予算内に収めていたのだ。一応、家がコーヒー園だから、それなりに自信は持ってもいいはず。

とことごと、一人、キッチンへ赴く。

一人で歩く廊下のおまりの長さに、リズが恋しくなってしまったのは、誰にも言わない。

「えっと。粉碎機無いから……ナイフでいっか。これで粉っぽくして……と」

アリスはうちに遊びに来たときはいつも、ブラックだ。ノアはコーヒーを飲めるかどうかわからないから、とりあえず、砂糖を入れて甘めにしておく。リズは、その甘いコーヒーにさらにミルクを足す。ブラックだったりラテだったり、日によって飲み方をコロコロ変えてしまう自分が、何だか優柔不断みたいで格好悪く感じた。

誰かの都合の良い解釈を心待ちにする間に、湯が沸いた。

「……………」

一人でいるはずなのに、間を掴めない。

どうしてだろう。

もっと、誰かと一緒に、皆と一緒に居るべき場所なのに、一人でいるからだろうか。

どうすれば、この震えは収まるだろうか。

寒い。

怖い。

誰か、僕に声をかけてよ。

ああそうだ、と思い立って、僕は沸騰したお湯をポットに映して、コーヒーカップごとダイニングへ持って戻った。是非、実演してみせようという次第だ。

カチャカチャと騒がしくしていると、もう少し静かにできないかとアリスに指摘されてしまった。わざと賑やかしたわけではないのだけれど。

十分留意するとして、僕はコーヒーを淹れる。

静かに部屋に充滿していく香りは、常夏らしいというか、フルーティな楽しさがあって、後に豊潤であった。昔、母が同じブレンドで淹れてくれたのかもしれないだろうか、何だか懐かしい香りだ。

学生の予算内に収めた安いものなのだけれど、これは正解だったかもしれない。

「はい。できたよ」

「ありがとう」

テーブルの真ん中あたりにカップを置くと、アリスがすぐ飲んでくれた。しかし、アリスはそのカップを自分の前ではなく、ノアの前に戻した。砂糖入りだったらしい。

今日の気分だったカフェラテをテーブルに置いて、僕もその席で一服するとする。

特に感想を要求したわけではないのだけれど、アリスと目が合っってしまったから。

「これ、安いやつよね。美味しいわ」

「あ、うん。ありがとう」

これまたアリスにしては毒気が無かったから、少し揺さぶられた。でも、温かい。

アリスの言葉だけは通るのか、作業中だったノアも手を止めて、急いでコーヒーを口にしてくれた。そんなに焦らなくてもいいのにと、少し可笑しい。

「甘くて、美味しい。ルート、上手……」

「それなら、よかった。うん。ありがとう」

焦ると言えば、今、一体何時頃だろうか。

この部屋に時計はまだないし、夜の帳は僕の眼には参考にならないし。

率直に言葉にするのはあまりに恥ずかしいことだけれど、明日がどうかそんな先のことよりも、今夜が、僕は少し不安だった。

月が瞳のように、僕を監視しているからだろうか。合宿という特殊な環境であるからか。

一人になるのが、少しだけ怖かった。

「そういえば、今日はさ、何時頃に寝るの？ それとも、まだ勉強やる？」

「もう遅いし、そろそろ寝るつもりよ。夜更かししてノアが体調崩したりしたら困るわ」

「そうだね。じゃあ、僕も終わるまでは起きてようかな」

「なによ。そわそわと。煩わしいわね」

「な、何でもないよっ」

こんな時は、教科書を開いて勉強でもすれば落ち着くだろうか。いや、それでは根本的な解決になっていない。

僕は、どうにかして今宵、一人の夜を免れたいのだ。恋人同士である二人の間に入るなんて滅相も無い。端の方に布団をちよこんと敷かせてもらえれば、それで安心できると思う。トイレに起きたら、それはなるべく一人で頑張るつもりだし。

とは言え、こんな子供じみた頼み、どう切り出せばいいだろう。でも、そろそろ言わないと、後で泣くことになりそうな気がする。

そんなわけで僕は、自分を最上級に遜って、お尋ねすることに致したわけでありました。

「あのー……。つかぬ事をお聞きますが……。二人は、一緒に部屋で、眠るんでしょうか……」

さすがに癪だったか、言ったそばからアリスにぎろりと睨みつけ

られた。

ノアは作業に集中していて、助け舟を出してくれそうな状況になり。

恥ずかしいし怖いしで、もうどうしていいかわからない。親しき仲にも礼儀ありとは言うけれど、これはあまりに酷ではないか。

なかなか絶望的過ぎて、僕はかえって吹っ切れたようになった。もしよかったら、僕も、隅の方でいいので、一緒に寝てはだめでしょうか……？ 目的とか、全然、そんなのはないです。はい。ただ、寂しいだけです。一人で寝るの、ちょっと怖くてですね。はい。故に……何卒っ！」

元夫が元妻に、『寂しいからお前の新しい夫との間に入れてくれ』とせがんでいる状況に例を見る。混沌としているどころか、それはただの修羅場の入り口である。

しかし、今の僕にはこうも言える。

修羅場だって、一人じゃない。

それほどまでに一人が怖いのかと言われると、何だか違和感を感じるけれど、アリスに怒られるよりは確実に怖いなと思った。こんな時ばかりは、アリスと『願い』で通じていた頃が恋しくなる。

ぺたりと机に突っ伏す形でお願いしたから、アリスがどんな表情をしているかは確認できなかった。

数秒後、アリスは僕に溜息をついて言うのだった。

「……ったく。なに馬鹿なこと言ってるのよ。三人一緒の部屋でしょっ？」

ふっ、と肩の力が抜けた感じがした。

そうだった。

まだ、寢室を確認していなかった。
てつきり、一部屋に一つずつベッドがあつて、一人余るんじゃないかと思つた。

そうか。なら、大丈夫だ。

でも、どうしてだろう。

どうして僕は。

忘れないで、神帰月。(後書き)

【あとがき】

私は修学旅行など、学校単位の宿泊行事が苦手です。

せっかく築き上げた自分のペースが崩れてしまいそうになります。

特に、超早寝早起になります。

枕は別になんでも眠れます。

今回は、折り返し地点　彼女の誕生日。

思い出して、書す月。（前書き）

【まえがき】

くれこづき、です。

問題の、一度削除してしまった部分です。

あのころは萎えた。

無事お届け。

どうぞ。

思い出して、暮古月。

全く今日という日は、朝から落ち着かなかった。同日に関して言えば、いつも大体そうであるが、色々あって今日は特にだった。

それを見越してか、昨夜は会話に花を咲かせられた。つまり、眠らせてもらえなかった。にも拘らず、早く目が覚めてしまったので、変に頭が冴えていた。

その冴えた頭で、僕はパーティの準備を進めた。

昔からそうなのだが、うちはお祝い事と言えばパーティが主なのだ。高級料理とか豪華な来賓なんて一切ないけれど、高ぶる気持ちに遜色はないと思う。

初めに取り掛かったのは、パーティの段取り決めだったか。

これは主役ではない人が担当することになっていて、プレゼント渡しのタイミングとか、手紙を読みあげるだとか、すべてを決められるルールだ。脱線することもしばしばあるけれど、大まかに流れが決まっていると、空気が滞りづらくなる。父の提案だ。

僕は本をよく読むし、演劇の台本なんかを書いたこともあったから、割とすぐに出来上がった。ある程度の運も含むプレゼント渡しは、開始直後にやることにしたのだった。

次に、キャスティングをした。

当日に電話をするのが定例で、毎年来てくれていたアリスに加えて、今年はノアも駆けつけてくれることになった。

パーティが盛り上がってくるといっても、勿論。“あのこと”について万全を期すのに、関係者は多い方が良かったというのもあった。

それは結局、楽しいだけに終わってしまって、杞憂だったのだけ

れど。

逆に、パーティが終わってしまった後の、この遣る瀬の無い空虚なダイニングに、途方もない愁いを感じてしまう。準備をしている時こそ楽しいと感じるのは、終わる痛みを知らないからなのだろう。誰かと巡り合うことは、再び相見えることを呈していて、それがまた、特別な時間をもたらしてくれるのだ。今日来たアリスが、そんな風なことを言っていた気がする。

だとするならば、全く今日という日は。

何かを準備する日であり、尚且つ、始める日でもあるということ。この祈りを彼女に捧げるために、僕のプレゼントは一つだった。

「むふふふふ」

「ごめんね。ちょっと不本意かもしれないよね」

「むふふふふ……。いいのいいのー」

「そう？ よかった」

ベッドのヘッドボードに枕を立てて二人凭れ、冷気に負けぬよう寄り添った。掛け布団に埋もれた脚と脚は触れ合って、僕たちは腕を絡めていた。

彼女が天を仰ぐ左手の薬指には、涙ほどの決意があつて、それは部屋の電灯の光を受けて大層煌めいた。僕の半年分のお手伝い料とイコールで結ばれるそれは、彼女の傍に寄り添える時間の証明を半年分代わってくれているようで、耳がくすぐったかった。

そのターコイズにも意志があるとすれば、是非とも愛に誠実であつてほしい。

「リズはダイヤとかの方が似合いそうだよね」

「ちよつとルー。なんでそんなこと言うの」

「え？」

「大事なのは気持ちだつて、さつき自分で力説してたのにさ」

「あ、うん。そうだね。ごめん」

大事なのは気持ちなのであれば、初めからプレゼントは必要ない。それでも人がプレゼントを用意するのは、内に秘めたる願いを、

その中へ隠してしまえるから。そうして願いを決めるのは、他でもないあなたなのだ。

「みんなのプレゼント、なんだったか聞いてもいい？」

「うん。いいよー。えっとねー、お父さんはいつもと同じで、本くれたよ」

「やっぱりそうだったんだ。あの形はそうだよな、と思ったんだよね」

「ねー。あ、でもでも、今回はちゃんと読んでみようかなって、思ってるよ」

「今回は……かあ」

「あぁー。私のこと信じてないなあ？」

それも仕方がないことで、父がリズへ送ったはずの小説やら短編集やらは、今、すべて僕の本棚に収納されているのだ。つまり、そういうことである。

このくだりは毎年やっているのだけれど、同じ部屋で、同じベッドでするのは久しい。それなのに視線は彼女の指に釘付けにされてしまつて、懐かしいというよりは新鮮だったかもしれない。

僕が、彼女を信じていないはずなど、これ一つもありはしない。瞳を合わせずとも、伝わったのだろう。

「ま、いーよいよよ。それで、あとね、お母さんからはね、下着だったー」

「下着……！ 聞いたいてなんだけど、返答に困るね……」

幼い頃、僕たちの下着は母が買ってくれていたから、これも懐かしむべきなのだろう。

いやしかし、新鮮である。

月々いくらという明確な加減は無かったものの、ウェール家のお小遣い事情も、配給制ではあったと言える。

具体的に欲しいものを言えば、何か特別なものでない限りは買って貰えたのだ。そもそも、あまり欲しいものが無かったから、そういうシステムになった。

利点ばかりに見えるかもしれないけれど、ミドルくらいになってくると、さすがに親に知られるのが恥ずかしいことも出てくる。

その代表格が、所謂“下着等”だった。

とは言え、母が自発的に買って来たものを管理するのも、勿論させてしまつのも、あまりいい気分ではない。できれば、自分でそれなりのものを選んで、自分で管理するべきところだと思う。

それで実際そうしているわけだし、今回、母がわざわざ下着を買ってきたと言うからには、多少、何かの勘を擦られている感は否めないのだ。

母は結構、そういう策士的なところがあつて、アリスと少し似ていたりする。アリスが利己主義なのに対して、母はサプライズが好きなだけ……というのはアリスに失礼か。

「それで……。どんな下着だったの？」

恐る恐る尋ねてみると、声の調子を読まれた。

「別に、そんな恐る恐る聞かなくても。今着てるよ。見る？」
そう。

リズはプレゼントの袋をその場でビリビリと破くタイプだ。すぐ使えるもの、使いたいものは、その場で消費するのがセオリー。当日のお風呂上り、すでにそれを着用していてもおかしくはない。

ただし。

恐る恐る尋ねるような人に、確認する度胸は無いはずだ。

「い、いやっ、大丈夫……！」

「ま、そうだよねー。どうせ、後で」

「ノノノ、ノアさんからはっ、何を、貰ったのかなっ……！？」
声が裏返る。

「ふっ」

妹に鼻で笑われる。

「……っ！！」

全く、不甲斐なさすぎである。

「ノアさんからはね。なんか高そうな塩胡椒」

「へ、へえーっ。じゃ、じゃあアリスからは？」

「アリスお姉ちゃんからはねー、またマフラー貰ったんだー。そういうのが得意なメイドさんがいるらしいんだけど、その人に直接聞きながら手作りしたんだってー。んもー、アリスお姉ちゃんも愛が重いなあ」

「また？」

僕はアリスから毎年キーホルダーを貰うけれど、その恒例は聞いたことがない。

「うん。一昨年くらいにね、貰ったの。そう言えば、そんな時はまだ、アリスお姉ちゃんのこと『先輩』って呼んでたなあ」

「だね。アリスのこと『先輩』って呼んでたよな」

僕の知り得る限りでは、学校内ではそう呼んでいるという線引きが為されている感じがしたのだが、実際はどうだろうか。今は昔と同じく『アリスお姉ちゃん』で通しているから、今思い返すと不思議な気持ちになる。

「また今度、呼んでみようかな」

「ちなみに気になったんだけど、どうして『先輩』って呼んでたの？」

「えっ。今更なの？ 言わなかったっけ。っていうか、わかんない？ わかんないか。わかんないよね。ルーだもんね」

「今馬鹿にされてるのはわかったから大丈夫かな……！」

実際、大丈夫でない。

空気が読めないのは経験を積みばどうにかなると思っていたし、ミドル時代の担任の先生あたりにもアドバイスを貰った。そのはずが、この様であるからして、僕は大きく成長できていないということになりかねない。

無知の知なんて、便利な言葉を知ってしまう前に、無知の知という意味を知っておきたかったところである。それは矛盾か。

「アリスお姉ちゃん、すごいモテたでしょ？ 今もそうだけど」

「あ、うん。よく告白されるよね」

それはもう、性別を問わない。

「ミドルん時は、部活のエースですごかったじゃん？ それも見てたでしょ」

「うん」

「それで、部活内でアリスお姉ちゃんのことを好きな人って、イッパイいたわけなのね。逆に、アリスお姉ちゃんが好きだから入るって子もいたくらいだし」

なるほど。

以前は、リズもその中の一人だったということか。

「それとーゼんの如くファンクラブみたいなのができてね。同じタイミングでクラブ規則みたいなのが作られたんだよ。勝手にさ」

「規則、ね……」

何だろう。

アリスによるアリスのための規則と聞くと、違和感がない。

「そんな中でさ、アリスお姉ちゃんに不用意に近づこうものなら、もう色々すごいんだよ。バッシングとか。仲間外れにされたりして」

「そうなんだ……」

モテる女は罪だとはよく言うが、正直なところ意味はあまりよくわからなかった。けれど、アリスを具体例に取り上げると、すぐに理解できた。“罪”という名は少々飛躍が過ぎるような気がするけれど、愛情という心の深度を顧みれば、しみじみと頷くこともできるだろう。

でも、それにしても何だろう、この敗北感は。

バトン部には、勝ち負けなどないはずなのだけけれど。

「私、アリスお姉ちゃんと幼馴染だったから、アドバンテージがあったんだ。だから、ちよつと距離をとって『先輩』。でも、みんな『様』って呼んでたからね。『先輩』でも、だいぶ、あれだよね」

「あはは……。確かに」

アリス様という字の連なりを初めて聞いたと思うのだけれど、聞き慣れたように感じるのは何故だろう。そして、僕の口からそれを

言ったら、パズルが完成しそうなのは、どついつ趣きだろう。

とは言え、アリスは優しい。

できれば、執事には候補されずにいたい。

ここでアリスの話をするのもあまりよくないだろうと思って少し黙ると、リズが粹である。

「そして最後はねえ」

口にしながら、リズが再び左手を掲げるものだから、少し焦った。落ち着いているふりができた。

「ルーのは……指輪、だねえ」

僕の言葉を誘っているようだったので、答えなければいけない。

どうせリズは、気の利いた言葉を求めている。

「一番、伝わりやすいかなと思って……」

「ふーん」

世界に存在する物質というものは、構成が変われども単位は変わり得ない。ダイヤモンドがグラファイトになってもフラーレンになっても、炭素はそこにあつて、それは永久に変わらない。

そんな心を体現してくれるのがジュエリーだと、宝石店のお姉さんから説教を喰らったのだった。あれがまさか、僕の説得力に一役買うとは。

僕の真剣な言葉が、想いが届くと、リズはいつも沈黙を決め込む。言い返せない、言い返すのが億劫だという理屈で、相手（主に僕）の主張が収まるのを只管黙って見ているのだ。時折頷いたりして聞いている風を装っておきながら、全く聞いていないということもしばしばあった。

所謂“処世術”の一環なのだろうと、ずっと対抗策を考えて来た僕だったが、今日、その答えがわかった気がする。

いや、今日になって、リズが答えを覚えてくれたのかもしれない。リズの眼差しの先には僕の指輪がある。耳はわずかに赤らんで、

頬は静かに震えている。その横顔はどうにも物憂げで、満ち足りない日々の中に、何かを探し求めてるように見えなくもない。

例えば、僕がそれを充実させられるとする。

だとすれば僕は、リズムがどうして沈黙を選んだのかわかる気がする。

「んむっ……」

それがただの思い過ごしか、あるいは既視感なのか。

些細な猜疑心を感じながらも僕は僕の沈黙と、彼女の静寂とが混じるのがこれ以上なく心地よかった。

しんとした部屋を鳴らす銘々の息遣いは、ちょうど、浮き沈み廻り巡る公転にも似ている。その星にはざらつとした砂漠があつて、温かい海もあつて、勿論、歩みを撥ね返す山もある。そういうイメージが一気に脳裏を駆けて、僕は彼女の津々浦々　すべてを知れたような、底知れぬ愉悦に浸ることになる。

しかし、個々の時間というものも、当然のことながら求められる。

すう、と鼻から小さく気を吐いて、彼女は少しずつ離れて行った。それから少しだけ顔を赤らめて、何かを隠そうと口元を手で覆った。

「……………」
「……………」

何か、お気に召さない事があつただろうか。

ごくり、と彼女を飲み込んで、僕はわずかに得意げに、彼女の指摘を待つことにする。

「ちっとも、うまくなんないね」

「うっ」

どこか可哀想なものを見る目で、リズは僕を見る。全く、情けない。

「本当にすみません……」

「ちよ、ちよっと、本気で凹まないでっつてばっ」

とは言え、一人で感情昇天していたのであれば、年上として多少は恥ずべきことだと思う。

こっして励まされるのも、思うところがある。

でも、どうすればそれが改善されるかわからない。

これは決して学校では習わないし、的を得た参考書も無い。親しい者に相談する勇氣はないし、親に尋ねられるほど不安もない。あるのは、生まれつきの才能だけ。

つまり、これは僕の問題なのだ。

いや、二人のと言うべきか。

「嬉しいよ。ルーからしてくれるの」

「あ、あう、うん……っ」

それがリズの答えなら、僕は心から嬉しく思う。そのはずなだけけれど。

欲しがりな彼女は、燻る僕をよく思わないようで。

くすくす、と小刻みに震える口角が、小さな肩が、稚い心を擦る。

「仕方ないなあ。じゃあ、私からしたげる……」

「……うん」

じゃあ目を閉じてと条件づけられた僕の瞼は為すがままに、世界を黒に染め上げる。

いや、黒ではない。

それはすぐさまに白に変わって、無機質な冷気も、二度目の温もりによって打ち消されることになる。また静寂が訪れるかと思っただけれど、今回は少し違って、僕が彼女の声のようなものが絡まる腕の間隙から漏れた。

何か途切れてしまわぬよう、僕がすぐに後を追うと、彼女もまた同じことを考えていて、文字通り息がぴたりと合う。

忘れていた甘い香りを、僕はもう一度思い出す。

「どうだった……?」

感想を尋ねられる。

心拍数は、間違いない。二百点ほどをた叩き出していそうだ。

「どどど、どうって……っ。し、心臓が、止まり、そう……ですっ」

この静かな部屋であればリズムにも伝わっているのではというくらいに、それは耳に五月蠅い。

沈黙の女神から吐き捨てられそうな僕に追い打ちをかけるように、彼女は詰める。

「もう一回したら、どうなっちゃっ?」

「も、もう一回……っ? し、死んじゃっかも……」

特に、過言ではないように思った。

鼻だけで息をしていたからだという大義名分も無くはないけれど、少し言い訳臭くなる。

「じゃあ、手、繋ご?」

「えっ? あ、うん……」

急遽出航した渡し船に、僕は堂々と乗っかる以外ない。

鼓動の波がこの部屋へ押し寄せるのなら、僕は溺れても救われるかもしれないが。

「……………」

ふと、会話が無くなる。

果たして、僕は満足してしまったのだろうか。

ちらちらと、遠泳に出た瞳は、壁の微笑みを捉えて　いや、捕らえて喜ぶ。

「ぶぶぶっ」

「え、なにになに？　どしたの？　大丈夫？　恋人繋ぎだけで飛んじやった？」

“とんだ”とは、つまりどういうことか。

僕はバタフライが一番遅いのだけけれど。

「違うよ。ほら、あの壁の染み。覚えてる？」

「壁の染み？　あー、あれかあ。お化けの顔に見えるよね」

指を指さなくとも、同じ個所を見ているだろうとわかる。

あの染みは、昔、恐怖したリスによってシールを貼られていた。長らくそのままだったため、剥がした時に日焼け跡ができてしまっていたのだ。

「昔、あれでリス泣いてたよね」

「そうだったけー」

声ができるだとか、見られている気がするだとかで、よく夜中に起こされた記憶がある。お花を摘みに行く時には必ず。

あれは、今考えると、そういうことだったのかもしれない。

「うん。そうだよ。だけどさ。今、見たら、ハートに見えるなって思っちゃって。おかしくて」

「あ。ほんとだ」

リスなら、ここで「見えないよー」とか苦言を呈しそうなものなのだけれど、肯定を得られてしまう。あまりに簡単すぎて、若干、肩透かしの感はある。

そのせいで、僕は続く言葉を選択肢から抽出できなくなったわけ

「……………」

「……………」

僕はこの沈黙の意味について、真っ直ぐな目で尋ねた。

あの頃のリスを脅かした彼の者は、笑って、どう応えてくれるだろうか。

その声を聞くのは、他でもないリスだった。

「ねえ………?」

「うん」

繋いだ手が、きゅっ、と震えた。

これで全部わかる。

「……しないの」

リスを好きだと、思った。

この気持ちを、僕は探していたのだと、漸く気付いた。

「……したい、です………」

リスが大雑把に掛け布団を手繰り寄せ、僕たちはその中へ匿われた。真っ暗闇の世界で、部屋という電灯は、もう月のそれとは区別がつかない。では、どちらでもいい。

閉鎖された空間の酸素が消耗されて、僕たちは息苦しくなる。でも、絶対に消えない。彼女の息吹を、温もりを、心と体で察知できる。生と死の境を、二人で踊っている気分になる。窒息するのも怖くない。

手を繋いだまま、暗順応できない。

でも、僕の眼にはリスが映っている。

リスの瞳には僕が映っている。

それ以外は、わからない。

いや、もう、必要ないのかもしれない。

「死んだら、嫌………だから」

「う、うん……。頑張りま」

僕は彼女の息を飲む。

世界との接点が希薄になっていく幸せを、僕は如何しても表現でき
ない。

思い出して、暮古月。（後書き）

【あとがき】

どちらからとか上か下かとか、ということがないタイプの、アニメや漫画には珍しいカップルです。

現実やリアルもののドラマでは、そういうことの方が多い気がします。少し生々しいのとキャラ付けの難しさからでしょうか、小説や漫画では好まれません。

好まれません。この二人はそういう人たちみたいです。

リスは誘うのが上手そうですが、一步を踏み切る勇気が出せない。ルートは誘う自信がありませんが、相手の気持ちに因應するのが上手そう。

やっぱり、凸凹って上手くいきますね。

次回は、何月……？

『Log』星の譜面（前書き）

【まえがき】

お待たせいたしました。
最終章、続いています。

ふしぞ。

『Log』星の譜面

目の前に広がるのは、白だった。

その白は、世界と言うのに必要十分すぎていた。

水平線も何も、境界と名のつくもの全てが曖昧で、彩色は均一。距離感という概念を感じさせない世界は、それでいて空間たり得ていて、自分がどこにいるのか把握することは可能であった。

白は、脳裏。

瞳を閉じた瞬間だけ見える、真っ暗な世界。

「……………」

体を自在に操れるのに気付く。そのことに対して、感想を並べることが出来る。頼りに、記憶を辿った。記憶は感情と結びつきが強い。

しかし、ここに類似する場所を、思い起こすことはできない。

不意に、言葉を思い出す。

思わず振り返った。そこにはさっきまでと同じ白しかない。続いて、上を見上げる。あるのは、白、それだけ。下も同様に。無論、白い音がして、鼻を衝く芳香も白い。

そういう花が咲いているのであれば、それでもいいだろう。

世界にはそれしかないと言う孤独。

であれば、“わたし”は誰でもいい。

「……………」

この白に溺れていく速さは、一体誰のものだろう。
そう唱えてみれば、底がある。撥ね返って来た心の声に呼応して、息が震える。目に見えない吐息は、わずかなりとも期待を含む。
わたしはわたしなのであると、いつの日かのわたしたちが言っている。あなたのために存在したわたしと、あなたのために存在しなくなったわたしが。

瞼が熱くなる。頬が濡れる。

どうしてだろう。

わたしがそう願ひ、呪い、望む色に世界は染まったのに。

ああ。わかった。

どうしてか悲しくなるのは、わたしが笑っているからだ。

わたしは人間だから。

あなたが、好きだから。

ずっと、会いたかったんだ。

解釈を求める。

【第一項】『呪い』は一つであった。

【第二項】『呪い』の範囲はすべてだった。

【第三項】『呪い』は決定できなかった。

【第四項】『呪い』は打ち消されなかった。

【第五項】『呪い』を他人に知られてはいけなかった。

【第六項】『呪い』は目的が達成されると無効になった。

三千世界とは言え、所詮、紙面上の字の羅列に変わりはない。無矛盾的に肯定される。

であれば、どこかに論理の抜け道があってもおかしくはない。

だから、わたしはその綻びを解釈し、記録することにした。真っ白なノートに、黒いペンで文字を描くように、この記憶に。

データは隠すことができなかった。

しかし、消されることも無かった。ゼロで流されても、イチで流されても、わたしが見つけるし、バラバラに砕かれても、また組み立ててみせる。どれだけ時間がかかろうとも。

わたしに残された選択肢は、それだけだった。

必至で探し回ったと思う。

疲れたし、汚れたし、傷もついた。

そうやって見つけたあなたは、わたしのデータを失っていた。

それでもあなたは、あなたに変わりなくて、わたしはどのあなたも好きになった。

そこで気付くべきだった。

いや、もう、気付いていたけれど。

ただ、諦めきれなかっただけで。

欠損したわたしのデータは、あなたにとっても重要な歯車だ。代用のデータがあてがわれるのは当然のことなのかもしれない。この場合、わたしが代用になるのだろうけれど。

善き哉、悪き哉、ルールに則ってページを走っただけのわたしでは、それをどうしようもなく平和に見守ることしかできない。心を

もったばかりに痛く感じるけれど、それもはや、個性に成り下がった。

だから、誰かが呪うしかなかった。
誰かが呪われるしかなかった。

願わくは、ページを捲るスピードよ。
少しばかり、わたしの本望に。

『Log』星の譜面（後書き）

【あとがき】

今話は、どこか今までと違う雰囲気を出せなければなと思います。でも、それが本当に「違うもの」なのかはわかりません。正しさは、いつも心の中にあります。

次回、話に入っていきます。

生れて。

誰かの記憶に残ること。

わたしの記憶に、あなたがいること。

*

「ねえ、知ってる？」

専ら読書に耽っていたわたしは、博識よろしく、会話をそう切り出すことが多かった。

実際はどうかというところ、興味だけがよく温まっでいて、肝心の知識は凍っていた。元々、物覚えが悪いわけではないのだが、面白い文面だけを目で追うと、造詣に至る筋道は得てして見逃してしまうものなのだ。

あれは実に小さい。

ともあれ、その熱ばかりが他人へ伝わると、あまり良い印象は受けない。例外なくわたしもそうだ。興味ない話を熱弁されることほど、居辛いことはない。

では、それを静かに聞いて居てくれる者がいるとするならば、彼女は一体何を持って、熱を許容しているのだろうか。

「なあに？」

外連味も無く返してくれる声に、わたしはこれ以上ない安堵を覚える。熱ばかりが先行する好奇心を、溢れさせてもいいのか猜疑に駆られる。

もし零れたら、それは熱湯だ。

皮肉にも、わたしはその熱のやり場を、零す以外知らなかった。

ああ。でも、もし。

もし、あなたの心が氷のように冷たく凍てついていたらのなら。こうして、無垢な想いをあなたに伝えても、罪悪感はないだろう。

わたしは、隣に腰かけたあなたに肩を寄せる。

存外、わたしは寒がりであった。

否、寂しがり屋であった。

「宇宙の外側って、真っ白なんだよ」

天文学雑誌の一題タイトルを、自分なりにアレンジして綴る。

これで掴みは良好だ。

「へえー。真っ黒じゃないの？ 夜の空、真っ黒いのに」

あなたは、飛躍した話題すらも適当に流すということをしない。

わたしはその信頼に、沸騰した興味で返すのが常だった。

「真っ白だけど、真っ黒でもあるんだよ。それは見た人が決めるの」

「えっ、決めていいの？」

もう一段落、詰められる。

二の腕に押し掛かる絶大な信頼に押し潰されそうになる。対処法は、この本のどこのページにも載っていないらしい。コラム欄ならあるいは……だけれども、注釈を見る気はとりあえず起きない。

これをいなすには、多少アドリブが要る。

「え、えっとー……、チカチカしてて、それを見た瞬間にどっちかになるのー」

良い。なかなかの的を得ている。

「先ず「ふうん」と鼻を鳴らしてくれたし、そういう解釈があるということにしておこう。」

わたしが話したいところは、特別そこじゃないのだ。

「それでね？ その白い方と黒い方の間に、境界線みたいなのがあるの」

頭の中に想い描いた空間を、遙か上空から見下ろして教える。

この場所に、あなたも来られたらいいのに、なんてしようもないことを考えつつ、わたしは身振り手振りで目の前に世界を構築する。ここがこうで、あそこがああなっていると、出鱈目な距離感を再三確かめる。

それをゆつくりと目で追うあなたは、わたしよりもわたしを理解してくれている。

目が合った時、そう錯覚してしまった。

「その境界線を越えるとね、なくなっちゃうんだって」

白の世界の住人は影に生きて、黒の世界の住人は輝いて生きる。境界を跨いだ瞬間、生きているというステータスを世界に剥奪されてしまう。

どう言えばいいだろう。

小説に登場する人物の、名前をすべて消しゴムで消し去るか、名前以外をすべて黒く染め上げるか。それを登場人物が決める、という感じだろうか。

想像に難い。

「なくなっちゃう？ どうゆうこと？」

例によって、疑問を投げかけられた。

わたしは、直訳するかどうか迷ったけれど、誤魔化さないことにした。

あなたの肩に身を寄せて、それで。
「なくなっちゃうの。全部。そこを越えた人は、みんなから忘れら

れちゃって、名前も思い出も全部、消えちゃうの……」

「こ、怖いよ……」

あなたはわたしの手をぎゅっと握って、それから声も震わせた。どうやら淋しがり屋は、わたしだけのようだった。

一人の世界は 読書は一旦中止した。

「だ、大丈夫っ！ わたしは忘れないもん……！」

わたしはあなたの手を握り返して、境界線とやりに抗ってみる。

利己的で愛くるしい小さな辞書には、そうせよと記してあったから。

これで二人の境界線が無くなってしまえばいいのにと、わたしは青い惑星の表紙を睨む。

しかし、これ以上の約束を、この時のわたしはまだ、知らなかった。

「うんっ。忘れない。絶対だねっ」

限りなく絶対に近い温もりも、物語として見れば不確定要素に相違ない。

それでもわたしは、誇らしげに涙を隠すその仕草を、どうしても疑いきれなかった。

二秒先は、もしかしたら地獄なのかもしれないのに。

いや、三分十二秒前には、世界はもう終わっているかもしれないのに。

おかしい。

どこの項を探しても見当たらない。

“絶対”という文字が。

そこへ字を記すには、まだ、経験が足りない。
そう感じたけれど、誰かに代筆を頼もうとは思わなかった。
わたしはわたしなりに、わたしの辞書を作ろうと思う。面白いこ
とだけ集めてもいい。後で解釈を変更してもいい。わたしが伝えた
いことだけ、見失わないように。

「……………」
「……………」

わたしはあなたの手を握り、あなたはわたしの手を握る。
すう、と小さい空気の塊を飲み込んだら、ゆっくりと瞳を閉じる。
微睡む世界に帳が差して、暗い、暗い、一頻りの真つ白な世界に解
釈を変えてゆく。

繋いだ手の温もりだけを頼りに、わたしはあなたを探し、あなた
はわたしを探してくれる。
そうしてあなたを見つけた時、暗闇を彷徨った勇気が愛に変わる。
わたしの愛とあなたの愛が結びついて、幸せに変わる。
もう何も、怖くない。

「はい、ここまでー」

不安になった時や心配事で眠れない時、母がしてくれるおまじな
いだった。

この後、母は頬にキスをしてくれるのだけれど、わたしの生兵法
は宛にしないのか、いつもここで打ち切られてしまった。キスをし
て欲しいわけではないけれど、嫌われている感じがしてしまって、
毎度毎度それなりに気に病む。

母は、一番好きな人だけするものだと言った。
それなのにどうしてしないのか、夜道を歩む勇気は、生憎残って
いない。

「んんんー……！」

どうか、わたしを置いていかないで。

脇の下からあなたに巻き付いて、そう心の中で猛っていた。

「甘えん坊だなあ。赤ちゃんみたい」

「うるさい……。わたしの方が」

だから、わたしの世界は白いのだろう。

「わたしの方が、お姉ちゃんだし……っ」

勿論、この小さな白も含めて。

初めて。

触れ合った時に感じる温かさとは、わたしの温かさ。

あなたがわたしの手を取るのは、わたしがあなたを好きだから。
不本意でない。

*

「ああー。世界を幸せで一杯にするには、どうしたらいいかなあ」

わたしとは、得てしてメルヒエンな檻であった。

脳には、これと言って特に、セリフを裏付けするような論拠は無い。つまり、結構な口から出まかせであると言える。褒められたいのは、悲観的でないことが多いところだったろうか。

なにしろ聞いてくれる人がいるのだから、言い放ってしまうのは無責任ではない。

「ざっくりしたお願いごとお」

その字の羅列にはあまりにピンと来なかつたので、言い添えた。

「お願いごとじゃないよっ。シ、ン、ケ、ン。真剣なのっ」
それはそう。

至るいつかの昼下がりに、話題に上がった天文の新見地ではないけれど。

わたしの思う方法に、それとない裏付けが欲しかったのだ。裏付

けなく言い出した割に。

必要なのは、あなたの賛同だけなのだけれど。

「真剣かあ。でも、なんか難しそうだなあ」

等身大にも、世界の広大さとは偉大だった。宇宙を語っている間は小さく感じるこの星も、自らを思えば、途轍もなく広大なのだ。

世界のほんの一部しか知らない、わたしという存在の無力さは、理解しているつもりだ。

けれど、イメージできた。

この世界に住む人は、皆、わたしと同じ人間で、幸せを感じることもができる。

それは美味しい物を食べている時かもしれないし、ゲームをしている時かもしれない。恋人とキスをする時かもしれないし、家族で旅行に行っている時かもしれない。人それぞれ違うだろう。

でも、その「幸せ」という気持ちは、全部一緒だ。

であるならば、わたしの中にあるこの無限の「幸せ」を、そうでもない人に分け与えれば。そういう思いを抱く人が、たくさんいれば。世界は瞬く間に、「幸せ」に包まれる。

よくわからないけれど、戦地が廃墟に花畑が咲き乱れている情景が浮かんだ。

確かに、そんなイメージだ。

でも、今、そうなっていないのだから、“難しい”のだろう。

だから、大切なのは方法だと、是非とも論じてゆきたい。

「簡単だよ。広い場所にみんなを集めて、美味しいもの食べればいいの」

「広い場所ってどこ？」

それは、言わば、メルヒエンの檻のようなもの。

理想とする空間は、脳の中に描かれた、小さな小さな公園。いつもあなたと駆けて遊ぶ野原。世界は、そこから始まっているという算段だ。

至極適当に「どこでもいいじゃん」と頷いて、ある程度くだけて

おく。

「美味しいもの、いっぱい作るのに、お小遣い足りないよ？」

「うっ……！」

至極全うである。

それどころか、見知らぬ他人のために自分のおやつ代を削らなければいけないと思うと、それは大変に遺憾だ。

でも、「幸せ」はお金で買えない。

波紋はわずかでも、わたしが投じるべきものはあるはずだ。

「お、お母さんに頼むもん！」

「お母さん、最後は自分でやりなさいって言うと思うよ？」

確かに、そうかもしれない。

ものぐさなわたしは、両親のお手伝いを時たま手抜きすることがある。そういうことが度重なったから、わたしにだけ自主性を強調するようになってしまったのだ。

言われればやるのだけれど。

わたしには、何でもやってしまおう人がいるから。

「うっ……！」

「うん。でもね。二人分のお小遣いでも、足りないと思うんだ。世界中の人を、幸せにするには」

さり気なく、協力してくれるところが、また好きだった。

それがわたしの中での普通になっていて、特に、何かを思うことは無かったけれど。

兎にも角にも、わたしが幸せにしたい「世界中」は「世界」は、決してわたしだけの世界じゃなく、あなたと見るこの優しい世界。

そう信じて、頼られることが、わたしは何より嬉しい。だからこそ、そんな時間が少しでも長く、そんな世界が少しでも広く、なってくればいいのにと、掲げたものが檻だった。

最後にはきつと、こんな話などどうでもよくなっているのだ。

誰かに協力を仰ぐことはできても、正解の道を進んでいるとわか

るのは自分。だから、自分でできることしか自分にはできない。正解と決めるのも、勿論、自分だ。

けれどやはり、わたしの思う「恋」や「愛」、いわゆる「幸せ」というものは、結果の中にはないのだと思う。道草を目的に旅行へは行かない道理があるから、ざっくりしたお願いごとと称されるのも、無理はない。

そうやって歩いていく正解の道で、わたしはあなたと歩いてゆきたい。

始まりは、全く、ただそれだけのこと。

囚われの檻から、わたしを連れて脱出して欲しい。

「でも、諦めたらそこで、試合終了って、何かで読んだし。今できること、しよ」

「試合……？」

足がつかないダイニングの椅子から降りる時は、いつも小跳躍を挟む。

人が何処かへ旅立つ時、立ち往く足取りは重くはない。

目的地へと小旅行を企てるわたしに、また、あなたは問う。

「なにをするの？」

「おりょうり」

居間を去る時にでも気取られたか、気障な捨て台詞は、助けを呼ぶ喚声となる。

トコトコと仲良く相引いてしまったけれど、とりあえず、廊下の暮れはわたしが漸進して切り拓いていったとしよう。

「さて、と」

木造の二、三畳の部屋のと真ん中に、部屋を左右に分断する長テーブルがあって、向かって右に流し、左に食品置き場という趣。調

理用具然り、食器類然り、壁付のシェルフに綺麗に陳列してあつて、なかなか見映えが良い。見映えはいいが、わたしくらいの身長だと、まだ届かない。

それもそのはず、キッチンというのは基本的に、いつも作る人のためにある。セッティングは、その人のためになされて当然なのだ。こつやつて、気分で顔を出す幽霊部員のようなわたしにはあまり優しくない。

それを知っていて、来たのだけれど。
そつだ。

今日は頑張つてみよう、という気になつたのだ。

「よいしょ……と」

調理台に立つ時、いつも母が出してくれるお立ち台を出して来て、スタンバイは完了する。

台はちゃんと二人分ある。二つ並べると、一つの長い台のようになって、少しだけなら移動できそつだ。

「えつと……。とりあえず、お鍋と、箶……。あと、ナイフも」

一段降りて、流しの下にある戸棚を漁っていると、何やら不安そつだ。

「え……。ナイフ使うの？ 危ないからダメだよ……つ」

「大丈夫だつて。少しくらい。ナイフ使わないと切れないし」

本当は少し怖かつたけれど、それよりも好奇心が大きかつた。ナイフを使えたら、母も見直すかもしれない。一石二鳥なのである。

がさがさとシャツの裾を引っ張られながらも、漸く見つけたナイフを持ち上げることに成功する。慎重かつ大胆に、調理台へと掴み運んだ。何か、禍々しい蟲を捕獲してしまった時のようでもある。

初めて触るわけではないけれど、母がいないところで使用するのは初めてだつた。

「ふ、ふう……！」

「気を付けてよ……つ」

鍋と箶はすぐに手に入ったものの、思わぬ心労である。

でも、ここまでくればあとは簡単、なはず。

「それじゃあ、作ろう」

「なにを？」

決して言わないつもりだが、わたしはあなたのために作るのだ。
答えるのは無粋というものだろう。

「ひ、み、つう」

「ええ……。それじゃあ、手伝えないよ？」
なるほど、優しくかった。

だが、それに関してはとりあえず策がある。

「じゃあ、必要な言うから、それ持ってきて」

「あ、うん……」

言葉の意味を理解すると、あなたは少し寂しそうに台から降りた。
わたしは、その想いに答えるだけの料理を 「幸せ」を提供し
ようと意気込んだ。

きっと、あなたも好きになってくれる。

わたしの好きなものを。

「じゃあ、まずは」

わたしが好きな物を食べている時、わたしは「幸せ」になる。こ
れは、誰とも同じだろう。

わたしの「好き」は減らない。つまり無限だ。

わたしの「好き」を分け合えれば、「好き」は広がっていく。

世界は「幸せ」で包まれてゆく。

「はい、できたっ。これ、そば」

幾つもの思い出を切り分けて。温かい気持ちで沸騰したら、今度は笑顔で語らう今この瞬間を和えていく。試行錯誤を繰り返すうち、涙は素敵な隠し味になって。そうして刻んだ時を、皿いっぱいに鏤めて。決して、それで完成ではない。

誰かが　あなたが、わたしの「幸せ」を、共に感じてくれるまで。

「塩^{しほ}っぱー!!　でも……うん、美味しいよ」

世界を幸せで一杯にしたいから。
まず、あなたから。

恋して。

きっかけは、ほんの些細なこと。
引き金が何でできていたのか、それすらもう思い出せない。それくらい、些細だった。

*

班行動や日直等、同姓であるわたしたちは、あまり一緒の組になることがない。区別がつきやすいようにと、どうやら、先生側の都合でそう仕組まれているらしい。

確かに、避難訓練が“訓練”でなくなった時、姓が同じとは、わたしたちを呼ぶのに面倒がある。勿論、血縁ゆえ容姿が似ているのも。

区分けをし忘れた怠慢の先生がどうかは知らないけれど、クラスメイトたちは、わたしたちのことをしばしば瞳で見分けている。青緑か、緑青か、その順番でだ。

なるほど鏡に映ったらよくわからないと、たまに女子に弄ばれる。あまり気にしたことはないし、自分では気に入っていたから、悪い気はしないけど。

「今度のフィールドワーク、班、自由だってー」

給食の片付けの帰りにでも仕入れたのか、大手を振って教室の敷

居を跨ぐ少女は、かなり得意げに見える。彼女は噂話が好きで、クルスのムードメーカーを担う子だった。

わらわらと、その仲間たちが集まってくる。

それが、偶然わたしの周りだっただけなのだと思いたい。

「へえ。別クラもありなのお？」

「ありだつてー」

ロングヘアの子は、例のムードメーカーに便乗して、さらに場を盛り上げるのが得意。

いわゆる、火に油というやつだ。

「いいじゃんいいじゃん。楽しそう。うちらで組もうよ」

「いいよお」

対抗するシヨートの子は、ボーイッシュな振る舞いとあどけない所作で男子人気があるけれど、割と短気で、怒らせるといいことはない。

結構、個々の力が強い三名に思う。

そういう三名が作るグループに、例えば、あと一つ枠があるとして。

そこに、当てはめるとパワーバランスがちょうどよさそうなのと言え、根暗な読書少女だったりするだろうか。はたまた、

それがつまるどころ、わたしだったりするのだから、人生怖い。

「班つて、確か四人か五人じゃないとダメらしいし、もうさ、ここ四人でよくない？」

「ああー。いつものお弁当パーティーね。いいじゃんいいじゃん」

それぞれ席が近い、尚且つ教室の後ろ側の席という好条件もあって、お昼休みの時間帯、わたしの周りは大抵いつもこの三名が占拠していた。それから、知らぬ間に根城にされていたのである。許可を出した覚えはない。

しかし、素行が悪いわけではない、むしろ優しくて面白い人たちだし、特に嫌いということもない。けれど、わたしは一緒に食べた人がいるので、わりかし煙たがっていた方だと思う。

嫌だと言っか、眩しい太陽を直視できないのと感覚は似ているか。とは言え、それに関して、特に何か訴えたためしはない。

わたし自身、心の中では「うげっ」と、顎め面を浮かべているかもしれないし。

「そうだねー。他に、男子とかいる？」

「ううん。いらなあい」

その「いる？」とは、所定の者が「居る」ではなく、所謂「要る？」であろう。「要らなあい」であろう。

まあ、デートに行くわけではないのだし、必要ではないと判断されたのだろう。

「じゃあ、この四人でいいよね？」

三名のアイコンタクトもいいところで、わたしに賛同を求めるクエスチョンマークが伺えた。

当然、わたしには昼食を一緒に食べたい人がいるのと同じく、一緒の班になりたい人だっている。それは同じ人なのだけれど。

しかし、班は最低でも四人以上で組まなければいけない制限付きなので、その人とわたし自身を数えても、絶対数的に二人足りなくなる。

こうやって他人を煙たがっている読書少女は、生憎、その身上、残り二人を抽出できる程の交友関係を有していない。適当に余った二人組とマッチングされて、フィールドワークをあまり楽しめなくなるのは目に見えている。

経験則ではないけれど。経験則ではない、初のフィールドワークだからこそ、わたしの脳内シミュレーションは非常に捗り、今までに例を見ない急ピッチで進行した。

そして、結論が出た。

それに関して、わたしがとったりアクションとは、小さく二度頷くだけだけれど。

いや、別に、推し負けたのではない。

「よっし、決定ね」

話したことも無い人と、行ったことの無い場所を巡るよりかはマシだろうと、甘んじて受け入れることにする。それに、数合わせという意味合いは、向こうもわたしも同じはずだ。

居辛くなったりしたら、腹痛でも引き起こせばいいだろう。

もしかしたら、臨時の医務室なんかにも助けに来てくれるかもしれない。

いつもより多少高鳴る鼓動が、三拍子を刻むようで気持ちが悪い。片手間に読み進めていた国語の復習も、頭に入っていない。

どちらかが振り切れていれば、きつと楽だろうに。

まあ、関わり合いを否定するわたしが、基本的にいけないのだからうけれど。

「んじゃ、どこ見る？ どこ見たい？」

「そうねー。博物館とかは、なんかあんまりだよねー」

「言っであんま見るとこないし、無難にモールでお買い物とかかなあ」

それは、何とも麗しくない。

わたしがモールでお買い物をして、いい思い出作りになる構図が全く想像できない。一体誰なのだろう、引き攣った笑顔のそいつは、匆々、ほろ苦い。

ああ、でも、新刊の発売日だったかもしれない。

毎号楽しみにしているのだ、星の

「あ。男子戻って来た」

予鈴ギリギリというべきか、予鈴丁度というべきか、計算され尽くしたタイミングで、クラスの男子たち幾数名が舞い戻ってくる。

どの御仁も良い汗かいた感のある晴れやかな表情をしているから、何か収穫でもあったらしい。

昼休みを校庭で過ごす面子の、最近の流行りはサッカーだと聞く。新しい技術でも覚えたのだろうか。

フィールドを駆ける勢いそのままに教室に戻って来るから、次の授業の準備が頗る賑やかになる。あり余っているなど、思わざるを得ない。

そのガヤを皮切りに、他のクラスメイトたちもある一定の音量を有して話始めるから、教室が余計に騒がしい。そうしないと、聞こえないのだから仕方ない。

これが所謂、このクラスの昼休みである。何か文章を読み下すには適さない。

適さないのだが、今日は少し違った。

わたしの周囲が、逆に囁き出したからだ。

「実際さあ。どう思う……？」

「ああ、アイツ？ うーん……。うちは、あんまりかなあ。別に嫌いじゃないけどねー」

ショートの子の視線の軌跡を辿ると、行間を読むのとで、誰のことを言っているのかは何となくわかった。

読書ばかりしていると、こんなことばかり見えるようになるから、良くない。

やれやれ、と軽く自己嫌悪していると、ムードメーカーの子が応戦する。

「どう？ 誘ってみちゃう？ わたしは、別にいいんだけど」

囁き声に変わったのは、どうやら、そういう趣きのミーティングにパラダイムシフトしたかららしい。

「ええ……。うちは微妙かもー」

「わたしは、どっちでもいいかなあ」

とりあえず、ショートもロングもあまり乗り気ではないらしい。それを気取ったのか、ムードメーカーの子が機転を利かせた。ロングの子が食いつきそうな議題を振って、自分のフィールドを構築するつもりようだ。

「てかさ、てかさ、彼氏いるんだったよねー」

「あ、うん。いるよあ。C組に」

なにかいるらしい。

「えっ、マジで!? いつの間にだよっ。うち、聞いてないんだけど!」

「一週間くらい前かなあ。放課後急に告られて、なんかオツケーしちゃったあ」

オツケーしちゃったらしい。

「なにー、もしかして、もう、色々しちゃった系?」

「まあったく、なんにもしてないよ。デートもまだしてない」

「でも、なんか負けた感……!」

展開が非常に目まぐるしい。

飛び交う羅列を目で追っていたら、本当に眩暈がしてきそうだ。

それはもう、どうでもいい字面と、わたしから遠すぎる世界観に酔って。わたしは生来、三半が貧弱なのである。

歎いた下からショートの子が急に吠えるので、びくつとなった。

「あああああ! うちもカレシ欲しいなああ! めっちゃイケメンのやつー! あと優しいの。そして、マッチョなの。おまけに手品とかできたらいいなー!」

「最後のなにそれ」

「でも、いいなー。オツケーしたってことは、好きだったんでしょ?」

ムードメーカーの子が冷静に収めると、ロングの子は少し気恥ずかしそうに縮こまって言う。

「あ、うん。まあね。ちょっと、カッコいいかなあっては思ってた……と思う」

「照れちゃってー!!」

それが所謂、男女の恋愛というやつなのだとは、小説や物語を幾つか読んで知ってはいた。でも、どうして女性がそうも男性に固執するのか、その逆もまた然りで、特定の人物に執着すると言っ意味を理解し切れてはいない気がする。

保健体育の時間に、男子は女子に触れなくなってくるのだと習っ

たけれど、どうしてそれを知っていながら返事を出せるのか疑問だった。触れられたいのだろうか。だとすればそれは、どう触れられたいのだろうか。

そう言えば、女子はこうやって考えることが増えると、そのとき一緒に習った気もする。

何が成長で、何が性徴なのか、全然わからないのだけれど。学とはあてにならない。

あてにできるものなのであれば、不意に飛んできた難題にも、的確に解答できてもいいはずだ。さしずめトゥーランドットの主役……ではないけれど。

「ねえねえ。好きな人とか、いるの？」

本の登場人物とか以外でね、と付け足されたけれど、端からそんな小洒落たセリフを吐こうなどとは思っていない。パステイシーユは無粋というものだ。

とは言え、無視の羽蟲もいけないだろうから、「えっと」「や」「うーん」などと唸っておく。

思えば、考えたことも無かった。

登場人物の心情表現だったり、今回のような風の噂だったり、時には両親の馴れ初めだったり、他人のそれに触れる瞬間は多からずあった。けれど、自分がその話題の中心になることは一度もなかった。

それがつまり、恋愛をする意味を理解できない所以なのかもしれない。

そう思い立ったわたしは、どちらかと言えば、協力的な姿勢で逡巡していたのだと思う。

「どういう人タイプ？ やっぱ、本読むの好きな人？」

「う、うん……。本は、好きだと、いいかな……」
それも、わたしと同じ趣味のものだといひ。天体とか、異国文化とか、できるだけ。

そうして、面白いねと優しく賛同してくれるような。

「顔は、顔！ 見た目はどんな感じがいい？」

「え、ええと……」

シヨートの子に捲し立てられるものの、それはわたしが選んでいいものなのだろうか。駄菓子屋に並んだアソートを選ぶのではないわけだし。

要は、相手の気持ちも、そこにはあるわけで。

言い切るのには自信がなかったので、「わ、わからないかな……」と恍けることにした。

その中途半端な対応がいけなかったのか、ロングの子の興味を誘ってしまった。

「このクラスで言うとな誰え？」

「う、うーん……！ だ、誰かなあ……。うーん……」

言い得て妙な答えが見当たらないので、お茶を濁す。

濁したお茶は、全部飲み干されてしまう。せつかく、苦いものになあ。

「誰かと、手、繋いでみたいとかない？」

「手を、繋ぐ……？ うーん……」

「もつとさー、キスしたいとか、ほら。あるでしょ、そういうの」

「そ、そんなの……、まだ……」

「えええ。つままないなー」

思えば、小説に登場する恋人同士の二人は、得てして、そうやってエンディングを迎えていた。俗に、それはハッピーエンディングなどと呼ばれたりして、第三者的には「幸せ」の象徴なのだろうと思つ。

であれば、「幸せ」を求める者であるわたしは、少なからずそれを理解しなければなるまい。

好きな人がいること、手を繋ぐこと、キスをしたいと思うこと
あまりに独立した事象過ぎて、それらを結びつけるのは決して容
易ではない。ましてや、自分との関連性を見出そうなどは、困難
を極めるに違いない。

わたしは、これまでたくさんの本を読み解いてきた。同学年の子
であれば、一番読んでいると言い切ってもいいかもしれない。
色々な恋愛を見た。

悲劇的なものもあったし、衝撃的でドラマティックなものもあっ
た。勿論、何ら普通の恋愛もあった。

見てきたから、自分にも簡単にできると思った。少なくとも、三
行で纏められている過去の恋愛よりは、素敵な恋愛をできるとも思
っていた。

それが、どうだろう。

ロングの子にはできて、自分にはできない。

何か、わたしがまだ読んでいない本を、読んででもいるのだろう
か。それは一体、誰が書いた、どういうジャンルの物語だろう。わ
たしがそれを読んで、果たして理解できるものだろうか。

ああ。違う。

わたしは、それが違うということは知っている。
きつとそれは、彼女がこの街を歩く、彼女だけの物語なのだ。
では、わたしの物語は。

「ただいま！ たまには体育館もいいね」

先ほど戻って来た校庭グループの後に続いて、体育館グループも
教室に戻っていたらしい。体育館は使用後に片付けと掃除をやらな
くてはいけない分、帰りが遅いのだ。

「う、うん。おかえり。はい、タオル」

わたしは、それ用にと家から持参していたタオルを取り出し、渡す。

それは仮にもわたしのので、あなたがそれと同じタオルを持っているのは知っているけれど。

「えっ、ありがとう。でも、いいの？ これって」

「い、いいのいいのっ。使ってよ……！」

どうしてわたしはこんなことをしているのだろう。何か意味があるのだろうか。

ずっと、ずっと、わからなかった。

ただ、あなたの役に立とうと、「ありがとう」と喜ぶ顔を見ようと、それだけのためにやっていると思った。見返りを求めていたわけではなかった。

家に帰って鞆を開けると、あなたの匂いがした。

誰かが、ページを捲った。

点と点が繋がって、線になる。

「お姉ちゃん。あのね。今度のフィールドワーク」

わたしはもう、お姉ちゃんじゃなくてもいい。
そう思った。

【Sign】繰り返して、終着点。(前書き)

【まえがき】

”一日を生きて笑い、永遠を生きて学ぶ”
時間を刻むとそれは無限であると言いますが、本当にそうでしょうか。

長い長い1ページがあるとすれば、それを捲った時、わたし達は
どうなるでしょうか。

簡単でも、難しい。

すべてが、そういうもの。

どしどし。

【Sign】繰り返して、終着点。

「あれ？ 今日って何日だっけ」

ふと生じた疑問に、僕は少なからず疑問を感じていたと思う。無
限に続く違和感のループの正体を掴みたくて、僕は問いかけた。

それでも、なにか、どこか遠い場所へ電話をしている感覚だった。
「今日？ 今日には十二月の十三日だけだ。あれあれー？ 昨日のこ
と、忘れたんですかー？ あんなに乱れてたのに、ねえ、ルーお姉
ちゃん？」

パジャマの彼女はわざわざ掛け布団からはみ出して、二人の部屋
にあるカレンダーを指差す。

現実逃避しようと思ったわけではない。

だからこそ、体の内側に撒き散らした愛情の残滓が、いやに脳を
誘う。きつと、頬なんかは赤々と奇を衒っているに違いない。部屋
は寒いのに、薄着で居ても温かい。

「わっ、ちよっ、服っ……………！」

「あははは。ごめんごめん。はい、これ。ルーの」

おそらくさつきまで僕が陣取っていたところから、寝間着がする
ると姿を現した。

隠していた風ではないのが、なんともリズラしくなかった。

「夜中、寝惚けて私のこと起こした仕返し。何となく脱がせてみた。
全然起きないし」

「や、やめてよ……………っ。恥ずかしいからっ。ていうか……………み、乱れ
てない……………からっ！」

「あははっ。いいからいいから。でも、可愛かったなあ、昨日のル

「……もうっ！」

取り返しがてら、僕はベッドへ舞い戻る。

しかし、僕はどうして一度立ち上がったのか。

「ま、全く……っ」

「あはははっ」

「わ、笑わないでよ、あんまりっ。あと、ズボン返して……!!」

「んー。けど、ルーさ、外出ないから、真っ白だよ。肌」

何故か、ズボンは布団の中で上手く履けるようになった。

冬だから、だろうか。

「そうかな。昔はよく外出してたから、そこまで自分に色白の印象ないけど」

「まあ、昔はねー。今は真っ白だよ。白いし、すべすべ。羨ましいなあ」

言いながら、リズが右腕から胸にかけて頬を擦り寄せてくる。

そういう距離に、僕は今、居る。

何となく、求められているのがわかるようになった。リズはそういう時、身を寄せながらも心は素っ気無い感じがする。その心身の温度差が表情に出るけれど、言い得て妙な表現を持ち合わせていない。

ただただ、僕はドキドキさせられた。

「そそ、そんなことないよっ……。リズだっって……」

「おっ？」

寄りかかれて身動きの取りづらい僕ができる行動は、多かれ少なかれ限定される。僕という頼りない器をもってすれば、それは、あるいは予測もできたかもしれない。

着崩してはだけていた彼女の右肩へと、誘こよほわれるように、僕の右手が吸い込まれていく。「わぁ」という、仰々しい彼女のリアクションとともに、フリースパジャマの袖が下がる。なるほど、僕が撫

でべき軌道が、確保されて行っているような気がしないでもないのだけれど。

なにか悔しい気持ちと、恥ずかしい気持ちが同じくらいあった。

「ふふふふっ」

「な、なに？」

僕の腕の中で、彼女が笑う。

息を吐く度に振動が伝わってくるのが、兎角こそばゆい。

「ムードに弱いよねー」

「うっ」

いつになつたら慣れるだろうと、気がかりでならない。

慣れてしまった暁には、僕はリズムをどうしてしまっただろうかという怖いもの見たさも、そこには密かにあって。

今はただ彼女に従うようにしてしまって、彼女が心地よく思う時間を、僕が探すしかない。

「ね」

「ん？ なに？」

トクンと、静かに脈が鳴る。

僕の。いや、彼女の。

「……………」

「……………」

ぎゅっと裾を握られて、引き攣ったパジャマに沿って、僕は背筋が伸びる。そのまま彼女を離してしまわないように、肩を抱き寄せる。見計らっていたのだらう、彼女は僕の胸をさっさと渡って、それから僕はいなされた。

ベッドの反発力に飲み込まれた僕は、その斥力の働くままに、彼女の体重を受けた。

抱きしめれば抱きしめる程、僕へ掛かる彼女の引力は、当たり前を増して。そうやって体にかかる負担を、愛の重さと勘違いして。気付けば息が出来なくなっているのを、必死で忘れようとして。

それが今の僕にできる精一杯の、模索であった。

「……………っは！……………はあはあ」
「あっ、ごめん……………。苦しかった……………？ な、なんか急にキスした
くなつて……………」

なんだろう。

自分の中の何かを僕で埋めようとしているような、あるいは、僕
の中の何かを自分で埋めようとしているような。そんな感覚。
彼女の心悲しい表情こころがなをなぞるのは、今日の日も僕という許嫁の掌
であつて欲しい。

「あ、ううん。いいよ、大丈夫。全然嬉しい。……………でも、リズ、ど
うしたの？ 悩み？」

「んー。別に、違うけどさ。だって、私たちってさ、ほら、普通じ
ゃないじゃん？ だから、いつどこで、どうなるかって、時々たま
ーに、たまーにだけどね。ほんのちよつと、怖……………ドキッとして…
…」

「リズ……………」
いつも意気軒昂としている彼女の、あまりに儂げで弱々しい声に、
思わず僕は、掛け布団を広げた。僕を覆う彼女をさらに覆つて、そ
して、世界は僕と彼女の二人だけになった。この暗黒の世界でなら、
僕たちは絶対に光を見失わないだろう。

声が聞こえる。命脈が流れる。息吹を感じる。想いを通わせる。
すべてが同じ方向を向いている。

抱き締め合つて確かめる。口づけをして愛し合う。

「好き……………。リズ……………好き……………。大好き……………！」
「私も好き……………。お姉ちゃん……………。ルーお姉ちゃん……………！」

ああ。

そつだ。

そうして、僕はリズ以外のすべてを世界から忘却してしまう。
そうしなければ、僕たちは離れ離れになってしまうかもしれないから。絶対的事由に追走されてしまつに違いないから。
それが僕が恐れること。

正反対にこそ、愛はあつた。

包み隠さずすべてを脱ぎ捨てて、彼女と一つになろうとするたびに、それは見えた。

それは、大きな黒い影を成していた。

そう言えば、居間の時計は十七時を指していた。

つまり、今日は休日であると言える。

など、短絡思考にもほどがあるだろうと、先ほど、父の軽いお怒りを頂戴したところだ。

「なに。二人してぼーっとして」

母が夕涼みの一杯を片手に、僕の座る向かい側へとやってくる。

その席は、暖炉の火が一番近い特等席なのだと、冬になると羨ましくなりはする。

冷ます吐息に香るのは、いつものブラックではない。

これは、ジンジャーコーヒード。

「あ。うん。大丈夫」

「ソーソー。ただのパーティ疲れー」

隣のリズが応戦する。

何だろつ。目を見合わせたわけでもないのに、見つめ合ったかのように恥ずかしい。顔が仄かに火照っている。これは悴んでいるとも言うかもしれない。

僕らの距離は何ら不自然ではなく、密に近い。

だからかもしれない。

「あらそう？　ならいいんだけど。それより、何か温かいの飲む？」

「じゃあ、私、マキアート」

「僕も同じで……というか、手伝うよ。マキアートって時間かかるし」

「いいわよ。昨日の残りがあるから。リズは甘いよね。ルートも待っててね。今温めてくるから」

「あ、うん。ありがとう……」

小気味よく立ち上がる母の後ろ姿は、急いでいるようには決して見えない。川が流れるようなベクトルと、飛沫が撥ね返るような姿勢の良さは、それこそ自然。

そのはずなのに、母の言葉に、僕は一抹の疑念を抱いてしまう。僕の申し出を断るとは、なかなか珍しい。

喧嘩もしなければ、互いに深い詮索もしない。それで溝ができたことはないし、距離が著しく離れたことも無い。母と子のスタンスを、美しく保ち続けてきた。

母が僕を嫌っても僕は母を好きでいるだろうし、僕が母を嫌っても母は僕を好きでいてくれるだろうとも思う。こんなに素敵な母親は、世界中どこを探してもウェール家にしかないに違いない。

それでも、飛躍しすぎかもしれないけれど、虫の知らせを聞いたかのように感じた。

そこまで由々しき問題に直面したわけではないのは確かだ。心臓の異様な拍動も、呼吸の乱れもない。外界に呼応する身体的変化が少なすぎる。

であれば、これは感情の変化だろうか。

夏の暑いのに暖房に当たって、冬の寒いのに冷や水を被ったような、そんな。僕はそれを正当化する義務を負って、普遍となるまで永久にそれを繰り返さなければならぬ。僕が、その義務を忘れるその日まで。

これ以上、何と表現すればよいだろう。

皮を剥いたまま干乾びたオレンジの抱いた、あの憂慮に淀んだ感情とでも言うだろうか。

ああ。だめだ。

僕は、比喻表現が得意ではなかったのだった。

一体、どうしてだろう。

体感とは 経験も記憶も記録も、そのすべてを超え得る瞬間の
だと、僕はもう知っていたはずなのに。

「はい。おまたせ。リズのは甘いのね」

我が家はカップで見分けがつくようになっていいるから、それはすぐに分かった。

いや、瞬間的に体感した。

そして、記憶は。

「お母さんありがとー」

記憶は、僕の言葉を予定して埋め尽くして、抑え込んだ。

今、思い出すべきではない。思い出してはいけない。記憶違いをしてはならない。

この幸せを、失ってしまうことになるかもしれないから。

「はい」

僕は選択を拒んだ。

拒むしかない。

受け入れてしまえば、それは。

「ルート？ どうかしたの？」

それは、違わないのに。

それも、間違っているはずはないのに。

同じだけの大きさの感情と感情が、闘ぎあう。それが混ざり合わないのは、決して水と油だからではない。それが藍と青だからだった。

きつと、泣いてしまっはいけない。

彼女が泣けなくなってしまつから。新しい道を、進んでいけなくなつてしまつから。

だから僕は今、受け入れなければならぬ。

選択、しなければならぬ。

「うん。何でもないよ」

届かなければ手を伸ばすしかない。越えられなければ、壊すしかない。通れなければ、渡るしかない。分からなければ、探すしかない。実らなければ、愛するしかない。

そう思つて、僕は口づけを交わしたのだから。

「いただきます」

「ん？ あれ？ それ、ルーのカップじゃない？」

「うん。そうだよ」

「あらあら。大胆ね、ルート。お友達のカップで飲んじゃうなんて味はリズの以外同じよ？」

「うん。知つてる」

忘れるはずない。

大切な人。

僕にとつて、当たり前前に『特別』な人。

「だつて、これは桜のだから」

居てもたつても居られなくなった僕は、すぐさまアリスに電話したのだつた。

電話口で何もかも理解していたように話す様子は、特に不思議でも何でもなかった。それどころか、通訳が要らなくて安心した。

アリスはきつと、僕の考えていることを、全部知ってくれているのだから。

狼狽えながらの電話を横で聞いていたリズムも、何か事情を察したのか、僕に同行してくれると言い出した。もう夜も深けていくばかりだし、断ろうかとも思っただけで、あの場所にリズムだけいないというのも、不正解だろうと連れて行くことに決めた。

その後、ルリ会長の家へ電話をした。アレンへの電話も、リズムから聞いてなんとか成し遂げることができた。

当然ながら、僕は無闇矢鱈に架電を繰り返したわけではない。意味があるとすれば、声を聞いて安心したいから、などでもない。けれど、明確な理由があるとも全く断言できない。

だから、苦手な比喻表現に頼る他なくなる。

一口に言い表すのならそれは、多分、“点と点を結んで、線を作るため”だろう。

アカデミーに入学して新しい友達ができ点。球技大会で優勝できた点。文化祭でリズムとキスをした点。秋に合宿をした点。騒動の渦中にいた親友が無事だった点。ショッピングモールで事件が起きた点。一度、世界をやり直した点。

色々と拙かった僕の処世術も、紡いだ点を模倣することで、少しは上達していたのかもしれない。

「マジ……？ 本当に開いてんだけど……」

それは当然だろうと、僕は柄にもなく腕時計を気にする素振りを見せる。腕時計などしていないし、時間というものを急いでいるわけでもないけれど。

その人はルールに拘束されているから。

「僕が開けておきましたから」

「あ。そうなのね。ルートくん意外と大胆なことするね。こんな時間に、こんな場所に、こんなに人呼んで。ワタシ、父さんに心配かけちゃったよー。『彼氏か？ 彼氏なのか！？』ってねー」

「嬉しそうに見えるんですが」

「あ。そう見える？」

けたけたと笑っていられる器量の広さこそ、このカシミヤ校の生徒会長ルリ・リリアムである。いや、それは、器量の広さと評価していいか微妙なところかもしれないが。

とりあえず、屋上庭園まで続く道のりは、僕が段取ったことにしておくとする。

僕は特に何もしていないけれど。

「それにしても、すごいですね、ルートさん」

「そうかな」

非の打ちどころの無いアレンに褒められると、脇から背中にかけてこそばゆい。リズと同じ年であるから、尚のことだろう。

思い当たる節から近いところにはいなかったから呼ぶべきか迷ったけれど、呼んでおいて良かったと思う。アレンがいると、少し安心できる。震えが止まる感じがする。

固着から捻くれた勝手な感情かもしれないが、リズ同様に守られている気がしてしまうのだ。

「放課後も巡回の係の方もいますよね。その後を開けたんですか？」

「ううん。巡回の人がいつも確認しない場所があるんだけどね。そこだけ開けといたよ。職員玄関は外側からも簡単に鍵が開く仕組みだから、そこ以外ね」

「す、すごい……。ルートさん、プロの泥棒みたいですよ！ ……あれ？ 褒めてるはずが、貶してるように……？」

「あはは……」

この笑えない状況下で、よくも笑えたものだ、正直なところ笑えて来てしまう。

でも、中身の無い笑いは、僕の体温を奪っていくようで。痩せこけた三日月に睨まれた僕は、それだけで足が竦んでしまいそうだった。

屋上庭園に舞う風は冷たいし、見下げる大地は遠い。

それでも いや、だからこそ、この樹々のどこかに、あの白い温もりへと通じるトンネルのようなものが、偶然あってしまう気がして。

「お楽しみのところ悪いのだけれど」

コホン、と仰々しく咳を払って、その人は白い息を吐いた。

隣にいる華奢な彼女とぴったりとくっついていいるから、きつと、体の芯から温かいのだろう。

「……ルート？」

ああ。僕もそうだった。

リズムと手を繋いでいるところから伝播して、心まで温かい。

それならば僕も、後に続こう。

「ごめん。ノア。アリス。うん。えっとね……」

隗かいより始めよとは、よく言ったものだ。

誰かの視線を感じてたじろぐ僕は、もう、この世界には存在しない。

「まず……。今日は、来てくれてありがとう……。無理なお願いだつていうのはわかってたんだ。でも、このまま夜が明けたら、明日はもう思い出せないかもって思って……」

恐怖は誰かに認知してもらうことはできるかもしれないけれど、それを理解してもらうことはできない。

それでも、僕は皆を集めた。

今ならまだ、共有することができるかもしれないからだった。

「この場所じゃないとダメだつて。ここにいる全員じゃないとダメだつて。本当に確認なんてないんだけど。僕が失った“何か”は “誰か” は、皆が知っていたはずの事なんだつて思ったから

……」

「ルートさん……。そこまで……」

どうすれば確証に変わるかもわからないままに、忘れたくない
と、思い出したいと、そういう思いばかりが募っていった。
漠然と、大事なものを失くしたけれど、それが何か思い出せない、
事務的な感情もあつたけれど。

それ以上に、数時間前まで見えていた 聞こえていたことが、
突然、感じられなくなった喪失感に、僕の中の温かい思い出がリン
クして。ただただ、この冬の寒いように、心が寒くなってしまった
のだ。

「でも、どうしたらいいか、僕にもよくわからなくて……。でも、
今、ここで、何かをしなくちゃいけないと思うんだ。このチャンス
を逃したら、きつと、いつか後悔する……。そう思う」

「ルートくん……」

一番近くで眠っていたリズムも、きつと、僕の心が凍結していくの
を感じたのだろう。今朝のキスで、僕は満たされ、解凍したと思う。
でも、僕はあのマキアートで舌を火傷した。

失われた“何か”が、消え失せた“誰か”が、忘れ去られた“彼
女”が、僕を妬いているのかと思った。飲み干しても、まだ、舌は
ヒリヒリと痛んだ。それが、また奇を銜って。

その頃にはもう、僕のカップのマキアートは冷めていた。

「皆を巻き込んだのは、あの……。本当にごめんなさい！

……。でも、ここに居る皆だからこそなんだ！」

「ルート……」

どうしてか涙が溢れそうになった。

背中を雑に摩られて励まされている感覚になるのに、かえって瞳
は熱くなった。

僕は誰かに愛されていたのだと。

そのときのリズムの表情を見て、ある言葉が浮かんだ。

この屋上庭園に咲く、あの木の名前だった。

今は冬で葉も無いけれど、確かに、彼女は庭園の中央に聳そびえてい

る。年月という概念に根を張って、力強く生きている。青春という目標に期待して、僕を呼んでいる。

「例え何も得られなくても、忘れちゃっても……いや、そんなこと絶対ない。皆が、今の僕を覚えていてくれるから。絶対消えない。消させない」

「ルー、ト……」

なれば、答えなければならぬ。

いや、問いかねられずとも。

僕は、彼女を知らなければならぬ。知りたい。

「だから、さ……」

「……」

そう。

だから。

「だから」

「木の上で、眠ってみたいと思うんだ」

【Sign】繰り返して、終着点。（後書き）

【あとがき】

時間の流れ、空気の流れを、肌で感じていただけたかなと思います。

時計塔で迷ってしまった方は、今章の初めから読み直してみてください。

次回をお楽しみに。

愛して。

一步を踏み出す勇氣は、誰かの背中を押す心。
誰かの背中を押す心は、私に勇氣をくれる愛そのものであった。

*

ある日を境に、わたしは姉を名前で呼べなくなった。

それは決して姉と呼ばれない自分への陶醉なのかもしれないし、ただの責任転嫁なのかもしれない。

遅いとも言えないし、早いとも言えない。

その日は、往々にしてやって来たというものだ。

わたしの知る誰かは、それを成長と呼んだけれど、こんなに苦しいものが成長なら、わたしは成長などしなくてよかったと心中嘆いていた。

でも、隣で同じように成長していくのを目の当たりにして、わたしはわたしのままではいけないのだということもわかった。それは勿論、体もそうだし、心もそうだった。

綺麗な碧緑ひくみはそのままに、輪郭はより一層鋭く縁取られて、漂わせる香りも重くなった。少しだけ胸元の張ったブラウスが、淀まぬ声に掠れるのは、ごく自然な法則に則っているだけなのに。

最後に触れたのはいつだったろうかと、よく考えてしまう。

姉がわたしの知らない誰かと手を繋いでいるところを想像すると、それだけで気持ちが悪くなった。誰かとキスをしているところを想

像すると、夜眠れなくなった。愛を深めていくのを想像すると、怖くて悔しくて、涙が溢れそうだった。

相手が男性であろうとも、女性であろうとも。

それは、わたしが追いつこうと焦っているからだと近頃気付いた。わたしに微笑んでくれたのは、過去のものになってしまった。気付きたくなかった。

いや、嘘だ。ああ、最悪だ。

いつそのこと、違う学校だったらよかったのに。

それも、嘘だ。

この遣る瀬ない感情は、そのまま、わたしと”お姉ちゃん”の距離感の写しだったと思う。それがあべき姿か、望まれる姿かは別として。

だからだろうか。

鏡を見る度に思うことがあった。

この眼球を取り出して、左右を入れ替えたら、わたしはまた”お姉ちゃん”になれるかもしれない。

無論、わたしにはそんな勇気などなかったし、そもそも、眼球を取り出すことができたのなら、わたしはそれを投げ捨てるはずだ。そうして光など失ってしまえば、また、手を差し伸べてもらえるかもしれない。

その程度でよかった。

宇宙を彷徨うのに一人で居たくなかったただけなのに、わたしは自分で自分を銀河の彼方にも擲ってしまったのだらうと思う。

そしてまた、始まりの時をあなたと歩く。

「ただいま……」

お帰りと、母が変わらぬ笑顔で言うのが、心苦しかった。
力なく返事をして、わたしはまた一人で部屋に　いや、一人部
屋であなただを待つ。

あなたはもう、わたしを待っていないけれど、わたしはあなたを
待っている。あなたが答えをくれないからこそ、わたしはこうして
平坦を保っていられる。

わかっているのに。わかっているからこそ。

わたしは、後悔しかできない生き物に成り下がっていたのだと思
う。

そういう時は、読み慣れた本を読んだ。

主人公は最後には死んでしまっけれど、物語の初めは笑い合いな
がら仲間と戯れている。中盤から驚天動地の展開があつて、主人公
は悲痛に暮れなければならぬ。そうして初めて、仲間と過ごす日
常の尊さに気付き、それを守るために身を挺する。

そうやって、何度も何度も繰り返された物語。

わたしのなかでは、もう、始まりと終わりの境界が無くなるくら
い、時間の流れが一切無いように感じられるくらい、世界が小さか
った。

わたしはその中を、大股一歩で歩くことができた。

わたしが誰かの手を取れば、この世界なら一緒に支配できる。す
っかり網羅できる。

いつの間にか、好きでも嫌いでもない話になった。

あのころ、あなたと二人で旅する世界は、とても広大で、畏怖の
念すらあつたと思う。でも、だからこそ、わたしはあなたに縋つた
し、あなたはわたしを頼っていた。そうして乗り越えることができ
たし、手を取り合う大切さを知れた。

どうして、こうなってしまったのだろうか、悔いても遅いだろう。

けれど、諦めきれない気持ちは、胸のどこかに確かにあって。それは、あなたと時々お喋りする瞬間に、思わず飛び出してしまいそうなほど不安定で。

今日も、あなたを待っているのは、そういう思いのやり場を、とうの昔に失くしてしまっただからだと思う。

それはそう、あなたと部屋が別々になってからかもしれない。

もう、この部屋にはあなたの匂いは残っていない。あなたの声も、あなたの息吹も、何も。

心の空虚なところに吸い込まれて、胸はきゅうつと痛くなった。

ああ。成長痛なのだなど、思うことにしていた。

「あ。ただいま。大丈夫？ 体調悪いの？」

「る……。お、姉ちゃん……」

わたしの部屋に入る時は必ずソックをするのに、珍しくしないで入って来たのだろうか。少し目を閉じていたら気が付かなかった。

特に健康で横になっている罪悪感が、わたしをベッドに縛り付けた。

「大丈夫？ 何か持ってこようか？」

「んん……」

お姉ちゃんは、わたしの体調が優れないと、何も言わなくとも何か持ってくるし、おまけに母にも伝える。一段も二段も大事になる。そういうところが、迷惑だった。

そういうところが、好きだった。

わたしは無垢のシートで顔を隠した。

白いのに、世界が真っ暗に落ちていくようで、なにか不思議だった。

あなたが、そこに居てくれるから。

「本当に大丈夫？」

「……うん」

「また、不機嫌？」

「……ち、がう……」

「そっか」

白の世界がピンと張りつめたと思うと、黒との境界面からお姉ちゃん匂いがした。

それから、背中辺りに温かい感触があった。

「言いたいこと、言ってみて？」

わたしのすぐ横に座ったお姉ちゃんが、背中を摩りながら言い添えた。

何故だろう。

安心するのに。嬉しいのに。

とても怖い。この目から溢れてくるものは、どうしたら止められるのかわからない。

「わかんないよっ……。そんなのっ……。！」

「うん。大丈夫だよ。分からなくてもいいんだ。全部受け止めるから、言ってごらん」

誰かを許すことに慣れていないはずなのに、お姉ちゃんがわたしを許してくれる。誰かを包み込むことができないはずなのに、お姉ちゃんはわたしを抱きとめていてくれる。

今、そうすることをやめたら、果たして、この溢れる涙は止まってくれるだろうか。

そんなのは無理だ。

傍にいとこんなに悲しくなるのに、胸が苦しくなるのに、お姉ちゃんと離れるのは嫌だった。居たくても辛くてもいいから、一緒に居たいと思ってしまった。長い、長い、長い時間をこれからも共に。

「……………」

「どこか痛いのか？ お腹？」

「んん……」

「誰かに意地悪されたの？」

「んん……」

ああ。ダメだ。

理想を描く空想も、今は混ざり気が強くて、何の意味をも為さない。わたしの劣情というものも、逃げ場を失って、膜を膨張させ続けている。このままではわたしが壊れてしまおうとわかる。家族に迷惑をかけるという自制心だけが、歯止めをかけている現状、わたしという心は身動きが全く取れない。

どうすれば、わたしは助かるだろうか。

答えは簡単だった。いや、それは難しいとも言つのかもかもしれない。わたしはどうしても助からないからだ。

そこにあるのは、どれだけ傷の深さを浅くできるかという対処療法的なものだけ。”奇跡”はわたしの生まれた時に、”運命”はこの答えに気付いた時に、すでに使い果たしている。

であれば、時間を待たせるのも身を削るのと同義だろうか。

先延ばしにした分は、あとで痛みとして自分に返ってくるに違いない。最悪、手遅れになるかもしれない。

その時、わたしは一体どうしてしまっただろう。

ああ。そうだろう。

こんな風に惨めに泣いて、お姉ちゃんの袖や裾を濡らすのだろう。慰めてもらって、また泣いて。我儘を言って、後悔して。心の居場所も、体の居場所も、無くなってしまっただろうかもしれない。

「……き」

「ん？ なんて？」

我慢できなかった。我慢するのをやめてしまった。分かりきっているのに。

「好き……」

「好きな人のこと？」

「お姉ちゃんが好き……！」

「わっ、と……」

やってしまった。

全く。鈍感なお姉ちゃん。

「……ううう……うええええ……っ！！」

お姉ちゃんの胸に飛び込むと、やっぱり大好きな匂いがして、気持ちが落ち着いた。けれど、鬨値の前後で逡巡の乱高下が起きていて、それはどうしても消えずにいた。

これ以上、何を望んでも進まないだろうに。

「泣かないで。うん。わたしも、好きだよ………ルカのこと」

「……っ、うわああああん……！！」

それなのに、お姉ちゃんは何も知らないから、酷だった。

無知の知という言葉を、これ以上ないくらい憎んだ。

不安に溺れる未知よりも過去に驕れる既知よりも、真っ白な無知が一番罪だと知った。

「でも。やつぱり、笑ってる顔の方が好きだなあ」

「……う、ん………」

そんなお姉ちゃんに、わたしは呪いをかけようと思った、

わたしはこんなに苦しいのだ。お姉ちゃんも、苦しんだらいい。

ずっとずっと、いつまでも。

わたしが、お姉ちゃんのことを嫌いになれるまで。お姉ちゃんが、わたしのことを大嫌いになるまで。成就したならばその時は、笑って、恋の叶う瞬間を祝おう。

「本当に、好き………？」

「うん。本当だよ」

「ずっと？」

「ずっとだよ。小さい頃に約束したでしょ？」

「……………！」
そう。

それはまるで、幼い子供のするいい加減な約定のよう。
叶うこと、叶わないことよりも、誓い合う”今”という時を思う。
築いていく”未来”という夢を追う 負う。

辿りつくことよりも、誰かとそこへ歩いていくことの方が大切で、
寄り道するのも決して間違いではない。

「誰かと結婚しても、離れてても、おばあちゃんになっても、死ん
じゃっても……………。ずっと、だから……………！」

「うん。ずっとだよ」

拙い口約束でもいいから、最後に言っておきたかった。

わたしは、忘れない。

例え、あなたが忘れてしまっても。

例え、わたしが選ばれなくても。

そして、わたしはあなたに『おまじない』のキスをした。

わたしがあなたとキスした過去だけ残して、わたしは世界から消
えてもいいと思った。

長い、長い、長い、時間 あなたと感じていた『幸せ』の時間
を、あなたが忘れてしまっていたとしても。それでも、構わない。

「ずっと大好きだよ……………。るー？」

嬉しいのに。

世界はこんなにも幸せで一杯なのに。

わたしの涙は、止まらなかった。

2024

そして。

時を超えて、距離を超えて、あなたの観測も超えたら。
そのあとは、わたしは、あなたに恋をしたいと思っていた。

*

あの夕べのことは、どうやら母に知られているようだった。
そんなに大きな声が出ていただろうか、俄かに反省する。それよりも、あのまま気持ちが鎮まっていって、眠りについてしまったのがいけなかったのかもしれない。

そんなわたしの傷ついた心に、母の言葉は酷く沁みたまものだ。
あなたはまだ若いのだからと、まず初めに諭された。若さゆえに犯してしまう過ちも、信じ切ってしまう正しさもすべて、まだ変化の途中かもしれないのだと。

正直、わたしは憤りを覚えた。

わたしの抱く感情に対して”わたし”とは絶対で、確定的真理だ。
わたしがそう思ったことを、そう思ったと決定するならば、それは他人にどう思われようが、そう思ったことになるのだ。

だから、わたしの中に芽生えたそれも、そうだと思った。

でも、母は違うのだと言う。それは、わたしの中にある絶対的確定的真理と同じ、母の絶対的確定的真理が語っているのだと。それは経験則とも言うかもしれない。

だからこそ、わたしにはもっとたくさんの恋を知って欲しいし、

気の狂うほどの愛を感じても見て欲しいのだそうだ。その人が男性でも女性でも構わないから、その時その時での一番の感情を寄せ集めてみて。

それから最後に、まだ、それでも、もし、一番好きでいられたら。その時は、応援すると言った。

我に返ったわたしは、ただただ聞き入ってしまった。

そんなに前向きな捉え方もあるものなのだなど、自戒しようとする気持ちもあったし、泣いて疲弊して自棄になる気持ちも確かにあった。それが外界に何を為すものでもなかったものだから、極めて惨めであった。

せめて、この心変わりが、わたしの小さな胸を一回りでも大きくしてくれたら、良かったのに。

そう思えるほどには、わたしも立ち直れているのかもしれないなかった。

しかし、今一つ。

それが今一つだった。

あなたの純真無垢な優しさが、いつでもわたしに降り注いだからだ。

わたしが学校へ行くのを拒んでも、あなたは決して見下さずに、いつも通りに接してくれた。わたしが髪の毛を纏めるのに飽きても、あなたは不器用に均してくれた。わたしが拒食を患った時は、あなたが咀嚼を代わってくれた。

それでも、あなたはそれをキスと呼ばなかった。

揺れることも解けることもないわたしの心は、寂々とふやけていて、折り切れる前にぐにやりと根元から歪曲した。この時ばかりは、自分自身の心の形というものが、確りと見て取れた。

だから、あなたの胸の中で眠る間ずっと、わたしは謝り続けた。

『好きになってごめんなさい』

『あなたの妹に生まれてきてごめんなさい』

*

とある夏の日のこと。

大きくて重い鉄の塊が中身のない木箱に衝突するような音が、部屋に籠っていたわたしの耳に届いた。直後の揺れには誰かの感情も混じっていて、地震で何か物が落ちたにしては表現力に富んでいる。とどのつまり、誰かが飛び降りでもしたのだろうと踏んだ。

生理現象以外で部屋から出ることに無いわたしも、その時は思わず扉を蹴とばす勢いで駆けつけた。わたしに何ができるということでもないとは知っていたけれど。多分、そういうのを見届けるのに相応しい人間だという思いが心のどこかにあったのだ。

ああ。

もしかすれば、いち早く追おうという気持ちもあったかもしれない。

何てことは無い。

いつだって、わたしは物語の読者である。

それだけなのだから。

家の中で高低差の出る場所　階段へと、足を速める。

このスピードで廊下を移動することなど、未だ嘗てなかった。

「……っ！」

けれど、そこでわたしが見たものは、あまりに現実的で独創性の欠片すら無い。アリバイも証明できないのに、只管に無実を強弁し続ける犯人たちを見ているかのよう。あるいは、その犯人にわたしがなっているかのよう、とでも言えればいいだろうか。

前後の文脈から判断するに、その現場の状態を直情的に判断するのは、ただただ愚昧だ。ただ、行間は読み切れない。

『だ、大丈夫っ!?!』

『う、うん。すごい音したけど、そんなに痛みはなかったよ』

『本当に?』

『リスこそ、大丈夫だった?』

『うん。大丈夫だよ。ルーが受け止めてくれたから』

『そ、そっか。ならよかった……』

あの想像の木箱が実物の人体へと飛躍する時、それはもう、奇だ。果たして、わたしはどうすべきか。考えることもままならなかった。

ままならず、わたしはただ、二階の階段の影から、一階の床に転がっていた「四諦^{したい}」を眺めていた。

『ありがとね。ルー』

『うん。どういたしまして』

『……』

『……』

『あ、あの……。そろそろどいて』

『あげないっ。ルーの上、柔らかくて気持ちいいな……。なんて』
『こ、こらっ、リス……。!』

『……………』
『あ痛つ』

『え、嘘っ、ごめん！ 痛かった？ どごとっ。ごめんなさい！』
『あ、えっと。冗、談です……………』
『んん！！ そっういの良くない！ 心配……………したじゃん……………っ』
『あははっ。ごめんね？』

また、視界が揺らめいた。
でも、声は我慢した。
それが、わたしにできる精いっぱいだった。

『私こそ。今度から気を付けるね。パンツ』
『う、うん……………！』
『……………』
『……………リズ？』

耳を塞ごうとも思った。
けれど、できなかった。
わたしは今、一人だからだ。もうすでに、独りだからだ。
だから、あの真つ暗なお呪いの世界まじなに没頭したら、もう二度とこ
こへ帰ってこれない。黒く穢れたわたしだけがぼつんと、無垢の世
界に取り残されてしまう。それとも、わたしは白いままで居て、同
化して消えてしまう。

怖い。

怖いけれど、もうそれしかないかもしれない。
火を見るより明らか、今は、二人を いや、お姉ちゃんを眺め
ている方が怖い。

わたしがお姉ちゃんを見る時の顔と、同じ顔をしていたからだ。

『ねえ、ルー……？』

『ん？ どうしたの？』

『もうちよつとだけこのままでしたら、ダメ……？ まだ、胸、ドキドキしてて……』

『えっ……うん。ダ、ダメ……じゃない……けど……』

『ありがとルーお姉ちゃん……』

『う、うん……』

嘘偽りはない。

嘘偽りはないけれど、優劣はある。

愛とは残酷なもので、数値化も形式化もできない方法論的自然主義のくせに、序列がある。しかも、その線引きも往々にして策で、閾値すらも随時変遷している。そういうものであるからこそ、わたしという檻は、何かに期待してしまう。

そして、期待の結果が敗北だとすれば、心に抱かされた温もりの分だけ、それは絶望へとその意味だけを変更するのだ。柔軟に対応できる不定質だからこそ、そういう変化が起こり得る。

心理学だったか、倫理学だったか、はたまた恋愛小説だったか、わたしはいつかどこかでそういう説を手に入れた。

でも、結局それらすべては、勝者の言葉に過ぎなかった。

解釈するならば、リズの『リズⅡＱⅡウエル』の言葉とでも言えるだろうか。

わたしは、ただの読者。

登場人物に想いを寄せても、それは夢の中の相手に恋をするようなもの。彼女のくれるヒントを読み解いて、自分の都合の良いように解釈を変えていくだけ。空想に過ぎない。そういうもの。

読者は登場人物を好きになってもいいかもしれないけれど、登場人物は読者のことを好きになれない。

『ルーも、ドキドキって……なってる……』

『リ、リス……』

『ルー……？』

ここで、わたしは漸く耳を塞ぐことができた。

何か、もう遅い気がするけれど。これでいい。

こうして、わたしがお呪いを唱えたら、世界は真っ白に、真っ暗になるはずだ。暗い、暗い、まるで深海のような冷たくて優しい場所へと、沈み込んで行ける。

例えばそこは、世界が始まった場所。

あなたは後悔していない？

そう、問う。

すると、後悔だらけの人生だよ、とあなたが答える。

同じだね、と笑って返すわたしは、きつとその時、涙さえ枯れている。

ただ、わたしは決して人生をやり直したいわけではない。

願わくは、お姉ちゃんがわたしが好きで、わたしもお姉ちゃんのこと好きな世界に行きたいだけなのだ。二人だけの世界でもいいむしろ、その方が簡単かもしれない。余計なシミュレートは必要ない。

だけど、『物語の作者になりたい』とは思わない。

作者であつても、登場人物と恋をすることはできないだろうから。また、一緒に約束したい。

叶わない『願い』でも構わないから。

そして、そのまま、あなたとキスしたい。

わたしの祈りは、あの頃のように。

『事象の境界を知りたい』

帰って来て、未亡人。(前書き)

【まえがき】

怒涛の最終章。

怒涛です。

ぶいぞ。

帰って来て、未亡人。

あなたの記憶に残ること。
誰かの記憶に、わたしがいること。

「ううん……」

幕間に目を開けたら視界が一面、樹で覆われていて、結構吃驚した。一瞬、まだ夢の中なのではと錯覚したけれど、すぐにそうではないとわかる。

でももし、わからないまま幹を伝って下界に降り立てば、きっとそこは夢世界だ。

そんな気がする。

そういう人が、ここに居た気がする。

「意外と、寝れるね……」

得てして気持ちの良い寝醒めとはいかなかったけれど、そのせいか、頭は変に冴えている。

それもそのはず、寝醒めというほど僕の脳は休息していない。夜の更けていくのを、普通に感じていたくらいだ。意識して目を瞑らなければ、こんなにも睡眠に不適な場所では、到底、夢の世界へは旅立てまい。

三分と十数秒と言ったところだろうか。

僕たちの記憶や森羅万象三千世界に影響が出るとすれば、程よい頃合いに思う。いや、変化する未来はすでに過去の時点で決まって

いるから、その頃合いというのはまさに、今この瞬間の連続であるう。

少しばかり肩透かし感とは与えてしまっただろうけど、無意味に時間を作っても仕方ない。

皆を起こしに行こう。

すると幹の太いルートを伝って、根元の盛り上がっているところに足をつく。足の置き場としては不十分だったので、すぐさまもう片方の足を投げ出した。

「……っと」

少し、ふらついた。

そんなに長い時間縮こまっていたわけではないのだけれど。

それはともかくとして、こうして一人、屋上の森を歩くと、誰かが何かを僕に問いかけているような気がしてくる。実際、今、一番初めに誰を起こすか決めることができる。

しかし、僕が言いたいのは、そういうことではない。

確かに、皆をここへ集めたのは僕で、木の上で眠ろうなんていう馬鹿げた提案をしたのも僕だ。誰がここへ集まって、誰がどの木で眠っているか、そこまで認識の範疇である。

では、今から僕が揺する木に、果たして彼女は居るだろうか。いや、居なければおかしいのだけれど、そこから降りてきた彼女とは、本当に僕の知る彼女だろうか。

彼女は彼女たり得ているから彼女のような振る舞いをするだろうけど、保証はできない。

そう。

僕と同様、彼女自身も僕のことを疑い得る。

そういう意味で、僕が提案した行為というのは、『一度、現実世界から自分たちを乖離する』ことに近似しているわけだ。そうすることで、現実と非現実の区別を明確にし、僕に取る非日常の炙り出しを施せる。

だから、僕が初めにリズを起こしに行くのは、ごく自然なことな

のかもしれない。

「おーい」

「わっ！！」

「リズ？」

「ルー？ だよな？ ねえ、びっくりするからやめてよ、もー」

木に目印はつけていなかったけれど、庭園中央のベンチから一番近かったので、よく覚えていた。

反応が早かったのは、きっと、眠れなかったせいだろう。

一歩二歩、幹から遠ざかると、彼女がすんと身軽に舞い降りた。起きてたの？」

「こんなところで寝れるわけないじゃん。外だし、寒いし、木だし」

「あはは……」

「ごもつともである。」

「言えど、無意味ではない。」

「それはリズも感じているようで。」

「それで？ 何か掴めたの？」

「そうだね。これから、かな……」

予兆は確かに、この屋上に渦を巻いて胎動している。

家からここへ来るまでの道のりが、風で繋がっているように感じる。

ともすれば、過去を辿るのも、現在を知るのも、未来を観るのも、不可能はない。

あくまで、シミュレート上での話だが。

「他の人も起こすの？」

「うん」

突如、ひゅうと吹いた夜風に身震いでもしたのか、リズがぴったりと密着してきた。僕はそのまま腕を組むように絡めて、手を握った。

少し、歩きづらい。

でも、寒くない。

僕はもう、一人じゃない。

「次は」

そうして、ルリ会長、アレン、ノア、アリスと順に起こしていった。

さすがに底冷えがしたので、庭園で一番大きな木を盾に、僕たちは風下で円陣を組んだ。

「どうでした？ 皆さん、何かわかりましたか？」

「ワタシは、そうだなあ……。なんか目が覚めたよ。マイナスイオンを吸収したような気がしたね。そして、生命の真価を肌で感じた」「それは木だからなのでは……？」

「そういうアレンはどうなのー？ どうせ何にもわかってないんでしょー？」

「うっ。そう、だけど……。すみません、ルートさん……」

「あ、ううん！ 大丈夫だよ。アレン君、ありがとう。この調子だと、ノアさんとアリスも……。だよね？」

「まあ、ええ。そうね。今のところはね」

「ノアも、よくわかんなかった……」
再び、ひゅうと風が吹いた。

屋上という高所であり、深夜という時間帯であることも相俟って、非常に冷たい風だ。頻度も威力もそれなりにあった。

でも、今度は大樹が壁になって、上手く風を避けてくれていた。

ちょうど、向かってきた風が木にぶつかって、そこから二股に枝分かれしているイメージだろうか。そして、その合間に居る僕たちは、風の行く末など知る由もない。

しかし、知り得ることもある。

それは、言わば『風の分岐点』 『大樹の存在』だ。

僕が辿ろうとしている道のりは、そういう手段で掘り起こせるのではないだろうか。ここに居る全員が一斉に掘り進めたら、埋没した記憶の欠片も、きっと救い出せる。

どこを、掘ればいいのか。

色でもいい、輪郭でもいい、重さでもいい、温度でもいい。

僕の中に微かに残っている、記憶の残滓を貼り合わせて、捏造して、増版して、それから全員で演繹しよう。そして、誰かの『願い』の跡から、僕たちの思いによって創造しよう。それこそ、全く懐かしいものを。

僕には 僕たちにはそれができるはずだ。

「でも、何か感じたんでしょう？」

「アリス……。うん。そうだね……」

意図して僕の対極に居るのも、意味あつての事だろう。

長年の付き合いだからこそわかる。

アリスは、僕のことを見透かせる位置に、いつも居てくれる。

「ちよつと整理してみる」

「寒いから、早くしなさいよ」

「アリスちゃん辛辣だねえ」

「ははは……」

しかし、僕自身も急がずにはいられなかった。

とは言え、僕は僕の処理速度以上には記憶を探れない。

ここにみんなで集まった理由を考える。

もしかしたら、答え合わせができるのではないか。

「まず、僕がサッカーを辞めた理由。プロのクラブに入れなかったから」

「えっ？ そこから入るの……？ 大丈夫？ 大丈夫って、あれだよ？ 尺的な意味じゃなくて、その……辛くない？」

「うん。もう大丈夫だよ。僕にとって大事なことから、忘れたくなくて。それに、僕にはリズがついてるから」

彼女の手を今一度、きゅっと握ると、「あっそー」と視線を外さ

れた。

無口な答えは、饒舌な僕の手に戻って来た。

アリスのため息が、夜風を凪いだ。

「はいはい。その次はさしずめ、ノアとの出会いかしらね」

「うん。そうだね。すごく大事だよ」

「ルートとの、出会い……。ノア、今でも、覚えてるよ……」

一番初めにノアと出会ったのは、ミドルの下校途中のトンネル辺りで、本当にすれ違う程度のことだった。その時は、今でもあまり聞けないような大声でアリスを怒鳴りつけて、そのまま走って立ち去ってしまったのだった。

というエピソードは、今、相応しくなさそうだと気を遣ったのだが。

「なんか、突然家にやってきて、夜にたくさん電話したね」

「その言い方はちょっと語弊が……！」

でも、思い出すととても懐かしい。

僕の探していた感覚も、その懐古の念とともに引きずりあげられているように思う。何と形容すればよいだろう。道に迷った時、ふと知っている道に出ることができた、あの安心感などだろうか。

今の場合、その知っている道も、まだ実は知らない道だということになる。

「でも、アカデミー一緒になれたとき、すごく嬉しかったよ。驚きもしたし」

「そうね。あたしも嬉しかったわ。今思うと、ホツとするわね」

「んん……」

そういう風におませに照れたノアを、初めて見た。

誰かが生唾を飲み込む音が聞こえた気がした。

「最初のうちは大変だったよね。ここに慣れるのも」

「そうかしら。あたしはかえって、楽になった感じがするわ」

「ノアも、楽しかったかな……」

「あ、あれえ？」

それもそのはず、アリスはノアの一件以来、家のルールに縛られなくなつたし、ノアもアリスと同居を始めて心身共に満たされたはずなのだ。

対する僕は、部活すら決めておらず、それどころか荒唐無稽にも名指して生徒会副会長に任命されてしまった。入試のテストでそんなに高い点を出していた覚えはないのだけれど。

ともかく、ノリに乗ったアカデミーデビューとなつたのであった。そう言えば、ルー、球技大会でサッカーしてなかったっけ？」「えっ……？」

確かに、カシミーヤ校では運動会シーズンにそういった催しをする習わしがあつた。近隣の住民の方に公開で開かれるので、毎年素晴らしい盛り上がりを見せる。

でも、どうだろう。

サッカーをやつた覚えは、なくはないけれど、曖昧だ。

勝利という圧力のある雰囲気と、目標に向かって徐々にまとまっていく群衆。トラップからのダッシュで、肩に感じる風。果たして、頭の中あのフィールドは、カシミーヤのものなのだろうか。

「もしかして、抜けてるのってそれじゃない？ 私、ルーがサッカーしてるの見て嬉しかった覚えあるんだけど……」

「うーん……。サッカーなんてしたかなあ……。確かに、なにか勝つた覚えはあるんだけど……。その後、なにかを生徒会でやらかしたような……」

「や、やらかしたつてなんだよー！ 人聞きが悪いなーもー。ワタシも覚えてるぞ。何せ、放送係やつたの、ワタシだからね。あの時は、確かに一年生のクラスが優勝してたよ。それがルートくんのクラスだったかどうかは知らなかったけど、近年稀に見る展開だったから良く覚えてるねえ」

「そう言われると、そんな気がしてきたような……。でも、僕は、その表彰台に立ってない、ですよ？」

「うーん……。どうだったろ……」

その部分の記憶に関しては、欠片も香りも何もない。

僕は表彰式のタイミング、別場所で誰かと何か別のことをしていたはずだ。

洞察力のあるアレンが、重ねて僕に問う。

「ルートさん、その時は何してたんですか？ 表彰式なんて大事な場面でいないなんて、ルートさんにとっては、相当重要な局面だったんじゃない……」

「そう、だよな……。でも、うーん……。うーん……。！！全然、思い出せないや……」

でも、靄がかかっているとか、フィルターが詰まっているとかではない感じだ。いつも歩いている道から、一つずれた道を歩いているとわかった時のような、そんな錯誤で。

もう少し進んでみようと思った。

道は繋がっているかもしれない。

いや、見渡せればそれでいい。

「そうそう！ あと、公開文化祭だよな！」

「何よ。急に楽しそうね」

結果を急いでいることが、皆に伝わってしまったかもしれない。

でも、記憶が逃げない保証はない。

「そんなにハイテンションで語っていいの？ ルーのことだから、私とキスしたので、皆に弄られてそうだけど」

「そーいやあ、そんなこともあったねー！ ワタシ、直で見ただけじゃなかったから、まさかなーとは思ってたんだけどさー。リズちゃんと言ってるってことは、そういうことでいいんだよね！？ 公認で!？」

僕としては、もっとこう、劇の脚本を任されて大変だったとか、主役も担うことになって大変だったとか、皆に助けられて感動したとか、そういうことをしみじみ語るつもりだったのだけど。

やはり、キスの印象はハグとは比べ物にならないかと、今更ながら感心する作者である。

そのことに一人でうんうん頷いていると、会長が雄叫びを上げていたので、さすがに口を塞がせていただいた。ルリ会長は屋上へ来るとすぐ叫びたがる。

「しーっ!! 静かにしてくださいっ! 誰かに通報されたらどうするんですかっ!」

「んんん……っ!!」

「あ痛っ!! ……って、噛むの!? 会長なのに!? ……うっ!!」

慣れない手の平の痛みにつられてだろうか、一瞬、キンと頭痛がした。いや、頭痛というよりは、脳から発せられた電気信号が、全身の痛点を颯爽と駆け巡ったような感じだろうか。乗じて、背筋がピンと伸びた。

それから、酷い既視感に囚われた。

僕はここで、誰かに同じことをされている?

危うく、この世界に疑いをかけるところだった。

無意識のうち走り出しそうになる僕を止めたのは、リスとアリスだった。

「どこ行く気よ」

「あっ、うっ、ごめんっ、僕……。なんで……」

僕の手首を握る二人の手は、僕にもわかるほど震えていた。

僕と同じくらい、皆も怖かったのだ。

誰かの発言によって世界がすべて覆われて、真っ逆さまになって、大地から振り落とされてしまうかのような、途方もない不安。対処しようがないからこそ、そうなってしまった時、せめて誰かと繋がれているように。

そう思って、この桜の木の下で、皆で円陣を組んだのだ。

繋いだ手と手で。

「ねえ、ルー？ もうやめよ？ もうおうちに帰ろうよ……」
「リス……」

僕が中心にいるからこそだろう。

その中で、一番、夜に怯えていたリスが、僕に縋ってくる。
だとすれば、アリスもノアが守るだろう。

「アリス……。ノアも、少し寒い……」

「そうよね……。ごめんね……」

当然ながら、二人も例外ではなかった。

「俺は大丈夫ですけど、皆さんが……」

「ワタシも、時間は別にいいんだけど、確かにちょっと寒いなー」
もっと密にくっついていていべきなのに、むしろ、離れていつてしまっている。

記憶は彫刻ていこくむものであって、鏤散めいさんるものではない。

この程度の夜風で吹き飛んではいけないのだ。

でも、狼狽ろうたいえて汗をかくと、かえって冷えてしまう。

「わかった。最後にするよ」

「ルー？」

実際にイメージするまでは、長さも重さも形もわからないから、
そういう意味では本当に一か八かである。

でも、やるしかない。

「これでダメだったら、諦め」

諦めたら、それは、この世界を肯定することになる。

僕が大切な“何か”を忘れたまま、僕はこの世界で生き、そして
死ぬことになる。

絶対に後悔するだろう。

そして、そうしないように僕はまた、あの頃のような贖罪の日々
を重ねるだろう。

でも、今回は決して償えない。

今日という終着点 境界線から遠ざかっていくだけの明日を繰

り返すたびに、僕の中にある『忘却』という枠組みだけ浮き彫りになる。そして、未来永劫、僕を感じる喜びも幸せも、その枠組みの中にしか溜められない。

最後には、『忘却』の枷が、僕の色を決めてしまう。

「あつ、えっ……………」

その瞬間、頬に当たる風が沁みた。

「ル、ルー、ごめん……………！ 私……………怖くてっ。これ以上したら、ルーがどこか遠くに行っちゃいそうで……………！」

「はははっ、うん、いいよっ……………僕は、大丈夫だから」

どうして泣いているのか、自分でもわからなかった。

でも、僕はこの涙も後悔の証にしたいくない。

リズが自分の服の袖で僕の涙を拭ってくれた。僕は「ありがとう」と言っ、リズの髪を撫でた。リズは、髪を撫でる僕の手を捕まえて、辿って、そして僕にキスをした。僕は、そのまま瞬きだけした。

「あ」

籠った息を吐いて数秒後、リズが目をまん丸にして言った。

「しちゃった……………。みんなの前で……………」

「うん……………」

「ワタシ、見ちゃったんだけど」

「僕……………俺も、見ちゃいました」

「ノアは、見えてないよ……………」

「見せられないわ」

状況が状況だからだろうか、公然のキスということに関しての焦りはほぼ皆無だった。

リズも少しだけ恥ずかしそうにしている。

「みんな、今の忘れてねっ」

「いや、無理っしょ」

「無理ですね」

「無、無理だよ……」

「図解として撮っておきたかったわ」

ああ。

そうか。

これだけ思い出そうとしても思い出せないのは、『思い出してほしくない』ことばかり思い出そうとしているからなのかもしれない。それは僕がかもしれないし、誰か別の人が、かもしれない。

そういうことを考えていなかった。

忘れたのは、僕にとって大切なことだ。

それはつまり、その記憶を共有する相手にとっても大切、あるいは『特別』であると言い換えてもいい。

『思い出してほしくない』というのは、つまり、今の不意なキスのような出来事なのかもしれない。であれば、もっと些細な、とるに足らない日常を、僕は思い出すべきなのかもしれない。

球技大会、文化祭のように学校規模のものでは、決して満足しない。満足しないと言うよりか、そういう枠に嵌められてしまうのが、性に合わない。

日常の中に作り出した非日常を、僕や他の人たちと共有することでこそ、僕たちの『特別』は成り立つということ。

余りに平凡過ぎて、写真に写されることもない、当たり前前の『特別』を、僕は大切だと気付いたのだ。

あの、夕陽の見える水の辺ほとりで。

あの、煌めく白浜に囲まれた異世界で。

あの、時の無い決意の空間で。

「合宿だ」

「えっ？」

ここへ置いていかないように、首を傾げるリズの手を握った。
温かい。

温かいけれど、少し胸が痛くなる。

「合宿だよ！ ここにいるみんなで行ったじゃないか！ 秋に！」

「秋の合宿……？ んんー？」

「ここに居るみんなって、ワタシもだよ？ ワタシよくハブられるからなー、みんなに」

「俺も……混ざってるんですか？ 男なのに？ あれ？ でも、なんだか……宿泊会みたいなのやったような気が……しないで、ない……でもない、ような……」

腑に落ちない点があるのは僕も同じだ。

でも、あれは確かに、合宿だったろうと思う。

夏休みのように夏休みではない。土日のように土日ではない。そう。

例えば、祝日の重なった連休の。

「んんー……？ 合宿か……。言われてみれば行ったような気がするかも……」

「本当！？ リズ、覚えてるの！？」

「覚えてるって言うか……。うーん……。なんか夏だったような気がするんだよね……」

違う。

これは夏のように夏ではない。

僕たちが体験した幾数日は、もっと、月の瞳が揺らめく夜長の空気が漂っていたはずだ。

それと、もう一つ。

「海……」

「ノア、あなた……！」

「海……海だよ！ 海があった！」

記憶の欠けていた部分を、ノアが染め直してくれた。

それこそ、はじめは深淵の紅の絵筆からだった。

「そこで、リズとノアさんが燥いでいたんだ！ 初めて海を見たから！」

「ええー、私、そんなことで燥がないよ……。あれ？ 何でだろ。私、海行ったことないのに、見たことある感じするんだけど。しかも、大パノラマのやつ」

塗り重ねるのは、リズの言葉。

大パノラマと言われて、何となく砂浜との折り合いが掴めた気がする。ヤシの木だったり、ログハウスのような建物だったり、補填するとそれらしくなる。

「大パノラマ……。俺、海はたくさん見てますけど、一つだけ、異様に鮮明に記憶に刻まれてる景色があります……。昔からか、最近見たかはわかりませんが、その景色から、楽しかった思い出と悲しかった思い出が同時についてくる感じがします……」

「ああ……。そうか……。そうだよ……。！ アレン君は、僕が誘ったんだ……！」

「俺が、ルートさんに……？」

楽しい思い出も悲しい思い出も、僕が先延ばしにしてしまったからこそ、過去として集積された記憶。事実と、それから自分と向き合うための、長いようでいて短く、短いようでいても長い。

でも、それは僕が選択するために必要なことだった。

貴重な時間だったと思う。

あの時、時間は分からなかったけれど。

「あの……。勝手な妄想だったらすみません。先に謝るとききます。あと、リズもごめん」

「アレン君？」

「な、なんなの？」

「……。俺、ルートさんと付き合っていたような気がします。短い間でしただけ」

「……………」

リズは顔色を変えずに、アレンの口元を見ているようだった。少しシヨックだったのかも知れない。

けれど、僕のした選択にも気付いて欲しい。

「うん、そうだね。僕、アレン君と付き合っただ。でも、最後は」

「そこから先は、言わないでください！ 忘れたことにしますから……………！ なんて……………、はははっ！」

「うん。わかった。ごめんねアレン君」
「そうだ。」

僕はそこで腹を括って、リズと付き合おうと決めたのだ。両親に打ち明けた経緯は、アレンとの思い出があったからこそそのものだったということだ。

だから今こうして、リズと手を繋いでいられる。僕は、自分の選択に自信を持てる。

リズは、昔から鋭い。

その拗ねた素振りも、今はただ、愛おしく思える。

「はいはい。お仲がよろしゅうございますね」

「ご、ごめん、つい……………」

「ふーんだ」

リズには後で謝るとして、今はアリスの追及に応えなければなるまい。

アリスは無意味に僕たちの合間を裂いたりはしない。

「何かわかった？ アリス」

「ええ。一つ疑問なんだけど、あたしたちは一体どうやってその場所へ行ったの？」

確かに。

生徒会長副会長の二名は居れども、こんな脈絡の無い大所帯を引き連れて、国外へ飛び出すのは考えにくい。それも、海に面した場所と来た。比較的すぐ思いつくことと言えば、六月になるとポスト

に投函されるハネムーン旅行のチラシと、十一月にある修学旅行の行き先くらいのもだろう。

あと、僕たちに限定してあるとすれば、あの力か。

だとすれば、それは一体誰のものだろう。

僕たち全員の記憶に残るような、心躍る小旅行。誰かに加担することもなく、分け隔ての無いルール。そうして、僕たちの時を惑わせる。

「あ……」

そんな存在は、一つしか 一人しか居なかった。

だから僕は、最初から“この場所”を選んでいたので。

彼女が、呼んでいる気がする。

「ここだ……」

「えっ？ ここ！？ ここって、屋上？ なに？ こっから海に行

ったとか言っの？」

「言ってみようよ」

「なんだろう。ワタシはよくわかんないけど、それは楽しそうだな

あ

「ですね。なんか俺も、行ける気がしちゃいます」

「ん……。ノアも思う」

全員と順番に目を合わせた後、僕はリスを強く抱きしめ、リスのおでこにキスをした。

離れたくない気持ちは大いにあったけれど、今度は大袈裟になりすぎないように。思い出した時に恥ずかしくならないように。

そしてまた、手を繋いだ。

「僕、もう一度会いたい人がいるんだ」

気付いた。

もう、この場所は現実世界などではない。

そこは夢世界の延長であり、その境界線上にあると言っても過言ではない。イチとゼロがあやふやに曖昧に繰り返される、高度なシミュレート空間。言い換えれば、僕と誰かの心が交わる真実の世界。つまり、僕の『願い』は『願い』ではないし、剩え『呪い』でもなかったということ。

でも、大丈夫。

目を閉じて、その真っ白な暗闇に心を投じれば、もう不安などない。さつきりズとしたキスが、きつと『おまじない』よりも強い力で僕を守ってくれることだろう。あるいは、アリスが僕の深層心理ごと釣り上げてくれるかもしれない。

「膝、少しいい？」

「うん。いいよ。おやすみ。私、待つてるね」

さあ。

夜が明ける前に、もう一度彼女に会わなければならない。

僕にとる『特別』な存在　　サクラに。

帰って来て、未亡人。（後書き）

【あとがき】

これまでのお話をしめくくる最終章です。

初めて読む方には時間が見えないかもしれません。

しかし、折角最後ですので、ちょっと厳しくいきます。

次回、この続きです。

探してみて、境界線。(前書き)

【まえがき】

そして、気付く。

ルーマス、パラレルワールド展開中。

どうぞ。

探してみても、境界線。

誰かを愛するということ。誰かを憎むということ。
どちらも、同じだけ相手を思う。

僕が会いたかった少女は、ある日突然、僕の中から消えた。

けれど、僕はまた思い出した。

ただ、もう彼女に会うことはできない。

彼女は現実と夢と境界を超え、ここではないどこかに存在を確立させてしまったから。

その方法は知る術もないが、僕は『願い』の始まりがそこにあつたのではないかと思っている。『願い』の始まりは『おまじない』の意志の力であり、アリスやノアが信じたものは、僕たち（正確には彼女）から派生した『呪い』なのではないかと。

幼い頃、誰もが憧れた王子様やお姫様になるための原動力。現実と夢の境を決めるのは、紛れもなく自分。不安を打ち消すためのそれは、母に教わったものだった。

それを信じ、目を閉じれば、僕は万能だった。

でも、もしかしたら、彼女は僕に会いたいと思っていないかもしれない。
それなら、そう告げてほしい。

それは、彼女にとっては酷なことだろうけれど、必要なことでも

あると思うのだ。彼女が新しい世界に旅立つために、あるいは、もう一度選択するために。そうして再び僕を選んでくれたら、その時は、僕もきつと精一杯悩む。

結果に涙を流すこともあると思う。

そうなってしまっても、最後には「良かった」と思えるように。

今は、彼女に会いに行こう。

真っ白で真っ暗な、この夢世界　いや、現実のシミュレート空間に。

「久しぶり、って言ったらいいのかな」

まずは、自分自身の知覚から、世界は開始される。一番初めに、それが出来上がったと認識できるのは、視覚が安定してからのこと。距離感、明暗、位置、と順に体にインプットしていく。これには、個人差がある。

心で文字の読み書きもできるし、発音もできるから、基本的に言葉は二の次だ。

ここまでは、決して難しくない。

僕はさらに、歩き出さなければならぬ。ここへ待っていても、彼女が迎えに来てくれるわけではないのだ。

でも、今の僕には、なにも難しいことではない。

彼女が今どう思っていたとしても、僕は彼女に会いたい。会って、また話したい。彼女が望むなら、何時間でも抱きしめてあげたい。僕にできること全部で、彼女に返してあげたい。

そうしたら、もう一度笑ってくれるだろうか。

僕がもう一度微笑みかけたら、また笑ってくれるだろうか。

きつと、大丈夫。

彼女が泣いているなら、僕がまた『おまじない』をしてあげるから。

だから、さあ、目を閉じて。

そうしたら、僕は君の手を取るから。君は僕の手を取って、息を吸う。

ゆっくりと、ぶつからないように、君との距離を記憶して。思い出しながら、君の頬に触れる。

そうしたら、もう、何も怖いものなんてないのだから。

「お姉ちゃん、会いたかった……！」

「うん。僕も会いたかったよ。サクラ」

目を開くと、そこには僕の想い描いた少女が、僕の手を握って泣いていた。

そう言えば、この『おまじない』で涙が止まった試しがなかった。

「その名前……、覚えててくれたんだ……」

「忘れるわけないよ。僕の大切な人のこと。勿論、ルカのことも」

「えへへ……っ。ありがと。るー」

「うん……！」

サクラには初めて呼ばれたはずなのに、なんだか懐かしい感じがして、気恥ずかしい。

でも、これは新しく記憶し直してもいいはずだ。

ルカと僕、そしてサクラと僕の記憶に上書きをして。

「あ。少し緊張してるでしょ」

「えっ……？ あ、うん。そっか。そういうの鋭いもんね」

手を繋いでいるから、余計に隠せないだろう。

サクラは、触れた相手に対してもとても鋭敏なのだ。

「んー。お姉ちゃんが鈍感なだけだよ」

「あはは……。それは、反省してます……」

誰かにも同じことを言われた気がするけれど、彼女の場合は、僕の反応を見て愉しんでいる感じた。それに対して、サクラは僕の反

応を予測したような遜った表情が見て取れる。

恥ずかしいなら言わなければいいのに、サクラは言う。

小さい時からそうだった。

その意味に、やっと気付けた。

「それよりさ」

「うん」

ぴたりと僕の腕に身を寄せてから、サクラが弱々しく言う。

「なんで、わたしだけ……裸なの？」

「えっ！？ あっ！ ホントだっ、じゃなくて、ごめんっ！」

若干、白肌を視界にいれてしまったことを、即座に詫びる。

とは言え、僕が意図してそうしたわけではないから、何と言って詫びればよいものか。

サクラは僕に見られないようにくっついて盲点にでも入ったのかと思っただが、それはどうやら違ったらしいようだ。

「別に、いいよ。お姉ちゃん」

「ごめん……」

おそらく、僕が一番最後に見たルカがサクラの記憶が、この姿だったのだろう。

辿った記憶から容姿情報を補填するには、最近のものやよくしている格好が適している。さすがに普段から全裸というのはおかしいだろうから、最近のものということになるだろう。

全裸、ということとは、湯船だろうか。

あるいは……。

「ねえ」

「ん？ どうしたの？」

サクラは、僕の頼りない腕を伝って、耳元でぼそりと呟いた。

「どきどきしてるでしょ」

それはもう、心臓が飛び出るほどに。

僕が彼女に何かするわけでもないし、できるわけでもないはずなのに。

「うん……、まあ、そりゃ……」

「やらしー……。お姉ちゃんって、結構節操ないよね。誰にでもどきどきするし」

「うっ……。！ご、ごめんなさい……。でも僕、それに対して、どうしたらいいかわからなくて……。普通にしていれば問題ないんだけど、こういうシチュエーションだと急に鼓動が……」

「あ、ううん！ 謝らないで？ そんなつもりで言ったんじゃないの。仕方ないことだと思うし。お姉ちゃんの周りって、可愛い人たくさんいるから……」

「確かに……」

親しくなると友だちである認識が優先されて、日常的には気付かない。けれど、アリスもノアも、リズも、生徒会長も、みんな素敵な人ばかりだ。

……。

この感情がいけないのではないかと、ふと疑心暗鬼する。

「でも、その中で一番どきどきする人がいるでしょ」

「一番、ドキドキする人……」

すぐにイメージが浮かんだけれど、今は一旦保留にしておかなければならない。

この世界のシミュレートも、そこまで簡単ではないのだ。

それはサクラ本人も知っているようだった。

「一番になりたいんだ。わたし」

「……」

サクラがしているのが、紛れもない“今”の話であることに、僕は安堵を覚える。

それと同時に、僕の心の中には、霧のようなものがたちこめてき

た。それはピンクを限りなく薄くしたような淡い色気を醸していて、そして、懐かしい花の匂いを漂わせている。

今、靄を晴らしてしまつたら、日の光に焼かれるか、気化する大地に体温を奪われて、死んでしまふかもしれない。そうでなくとも、きつと草臥れてしまふことだろう。

「だから、お姉ちゃん」

「うん」

これは決して、誘引ではない。

記憶を掘り起こすために、必要不可欠なことだと思つ。

「こつち見て……？」

それがサクラの意志であるなら、僕は甘んじて受け入れよう。

そこにルカの残滓が、サクラの花弁が、欠片になつて散らばつて
いるかもしれないのだ。

無下にすることはできない。

「うん……。わかつた……」

本当の意味で向き合いたいのだろう、サクラは僕の言葉を聞いて、
安心したように僕の体から離れていった。決して遠くではなく、手
を繋いだままいられる範囲でだ。

まさか、手を繋いだまま、裸のサクラと向き合つことになるうと
は。

僕の心臓はどうにかしてしまいそうだ。

ああ。

でも、その人こそ僕の『特別』な人、サクラだ。

僕の双子の妹、ルカだ。

「やっとこつち見たね」

「……うん」

嘘だ。

体を向き合わせただけで、まだ直視できたわけではない。

サクラが気を遣ってくれたのだ。

「恥ずかしい？」

「う、うん……。恥ずかしくないの？」

その輪郭は華奢でも豊満でもなく、至って標準。あまり外出を好まなかった肌は、影に愛されたように不可逆的に白く、聊か病のようにさらりとしている。花の匂いが漂っているのは、僕たちが昔使っていたシャンプーの匂いと、それを映した彼女の部屋の匂い。

鼻を嚙れば、その間から見える瞳が円く煌々と、碧と青の宝石を宿している。頬を撫でれば、自然と宙を舞う髪が艶々と、全く法則がない。彼女の所作に合わせてお道化ているようにも感じる。でも、その中で唯一、彼女の心だけは遠く離れたところで侘しさを極め、傍観しているのだ。

彼女が欲しい、と思ってしまうのは、きっと子供の時に抱く、美しい人形への憧れに類する。

自分の手のうちに収めておきたい。そばに居ると、自分まで輝ける気がする。そんな感情が湧いてくる。

「恥ずかしいよ。恥ずかしいに決まってる」

「う、ごめん……。でも、どうしたら……」

少し配慮に欠けていたと反省する。

せめて僕の羽織っているものでも貸してあげられたらいいのだけだ。

サクラは、きつと嫌がると思う。

「ふふっ。いいのっ。すごく恥ずかしいけど、お姉ちゃんなら、わたしのぜんぶ、見て欲しいよ。ああ、でもだめかも」

「わっ、とっ……」

「えへへ……。っ。もっと、ぎゅってしてたくて……。だめ……?」

まあ、確かに。

これなら、裸は隠せるけれど。

けれど、このままではただの邂逅の抱擁になってしまう。

それだけではいけない。

僕がここに居る意味を失ったら、彼女も世界に留まれなくなってしまう。

「うん。いいよ」

「やった！」

「ただし！」

「んなつ、なに？」

少し声を張り過ぎたか。

吃驚させてしまったようだ。

僕がサクラに対してそんなにあどけない印象を受けていたのかと、自分でも少し驚きだ。

颯と、気を取り直して。

「聞きたいことがあるんだ」

「……………」

何かを感じ取ったのか、眉毛が少しばかり不安げな形をしている。僕の勢いに問題があったのなら、それは改めよう。

「答えたくないのは、答えなくてもいいからね」

「……………うん。わかった」

どうやら納得してくれたようだ。

それでは、僕は体を授けよう。いや、この場合、受け止めようか。すでに抱きつかれていたから、僕はそれに応えるように、背中に手を回した。そして、彼女の包み込むような体温を、体全部で享受した。そのうち、同じほどの温度になる。

僕はその先を、すでに知っている。

彼女はどうかだろうか。

「ねえ、サクラ？」

「ルカって呼んで」

「ごめん。ルカ？」

「やっぱり、サクラって呼んで」

「うん。サクラ」

「……………」

「うん？」

「ごめんなさい……………」

「ううん。大丈夫。僕はここに居るよ」

「……………」

「……………」

おそらく、彼女は偽りの温もりしか知らないのだろう。いや、知っていたはずだけど、忘れてしまったのだ。長い、長い、時の中で。

「いいよ……………。聞いて？」

「うん。ありがとう。辛かったら、すぐ休もうね」

「うん……………」

辛いのも当然のことだ。

例え偽りだとしても、サクラが旅した歳月は確かにサクラの中にあつて、実際に体感として記憶されているのだ。幸か不幸か必然か、僕にはサクラの記憶を共有する力はないけれど、その苦しみの一部はわかる。

僕が世界をやり直したあの時も、身悶えるほど辛かった。

確実に失われるものがあることを知覚するのは、途轍もなく苦しい。

サクラはきつと、そんな経験を無数にしている。

あるうことか、僕はそれを掻い摘んで聞き出そうとしているわけだ。傷口に塩を塗り込むどころか、広げて塗布する勢いなのではないか。

でも、僕はその傷をそのままにして欲しくない。その傷口を縫ってあげたい。

時間を巻き戻しても閉じないその傷を治せるのは、僕だけなのだから。

だから、今は僕を信じていて欲しい。

「どうして、突然居なくなってしまったの？」

僕が口を開くと、僕の服の裾を握るサクラの手が、きゅっとなつた。

それからすぐに、僕の方へ体重がかかったのがわかる。

「怒らないで聞いてくれる？」

「えっ？」

このタイミングで、僕が怒るようなことがあるだろうかという、さり気ない疑問符だった。

言った下から「もちろん」と、豪語する。

何も根拠は無い。

サクラはもじもじと酷く狼狽しながら、僕の平らな胸に声を響かせた。

「あの、ね……？ も、目的、達成されたの……。あの、夜に……」

発せられた“目的達成”という単語に、いまいちピンと来なかった。

余りに、現実的過ぎたから。

しかし、サクラがすぐに言い添えたので、理解は深まった。

「わたしの『願い』の……」

そう言えば、アリスが推測していたデータの中に、酷似していたものがあつた気がする。

『願い』の目的が達成されると、その効力が失われるというものだったか。

サクラが言うのだから、それは真実にかなり近いのだろう。

「『願い』……？」

しかし、ともするならば、サクラが世界から除外される必要などなかったのではないか。

サクラの『願い』は確か、『魔法を使いたい』だったはずだ。

何も無いところから火を出したり、瞬間移動をして見せたり、学校全体を異空間に包んでみたり……。その『魔法』とやらが使えなくなっただけで、果たして、サクラ自身が世界から消滅してしまうようなことはあるものなのか。

直接的に関係が無いように感じるのだけれど。

もしかしたら、それが「怒らないで」と言った要点なのかもしれない。

だとしても、特に、怒るつもりはないけれど。

首を傾げていると、サクラが告白する。

「のあが自分の『願い』を告白した時、あつたでしょ？」

「うん」

「あれ、すごくびっくりしたんだ。え、そんなことしても大丈夫なの？ って」

「そうだよ。僕も驚いたよ」

「それで、わたし、咄嗟に嘘ついちゃったの……」

「嘘……？ それって……」

本来、僕はそこまで洞察力の良い方ではないのだけれど、これは特別勘付いた。サクラが歯車を見つけてきてくれたのかもしれない。

「そう。わたしの『願い』」

つまり、サクラの本当の『願い』は別なところにあつて、その目的が達成されたために、効力を失ってしまったと。逆に言えば、サクラが世界から消滅するということは、サクラは『願い』を叶えた時にはすでに、元の世界から消滅しているということになる。

それは例えば、イチとゼロの境界を潜ってしまったかのように。

「まさか……」

「うん。そうだよ。そのまさか」

『事象の境界を知りたい』

「なんでそんなこと……」

思わず、抱きしめる腕に力が入ってしまう。

確かに、ルカは幼い頃から天体や物理の事に興味があつて、よく僕に話をしてくれていた。事象の境界なんて、知っていなければ出ない単語だし、語彙はそこから来ているのだと思う。

でも、だとすれば、目的になつた僕にも少なからず、何らかの責任はある。

そうでもなければ、僕はこの世界で天文学に興味を持つことは無かつただろうし、好事家と言われてまで和食を好んだりはしなかつたはずだ。

もはや、謝つて許してもらえるなんて、あり得ないけれど。

でも、それに関しては、謝るしかない。

「うーん。やけくそかなー。今思えば」

「ごめん……」

「謝らないでつてば。これは、わたしの問題なんだから……」
そう知っているからこそ謝りたいし、謝つても仕方がないことなのであつた。

それでも僕は、黙ることが出来なくて。

黙っていると、体が疼いてしまつて。

「ごめん、ごめん……！ 本当にごめんっ……！！」

「やめてよ、お姉ちゃん。わたし、死んだ人みたいじゃん」

「でも、だつて、僕にできることつて、もう……っ」

こうして抱きしめていてあげることくらいしかない。

でも、それも永遠を保証できない。

サクラの生きた永遠を、僕は償えないかもしれない。

「じゃあさ。お姉ちゃん」

涙ぐむ僕の顔を真っ直ぐに見止めて、彼女は言い放つ。

「わたしと、きすして？」

つまり、そういうことだった。

僕とリズとが結びついてしまったために、ルカが傷ついて、それで自暴自棄になってしまった。事象の境界を超えれば、消えてなくなると思っ、そう願った。

でも、消えなかった。

彼女は事象の境界を知って、『世界が誕生する三分十数秒』を何度も繰り返し返した。

そして、その中で彼女は、サクラとして、また僕と出会い恋をした。

そうだ。

卒業式の後、僕の家にはサクラが遊びに来たのだ。

それで。

「あの夜は、わたしが強引に……したけど。今度は、お姉ちゃんから……るーからして欲しい。ちゃんと、愛してるのきすを。りずにしたのと同じ……いや、それよりももっと」

「サクラ……」

多分だけど、僕はそれをサクラにあげることができる。

そして、そうしてしまえば、僕の贖罪は果たされるのだろう。

「るー……」

けれど、きつと後悔する。

瞳を閉じた彼女の表情を見て、そう思った。

だから僕は、差し出された彼女を気持ち一度僕の中にしまった。

「や、やっぱりダメだよ！ このままじゃー！」

「な、なんで！ わたしはこんなに大好きなのに！ お姉ちゃん、わたしのこと嫌いなもの……？」

「違う。そんなはず、あるわけない。」

「そ、そんなの……っ！」

僕は首を大きく横に振る。

そして、また、強く抱きしめた。

「大好きだよっ！ サクラのことも、ルカのことも！ 大好きに決まってる！」

「お、おねっ……！ うつつ、うえええええんっ！！」

あまりにボロボロと、大粒の雫が零れるので、なんだか僕が絞り出したようにも思えた。

いちいち拭くのも面倒だからというのもあったろう、暫くすると彼女は僕の胸に埋まってしまった。少しばかり、シャツが湿る。

それから、声が籠る。

とりあえず、激昂は一段落してくれたようだった。

「なんでっ？ なんでっ、だめなのう……っ」

鼻声でなのか埋まっているからなのか、はたまたその両方なのか、いつもよりワントーン高く響く。

鼻を吸うのに呼応して、ぴくつと体が震えるのが、儚くも愛らしい。

「うん。ごめんね。でも、サクラが僕を選んでくれるなら、僕ももう一度考えなきゃって思ったんだ。サクラのこともリズのことも、大好きだからこそ、こんな形で選ばれるのも……選ぶのも、ダメだなんて思う。僕はもう、後悔なんてしたくないから。サクラも、本当は気付いてるんでしょ？」

僕が背中をポンポンと叩いてあげると、その震えは鎮まる。

それが明々白々たる証拠であった。

サクラは、今ここで僕とキスをすることに、後ろめたさを抱いている。そんな状態でキスしても意味が無いし、絶対に後悔する。サクラも、それは同じだと思ったのだ。

「サクラが求めるものは、きっと、僕の体だけではなくて、心もだ。」

「嫌……」

「大丈夫だよ」

「サクラは受け入れたくないだけなのだ。」

でも、それを受け入れなければ、僕もサクラの気持ちに答えることができない。

「嫌だよっ……」

「サクラ……」

「気持ちは痛いほど理解できた。」

「今はただ、サクラに寄り添って話を聞き続けよう。」

「そんなことしかできないけれど、そんなことでも意味はある。」

「お姉ちゃん……。お姉ちゃん……。好き……。好きっ……。！大好き、だよ……。」

「よしよし……」

「ごしごしと、サクラは僕の服で涙を拭くふりをするけれど、本当はもっと強く抱きしめて欲しいだけなのだとわかる。ちょうど、駄々をこねる幼児のようでもある。」

「髪を撫でると、少しだけ嬉しそうだったから、暫くそうした。」

「ね……？」

「うん」

「今度は、声が震えていなかった。」

「そのまま答えを引き出すように、少しだけ、サクラを自分の方に抱き寄せた。」

「そうすると今度は、異常なほどに早い鼓動が聞こえてきた。」

「僕のものかサクラのものか、二人のものか。」

「この白の世界では、到底わからないけど。」

「わたし、どうしたらいいのかな……」

「一緒に元の世界に帰ろう？ そうしたら、僕、また悩むよ」

首を傾げるサクラに解答を言い渡したつもりだけれど、的を得ていなかったようで。

それもそのはず、僕がここに居るのは、他でもない僕の。

「『願い』の力なんて、わたし、もうないよ……？ あの夜、強引にお姉ちゃんと、その……、したから……」

「う、うん。大丈夫なんだよ。それでも。覚えてる？ あの……
そうだ。」

世界にただ二人だけ 僕とサクラが知っている、あの魔法があるではないか。

そしてそれは、きつとまだ、未完成だ。けれど、絶対に失われな
い。

だから、今ここで完成させなければいけない。
でなければ僕は、この世界から帰れない。

「あの、『おまじない』」

「『おまじない』？ って、お母さんの？」

サクラの中にも、まだ残っていたようで安堵する。

あり得ないとは思っていたけれど、ここで忘れられていたら、そ
こで終わりだった。

「そう！ また、あの『おまじない』で約束するんだ！」

「そんなんじゃ絶対無理だよ……。それに、お姉ちゃんと一つにな
れなかった、あんな『おまじない』なんて……ただの『呪い』と一
緒……」

やはり。

サクラはあの『おまじない』を、『呪い』だと思いこんでしまっ

ている。

本来、意志を確認するためだけの『おまじない』を、『呪い』だ
と思うこと。それが、そのまま『呪い』を作り出している。信じる
こと自体は同じでも、何を信じるか、どう信じるかによって『おま
じない』の効力は形を変えるのだ。

何も非現実的な夢物語ではなく、それはごくごく自然なこと。

つまり、サクラが力を取り戻すのは簡単なこと。いや、そこに正
体不明の力など、初めから存在しない。誰しもが、願いを叶えられ
る力を持っている。

それに気付かせてくれる『おまじない』なのだ。

「わたし……もう、痛いのも苦しいのも嫌だよ……」

「させないよ。そんな思い」

今しかない、これが最後のチャンスかもしれない。

そう思って、僕はサクラを腕ごと、ぎゅっと強く抱きしめた。

すると、サクラが泣き出してしまふので、僕もまた何も言わずに、
力を緩めなかった。

いつか、サクラが僕から離れる時が来るのを待ったためだった。

暫くと言っても、そこまで長い時間ではなかったと思う。

「もう、大丈夫？」

「……ん」

「そっか。よしよし」

「……………」

僕自身も、今までの発言を確信に変えるために、言葉を選ばなけ
ればならない。

まずは、サクラを肯定しようと思った。

「確かにね？ 言う通り、『呪い』なのかもしれない……。僕も、
はじめはそう思った」

「お姉ちゃんも？」

「うん。実は、モールで起きた事件に、リズたちが巻き込まれたこ
とがあったんだ。僕も傍に居ただけけど、守れなくて……」

「えっ……」

「そしたら僕、叶えてた。『時間を巻き戻して』って」
時を遡る残酷さを、ほんの僅かも考えずに、僕はそう決断してしまった。命を秤にかけた僕は、人ならざるものとしての苦しみと、心への重責を負った。僕は、二十二分人の命を生きなければならなかった。

でも、こうして今も生きている。

僕も、リズも、アリスも。

「ニュースで見ってしまったんだ。モールで、二十二人も犠牲者が出たって。その時、すごく辛かった……。ううん。今も、辛いよ。正直、『呪い』って言うてもいいと思う」

ただ、どちらが正解だとか、どちらが非人道的だとか、その答えは無かった。

さらに残酷なことに、答えは自分で決めるものだったのだ。

その一つの解釈を、サクラが教えてくれた。

「だけどね、サクラ。僕、思うんだ」

サクラも、生きていた。

生きていてくれた。

それだけで、僕の中で錘を成していた何かが軽くなるのを感じた。

「『呪い』も『願い』も『おまじない』も、どれも同じだけ、誰かのことを思ってる。その想いがお互いに通じ合った時、それは成就するんだ。それなら、『呪い』って思うのはやめよう？ それじゃ、相手も自分も、誰も幸せになれないから」

「幸せに……？」

そう。

世界を幸せで一杯にするのならば、それは『呪い』では難しいのだ。

もう、忘れてしまったらどうか。

「うん。サクラの『魔法』も一緒だよ。サクラはそう思わないかもしれないけど、僕はサクラの『魔法』が僕たちを繋げてくれたと思

ってる。だから僕は、サクラが僕のことを考えてくれてるって……
すごく嬉しいよ?」

「お姉ちゃん……」

声に覇気が宿らない。

けれど、互いの脈拍でわかることがあった。

淀みの無い決意と、順応に対する一抹の不安だった。

「うん……。わかった……。信じるね。お姉ちゃんのこと」

「うん。ありがとう。信じてくれて」
何だろう。

一面真白だったこの世界に、黒との境界線が引かれていくような
不和を感じる。この空間が崩れ去る、ではないけれど、確かに、そ
こかしこに通風孔のような光が漏れていつているようだ。

肌を感じる温度も、少しだけ寒い。

もしかしたら、もう時間がないのかもしれない。

「じゃあ、目、閉じるね……? あっ。口にしても」

「しーっ。『おまじない』の時は喋らない、でしょ?」

「んー……」

「よしよし。大丈夫。僕は居なくなったりしないから」

「ん……」

いや、これは違う。

これは、まさか、そういうことなのか。

パリパリと、光が音を立てて卵の殻のようにはがれていく。そこ
で初めて、この世界が決して真っ暗などではないことがわかる。見
渡す限りの白い花畑は、すべてコーヒーの花だ。いつか浜辺で見た
あのログハウスは、僕の 僕たちの家そのものではないか。

サクラがどれだけ僕を愛していたか、その純粹無垢たる想いが、
涙の一滴として胸に滲みていく。それが僕の中に拡がって、失われ
ていた僕とルカとの記憶が、ひとつ残らず同期されていくのを感じ
る。

「じゃあ、するね……?」

「ん……」

ああ。何だ。

世界は、こんなにも鮮やかな光に象られている。こんなにも美しい色で彩られている。そうやって形を成したものこそ、僕たちの探していたものではないだろうか。

『幸せ』で一杯にすることは、不可能ではないのだな。
そう思いつつ、僕も瞳を閉じた。

*

『元の世界に帰ろう?』

あなたは、優しく笑って、それから一度だけ頷いた。

探してみて、境界線。(後書き)

【あとがき】

“それ”とは一体どこを指すのか。

ここまで読んでいただいている皆さんと、そうでない皆さん。見えている世界が違ふと思います。

けど、それって、結構当たり前なこと、そうやって違ふ世界を見ている人たちを理解しようとする。それが、誰かのことを想うということなのです。

だから、恋も愛も、自分とは『違ふ』誰かにしか成立しないものです。

でも、自分と同じところが多いほど、好きになっってしまう。

この感情を、どうすればいいでしょう。

彼女たちは、どうしていたでしょう。

次回は、なんと……！

この続きです。

理解して、修正点。(前書き)

【まえがき】

時間は、進んでいます。

しかし、目が覚めたその先は時間が止まっているかもしれない。

では、どうぞ。

理解して、修正点。

記憶の中で愛していたあなたと、今のあなたは別の人。
それでも、わたしはもう一度、あなたを好きになる。

リンゴンリンゴンと、昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

実はこの鐘の音が出力されるスピーカーは、この屋上庭園の入り口付近に設置されている。

そのため、一人でここに居ると、風に乗って通ってきて、非常に五月蠅いところだ。

支度を急かされているようで気に障るし、僕はそそくさとお弁当を置いて、教室へ戻るとしよう。今日も、きちんと完食したから、食材も彼女も喜んでくれることだろう。

ああ、そうだ。

ここは元の世界、なのだろうか。

さも当たり前であるように、僕はこの世界に同期されたけれど、あの白の世界の記憶も、それより前の記憶もある。リズたちは今、眠りこけた僕を観察しているはずだ。

何か違和感のようなものを感じるのは、この世界が、いやに温かいからなのだと思う。

「今は、春……なのかな」

この学校の屋上には庭園があるから、アクセスが容易になってい

る。教室へも最短で帰ることができる。

廊下へ通じる鉄扉を開けると、仄々とした外の空気と一転して、少し重たくて冷たい空気が流れ込んできた。日陰になっていているからだろうけど、ここまでのギャップはなかなかにして珍しい。

惑わされているのかと疑念を抱かざるを得ない。

それも、教室へ行けばわかるはずだ。

「なんでだろう。新学期みたいな、感じがするな……」

すたすたと校内を歩いて教室へ向かう。

その途中で数人の生徒とすれ違ったけれど、誰のことも知らなかった。噂に聞いたこともないし、授業で目を合わせたというようなこともなかった。

それが自然な時期は、入学シーズンしかない。

でも、僕自身は明らかに「二年生」になっていると思う。自然と教室へ向かう足も、そちらの校舎へ吸い込まれているし。

明らかに、何かがおかしい。

焦りからか、いつの間にか小走りになる。

今振り返ったら、そこには世界が続いていないかもしれない。

一人は、怖い。

だから急ぐ。

教室になら、必ず彼女が居てくれる。

だって、今日のお弁当を作ってくれたのは、他でもない彼女なのだから。

「あつた……」

廊下の突き当りを曲がるとすぐそこに、目的地があった。

授業の準備もあつてか、数名の生徒がそぞろに出入りしていた。

そのため、自然と教室へも入りやすかった。ドアが閉まっていたら、きっと、一人では開けられなかったと思う。

敷居を跨いですぐ、教室を見渡す。

こちらは、黒板とは逆側の教室の後ろ側の方なので、席に着いている人は背中しか見えない。半数近くはまだ準備中でうろつろ

していたが、あとの者はすでに席に着いているようだった。僕は、すでに席に着いている人の方を優先的に探した。彼女なら、そうしているだろうと思っただのだ。升目を塗りつぶすように、角から目視確認を進めていく。進捗は悪くない。悪くないが、芳しくない。

「あ」

人間心理なのか、一番遠い黒板側から見渡していったから、気付くのが遅くなってしまった。

探し人は、僕のすぐ目の前で、手招きして微笑んでいた。そう。

僕の席は、その隣だ。

何だろう。それには、とても安心する。

それと同時に、この世界にぐつと強烈な力で押さえつけられているかのように感じる。

「おかえりー。どこ行ってたの？」

「あ、うん。ちょっと屋上にね」

それでも、彼女はいつも通り素敵な笑顔で僕を迎えてくれる。

まるで、この世界の行く末を、有無を言わず肯定するように。

だからか、彼女の立ち居振る舞いはとても洗練されていて、所作の細やかな部分にも余念がない。すべてが校則の模範のようだった。だからこそ映える地の美しさというものが、姿勢の良さと淀みの無い声色に寓されていた。

その無垢さが余計にコンプレックスを際立たせていると知っていたながら、アカデミーに入学以来、隠さなかった。誰しもが引き込まれそうになる、その青と緑の瞳を。僕とすべてが同じだという、血

の宝石を。

「えっ、屋上？ あははっ、なんで？ 変なの」

「校舎の中より、外の方が温かいかもって思ってたさ」

「ふーん」

その前後の記憶も、辿ればあるけれど、何だかそれは僕のものではない気がした。

だから、少しだけ茶を濁した。

「あ。ごめん。僕に用事あった？」

「んーん。大丈夫だよー……」

何かしら不服そうなので、行間を読んでみる。

それが僕に対する気持ちの具現であるならば、僕も気持ちを伝えよう。

「あ、そうだ。お弁当、今日も美味しかったよ」

「ホントっ？ よかったあ……！ 今日のはちよっと、いつもより凝ったから、嬉しいな。えへへっ……」

どうやら、当たりらしい。

そう喜んでもらえると、僕も嬉しい。

「毎日ありがとう。僕も今度、休みの日とかに何か作るね」

「やったあ！ じゃあ、週末さ、お蕎麦にしよっ？ いつも作ってくれる鶏出汁のやつ、好きなんだー。わたしより上手なのが悔しいけど。あはははっ」

それにしても、本当に嬉しそうな表情をするものだ。

少し赤らんだ耳が、とても愛らしい。そう言えば、眼鏡もコンタクトもしていないせいか、瞳も気持ち円らに見える。ゴロゴロしたり酔ったりしないから、口角や目線がわずかに上昇しているのだろう。

いや、それをしているから暗いというわけではないけれど。

やけに幸せそうだと、思ったのだ。

この世界の彼女は。

なに、勿論、“幸せ”に越したことはないけれど。

「ほら。授業始めるぞ。席に着けー」

眼鏡をした中年の男性が教室の前の扉から現れると、クラスがざわつく。この先生はいつも、予鈴と同じタイミングで教室に入ってくるから、少々騒がしく感じる。

ただ、僕の場合、授業の準備は昼休みの前、四時限目の終わりにしてしまうから、あわてて準備する必要はない。

「先生来たね」

「うん。……あれ？ 今日って宿題あったっけ？」

「プリントが一枚だけね。昨日、一緒にやったよ？」

何だろう。

彼女との会話が途切れてしまうことを、僕はこれ以上ないくらい残念に思ってしまう。こうしてチャイムが鳴り終わるギリギリの間まで見つめ合うことに、これまで知らなかった感情が芽生える。いや、この感情は芽生えると言うよりは、育まれると言うべきだろうか。

知らないはずなのに、知^っているということは、なにか『特別』なものなのではないか。

「あ、あなさ」

「大丈夫。お姉ちゃんは忘れてないよ」

*

「いやー。六時限目の体育はマジでやめて欲しいわ……。汗がやばい……。着替えるのがめんどい……」

「えー。うちは好きやけどなあ。そーゆうて、レオナも結構楽しんだるやん？ 今日も思いつきしすところんどったし。あれは可愛かったなあ。写真に残しときたかったわあ。ルートさんたちもそう思わへん？」

「あはは……。そ、そうだね……」

「ねー。あれは確かに派手だったよね。奇跡の着地だった。あー、でも、わたしも六時限目の体育は嫌いじゃないかな。終わったらそのまま帰れるところが、なんかいいよね。下校時間一緒になるし」

彼女が僕の方を見て微笑むので、滞りなく微笑み返した。

はて、今のはどういう意味なのだろう。

僕の理解は特に求めず、彼女は続ける。

「二人もそうなんじゃない？」

「だったら良かったよー。私は別に部活やってないからいいんだけど、レオナがあるから一緒じゃないんだー。まあ、演劇部面白いから、見てると結構すぐなんだけどね」

「面白いゆーけどな、こないだのあれはお笑いちゃうで？ あれは王様と王妃様の悲恋の物語で」

「わかってるわかってるう。いやさ、普通の日常生活であんな大声で叫ぶことないからさー、その……新鮮だねー。ついこみ上げてしまっただけ。笑いが」

「そこは涙やる？」

「あはははっ。二人って、付き合ってるって言うより、何か……結成したって感じだよな」

「えっ、付き合ってるの……？」

「ルートさん、マジ顔で不思議がるのやめー。悲しくなるっつの」

「ごめんごめん。あははは……」

「でも、まあ、これが私らの距離感なのかもねー。レオナとこうして嫌って思ったこと、今まで一度もないし……むしろ、これが良

いつて言うか……つて、なに言わせんねん……っ！」

「痛っ。何でうち！？ エレナ、今、勝手に恥ずかしいこと言うたんやで？ あー、もう、なんか、背中ムズムズすんねんけど。でも、まあ、嬉しい……、けど……」

「ひゅーひゅー。二人とも、らぶらぶだねー！」

二人の親しい友人とやり取りをしていると、教室に担任の先生が入ってくる。僕たち以外にも、まだ着替えを終わっていない者も複数名いるが、お構いなしにホームルームを仕切り始めてしまった。

この先生は結構、時間や規則にルーズなところがあって、毎週この時間のホームルームというのは、こんな感じである。

着替え終わっている者と、そうでない者。帰る準備をする者と、部活の準備をする者。各々が各々で、自分の目的に向かって最短ルートを進んでいる。かなりカオスな絵面ではあるが、それなりに一体感はあるのだと思う。

そうこうしているうちに、「さようなら」、「また明日」と終礼の挨拶が済まされてしまう。

それに関してはどうということもないけれど、ぐうたらやっている、教室の掃除係の人に白い目で見られてしまう。自分がその担当になった時に、嫌な思いをしたくないので、帰り支度は手早く済ませる。

なるほど納得。

先生も業務を終わらせて早く帰りたいのであろう。

愛する人がいる場所へ帰ることも大切だけれど、誰かの為に残るといふことも、一つの表現として成立する。そう、あの担任の先生に教えてあげてもいいかもしれない。

というか、ホームルームも一応は業務の一環なのだけだ。

先生に置いてけぼりを喰らった僕たちは、当初の目的を思い出して、各々の帰路へ着く。部活へ赴く者もいれば、早々と帰宅する者もいる。小さな分岐点のような効果が、あのチャイムには秘められているのかもしれない。

「ほな。うちらはこのまま部屋行くわー。二人は帰るん？」

「あ。今日は、わたしちよつと用事あるんだー。だから、別々かな」
手提げサイズの鞆を肩にかけて、彼女は言った。

用事があるとは初耳だったから、思わず二度見してしまった。

「あららー。だってさ、ルートさん。ドンマイ」

「ええっ、うん……」

「ルートさん、可愛いなあ。あからさまにショクな表情。なら、
どうだ？ 私と一緒にレオナ劇場でも見て待ってる？」

「レオナ劇場言っな。まあ、うちは良いけど……」

二人の気遣いはとてもありがたいけれど、他の部員の方に迷惑がかかるかもしれないし、彼女に用事があるのに、僕だけ暇をしているのもどうかと思った。

簡単な話、僕が彼女について行けばいいのではないだろうか。

勿論、彼女の許してくれる範囲の中で。

「二人ともありがとう。でも、遠慮しとくよ。他の部員さんにも無理を言ったら悪いから。演劇は、発表の時を楽しみにしてるね」

「そっかそっか。じゃあ仕方ない。折角、レオナのコスプレ可愛いのに、勿体ないなー」

「コスプレやのーで、衣装やからね？ でも、そんなら仕方ないな。じゃ、うちらは行くわー。そんじゃ、また明日なー」

「じゃあねー二人ともー」

「うん。それじゃ」「また明日ね」

そうして僕たちは、仲睦まじい距離感を保つ二人の背中を見送った。

はたはたと手を振るのが、徐々にゆっくりになっていくうち、僕は的確なセリフがないか逡巡した。提案でもない、謙遜でもない、直情でもない、彼女が優しく微笑んでくれる常套句のような文言を。

「やっ」

切り出しは、彼女の方が多少なりとも早かった。

「えっと……。まず先に、ごめん、お姉ちゃん」

「えっ？ 何が？」

急に謝罪を始めるとは、何事か。

とは言え、謝ると心に決めていたのであれば、会話の皮切りにするにも納得であるけれど。

「わたしの用事と一緒に来るつもりでレオナの断ったんでしょ？」

でも、ちよつとわたし一人の用事なんだ。保健の先生のとこ行つてくるの。だから、その……。ごめんね……。？」

「あつ、ううん！ 僕が勝手に決めたことだから、全然。というか、それなら、終わるまで教室（こく）で」

「いいよいいよ！ 先に帰つて。宿題たくさんあつたし、今日はお姉ちゃんとやりたいの！ だから、先に帰つて予習してて！ あとですぐ行くから」

「う、うん。わかつたよ」

多分、僕はきつと、言われなくてもそうしてしまうと思う。

帰宅部よろしく時間があり余っている、という大義名分はあるが。

この場所よりも 学校よりも、家の方が一緒に居られるから。

「ごめん！ じゃ、ちよつと行つてくるね」

「うん。行つてらっしゃい」

僕が頷くと、彼女は小さな鞆を一度背負い直して、それからすぐ、小走りで教室を後にしてしまった。

ふわりと小台風が巻き起こって、それがまた、春の嵐のように懐古の情を香らせて、わずかばかりに逸る。何、興味を惹かれることはない、僕と同じ匂いがするだけのはずだけど。

今度こそ、僕が「さて」と閑話を休題できる。

家に帰るのにも、一人は心細い。

そうは言っても、帰宅部である身上、帰宅部としか一緒に帰れな

い。

なので、せめて、知り合いを見つけて、明日の用事でも聞いておこうというのが、いいところ。特にさしたる理由というものはそこに付随しない。朝刊や夕刊を定期購読するイメージに近い。

一先ず、僕の唯一の勤務先である生徒会室へ向かうとする。

一人だと不安になっていた廊下も、西日の温かさにあてられてか、あらかた紛れた。それでも確かに、拭えない何かがそこにはあって、それを感じ取る嗅覚めいたものが、僕を今の僕たらしめた。

彼女は保健室で何をしているだろうか、と一人で妄想をしながら靴音を響かせて階段を上がる。すぐ横に屋上が見えるのが、酷く落ち着かない。

迷っている暇はない。

さつさと生徒会室の扉を開く。

一応、僕はこの学校の生徒会副会長ではあるけれど、礼節は弁えているつもりだった。入る時はノックをするし、ものぐさな生徒会長にも敬語を貫き通している。

それは入学以来、欠かしたことがない。

「失礼します」と挨拶を入ると、数秒して「はいどうぞ」と返答がある。

いや、失礼するのはそっちの方なのでと、言いながら毎回思いはするけれど。

入場して人間を認識すると、いつも「ういっす」とか「おーっす」とか、よくわからないノリで返事されるのだから、致し方ない部分もあるだろう。その景気のいい性格がいいところでもあるのだが。

がらりと扉を開けると、どうだろう　西日の差す廊下との温度差だろうか、ピンと張りつめた冷たい空気が肌を撫でた。それに乗じて、二の腕に鳥肌がわつとなつて、微妙な気分になった。

恐怖に対しての身震いでもなければ、偶発的なそれでもない。立つのは、その新鮮で冷えたような空気を肌を感じたからであると思われる。まるで、冷凍庫から凍った食材を取り出した時のような感

覚。それはもはや、初めてここへ来たかのような感覚と言っている。だからだろうか。

僕は、生徒会室の敷居を跨いだ瞬間、すでに、ここへ来た最もな理由を見つげようと必死に脳を回転させていた。

もし、間に合わなければ、僕の背後に世界は続いていない。

「えーと。二年生？ お名前は？ 生徒会に何か用かい？」

*

僕は、間をおかず、昇降口にいた。

早く家に帰らなければ、帰って僕を知っている彼女に会わなければ、と逸る気持ちがそうさせた。

どうやって生徒会室を切り抜けたかとか、廊下は走ったのか歩いたのかだとか、もう思い出せない。それでも、ガラスに映った自分が肩で息をするのを見ると、透過できなかった。

一秒でも気を抜いたら、僕の背後には世界が繋がっていないくて、その次の瞬間には飲み込まれてしまう。そんな恐怖を、ひしひしと肌を感じる。

だからこそ、会わなければならなかった。

いや、僕は待たなければならなかった。

「あ」

その人は、僕よりも先に靴を履き替えていて、ちょうど上半身を

起こすところだった。

ローファーはまるで新品のように艶めいて、肩に背負ったブランド物のバッグがラフに揺れる。追いかけるように空中を踊る髪の毛は、夕日も萎縮しそうなほど美しいブロンドで、身に付けた衣服の外連味を全く殺してしまっている。人形のような冷たい横顔は、僕の方を振り返らずに、ただ淡々と美を追求する。

すらりとしたスリムな体型で、どちらかと言えば華奢であろう。加えて、色白であり、これで人の血を吸えば吸血鬼にでもなれそう。にも拘らず、歩みにブレが一切ないあたり、偽物ではない。紛れもない、あのアリスではないだろうか。

「アリス？ ねえ、アリスだよね！」

もしかしたら、声を通らなかつたのだろうか。

この時間帯、昇降口には僕とアリスくらいしかいないのだけれど、部活へ興じる者はすでに活動の地へと辿り着いているだろうし、そうでない者は校内清掃を終えてすでに帰路に着いているだろうから。

それなのに、僕の声はアリスの背中に吸収されてしまって、返ってこなかった。

それならば、致し方あるまい。

肩を叩こう。

思い返せば、今まで一度もしたことがない気がするけれど。

僕は、藁をも縋る思いで、その太陽の光輪に触れる。

「アリス……っ！」

当然の如く振り返ったアリスの瞳は、いつかどこかで見た、凍てついた氷の結晶のよう。

しかし、今日はどこか違う。

これは、温度が違う。

「えっ……と、アリスってあたしのことかしら？ 珍しい名前じゃ

ないし、いきなり呼び捨てだったから無視したわ。ごめんなさい。それで、何か用？」

その絶対零度の矢に射られたら、僕は確実に燃え尽きると思った。おかしい。

アリスの冷徹を、冷たいと感じない。

むしろ、新鮮味があつて、生暖かいくらいだ。

「あ、あの……」

「何？ 用があるなら、早く言いなさい？ あたし、急いでるの。そうだ。」

アリスとは同じクラスではない。

だから、少し距離感を感じるだけだ。

「えっと。一緒に帰ろうかな、と思って……」

「はあ……。もういいかしら。あたし、人を待たせてるから。もう行くわね」

だとすれば、その対応は文字通り“一周回って”いるのかもしれない。

僕が周回遅れなのではない。

これは、僕が一周早くなってしまっている。

余計にもう一周、僕が補填するとするならば、これはどうだろう。

「それって、もしかして……ノア、さん……？」

その名前を聞いた瞬間、アリスの眼がまん丸になる。

自己満足の逆走こそ、してはならない罪なのだと改めて感じた。

「どうしてあなたが知ってるのよ。もしかして、あの子とエレメンタリーが一緒だったとか……？ にしては、話が飛躍し過ぎね。あたしを呼び捨てにするのも変だし。でも、まあ、ふーん、そう？」

「アリス……？」

僕の胸をトントンと二回、痛く突いて、それからアリスは言う。

額を穿孔するのではというほど睨みを利かされたのに、どうしてか、アリスの言葉は全く僕の心には刺さらなかった。

「今日は、お父様には何も言わないでおいてあげる。けど、次もあ

るようなら、覚悟しておくのね。それじゃあ、ごきげんよう。素敵なストーリーカーさん？」

アリスの背中が小さくなっていった、それから見えなくなるまで、僕はただ、正門の前で呆然と立ち尽くしていた。

ここから動かなくとも、涙で景色が滲もつとも、校庭の方から聞こえてくる運動部の掛け声や、時折訪れる、季節と梢の戯れる音が途切れることはなかった。

どれくらい経ってからだろう。

もう、家に帰るための道も思い出せなくなっていた。

振り向いて誰かに助けを求めることも、できなかった。

何も、わからない。

分からないけれど、季節の囁きが聞こえる瞬間があった。

僕と同じく、正門に立ち尽くす二人が揺らめく影に気付いた。

花は散らない。葉も散らない。

それならば、今、季節は一体いつだろう。

アリスのせいではないけれど、僕は急に、体に感じるはずの温度の一切の感覚を失ったようだった。常時生温いお湯に浸かっているかのような、はたまた、氷を人肌に温めて融かしたような、そんな今なら、後ろを振り向いても大丈夫だと思った。

根拠は、声だった。

「お姉ちゃん？」

僕は遮二無二、駆けた。

駆けて、彼女を抱きしめていた。

無論、根拠は声だったから、目など見えていなくてもよかった。

目が見えなければ、そこにある世界が無くなることはないのだから。

「きき、急に、ど、どうしたの!?!? ここ、学校だよ??」

その鼓動の速さに彼女を感じる。僕を包み込む温もりを感じる。涙は堪え切れなくなった。

僕は、まだ、消えるわけにはいかない。

「僕、もう、ダメかと、思ったんだ……。ここじゃないどこかで失われたものに、押しつぶされそうになって……。っ」

「失われた……。？ お姉ちゃん、何か、大事なもの失くしたの？

ああー、そんなに泣いちゃって……。誰かに何かされたのかな……。？ よしよし」

僕の髪を撫でる優しい手を、僕は両の手で掴んで胸に抱いた。

これ以上、何かを失うのは 失ったと気付くのは、もう嫌だった。

「お……。姉ちゃん……」

「ごめん……。本当にごめんね……」

「うーん……。？ 全然わからないけど……。可愛いから許しちゃうなあ……。でも、さすがに正門のと真ん中はまずいよ、お姉ちゃん。

帰り道に公園あるから、あそこで休もう？」

「……。うん」

それから、彼女に肩を支えられて、夕暮れの道を歩き出した。

僕が先行することは一切無く、ただただ見知らぬ街道を連れられて歩いた。

僕の知る『僕たちの家』に辿り着くことは決してないと、すぐに分かった。あり得るとすれば、あの白い花の咲く、大きな庭園に。

暫くすると、小さな公園が見えてくる。

「よいしょ、と……」

「ごめん。ありがとう……」

風に揺れるブランコの隣、二人掛けのベンチに、肩を支えられたまま腰かけた。二人掛けであるせいで、僕たちの脇に大きな空間ができた。それでも、誰か他の人が腰かけられるような優しさは、そこには無かった。

僕は縋るしかなかった。

彼女の優しさに。

「大丈夫？」

「……うん」

僕の太腿をゆっくりと摩りながら、彼女は言った。

「学校で何かあったの？」

「……」

「ゆっくりで、いいよ」

彼女が僕の手を握らなかつたら、僕は口を開けなかつたかもしれない。

「思い出したんだ」

「うん。そっか。どんなこと？ 怖いこと？」

彼女が繋いだ僕の手が、並んだ僕と彼女の太腿の上をポンポンと順番に跳ねる。

イチとゼロ いや、一と二を繰り返すように、目まぐるしい。

僕の方に居ない時は、彼女の方へ。彼女の方に居ない時は、僕の方に居る。

二人分の重みが無くなった瞬間、酷い喪失感に囚われる。

当たり前のことだ。

彼女は、確かに、そこにいたのだから。

「僕がミドルの時、あのショッピングモールで起こったこと……」

徐に考える素振りを見せると、それから、一呼吸おいて彼女は言う。

「凱旋ぱれーど？」

「そう、だよな……」

そう。

確かにあの日、ショッピングモールでは『アイスホッケー世界大

会』に出場し検討した選手たちのための凱旋パレードが開催されて居た。近所に住んでいる僕たちは、家族でそれを観に行ったのだ。それから、みんなでご馳走を食べて、手を繋いで帰った。

そのはずだった。

そのはずなのに、僕は。

「え？ なに？ ぱれーど、どうかしたの？」

「ううん……違うんだ……。僕、最低だなんて……。泣いても、意味ないのに……。こんなの、弁明にもならないのに……」

「お、お姉ちゃん……っ」

僕を抱きしめてくれるのは、彼女が僕の恋人だからだろうか。

彼女は何も知らないはずなのに、僕の肩を持つのは、僕が憐れでならないからだろうか。

あるいは、『僕のことを知っている』からだろうか。

それでも、彼女は彼女たり得ていると、自らそう証明した。

「わたし、今日のお姉ちゃん、よくわからないよ。なんか別人みたい……。きつと、すごく怖い思いをしたんだね……」

僕は大きく首を振る。

何度も、何度も。

彼女は、それを無理矢理にでも止めようと、改めて僕を強く抱きしめた。

「でも、大丈夫。大丈夫だよ……。わたしは、どの世界のお姉ちゃんのこと、大好きだから……」

「うう……、うわあああああんっ！！」

僕はこれまで、その想いに順番や優劣など無いと思っていた。思っていたし、実際、ずっとそうだった。一番だと思った、あの『好き』も、この『好き』も、生まれては募り、全部が同率の一番になっっていた。

そう。

それは、誰かとの絆と同じように。

すべての命と、同じように。

「ね。お姉ちゃん……?」
でも、違った。

どうして、“僕”はこの世界に僕一人しかいないのだろうと思っ
た。

「おまじない……しよ?」

そして僕は、彼女に言われるがままに瞳を閉じ、真っ白な闇の世
界すべてを受け入れた。

それからすぐ、彼女の感情が勢いよく僕に流れ込んで来た。

それは、紛い物の二度目の選択^{セカイ}ではなく、紛れもない僕自身の選
択であり、最初で最後の覚悟。流されるままではなく、それに応え
ようとする、“僕”という情動の媒体が、その確たる証明になり得
る。

彼女の愛を受けて、僕の中の愛が大きくなる。そうやって、世界
は『しあわせ』に包まれていくのだと、彼女はいつも言っていた。

彼女の言っていた世界とは、僕と彼女だけが潜むほどの狭い
いや、無限大に広がっていく、それこそ紙面上や空想上の、もの
こと。僕が夜伽に語り続けた、あの空想の中の『都市伝説』のよう
な物語。

その結末はいつも、目映いほどの『しあわせ』に満ちていたでは
ないか。

僕と、彼女の手で。

いや、僕と彼女の『おまじない』のキスで。

「ねえ……っ」

ああ。

そうだ。

僕が、生まれて初めて好きになったのは
一人の女性として好
きになったのは、他の誰でもない。
。

彼女^{サクラ}だった。

理解して、修正点。(後書き)

【あとがき】

サクラという名前は実は、ルカという名前のあとからできたものでした。

「Aryys アリス」とか、「Rize リズ」とか、「Lin oah リノ」とか「Lenoah レノ」とか。不思議なスペルが多くて気付かなかった方も居ると思いますが、実は。

Rukas ルカとして(生きる)という言葉のアナグラムになっているのです。

ルカが自分で考えたものだと思うと、また少し、神妙な感情になりますね。

一度すべて読み終えてから、もう一度出会いのシーンを読み直したりしたら、面白いかもしれません。

私も今度やってみよう。

次回は……。

惑わされて、時計針。(前書き)

【まえがき】

佳境です。

どうぞ。

惑わされて、時計針。

想いには優劣や順番がある。
それがごちゃごちゃになった時、恋は始まるもの。

そうだ。

最初に事件が起きた『あの日』、僕は急いでいた。
他にもない、彼女を探すために。一刻も早く存否を確認して、安心するために。

確か、新聞か何かで隣国の戦況を見て、急に心配になったとかだったと思う。そんな記事は、その戦争地域の隣国になるわけだから、ごくごく日常的なことだったはずだけれど。

そののどこから物語が始まったのかは、僕にもわからない。
わからないけれど、僕はその時、家の廊下を只管に走っていた。

二階の彼女の部屋まで、できる限りの早さで。
見るだけでよかった。特に何かをする必要は無い。
むしろ、彼女はそこに寝ていてもいい。

僕がそれを僕の視界にいれて、それで満足なのだろうと
思っていた。

その先入観のせいなのだと思う。
ちょうど、僕が階段を登り切る直前くらいのタイミングだった。

「ルー」

彼女の声は、僕の真後ろから聞こえた。

僕が探しに行こうとしていた場所に、はじめから彼女はいなかった。

では、僕は一体、誰を探しに焦燥に駆られていたのだろうか。今ならわかる。

間違いない。

ル力を サクラを、だった。

振り向いた反動で先が見えなくなった僕は、慣性力にいなされて次の段を踏み外すことになる。僕が上手く着地できなかったのは、運動神経が悪いせいではなくて、この体に慣れていないからだと思っただ。

でも、この体だからこそ、彼女は無事だった。

「うわわっ……とっ！」

間一髪、彼女が床に叩きつけられる前に、左半身を身代わりにと大地へ差し出した。身代わりというか、普通に左半身にダメージを受けているけれど。彼女が怪我をしないで済んだわけだから、一先ず良しとしよう。

家は小さく揺れ、母が遠くの居間からこちらを覗いて、ニヤニヤしている。

「ただ、大丈夫っ!？」

これはなかなか随分と大それた演出をしてくれたものだ。

とは言え、多少、肩関節あたりがビクついてはいるものの、それ

ほど痛みはなかった。

「うん。すごい音したけど、そんなに痛くは無かったよ。それより、リズこそ。怪我とかない？」

「あ、うん。私は全然平気」

「そっか。なら、よかった」

であれば、ふう、と一息つける。

勝手に落ち着いていると、リズが僕の肩辺りをぐいっと押すのが少し素っ気無い。

「ど、どけられる？」

「うーん。どうだろ。よっ……こいしよ、いつ！？ あ痛ててっ。

……「ごめん。ちょっとまだ、無理そっかも……」

「だよー……。暫く、こうしてよー」

「ごめん」

これが、とある夏の日の朝の出来事。

僕が階段で転んで、リズと接触してしまう不慮の事故が、その日に起きる。

「……………」

「……………」

「ねえ。そうやってたら、腕疲れるでしょ？ いいよ？ 寄っかかってっも」

「う、うん。ありがとう。じゃあ、少し……………」

何だろっ。

まるで未来予知や予定調和のように、次に起きることが把握できてしまう。

例えばそれは、リズの体温であったり、揺れ動く鼓動であったり。はたまた僕自身のそれであったりしてもだった。

「……………」

「……………」

どきりどきり、とリズの心臓が鳴るのを、僕の心臓が静かに聴いているようだった。

年相応に柔らかい彼女の胸に、宿る想いとは斯くも強固で、しかも遙かに浩瀚であったのだ。その時の僕はまだ、そのことを知る術はないはずだろう。

しかし、“僕”がそう思い出すのとは、全く別の話。

「ね」

「ん？ どうしたの？ あ、ごめんっ。もしかして重かった？ すぐどくよっ……痛てっ」

「あっ、違うの違うの！ ルーはそのままにしててっ」

「すう……はあ……。あ痛たた……」

瞬間的な痛みこそ無かったものの、後を引くものがある。

鐸が響くのにも似た鈍痛が、ジンジンと肩の骨を打ち鳴らすようだ。

「ご、めん……」

リズが僕の左肩を優しく摩ってくれた。

少しだけ、ましになったかもしれない。

僕は首を小さく横に振って、「全然だよ」と微笑んで見せた。

僕なんかのことよりも、リズの話の続きを聞こうと思ったのだ。

それなのに、リズは僕の脈動を聴くかのように、僕の胸に尋ねてきた。

「なんで、さつき走ってたの？」

「ああ、うん。今朝の新聞でね。隣の国で、戦争が激化したっていうのを見て。少し心配になっちゃって……って、僕のお節介なんだけど」

「そう、なんだ……」

お茶を濁したようになってたけれど、そのお茶は元々、かなり濁っていたと思う。

リズはそのことに関して特に何も言わなかったけれど、左肩を撫でる範囲が少しだけ広くなったように思う。もしかしたら、僕がリズに責任を押し付けたようになってしまったかもしれない。

僕は、すぐにフォローした。

「でも、よかった。無事だったから」

「いっつも大げさー……」

「あははは……」

このタイミングで気付くのも、何かの思し召しだろうか。

いや、違うか。

これは、僕自身が持ち越した記憶の賜物だろう。

きつと、あまりに彼女を近くに感じ過ぎて、思い出してしまっただけだ。彼女に抱きしめられることで、僕本来の欲望が、もう一度芽生えてしまっただけだ。

「でも、ありがと……。心配してくれて……」

「う、うん……っ」

ぎゅっと肩口を握られるのが、少し痛く響いたけれど、それ以上に彼女を尊く思う気持ちが強くあった。

かつて僕が、ここではないどこかで感じた想いに、それは似ていた。

「ルーは優しいなあ」

「なに、急にそんなこと……。もしかして、何か買って貰おうとしてる？」

「そんなわけないでしょー？ ただ」

初めに、可愛いという気持ちがあったと思う。

もう少しして、素敵だなという感情を抱いたと思う。

そのうちに、触れてみたいだとかキスを試みたいだとか、思うようになっていった。

今は、そんな過程を通り越して、結論だけが僕の頭に先走っている状態なのだと思う。未来予知・予定調和的に、それは起きていると。

「ただ？」

だから、ここでは何も起きない。

何故なら、もうすでに、何も起きなかったのだから。

「ルーがわたしの恋人だったら、いいのになーとか、思ったり思わなかったり」

「リ、リズ……」

その刹那だった。

『リズのことを、好きだなあ』

そう思った。

思ったのだった。

……………。

何であるう。

もうすでに、僕は、知っているはずなのに、もう一度改めて、そう思ったただけだろうか。

であるならば、別段、ここまで確りと、印象に残すことはないだろうにと、瞬時に自分に思い返した。数秒前の記憶を辿るなら、未
来予知・予定調和的ではないと換言できる。

確かに、今、僕はそう思った。

リズのことを好きだと。

それは、もう、姉妹としてではなく、一人の女性としてだった。

そのはずなのに、その瞬間だけ、それを否定する自分が生まれた気がした。

まるで、一人の女性としてリズを愛することに、まだ後ろめたさや不安を感じているみたいだった。自分のことで、且つ、過ぎ去った出来事にも拘らず、自身への照会が再度行われた。

もう一度、リズと目を合わせてみたい。

その過程すらも、今の僕には、少しばかり苦難を強いられる。

「どうかした？」

「う、ううん。何でもないよ」
「いや、待て。」

お願いだから、取り消してほしい。

これは単なる“同期”ではなくて、“上書き”……なのか？
ということは、何か。

つまり、僕がこれまで積み上げてきた苦悩の過去は　僕が今まで
ずっと抱いてきたこの切なる『願い』とは　。

「痛い痛い、とんでけー……なんてっ」

「あ、ありがとう……」

リズの『願い』によって、始まったとでも言うのだろうか？

惑わされて、時計針。(後書き)

【あとがき】

ルーモスの二大トリックの、最後の砦「リズへの気持ち」が明らかになりました。

これまでの『願い』を巡る時節の中、気付いていた、あるいは疑っていたかたもいらっしやるのではないでしょうか。“あの時”という比喻を用いたり、『願い』の力をリズにだけ知らせなかったり、色々と含ませておりました故。

しかし、惑わされないでください。

『願い』の力とは……。

いや。

これは、自戒。はたまた、次回。

物語は、収束します。

決意して、羅針盤。(前書き)

【まえがき】

優しさの代償は、いつも「誰かの心の中にある空しさ」なのだと思えます。

そんな凸凹な物語も、終わりを迎えます。

では、さようぞ。

決意して、羅針盤。

いつか会いたいと思うこと。今会いたいと思うこと。
それは、ずっと一緒に居たかったということ。

「っは……！！ はぁ……、はぁ……っ！」

息の仕方すら忘れてしまっていたのだろうか、僕は、それを思い出したおかげで、目を覚ませたのかもしれない。

いや、それは、皆がそうだろう。

人は、明日を迎えるために昨日を忘れなければならない。昨日覚えていた、『息をする方法』も、明日使えるとは限らないからだ。でも、そこに汎用性を持たせてはいけなくて、昨日と変わらない明日を生き抜くために、それは必要なことだったのだ。

何故なら、世界は『三十二秒前に、誕生し続けている』のだから。

だから、多少の窒息なら大丈夫のように、元々、人間は作られている。

あなたとキスをする時 『おまじない』を信じる時、僕たちはきつと、どんな世界のどこの誰よりもきつと、死に近くて、無防備だから。

それは勿論、僕だけではなくて、あなたも。

誰も彼も一緒だ。

「あ。起きたー。良かったー」

「あっ、リズ……。えっと、おはよう……で、合ってる？」

「外れー。こんばんは、ね。ま、とりあえず、大丈夫そうだし、お母さんに報告してくるから。まだ寝ててね」

「ま、待って！」

走り去るリズの袖口に、指が届かない。

リズは僕の声に素早く反応して、「なにー？」と振り向いてくれた。

「僕、さっき、倒れたんだっけ？」

そんな記憶は一切ないけれど、なるだけ世界に順応できるよう、最大限の洞察を凝らした。それが例え、捏造になったとしても、この場合は厭わない。

首を傾げる僕に向かって、彼女は言う。

「そうだよー。お風呂で逆上せたって聞いたけど？ 詳しくは、本人に聞いてー」

「本人って」

「それじゃ、私ちょっと行ってくるー。すぐ戻って来るから、わたしのルーに絶対ヘンなことしないでよねっ！」

リズは何かの忠告をして、そそくさと部屋を出て行ってしまった。あの急いでいる様子からすると、僕は今現在も何らかの危険に晒されているらしい。

そろそろ、周囲を見渡してもいいだろう。

まず、ここは僕の部屋で間違いない。正しくは、リズと僕の二人部屋か。これは部屋の家具の配置からインテリアまで、何もかも不和がないから間違いないだろう。おまけに、あの壁の染みがお熱いのも、確りとそこにある。

あれはどうだろう。

風呂場で逆上せたと行ってたから、十時半を刻んでいるあの時計針は信用してもいいか。それならば、最近捲った覚えのある、あ

のカレンダーも差異ないと言っているはずだ。

壁のフックにかけられた制服は、僕のものもリズのものも、覚えのある冬服だ。よく見ると厚手のフォーマル制服であるので、何か学校で式でもやっていたのであろう。

ああ。

リズの方もフォーマルだということは、イベントが重なりやすいシーズンだ。

冬で、尚且つ、三月。

アカデミー生もミドル生も、フォーマル制服をタンスから引っ張り出してくる日。

時間を信じるのなら、それはもう、今日は終わっている。

それでいて、僕が湯船で逆上せてしまうような事件が、今日。

「あれ……？ 今日って確か……」

「卒業式」

「うわっ!?!」

どこからともなく声が出たので、非常に驚いたと思う。心臓がどこかの壁に当たって、ずきずきと痛みすらするし。

聞いたことのある声だったから、まさかと思って、薄眼で壁の染みを確認する。

けれど、嘗ての不気味な笑みはそこになく、ただ小さくて黒っぽいハートの影が鎮座していただけだった。

では何者であろうと、僕は手探りで身の回りを漁る。

もしかすれば、それは僕にしか聞こえない一種の“声”のようなものかもしれないから。

せめてもう一度それが聞こえたら、などと念じつつ暗闇を探検していると、布団でない何かに当たった。

「あつ……」

「あつ……？」

それは、途轍もない弾力と衝撃吸収力を兼ね備えた、極上のクッション素材のような感触をしていて、尚且つ肌触りがいい。解せば、それは柔軟に形を変えて、僕の指と指の間に絡んで、すごく心地が良い。ずっと触っていたくなる気持ちと、欲に感けてしまいそうになる罪悪感が、拙い心を支配していく。

少しだけ熱を持っていて、多少湿ってもいた。

それはそうか。

僕たちは入浴していたのだ。

入浴……？

「んっ……」

「んんっ……！？」

そうか。そういうことが。

リズの言っていた『ヘンなことしないでよ』というのは、この展開への布石だったと言うわけか。いや、まさか、僕がそれをしでかすとは、全く思いもしないだろうけど。

段々と夜目も利き始めるあたり、嫌な汗が全身からぶわっと噴き出すのがわかる。

折角、風呂に入って今日一日の汗も洗い流したと言うのに、これは本末転倒というか……、もはやこれが大義名分というか。

一度、強烈な勢いでもってそうしてしまった手前、急に手を引くと、『僕が気付いて冷静になった』と思われかねない。それでは、僕がヘンなことを我慢できずに、やってしまったことになってしまふ。

だから、ここは気付いていないフリをして、このまま惰性で慣れさせて、いつの間にか終わっているという流れが、無難なのではないだろうか。僕がそれに気付いてしまっているのだから、もうアウトなものには変わりないのだけれど。

いや、真実を申し上げるならば、嫌われてもいいからもっと触っ

ていたい、なのである。

再会がこんな形になってしまふとは予想だにしないけれど、こうしてまた、彼女に会うことができたのだから。

ああ。そうだ。

願わくは、彼女が熟睡などしていませんように。

「や、やめっ……んっ……！」

「……………」

全然、起きていた。

今、僕が彼女に尋ねたら、僕と同期した過去の彼女と、目の前に居る現在の彼女は同期するだろうか。同期という表現は正しくないか。僕のことを覚えているルートに、この世界は軌道修正されるだろうか、か。

もう、認めよう。

僕は、無意識にせよ、女の子の胸を徒に撫でまわしてしまっていた。

それから離脱するように、僕はゆっくりと背中の方に手を回してそのまま彼女を包み込むように抱き寄せた。優しく、そして強く。

覚えているはずもない乳幼児だった頃の記憶の残滓が、走馬灯のように脳裏を駆けた。灯火は仄かに僕たちを照らして、肌と肌が触れ合った時のように温かかった。

事実、僕たちは裸であった。

「よかった、無事で……………」

「るー、と……………」

一瞬、サクラの体が強張ったように感じたけれど、それからすぐに弛緩した。

以前にサクラが言っていたことは、なるほどこういうことか。

自分に気を許してくれた、信頼して受け入れてくれた　そうわかることが、こんなにも嬉しい。サクラが誰かとの繋がりを第一に考えていた意味が、少しだけわかった気がする。

誰かと通じ合うことは、こんなにも気持ちが良いのだ。

「ねえ、サクラ」

「……………」

サクラは珍しく何も言わなかった。

僕の問いかけにサクラが無言になることは、今までに一度も無かったと思う。

それなのに、僕はサクラが何を感じているのか、分かったような気がした。

だって、こんなにも近くに居るのだ。微かに揺れ動く脈動すら、僕の耳には聞こえてくる。

それが、決して完全な予測や未来予知ではないとしても、『悲しい』だとか『嬉しい』だとか『好き』だとか……そんな簡単なことに帰結する未来とは、確かに、僕のこの碧緑ひとみには煌々と輝いて像を結んだ。

「僕が一番初めに好きになったのは、サクラだったんだね……………」
「……………」

サクラが息を飲むと、また、鼓動が一段と早く鳴る。

それから、サクラは僕の胸の中で、声を殺して静かに泣いていた。僕も特に何も言わず、ただ打ち震える彼女の髪を、できる限り優しく梳いた。

今までサクラが失ってきた時間を、そうやって掬えばいいのにと、僕の瞳も潤んでしまった。でも、堪えた。

今、泣いていいのは、サクラだけだ。

なぜなら、今ここに居る僕は、この世界に“僕一人”しか存在しないのだから。

「一つ、聞いてもいい？」

サクラは「うん」と頷くと僕に抱きついてきて、ぎゅっと小さくなった。

なんだか、生れたばかりの赤ちゃんみたいだ。

「どうして、リズの『願い』を僕に……………」

「それは……………」

ずっと、鼻を吸る音がする。

まるで、自分の気持ちを落ち着けるために、間を取っているかのように。

それならば、僕はいくらでも待つつもりだ。

冷えてはいけないと、僕はサクラのお腹を摩る。

「まつ……！ おっ、お姉ちゃんっ。き、急には、やめてね？ びつくりして変な声でちゃうってば。好きな人に、そんなことされたら……」

「あつ、ごっ、ごめんっ。……けど、寒くない？ 大丈夫？ 服、持ってこよ……って、今、僕も裸なんだった……。リズとかお父さんに見られたら、さすがに、正気を疑われる……！」

「んーん。大丈夫だよ。お姉ちゃんが温かいから。心配してくれてありがとね、お姉ちゃん。ね……いいよ？ お腹触っても。お姉ちゃんもそうした方が温かくない？」

「そう、かな……」

確かに、触れていないところは布団に雪崩れ込む外気で冷えるけれど、そうではない、肌が触れているところは、少しも寒くなかった。

やはり、人間の営みとはこういうものだろうか。

肌と肌を直接触れ合わせる方が温かいとはよく聞くが、これは確かに。互いに好き同士がやれば、気恥ずかしさも助けて、一冬弱くらは越せてしまいかもしれない。

しかし、僕は。

「やっぱり、まだ一番になりたいから……かな？」

サクラは何かを恐れるように、ぼそりと呟いた。

「え……？」

「あの子の『願い』を見せた理由だよ」

もしかしなくても、それは聞かなくてもいいことだとわかる。それでも、知らなくてはいけないのだ。

サクラの気持ちに、ちゃんと答えるために。

「わたしが選ばれることって、あの子が選ばれないのと一緒にでしょ？ だから、あの子のこと、少し嫌いになったりしないかなって……そう、思った……。それって、ちょっとずるいんだけどね。でも、それでも」

「それでも、僕のことを……」

サクラは何も言わず頷かず、そのまま僕に体を預けて来た。

それは「わかってよ」という意味だろうか。

いや、さすがに、僕の気持ちだって少しはわかっているのではないか。それにしても、少しばかり精がない気がする。しおらしいというか。

数多の世界を旅して、現実から逃げ出して、理想を追い求めて、たった一つのゴールに向かって、そして今日、こうして巡り会えたのにも関わらず、その態度はなんともサクラらしからぬものだ。

そればかりか、何かを躊躇しているのか、いじけたリズムで僕の脇腹辺りを突いてくる。

リズムがよく似たことをするから、そういう遺伝なのかもしれない。であれば、その行為の意味とは。

「ねえ………?」

脳が処理を急いでいるところに話しかけられてしまって、多少極まりが悪い。

しかし、これほどまでに距離が近いと、そんな伝送のロスすらも度外視できそうだ。

「うん？」

「わたしに会ったってことはさ……。わかってるでしょ？ 今日、何が起きるか……。わたしと……。世界と……」

「サクラが突いてくる皮膚の辺りが、何らかの情報端子にでもなっているのだろうか。」

「ふにふにと摘まれる度に、僕のした体験が鮮明に蘇ってくる。とは言っても、その時の情景が見えるわけではないから、これは洞察の一種だと言ってもいい。」

「あの“一度目の世界”での僕たちの在り方、“白の世界”でのサクラの発言、エトセトラ……。そこからわかる真実が、多からず存在する。」

「まず、その理由をはっきりさせなければならぬ。」

「わかる、けど……。ねえ、サクラ……。どうして、無理やりなの？ 僕なら多分……」

「うん。あの時はね、りずが入ってきたんだ。その……。わたしとお姉ちゃんが、らぶらぶ……。って、してるときにね……」

「あ、ああ……」

「とりあえず、誰に謝ればいいかわからない。」

「皮肉にも、それは未来の出来事だから、取り返しはつかない。」

「でも、それはもう、この世界では起こり得ない」

「それは、そうか。」

「この戯れにも似た邂逅の時間は、決して永遠ではない。」

「そして、それは彼女にとっては、須臾の時のようにも感じ得る。」

「ちよつとおーっ！！ ころうあっ！！ 何してんのっ！！」

「リズのドロップキックが、僕たちが横になっていたベッドに突き刺さる。誰を目がけたかは、すぐに分かったけれど、それはおおよ

そ僕に当たった。

リズも本気のトーンではなかったから、多少の接触は容認するところなのだろう。

「あ痛てて……」

「あ。ごめん。ルーに当たった」

「う、うん。いいけど……。寝てる人にドロップキックしたら危ないよ？」

「だ、だって、その女が……あっ？」

リズの飛び込んできた扉の隙間から注ぐ電灯が、僕たちをピンポイントで照らし出す。

まるで、世界から二人だけ隔離されたようになってる。

それを別の人が覗き込んだら、誰しもがこう言うだろう。

一枚の絵画のようだ、と。

母譲りの美貌と角の取れた輪郭。父から受け継いだ知識と経験は、僕たちの共通の趣味嗜好にそのまま反映されている。互いが互いを真似し、互いが互いを比較し続け、し続けられた。考えることも似るし、顰に倣えば容姿も似てくる。

そして、両親から片方ずつ授かった碧緑の瞳で、引き寄せ合う。

一糸纏わぬ僕たちを見たら、誰もがきつと、鏡の絵画を思い出すだろう。

僕とサクラは、双子なのだから。

「あ、えつと……これって、偶然とかじゃ……ない、よね？」

幸か不幸か、リズは往々にして状況の把握が早い。

けれど、おそらく、リズがサクラを苦手に思っていたのは、その存在を覚えていたからではないだろう。

「うん。偶然じゃないよ。サクラはね」

つまりそれは、思い出すかどうかではなく。

今までを いや、これからを、信じるかどうかということ。

「僕の双子の妹で、リズのお姉さん」

「あの一、リズさん……？」

「なによー！」

「何も、リズまで脱がなくてもいいと思うんだけど……。というか、この状況は、さすがにまずい……」

「あははっ。お姉ちゃん、もてもてだねー」

「そ、そういうことじゃないんだけど……」

口調や面持ちが違っていても、やっぱりサクラはサクラで、リズとは反りが合わなかった。サクラとしてではなくて、ルカとしての態度なのかもしれないけれど、サクラにとってそれはもう、どちらでもいいのだろう。

リズが僕を信じているか信じていないかは、リズの言葉を僕が信じるということと解決させたとしても、サクラとどう折り合いをつけるかは別の話らしかった。

軽い口喧嘩のようになってしまった拳句の果てに、リズが来ていたパジャマを脱ぎだして、僕と添い寝を始めたのだった。それで、サクラと同じように僕の腕に絡まったなら、それはそれはよくわからない。

両手に花なのかとは思いつけれど、女子同士での取り合いが展開するところということになるとは、誰も想像だにしない。

僕は左右の視界を封じられて、天井や壁のあの染みと対話するしかなくなる。

「ホント、ルーと居ると、不思議なことばっか起きるよね」

「そ、そうかな」

リズがしみじみと語る回顧の念の情景には、サクラはきつといな

いだろう。

例えば、僕がそこに橋を架けるとして。

サクラとリズが対等の立場になれる拠り所とは、この僕の胸以外にはないのだろうと思う。

「それ、わたしのせいかも」

「ふーん……」

「最初にお姉ちゃんと『おまじない』をしたのって、わたしだったから」

「何それ。キスしたって言いたいの？」

「違うよ。『おまじない』は『おまじない』なの」

リズはどちらかと言えば現実的で、あまり夢見がちな発言はしない性格だ。恋だろうと勉強だろうと、持ち前のセンスと勝負運で真っ向から勝負する感じだろうか。

それに対して、サクラはどちらかと言えば内向的でメルヘンチックなイメージがある。勝てない勝負とわかったら、確実に何かを置土産にしてから散るタイプだと思う。

陰と陽、夏と冬、月と太陽……。

そんな字面を見ると、二人は本当は仲が良いのではと思ってしまったり。

でも、姉妹だ。

どこまで認め合えば、確かめ合えば、“愛”を通り過ぎるだろうか。

僕には、それを知る素質が欠けている。

「ねえ、リズ……ちゃん。一ついい？」

「桜さんにちゃん付けされるのはなんかキモいから、リズでいい」

「うん。じゃあ。わたしも、さんなんていらなから。むしろ、お姉ちゃんって呼んでくれてもいいんだよ……？ リズ……？」

そこまで詳しく思い出せないけれど、サクラは以前、リズのことを「リズちゃん」と、そう呼んでいた気がする。目下の相手のはずなのに、何故か敬語を使ってしまうような、あの劣等感をサクラも

感じていたのだろう。

リズは、わりと結構グイ来るからな。

「おね……やっぱいい。桜さんは桜さんで」

「そっか……」

サクラの声には、少しばかり覇気がなかった。

リズの中から、ルカという一人の少女がすっかり消滅してしまっただから、当然だろう。

でも、僕はまだ覚えている。

だから、選択することができる。

「それで？ なに？」

「あ、うん。大したことじゃないかもだけど……りず、大きくなっただけであって。これ、ずっと言いたくて……」

「え、何それ。おばあちゃんみたい」

そつと、僕の肩に寄り添い縋るように、サクラは喋る。

その口調に、淀みはない。

「まあ、確かに、精神年齢的にはそうかも。えへへ……っ。あ、でもね？ 本当にそう思ったから。大きくなったなって。それに、すごく可愛くなった。胸もなんか、これからーって感じだったし。意地っ張りだけど本当はすごく優しいのも、わたし、知ってる」

「あ。もしかして、私のこと狙ってるの？ いいよ……。桜さんなら。愛人くらいには、してあげても」

褒められ慣れているリズは、照れる様子もなく軽く受け流す。

半分ジョークなのではないかと思うが、いやきつと、まさに半分ジョークだろう。

サクラがリズの言葉に微笑まないのは、何となくわかってはいた。「お姉ちゃんが好きになるのも、わかるなあ……」

それまで、仄かに温かかった空気が、一瞬、ポタリと雫が落ちたように冷たくなる。

その波紋は静かに漸進して行って、それから、入り組んだ心の漣に反射して、歪な造形を成した。

シルエットでしかわからないその影にすら、意味を見出す人は多からず居る。

「ね、ねえ……」

リズが半身を起こして、それからまた僕に確りと捕まった。何か揺さぶられ手摺に頼るかのように、その手は何かを耐えていた。

その言葉には息が混じる。

「どこにも、いかないでよ……？ 桜……お姉ちゃん……」

「……………」

その言葉に対しての返事は、無かった。

しかし、僕にはちゃんと伝わってきている。

その気持ちを隠すか、事実を伝えるかは、僕に委ねると言うことだろう。

いや、そうさせない。

それが、僕がこの世界でとるべき選択だ。

「ねえ。サクラ。教えて欲しいんだ」

ぎゅっと、掴まれた両腕に明白な力を感じる。

僕はそれを鼓舞と受け取って、言葉が続ける。核心に、迫る。

「さつき、サクラが言ってた『世界と』って、それって、世界にどんなことが起きるの？」

「無くなるの」

その『世界』がどれだけの範囲を指すのか、そして、『無くなる』とはどういう経緯でそうなるのか、予想などできるはずもない。そ

のはずなのに、僕には何となくそのヴィジョンが見えた。

これは、記憶があったからというよりかは、記録があったからだろうか。

とは言え、まだ予測の段階であることには変わらない。ここでは、まだ実測されていないのだから。

しかし、それが夢世界の延長であったりとか、物語の中だけの妄想であったりとかは決してないのだとわかる。

リズにもそれほど驚いた様子はない。

「無くなるって……何？ どうやって？」

「方法のこと？ 多分、戦争……かな」

「せ、戦争っ……！？ い、いやだよ、私……っ」

戦争という単語から連想されるに、世界の範囲はおそらく『僕が認識できる範囲』になる。それは、人を伝ってもそうだし、場所を伝ってもそうだ。僕が関係した物事を『世界』とするならば、その戦争はそれをすべて破滅させてしまうことになる。そして、その火種はおそらく、隣国の内部紛争になるだろう。

戦争の規模はまだわからないけれど、一国が滅んでしまってもおかしくはない。

そして、僕のすべてが。

「でもね、リズ。あなたは助かる。それと、お姉ちゃんも」

ぴくつと、リズの指が反応した。

それからすぐに、鼓動が早くなった。

「えっ……。どうして……？」

そうか。

そういうことか。

僕の知る世界が消えてなくなるのは、他でもない。

「『世界に二人以外必要ない』って、あなたたちが願うから」

でも、今度は条件が違う。

だとすれば、僕はどうすればいいだろう。

「じゃあ、僕がそれを願わなければ……」

「ダメだよ、お姉ちゃん。それでも、りずが願うから」

「……っ」

また、リズの指がピクリと動いた。

同じことに驚くとは、リズらしくない。

いや、それは違うのか、あるいは。

「りずはね、多分、世界を一度やり直してる」

僕は、はっとした。

それはサクラにも、勿論、リズの方にも勘付かれたことだろう。

「『願い』の力……『おまじない』の力を失わないように願ってか
らね。だから、りずは、もう一度『願い』を」

「ま、待って、サクラ！」

思わず、言葉を遮ってしまった。

それが偽物などではなく、『本物』であると、分かってはいるはずなのに。

憔悴して乱高下する胸を優しく撫でながら、サクラが僕を諭す。

「大丈夫だよ。りずのは、わたしたちと同じ、お母さんから教えて
もらった『おまじない』だから。規則違反へんたいなんてない」

「そ、そうだけど……っ！」

そっだ。

僕は止めて良かったのだ。

何なら、サクラのことを軽蔑してもいい。

そこまで貶める必要はないのではないかと。

でも、それはリズ自身が決めることであって、僕の選択どころではない。

ともするならば、僕はサクラを嫌いになれるだろうか。

そんなことは、もう、無理だった。

僕はサクラのことを、リズと同じくらいに愛しているのだから。

「いいよ、ルー……。私のこと、庇わないで……。桜さんの言うてること、本当だから……」

「リ、ズ……」

腕に絡みつく圧力が減退していくので、その後ろめたさは伝わってきた。

いや、そうでなくても、理解していたつもりだった。僕の中にあるこの、リズへの気持ちの正体が、『おまじない』の力から来たものであったとしたら、それはとてもショックだろうなと思っただけなのだ。

そうわかっていたからこそ、できるだけ心構えはしていたし、気持ちを確認するためのリズとの一夜をイメージしてもいた。

「で、でもっ！ ルーのこと好きなのは、絶対だからっ！！ キスしたいし、手繋ぎたいし、夜は一緒に寝たいし、結婚したいし、子供も欲しい……。だから、ルーが言っただけで遺伝子の研究、すっごく応援してる！ 私のこと、どんなに滅茶苦茶にしてもいい……。っ！心も体も、もう、全部あげるから……。っ！ だから、お願い……。っ！ お願い、だからあ……。っ」

それなのに。

僕は悲しいのよりも少し、怒りの方が強かった。

そんなことをしなくても、僕はちゃんと、リズのことを好きになるのにな、と。

「私のこと、嫌いにならないでください……」

僕の興味と無垢とを、また一から掴み直すように、リズは僕の腕をぎゅっと抱きしめてくる。痛いぐらいの柔らかさが、逆に、憐れに感じた。

僕は、まだ、リズのことをちゃんと好きだ。

それから、僕は選ばなくてはいけない。

「なるわけないよ。嫌いになんか」

「ルー……っ」

「だからこそ、世界を救わなくちゃいけない。ううん。そんな大それたこと、しなくていいんだ。ただ、僕の僕たちの『しあわせ』を、世界におすそ分けしてあげれば、それで」

それは簡単なことではないと、いつか知った。

けれど、その同時に、不可能ではないと夢を見た。

僕たちが勇気を出す理由は、それくらいで十分だ。

その希望の灯火は、サクラが着火する。

「止める方法は、一つしかないし、簡単でいてすごく難しい。けど、努力してどうにかできる問題でもない。そんな理不尽でも、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

その灯火を、僕に渡す。

その方法は「心を通わせること」、ただそれだけでいい。

「わたしの『三十分十二秒を辿る力』は、お姉ちゃんたちのあやふやな時間逆行じゃないの。だから、記憶とか記録、全部が『なかつたことになる』。んーん、違うね。そういう出来事が起きる前の『はじめの世界』になる。時間を巻き戻すんじゃなくて、予定調和を辿って、そこからまた再開できるの。ちょうど復元ぽいんとかから、復元するみたいだね」

サクラは淡々と、解説を始める。

掌握が容易に感じるのは、そこに矛盾がないからではないだろう。僕が頷くのは、リズとの総意だ。

「それで、お姉ちゃんを過去の状態に戻すから」

「過去……」

「うん。りずも、分かるよね」

「……ん」

「戻るの、りずの『願い』が始まった、あの夏の日。そこから、世界は始まるよ」

「わかった」

そうか。

思えば、あの『願い』がすべての始まりなのか。

それは、何とも至妙な展開だと言えよう。

すべての元凶が僕で、それを回収しようとしているのも僕なのだから。

「じゃあ、僕はそこで、りずを止めればいいんだね」

「うん。そう」

「ま、待ってよ！ それって、私の気持ちはどうなるの……？」

「それは、わたしやお姉ちゃんも含め、全部その時に戻るから……」

あの時、自分がどう思っていたかなんて、直ぐに想起できるものでもないはずなのに。

今は、どうしてか、光のように早く、そして鮮明に思い浮かぶ。

だから、りずが激昂するのもわかった。

「忘れちゃうって事じゃん！ い、いやだよ！ そんなの、絶対イヤっ！ なんで……なんで、そうなるの？ せっかく、二人でやっつてこっつてっ、色々話してっ、お母さんたちにも打ち明けてっ、部屋も同じに戻せてっ……！！ これからだっつて、思ったのに……。なのに……なのに……っ！ どうしてっ！？ どこにもいかないですよ……っ。ルー……、ルーお姉ちゃん……っ！！」

進むマグマの如くりずが熱くなるのに対して、サクラの言葉は水の礫の様に鋭く。

でも、それも、泣きたくなくなるほど、僕は美しいと思ってしまった。「それじゃ、二人が愛し合ってるどころ、わたしに見てるっつて言う

の？」

「ち、違」

「くないよね。それじゃあ、りず。りずは、わたしとお姉ちゃんが……してるところ、隣で見えていられるの？」

「そ、そんな……。い、嫌あ……。っ！！なんで、そんなこと……」

「わたしも、同じ気持ちだよ？」

サクラの手がぶるぶると震えを刻んでいる。

希望を抱くことだったり、可能性を信じることだったり、心の持ちようはある。

けれど、その気持ちは代わりが利かない。

サクラも、リズも、勿論僕も。

だからこそ、選ばなくてはいけないし、魔される程悩まなくてはいけない。

それは、みんなわかっているはずだ。

「ごめん、なさい……」

「ううん。いいよ。わたしだって嫌だし、怖いから……。存在ごと消えちゃうって、寂しいから……。すごくっ……。すごく、ねっ……？でもっ……。仕方ないんだっ」

「待って！サクラ……。っ。存在ごと……。って？」

「そ、そんなの、ダメっ、やめてよ……。！桜さん……。っ！」

ああ。
だから、二度目の世界でサクラは、僕と強引に結びついたのか。それが最後だと、これが最後になるとわかっていたから。

「その世界につ、わたしはっ……。いないんだ……。っ」
ダメだ。

これ以上、涙を我慢することはできない。

「きつと……。また、覚えていてね……。？」

こうして歪んでゆく世界を、他の何かに形容することができたなら。

僕は、今よりもう少し、明るく振る舞えたのかもしれない。

わんわんと部屋に響く涙の音は、一頻り壁や天井を濡らす。嗚咽して漏れる呼吸も、僕の耳には拡がって聞こえた。暗闇に流れ込んだ一筋の光が、僕たちを照らした。

そのうち、いつの間にか世界は微睡みを覚える。このまま何事も無く今日が終わればいいのにと、二人の涙は温かく僕を包み込むように。それでいて結びつこうとしたり、沁み込もうとしたり、ぐるぐると廻りながら一つに混ざっていった。

それでも、世界は微睡まない。永遠に休まない。

リズの手を握って鼓動が早くなるのは、その証拠。サクラの肌に触れて胸が高鳴るのは、その証拠。二人の心を知って涙が溢れるのは、その証拠。

それは決して、悲しいのではない。

終わってしまう今日と、新しく始める明日に、不安を覚えるから。また、あなたを忘れてしまうのではないかと、怖くなるからだ。

でも、きつと、僕は思い出す。

いや、思い出せなくても、僕はまた、もう一度、あなたを好きになる。

長い、長い、長い時間の中で恋をして、また愛に気付く。好きだと言う気持ちの本物であると、知る。そして、また、涙する。積み重ねた、想いの数だけキスをする。

その願いは、再び巡り会えた時笑い合えるように。

あの時の僕も、今の僕も、これからの僕も、それはきつと同じ“僕”なのだから。

だから、これは忘れるのではない。明日、思い出すでもない。無論、記録に残すでもない。ただ、ずっと、ずっと、大好きなあ

あなたのことを覚えている。

そうだ。『おまじない』をしよう？

世界からいなくなってしまうても、きっとまた、会えるように。

手を繋いで、目を瞑って、あなたの頬にキスをして。

ねえ。わたし。

僕、覚えているよ。

「お姉ちゃん、ありがとう。ずっと、大好き……!!」

決意して、羅針盤。（後書き）

【あとがき】

次回、まとめ、です。

賛否あるんじゃないかと思えますので、これでスッキリという方は、ここでエンディングでもいいかなと思えます。ちなみに、否の感情は心に留めておくのが、世界に溶け込むコツです。

きつと。(前書き)

【まえがき】

最後です。

どうか優しく見守ってあげてください。
どうぞ。

きつと。

『どんな願いも、無条件で一つだけ叶います』

十五歳の誕生日の夜、夢の中の誰かにそんなことを言われた。何言つてんだろ……いや、何夢見てんだろと、十五歳のくせに現実主義を決め込んだ私だったわけだけれど。

そんな変な夢、普通の人見ないから、少しだけ期待してしまった部分はなくもなかった。いままで、予知夢とかそういう意味ありげな夢を見たことがなかったから、自分の中にもそれ系の素質があったのではと、儚い期待を。

現実的であるからこそ、現実的でないことには憧れる。

普段から、友だちなんかと話をすることもあった。

『もしも、願いが一つだけ叶うなら。何を叶える？』

なんて感じの。

現実主義の私に、よくそんな下らない話をと思いつつも、会話にはそこそこいい感じの花が咲く。それはもう、向日葵くらいの。

空を飛びたい、と誰かが言った。

そんなの、着地に失敗したら絶対死んじゃう。

賢くなりたい、と誰かが言った。

それって、学校のテストの点数が上がるだけだよな。

強くなりたい、と誰かが言った。

そういうのって、外見が筋骨隆々とかになるのがオチだよ。格好良くなりたい、と誰かが言った。

誰かは必ずダメだしをするし、それはいいことだけじゃないと思う。

お金持ちになりたい、と誰かが言った。

でも、お金が無限に湧いたら、お金の価値が無くなっちゃう。

王様になりたい、と誰かが言った。

権限だけの王様なら、そのうち国民が離れて行っちゃっよ。

魔法が使いたい、と誰かが言った。

誰かを救うのも、誰かを傷つけるのも、人間がどうにかできるとじゃないと、きつと大変なことになると思うよ。ただでさえ、隣で戦争とかやってるんだから。

人の心を読みたい、と誰かが言った。

知らなくてもいいことって、たくさんあると思う。

未来を予知したい、と誰かが言った。

いいの？ これからの楽しみが無くなっても。

後悔したくない、と誰かが言った。

一日を振り返らない、そして反省することもない。そんな人が、

誰かから愛されると思えないんだよね。

過去をやり直したい、と誰かが言った。

後悔を取り戻すなんて、そんな簡単にできないと思うけどな。

死にたくない、と誰かが言った。

私は、誰かが死ぬのを永遠に見続けることなんて無理だし、ごめん。

お前は天邪鬼か、とそう突っ込んでいただいても構いませんよ。

けど、そうやってただ願うことができるのって、叶わないはずだと思ってるからなんだよ、きつと。それが絶対に百パーセント叶えられるってわかった時、普通の人だったら、願うことは決まってるでしょ？

『何度も叶えられるようにして欲しい』

色々やりたいことがあったわけじゃないし、本当だった時のための保険とか、最初は全然そういうのじゃなかった。いや、本心はそうなのかも。

とは言え、はじめはあの夢を信じていなかったから、そこに強い意志はなかったんだよ。

そうやって、誰ともわからん謎の夢に、私はもう一度祈ったわけだ。

それが何度も叶えられると知るには、少なくとも二回以上それをやらないといけないんだからさ。

できるだけ、人目につかない場所を選んだよ。というのは冗談で、私は次の日の夜、布団に包まって、一人で恥ずかしいことをしたのだった。

……つと、語弊があるな。

ま、でも、恥ずかしくはあった。

神さまでもなんでもなさげな、私の夢に出て来たそいつに、甚だ懇ろなご祈祷をしているわけだからね。相当痛いよね。

けど、そうだね。

その時に願ったのが、一番はじめ。

だから、そこから始まったのかな。全部。

なんで、その日を選んだかは、自分でもよくわからないけど。

x x x

「こういつのつて、すぐ効能があるもんじゃないの？」と、一人で勝手にぶつくさ考えて、そして知らぬ間に寝ていた。寝ていたというのは、非常に言い得て妙で、気付いたら朝だったから、私は気付かないうちに寝ていたのだ。

今まで、宿題途中に寝落ちすることはあつたけど、さすがに一晚は嘗て無い。

前夜に恥ずかしいことをしていた手前、なんか、イケナイことをしてしまった気分である。これが俗に言う、「朝ちゅん」というやつなのかもしれない。いや、多分、違うけど。

私、部屋に一人だし。

へっ？

一人部屋だつたっけ？

いや、一人部屋だけど？

「……………」

今の一瞬の感覚は何だろうと、結構な不気味さである。

ああ。でも、そう言えば、そうか。

小さい頃は、よく一緒に寝てたよね。

お姉ちゃんたちと。

ん？

たち？

「……………」

まただ。

また、不気味な感覚に囚われる。

なんだと言うんだらう。すごく気持ちが悪い。

顔でも洗ってこようかな。

今日は確か、学校がある日だから、そこそこ急いだ方がいいかもしれない。

あー、ほらね。

それを知ってても、結局、寝坊する確定事項は変えられない。

私、知ってるんだ。

えへん……っ！

「……………」
「切、行こう。」

私は、朝のお着替えを、大抵支度の最後の方にやる。顔も洗って、朝ごはんも食べて、学校の準備もしてから、それから鞆を背負う手前くらいに。

だから、朝ごはんのテーブルで寝癖をお披露目することになっている。たまに、本当にひどい時は先に寝癖を直す。そういう時は、お母さんが私を期待の眼差しで見つめて、圧をかけてくるから怖い。仕方ないでしょ。これ、ルーティンなんだから。

いや、しかし、今日は寝癖を先に直してみよう。なんなら、先に制服にも着替えよう。

部屋のドアを半分開けたところで、また、部屋に舞い戻る。引き籠りがやっとな改心して意気込んだはいいけど、いざとなると怖くてダメだったみたいで、ちょっと嫌だ。でも、ただのいつも通りって言うのも、センスがない。

元はお父さんの書斎なのに、鏡なんて、一体なんでついてるんだろ、とか思っていたけど、役に立つ時が来るとは。

一応、レディの嗜みとして、部屋に軽いメイキングアイテムも取り揃えてある。本陣は洗面所に定位置を確保しているけど、あれは学校用で、こっちはデート用という感じで住み分けが為されていたりする。

今日は、デート用になるわけだ。

私は特に、デートとかしないんだけどね。休日とかに強気でメイクするとか、人にあんまり言いたくないからって、ただのその言い訳だったりね。

まあ、いいや。

とりあえず、制服に着替えてやろう。寝癖も完璧に直して。

私の髪は、どちらかと言えばお母さん寄りの硬質で、しっとりしてるから、セットは三分くらいあれば終わる。お父さんに似た場合、

天使の羽毛タイプで、柔らかくてサラサラしてるんだけど、その代わり全然言うことを聞いてくれない。だから、髪の毛をあまり長く伸ばせない。

お母さん似でよかったー、と思う瞬間である。

んじゃ、今日はポニーテールにしようかな。私にツインテールは諄いしな。

あー。

一つ思うけど、私って、誰の為にこういうちよつとしたおめかしをしてるんだらう。

学校に好きな人がいるわけじゃないし、例え居るとしても、いわゆるそういう「好き」とは違うし。どんだけ着飾って綺麗になっても、先輩は絶対に振り向いてくれないってわかってる。私は、いつからか女の子が好きだったから。

けど、お母さんの言うように、「年頃の女の子なんだから、おめかしの一つくらい」「っていう惰性でやっているわけでもなさそうな感じはする。

多分、目的があってやっているんだらうけど、なんだったらう。

まあ、こついうおめかし自体嫌いじゃないし、女の子だからそういうものか。

とかなんとか逡巡してる間に、私の身支度は完遂される。

女の子の子言ってるわりには、意外と地味で、すっぴん際立つ九割ノーメイクである。まあ、学校だしね。やる意味もやる価値もないし、そもそも必要がない。どうでもいい男なんか捕まったりするかもしれないし、かえって邪魔なくらい。

とは言え、メイクしたらしたで、それなりに達成感があるけど。

お母さんに教えてもらいながら少しづつ練習してるから、それなりに上手な方だと思っし。

うん。

今日もばっちり決まってる。

制服も完璧だ。

なんか自信あるし、スカートもう一捲りしちゃおうかな。
待て待て待て、ほら。

なんでだろう。

意味無いつつってんに、なんかやりたくなっちゃうな。

別に、スカート短くしたってメイク上手くたって、私が変わるわけじゃないのに。

けど、誰の為でもないってわかってるなら、これは私の為なんだろう。

私の自己満足のためだけのおめかし。

それが、もしかしたら、誰かの好みに合うかもしれないし、私もしかしたら、そういう誰かの自己満足のためだけのおめかしに、惹かれてるのかもしれない。先輩から良い匂いにするのは、先輩の自己満足に、偶然私が感銘を受けただけってこと。

だとすれば、私が誰を好きだとか、誰が私を好きだとか、そういうのって、あんまり関係ないんだな。その時、偶然、好きになるっただけで。

こんな言葉下手なことはないけど、言うなればそれは『運命』であったりするのもかもしれない。

どすん、どすん。

一瞬、地鳴りがしたかと思ったけど、違うらしいことがわかる。

これは、誰かが勢いよく床を踏みつけている時の音。私がお母さんと喧嘩して、キレて、わざと音を立てて廊下を駆ける時なんかとかなり似てる。

いや、でも、私は別に今キレてないし、現にここにいる。

だとすれば、もう一つ。アレかもしれない。

遅刻ギリギリで忘れ物に気付いたとか、何か急を要した時、本気

で床を踏みしめる、アレ。

この家でそんなことをしているのって、生き様に余裕を持っている私くらいのはずだけど。例によって、私はここに居る。

じゃあ、それは一体誰だろうと、少し焦る。焦るといっか、気になる。気になるなら、見に行けばいい。そしたら、そこにある風景はきっと、予定表の枠からはみ出した、くだらないコラムなんかじゃないんだと思うし。

そうともすると、さっそく確認しに行かなくては。

善は急げだ。いや、これが善なのかは知らないけど。

マニキュアの瓶に刷毛を収納するので少し手古摺ったが、なんなく部屋を後にすることができた。

ああ。そうだ。

今日の私は、少しメイクをしているのだ。

いつもより数倍増しで可愛いから、きっと、誰かが惚れてしまっても何らおかしくはない。

なんて。別に、期待はしないけど。

私はこの変わらない日常の中に、ほんのわずかでも心をときめかせることがあるならば、勇んで飛び込もうと思う。そうやって、私は輝いていたい。

とか、なんとかアイドルよろしく登場したわけだけけど。

「あ？」

ちょうど、一階に下ろうというタイミング。階段の頂上から、私が見下ろす形となった。

一段一段、噛みしめて降りて行っても良かったけれど、何となくそうしなかった。

彼女が、騒動の原点かもしれないから。

「リ、リズ……」

肩で息をしながら、若干興奮した様子の彼女が私の名前を呼ぶ。なんでそんなに息が切れているんだろうか。

確かに、昔と違って、最近は体を動かしているところを目にしな
いし、普段から運動するという習慣もない。部活はバトン部という
名目の帰宅部だ。それならば、仕方ないのかもしれないけど。

しかし、ここはグラウンドじゃない。

家だ。しかも、そんなに大きくない。コーヒー園は結構広いけど、
家は小さい。隣に喫茶店を併設しているけど、家は小さい。

つまり、そんなに息が切れるようなことはない。

じゃあ、一体どうしたというのか。

それは、本人に聞くのが一番早い。

「どたどたやってたの、ルー？」

「ご、ごめん。五月蠅かったよね……」

簡単に犯人だと自白した。

少し面白みに欠ける。

動機は、何か一悶着あるかもしれない。

「なんか忘れ物？」

「あ、うん。忘れ物……そうなのかも……」

なんだろう。その含みのある間のとりかたは。それに、表情も憂
げに作られてる感じがする。

いつものニブチンなルーらしくないと、私が結局寝坊的な時間
だったのとで、ちょっとだけドキッとさせられる。

まさか。

それは、私だとかい言うんじゃないだろうか。

だとしたら、笑えないぞ。

いや、確かに、同じ学校なんだから、同じ時間に登校するべきな
んだろうけど。

「なに忘れたの？」

恐る恐る尋ねてみる。

逆に、言葉を誘っている感が出てちょっと悔しい。

「うん。ちょっと……ね。あの、それより、リズ……?」

ルーは語尾が淀んだ感じになっていてずるい。

ますます、いつものルーらしくない。いつも変だけど、今日はもつと変。

目も、なんか合わせてくれないし。

あ。それは、いつも……だったっけ?

「ちょっと、言いづらいんだけど……」

「え。なに。怖いんだけど」

余計な脚色を嫌うルーの言葉だからこそ、私にストレートに向けられると怖い。

刺さったら抜けなさそうで。

今なら、言葉を留めさせておくこともできる。あるいは、耳を塞いでしまつて、時に流すことも。

いや、まあ、そこまでのことじゃないだろう。

「い、いいよ。言つてよ。何?」

再度「えーっと……」とクッションを挟むあたり、ルーの慎重さが伺える。

それがルーなりの、タイミングの取り方なんだろう。

タイミングを合わせたら、どこかにジャンプしなければいけない。

さきの間の取り方と言い、何かを隠していることはわかっている。

では、それは何だろう。

私がおくりと息を飲むと、ルーもそれに合わせて頷いた。促されるようにルーが口を動かすと、それはちょうど、タイムリーな私の話題に彩られてゆく。とてもとてもシンプルで、地味で、でもワンポイントも忘れていないみたいな。

「パンツ、見えてる……っ」

文脈を理解するより先に、私の中に感情が生まれていたから、行動が後についてきた。

そこにあつたイメージは、モノトーンのシルク素材に黒っぽいリボンの装飾と、控えめな白のフリル。無垢な純真さと、裏表のある大人な雰囲気とを兼ね備えた、私のお気に入り。

それを隠すのに、必死になったのは、ほんの数秒　いや、数ミリ秒。

私は、自分が靴下を履いていることも忘れて、反射的に後退と躊躇を繰り返していた。

うちは木造住宅だから、当然、床は木でできている。二スを塗布して間もなければいいんだけど、こと階段に限っては、無塗装。だから、靴下なんかでふざけて燥いだと滑る。そう、お母さんに今まで何度注意されたことが。

数えてる間に、私の痛いのはどこかへ飛んで行っているかもしれない。

痛くなる前にやったら、意味ないのかもしれないけど。

でも、これはもう、絶対痛いですよ。

床、固いし。

転がり落ちるよりはいいかと思って、とっさに飛んでみたけど、これはミスったかもな。

一、二、三、四、五。

誰かが受け止めてくれたらなあ。

でも、その人が怪我するといけないか。

せめて、頭だけでも守らないと。それから、指とか折れないように。

六、七、八、九……。

あれ？

誰か、見たことある人がいる。

なんで、そんなに晴れやかな表情なんだろう。まるで私を待っているみたい。そうやって息を切らしているのも、私を探しに走って疲れたみたいで、なんだか可笑しい。

だって、その人は、ルーだ。

ルーは、女の子だ。

そして、私のお姉ちゃんだ。

だから、これは多分、幻想だ。物語みたいな夢だ。

いや、夢みたいな物語だ。

例えば、キスをしたらすべてを思い出して、また恋に落ちるような。

それから、抱き止められた勢いそのままに、二人で地面に転がった。

けど、どうしてだろう。

そう考えれば考える程、胸がドキドキするのは。そう描くと、私のおめかしがストーリーになっているのは。そう期待すると、益々不安になるのは。そう夢を見ると、見えている世界が揺らめくのは。そう言葉にすると、あなたを好きになるのは。

確かめるため、だろうか。

思い出すため、だろうか。

どちらであつても、同じこと。

どちらでなくとも、厭わない。

ただ、私が今、彼女のことを好きになって、彼女もまた私を好きでいてくれる。

そういうキスを、私はした。

そういう選択を、彼女はした。

たったそれだけの、どうしようもない自己満足。

長い、長い、長い、一日のお話。

「ねえ、リス？」

「なに？」

「……好き、です」

「うん。私も。……大好きです」

きつと。(後書き)

【あとがき】

これにて本編終了となります。

ここまでお読みいただき誠にありがとうございます。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、まだ「連載中」になっております。ということは、続きがあります。

後日談のようなものになるとは思いますが、どうでしょう。

サクラが好きだと言う方には、見て欲しい……ような見て欲しくないような。

これも賛否ありそう。

物語は終わりになりますが、彼女たちの人生はまだまだ続いています。

どこかの知らない世界で、ゆっくりと経過する時間を幸せに過ごしている……と、柔らかい気持ちになっていただければ冥利です。

あとがきは、最後にちゃんとあとがくので、このへんで……。

すいど。(前書き)

【まえがき】

まえがきはありません。

ずっと。

願いが誰かの祈りだとするなら、それは、どれもが尊くて、けど、醜くて。

想いや気持ち、そういうものを人は「恋」と呼んだり「愛」と読んだりして、すぐくややこしくなる。不可思議になる。

でも、そこにあるのは、本当はただの欲だけなのに、それを隠すみたいに希望や期待を持ち出して、一人空しくなる。空しくなつて、また一人になる。

気持ちとか想いをぶつけあつて、身に纏つた偽りのヴェールを全部脱ぎ捨てたら、それで初めて、自分と同じなんだつて、そこでようやくわかる。

私とルーは、性別も同じだった。

桜さんとルーは、流れる血も同じだった。

それつて、欲 いや、期待とか希望でもいいけど。

それと同じ匂いがする。

気持ちは、ぶつけ合うとお互いに痛いし、見返りを求めると恥ずかしい。ぶつけ合わなくても、躲されると自分が痛い。だから、心の真ん中にある「一度目の正直」を、二度目、三度目と持ち越してしまう。

その度に、後悔のようなものは募つて、気持ちは大きくなつていく。

大きくなつた気持ちは、ぶつけた時、もっと痛い。

けど、ぶつけないで隠していると、もっと大きくなる。

気持ちは破裂なんて絶対にしてくれなくて、萎むのにも時間と心労が重なる。それに、萎んだつて何したつて、気持ちは無くなるわ

けじゃない。ただ疑似的な、ただ利己的な、妄想の延長みたいな慰めをするしかなくなる。

情けなくなる。

悲しくなる。

不安になる。

ルーは私だけのものなのに。

私はルーだけのものなのに。

一度愛してしまえば、それというのは夢もロマンも、その鱗片すらなかつたりする。

私にはそれはよくわからないけど、男と女なら、尚のことなのかもしれない。

愛や恋、そこへは常に、生殖とか本能が関わってくる。

それはそれで悩まなくてもいいから、いいのかもしれないけど。

好きという気持ちを体現しうる「愛」という解釈に対して、個体を増やすための行為であると抗議するのは、ちよつと無粋なんじゃないかと思う。

例えば、その「愛」に目的を設けるとしたら。

その中に、「人間の数を増やすため」と答える人は何人いるだろう。

多分、少ないんじゃないかと思う。女の人は、特に。

とは言っても、そんなのは人それぞれで、しかも、聞いて返ってきた答えが本音であるとも限らない。二重三重のフィルターを通して、ばつちり美化されたそれが「愛」だなんて仰々しく答えてくれるかもしれない。

だとしたら、それこそ「人間の数を増やすため」みたいな事務的な解答が一つあると、便宜的に困らないのかもかもしれない。

そんなこんなで、「愛」というものを語るよりも早いし簡単だから、きつと、人はキスをするのだと思う。……なんてのは、全くの後付けでしかないけれど。

願いと祈りは、「恋」と「愛」。

誰かが誰かに伝えて、それで誰かと誰かが繋がって、二つだった道が一つの大きな道路になる。世界はそういう無数の道でできて、世界はそのために必要だから、大地があって空がある。

世界が生まれたのは、そう望まれたから。

誰かが誰かに「恋」をして、実を結んだ「愛」の結晶。

例えばそれは、小さな国の幼い少女たちが思い描いた、絵本の物語。こうあればいいんじゃない、そうなればいいんじゃないと、拙い理想を重ねて作る、あなたとの世界。私たちはきつとその中で、永遠の時を生きている。そうやって作り上げる世界にこそ、「幸せ」は生まれる。

その理想の中には、間違っているものもあると思う。

けれど、それでも二人の想いを重ねれば、必ずそこに道はできる。

あなたの目に見えている世界を、私も見たい。

だから、私はキスをする。

そうやって、思い出す。

『 い 』

いや。

きつと、また覚えている。

たった三分十二秒前のことなんて、忘れてたりしないんだから。

『 に会いたい 』

だから、これは気付きだ。

キスは、気付きだ。

『桜に会いたい』

「サクラに会いたい」

x x x

その日は朝から慌ただしかった。

どたばた何かを準備したり、食器ががしゃがしゃしたりと、あまりの喧噪に、私も珍しく目を覚ましたものだ。手伝うのが面倒そうだなと思って、ちょっとだけ寝たふりをしたのは内緒ね。

エースは遅れて登場するものだと言わんばかりに、ダイニングへ顔を出すと、三人から注目を浴びて腕が鳴る。まあ、なんの腕か知らないけど。

それが、腕じゃなくて、手だったのは、その後すぐ気付かされることになるわけで。

「あ。やっと起きたね。リズ。おはよう」

「おはよー。何やってんのルー。……と、お母さんたちも」

居間を見渡すと、家具の配置がガラツと変わっているのに驚く。

そんな大移動みたいなことをやるなら、昨日からそう言っておいてくれればよかったのに。私、早起したかもしれないよ。

「今日はお客さんが来るって、お父さん、昨日言ったじゃない。さては、聞いてなかったのね？」

「き、聞いてたけど。お父さん、いつつもどうでもいい話ばっかするから、冗談かと思っただのー」

「父さんの話、いつつもどうでもいいのか……？」

「あなた、よく脱線するじゃない？ リズの話題がどこかにいつちやうから、それでよ」

「脱線なんかしてるか？ 結構関連する話だと思っただが……」

「あははは……」

お父さんは新聞編集者だったか書籍編集者だったか雑誌編集者だったか、そういう系の仕事をしているから、一つの話題を発展させていくのが上手なんだと思う。……という褒め言葉は置いて。

私が「球技大会」の話を始めたかと思うと、いつの間にか、「世界情勢」とかにパラダイムシフトしてる時がある。学校の科目で言うと、地理とか歴史とか、そういう話になることが多いから、私はあんまり興味がない。

山登りとか好きだったルーは、割と好きなのかもしれないけど。

ともかく、でも確かに、そんなことを大言してたような気はしないでもない。

「あーそれで。誰か来るから、ここ片付けてんのねー」

一人で納得していると、三人の瞳は「そんなのいいから手伝え」と静かに言いたげである。

でも、腑に落ちない。

一人や二人、いやもつとかもだけど、さすがに何十二人とか呼ぶわけじゃないんだし、模様替えまでしなくてもいいんじゃないか。うちに偉い人が来るとか、至極考えにくいし。お母さんは断りそうだし、お父さんは偉そうぶるから断られそうだし、ルーは人見知りなはずだし、私は何も知らないし。

一つ。

ついに、私に女優のオファーが来たのかもしれない。

あ。しまった。

あり得ないって切り返せないやつだ、これ。

キンツ、コーン……。

自分の家のドアチャイムの音を久しぶりに聞いた気がする。
小さい頃に、遊びで鳴らした時以来だっけか。あれは、鳴らし方にコツが要って、うちのは特に音程がポンコツだから難しいのに。これは綺麗になっている。

誰かに感心してる場合じゃない。

……って表情をしてるのは、私じゃない。

「まずい！ もう来てしまった……！」

「それじゃ、あなた、そのソファは窓のところに置いておいて？
私は、作りかけのスイーツ完成させちゃうわね。ルートとリス二人は、お客さんを出迎えてあげて」

「はい」

「うん。わかったよ」

お母さんに指示されるまま、それぞれ動き始める。なんかの歯車が回り始めるみたいで、お母さんが何かすごいものに見える。

そう言えば、お母さん、ちゃんと化粧してるし、髪も整えてる。

今日って、そんなに重要な日なんだろうか。

私、寝癖とか全然あるんだけど。

これは、圧倒的に不利なのは。

けど、お父さんもそこまでは言っていなかったような気がするんだけどな。

確か、お母さんの親戚の娘だったか、なんだったかが、うちに遊びに来るとか来ないとか。

重要と言っても、隠し子とかそういうシリアスなではなかったような。

こつこついう時は、ルーに聞いたら早いかな。

「何。今日、誰来るの？」

「お母さんの親戚の娘さんだよ。僕と同じ年だって」

「一人？」

「みたいだよ」

一人で遊びに来るほどお母さんとの関係が深いのかとか知らないけど。年頃の女の子が、うちのお母さんを尋ねてくるなんて、なんとなく気がかりな感はある。それに、ルーの瞳がちょっとだけ輝いてるのが、そこそこ心配だ。

まあ、でも、私もちよつと、ときめいてるのか。

男の子じゃなくて、女の子だし。

「可愛い子かな」

「子って……。リズより年上だよ……」

「それは年齢より性格でしょー」

「そういうものかな……」

私はどちらかというと、清楚でクールな人がタイプなんだけど。

そういう人が鉄板で隠し持ってる“乙女な部分”を責めまくって、立場逆転みたいなことをするのが理想のシチュエーションだ。普段とのギャップみたいなのに萌える。それから、普通に、優しく意地悪されるみたいなのもありかな。

「ルーは基本誰でもさん付けで呼ぶよね」

「うん、まあね。急に呼び捨てにすると馴れ馴れしいし、横柄な印象を持たれちゃうかもしれないから。意識してるんだ」

「ふうん」

気のせいかな。

なんか、私のこと軽視してるような。

言っても、私は別に、ルーにそんな印象持たなかったけどな。

それって、当たり前なのかな。

だとしたら、その子の呼び方って、ちょっと大事な気がする。

「ねえ。名前はなんて言うの？」

「名前、まだ聞いてないんだ。ああ、でも、苗字は確か……」

無論、苗字から愛称が決まることも少くない。

参考にしようと思ったんだけど。

「ミサキ……だったかな」

「ミサキ……？」

それはあまりにも強い力で名前を結び付けていて、ミーちゃんとかサッチャンとか、とてもじゃないけど呼べそうもなかった。

それならば、仕方ないこともあるんじゃないかと思う。

名前は、改めて聞いてからでも、いいかもって。

私としたことが、ちよつとだけ負けを認めてるみたいで嫌だけど。私たちは、今日、初めましてなんだから。

せめて笑顔で、再び巡り会えたことを喜び合おう。

「うん。それでね。今日からうちに住むって」

「えっ、住むの？」

「今朝、言ってたよ」

「そんな大事なこと、なんで今朝なの」

「ははは……。父さんのことだし、やりかねないよ……」

でも。

でもさ。

一目惚れって、あると思う？

私はないと思う。

「さあ、お迎えしようか」

「そうだね」

まるで、そこから物語がスタートするみたいに、白紙があるいはそれに近かった世界に、ストーリーが生まれていく感じ。文字が歩いて、絵画が歌って、声が時を刻むかのよう。

例えばそれは、三分くらい前のこと。あの子がうちの玄関のベルを鳴らした時から、すでに始まっていて。それに気付いた今、私たちは、またあの子と再会することになる。

それって、決して刹那の出来事じゃないんだと思う。

だから、どうかな。

ここは一つ。

歓迎の言葉には、細やかなるサプライズを。

新しい世界を開く扉は、いつだってすぐそこにあるんだって、誰

かが言つてたしね。

勿体ぶらないでも、いいよね？

えっ？

それはこっちの台詞、だつて？

「「おかえり。桜^{サクラ}さん」「

「……っ」

「ただいま……っ！」

ずっと。(後書き)

【あとがき】

あとがきはありません。

【あとがき】

お疲れさまでした。

文字数、滅茶苦茶多かったですね。

最後までお読みくださり、誠にありがとうございました。

どうでしたでしょうか。

時間、ゆっくり流れましたか？

気付いたら三時間も経ってた！ と、焦った方は、時間がゆっくりになっていた証拠です。

心の温まるモノログストーリーを、ということ、芯から温まっていただけであれば、これまた冥利です。自分で自分のものを読んでも中々温まりにくいもので、体感していただけの方はちょっと羨ましかったです。私自身は結構手探りでした。

ラノベも小説も読んだことがないので大分苦労したかなと思います。体裁とか校閲とか、括弧とか感嘆符とかの使い方など、十万文字くらい書いてから間違いに気付いて、全訂正するとかやっておりますね。懐かしい。

でも、ここまでいけたので、自分では結構やれた方かなと、僭越ながら思っております。

如何でしたでしょうか。

これからまだまだ、成長できると自信ができましたので、次回作も楽しみにしててください。

ここで突然ですが、クイズです！

+++

父親が一人息子を連れてドライブに出かけました。

ところがその途中で父親がハンドル操作を誤り、電柱に衝突する大きな交通事故を起こしてしまいました。父親は即死、助手席の息子は意識不明の重体になり、すぐに救急車で病院に運ばれました。幸運にも天才外科医との呼び声の高い、その病院の院長が直々に手術をすることになりました。助手や看護師を従えて手術室に入り手術台に寝かされた子どもを見るなり、院長は叫びました。

「なんと、これは私の息子じゃないか！」
さて、これはいったいどういうことなのでしょう。

+++

割とメジャーな問題らしいのですが、嘗て心理や倫理を嗜んでいたわたしも、先入観を問うこの設問に一度ひっかかってしまったのでした。

それで「ああ。まだ、差別意識が抜け切れていないな。百合好きなのに情けない……」と、そう思ったのが、作文の始まりでした。

（作文、超苦手だったのに、なんでできると思ったんだろう）

二人が女性どうしだとは気付かずに応援してしまう恋を、すり替えば、きつと皆さまにも気付いていただけるだろうと思ったのです。

そして出来上がったのが、この『願い』を巡る、一夜の物語。

人間の脳はとても出来がいいもので、一目では絶対に認識できないような、この文字数も、一瞬にして構築してしまい、そこから各人が動き始めてしまったのです。とある日の夜、本当に一瞬のことでした。（思わずメモを取ってしまったことが懐かしく思われます）
なので、わたしは書くしかなかったのです。

わたしの手で始まってしまった彼女たちの戦いを、わたしの手で終わらせるために。

傾倒しすぎて色々失うものもありましたが、たくさん得たものもありました。

終わってしまったのは悲しいことですが、彼女たちがいなくなると言うわけではありません（新プロデューズ企画『うさぎタウン』にも語り継がれます）ので、わたしの一つの過去として、誰かの記憶に残っていたら、作者冥利に尽きると言うものです。

これから新作や別ジャンルにも取り組んでいきますので、宜しければどうぞ、またお手に取ってご覧ください。心臓も時も止まるような優しい世界が、あなたの中に拡がらんことを行間より祈っております。

ここまでお読みいただき、本当にありがとうございます。

ちなみに、今日はルートとサクラの誕生日です。ちょうどいいですね。

最後に、わたしがプロデューズするガールズインストウルメンタルバンド「うさぎタウンband（仮）」の宣伝をして閉幕と致します。

そうです。

何故かバンドの宣伝なんです。

超可愛いです。あと、音楽ジャンルがニッチ過ぎる。

ついでに、わたしの分も一応載せておきます。

特に新作情報とかをボロボロ言っていたりはしないので、見ても見なくてもいいと思います。

なので是非。どっちやねん。

【ツイッター】

うさブルー @usa_blue

うさぎタウンband（仮） @usagittown

【公式LINE】

うさぎタウンband（仮） @sqas065p

作 うきブル
スペシャルサンクス
読者さま

了。

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n2677cn/>

ルートモストマック

2024年1月26日21時14分発行